国立国語研究所学術情報リポジトリ

A descriptive study on the meaning and uses of Japanese verbs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001245

国立国語研究所報告 43

動詞の意味・用法の記述的研究

国立国語研究所

宮島達夫

秀英出版

刊行のことば

本書は，当研究所の書きことば研究室が昭和39年から行なってきた「語の意味・用法の記述的研究――動詞形容詞等――」の結果のうち動詞の部分をまとめたものである。

担当者は書きことば研究室の宮島達夫である。全期間を通じて研究補助員高木　翠，昭和39年度には同田原圭子および谷内レイ子がこれを助けた。

大量の用例カードの作成については「現代語誌記述のための基礎的研究」（代表者：林　大――当時の第一研究部長）の題で昭和39・40年度の文部省科学研究費（総合研究）の交付を受けた。また，小規模な意識調査の実施については，お茶の水女子大学教授市川　孝氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

昭和47年 3 月

国立国語研究所長　岩淵悦太郎

目　次

はじめに …… 1

1. 目的と方法 …… 1
1.1 目　的 …… 1
1.2 調査の方法 …… 5
2. 資　料 …… 9

第1部　意味特徴の記述 …… 14

0. 前おき …… 14
1. 主　体 …… 21
2. 対　象 …… 163
3. 動作・作用の属性 …… 202
4. 環　境 …… 369
5. 結　果 …… 376
6. 意　図 …… 422
7. 原　因 …… 475
8. 評　価 …… 492
9. その他 …… 503

第2部　個別的記述 …… 509

0. 前おき …… 509
1. 「あがる」 …… 510
2. 「のぼる」 …… 523
3. 「あげる」 …… 534
4. 「うく」 …… 551
5. 「うかぶ」 …… 556

6. 「でる」…… 563
7. 「あける」…… 607
8. 「のびる」…… 616
9. 「のむ」…… 621
10. 「くう」…… 626
11. 「はかる」…… 637
12. 「よむ」…… 646
13. 感覚動詞 …… 654

第3部 意味とほかの性質との関係…… 665

1. 動詞の意味と文法的性質 …… 665
1.1 単語の文法的性質…… 665
1.2 語い的意味と文法的性質との関係 …… 668
1.3 用法の限定による品詞性の変化 …… 675
1.4 動詞の意味と形態論的性質 …… 679
1.4.1 用言的カテゴリー …… 680
1.4.2 動詞的カテゴリー …… 683
1.5 動詞の意味と構文論的性質 …… 686
1.5.1 2動詞間の構文機能の対応 …… 689
1.5.2 1動詞における構文機能のかさなり …… 701
2. 動詞の意味と文体的性質 …… 708
2.1 単語の文体的性質…… 708
2.2 文章語における意味の限定 …… 709
2.3 文章語における意味のかたより …… 712
2.3.1 大規模なことがら …… 713
2.3.2 公的なことがら …… 721
2.3.3 抽象的なことがら …… 726
2.3.4 よいことがら …… 730
2.4 俗語における意味のかたより …… 731

参考文献
索 引

第1部　意味特徴の記述（細目）

0.　前おき ……14
0.1　記述法 ……14
0.2　この方法の性質 ……15
0.3　特徴の相互関係 ……19
1.　主　　体 ……21
1.0　一　　般 ……22
1.0.0.1　つづいてあらわれたもの ……26
〔1〕たえる＜なくなる ……26
〔2〕たやす＜なくす ……27
1.0.0.2　貴重なもの ……27
〔3〕ありつく／える ……27
1.0.1　もの／こと ……30
1.0.1.1　天候・気象状態 ……30
1.0.1.2　光 ……33
1.0.1.3　音 ……33
1.0.1.4　におい ……34
1.0.1.5　けむり ……35
1.0.1.6　火 ……35
1.0.1.7　温度 ……36
1.0.1.8　時刻・季節 ……36
〔4〕産する／おこる＜生ずる，できる，なりたつ ……38
〔5〕たむける，そなえる＜ささげる，あげる ……39
〔6〕どかす，どける／はぶく，略す，省略する＜のかす，のける，ぬかす，のぞく，とりさる，とりのぞく ……40
1.1　も　　の ……42
〔7〕かじる＜かむ ……44
1.1.0.1　質 ……46
1.1.0.1.1　物体／物質 ……46
〔8〕こわれる＜つぶれる，くずれる ……46
〔9〕こわす＜きる，たつ，さく，ちぎる，やぶる，くだく，つぶす，くずす，わる ……47

〔10〕あふれる＜はみだす，はみでる……49
1.1.0.1.2　固体／液体／気体 ……50
〔11〕くちる＜くさる……50
〔12〕すむ＜すきとおる……50
〔13〕ぬるむ＜あたたまる，ぬくもる……51
〔14〕あぶる＜あたためる，熱する……51
〔15〕みなぎる，たたえる＜みちる，あふれる……51
〔16〕たたえる＜みたす……52
〔17〕したたる，たれる＜おちる，ふる……53
〔18〕ほとばしる／とびちる……54
〔19〕ささる／しみる，にじむ……55
〔20〕つぐ，さす＜いれる……55
〔21〕そそぐ＜あびせる＜かける……57
〔22〕(せく，せきとめる＜さえぎる，ふせぐ，くいとめる)……57
〔23〕くう，たべる／のむ＜くらう，あがる，めしあがる，いただく，たいらげる……59
〔24〕すう／すする……60
〔25〕つく，ふく／あげる，もどす＜はく……61
1.1.0.1.3　次元・形 ……62
〔26〕あれる／こわれる……62
〔27〕あらす／こわす……63
〔28〕やぶる／つぶす（くずす）＜きる，たつ，ちぎる，くだく，こわす，わる（さく）……64
〔29〕たたむ＜おる，まげる……66
〔30〕しく／おく……66
1.1.0.1.4　大きさ ……67
〔31〕うねる，くねる＜まがる……67
〔32〕つもる／かさなる（つみかさなる）……68
〔33〕(うごめく＜うごく)……69
〔34〕よる／なう＜あむ，くむ……69
〔35〕いる／やく＜いためる……71
〔36〕(まくる／めくる)……71
1.1.0.1.5　おもさ ……72
〔37〕そよぐ＜ゆらぐ，ゆらめく，ゆれる……72

1.1.0.1.6 弾力 ……74
〔38〕しなう，たわむ＜まがる，そる……75
〔39〕くだく（わる）／きる，たつ，さく，ちぎる，やぶる……75
1.1.0.1.7 その他 ……76
〔40〕ぬぐ／はぐ／むしる／むく／はがす／そぐ，けずる……76
〔41〕たたえる／みなぎる＜みちる，あふれる……80
1.1.0.2 数量 ……80
1.1.0.2.1 数 ……80
〔42〕くりこむ，くりだす，おしよせる，つめかける（よせる）＜くる，
（のりこむ）……81
〔43〕たかる＜とまる，つく……82
〔44〕さざめく，ざわめく，ざわつく，どよめく＜さわぐ……83
〔45〕(ふる＜おちる)……83
〔46〕(うごめく＜うごく)……84
〔47〕たばねる＜しばる，くくる……84
〔48〕かる＜きる……85
〔49〕むれる，むらがる＜あつまる……85
〔50〕ちる，ちらばる＜わかれる……85
1.1.0.2.2 量 ……86
〔51〕したたる，たれる＜おちる，ふる……86
〔52〕つぐ，さす＜くむ，いれる……86
1.1.0.2.3 数量に関係のある特徴 ……87
〔53〕ありふれる＜ある……87
〔54〕おぶう，おう，せおう，しょう＜かつぐ，になう……88
〔55〕つきそう＜よりそう，つれだつ，つらなる，ならぶ（そう）……88
1.1.0.3 部分／全体 ……90
〔56〕たれる，たれさがる，ぶらさがる＜さがる……91
〔57〕たれる，たらす，ぶらさげる＜さげる……93
〔58〕まわす／ひねる，ねじる，よじる……94
〔59〕まわる／ねじれる，よじれる……96
〔60〕もりあがる＜もちあがる……96
1.1.0.4 評価 ……96
1.1.1 生物 ……97
1.1.1.1 いきもの（人間をふくむ）……98

〔61〕生ずる＜うまれる，できる……99
〔62〕ほろびる＜たえる，なくなる……100
〔63〕ほろぼす＜なくす（たやす）……101
〔64〕ばける＜かわる，なる，変ずる，変化する……101
〔65〕いえる＜なおる，回復する……102
〔66〕いやす＜なおす，回復する……103
〔67〕ふとる，こえる＜ふくれる，ふくらむ……104
〔68〕やせる＜ほそる……105
〔69〕うごめく＜うごく……106
〔70〕つれる，ひきいる＜はこぶ……106
〔71〕たかる＜あつまる，むれる，むらがる……107
〔72〕はねる＜はずむ……108
〔73〕よろめく，よろける（ふらつく）＜ゆれる，ゆらぐ（ぐらつく）……108
〔74〕なぐる，ぶつ（たたく）＜うつ……110
〔75〕ほうむる／いける＜うめる，うずめる……110
1.1.1.1.1　人間……111
1.1.1.1.1.1　人間／動物……112
〔76〕つどう＜あつまる，むれる，むらがる……112
〔77〕どよめく，はしゃぐ＜さわぐ……112
〔78〕かくまう＜かくす（秘す）……113
1.1.1.1.1.2　人間の資格……113
〔79〕いちゃつく＜ふざけあう……114
〔80〕あきなう＜うる……114
〔81〕つとめる＜はたらく……115
〔82〕縛する＜しばる……116
〔83〕いじめる，いびる＜苦しめる，いためつける……117
1.1.1.1.1.3　個人／集団・組織……117
〔84〕いそしむ，はげむ，はたらく＜つとめる……118
〔85〕おちぶれる，零落する＜おとろえる，没落する……119
〔86〕ほろびる＜なくなる……120
〔87〕ほろぼす＜なくす……121
1.1.1.1.2　動物（人間以外）……122
〔88〕じゃれる＜ふざける，たわむれる……122
〔89〕ついばむ＜くう，たべる……123

〔90〕さえずる／すだく＜なく…… 123
〔91〕いななく／ほえる＜なく…… 125
1.1.1.1.3　からだの部分 …… 125
〔92〕もたげる／もちあげる＜あげる…… 129
〔93〕つむ，つみかさねる＜かさねる…… 131
〔94〕くしけずる，すく，とかす＜ととのえる…… 132
〔95〕うるむ＜ぬれる，しめる…… 132
〔96〕つぶる（つむる）／つぐむ＜とじる，とざす…… 134
〔97〕しかめる＜ゆがめる…… 135
〔98〕かしげる＜かたむける…… 137
〔99〕くびる＜しめる…… 138
〔100〕うつむく／うつぶす＜ふす，あおむく…… 139
〔101〕かがめる＜おる，まげる，おりまげる…… 140
〔102〕たつ／かがむ，しゃがむ，うずくまる，すわる，こしかける／かたむく，
かしぐ，おきる／ねる，はう，ふす，よこたわる，たおれる，ころぶ，
ひっくりかえる…… 142
1.1.1.2　植物 …… 149
〔103〕しおれる＜なえる，しなびる…… 150
〔104〕むす＜はえる…… 150
〔105〕こる／かる＜きる…… 151
1.1.2　生物以外 …… 151
〔106〕てる＜ひかる，かがやく…… 152
〔107〕きりたつ＜そびえる，そそりたつ…… 153
〔108〕つくろう＜なおす…… 153
〔109〕からげる，はしょる＜まくる，めくる，たくしあげる…… 154
〔110〕とぐ＜みがく…… 155
〔111〕あえる＜まぜる…… 156
〔112〕ほうじる，いる，いためる＜あぶる，やく…… 156
〔113〕たく／にる／ゆでる…… 157
〔114〕たける／にえる／ゆだる…… 158
1.2　こと…… 158
〔115〕こうずる／つよまる，つのる…… 161
〔116〕しぐれる＜ふる…… 162
2.　対　　象 …… 163

2.1 直接的対象 …… 163
2.1.1 いきもの …… 164
〔117〕おぶう／になう＜おう，せおう，しょう，かつぐ…… 164
〔118〕ひきたてる，ひったてる＜つれる，ひきいる／もっていく（くる），もたらす＜やる，よこす，とどける，おくる，はこぶ…… 165
〔119〕なぐる＜うつ，たたく…… 167
〔120〕かう＜やしなう…… 167
〔121〕そそのかす＜けしかける…… 168
〔122〕あやす＜なだめる，きげんをとる…… 168
2.1.2 生産物 …… 169
〔123〕いる／うつ＜はなつ，発する…… 169
〔124〕ひく，弾ずる／ふく＜かなでる／うつ，たたく ＜ならす…… 170
〔125〕かぶりつく／かみつく…… 172
2.1.3 こと …… 172
〔126〕ふきこむ／しつける／しこむ＜おしえる，たたきこむ…… 172
2.2 相　手 …… 175
2.2.1 相手のありなし …… 175
〔127〕じゃれる／ふざける，たわむれる＜あそぶ…… 175
〔128〕まくしたてる，ささやく／うめく＜どなる，がなる，さけぶ，わめく，つぶやく，どもる，いう…… 176
〔129〕しかる／いかる，いきどおる，ふんがいする，腹をたてる＜おこる… 179
2.2.2 相手の種類 …… 181
〔130〕しなだれる＜よりかかる，もたれる，もたれかかる…… 181
〔131〕とりすがる＜すがる，すがりつく，とりつく…… 181
〔132〕おろす＜うる…… 182
〔133〕たむける，そなえる＜ささげる（おくる，あげる）…… 183
〔134〕おちあう，ゆきあう＜あう，であう，でくわす，ぶつかる，めぐりあう…… 183
2.2.3 相手の評価 …… 185
〔135〕しこむ＜おしえる…… 185
2.3 とりつける対象 …… 186
2.3.1 対象のありなし …… 186
〔136〕つなぐ／しばる，ゆう＜むすぶ（ゆわく，ゆわえる）…… 186

〔137〕くみこむ，くみいれる／くみたてる＜くみあわせる…… 190
〔138〕もつれる＜からまる…… 191
2.3.2　対象の種類 …… 192
〔139〕かぶる／きる／はめる／はく＜つける…… 192
2.4　とりはずす対象 …… 198
2.4.1　対象のありなし …… 198
〔140〕ほぐす＜とく，ほどく…… 198
2.4.2　対象の種類 …… 199
〔141〕ぬぐ＜とる…… 199
2.5　比較の対象 …… 201
〔142〕ずばぬける，ずぬける，ぬきんでる（ひいでる）＜まさる，すぐれる… 201
3.　動作・作用の属性 …… 202
3.1　段　階 …… 202
3.1.1　状態／うごき …… 202
〔143〕たたえる＜みたす…… 202
3.1.2　動作・現象の段階 …… 202
〔移動の段階〕…… 203
〔144〕つぐ，さす，そそぐ＜くむ…… 211
〔145〕もえる／やける／くすぶる，いぶる／こげる…… 212
〔146〕もす，もやす／やく／（くすべる）／こがす…… 214
〔147〕（たばこを）のむ，すう …… 215
〔148〕ふかす（すう，はく）…… 215
〔149〕たいらげる＜くう，のむ…… 216
〔150〕もとめる…… 216
3.1.3　経過／結果 …… 218
〔151〕あさる，さがす／（みつける）みいだす，みとめる，発見する…… 219
〔152〕思案する／おもいつく＜かんがえる…… 220
〔153〕発明する（考案する）＜工夫する…… 222
〔154〕ほろびる＜なくなる…… 222
〔155〕はたらく／かせぐ…… 223
〔156〕ほす／かわかす…… 224
3.1.4　一時的／継続的 …… 228
〔157〕ひらめく＜ひかる…… 228
〔158〕ちらつく＜みえる…… 229

3.2　量・程度 …… 229
3.2.1　光りの程度 …… 230
〔159〕かがやく，ひらめく，＜ひかる，てる …… 230
3.2.2　音の程度 …… 231
〔160〕とどろく＜（ひびく）なる，〔音が〕する …… 231
〔161〕どなる，がなる，さけぶ，わめく／ささやく，つぶやく＜うめく，
どもる，まくしたてる，いう …… 233
〔162〕ほえる＜なく …… 235
3.3　いきおい …… 235
〔163〕そよぐ＜ゆれる（ゆらめく，ゆらぐ） …… 236
〔164〕ほとばしる＜でる，ながれる，とびちる …… 236
〔165〕さわる，ふれる／あたる，ぶつかる …… 237
〔166〕さわる，ふれる／あてる／ぶつける／たたきつける …… 238
〔167〕つつく／つく …… 239
〔168〕おす／つく …… 239
〔169〕ぶんなぐる，なぐりつける＜なぐる，ぶつ＜うつ，たたく …… 239
〔170〕くりこむ，くりだす，ふみこむ，のりこむ＜はいる，いく …… 241
〔171〕ふきこむ／たたきこむ＜おしえる …… 241
3.4　はやさ …… 242
〔172〕はしる，とぶ；いそぐ＜(いく) …… 242
〔173〕うごめく＜うごく …… 248
3.5　方　　向 …… 249
3.5.1　上下 …… 249
上――下 …… 249
〔174〕あがる，あげる，のぼる――くだる，おりる，おろす，さがる，
さげる，おちる，おとす …… 253
〔175〕あおむく――うつぶす＜ふす，ねる，ねころぶ，よこたわる …… 259
〔176〕かぶる＜あびる …… 260
〔177〕つむ，つみかさねる＜かさねる／ならべる …… 261
〔178〕つもる，つみかさなる＜かさなる／ならぶ …… 262
3.5.2　左右 …… 263
〔179〕かしげる＜かたむける …… 264
3.5.3　前後 …… 265
〔180〕すすむ，すすめる，でる，だす――しりぞく，さがる，さげる，ひ

く，ひっこむ，ひっこめる，すさる，しさる…… 265
〔181〕ふみこむ…… 266
〔182〕かがめる＜まげる…… 267
〔183〕そる＜まがる…… 268
3.5.4　内外 …… 269
〔184〕はいる，いれる——でる，だす
つぐ——こぼす
のる——おりる
もぐる，こもる，つかる…… 269
〔185〕もりあがる，もりあげる——くぼむ，へこむ…… 270
〔186〕でばる，でっぱる，でる，つきでる，つきだす——ひっこむ，ひっこめる…… 271
3.5.5　東西南北 …… 272
3.5.6　ある基準点に対する方向 …… 272
〔187〕むかう——（さる，それる，転ずる）…… 272
〔188〕近づく，近づける——遠のく，遠のける，遠ざかる，遠ざける
よる，よせる，せまる
くっつく，くっつける——はなれる，はなす，へだたる，へだてる
あつまる——ちる…… 273
〔189〕むける——そむける…… 276
〔190〕むく，むかう，面する——（そむく）…… 277
〔191〕おす，つく——ひく…… 284
3.5.7　特定の目的地に対する方向 …… 286
3.5.8　川上・川下の方向 …… 286
〔192〕のぼる，さかのぼる——くだる，さがる…… 286
3.5.9　人前への方向 …… 287
〔193〕でる，だす——ひっこむ，ひっこめる，さがる，さげる…… 287
3.5.10　話し手に対する方向…… 288
〔194〕いく——くる…… 288
〔195〕さる…… 289
3.5.11　最初の出発点に対する方向…… 290
〔196〕かえる，もどる，ひきあげる，ひきかえす，帰還する，帰国する，帰宅する……＜いく，くる…… 291
3.5.12　不定の方向…… 294

〔197〕さまよう，うろつく，ほっつく／いく，くる
ただよう＜ながれる…… 294
3.5.13 回転…… 296
〔198〕まげる／ねじる，ひねる，よじる，まわす…… 296
〔199〕まがる／よじれる，ねじれる，まわる…… 297
3.6 距　離 …… 297
〔200〕とおざかる，とおのく＜はなれる
とおざける，とおのける＜はなす…… 298
〔201〕くだる＜おりる…… 300
〔202〕ふる／したたる，たれる＜おちる…… 301
〔203〕よる，ちかよる＜ちかづく
よせる＜ちかづける…… 302
〔204〕さがる，さげる＜ひっこむ，ひっこめる…… 303
〔205〕うごめく＜うごく…… 303
〔206〕うろつく／さまよう／さすらう…… 304
3.7 回　数 …… 305
〔207〕かよう＜いく…… 306
〔208〕うねる，くねる＜まがる…… 307
〔209〕（はずむ＜はねる）…… 308
〔210〕たたく／うつ…… 308
〔211〕つつく／つく…… 309
3.8 手段・方法 …… 310
〔212〕はしる，かける／あるく／はう／ころがる／すべる
とぶ
ながれる／およぐ…… 310
〔213〕つれる，ひきいる／はこぶ…… 311
〔214〕つれる，ひきいる，はこぶ／やる，よこす＜おくる，とどける…… 312
〔215〕おぶう，おう，せおう，しょう＜かつぐ，になう…… 313
〔216〕ふる／ゆする，ゆすぶる…… 316
〔217〕いる／いためる／やく…… 319
〔218〕あぶる＜あたためる，熱する…… 320
〔219〕はりだす＜かかげる…… 321
〔220〕かぶりつく＜かみつく，くいつく…… 321
〔221〕のむ／すする＜すう…… 322

〔222〕あおる＜のむ…… 323
〔223〕ふるまう＜もてなす…… 324
〔224〕うかがう＜みる…… 326
〔225〕じゃれる＜ふざける，たわむれる…… 327
〔226〕うばう／ぬすむ／する／かすめる／くすねる＜とる…… 327
〔227〕もうける／かせぐ…… 334
〔228〕うる＜かす…… 335
〔229〕かう＜もらう，うけとる，かりる，あずかる…… 335
〔230〕やとう（めしかかえる）＜たのむ，つかう…… 337
〔231〕命ずる，命令する／しいる，強制する，強要する…… 337
〔232〕つぶやく，ささやく，まくしたてる，どもる，がなる，どなる，
いう／さけぶ，わめく，うめく…… 339
3.9　態　　度 …… 341
〔233〕おしかける／つめかける／かけつける／いく，つく…… 341
〔234〕せまる，よせる，おしよせる，つめよる＜よる，ちかよる，ちかづく… 343
〔235〕ひきたてる，ひったてる＜つれる…… 345
〔236〕つきつける／さしだす…… 346
〔237〕ゆする＜せびる／せがむ／ねだる…… 347
〔238〕つっぱねる，はねつける＜拒絶する，拒否する＜ことわる，こばむ… 348
〔239〕哀願する，嘆願する／懇願する／懇請する，懇望する／希望する，
依頼する／要望する，要請する／要求する／命ずる，命令する，
強制する，強要する
ねがう／のぞむ／たのむ／もとめる／しいる…… 351
3.10　ようす…… 361
〔240〕したたる，ふる＜たれる，おちる…… 361
〔241〕あふれる＜こぼれる／もれる…… 362
〔242〕とびちる＜ほとばしる…… 362
〔243〕ひんまがる＜まがる，ゆがむ
ひんまげる＜まげる，ゆがめる…… 363
〔244〕うずく＜いたむ…… 365
〔245〕ふきだす／ほほえむ，ほくそえむ＜わらう…… 365
〔246〕たどりつく＜つく…… 366
〔247〕たどる＜いく…… 368
4.　環　　境 …… 369

〔248〕とぶ<うく，うかぶ，しずむ，ながれる…… 370
〔249〕つかる，ひたる／うまる，うずまる，うもれる，うずもれる／もぐる，没する…… 371
〔250〕もれる，もる<（でる，はいる）…… 374
〔251〕たたえる<みなぎる，みちる…… 375
〔252〕ありふれる<ある…… 376
5. 結　果…… 376
5.1 変化の形式…… 376
5.1.1 一時的／永続的…… 376
〔253〕しなう，たわむ<まがる，そる…… 376
〔254〕ばける<かわる，なる，変ずる，変化する…… 377
〔255〕ふとる，こえる<ふくれる，ふくらむ…… 377
〔256〕めしかかえる<たのむ，つかう，やとう…… 378
5.1.2 現象／本質…… 380
〔257〕しおれる，かれる，さびれる，すたれる／おとろえる…… 380
〔258〕にじむ／しみる…… 381
5.1.3 基準のあるなし…… 382
〔259〕ふえる，ます／みちる，あふれる…… 382
〔260〕ふやす，ます／みたす…… 382
〔261〕のこる<とどまる…… 382
5.2 変化の内容…… 383
5.2.1 物理的・化学的な変化…… 383
〔262〕くだく<きる，たつ，さく，ちぎる，やぶる，わる／つぶす，くずす≪こわす…… 383
〔263〕かる<きる…… 387
〔264〕おる／そらす<まげる…… 388
〔265〕おれる／そる<まがる…… 388
〔266〕まがる，おれる<くぼむ，へこむ<ゆがむ…… 389
〔267〕それる／どく<ずれる…… 390
〔268〕そらす，どける，ずらす…… 390
〔269〕うらがえす<ひっくりかえす，かえす…… 391
〔270〕つめる<いれる…… 393
〔271〕しく<おく…… 394
〔272〕つくろう<なおす…… 395

〔273〕にる／ゆでる…… 395
〔274〕あせる，さめる＜うすれる…… 396
〔量の変化と位置の変化〕…… 397
5.2.2 生理的な変化 …… 401
〔275〕やせる／ほそる…… 401
〔276〕ふとる，こえる／むくむ＜ふくれる，ふくらむ…… 402
5.2.3 服装の変化 …… 402
〔277〕はおる＜きる…… 402
〔278〕つくろう／なおす…… 404
〔279〕くしけずる，すく，とかす＜ととのえる…… 405
5.2.4 社会的な変化 …… 405
〔280〕かす，あずける／やる，あげる，あたえる＜わたす…… 405
〔281〕かりる，あずかる／もらう，いただく＜うけとる…… 408
〔282〕むらがる＜あつまる…… 409
5.3 変化の程度 …… 410
〔283〕かたむく，かしぐ＜たおれる…… 410
〔284〕かたむける，かしげる＜たおす…… 411
〔285〕さめる＜ひえる…… 412
〔286〕さます＜ひやす…… 413
〔287〕あたためる，あったためる＜熱する…… 414
〔288〕(あたたまる，あったまる＜熱する)…… 414
〔289〕ぬれる／しめる…… 415
〔290〕そだつ，成長する，長ずる／としよる，としとる，としおいる，
おいる＜（としをとる）…… 417
〔291〕ずぬける，ずばぬける，ぬきんでる＜すぐれる…… 419
5.4 結果の評価 …… 419
〔292〕なおる／こわれる，くずれる＜かわる…… 419
〔293〕なおる，もちなおす／ぶりかえす＜もどる…… 420
〔294〕ひんまがる，ゆがむ＜まがる
ひんまげる，ゆがめる＜まげる…… 421
6. 意　図 …… 422
6.1 主体の意図 …… 429
6.1.1 意図的行為 …… 429
〔295〕ばける＜かわる，なる，変ずる，変化する…… 429

〔296〕ひそむ＜かくれる…… 430
〔297〕すずむ＜ひやす（さます）…… 431
〔298〕しとめる＜ころす…… 432
〔299〕いじめる，いびる＜くるしめる，いためつける…… 434
6.1.2 非意図的行為 …… 436
〔300〕くちばしる＜いう…… 437
〔301〕たかる，むれる，むらがる＜あつまる…… 437
〔302〕ふきだす，ほくそえむ＜ほほえむ，わらう…… 438
〔303〕みかける＜みる…… 439
6.1.3 意図的／非意図的 …… 440
〔304〕なくする／うしなう＜なくす…… 440
〔305〕であう，でくわす，ぶつかる，めぐりあう，ゆきあう／おちあう＜あう…… 441
6.2 相手の意図 …… 442
6.2.1 意図の尊重 …… 442
〔306〕かくまう＜かくす…… 443
〔307〕つのる，募集する＜あつめる…… 444
6.2.2 意図の無視 …… 445
〔308〕すっぱぬく，ばらす＜しらす，しらせる…… 445
〔309〕ばれる＜しれる…… 446
〔310〕（あばく＜しる）…… 446
〔311〕しいる／すすめる／しむける…… 447
6.3 目　的 …… 448
〔312〕ふみこむ／はいる…… 449
〔313〕どける＜ずらす（どく＜ずれる）…… 450
〔314〕ふさぐ／つめる…… 451
〔315〕しく＜おく…… 451
〔316〕おさえる…… 452
〔317〕しぼる＜ねじる＋おす…… 453
〔318〕みがく＜こする…… 454
〔319〕いける＜うめる…… 455
〔320〕ほうむる＜うずめる…… 456
〔321〕ひかえる＜いる…… 457

〔322〕かくれる，ひそむ／こもる…… 459
〔323〕たかる＜あつまる，むれる，むらがる…… 459
〔324〕はたらく＜はげむ，いそしむ＜つとめる…… 461
〔325〕くすぐる＜さする，なでる…… 463
〔326〕つきつける＜さしだす…… 463
〔327〕あやす，きげんをとる／なだめる…… 465
〔328〕みまう＜たずねる，おとずれる…… 466
〔329〕せびる，ゆする＜せがむ，ねだる，もとめる…… 468
〔330〕さそう／うながす＜もとめる，すすめる…… 469
〔331〕すすめる／もとめる…… 470
〔332〕そそのかす，けしかける＜あおる，あおりたてる…… 472
〔333〕たてかえる＜はらう＜あたえる，やる…… 473
〔334〕しいれる＜かう…… 474
7. 原　　因 …… 475
7.1 原　　因 …… 475
〔335〕そよぐ＜ゆらぐ，ゆらめく，ゆれる…… 475
〔336〕あふれる＜はみだす…… 476
〔337〕さざめく＜ざわめく，ざわつく…… 476
〔338〕つもる＜かさなる（つみかさなる）…… 477
〔339〕あたる／中毒する…… 478
7.2 主体のきもち …… 478
〔340〕ぬかずく＜ひざまずく（ひれふす）…… 478
〔341〕にらむ＜みつめる…… 479
〔342〕うなだれる＜うつむく…… 481
〔343〕（ふんぞりかえる＜そりかえる）…… 482
〔344〕しかめる＜ゆがめる…… 483
〔345〕しなだれる＜よりかかる，もたれる，もたれかかる…… 484
〔346〕あしらう＜あつかう…… 485
〔347〕ふきだす／ほくそえむ＜ほほえむ≪わらう…… 486
〔348〕いそしむ／はげむ，つとめる＜はたらく…… 487
〔349〕はしゃぐ／どよめく＜さわぐ…… 488
7.3 きもちと行動 …… 490
〔350〕はしゃぐ，いわう／よろこぶ，うれしがる…… 490
〔351〕とむらう／かなしむ…… 491

8. 評　　価 …… 492
8.1 よい評価 …… 492
〔352〕かおる＜におう …… 492
〔353〕くゆらす／くすべる …… 492
〔354〕永眠する／落命する＜死ぬ，死亡する …… 493
8.2 わるい評価 …… 493
〔355〕でっちあげる＜つくりあげる，つくりだす …… 493
〔356〕うろつく，ほっつく，ほっつきあるく／さまよう，さすらう …… 494
〔357〕なすりつける（なする）＜ぬる …… 495
〔358〕たかる＜あつまる …… 496
〔359〕むしかえす＜くりかえす …… 497
〔360〕おこたる，ずるける，なまける，サボる＜やすむ …… 497
〔361〕せしめる＜える …… 498
〔362〕ぼる＜もうける …… 498
〔363〕おもねる，へつらう，おだてる＜ほめる …… 499
〔364〕ふきこむ＜おしえる …… 500
〔365〕あおりたてる，あおる，けしかける，そそのかす＜うながす，すすめる …… 500
〔366〕ほくそえむ＜ほほえむ，ふきだす，わらう …… 501
〔367〕わだかまる＜ある …… 502
9. そ の 他 …… 503
9.1 内　　容 …… 503
〔368〕むしかえす＜くりかえす …… 503
9.2 予　　想 …… 504
〔369〕とぎれる，とだえる／おわる＜やむ …… 504
9.3 抽 象 性 …… 506
〔370〕かせぐ＜はたらく …… 506
〔371〕ふきだす／ほくそえむ＜ほほえむ，わらう …… 506

はじめに

1. 目的と方法

1.1 目的

この研究の目的は，現代語の動詞の意味・用法を，言語作品のなかで実際に使われた用例によって分析・記述することである。

最初に，このような研究が現在までの意味記述のなかでどのような位置をしめるものであるかについて，説明しておきたいとおもう。

これまでのところ，現代語の単語の意味の説明は，ほとんど辞典というかたちでされてきた。文法書と辞典というのは，常識的に考えても言語記述の2つの典型的なかたちであり，文法の記述が文典・文法書というかたちでなされるのが当然であるように，単語の意味の記述については，辞典というかたち以外，ほとんど考えることさえむずかしいほどである。しかし，辞典における意味の記述は，不完全なところがある。その不完全さが，部分的，偶然的なものなら，しだいに改良されるのを期待することができるし，現に部分的な欠点は年々改められ，よくなってきている。しかし，辞典が一方で実用性を要求される以上，それは学問的な意味の記述としては不完全にならざるをえない。すなわち，それが実用上不便でないようにある程度までの長さの記述しかゆるされないこと，また，純粋に記述的ではなく，多少とも規範的な態度を一般に要求されること，などのために，つぎのような欠点が生じる。第1に，辞典における意味の説明は，あまりに短く不完全である。具体例については，この報告書のなかでいくつかの辞典を引用し，これを批判・訂正しているので，それを見ていただきたい。しかも，だいじなことは，これが単に説明することばのたりなさというようなことだけではなく，単語の意味・用法における中間的なもの，あいまいなものを排除して，断定的に一面的にのべる傾向をもちがちだという点である。ある用法は，正しいかまちがっているか，Aの意味に属するかBの意味に属するかのどちらかで，その中間だというような説明は，辞典にもとめることができない。第2に，辞典の説明は結論だけで，その結論に到達する根拠をしめしていない。第3に，辞典の見出し語は一般に語形の順に，すなわち50音順やアルファベット順にならべられており，意味の体系的な関連がとかれていない。単語の意味は，すべて孤立してあるのではなく，これをとりかこむほかの単語によって相対的に制約されている。他の単語の意味との共通点と区別とをあきらかにできないような説明では不完全である。

一方，いわゆる意味論の分野においては，しばしば，哲学的な意味の本質に関する議論があるが，これは意味記述のしごとの中から生まれたものではなく，したがって実際に単語の意味を記述するためにはほとんど役立っていない。またかつての言語学でさか

んだった意味変化の研究も，多義語の内部構造を記述する点では直接関係をもってくるが，それが現代日本語の記述に具体的に応用されたということは，ほとんどない。このように一方では辞典というかたちでおびただしい量の記述がされ，それと無関係に，多方で意味論がのべられるという事情は，日本（語）にかぎったことではなさそうである。意味論のなかで，ほんとうに現代語の記述法がとりあげられたのは，ごく最近といってもよいであろう。

現代の単語の意味が学問的な記述の対象にならなかったのは，研究対象としてとりあげるにはあまりに自明なことであるかのようにみられたためだろう。しかし，これは言語使用者としての観点と言語研究者としての観点との混同である。使うのにすこしもまよわないごくありふれた単語の意味も，規定しようとおもうと，ひじょうにむずかしいのである。これは，われわれが自由に使いこなしている文法の規則について，学問的に記述することがむずかしいこと，またまったく無意識的にうごかしているのどや口の動きも，音声・生理学的に記述しようとすればきわめてやっかいなことと同じである。

さて，上にのべたように，辞典というかたちでの記述にみられる欠点が，この形式に本質的につきまとうものだとすれば，これとはちがったかたちでの記述法がもとめられなければならない。これについては，上に辞典における記述の欠点としてあげたものをうらがえして考えればよいであろう。

第1に，記述は，くわしい説明でなければならない。このくわしさということは，単に量的に長いということではない。辞典がほとんど肯定的にしかのべないのに対し，ばあいによっては，これこれの意味では使われない，これこれをさすことはない，のように否定的な注記をくわえることも必要であろう。また，辞典はおもに定義的，断言的なかたちでしか記述しないが，これでは中心的，典型的なばあいしかとらえることができない。しかし，意味は，このようなかたちの説明からもれる，周辺的なもの，あいまいなものをつねにもっている。たとえば，「かしげる」ということばは，一般に「かたむける」「横にまげる」のように説明されていて，それ以上なんの限定もない。ところが，実例としてはほとんど，「首をかしげる」「頭をかしげる」のように，からだの部分についてつかわれているのであって，今回の用例のなかでは「破戒」の，

○主婦(かみさん)が傾(かし)げた大徳利の口を玻璃杯(こっぷ)に受けて，茶色に気(いき)の立つ酒をなみなみと注いで貰ひ，（破戒 231）

の例がただ1つの例外だった。このばあい，「破戒」の例を正しいものとみて，「かしげる」には対象の面での限定が特にないとみとめるべきか，それとも，この例は誤用であって，「かしげる」はからだの部分をかたむけることに限定されているとみとめるべきか。どちらにしても，断言してしまうことは危険なようにおもわれる。たしかに，ふつう使われる用法としては，からだの部分に関するものが圧倒的だろうが，一方にはこれに対応する自動詞として，「家がかしぐ」のように，からだの部分以外を主体とする「かしぐ」の用法があり，他動詞の「かしげる」もたえずこれにひきずられるだろう。

このような決定のむずかしさは，なかばは調査研究の不十分さにもとづくものではあ

るが，どのように研究をすすめても，結局は一方的にきめてしまうことができない，あいまいな部分，中間的な部分がのこらざるをえない。これは，意味にかぎらず，言語が歴史的，社会的な現象であるところから，必然的におこることである。意味が変化したというとき，ふつうはその出発点と帰着点だけが注目され，そのかぎりにおいては，一定のあきらかな意味から他のもう1つのあきらかな意味へと，飛躍しているようにみえる。しかし，その途中の段階をとってみれば，かならずそのどちらとも断言できない，あいまいなものがあったはずである。

「ひく」という動詞が楽器についてもちいられるばあい，辞典はつぎのように説明している。

「ひく」

楽器を鳴らす （講談社国語辞典）

楽器をかきならす （明解国語辞典）

弦楽器をかきならす （岩波国語辞典）

弦楽器・鍵楽器をかき鳴らす （辞海）

このうち，単に「楽器」のように限定している規定は，笛や太鼓までふくめてしまうことになるから，広すぎることはあきらかである。「弦楽器」という限定はかなり正確ではあるが，ピアノやオルガンについてもこの動詞がつかわれる点で，不十分だ。ピアノまでは弦楽器といえるかもしれないが，オルガンについては「鍵（盤）楽器」という規定をしなければ，あてはまらない。ところで，ピアノやオルガンが使われだしたのは，近代になってからであって，それ以前は「弦楽器」という規定で十分だったであろう。ピアノ，オルガンがはいって，これを「ひく」という表現が生まれたその具体的な状況を今から再現することはむずかしいが，おそらくそのばあいにも，「三味線をひく」から「バイオリンをひく」への移行がスムーズであったのにくらべれば，ギゴチなく不自然におもわれる段階があっただろう。そのような段階におけるこの動詞の意味を規定するばあいに，「鍵（盤）楽器」ということばをいれるにしても，いれないにしても，おちつかなかったにちがいない。

このようなあいまいな用法というのは，ある人は正しいとし，別の人はまちがいだとするようなばあいにもっともあきらかだが，ある個人をとっても，一定の用法が正しいかまちがっているか，つねに明確に断言できるものではない。社会的な変動は，やはり個人の言語意識や言語行動のなかにも反映してくるのである。この点は文法現象のばあいと同様である。たとえば，現代の日本語において「見れる」「来れる」などというういい方を正しいとするか，まちがっているとするかは，むずかしい問題だ。このような現象は，まさにそのどちらに断言することもできない中間的なものとして説明されなければならない。意味が単純な定義的なかたちで説明しつくせるものでないことは，ちょうどある言語の文法的な性質が，単にこれを動詞・形容詞などとよぶことによって説明しつくせないのと同様である。あとで意味と文法との関係をのべるところであきらかにするように，動詞のなかにも，実はもっぱら過去形でつかわれるもの，肯定のかたちをほ

とんどもっていないものなど，いろんな用法上のかたよりがあり，もし文法現象を十分に説明しようとするならば，1語1語について，それらのこまかい用法まで説明しなければならない。最後には，Aの語形・用法でつかわれることは多いが，Bの語形・用法でつかわれることは比較的少ない，のように，量的な規定をすることも必要になってくるだろう。

もちろん，ここでいっていることは，定義的な形での説明を否定するものではない。意味は，ことばによって定義的なかたちで明確に規定することができない，ということを強く主張するならば，不可知論におちいるであろう。定義的なかたちで，意味の本質的な部分は説明することができる。しかし，一定の説明が固定したとき，そこからは，つねにもれるものがあり，その説明は不完全なものでしかないであろう。これをよりくわしくより精密に説明していくことによって，われわれは，意味の完全な説明に無限に近づくことができる。

第2に，辞典のかたちをとらない記述では，結論だけではなく，論証の過程をもしめさなければならない。そして言語の現象形態は言語活動だから，このような論証の過程は，用例の検討というかたちをとる。辞典における用例は，すでにえられた結論を，典型的なかたちでしめすためのものであり，うたがわしい用例をのせる必要はない。しかし意味の記述ではそのような例もまた貴重である。上に「かしげる」の「破戒」の例をあげたが，この用例を正しいとみとめる点に疑問があるのは，これが単に1例にとどまるということだけからではない。これが「破戒」という作品にしかみえなかったということは，現在からすでに数十年まえの明治時代の用法であった可能性と，信州方言的な用法であった可能性とをもっているということであり，それだけ，現代日本語の用例としては，根拠がうすくなるのである。

第3に，辞典のかたちをとらない記述は，50音順の配列ではあきらかにすることができない，言語の意味的な体系を記述しなければならない。意味的な体系には，いわば外的なものと内的なものとがある。外的なものというのは，1つの単語とほかの単語との作りだすものであって，たとえば類義，反対，上位下位の関係などが，これにあたる。また，内的な体系というのは，1つの単語の意味のなかにおけるいくつかの意味の相互関係，さらに1つの意味を構成するいくつかの意味的特徴の相互関係などである。この報告書の第2部「意味特徴の記述」，第3部「個々の語の記述」が，それぞれ，外的体系，内的体系の説明にあたるものである。これらについては，それぞれの部の説明を参照していただきたい。

なお，われわれの研究目標は，さしあたって，意味記述それ自体である。方法論の研究はこれに当然ともなうものとして考えているのである。用例の多さがある単語についての分析の正確さを保証するように，どのくらい多くの単語についてどのくらいくわしく分析したかというその量が，意味論のたかさを保証する。貧弱な記述例の上に，あるいは多くの単語のあらい記述の上には，貧弱な意味論しかつくることができない。

1.2 調査の方法

調査方法の面からいうと，大量の用例をつかったということが，今回の研究の特徴である。この，用例をつかうということの意味について，すこしのべることにする。

多くの用例から意味を帰納することは，ごくあたりまえの方法ではあるが，現在，かならずしも人気がないようにみえる。それよりもむしろ，用例をいくらあつめても言語の法則性を説明することにはならない，とか，単なる現象の記述は学問ではない，とかいうことがいわれる。ここでは，これに対しあまりにも古典的にみえるかもしれないつぎのような立ち場をとった。

> 「正確なる意義解釈の上には用例を集める程大切な事は無い，山成す用例の前には百の疑問も自ら氷解し千の議論も立所に鳴を鎮めるものである」(市河三喜『Macbeth』旧版の緒言)

ただし，この立ち場にたつということは，実際に今回の調査が「山なす用例」にもとづいていることを意味するものではない。全体としてみれば，われわれの集めえた用例の数は理想からはるかにとおく，このため分析が不十分なものにおわらざるをえなかったことは，あとの記述のなかで何度ものべているとおりである。また，より多くの用例によって意味が一層明確なすがたをとってくるとはかぎらない。逆に，意外な例があらわれて，明確に規定できるようにみえたものが，かえってあいまいになってしまうこともある。しかし，そのばあいには，このあいまいなすがたこそ意味の真相なのであり，問題の解決に一歩近づいた点はかわりない。

用例による研究方法の妥当さについては，原理的な面と実際的な面と2重に論ずることができる。まず，原理的な面からいえば，用例とは，一体なんであるかということがある。もし，われわれの研究対象が，用例や言語活動をはなれてあるものなら，なんらかの方法で，その対象そのものが観察できればよいことになる。しかし，言語は現象としての言語活動のなかにしか存在しない。それは現象であって，そこから分析して本質的なものをとり出さなければならないのだが，そのためにはまず多くの現象（用例）をあつめなければならない。理論は現象をうまく説明できさえすればよく，理論の源泉はどうでもいいのだ，という考えがある。これは形式的にはもっともにみえるが，Aであれば十分でBである必要はない，というとき，そのAとBとは無関係なものでなければ実際上はあまり意味がない。ところが用例を数多くあつめて，これを分析することこそ，これらの用例をうまく説明する理論に達するためのもっともよい手段である。こうして問題は原理的なところから実際的な面にうつる。

実際上の面からいえば用例が多い方がいいことは自明のことである。ただ，数のことについていうと，多いばあいの欠点としてつぎの2つが考えられる。すなわち，それが処理能力をこえないかということと，資料の純粋性がたもてるかということである。

まず，あまりに多くの用例があれば，それを1とおり見るだけでも時間をくってしまって，なかなか分析できないことはたしかだ。しかし，実際の作品から用例をあつめる方法によれば，大体の傾向としては，多くえられる用例は基本的な単語のものであり，し

たがって多義的なものが多く，それだけ多くの用例が分析に必要とされるものである。数千例を分類し，検討する作業はたしかに楽ではないが，今回あつめた程度の資料のなかで，数千の用例がえられた動詞というのは，それを全部検討するにあたいする程度，あるいは全部みてもまだまだたりない程度に，意味の構造が複雑なものである。たとえば，あとで分析している動詞の「でる」や「あがる」を参照。逆に，今回あつめた程度の資料ではまだほしい用例が5，6例あるいは1，2例しかないというものがひじょうに多かった。どんなに単純な動詞でも，10例や20例では，けっして多すぎるという感じはしないものであり，一般論としていうならば，動詞の分析にあたって今回程度の資料ではたりない方がはるかに多い。対象が単純であるのに資料が多すぎて処理能力をこえる，ということは，今回のにくらべてすくなくとも数倍，あるいは数十倍のデータがえられた段階で，はじめて現実的な問題になりうるものであろう。

つぎに，用例をふやすことによって資料が等質的でなくなるのではないか，という問題がある。あとでしめす表にみるように，今回利用した資料でいちばん古いのは，1898年の国木田独歩「武蔵野」であり，いちばん新しいのは，1966年の関つとむ「未知の星を求めて」その他である。つまり資料の年代はほぼ70年にわたる。この70年という時間は，対象の等質性をもとめるという観点からみて長すぎはしないかという疑問があるかもしれない。われわれは現代語の動詞を分析するという目標をかかげている。明治時代の言語資料は近代語の範囲には当然はいるとしても，現代語というには古すぎはしないか，むしろ，たとえば戦後のものにかぎった方がよいのではないか，という考えもありうるだろう。しかし，これは実際上ほとんど気にするにたりない心配だ。というのは，ここにあげたような口語文の作品を材料とするかぎり，明治・大正時代から現代にいたるまでの動詞の意味の変化というのは，ほとんど無視できる程度のものだからである。たしかに，今では使われず，明治時代の作品にしか出てこないのではないか，というような使い方も，全然ないことはない。しかし，それは大体周辺的な部分，すなわちごくまれにしかつかわれない動詞の用法についておこっていることで，基本的な動詞の基本的な用法に変化があるわけではない。そして，このような周辺的な部分における変化のはばは，たとえば1970年という1年間に発表された作品のうちでの個人個人のくせによる変化のはばにくらべて，それほど大きいものとはおもえない。さらに，積極的にいうならば，資料の年代をくぎることによって等質性に近づくということは，ある程度まではいえても，結局のところ，純粋の等質性という概念は幻想にすぎない。今のべたように，同時期における何人かの筆者たちのあいだのちがいは，つねに存在するものだし，同一時期における20代の筆者と70代の筆者とのことばづかいのちがいが，同一筆者の20代・70代のことばづかいのちがいよりもちいさいという保証はどこにもない。むしろ，そのような混質性を本質的にふくんだものが現代語なのであって，現代の社会が複雑になり，書きことばによる前の時代のことばの保存がますます広くおこなわれるにつれ，言語は純粋の等質性という概念からますます遠くへだたらざるをえないのである。現にここにとりあげた作品は，発表以来，あるいは作者の死以来すでに何十年をへたもので

あっても，みな文庫本として毎年新しく印刷され，ひろく読まれているものである。あたらしく書かれる文章への影響力という点からみるならば，現在年々書かれている作品にくらべて，けっしておとるものではない。一見異質の資料にみえるものであっても，むしろ周辺的な用法として，あるいは文章語的な文体上の変種として，現代語の体系の必要な構成部分になっていることが多いのである。ただし，現代語の混質性といっても程度問題で，今回も，文語文の引用部分や，「土」の関東方言，「春琴抄」「真空地帯」の関西方言の会話などは，なるべく使わないことにした。

つぎに，その用例をどのようにしてあつめるか，という問題がある。これについてはこの研究でとったように，すでにある言語作品（ここでは書きことばに限定したが，話しことばを録音採集することも，原理的には同じ意味をもつ）から採集する客観的な方法と，研究者または被調査者が可能だとおもわれる言いまわしをいろいろ考えてみる主観的な方法とがある。これらにはそれぞれ長所も短所もある。

まず客観的な方法の短所から先にいうと，これだけではその用例が正しいかどうかをいうことがむずかしい。上にのべた資料の混質性とは別に，あきらかにまちがいとおもわれる例もないことはない。たとえば，

○朝日の照り返へしに眼がチクチクとしみるやうな石だたみの道を裕佐は自分の家の方へ歩いてゐた。何と云つて弁解してもおのづと滅入り込んで行く胸の暗さを抱いて悄然とした垂れた彼の姿は惨めであつた。（青銅の基督 34）

「しなだれる」は，ふつう，なまめかしいようすで他人に寄りかかることをいう。ここでは「うなだれる」と語形がにているために，いわゆる類音牽引をおこしたのではないかとおもわれる。したがって「しなだれる」の分析にあたっては，はぶくべき例であろう。しかし，このようなことがいえるのは研究者自身が現代日本語の話し手だからで，もし研究者が未知の言語を，用例だけをたよって研究するばあいには，これがほかの用例とならぶ正しいものであるかどうかをいうことはきわめてむずかしい。もし用例の数が圧倒的に多ければ，正しさをきめる上での参考にすることができる。たとえば「しなだれる」のふつうの意味が1万例あるのに対し「うなだれる」とおなじような意味に使われたものが1例しかなかったとすれば，この例はうたがわしいということもできるだろう。しかし，一方が数十例で，他方が1例だという程度の比率では，その1例の方を誤用ではないかとうたがう根拠にはならない。そして，このような誤用がおこる可能性があるのは，たやすく数多くの例がえられる，基本的な単語の中心的な用法についてではなく，あまりつかわれない単語や周辺的な意味においてであり，数十例をさがすことでさえ，むずかしいばあいなのである。現に，今回集めた数十万の動詞の例のうち，「しなだれる」という動詞は，上にあげた誤用とおもわれるものもふくめてわずか2例にすぎなかった。

このように，ある程度は研究者の判断にたよらなければならないとはいえ，用例の数がふえてゆけば，この客観的な方法がすぐれていることはあきらかである。あとの分析の実例をみればわかるように，動詞の意味の分析はこの動詞といっしょにもちいられ

る主語や目的語や修飾語が，どのようなものやようすをあらわしているかということを，おもな手がかりにしてすすめられる。そして，ある動詞にかかっていく目的語や修飾語としてどんなことばがくるかということは，とうてい思いだしつくせるものではない。前にあげた「ひく」という動詞の分析にあたって，もし「オルガンをひく」という例を思いださなかったら「弦楽器をならす」という規定にとどまって「鍵（盤）楽器」という規定をいれないでしまうかもしれない。ことばに関するわれわれの記憶力は，一面では実におどろくべきものがあり，おなじ言語社会にそだった人たちのあいだでは，かなりよく一致するものである。実際，これまでの国語辞典は，ほとんどすべて，編集者・執筆者の思いだした用例をもとにして記述されており，それでもそれほど大きなまちがいはおかしていない。しかし，また，こまかいところにいけば，その記憶がかなりあやしいことも事実である。被調査者が，そんなことばづかいは全然しない，と断言したすぐそのあとで，これを使ってしまうというようなことは，方言調査の際などにしばしばぶつかることである。

意味の分析に，客観的に，用例を利用するといっても，いわば白紙の状態でいきなり用例にあたるとはかぎらない。国語辞典の説明をよみくらべて，一応の分析をしてから用例にあたることも多いし，そうでなくても無意識のうちにある程度の予想はたてているものである。ところが，その予想に反する実例が1例でも見つかると，とたんに考えがぐらついて自信がなくなったり，あるいは自分の予想のちがいをただちに気づかされる，といったばあいがある。たとえば「むれる」「むらがる」という動詞については，最初，人間や動物についてしか使われないだろうと考えていた。ところが，実例にあたってみると，これに反するものがある。

○二つの水の間の三角の段丘に，椰子が群れてゐた。（野火 48）

○かれらのゆく小径のまはりには，松の木のやはらかな草生（くさぶ）のところどころに，赤いげんげの花が群がつて咲いてゐた。（潮騒 92）

「むれる」についてはまだ多少疑問があるが，「むらがる」については，あきらかに主観的な予想のちがいだったとみられる。また「ふんぞりかえる」は，いばったようすの形容に使うことばかとおもっていたが，

○しかし駿はその婦人の腕の上でも，しきりに踏んぞり返つて泣続けた。（波 177）

のような例をみると，そうではないことがわかった。

なお，用例から帰納することの問題点として，もう1つ，のべておかなければならないことがある。それは，用例はそのあらわす現実と切りはなされているということである。動詞の意味の研究にあたっては，その動詞のあらわした具体的な動作や現象を用例とともに観察することが，いちばん正当な研究法であろう。ところが，われわれにあたえられているのは一定の言語表現だけであって，それが具体的にどのような現実を表現しているかは，想像するよりしかたがない。たとえば上にあげた「ふんぞりかえる」ということばについても，赤ん坊がどの程度にからだをそらしたことを「ふんぞりかえる」であらわしたかは，その場面を想像してみるよりしかたがない。

意味の分析にとって，文脈はたしかにたいせつである。しかし，それはあくまで文脈が意味を知る手がかりをあたえるからで，それ以上ではない。ほかの単語との結びつき，あるいはその能力は，意味によって規定され，あるいは逆に意味を規定する1つの条件であって，意味そのものではない。この点を混同して，意味とは「それがあらわれうる言語的文脈の総和である」(A. A. Hill の規定，Y. Ikegami "Structural Semantics" Linguistics 33, p. 57 の引用による) とまでいうと，それは言語と現実との関係を無視した形式主義である。

しかし，このような事情が，どの程度欠点としてひびくかは，分析の対象である単語の種類によってちがう。具体名詞の「ペン」「鉛筆」「万年筆」のちがいを，これらがもちいられた用例から知ろうとすることは，きわめて能率のわるい方法であろう。このようなものについては，実際にそのあらわしているもの自体を直接みるのがよい。これにくらべれば，動詞のように名詞のあらわすものの属性をあらわし，名詞によりかかってその意味を表現するばあい，これと関係する名詞などの意味がわかっていれば，まだしもその現象を想像しやすい。つまり，例文を使う方法は，物のなまえのように，比較的文脈から独立しているものよりも，動詞のように，言語的な文脈に依存しているものにおいて有効である。文脈依存度の大きさは，また，動詞にとって「～に」と結びつくか「～を」と結びつくかといった文法的性質が重要だという点にもあらわれており，この面でも例文が多いことは役に立つ。

2. 資　　料

この調査の資料である用例カードの種類・内容・テキストなどは以下のとおりである。

1. 文学作品

明治・大正・昭和にわたる52の文学作品から採集した資料である。その作品と，用いたテキストは次の表のとおりである。用例の出典のあとにつけた数字は，そのテキストにおけるページ数を示している。

なお，原作は歴史的かなづかいで書かれていて，使用したテキストでは現代表記に改められているもの，あるいははじめから現代かなづかいで書かれているものには＊印をつけた。

	年代	作家名	作品名	出典	ページ数
1	1898	国木田独歩	武蔵野	岩波文庫	27
2	1900	泉鏡花	高野聖	〃	72
3	1901	徳富健次郎	思出の記（上）	〃	229
4	1906	伊藤左千夫	野菊の墓	〃	54
5	1906	島崎藤村	破戒	〃	336

6	1907	田山花袋	蒲団	〃	81
7	1907	二葉亭四迷	平凡	〃	135
8	1910	長塚節	土（上）	〃	208
9	1913	森鷗外	阿部一族	〃	55
10	1913	有島武郎	或る女（前）	〃	233
11	1913	鈴木三重吉	桑の実	〃	159
12	1914	夏目漱石	こゝろ	〃	285
13	1915	徳田秋声	あらくれ	〃	249
14	1915	芥川竜之介	*羅生門	〃	12
15	1916	倉田百三	*出家とその弟子	〃	213
16	1917	佐藤春夫	田園の憂鬱	〃	115
17	1917	久保田万太郎	末枯	新潮文庫	56
18	1919	菊池寛	恩讐の彼方に	岩波文庫	34
19	1919	武者小路実篤	友情	〃	125
20	1921	志賀直哉	*暗夜行路（前）	〃	261
21	1922	長与善郎	青銅の基督	〃	114
22	1923	正宗白鳥	生まざりしならば	新潮文庫	45
23	1923	里見弴	多情仏心（前）	岩波文庫	359
24	1926	宮沢賢治	銀河鉄道の夜	〃	79
25	1926	宮本百合子	伸子（上）	〃	199
26	1928	山本有三	波	〃	394
27	1929	小林多喜二	蟹工船	〃	113
28	1930	林芙美子	*放浪記	新潮文庫	303
29	1930	横光利一	機械	〃	29
30	1930	野上弥生子	真知子（前）	岩波文庫	205
31	1931	永井荷風	つゆのあとさき	〃	114
32	1933	谷崎潤一郎	春琴抄	〃	76
33	1934	室生犀星	あにいもうと	新潮文庫	25
34	1936	佐多稲子	*くれない	〃	144
35	1936	阿部知二	冬の宿	岩波文庫	195
36	1937	川端康成	雪国	〃	170
37	1938	中山義秀	厚物咲	新潮文庫	37
38	1938	堀辰雄	風立ちぬ	岩波文庫	92
39	1939	岡本かの子	河明り	新潮文庫	99
40	1939	太宰治	富岳百景	岩波文庫	23
41	1943	中島敦	李陵	新潮文庫	52
42	1947	丹羽文雄	*厭がらせの年齢	〃	42
43	1948	大仏次郎	帰郷	〃	349
44	1948	田宮虎彦	*落城	〃	44
45	1949	井上靖	闘牛	〃	80

46	1950	獅子文六	*自由学校	〃	377
47	1950	井伏鱒二	本日休診	〃	82
48	1951	大岡昇平	野火	〃	176
49	1952	野間宏	*真空地帯（上）	岩波文庫	232
50	1954	三島由紀夫	潮騒	新潮文庫	159
51	1954	中野重治	*むらぎも	〃	352
52	1959	石川達三	*人間の壁（上）	〃	350

（合計8047ページ）

これらの作品は，1作家1作品の方針で，次のような順に選択した。

(1) 岩波文庫「百冊の本」におさめられている作品。

(2) 岩波・新潮・角川の3文庫に共通しておさめられている作品。

(3) 岩波・新潮・角川のうちの2文庫に共通しておさめられており，かつ吉田精一編『日本文学鑑賞辞典（近代編）』に項目として取りあげられている作品。

2. 科学説明文・論説文など

文学作品とは性質のちがった資料として，あとから補充的に追加したものであるが，下記の資料からとった用例カードがある。作品名につけた＊印は文学のばあいと同様である。

作品年代	執筆者	作品名	出典	ページ数
1916	河上肇	*貧乏物語	岩波文庫	163
1929	出隆	*哲学以前	新潮文庫	260
1920～1941	三木清	人生論ノート	〃	141
1934～1951	小林秀雄	*私の人生観	角川文庫	139
1919～1922	阿部次郎	人格主義	〃	170
1950	笠信太郎	*ものの見方について	〃	185
1937	石原純	*社会事情と科学的精神	現代日本思想大系25・科学の思想Ⅰ	11
1946	武谷三男	*革命期における思惟の基準	〃	14
1948	湯川秀樹	*物質世界の客観性について	〃	34
1947	坂田昌一	*原子物理学の発展とその方法	〃	16
1936	長岡半太郎	*総長就業と廃業	〃	30
1948	渡辺慧	*原子党宣言	〃	6
1961	梅棹忠夫	*高崎山	現代の教養6・学問の前線	53
1965	小尾信弥	*宇宙の謎はどこまで解けたか	〃	11

1964	藤田信勝	*物質の根源と宇宙を結ぶ	〃	33
1965	高瀬良夫	*生命の暗号を解く	〃	29
1965	柴谷篤弘	*生命の謎はどこまで解けたか	〃	12
1964～1965	朝日新聞学芸部	*学問の動き	〃	36
1965	石田英一郎	*抵抗の科学	〃	7
1965	藤森栄一	*旧石器の狩人	〃	14
1966	関つとむ	*未知の星を求めて	〃	15
1966	渥美和彦	*人工心臓を体内に	〃	12
1966	桜田一郎	*新しい繊維	〃	9
1966	坂井利之	*文字を読む機械	〃	9

（合計1409ページ）

以上「文学」「論説文など」の用例カードの具体的な作成方法，経過などについては『国立国語研究所年報』16～18を参照。

3. 「現代雑誌九十種」の用例

先年，書きことば研究室が行なった「現代雑誌九十種の用語用字」の調査のために作られたカードが，そのまま用例カードとして利用でき，これも資料の一環をなしている。

この雑誌資料はすべて，昭和31(1956)年の1月号から12月号までのものである。90種の雑誌の名まえは，国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊の2ページにゆずることにする。ここには雑誌の類別と各類の例だけをあげよう。

評論・芸文（12誌）　群像・世界……
庶民（14誌）　家の光・週刊朝日……
実用・通俗科学（15誌）　エコノミスト・自然……
生活・婦人（14誌）　暮しの手帖・婦人公論……
娯楽・趣味（35誌）　アサヒカメラ・小説の泉……

引用した例については，出典として雑誌名・発行年月・ページが示してある。

4. 「総合雑誌」の用例

「現代雑誌九十種」の前に，書きことば研究室が行なった「総合雑誌の用語」の調査のために作られたカードも，同じく資料の一部分をなしている。

この雑誌資料は昭和28（1953）年7月号から昭和29（1954）年6月号までのものである。雑誌は次の13種である。

改造　解放　学園評論　国民　心　人生手帖　世界　世潮　中央公論　日本及日本人　ニューエイジ　文芸春秋　平和

以上の各種資料からえた動詞の用例の概数は，つぎのとおりである。

文学・論説文など	30万前後
現代雑誌九十種	約10万
総合雑誌	約5万

ただし，雑誌の用例は統計のために採集したので厳密にかぞえてあるが，文学・論説文などについてはそうではない。「〜ている」「〜とみえる」などの補助的な用法の例は採集しなかったほか，分析にあまり役立たないと思われる例は適当にはぶいた。それで数や比率が問題になるときは，なるべく雑誌の方の例をとりあげた。

以上のような用例とまったく異質の資料として，部分的に，主観的な言語意識についての調査結果をしるしたところもある。これは，1970年6月にお茶の水女子大学国文科の学生に対して行なったもので，みじかい例文について，

日本語として普通だと感じるものに　○
やや普通でないと感じるものに　△
あきらかにおかしいと感じるものに　×

をつけるよう，もとめたものである。被調査者は合計21名で，うち8名が東京出身であるほかは，東北から九州まで，出身地は全国にちらばっている。結果的に，出身地の差は特に見られない。この調査結果をしるしてある箇所は，第1部の分析例のうち，つぎの番号のものである。

〔3〕〔18〕〔22〕〔42〕〔49〕〔61〕〔73〕〔88〕〔90〕〔105〕
〔110〕〔118〕〔119〕〔125〕〔127〕〔139〕〔156〕〔179〕〔188〕〔285〕
〔319〕〔340〕

第1部　意味特徴の記述

0.　前　お　き

0.1　記　述　法

1対の単語の意味を区別する特徴を「意味特徴」または略して単に「特徴」とよぶ。この1対をなす単語は，両方または一方が1語のこともあり，何語かになることもある。

特徴をみつける手つづきは，つぎのとおりである。

いま，A・Bという1対の単語（または単語群）をとって考える。この両者は，ある文脈では，おたがいにおきかえても，ほぼおなじ事実をあらわすものとする。このような文脈は，1つにはかぎらない。すなわちA・Bをおたがいにおきかえても，おなじ事実をつたえるような短文は幾組かつくることができる。このようにA・Bにとっていわばおなじ環境をなす例文のグループを例（AB）とあらわすことにする。一方，Bの例文としては使えるがAをBのかわりに代入することはできない，という文もあるはずである。これを例（B）であらわす。A・Bの意味の差は，この例（B）と例（AB）とを比較することによってえられる。すなわち，Aが例（B）に現われないのは，Aの意味がこの点で積極的な制限をもっているからである。この制限が，Aにとっての意味的な特徴を示していると考える。

たとえば「ほえる」と「なく」という1対の動詞をとったばあい，「犬が〜」「けものが〜」というような文脈では，このどちらをいれることも可能である。すなわち，これらの文は例（AB）である。一方，「ねこが〜」という文脈では，「なく」をいれることはできるが，「ほえる」をいれることはできない。これが例（B）である。このようなちがいから，「ほえる」と「なく」には，その動作の主体の面におけるちがいがあること，「ほえる」は猛獣や犬にかぎられ，それ以外の小動物についてはつかわれないこと，一方「なく」の方は，すくなくとも「ほえる」にくらべれば主体の範囲が広いことがいえる。AとBとのあいだで，このようにBの意味が広いこと，BとAとが上位下位の関係（hyponymy）にあることを

A＜B

というかたちであらわすことにする。意味特徴の記述でとりあげた対は，ほとんどがこのように上位下位の関係にある語群である。

もし対立する両方が上位下位の関係になく，おなじレベルであるとき（たとえば「ほえる」と「さえずる」）には，この関係を，

A / B

とあらわすことにする。

また，ときとしては，いわゆる反対語の関係にある動詞を1対のものとしてくみあわせたこともある。このばあいには，

おす——ひく

のようなかたちであらわした。このような対立は，いうまでもなく，動詞にみられるだけではない。もっとも典型的な例を名詞の方からひろうと，たとえば，「男」は「人」よりも下位にあり（男＜人），「男」と「おとな」とはおなじレベルにおいて対立しているばあいであり（男／おとな），「男」と「女」とは反対の関係にある（男—女）。

なお，ここで注意しなければならないのは，多義語の処理である。たとえば「自動車が**はしる**」「この布地は湿気を**きらう**」「文字を**よむ**機械」などというように，本来人間または動物についてつかわれていた動詞が，生産物・機械などの類についてつかわれることが少なくない。このばあいの処置については，つぎの3とおりが考えられる。第1に，これは臨時のぎ人化した比ゆ的方法だ，とするものである。そのばあいには，これらの動詞は人間または動物だけを主体とし，無生物とは結びつかないといえる。第2に，これらは基本的な意味から派生した意味においてつかわれている，とするやり方である。こう考えれば「はしる」や「きらう」は基本的意味では人間または動物に，派生的意味では，広く無生物についてつかわれることになる。第3の解決法は，意味が広がり，変化したとするものである。この立ち場をとれば，「はしる」「きらう」「よむ」などは，とくに人間や動物に限定されず，広く生物無生物をとわずいろんな主語と結びつくことになる。しかし，そのばあいの意味は，たとえば「はしる」についていえば，「あるく」と対立させて，「ある瞬間には両足とも空中にあるような状態で早く移動する」のように規定することはできない。早く移動すること，または単に移動することの意味だとしなければならない。以上3とおりの解決法のうち，どれが妥当かは，実はその単語単語により，また用例用例によってまちまちだろう。いまのところ，1つの意味であるか，それとも2つの意味に分けるべきかということについての基準が立たないので，ここでは，ごく常識的に考えて処理することにする。

0.2 この方法の性質

このような記述法をとったのは，つぎのような理由からである。1つ1つの単語を全面的に記述する方法はたしかに必要ではある。しかし，これをくわしくやるには，労力も記述のスペースもかなりの量を必要とする。このことは，この報告書の第2部をみていただければわかるとおりであって，そのような方法によって記述できる単語の数は，動詞全体からみれば，わずかなものにすぎない。したがって，一方ではこれをおぎなうようなかたちで，一面的，部分的ではあっても，多くの単語を問題にしうるような記述がのぞましいと考えた。

また個々の動詞の記述にあたっては，その動詞の意味のあいだの相互関係はとらえることができるが，その動詞とほかの動詞との相互関係は正面にでてこない。このような体系性をあきらかにするためにも，意味特徴をひきだして記述するという方法は役に立

つものである。単語間の相互関係をあきらかにすることは，直接比較されている「ほえる」と「なく」とをむすびつけるだけではない。同様にしてたとえば「さえずる」もまた「なく」の下位にはいるのであり，「なく」を媒介にして「ほえる」と「さえずる」「いななく」などがむすびつけられるのである。「ほえる」と「なく」との関係を問題にしているかぎり，主体の面における制限ということは，いわば「ほえる」の示差的（弁別的）特徴だといえる。しかし，特徴を単に示差的とだけ考えるのは一面的である。「あがる」における＜上＞という方向性は，これを「さがる」や「かえる」に対する特徴たらしめているかぎりにおいて示差的である。しかしこれが非移動的な「あおむく」と「あがる」とに共通にはたらいているという意味においては，示同的，包括的な特徴でもある。

さらに，「あがる」が「上への移動」だというとき，「あがる」と「上」との意味的なつながりが，しめされている。方向の分析のさいにのべるように，「上」ということばの内容もけっして単純ではなく，その意味的派生は，ちょうど「あがる」という動詞が方向の面でいろんなニュアンスをともなってつかわれることに対応しているのである。言語の記述において，記述される対象言語と，それを記述する手段としての記述言語とを区別するならば，「あがる」は対象言語，「上」は記述言語に属する。しかし，われわれが自国語を自国語によって分析するとき，対象言語も記述言語も，ともにおなじ言語である。意味の特徴をひきだすというしごとは，客観的な単語の意味の分析であるとともに，それの記述法の研究でもある。「ほえる」や「いななく」や「さえずる」の上位語が「なく」であるということ，これらが「なく」動作の一種であることを確認することは，対象言語における問題ではあるが，同時にそれは，これらの意味を記述する記述言語において「なく」ということばを使ってよいこと，「なく」という動詞をなにかのかたちで限定することによって「ほえる」などの動詞の意味が説明できることをもしめしている。

意味から特徴をひきだすことは，複雑な対象を側面に分析するということである。そのことによってほかの単語の意味と関係がつけられるのである。たとえば石油を燃料と規定することによって，この物質は，木・石炭などと関係がつけられ，さらに消極的な意味では，水や牛乳とも関係づけられる。ちょうどそれとおなじように，「あがる」を「上への移動」と規定することによって，このことばは「上」「うかぶ」「いく」「おりる」その他多くのことばと関係づけられるのである。

単語を対立させ，そこから意味的な特徴をさぐろうとする研究は，音韻論にヒントをえたいわゆる成分分析の方法にちかいものである。しかし，この報告書での記述法と，いままでにされている成分分析とのあいだには，ちがいがある。それは，成分分析が単語を特徴（成分）に分析しつくし，その成分を再構成することによって完全に単語の意味を記述することを目標としているのに対し，ここでの記述はかならずしもそうではない，という点にある。「ほえる」はすくなくとも主体の面における限定がある。と同時に，そのなき方におけるはげしさ，おそろしさといった面における限定もある。それ

で「ほえる」の特徴を完全につくしたことになるかどうかは，ここでは問題にしない。とにかく，上位の語と対立させることによってひきだしうる特徴を，ひろくいろんな動詞から，できるだけ多くひきだそうとするのが，ここでの目標である。このことと当然関連することだが，これまでの成分分析は，対象を意味的に比較的よくまとまった1群の単語にかぎっている。これに対し，今回の調査では，できるだけひろくいろんな動詞にあたることを目標とし，とくに動詞の範囲をくぎることをしなかった。単語の意味が結局は成分に分解しつくされ，意味は成分の束として記述できるものであるかどうかについて，ここでは肯定的な答えも否定的な答えもだそうとはおもわない。はじめにものべたように，意味の具体的な記述とあまり関係のないところで壮大な論理をくりひろげてもしかたがないのである。実際にどこまで要素がとりだせるかは，観念的な理論の問題ではなくて，具体的な記述の問題である。

この記述法は万能ではなく，単語の性質によって，適用しやすいものと，そうでないものとがあるはずだ。抽象的なカテゴリーがとりだしやすい分野，上位語対下位語の対立が見つけやすい分野と，そうでない分野とがあるだろう。このことをみるために，第1部で分析の対象にした動詞を意味分野によって分類し，これを国立国語研究所編『分類語彙表』における分布と比較することにした。ただし，

1) 不等号（＜）の右辺にある上位語は，一般に，それ自体を積極的に規定するために出したのではなく，下位語を規定するための，対照項目としての意味しかないので，ここでは集計しなかった。
2) 「する」のついた複合動詞など，『分類語彙表』にないもの（30語ほど）ははぶいた。
3) 2か所以上で分析した動詞も，ダブって集計することはしない。
4) 『分類語彙表』の分では，逆に，何か所にも出てきた動詞は，それぞれの場所でダブって集計した。

以上のような方針で集計すると，つぎのような結果がえられる。カッコ内は%。

	A. 分類語彙表	B. 分析した動詞	B／A
2.1 抽象的関係	2112 (44.8)	299 (57.4)	0.14
2.3 精神および行為	2134 (45.3)	157 (30.1)	0.07
2.5 自然現象	467 (9.9)	65 (12.5)	0.14
計	4713	521	0.11

このように，「2.1 抽象的関係」に属する動詞の方が，「2.3 精神および行為」に属するものよりも，比較的多くとりあげられている。ということは，後者の方がこの方法を適用しにくいことのあらわれであろう。さらに，「2.3」のなかでも，

	A. 分類語彙表	B. 分析した動詞	B／A
2.30 感覚・感情・思考	742 (15.7)	24 (4.6)	0.03
2.33 生活・動作	321 (6.8)	51 (9.8)	0.16

のように，身体的な，具体的な動作にくらべて，精神活動はあまりあつかわれていな

い。

このように，対立・特徴がひきだしにくく，この記述法ではあつかいにくい単語が，けっきょくあつかえない，ということになるかどうかは，天下りにではなく，そこへ近づく努力をするなかで，答えられるべきである。

対立を見つけだしていく態度としては，まず大きな意味的カテゴリー，あるいは抽象的な意味特徴をかんがえ，それが個々の動詞にどのようにあらわれ，これをどう組織しているか，という方向でみていくこともできる。しかし，ここでは，あくまで個々の単語に密着したかたちで記述をする。単語を手がかりにして動詞における意味の全体的な構造をあきらかにする方向ではなくて，意味特徴を手がかりにして個々の単語の意味自体を記述する方向である。まして，ここで問題にしている特徴が日本語をこえた普遍性をもっているか，比較的少数の特徴に帰着するか，などの点は，はじめから問題の外にある。普遍性についていうならば，それは，普遍的な面がある，ということであって，とりだされた特徴がまるごと普遍的，超民族的だということではないだろう。具体的にあらわれた姿では，上下の方向性といったものでさえ，おそらくは普遍と特殊，人類的なものと民族的なもの，論理的なものと歴史的なものとの統一としてある。だが，このような高度の議論をするためには，基礎となるべき具体的な記述があまりにすくないのである。

個々の単語に密着したことのプラスは，記述がこまかくなることだが，マイナス面の1つとして，単語群対単語群の対立によって浮かびあがってくるような抽象的なカテゴリーがもれてしまう，ということがある。たとえば，状態対動作，経過的対結果的，のような対立，あるいは，移動か状態変化か，物理現象か心理現象か社会現象か，といった分野のちがいである。個々の動詞の意味を規定するにあたっても，これら抽象的一般的な側面における記述は当然必要だ。しかし，これらの側面は，個々の動詞の対立においては，はっきりしてこない。つまり，これらの抽象的側面をおもな対立点とする動詞の対というものは，あまりない。これらをぬきだすには，どうしても，移動の動詞全体と状態変化の動詞全体，というように，グループの比較をしなければならないだろう。

なお，ここで意味論における形式主義ということについてふれておきたい。「なく」と「ほえる」「さえずる」などが上位下位の関係にあることを確認することは，つまりこれらの単語の意味間の関係をあきらかにすることである。これはたしかに意味のもっている1つの側面ではある。しかし，意味にとってより重要なことは，このような形式的な関係，すなわち記号と記号との関係ではなく，「ほえる」や「なく」という単語がどのような現実を反映しているかという，記号と現実との関係でなければならない。ところが，意味論においてたいせつなのは，まさに意味の形式的側面であって，実質的側面ではない，とする意見もある（たとえば，J. Lyons "Structural Semantics" p. 59）。これは意味論における形式主義であり，意味＝文脈の総体という規定が syntagmatic な形式主義なのに対し，paradigmatic な形式主義である。

実際には，記号間の対応は現実との対応の1つの側面としてしか成立しえない。「ほ

える」や「さえずる」と「なく」とが一定の関係をもっているのは，両者がある現実を反映し，そして，これら現実どうしのあいだに一定の関係があるからにほかならない。にもかかわらず現実から相対的にきりはなされた言語の世界では，逆に，現実との対応は記号間の対応をとおして実現する。すなわち，「ほえる」や「さえずる」の意味を説明するばあい，われわれはこれに対応する現実を直接に指示するよりも，むしろこれを「なく」という単語と関係づけ，これこれの動物がこれこれのしかたでなくことである，というかたちで説明する。このために，記号間の対応を分析することが意味論のすべてであるかのような錯覚が生じる。このことはつぎのような点にもあらわれている。すなわち基本語については(1) (2)……と意味をこまかくわけている辞典が，それからの派生語や一般にその基本語で説明される単語については，あたかも1つの意味しかないかのようにあつかっていることである。「ふかい」「なりたつ」については，具体的な現象をさすばあいと，抽象的な現象をさすばあいとで，別々の意味をたてている辞典が「ふかめる」「成立する」については，これらの基本語への言いかえですましているのである。しかし，結局のところ，記号間の関係を現実から絶対的にきりはなすことはできない。「ほえる」を「なく」と関係づけることが意味の説明にとって重要なのは，「なく」がより基本的な語であり，「なく」の意味がすでにわかっていること，つまり「なく」と現実のあいだに一定の関係があることを，当然の前提にしているからである。もし「なく」の意味がわからないとすれば，「ほえる」がこれの下位語であり，そのちがいがこれこれのところにある，というようなことをいってみても，無意味であろう。

なお，機械のばあいには，いくら基本語との対応をつけても，それが現実とむすびつくということはない。すくなくとも現在の段階で，機械に意味がわかっているということは，他の記号との関係がわかっているということであって，それ以上ではないであろう（なお，p. 649参照。）意味論における形式主義が発生する現実的な根拠は，このような点にもあるとおもわれる。

0.3 特徴の相互関係

この報告書では，1対の単語からこれを区別する特徴をひきだして記述する（あるいは，その特徴の側面からみた単語の意味を記述する）という点に重点をおき，これらの特徴がおたがいにどのように関連して全体としての単語の意味を構成しているかについてはふれなかった。しかし，こうしてとりだされた特徴は，けっして機械的に同列にならべられるものではなく，そのあいだには，一定の関係がある。すなわち，ある特徴はその動詞にとってより本質的であり，別の特徴はその上にかぶさっている2次的なものである。たとえば「うろつく」ということばには，「さまよう」「さすらう」などと共通の，不定方向への移動であるという側面と，これらとはちがって，わるい評価のあたえられるような動作であるという側面とがある。しかし，この評価的な側面は，「うろつく」にとって方向性の問題ほど本質的なことではないとおもわれる。もちろん，一定の文脈では，この2次的な特徴がかえって重要であることもあるだろう。「かれは，さま

よっていたというよりも，うろついていたのである」というように，この評価的な側面が前面に出てくることもある。しかし，一般論としていえば，評価的な側面における特徴は，他の特徴よりも外側の2次的なものだといえるだろう。

また，ある特徴と他の特徴とのあいだには，一方が当然他方を前提にし，予想している，という関係がありうる。たとえば，ある動作が意図的だというとき，主体の面では当然人間（動物）のはずである。主体や対象の＜数＞と＜量＞とのどちらが特徴であるかは，これらが固体の物体であるか液体であるかに関連する。「(ぼうしを）かぶる」と「(くつを）はく」との対立では，身につけるものと，からだの部分と，とりつけ方という特徴が，それぞれ他を制約しあっている。

つぎに，これらの特徴のまとめ方についてのべる。＜人＞という特徴は，たとえば，「ばける」を「かわる」と対立させるとき，「ばける」の主体が＜人（および動物)＞である，というかたちであらわれる。また，「しなだれる」においては，その対象が人であるという点で，これを「よりかかる」などから区別する特徴でもある。＜数＞という特徴は，「あつまる」ではこの動作をする主体の数であり，「かよう」では動作自身がくりかえしておこなわれるという意味での数である。こうして，これらの特徴をまとめるばあいに，つぎのA・B2つのまとめ方が可能だ。

（A）　主体 { 人 / もの / …… / …… / 数個以上の主体 }　　対象 { 人 / もの / …… / …… }　ようす { 数 / 方向 / はやさ / …… / …… }

（B）　人 { 主体 / 対象 / …… / …… }　もの { 主体 / 対象 / …… / …… }　数 { 主体の数 / 動作の数 / …… / …… }

Bのまとめ方は，たとえば，＜数＞という特徴が日本語のどのような側面にあらわれているかということを問題にするようなばあいには便利である。しかし，Aのまとめ方のほうが，言語学的にはあつかいやすい。Aのまとめ方は，文法的なカテゴリーとの対応がつけやすく，語いと文法とを一貫して記述するという目標に，近づくことになる。それで，ここでは原則としてAのような立ち場をとった。ただし，これに対する例外として，ほかからのはたらきかけをうけて変化する対象は，主体とおなじところであつかった。たとえば「やぶる」「つぶす」「こわす」などの対象は，「やぶれる」「つぶれる」「こわれる」などの主体をあつかうのとおなじ場所にいれた。これらの自動詞と他動詞とのあいだには，意味上かなりの対応関係があり，これらを別々のところであつかうのはかえって不便だからである。したがって，純粋に文法的にいえば対象のところにはいるべきものが，大幅に主体の方にまわっている。(この点については，Y. Ikegami "The Semological Structure of the English Verbs of Motion" p. 93 以下の

"ergatum" についての論を参照。なお，自他の対立のある動詞とない動詞との意味的な差については，p. 684 を参照。)

1. 主　体

動詞のあらわす動作・状態の主体は，一般に，主語というかたちで表現される。しかし，つねにそうだとはいえない。主語が省略されることが多いことは，いうまでもないが，なかには，つねに主語をともなわないでつかわれる動詞もあり，そのばあいにもやはり動作の主体がなんであるかを考えることはできる。

○御身の手にかゝり，此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば，はや思ひ残すこともムりませぬ。(恩讐の彼方に 86)

この「おもいのこす」は，つねに「おもいのこすことはない」またはこれに近い表現の中でつかわれるのであって，「だれだれがおもいのこす」というかたちで主体を表現することはない。しかし，事実上，主体（おもいのこすもの）がだれであるかは，つねに明らかだ。

なお，移動などのばあい，主体は相対的な概念だ。地球が回転することによって，太陽や月は「のぼる」のである。

「近づく」「遠ざかる」などでは，実際にうごいているものを主体とする表現がおおいのは当然だ。しかし，運動は相対的なものだから，逆に，実際には固定してうごかない基準点の方がうごいているかのようにもみえるわけで，そのような表現もある。

○すると何時の間にか今上(のぼ)つた山は過ぎて又一ツ山が近(ちかづ)いて来た，(高野聖 18)

○東京が近づくにつれて，汽車の駐(とど)まる駅々に，(あらくれ 135)

○仲子は家が近づくにつれ，深まる懸念を感じた。(仲子・上 162)

○石高な道に，車輪の音が高く響いて，長いあひだ耳についてゐた町の流れが，高原の平地へ出て来るにつれて，次第に遠ざかつて行つた。(あらくれ 134)

どのような範囲の動詞に，こういう表現が可能か，またよくもちいられるかは，あきらかではない。「よる」「はなれる」には，たまたま実例はなかったが，同様の表現があるであろう。一方，「近づける」「遠ざける」「よせる」「はなす」などの他動詞については，移動の主体（すなわち，このばあいには動作の対象であるが）が，実際と表現とで入れかわることは，ほとんどないであろう。「東京が近づく」はごく自然な表現だが，「東京を近づける」とは，まずいえないとおもう。

なお，「くる」にも，つぎのように，実際には移動していないものを主語とした表現がある。事実は，汽車の方が三角標の正面に移動してきたのである。

○青い森の中の三角標はすつかり汽車の正面に来ました。(銀河鉄道の夜 296)

動詞のあらわす動作の主体を，ここでは，つぎのように分類し，そのおのおのに結びつく動詞ごとに説明していくことにする。

0. 一般
- 1. もの
  - 1.1 生物
    - 1.1.1 いきもの
      - 1.1.1.1 人間
      - 1.1.1.2 動物
      - 1.1.1.3 からだの部分
    - 1.1.2 植物
  - 1.2 無生物
- 2. こと

このような論理主義的な図式は，大ざっぱな意味的分類として利用できるだけで，それ以上のものではない。たとえば，「いる」「おる」という動詞は，主体が人間・動物をあわせた<いきもの>だという特徴をもっている，もっとも典型的な動詞だといってよいだろう。これらの動詞を「1.1.1 いきもの」という項目の下にいれることには，ほとんど問題がないようにおもわれる。ところが，これらは，また，あきらかに無生物である乗りものをあらわす名詞と結びついてつかわれることがある。

○まもなく，仲間の姿が見えなくなり，アサユクのソリもいなくなった，と思ったとたん，（実話雑誌 1956年1月 165）

○**松本** その場合に，一番現実的に重要性を持っているのはマリクも言っているようにエトロフですが，あそこは大きなジェット機はどうですか。

林 ジェット戦闘機ならおりますよ。（中央公論 1956年9月 169）

乗りものをあらわす名詞は，「いる」「おる」以外にも，ふつうは人間の動作をあらわすはずの動詞と結びつくことがある。

○自動車が待つてゐるところへ行くと，達三は，無言で先へ乗つた。（帰郷 318）

○車は，すぐ来てくれるらしかつた。（帰郷 261）

○台湾から飛行機が迎へに来るはずだ，（野火 130）

○よろしゅうございますわ。車を呼んで，お送りしますから……（自由学校 149）

○車を呼び止めて，娘をホテルの食堂に連れて行き，（河明り 292）

○心せくままに車を急がせ伊豆山の大洞台に着いた頃は，（旅 1956年6月 79）

○鴨沢は車をやとって鉱泉の方に行った。（群像 1956年6月 48）

○駕籠宿から駕籠二挺つれて帰ってきた。（読切倶楽部 1956年6月 76）

これらの例は，ぎ人化というには表現的色彩がうすく，自然である。乗りものは，ある観点のもとでは，いきものあつかいされる，とみるべきであろう。

1.0 一　　般

最初に，特に主体の面で限定がなく，いろいろなものごとについて使われる動詞をあげよう。たとえば，つぎの例が示すように，「にる」「ちがう」「ふえる」などは，人間についても，ものについても，また，動作などの抽象物についても，自由につかわれる。

〈人間〉	〈もの〉	〈こと〉
○此女はどこか，英百合子に似ていて，肌の美しい女だった。（放浪記 282）	○びろうどに似た厚い布が重たく垂れて，窓の在りかを目隠ししてゐた。（帰郷 48）	○胸いつぱいのかなしみに似た新らしい気持ちを，（銀河鉄道の夜 272）
○好いわ。武士は妾（めかけ）とは違ふ。（阿部一族 49）	○宿と云つても普通の旅館と違つて，広い寺の境内にある別荘のやうな建物であつた。（こゝろ 11）	○追腹（おひばら）はお許の出た殉死とは違ふなぞと云ふ奴があらうて。（阿部一族 53）
○また，友達がひとりふえたんだ。（人間の壁・上 277）	○遺棄された鉄帽が増えた。（野火 103）	○先生がひとり少なくなっただけ，みんなの仕事がふえている。（人間の壁・上 105）

ここでちょっと，動詞のあらわす現象の主体が具体物であるか，抽象物（性質・動作など）であるか，まぎらわしいばあいについてふれておこう。上にあげた例のうち，こと（抽象物）としてあげたものとまぎらわしいものに，つぎのような例がある。

○つまり，芳蘭女史にいいまくられて，口がきけなくなった彼女と，平常，彼女から同様の目に会ってる五百助と，ちょっと様子が似てたからであろう。（自由学校 115）

○風呂に入り乍ら蟋蟀（きりぎりす）を聴くなんて，成程寺らしい趣味だと思つたねえ。今迄の下宿とは全然（まるで）様子が違ふ——（破戒 39）

しかし，これらの例については，「ようす」という抽象的なことがらを主体にしているというよりも，そのようすの持ち主である人とかお寺などが，本当の主体だと考えられる。一般に，「象は鼻が長い（〜は〜が〜だ）」という文型において，「鼻が」の位置にくることばとしては，部分・側面などをあらわすものがある。そして「鼻が」のように部分をあらわすことばがくるばあい，それは主体をあらわすことが多い。「鼻が長い」という表現はなりたつが，「象は長い」は不完全な表現だからである。これに対し，そのおなじ位置に，側面・性質を表わすことばがくるばあいには，それをとばしても表現がなりたつ。「象は目方が重い」という表現は，単に「象は重い」といっても同じことである。このような側面・性質をあらわすことばが「〜が」という主語的なかたちで動詞と結びついているという理由だけで，その動詞のあらわす性質の主体が，こと（抽象物）であるとすると，ことことの結びつきが不当に広くなる。それでこれらの部分主語的な表現は，主体がなにかをきめるにあたって考慮しないことにする。たとえば，空間的な長さが長くなることをあらわす，「のびる」は，その意味上，当然空間的な大きさをもちうる対象，すなわち具体物についてしかいえないはずである。

○僕は頭上に圧制政府を戴いて居るから大きくならんのだ，二十三年になると急に伸びるから今に見玉へ，（思出の記・上 120）

○彼が来た時に二三寸しかなかった麦が今は六七寸に伸びていた。（暗夜行路・前 164）

しかし，これらの例とまったくおなじような事実は，「背丈」「丈」というような抽象名詞との結びつきでもあらわされる。

○又何処か暢(のん)びりと，急に背丈が延びたやうな気もする。(平凡 55)

○それは日のあたるところだけが生ひ茂り丈が延びて，諸(もろもろ)の大きな樹の下に覆はれて日蔭になつた部分は，落凹んで了つたからであつた。(田園の憂鬱 23)

だからといって，「のびる」はものについてもことについてもつかわれる，といってしまうと，この動作の意味的な位置づけを考えるためにその主体をしらべるということが，あまり意味のないことになってしまう。「のびる」がことを主体とするのは，空間的に長くなるという意味のばあいではなく，つぎにあげる例のように，発展するというような意味をもっているばあいである。

○ここ暫く輸出が伸びなかったらお互はまた少し配給を減らすほかはあるまい，(ものの見方について 60)

○さて，そのがんセンターの生物学部が力を入れる分子生物学は，どのように伸びてきたのだろうか。(生命の暗号を解く 151)

このような意味のちがいに応じた結びつきかたのちがいを説明するためには，側面・性質を本来の主体から区別しなければならない。

主体が特に限定されていないこのグループに属するものとしては，第1に，状態性の動詞の一群がある。たとえば比較・異同をあらわす，

にる，類する，にあう，あてはまる，ちがう，ことなる

など。また，ほかのものとの関係をあらわす，

属する，かねる，適する，価する，いる(要)，役立つ，まにあう

など。

「ある」「存する」「ありあまる」なども，特に主体が限定されていないということができるだろう。

第2に，きわめて抽象的，一般的な変化をあらわす動詞がある。たとえば，

なる，かわる，うつりかわる，あらたまる，変ずる，化する，なおる，なくなる，つきる，ふえる，ます，くわわる，たまる，へる，あつまる，まとまる，そろう，まじる，あまる，のこる，あらわれる，かくれる

など。

第3のグループとしては，因果関係をあらわすものがある。

〈人間〉	〈もの〉	〈こと〉
○一週三十時間労働で，食費住宅会社持ちで，カク首絶対なしの従業員が，ストを起したのと，同じではないか。(自由学校 51)	○三個の計数管が同時に放電を起こすのである。(物質の根源と宇宙を結ぶ 122)	○“早川宇宙線”の天文学への衝突は，天文学に連鎖反応を起こし，それがまた宇宙線屋にはねかえってきた。(物質の根源と宇宙を結ぶ 131)

○佐助は五六人の手代や丁稚共と立つと頭がつかへるやうな低い狭い部屋へ寝るので彼等の眠りを妨げぬことを条件として内証にしておいてくれるやうに頼んだ。（春琴抄 152）

○いや，お前とそれを見てゐた夏の時分はいつも雲に妨げられて殆ど何も見えやしなかつたのさ。（風立ちぬ 128）

○嵐のどんなざわめきも，彼のみちたりた眠りを妨げるわけには行かなかつた。（潮騒 147）

これらのうち，人間が主体になるばあいには，因果関係というよりももっと積極的な意志的動作をあらわすといってもよい。しかし，無生物・ことがらなどが主体になるときには，もちろんそういうニュアンスはない。この類に属するものとしては，

かもしだす，きたす，ひきおこす，そそる，力づける，苦しめる，なやます，おびやかす，害する，ほろぼす

などがある。

第4のグループとしては，受け身的な意味をもった動詞の一群がある。ここで受け身的というのは，そのものごと自身がひとりでに変化するというよりも，人間がある動作をし，その働きかけをうけることによって，ある変化がおこることをあらわすものである。

〈人間〉

○其後間もなく雪江さんのお婿さんが極つた。（平凡 93）

○先に自由に帰つた関が，羨ましく意識に浮かんだ。（真知子・前 136）

〈もの〉

○「船は決まったのかい？」しばらくして謙作が沈黙を破った。（暗夜行路・前 25）

○鶏の足が頭に浮かんできた。それは本当に鶏の足そっくりだった。（むらぎも 307）

〈こと〉

○これで自分のそういう運命も決まってしまったと（暗夜行路・前 185）

○安吉の頭に疑問の影が浮かんだ。（むらぎも 33）

これらの例において，「きまる」「うかぶ」の主体は，それ自身の力によってこの現象をおこすのではなく，人間がきめること，思いうかべることによって「きまる」「うかぶ」という現象の主体になるのである。ほかに，

おもいうかぶ，さだまる，みつかる，みあたる

などがある。これらの精神現象以外に，社会現象として，やはり受け身的な内容をもっているものがある。たとえば，

はやる，すたれる，ゆきわたる，ひろまる，つたわる

などであって，みな，対応する他動詞のありなしにかかわらず，人間がそれをもてはやしたり，つたえたりすることによって，はじめてなりたつ現象である。このグループのばあいには，

○すると間もなく，頭の真ん中を二つに分けたカチュウシャの髪が流行って来た。(放浪記 9)

○こういう呼び方は，戦後の家庭で，流行らない。(自由学校 295)

のように，主としてものまたはことが主体になっており，人が主体になった例はみつからなかった。これは，社会現象として人をいわばものと同様にあつかうことが少ないというところからの当然の結果であろう。しかし，たとえば「うる」という動作の結果として生ずる現象をあらわす「うれる」「うりきれる」「さばける」などの動詞について考えてみれば，主としてものが主体になることは明らかだが，「権利」のような抽象的なことがらも，売買の対象になりうるし，どれいのような人間もうれるはずである。

なお，以上にあげてきた4つのグループが，とくに主体の面で限定がないということは，これらに属するすべての動詞があらゆる名詞と自由に結びついてつかわれるということではない。いちいちの動詞の意味に応じて，その結びつきうる名詞の範囲，それが主体として結びつきうる現象の範囲は，もちろんさまざまに制限されている。ただ，それが，人についても，ものについても，ことについても，一応広い領域にわたっているというだけの話である。

1.0.0.1　つづいてあらわれたもの

〔1〕 たえる＜なくなる

「たえる」は，今までつづいてあらわれていたものが，なくなることをあらわす。「なくなる」は「たえる」であらわされるばあいもふくんで，さらに広く一般的にもちいられる。

○そしてとうとうある日哀れな最後の一人が死んで，人類は絶えてしまう。(暗夜行路・前 112)

○その大溝が掃除されん内は，いつになつたつてボーフラは絶えやしませんよ。(波 66)

○時々裾をからげて出てゆく箱屋や芸者の姿が見られて，どこからともなく飲みに来る客が絶えなかつた。(あらくれ 115)

では，みな過去にずっとつづいてきたものが，あるときからなくなる，ということをあらわす。これらの例は，「なくなる」でおきかえることができる。たとえば，つぎの2つの例では，あらわしている事実はまったくおなじである。

○そして今夜の宿泊所を求めるために，人影の全く絶えた，石段ぎはの小さい祠(ほこら)の暗闇の方へゐざり寄つて行つた。(あらくれ 180)

○「実にさびしい出発でしたな。」と村岡は既に人影のなくなつたプラットフホームを見廻しながら初めて歩み出した。(つゆのあとさき 94)

一方，つぎの2つではちがう事実をあらわす。

○花活に花の絶えたことがない……といふと結構らしいが，(平凡 112)

○萎(しぼ)んだ花束が取り除けられて無くなつてゐるばかりで，あとは横浜を出た時の通り

の部屋の姿になつてゐた。（或る女・前 191）

「平凡」の例では「花活に花のなくなったことがない」といいなおせるだろう。しかし，逆に「或る女」の例で，「花束がたえている」とはいえない。「平凡」のばあいには，ある特定の1つの花がなくなった，ということではなく，花いけに入れかわりたちかわり，くりかえしてあらわれた花が，あるときから，あらわれなくなることをあらわしている。「或る女」では，問題になっている花束はただ1つで，前にあったその花束が今は見えない，ということである。

〔2〕 たやす＜なくす

この対立も自動詞の「たえる」対「なくなる」と同じである。「たやす」はこれまでひきつづいてあらわれたものや現象がなくなるばあい，「なくす」はそのようなばあいもふくめて，もっと一般的な表現にもちいられる。

○果樹園は東南に向つて開き春夏秋と花を絶やさず，（厚物咲 23）

○この部落で，火の気を絶やさぬのは，女世帯の彼女の家だけであるが，（自由学校 317）

これらの例で，花や火の気はこれまでずっとひきつづいてあったものである。

○文化も何も，人間の貧乏をなくす工夫をしなけれァ決して始まらないのだと気がついてくれれば，もつといゝのだ。（帰郷 237）

の例では，貧乏がこれまでずっとひきつづいておこってきた現象であるから「たやす」といいかえてもいい。しかし，

○節子は，糸屑を落して失くしてゐた。（帰郷 235）

では，ひきつづいて糸くずをもっていたわけではないから，「たやす」にすることができない。

＜注＞　「たやす」はこの分析にあたって5例（みな文学作品のもの）あったが，みな「たやさず」「たやしたことはない」など，打消しのばあいに使われた例ばかりである。「なくす」にはそのような傾向はない。

1.0.0.2 貴重なもの

〔3〕 ありつく／える

「ありつく」は「〜に」，「える」は「〜を」という目的語をとるが，どちらも，ある対象を手に入れるという意味である。そして「ありつく」の方が意味や文体の面で限定されている。

「ありつく」	「え　る」
○五百助も，やっと，端の席にありついた。（自由学校 140）	○運転手台に近いところへ席を得てゐた見知らぬ若者の方へ，（多情仏心・前 143）

をくらべてみると，「える」の方では特に限定がないのに対し，「ありつく」の方は，さがし求めていた席にやっとたどりつくことができた，というばあいである。

対象の面における限定は辞典によってちがいがみられる。たとえば例解国語辞典や岩波国語辞典では「生活上求めていたものを」のような表現になっている。しかしいまあげた「自由学校」の例などでは，「生活に必要なもの」とは，ちょっと言いにくいだろう。もちろん，人間のすることであるから，どのようなことも生活に必要なものだといってしまえば，それまでであるが，生活に必要なものという表現をそこまで広く解釈すれば，限定しないことと同じになる。広辞苑や新潮国語辞典では，「望んでいたもの」とか「求めていたもの」というかたちで対象を限定している。たしかに，上の例における「ありつく」は求めていたものである。しかし，つねにそうだともいいにくい。たとえば

○一生食つて行けるだけの遺産にありついてゐると云ふだけの，（多情仏心・前 258）

のようなばあい，遺産はずっとねらっていることもあるし，また思いがけずにひょっこりはいってくることもある。したがって「望んでいたもの」「求めていたもの」という限定もあまり適当ではない。

「ありつく」という動作の対象の範囲が「える」よりもせまいことは明らかだが，どのようにせまいかは，よくわからない。実例からは，たべものや職業に「ありつく」という例が比較的多く，その限りでは生活に必要なものという規定も，傾向としては認められてよい。また，たとえば人間が「ありつく」の対象になることはない，といえるかもしれない。実例の中には，もちろんそういう例がなかったし，たとえば，

○自分の過去の事を少しも知らない新しい恋人を得たいといふ気にもなつてゐる。（つゆのあとさき 37）

のようなばあいに，「ありつく」でおきかえることは，むずかしいだろう。

○倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思はう。倉地を自分独りに得さへすれば……。（或る女・前 163）

のように固有名詞があげられているばあいには，まず「ありつく」ということは不可能だと思われる。しかし，たとえば，

○「先生のやうに仰有られると，これから新しく始める出版社には，良い著者が得られないことになります。」（帰郷 224）

のようなばあいには，「よい著者にありつけない」ということも，あるいはできるかもしれない。

なお，お茶の水女子大生についての調査では，「やっとよい先生にありつくことができた。」という例文に対し，○—2，△—4，×—15だった。

抽象名詞のばあいにも，ありつく対象となるものの範囲は，はっきりしない。「職業にありつく」「正しい生活にありつく」などは，つかわれる表現だが，そのほか

○折角，相互銀行の出現によって，銀行取引の妙味にありつくことのできた，零細な弱小企業者は，（実業之日本 1956年8月15日 78）

のようなばあいもある。また「ありつく」の方の例ではないが，

○あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから。（こゝろ 152）

○青年達は，この天下に有名な学者と話す機会を得たのに，面を輝かしてゐて，口々に答へた。（帰郷 152）

のようなものも，「ありつく」といいかえることができるだろう。しかし抽象名詞の中でも，つぎのようなものは，どうも言いかえがむずかしく，「える」というよりしかたがないように思われる。それは，まず他人の動作についてである。

○忠利の許を得て殉死した十八人の外に，阿部弥一右衛門通信と云ふものがあつた。（阿部一族 46）

○中堀中尉が下瀬中尉の協力をえて強行したといわれる，部隊経理の無駄を排除する計画は，（真空地帯・上 174）

また，つぎのように，本人の精神的な状態について「える」をつかった例も，「ありつく」にはおきかえにくい。

○今飲んだ水から急に元気を得た二疋の犬は，主人達よりも一足さきに庭のなかへ跳り込んだ。（田園の憂鬱 14）

○振返りながらどんどん駈けて，やがて弾が届かない自信を得たか，歩行に返つた。（野火 159）

以上「ありつく」の対象となりうるもの，なりえないものを並べたてた。これらから帰納して，「ありつく」の対象を一般化することはむずかしい。それらがみな貴重なものであることはまちがいないが，さらに「える」にくらべれば，こまかい限定が必要なはずで，そのことは，まだできていない。

なお，「ありつく」については，対象の面からの限定とともに，その対象を「える」方法の面からの限定が必要であるかもしれない。たとえば，例解国語辞典，岩波国語辞典は，「ありつく」を「やっとのことで」ということばで限定している。これは，「もとめていたものを」というような対象の面からの規定に対応するものである。しかし，上にものべたように，「ありつく」は，かならずしも，さがしもとめていたものを苦心のすえ手に入れた，というばあいにかぎられるものではなく，偶然の機会にころがりこんできたものについてもいうのであるから，「やっとのことで」という限定は（傾向としてはあるとしても）つねに正しいとはいえない。むしろ，ようすという面では，「ありつく」という動詞は，対象をえることの不確定性，偶然さをあらわしている，という点に特徴を示しているように思われる。

○勿論飛騨越と銘を打つた日には，七里に一軒十里に五軒といふ相場，其処で粟の飯にありつけば都合も上の方といふことになつて居ります。（高野聖 19）

のような例は，典型的であって，粟の飯があるかどうかは，まったく，ぽつんぽつんとある家のつごう次第であり，こちらが努力してもえられるものではない。

○と，腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込むで来る。（平凡 27）

は，子犬が母親の乳をのむところの描写だが，このばあいには，子犬たちは，乳にありつくべく鼻づらで割り込むという努力をしている。しかしその努力がつねにむくいられるとはかぎらない。自分の兄弟がすでに自分よりも先に乳首に到達していれば，努力のかいはないのである。「ありつく」に，このような，相手まかせの不安定さがあるところから，労働などの当然の報酬として求めていたものがはいってくるばあいには，「ありつく」ではなくて「える」がつかわれる。

○然し壁際に積んだ木の根はそこには不正なものが交つて居るにしても，大部分は彼の非常な労苦から獲たものである。（土・上 105）

○金は彼が刑務所ではたらいて得た金であった。（真空地帯・上 137）

このばあいには，偶然性のはいりこむ余地はほとんどない。働けばかならず木の根や金がはいってくることは，わかりきっているのである。

1.0.1　もの／こと

もの（具体物）を主体とするか，こと（動作・状態・性質・関係などの抽象物）を主体とするか，という分類は，論理的に明快なようだが，その中間的なものとして，現象を主体とするものなど，どちらともいいにくいばあいが，いくつかある。ここでは，それらをどちらかに判断して分類してしまうことはむずかしいので，単に問題点があるということを指摘するにとどめる。

1.0.1.1　天候・気象状態

「はれる」「くもる」「ふる」などの動詞は，なにを主体とするといっていいのか，むずかしいばあいがある。その理由は，第1に，たとえば「雨がふる」「雪がふる」などの表現において，「ふる」の主体が雨や雪であることは明らかであるにもかかわらず，その雨，雪というのは，もの（具体物）に属するのか，こと（動作・作用）に属するのかがスッキリしないという点にある。たとえば，

○大粒の雨がやってくると，天井なしの，木組が下から眺められるトタン屋根がおそろしい騒音を立てた。（むらぎも 83）

○風の巨大な塊りがぶつかり，船が高く持ち上げられると，（潮騒 142）

のような例では，雨や風はそれぞれ液体および気体の一定のかたまりとして，きわめてもの的であるが，

○雨はいつか止み，遠く犬の鳴く声が断続して，（野火 113）

○風が止み，うららかに日が照りだした。（潮騒 17）

などのばあいには，ある現象の進行をあらわすものとして，こと的な名詞だといえる。したがって，「雨がふる」「風がふく」というばあいの雨・風も，かんたんに，そのどちらかに，きめてしまうことはできないのである。

天候をあらわす動詞の主体がはっきり限定できない第2の理由は，それらが主語または主語に類する形式として，どの名詞と関係しているとみるべきかが，まぎらわしいと

いうことである。「ふる」や「ふく」のばあいには，これと結びつくのは，ほとんど「雨」「雪」や「風」であって，まぎれることがない。

○「東京はまだ雪が降らないの？」（雪国 17）

○外は雨がふっているので，レインコートを着て傘を股のあいだに立てている。（人間の壁・上 234）

の例でも，一応「東京」「外」という名詞を場所をあらわす修飾語と考えることができるだろう。しかし，たとえば，

○どこか北の方の山がしきりに吹雪いてゐるらしい。（風立ちぬ 147）

の「ふぶく」のばあいはどうだろうか。このばあいの「北の方の山」というのは，上にあげた「東京」というのと，ほぼ同じである。したがって「東京」を修飾語にするならば，これも修飾語ということになる。しかし，もしこの「山」を場所をあらわす修飾語だと考えたとすれば，ほかにおぎなうべき主語をみつけることはむずかしい。しいていえば，「ふぶきがふぶく」という反復的な主述関係を想定することになるのだろうが，ふつうのばあい「ふぶく」は，

○長い間吹雪いたのでだいぶ中止するものもできたらしい，（私の人生観 37）

のように，無主語文でつかわれるのである。「しぐれる」については，つぎにあげる文語の1例しかなかったが，これもやはりふつう主語を想定することのできない非人称的な動詞であろう。

○門よりの時雨るゝ坂となり下る（俳句 1956年4月 149）

「はれる」という動詞のばあいは，なにが主体であるか，もっとやっかいだ。第1に，

○昨日の雨ははれたが，三月末の曇り空はかなり寒い。（人間の壁・上 52）

○もう少し経つたら霧もはれると思ひますが，（富岳百景 53）

のような例では，雨や霧が主体であることは明らかだが，ふつうただ単に「はれる」といえば，空に雲がない状態になることをあらわすのに対し，「雨がはれた」だけではそのような状態になるとはかぎらず，空がくもっていてもいいのだから，これはむしろ別の意味とみるべきかもしれない。第2に，つぎのように「日がはれる」の例がある。

○日は晴れてゐたが，風のために全村は休漁したので，母は新治に頼み事をした。（潮騒 25）

しかし，こういういい方はごくまれであろう。第3に「空がはれる」ばあいがある。

○太陽が出て，よく空が晴れてゐた。（本日休診 90）

○空は東の方がからりと晴れて，西の方へ行くほど曇つてその果は真黒であつた。（田園の憂鬱 78）

空は「はれる」の主体とするのにふさわしいものと考えられる。しかし，そのばあいにも，

○伸子は，響の工合で，外は晴れてゐるのを知つた。（伸子・上 140）

の「外」のように，場所をあらわしているにすぎないものと，かたちの上ではおなじであり，そのあいだに線を引かなければならない。「空は日がはれている」の省略だ，つ

まり，本当の主体は「日」で，「空」はその場所をあらわすにすぎない，という説も考えられないことはない。しかし，ふつうそういういい方はしないだろうから，この「空」は「はれる」の主体と考えるのが無難であろう。4番めに，時間をあらわすことばが主語とおなじような形で表現されることがある。

○遂に或る日が晴れて，永松は出掛けて行つた。（野火 157）

これもまれな例であって，もしこれを主語だとすれば

○きょうはよく晴れて比叡山があのようにはっきりと見えます。（出家とその弟子 67）

○今朝は玉の如くに晴れて居たが，何時の間にか東の空暗くなり，（思出の記・上 175）

のようなものも，「きょう」や「今朝」を主語だとしなければならなくなる。

「くもる」については，「雨がはれる」「霧がはれる」に対応するような例はなかった。「日がはれる」に対応するものとしては，

○外にはひえびえした夜気の中に，仲秋の月が少し曇つて現はれ，（真知子・前 12）

がある。「空がはれる」に近いようなものとしては，

○空は真暗に曇つて，今にも雨が降つて来さうに思はれながら，（つゆのあとさき 97）

○東が曇れば風とやら，

西が曇れば雨とやら，（潮騒 45）

○海は曇って，低く，広く見えた。（くれない 142）

などがある。「海は（曇って）」をもし主語とみるならば，

○外は曇ってゐて，冷たい風が強く吹いてゐた。（冬の宿 105）

の「外は（曇つてゐて）」も，やはり「くもる」の主体をあらわすものとしたくなる。そうすると，また「外は雨がふっている」というばあいの「外」とのあいだに線が引きにくい。時間的なものの例としては，

○夜半は曇っていたが，夜明け寸前，奇蹟的に雲が切れ，約十分間見ることが出来た。（未知の星を求めて 320）

があるが，これは主語とみなくてもいいだろう。

時間的なものがもっとはっきり主体としての位置にあるものとしては，「しらむ」の例がある。「しらむ」の主体としては，

○静寂な夜明け前の大気が，次第に白んで来る。（未知の星を求めて 332）

の空気，

○その夜ほとんど眠れなかつた新治は，御来迎前に起きて，あたりが白むと共に，碇泊燈を外しに行つた。（潮騒 136）

○東が白むで，暁の風切る様に面（めん）を吹く。（思出の記・上 63）

の場所などは，一応ものを主体としているといっていいだろうが，

○何しろ夜の白むのが待遠でならぬ。（高野聖 63）

のように「夜がしらむ」という表現になると，「夜があける」とほとんどおなじであって，このばあいには，ものではなくて「夜」という時間が主体となる。要するに天候，気象状態をあらわすことばのばあいには，なにが主体であるのか，きわめてあいまいな

ものが多いのである。

1.0.1.2 光

「ひかる」「てる」などの動詞については，「太陽がひかる」「月がてる」のように発光体を主体とするばあいのほか，光そのものを主体とした表現もみられる。

○月の光が，鉄のらんかんに冷たく鋭く光っている。（くれない 47）

○初冬に入つて間もないあたゝかい日で，照るともなく照る底明るい光線のためかも知れない，（河明り 245）

○「あら，もう消えちまつた。暗い空の中にひらめく稲妻のやうだつたわ。」（青銅の基督 70）

つぎの例での主体は，光そのものとはいえないが，ものでない点ではこれらと同じである。

○真向ひの亜鉛屋根にかすかな真昼の陽炎がちらちら光つてゐて，（冬の宿 173）

しかし，これらの例についても，言語表現の面では，「月がひかる」などと区別する理由を見いだすことはむずかしい。つまり，「光」はふつうの物体をあらわす名詞と同じようにもちいられるのである。なお，つぎの例では「日」ということばが「太陽」とも「光線」ともとれる。

○桜が咲いてから寒い日が続き，日は照つてゐて外気は冷えてゐた。（帰郷 144）

1.0.1.3 音

音をあらわす動詞のばあいにも，光のばあいと同様，その音を発するものを主体にした表現と音という現象を主体にした表現とがみられる。

〈も　の〉

○鈴が鳴つて休みに成る度に，（破戒 196）

○芝居小屋の方角から銅羅や胡弓が急に騒々しく響いて来るやうになつたのが，そのせゐである。（帰郷 40）

〈音〉

○聽て発車を報せる鈴の音が鳴つた。（破戒 98）

○各所の太鼓の音が興味は却て此れからだといふ様に沈んだ夜を透して一直線に響いて来る。（土・上 195）

「きこえる」「とどろく」などについても同様である。「しわがれる」「かんばしる」は，ほとんどつねに音を主体にしており，音の発生源を主体にすることはまれだが，つぎのような例もある。

○それでも幾らか羽の運動が鈍く成つて居るのか春のやうではなく低く徘徊うて嗄れた喉を鳴らして居る。（土・上 134）

逆に，ほとんどつねに音の発生源である物体を主体とするものには，「きしむ」「きしる」がある。これらは，ふつう「いすがきしむ」「電車がきしる」のように，物体を主体とするのだが，これにもやはりつぎのような例外があった。

○向うの電車の音が，あたりの青い木立の中に軋つて聞える。（桑の実 27）

ところで，光そのものを主体とした例を，物体を主体にした表現とあえて区別する必要がなさそうにおもわれることは上にのべたが，音のばあいは，やや事情がことなる。すなわち「音」という名詞は，言語的にはかならずしも物体あつかいされず，むしろ動作・作用などをあらわす名詞とおなじようにあつかわれるばあいがある。たしかに，「太鼓がひびく」「太鼓の音がひびく」という両方のいい方がなりたつかぎりでは，「音」が物体とおなじように現象の主体として表現されている。しかし，つぎにあげるような例文の中では，「音」は，ふつう動作・作用をあらわす名詞が結びつく種類の動詞に結びついている。

○鼻をすゝる音が，つゞいてあちらにも，こちらにも起つた。（波 45）
○自動車の扉のばんと閉じる音が波と風の音の中でした。（くれない 10）
○雨戸をはげしくうちつける雨風の音が夜明け方までつづいた。（落城 18）
○暮れるまで続いていた太鼓の音もやんだ。（くれない 16）
○若者は耳をすました。音はたえた。（潮騒 27）

これは，たとえば「火事がおこる」「戦争がつづく」「振動がやむ」などにちかい表現であり，音がものというよりも現象・作用であることをしめしている。「光」については，「光がおこる」「光がつづく」「光がやむ」などという表現はふつうしない。このことを考慮すると，「ひかる」という動詞がものを主体にするといえるのとおなじ程度に，「なる」や「ひびく」もものを主体にするということはできない。

1.0.1.4　におい

「におう」という動詞も，現象の発生源である物体と現象としてのにおいとを，ともに主体の表現としてとる。

〈もの〉

○その花の匂ひだけでなく，どの木も草も匂つてゐる。土も匂つてゐる。（帰郷 8）

〈におい〉

○綺麗に分けた濃い髪のポマードの匂ひがプンと部屋に匂つた。（冬の宿 39）

では，この「におい」という名詞は，言語的にみて，ものに近いのか，動作・作用に近いのか。

○白樺のしおりを鼻にくっつけると，香ばしい山の匂いがする。（放浪記 207）

のような表現がある点では，それはこと（動作・作用）のなかまだが，

○生臭い血の匂いが峠の夜風に流れ，時おり敵味方どちらともわからぬ鯨波が渦巻いた。（落城 36）

のように，空間的に一定の場所をしめ，移動する点ではものに近いといえる。「音」のばあいのように，いろいろな動詞と結びついて現象としての性格をつよくもっているというわけではないが，やはりものと動作・作用との中間にあるものといえるであろう。「かおる」については，

○北海道あたりの，アカシヤの香る並樹道を一人できままに歩いてみたいものなり。

（放浪記 65）

のように，ものを主体にする例しかなかったが，これも「におう」と，同様とおもわれる。

1.0.1.5 けむり

これに関係した動詞のばあいにも，やはりけむりの発生源を主体にする例と，けむりそのものを主体にする例とがみられる。

〈も　の〉

○柱や梁などの骨組はいぶりながら立つてゐた。（雪国 170）

○木の根が燻ぶつていつでも青い煙が少しづつ立つて居る。（土・上 105）

○仏壇には新らしく立てた線香が煙つてゐた。（帰郷 139）

〈けむり〉

○ぷすぷすと燻る煙が蚊を遠く散乱せしめる。（土・上 186）

○暗い土間の隅に燻る煙のなかで，（冬の宿 109）

ただし「けむる」という動詞については，「けむりがけむる」という例は見あたらなかった。一方，つぎのように，「雨がけむる」という例があったが，これは「煙がけむる」に近いものである。（雨について発生源を問題にしているわけではないから。）

○入江になった渚（なぎさ）には蒼く染ったような雨が煙つていた。（放浪記 144）

そしてさらに「けむる」のばあいには，けむりが立つことによって，あるいは雨がふることによって，ぼんやりしたすがたにさせられるものを主体とした表現もみられる。つまり，「まきがけむる」という表現が原因的であるのに対し，これは結果的である。

○暗い内陣の，香華にけむつた空気のなかの棺のうへに，（冬の宿 180）

○丘と原は雨に煙つてゐた。（野火 104）

「けむり」は，「けむりがする」「けむりがはじまる」などの表現もなく，空間的に一定の位置をしめ，目で見てはっきり，それとわかるかたちをもしめすのだから，これまでにとりあげてきたもののなかでも，いちばんもの的性格がつよい。

1.0.1.6 火

火については，「もえる」と「やける」とでちがいがある点に注意しなければならない。「もえる」は火を発しているものについても，火そのものについても，いうことができる。

〈も　の〉

○しばらく天守閣の燃える炎の音とライフル砲のひびきとが，まつわりあって（落城 51）

〈火〉

○停車場の待合室ではストーブに火がよく燃えていた。（暗夜行路・前 176）

これに対して「やける」は，「家がやける」のように，ものについてしか，いうことができない。「火がやける」「ほのおがやける」などとはいえない。これは，「もえる」と

「やける」との意味の差に関係があるものとおもわれる（これについてはp.212以下を参照）。「火」という名詞は，「火のなか」「火をはこぶ」などの表現がなりたつ点ではもの的だが，「火をおこす」といういい方があり，「火をつける」「火がうつる」などの表現で「つける」「うつる」が，より物体的なものについてつかわれるばあいとちがう意味になっているような点では，ものから遠い。

1.0.1.7 温 度

「あたたまる」や「さめる」は，ほぼ，ものを主体とするといってよいだろう。しかし「ひえる」のばあいには，やっかいである。「ひえる」も

○手や足は大根のやうに冷えて，感覚なく身体についてゐた。（蟹工船 22）

○しかし，果物は，メロンだの，アレキサンドリアだの，よく冷えたのが，多量に出た。（自由学校 97）

○桜が咲いてから寒い日が続き，日は照つてゐて外気は冷えてゐた。（帰郷 144）

などでは，ものが主体になっている。しかし

○今夜は雪だわ。雪の降る前の晩は冷えるんですよ。（雪国 73）

○秋が冷えるにつれて，彼の部屋の畳の上で死んでゆく虫も日毎にあつたのだ。（雪国 128）

のように，時刻・季節などが「～は，～が」のかたちで表現されているばあいには，これらを主体とみることはむずかしい。では，このばあい，ほんとうの主体はなにかというと，しいていえばさきほどの「帰郷」の例と同じように，「空気」だといえるかもしれないが，ふつうは表現されない。「ひえる」は非人称的な用法のおおい動詞である。つぎのように，場所をあらわすことばが主体的な表現をとっているばあいにも，これをほんとうの主体としていいかどうかは疑問である。

○庵原はま江が行つてゐる海岸のサナトリウムでさへ寒く冷えてゐるといふことであつた。（冬の宿 72）

○上野界隈は殊に真夜なかになって冷えた。（むらぎも 205）

「いてる」「ぬくもる」「むす」などについても，「ひえる」と同じような非人称的な表現がありそうにもおもわれるが，これは用例が少なくてたしかめられなかった。

1.0.1.8 時刻・季節

いままであげてきた例が原則としてものをあらわし，例外的にことにわたっていたのにくらべて，以下の動詞は原則として時刻や季節を主体とするものである。それが，ときとして場所を主体とする表現をとるのである。まず「あける」「くれる」は原則として「夜」「日」を主体とする。

○二時で，もう夜が明けてゐた。（蟹工船 103）

○日が暮れて来ると，東京の屋外の寒さはまだきびしい。（帰郷 81）

このように，ふつうは「夜があける」「日がくれる」というのだが，逆に「日があけ

る」「夜がくれる」という例もあった。

○日曜日は美しい霜で，おだやかに，晴れ晴れと**明けた**。(真知子・前 104)

○いつか，晩夏の夜も，トップリ**暮れて**いた。(自由学校 237)

これらの時刻を主体とした表現に対し，つぎにあげるのは，それらの現象のおこる場所を主体にした例である。

○その道が白く**明けて**行くのを，私は丘の頂の叢から眺めた。(野火 118)

○浜はすでに**暮れ**，手伝ひに出る中学生たちの姿も見えなかつた。(潮騒 35)

○あかあかと燃え上がったほのおは，**くれて**ゆく夕空に巨大な聖火台のかげをあらわに浮び上がらせていた。(学問の動き 252)

なお，「ふける」はすべて「夜」とか「秋」とかを主体とした表現だけで，場所を主体にしたものはなかった。

つぎに「春めく」「秋めく」という動詞であるが，これらは「あける」や「くれる」とちがっている。すなわち，「あける」や「くれる」が純粋に時間の推移をあらわすのに対し，「春めく」「秋めく」などは，単に春になるということではなくて，景色などが春らしく変化するということであり，それだけに，場所つまりものを主体とする表現をとりやすい。

○町も**春めいて**ずいぶん陽気になりましたよ。(出家とその弟子 144)

しかし，特に主体を表現しないばあいもあり，そのばあいには非人称的であって，ものを主体とするともいいにくい。

○日中は**春めいて**来たといつても，日が暮れて来ると，東京の屋外の寒さはまだきびしい。(帰郷 81)

以上，動詞が主体としてもの・ことのどちらをとるか，ということをみてきた。そして多くのばあいに，純粋にものを主体にする用法と同時に，<もの>と<こと>との中間的なものとしての<現象>を主体にする動詞があることを知った。<もの／こと>という図式からすれば，この中間的なものとしての現象は本質的にどちらに属するかを論ずることが大事だということになる。しかし，実は，それは（少なくともこの段階では）あまり意味がない。ここでは，<現象>がものとことの中間的な，あるいは両面的な性格をもっていることを確認すれば十分である。かりにそれが完全にもの的な性格をもっていたとしても，上にとりあげた動詞がものを主体とするというひと言でかたづけられてしまうならば，はなはだ不完全な記述だといわなければならない。においや煙が言語的にはものの世界に属するとしても，それらは「におう」「くすぶる」などの動詞との関係において「花」「まき」などの純粋に物体を表わす名詞とは区別されなければならない。「花がにおう」「においがにおう」;「まきがくすぶる」「けむりがくすぶる」という2とおりの表現がなりたつことは，「におう」「くすぶる」という動詞の性質として，きわめてたいせつなことである。これは，たとえば「もえる」が「火がもえる」という表現をとりうるのに対し，「やける」がそのような現象を主体とする表現をとりえな

い，というような例を考えてみれば，特にはっきりする。理想的な辞典では，当然いちいちの動詞について，そのとりうる主体の範囲（さらに対象・手段・目的……などの範囲）について記述しなければならない。

ここで＜もの／こと＞という対立をとりあげたのは，このような主体の種類をあきらかにし，それを整理するための手がかりとしてであり，整理してえられた結論ではない。

〔4〕 産する／おこる＜生ずる，できる，なりたつ

「産する」は，ものにかぎられる。

○又，長野県のある山村七二会（なにあい）村，日里村では珍らしく「わかめ，おご」を産し常食として居るから，（文芸春秋 1954年5月 270）

実例はこの他動詞のものしかなかったが，「〜が産する」というかたちの自動詞的用法もあるはずだ。

「おこる」は，こと（事件・現象）にかぎられる。

○どこか遠くの方で激しい嵐が起つてゐるのだ。（冬の宿 157）

そして，「生ずる」「できる」「なりたつ」には，この両方のばあいがふくまれる。

〈もの〉	〈こと〉
○一坪の土地から僅に一升の米しか生じない訳になるのです。（真知子・前 37）	○真知子の好奇心にも或ひそかな変化が生じてゐた。（真知子・前 52）
○それは海峡の一部に出来るイギリス海軍根拠地の大工事だと，（河明り 306）	○あのひと，帰るんです。ちよつと用事が出来ました。（本日休診 110）
○すべて有機質から成り立つてゐる食物を喰べることを，（野火 166）	○職業的意識を失っては、商売が成り立たぬらしい。（自由学校 173）

これらの単語のあいだにある区別は，単なる ＜もの／こと＞ という対立だけではない。すなわち，

(1) ものについていう単語のうち，「生ずる」「できる」「なりたつ」は広くもちいられるが，「産する」は産業の対象となるようなものである点でせまい。

(2) 「産する」「生ずる」はもっぱら変化としての発生をあらわすが，「なりたつ」は静的な状態をあらわし，「できる」はその両方をふくむ。

(3) ことについていう単語のうち，「おこる」は動的な現象について，「できる」「なりたつ」は静的な状態についていうことがおおい。「生ずる」はその両者をふくむ。

「さかんになる」意味での「おこる」は，ものを主体とする表現につかわれる。

○あゝ菊池の家がまた興つたと村の者にも云はれたい（思出の記・上 26）

○バイブルにも「剣を以て興る者は剣によって亡ぶ」と訓えている。（平和 1954年3月 19）

もしこれらの用例もふくめるなら，「おこる」の主体の範囲は広くなる。しかし，これは「事件がおこる」などが無から有への変化（発生）をあらわしているのに対して，すでに存在していたものが，よりさかんになることであり，別にあつかうべきものとお

もわれる。

〔5〕 たむける，そなえる＜ささげる，あげる

これらの動詞は，みな神仏の前に何かをさし出すことをあらわす。そして「たむける」「そなえる」は具体的なものを対象とする。

○一人の若い女が墓前に花を手向けてゐるのを見て，（つゆのあとさき 54）

○前には新しい位牌を置き，水，団子，外には菊，樒の緑葉なぞを供へてあつた。（破戒 109）

「ささげる」「あげる」も，ものを対象とするばあいがある。

○基督を恋ひ恋うて，夜も昼もやみがたく十字架を編み込んだ美しい帯を作つて献げようと（或る女・前 99）

○僕は香を上げ花を上げ水を注いでから，前に蹲つて心のゆくまで拝んだ。（野菊の墓 53）

しかし，「ささげる」「あげる」は，それだけにかぎらず，ある種の動作をすることをもあらわす。

○神の立ちどころの恩寵に，まだ感謝の祈りを捧げてゐなかつたことを思ひ出して。表へまはつて，敬虔な祈りを捧げた。（潮騒 41）

○お経をあげて山田君の霊を慰めてやることは出来ない。（蟹工船 88）

これらにあっては，ものをさし出すことと，一定の動作をすることが，神仏に対する気もちをあらわすという意味では，同じ資格のものとしてはたらいている。

○一生を仏様にささげてはたらいたものの良心の安けさが（出家とその弟子 208）

も，やはり一生を通じての自分の行ないをさし出しているのである。

「あげる」の分析のところでものべたことだが，

○燈明をあげ肩衣をつけ，歎異鈔に類したものを唱した。（仲子・上 169）

のようなばあいには，燈明という具体物を対象にはしていても，すでに「お経をあげる」などの動作を対象とするばあいに近づいている。というのは，「花をあげる」のばあいだったら，対象が仏だんのところに移動しなければならないのだが，「燈明をあげる」では，ろうそくやランプは，はじめから仏だんの前にあり，ただそれに火をともすという行為によって「あげられた」ことになるからである。このばあいには，ものの移動は起こっていない。「たむける」にも，そういう意味で，

○お品の塔婆の前にそれから其処ら一杯の卵塔の前に線香を少しづつ手向けて，（土・上 184）

のように「線香をたむける」という例がある。線香に火をつけなければ「たむけた」ことにならないのだから，その点では「燈明をあげる」に近い。「花をたむける」にくらべれば，やや重点が移っている。しかし，燈明のばあいとちがって，線香は原則としてそこにないものを移動させるのだから，まだかなり具体的な性格が強い。

〔6〕 どかす，どける／はぶく，略す，省略する ＜のかす，のける，ぬかす，のぞく，とりさる，とりのぞく

「どかす」「どける」は，ものについてだけいう。(「どかす」の例はなかった。)

○行介は足や腰のまはりの湯タンポをどけて，病児の体を抑へた。(波 208)

「はぶく」「略す」「省略する」は，原則として，こと（動作など）を対象とする。

○はあ，敬礼ははぶかせて頂いております。(真空地帯・上 123)

○その点については，前に『沙漠の征服』で詳しく書いたことがあるので略するが，(文芸春秋 1954年2月 56)

○本会議においても質疑を省略され，ただちに討論にはいった。(人間の壁・上 314)

「のかす」以下の動詞は，もの・こと両方についてもちいられる。(「のかす」「ぬかす」は，両方についての用例がそろわなかったので，ほかの単語の例だけをあげる。)

〈もの〉

○彼の額へ手を翳して居た彼の妻は，さう言つて，手を其処からのけて，自分の額へ手を当てて見た。(田園の憂鬱 95)

○作物の畦間を耕すことも雑草を除くことも(土・上 97)

○死者の傍に銃があることは絶えてなかつた。最初から持つてゐないか，或ひは素速く取り去られるからであらう。(野火 97)

○繃帯を解いてガーゼを取りのぞくと，明らかに歯で噛まれた疵であつた。(本日休診 77)

〈こと〉

○眼窩のあたりがまつたく扁平なことと，顔色が深く沈澱した黄色の光沢をたたへてゐることとをのければ，(冬の宿 44)

○私の拒食の習慣が除かれたことだけは，(野火 171)

○どうやって子供の不幸をその親に知らせ，不幸の原因を取り去ることができるだろうか。(人間の壁・上 160)

○と云ふより，一切の不公平を取り除く組織の実現を。(真知子・前 72)

「どかす」「どける」に，ことを対象とするばあいが全然ないかどうか，つまり，たとえば「不幸の原因をどかす（どける)」といったとすれば，それはまちがいと断定してよいかどうかには疑問がのこる。用例がすくなかったため，ものを対象とするばあいだけだったので，もっと例をふやせば，ことのばあいもでてくるかもしれない。しかし，かりにそういう例があったとしても，それは「のぞく」や「とりさる」にくらべて臨時的，比ゆ的なニュアンスがつきまとうだろう。「どかす」「どける」が具体物についてつかわれるということは，これらがやや俗語的で，文章語になじみにくいことと関係があるとおもわれる。

なお，「はぶく」「略す」「省略する」が，「原則として」ことを対象とする，と書いたのは，つぎのような例があるためだ。

○次の移住者は，先の移住者の板壁を利用し，手間と資材を省くことによって，自然に，七軒の長屋が，できあがった。(自由学校 181)

○馬鹿を見るのは，刺身やカマボコの数をへらされ，佃煮を省略され，狭い部屋へ大ぜい押しこめられた生徒諸君だが，（中央公論 1953年8月 152）

「資材」「佃煮」のようなものが対象とされていることからみれば，これらの単語が＜こと＞を対象とする，とはいえなくなる。そのばあいには「はぶく」などの対象が＜こと＞であることは，必要条件ではなく量的な規定として，つまりそうなることが多い，という傾向としてみとめられる。なお，「佃煮を省略する」などは，すこしはしょった感じがあるかもしれない。

この点と関連して問題にしなければならないのは，「はぶく」などと「とりさる」などとの，いちばん大切なちがいはなにか，ということだ。辞書では，「はぶく」の訳語として，「とりのぞいてへらす」「とりさる」などをあげていることが多い。つまり，これらを同義語としてあつかい，そのちがいを問題にしていない。しかし，そのあいだには一定の区別があり，それは，＜もの＞と＜こと＞との対立というだけでは，説明がつかない。「はぶく」などは，たしかに＜こと＞を対象とするが，おなじく＜こと＞を対象とした「不幸の原因をとりさる」「一切の不公平をとりのぞく」などを，「不幸の原因をはぶく」「一切の不公平を省略する」などとはいえないのだ。それでは，どこがちがうかというと，

「とりさる」などは，すでにあるものごとをなくすことをあらわす

のに対して，

「はぶく」などは，これからしようとすること（の一部）をしないでおくことをあらわす

という点にあるとおもわれる。したがって「原因」「不公平」など，すでに存在する現象については，「はぶく」「省略する」などといえないわけだ。逆に，「敬礼をはぶく」「質疑を省略する」など，これからおころうとしている現象については，「のぞく」「とりさる」の類はつかえない。おなじく＜こと＞を対象とするといっても，「とりさる」対象は状態・性質の類であり，「はぶく」対象は動作である。＜もの＞を対象とするばあいでも，「雑草をのぞく」「ガーゼをとりのぞく」などでは，すでにある雑草やガーゼをなくすことだが，「資材をはぶく」「佃煮を省略する」では，資材や佃煮がこれからある場所に登場しないようにするのである。

「のける」の例としてあげた「……ゐることとをのければ」は，ほかの例とくらべて異質だ。「習慣をのぞく」「原因をとりさる」などが，有から無への変化（つまり消滅）をあらわしているのに対し，これは単に論理的に範囲をくぎることをあらわしている。その操作は，客観的なものではなく，話し手の思考のなかでおこるにすぎない。これは，多分別の意味として立てた方がよく，ここにあげるのは適当でないだろうが，「のける」で＜こと＞の変化（消滅）をあらわす例がみつからなかったので，つかった。つぎの「のぞく」も，これとおなじ類に属する。

○武蔵野を除(のぞい)て日本に此様な処が何処(どこ)にあるか。（武蔵野 19）

1.1 もの

もの一般を主体とする動詞には，つぎのようなものがある。

A．移動——のぼる，うかぶ，おちる，ふる，はいる，いく，ただよう，とぶ，すべる，すすむ

B．物理的な状態の変化——かたまる，へこむ，こわれる，くだける，おれる，ゆがむ，ふくらむ，のびる，ゆるむ

C．化学的な状態の変化——こげる，にえる，とける，くさる，よごれる

D．姿勢などの変化——かたむく，たおれる，もつれる

E．ほかのものとの関係の変化——ぶつかる，ふれる，はなれる

F．持続する動作・作用——ゆれる，ふるえる，ひるがえる

この<もの一般>という主体の中には，ものとしてながめたばあいの人間や動物のからだも含まれる。たとえば「棒がたおれる」と「人がたおれる」というのは，意味的にみて区別する必要がないであろう。ただし，人間のからだについていえるかどうか，うたがわしい動詞，つまり，もの一般を主体とするのか，それとも無生物であるものを主体とするのか，まようようなものも，すくなくない。

ところで，広い意味では，どちらもものではあるが，2種類のちがった主体をとる動詞がある。たとえば

○然し今時分，丁度酔客の込合ふ時刻には，銀座のドンフワンなどへは君江との関係もあるところから、うかうか一人では行かれない。（つゆのあとさき 71）

○銀座通のカツフエーは此のドンフワンに限らず，いづこも十時過ぎてから店のしめ際になつて急に込み合つて来るのが常である。（つゆのあとさき 76）

という例をくらべてみると，左がわの表現では，ある場所にあつまっているもの（この例では人）を主体にして表現している。これに対して，右がわの例では，おなじような現象をあらわすのに，それらのものがあつまった場所（このばあいには店）を主体にしている。このように，一方では人間・物体など，他方ではそれらの位置する場所・入れものなど2種類の主体をとりうる動詞の例としては，ほかにつぎのようなものがある。

〈もの〉

○僕は咽元に大きな塊がつかへて，急に側向いた。（思出の記・上 144）

○その本箱には，十九世紀の英文学から，戦後紹介されたアメリカ作家まで，原書や訳本が詰まってる。（自由学校 6）

○此は蓋し駒井先生にとって前途に塞が

〈場所〉

○しかし志野田先生は喉がつかえて，急には返事ができなかった。（人間の壁・上 49）

○書棚は本と書類とで詰まっていて，その背を揃えた並び方は図書館のように見えた。（むらぎも 42）

○雪で道もふさがってしまいました。

る敵の軍勢が戦を挑む鯨波の第一声であつたのだ。（思出の記・上 110）

○客がたてこむと，炊事場の女中達の声も大きくなるのだが，葉子のあの美しい声は聞えなかつた。（雪国 124）

○この線に乗りかえると幾分客がすいてくる。（むらぎも 217）

○頬は涙が乾いて硬ばつて居た。（田園の憂鬱 47）

○大きな帆立貝で作つた聖水盤の水は干上つてゐた。（野火 79）

（出家とその弟子 28）

○早かつたので来たては割にすいてゐた部屋も，いつとなく立て込んで来た。（真知子・前 109）

○中学も高校も春の休暇にはいっているので，朝の汽車はいつもより空いていた。（人間の壁・上 52）

○何故，こんなに蠅が来るのだらう。唸つて飛び廻り，干いた頬に止つて，むずむず動く。（野火 140）

○井戸は，ロケ隊が到着と同時に顔を洗ったり，飲んだりしたために干上り，その日から使用禁止という状態である。（映画ファン 1956年10月 61）

うえの例にみるように，これらの動詞のばあいは，「（もの）が（場所）に〜する」＝「（場所）が（もの）で〜する」という変換の公式がなりたつことが多い。（特に「つまる」の例をみよ。また，p. 703〜704を参照。）また，「（場所）は（もの）が〜している」という表現がなりたつことがある。

○二階は二部屋になっていて，どっちも人が一ぱいに詰まっている。（むらぎも 252）

また「（場所）の（もの）は〜している」という表現がなりたつこともある。

○インキスタンドのインキは乾いている。（人間の壁・上 330）

これらの点でこの（場所）と（もの）とは全体と部分との関係，あるいは属性の持ち主と属性との関係に似ている。つぎの例を参照。

○都会の雀は，痩せて煤煙で羽色がよごれてゐる。（帰郷 155）

○おつぎの手は落葉の埃で汚れて居た。（土・上 26）

しかし，全体と部分，あるいは属性の持ち主と属性，という両方の名詞と関係をもつ動詞のばあいには，上に例をあげたような，ほかの表現をとることができない。つまり，「AはBが〜している」「AのBは〜している」という表現がなりたつばあいに，「AにはBが〜している」「AはBで〜している」という表現に転換することはできないのである。そのような転換ができるところに，ここでとりあげた動詞の特殊性がある。

もの（物体・物質）についてつかわれる動詞を，そのもののどの側面を問題にしているかによって，つぎの3つのグループにわける。

101　質
102　数量
103　部分／全体

「質」というのは，ここにあつめられた動詞の対が，主として動作の主体（他動詞のばあいは対象）の質という点で区別される，という意味である。他のばあいもおなじ。

p. 20でのべたように，1つの動詞の意味に属する特徴は，たがいに規定しあい，ひきつけあう。＜質＞＜数量＞＜部分＞などの特徴に分解しての記述にはいる前に，なかば総合された形での分析例として「かじる」をとりあげる。

〔7〕 かじる＜かむ

「かじる」の意味は，広辞苑によれば「堅い物の片はしをかむ」となっている。すなわち「かじる」は「かむ」の下位概念であって，その特徴は，第1に，かたいものについてであるということ，第2にものの片はしについてである，ということとみとめている。「かじる」が「かむ」の下位概念であるという点についてはほとんど問題ない。実例からみて「かむ」がつかわれていて「かじる」に置きかえられないという例は多いが，逆に「かじる」がつかわれていて「かむ」に置きかえられないという例は（以下に述べるような重点の置き場所を無視するかぎり）見当たらない。典型的な用例では，上にあげた広辞苑の規定（ほかの辞典の規定も大同小異である）はよくあてはまる。

「かじる」	「か　む」
○輝雄はそのとき塩せんべいをかじりながら，わざとらしく軽い咳をした。（冬の宿 74）	○夜に入つてかき餅などを焼いて貰つてぼりぼり噛んだ。（こゝろ 124）
○その白樺の木陰に寝そべつて果物を齧じつてゐた。（風立ちぬ 71）	○私の恋人が大きい林檎を噛んでいた。（放浪記 206）

そして「かじる」を「かむ」から区別する2つの特徴のうち，第1の，かたいものについてであるということ，いいかえれば，かんだときに歯ごたえがあるようなものについてであることも，また大部分の用例からみとめられる。「かむ」が使われていて，「かじる」におきかえられない，以下のような例は，みな「かむ」対象がやわらかいもののばあいだ。

○葉子は自分の爪先を見詰めながら下唇をかんでゐた。（或る女・上 54）

○痙攣を起したもんですから，舌を噛まないやうにつて，先生がさうなすつていらしつたんです。（波 206）

○よろこびにさからふためにそでをかんでゐた。（雪国 36）

これらについては，「ものの片はしをかむ」というかぎりでは，「かじる」といいかえてもよさそうに思われるが，対象がやわらかいものであるために，そういいかえられない。

ところが，中には，かたいものについてその片はしを「かむ」動作であって，しかも「かじる」にはおきかえられない例がみられる。

○卯平も泣いた。彼は煙管を噛んでは只舌鼓を打つて唾を嚥んだ。（土・上 53）

○拇指の爪をかみながら，上眼をつかつて，皆の云ふのを聞いてゐた男が，（蟹工船

42)

したがって,「かじる」を「かむ」から区別するためには,＜かたいもの＞と＜片はし＞という規定以上に,なにかをつけ加えなければならない。1つの可能性としては,「かじる」が食べものを対象とするばあいにかぎられる,ということも考えられる。キセルやつめは,食べものではない。そして,「かじる」の用例は,ほとんど全部食べものを対象にするばあいだった。しかし,この考えも,つぎのような例があることから否定される。

○鼠がさつきからがりがりと,どこかそこらの天井の中で何をか囓つてゐるのが気になる。(桑の実 138)

そこで,つぎに考えあわせられることは,いくつかの辞典が,「かじる」の上位語として,「かむ」と並んで「けずりとる」をあげていることだ。「かむ」という動作は,歯をかたくおし合わせればいいのであって,上にあげた「唇をかむ」「袖をかむ」などのばあい,唇や袖は原則として変化を起こさない。ところが「かじる」のばあいには,多くは,かなり大きなものの一部分を歯でかみとるのであり,また,すぐつぎにあげるように,豆などをかみくだくのであって,どちらのばあいにも対象は変化を起こしている。この点は,「かじる」を「かむ」から区別する,かなり重要な特徴である。「かむ」がかたいものについて使われていて,しかも「かじる」にならない例としてあげた「キセルをかむ」「つめをかむ」では,キセルもつめも,かみとられもしなければ,かみくだかれもしない。それで,これらは「かじる」といいかえられないのであろう。(なお,「かみとる」「かみくだく」「かみやぶる」などの複合動詞になれば,単なる働きかけではなく,結果としての変化もふくまれる。)

「かじる」を「かむ」から区別する第2の特徴である＜ものの片はしを＞という点については,たとえばつぎのような例からみて,不十分な規定であると思われる。

○其前々夜は,夜の白むまで僕の二階で炒豆を噛りながら,さまざまの事を語り明し(思出の記・上 228)

辞典によっては「かじる」を＜少しずつ＞と規定しているのもあり,もしこの例で,いり豆の全体,数多くの粒を合計した全体を対象としてとらえ,それの1つぶずつを＜片はし＞ないしは＜少しずつ＞という表現にあたるものと考えるならば,この規定はこの例にもあてはまる。しかし「片はし」や「少しずつ」という表現は,そうではなくて,固体の一部分をあらわすものと思われる。そして,この条件にあわないばあい,たとえばただ1粒のいり豆を「かむ」ばあいでも,やはり「かじる」といえるであろう。したがって,かたいものをかんで変化させる,という条件がみたされているばあいには,そのものの片はし,部分をかむという限定は,かならずしも必要ない。しかしまた,逆にものの一部分をかみ取るばあいだったら,かたくなくても「かじる」が使えるようである。

○コッペパンをかじってもそれでは生活できない。(主婦の友 1956年2月 270)

だから,対象とするものがかたい,または対象とするものの一部分である,という一

方の条件がみたされていれば，(そして，その対象が変化するならば)「かじる」はつかえるようだ。これらがともにみたされず，対象がやわらかくて，かつ全体的なばあい，たとえばイチゴを「かむ」ばあいには対象が変化して（つぶれて）も「かじる」とはいえない。すなわち，表にまとめるとつぎのようになる。

	りんご	コッペパン	豆	いちご	キセル	そで
かたいか	+	−	+	−	+	−
部分的か	+	+	−	−	+	+
変化するか	+	+	+	+	−	−
	かじる					
	か む					

なお，上のように考えても，つぎの「かじる」は例外になる。

○勘次は風呂敷包から弁当の残を出して冷たい儘ぶすぶすと噛つた。（土・上 33)

めしについては，ふつう

○彼は飯をかんでいるうちに，ふと，「山海楼やったら，行って渡してきてもよい」といった染(そめ)の言葉を思い出して，（真空地帯・上 148)

のように「かむ」をつかうことはあっても，「かじる」をつかうことはない。それはかたいものでもなく，固体の部分だともいえないから。もっとも，上の例では，べんとうのめしが冷えきってかたくなったことを強調するために「かじる」をつかったのかもしれない。

＜注＞部分的なものを対象にするという「かじる」の特徴は，抽象化して，ものの一部分だけを知るという意味につかわれるとき，はっきりあらわれる。

○英文学をカジる奥さんと，配給所のオッサンとでは，所詮ムリな取組みである。（自由学校 266)

この抽象化は，かたいものに対するはたらきかけという特徴だけが切り捨てられ，ものの片はし，部分という特徴が強調されたものである。

1.1.0.1 質

1.1.0.1.1 物体／物質

ここで＜物体＞というのは，道具・生物，また生物のからだの部分のように，ある一定のかたちをもっているものであり，＜物質＞というのは，それをつくっている，材木・金属など，それ自身としては一定のかたちをもっていないものである。

〔8〕 こわれる＜つぶれる，くずれる

「こわれる」は，道具その他一定のきちんとしたかたちをそなえた物体が，そのかたちや働きを失うばあいにいう。

○この橋がこわれたのは，六年まえの台風のときである。（人間の壁・上 53)

「つぶれる」「くずれる」は，物体についてもいうし，また物質的なもののあつまりで特定のかたちを問題にしないようなものについてもいう。「厭がらせの年齢」の例は，大便についていったものである。

〈物　体〉

○颱風には教室がつぶれたりしました。（婦人倶楽部 1956年9月 149）

○半ば崩れたビルと，コンクリート、煉瓦の破片だけの荒野である。（文芸春秋 1953年9月 138）

〈物　質〉

○便所の草履に足を入れると，足裏でぐにゃりと潰れたものがあった。（厭がらせの年齢 299）

○どおつと音を立ててひとりでに崩れる雪の飛沫を浴びながら，（風立ちぬ 158）

教室やビルについては「こわれる」ともいえるが，大便や雪について「こわれる」とはいえない。もちろん，雪が材料になっていても，はっきりしたかたちをとった物体として，雪だるまに作られているばあいには，「こわれる」といえる。

このような主体のちがいは，実は「こわれる」などの変化のしかた，あるいは変化の結果のあり方と結びついているのであり，むしろ，そちらの方が基本的で，そのために主体にもちがいが生じるのだと思われる。そして，ここでは一応「こわれる」と「つぶれる」「くずれる」とのあいだに線を引いたが，実は「つぶれる」と「くずれる」とのあいだにもちがいがある。すなわち「つぶれる」の方はまだ物体についていうことが多いのに対し，「くずれる」は主として物質的なものについてつかわれる。たとえば

○小屋の外の七輪や，壊れたカマドで，朝の炊煙をあげるのは，（自由学校 184）

○広場の会堂とは反対の側に設けられた，一つの水道栓がこはれて，白い水が迸つてゐた。（野火 75）

の「こわれる」は，どちらも「つぶれる」にいいかえることができる。「こわれる」といったばあいと「つぶれる」をつかったばあいとで，そのあらわしている状況は多少違ってくるが，かまども水道栓も，ばあいによっては「つぶれて」おかしくないものである。しかし「くずれる」が使えるのはかまどだけであって，水道栓にはいえない。これは，かまどの方が，より物質的であって，その部分部分がこまかな等質的なものにたやすく分かれるのに対し，水道栓は，かりに部分に分けたとしても，なおそこには一定の形がつきまとうことがさけられず，かまどのように，かんたんに物質には還元できないものだからだ。「こわれる」について，比較的，物質的なものをさすのに用いられたのは，つぎの例である。

○玉子の黄身を中央へこわれないように落します。（若い女性 1956年8月 110）

これも，黄味のかたちが比較的まとまっているために「こわれる」がつかえるのであって，単に不定形のかたまりをあらわすのではない。

〔9〕 こわす＜きる，たつ，さく，ちぎる，やぶる，くだく，つぶす，くずす，わる

これらの動詞のうち，「こわす」はもっぱら物体を対象とする。

○ドアーを壊して，漁夫や，水，火夫が雪崩れ込んできた。（蟹工船 113）

物体のなかには，たとえばつぎのように，特殊なものもふくまれる。

○この場合は，血液にアワがまじることもないし，血球などがこわされることもない。（人工心臓を体内に 366）

しかし，純粋の物質について，たとえば「石をこわす」「材木をこわす」などとはいえない。もしそういったとすれば，それは，その石なり材木なりが，すでに四角に切られているばあいなど，一定のかたちをなしていることを前提にしている。

これ以外の動詞は，みな物体についても物質についてもいうことができる。以下その両方の例をあげる。ただし，物質の例は全部の動詞についてはそろわなかった。

〈物 体〉	〈物 質〉
○悉く漢陣の旌旗を倒し之を斬つて地中に埋めた後，（李陵 164）	○傍で多計代がカステラを切つてゐた。（仲子・上 157）
○昔慧可大師は半臂を断って法を求め，（貧乏物語 39）	
○電車の切符を二枚私に裂いてくれた。（放浪記 180）	○僕は早速紙を裂いて結はへてやる。（野菊の墓 23）
○汚れた雑嚢をさげて手帖をちぎつたものらしい紙片を附けてあつた。（帰郷 73）	○おつぎは臼から餅を拗切つて茗荷の葉に乗せて一つ一つ膳へ並べた。（土・上 185）
○たいさんの茶色のマントが，見るもむざんに破られていた。（放浪記 273）	○「阿呆」と云ひさま撥を以て打つた弾みに眉間の皮を破つたので（春琴抄 191）
○ちらちらちらちらと玉の簾を百千に砕いたやう，（高野聖 67）	○氷を砕く寒い音が聞こえた。（真知子・前 173～174）
○漁夫は虱を口に入れて，前歯で，音をさせて，つぶしたり，両方の拇指の爪で，爪が真赤になるまでつぶした。（蟹工船 63）	
○阿部が屋敷の裏手にあつた物置小屋を崩させて，それに火を掛けた。（阿部一族 75）	○神田明神のある神田山の台を崩して，その土で埋めて拵へたものである。（河明り 287）
○「こぼしちやつた。ぢや，瓶も割つてしまつたのかい。」（波 309）	○がさがさに割られて尖り切つた氷の破片が，（こゝろ 142）

これらの例のうち，物体と物質とにそれぞれを入れることに，疑問がのこるものもある。たとえば，「さく」のばあいの切符と紙とはひじょうにちかい。紙は，切符になったばあい，単にちいさな四角にきられているだけであって，それ以外，かたちのうえで特徴がないからだ。

つぎにあげる例も，物体とも物質ともいえるかもしれない。

○里芋のコロコロしたのを薄く切って，小松菜と一緒にたいた味噌汁はいいものだ。(放浪記 122)

単に「さといもをきる」または「さといもを２つにきる」というばあいには，全体としての，まるいかたちをもった，さといもが対象になっている。しかし「さといもをうすくきる」というばあいには，すでに，全体としてのかたちは，あまり問題ではない。その物質としての存在が，いもでありさえすれば，いくらでもうすくきることができる。これは，たとえば「カステラをきる」というのと，ほとんど区別する必要はないだろう。

なお，１つ１つとったときには，こまかい物体であっても，それの集まったものは，全体として不定のかたちをとって，物質的なものになるばあいがある。

○彼は崩した一つの束から，コンクリートの床に枯松葉や粗朶を積み上げたが，(潮騒 64)

このばあい，１つ１つの松葉や枝は，それ自身では物体である。しかしそれが集まってたばをつくるときには，物質的なものであろう。

以上にあげた例のうち，物体を対象とするとしたものは，原則として「こわす」の対象にもなりうるが，物質を対象としている例は，「こわす」でいうことができない。物体を対象としたものでも，さらにほかの条件がくわわるために「こわす」といえないものがある。たとえば，平面的なかたちをもったマントや切符が「こわす」の対象になりにくいのは，物質的かどうかというのとは別の理由によるものである。

〔10〕 あふれる＜はみだす，はみでる

これらの動詞は，ものがうつわなどにはいりきらないで，外まで部分的に出ていることをあらわす。そして「あふれる」は，物質とよぶのがふさわしいようなものについてつかわれる。多くは

○石油タンクが射たれ，石油が血潮の上に溢れた。(潮騒 33)

のように液体についていうが，

○引率の先生は，埠頭にあふれた母親の群におそれをなした。(潮騒 52)

のように群集などについてもいうことがある。群集はもちろん物質とよぶのには不適当だが，全体をどの部分でわけてもよく，数ではかるよりは量ではかるのにふさわしいものである，という意味では，個物・物体よりも物質に近い。

これに対して「はみだす」は

○銀の蓋からはみ出して，壺のふちにつぶれたようになってくっついている辛子が(むらぎも 120)

のように物質的なものについていうばあいもあり，これは「あふれる」におきかえることができる。(「あふれる」は，中にはいりきらないほどたくさんあるため，という原因の面での限定があり，「はみだす」にはそのような限定がないから，その点ではちがう

が。）しかし，「はみだす」はむしろ，

○地中からハミ出した土管から，トウトウと，水が流れてる。（自由学校 179〜180）

○チョッキの外へはみ出てしまっている臙脂いろの派手なネクタイ，（むらぎも 84）

のように，物体・個物の一部分が，外に出ているばあいにつかわれる。これらの例では「あふれる」におきかえることはできない。なお「あふれる」についても，個物についての表現である例があった。

○嘉門の体はこの狭い室には溢れるやうにみえた。（冬の宿 190）

ただしこれは比ゆ的にいっているのであり，しかもそのばあい，人間のからだというよりは，物質的なものであるかのように思われる，という誇張による表現であって，上にのべたことに対する例外にはならない。

1.1.0.1.2 固体／液体／気体

〔11〕 くちる＜くさる

固体については「くちる」も「くさる」もともにつかわれる。

○半ば朽ちた木の階段を下りると，（野火 8）

○雪の斑らな屋根は板が腐つて軒に波を描いてゐた。（雪国 51）

しかし，液体については，「くちる」がつかわれることはない。「くさる」はつぎのように水についてもいうことができる。

○一年もまるで汲まないといふのですもの，水だつて大がい腐りますわねえ（田園の憂鬱 16）

○併し放つておいたら，溝の水は腐るばかりぢやありませんか。（波 66）

さらに，やや比ゆ的かもしれないが，気体について「くさる」がつかわれた例もある。

○この家の空気は陰気になつて，しめつぽくなつて，腐つてしまつて，ランプへ火がともらなくなつたのではあるまいか。（田園の憂鬱 119）

○薄暗い電気の下に，煙草の煙が雲のやうにこめてゐた。空気がムレて，ドロドロに腐つてゐた。（蟹工船 77）

〔12〕 すむ＜すきとおる

「すきとおる」は，固体についても液体や気体についてもいう。

○七月の青空が，透き徹った青葉に縁どられて，遠く，高い。（自由学校 190）

○下を覗けば，水は青味を帯びた水晶と透き徹つて，底の小石に金糸を欺く日影がちらちら。（思出の記・上 78〜79）

○日の光は透通つた空気に射渡つて，（蒲団 40）

「すむ」は，液体・気体だけで固体についてはいわない。

○水は清く澄で，大空を横ぎる白雲の断片を鮮かに映してゐる。（武蔵野 20）

○空気が硝子のやうに冷たくて，塵一本なく澄んでゐた。（蟹工船 103）

〔13〕 ぬるむ＜あたたまる，ぬくもる

「あたたまる」は固体についても液体についても気体についてもいう。

○お互の身体が少し温まつてくると，湯気が立つた。（竪工船 54）

○鍋に牛乳をかけ，あたたまってきたらバターを入れて，（暮しの手帖 1956年33号 157）

○スティームで存分に暖まつて来た船室の中の空気は息気苦しい程だつた。（或る女・前 101）

「ぬくもる」も同様だとおもわれる。ただし，液体の例はなく，気体の例は文語の短歌のものだった。

○佐助が両足を懐に抱いて温めたがそれでも容易に温もらず（春琴抄 175）

○温もりし風になぶらる庭木立日に日に繁く野路を閉ざしぬ（婦人朝日 1956年8月 151）

これに対して「ぬるむ」は液体や気体についてはいうが，固体についてはいわない。

○汲んだ水の温むまで話し込む事もあった。（暗夜行路・前 236）

○松風を吹く風がぬるむ。海が紺色に澄んで光りはじめる。（人間の壁・上 74）

〔14〕 あぶる＜あたためる，熱する

「あぶる」は対象が固体のばあいにかぎられる。

○おのぶは，台所からクサヤを炙つて持つて来た。（末枯 50）

「あたためる」「熱する」は，固体でも液体でも気体でもかまわない。

〈固　体〉	〈液　体〉	〈気　体〉
○身体も心も暖めようない程冷え込んで（闘牛 110）	○婆やは山羊の乳を温めて黒い壺へ入れた。（桑の実 40）	○前から暖めさせて置いた洋館の書斎に，（多情仏心・前 61）
○朝早くから瓦斯で熱した真鍮へ漆を塗りつけては乾かしたり（機械 22）	○フライパンにサラダ油をたっぷり入れて熱して，（婦人倶楽部 1956年6月付録 夏の一品料理 47）	○発生したエネルギーで周囲の濃いガスが熱せられ，（宇宙の謎はどこまで解けたか 97）

「あたためる」の気体の例としてあげた「書斎」は，固体ともいえるが，「へやをあたためる」というばあいに大事なことは，へやにある家具や壁ではなくて，へやの空気である。そのような意味で，気体の例とした。もちろん，「へやの空気をあたためる」のように，完全に気体を対象とした表現もありうるはずだ。

〔15〕 みなぎる，たたえる＜みちる，あふれる

「みなぎる」「たたえる」は液体についていう。

○芳子は涙の漲るのを禁め得なかつた。（蒲団 61）

○堰には動かない水が空を映して湛へて居る処がある。（土・上 115）

なお「みなぎる」の主体には，ほかに霧や雲があると思われ，この点であるいは「たたえる」よりも広いかもしれないが，そういう実例はなかった。

「みちる」「あふれる」は液体についても，そのほかのもの（物体・人間など）についてもいう。

〈液 体〉

○白い菅糸のやうな雨は水が田に満つるまでは注いで又注ぐ。（土・上 75）

○湯槽から溢れる湯を俄づくりの溝で宿の壁沿ひにめぐらせてあるが，（雪国 46～47）

〈その他〉

○群衆が会堂に満ち，跪いて祈つてゐた。（野火 62）

○商品は店頭に溢れ，ヨシズ張りの舗道に，活気が漲っていた。（自由学校 205）

これらの動詞は，すべて液体以外にも，光り・におい・音，さらにはもっと抽象的，精神的な事実についても，つかわれることがある。

○音楽教室のなかには沈鬱な空気がみなぎっていた。（人間の壁・上 175）

○色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる笑みが湛へて居る。（野菊の墓 10）

○彼は喜びと不安に満ちながら，きぬ子からちよつとも眼を離さなかつた。（波 44）

○一種陰性の幸福感が身内に溢れるのを私は感じた。（野火 11）

したがって，これらもおなじ意味とみとめれば，液体にはかぎらないのだが，かりにそうだとしても，「みなぎる」「たたえる」は，具体名詞があらわす固体についてつかわれない点で，やはり「みちる」「あふれる」などと区別される。

＜注＞「たたえる」が自動詞としてつかわれたのは，上にあげた2つの例だけで，あとはすべて他動詞としての用法だった。

〔16〕 たたえる＜みたす

他動詞のばあいも，自動詞のばあいと同様，「たたえる」の対象は液体で，「みたす」は液体を含めたもの一般につかわれるのではないかと思われる。ただし実例としては，

○その林の上に，二つの岬に抱かれた湾が，静かな水を湛へてゐた。（野火 56～57）

のような「たたえる」に対応する形でつかわれた「みたす」の対象は，

○三次元のユークリッド空間の中に物質とエーテルとが満され，（物質世界の客観性について 260）

という例のほかには，

○tは水を満たしたゴム管。（自然 1956年3月 20）

のように水だけだった。このばあいも「たたえる」の主体は湾であり，「みたす」の主体はゴム管ではなくて，おそらく人だろうから（「ゴム管が水をみたした」とはいいにくい），きちんと対応するとはいえないが，少なくとも両者が「水」を目的語にしている点は共通だ。逆に入れものの方を対象にした例ならば，「みたす」の方には，水以外

のものについていった例もある。

○卵はもとより，親鳥もしばしば伯父の胃の腑を盈したが，（思出の記・上 89）

○すると夜空は星に充たされ，（潮騒 158）

なお，「たたえる」には

○よどんだ水が岸辺に薄氷をたたえていた。（落城 20）

という，水以外のものを「たたえた」例が1つだけあった。このばあい，意味は「水にうかべている」というのにちかいと思われる。このような意味は，いまのところ辞書に登録されていないようであり，正しい用法とみとめるべきかどうか，問題が残るであろう。

〔17〕 したたる，たれる＜おちる，ふる

「したたる」「たれる」は，液体についていう。

○噛みしめたその左の腕から血がぽたぽたと滴つてゐた。（或る女・前 88）

○だらだらと垂れる汗を水で拭つた。（土・上 186）

「おちる」「ふる」は，液体についても，固体についてもいう。

〈液　体〉

○雨が屋根づたひにバルコンの上に落ちるのを聞いてゐた。（風立ちぬ 105）

○秋雨のやうな雨がまだじとじと降つてゐた。（あらくれ 107）

〈固　体〉

○さつきポケットに入れておいた春三の手紙が床に落ちた。（本日休診 61）

○すると天から花が降って来て，あたりは浄い香りに満ちた。（出家とその弟子 205）

厳密には液体といえないかもしれない，つぎのような例がある。

○蠟燭の蠟がぽたぽたと土の上に滴る。（桑の実 133）

○一方は代赭色の，も一方は空色青の絵具が外側に垂れてこびりついていた。（むらぎも 201）

しかし，これらも，流動物である点，液体に準ずると見ることができるだろう。「たれる」は「腕がだらんとたれている」のように，片方の端が固定されているばあいには，固体についても使う。しかしこれは，その部分が切りはなされて落ちるわけではないので，「したたる」とおなじ意味につかわれた「たれる」とは別の意味と見て，いまは問題にしない。ただし「たれる」にこの2つの意味があること，すなわち液体については下に落ちることをあらわし，固体については，一端が固定されて，他の端が下にさがっていることをあらわすのは，偶然ではないであろう。すなわち，液体は，全体が一度におちるのではなく，部分としての落下であり，そのばあい，まだ残っている部分が上の方にあるために，一方の端だけが下におちて，他方の端はまだ上にある，というかたちを（瞬間的に固定してみれば）とっている。たとえば，軒先から雨だれが「たれて」いるようすは，もし水がつづいているならば，ひもが軒先から「ぶら下がって（たれて）」いるようすに近い。

なお、「おちる」「ふる」は，つぎのように，物体というより現象というべきものの，上から下への移動をあらわす。

○そしてそこに太陽の光の落ちたときのことを言っているので，（哲学以前 132）

○その広い磨り硝子を通して一面に降つて来る戸外の光線は，（闘牛 127～128）

○地上より山の方が高いエネルギーの宇宙線が降ってくるチャンスが多い。（物質の根源と宇宙を結ぶ 113）

○おだやかな，太い声が降って来たので，瑠璃子がふりかえると，（朕がらせの年齢 275）

〔18〕 ほとばしる／とびちる

「ほとばしる」は，気体または液体についていう。

〈気 体〉	〈液 体〉
○タイヤの穴から，空気のほとばしるような，烈しい勢いだった。（自由学校 201）	○唐紙の血潮は，彼の頸筋から一度に迸ばしつたものと知れました。（こゝろ 272）

「とびちる」は，液体または固体の小さなかたまりについていう。

〈液 体〉	〈固 体〉
○飛沫がその十人余りの身体をつつんでとびちった。（落城 25）	○鶴見さんがビーカーを落してガラスがこなごなに飛びちりました。（人間の壁・上 142）

したがって，「ほとばしる」と「とびちる」とは，液体のばあいには，こまかいニュアンスをのぞけば，おきかえることができる。気体や固体のばあいには，おきかえられない。

「ほとばしる」について，辞典は，多くのばあい「いきおいよくとびちる」のように説明している。すなわち，「とびちる」を「ほとばしる」の上位概念としておいている。しかし，上にあげたように，気体も「ほとばしる」のに対して，これは「とびちる」ことはないのだから，「とびちる」を「ほとばしる」の上位概念だと，単純にはいいきれない。

「ほとばしる」はまた，光・音，さらにもっと抽象的なものごとについて，つかわれることがある。

○頂上に並んだ樹の間から，光線が縞をなして迸つた。（野火 129）

○今米子の顔を見たら，急に泣声が迸りさうな気がした。（真知子・前 211）

○反射的に迸る愛情に身体が慄えた。（くれない 142）

これらの例をふくめて考え，また気体についても「ほとばしる」といえるところからすれば，「ほとばしる」の上位概念は「とびちる」よりもむしろ「出る」「ふき出す」であるといった方がよさそうにも思われる。しかし，つぎの例では，「ほとばしる」は，はげしいいきおいで流れることをあらわしている。

○その山裾に雪笹川が激湍をほとばしらせている。（落城 11）

したがって，部分的に「とびちる」「出る」「流れる」などにおきかえられるけれども，「ほとばしる」のあらわす現象全体をおおうような上位概念は見あたらない。

「ほとばしる」が気体・液体以外にこまかい粒状のもの，たとえば砂などについていえないかどうかは疑問である。砂をいっぱいつめた袋がすこしやぶれて，そこからいきおいよく砂がとびだしたばあい，ひょっとしたら「ほとばしった」といえるかもしれない。お茶の水女子大生についての調査では「袋がやぶれて，中の砂がいきおいよくほとばしった。」という例文に対し，○—2，△—6，×—13だった。

〔19〕 ささる／しみる，にじむ

これらの動詞は，ある物体のなかに，ほかのものがはいることをいう。そして，「ささる」は固体が，「しみる」「にじむ」は液体が，はいることである。

○その時筆筒の底にあったペン先が，どうしたはずみか一本畳へささった。（暗夜行路・前 202）

○油が滲みて半透明になつた薄汚い羽二重を持つて，（多情仏心・前 133～134）

○かすかに喘いでゐるその鰓からは，血が流れ出て，白い滑らかな肌に滲んでゐる。（潮騒 11）

「しみる」は，液体以外に，におい・味，さらにはもっと抽象的な精神的現象についても使われる。

○三十分煮るとにしんとわかめの味がふきにしみて美味しくなります。（婦人生活 1956年2月付録 家庭料理 248）

○帰りみちは，海からの風が背中に当るので，一層寒さが身に泌みた。（冬の宿 110）

「にじむ」も抽象的なことがらについて使われるばあいがある。

○いつもは血の気のない無表情な顔にも，しだいに険しく波立つ感情の翳がにじみはじめた。（小説春秋 1956年7月 132）

〔20〕 つぐ，さす＜いれる

「つぐ」「さす」は液体をいれるばあいにいう。

○おゆふはいれ替へて来たお茶を注ぎながら言つた。（あらくれ 72）

○多計代は，紅茶をさして，一口飲んだ。（仲子・上 144）

「いれる」は液体のばあいにも，固体のばあいにもいう。

〈液　体〉	〈固　体〉
○ウィスキイを少し入れたコップに（自由学校 100）	○茶碗の中へ入れる砂糖の数を聞いた。（こゝろ 46）

「いれる」は，このほか，「へやに空気をいれる」のように，気体のばあいにも使われる。あまりいい例ではないが，

○夙を懐へ入れ足を展して休む。（野菊の墓 23）

○高圧水素を**入れた**霧箱を使って中間子の発生する写真を直接とろうとした。（物質の根源と宇宙を結ぶ 118）

というのがあった。また，「火をいれる」という表現は，

○長火鉢の火を火消壺へ**入れながら**，（桑の実 103）

のように，具体的な移動のばあいにもいうが，

○泊る客もだんだん少くなると，母は店の行燈へ灯を**入れる**のを渋ったりしている。（放浪記 113）

のように，かならずしも移動をともなわないばあいにもいう。「あんどんへ灯をいれる」は，外にあった火をうつすのではなく，中へ新しくつけることにもいう表現である。

「つぐ」が固体のばあいにつかわれた，つぎのような例がある。

○飯桶（めしおけ）と汁鑵（しるかん）の飯と汁を食器に次々と**ついで**行く初年兵を（真空地帯・上 31）

○既に室内には飯バケツがはこばれ，食器に次々と**ついで**まわる初年兵は，（真空地帯・上 117）

前の例は「飯と汁を」と液体がふくまれているので，それにひきずられた表現かもしれないが，あとの例では，めしだけが問題になっている。この表現をみとめれば，「つぐ」の対象は，かならずしも液体とはいえない。

実例にあるかぎりでは，「つぐ」「さす」の対象は単に液体であるにとどまらず，ほとんどつねに，のみものだった。しかし，のみもの以外にも，たとえば「すずりに水をつぐ（さす）」のようにつかえるだろうから，そのように限定することはできないだろう。比ゆ的な表現だが，のみもの以外を対象にした，つぎのような例があった。

○寝耳に水を**さされた**人が狼狽（ろうばい）して起き上がる時に，（暗夜行路・前 184）

「さす」を「いれる」の下位概念としてよいかどうかには問題がある。大部分は液体をうつわにいれるばあいだが，つぎのような例では，対象は液体であっても「さす」相手はうつわとはいえず，「いれる」といいかえるわけにはいかない。

○謙作は仰向いて，また目薬を**さした**。（暗夜行路・前 88）

○あたかもぎごちなくなった歯車に，油を**注して**円滑に輾転する運びになると同じだから，（総長就業と廃業 360）

このような現象は，ものに水を「いれる」というよりは，「かける」「あびせる」などに近いともいえる。しかし「かける」や「あびせる」でおきかえることもできない。うつわの中に「いれる」のではないが，「さす」というのは，やはり外がわに「かける」のではなく，機械の内部や目のあなの中，というように，ある程度くぼんだところに<いれる>動作だからである。したがって「さす」は「いれる」から多少はみだすけれども，まだ，完全に「いれる」の範囲をぬけだして「いれる」と「かける」にまたがった領域をしめている，とはいえない。もし，そういうふうになったら，あるいは，それら2つのばあいは，別々の意味とみとめた方がよいかもしれない。

「さす」には，また，つぎのような用法がある。

○紅いカーネイションの花を持つてきて花瓶に**挿し**，そのついでに私の机の上の瓶に

もさしてくれた。（冬の宿 46）

このような用法までふくめれば，固体も対象になるといえるが，これは別の意味にみとめるべきであろう。このばあいには，単に「いれる」のではなくて，細長いものが立っているようにいれるのだし，また，かならずしも，いれものの中ではなくて，針さしなどにさしてもよいのである。なお，「つぐ」は，大体ものの中にいれる動作とみとめてよいと思われる。

〔21〕 そそぐ＜あびせる＜かける

「そそぐ」は水その他の液体についてだけいう。

○盆栽に水を灌ぎなどした後，（つゆのあとさき 90）

「あびせる」は，ふつう液体についていう。

○両方の頭へいきなり冷水を浴びせ，背中を蹴上げた。（潮騒 97）

実例には液体のばあいしかなかったが，「あびせる」は，たとえば「砂を頭からあびせる」のように，液体に準ずる，細かい粒のあつまりのようなものについても，いうことがあると思われる。

「かける」は液体のばあいにも，これに準ずる粒状のものにも，また，ひらたいもののばあいにもいう。

○気絶をすれば，水をかけて生かし，それを何度も繰りかへした。（蟹工船 57）

○のこりの金をもとのところにかえし，その上に砂をかけた。（真空地帯・上 138）

○死体の顔の上にかけてある白木綿が除れさうに動いた。（蟹工船 89）

ただし，「そそぐ」は，かならずしも「あびせる」や「かける」の下位にあるとはいえない。「コップにお湯をそそぐ」のようなばあいには，むしろ「いれる」の下位概念である。このような実例はなかったが，

○トロロコンブを椀に入れて，鰹節と葱のきざんだのとを入れて，それに塩と醤油を入れて熱湯をそそいだだけで（むらぎも 29）

のようなばあいには，トロロコンブに熱湯をそそいだ，とも，おわんに熱湯をそそいだとも考えられる。しかし，いずれにしても，液体だけについていう点はかわりない。

なお，「水をかける」のと，「きれをかける」のとは，別の意味とみるべきかもしれない。そうすると，ここにあげる例には，あてはまらなくなる。

〔22〕（せく，せきとめる＜さえぎる，ふせぐ，くいとめる）

これらについては，「せく」「せきとめる」は，液体だけについてつかわれるだろう，「さえぎる」「ふせぐ」「くいとめる」は，もっと広く固体も対象にするだろうと考えた。しかし，実例からは，そのようには結論できない。

まず，「さえぎる」「ふせぐ」「くいとめる」が液体を対象とするばあいと，それ以外のものを対象とするばあいとあることは，つぎに示すとおりである。

〈液 体〉

○一時動流することをさへぎられたそれらのささやかな水は，（田園の憂鬱 13）

○ただ堤防だけで水を防がなければならない。（改造 1953年12月 199）

○涙が流れ出ようとするのを糸切歯（いときりば）で噛みきるばかりに強ひて喰ひとめた。（或る女・前 173）

〈その他〉

○貧乏な百姓には牛や馬が馬塞棒（ませぼう）で遮られたやうな形でなければならぬ。（土・上 97）

○女は楢火の灰を防ぐために頭髪は手拭でつつみ，（厚物咲 19）

○「河は新装備の攻撃軍を長くくい止めることはできなくなったのだ」（世界 1954年6月 9）

これらは，気体・光線その他についてもいう。

○富士に，日も，風もさへぎられて，ひよろひよろに伸びた茎のやうで，（富岳百景 57）

○李陵は直ぐに附近の葦に迎へ火を放たしめて，辛うじて之を防いだ。（李陵 160）

一方、「せきとめる」の例をみると，やはりいろいろなものにつかわれている。

○せきとめられた濠の水は（落城 15）

○堰（せ）きとめる暇もなく涙がはらはらと流れ出た。（或る女・前 192）

などは，水についていったもの，

○水上からの木の葉やら新聞のきれのやうなものなどを堰きとめて，（田園の憂鬱 85～86）

は水に浮かんだものについていったもの，そして

○弥生町がわに堰きとめられた人数と，善光寺坂がわに堰きとめられた人数とが，両方からひしめいて溢れてどっと電車道をわたる。（むらぎも 188）

は人間についていった例である。この例は大ぜいの人間を「せきとめる」ので，「人の流れ」という表現があるように，まだ水のばあいと共通性があるが，

○事務長は思はず身を退いて両手を伸ばして走りよる葉子をせき止めようとしたが，（或る女・前 175）

のばあいには，個人をとめることを「せきとめる」といっている。個人でもはげしく走ってきたのだから，その点では流れと共通性がある。しかし，この例はあまり自然な使い方ではない。お茶の水女子大生についての調査では，「走ってきた男をせきとめようとした。」という例文に対し，○—0，△—2，×—19だった。

とにかく，これらの例があるところからみて，「せきとめる」が液体以外につかわれたばあい，単にこれを臨時の例外的，比ゆ的な用法とはいいきれない。

なお「せく」は，

○永松は石で流れを堰いた。（野火 163）

のように，液体についてつかわれた例だけだった。しかし，上に引いた「せきとめる」についての例文などで，「せく」でもいえそうなものがあるから，これも，あるいは，もっと範囲が広いと見るべきかもしれない。「せきとめる」「せく」とも，液体以外に

気体の流れについてもつかわれると思うが，そういう実例はなかった。

〔23〕 くう，たべる／のむ＜くらう，あがる，めしあがる，いただく，たいらげる

「くう」「たべる」と「のむ」とのちがいは，主としてその対象が固体であるか，液体であるかという点にある。もちろん，「のむ」は，固体であるもの，たとえば，あめだまやくすりを，丸ごとのみこむばあいにもつかわれる。「いきをのむ」というかたちでは気体についてもつかわれる。(「いきをのむ」は，主として緊張することをあらわす慣用句だが，実際に動作として「いきをのみこむ」ことをあらわす例もないわけではない。これについてはp. 623 を参照。) だから，対象の性質だけがこれらの動詞のちがいをきめるわけではない。しかし，ほとんどの用例については，対象が固体であるか，液体であるかによって使いわけられているといってもよい。

○それから皆，菓子を食つたり，茶をのんで話をした。(友情 79)

○茂木夫人も，手づかみで，魚を食べてから，罐詰のジュースを，大口に飲んだ。(自由学校 96)

これに対して「くらう」以下の動詞は，どちらのばあいにもつかうことができる。

〈固　体〉

○今日粟飯の硬(こわ)きを食(く)ふ身となつては，(思出の記・上 12)

○貴方，御飯をお上ンなさいなと云ふ。(平凡 17)

○胃潰瘍の予後のところで，ビールを飲んで南京豆を召し上つたと云ひますね。(本日休診 94)

○おかみさんのお土産のさくらんぼを戴いてゐると，(桑の実 152)

○百二十円の丼をうまさうに平げてゐるシビリヤンと云ひ，(文芸春秋　増刊 1953年8月 81)

〈液　体〉

○親爺やお酒をくらつて居るんでさ (田園の憂鬱 58)

○青木さんは先にお茶をお上りになる。(桑の実 125)

○お酒を召し上らないと，ほんたうに面白いといふことがございませんね，(雪国 57)

○「弟もお酒をいただきますでせうか。」「いや。」(雪国 6)

○岡部は二本目のウイスキーを殆ど一人で平らげ，足許も大分怪しくなつてゐたのだが，(闘牛 135)

このほか，「めす」という動詞も，両方，つまり対象が固体のばあいにも，液体のばあいにも，つかわれるはずだが，実例としては，衣服を身につける，すなわち「きる」や「はく」にあたる例しかなかった。

また「喫する」も「くう」「のむ」両方のばあいにあたる用法があると思われるが，これについては，大部分が「敗北を喫する」「一驚を喫する」など，抽象的，慣用句的な表現であり，ただ「のむ」にあたるつぎの1例があっただけである。

○於常の点てた茶を喫しながら，光国は，楽しそうな表情をしている。(サンデー毎日 1956年10月7日 70)

以上にあげたのは大部分が敬語動詞の例である。敬語のばあいには，相手のしている

ことをあまり露骨にいわないで，それと暗示するような別の動作で示すか，ひじょうに一般的な表現をとることによってぼかす，というのが，よくとられる方法である。このばあいに，「くう」と「のむ」とのどちらともはっきりしない抽象的な表現をとっていることは，その1つのあらわれだといえよう。「めす」が「のむ」「くう」「きる」「はく」「かぶる」など，さらに，「ふろをめす」など，いろんな動作についてつかわれるのは，そのもっともいちじるしい例である。

「くらう」は，現在では大体敬語と逆に相手をけいべつするような表現であり，待遇表現が主になることによってほかの特徴がうすれたものと考えれば，上にのべた敬語のばあいと同じことになる。ただし，上にひいた例については，けいべつを表わしているとはみられない。

〔24〕 すう／すする

「すう」は，気体や液体についていう。

〈気　体〉

○深く空気を吸った。（眠がらせの年齢 273）

〈液　体〉

○谷川の水口つけに吸つて，（思出の記・上 64）

「すする」は

○茶店の椅子に腰かけて，熱い番茶を啜つてゐたら，（富岳百景 71）

のように液体についていうことが多い。しかし液体に準ずる固体，あるいは液体と固体との混合物についてもつかわれる。かりにこれを「流動物」とよんでおく。

○薄い粥くらゐを啜つてごろごろしてゐた。（多情仏心・前 249）

○寒さしのぎにうどんを一杯すすつただけだつた。（雪国 155～156）

これらは，液体とたいしてちがわないしかたで，のみこめるものである。

「すする」は，また鼻で鼻水をすするばあいにもつかわれる。

○竹さんは部屋の隅で，鼻水をすすりながらバケツのそばに坐つてゐた。（本日休診 97）

「すう」が固体を対象として用いられた例が1つだけあった。

○お前達は虫を吸つて居れば沢山だよ。（高野聖 37）

これは，ひきがえるが虫をのみこむことについていった部分である。

「すう」の対象が固体であるばあいの例としては，またつぎのようなものがある。

○赤ん坊が母の乳房を吸ふことも，（波 318）

○たんとは口へはいらないやうに，巧みに盃の縁を吸つて，（多情仏心・前 91）

これらについては，たとえば「のむ」の分析（p.621～622）で述べた「酒をのむ」に対する「盃をのむ」という表現が考えあわせられる。やはり，手段が対象として表現されている，ともみられるからである。しかし，「のむ」にくらべれば，「すう」の対象として表現されているものは，手段としての性格がうすいように思われる。

たとえば，

○異人は乳をいじり，上半身をこごみ込ませるようにして，唇を吸おうとする。（小説と読物 1956年3月 284）

というばあいには，くちびるは，なにかほかのものを「すう」手段であるよりも，それ自身がすわれる対象になっている。

つぎの「すう」は固体を対象としているが，「すいつける，ひきつける」の意味であって，別にあつかうべきものである。

○彼等は，磁石に吸はれる鉄片のやうに，もしくは灯火に慕ひ寄る夏虫のやうに強者の周囲に吸ひ寄せられずにはゐられない。（人格主義 91）

〔25〕 つく，ふく／あげる，もどす＜はく

「つく」は，対象の範囲がいちばんせまく，息にかぎられる。

○深い息をついて身もだえした。（つゆのあとさき 87）

このほかの「つく」の対象は，「ため息をつく」「と息をつく」「大息をつく」というように，「息」を含んだ複合語にかぎられている。したがって「息をつく」の「つく」は，慣用句的な表現のなかでしかつかわれない，といえよう。

つぎに「ふく」は「つく」よりは広いが，気体にかぎられる。

○川西は晩酌をやつた後で，酒くさい息をふいてゐた。（あらくれ 184）

のように「息をふく」ばあいのほか，

○戻つて来ると，彼はうまさうに葉巻の煙を吹いた。（仲子・上 8）

のように「煙をふく」ばあいにつかわれる。煙も気体の一種と考えてよいだろう。なお「つく」にしても「ふく」にしても，息を出しているのは，鼻からであるか，口からであるか，明らかでない文が多い。それは，どちらのばあいも，ありうると思われる。

「ふく」には液体を対象にしていると見られる例がいくつかある。

○普通の電気アイロンの場合は霧を吹いて仕上げます。（婦人倶楽部 1956年3月 432）

のばあいには，「煙をふく」と同様に「霧」を気体の一種と考えれば例外にはならない。（ただし，煙が吹く以前に，からだの中にあったときから煙であるのに対し，霧は吹かれてはじめて霧になる，つまりこの「ふく」が生産的な意味をもっている点でちがう。）しかし，

○口から泡と一しよに血を吹いた時には，（波 144）

では，明らかに液体を吹いている。このばあいには，泡が一しょに出ている点で，気体を吹くのに付随して液体も吹いたと考えられるかもしれない。

○襲子は浮上つて来て，心持よささうに口から海水をぷうと吹いた。（波 248）

ここでは気体に付随してというような説明も通用しにくい。これについては，さらに

○くぢら，頭と黒いしつぽだけ見えます。潮を吹くと丁度本にあるやうになります。（銀河鉄道の夜 299）

のような，やや慣用句化した表現が思いあわせられる。これらの例は少数ではあるが，もちろん誤用ではないので，あるいは「ふく」の対象は気体にかぎらず，液体をも含め

た流体と規定する方が，正確かもしれない。

これに対して，「あげる」「もどす」は，食べものをはくばあいに使われる。食べものの中には液体と固体とが含まれるだろうが，気体は問題外である。そしてこのばあい，もちろん口から出すのであり，その出発点も息をはくのとちがって，胃の方からである。だから，対象のちがいに応じて，動作のしかたも，「つく」「ふく」と「あげる」「もどす」とではちがっている。なお「あげる」は実例がなかった。

○「お嘔(もどし)なさつた……それはいけない」（或る女・前 117）

「はく」は以上にあげたすべての対象をとることができる。

○広介の顔の下で熱い息をはくようにして，（くれない 89）

○一条先生は煙草のけむりを吐きながら言った。（人間の壁・上 206）

のような例は，「ふく」と同様に気体を対象にしている。

○父が変な黄色いものを嘔いた時，（こゝろ 139）

は，「あげる」「もどす」とおなじく，胃から液体・固体をはいた例である。そして，同じ液体・固体でも，「あげる」「もどす」が胃の中にはいったたべもの，または，それの変化したものにかぎられるのに対し，「はく」はそうではない。

○煤色の血を吐くまで殆んど彼女一人で耕作した。（厚物咲 27）

のばあいには，たべものではなくて，胃からの出血にせよ，または，肺からのものにせよ，自分のからだの一部分である血を吐いたのであって，「あげる」「もどす」におきかえることはできない。

＜注＞「息をつく」「息をはく」は，どちらもつかわれるので，漢字で書いてあると読みわけるのがむずかしいばあいが多い。

○昨日この畠を見つけて，やつと一息吐いたところだ（野火 91）

のような例は，慣用句として，「ついた」としか読めない。

○そのあとから牛乳配達がやはり白い息を吐いて，やってくる。（むらぎも 212）

では「はいて」だろうと思われる。しかし，

○広介はほっと溜息を吐いた。（くれない 73）

では，たぶん「ついた」だろうが，「はいた」ともよめるし，

○女はあわてて制し乍ら眉を寄せて，四辺の気配をうかゞひ，ほつと息を吐いてからまつすぐに彼の目を見て，うなづいた。（青銅の基督 23）

では「ついて」か「はいて」か見当がつかない。

1.1.0.1.3 次元・形

〔26〕 あれる／こわれる

「あれる」は，ものの表面がわるい状態になることをいう。

○妙にガサガサ荒れた手をしていた。（放浪記 261）

○暗い竹藪や荒れた畑地もあつた。（あらくれ 195）

手が「あれる」ということは，手の表面である皮膚が「あれる」ことであって，手の内部構造が「こわれる」ことではない。畑や田んぼが「あれる」というのも，それが表面的なものであって，地面の中深くには関係がないからであろう。

これに対して，「こわれる」は，より立体的なものについていう。

○五百助は，壊われた陶器を，拾い集めた。（自由学校 321）

のように，1つのまとまったものが，ばらばらにくだけてしまうようなばあいには，いちばんはっきりしているが，また

○あんなに毀れた体といふものは初めてですよ，呼吸器，心臓，胃腸，みんな毀れた機械のやうなものです。（冬の宿 127）

のように，現象的には一応かたちをたもっていても，内面的な働きがすっかりだめになってしまうばあいもある。おなじことがらについての表現でも，たとえば，

○家と庭とは荒れに荒れた。（田園の憂鬱 21）

というばあいには，家の建物はこわれておらず，ただ部分的に，戸や窓がよごれたりこわれたりしているだけにとどまると思われるのに対し，

○母親は家がこはれてしまふと叱り，（潮騒 59）

のばあいには，柱がたおれ，屋根が落ちる，というように，かたちがくずれてしまうことをさしている。もちろん，表面的なものと内部的なものとの区別は，つねにはっきりしているわけではないから，おなじような事実に対して「家があれる」とも「家がこわれる」ともいえるが，極端なばあいをとって，人が住まなくなって，ほこりがつもっている状態を考えれば，これは「あれる」としかいえないし，柱がおれるような変化は「こわれる」としかいえない。

〔27〕 あらす／こわす

これも自動詞の対立と同様である。

○一番ひどく荒されてゐるのは私の顔でカルシュウムがざらざらしたまま唇から耳へまで這入つてゐるのに気がついた。（機械 19）

○三右衛門が豚は畑を荒らしたと云つて打殺（ぶちころ）して食ふ，（思出の記・上 90）

のように，主として表面的なばあいについては「あらす」がつかわれ，

○「おい！　さつき何か壊したね」
「ええ，十銭で買つた西洋皿」（田園の憂鬱 102）

のように，立体的なものが，ばらばらにくだけてしまうのは「こわす」である。

「こわす」	「あらす」
○由緒のある家を，相続人があるのに壊したり売つたりするのは（こゝろ 159）	○このごろ，彼の家宅を荒したというのは，（自由学校 155）

「家をこわす」というのは，家の建物をばらばらにしてしまうことだが，「家をあらす」というのは，建物にはすこしも傷をつけなくてもよいので，ただ中のものをぬすん

だり，乱雑な状態にしたりすることをいう。

〔28〕 やぶる／つぶす（くずす）＜きる，たつ，ちぎる，くだく，こわす，わる（さく）

これらの動詞は，対象が平面であるか立体であるかによって，つかいわけられる。たとえば，

○絵本を破つたり玩具を壊したりすることもあつたが，（生まざりしならば 186）

のばあい，絵本は平面の紙でできているので，「やぶる」が使われ，おもちゃは，多くのばあい，立体的なものなので，「こわす」がつかわれている。つぎの例では，「やぶる」も，「こわす」と，それほどちがいがないようにもみえる。

○弁天池の水門をやぶるのは，敵がもう雪笹川の辰滝の瀬に攻めいったからである。（落城 25）

しかし，このばあいにも，やはり水門はかなりひらたいものだから，「やぶる」が平面的なものについて使われるということの例外にはならない。平面的か立体的かというのは，結局のところは程度の差だから，どのくらいのあつさがあれば「やぶる」が使えなくなるか，という絶対的な量はいえない。つぎの例では，「やぶる」が，ひじょうなあつみをもっているものについて使われている。

○静かな夜の空気を破つて，ぱちやあんと大地を打つ音が響いた。（波 219）

○火花が夕闇を破て往来の中程まで飛んだ。（武蔵野 31）

しかし，これは，固体ではなくて，あるいは物質でさえもなく，普通の用法におけるものとは区別すべきものと考えられる。

「やぶる」と逆に，「つぶす」は，立体的なものについてだけ使われる。

○学生が蟹をつぶした手の甲で，額を軽くたゝいてゐた。（蟹工船 66）

○カレエの木の実を，石の俎板で丸石で潰して粉末に磨つてゐた。（帰郷 79）

これらのばあいにも，立体と平面との差は，絶対的なものではないから，たとえば，「厚紙をつぶす」というような言い方がありうるかもしれない。そのばあいに，厚紙自身のあつさは，かなりうすくてもかまわないのであって，ただ，つぶした結果，前よりも一段とうすくなることが確認できる程度であればよい。

「くずす」も，原則として立体的なものについていう。

○子供が川ばたでたくさん石を積んで，鬼が金棒でくずしている絵があるが（出家とその弟子23）

ただ，「くずす」のばあいには，つぎのような例があり，これまで考察の対象にふくめれば，平面的なものをくずしている，ともいえる。

○若者はしかたなしに一人でテーブルにそれ〔トランプ〕を並べてはくずし，並べてはくずししていた。（暗夜行路・前 146）

岩波国語辞典は，「くずす」の基本的な意味を「一つにまとまり整った形があるものを，砕いてこわす。」とし，これにならべて「整った状態を乱す。」という解釈もあげ

て，あわせて1つの意味にくくっている。これに対し，例解国語辞典は，ほぼ同じような規定をあたえているが，これらを①と②とにわけて，別々の意味としている。これらがごく近い関係にあることはもちろんだが，「暗夜行路」の例は，むしろ「姿勢をくずす」「ひざをくずす」「敵陣をくずす」などと同列にあつかうべきもので，秩序やきちんとしたかたちをみだす，ということをあらわしている。つまり例解の②に属する例であり，「石をくずす」と同列にあつかうべきものではない，と考えられる。そして，これをのぞいて，基本的な用法においては，「くずす」は立体的なものを対象にする。

他の動詞は，みな平面的なものも立体的なものも対象にする。一部用例にかけているところがあるが，平面の対象と立体の対象とを対比させてあげておく。

〈平　面〉

○僕はこの図書館の本のページを勝手に**切り**，（私の人生観 27）

○手帳を出して，紙を一枚**ちぎつて**（帰郷 227）

○冬の朝氷を**砕いて**顔を洗つて，（思出の記・上 31）

○お皿を一枚**こわした**と言って，（出家とその弟子 135）

○その左手は硝子を**割つた**ときの怪我です。（冬の宿 134）

〈立　体〉

○おつぎも勘次の横へ筵を敷いて又大根を**切つて**居る。（土・上 36）

○後悔慚愧腸（はらわた）を**断つ**想（おもひ）が有りながら，（平凡 7）

○かう言つて麺麭を**お裂**（ちぎ）**り**になる。（桑の実 112）

○男滝（だき）の方はうらはらで，石を**砕き**，地を貫く勢，（高野聖 67）

○「五百助君が，ミシンを踏んだ日には，何台あっても，**壊してしまう**…」（自由学校 381）

○梨が**割られて**その身が白日のもとにさらしだされたとき（哲学以前 132）

ここでやや問題になるのは「さく」である。これは原則として，

○りきは小畑からの名刺を出して見せたが，しばらく見詰めたあと，こんなもの，あたしに用はないわと云ひ細かく静かに**裂いて**しまつた。（あにいもうと 155）

のように平面的なものを対象にするのであるが，そうはいいきれない例もある。

○さうして彼女は杉箸を**裂き**，一切れの寿司をつまんで運んで来た男に云つた。（青銅の基督 32）

この例ではまだ対象は平面的なものといってよいかもしれない。しかし

○屠手の頭（かしら）は鋭い出刃庖丁を振つて，先づ牛の咽喉を**割**（さ）**く**。（破戒 149）

○剣を用ひて，この肉を**裂き**，血をすゝるのと（野火 133）

のように，からだの部分を対象にしているばあいには，かなりあつみがあるものに動作がむけられていることになる。からだの部分以外に，どのような立体的な対象をとることができるかは，あきらかでない。これに対応する自動詞の「さける」のばあいには，やはり

○服は**裂け**，靴は破れ，（野火 96）

のように平面的なものについていうことが多いが，

○パイプと煙突が裂け，新治の父の頭の耳から上はめちやめちやに裂けた。(潮騒 38)

のように立体的なものについても，わりによく使われる。「さく」の対象に立体的なものがすくないということは，単に事実上の問題であるか，または「さく」ときの力の加えかたや，その結果の生じ方に，なにか立体的なものにふさわしくないような要素がはいっているためかどうかは，もっと用例を集めないと，なんともいえない。

〔29〕 たたむ<おる，まげる

「たたむ」は紙やきれなどの平たいもの，つまり面的なものについていう。

○スカートをたたみ，ズボンをたたんだ。(人間の壁・上 270)

「おる」もこれと同じようなばあいにいうことがある。

○小さく折つた緑いろの紙を，(銀河鉄道の夜 320)

「まげる」は，適当な例がなかったが，やはりたとえば「鉄板をまげる」のように，平たい面的なものについていうことがあるだろう。「おる」や「まげる」は，しかし，面的なものにかぎらず，棒状の，つまり線的なものや，またもっと立体的なものについてもいう。

○五七五と指を折つて，数へてゐることが御座います。(本日休診 59)

○物差しを弓形にまげて衿先と結びます。(婦人倶楽部 1956年9月付録 赤ちゃんのきものと育て方 88)

これらは，比較的細長いものの例である。

○その上半身を左肩からがくんと折った。(むらぎも 305)

○軽く腰をまげて後れ毛をかき上げながら (或る女・前 166)

これらはそれに比べて，ふといものの例である。したがって「おる」や「まげる」の方が「たたむ」よりも対象の範囲が広いことになる。

〔30〕 しく／おく

「しく」は上になにかをのせるために「おく」ことをいう (p. 451～452)。この目的の面での限定から，「しく」は一般に平たいものを「おく」ことにかぎられる。その平たいものというのは，ふとん・毛布・新聞紙のように，折りたたむことができるものであることが多いが，つぎのように，折りたたむことができなくても，本来平たくて，上になにかをのせるためのものであれば，やはり「しく」といえる。

○火鉢の前に敷いた座蒲団の上へ私を坐らせて，(こゝろ 44)

○十畳ばかり畳を敷いた一室があつて，(つゆのあとさき 13)

平たいものという限定の限界ははっきりしないが，つぎのように，げたを「しく」の対象にした例もある。

○行介は下駄をお尻の下に敷き，熱し切つた砂の上に腰を下して，(波 347)

しかし「しく」は，その上に何かをのせるためという目的の面だけによって規定され

ているとはいえない。

○其前に小机を置き，土器(かはらけ)の類(たぐひ)も新しいのが載(の)せてある。（破戒 295）

○窓に寄せて，布の破れた長椅子が置いてあつた，（帰郷 315）

○一寸頭を下げて銀色の盆を畳椅子(たゝみいす)の上においた。（或る女・前 108）

これらの例は本来その上になにかをのせるための道具についてである。にもかかわらず，「おく」としかいえないのだから，「しく」は平たいものを対象とするという規定が，この動作の目的の面からの限定とは別に必要である。盆は，全体としての形からいえば，むしろ平たいものに近い。しかし，そのふちがわずかでも高くなっていて，完全に平らではなく，うつわのかたちをしているために，やはり「しく」とはいえないのであろう。まったく平らな1枚の板ならば，「しく」ということができると思われる。また，盆などは，もし人間がその上に腰をおろすために草の上におかれたというような状況を考えると，「しく」もつかえそうである。つまり，その上にのるものが小さくて，いわばうつわに入れるようなばあいには，平らなものとは見なされないが，人間のからだのように，これよりはるかに大きく，それにくらべれば下においたものが全体として平らなものと見なしうるようなばあいには，「しく」といえるのではないだろうか。

つぎの例では，おなじように枕にしているのだが，えりまき・座ぶとんについては「しく」がつかわれ，空気枕については「おく」がつかわれている。

○襟巻を枕に敷き，それを鼻の下にひつかけて口をぴつたり覆ひ，（雪国 9）

○座布団を頭の下に敷いて淡い眠りに落ちていた。（くれない 115）

○窓ガラスに当てていた自身の空気枕(くうきまくら)を娘のために置いてやった。（暗夜行路・前 213）

このばあいも，ものとしての平たさ，空気枕の方が厚みがあるということが，このような表現のちがいを生んでいるのではないかとみられる。ただし，空気枕も，お盆やげたとともに，平たいものとして，「しく」の対象になりうるかどうかの境界線上にあるものであろう。

1.1.0.1.4 大きさ

〔31〕 うねる，くねる＜まがる

「うねる」「くねる」は，どちらも，ほとんどおなじ事実をあらわす。つぎのように，おなじものごとについて「うねる」「くねる」がともに使われている例がある。

「うねる」

○それらの蔬の短い節節を洗ひきよめながら，うねりうねつて，（田園の憂鬱 13）

○あのうねる樹幹の鬱蒼の下に（河明り 321）

○手足と腰をうねらせて踊り始めた。（帰郷 86）

「くねる」

○流れは林の間をくねつて出て来り，（武蔵野 29）

○くねった松の幹のあいだから，（人間の壁・上 300）

○ハダカの胸を張り，腰をクネらせて，（自由学校 142）

また「うねる」と「くねる」が同じ文の中で対になって使われている例もある。

○うねり，くねったわかりにくい小道がいくつもあって，（暗夜行路・前 154）

これらの例においては，「うねる」と「くねる」とを入れかえても意味のちがいはなさそうである。ただし，

○一晩中うねる大波に揉まれてゐたやうな心身の疲労を（伸子・上 68）

のように波が立つばあいについては「くねる」とはいわない。また

○道は林の中でうねつた丘裾の，線の自然をなぞつてゐた。（野火 16）

のように波の形に近い立体的なもののようすにも「くねる」は使いにくいように思われる。このことと，からだについては「くねる」を使う方がずっと多いこととから考えると，「うねる」と「くねる」のあいだでも，「うねる」の方が比較的大きいものについていう，という傾向があるかもしれない。いずれにしても，「うねる」「くねる」は，かなりの程度の大きさ（ふつうは人体以上）のものについてつかわれる。「うねる」「くねる」を通じて，いちばん小さいものにいった例は，つぎにあげるものである。

○テーブルの上に鋏で截つたばかりの布地が描くうねつてゐる姿を（帰郷 170）

これに対して「まがる」は，

○道が，ゆるく曲がって動物園の方へ行っている。（むらぎも 155）

のように「うねる」「くねる」とおなじような大きい現象についてもつかわれるし，

○〔手の指が〕垢だらけで伸びたり曲がったりしている。（むらぎも 307）

のように，小さいものについてもつかわれる。その点で「まがる」の方が範囲が広い。

＜注＞「うねる」「くねる」はふつう状態的な意味で使われ，人間の動作としては，からだをまげることにいう。しかし，つぎにあげる例では，そうではなくて，人間がまがった道にそって進んでいくことをいっている。このような例は，この2つしかなかった。

○〔巡査は〕畑の小径をうねりつつ行つた。（土・上 139）

○それから二人はほの暗い階段を，くねりながら降りて行った。（人間の壁・上 233）

〔32〕 つもる／かさなる（つみかさなる）

「つもる」は，大部分の例が雪についてで，雪以外は，つぎにあげる4例しかなかった。

○木の床やベンチに積つた埃を（野火 79）

○池には深く泥が積り，（世潮 1954年2月 187）

○勿論木葉は堆く積つて，（平凡 21）

○白い，小さい花は，春の雪のやうに，浅緑の細かい葉の上に一面に積つてゐた。（波 61）

このように，「つもる」は，すべてこまかいもの，小さいものについてつかわれている。どろは，それ自身では，どこからどこまでとはっきり区切れるものではなく，考え

方によっては，ひじょうに大きいものだともいえるが，土と同様に考えれば，やはりひじょうにこまかいつぶの集まりとみることができて，例外にはならない。

「かさなる」は，つぎのように，いろいろなものについてつかわれる。

○一枚置いた下にダイヤの女王は重なつてゐた。（帰郷 354）

○側に積さなつてゐた罐詰の空瓶が（蟹工船 66）

○鼠色の雲が厚く重なつた上から，髪束のやうに高い積雲が立ち，（野火 118）

しかし，「つもる」にくらべれば，みな大きいものばかりだ。同じものに対して，「つもる」も「かさなる」もつかわれた例は見あたらなかった。「平凡」の例のように「木の葉がつもる」という例はあるのだが，これは「木葉は堆くかさなって」といえるかもしれない。したがって，「かさなる」は，「つもる」と対立する語ではなく，「つもる」をふくむのかもしれないが，すくなくとも「つもる」がこまかいものについてしかいえないという限定は認めることができる。「つみかさなる」はほとんど用例がなかったが，多分これも「かさなる」に近いのではないかとおもわれる。

○地金の真鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて来たり，（機械 11）

〔33〕（うごめく＜うごく）

「うごめく」は，

○小な繭の中に蛹の蠢々うごめく様に，（思出の記・上 194）

のように，おもに虫などについていうことばであり，また人間についていうのにも，

○区切られた寝床にゴロゴロしてゐる人間が，蛆虫のやうにうごめいて見えた。（蟹工船 17）

のように虫なみに多くの人間を遠くから眺めていうことが多い。したがって主体の大きさとしては一般にかなり小さい。しかし用例のなかには，

○一間ばかり高い土手の草に，人影の蠢く気配が感じられた。（野火 115）

○ふいに，土塀横の空地から黒いものがうごめいて安吉へ寄ってきた。

「旦那……」とそれがいった，「お安くまいりましょう」（むらぎも 217）

のように，かならずしも小さくない主体（人間）についていったものがあり，このような結論はまだくだせない。

〔34〕よる／なう＜あむ，くむ

これらの動詞は，糸・つな・なわなど，細長いものを作るのにいう。そして，その対象の大きさによって使いわけがある。

まず「よる」は

○両親が内職に観世撚を撚るといふ手紙を覧た時には，（平凡 130）

のように，こよりについていった例があり，このほか，例はなかったが糸を作るばあいにもいうと思われる。また，

○少し霑れた口髭を撚りながら（土・上 106）

のように，口ひげを「撚る」という例があったが，これは「ねじる」「ひねる」などと読むのかもしれない。

「なう」はなわについていう。

○隣の雇人は夜なべの繩を綯(な)つて居た。（土・上 21）

このほか，つなについても多分「なう」がつかわれるであろう。

「あむ」も，

○輪に綴合せ，紐を編んで綴じつけ，（婦人生活 1956年1月付録　冬の流行毛糸あみもの集 56）

のように，ひもについていった例がある。このほか糸についてもいえると思われる。しかし「あむ」のばあい，ふつう，

○産褥から出たばかりの細君を助けて，靴下を編む，襟巻を編む，着物を縫ふ，（蒲団 12）

のように，いわゆるあみものについていうことが多く，また，

○裂き竹を格子の目に編んでいい加減の大きさに成るとぐるりと四方を一つに纏めて括つた花籠も二つ翳された。（土・上 56）

○藤で編んだ釜敷にまで，（帰郷 247）

のように，かごその他のものを作るばあいにもつかわれる。

「くむ」は糸やひもの例がなかったが「くみ糸」「くみひも」ということばがあるように，これらを作るのに使われるであろう。実例としては，つぎのようにいろいろなものに用いられている。

○うどをいかだ型に組んで，（婦人倶楽部 1956年4月付録　おすしとお弁当料理 27）

○荒く組んだ筏を操つて行く馬来(マレイ)の子供。（河明り 301）

○太い鉄の棒が，縦と横に，ガッシリと組まれ，（自由学校 362）

「くむ」は「あむ」よりも大きなものを作るばあいにつかわれることが多いようである。この「あむ」「くむ」は，上の例にみるように，ひも・糸など線状のものを作るのにかぎられていない。

以上をまとめて表にするとつぎのようになる。◎は実例があったもの，○は実例はなかったがありうると思われものである。

	よる	なう	あむ	くむ
いと	○		○	○
こより	◎			
ひも			◎	○
つな		○		
なわ		◎		
かご			◎	○
セーター			◎	
いかだ				◎

〔35〕 いる／やく＜いためる

「いる」は，粉や豆粒のような小さいものについていうのがふつうである。

○大豆と玄米を炒つて粉にした物へ（春琴抄 178）

今回の資料では，このほかの「いる」対象としては，ゴマの例と，ムギの例とがあった。

「やく」は，これに対して，ふつうもっと大きな対象についていう。

○河べりで河魚などこの様にして焼けばよい。（婦人画報 1956年9月 131）

「粉をやく」というような表現はほとんどないだろう。「豆をやく」はあるかもしれないが，一般に「いる」に比べれば大きな対象についてつかわれる。

「いためる」はこの両者をふくんだ範囲をおおっている。すなわち

○炒めておいた小麦粉に③のスープだけを少しずつ加えてのばし，（婦人倶楽部 1956年12月付録 温かい冬の家庭料理 124）

の例では「いる」と同様小さいものについて，

○ナベに油を煮立て水けを絞ったごぼうをいため，次にどじょうを入れてさらにいためたら，（主婦と生活 1956年5月付録　家庭料理全集 76）

の例では「やく」と同じく大きなものについて使われている。なお，ここではみなたべものについて問題にしたが，たべもの以外の例まで範囲を広げれば，「やく」はずっと大きな道具・建物まではいってくるので，「いためる」の対象とする範囲には，おさまらない。

〔36〕 （まくる／めくる）

これについては，対象が比較的大きいばあいには「まくる」を，小さいばあいには「めくる」を使うのではないかと考えたが，用例に出てきたところでは，そういうふうに，はっきりわかれているとはいいにくい。すなわち，つぎにあげるように，同じ対象について，「まくる」も「めくる」も両方つかわれている。

「まくる」	「めくる」
○頁を一枚々々にまくつて行く方が，（こゝろ 109）	○目録から本文をぺらぺらとめくつて見る。（真知子・前 108）
○ムシロが巻くられて，鋭い声と，鋭い眼が，五百助を射た。（自由学校 197）	○カーテンをめくって，陽の光りを見上げた。（放浪記 267）
○白いシヤツの上に浴衣を肩まで捲くつて，（土・上 192）	○私は屍体の襦袢をめくり，（野火 133）

ただし，「ページをめくる」という例は多いが，「ページをまくる」は上の1例だけであり，逆に，「着物をまくる」「すそをまくる」「そで口をまくる」などの例は多いが，これを「めくる」で表現したのは上にあげたもののほか1，2例にすぎない。その点からみると，はっきりした対立ではなくても，やはり「まくる」のは比較的大きなも

ので，「めくる」のは小さなもの，という傾向を認めてよいかもしれない。このちがいは，あるいは，「まくる」に，中にかくれているものを出すために，という意図の面での傾向がみられる結果かもしれない。いずれにせよ，はっきりした結論を出すためにはまだ用例が不十分である。

上にあげたようなもの以外，「まくる」については，たいして対象の幅の広がりはなかったが，「めくる」についてはつぎのような例があった。

○手を伸して残つた札をめくつて見ると，（帰郷 354）

○飛石に置いてある四角い瓦のやうなものを何心なくめくつた。（仲子・上 190）

なお，「きものをまくる（めくる）」のほかに，つぎのようないい方もある。

○女は二の腕をまくつて見せた。（本日休診 102）

○榎本なんか，十九になったばかりですが，腕めくったらゴリラの手みたい。（明星 1956年5月 279）

1.1.0.1.5 おもさ

〔37〕 そよぐ＜ゆらぐ，ゆらめく，ゆれる

結論的にいえば「そよぐ」はわずかな風でも動くような軽いものについてつかわれ，その他の動詞は主体の重さの面で特に限定はない。これらの動詞のうち，「ゆれる」以外については，どれも20例たらずしかなかった。それで，これらの動作の主体として表現されているものも当然「ゆれる」のばあいがいちばん範囲が広く，いろいろなものが含まれている。これが，動詞の質的なちがいであるか，あるいは用例の多い少ないからくる単なるみかけ上のちがいであるかは，あきらかではない。しかし「ゆらぐ」「ゆらめく」については，種類こそ少ないが，一応「ゆれる」のあらわしている主体の範囲にあたるくらいの広さをもっているように思われる。このことを，ややくわしくみるために，つぎにあげる5つの分野について，それぞれ例をあげていくことにする。

A）重いもの
B）軽いもの
C）植物
D）実体のないもの
E）風

A）重いもの

ここでは，人間のからだを基準にしたばあいに，それよりもはるかに重いような建物などについて例をあげる。

○船のゆらぐ毎に木と木との擦れあふ不快な音は，（或る女・前 122）

○ぐらぐらと家が揺(ゆらめ)いた。（高野聖 64）

○二階で少しはげしく歩くと家が揺れた。（暗夜行路・前 244）

「そよぐ」以外には，みなそれぞれ実例がある。「そよぐ」はたとえば，「家がそよぐ」

「船がそよぐ」とはつかえないだろう。「ゆらぐ」「ゆらめく」「ゆれる」のうち「ゆれる」については，このほか，たとえば「電車がゆれる」「船がゆれる」「煙突がゆれる」など，いくつかの例があり，「ゆらぐ」についても，

○人馬の発する阿鼻叫喚の凄まじさは地も揺ぐかと思われた。（丸 1956年12月増刊 65）

のような，慣用的表現もあって，重いものについてつかわれるのは不自然ではない。しかし「家がゆらめく」という「高野聖」の例はこれ1つであって，あるいは「ゆれる」「ゆらぐ」ほどぴったりしないかもしれない。

B）軽いもの

これについても，「そよぐ」以外はみな実例がある。

○白張の提燈が二張ハタハタと風に揺いでゐる。（平凡 21）

○頸から胸にゆらめく玉環と相和して，（日本及日本人 1953年10月 82）

○床の下では，犬が蚤にせめ立てられて，それを追ふために身を揺すぶると，その度にゆれる鎖の音が，がちやがちやと彼に聞えて来た。（田園の憂鬱 55）

「ゆらぐ」「ゆらめく」は，それぞれ上にあげたもののほか，このグループにはいる適当な例が見当たらなかったのに対し，「ゆれる」は，このほか，たとえば，カーテン・ランプ・鳥の羽・ブイなど，いろいろなものに使われている。しかし「ゆれる」がいちばん普通の表現であることはたしかだとしても，それらが「ゆらぐ」「ゆらめく」でおきかえられない，ということはなさそうだ。

C）植物

このグループになると「そよぐ」もつかわれる。

○高いポプラがゆっさゆっさ風にそよいでいる。（放浪記 183～184）

○その大きなたうもろこしの木がほとんどいちめんに植ゑられてさやさや風にゆらぎ，（銀河鉄道の夜 302）

○箒のやうに立つて夜風にゆらめいてゐる欅をめあてに（冬の宿 35）

○萱の穂が一面に咲き揃つて，眩しい銀色に揺れてゐた。（雪国 113）

ここにあげた例に関するかぎり，これらの4つの動詞をおたがいにおきかえても，ほとんどちがいはないであろう。

D）実体のないもの

たとえば，「影」という名詞にともなってこれらが用いられた例として，つぎのようなものがある。

○顔を動かすと，畳と壁とに拡がつて写つてゐる影法師も軽く揺(ゆう)いだ。（桑の実 51）

○怪獣のやうな暗い木の影が，そこに揺(ゆら)めいてゐた。（あらくれ 7）

○黙つて焔をふく焚火を眺めてゐる者達の大きく重なり合つた影法師が板敷を這ひ，板戸の上で揺れながら延びたり縮んだりする。（伸子・上 169）

このほか，たとえば，

○谷間の青葉を透かして落ちてくる日光が女の手許の水に揺らぎ，（厚物咲 21）

○その辟燭台の火はゆらめいてゐる。（阿部一族 51）

○丘の煙は細く高く，誇らかに騰つて，空と風と戯れるやうに，揺れて靡いて流れてゐた。（野火 21）

のように，光・ほのお・けむりなどについても，これらの動詞がつかわれている。前にあげた建物や道具などとちがって，これら実体のないものについては，特に「ゆれる」が多くつかわれるという傾向はみられないようである。「ゆらぐ」「ゆらめく」もおなじ程度に使われており，また質的な面でも，それらの動詞のあいだにちがいを見出すことはむずかしい。これらの現象について「そよぐ」が用いられた実例は，1つもなかったが，あるいは「ほのおがそよぐ」「煙がそよぐ」などはありうるかもしれない。

E）風

これは上にあげてきたものとはちがって，「そよぐ」に固有の用法である。すなわち「そよぐ」は上に「放浪記」から引いたような「～が風にそよぐ」という用法のほか，つぎのように「風が～にそよぐ」という用法ももっている。

○涼しい風が，日に焦け疲れた二人の顔に心持よく戦いだ。（あらくれ 180）

これは，「ゆれる」などの意味とは別であろう。すなわち，結果的にゆれていなくても，なにかがゆれるように風がふけば，それでもう「そよぐ」といえるのである。いまあげた例にしても，風は弱いものだから，そのためにふたりの顔がゆれることはありえない。「そよぐ」以外の動詞では，ふつうこのようないい方はみられないが，ただ「ゆらぐ」には

○尾花にゆらぐ風もなく，（野菊の墓 30）

というのが1つあり，これが例外になっている。

以上をまとめると，風がふく意味をのぞいて，「そよぐ」は，植物のばあいだけに用いられている。しかし，たまたま実例はなかったが，煙やほのお，あるいは髪の毛や鳥の羽などについては，「ゆれる」などとともに，「そよぐ」も用いられるものと思われる。それ以外のばあいには，ちょっと「そよぐ」とはいいにくいであろう。すなわち，「そよぐ」はもっぱら軽いもの，静かな風にでもゆれるものについて用いられるといえるであろう。なお，「そよぐ」には，主体の面における限定だけではなく，風にふかれたためという原因の面，また，それほどひどいゆれ方ではないという勢いの面における限定もある。これについては，それぞれの項（p. 475～476, p. 236）を参照。

「ゆらぐ」「ゆらめく」「ゆれる」のちがいについては，上にあげた用例でははっきりしないが，光・影・煙・ほのおなどについては，これらがおなじ程度に用いられ，建物や道具については，「ゆれる」が比較的多いことからすると，「ゆれる」が平衡感覚からとらえるのに対し，「ゆらぐ」「ゆらめく」は視覚的な面からとらえる点に重きをおいている，といえるかもしれない。このほか「ゆれる」が日常語なのに対し，「ゆらぐ」「ゆらめく」は文章語だという，文体の面でのちがいも，もちろんある。

1.1.0.1.6 弾　力

〔38〕 しなう，たわむ＜まがる，そる

「しなう」「たわむ」は，弾力のあるものがまがるばあいにいう。

○柳条(やなぎのえだ)が，たをやかに嫋(しな)つてゐた。（あらくれ 70）

○路傍の柿の樹は枝も撓(たわ)むばかりに黄な珠を見せ，（破戒 97）

弾力があるという以外にも，しなったり，たわんだりするものには，もっと限定があるかもしれない。枝や棒のような形をしたものについていうことが多いようだが，そのほかにつぎのような例がある。

○身丈も恰幅のよい長身だが滑りなく撓(しな)つた。（河明り 246）

○ギーイと何かたわむ音や，波に横ッ腹がドブーンと打ち当る音がした。（蟹工船 20）

「しなう」については，からだの部分として，このほか「てのひらがしなう」「指がしなう」などの例がある。どちらも全体で数例なので，はっきりその主体を限定することはむずかしい。

「まがる」「そる」は，弾力があるものについても，またそうでないものについてもいえる。

○葉の陰に下る瓜が，萎んだ花のとれぬうちに尻が曲つて（土・上 130）

○その杉は岩にうしろ手を突いて胸まで反らないと目の届かぬ高さ，（雪国 29）

上の「まがる」の例は，まがりっぱなしになるばあいで，「そる」はもとにもどるばあいである。「そる」については，あるいは，弾力があるものの例といえるかもしれない。これも例が少なくて，あきらかに弾力のあるものと，そうでないものとの，典型的な例をあげることができなかったが，とにかくその両方についていえることは，たしかだと思われる。

「まがる」「そる」について，変化の例だけではなく，つぎにあげるように，「まがった」「そった」の形で，はじめからそのような形をしているものをあらわすばあいがあることは，弾力があるものだけについていうのではないこと，つまり，外から加えられた力がなくなっても，もとにもどるとは限らないことをあらわしていることと，関係があるであろう。

○緩い勾配のついた曲つた路で導かれた，（真知子・前 116）

○彼女の栗色のおかつぱと，短かい，反つた鼻を眺め，（真知子・前 135）

「しなう」や「たわむ」には，これにあたる用例はない。

〔39〕 くだく（わる）／きる，たつ，さく，ちぎる，やぶる

これらの動詞は，みな，対象に力をくわえて，2つ以上の部分にわけることをあらわす。そして，「くだく」「わる」は対象に弾力がとぼしいことを前提としている。

○冬の朝氷を砕いて顔を洗つて，（思出の記・上 31）

○その左手は硝子を割つたときの怪我です。（冬の宿 134）

多くのばあい，＜弾力がとぼしい＞ということは，＜かたい＞ことと一致する。しかし，ゆでたまごなどは，かならずしも＜かたい＞とはいえず，「くだく」「わる」が

かわれる条件は，変形したものが，もとにもどりにくいこと，つまり弾力のあるなしにかかっている。

○私はうで玉子を卓子の角で割りながら，お由さんと食べる。（放浪記 260）

他の動詞は，弾力のあるものに対しても弾力のないものに対してもつかわれる。いま，「きる」と「やぶる」の例についてあげてみよう。

〈弾力あり〉	〈弾力なし〉
○大きく切つた檀紙に沢野忠庵と認めた名札を渡し乍ら（青銅の基督 38）	○ダイヤモンドの結晶の形に切つた黒い硝子の化粧瓶で（帰郷 58）
○絵や習字などが破られたりすることもある。（人間の壁・上 285）	○その槌に破られたる小さき穴から，（恩讐の彼方に 91）

「恩讐の彼方に」の例は，岩をやぶったものである。もっとも，紙を弾力のあるものとみとめてよいかどうかには，問題があるかもしれない。「紙をくだく」とか，「紙をわる」といえないことはあきらかだが，かなり厚手の紙になると，弾力があるとはいいきれないかもしれない。それで，もっとはっきり弾力のあるものについてつかわれた例を「きる」からあげておく。

○鋏で截つたばかりの布地が（帰郷 170）

○切つた肉を竹の皮の上に薄く伸ばして，（波 7）

○油揚を三角に切って，（むらぎも 31）

用例にはなかったが，比較のために，弾力のあるものと，ないものの例をあげると，たとえば，こんにゃくは弾力があって，わったりくだいたりできないが，豆腐はくだくことができる。同様に，やわらかいときのモチや1かたまりになったゴムは，わったりくだいたりできず，かたくなったモチやゴム，あるいはゴム風船なら，わったりくだいたりもできる。木の板や鋼鉄の板は，大きな力をくわえればくだけるが，ガラスの板や鋳鉄にくらべれば，くだきにくいだろう。

なお「わる」と「くだく」とのあいだにも差があり，「くだく」は「わる」よりもいっそう弾力がないことを必要とする。たとえば，ようかんやパン程度のやわらかさと弾力をもっているものを，手で2つに「わる」ことはできる。しかしこれを「くだく」ことはむずかしい。このことは「くだく」が同時に3つ以上の破片にわかれなければならないということ（p. 383）と関係がある。同時にいくつものこまかい破片にわかれるためには，弾力あるいは粘着力があってはこまるからだ。

1.1.0.1.7　その他

〔40〕 ぬぐ／はぐ／むしる／むく／はがす／そぐ，けずる

これらは，みな，ある本体となるものから，おおいや，うすい部分などをとりさることをあらわす動詞である。そして，ここに並べたような順に，より外側のものから，より内側のものへと対象がかわっていく。対象と動詞との関係を表にすると，つぎのようになる。◎は実例があるもの，○は実例はないが，あるだろうと思われるものである。

	ぬぐ	はぐ	むしる	むく	はがす	そぐ	けずる
ふとん		◎					
きもの	◎	○					
ぼうし	◎						
くつ	◎						
毛			◎				
羽			◎				
つつみ（紙）		○	○	◎	◎		
から	○	◎	○	○	○		
皮	(◎)	◎	◎	◎	○	○	○
肉			◎		◎	◎	
身					◎	○	◎
骨						◎	○

まず「ぬぐ」は，いちばん外側の非本質的な部分をとり去ることにいう。用例の大部分は，きもの・帽子・くつなど，服装関係についてのものである。

○おそではセルのコートを脱いで地味な大島の羽織をも脱いだ。(生まざりしならば 178)

ただし，せみやへびが皮を「ぬぐ」ようなばあいも使われる。そういう例はなかったが，比ゆ的なものとして，つぎの例があった。

○「お互の化の皮を脱ぎますかね。」と高はいつた。（冬の宿 48)

また，短歌の例だが，「ぬぎすてる」にはつぎの例がある。

○おもむろに殻脱ぎ捨つる蟬を囲み見つめ居る子らの厳しき眼　（婦人之友 1956年9月 157)

ただし，このばあいにも，あとで出てくる「むく」などの動詞とちがって，生皮をとり去るわけではなく，いらなくなった古い皮を，ぬぎすてることをいうのである。なお，以下の動詞が，主として，自分から離れているものを対象とする動作につかわれるのに対し，「ぬぐ」は，自分自身のからだにつけている，きものなどをとり去るばあいにつかわれる。他人のばあいだったら「ぬがせる」というのがふつうである。（p. 129, p. 200 参照。)

「はぐ」は，ふとんをとり去るのにつかわれるばあいがある。

○母が最後(しまり)には夜着を剝ぐ。(平凡 33)

きものなどについていった例はないが，たとえば，どろぼうが「身ぐるみはぐ」というばあいには，きものも，くつも，帽子も，すべて対象になるだろう。つぎの例は髪かざりについていったものである。

○死人の髪の物を剝ぐ為に，（恩讐の彼方に 68～69)

「はぎとる」ならば，きものやくつの例がちった。

○下人は，すばやく，老婆の着物をはぎとった。(羅生門 16)

○靴もはぎ取られたとみえ，（野火 104）

動物や植物のからや皮をとり去るばあいに「はぐ」を使う例はしばしばある。「出家とその弟子」の例は，比ゆ的だが，文字どおりの意味でもいえるだろう。

○蟹蝦等の殻を剝ぐことが上手になり（春琴抄 174）

○善人らしい面をしているやつの面の皮をはいでやりたいのだ。（出家とその弟子 24）

○野生のバナナは皮を剝ぐと，見る見る象牙色の肌から涙のやうな露を垂した。（河明り 315）

また，つぎのように家の屋根についてつかった例もある。

○昔から何程暴風が吹いても，此椎森のために，僕の家許りは屋根を剝がれたことは只の一度もないとの話だ。（野菊の墓 6）

「ぬぐ」のように外面的なものについて使うと同時に，もう少し本来的なものについても使われるので，それだけ対象の範囲が広いといえるだろう。

「はぎとる」ならば，肉についていった例もある。

○その痛さを我慢して，癒着箇所を剝ぎとつて行くと，途端に，ぽろりと胎盤がとれる。（本日休診 98）

「むしる」もいろいろな対象についてつかわれる。

○しっぽや胴の羽を一本一本むしっていた。（出家とその弟子 38）

○羊は，毛をむしって，織って，それをおれが着るためにむくむく動いている。（むらぎも 153）

○ささくれからは血がにじみ出て来た。それでも痛さを感じないようになおむやみとむしった。（暗夜行路・前 118）

などでは比較的外側にあるものについてつかわれており，

○鯛のあら煮の身をむしること（春琴抄 174）

○先生に挨拶してパンをむしる児童たち（週刊サンケイ 1956年5月13日 40）

ではもっと内部的なものについていっている。しかし，いずれにせよ，これらはそのものに本来そなわっていた一部分をとり去っている例である。

○地面に手を伸ばして，草をむしるか，（帰郷 71）

というのも，やはり，地面に本来付随していた部分をとり去るのだといえる。

もっとも，「むしる」単独の例はなかったが，複合語の一部としては，きものなど外部的なものについても「むしる」ばあいがあった。「高野聖」の例は，からだについたひるを「むしる」のである。

○お互いに衣装を，ムシリ取り合って，裸体に近くなる。（自由学校 140）

○体中珠数生になつたのを手当次第に掻い除け捻り棄て，（高野聖 26）

「むしる」は，結果としてとり去るということよりも，むしろ指などでつまんでひっぱるようにしてとり去るのだという，動作のしかたの面に重点があり，そのようなしかたでとるならば，対象はことさら限定する必要はないのである。

○歩きながら渠はかう絶叫して頭髪をむしつた。（蒲団 5）

のように単にかきむしっているだけで，とり去るのではないばあいにも，「むしる」が使われることは，重点がようすにあって，結果にないことを示している。このばあいにも，あたかも引き抜くかのような勢いでその動作をしてはいるわけだが，目的も，その動作の結果も，髪の毛をとり去ることにはないのである。

「むく」は対象の範囲がかなりせまい。

○最後の一つを剝いた銀紙と共に〔チョコレートを〕枕許に散らかしたまゝ，（真知子・前 12）

○それから，鮨を小皿に取分けて，笹の葉を剝いてやらねばならなかつた。（河明り 273）

○安吉は古綿をむいた。中から人形のようなものが出てきた。（むらぎも 16）

などでは，あるものを包んでいる紙その他で，

○使うとき薄皮をむき，小骨を毛抜きで取って適当におろして使います。（主婦と生活 1956年5月付録 家庭料理全集 177）

○婆さんが剝て呉れる甜瓜を喰ひ，（武蔵野 22）

では動物や植物の皮である。前者はそのものにとって固有ではなく，後者はそのもの本来の一部分である。しかし，どちらのばあいでも，あるものの表面に近いところに，うすくある，という点では範囲が限られている。本来的なものでない，包み紙などのばあいでも，ふとんや帽子とちがって，その表面に密着しているものであり，本来のものである皮のばあいでも，肉や骨のように内部的なものではない。

「はがす」は，密着しているものをはなすという点で，「はぐ」よりもむしろ「むく」に近い。

○握飯を包むだ布切を丁寧に剝がして，（思出の記・上 61）

○其の膏薬を剝がすにも（高野聖 73）

のようなばあいには，やはり本来的でなく，しかも本体に密着しているものをとり去るのである。「思出の記」の例では「むく」におきかえることができるが「こうやくをはがす」ばあいには「こうやくをむく」とはいえない。これは，「むく」のばあい，かなりの面積をおおっているものについていうのに対し，こうやくは，わずかの面積しかしめていないからだろうか。さらに，

○その胎盤を剝離して行くと，ところどころ石灰性の癒着と思はれるやうな箇所がある。そこを剝がさうとしてゐると，（本日休診 97）

の例では，からだの中の肉どうしをはなすのであって，対象は「むく」などに比べて内部的なものになっている。これらを通じていえることは，「はがす」の重点が，とり去ることよりも，密着したものをひきはなす点にある，ということである。

最後に，「そぐ」「けずる」は，そのものにとって固有の部分である，皮・肉・骨などを，うすくとり去ることをあらわす。

○尻の肉を殺がれた一人は，出血多量で間もなく死んだ。（潮騒 33）

○実に骨をそぐ思にて日々暮らし居候ところ（思出の記・上 211）

○身を削つても卿(おまへ)を育てやう（思出の記・上 26）
○どこかで氷を削る音と風鈴が聞える。（放浪記 174）

〔41〕 たたえる／みなぎる＜みちる，あふれる

これらの動詞はみな，水がいっぱいである状態をいうが，その際「たたえる」は，水が静かにあることをあらわす。

○堀には動かない水が空を映して堪へて居る処がある。（土・上 115）

これに対し，「みなぎる」は，あふれようとして，波立ち騒いでいるような状態をあらわす。もっとも，表面的には，まったく平らで波が立たなくてもいいのだが，そのうちには，ますますふえてきて，あふれそうだ，というような力を，感じさせるばあいにいう。これについては，あまり適当な例がなかったが，つぎの例なども動いている液体についてのものである。

○さうして漲る心臓の血潮の奥に，活動々々と打ちつゞける鼓動を聞いた。（こゝろ 63）

一方，「みちる」は，静かでも，動いていても，どちらでもよいと思われる。これについても適当な例はなかった。

○生憎酒は盃に満たなかつた。（破戒 237）

のようなばあいには，静かであろうと，ゆれ動いていようと，そのことに関係がない表現である。

「あふれる」は，以上の動詞とちがって，単にいっぱいであるにとどまらず，外に流れているのだから，その意味では，動的な表現であるが，そのさい，流れ方が静かであるばあいにも，また波立っているようなばあいにもつかわれる点では，範囲が広いといえる。

〈静〉	〈動〉
○水が槽のへりの滑らかな苔をこえて溢れるさまは，動いて流れてゐるやうではなく，（潮騒 79）	○濁り泡だつ田の水はどくどく溢れて，小鮒や鰌が矢鱈に畦路にはねて居る。（思出の記・上 7）

1.1.0.2 数　量

これには，動物その他の物体の＜数＞と，液体などの＜量＞とがある。また，主体の数量に関係はあるが，ほかの観点もはいっているものがある。それで，つぎの3つにわけた。

1. 数
2. 量
3. 数量に関係のある特徴

1.1.0.2.1 数

動詞のあらわす動作などの主体の数は，一般には，特に限定されていない。つまり，「いく」「はしる」「ながめる」「おぼえる」などの主体は，ひとりでも数人でも，また何万人でもかまわない。しかし，例外的に数が限定されているものがある。それは，「あつまる」「ちらばる」のように，いくつかの主体がなければ成立しない現象のばあいだ。この<いくつかの>という点でも，さらにこまかい限定が必要かもしれない。「むれる，むらがる」はその例である。逆に，特にある1つの主体についてしかいえない，という動詞は，なさそうである。

〔42〕 **くりこむ，くりだす，おしよせる，つめかける，(よせる)<くる，(のりこむ)**

「くりこむ」などは，みな何人かが1度にやってくるばあいにつかわれる。

○外が暗くなる時分に，白粉をこてこて塗つて**繰込んで**来た若い女連(をんなれん)と（あらくれ 50）

○佐土原勢は手負いのもののあとからあとから新手が**くり出して**来た。（落城 26）

○召集をうけたものを「即日帰郷」にしてもらうために多くの人が**おしよせる**ということだった。（真空地帯・上 175）

○病男病女(びやうなんびやうによ)が我も我もと**詰(つ)め懸(かけ)る**。（高野聖 70）

このほか「よせる」も，たとえば「敵の軍勢がよせてきた」のように自動詞につかわれるばあいには，やはり大勢の人間の動作をあらわす。しかし「よせる」が自動詞としてつかわれた例はなかった。

以上にあげたもののうち，「つめかける」はひとりの主体についてつかわれたとみられる例が2つあった。

○なかでも，編輯の衝にあたつてゐる三好は，忙しい期間には毎日のやうに，藤代家の洋館の一室に置いてある編輯事務所に**詰めかけて**ゐる関係からも，一番隔(へだて)がとれてゐた。（多情仏心・前 119）

○種牛の持主は早くから**詰掛けて**，叔父と丑松とを待受けて居た。（破戒 145）

ただし，「多情仏心」の例では，主語（三好）は「つめかける」にではなくて，「隔がとれてゐた」にかかるとも考えられるので，そうみれば例外ではない。しかし「破戒」の例は，あきらかにひとりの主体についてつかわれたものだ。

なお，お茶の水女子大生についての調査では「かれは朝から会場につめかけていた。」という例文に対し，○—4，△—6，×—11だった。

また，「おしよせる」については，比ゆ的に抽象的なことがらを主体としていうことがあり，そのばあいには多くの主体でなくてもよいようである。

○胸の騒ぐのは無論である。不快の情はひしと**押し寄せて**来た。（蒲団 53）

○ただ，車が坂の角に消えてゆき，人が散つてしまつたとき，なんともいひやうのない孤独感が**押しよせて**きた。（冬の宿 185）

これらについても，しいていうならば，ある感情がつぎからつぎへとわきおこってきたことをあらわしている，といえるかもしれないが，そうとらなければならない理由はない。

「のりこむ」について，広辞苑（第1版）は，「一組のものが或る場所にくりこむ。」とし，例解国語辞典も「一団の者がある場所へ繰り込む。」と同様な規定をしている。つまりこれらの辞典は「のりこむ」の主体が複数であり，かつそれが一団となっていることをいっている。しかしこの限定はまちがいだ。岩波国語辞典は「(一団となって，または勇をふるって勢いよく）ある場所に進みはいる。」としている。この規定の方がいいが，それでも「一団となって」という限定は不必要である。「勇をふるって勢いよく」という規定が，この意味の「のりこむ」のすべての用例にあてはまるのに対し，「一団となって」は，そのうちのほんの一部にしかあてはまらないからである。結局，辞典の規定の中では，新潮国語辞典の「(威勢よく）目的地に到着する。」，広辞苑（第2版）の「勢いよく或る場所に進み入る。」という規定がいちばんただしい。ある場所にいくことをあらわす「のりこむ」は，今度の調査で20例ほどあったが，その大部分は，つぎにあげるように，ひとりの主体についての例である。

○単騎肥後に**乗り込み**，西郷を説破して兵を弭めさせ，（思出の記・上 46）

○片野は家を釘づけにして蒲団を背負ひ甥の家へ居催促に**乗り込んで**行つたのださうである。（厚物咲 29）

○それから彼はできるだけはやく林中尉の居所をさがしだして，そこへ**のりこんで**行ってやらなければならないと考えていた。（真空地帯・上 65）

「一団となって」という規定があてはまるのは，わずか2例しかなかった。つぎにその1つをあげる。

○白糸一座に合流を申しこんで一蹴された寅五郎達は，一足早く金沢へ**乗りこんで**白糸の興行の邪魔しようと，（映画ファン 1956年8月 169）

つぎの例では，主体は複数だが「続々と」とあるから，一団となって，とはいえない。

○北鮮の警官，保安隊員の大群が，平壌から続々と京城に**のりこんで**きていた。（文芸春秋 1953年7月 67）

＜注＞「くりだす」は上にみるように自動詞としても使われるが，また

○その頃から西国勢はどの攻め口にも新手を**くり出して**来た。（落城 34）

のように他動詞としての使い方もある。実例についていうと，全部で7例あったうち，自動詞が2例，他動詞が5例だった。「くりこむ」も自動詞のばあいと他動詞のばあいと両方あるはずだが，実例は2例だけで，ともに自動詞だった。

〔43〕 たかる＜とまる，つく

これらは，虫や鳥がある位置にいるばあいにつかわれるが，「たかる」は，そのさい，多くの主体があつまっていることをあらわす。

○顔に一杯蠅が**たかつて**ゐるんだ。（蟹工船 58）

「とまる」は1ぴきでもいいし，数多くあつまっていてもいい。

〈1〉

○ただ，ところどころ丹塗りのはげた，大きな丸柱に，蟋蟀が一匹とまっている。(羅生門 6)

〈多〉

○網戸にも外側から幾種類とも知れぬ蛾が点々ととまつて，澄み渡つた月明りに浮んでゐた。(雪国 91)

「つく」については，「とまる」のようにつごうよく両方がはっきりわかる例がなかったが，たとえば

○草花の若い芽生についてゐる虫を取つたりなさつたが，(桑の実 71)

のばあいには，1ぴきとも数ひきとも考えられる。そのどちらもあらわすことのできる動詞である。もちろん，数の多少ということは，これらをわけるただ1つの特徴ではない。たとえば「たかる」については

○あの硝子燈に小さい虫があんなにたかつて飛んでるでせう？(桑の実 93)

のように，かならずしもある場所にとまっていないで，そのすぐそばにいるばあい，しかも動きまわっているばあいにもつかえる。

〔44〕 さざめく，ざわめく，ざわつく，どよめく＜さわぐ

「さざめく」などは，みな何人かの人間が音をたてるばあいにつかわれる。

○「おつぎは居るよおめえ，さういに見ねえでも」〔女房たちは〕柱の陰からいつて私語いた。(土・上 208)

○車内はひとしきり，ざわめいた。(富岳百景 61～62)

○クラス全体がざわついている日，(人間の壁・上 95)

○風呂桶の傍では四十五十に成る百姓も居て一同が愉快相にどよめいた。(土・上 201)

「さわぐ」は主体がひとりでもいいし，大勢でもいい。

〈1〉

○彼は余り悦んで騒いでひよつとすると危い手もとで鰌を庭へ落す事がある。(土・上 116)

〈多〉

○階下の廊下では，そうぞうしく小学生の修学旅行の群がさわいでいた。(放浪記 256)

〔45〕 (ふる＜おちる)

これははっきりした質的な対立ではなく，傾向としての対立だが，「ふる」の方は多くの主体について使われることが多いという点にちがいがある。まず，「おちる」の方は，つぎのように，主体が1つでも，数多くでもかまわない。

〈1〉

○緑いろの透明な海藻の一片が，髪からこぼれて，まばゆい砂の上に落ちた。(潮騒 125)

〈多〉

○路傍に黄ばんだ柳の葉はばらばらと地に落ちた。(破戒 30)

これに対し，「ふる」の方は，ほとんどの例が「雨が降る」「雪が降る」といった自然現象のばあいで，これはもちろん数多くの主体という例にあてはまるけれども，これ

をのぞいてしまうと，例があまりない。そして，1つの主体が「ふってきた」例は，全然なかった。「ビルの屋上から重い荷物がふってきた」のように，1つでもいわないことはないはずだが，おそらくそういう例は少ないであろう。実例にあったのは，

○蠅が降つて来た。空を一面に，花のやうに満たして，唸りながら，真直に私の顔に急降下して来た。（野火 139）

のように，多くの主体が「ふる」ばあいだけである。

○ただ松の枝と桜の枝とをたわめて強く揺ぶらせ，それ等の葉を捲ぎ取らせて地の上に降らせ，又桜の枝にくつついて居た毛虫を彼の麦稈帽子の上に落しただけで，（田園の憂鬱 33）

のように，木の葉については「ふらせる」という表現をとり，毛虫については「おとす」という表現をとっているものがあることも，やはり「ふる」主体と「おちる」主体との数のちがいがからんでいるのであろう。また，「ふるように」という慣用句が，ひじょうにたくさんあることをあらわすのも，やはり「ふる」の主体は多いのがふつうだからである。

○燕が降るやうに沢山ゐた。（桑の実 121）

○降る如く一面に星の現はれた空を（青銅の基督 96）

〔46〕（うごめく＜うごく）

これについては，「うごめく」は1つの主体でなく，多くの主体のばあいにいうことが多いのではないかと考えたのだが，すくなくとも今ある用例からは，そのような傾向は出てこなかった。「うごめく」「うごく」とも主体が多いばあいにも，すくないばあいにも使われている。

〈1〉

○が，彼は自分が掘り穿つた洞窟の裡に，獣の如く蠢めきながら，狂気の如くその槌を振ひつゞけて居たのである。（恩讐の彼方に 76）

○手拭被つたおつぎの姿が徐ろに動いて来るのを見た。（土・上 172）

〈多〉

○何百人だか何千人だかわからぬ，男とも女ともわからぬ人間が黒い後姿でかたまってうごめいて見えた。（むらぎも 342）

○ぞろぞろと学生たちが動いて行く。（むらぎも 345）

〔47〕たばねる＜しばる，くくる

「たばねる」は，いくつかのものを合わせ，まとめてそれを「しばる」ばあいにいう。

○雑誌を束ねた紐に手まわしよく紙切れが挿んである。（むらぎも 285）

「しばる」「くくる」は，対象がただ1つのものであってもよいし，「たばねる」と同様に，いくつかのものをまとめてでもよい。

〈1〉

○髪へつける胡麻の油を元結で縛つた小

〈多〉

○さうして端を縛つた小さな藁の束を丸

さな罎へ入れて（土・上 120）
○行李は何時持ち出しても差支ないやうに，堅く括られた儘であつた。（こゝろ 123）
く開いて，（土・上 36）
○マコーレー文集の端本一冊と外一二巻の書物を前，兵児帯の古いので括つて，（思出の記・上 162）

「たばねる」を「しばる」「くくる」などと同列に並べてよいかどうかには多少問題がある。すなわち，「たばねる」は，多くのばあい，上に「むらぎも」の例で示したようにひも・なわなどでしばるのだが，ただいくつかのものをまとめただけで，しばらなくても，いうかもしれないからである。そういう実例はなかったし，かりにあったとしても，ひじょうにまれではあるだろうが，多少可能性は残っているとおもわれる。

○白い大きな壺に雛芥子の花が沢山束ねて挿してあるのが（桑の実 53）

のようなばあいは，そうとれないこともない。

〔48〕 かる＜きる

「かる」は「きる」にくらべて対象の範囲がせまいが，その1つの条件として，「きる」ものの数は特に限定されていないのに，「かる」対象はかなりの数のものであることが多い，ということがありそうだ。1本のばあいにも絶対に「かる」とはいえない，ということはなく，量的な制限は傾向にすぎないが，たとえば「かみの毛をかる」とは，1本のばあいにはいえない。

〔49〕 むれる，むらがる＜あつまる

「あつまる」という動作は，最低2，3人いればなりたつ。

○二三人の町の人が，そこに集つてゐた。（あらくれ 119）
○甥が彼女を見付けて，「瑠璃子姉さんが来たよう」と三人，集まって来た。（厭がらせの年齢 276）

これに対して，「むれる」「むらがる」などは2，3人ではいいにくい。実例では，何人ぐらいをさしているのか，はっきりわかるものがなかったが，最低4，5人いるときに使うのが，ふつうだと思われる。お茶の水女子大生についての調査では，「三，四人の人がそこにむらがっていた。」という例文に対し，○—6，△—8，×—7だった。

〔50〕 ちる，ちらばる＜わかれる

「ちる」「ちらばる」は，多くの主体がわかれわかれになることをいう。

○社員たちはそれを郊外電車の沿線の駅々に貼るために四方に散つた。（闘牛 138）
○患者が小屋から溢れ，思ひ思ひの方向に散らばつて行つた。（野火 42）

主体の数がどのくらいなければいえないかは，はっきりしないが，すくなくとも，ふたりだけのばあいには，これらの動詞は使えないだろう。これに対して，「わかれる」は，ほとんどのばあいが

○二人はその家を出るとすぐ別れた。（暗夜行路・前 41）

のように，ふたりがはなれることをあらわしている。しかし，もっと多くの人数がわかれわかれになるばあいをも，あらわさないことはない。

○みんながまたいっしょになって，その家を出たのは九時ごろだった。そして，なお，しばらく夜店の出ている側を歩いたが，ある所で別れる事にした。（暗夜行路・前 76）

○天文台前まで戻つて来た頃は大分遅かつた。でも私達はそのまま各自の部屋に別れて眠て了ふのを惜しく思つた。（芸術新潮 1956年12月 167）

〔芸術新潮の例は，島崎藤村の「エトランゼー」からの引用で，主体は3人である。〕

1.1.0.2.2 量

〔51〕 したたる，たれる＜おちる，ふる

「したたる」「たれる」はそのようすからいって当然わずかの水についていう。

○その口からすでにくろずんだ血がひとすじしたたっていた。（落城 21）

○私が陸へ上つて雫の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると，（こゝろ 9）

「したたる」は，しずくになっておちることで，「たれる」は，しずくでもいいし，細い棒のような形でつづいていてもよい。それで，「したたる」と「たれる」との間では，「したたる」の量の方が少ないといってよいかもしれない。

これに対して「おちる」は，多くても少なくてもいい。

○藁草履を穿いた勘次の爪先に涙がぽつりと落ちた。（土・上 109）

○目の下近く水が躍つて，滝になつて落つるのを見たら，（高野聖 66）

「土」の例では，1滴の水だから，「したたる」や「たれる」といってもよいばあいだ。「高野聖」のばあいには，多量の水だから，「したたる」や「たれる」とはいえない。

「ふる」については，液体がふる例はすべて雨のばあいだった。その量については，

○朝，冷たい霧雨が降っていた。（放浪記 287）

のように少ないばあいと，

○低迷していた雲が切れると，灰をかぶるような激しい雨が降ってきた。（放浪記 258）

のように多いばあいとがあるが，少ないといっても一面に降っているのだから，総量としては多いといえるかもしれない。1滴のしずくが落ちるようなばあいについても「ふる」といえるかもしれないが，そういう例はなかった。

〔52〕 つぐ，さす＜くむ，いれる

「つぐ」「さす」は対象とする液体の量が比較的少ないが，「くむ」や「いれる」では，そのような限定がない。

まず「つぐ」は

○ゆつたりお茶を注ぐ母の態度には，（伸子・上 172）

○田代は中腰で尾本や津上に酒を注いだ。（囧牛 87）

のように，のみものをうつわにそそいで，すぐのめるようにする例しかなく，当然その量はわずかだ。「さす」は

○買って来た目薬をさしてから，（暗夜行路・前 84）

○鉄瓶に水を注したり，火鉢の縁を拭いたりして，（こゝろ 258）

○鉄を削るに油をさし，仕上げをするに石鹸水を注ぎ，（文芸春秋 1953年12月 80）

のように，「つぐ」よりもすこし多いかもしれない例もあるが，これと大差ない。

これに対し「くむ」のばあいには

○私は黙ってお茶を汲んでいるわね。（くれない 16）

○手に汲んだ川の水を飲みかねて猶豫つて居るとね。（高野聖 13）

のように，「つぐ」や「さす」とおなじ程度のわずかな量についていうこともあるが，むしろ

○先生の宅の風呂の水汲む，（思出の記・上 58）

のように，かなりの量の液体を対象とするばあいの方が多い。しかし，かなりの量といっても，「くむ」のばあいには，ふろの水をくんだり，井戸水を手おけにくんだりする程度が，実例からみた限界である。「いれる」は，

○襲子は水薬を急須に入れて，一滴ぐらゐづつ，駸の口の中に垂らし込んだ。（波 215）

のように，わずかな量，「つぐ」「さす」と同程度の量を対象とするばあいもあるし，

○かちかちになつた若布を緑色の液を入れた槽につけ，（本日休診 91）

のように，かなり多い量を対象としてもつかわれる。そして，「くむ」とちがって，「いれる」には量の上限がない。たとえば，大きなタンカーに石油をいっぱい「いれる」ようなばあいには，ほかの動詞は使えないが，「いれる」なら十分あらわせる。

1.1.0.2.3　数量に関係のある特徴

以上にあげた動詞のばあいにも，数量という特徴は，純粋なかたちで出てくるのではなくて，動作のあり方などにからんで，むしろ他の質的な特徴に付随してあらわれる。このような傾向がもっとつよいのではないか，とおもわれる例をつぎにあげる。

「ありふれる」では，数がおおいこととともに，質的にみて平凡で，めずらしくないという点が重要である。「かつぐ」「よりそう」などでは，主体がひとりか，ふたり(以上)かというよりも，共同の行為であるかどうかが問題である。

〔53〕 ありふれる＜ある

「ありふれる」が多くのものについてつかわれ，「ある」の主体は1つでも多くてもよいことは，特に説明を要しない。「ありふれる」は，

○斯の寺のも矢張同じ型ではあつたが，多少創意のある画家の筆に成つたものと見えて，ありふれた図に比べると余程活々して居た。（破戒 210）

のように，全用例（8例）とも「〜た」の形であり，動詞とするのはあまり適当でない。ただし，

○今まで世にありふれた講談や伝奇を現代の口語に書替へた（つゆのあとさき 57）

のように「今まで」という時の規定をともなった例がある点では，完全に連体詞になりきったともいいきれない。

〔54〕 おぶう，おう，せおう，しょう＜かつぐ，になう

「おぶう」「おう」「せおう」「しょう」は，ひとりの主体によって行なわれる動作をあらわす。たとえば

○いつものように，二人で荷物を背負って駅へ行くと，（放浪記 29）

のようなばあいでも，ふたりが共同で「せおう」という動作をするのではなく，ひとりひとり，ばらばらに，この動作をするのであって，そのようなふたりが，たまたまそろったというにすぎない。

これに対して，「かつぐ」「になう」のばあいには，ひとりの個人がすることもあるし，ふたり以上が共同ですることもある。

〈単 独〉

○勘次は雨でも降らねば毎日必ず唐鍬を担いで出た。（土・上 99）

○ゴロゴロする大きな昔風の信玄袋を担つた男が，梯子を下りてきた。（蟹工船 12）

〈共 同〉

○何やかやそれぞれまとめて番ニョに乗せ，二人で差しあひにかつぐ。（野菊の墓 30）

○人々はその棺を担ひながら，何処だか知らない野原を横切つたり，（風立ちぬ 106）

ただし，これらの動詞についても，実例の多くは，ひとりでかついだり，になったりするばあいであり，ふたり以上が共同ですることをあらわしている例は，むしろ少ない。

〔55〕 つきそう＜よりそう，つれだつ，つらなる，ならぶ（そう）

「つきそう」は，

○春琴には佐助が附き添つて行つたこと云ふ迄もない（春琴抄 188）

のように「〜が〜につきそう」の形で用いられ，主語であらわされる人物ひとりの行動を表現する。上の例では「つきそう」は佐助ひとりの行動であって，春琴の行動ではない。

「よりそう」のばあいには，これとちがって，つぎのような2とおりの使い方がある。

〈単 独〉

○駒子は彼に寄り添い，片袖をつかんだ手を，放さなかった。（自由学校 373）

〈共 同〉

○二人は燈台から風の吹きつける石段を寄り添つて下りた。（潮騒 71）

自由学校の例では，「つきそう」のばあいと同様に，「よりそう」の主体は駒子だけ

であって，その相手である「彼」は主体ではなく，よりそわれる対象にすぎない。しかし「潮騒」の例では，ふたりがおたがいに「よりそって」いるのであって，一方が主体，一方が対象というわけではない。

「つれだつ」以下の動詞にも，「よりそう」と同様に，単独で主体となるばあいと両方が合同して主体となるばあいとがある。

〈単　独〉

○安吉は汚い背広をぬいで，着物にきかえて沢田と**連れだって**出た。(むらぎも 346)

○そこで私は男に**連立つて**出た。(河明り 325)

○鳩の巣，横笛，鬼場の三つの峰が起伏して猿啼山に**つらなり**，(落城 11)

○お加代も酔ってはいたが，もう静かな気分でお鈴と**並んで**腰かけていた。(暗夜行路・前 107)

〈共　同〉

○二人は**連れ立つて**，云はれたものを見るために並んで歩いて行つた。(真知子・前 15)

○蓼科(たてしな)，八つヶ岳(だけ)，保福寺(ほうふくじ)，又は御射山(みさやま)，和田(わだ)，大門(だいもん)などの山々が**連つて**，(破戒 121)

○そのしめつぽく，生ぬるい夕方の空気の中を私たちは**並んで**駅の方にいそいだ。(冬の宿 62)

ただし，一方が単独で主体になるばあいでも「つれだつ」と「よりそう」とではちがう。すなわち「よりそう」のばあいには，主体と対象というふうに，両方の人物が同等の立ち場にないのに対し，「つれだつ」のばあいには，「AがBにつれだつ」「AがBとつれだつ」という表現をとっていても，AとBとは同じくらいの重みで扱われている。形式的には，Bが対象であるが，意味的にはAとBがともに主体であるといってもよい。

「そう」についても，これと同じような両方の使い方がありうると思われるが，実例では，具体的な動作として，空間的に近づくことをあらわす例はなかった。しかし，結婚することをあらわす用例では，つぎのように「AがBにそう」というかたちと，「AとBとがそう」というかたちとがあった。

〈単　独〉

○そういう良人に，九年も**添つてきて**，(自由学校 351)

〈共　同〉

○真情を披瀝して，二人を**添はせてやる**ことだ。(潮騒 114)

事実としてはおなじような現象の主体として，単独のものも，共同のものも，とることができる，という動詞は，ほかにも少なくない。「かさなる」の例をあげると，

○火燵蒲団はそのままに，つまり掛蒲団がそれと**重なり**，(雪国 75)

では，掛蒲団が単独で主体になっており，

○敷蒲団がきちんと**重なつて**なかつたり，敷布がゆがんでたりでせう。(雪国 98)

では，2枚以上の敷蒲団についてのべられている。

この種のものについては，p. 688～689参照。

1.1.0.3　部分／全体

動詞のなかには，ものの一部分についての現象だけをあらわすものがある。この種のものの例をあげる。なお，特に動物（人間）のからだの一部分が問題になるものについては，1.1.1.1.3（p. 125 以下）を参照。

からだの部分のばあいと同様に，おなじ動詞が全体についても部分についてもつかわれる，という現象は，もの一般のばあいにもみられる。その第1は，

{ 自動車がゆれている。
{ 自動車のアンテナがゆれている。

{ 金庫がひかっている。
{ 金庫の取っ手がひかっている。

のように，別々の事実をあらわすばあいである。ここで，アンテナ・取っ手は，自動車・金庫の全体を代表するほど重要な部分ではない。

第2に，

{ 自動車がパンクした。
{ 自動車のタイヤがパンクした。

{ 金庫があいている。
{ 金庫のとびらがあいている。

のように，全体についていっても，部分についていっても，おなじ事実をいっていることになるばあいがある。タイヤ・とびらは，「パンクする」「あく」という現象については，自動車・金庫の全体を代表できる部分である。

ところで，後者のばあいに，全体についての表現が部分についての表現とはちがったニュアンスをもつのではないか，ともみられる例がある。部分が主体ではなくて対象である例だが，当面の問題にとっては，本質的な差はないとおもうので，「ひねる」のばあいについてのべる。

「ひねる」には，「電燈のスイッチをひねる」といういい方がある。

○手を伸ばして頭の上の電燈のスイッチをひねった。(むらぎも 208)

これは，ほかのばあいの「ひねる」とまったく同じように，ある軸を中心にして回転させることである。ところが，電燈のばあいには，「スイッチをひねる」のほかに，つぎにあげるようないい方もある。

○手近にある事務机の上の電燈を一つ捻つた。(闘牛 137)

○おくみはそこの電気を捻つた。(桑の実 86)

○枕元のスタンドをひねつてはみたが，灯はつかなかつた。(冬の宿 85)

これらのばあいには，「軸を中心にして回転させる」とはいえない。スイッチは回転しているのだが，電燈全体としては回転しているわけではないのだから。それで，広辞苑（第1版）は，これをほかの意味から区別して，「電灯を点滅する」という意味を1

つ独立にみとめている。ほかには，これを特に立てている辞典はないようだ。このやり方は，しかし適当ではない。というのは，直接には部分に対するはたらきかけを示すが，しかも全体をあらわすことばとも結びついてつかわれる，という例は，ほかにもすくなくないからだ。

〈部　分〉	〈全　体〉
○ハンドバッグの蓋をあけながら，云ひ出した。(帰郷 310)	○微笑しながら，留金を外してハンドバッグを開けた。(帰郷 288)
○私がこゞんで其靴紐を解いてゐるうち，(こゝろ 212)	○靴を解いてお上りになる。(桑の実 95)
○卓子はペタルを踏みながら行介と話をつゞけた。(波 149)	○家の中からミシンを踏む音が響いて来た。(波 149)

これらについても，たとえば，「ミシンのペダルをふむ」と区別して「ミシンをふむ」というばあいの意味を規定しようとすれば，「ミシンをうごかす」のような意味を立てなければならなくなる。しかし，そのような必要はないだろうし，現に広辞苑でもほかのばあいについては別の意味としていない。

なお，広辞苑の第2版では，この規定をあらためて，「電燈などのスイッチを操作する。」としている。この規定は第1版の規定よりもいいが，それでもまだ広すぎる。たとえば，押しボタン式のスイッチで電燈をつけるばあいにも，やはり「電燈をひねる」ということがゆるされるならば，「ひねる」のもともとの意味である，回転運動をおこさせるということから派生して，明らかに「電燈を点滅させる」あるいは「電燈などのスイッチを操作する」という独立の意味が生じたものとみとめるべきだ。しかし，そこまでは「ひねる」の使い方が発展していない。方向としては，そちらにいく可能性を，「電燈をひねる」といういい方は含んでいるのだが，この段階では，まだそこまでみとめる必要はない。

「ねじる」についてもこれとおなじような使い方がみられる。

○おくみは，やがて中からその電気のかさを引きよせて灯を捩ぢた。(桑の実 136)

○アルミニユームの手鍋の下の瓦斯を捩ぢた。(桑の実 99)

「あかりをねじる」が「けす」という意味なら「ガスをねじる」もやはり「ガスをとめる」という意味のものとしてみとめなければならないだろう。しかし，そのようにいちいちの機械・道具に応じて別々の意味をみとめる必要は，「ねじる」についてもみとめられない。

また「まわす」にもつぎのような例がある。

○私が何の気もなく椅子を動かしたり断裁機を廻したりしかけると(機械 11)

これなど，かなり「機械をうごかす」という意味に近づいているとみられるが，まだ独立させるのには疑問があるだろう。

〔56〕 たれる，たれさがる，ぶらさがる＜さがる

「たれる」「たれさがる」「ぶらさがる」は，一方の端が上の方に固定されていて，もう一方の端が下の方にあるような状態，またはそういう状態への変化をあらわす。

○びろうどに似た厚い布が重たく**垂れて**，窓の在りかを目隠ししてゐた。（帰郷 48）

○木の枝が，土民の小屋の附近でよく見るやうに，焚木の長さに切られ，**垂れ下つて**ゐた。（野火 146）

○頭の上に**ぶらさがった**鉄道地図を，じっと見上げて（放浪記 54）

したがってこれらは，変化の主体としては，下の方の部分だけだといえる。このばあい，中心的な部分が下の方にあって，上の方にあるのは，付属的な部分にすぎないというものもある。

○卓の上だけを明るく照らしつけるやうにシェードを掛けた電灯が低く**垂れて**ゐるので，（帰郷 48）

○安西の手をとって暗い電灯の**たれさがった**班内にひき入れた。（真空地帯・上 212）

○低い天井からは煤(すす)けた紅葉の造花と提灯(ちやうちん)と**がぶら下つて**ゐて，（冬の宿 111）

これらのばあい，電灯などが下の方にあり，それにむすびついたコードなどが上の方に固定されているのだが，コードは電灯と別物と考えれば，「たれて」いるのは部分ではなくて全体だということになる。しかし，このようなばあいでも，かならず付属物であるコード・ひもなどは上の端に固定されている。したがって，しばらくコードなどを電燈の付属物，その一部分とみて，ほかの「たれる」「たれさがる」などと区別しないでもよいであろう。

「さがる」には，部分としての変化もあるし，全体としての変化もある。

〈部 分〉	〈全 体〉
○一寸お待ちなさいまし。帯が後(うしろ)へ**下つて**ゐます。（桑の実 148）	○あるいは上つたり，あるいは**下つたり**，木馬の上でゆらゆら揺られつつ，（波 197）

この部分としての変化は，「たれる」「たれさがる」などでいいかえることができるが，全体としての変化は「たれる」などではおきかえられない。部分としての変化については「たれる」「さがる」がまったくおなじような文脈でもちいられることがある。

〈たれる〉	〈さがる〉
○木谷の頭は瞬間，反射的に**たれた**。（真空地帯・上 5）	○わしはもったいなくて頭が**下がった**。（出家とその弟子 205）

「たれる」「たれさがる」と「ぶらさがる」とのちがいは，よくわからない。文体的に「ぶらさがる」の方がややくだけたものに属するという点をのぞけば，多くのばあい「ぶらさがる」は，「たれる」や「たれさがる」といいかえても，それほど不自然ではない。ただし，人が「ぶらさがって」いるばあいについては，「たれる」「たれさがる」でおきかえることができない。

○此隙に私は母と談判を始めて，今晩一晩泊めて遣つてと，雪洞(ぼんぼり)を持つた手に振垂(ぶらさが)る。

（平凡 30）

○鴨居にぶらさがつて機械体操のまねをしたりしたのである。（潮騒 59）

○俊樹の前に立つて吊革にぶらさがつてゐた男たちが，（帰郷 117）

これらも，一方のはしが固定されており，他方のはしが下の方にあるという点では，「たれる」におきかえられる他の「ぶらさがる」とちがいはない。それなのに，これらは「たれる」「たれさがる」といいかえることはできない。もっとも，これらの例は，意志的に「ぶらさがった」例であって，「たれる」などが常に無意志動詞である点にちがいを求めることができるかもしれない。

〔57〕 たれる，たらす，ぶらさげる＜さげる

これらについても，対応する自動詞のばあいと同様のことがいえる。「たれる」「たらす」「ぶらさげる」は，一部分が上に固定され，他の部分が下の方にさがっている状態のばあいにつかわれる。

○崖には藤が花房をたれてゐる若葉の季節である。（厚物咲 16）

○彼は釣針の先に餌をつけて，水の中に糸を垂らした。（波 246）

○私は高い寝台の上から，足をぶらさげて，御馳走を食べた。（放浪記 190）

ただし「ぶらさげる」は，上の例のように，主要部分が上から下まであるよりも，むしろ，

○水中めがねを首にぶらさげて，片手には魚を突くやすを持っている。（人間の壁・上 306）

のように，主要部分が下にあって，これが補助的な部分，つまり，ひもなどで上につながれている，というばあいに多くつかう。その点では「たれる」「たらす」などとちがっている。補助部分まで含めれば細長い形になって「たれる」「たらす」と同じだが，主要部分だけをとれば，形はどうでもよい。「たれる」「たらす」は，原則として上から下まで主要部分だから，形としても細長いものについていう。

「さげる」は部分についても全体についてもいう。

〈部　分〉

○二人は頭を下げて，合掌しました。（こゝろ 276）

〈全　体〉

○片山君がまたとぶ番になったとき，僕はちょっとなわを下げた。（人間の壁・上 290）

部分的であるか全体的であるかは，おなじ単語でも両方あるばあいがある。たとえば，

○丁度両手をさげて不動の姿勢をとつたやうな風にして（銀河鉄道の夜 298）

という例では，手について，肩のところから指先までの全体を問題にしているのであり，付け根の部分が固定されて指先が下の方にあるため，これは「たれる」でもいえるばあいである。すなわち，さがっているのは指先の方という一部にすぎない。ところが，

○櫛を持つた右の手を，頬のあたりまでさげて，（多情仏心・前 320）

という例では，腕の方を問題にしていない。この「手」は，手首から先あたりの部分をいっているのである。したがって，このばあいは，右の手が全体としてさがったことになり，「たれる」などではいいにくい。なお，これは自動詞の「たれる」「さがる」などについてもいえることだが，部分的な移動のばあいには，全体としてのかたち，すなわち，上から下にのびているというかたちを問題にして，部分の移動の表現というより，状態の表現になっていることが多い。

〔58〕 **まわす／ひねる，ねじる，よじる**

「まわす」はある対象を全体として回転させることをあらわす。

○私はえこじに傘をクルクル**まわして**歩いた。（放浪記 154）

○紙鳶（たこ）を揚げたり独楽（こま）を廻したりして遊んだ頃の（破戒 117）

これらの例で，かさやこまは単にその柄や軸がまわっているだけではなく，すべての部分が回転しているのである。

これに対して，「ひねる」「ねじる」「よじる」などでは，一部分が回転するだけで，ほかの部分は回転しない。

○警部は髯（ひげ）を撚（ひね）りながら左右を顧みて，（思出の記・上 196）

○良人は茶碗と箸を持ったまま，上体を**ねじって**，修学旅行のバスが崖から落ちたという三面記事を読んでいる。（人間の壁・上 153）

○身を**よじって**くるしむ母を，（中央公論 1954年2月 204）

したがって，「まわった」結果，そのもののかたちは，すこしもかわらないが，「ひねったり，ねじったり」したあとのものは，そのかたちがかわる。上の例で「ひげをひねる」というのは，ひげの片方の端だけを回転させるのであり，「上体をねじる」は，下半身は動かさずに上体だけを回転させることであって，それらの動作の結果，ひげ，あるいは，からだの全体としてみれば，すがたがかわったことになる。

辞典の説明で，「ひねる」「ねじる」「よじる」は，多くのばあい，じゅん環している。そして，たとえば広辞苑ではつぎのように「ねじる」を説明している。「棒状・糸状のものの両端をつかんで，互いに逆の方向にまわす。」この「互いに逆の方向にまわす」という規定は，上にあげたような例にはあてはまらない。「身をよじる」は，あるいはそうだといえるかもしれないが，「ひげをひねる」「上体をねじる」では，他の一方の端は固定しているのである。したがって，この規定は，「両端をつかんで」という点と，「互いに逆の方向に」という点とで不完全だ。たしかに「両端をつかんで互いに逆の方向にまわす」という規定にあてはまる例もあることはある。

○彼女はいきなり，自分のかけていた眼鏡を両手で取って，きゅっと逆に**捩った**。（くれない 28）

しかし，「ひねる」「ねじる」「よじる」を通じて，うまくこの規定があてはまるのは上の1例だけで，あとはみな他の端が固定されているばあいだった。岩波国語辞典は，「ねじる」について，広辞苑のに近い規定を与えたあとで，さらに，「一端を押え他端

に力を加えて回す。」という説明も与えている。これは，どのようにするのか，ややあいまいな点があるが，「ひげをひねる」や「上体をねじる」にあてはまらないことはない。だから，広辞苑式の規定のほかに，これに近い規定をくわえておくことが必要だろう。

つぎにあげる「からだをまわす」と「からだをひねる」の例では「まわす」と「ひねる」とのちがいがはっきり出ている。

「まわす」

○あぐらのまま，前へ倒れてもう一度うつ伏しになり，そのままもう一度からだをぐるりと廻わして足一ぱいに伸びながら，（むらぎも 208）

○広介は椅子ごと身体を廻した。（くれない 24）

「ひねる」

○しかし下りきらずに階段の途中で，体をちよつとひねるやうにして，物を言つた。（潮騒 115）

○係は身体をひねつて，廻転椅子をぐるりとまはした。（盤工船 28）

つまり，「からだをまわす」というのは，上から下までのからだ全体を別の方向に向けることであり，「からだをひねる」は，その一部分，上にあげた例では上半身を，別の方向に向けることをあらわす。

しかし，全体であるか部分であるかは，相対的なものである。大きく見れば全体の中の一部分であるにすぎなくて，しかもほかの部分とは相対的に独立しているようなもののばあい，これはそれ自身が1つの全体であるともいえる。

「まわす」

○その度にうっぷしている染は，首をまわして班長の方へ向き直ろうとするらしく，（真空地帯・上 106）

○指の節で校長室の扉を二つたたいた。応答はなかったが，彼女はハンドルをまわした。（人間の壁・上 132）

「ひねる」

○黙つたまゝで軽く点頭（うなづ）かうと，少し肩と顔とをそつちにひねつて，（或る女・前 8）

○やうやく事務室の戸の前に来て，あたりを見廻して見て，ノックもせずにいきなりハンドルをひねつた。（或る女・前 149）

首とかハンドルは，それだけをとって考えれば，それで1つの全体である。したがって「まわす」の対象になる。ところが，これはまた，人間のからだ，あるいはドアという，より大きな全体的なものの一部だともいえる。したがって，また「ひねる」の対象としてもあらわされる。つぎにあげるスイッチなどは，全体に対する関係・構造という点では，ドアのハンドルと同じようなものだが，このばあいには「まわす」の例がなかった。それは偶然なかっただけなのか，あるいはスイッチや栓などの形にも関係があって，これらのばあいには「ひねる」としかいえないのかは不明である。

○行介は立上つて，電燈のスヰッチをひねつた。（波 274）

○曾田一等兵は，丁度便所を終って手を洗いにきたという恰好（かっこう）で木谷のすぐ横の栓（せん）をひねった。（真空地帯・上 86）

〔59〕 まわる／ねじれる，よじれる

自動詞のばあいにも，他動詞の「まわす」などと基本的におなじことがいえる。すなわち，「まわる」は全体としての回転であり，「ねじれる」「よじれる」は，一部分は固定したままで他の部分が回転することである。

○「地球が廻つてるんだよ。だから太陽が沈むんだよ」（野火 129）

○**ねじれたり**，まばらの毛がところどころにかたまってのこっている薄白い頭，（真空地帯・上 12）

○幹の**よじれた**二，三十本の小松が（人間の壁・上 302）

ただし，「ねじれる」「よじれる」は上のように動作というよりも状態をあらわす例しかなかった。また「ひねる」に対応する自動詞はない。

〔60〕 もりあがる＜もちあがる

「もりあがる」は，

○しかもその縁の下の土は**もり上つ**ていて，（真空地帯・上 139）

○肩と腕とには**盛上つた**筋肉が汗に輝いてゐた。（冬の宿 106）

のように，より広い平面の一部分が下から，または中から，上または外へ高く出ることをいう。多くのばあい山型になるだろうが，たとえば平野の中に高原状に土が「もりあがる」ようなばあいもあるだろう。いずれにしても，あるもの全体としての位置変化ではなく，部分的な上昇であり，その平面を含んだもの全体からみれば，形の変化である。

「もちあがる」も，これとおなじようなばあいにもつかわれる。

○このひとりでに**持ち上る**土の紫色を飽かず凝視した。（田園の憂鬱 67）

○眠れない子供たちは目をつぶったまま，毛布の中で蹴り合いを始めた。もくもくとそこが**持ち上つた**。（暗夜行路・前 214）

などでは，「もりあがる」といいなおしても，おかしくない。しかし，これと同時に，あるもの全体としての位置変化をあらわすばあいもある。

○その声を聞くと，五百助の腰が，自然に，**もち上つた**。（自由学校 136）

○寝台一つ**もち上らん**のか。（真空地帯・上 54）

これらでは，「もりあがる」にいいかえることはできない。「真空地帯」の例は，「もちあげる」に対応する自動詞で，「自由学校」のばあいには，そうではないが，いずれにせよ，これらは全体としての上昇をあらわしている。

1.1.0.4 評 価

主体に対する評価として，はっきりしているのは，敬語のばあいだ。

いらっしゃる＜いる，いく

おっしゃる＜いう

きこしめす＜きく

あそばす＜なさる＜する
めしあがる＜たべる，のむ
なくなる＜死ぬ

など。また，

くたばる＜死ぬ
ぬかす，ほざく＜いう

のように，逆に軽べつをあらわすばあいもある。「うろつく」「でっちあげる」「ほくそえむ」などにおける評価的な要素も，主体に対するものと，みられないことはないが，ここでは動作自体に対する評価とみて，別にとりだした。(p. 492 以下)

1.1.1 生　物

生物一般だけを主体とする動詞，つまり動物・植物を通じてつかえるが，それ以外の物体についてはつかえない，という動詞はごくまれである。しいてあげるとすれば，つぎのような例がそれにあたる。

〈動　物〉

○家禽類は，洋禽も和鶏もよく育つて，(思出の記・上 89)

○あいつはあんな太い態度で一日中寝台の上にのさばってごろごろしていやがるけれど (真空地帯・上 81～82)

〈植　物〉

○秋までに育った苗が，冬季に枯れて (農業世界 1956年1月 143)

○杉や梅や柿の茂るがままの枝は，それ等の薔薇の木の上へのさばつて屋根のやうになつて居た。(田園の憂鬱 29)

ただし，このばあい，「そだつ」について，つぎのような例を別義としなければならない。

○現状との関係如何をのみ意としている限り哲学は育たず真理は消える。(哲学以前 36)

○帰りつゝあるといふ感じが育つて行つた。(野火 137)

なお，このように「そだつ」の意味をわけるとき，つぎにあげるようなものは中間的である。

○しかも真の哲人は迫害のうちに育ち，真の真理は暗闇を破って輝きでた。(哲学以前 37)

○私のように久しい間近代文学の饒舌のなかに育って来た者に (私の人生観 131)

これらのばあいには，主体は人であるけれども，人間の動物や植物との共通面が問題にされているのではない。すなわち，生理的な成長をいっているのではなくて，精神的な発達についてのべているのである。したがって，その抽象性においては「哲学がそだつ」「感じがそだつ」などという前にあげた例に近い。「のさばる」については，つぎの例を考えあわせると，先にあげた「枝がのさばる」というのも，臨時の，ぎ人化したものではないかとも見られる。

○連日の雨にしめつて燃えなくなつて居る薪の煙が，風の具合で，意地わるく毎日座

敷の方へばかり這入り込んで来て天井一面に重くのさばつた。(田園の憂鬱 51)

なお「はえる」は，ふつう植物についてつかわれ，動物の個体を主体とすることはない。しかし，動物のからだの部分についてならば，いろいろなものを主体とする。

○冷りとしとつた**生える**がままの毛髪は，(田園の憂鬱 49)

○立派な髭の**生え**た人もまだ好い。(平凡 71)

○謙作は〔子やぎの〕まだ**はえ**ていない角(つの)の所へ手をやってみた。(暗夜行路・前 39)

○それは薮鶯の雛を，まだ尾の**生えぬ**時に生け捕つて来て(春琴抄 177)

○此の白い首には鱗が**生えて**，体は床を這つて尾をずるずると引いて(高野聖 29)

1.1.1.1 いきもの(人間をふくむ)

人間をふくむいろいろな動物について広く使われるが，植物やその他の自然物・道具などについてはつかわれない動詞というのは，かなりある。主として，からだをつかってのいろいろな動作をあらわすことばである。ただし，すべての動物について使われるとはかぎらないものが多い。いくつかの動詞を例にとると，つぎのようになるであろう。

			知覚(感じる・しる)	生理(うまれる・たべる・つかれる)	動作的態度(あらそう・にげる・まつ)	全身の動作(あばれる・おさえる・もがく)	足の動作(ふむ・またぐ・はしる・ころぶ)	感情的態度(あまえる・なつく)	音声(うなる・さけぶ)	指の動作(つかむ・にぎる)	手・腕の動作(なぐる・なげる)
脊椎動物	ほ乳類	ヒト	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		サル	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		イヌ				○	○	○	○	○	○
	鳥類	ハト				○	○	○	?	○	○
	は虫類	ヘビ				○					
		カメ				○	○	○	○	○	○
	魚類	フナ				○					
節足動物	こん虫類	コオロギ				○	○	○	○	○	○
	甲殻類	エビ				○					
環形動物・貧毛類		ミミズ				○					

このような表をつくるにあたつては，○をつけるべきかどうか問題になる箇所も多いから，これは大体の見当をつけるものにすぎない。ただ，いえることは，より高等な動物，つまり人間に近い動物ほどいろんな動詞がつかわれ，逆に下等な動物については生理現象とか全身的な動作などの表現がつかわれるだけだ，ということである。これは，一面からすれば，動物が高級になるほど動作の種類も複雑になり，それをあらわすために多くの動詞が必要だからだともみられる。また，ことばはそもそも人間が人間的な関心をもとにして作ったものだから，当然人間についていう表現が多くみられ，したがって人間に近い動作をする動物にはあてはまることが多く，逆に人間とはちがった動作をし，しかも人間と関係のうすい動物については，かりに動作自体は複雑であっても，固有の表現があたえられないのだとも考えられる。

このように，より下等なものについては動詞の種類が制限される，という現象は，動物という範囲にかぎってみられるだけではなく，動詞の全体系を通じて一般論としていえることである。すなわち，ここであげたような動物はすべて生理的な存在であると同時に物質的な存在でもあり，その意味では，道具や自然物についていえる動詞（おちる，うかぶ，はいる，のびる，ゆれる……）は，原則としてこれらの動物についてもいうことができる。しかし，道具や自然物について，ここにあげたような「なぐる」「つかむ」「あらそう」などの動詞をつかうことはできない。さらに，人間は，物質的存在であり生理的存在であると同時に，精神的存在でもあるのだから，「おちる」「はいる」の類の動詞も「なぐる」「あらそう」の類の動詞もつかえるうえに，精神活動や言語活動をあらわす多くの動詞をあてはめることができるのである。

〔61〕 生ずる＜うまれる，できる

人や動物の子どもの誕生は，「生ずる」ではあらわせないが，「うまれる」「できる」ではあらわせる。この例は，あげるまでもないから略す。一方，ものの発生をあらわすのには，以下のように，これらがみなつかわれる。

○一坪の土地から僅に一升の米しか**生じない**訳になるのです。（真知子・前 37）

○その一言で野島の脳のなかに何か毒素が**生れた**と云ふにちがひない，（友情 13）

○昔縮の市が立つたといふ町にはみな汽車の駅が**出来て**，（雪国 152）

このちがいは，「生ずる」の意味範囲が「うまれる」「できる」にくらべてせまい，ということではない。今あげたような例については，「生ずる」も「うまれる」「できる」もおなじ広さをもち，そのほかに，「うまれる」「できる」には，

母体から子どもや卵が（または卵から子どもが）出てくる

という別の意味がある，とみるべきだろう。つまり，

生ずる（もの）＜うまれる，できる（人・動物・もの）

という対立ではなくて，

生ずる（発生）＝うまれる[1]，できる[1]（発生）

（ナ　　シ）＝うまれる[2]，できる[2]（誕生）

という形の対立だろう。

このことは，＜発生＞の意味でならば，「生ずる」が動物についてもいえることによっても裏づけられる。

○養鶏から生ずる蠅や悪臭のことまで考えると，（婦人の友 1956年3月 120）

「うまれる」「できる」が人についてつかわれたつぎの例も，やはり＜発生＞の意味であり，「蠅が生ずる」とおなじで，「子どもがうまれる（できる）」とは別の意味に属する。

○もう，南村五百助という市民は，社会から，抹殺されたともいえる。そして，いやに体のいい，一人のルムペンが生れたともいえる。（自由学校 171～172）

○好きな人が出来て，その人と結婚するつもりだつたんだけれど，（雪国 93）

辞典によっては，「生ずる」に

大豆の芽が生ずる

子ねずみががんどん生ずる

などと，動（植）物の誕生の例文をあげているものがあるが，このような実例は見あたらなかった。お茶の水子大生についての調査では，「大豆の芽が生じた。」という例文に対し，○—4，△—3，×—14，「子ねずみがどんどん生じた。」という例文に対し，○—0，△—4，×—17　だった。

〔62〕 ほろびる＜たえる，なくなる

「ほろびる」は人間や動物についていう。

○凡そ人間が滅びるのは，地球の薄皮が破れて空から火が降るのでもなければ，大海が押被（おっかぶ）さるのでもない，（高野聖 26）

○私自身がこの楽園に生きながら，友軍が滅びたと空想したのは（野火 54）

「たえる」「なくなる」は人間についても，ものについてもいう。

〈いきもの〉	〈もの〉
○物好きな痴漢はいつの世にも絶えないもので（春琴抄 181）	○花活に花の絶えたことがない…（平凡 112）
○「えゝ，大宮に行かれると，僕はもう話相手がなくなります」（友情 88）	○ダイヤモンドは，日本軍が命令で買つて行つたから，なくなりました。（帰郷 13）

「ほろびる」は，人間以外に，人間のつくった文化などについてもいうことがある。

○喜捨，供養をすれば罪が滅びると教えてくださるので，（出家とその弟子 31）

○漸次（だんだん）そのたがひの関係も滅びて行くとせん枝は考へた。（末枯 72）

○市民が過去を哀惜し，亡びようとするものを大切にする余裕が（帰郷 246）

その意味では，人や動物にかぎられず，ものにも適用できるといえるが，「なくなる」「たえる」のように具体物についていうことはない。

なお「ほろびる」は植物（の種類など）についていうこともあるかもしれない。この

点は，実例がなくて，たしかめられなかった。

〔63〕 ほろぼす＜なくす（たやす）

自動詞のばあいと同様に，「ほろぼす」は主として人（動物）に使われる。

○そしてその死に民衆を「嗾かす」ばてれん達は又国民を亡ぼして行く者と見做された事なぞも（青銅の基督 7）

「なくす」は，人でも，ものでもよい。

〈いきもの〉

○子を失ひ若い夫をなくす人間が（帰郷 49）

〈も　の〉

○戦災で家を失くした浮浪人が（帰郷 137）

「たやす」については適当な例がなかったが，やはり人でも，ものでも，両方について使われると思われる。

「ほろぼす」はまた人間の文化その他についてもいうことがある。この点も「ほろびる」と同じである。

○彼女の最後の一すぢの希望までも滅ぼすものになるのだらう，（冬の宿 54）

〔64〕 ばける＜かわる，なる，変ずる，変化する

「ばける」は，きつね・たぬき・ねこなどの動物，または，ばけものが，かりにあるものに姿をかえることをあらわす。

○猫が死人を越えて渡ると化けるといつて杼（ひ）は猫の防禦であつた。（土・上 52）

○近頃のばてれんと来たら非人にでも，おんばうにでも平気で化けるから，（青銅の基督 38）

また人が変装して本当の姿をかくすことをあらわす。いずれにしても，「ばける」の主体は動物・ばけもの・人など，魂をもったものである。

これに対して，「かわる」「なる」「変ずる」「変化する」の主体は，人間などでもいいし，また単なるものでもよい。いちいちの例をあげるまでもないので，「変化する」のばあいだけをあげておく。

〈いきもの〉

○どんないきさつであの『芽生え』のヘロインがそんな風に変化して行ったのだろう？（むらぎも 194）

〈も　の〉

○マラッカの華僑の家が静かな隠居所や住宅に変化して以来，（帰郷 22）

ただし，「ばける」が，人・動物などについて使われるというのは，絶対的な条件ではない。つぎのように，ものについて使われた例もある。

○彼（あ）の助平野郎，疾（とう）に馬になつて，それ馬市で銭（おあし）になつて，お銭（あし）が，そうら此の鯉に化けた。（高野聖 69）

○それと見てとつた西山の頬には，悪魔の凱歌が，美しい薔薇色の血汐に化けて衝きあげて来た。（多情仏心・前 285）

○全然税関を通さないでドルをもって来て，それを日本の政界に，政治資金として与え，それが円に化けて選挙に使われてゆく。（改造 1954年4月 215）

これらの例については，臨時的な比ゆ的な用法と見られないこともない。しかし，かなり自由にこういう使い方がされるとすれば，もう「ばける」の主体も人間などに限定されず，もっと広いものになった，とみるべきかもしれない。なお，このばあいにも，何かかわるべからざるものがかわったという意外さや，評価の気もちがつきまとっており，その点では「ねこがばける」などのもっている気味わるさが，まだはたらいていると見られる。しかし一方では，このようなものについての「ばける」の表現は，動物や人のばあいが，一時的，現象的な変化にとどまるのに対して，もう可逆的ではないような本質的な変化をあらわしている。この点からすれば，これらは，「ねこがばける」「人がばける」などとは区別して，独立の派生的な意味として立てるべきかもしれない。

〔65〕 いえる＜なおる，回復する

これらは，みな，病気や傷がもとどおりになることをあらわす。

（病気の例）

○固疾いえた吉葉山は，（相撲 1956年12月 14）

○難病が癒つたあとは格別に悦しいものでせうね。（生まざりしならば 198）

○病気から恢復してきた咲子には，（冬の宿 145）

（傷の例）

○又七郎は創が癒えて光尚に拝謁した。（阿部一族 78）

○腰や手足の打身はまだ直らず，（つゆのあとさき 103）

○ヴァシリー・ボルティニコフは戦場で重傷を負い，半死人として残されたが，病院で手術を受けて恢復し，（平和 1954年3月 49）

これは，もちろん人間（動物）についていわれる。しかし，「なおる」「回復する」は，このほかの現象についてもいう。たとえば，

○久しいあひだの発電機の故障が直つたのだ。（潮騒 50）

○破壊消耗されたわが生産力がまだ回復しなかったこと，（東洋経済新報 1956年10月20日 41）

「いえる」「なおる」については，「病気が……」のように限定している辞典が少なくないが，病気にかぎらないことは，上にしめしたとおりで，「いえる」は，病気よりもむしろ傷についていう方が多い。

「なおる」「回復する」は，人間（動物）のばあいも，病気・傷以外のいろいろな現象についていう。

○嘔気も胃をよくすれば自然に癒るのだから，（真知子・前 180）

○ナマリの直らぬ役者はすべて没落した。（文芸春秋 増刊 1953年10月 109）

○関は最初の驚きからすぐ恢復すると，持ち前の冷淡な表情に返り，（真知子・前 92）

○疲労の恢復した後おのづから来るべき新しい戯れを（つゆのあとさき 87）

このほか，「足痛」「肩のこり」「脳貧血」などについていった例がある。要するに，肉体・精神の異状が正常な状態にもどることを，ひろくあらわすのだ。これにくらべて，「いえる」が病気・傷以外のどのくらいの範囲をおおえるかは不明である。「嘔気」や「疲労」についてはいえるだろうから，これもせまい意味での病気・傷には限定されないだろうが，用例が少ないので，はっきりはいえない。病気・傷以外の実例としては，つぎの2つがあった。

○彼等は淡い嫉妬を沸かさねば成らぬ。それで彼等の心には喰つてやれ，飲んでやれ，さうして遣らねば腹が癒えぬといふ観念が（土・上 178～179）

○心の傷だけならば時と共に癒えることもあらうが，（李陵 177）

これらの例も，「土」のは慣用句であり，「李陵」のは比ゆとして「傷」がつかわれているので，本当に病気・傷以外とはいいにくい。つまり，「いえる」の「なおる」「回復する」に対するちがいは，人間（動物）にかぎられるという点にあるのか，病気・傷にかぎられるという点にあるのか，問題が残るのである。すくなくとも「ナマリの直らぬ」「驚きから恢復すると」などは「いえる」でおきかえられないだろうから，「いえる」の特徴は，人間についていう，というよりも（広い意味での）病気・傷などについていう，という点に求めた方がよいのではないかとおもわれる。

「いえる」は文章語であり，やや古い。したがって，それのつかわれるのは，あまりにこまごました日常的な事件よりも，やや大きな事件である大病・重傷などの方がふつうであるかもしれない。

「なおる」「回復する」は，ともに，

A）正常な状態への変化，であり

B）もとの状態への変化，

でもある。そして，「なおる」はA）に，「回復する」はB）に重点があるのではないかとおもわれる。「ナマリがなおる」とはいえても「ナマリが回復する」といえないのは，そのためであろう。「ナマリ」は正されるべき状態であっても，本来の姿であって，そのもとの状態というものはないからだ。

〔66〕 いやす＜なおす，回復する

これについても，大体のところでは「いえる」＜「なおる」「回復する」にちかいことがいえる。すなわち，

○子供達にバトンを渡して私は身体を癒(いや)そう……。（婦人倶楽部 1956年8月 396）

○彼等は其処に二日ゐて，身体を直し，そして帰つてきたのだつた。（蟹工船 44）

○彼は都会生活で破壊された健康と頭脳を恢復するのに長くかかつた。（厚物咲 18）

などと，おなじような文脈でつかわれる一方，「なおす」「回復する」は人間以外にもつかわれる。

用例が少ないため，たしかなことはいえないが，「いえる」が大部分病気や傷についての表現だったのに対し，「いやす」は病気・傷以外の精神的な事実についていうこと

がおおいようだ。たとえば，つぎのように。

○私が飢を癒すべき対象として，人肉を思ひついたかどうかは（野火 128）

○畢竟その淋しさを医す為めである。（蒲団 8）

○然しそんなつぎはぎな考へ方が，どうしていつまでも葉子の心の底を蝕む不安を医す事が出来よう。（或る女・前 161）

○自責の心を癒やす機会を失ったのだ。（人間の壁・上 240）

そして，これらの例は，「なおす」「回復する」でおきかえることができない。「なおす」が精神現象についてもちいられた例は，わずかに「きげんをなおす」が数例あっただけで，これを慣用句として別あつかいすれば，病気以外の精神状態について，「なおす」をつかった例はない。「いやす」は，元来は病気や傷にかぎられていたものだろうし，

○傷だらけのこころを癒やすため再び以前の海女を，稼業として働きだしたのであった。（傑作倶楽部 1956年7月 308）

のような例だけなら，その比ゆ的な用法として考えることができる。しかし，上にあげたように，「さびしさをいやす」「不安をいやす」など，かなり自由にいろいろな名詞とくみあわさっているのをみると，もう「いやす」は単に病的なばあいにかぎらず，望ましくない精神状態をふつうの（あるいは望ましい）状態にする，という方まで意味の範囲をひろげたものとみられる。つまり，この点では，「いやす」の方が，かえって「なおす」よりもひろいのである。図示すると，

いやす｛望ましくない精神状態／病的な生理（心理）／その他一般に不備な状態｝なおす

ということになる。

〔67〕 ふとる，こえる<ふくれる，ふくらむ

「ふとる」「こえる」は人間や動物についていう。

○肥つたお島は長い野道を歩いて，背筋が汗ばんでゐた。（あらくれ 17）

○水がめを頭にのせた娘が肥えてみち足りた顔をしていた。（むらぎも 28）

「ふくれる」「ふくらむ」は人間・動物以外のものについていう。

○部屋の隅にふくれた座布団が積んであって，（むらぎも 21）

○橋の下に帰ってきた彼のポケットは，蛙を呑んだ蛇のように，紙幣束で，膨らんでいた。（自由学校 245～246）

「ふくれる」「ふくらむ」が人間について使われた例もすこしある。

○みるみる木谷はそれにおいつき，距離をちぢめた。すると彼の全身はまるくふくれて，弾んだ。（真空地帯・上 152）

○今日は，解放の喜びに膨らんで，体も，顔つきも，一段と，輪郭が大きく見える。（自由学校 136）

このような例がかなり自由につくれるとすれば，「ふくれる」「ふくらむ」がものに

ついて使われるという規定はせますぎることになる。牛のまねをしようとしたカエルの話などでは，「からだをふくれさせた」「からだがふくらんだ」と表現するだろう。なお，「真空地帯」の「ふくれる」は「ふとる」のように体積が大きくなることをいうのではなく，全体の姿勢が細長い状態からまるい状態にかわったことをいっている。「自由学校」の例では，「ふくらむ」は，比ゆ的に精神状態がのびのびしたことをいっているものとも見られる。

「ふとる」「こえる」も「ふくれる」「ふくらむ」も，人間や動物のからだの部分についてはともに使われる。ただし，このばあい，一時的か永続的かといった違いはある。(p. 377～378 を参照。)

「ふくれる」「ふくらむ」は，一般に，ある体積をもった物体についていう。しかしつぎにあげるような例では，直接的には平面的なものについて「ふくれる」「ふくらむ」が使われている。これらの例では，その平面がもりあがることによってかこまれてできる空間をふくんで，1つの物体相当のものと見立てて表現しているのである。

○窓掛けのレエスが，微風に軽く押されて，ふくれては，また，ゆるやかに戻つて行く。(帰郷 170)

○たいさんは茶色のマントをふくらませて，電気スタンドの美しいのをショーウインドに眺めながら，(放浪記 268)

○西洋支那料理の赤い旗が，まるで私のように，ヘラヘラ風に膨らんでいる。(放浪記 129)

「ふとる」がもの(植物の実)に使われた，つぎのような例があるが，これは臨時の比ゆ的なものとみてよいだろう。

○指ほどの長さでまるまる肥つてゐる，野生のバナナは皮を剝ぐと，見る見る象牙色の肌から涙のやうな露を垂した。(河明り 314～315)

〔68〕 やせる＜ほそる

「やせる」は人間や動物についていう。

○ボチの殺された当座は，私は食が細つて痩せた程だつた。(平凡 46)

○鶏は痩せて黒い比島の鶏であつた。(野火 52)

「ほそる」は人・動物についても，またものについてもいう。

〈いきもの〉

○見ていて安吉は身のほそる思いがした。(むらぎも 338)

〈も　の〉

○此の方は姿も窶れ容も細つて，流るる音さへ別様に，泣くか，怨むかとも思はれるが，あはれにも優しい女滝ぢや。(高野聖 67)

一般に，人間や動物についていうことばと，広くものについていうことばとが対立するばあい，植物は無生物の方に属する。ところが「やせる」については植物について使われた例がいくつか見られる。

○痩せた菜花の咲いてゐるところがあつたり，（あらくれ 133）

○痩せた蜀黍は眠つたかと思ふやうにしつとりとして居ては，簫てざわざわと鳴つた。（土・上 147）

○やせた日まわりがうなだれている垣根をまわりながら（くれない 112）

これは，たとえば「うなだれている」とか「眠つたかと思ふやうに」とかいうことばがあるところからみて比ゆ的な用法とも見られる。しかし，かなり広く使われていて，あるいは比ゆ的な感じがうすらいでいるかもしれない。そうすると，これは人や動物と並んで植物が「やせる」の主体になっている例とすることができる。もちろん，植物については，同じ現象を「ほそる」があらわしている例もある。

○日光を享けることの出来なくなつた枝は日に日に細つて行つた。（田園の憂鬱 23）

〔69〕 うごめく＜うごく

「うごめく」はふつう動物についていう。

○後の柵にうごめいてゐる羊の群。（真知子・前 63）

また，動物のからだの部分についていったつぎのような例があった。

○（畜生。）といつたが馬は出ないわ。びくびくと蠢いて見える大な鼻面を此方へ捻ぢ向けて（高野聖 50）

比ゆ的に動物以外についていった例もある。

○さつきからこまかい虫の集まりのやうに蠢めいてゐた，新嘉坡の町の灯がだんだん生き生きと煌めき出した。（河明り 340）

つぎの例は「うごめく」の中でただ1つの例外である。

○山北は染太郎に腕をとられながら，タクシイのうごめいている通へ出た。（講談倶楽部 1956年5月 206）

このばあいにも，タクシーを動物なみに扱ったとも考えられる。（乗りものは，意味的なカテゴリーとして，しばしば動物の類に属する。p.22参照）あるいは，「うごめく」が動物につかわれるのは傾向的な特徴と見るべきかもしれない。その点は十分たしかめられるほどの用例がない。なお，抽象的なことについて，つぎのような例がいくつかあるが，これは派生的な意味とみとめるべきだろう。

○先生の心の底に去年から絶えず蠢いてゐる報復の企を（つゆのあとさき 104）

「うごく」の方は人間（動物）についても，また，からだの部分についても自然物についてもいう。

○生きて動くものは，蠅だけであつた。（野火 124）

○宇平の眉毛はぴくぴく動いてゐた。（波 113）

○恭吾は雲の動いて行く方角を見た。（帰郷 281）

〔70〕 つれる，ひきいる＜はこぶ

あとで移動させられる対象を問題にする（p.165～167）が，ここでは移動させる主

体のがわをとりあげる。

「つれる」「ひきいる」の主体は，人（または動物）であることにまちがいない。「はこぶ」の主体もほとんど人（または動物）にかぎられている。それで，つぎのように無生物を主体とする表現では，やや比ゆ的な感じがつきまとうようだ。

○すると今度は幸ひな波が，胸をほとんど浮標にぶつけるばかりに，一息に彼を運んで，（潮騒 146）

○庭を渡る風に運ばれ，裏山の鐘が経って行く時を告げて響いた。（小説春秋 1956年6月 39）

ところが，つぎのような表現では，その比ゆ的な感じがうすいように思われる。

○電車がごとんごとんのろく走るのが気にならない。乗ってさえいれば運ばれる。（むらぎも 348）

○荷物と一しょに家族六人が，荷物同様にはこばれたが，八時間のトラックは辛かった。（厭がらせの年齢 295）

○花が上流に向いて落ちると，ぐるりと下流へ押し向けられてずんずんと運ばれて行く。（土・上 86）

これらの例では，主体が「電車」「自動車」「水」であるともいえる。しかし，事実における問題は別にして，言語面に限定していえば，そう断定することはできない。ふつうの受け身のように，「電車にはこばれた」という形で主体が表現されていないからである。つぎの例では乗りものが「終電車で」と，手段として表現されてしまっているため，どうしても主体と考えることができない。

○東京で呑み足りなかった酔っぱらいが，終電車ではこばれて乗るのを（私の人生観 14）

これらの，だれ（なに）がはこんだのかを問題にしない「はこばれる」は，全体として自動詞に近づいているのである。

〔71〕 たかる＜あつまる，むれる，むらがる

「たかる」は人間や動物についてだけいう。

○楽屋口にたかつて来て，吾々の出這入りを見物してゐる子守ッ娘ね，（多情仏心・前 43）

○顔に一杯蠅がたかつてゐるんだ。（蟹工船 58）

「あつまる」「むれる」「むらがる」などは，人・動物についても，もの（植物をふくむ）についてもいう。

〈いきもの〉

○踊子はもう大分集つて居た。（土・上 188）

○芝浦の築港には鷗のように白い水兵達が群れていた。（放浪記 187）

〈もの〉

○多くの賽銭はまた畳の上に集つた。（破戒 219）

○二つの水の間の三角の段丘に，椰子が群れてゐた。（野火 48）

○群がる生徒たちのあいだを縫って，安藤さんは彼女の方へやって来た。（人間の壁・上 131）

○富士の中腹に群がる雲は黄金色に染て，見るがうちに様々の形に変ずる。（武蔵野 21）

はじめの予想では，「むれる」「むらがる」も人・動物などの＜いきもの＞にしかつかわれないのではないか，とおもったのだが，その予想に反して＜もの＞にもつかわれるのは，上にあげた例の示すとおりだ。これらは，ぎ人化したものとか，孤立した例外とかに，片づけてしまうわけにはいかない，とおもう。「むれる」が人・動物以外につかわれたのは，手元にある23例中，上の1例にすぎないが，「むらがる」の方はなお数例あるので，雲以外の例をおぎなっておく。

○赤いげんげの花が群がつて咲いてゐた。（潮騒 92）

○家家の窓から灯が，きらきらと簇つて輝いて居る……。（田園の憂鬱 79）

「たかる」にも，人間・動物以外につかわれた，つぎの1例がある。

○癖のない濃い髪には薪の灰らしい灰がたかつてゐた。（或る女・前 57）

しかし，この例は，現代語の正当な用法に属するといってよいかどうか疑問であり，「たかる」が＜いきもの＞についていう単語だという一般的な結論をくつがえすほど有力な例とはみとめにくい。

〔72〕 はねる＜はずむ

「はねる」は人間や動物について使われる。

○黒鯛が夕日を煌めかせて跳ねてゐる。（潮騒 35）

「はずむ」は人や動物についても，それ以外のもの一般についても使われる。

○そして小さいしなやかな足に，踵の高い靴をはくと，自然（ひとりで）に軽く手足に弾力が出て来て，前へはずむやうであつた。（あらくれ 230）

○ぽんという乾いた音がしていくつも紙の筒がテーブル下へ落ちる。そしてちょっと弾む。（むらぎも 346）

ただし，「はねる」のつぎのような例も人や動物の動作とおなじ現象とみれば，主体の広さという点で「はねる」の方がせまいとはいえない。

○木のはねる音と，かまどのなかの風のやうな火の音がして，（潮騒 92）

○丁度油でもはねた時のやうに，（波 7）

○此の秤なんざあ検査したばかりだもの一分でも此の通り跳ねたり垂れたりして，（土・上 44）

これは，ふつう，人や動物が「はねる」のとは別の意味とされているものである。

〔73〕 よろめく，よろける（ふらつく）＜ゆれる，ゆらぐ（ぐらつく）

「よろめく」「よろける」は人・動物だけにつかわれる。

○その途端，二三歩よろめいたのは駒子の方であつた。（雪国 80）

○そこに上る時，どうしたのかきぬ子は少しよろけた。（波 44）

ただし，人や動物のからだの部分（足）についていうこともある。

○よろめく足を蹈しめ蹈しめ町の方へ行つた。（思出の記・上 177）

○婆さんは腰をのして強い西風によろける足を踏しめて（土・上 102）

これに対して「ゆれる」「ゆらぐ」は人についても，ものについてもいう。

〈いきもの〉

○ふと見るとマラリア患者がいつか立ち上り，木につかまつて，ふらふらと前後に揺れてゐた。（野火 32）

○お品は其の夕刻から俄かに痙攣が起つた。身体がびりびりと慄ぎながら手も足も引き緊められるやうに後へ反つた。（土・上 48）

〈もの〉

○ワイヤ・ロープが，誰か下で振つてゐるやうに揺れてゐて，（蟹工船 65）

○公園の樹々の梢に円々と附著してゐる雪は，風が吹いて梢がゆらぐたびに，蒼白い光の塊りとなつて（冬の宿 93）

しかし，これらは，どちらかといえば，ものについていうことばであり，人や動物についていうばあいは少ないだろう。上にあげた例にしても，やや，人をもの扱いしているような感じがともなう。

これらもまた，からだの部分についていうことがある（「ゆらぐ」は適当な例がなかった）。

○女の顔はほんの少し左右に揺れて，また薄赤らんだ。（雪国 21）

○ゆたかな髪が，強く揺れた。（帰郷 195）

「ふらつく」は人およびからだの部分についての例しかなかった。

○不意に起されたことゆゑふらついて，また倒れると，（雪国 120）

○先生の足は，ふらついてゐた。大通りに出ると，ますますふらついて来た。（本日休診 65）

辞典類も人間についての例だけをあげて，ものについて「ふらつく」をつかった例文はのせていない。お茶の水女子大生についての調査では，「風が吹くたびに木の枝がふらつく。」という例文に対し，○—0，△—5，×—16だった。

また，「ぐらつく」はからだの部分についての例しかなかった。

○横浜の町を歩いただけで，妙に，腰がグラついてきたのである。（自由学校 54）

しかし，「ぐらつく」は人・動物以外のものについても，いうことができると思われる。たとえば，例解国語辞典は「土台が不安定で風が吹くと建物が—」という例を，研究社新和英大辞典は「机がぐらついて書きにくい」という例をあげている。

「よろめく」を人間・動物以外に使ったものとしては，つぎの1例がある。

○牢獄のなかで人はかういふ幾日かを送るであらうか？ おお！ 然うだ。日蔭になつて，五月になつても，八月の半頃になつても青い葉一枚とてはなく，ただ茎ばかりが蔓草のやうに徒らによろめいて延びて居た，この家の井戸端のあの薔薇の木の生活だ。（田園の憂鬱 56）

植物や植物の部分は，一般に人・動物とものとの対立において，ものの方に属する。こ

こで「よろめく」が，ばらの木の茎について使われているのは，したがって特殊な例である。この文脈は，ばらを，ぎ人化している表現であり，そのことは，ばらの木について「生活」ということばを使っていること，牢獄の中にとじこめられている人にたとえていることなどにあらわれている。だから，「よろめく」が一般に人や動物に使われるという原則を否定するものではない。

〔74〕 なぐる，ぶつ，（たたく）＜うつ

「なぐる」「ぶつ」は，主体が人のばあいにかぎられる。

○君をあのとき殴らなければいつまで軽部に自分が殴られるかもしれなかつたから事件に終りをつけるために君を殴らせて貰つたのだ。（機械 32）

○お島はいきなり振顧(ふりかへ)ると，平手でぴしやりとその顔を打(ぶ)つた。（あらくれ 53）

「たたく」もほとんど人が主体となるが，多少，自然現象などが主体になった例がある。

○バラバラと檜をたたく霰の音がきこえはじめた。（落城 18）

○黒いつめたい風が，どっとふいてきて，わたしの頬をたたいた。（人生手帖 1956年8月 135）

「うつ」ももちろん，主体が人であるばあいが圧倒的に多いけれども，いくつかの例では，やはり自然現象や物体が主体になっている。

○久し振りで，軒を打つ雨声を聞いてると，（自由学校 230）

○きびしい朝風は若者の頬を搏つた。（潮騒 13）

○ドドドウと舷(ふなべり)を打つ重い濤音(なみおと)とともに，（仲子・上 133）

○壁際に立て掛けた竹箒が倒れて柄がかちつと草刈籠を打つた。（土・上 147）

以上の動詞のうち，「なぐる」「ぶつ」と「うつ」とのあいだには，かなりはっきりした対立がある。すなわち「なぐる」「ぶつ」は全然自然現象などを主体とすることがないからである。しかし「たたく」と「うつ」とのちがいは，量的，傾向的なものにすぎない。雑誌90種の例についていうと，自然現象などを主体としたものは「たたく」が2例，「うつ」が3例で，その違いを問題にするにはたりない。文学作品のばあいでは，これが「たたく」で3例，「うつ」で約20例ほどあり，量的にかなりの違いがみとめられる。なお，以上は，「心をうつ」など抽象的な用法はすべて除外し，物理的なはたらきかけの例だけをとりあげた。

〔75〕 ほうむる／いける＜うめる，うずめる

「ほうむる」は人間についていう。動物についてもいうと思われるが，実例はなかった。

○民さんは野菊の中へ葬られたのだ。（野菊の墓 54）

「ほうむる」の目的語は，ふつうこの例のように人間をあらわすことばだが，またつぎにあげるように，からだやその一部分をあらわすことばがくることもあり，また「棺

をほうむる」ばあいもある。

○北条時宗の遺骸が，この縁の下にはふむつてあるといふのだ。（帰郷 127）

○病気柄骨を送ることも出来なかつたので，遺髪だけ葬つた。（思出の記・上 125）

○棺は僅な人で葬られた。（土・上 56）

「いける」はものについていう。人間やからだの部分をあらわすことばをうけることはない。

○それから大根も干したり土へ活けたりして闇いから闇いまで働いた。（土・上 28）

「うめる」「うずめる」は，人間についても，ものについてもいう。

〈いきもの〉

○王子は島の娘を娶り，死んだのちは陵に埋められたのである。（潮騒 109）

〈もの〉

○悉く漢陣の旌旗を倒し之を斬つて地中に埋めた後，（李陵 164）

もちろん，人間のからだの部分についても，いうばあいがある。

○彼等の骨が埋められ彼等の血の染み込んだ其の砂の上を（李陵 188）

○すでに用意した穴にその首をうずめると，（落城 35）

「うめる」「うずめる」は，上の例に見るとおり，「埋める」とあると，どちらにでもよめる。文体的には「うずめる」の方がすこし文章語的で，「うめる」の方が日常語的だろうと思われるが，その程度のちがいしかないので，これを読みわけることはほとんど不可能である。そして，かながきの例は，ごくすこししかない。したがって「うめる」と「うずめる」とをはっきりわけて両方の例をあげることはできなかった。なお，以上のような対象のちがいは「ほうむる」「うめる」などの動作の目的のちがいと関係し，むしろその目的のちがいのためにひきおこされるものである。（p. 456～457）

1.1.1.1.1 人　間

人間に固有な動詞というのはかなり多いようである。しかし，本当に厳密な意味で人間にしか使われない，動物には，サルやイヌのような高等な動物までふくめて使われることのない動詞というのは，それほど多くないかもしれない。たとえば，感情を表わす「あわてる」「したう」「よろこぶ」「びっくりする」「こいしがる」などは，人間固有の現象とも考えられるが，これらはみな「平凡」の中で犬を主体としてつかった例がある。

○夢心地にも狼狽て又吸付いて，一しきり吸立てるが，直に又他愛なく昏々となつて，乳首が遂に口を脱ける。（平凡 27）

○悲しい悲しい血を吐きさうな啼声を立てゝ後を慕ひ，姿が見えなくなつても啼止まない。（平凡 34）

○況して家へ来た人だと，誰彼の見界はない，皆に喜んで飛付く。初ての人は驚いて，子供なんぞは泣出すのもある。すると，ポチは吃驚して其面を視てゐる。人でさへ是だから同類は尚ほ恋しがる。犬が外を通りさへすれば屹度飛んで出る。（平凡 36～37）

「はなす」「よむ」のような言語活動や，「うる」「かう」のような社会的な活動については，感情よりももっと線が引きやすいはずだが，それでもたとえば

○かれがここで研究していたころ，まだ少年だった連中が，いまでは堂々たるおとなザルになっている。**出世して**，群れのなかでも，そうとうの地位についているのがいる。（高崎山 12）

のように，社会的現象の動詞をサルにつかった例がある。もちろん，ここでは「少年」ということばもつかわれているから，サルを，ぎ人化しているのだという見方もなりたつが，サルの社会生活を論じた文章に出てくるのだから，この「出世する」も比ゆではないとすべきであろう。

1.1.1.1.1.1　人間／動物

〔76〕 **つどう＜あつまる，むれる，むらがる**

「つどう」は人間についていう。

○繁忙（はんぼう）しい職業に従ふ人々まで，其を聴かうとして熱心に**集**（つど）ふのを見ても（破戒 213）

「あつまる」「むれる」「むらがる」は人間についても動物についてもいう。

〈人〉	〈動　物〉
○家族のものが，みんな一つ家の内に**集まつて**ゐました。（こゝろ 160）	○鶏は朝晩小屋に**集つて**軒端に寝た。（野火 55）
○頂上に兵達が**群れて**ゐた。（野火 106）	○丘の雑木林の上には烏が**群れて**居た。（田園の憂鬱 66）
○上野の地下道には戦災で家を失くした浮浪人が群が**つて**ゐる。（帰郷 137）	○俺は船が沈んでゆく時に**群がる**鷗のやうなものだ。（冬の宿 200）

ただし，「あつまる」「むれる」「むらがる」は，動物以外にもいう。（〔71〕参照）

〔77〕 **どよめく，はしゃぐ＜さわぐ**

これらがともに人間を主体とする動作につかわれることは，あきらかだが，それ以外に，どの範囲までつかわれるかは，はっきりしない。

「どよめく」は，主体が人間であるばあいにいう。

○校を挙げて宛ながら一の「モツブ」となり果てた生徒一同，忽ち**動揺**（どよ）**めいて**，（思出の記・上 110）

このようなばあいのほかに，辞典には「音が鳴りひびく」という意味が書いてあることがある。しかし，それにあたるような例は見当たらなかった。研究社の新和英大辞典には「その響きで隅から隅までどよめいた」という例文があがっている。このばあいには，主体は人間ではなくて，へやか何かであると思われるが，実例としてはこういうのはなかった。

「はしゃぐ」は，うれしい気もちのあらわれとしての動作を意味し，したがって＜うれしい＞というような感情があるとはみとめられない動物についてはつかえない。

○続く，性急な，はしやいだ吠え立て。（真知子・前 102）

これは，犬のほえ声であって，犬はうれしさ・かなしさなど，人間に近い感情をもちうるものと一般にみとめられている。「さわぐ」の方には，つぎのような例がある。

○台所で鼠が騒いだんだらうと（雪国 96）

○門前には家鴨が騒いで居る。（思出の記・上 71）

ネズミやアヒルについても，そういう感情をみとめることができるかもしれないが犬よりはむずかしいだろう。さらに，カエルや虫・さかなどについても「さわぐ」ということができるとおもわれる。また，植物や無生物についても「さわぐ」がつかわれている例がある。

○颯と風が吹いて通る，木の葉がざわざわと騒ぐ。（平凡 21）

○水はその笯を乗り越すために，湧上り湧上りして騒いで居た。（田園の憂鬱 86）

これらの例は，比ゆ的といえるかもしれないが，もし「はしゃぐ」がここでつかわれていれば，いっそう比ゆ的な感じがするだろう。要するに，ともに人間以外の動物についてもつかわれるとはいえても，「はしゃぐ」の方が「さわぐ」よりもその範囲がせまく，高等な動物にかぎられるのである。

〔78〕 かくまう＜かくす（秘す）

「かくまう」は対象が人間であるばあいだけに使う。

○十字坊は，義経たちを，そこに匿まひ，（週刊朝日 1956年8月19日 44）

「かくす」は，人間のばあいにも動物のばあいにも，もののばあいにもつかう。

〈人〉	〈動　物〉	〈も　の〉
○どうか隠してくれと彼は土蔵へ入れて貰つた。（土・上 140）	○懲しめのため，ボチを何処かへ匿したのぢやないかと思ふ。（平凡 44）	○パイプや帳簿のやうなものは叮嚀に抽出（ひきだし）に隠した。（或る女・前 190）

一般に，人を対象とする動詞と，ものを対象とする動詞とが対立するばあい，動物は人を対象とする方に分類されるのだが，このばあいには人間だけが特にとり出されて，人間とそれ以外というかたちで対立している。すなわち，「かくまう」の対象に動物がくることはないと思われる。この点については p. 443　参照。

「秘す」は「かくす」とおなじかもしれないが，実例としては，つぎのように，ことがらを人にしゃべらずにいる，ということをあらわす例が2つあっただけだった。

○彼は，駒子に秘して，社をやめてしまったが，（自由学校 132）

1.1.1.1.1.2　人間の資格

人間のうちでも，特定の性・年令などにしかつかわれない，という動詞も，すこしはある。

とつぐ，嫁する；みごもる，はらむ；うむ

などの主体は，当然女性にかぎられる。

　悩殺する
も，「女が男を」であろう。
　年令の面では，
　こましゃくれる，ませる，おとなびる，夭折する
などが子どもや青年について，
　年よる，若がえる，若やぐ
は中年以上についての表現である。
　特定の身分についてしかいえないものには，
　崩ずる，薨ずる，崩御する，薨去する
などがある。

〔79〕 いちゃつく＜ふざけあう

「いちゃつく」は男女のあいだにかぎられるが，「ふざけあう」はそれ以外でもよい。たとえば，つぎにあげる例で「いちゃつく」を「ふざけあう」にすることはできるが，逆に「ふざけあう」を「いちゃつく」にすることはできない。

○君江は新に好きな男ができると忽ち熱くなつて忽ち冷めてしまふといふ，生れついての浮気者なので，翌日も夕方近くまでいちやついてゐたが，（つゆのあとさき 38〜39）

○二疋の犬は彼の後について，二疋で互にふざけ合ひながら，嬉嬉として戯れて居た。（田園の憂鬱 78）

〔80〕 あきなう＜うる

「あきなう」は，商店が商売としてものを「うる」ばあいにかぎられる。

○廂が低く採光の悪い店が古びて色の落ちた暖簾を垂らして古物を商つてゐるのを時折見かけ，（帰郷 247）

「うる」は商店がものを売るばあいにもつかうし，しろうとが，たまたまあるものを売って金を手に入れるばあいにもつかわれる。

〈商　店〉	〈しろうと〉
○日本橋へ行くまでに二三軒漢籍を売る家（うち）があったはずだと思う。（暗夜行路・前 264）	○高の本を売つて得た金は，その宿料の半分にもならなかつたことは，（冬の宿 103）

「あきなう」と「うる」の基本的なちがいは，それを売る主体が職業としての商人・商店にかぎられるかどうかにあるが，その結果として，商品ではない，子どもとか，原稿とかについては，当然「あきなう」はもちいられない。このように，売られるものの側からも，「あきなう」と「うる」のちがいを問題にすることができる。

○農民は，まことにお恥かしい次第だが，子供，とくに娘を売りつつある……（むらぎも 168）

○童話や詩を三ツ四ツ売ってみた所で（放浪記 97）

商品であるか商品でないかの限界，したがって「あきなう」が使えるかどうかの限界は，ややあいまいなばあいがある。たとえば

○ある日安吉は，リーンハルトの希望もあって上野博物館へ連れだって行った。黒い門柱の弾痕を見せて維新戦争の話なぞをしたが，せめて英語の解説書を売っていないかといわれて売っていないのに弱り，（むらぎも 176）

という例では，「解説書を売っていないか」を「解説書をあきなっていないか」におきかえることがむずかしい。もし，本屋がうっているのであれば，その解説書は，商品として，「あきなう」といえるはずだが，このばあいには，博物館のしごとの一部としてうっているのであって，解説書の販売で利益をあげることを目的にしているわけではない。だからこの解説書は商品とはいいにくいだろう。また，

○二割引で買ひとつた全入場券に「清涼」の小袋を一個づつ添附して売りたいといふのである。（闘牛 123）

という例のように，入場券・切符などをうるときも「あきなう」とはいえない。入場券なども，たしかに，それをうることは利益をえることにつながるが，ほかから仕入れてきて，あるいは自分で作って，もうけるというものではない。入場させることに対して金をとっているのであって，そのことをはなれて，入場券自身に価値があるわけではない。このようなものも，やはり商品とはいえない。また，解説書をうったり入場券をうったりする人たちは，そのことを職業とし，そのことによって収入をえていても，商人とは呼べないであろう。

なお，これらの類義語として，文章語の「ひさぐ」があるが，これは実例が1つもなく，「うる」「あきなう」のどちらに近いか，あきらかでない。

〔81〕 つとめる<はたらく

「つとめる」と「はたらく」とは，ほとんど同じ文脈で使われることがある。

「つとめる」	「はたらく」
○君は中学につとめていた時は校長の悪口を言っていた。（人間の壁・上 246）	○この夜学部の方にも一週二日づつ働いてゐた。（波 72）
○カフェーに勤めるようになると，（放浪記 129）	○やっぱりカフェーで働くと云うのに，（放浪記 154）

しかし，このばあいに重点のおき場所はちがう。すなわち，「はたらく」が単にしごとをすることをあらわし，「～で」「～に」という目的語は，そのしごとをする場所・組織をあらわすのに対して，「つとめる」はそのような組織の一員としてはたらくことをあらわしている。したがって，上にあげたような例では，どちらの表現をとってもほとんど同じであるが，たとえばつぎのばあいには，まったくちがってしまう。

○金は彼が刑務所ではたらいて得た金であった。刑務所では作業褒賞金がでたからである。（真空地帯・上 137）

ここで，「刑務所ではたらいて」というのは，囚人として刑務所に入れられていたときに「はたらいた」ことを示すものであり，もしこの文脈で「刑務所につとめて」といえば，囚人としてではなく，看守として刑務所に勤務していたことを意味するようになる。また，つぎのようなばあいにも，「はたらく」は，「つとめる」におきかえられない。

○お島は狭い台所にがしやがしや働いてゐた。（あらくれ 190）

○――また何が割のよい教師や事務員にならないで，彼女をあんな貧民窟で働かせてゐるのか。（真知子・前 121）

これらの「台所に」「貧民窟で」は単なる空間的な場所を示しているにすぎず，「つとめる」のばあいに必要な＜組織の一員としてはたらく＞というようなニュアンスはもっていない。

なお，「つとめる」は「はたらく」に比べて抽象的である。それで，はじめにあげてきたように一般化していうばあいだと，「はたらく」でも「つとめる」でもほとんど同じだが，いま上にあげた「あらくれ」の例のように，ある特定の瞬間に具体的な動作として「はたらいて」いることを示す用法のばあいは，「つとめる」におきかえることはできない。(p. 506参照。)

＜注＞「はたらく」につく目的語は「～で」の形をとり，まれに上にあげたように，「～に」のかたちをとる。「つとめる」は大体は「～に」をとるが，このほか「～へ」もあり，また「～を」の例もある。

○人の周旋で今の役所へ勤めるやうになつたが，（平凡 138）

○どうか倅が中学を卒業する迄首尾よく役所を勤めて居たい，（平凡 6）

〔82〕 縛する＜しばる

「縛する」は，罪人を，逃げられないようにしばることをいう。

○しかし彼の縛された手には繩がついてゐた。（青銅の基督 116）

「しばる」も，これと同じようなばあいにも使われる。

○「誰が何と云ったって，人を手錠で縛るような商売はまっぴらじゃあ」（人生手帖 1953年12月 49）

しかし，罪人ではない者をしばるばあいにも使われる。

○父は私の帯を解いて，私の両の手を後ろ手に縛ってしまった。（暗夜行路・前 16）

この例は，子どもをこらしめのために「しばった」ばあいである。このように，「縛する」は，対象の面で限定があるが，観点を変えていえば，逃げられないようにしばっておくことだから，目的の面でも限定がある，ともいえる。「しばる」には，このような限定がないから，上にあげたように人間を「しばる」ばあいだけではなく，つぎのような動物やものを「しばる」ばあいにも使われる。

○どこかの小さい犬を帯で縛つて，びしよ濡れになつて引つ張り廻してるんだよ。

（桑の実 101）

○拾い物のヤカンや鍋皿の類は，殖えていたが，縄で縛って，片手に提げて，歩けない分量でもなかった。（自由学校 176）

〔83〕 いじめる，いびる＜苦しめる，いためつける

「いじめる」「いびる」は，相手が自分よりも弱いばあいにもちいられる。（「いじめる」は下の例にみるように，動物についてもいうが，「いびる」は人間についてしかいわないとおもわれるので，一括してここで扱うことにした。）

○輝雄は隣の妹を始終いぢめてゐる。（冬の宿 17～18）

○若しや犬がいぢめられて居はしないかと，（田園の憂鬱 60）

「いびる」については，例がなかったが，「いびりづめ」というのが1例あった。

○毎日々々母親に窘りづめにされてゐたお島は，（あらくれ 91）

これに対して「苦しめる」は相手が自分よりも弱いばあいにも，強いばあいにもつかう。

○私達の友達がこの工船の中で，どんなに苦しめられ，半殺しにされたか。（蟹工船 111）

この例では「苦しめられて」いるものが弱い立ち場にあり，「いじめられ」といってもそれほど大きなちがいはない。しかし，つぎの例では，「いじめる」におきかえられない。

○桐生の順当の勝利。山口が快打し，伊藤遊撃手の好守が目立った。西条の相田投手はなかなかの健闘で桐生を苦しめたが，とくにスローカーブで桐生打者のタイミングを上手にはずしていた。（野球界 1956年5月 132）

このばあい，桐生の方が勝ったのだから，西条よりも強かったのであろう。そして，弱い立ち場にある西条の投手が「苦しめた」のだから，これは弱者が強者を「苦しめた」例である。ただし「苦しめる」のばあいには，このように相手が弱いばあい，強いばあいと2つにはっきり分かれるのではなく，そのような区別には無関心なのだから，多くの例については，相手が弱いとも強いともきめかねる。

「いためつける」は「苦しめる」に近いかと思われるが，用例が少ないので，はっきりしたことはいえない。つぎの例では「いじめる」と並んだ文脈で使われ，「いじめる」と同様に弱い立ち場にある相手に対する働きかけをあらわしている。

○国家も苦しいだろうが，個人が，こうイタめつけられては，やりきれない。国家，社会，家庭と，総がかりで，個人をイジめる。（自由学校 134）

「いためつけられる」の方が「苦しめる」よりも一そう程度がひどいように思われるが，そのことを考え合わせると，あるいは，「苦しめる」よりも相手が弱者であるばあいに多く使われるかもしれない。

1.1.1.1.1.3 個人／集団・組織

〔84〕 いそしむ，はげむ，はたらく＜つとめる

「いそしむ」「はげむ」「はたらく」は，もっぱら個人についていう。

○新治ともう一人の若者竜二は，その身に適した力業(わざ)にいそしめばよいのであつた。（潮騒 14）

○黙々と仕事に励んでいる次第，（近代映画 1956年7月 181）

○彼女は家にゐては能く働いたが（あらくれ 8）

「つとめる」も大部分は個人についての表現である。

○私は甲府で緊張し，一心に努めたのである。（富岳百景 67）

しかし，中には，組織を主体とした表現がある。

○昨年あたりの各企業は，デフレ政策の余波もあって極力在庫の圧縮に努めていた。（時の法令 1956年9月3日 33）

○労働組合活動には闘争資金が必要であり，組合はその備蓄につとめてきた。（中央公論 1954年3月 153～154）

これらの例にあたるような使い方は，「いそしむ」「はげむ」「はたらく」には，みられない。たとえば，ほとんどおなじようなことをいっている例だが，

○多くの教会聖職者は，個人としては，これらの邪悪の諸結果をできるだけ軽減しようと努めた。（心 1953年11月 28）

のばあいには，主体が個人であるので，「はげむ」におきかえることができる。「はたらく」といってもよいだろう。「いそしむ」にはならないが，これは「～しようといそしむ」のような形式がないためである。これに対し，

○他のキリスト教諸派が決して奴隷制度そのものの廃止につとめなかつた事実を（心 1953年11月 28）

のばあいには，主体が「キリスト教諸派」という組織であるため，「はげむ」にも「はたらく」にも，おきかえることはできない。

このように，「つとめる」だけが組織を主体にできるということは，「いそしむ」や「はげむ」にくらべて，「つとめる」の方が，より客観的な，動作についての表現であるということと関係があるのではないかとおもわれる。「いそしむ」も「はげむ」も「つとめる」も，みな主体のきもちとしての熱心さ，およびそのあらわれとしての動作のようす，という点に特徴がある。しかし，これら3つをくらべると，「いそしむ」「はげむ」の方が，一層主体のきもちに重点をおいた表現であり，「つとめる」の方は客観的にあらわれた動作の面に重点をおいた表現である。個人については，主体のきもちを論じてもふしぎはないが，組織について＜主体のきもち＞というのは，やや抽象化したとらえ方である。したがって，「いそしむ」「はげむ」のような，特に「いそしむ」のような，主体のきもちが強く表現されている動詞では，組織を主体とすることはできないのであろう。「はたらく」については，主体のきもちと関係のない表現なので，組織を主体としない理由は，なにかもっと別なところに求めなければならない。なお，ここで，個人／組織というかたちでとりあげたが，この＜個人＞は単数でも複数でもよい。たとえば

つぎにあげる「はげむ」「つとめる」は，ともに何十万もの人たちについての表現だが，それでもやはり組織ではなくて，個人である。おなじような主体について，これを1つの組織として，たとえば，日教組というような組織としての観点からとらえるばあい，それにふさわしい動詞は「つとめる」だけで「はげむ」ではない。

○教師たちは，民主教育の大本を示されたこの法律にしたがって，もはや安心して教職にはげむことが出来るはずであった。（人間の壁・上 103）

○二十八万の教室において，先生たちは心をこめて，新しい民主的教育の実践につとめていた。（人間の壁・上 104）

〔85〕 おちぶれる，零落する＜おとろえる，没落する

これらの動詞は，すべて社会的な地位が低くなったり，生活が苦しくなったりすることをあらわしている。そして，実例によれば，これらのうち「おちぶれる」「零落する」は，個人や家についていい，「おとろえる」は家や国についていい，「没落する」は，個人についても，家についても，また国家以上の大きな集団についてもつかわれている。

〈個　人〉	〈家〉	〈国家以上〉
○片野が落ちぶれてからもちつとも変らなかつた。（厚物咲 27）	○わたくしの一家は落ちぶれてしまつたものです。（冬の宿 16）	
○先方は素より零落した兄には何の情義も無かつたのである。（思出の記・上 14）	○家が零落して，細君が働き振りを示し出したら，（自由学校 130）	
	○衰へたと云つても年に二千俵以上からの小作米を取る地主の家が，（真知子・前 35）	○料理の発達した国は，古今一様に亡びるか衰えるかしている。（改造 1953年11月 91）
○やはり没落した元海軍軍人の生活だな，と小ざかしい考へが（帰郷 121）	○鵙屋の家はとうに没落してしまひ近年は稀に一族の者がお参りに来るだけであるが（春琴抄 136）	○ヨーロッパはこの争いの周辺の位置に没落することとなった。（中央公論 1953年9月 311）

これらのちがいは，質的な差であるか，それとも，たまたま実例に，あるばあいが現われなかった，というだけのちがいにすぎないのか，疑問が残る。たとえば「おちぶれる」のばあいについても，「X国もおちぶれたものだ」のように，国についていう実例がありそうである。

「おとろえる」は，個人についていった例がなかったが，これもありえないとはいいきれない。なお，「おちぶれる」と同様な意味でなければ，すなわち肉体的なおとろえについていった例ならば，個人についても見出される。

○しかし幹は高く，衰へた私の体では攀ぢることは出来なかつた。（野火 48）

「おちぶれる」と「おとろえる」とを比較すると，「おとろえる」は一般に勢いがへることをいうのであり，「家がおとろえる」のようなばあいには，家の勢いというのが社会的なものであるために，たまたま「おちぶれる」とかさなるのである。人間についていうばあいには，肉体的なおとろえもあり，社会的な力のおとろえもあり，また好奇心や愛情やその他もろもろの精神的な現象のおとろえもありうるだろう。したがって，「おちぶれる」のばあいには，「家の勢いがおちぶれる」「家の地位がおちぶれる」などという表現はとられず，単に「家がおちぶれる」というのが普通であるが，「おとろえる」については，どのような側面が「おとろえる」のかをくわしく限定するのが普通である。「かれのからだ（元気・愛情……）がおとろえる」のように。なお「おとろえる」は勢いがへることであるから，厳密にいえば「家がおとろえる」のと「家がおちぶれる」のとでも，違いがあるかもしれない。しかし，上にあげたような例では，それほどはっきりした違いは，みうけられない。しいていえば，「おとろえる」は少しでも程度が低くなればいえるのに対して，「おちぶれる」はある程度のところまで下らなければいえない，というようなことがあるであろう。

〔86〕 ほろびる＜なくなる

「ほろびる」はふつう個人ではなく，集団としての人（動物）についていう。

○小西家が滅びてから，加藤清正に千石で召し出されてゐたが，（阿部一族 64）

○真剣に働かねば企業は亡び労働者は失業することを（改造 1954年2月 106）

○吉田内閣がつぶれると日本が滅びるわけでもないし，（中央公論 1954年6月 44）

このほかの実例としては「国」「民族」「軍隊」などがあった。したがって「ほろびる」は「なくなる」のしめる領域のうち，その主体という観点からすれば，ごくわずかの部分をしめているにすぎない。

つぎにあげるような例では，両方とも集団である主体（この例は，かならずしも現実的な集団ではなく，同類として概念的にまとめうる集団，という程度のものであるが）についていっているので，「なくなる」でも「ほろびる」でも，ほとんど同じことをあらわしている。

○形式的に取締本部を設け，事件だけの処理をしている限り彼らは滅びない。（実話雑誌 1956年9月 266）

○あなたがたのなさる説教というものはありがたいものですな。おかげで世間に悪人がなくなりますよ。（出家とその弟子 31）

しかし，つぎの例では，けんか相手という個人について「なくなる」が使われているので，これを「ほろびる」といいかえることはできない。（これが「ほろびる」にならないもう1つの理由は，ここでの表現がけんか相手の有無だけを問題にしていて，そのなくなり方のプロセスを問題にしていないという点にもある。）

○喧嘩相手の無くなつたことに何となく力抜けのした具合で（河明り 332）

なお，以上の点は「ほろびる」の反対語である「さかえる」についても同様だと思われる。

以上のべたことについて，すこし例外ともみえる例があるので，以下にあげて若干説明をつけておこう。

○十日前までは歯牙にもかけなかった領内の町人百姓たちに対する憤りが，そんなゆがんだ形であらわれている。しかし，笑っているものにそんなことはわかっていはしないのだ。ただ，自分が滅びてゆくのと同じように，すべてがほろびてゆくことがのぞましいのである。（落城 45～46）

○バイブルにも「剣を以て興る者は剣によって亡ぶ」と訓えている。（平和 1954年3月 19）

これらの例では，主体を個人とも集団とも考えることができる。集団ならば「ほろびる」とは「なくなる」ことだが，個人であれば，肉体的な消滅というよりも社会的な没落（その極度の状態としては肉体的な消滅までもふくむ）をあらわすとみられる。もし「信長がほろびる」のように個人についても「ほろびる」がつかえるとすると，集団が主体だということは「ほろびる」にとって絶対的でないことになるが，そのばあいでも，傾向としての特徴にかぞえることはできる。

○いいえ。私は一人の悪魔としてあなたの前に立っているのです。私は滅ぶる運命を負わされているのです。（出家とその弟子 101）

この例はあきらかに単独の主体について使われている。しかし，このばあいの「ほろびる」は，社会的な意味で没落するということをいっているのではなく，もっと抽象的，精神的な現象として，救われることがない，というような事実をあらわしているものと思われる。いわば意味の重点にずれがおこっているのであって，単独の主体にもちいられているのも，そのためであろう。

○蜂は少し歩いて転び，また歩いて倒れた。季節の移るやうに自然と亡びてゆく，静かな死であつたけれども，（雪国 128）

動物の個体の死を「ほろびる」というのは，やはり一般的な用法とちがっている。このばあい「ほろびる」を使ったのは，ハチが秋になって種族としても一せいに死んでゆく，その1つの代表例，象徴として目の前にいるハチを考えた，ということではないだろうか。ことばをおぎなっていえば，自然にほろびていく一族の運命を象徴するような静かな死であったけれども，というような意味あいではないかと思う。

〔87〕 ほろぼす＜なくす

自動詞の「ほろびる」と同様に，「ほろぼす」も国家など社会的な集団について使われることが多い。

○伏波将軍として十万の兵を率ゐて南越を滅した老将である。（李陵 154）

しかし，「ほろびる」に比べると，「ほろぼす」のばあいには，集団ではなく個人についていった例もかなり見うけられる。

○毒ダケに当って身を滅ぼす人は年毎に殖えているのである。（オール読物 1956年9月 229）

○あの子が黒田長官をほろぼすために，爆烈弾を調合して，（小説春秋 1956年10月 288）

○「わしをほろぼして，やつめ，何とする肚か」

「藤内のねらふのは，守といふ位にほかなりませぬ」（中央公論 1956年7月 357）

したがって，「ほろぼす」のばあいには，集団について，という特徴はごく弱いものになっている。あるいは特徴に数えあげるべきではないかもしれない。

1.1.1.1.2 動物（人間以外）

まえにのべたように，一般に高等な動物については，下等な動物について使える動詞がすべて使われ，そのほか，さらにいくつかが，つけくわわる，というかたちをとっている。したがって，最高の段階にある動物である人間のばあいには，ほかの動物についていえる動詞は，たいてい使うことができる。逆に，人間についてはいえず，ある種の動物についてしか使えないという動詞は，ごくかぎられている。このグループには，なき声をあらわす「いななく」「さえずる」「ほえる」や，鳥についての「はばたく」「ついばむ」，卵生動詞についての「（卵から）かえる」「うみつける」などの例がある。

〔88〕 じゃれる＜ふざける，たわむれる

「じゃれる」は動物がふざけることをいう。

○私の裾にまつわってじゃれていた小猫のオテクサンはどうしたろう（放浪記 131）

「ふざける」「たわむれる」は人間についても動物についてもいう。

〈人〉

○坊ちやんはさつきから，洗吉さんに相手になつてお貰ひになつて，六畳でふざけてお出でになつたが，（桑の実 89）

○遊戯の時間なぞには，彼は久しぶりで，子供と一しよに心から戯れることが出来た。（波 185）

〈動 物〉

○で，犬がふざけると，他の場合より彼女はずつと潑剌となつた。（真知子・前 162）

○二疋の犬は彼の後について，二疋で互にふざけ合ひながら，嬉嬉として戯れて居た。（田園の憂鬱 78）

人間について「じゃれる」を使ったつぎの例があるが，これは明らかに比ゆ的な用法である。

○あなたはまるで仔犬だわ，かみついて，じゃれて……（小説サロン 1956年1月付録 恋愛のバイブル 50）

しかし，たとえば子どもや芸者が人にたわむれるのを，親しみ，ないしは軽べつの気持ちをこめて「じゃれる」と表現することがあるかもしれない。

なお，お茶の水女子大生についての調査では，「赤ん坊が母親にじゃれている。」という例文に対し，○—1，△＝3，×—17だった。

〔89〕 ついばむ＜くう，たべる

「ついばむ」は，鳥についてだけいう。

○鴉は，もちろん，門の上にある死人の肉を，ついばみに来るのである。（羅生門 7）

「くう」「たべる」は広く人間や動物についていう。

〈人〉

○駒井先生は此室を本陣として，学生と一諸に飯も喫い，（思出の記・上 113）

○私はこれまで反省なく，草や木や動物を喰べてゐたが，（野火 138）

〈動　物〉

○犬はすぐに食はうともせず，尾を掉つて五助の顔を見てゐた。（阿部一族 44）

○象は鼻を延ばして，ぷうつ，ぷうつと息を吹きかけては，自分の方に吹寄せて器用にパンを食べてしまつた。（波 199）

そして，「くう」「たべる」は動物一般についていうことばであるから，このなかには当然鳥もふくまれる。

○雀には食はれやしたが，しかし坊主（稲の名）が九分で，目は有りやすよ。（破戒 245）

○鷺が水牛の皮膚につく或る種の虫を喰べ，水牛が喜んでゐるのを，（野火 70）

つぎの例では，「ついばむ」と「たべる」とが，まったく同じ事実をさすことばとして，すぐつづいて使われている。

○鶏は斜面の下の遠いところを，射撃者を無視した足取りで歩いてゐたが，時々立ち止り，地面についばんだ。何を喰べてゐるのであらう。（野火 52）

「ついばむ」は，たべ方の面での限定もありそうである。すなわち，くちばしでつついて「たべる」という限定がさらに必要で，あるいはそのような特徴の方が本質的で，そこから鳥がたべるばあいだけに限定されるのだと見るべきかもしれない。しかし，手もとにある例からは，「ついばむ」が特にそのようなたべ方だけに用いられる，と結論することはできなかった。すなわち，鳥がたべている例は，つねに「ついばむ」におきかえても不自然ではない例ばかりだった。たとえばペリカンが大きく口をあけて，そこに人がたべものをほうりこんだばあい，これは「ついばむ」ではあらわしにくい現象であって，おそらく「ついばむ」の正確な規定には口ばしでつつくというたべ方の規定が必要だと思われるが，それを説明するには，もっと例をあつめなければならない。

〔90〕 さえずる／すだく＜なく

「さえずる」は小鳥だけについていい，「なく」は鳥一般，さらに，けものや虫についてもいう。したがって，「なく」の方が範囲がずっと広い。小鳥については「さえずる」と「なく」両方がつかわれる。

「さえずる」

○軒に雀の囀る声。（つゆのあとさき 84）

「な　く」

○雀が二三匹小屋の屋根へ下りて啼いた。（桑の実 39）

このほか「さえずる」については，ひばり・よしきりの例があった。鳥のなかでも比較的大きいものについては，「さえずる」といえない。

○その鴉が何羽となく輪を描いて，高い鴟尾（しび）のまわりを鳴きながら，飛びまわっている。（羅生門 7）

○一列の雁が二人を促すかの様に空近く鳴いて通る。（野菊の墓 31）

このほか，山ばと・にわとり・うずら・きじ，かもめ・とんび・ふくろうなどについて，「なく」をつかった例があったが，これらはみな「さえずる」とはいえないと思われるものである。

「さえずる」と「なく」のちがいとして，とらえやすいのは，このように，小鳥にかぎられるかどうかという主体の側面だが，このことは当然鳴き方にも関係がある。すなわち，小鳥だから，わりにかん高い声，あるいはきれいな声で「なく」ばあいが多く，ふくろうやからすのように太い声のものは除外される。小鳥ということ，すなわち鳥のからだの大きさということよりも，むしろその声の質の方に，本質的なちがいがあると見るべきかもしれない。また辞典は「さえずる」について「（小鳥が）しきりに鳴きつづける」と規定していることが多い。ということは，「なく」は1声でもよいが「さえずる」は鳴きつづけなければいけない，というちがいを，みとめたもののようである。しかし，実例からは，そのような対立があるかどうか，はっきりしなかった。

「さえずる」が虫についてつかわれた例がある。

○蝶々とんぼやきりぎりす
　お山でさへづる
　松虫鈴虫くつわ虫（雪国 105）

○森の中の螽蟖（きりぎりす）
　どういうて囀るや
　お杉友達墓参り
　墓参り一丁一丁一丁や（雪国 138）

ただしこれらは，越後の民謡に出てくる表現であるから，標準語の使用例とするのには不適当であろう。小鳥と近い音色をもった虫について「さえずる」といえるかどうかは，これ以外に参考とすべき用例が見あたらなかった。お茶の水女子大生についての調査では，「鈴虫がきれいな声でさえずっている。」という例文に対し，○—0，△—0，×—21だった。

もちろん，虫について「なく」を使った例はある。

○どこか間近い草の中で，まだ早い蟋蟀が一匹，ひそひそと青白い糸を引くやうに鳴いてゐる。（桑の実 106）

「すだく」は虫についてだけいう。

○叢（くさむら）の蔭，林の奥にすだく虫の音。（武蔵野 13）

虫の声がすべて「すだく」であらわせるかどうかは明らかでない。実例としては，きりぎりす・こおろぎ・ひぐらし・蚊・くつわむし・かぶと虫などのものがあった。

「すだく」は文章語的な色合いのこいことばだから，あるいは一定の状況，たとえば，秋らしい風景のばあいにしか使えない，というような制限もあるかもしれないが，実例からは断言できない。(なお，文法的な制約については，p. 678参照。)

〔91〕 いななく／ほえる＜なく

「いななく」は馬についてだけ使われる。

○門口には馬が嘶いてゐる。(阿部一族 69)

「なく」は動物一般についてつかわれることばであり，馬についても，当然いうはずであるが，実例はなかった。馬について「いななく」と「なく」が用いられたばあい，なき方にちがいがあるかどうか，といった点については，したがって，なにもいえない。また，ロバ・ラクダなど，馬に近いけものについて「いななく」といえるかどうかも不明である。

「ほえる」は，犬や猛獣についていう。

○犬どもは声を揃へて吠えて居る。(田園の憂鬱 118)

犬以外の例では，つぎのように比ゆ的につかわれたものが2つあっただけである。

○僕はもう処女ではない。獅子だ。傷ついた，孤独な獅子だ。そして吠える。(友情 127)

○ごうごうと哮つて彼等に吹きあたる風の音は，その既に幾十の人命を呑み食(くら)つてなほ飽きたらぬ巨獣の吼える如く思はれた。(青銅の基督 84)

「なく」も犬について使った例は多い。

○犬は一声鳴いて尾を掉つた。(阿部一族 45)

けものについて「なく」をつかったものでは，このほか，ねこ・やぎ・うし・ねずみなどの例があり，これらはみな「ほえる」とはいえないものである。つぎの例はあるいは「ほえる」といえるものかもしれないが，あきらかでない。

○北洋での愉しみはトドというオットセイに似た海獣が，船の傍まで寄ってきます。啼声がちょっと人間が人を呼ぶときに似て「オウ」と呼ぶようになくので，誰もがその愛嬌のある動物を愛します。(改造 1953年8月 208)

1.1.1.1.3　からだの部分

人間や動物についての表現であっても，全身的なものではなく，からだの特定の一部分の動作・現象についてつかわれる動詞がある。

はじめに，おなじ動詞でも，からだ全体を主体とするか，そのからだの部分を主体とするか，という2とおりの表現があることについてのべる。(p. 90～91 参照。)

両方のいい方がなりたつ第1は，それらが，おのおの別の事実をあらわしているばあいである。すなわち，全体を主体とした表現が，からだ全体(あるいは，からだのうちで特に代表的な部分)にみられる事実をのべているのに対し，部分を主体とした表現は，その部分だけにかぎられる事実についてのべている，という例である。手・足・口

という部分の例をあげることにする。

〈部 分〉

○かさかさに乾燥(かわ)いた手が水へつける度に赤くなつた。（土・上 14）

○勘次は薄い蒲団へくるまつて日の中から冷えてた足が暖らなかつた。（土・上 28～29）

〈全 体〉

○お島はそれでも極りわるさうに紅くなつた。（あらくれ 212）

○ウイスキを飲んでゐた高は，やつと暖まつたとみえて立ち上つた。（冬の宿 84）

○闇の六畳の床で，うめ女は背を丸めて，石のように動かない。声をかけたくせに，自分の口がそう動いたということさえ，はっきりと意識に置かないのである。（厭がらせの年齢 264）

「手が赤くなつた」というのは，文字どおりその手だけを問題にしているのであって，からだのほかの部分は論じていない。これに対して，「お島は紅くなつた」というのは，お島という人物の代表としての顔があかくなったことをあらわしている。もしお島の手があかくなったばあいであれば，「手が」ということばをぬきにして，単に「お島は紅くなつた」とはいわない。つぎの「足が暖まらなかつた」と「ウイスキを飲んでゐた高は，やつと暖まつたとみえて」というのも，おなじようなちがいであって，後者はからだ全体があたたまったことを意味している。また，つぎの「厭がらせの年齢」の例では，全体についての表現と部分についての表現がとなりあって出てきている。「うめ女は背を丸めて，石のように動かない」というのは，からだ全体のうごきを問題にしているのである。したがって，「石のように動かない」ということと，「自分の口がそう動いた」ということは，おたがいに別々の事実をいっているのであって，むじゅんしていない。

第2のばあいとして，全体を主体としても，部分を主体としても一致するものがある。「彼女はあかくなった」は，「彼女は手があかくなった」とは一致しないが，「彼女は顔があかくなった」とは一致する。

○お島は初(うぶ)らしく顔の赤くなるのを覚えた。（あらくれ 209）

つぎにあげるのはそのような例である。

〈部 分〉

○彼は，彼女の手が，背広の袖を，シッカリとつかまえてるのに，気づいた。（自由学校 372）

○加治木の足が，五百助の靴を，一度だけ踏んだ。（自由学校 242）

○女房等は其の強健で旦拡大された胃の容れる限りは口が之を貪つて止まないのである。（土・上 57）

〈全 体〉

○嘉門は，立ち上つて恐ろしい力で私を摑まへて放さなかつた。（冬の宿 192）

○又，誰かが，僕の腹を危く踏むところだつた。（冬の宿 87）

○嘉門は菓子をむさぼり，煙草の匂ひを消すためだらうか，茶を何杯も飲んで（冬の宿 17）

「つかまえる」「ふむ」「むさぼる」という動作は，それぞれ具体的には，手・足・

口でするにきまっている。したがって「手がつかまえる」「足がふむ」「口がむさぼる」といういい方があることは事実だが，むしろこの主体はいわない方がふつうである。これはまた，からだの部分を手段として，「手でつかまえる」「足でふむ」「口でむさぼる」のようにも，いうことができる。そのばあいにも，やはり，「きたない手でつかむ」のようにその部分になにか修飾語をつける必要があるか，あるいは特殊な表現効果をねらうか，など特別な理由があるはずである。この問題については別にあげた感覚動詞の分析のところでもとりあげたので (p. 659～660)，そこを参照していただきたい。表現効果の1つのばあいをつけたしておくと，

○たしかに間違のないことを知ると，彼は歯をくひ縛り，思はず力が両手にこもつた。男は身をもがいて苦悶の呻きを洩らした。陵の手が無意識の中に其の咽喉を扼してゐたのである。（李陵 186）

のように，自分はそうするつもりがないのに，無意識のうちに自分のからだの部分がそうはたらいてしまう，いわばその部分が自分とは別のものであるかのように思われる，というばあいのものがある。このように部分を主体とする表現が，どの程度つかわれるかは，動詞の種類やその部分をあらわす名詞の種類によってまちまちであろう。「彼の手がつかまえた」などは，まだかなり自然なようだが，たとえばつぎにあげるような例は，特殊で，あまりつかわれないとおもわれる。

○初江は気がついて，今まで丁度胸のところで凭れてゐたコンクリートの縁が，黒く汚れてゐるのを見た。うつむいて，自分の胸を平手が叩いた。（潮騒 29）

○彼の嘴はこれを喰ったが彼はその味を愛しも憎みもしなかった，彼の嘴は永遠にこの果実をついばみ彼の咽はこの森で限りなく鳴くであろう，（哲学以前 15）

なお，からだの部分からさらにずれて，服装の一部を主体にした例もある。これは換ゆ的とよぶべきだろうか。

○トオン，トン，トン，トンと上草履が階子を上つて行く音，（末枯 67）

以上のように，からだの部分も全体もともに主体になりうるばあいのほか，部分しか主体になれないという例もある。

○手が荒れるといふことで妻には土いぢりをさせなかつた。（厚物咲 31）

○五十は越しても昔し大兵多力の某県令を足蹴にした大力者，右の足が挙がると思へば，三次郎は鞠の如くころむだ。（思出の記・上 136）

○頂点を下に三角につぼまって，二辺に挟まれて縦に口が開く。（むらぎも 158）

○彼の顔の皮膚は灰のやうに濁つてゐた。眼は飛びだして鋭かつた。頭髪は脱けおち，地肌が白くすいて見えた。（厚物咲 18）

これらの例については，たとえば「手が荒れる」のかわりに「妻が荒れる」，「口が開く」のかわりに「象が開く」のようにいうことができない。

つねにからだの特定の部分だけを主体とする動詞には，つぎのような例がある。慣用句的な表現でつかわれるものが多い。

（目が）くるめく，しょぼつく，血ばしる
（むねが）ときめく
（手足が）かじかむ
（身の毛が）よだつ
（小股が）きれあがる

動詞のなかには，特に，自分のからだについてしか，つかわれないものがある。これは，からだの部分を主体とするよりも対象とする表現にみられるものだが，ついでにここであつかっておく。

たとえば，「（目を）つぶる」という表現は，つねに自分の目についていうのであって，他人の目については「目をつぶらせる」という使役の形でしかつかえない。「すりむく」のはつねに自分の皮であって，「むく」が自分の皮についても他人の皮についてもいえるのとは，対照的である。このような動詞の例を下にひろってみた。cf. としたのは，「むく」のように，自分についても他人についてもつかえる，とおもわれるものである。

（からだを）こわす，いためる，そこねる，そこなう　　cf. きずつける
（全身を）没する　　cf. しずめる
（かおを）赤らめる
（かおを）ほころばす
（かおを）しかめる　　cf. ゆがめる（？）
（目を）なきはらす
（目を）転ずる
（耳を）そばだてる
（口を）つぐむ
（くびを）かしげる　　cf. かたむける（？）
（かたを）そびやかす
（かたを）すくめる
（うでを）こまぬく
（はらを）くだす
（はらを）すかす，へらす
（こしを）かがめる　　cf. まげる
（小便を）もらす

「（むねを）ときめかす」も，ふつうは自分についてしかいわない表現かとおもうが，他人についての例もある。（高橋太郎氏による。）

○女のなつかしい油の匂ひと汗のにほひとが言ひも知らず時雄の胸をときめかした。
（蒲団 84）

上にあげた語例のなかにも，まったく自分のことにしかいわないものと，まれには他人

についてもいうものとが，まじっているかもしれない。

このほか，服装については，つぎのような対立がある。(p. 192以下，199以下参照)

〈自　分〉		〈他　人〉
きる，まとう，はおる		きせる
よそおう，きかざる		
かぶる		かぶせる
はく		
おびる		
	はめる	
ぬぐ		
脱帽する		
	とる，はずす，はぐ	

さらに，

あびる，浴する　　cf. あびせる

せおう，になう　　cf. のせる

なども，もっぱら自分のからだについてつかわれる表現である。

〔92〕 もたげる／もちあげる＜あげる

多くの辞典は，「もたげる」について，単に「もちあげる」としか説明していない。そして「もちあげる」をみると，「手で持ってあげる」というような説明が書いてある。しかし，このような規定はまちがいである。というのは，「もたげる」はかならずしも「もちあげる」におきかえられないし，しかも「もたげる」と「もちあげる」とが同じである部分は，決して「手で持ってあげる」という意味ではないからである。「もちあげる」には，たしかに「手で持ってあげる」というのにあたる用法もあるが，そういう用法は「もたげる」にはない。「もたげる」と「もちあげる」に共通しているのは，自分のからだ，主としてその一部分を上の方にあげる，というばあいだ。

まず「もたげる」についていうと，ほとんどすべての用例は，今いったように，からだの部分を上にあげる，というばあいである。

○彼女は顔をもたげて，微笑さへしだした。(風立ちぬ 120)

○突然葉子は心臓でも破裂しさうな驚きに打たれて，はっと眼を開いて頭を擡げた。(或る女・前 156)

○私は深く吐息し，身をもたげた。(野火 117)

しかも，そのからだの部分というのは，大部分がかお・頭・くび・かしら・つむりなどであり，また，身・からだである。これ以外には，わずかにつぎのような例があったにすぎない。

○すぐ自分も腰を擡げ，顔だけ振りむけて，(多情仏心・前 149)

○一寸ばかりの蟷螂(かまきり)が斧を擡げてちよろちよろと歩き出した。(土・上 208)

これが自分のからだの部分以外の対象についてつかわれた例は，つぎの3つである。

○犇々と上げてくる秋の汐は廂のない屋根舟を木の葉のやうに軽くあふつて往来と同じ水準にまで擡げてゐる——（青銅の基督 20）

○畑の上を蚯蚓が擡げたやうな形に，（土・上 104）

○時々枕を擡げて戸口から外を見る。（土・上 25）

このほか，やはり「枕をもたげる」という例が「土」の中に2例出てきた。これは「あたまをもたげる」と「枕からもたげる」との入りまじった表現かもしれない。とにかく，このような例があるところからみて，「もたげる」がつねに自分のからだの部分を対象にするとはいえないが，大部分の例についてそうだ，とはいえる。「もちあげる」や「あげる」も，「もたげる」とおなじように，自分のからだの一部分を「あげる」ばあいにつかわれることがある。

○布団から首だけ持ちあげて，またどさんと枕に落として（むらぎも 278）

○寝たっきりなので，体をもち上げるとボキボキ骨が鳴ってくる。（放浪記 287）

○頭を半分上げて何か云つてゐる。（蟹工船 66）

○両腕を高くあげ，即席の奇妙な呪文をとなへて，上半身を上げたり折り曲げたりしながら祈つた。（潮騒 89）

これらは，それぞれ，首やからだについてつかわれているので，「もたげる」におきかえてもおかしくない。上にあげたように，「腰をもたげる」という例が「多情仏心」にあるが，おなじ作品の中に，また「腰をもちあげる」という例もある。

○もういよいよ腰をもちあげようと云ふ間際になつて，（多情仏心・前 213）

しかしこれについては，

○「はい」と返事をする丈で，容易に腰を上げない事さへありました。（こゝろ 181）

のように「腰をあげる」というのがふつうである。これらは，どのばあいにも，すわっている状態から立ちあがる（多くのばあいには立ち去る）ことをあらわしている。

上にのべたように，自分のからだの部分であっても，「もたげる」の対象とするものはかなりかぎられているので，「もちあげる」や「あげる」の範囲よりはせまい。「もちあげる」「あげる」については，たとえばつぎのような例もある。

○松木君は繃帯した腕を持ちあげて見せた。（本日休診 77）

○私は其時ふと重たい瞼を上げてKの顔を見ました。（こゝろ 242）

○男は窓の方を枕にして，娘の横へ折り曲げた足をあげてゐた。（雪国 9）

これらの腕・まぶた・足などについては，「もたげる」の実例はなかったし，はたして「もたげる」といえるかどうかは疑問である。したがって，「もたげる」の対象は，からだの部分という以上に，さらにこまかい限定（おもに首，またはからだについて，というような）が必要であろう。

なお，からだの部分であっても，

○横にした首を軽く浮かして鬢を小指で持ち上げながら，（雪国 45）

のように，それ自身の力ではあげることができず，手の力によってあげるばあい，また

○私は突然Kの頭を抱えるやうに両手で少し持ち上げました。（こゝろ 269）

のように他人のからだの部分であるばあいは，「もちあげる」の例しかなかった。これも「もたげる」ではいいにくい例にはいるだろう。「あげる」ではいえそうに思えるが，実例は見当たらなかった。

以上のように，からだの部分についてつかわれるほか，「もちあげる」「あげる」が，広くいろいろなものを対象とする動作につかわれるのは，もちろんである。

○両手で毛布の上に出された酒保品の紙袋をもちあげて，自分の寝台の方へもって行った。（真空地帯・上 144）

○内儀さんはランプを自分の頭の上に上げて凝然と首を低くしておつぎの容子を見た。（土・上 150）

これらの例では，「手で持って」あげている。しかし「もちあげる」が，辞典に規定するように，つねに「手で持って」あげる動作をあらわすとはいえない。つぎにあげる例は，みなその規定からはずれるものだ。

○何か素晴しい力でグイと持ち上げられる。船が一瞬間宙に浮かぶ。（蟹工船 19）

○ときをり軟らかな風が向うの生墻の間から抑へつけられてゐた呼吸かなんぞのやうに押し出されて，私達の前にしてゐる茂みにまで達し，その葉を僅かに持ち上げながら，それから其処にさういふ私達だけをそつくり完全に残したまんま通り過ぎていつた。（風立ちぬ 84）

○一雙の固い小さな乳房は，永い潜水にも耐へる広やかな胸の上に，薔薇いろの一雙の蕾をもちあげてゐた。（潮騒 65）

これらの例について，波や風が，ぎ人化されている，とみることができれば，その波や風の「手」によって持って上げられたのだと解釈することもできる。しかし，この文脈でも，またおそらくほかのばあいにも，そういう＜ぎ人化＞という解釈は適当でないだろう。むしろ「手で持って」という規定をひっこめた方がよいのである。

〔93〕 つむ，つみかさねる＜かさねる

これらの動詞はいろいろな対象についてつかわれるが，そのうち，からだの部分についていえるのは「かさねる」だけである。まず「つむ」「つみかさねる」「かさねる」は，みな，からだの部分でない物体については広くつかうことができる。

○子供が川ばたでたくさん石を積んで，鬼が金棒でくずしている絵が（出家とその弟子 23）

○座ぶとんを積み重ねた上に腰掛けていた。（暗夜行路・前 36）

○小皿を四つ重ねて別の箸と一緒に真ん中へ置いた。（桑の実 120）

しかし，「かさねる」は，このほか，つぎのように，からだの部分についてもつかわれる。

○重ねた両手の上に額を乗せて（或る女・前 116）

○片方の足の甲の上に，片方の足の平を重ねて，（波 32）

上にあげたのは，自分のからだの部分をかさねあわせる例だが，他人のからだの部分に自分のからだの部分をかさねあわせるばあいにも，いうことができる。

○彼女は伏目(ふしめ)になり，佃の手に自分の手を重ねた。（仲子・上 98）

どちらのばあいにも，「つむ」「つみかさねる」ではおきかえることができない。なお，これらに対応する自動詞のばあいも，おなじようなことがいえる。すなわち，「つむ」に対応する「つもる」は，ふつう「雪がつもる」など，自然現象についてしかいわないので「つむ」よりもはるかに範囲がせまく，もちろん人間のからだについてはいわない。「つみかさなる」も，おそらく，いいにくいと思われるが，これは実例がごくわずかしかない。「かさなる」には，からだの部分の例として，つぎのようなものがあった。

○青年は震へ戦(そのの)く足を組み違へ，片一方を爪先き立てた。薄べつたい甲が，その爪先の下に敷かれたが，動かなかつた。そろそろ踵からおろして，たうとう蹠(あしのうら)が，ペタリと重なつた……。（多情仏心・前 24）

これは他人のからだの部分にかさねあわせる例だが，自分のからだの部分がかさなることにも，使えるはずである。なお，「つむ」「つみかさねる」あるいは「つみかさなる」などでも，もしからだ全体から切りはなされた部分を対象にしているばあい，または死体についていうばあいには，からだの部分（または全体）を対象とすることができる。

なお，「つむ」は，いろいろなかたちの物体について使える。ただ，平たいものについて，たとえば紙や布などについては「かさねる」をつかう方が多く，この点でも，「つむ」と「かさねる」のあいだには，ちがいがあるようにもみえる。しかし，「つむ」も平たいものについてつかえないわけではない。

○そこにつまれている下着類は刑務所の下着類よりもはるかに悪かった。（真空地帯・上 33）

○講堂前の卒業証書の積んであるところへ行った。（むらぎも 345～346）

〔94〕 くしけずる，すく，とかす＜ととのえる

「くしけずる」「すく」「とかす」は，髪についてだけいう。「とかす」は例がなかった。

○梳(くしけづ)らざれば頭髪は何時の間にか，伸びて双肩を掩ひ，（恩讐の彼方に 76）

○髪に油を塗りながら，お久さんは髪をすいていた。（放浪記 240）

「ととのえる」は，からだの部分をふくめて，もの一般についていう。「髪をととのえる」という用例はなかったが，つぎの「身支度を整える」というばあいなどは，その一部として，髪をととのえることがふくまれていても，ふしぎはない。

○スーツ・ケースを引き出し，すっかり，身支度を整えたのであるが，（自由学校 235）

〔95〕 うるむ＜ぬれる，しめる

「うるむ」は，目やまぶたについて，つかわれる。

○三年の女生徒たちはみんな両手でうるんだ眼をおさへてゐた。（波 45）

○生徒たちの可愛さにまぶたがうるんで来る。（人間の壁・上 26）

「ぬれる」もおなじようなばあいに使われることがある。

○彼女は，いそいで両手の甲で涙に濡れた眼を擦(こす)つた。（仲子・上 92）

○島村も瞼が濡れた。（雪国 166）

「しめる」は，目についてつかわれた例はなかったが，まぶたについての例はあった。

○刀根の武運の拙さに陸奥は思わず瞼がしめった。（落城 16）

しかし，「ぬれる」「しめる」は，もちろん目やまぶただけではなく，その他のからだの部分や，もの一般について広くつかわれることばだ。

○砂は雨にぬれて黒かつた。（波 254）

○湿つた下草を踏む軍靴は，滑り易かつた。（野火 17）

したがって，「うるむ」は「ぬれる」「しめる」に比べて，ひじょうにせまい領域しか，しめていない。

ただし，「うるむ」が目以外のものについて使われることもある。その1つは，つぎにあげるように光や発光体についていうばあいである。

○雨戸の隙間には，蒼褪(あをざ)めた灰色の光線が微かにうるんでゐた。（冬の宿 88）

○碇泊燈は霧雨ににじんだ朝の最初の光りに，乳白色に潤んでゐる。（潮騒 136）

○星のうるんだ道を歩いて，我が家の門を入ると，（帰郷 187）

これらは，しめったように，ぼんやりかすんでみえることをいう。また，つぎのような例では，逆に光を受けるものの側についてつかわれて，しめったようにみえるようす，つややかな，あるいはすこしぼけたような色あいをさすのにつかわれている。

○障子に射してゐる光もさういへばいくらか和(なご)やかで明るく，やうやく力を増してきた咲子の頬をほのぼのと淡紅色にさへうるませて射し込んでゐた。（冬の宿 141）

○昼には，大理石の表にその色絹やハイヤシンスや青磁色の壺が斜(はすか)ひにつやつやして潤(うる)んで写つてゐた。（桑の実 82）

これらの例までふくめれば，「うるむ」は目にかぎられないことになる。しかし，上に引いたものからわかるように，目以外につかわれた「うるむ」は，実際に水気・しめり気があるかどうかよりも，そのようにみえるという視覚の面に重点が移っている。明解国語辞典のように「くもる」という訳語を与えているものがあるほどである。特に光線や発光体については，水気を帯びるということはナンセンスで，まったく視覚的な感じの表現になっている。したがって，これらは「目がうるむ」とは一応区別して考えるべきであろう。なお，このほかに「うるむ」には「声がうるむ」という用法があり，これも水気をふくんだような，つまり涙声についての形容であるが，今は問題外である。

○成田の声がかすかにうるんで安吉に聞えた。（むらぎも 254）

〔96〕 つぶる（つむる）／つぐむ＜とじる，とざす

「つぶる」は目についていう。

○朝，私が机に頬杖つき，目をつぶつて，さまざまのことを考へてゐたら（富岳百景 68）

「つむる」も「つぶる」と同じである。

○自動車に乗ると津上は座席に背をもたせ眼をつむつた。（闘牛 143）

「つぐむ」は口についていう。

○夫の語気が烈しいので，細君は口を噤んで了つた。（蒲団 25）

「とじる」「とざす」は目についても，口についてもいう。

〈目〉

○眼をとぢて，人気もない原の中に，ただ二人だけ寄りそつて（冬の宿 108）

○彼女の眼は，しばらく，さげすみと感謝とにかはるがはる光つたが，そのうちかたくとざされてしまつた。（冬の宿 164）

〈口〉

○これはいひ過ぎたかなと行介は思つた。それで彼も赤口を閉ぢてしまつた。（波 367）

○噺手は暫時口を鎖した。（土・上 182）

「目をつぶる（つむる）」と「目をとじる（とざす）」，「口をつぐむ」と「口をとじる（とざす）」のあいだには，ちがいが，ほとんどなさそうである。

「とじる」「とざす」は目や口ばかりではなく，開いていたもの一般についていう。

○洋装の売ト者はデスクの上によみかけの書物を閉ぢ（つゆのあとさき 6）

○受付はやはり黙つて窓を閉ぢ，ゆつくりとバットを吸ひ出した。（冬の宿 106）

○山崎の屋敷では門を厳重に鎖して静まり返つてゐた。（阿部一族 60）

「つぶる」はほとんど常に直前に「目を」という目的語をともなってあらわれる。「つぶる」対象は目にかぎられているのだから，「くびをくびる」といわないように，単に「つぶる」といってもよさそうなものだが，そういう例はなかった。「目をつぶる」という表現以外では，

○何人もの大学生の顔がつぶった目のなかへ出てきた。（むらぎも 322）

のように「つぶる」が修飾語として，逆に目にかかっているばあいがあり，また，つぎのように，まぶた・ひとみなどについていった例があった。

○瞼，瞼，薄ら瞑った瞼を突いて，
ぎゅっと抉って両眼をあける。
長崎の，長崎の
人形つくりはおそろしや！（放浪記 60）〔北原白秋の詩の引用〕

○足縛り秤に釣れば鶏は命あきらめ瞳つむりぬ（週刊サンケイ 1956年6月17日 42）

「つぐむ」もほとんど「口をつぐむ」という形で使われ，口以外のものとしては，

○名人はぐつとつぐんだ唇を突き出すやうな真剣な顔で，小刻みに歩いてゐた。（世

界 1954年5月 230)

という例が1つだけあった。

「目をとじる（とざす)」「口をとじる」と同様の表現としては，つぎのように「まぶた（ひとみ）をとじる（とざす)」「唇をとじる」があった。

○私は蒲団を顔へずり上げて固く瞼をとじた。（放浪記 217)

○閉された瞼は顫へてゐた。（野火 63)

○彼が来た時は既に春琴の美しい瞳が永久に鎖された後であつた。（春琴抄 146)

○酷薄に堅く閉ぢてゐた唇を，彼はしづかに動かした。（真知子・前 176)

「目をつぶる」は，文字どおりの意味に使うことが多いが，また，つぎのように見て見ないふりをするというような意味に，比ゆ的に使うばあいがある。

○あの人に成べく余計な迷惑を掛けないやうにしなきやならないと思つて衣服(きもの)のことなんぞ目を瞑(つぶ)つて我慢したのよ。（生まざりしならば 205)

「目をとじる」も文字どおりの意味に使われたばあいが大部分であり，わずかにつぎのような慣用句的表現があった。

○次第に，五百助は観念の眼を閉じる気持に，なってきた。（自由学校 367)

「口をつぐむ」「口をとじる」は，上にあげた例からわかるように，おもに「だまる」ということの換ゆ的な表現として使われる。単にあいていた口をとじる，というばあいにつかわれた例はない。そのようなばあいにも，「口をとじる」という表現ならつかえるが，「口をつぐむ」といえるかどうかは明らかでない。

つぎのような例があることからみて，「とじる」「とざす」には，他人の目や口を対象とするばあいがある，といってよいかもしれない。このことは，「とじる」「とざす」がもの一般を対象とするところから，当然予想されることである。

○石鹸の泡に半分瞼をとざされた若者は，いきなり反撃に出ようとしたが，（潮騒 97)

「つぶる」「つぐむ」の対象は，自分の目や口にかぎられるだろう。とすると，この点でもさらに「つぶる」「つぐむ」は範囲がせまいことになる。(p. 128 参照。)

〔97〕 しかめる＜ゆがめる

「しかめる」は人間の顔についていう。動物の顔についての例はなかった。

○叫ぶ子供。顔をしかめて耐えている子供。（人間の壁・上 272)

「ゆがめる」は広くもの一般についていう。

〈顔〉

○上り框へぶつかって少年は顔をゆがめた。（むらぎも 279)

〈その他〉

○燈台の光りは規則正しく茫漠とそれをよぎり，レンズの影は白いシャツと白い浴衣の背を，丁度そこのところだけ形を歪めながら廻つてゐた。(潮騒 162)

なお「ゆがめる」には，このほかに，もっと抽象的なことについて，正しい姿からはずれるようにする，という用法があるが，これは別の意味であろう。

○その貧しさのなかで，先生も苦しみ生徒も歪められて行く。（人間の壁・上 83）

「しかめる」「ゆがめる」とも，「顔をしかめる」「顔をゆがめる」という表現のほかに顔の部分について使った用例がある。

○ちよつと眉を顰めた。（生まざりしならば 182）

○穢い白髪と手拭とを吹かれながら目を瞠めていつた。（土・上 102）

○俊一は額を顰めて目を瞑つた。（生まざりしならば 219）

○「うむ，困つたなあ」卯平は深い皺を瞠めていつた。（土・上 50）

○一人がしかめた眼差で，ウインチを見上げて，（蟹工船 104）

「しかめる」については，「まゆをしかめる」という例が多い。「目をしかめる」は，数例あるが，みな「土」の中に出てくるものである。「ひたいをしかめる」「しわをしかめる」「まなざしをしかめる」は，それぞれ上にあげた1例しかなかった。

「ゆがめる」の方では，

○女のような唇をゆがめてどなっているのは「染」だ。（真空地帯・上 53）

○黄色ツぽくムクンだ片方の頬と眼蓋をゆがめた。（蟹工船 102）

○地野上等兵は眼の辺りをゆがめて顎から上をしゃくって（真空地帯・上 97）

など。このほか，「口」「口もと」「口のはた」「唇のすみ」などが「ゆがめる」の目的語になっており，この中では「口」「唇」などが多い。

このようにどちらも「顔」以外の単語に結びついて使われることもあるが，実例にあたったかぎりでは，「しかめる」「ゆがめる」に共通して使われているのは「顔」という例だけだった。顔の部分については，「しかめる」は目やまゆのあたり，「ゆがめる」は口・唇のあたりについての表現が多い。そして「ゆがめる」は，目のあたりについてもいうが，「しかめる」は口のあたりについてはいわず，顔の上の方にかぎられている。このことは当然，顔のようすをどのように変えるかということにも関係している。「しかめる」は，目・額のあたりにしわを寄せることである。「ゆがめる」は，主として口のあたりの形をかえることであるが，上にあげた「真空地帯（上 97）」の例などは，「しかめる」といいなおしてもいいようなゆがめ方だろう。したがって「しかめる」「ゆがめる」との対立は，「しかめる」は顔，「ゆがめる」は一般，ということ以外に，「しかめる」が顔の上半分に使われるのに，「ゆがめる」は顔じゅうの各部分についていうことができる，という点にも求められる。また「しかめる」がしわを作ることであるのに対し，「ゆがめる」はしわを作ってもいいし，口を妙なかっこうに開いてもいいし，要するに正常な形からずれた姿にすることである，という，ようすの点にも求められる。いずれにしても「しかめる」は「ゆがめる」にくらべてせまいのである。

「しかめる」も「ゆがめる」も一般に主語になるのは人をあらわす名詞である。すなわち，「だれだれは（自分の）顔をしかめた（ゆがめた）」というかたちをとる。そして「しかめる」については，このような型の文しかなかったが，「ゆがめる」については，人以外のものが主語として表現されているつぎの1例があった。

○と，乾燥した，意地の悪い微笑が，関の彫刻的な顔を歪めた。（真知子・前 176）

これはもちろん一般的な型の文とはいえないが，誤用でもない。「しかめる」については，たまたま例がなかっただけでなく，おそらくこのような型の文はありえないだろう。「ゆがめる」のばあい，「顔をゆがめる」以外の抽象的な用法だったら，主語に人間以外のものが立つ例が多くみられる。

○子供の活発な直感が，先生の言葉をゆがめたり，誇張したり，裏返したり，分析したりする。（人間の壁・上 56）

「微笑が顔をゆがめる」という表現は，このような抽象的な表現と関係があるであろう。

〔98〕 かしげる＜かたむける

「かしげる」は，おもに，首やそれに近い部分をかたむけることをいい，「かたむける」も，これと同じようなばあいに使われることがある。

「かしげる」	「かたむける」
○首をかしげて私にたづねた。（富岳百景 66）	○女中は首を傾けた。（暗夜行路・前 85）
○省吾は小首を傾げて，一寸口笛吹く真似をした。（破戒 211）	○叔父の方は，どういうわけか，小首を傾けた。（自由学校 40）
○お千代さんは蒼白い顔をかしげて，（放浪記 36）	○いつもの寂しい笑顔を傾けた。（多情仏心・前 295）
○私は桃割れの髪をかしげて電車のガラス窓で直した。（放浪記 32）	○女の人は美しい襟足を見せ，丸髷を傾けて，（暗夜行路・前 82）
○栗色の髪の濃い頭をかしげて考へてゐたが，（伸子・上 79）	○山高帽の頭だけを小さい仲子の方に傾け，（伸子・上 50）

しかし，「かしげる」については，上にあげた，首・頭……がほとんど対象のすべてであって，これ以外の例は見当たらないのに対し，「かたむける」はずっと広い。すなわち，からだの部分だけをとってみても，「耳をかたむける」という慣用句のほか，肩・胸・あごなどについて「かたむける」といった例があり，さらにつぎのように，からだの部分以外のもの（道具）についていった例も多く見られる。

○笊を傾けて鰯を零すことがある。（土・上 115）

○傘をかたむけて家を出る。（人間の壁・上 272）

「かしげる」がからだの部分以外について使われたのは，つぎの1例だけである。

○主婦が傾げた大徳利の口を玻璃杯に受けて，茶色に気の立つ酒をなみなみと注いで貰ひ，（破戒 231）

この例については，一般につかわれたものか，それとも誤用，ないしは方言的なものとみとめるべきか，という点に問題はあるが，少なくとも圧倒的多数の例は，くびなどをかたむける例であって，かりにこの「破戒」の例が正しいとしても，傾向としての特徴を「かしげる」にみとめることはできる。

なお，「首をかしげる」「首をかたむける」は，疑問の気もちの表現としての動作をいうことが多い。

○上さんは，「左右ですね」と云つて，少時首をかしげてゐましたが，「かし家はちよいと……」と全く思ひ当らない風でした。（こゝろ 172）

○二人は決しかねてついに伯父に相談をかけた。伯父も首を傾けた。（こゝろ 141）

これらのばあいには，実際に首をかたむけたかどうかという点よりも，むしろ主体が疑問に感じたという気もちの方に重点が移っている。そして，

○それが稲の穂首の垂れる頃からお品は思案の首を傾げるやうになつた。（土・上 61）

という例では，実際に首をかたむけたというようなことは，ほとんどどうでもよくて，「首をかたむける」は，まったく疑問に思う，迷うというような精神状態の象徴的な表現になりきっている。しかし，「首をかしげる」「首をかたむける」は，つねにこのような気もちをあらわすために用いられるのではない。たとえば，つぎにあげるような例では，ことさら疑問の気もちをもっているわけではなく，何となく首をかたむけているにすぎない。

○「ふむ。」とお島は首を傾げて聴惚れてゐた。（あらくれ 168）

○女は自由になっていた。そして物憂そうに首を傾け，彼の肩へその頬を押し当て，休んでいた。（暗夜行路・前 260）

〔99〕 くびる＜しめる

「くびる」は，人の首をしめて殺すこと，または，殺そうとして首をしめることをいう。これに対して，「しめる」の方は，首にかぎられない。

○彼は両手を腹の上でくみあわせて，花枝の首のまわりをぐっとしめる形をとった。（真空地帯・上 158）

「くびる」は，対象が首であることが，はじめからはっきりしているので，「首のまわりをしめる」のように，ことさら限定することがない。だから上のままの文脈で「しめる」を「くびる」にはおきかえられないが，「花枝の首のまわりをしめる」全体は，「花枝をくびる」におきかえることができる。

○頭を手拭で力一杯に締めないと，眠れなかつた。（蟹工船 53）

このように，首以外の部分をしめるばあいには，「くびる」では，おきかえられない。もちろん「しめる」はからだの部分にかぎらず，それ以外のものについても，つかわれる。

○鉄の楔で柄の先を締めた其の唐鍬の四角な穴の処が俄に緩んだ。（土・上 99）

なお，「くびる」の実例はつぎの1つしかなかった。

○弾丸の入つた跡であらうが，穴の痕跡はなく，周囲の肉の膨脹が，その腸をソーセージのやうにくびつてゐた。（野火 78）

これは，首をしめるのとはちがって，「くびれる」に対応する意味，つまり「細くなるようにしめつける」という意味であって，このような意味でならば，上の例が示すよ

うに，首以外のもの一般についてつかわれるであろう。

〔100〕 うつむく／うつぶす<ふす，あおむく

これらは，上下の方向に，からだの全体あるいはその一部分が向くことだが，どの部分が向くのかに，ちがいがある。

「うつむく」は，首・顔についていう。

○襲子はうつ向いてゐた首を急に上げて微笑した。（波 272）

これにともなって上半身がかたむくばあいもある。たとえば

○うつむいて上靴（スリッパー）を穿（は）かうとしてゐる佃の姿が（仲子・上 167～168）

では，首だけではなくて，上半身をかなりたおしているのであろう。しかし，そのばあい大事なことは，やはり顔が下を向いていることである。かりに上半身をななめにたおしても，顔が前を向いていれば「うつむく」とはいえない。また，下半身までふくめて，からだ全体を下に向けることは，「うつむく」ではない。

「うつぶす」は，からだ全体を下に向けるのが原則である。

○お品は俯伏したなりで煙臭くなつた蒲団を喰べた。（土・上 33）

顔を問題にしているばあいでも，当然の前提として，からだ全体が下を向いていなければならない。

○お品は俯伏した額を枕につけた。（土・上 32）

この例で直接表現しているのは，額が下を向いていることだ。このばあい全身がやはり横になって下を向いているのである。もっとも，「うつぶす」は，かならずしも頭から足の先までですっかり横たわっていなければならないわけでもない。上半身だけが水平の状態になっていれば，それで「うつぶす」といえる。

○女中のお安さんは，多い髪のハイカラな巻きかたに，黄色い厚い留櫛を見せて，向うのテイブルに俯（うつ）ぶした儘，正体もなく居眠をしてゐる。（桑の実 4）

しかし，「うつむく」とちがって，首だけでは「うつぶす」とはいえない。

「ふす」は，首だけでいいばあいと，全身のばあいとがある。

○俯して五丈に余る水面を見，仰いで頭を圧する十丈に近い絶壁を見る時は，（恩讐の彼方に 73）

では「うつむく」同様に首あるいは上半身だけで，それも水平まで曲げずに少々ななめにしただけでもよい。そして，このような用法の「ふす」は，「うつむく」とちがって，なにかをみるための動作であるという限定がある。そのような限定がないばあいには，

○或ひは道にその歩行の方向と平行に伏し，或ひは，恐らく水を飲むためであつたらう，道に沿つた溝まで匍ひ出して，水に頭を漬けて死んでゐた。（野火 125）

のように，からだ全体が横たわることをあらわす。

「あおむく」は方向が逆だが，やはり「ふす」と同様に首だけのばあいと全身のばあいとがある。

○謙作は仰向いて，また目薬をさした。（暗夜行路・前 88）
では首だけ上に向けたのだし
○煎餅蒲団の端から女の仰向いた顔と，赤とんぼの頭がのぞいてゐた。（本日休診 73）
ではからだ全体を上に向けているのである。

〔101〕 かがめる＜おる，まげる，おりまげる

「かがめる」は，からだの部分について使い，「おる」「まげる」「おりまげる」は，からだの部分をも含めて，もの一般についていう。今「かがめる」とその他の表現とがともにおなじ対象についてつかわれている例を並べてあげると，つぎのようになる。

「かがめる」	「おる」など
○民子が体をくの字にかがめて，茄子をもぎつつある其横顔を見て，（野菊の墓 12）	○立つてゐられないで軀を折つて畳んだやうに蹲つてゐる酔漢を見ると，（帰郷 103）
	○彼は闇の中に体を曲げて，自分のところから二つ三つ先の席に眼を走らせた。（波 169）
	○行一は身体を折り曲げて叫ぶのだった。（くれない 39）
○彼女はテーブルの上に身をかがめて，小声になった。（人間の壁・上 199）	○いかめしいクレーンは船艙の上に身を折り曲げてゐた。（潮騒 135）
○まだ九人しか集まらない署名簿を抱いて，背をかがめて歩いて行った。（人間の壁・上 328）	○背を曲げて，日向ぼっこをしていて，眠っていくことがある。（厭がらせの年齢 281）
○もつと目立つほど背中を屈めるやうにしてゐた。（風立ちぬ 109）	○上等兵は背中をまげて長い手で木谷の肩を押した。（真空地帯・上 37）
○胸にかけた小さい金の十字架がぶらりと前に垂れる程頭をかゞめて（青銅の基督 86）	○苦笑とも極りわるがりともつかない複雑な笑ひかたをして頭を曲げた。（仲子・上 75）
○彼女は腰をかがめて言った。（人間の壁・上 213）	○宇平は床に頭が届くほど丁寧に腰を曲げた。（波 85）

このほか「かがめる」だけにあつた例としては，つぎの2つのばあいがある。
○小腰を屈めて，遠慮勝に中へ入つた。（平凡 58）
○甲を浸して爪先を屈めながら，雪のやうな素足で石の盤の上に立つて居た。（高野聖 39）
「かがめる」になくて「おる」「まげる」「おりまげる」などにある例も多い。それで，からだの部分についてどのような表現がとられているかをまとめると，以下のようになる。

	かがめる	おる	まげる	おりまげる
からだ	◎	◎	◎	◎
身	◎			◎
背	◎		◎	
背中	◎		◎	
上半身		◎	◎	◎
頭	◎		◎	
首		◎	◎	
唇			◎	
肩			◎	
手				◎
ひじ			◎	◎
指		◎	◎	◎
腰	◎		◎	
ひざ		◎	◎	
足		◎	◎	◎
つまさき	◎			

「おる」「まげる」「おりまげる」は，もちろん，からだの部分以外のものを対象とするばあいに使われた例もある。

○園田が坐つてゐた座布団を，寝たまゝ腕を延ばして引張り寄せ，二つに折つて頭の下にあてがつた。（波 22）

○漸くのことで枝を曲げて其針をとつた。（土・上 86）

○一応ばねを小戻しして適当に折り曲げてもよいのですが，（若い女性 1956年4月 168）

上にあげた例をみると，「かがめる」と「おる」や「まげる」が同じ部分について使われているばあいに，そのあらわしている現象は，ほとんど同じであるとみられる。ただし，「指をおる（まげる）」や「ひじをおる（まげる）」など，手に関する表現が「かがめる」にない点が注意される。すなわち，「かがめる」はからだの部分をおりまげることであるが，その際結果的にからだが低くなるのが大事なのであって，その点で単に「おる」「まげる」「おりまげる」などというのとは区別される。ただし，この点「高野聖」の例にある「爪先を屈める」は，ややはずれることになる。このいい方が現在も一般に用いられるかどうかは，明らかでない。

「かがめる」は，からだについての表現であるという以上に，さらに，自分のからだを対象とするという限定がありそうに思われる。（p. 128参照。）これに対して「まげる」は，自分のばあいでも他人のばあいでもよい。たとえば，つぎにあげる「冬の宿」の例では，自分のからだ，「土」のばあいは他人のからだを対象としている。「おる」「おりまげる」も，多分「まげる」と同様，他人のからだについても使うのではないかと思われるが，この方は適当な例がなかった。

○僕は体を曲げてねむらうとする。（冬の宿 87）
○お品の硬直した身体は曲げて立膝にして棺桶へ入れられた。（土・上 54）

〔102〕 たつ／かがむ，しゃがむ，うずくまる，すわる，こしかける／かたむく，かしぐ，おきる／ねる，はう，ふす，よこたわる，たおれる，ころぶ，ひっくりかえる

これらは，みな人間の姿勢をあらわす。そして，姿勢にとっては，からだのどの部分がはたらいているか，その部分はどの方向を向いているか，ということが基本的な要素である。もちろん，厳密にいえば，からだの部分と方向とだけは，これらの動詞の意味を規定しつくせない。たとえば，鉄棒にぶらさがったかっこうと，つまさき立ちで上に手をのばした姿勢とは，からだの各部分のようすはにているが，後者が「たつ」なのに対し，前者は「ぶらさがる」であって「たつ」とはいえない。つまり，「たつ」には，からだを足でささえる，という要素が必要なのだ。しかし，上にあげた動詞を区別しようとするかぎり，やはり，もっとも重要なのは，からだの各部分の方向・角度である。

これらの動詞は，一定の姿勢をとっていることと，その姿勢をとることと，つまり状態と変化とを，ともにあらわす。たとえば「ねる」という動詞をとってみると

○いつも患者は一人用の寝台に寝てゐるさうである。（本日休診 67）
○ベッドに寝たままそれを受取ると，（風立ちぬ 108）
○父は寝ながら新聞を読んでゐた。（こゝろ 130）

などでは横になったままでいるという状態をあらわし

○じたばたせんで，手術台に，寝るだけぢや。（帰郷 336）
○緒方は並べた椅子（いす）の上に仰向けに寝た。（暗夜行路・前 89）
○自分にあてがはれてゐる室に入つて仰向けにねて，あーあと云つて見た。（友情 60）

ではそのような姿勢になるという変化をあらわす。

○そこここゝの小松の傍（わき）には臥（ね）たり起きたりして居る牡牛の群も見える。（破戒 113）

のばあいには，状態とも変化ともとれる。

状態と変化のどちらに重点があるかは動詞によってちがう。「ねる」や「よこたわる」「すわる」などでは，状態をあらわすばあいがかなり多いが，「たおれる」「ころぶ」などでは，ほとんどが変化をあらわす。しかし，状態も変化も，以下のばあいには一しょにしてあつかう。

これらの動詞を大きくグループにわけると，まずおきている姿勢とねている姿勢とにわけることができる。「おきる」「たつ」「すわる」「こしかける」，さらに「かたむく」「かしぐ」などは，みなおきた状態，ねていない状態についていう動詞だ。一方「ねる」「はう」など，さらに「たおれる」「ころぶ」たどは，横になった状態，あるいは横になることをあらわす。そして起きている状態については，さらにそれが直立しているもの，すなわち「たつ」と，ひざや腰がまがった状態の「しゃがむ」「すわる」「こしかける」などとにわかれ，後者はさらに，重量をささえているのが足であるか，しりであ

るか，というような観点で区別される。いま，これらの動詞を区別する上で比較的大切だと思われる特徴，すなわち，からだの部分とその状態とについて表をつくると，つぎのようになる。

	上体が水平	足でささえる	しりがついている	ひざが折れている	すねが垂直
たつ	±	＋	－	－	＋
かがむ	±	＋	－	±	±
しゃがむ	－	＋	－	＋	－
うずくまる	－	±	±	＋	－
すわる	－	－	＋	＋	－
こしかける	±	－	＋	＋	＋
おきる	±	±	±	±	±
かたむく	－	±	±	±	±
かしぐ	－	±	±	±	±
ねる	＋	－	±	±	±
はう	＋	－	－	±	－
ふす	＋	－	±	±	±
よこたわる	＋	－	±	±	±
たおれる	±	－	±	±	±
ころぶ	±	－	±	±	±
ひっくりかえる	?	－	±	±	±

この表で，＋はそのことが積極的にいえるもの，－はそうであってはいけないもの，±はどちらでもいいものをあらわす。

つぎに動詞ごとに問題になる点をのべていくことにする。

まず「たつ」について。これが足で全身をささえ，上体が垂直であるような姿勢をさしている点については，問題がない。ただ，ほかの動詞との関係でいうと，「かがむ」との対立点について，ふれなければならない。あとで「かがむ」のところでのべるように，「かがむ」という動詞のあらわす姿勢には，ひざはのばしたままで腰をまげ，上体が水平であるような姿勢もふくまれる。そして，これはまた，「たつ」であらわすことのできる姿勢でもある。もっとも，「かがむ」と共通のこのような姿勢を「たつ」で表現した実例はなかった。「たつ」であらわされている姿勢のうち，ほかとちがっているものとしては，つぎの例がある。

○途中で膝でたった安西二等兵の苦しげに歯をくいしばった様がたえられなかった。
（真空地帯・上 40）

主人公はこのまえの段階でゆかをはっているのである。それが途中で立ちひざの姿勢になったのだが，立ちひざの姿勢をとること，あるいは立ちひざの姿勢でいることを1語

であらわす動詞はない。これは「たっている」とも「すわっている」ともいいようのない，また「しゃがんでいる」「うずくまっている」などといっても，ぴったりしない姿勢だ。

「たつ」は一般に人間をあらわす名詞が主語として結びつく。しかし，この姿勢をとるときに，特にはたらく部分が足や腰であるところから，「足がたつ」「腰がたつ」といういい方がとられることもある。このばあい，つぎにあげるように打ち消しのかたちをとって可能動詞的につかわれる。すなわち，「足がたたない」「足腰がたたない」というかたちで，たつことができないことをあらわす。

○両足(りやうあし)が**立ちません**のでございますから，（高野聖 59）

○六角棒で腰が**立たなく**なる程なぐりつけることは（蟹工船 57）

○それこそ厩当番はどやしたおされて，足腰が**たたなく**なったというような話もした。（真空地帯・上 155）

「たつ」は，動物についても，使われることがある。実例では，つぎのように，けだものについていった例しかなかったが，このほか，たとえば鳥やある種の虫についても使うことができるだろう。

○子山羊は**立った**ままの姿勢で口だけを動かし，（暗夜行路・前 38）

○遠く正面に控へた林際の湿地に，二頭の水牛が**立つて**ゐた。（野火 70）

これら動物についての例では，＜上体が垂直である＞という規定はあてはまらない。人間がもしこれらのけだものと同様の姿勢をとったとすれば，それは「たつ」ではなくて，「はう」と表現されるものだ。したがって，「たつ」とよばれる姿勢は，その動物によってかならずしも一定していないことになる。ただ，人間のばあいとこれらのけだもののばあいとに共通していえることは，足でからだ全体をささえる姿勢であること，そしてふつうの移動のさいにとる姿勢であることである。

つぎに「かがむ」「しゃがむ」「うずくまる」は，基本的には，からだを足でささえながら，ひざをまげており，しりは地面についていない，そういう姿勢である。つぎにあげる例はみなこの説明にあてはまる。

○便器の上に**かがみながら**そこから小石や貝がらを取りだすと（真空地帯・上 139）

○片山は爪先き立ちで**しゃがんで**，冷たさへの抵抗でからだを精一ぱいに縮めて，股のところへ両手をさしこんだのを両方の膝でしめつけている。（むらぎも 209）

○そしてそこに，一人の男の子が地面に**うずくまり**，五寸釘で土の上になにか描いていた。（人間の壁・上 209）

もっとも，「うずくまる」については，しりをついてない，という積極的な例にこれがあてはまるかどうかは，多少疑問がある。しかし，すくなくとも，「かがむ」「しゃがむ」と同様の姿勢をも「うずくまる」であらわすことができることは，あきらかである。

しかし，これらの動詞には，このように共通の基本的な姿勢のほかに，多少問題になるばあいがある。まず「かがむ」の例には，上にもちょっとのべたように，ひざをまげ

ずに腰をまげる姿勢をあらわしたものがある。

○仲子は屈(かが)んで鍵穴(かぎあな)を見た。（仲子・上 54）

このばあい，さきにあげた「かがむ」と同様に，やはり，ひざをまげてしゃがみこんだ姿勢をとっているものと解釈することもできる。しかし，かぎ穴をのぞくには，上体だけを腰から折りまげたとみる方が自然だろう。また，

○おとされた木銃(もくじゅう)を拾おうとかがんだところを（真空地帯・上 171）

のばあいには，ひざを折ってしゃがんだ，ととることもできるが，むしろ，常識的に考えれば，ひざはのばしたまま腰を折ったのだろう。このような姿勢のばあい，それはまた同時に「たつ（たっている）」ともいえる。ひざを折ってしまえば，もう「たっている」ということはできない。

つぎに「しゃがむ」についてだが，ここでもやはり，ひざをまげていないのではないかとおもわれる例が1つだけあった。

○新聞くばりの足音をたてないで，商店街なため投げないでちょっとしゃがんでは挿しこんで，（むらぎも 211）

この例については，かぎあなをのぞくために「かがむ」のと同様，上体を腰のところから折りまげただけで，ひざまでまげなかったとみる方が自然だろう。ただし「しゃがむ」の中では，これ1例だけが孤立している。

つぎに，「しゃがむ」は，ふつうしりを地面につけないで体重は足でささえているのだが，しりまでつけてしまって，「すわる」とも表現できるような姿勢をとっているのではないか，とみられる例もある。

○砂の上にしやがみながら，長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で，（こゝろ 8）

この例では，すぐつぎに「尻を卸した所」とあることからみて，砂の上にすわっていたのではないかと考えられる。また

○お島は疲れた体を，草のうへに休めるために蹲坐(しやが)んだ。（あらくれ 232）

の例でも，「疲れた体を，草のうへに休める」というのは，むしろすわりこむときにふさわしい表現だ。

つぎに「うずくまる」だが，これは「かがむ」や「しゃがむ」よりも，もっととりうる姿勢の範囲が広い。ひざを折って上体を地面に近づけているという条件がまもられていれば，あとはいろんな姿勢を自由にとっていてもよい。たとえば

○炬燵にうずくまりながら，思わず口に出すのだった。（厭がらせの年齢 287）

は，あきらかに，しりを下につけてすわっているようすだ。また

○行介は自分の前に牛のやうな黒いものがうづくまつてゐるのをほのかに認めた。宇平だつた。声こそ立てないが，彼は突つ伏して泣いてゐるらしかつた。（波 59）

は，手やひたいを前につけて，ひれふしている姿だ。これらについては，たとえば「かがむ」といいなおすことはむずかしいだろう。

「かがむ」「しゃがむ」は人間以外の動物について使われた例がないが，「うずくま

る」は，つぎにあげるように，いろいろな動物について使われている。

○見給へ，其処に片眼の犬が蹲(うづくま)て居る。（武蔵野 30）

○青銅の大きな二匹の獅子の踞まつた入口から，（真知子・前 151）

○さらに壺を木の棒で掻きまはされて，蛸は，不承不承，昼寝の最中を起された人のやうに，全身を辷り出してうづくまつた。（潮騒 16）

このことは，おそらく，「うずくまる」が，人間のばあいについて，いろいろな姿勢をとる自由をふくんでいることと関係があるのだろう。つまり「かがむ」「しゃがむ」がより具体的に人間の姿勢をいいあらわしているのに対し，「うずくまる」は，からだのどの部分がどのような姿勢をとるかということよりも，からだが全体として低く小さくまとまっていることをあらわすのであり，その意味で動物にまでつかえるのではないかとおもわれる。つぎに「すわる」だが，これは

○炉端に大柄の女が後向きに坐つてゐた。（雪国 87）

のように正座しているばあい，あるいはあぐらをかいているばあいも，また

○駒子の立つた後の籐椅子に坐つてゐると，（雪国 73）

のように腰かけているばあいも，ともにふくんでいる。すなわち，「すわる」は「こしかける」の上位語である。ここでやや問題になるのは，ひざがまがっていなければ「すわる」とはいえないかということだ。「こしかける」のばあいには，あきらかにひざがまがっている。また正座やあぐらのときも，ひざがまがっている。それ以外の姿勢，すなわち腰をおろして，ひざをのばしたまま，まっすぐ前につきだしているような姿勢を，「すわる」といえるかどうか，ということである。こういう姿勢をとっていると，あきらかにみとめられる例は，「すわる」にはなかった。また，ほかの表現を考えても，「こしをおろす」という以外に，そういう姿勢をとくにあらわすことばは思いつかない。ひざをのばしていなくても，腰をおろして，ひざをたてているような姿勢について，「すわる」といえるかどうかも問題になる。

○彼は寝台の方にすわって，体をうしろの整頓棚の下のくらいところにおしこんでいるか，或は毛布をめくって前につき出した足をつつみこみ……そのたてた膝の上にあごをのせて班内を見廻しているかした。（真空地帯・上 80～81）

この例で，もし「すわって」が，「おしこんでいるか」までしか，かからなければ，正座あるいはあぐらの姿勢をとっている，と考えられるが，そのつぎの「足をつつみこみ」「あごをのせて」までかかっているとすれば，これはふつう「すわる」とよばれている範囲とはちがう姿勢になる。

つぎに「おきる」は，立っていても，すわっていても，またしゃがんでいても，要するに以上にあげてきた姿勢のどれをとっていても，つかうことができる。「ねる」に対する反対語であって，ねていなければ「おきて」いるといえるのである。

○佐々が初めて次の間の長椅子まで起きて来た時，（伸子・上 60）

ではたっている姿勢，

○母は帯を結(ゆ)うて蒲団(ふとん)の上に起きてゐた。（野菊の墓 47）

ではすわっている姿勢とおもわれる。なお，つぎの例は犬についてつかわれており，ねていた犬が足でたったことをあらわしている。

○さうするとな，お宅のは勃然(むっくり)起きましてな，（平凡 42）

つぎに「かたむく」「かしぐ」は，やはり「おきる」と同様，いろいろな姿勢につかわれる。ねてさえいなければ，

○彼が手をはなすと木谷の体はまたもとどおり左の方に傾いた。（真空地帯・上 88）

のように，たっていても，

○春子は傾きそうになるからだを，膝を崩して支えた。（人間の壁・上 262）

のようにすわっていても，「かたむく」という姿勢をとることができる。「かしぐ」については，上の「かたむく」のような適当な例はなかったが，やはり同様だとおもわれる。

つぎに「ねる」「はう」「ふす」「よこたわる」など，からだが水平になったものをとりあげる。これらのうち，「ねる」「ふす」「よこたわる」などについては，いま特にいうことはない。「はう」についてだけ，すこしのべる。「はう」姿勢をとっている動物は，大きくわけると，つぎの3つにわかれる。

第1は

○夜明近く水色の細い蛇が，スイスイと地を這っている夢を見た。（放浪記 99）

○なめくぢが地面を匐ふほどののろさだが，（蟹工船 69）

のように手足がまったくなく，胴体が地面その他の面にじかについている動物についていった例である。

第2は，足がある動物についてである。このばあい，からだは地面などに密着しているわけではない。

○水色の蟹が敷居の上をゴソゴソ這って行く。（放浪記 145）

○あたりのひつそりしてゐる土の上を，黒い大きな蟻が這つた。（桑の実 30）

このほか，虫や，は虫類についての例がいくつかある。たとえば，やもり・がま・むかでなど。それ以外のけだものについては，わずかにつぎの1例があっただけである。

○膝から下が保護されてゐる場合，地に匐ふ動物は無視することが出来る。私は銃口を下げて彼等を脅かしつゝ，急がしくあたりに眼を配つた。犬の声によって警告された人間の方が，懼るべきであった。（野火 74）

ここで「彼等」といっているのは犬であり，地にはう動物の中には，へびもかえるも，また犬やねこも，ふくまれているものとおもわれる。犬のばあいには，かにやありとちがって足であるくこともできるし，足を折って地面に腹を直接つけることもできる。そして後者の姿勢の方が，「はう」というのには，ふさわしいかとおもわれるが，ここでは足であるくことを，「(犬が) はう」と表現している。この姿勢は，前にみたように「たつ」ともいえるものである。とにかく上にあげた1例しかなかったところからみて，どちらの姿勢についても，犬その他のけだものについては，「はう」はあまり適当でないのであろう。そして上の例，すなわち「犬がはう」といっているばあいに，こ

れは「へびがはう」や「かにがはう」のとひっくるめて，要するにからだが非常に地面に近い位置で水平にのびた状態にある，ということをあらわしているのである。

第3のばあいとして人間の例がある。人間については手と足が区別され，ふつうは足だけであるいているのだが，手をついた姿勢，すなわち，犬やねこがふつうあるくときの状態に近い姿勢をとれば，それは「はう」とよばれる。

○我々は匍つて行つた。前方には黒々と林の輪郭が見えた。あそこまで行けばよい。肱と膝を用ひる中腰の匍匐の姿勢で，早く進んだ。（野火 115）

しかし，人間のばあいには，かならずしもこのような姿勢でなく，腹をべったり地面やゆかにつけた姿勢でも，やはり「はう」ということができる。実例はなかったが，そうもとれる例はあった。つまり，人間のばあいには，第1にあげた，へびに近い姿勢でも，また第2にあげた，ありや犬に近い姿勢でも，ともに「はう」ということができるのである。このような点からみて，「はう」の本質は，からだが水平状態で地面に接し，あるいは地面にひじょうに近くあることをあらわすと考えられ，腹が地面についているか，またはそうではなくて，手や足でからだをささえているか，という違いは，それほど本質的なものとはおもわれない。

つぎに「たおれる」「ころぶ」「ひっくりかえる」など，おきている状態から，ねている状態への変化をあらわす動詞をとりあげる。このうち，「ひっくりかえる」についてははっきりいえないが，「たおれる」「ころぶ」のばあい，かならずしもねている状態までいく必要はない。すなわち，上体が直立したままであっても，ひざをついたり，しりもちをついたりすれば，それは「たおれた」ことであり，「ころんだ」ことになる。あきらかにそういう状態だととれるような例はなかったが，たとえば，つぎにあげるものでは，それに近いようすを考えてもおかしくない。

○彼は食台（机）の間に**倒れ**，脇腹を食台の角にぶちあてた。（真空地帯・上 111）
○石に躓いて**転んだ**，其時膝節を痛めましたものと見える。（高野聖 21）

「たおれる」「ころぶ」のばあい，上体が直立している人間についていうだけではない。上体が水平であっても，足であるくのがふつうである，けだものや虫については，「たおれる」「ころぶ」がつかわれることがある。

○死んで其処に**倒れた**種牛と，（破戒 148）
○蜂は少し歩いて**転び**，また歩いて**倒れた**。（雪国 128）

牛のばあいは，四つ足でからだをささえている状態は「たっている」と表現することができ，したがって上体が直立か水平かにかかわらず，「たおれる」は「たっている」状態から「ねている」状態への変化である，ということもできる。はちのばあいには，足でからだをささえてあるく状態を「たっている」というかどうか不明であり，したがって「ころぶ」や「たおれる」を，たっている状態からねている状態へ，と規定して，あてはまるかどうかも，わからない。さらに「たおれる」には，つぎのように，さかなについてつかわれた例がある。

○鯆は白い腹をうかべ，血に塗れた舟板の上に**倒れてゐる**。（潮騒 17）

このばあいには，背びれから胸びれの方へ垂直になって海の中を泳いでいる状態が，いわば「たっている」姿勢であろう。もちろん，さかなについてはそれを「たっている」とはよばないだろうが，そういう，ふだん運動するときの状態から死んでしまったときの姿勢への変化を「たおれる」があらわしているという点では，ほかの動物のばあいとおなじである。そして，さかなにまで「たおれる」が適用できるということは，それだけこの動詞が特定の姿勢をあらわすものから解放されて，抽象化しつつあることを示すものであり，やがてたとえば「刺客の手にたおれる」というような，まったく姿勢とは関係のない，死ぬことの表現へ移っていく可能性を示している。

「ころぶ」については，なお，2つのことをつけたしておく。1つはこれが，「ころがる」とおなじような意味，つまり，ぐるぐると回転して移動することをあらわすことだ。この意味は一般に辞典に登録されているが，現在では，むしろ，あまりつかわれないと思うので，その例をあげておく。

○薔薇の葉をこぼれた露は，転びながら輝いて蜘蛛の網にかかると，（田園の憂鬱 110）

○その時，側に積さなつてゐた罐詰の空瓶がひどく音をたてゝ，学生の倒れた上に崩れ落ちた。それが船の傾斜に沿つて，機械の下や荷物の間に，光りながら円るく転んで行つた。（蟹工船 66～67）

これらについては，現在では「ころがる」をつかう方が自然であろう。

○二人の顔の上へ宿の番頭などが三四人ころぶやうに下りて来た。（雪国 162）

の「ころぶやうに」，あるいは

○ハシが転んでもおかしい，と云われる十七八の年頃の娘さんが，（小説の泉 1956年5月 66）

の「ハシがころんでもおかしい」というような慣用句における「ころぶ」も，「たおれる」ということではなくて，「ころがる」という意味で用いられたものだろう。

第2にキリシタンが改宗することをあらわす用法についてである。これも，辞典には登録されているが，一般の「ころぶ」が自動詞であるのに対し，この意味での「ころぶ」は今回の資料（ただし「青銅の基督」に出てきた例だけだが）では他動詞として用いられているので，例をあげる。

○「立ちかへり者」とは一旦宗門を転んで再び切支丹に帰つた者のことである。（青銅の基督 22）

○なぜあれほど迄の残虐を忍んでも宗門を転んではならないのか。（青銅の基督 58）

1.1.2.1 植　物

植物だけに固有の動詞というのは，ひじょうに数がかぎられている。例をあげると，「めばえる」「萌える」「つぼむ」「さく」「しげる」「みのる」「熟する」「うれる」「かれる」などである。これらの動詞のばあい，その主体には植物の種類が名指されることもあり，またその植物の部分が登場することもある。例をあげると，

〈種　類（全 体）〉

○野には麦が青々と**萌え**，（冬の宿 155）

○石油を買いに行く道の，白い夾竹桃の**咲く**広場で，（放浪記 9）

○黄色に**熟する**梅の小枝を（土・上 197）

〈部　分〉

○桜も何年と見ないけれど，早く若芽が**グングン萌えてくれる**といい。（放浪記 203）

○筏かづらの花が垂れ，夾竹桃の白い花が**咲いてゐた**。（帰郷 66）

○黒く**熟した**つぶつぶの実を（桑の実 72）

〔103〕 しおれる＜なえる，しなびる

「しおれる」は植物についてだけいう。

○この前の水仙の花はもう**凋れて**しまつてゐたのだ。（冬の宿 46）

もちろん

○二人は自信のない，**しおれた**姿で写真をとられた。（くれない 139）

のように元気がなくなるという意味では，人間（動物）についてもつかわれるが，これは別の意味と見るべきであろう。

「なえる」「しなびる」は，動物についても植物についてもつかわれる。

〈動　物〉

○雑夫は黄色に**なえて**，船酔らしく眼だけとんがらせて（蟹工船 19）

○**しなびた**手でお婆さんは私の手をはらいのけた。（放浪記 134）

〈植　物〉

○家で植ゑると一度萎えた葉は皆落ちてしまひ，（短歌 1956年11月 67）

○ころころ萎なびた蜜柑のやうに転ろがされたであらう。（世界 1954年4月 317）

「しなびる」は，さらに生物以外のものについても，いうことができるかもしれない。たとえば風船など。しかしその実例はなかった。

〔104〕 むす＜はえる

「むす」は現代語ではもうあまり使われないことばであって，実例としては，こけと結びついたものだけがあった。

○苔の**蒸した**岩から水が滴り湧いてゐるのを（帰郷 267）

このほかに，「草がむす」といういい方もあるかもしれない。しかし「木がむす」といういい方はありそうにもない。つまり「むす」は植物のうちでも小さなものとだけ結びつく動詞である。これに対して「はえる」は，広くいろいろな植物について，もちいられる。木や草についての例はあげるまでもないが，下等な類についても，つぎのような例がみられる。

○朽ち腐つた藁屋根にむつくりと青苔が**生えて**居るやうな破家なりとも，（田園の憂鬱 20）

○芽をだすに都合よく暖（あたた）めると，すぐ泥に黴（かび）が**生えちやふし**。（仲子・上 154）

○だんだん菌がそれに**はえる**ようになるのである。（貧乏物語 64）

〔105〕 こる／かる＜きる

「きる」はひろく用いられる。「こる」は実例が1つもなかったが，木を切りとるばあいについてしか，いえないであろう。その木の中でも，さらにどういう木という限定があるかもしれない。

「かる」は「こる」に比べれば広いが，「きる」よりはかなり限定されている。すなわち，線状のもので，しかも，多くのばあい，かなりの数がそろっているものを切りとるのであり，そのさい一方の部分は，もとのものの一部分として残っている，というような切り方のときにつかわれる。具体的にいえば多くの例は

○落葉を掻くことや青草を刈ることが（土・上 96）

のように草の類（稲やササなども含まれる）をきるばあいである。しかし，また

○梅や杉や柿の枝葉が，追追に刈られたからである。（田園の憂鬱 32）

のように木の枝についてもいうことがある。草と同じ程度に細く小さい若木などならば，枝でなくても「かる」対象になるだろう。植物のほかには動物の毛が「かる」対象になる。

○胡麻塩の髪は短かく刈つてをり，（潮騒 127）

○板小屋の前で一匹の羊の毛を刈つてゐる女の背中，（真知子・前 63）

のようなばあいはよくつかわれる。

○口髭を刈り洋服を着，（つゆのあとさき 5）

のように「ひげをかる」という言い方はふつうは現在使われないと思うが，この例のほかに「暗夜行路」の中にもう1例あった。お茶の水女子大生についての調査では，「床屋で口ひげを刈ってきた。」という例文に対し，○—0，△—3，×—18だった。

1.1.2 生物以外

人間や動物のからだも，道具や自然物と同様に物体だと考えるとすれば，生きものを主体としない動詞はかなりふえる。しかし，これらも人間・動物を主体とするとみれば，純粋のものだけを主体とする動詞というのは，きわめてわずかな数になってしまう。たとえば「燃える」「おれる」「くだける」などという動詞は，ふつうは生物のからだを主体とすることはできない。しかし生物のからだが純粋に物体としてあつかわれれば，やはりこれらの動詞のしめす現象の主体になりうる。これらを除外して自然物や生産物だけを主体とする動詞の例というのをさがしてみると，特に固体のばあいにはごくわずかだが，つぎのようなものがあげられる。

〔金属を主体とするもの〕 さびる，さびつく

〔ある特定の道具を主体とするもの〕 ぬげる，すっぽぬける，ともる，なまる

〔かなり広い場所を主体とするもの〕 ぬかる，あれはてる，なだれる

〔かなり高いものを主体とするもの〕 そばだつ，そそりたつ，きりたつ，そびえる

液体（時として気体）を主体とする動詞はかなりある。たとえば「すむ」「にごる」

「よどむ」「わく」「したたる」「こおる」「にじむ」など。しかし，これらの動詞も血や涙や汗が時として主体になるという点を考えると，純粋に生物以外のものだけを主体にするとはいえない。比ゆ的用法以外には血・涙などにはつかわれず，自然現象における液体，または食料品としての液体などにもっぱら使うとおもわれるのは，つぎのような動詞である。

うちよせる，さかまく，うずまく，たぎる，みなぎる，ぬるむ，にたつ，にえかえる，につまる，わきかえる

1）自然物

〔106〕 **てる＜ひかる，かがやく**

これらの動詞は，天然の発光体については，みなつかわれるし，また，それらからでる光そのものについても，つかわれる。

〈発光体〉	〈光〉
○月はさやかに**照り**，此等の光景を朦朧たる楕円形の裡(うち)に描き出して，（武蔵野 29）	○夏らしい暑い日の光が，山間の貧しい町のうへにも**照つて**来た。（あらくれ 126）
○暁の星がまだ二つ三つ幽かに**光つてゐる**のを（風立ちぬ 125）	○遠く稲光りが**光つた**。（帰郷 281）
○夜毎，狼星が青白い光芒を斜めに曳いて**輝いてゐた**。（李陵 157）	○真直な幹をすかして陽光が輝き，崖に出た。（野火 46）

ただし，「星がてる」という例はなかった。この表現は，かならずしもありえないとはいえないが，おそらくまれであろう。このほか「ひかる」「かがやく」は人工の光をだす発光体についてもいう。

○糸を輪にしたようなタングステン線が，まだ明るさの残っているなかで線をはっきりさして**光っていた**。（むらぎも 181）

○もう，飲食店にネオンが輝き，客が混みかける時間だった。（自由学校 338）

「てる」は，ふつう自然現象についてだけで，人工の発光体についてはいわない。ただし，つぎの1例があった。

○蒸暑い工場のなかは綺麗に片着いて，電気がかつかと**照つてゐた**。（あらくれ 186）

「ひかる」「かがやく」は，また，発光体からの光を反射しているものについていうことがある。

○白萩らしい花が小高い山腹に咲き乱れて銀色に**光つてゐる**のを，（雪国 86）

○海は青々と陽に輝いている。（くれない 13）

「てる」は，このばあいにも，ほとんどつかわれない。採集した範囲では，つぎの2つが例外的な用例である。

○青畳敷(しい)た谷間が，何時しか金色(こんじき)に**照つて**，（思出の記・上 7）

○広々した庭に蹲踞が**照つて**，裏の孟宗藪に鶯が頻りに鳴いて居る。（思出の記・上

79)

これも，たとえば，「雪が日にてる」などのいい方はありそうに思われるので，決定的なちがいとは，いえないかもしれない。しかし，いずれにせよ，人工の発光体や反射体については「てる」があまり使われない，という傾向上の差はみとめられる。

〔107〕 **きりたつ＜そびえる，そそりたつ**

これらは，まわりのものからぬきんでて高くつき出ていることをあらわす。しかし，「きりたつ」はふつう岩やがけについてしかいわない。

○屏風のやうに**切立つ**た大きな岩の頂(いただき)に，裸体の青年が現れた。（波 250）

「そびえる」は

○断崖の松の下には，鵜の糞に染つた白い岩角が**そびえ**，（潮騒 29）

のように岩についていうほか，木や，たてものについてもいう。

○部落の中はアカシヤの大木が聳え，（野火 11）

○恭吾は屋根の藁の厚い山門を見上げてゐた。これも杉と松の中に高々と**聳えてゐ**る。（帰郷 124）

「そそりたつ」は，たてものの例しかなかったが，これも岩や木についてもいえるとおもわれる。

○五百メートルほどの彼方に**そそり立つ**，パラボラアンテナが，（未知の星を求めて 332）

このような主体のちがいは，「そびえる」や「そそりたつ」が高さに重点をおいているのに対し，「きりたつ」は，その勾配に重点をおいている，というちがいにもとづくものであろう。

2）生産物

〔108〕 **つくろう＜なおす**

これらはどちらも，ものを修理・修繕することをあらわすのに用いられるが，「つくろう」の方は対象が限定されており，「なおす」の方がずっと広いようである。まず「つくろう」と「なおす」の両方に用いられている例をみると，きもののばあいと道のばあいとがある。

〈きもの〉

○しばらく襦袢(じゅばん)の襟を**つくろったり**，（真空地帯・上 142）

○背中がほころびていたけれど私はわざと**なおして**はやらなかったのだ。（放浪記 52）

〈道〉

○路の崩れたのを見れば，土砂を運び来つて繕うた。（恩讐の彼方に 71）

○ぜひ日本の道路は，一刻も早く**直した**いものだね。（ダイヤモンド 1956年10月23日 15）

ただし，この道の例についていえば，「つくろう」は，こわれたのをなおすことであり，「なおす」は，こわれていなくても改良するばあいにつかわれる。このほか，た

とえばつぎの網・石垣については，おのおの片方の例しかなかったが，「つくろう」と「なおす」とを入れかえることができる。

○網をつくろっている船頭がある。（暗夜行路・前 152）

○其処の石垣を直したり，此処の畠を拓いたりして居るが，（思出の記・上 88）

道具について「つくろう」が使われたのは，上にあげた網のばあいだけだったが，わりに古くからあるもの，たとえば，なべ・かまとか，くわなどについては「つくろう」といえるかもしれない。しかし，つぎのように複雑な機械のばあいには，これは不適当だと思われる。

○おまけに，ミシンを直しにやる間，内職もできやしない……。（自由学校 276）

このほか，たとえば，「自動車をなおす」「タイプライターをなおす」なども「つくろう」であらわすのは不適当だろう。なお，ものの修理ではなくて，病気をなおすこと，文章をなおすこと，などについては，「つくろう」が使えない。

○腹痛をなおすために便所に行ったのである。（真空地帯・上 180）

○やれ文章を直して呉れの，弟子にして呉れのと（蒲団 8）

これらの動詞は修理以外に，また，かたちのくずれたものを，きちんととととのえる，というばあいにもつかわれる。

○乱れ掛けた衣物の合せ目を繕うた。（土・上 193）

○洋服の上着の崩れを直した端厳な常の津上が（闘牛 85）

きものについていうばあいには，「つくろう」も「なおす」もともにつかわれ，それを入れかえてもよいようである。しかし「つくろう」は，きもの以外には「装いをつくろう」のような抽象的な表現，あるいは「威儀をつくろう」「威厳をつくろう」のような慣用句の中でしかつかわれた例がなく，その範囲は非常にかぎられている。わずかにつぎの例が，この範囲からはみ出しているだけである。

○あの渠の上へ冠さつて居る猫楊の枝ぶりを繕うても見た。（田園の憂鬱 34）

これは，一般的な用例からずれているだけでなく，人によっては不自然に感じるかもしれない。「なおす」は，きものにかぎらず，つぎのように，いろいろなばあいに使われる。

○男は硝子戸に姿をうつして帽子のかぶりかたをなほした。（本日休診 78）

○昂子は子供の寝相を直してやつた。（波 234）

○テイブルの上の花の形を直しながらかう言つた。（桑の実 125）

○杵の先を扱落（こきおと）して臼の中を丸い形に直す。（土・上 185）

これらについては，「つくろう」ということは，むずかしい。

〔109〕 からげる，はしょる＜まくる，めくる，たくしあげる

これらの動詞は，きものの一部分をまくりあげることをいう。そして実例からみるかぎり，「からげる」「はしょる」は，すそ・しりについてしか使われていない。

〈す　そ〉

○時々裾をからげて出てゆく箱屋や芸者の姿が見られて，（あらくれ 115）

○裾を端折つて，大盥の中でつや子の体を洗つて（仲子・上 183）

〈し　り〉

○尻をからげて，薩摩下駄をはいて，手拭を腰にさげて，（思出の記・上 44）

○子供も尻をはしよつて，溝の中で遊ぶのだといふなら（波 70）

すそ・しり以外では，つぎの1例があっただけである。

○おくみはその間井戸ばたへ出て，褄をからげて傘をさしかけてゐてお上げした。（桑の実 100）

ただし，例がそれほど多くはないので，「からげる」などが下半身についてしかいえないと断言するのは危険に思われる。

これに対して，「まくる」「めくる」「たくしあげる」は，どれも下半身・上半身の例が，ともにあった。

〈下半身〉

○掻巻の裾を徐かにまくつて（阿部一族 31）

○或は毛布をめくって前につき出した足をつつみこみ（真空地帯・上 80）

○毛脛がむきだしになるまで裾をたくしあげた小男と（多情仏心・前 315）

〈上半身〉

○彼女は袖口をまくって（人間の壁・上 263）

○私は屍体の襦袢をめくり，彼が自ら指定した上膊部を眺めた。（野火 133）

○子供の肩上げをたくし上げては縫ってやっていた。（放浪記 235）

〔110〕 とぐ＜みがく

「とぐ」は刃物についていう。つぎにあげるのは歌の文句の一節である。

○ブラマフトラ河ねむるとき，月の光に剣研ぐ（平凡 1956年7月 295）

このほかには「米をとぐ」という例があるが，これは別の意味であろう。辞典には「鏡をとぐ」のように「みがく」とおなじような用法があると書いてあるが，そのような例はなかった。お茶の水女子大生についての調査では，「鏡をとぐ」という例文に対し，○—0，△—0，×—21 だった。

「みがく」の方は，いろいろなものについて使われている。

○兵器をみがきにきていた使役兵たちは（真空地帯・上 78）

○しゃれた新型の服にみがいた靴をはき，（人間の壁・上 231）

○床柱は椰子材の磨いたものだし，（河明り 263）

このほか，たとえば，金具・ガラス窓・なべ・かま・鏡・宝石・板の間などの例があり，また，からだの部分として，つめ・歯についていったものや，つぎの例があった。

○おそでは俊一の身体を拭つてやつて，障りのない所を丹念に磨いてやつた。（生まざりしならば 200）

「刃物をみがく」ばあいの例はなかったが，これも当然ありうるはずである。このように「みがく」の方がずっと対象の範囲が広いが，両者のちがいはそれだけでなく，「と

ぐ」は，主として，刃物が切れるように鋭くするためのしごとであるのに対し，「みがく」の方は，切れ味よりもむしろ，光・つやなどを出すためのしごとである。そのちがいが，このような対象の広さのちがいとなって，あらわれているのである。

〔111〕 あえる＜まぜる

「あえる」は，食べものにしかいわない。

○貝柱，大根茎を大根卸と甘酢で和え，器に形よく盛ってすゝめます。(婦人生活 1956年2月付録　春夏秋冬の家庭料理 318)

○果物は和える直前に縦四つ割にして (若い女性 1956年10月 133)

「まぜる」は，たべものについても，それ以外のもの一般についてもいう。

〈たべもの〉

○玉ねぎをきざんで，卵とまぜて，フライパンでいりつける。(人間の壁・上 42)

〈それ以外〉

○セメントに小砂利を混ぜたのを巻箕で陸から運ぶ者がある。(暗夜行路・前 139)

ただし，「あえる」は，食べものという以上にこまかい限定があるようである。すなわち，いわゆる「あえもの」をつくるばあいであって，上にあげた例のように，さらに熱を加えたり，ごはんにまぜるばあいなどについてはいわない。主として日本風の料理であり，そのように規定している百科辞典もあるが，「きゅうりのビネグレットあえ」などということばがあるのだから，西洋料理にもいわないことはないようだ。世界大百科辞典における「あえもの」の規定はつぎにあげるとおりで，単にまぜ合わせた食べものというよりはずっとせまい。このような「あえもの」を作ることが「あえる」という動作である。

○一つ以上の食品と調味料によって独自の味を醸成する調理の基本的一手法。調味料のうち，ことに酢，みそ，しょう油，植物油などに，ごま，くるみ，ピーナツ，からし，わさび，木の芽，または卵黄，豆腐，うになどを用い，多種多様にわたっている。いずれのばあいも常温であえることと，味つけをそれぞれの材料および調味品とつりあう程度にしておくことが条件である。(田村魚菜 執筆)

〔112〕 ほうじる，いる，いためる＜あぶる，やく

これらの動詞は，みな，なんらかのし方で対象に熱をくわえることをあらわす。そして，その際，水分をふくまないこと，水分をへらすように熱をくわえることも共通している。このうち「ほうじる」「いる」「いためる」は，たべものについてだけつかわれ，「あぶる」「やく」は，たべものについても，その他についてもいう。

「ほうじる」「いる」「いためる」のあいだにもちがいがあり，「ほうじる」は主としてお茶について，「いる」は豆や穀類のような小さいものについて，「いためる」は，そのほかの，もっと大きなものについてつかわれる。

○番茶の匂ひのいゝのを炮じて持つて行つた。(桑の実 124)

○ゴマをさっと炒り，あらくすります。（家の光 1956年10月 224）

○ラードか油大さじ二杯を煮立てて，にんにく，玉葱、人参，挽肉の順に入れ，ばらばらにほぐれるまで炒めます。（主婦の友 1956年8月 325）

「あぶる」「やく」は，ともに，たべもののばあいと，そうでないばあいとがある。

〈たべもの〉

○香ばしく焙られた茶の葉のにほひを嗅いで見ると，（破戒 39）

○からだに朱の線をひいた石斑魚をひと網打つて，それを蛇籠の残り竹の串に刺してじいじい炙つた。（あにいもうと 132）

○隣りの春三のうちで干魚を焼いてゐる匂ひがした。（本日休診 89）

〈それ以外〉

○忙しくぽつと一燻べ落葉を燃して衣物を炙つて与吉へ着せた。（土・上 26）

○あの頃の手紙は此の間皆な焼いて了ひましたから。（蒲団 72）

これらの対象のちがいが，熱をくわえる際の方法のちがいや，またその目的のちがいと，からみあっていることは，もちろんである。

〔113〕 たく／にる／ゆでる

これらはみな，食べものを熱湯で処理することをあらわす。そして「たく」はめしについて，「にる」はしるなどについて，「ゆでる」はその他のばあいにつかわれる。

○私のために赤い飯を炊いて客をするといふ相談が（こゝろ 106）

○こんな乾物類で味噌汁を煮ると，（本日休診 91）

○鶉豆を茹でるための鍋をかけた。（桑の実 160）

「たく」は，めしのほかに，かゆについてつかった例がある。

○五分粥は米を一にし，水を九倍にして炊きます。（主婦と生活 1956年2月 471）

また，方言では，みそしるなど，「にる」というのがふつうなものにつかった例もある。

○里芋のコロコロしたのを薄く切って，小松菜と一緒にたいた味噌汁はいいものだ。（放浪記 122）

○川魚の煮いたのに，豆腐の汁ならごわす。（破戒 231）

「にる」は，めしについてはいわないが，雑炊についていった例はある。

○又氷つた飯で雑炊が煮られた。（土・上 24）

また，実例はなかったが，「かゆをにる」といういい方はある。かゆや雑炊は，めしの一種だとも，めしとはちがう種類の食べものだともいえるような中間的なものなので，これに対応する動詞も両方のばあいがありうるのだ。

「にる」はまた食べもの以外のいろいろなものについて使われる。

○楮の煮らるゝ釜の下の火を見ながら，（あらくれ 11）

○火事の焦臭さに繭を煮るやうな臭ひがまじつてゐた。（雪国 169）

○糊を擦つて煮て，解いたものを張板へ張つた。（桑の実 70）

「ゆでる」は，食べものについてつかった例しかなかった。つぎのような例はあるが，単に手や足を「ゆでる」ということはない。この点対応する自動詞の「ゆだる」とはちがう。

○勘次は漬菜の手を放して軒下へ来た。手も足も茹でたやうに赤くなつて居る。（土・上 43）

なお，「たく」「にる」は，「めしをたく」「みそしるをにる」のように，できあがった製品を対象にするばあいと，「米をたく」「いもをにる」のように材料を対象にするばあいと，両方の表現があるが，「ゆでる」は材料を対象にする表現しかなかった。しかし，たとえば，「ゆでたまごをゆでる」のような表現はありうるだろう。

〔114〕 たける／にえる／ゆだる

これらの自動詞も，それぞれ対応する他動詞と同様の主体（つまり他動詞のばあいには対象）をとる。「たける」は，

○何度やっても，飯がうまく炊けないので，（自由学校 187）

のように，めしについていい，「にえる」は，

○おでんが煮えてゐる釜がある。（冬の宿 189）

のように，しるなどについていう。これらは，おそらくほぼ完全に他動詞のばあいと対応する。ただし「ゆだる」はややちがう点がある。すなわち，「ゆでる」という他動詞は，食べものだけを対象にしたのに対し，「ゆだる」は

○〔車えびを〕沸騰した薄塩湯に入れ，約十分でさくら色にゆだったら取り出し（主婦と生活 1956年5月付録 家庭料理全集 177）

のように食べものを主体にすることも，もちろんあるが，

○照吉は赤くゆだつてゐたが，一見平静な顔つきで湯から上つた。（潮騒 97）

のように，食べもの以外のもの（ここでは人間のからだ）を主体とした表現でも，つかわれるのである。ただし，この表現がどの程度一般性をもっているかは問題である。

1.2 こ と

こと（動作・作用・現象・性質・状態・関係など）をもっぱら主体とする動詞というのは，ものを主体とする動詞にくらべて，はるかに少ない。おもにことを主体とするように見えるものでも，条件によってはものが主体になる，という例がすくなくない。このような点についてすこし説明する。

ことを主体とするものの中には，まず第1に動作・現象などのおこり方を示すものがある。たとえば，開始をあらわすものとして，「はじまる」「おこる」「ぶりかえす」など，進行を示すものとして，「ながびく」「はかどる」「あいつぐ」など，終末を示すものとして，「おわる」「やむ」「たえる」「はてる」「とぎれる」「とだえる」「すむ」など。このように並べると，それらの主体がことであってものでないことはあ

きらかなようにみえるかもしれないが，実際には，なかなかそう簡単にはいかない。これらの動詞が，ものを主体としている例についてしらべてみよう。

（A）動詞の意味が依然として動作・現象などの起こり方をあらわしているばあい。このばあいには，一般に，主体として当然それらの動作・現象を，つまりことを予想させるのだから，意味的に問題になるのは，そのものをあらわしている名詞の方である。たとえば

○其内学校がまた**始まりました。**（こゝろ 245）

○近くの郵便局はもう**終っている**だろうから，（くれない 70）

○もう蓄音器も**止んだ**のか知ら。（桑の実 132）

○学生の側がすむと先輩の側が**始まった。**（むらぎも 324）

これらの例において，「はじまる」「おわる」「やむ」などの意味は，たとえば「授業がはじまる」「事務がおわる」「音がやむ」などと動作・現象を主体にしたばあいと変わりがない。ところが，ここでは，それらの動作・現象の主体であるものを，動詞のあらわすことがらの主体として表現しているのである。これらの例の中でも，段階的なちがいがある。「蓄音器」などは，かなり臨時的な感じがあるが，「学校」は，「学校がおわる」「学校がつづく」「学校がある」（「運動会がある」などの例を参照）と，同様の用法をいろいろもっており，組織をあらわす本来の意味から「授業」「講義」などにやや近づいているのではないかと見られる。以上は授業・音などの現象に対する主体を問題にしたのであるが，つぎの例では，動作・現象の道具がとりあげられている。

○鵜合間道では火縄銃のとだえた際に斬り込みをかけて来たが，（落城 24）

○蛇は見えなくなり暑さも凌ぎよくなつたので，気も勇み足も捗取つたが，（高野聖 22）

またつぎの例では，動作の客体・対象をとりあげて，「はじまる」「はかどる」の主体として表現している。

○斯うして酒が**始つて**見ると，（破戒 248）

○思はず足も軽く道も**捗取つた**のである。（破戒 141）

このように，本来ことを主体とする動詞がものを主体とするというとき，そのものは，本来あるべき主体としてのこととなんらかの関係をもっていて，臨時にそのことをあらわしているのである。この＜もの＞と＜こと＞との関係は時にあいまいでゆるい。「学校がはじまる」を「学校の授業がはじまる」，「蓄音器がやむ」を「蓄音器の音がやむ」といいかえることはやさしい。つまり「学校」が学校の授業を，「蓄音器」が蓄音器の音を代表し，これらの表現をはしょったものであることはわかりやすい。しかし

○サルは軌道にのった。サルは終った，と市長はいう。市長は，もうつぎのプランにかかっている。（高崎山 18）

のばあいには，そのサルがどのような表現を代表し，はしょったものであるか，いいかえにくい。しいていうとすれば，サルについてのしごと，サルを利用しての観光事業などということになるだろう。いずれにせよ，この文脈におけるサルが文字どおりの生物と

してのサルではなく，それをめぐる動作・現象の代表であることはあきらかである。

（B）以上にあげたものの変種として，ものの方が個体ではなく，多くの個体が入れかわってつづく1系列であるばあいがある。

○これは多分，人間がはじまつた時から繰返されてゐることなんでせう。（波 388）

○客が途絶えてくると，私達はよくかたつむりのようにまあるくなって話した。（放浪記 101）

「客がとだえる」のばあいには，まだ現象をあらわしているともいえるが，「人間がはじまる」の方では現象というよりも1つの系列であつて，抽象的ではあるが，もの的な性格がより強い。

（C）動作・現象ではなく，もののおわりや始まりをあらわすようになったもの。

これはもう別の意味とみとめるべきかもしれない。つぎのような例である。

○九十九里浜の白砂が尽きて，将に犬若の絶壁がはじまらうとする，この磯は，（波 252）

○林が途切れると，丘の夢幻的な緑を形づくる雑草が，道傍まで降りて来た。（野火 16）

○日向（ひゆうが）の海岸はいつ果てるともなく長い。（高崎山 19）

○頓（やが）て人家が絶へてしまつて，両側は麦畑になる。（思出の記・上 39）

○床の高いマライ人の住家が見つかつたら，忽ちに町は終るのだ。（帰郷 14）

上にあげた例のいくつかにもあらわれているように，これらは元来，その絶壁・林などに沿ってあるきながらいくことのはじまり，おわりをいう表現から生じたものであろう。しかし現在では，かならずしも話し手や主人公の移動というようなニュアンスを含まないような例（上の「波」の「はじまる」を参照）についても使われる。さらに，上のような場所をあらわすことばのほか，ものをあらわすことばについても，使われることがある。

○大体以上が検察官の求刑にさいしての取調べ概要だったが，まだ綴はそれでおわってはいなかった。（真空地帯・上 229）

以上のような，ものを主体とする例がどのくらいの割合をしめるかは動詞によってちがう。「おこる」「すむ」などは，ほとんどの例が，「事件がおこる」「食事がすむ」のように，ことを主体とする例ばかりで，ものを主体とするものは見当たらない。これに対して，「つづく」のような例では，もちろん「戦争がつづく」のように，ことを主体とするものの方が多いけれども，「道がつづく」「林がつづく」「家がつづく」のように，ものを主体とした空間的なばあいの例もかなり多くみられ，後者を例外だということはむずかしい。

ことを主体とする動詞のうち，動作・現象の発生や進行をあらわすもの以外のグループとしては，ことの程度や，その他の状態が変わることをあらわすものがある。たとえ

ば，「うすらぐ」「うすれる」「よわまる」「つよまる」「ふかまる」「やわらぐ」「こじれる」「ばれる」「あらだつ」「角立つ」など。ただし，これらの動詞についても，原則としてことを主体とするとはいえても，つねにそうだとは，いいきれないものがある。たとえば「うすらぐ」についていうと，ふつうは「気持ちがうすらぐ」「痛みがうすらぐ」「記憶がうすらぐ」「寒さがうすらぐ」「においがうすらぐ」などとつかうのだが，例外として

○人家の少しずつ薄らいだ町はずれの海べを（暗夜行路・前 157）

のような例もあった。また「やわらぐ」もふつうは「気持ちが，光が，顔つきが」などと，ことを主体とするが，

○五十過ぎになつても彼女の真つ白な餅肌は若い女のやうな湿りに柔いでゐた。（厚物咲 33）

では，ものを主体としている。これらは主として形容詞から派生した動詞であるが，形容詞の方は，特にことを主体とするというような限定はない。それで，これらの動詞と「～くなる」「～になる」という表現は，おなじ意味をあらわすといってもよいが，後者の方が範囲が広い。たとえば，

○自由に対する弾圧がだんだんと強くなった戦前の日本では，（学問の勁き 240）

の例では「強くなる」が「弾圧」ということを主体としているので「強まる」といえるが，

○が，彼女がその事を知つてからといふものは少し強くなつた。（波 229）

の例では，おなじ「強くなる」が，「彼女」という人間を主体としているので，「強まる」におきかえるわけにはいかない。

〔115〕 こうずる／つよまる，つのる

これらの動詞は，精神現象が度合いを強めるばあいには，みな，おなじようにつかわれる。

○唯激しい嫉妬が頭をぐらぐらさせるばかりに嵩じて来るのを知つてゐた。（或る女・前 173）

○卒業しようという気持ちがそれだけ強まってくるのを（むらぎも 297）

○不幸が待つてゐはしまいかといふ不安が募つた。（仲子・上 133）

上にあげた例では，おたがいに動詞を入れかえても，さしつかえない。しかし，このほかに独自の領域について用いられるばあいがある。まず，「こうずる」は病気についていう。

○悪質の病気がこうじて金がいるのだというわさを（真空地帯・上 177）

これは「つよまる」「つのる」にはならない。ただし，「病」を比ゆ的に社会情勢をあらわすものとしてつかった，つぎのような例はあった。

○政治の組織化は組織化された政治的イデオロギイの過信という病をいよいよ募らせている。（私の人生観 121）

「つよまる」「つのる」は，人間の精神・生理状態以外に，社会的，自然的ないろいろな現象についても使われることがある。

○十月に入ると今年の新米がどっと出回ってくるので，落勢がさらに強まることは，確実である。（ダイヤモンド 1956年9月25日 24）

○前夜からつのつた強風に，（潮騒 72）

これらは「こうずる」でいいかえることはできない。

「こうずる」が，精神状態や病気以外につかわれた例として，つぎの3つがある。

○〔盗みは〕或るあそびの昂じたものではないのか。（厭がらせの年齢 281）

○其上に造つた酒が二年続けて腐るなど種々（いろいろ）な事が高じて，さしもの大身代も何時か筍の皮剝ぐ様に痩せて来た。（思出の記・上 10）

○不評はだんだん嵩じ，十八年の後に二月革命（一八四八年）に直面する。（ものの見方について 101）

このうち「厭がらせの年齢」の例は，「あそび」だから，まだ人間の精神活動の延長上にあるともいえるが，「思出の記」の例は，ふつうの「こうずる」とは，かなりずれている。ふつうなら，「いろいろなことがつづいて」とか「かさなって」とかいうべきところである。これはあるいは現代語としてはすたれてしまった，明治時代の用法かもしれない。「ものの見方について」の例は，精神活動ともいえるが，個人的なものではなくて社会的な現象である。これが特殊例でなければ，「こうずる」も社会現象まではあらわす，としなければならない。ただし，「風がつよまる」のような自然現象にまで「こうずる」が用いられることはないだろう。

「こうずる」は，病気についていう，という点では，悪い評価の与えられる現象に用いられる動詞である。しかし精神状態についていうばあいに，「つのる」や「つよまる」にくらべて，悪い状態についていう，という傾向は見られない。というのは，「こうずる」が積極的にいい状態についてつかわれる例があるということではなく，むしろ，たとえば「つのる」についても，わがまま・胸苦しさ・好奇心・不安・泣きたい気持ち・憎しみの念・かんしゃく・怒りなど，かなり悪い精神状態についての例が多いのである。もちろん一方では，愛着・恋慕など積極的に悪いとはいえない精神現象についても用いられているから，評価という面では，はっきりした特徴はみられない。

「つよまる」と「つのる」のあいだには，「つのる」が主として精神状態について用いられるのに対し，「つよまる」は，「支配がつよまる」「結束がつよまる」「傾向がつよまる」など，それ以外の現象についていうばあいが多い，というちがいが見られるようである。ただし，これはもちろん傾向の上での差にすぎず，はじめにあげたように「つよまる」「つのる」どちらも精神現象にもそれ以外の現象にも用いられる。また，この傾向の差が，はっきり量的に証明できるほどの用例はない。

〔116〕 しぐれる＜ふる

「しぐれる」は，しぐれのばあいにしか，いわない。実例としてはつぎの（しかも俳

句の）1例しかなかった。

○門よりの時雨るゝ坂となり下る（俳句 1956年4月 149）

「ふる」は，もちろん雨でも雪でも何にでもいえる。

○荷馬が，町に幾頭となく立駢(たちなら)んで，時雨のふる中を，尾をたれて白い息を吹いてゐるやうな（あらくれ 114）

のように，「しぐれ」ということばがでてくる例以外にも，

○雪にでもなりさうな冷たい雨の降る朝，（真知子・前 94）

のように，事実上しぐれとおなじような現象について，「雨がふる」といっているばあいもある。「しぐれる」の方は，「しぐれがしぐれる」「雨がしぐれる」とは多分いわないだろうが，「ふる」のばあいには，主体を明らかにするのが普通である。「しぐれがふる」と似たようなものとしては，つぎのような例がある。

○突如として，さみだれの降るなかに，提灯行列がはじまったのだ。（人間の壁・上 347）

○霙が降つてゐるのだ。（河明り 269）

2. 対　　象

対象に対するはたらきかけをあらわす動詞のうち，対象の変化をもあらわしているものは，「主体」の項にまわした。すなわち，「こわす」「まわす」について対象を問題にすることは，「こわれる」「まわる」の主体を問題にすることと同じだから，これらとならべてあつかった。したがって，ここでは，そののこりをとりあげる。ふつうの意味で「対象」といわれるもののうちの一部分にすぎないわけだ。(p. 20参照。)

特徴としての対象を，つぎの5つにわける。これらは，名詞にともなう格助詞の形にほぼ対応する。カッコのなかにしめしたのが，その形である。

1. 直接的対象（「～を」）
2. 相手（「～に」「～と」）
3. とりつける対象（「～に」）
4. とりはずす対象（「～から」）
5. 比較の対象（「～より」）

対象が特徴だというとき，その特徴としてのはたらきは一様ではない。あるばあいには，Aの動作がなんらかの対象を必要とするのに対し，Bの動作では必要ない，という形で対立する。別のばあいには，A・Bともに対象を必要とするが，その種類や範囲がちがう，という形で対立する。この点，なんらかの意味での＜主体＞がつねに必要であるのとは，条件がちがっている。

2.1 直接的対象

このグループは，対象が「～を」であらわされる。上にのべたように，「こわす」な

ど，対応する自動詞をもっているものは「主体」の項目であつかったから，ここでは自動詞と対応しないもの，意味的にいえば，対象へのはたらきかけに重点があって，対象の変化に関心のうすいものをとりあげる。とはいっても，他動詞を意味的にこの2群にわけることはむずかしい。

漢語では，

洗面する，洗顔する，洗眼する，洗髪する

のように，対象が語構成要素によってしめされていることが多い。しかし，そうでなくても，意味的に特定の対象に限定されているばあいも少なくない。たとえば「洗たく(する)」は，人体や，たてものを対象とすることはないから，つぎにあげる規定は，みな不完全である。

「あらいきよめること。あらいそそぐこと。」(明解国語辞典)

「あかを洗い清めること。よごれを洗いすすぐこと。クリーニング。」(新版広辞林)

「あらいすすぐこと。すすぎ。」(新選国語辞典)

「あらってきれいにすること。」(三省堂国語辞典)

これについては，ほかの多くの辞典がしているように，「衣服などを」といった対象の限定が必要だ。同様に，「造営（する）」を「つくり営むこと。」「建造(する)」を「たててつくること。」などと抽象的に規定したのでは，これらと「たてる」「建築する」などとのちがいがあきらかにならない。「造営する」は，神社・寺・宮殿などに限定される点で，「建造する」は船にもいえる点で，それぞれ対象に特徴がある。

2.1.1　いきもの

〔117〕 おぶう／になう＜おう，せおう，しょう，かつぐ

「おぶう」は赤ん坊や老人など人のばあいにかぎられる。サルまわしがサルをおぶうような，動物についての表現もあるはずだが，実例はなかった。この点は以下にあげる単語についてもおなじ。

○赤ん坊をおぶって廊下を何度も行ったり来たりしている。(放浪記 16)

「になう」は物体を対象とするばあいにかぎられる。

○両肩に棒を吊した水桶を荷つた初江が (潮騒 79)

ただし，けが人・病人など動けない人を対象とする表現はあるかもしれない。なお，ここにあげた動詞はみな動作の主体としては人間（動物）にかぎられるが，「になう」について植物を主体としたつぎの1例がある。

○雨滴を荷つた草も，或ひは私を迎へるやうに頭をもたげ，或ひは向うむきに倒れ伏して，顔だけ振り向いてゐた。(野火 136)

しかし，この例はつぎに「顔だけ振り向いてゐた」という表現がつづくことからわかるように，草をぎ人化したものであって，例外である。

「おう」「せおう」「かつぐ」については，それぞれ，人と物体と，両方が対象になる。

〈人〉

○与吉を負うて先へ帰るのが（土・上 91）

○背中というものはもともと子供を背負うに出来ている工合である。（厭がらせの年齢 270）

○赤ん坊をしよつた師走の引つ詰め髪のおかみさんと（真知子・前 152）

○小さな体を掬ひ上げるやうにくるりと一つ宙に廻して，肩にかついだ。（多情仏心・前 261）

〈もの〉

○小姓は箙を負ひ半弓を取つて，（阿部一族 71）

○おつぎは外の壁際の草刈籠を背負つた。（土・上 147）

○私は小さなふろしき包みをしょって，（出家とその弟子 135）

○行介は釣竿を担いで翌日もいつもの場所に行つた。（波 252）

以上の動詞についても，傾向としての差はある。「かつぐ」はほとんどがものをはこぶ例で，人をはこぶ例はきわめて少ない。しかし，上にあげた例がまったく孤立した例外的なものだとはいえない。人をかつぐ例を，もう2つあげておこう。

○右腕をもぎとられた御弓方の三上磐太郎が，二人の同心の肩にかつがれて砦にひいて行くのがみえた。（落城 33）

○戸板の上に病んだ母をのせてかついで来る十二三の子供の姿もまじっていた。（落城 37）

〔118〕 ひきたてる，ひったてる＜つれる，ひきいる／もっていく（くる），もたらす＜やる，よこす，とどける，おくる，はこぶ

「ひきたてる」「ひったてる」は人間についていう。

○更に二人の男囚が意外の処から曳き立てられて来た。（青銅の基督 116）

○どこかの用心棒が，コソ泥でも引ッ立てていく風景としか，（自由学校 164）

「つれる」「ひきいる」は，人間についても動物についてもいう。

〈人〉

○先生が一人の西洋人を伴れてゐたからである。（こゝろ 7）

○李陵は歩卒五千を率ゐ，辺塞遮虜鄣を発して北へ向つた。（李陵 152）

〈動物〉

○自分で自分の犬を運動に連れて行つた。（田園の憂鬱 50）

○サルの大軍をひきいてランカ（セイロン）の魔神を攻撃する。（高崎山 60）

「ひきたてる」「ひったてる」と「つれる」とのちがいは，主としては対象が人か動物かという点にあるのではなく，いやがる相手をむりやりつれて行くかどうかという点にある。そして，いやがる相手の中には，ひょっとしたら動物が含まれるかもしれない。ただし，「ひきたてる」にも「ひったてる」にもそのような例はなかった。お茶の水女子大生についての調査では「いやがる馬をむりやりひったてていった。」という例文に対し，○—10，△—10，×—1だった。

「もっていく（くる）」「もたらす」は，人間・動物以外のものについていう。

○中年の女中が紅茶を持って来ると，（人間の壁・上 224）

○新治を有頂天にさせる手紙をもたらした。（潮騒 116～117）

「もっていく（くる……）」が人を対象とした例も，全然ないわけではない。

○てめえの子供を腹のなかに持つて帰つたときは，（あにいもうと 146）

これは胎児の例だが，幼児を手にかかえているばあいなどについても，あるいはいえるかもしれない。

○こいつはナ，徒弟隊が板橋へ持ってかれたろ？あんとき奪還されなかった方の一人なんだ。持ってかれちまった方なんだ。（むらぎも 281）

胎児の例では，「子供を腹のなかにつれて帰った」より「持って帰った」というかもしれない。つまり，胎児については，人格をみとめず，ものとしてあつかうことも少なくないようにおもわれる。ところが，徒弟隊については，「板橋へつれてかれた」といえるし，むしろその方が普通だ。それで，ここで「つれていく」ではなく「もっていく」がえらばれたことは，一種の表現効果を――人間あつかいされずに乱暴につれていかれたのだというニュアンスをうんでいる。もっとも，ここで対象が個人でなく「徒弟隊」という集団であることで，その効果はうすめられているかもしれない。集団になると，「植民地へ軍隊をもっていって暴動を鎮圧する」のように，人格がうすれて「もっていく」の対象となることは，不自然ではないようだから。（ただし，こういう実例はなかった。）

なお，対象が動物のばあい，たとえば犬や小鳥を箱やかごに入れていくのなら「もっていく」「つれていく」どちらでもいえ，犬をあるかせていくのなら「つれていく」しかいえないだろう。つまり，移動のし方が問題になってくる。（人だったら，たとえ鉄格子のはまったおりに入れてはこんでも，「もっていく」とはいえない。）

「やる」「よこす」「とどける」「おくる」「はこぶ」は，両方についていう。

〈いきもの〉	〈も　の〉
○大阪の伯父の方に人をやらうと（波 226）	○この間やつた手紙を見て，（帰郷 22）
○「二，三日うちに大工をよこしましょう」（人間の壁・上 198）	○一向，手紙もよこさない。（自由学校 102）
○〔葉子を〕横浜へさへおとゞけ下されば（或る女・前 224）	○金入れを衛兵所にとどける方をえらばず，（真空地帯・上 181）
○石切の刑務所から護送自動車で送られてきた木谷一等兵が（真空地帯・上 4）	○故郷から送つて来た美味い魚の干物をまつ子が焼くかたはらで，（冬の宿 38）
○幸子が抱いて，うめ女を縁側に運ぶのだった。（厭がらせの年齢 281）	○湯殿に二人の荷物を運ぶと，私はホッとしたのだ。（放浪記 95）

「おくる」には，「荷物をおくる」のような用法のほかに，「客を玄関までおくる」のような，「見おくる」に近い用法があり，これは，当然人を対象とするときにかぎられる。ここでは，そういうものは除いて，荷物と同様に人があつかわれるばあい，つま

り，人格あるいは本人の意志を無視して移動がおこなわれる例をさがしたのだが，それは，上の「真空地帯」の1例があるだけだった。

〔119〕 なぐる<うつ，たたく

「なぐる」は，相手が人間のばあいである。

○傍についてゐた下士官が永松を殴つた。（野火 100～101）

人間のからだの部分が目的語として表現されることもある。

○伯父の足を力一杯ビシヤビシヤと撲つた。（青銅の基督 54）

人間以外が目的語になっているものでは，「なぐりだす」というかたちであるが，つぎの1例があった。

○無花果の実の親方みたいな奴がブラ下った所へ来て，ターバンを振りたて，こいを（ママ）ボカボカボカとナグリ出した。（傑作倶楽部 1956年2月 269）

これはプロレスラーが練習のためになぐっているもので，「うつ」や「たたく」の方がふつうの表現だろうが，レスリングのときのなぐり方とおなじで，相手を人間と見立てているのかもしれない。なお，お茶の水女子大生についての調査では，「表の戸をどんどんなぐった。」という例文に対し，○—0，△—6，×—15だった。

「うつ」「たたく」は，相手が人間のばあいでも，それ以外でも広くつかわれる。

〈人〉	〈動　物〉	〈も　の〉
○仙子を打つなら，さあ，わたしを打ってくれ，（厭がらせの年齢 280）	○あの晩，犬を打つてから（田園の憂鬱 86）	○壁をにぎりこぶしで打った。（真空地帯・上 23）
○人をたたいたのでは寝られないと（出家とその弟子 22）	○牛の尻を敲き，脇腹を敲いてゐた。（闘牛 153）	○表の戸を激しく叩くものがあつた。（冬の宿 84）

これらは人間が他の物体を「うつ（たたく）」ばあいであるが，さらに人間以外の主体がその動作をするように表現される例もある。

○ばたんばたんと船の胴を打つ波の音が聞こえた。（暗夜行路・前 171～172）

○雪の粉が雨戸を打つてゐた。（冬の宿 132）

○ズツクの覆ひの裾がバタバタとデツキをたゝいた。（蟹工船 35～36）

○風が海を叩いて，波音が高い。（放浪記 118）

ただし，このばあいは，「たたく」よりも，「うつ」の方がよく用いられるようだ。それだけに，「たたく」を使うと，ぎ人化したような感じがあるかもしれない。（ただ，いずれにしても，主体が無生物である例は少ない。今回の資料でも，はっきり数で示せるほどはなかった。）

〔120〕 かう<やしなう

「かう」は動物についてだけ使う。

○夏は金魚などを飼つたり（生まざりしならば 185）

「やしなう」は人間についても，動物についてもいう。

〈人〉

○年老いた両親と四人の子供とを養わなくてはならない。（人間の壁・上 51）

〈動　物〉

○時に依つていろいろな鳥を五羽も六羽も養つてゐた（春琴抄 181）

「かう」を人間について使ったつぎのような例があるが，これは相手を軽べつしていることを示すためにわざと動物なみの表現を使ったので，一般に動物にしか使われないということを前提にしているものだ。そうでなければこの表現の効果は生まれない。

○中隊にやお前みてえな肺病やみを、飼つとく余裕はねえ。（野火 5）

〔121〕 そそのかす＜けしかける

「そそのかす」は，つねに人を対象とする。

○建一郎をそそのかしているようで，（人間の壁・上 262）

「けしかける」は，人に対してのばあいと，動物に対してのばあいとがある。

〈人〉

○人の善い労働者を嗾しかけたり，（真知子・前 201）

〈動　物〉

○牛をけしかけるために牛の尻を敲き，（闘牛 153）

このちがいは，当然，そのやり方にも関係している。すなわち，「けしかける」は，動物を対象にすることもあるのだから，ことばによるとはかぎらない。動作によってじかに「けしかける」ばあいもある。「そそのかす」は人間が相手だから，原則として，ことばだけによるのである。ただし，「そそのかす」についても，動作だけで言いたいことをつたえるばあいが，ないとはいいきれない。

〔122〕 あやす＜なだめる，きげんをとる

「あやす」は相手が赤ん坊，またはこれに近い幼児のばあいにつかわれる。

○坊ちやんはあやす程悲しくおなりになつて，（桑の実 92）

○駅の時計を指しながら，行介は子供をあやした。しかし駿は「やいややいや。」を繰返すばかりだつた。（波 195）

「なだめる」は相手が幼児であっても，おとなであってもかまわない。

〈幼　児〉

○おくみは坊ちやんをなだめてこちらへ伴れて来た。（桑の実 90）

○なだめながら子供を椅子の上に抱きあげようとすると，（波 200）

〈おとな〉

○父親は，その度に母親をなだめて，（あらくれ 35）

○彼は一方に妻をなだめ，慰め，（仲子・上 204）

「なだめる」の例のうち，幼児のばあいとしてひいたものは，「あやす」のばあいと同じ相手について使われた例だ。もちろん，絶対的な年令として，何才ぐらいまでならば「あやす」が使えるかということは，はっきりしないが，かなり小さいこどもで，理屈

をいっても，あまりわからない段階にかぎられるだろう。「なだめる」は逆に下の限界があるかもしれない。生まれたばかりの赤ん坊でも「あやす」対象にはなるが，そこまで「なだめる」の対象にふくめるのは，あまり適当でない。

なお，「きげんをとる」という慣用句は，特に相手の年齢についての制限はないようだ。つぎの「真知子」の例では相手は数え年3つの子である。

〈幼　児〉

○みね子は泣く娘の機嫌をとりながら云ふ。（真知子・前 101）

〈おとな〉

○夫の機嫌を取り乍ら聞いて居た。（破戒 172）

「あやす」も「なだめる」も，ともに動物について使うことがある。

○ホテルのポーチで黒い犬をあやして一人でキャッキャッと笑っていた。（放浪記 109）

○犬をなだめてやらうとして，彼等の名を呼んでも，（田園の憂鬱 51）

ことばによってきちんと説明しても通じないような相手という意味では，赤ん坊も動物も同類である。したがって，動物については特に年齢のちがいを問題にする必要はない。

なお，「なだめる」は，人間に対してつかう以外に，つぎのように「心」「きもち」また「怒り」「恐怖」などの単語を目的語とするばあいがある。「あやす」にはこのようなことはない。

○親兄の心をなだめるため，其処で娘に小児を家まで送らせることにした。（高野聖 74～75）

2.1.2 生　産　物

〔123〕 いる／うつ＜はなつ，発する

「いる」は矢についていう。

○そのマトに玩具の矢を射るあそびを（若い女性 1956年12月 215）

「うつ」は，鉄砲の類についていう。

○絶え間なく鉄砲を打つ音がしている。（放浪記 77）

○指揮官機は固定機銃を打ちながら突込む。（実話雑誌 1956年5月 278）

○「臼砲は何をしている，早く撃て」（落城 32）

以上のように，小銃・機関銃・大砲などについての例がある。また，

○小石拾ひ，狙を定めてはつしと擲てば，見事にはづれた。（思出の記・上 162）

のように小石を投げることにつかわれた例もあったが，これはやや古い用法で，現代語ではあまりつかわないだろう。

「はなつ」「発する」は，矢でも鉄砲でもいえるはずである。ただし，実例としては，つぎのように，どちらも矢のばあいしかなかった。

○桐原寺五郎の放った尖矢が（落城 34）

○一時に連弩を発して乱射した時，（李陵 161）

「はなつ」には，このほか，「野球でホームランをはなつ」などの例がいくつかあった

が，これも矢や鉄砲をはなつことの延長上に出てきた用法であろう。

「いる」「うつ」は，上の「矢をいる」「鉄砲をうつ」のような用法のほか，その目標となるものを目的語としていう，つぎのような用い方もある。

○半弓(はんきゅう)を以て目に掛かる敵を射てゐたが，（阿部一族 74）

○偶々営舎附近にさまよひ寄つた牛を射つたことがある。（野火 76）

なお，「矢をいる」に対して「弓をいる」，「鉄砲をうつ」に対して「たまをうつ」という表現もあるはずだが，実例はなかった。

〔124〕 ひく，弾ずる／ふく＜かなでる／うつ，たたく ＜ならす

これらの動詞は，その対象とする楽器の種類によって使いわけられる。

まず「ひく」は，弦楽器のばあいにかぎられ，つぎのように，琴・三味線・バイオリンなどに使われる。

○黒塀の城内では，琴の音がきこえていた。奥の女たちがひいている曲である。（落城 17）

○こいさんも亦此の闇の中で三味線を弾きなさるのだと思ふと，（春琴抄 153）

○バイオリンを弾く門附の流行唄が聞え出した。（つゆのあとさき 67）

ピアノは，キーをたたくのだが，やはり「ひく」であらわされる。そして，それとの類推かもしれないが，弦楽器でないオルガンにも，「ひく」が使われる。つぎの例で，前の「弾きながら」はオルガン，あとの「弾いた」はピアノを対象とする動作だ。

○彼女は弾きながら，周りの有様とはまるで別なことを思ひ浮べてゐた。弾条のゆるい，こはれた鞴のやうな音を立てる楽器の代りに，一と月前の園遊会の晩，富美子と多喜子とでリストのヂュエットを弾いた素晴しいベヒシュタイン製のグランド・ピアノや，贅沢な広間や，着飾つた客がそこにあつた。（真知子・前 60）

この類には，また，「弾ずる」もはいる。実例はつぎの1つだけで，三味線をひいているばあいの例と思われる。

○放肆(ほしいまま)に恋慕の一曲を弾じて，銭(ぜに)を乞ふやうな卑しい芸人の一組もあつた。（破戒 97）

ほかに，「つまびく」も考えられるが，これは実例がなかった。

つぎに「ふく」は，管楽器についていう。

○歌に合せて銀笛をお吹きになるのは（桑の実 160）

○喇叭手(ラッパしゅ)は兵舎の東横(ひがしよこ)のところまできてまた吹いた。（真空地帯・上 41）

ほかにハーモニカやサキソフォンの例があった。「ふく」は，厳密な意味では楽器といえないようなものについて，口で吹いて音を出すばあいにも使われる。上にあげたラッパも，かならずしも楽器とはいえないし，合図の笛のようなものは，音を出す道具ではあっても楽器ではない。

○車掌は発車の笛を吹いた。（蒲団 82）

「うつ」「たたく」は打楽器についていう。

○謡の人々は鼓も打つてゐた。（雪国 149）

○シラベの二つの太鼓は，羽根田が，一人で打つことにすれば，（自由学校 378）

○ひまつぶしの道楽に，鉦や太鼓を叩いて，（自由学校 346）

これらも，音を出すための道具で，かならずしも楽器とはいえないものについてもつかわれる。

○遠くの寺でゆっくり鐘を打つのが響いて来る。（放浪記 126）

○小さなを鐘をたゝいて田の虫追に行つたことや，（思出の記・上 9）

○夜になつて大きな蔵々の間を拍子木叩いて歩く丈で（土・上 80）

このほか，ピアノなどについてもいえると思われるが，実例はなかった。

「かなでる」は，弦楽器や管楽器についていう。すなわち上にあげた動詞のうち，「ひく」「弾ずる」および「ふく」の上位語になる。打楽器の「うつ」「たたく」などにかわるものとしてはつかわれない。実例では，

○ヴァイオリンの一手も奏でたりした。（或る女・前 11）

という弦楽器のばあいと，

○心よげにしわがれ声でコーラスを奏でながら入房。（実話雑誌 1956年5月 32）

の歌のばあいとがあった。ただし，このように，歌についてつかうのが，一般に認められる用法かどうかは問題があるだろう。打楽器に使えず，管楽器・弦楽器や歌についていうのは，つまりメロディーのあるものに「かなでる」が使われるということになる。（打楽器のなかでも，木琴のように音階のあるものは「かなでる」といえるかもしれない。）なお「かなでる」の用例には，このほかつぎのような比ゆ的な使い方もあった。

○物語は長女の結婚をめぐって兄妹達がかなでる愛情の協奏曲で（映画ファン 1956年7月 136）

「ならす」は，いろいろな楽器についていう。つぎにあげるのは，それぞれ弦楽器・管楽器・打楽器のばあいだ。

○七号室ではお妾さんが三味線を鳴らしている。（放浪記 204）

○酒がまわったのか，風琴は遠い郷愁を鳴らしている。（放浪記 252）

○障子襖を取り払つた広間に家来を集めて，鉦太鼓を鳴らさせ，（阿部一族 61）

このほか，音をだす道具で，せまい意味での楽器といえないものについても，いろいろ実例がある。たとえば呼び子・汽笛・ベル・鈴など。さらに，音をだす道具ではないのに，ぶつかったり，こすれたりして音を出したばあいにも「ならす」がつかわれる。

○尾をちぎれるほどはげしく振り，鼻をくんくんとならした。（田園の憂鬱 107～108）

○信之は，幅の広い廊下にスリッパを鳴らして出て行つた。（多情仏心・前 310）

○バタンと環を鳴らして箪笥をしめた。（伸子・上 148）

○風が急にマストを鳴らして吹いて行つた。（蟹工船 35）

「かなでる」もかなり広いが，音楽を演奏するばあいに限られていたのに対し，「ならす」は，音が出れば，楽器だろうと何だろうとかまわないのである。

〔125〕 かぶりつく／かみつく

「かぶりつく」について，岩波国語辞典は，「かみつく。特に食物に，勢いよく，また粗暴にかみつく。」のように規定している。この規定は正しい。すなわち，「かぶりつく」は，「かみつく」「くいつく」にくらべたばあい，特に，たべものを対象とする点に特徴がある。

○木の根草の上に足投げ出して，網袋の握飯にかぶりつく時の心地。(思出の記・上 64)

のようなのが典型的な例である。しかし，これは絶対的な差ではなく，そういう例が多い，というにとどまる。「かぶりつく」でも，たべもの以外のものを対象とする例もある。

○「なんだ，こんなもの。畜生。畜生。だるいよ。こんなもの。」と，いきなり自分の肘にかぶりついた。(雪国 33)

「かみつく」「くいつく」には，たべものを対象とした例がなかった。

○そして彼女は男の手に噛みついた。(青銅の基督 111)

○あンたの首の根っこに喰いついてやろうと思ったのに (婦人生活 1956年7月 256)

しいていえば，

○狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食ひ付くやうに。(こゝろ 252)

は，たべものを対象にしているともいえる。しかし，これはおそらく用例がすくないためであって，これらがたべものを対象にしえないということではないであろう。今回の調査で，これらの動詞はいずれも10例前後の例しかなかった。

なお，お茶の水女子大生についての調査では，「弟は大きなパンにくいついた。」という例文に対し，○—13，△—6，×—2「弟は大きなパンにかみついた。」という例文に対し，○—6，△—8，×—7だった。

＜注＞ 「かぶりつく」はふつう「〜にかぶりつく」という形で，「に」格の目的語をとる。しかし，つぎの例では，むしろ，「を」格の目的語とみられる。

○キャベツを見るとフクフクと湯気の立つ豚カツでもかぶりつきたいと思う。(放浪記 31)

「に」格なら，「豚カツにでも」という形になるはずだからである。

2.1.3 こ と

〔126〕 ふきこむ／しつける／しこむ＜おしえる，たたきこむ

「ふきこむ」は，なにか意見・考えを人におしえこむばあいにいう。

○きっとだれかがこの人に，そんな風な説を吹きこんだに違いない。(人間の壁・上 194)

「しつける」は，礼儀作法や生き方などをおしえるばあいにいう。

○あのひとは，私と違つて，こんな生活にも，倖せだと信じて落着くやうに躾けられて来た気の毒なひとですもの。(帰郷 218)

「しこむ」は，芸能・技術などを身につけさせるばあいにいう。

○昔は遊芸を仕込むにも火の出るやうな凄じい稽古をつけ（春琴抄 159）

「おしえる」は，これらすべてのばあいにわたってつかわれる。

○此の嘘を以て武を救出すやうに教へたのであつた。（李陵 200）

○戦前の教育は，形式的な忠君愛国と，ただ目上の人の命令に盲従するような道徳秩序とだけを教えておって，（人間の壁・上 323）

などは，意見・考えについてで，「ふきこむ」にあたり，

○人間の生き方について、共同社会の倫理について，子供たちはそれとなく教えられているのだった。（人間の壁・上 100）

○これが模範的な親孝行だという風に教えられたのでした。（人間の壁・上 192）

では生き方・態度の問題で「しつける」にあたり，

○私が行くとお師匠さんは必ず御自分で稽古をつけて下されそれはそれは親切に優しく教へて下さるので（春琴抄 144）

○李陵はたゞ射だけを教へることにした。（李陵 184）

では，技能の問題で，「しこむ」にあたる。そして，「おしえる」の領域は，「ふきこむ」「しつける」「しこむ」などを合わせたものよりも，さらに広い。すなわち

○北海道の大学で生物学を教へてゐる曾根家の当主は，（真知子・前 9）

○画一的な義務教育は，この子にもやはり英語を教え，物理，化学を教え，代数，幾何を教えることになる。（人間の壁・上 204）

のように知識をさずけることは，上の3つの動詞のどれからもはみ出して，しかも「おしえる」がうけもっている領域である。もっとも「英語をおしえる」のようなばあいには，これを知識としてみれば「おしえる」でしかいえないが，技術としてみれば「しこむ」ともいえる。数学や生物学になれば，技術とはいえないから，「おしえる」であらわすのが自然である。

「たたきこむ」も，対象の面からいうと，「ふきこむ」「しこむ」などよりも広くおおっている。

○小学校でたたきこまれた教育勅語と二宮金次郎の思想が，（中央公論 1954年4月 215）

では考え方をうえつけるのであって「ふきこむ」にあたり，

○本気で叩き込んだらば愈々後生畏ろしい者になり本職の弟子共が困るであらう，（春琴抄 145）

では，技能をみがくばあいで「しこむ」にあたる。生き方をおしえるような，「しつける」に近いときは，「たたきこむ」といえるかどうか，実例がなかったので断言できない。「たたきこむ」も「ふきこむ」「しこむ」の領域をあわせただけ，というよりは広い範囲をおおっており，つぎのような例は，「ふきこむ」にも「しこむ」にも，あてはまらない。

○おぼろげながら神といふものを恋しかけた十二三歳頃の葉子に，学校は祈禱と，節慾と、殺情とを強制的にたゝき込まうとした。（或る女・前 69）

＜注1＞「しつける」は行儀作法や生き方に関することで，「しこむ」は芸能などに関することであるが，「しこむ」は，「しつける」と同じような現象にも，かなり使えるようである。つまり「しつける」と「しこむ」とでは「しこむ」の領域が広くて「しつける」をかなりの程度にカバーしているように思われる。「しこむ」の方には，このことを示すのに適当な例はなかったが，「しつける」の方では，たとえば

○何故私はボチを躾けて，人を見たら皆悪魔と思ひ，一生世間を睨め付けては居させなかつたらう？（平凡 38）

このようなばあい，「しこむ」といいかえてもおかしくはない。

＜注2＞「教養をしこむ」といういい方をもとにした，つぎのような例がある。

○今のところこれが，東京の大学で仕込んできた「教養」の最も目立つ成果であつた。（潮騒 53）

これは，「しこむ」が技術・芸能などについてつかわれる，という規定とむじゅんする。しかし，この「しこむ」は，たとえば「問屋から商品をしこむ」のように，「仕入れる」という意味でつかわれた例であろう。たまたま，このばあいの対象が抽象的な「教養」というものであるため，まぎらわしいのだが，もし，これが，いま問題にしている「しこむ」とおなじものであるとすると，これのもとのかたちは，「彼女は東京の大学で教養をしこんできた」ということになり，ほかのばあいとちがってしまう。おしえる意味での「しこむ」は，一般に，「AがBに〜をしこむ」というかたちでつかわれる。したがって，もしこの例がその意味だとすれば，「(だれかが) 彼女に東京の大学で教養をしこんだ」→「彼女は（だれかに）東京の大学で教養をしこまれた」→「(彼女が) 東京の大学でしこまれてきた教養」というかたちになるはずである。一方，「しいれる」意味なら，「彼女は東京の大学で教養をしこんだ」→「(彼女が) 東京の大学でしこんできた教養」となり，このままの形でさしつかえない。したがって，これは後者の意味であり，「教養をしこむ」という表現があっても例外にはならない。

＜注3＞「おしえる」という動詞は「AがBをおしえる」のように目的語として相手をあらわす名詞1つをとるばあいと「AがBに〜をおしえる」のように目的語として相手をあらわす名詞，内容をあらわす名詞の2つをとるばあいとがある。いま前者を仮に単一目的語構文，後者を二重目的語構文とよぶとすれば，このどちらの文を作りうる能力があるかという点で，ここにとりあげた動詞のあいだにはちがいがみられる。すなわち「しつける」という動詞は「AがBをしつける」という単一目的語構文しか作らず，逆に「ふきこむ」「たたきこむ」は「AがBに〜をふきこむ」「AがBに〜をたたきこむ」という二重目的語構文しか作らない。そして「しこむ」は，「AがBをしこむ」「AがBに〜をしこむ」という両方の型の文をつくることができ，この点「おしえる」とおなじである。上にあげた「春琴抄」の「しこむ」の例は「遊芸をしこむ」をいうのだから，相手をあらわす間接目的語は表現されていないが，二重目的

語構文の例である。それで，つぎにおなじ「しこむ」が単一目的語構文の中でつかわれた例をあげておく。

○今におつぎを一人前に仕込んで見ると勘次は心に思つて居る。（土・上 83）

ことがらとしては，おなじことをあらわしていても，このような文法上の制約によって，ある動詞がつかえたり，つかえなかったりするばあいがある。

○実は燈台長の奥さんが村の有志の少女に行儀作法を教へる会があり，（潮騒 28）

この例では，行儀作法をおしえるのだから，内容的には「しつける」のあらわす事実に近い。しかし，このばあいのように「少女に行儀作法を教へる」という二重目的語構文は「しつける」という動詞にはつくれない。したがって，このままの文脈ではこれを「しつける」でいいかえることはできない。もしこれが「少女に」ではなく，「少女を教へる会があり」という文だったら「少女をしつける会」といいかえることができるであろう。

2.2 相　手

2.2.1 相手のありなし

〔127〕 じゃれる／ふざける，たわむれる＜あそぶ

「じゃれる」は，相手を必要とする動作である。

○私の裾にまつわってじゃれていた小猫のオテクサンは（放浪記 131）

＜相手＞というのは，上の例にみるように，かならずしも動物でなくてよい。しかし生き物にせよ，単なる物体「裾」にせよ，何か物理的にはたらきかけるような対象がなければ，「じゃれる」とはいわない。

「ふざける」「たわむれる」は，かならずしも，そのようにはたらきかける相手を必要としない。

○園田のやうな男となら，彼はずゐぶん常談をいつたり，ふざけたりするのだが，（波 34）

○罪なく子家鴨と戯れた。（仲子・上 98）

などのばあいには相手があるが，

○そして白頭の画家は，大きな背中を向けて，遠ざかつて行くと，演奏台のバンドの仲間に加はり，白い服装に照明の光をあびながら，ギターを抱き上げてゐた。ふざけてゐるのではなく，真面目であつた。（帰郷 91）

○急に丑松は聞耳を立てた。後た何か聞きつけたといふ風で，すこし顔色を変へて，言ふに言はれぬ恐怖を表したのである。戯れて居るので無いといふことは，其真面目な眼付を見ても知れた。（破戒 84）

などでは，この主体ひとりの動作であって，その動作をするかぎりにおいては，格別特定の相手はなくてもいいのである。しかし，これらのばあいには，別の意味の相手を必要とする。それは，その動作を見てたのしむような相手である。

なお，お茶の水女子大生についての調査では，「かれは，ギターをもちだしてひとり

でたわむれていた。」という例文に対し，○—2，△—9，×—10だった。

「あそぶ」については，「じゃれる」のような意味での相手も，「ふざける」「たわむれる」のような意味での相手も，ともにかならずしも必要ない。

○お友だちとはねまわって遊んだわ。（出家とその弟子 134）

のように，いっしょにその動作をする相手が登場することもあるが，

○与吉は独で村を遊んで歩いた。（土・上 133）

のように，それがないばあいもある。そして，いずれにせよ，「ふざける」「たわむれる」のように，これをみてたのしむ相手というものは登場しない。「ふざける」「たわむれる」が他人のための動作であるのに対し，「あそぶ」は自分自身のための動作である。（「たわむれる」は，「あそぶ」と同じように，まったく自分自身にとってのたのしみを目的とするばあいにも，あるいはいえるかもしれない。しかし，そういう実例はなかった。）

〔128〕 まくしたてる，ささやく／うめく＜どなる，がなる，さけぶ，わめく，つぶやく，どもる，いう

これらの言語活動のしかたをあらわす動詞のうち，「まくしたてる」「ささやく」は，特定の相手に対して，あることがらを伝えようとしていうのであり，「うめく」は，伝えようとせずに，したがって相手を予想せずに，ことばを発するのであり，「どなる」以下の動詞はその両方のばあいをふくんでいる。

まず，「まくしたてる」と「ささやく」は，ともに相手になにごとかを伝えるためにいうことをあらわす動詞である。

○亭主には，あれほど，ベラベラと，マクし立てる彼女が，（自由学校 114）

○覗きこんでゐる母に，顔だけ仰向けてささやいた。（仲子・上 139）

この点で，同じく小声でいう動作ではあっても，「ささやく」と「つぶやく」とは，はっきりちがっている。

これと逆に「うめく」は無意識的に声を発することであり，その声が，一定の内容をもった，ことばの形をもっているばあいにも，相手につたえるために発しているのではない。

○戸の横の壁ぎわに逆立ちしていた兵隊がうめいて，床の上にくずおれて，（真空地帯・上 104）

つぎの例では，「うめく」が伝達のための行動を表わしているようにもみえる。

○眠りさうになると痙攣が襲つた。体がびくりとする。そのたびに彼女は先刻と同じやうに呻いた。

「眠らせて……眠らせて……」（仲子・上 67）

しかし，このばあいにも，なかば無意識的であって，相手をほとんど意識していない点では，ほかの「うめく」とおなじである。なお，ここで「うめく」がつかわれているのは，そういう非対人性という理由だけからではなく，そのときの声の出し方，すなわ

ち，うなり声に近いような発声のし方にもよることは，もちろんである。

「どなる」などの動詞は，対人的なばあいと，相手のあるなしにかかわりなく発せられるばあいと，両方の例がある。

〈対人的〉

○「今日は九時迄だ。」と監督が**怒鳴つて**歩いた。（蟹工船 68）

○しかし扉は開かず，外から受付の少女が**叫んだ**。

「お電話ですから，広間へいらつしやつて下さい」（仲子・上 92）

○誰だか，後刻（あと）で遊びに行くよ，と喚く。蝗を取りに行かないか，といふ声もする。（平凡 35）

○近所の女房に自分の手を見せて

「俺らこんなに肉刺（まめ）出つちやつたんだよ」と**呟いた**。（土・上 87）

○安吉は「読んでみて下さい。」と相手にいった。（むらぎも 32）

〈非対人的〉

○皆は思ひ合はせたやうに，相手もなく，たゞ「畜生！」と**怒鳴つた**。（蟹工船 69）

○突然進がアツと**叫んだ**ので，村岡はびつくりして寄添ふと，横合から吹つける風に，進は高価なパナマ帽子を奪ひ去られたのであつた。（つゆのあとさき 98）

○彼は何を思つたのか，手を振つたりわめいたりして，無茶苦茶に坑道を走り出した。（蟹工船 13）

○彼は更に豚小屋に近づいて燐寸をさつと擦つて見て「油断なんねえ」と**呟いて**又戸を閉ぢた。（土・上 149）

○そのとき娘が「あらつ！」と**云つて**，椀を下に置いた。（河明り 321）

ただし，これらの動詞のあいだにも，どちらに重点がおかれているかという点では，ちがいがある。多くのばあいには，対人的な伝達に重点がある。特に「いう」など，ほとんどつねに相手あっての行動である。しかし，「つぶやく」のばあいには，むしろ，原則として相手がいない。すなわち，ひとり言である。一般に，辞典では，「つぶやく」の意味について，「小さな声でひとり言をいう」のように規定していることが多い。すなわち，小声であるということと，ひとり言（非対人的言語行動）とが，ともにこの動詞の意味を規定する条件になっている，とみとめている。しかし，実例からすると，この規定はあたらない。たしかに，多くの例で「つぶやく」はひとり言を**あらわす**のだが，つぎにあげるように，相手にきこえるように，意識的に発した**ことば**も，また，「つぶやく」によってあらわされる。このような例は，例外的といってすませるほどには少なくない。

○木村は唇を噛むやうに聞いてゐたが，いまいましげに，

「判りました判りました」

合点しながら**つぶやいた**。（或る女・前 208）

○仲子は涙ぐんで沈黙してゐると，彼は急に焦立（いらだ）ち熱したやうに低い早口で**呟いた**。

「いらつしやればいいですよ，いらつしやればいいですよ。決して私のことなんぞ心配して下さらなくてもいいのです」（仲子・上 78）

○「困ったね」

羽根田は，総務課長室を出ながら，駒子に，呟いた。（自由学校 356）

○私の犠牲者が息絶える前に呟いた「喰べてもいゝよ」といふ言葉が私に憑いてゐた。（野火 133）

○「そうしますと，何だかこの組合というものが，何の役にも立たないような気がするんですけど……」と，穴山先生は不平そうにつぶやいた。「一体，こんどの退職勧告というのは，この学校だけに来ているんですか，他にも来ているんですか」（人間の壁・上 23）

もっとも，多くの例で「つぶやく」がひとり言をあらわしているという事実は，これらの例にも，やはり影響を与えているとみられる。これらの例の「つぶやく」は，特定の相手に対して，ある内容を伝達するための行為ではあるが，それほど積極的に，ぜひとも伝えなければならない，という意気ごみで発せられたものではなく，したがって，そのことばも，ひとり言に近いような調子で発せられているとみられる。たとえば，「人間の壁」の穴山先生のことばのうち，「そうしますと」から「気がするんですけど…」までは，ひとり言的なものであって，特に相手に積極的に伝えようとしたり，相手から答えを要求したりしているわけではない(「一体」から「他にも来ているんですか」までは，積極的な疑問文であって，これは「つぶやいた」わけではない)。にもかかわらず，「そうしますと」「するんですけど」という，です・ます体の調子は，純粋のひとり言ではなく，これがやはりほかの人にも聞かせるべく発せられたことばであることを示している。したがって「ひとり言をいう」という規定は，傾向として認められるが，決定的な性格づけとはいえない。

「どもる」「がなる」については用例が少なく，どちらも対人的な動作の例しかなかった。

○杉子は少しどもりながら本当に感心したやうに，武子に云つて，（友情 79）

○大声でがなりちらすことしか出来ぬ漁師に比して，（中央公論 1953年12月 186）

そして，事実，対人的な動作をあらわすことが多いにはちがいないが，これも，おそらく「さけぶ」や「つぶやく」と同様に，ひとり言のばあいにも，つかわれることがあるであろう。

「どなる」は，単に相手に対して大声をあげるというだけではなく，内容的にも相手を（大声で）しかるという意味のばあいがある。これはふつう「どなられる」という受け身のかたちでつかわれる。

○その声がちいさいとどなられるのを恐れている声は事故をおこしたあとなので，哀れなほど大きかった。（真空地帯・上 41）

○また，現行を見つかったところで，精々，呶鳴られるぐらいが，関の山である。（自由学校 168）

能動のかたちでは，この「どなる」は，「だれだれをどなる」ではなくて，「だれだれにどなる」であろう。「どなりつける」になれば

○彼はいきなり窓を明けて駿を怒鳴りつけようとした。（波 328）

のように，はっきり「だれだれをどなりつける」というかたちがあるが，「どなる」の単独の用法としては，「だれだれを」という目的語をとった例はなかった。「だれだれにどなる」もほとんど例がない。

○片野は伜に出て行けと**呶鳴つた**。（厚物咲 32）

しかし，このような能動のかたちのばあい，単に相手に大きな声を出すということと，相手をしかりつけることとのあいだに，線を引くことはむずかしい。「厚物咲」の例でも，どちらにでも解釈できる。おなじようなかたちをしていても，たとえば

○私も大きな声でどっかにいい男はないでしょうかとお月様に**呶鳴りたく**なってきた。（放浪記 48）

という例では，あきらかに大声を出しているだけであって，しかっているのではない。したがって，比較的はっきり＜しかる＞という意味だといえるのは，やはり受身のばあいだけである。

〔129〕 **しかる／いかる，いきどおる，ふんがいする，腹をたてる＜おこる**

「しかる」は，ことばで相手をせめとがめることをあらわす。それは単なる精神状態ではなく，具体的な言語活動にあらわれたようすを示し，かつその言語活動の相手がいなければならない。

○お父さんだって，思うように仙子姉さんを**叱る**ことが出来なかったわ。（屋がらせの年齢 280）

「いかる」などは，これに対して，精神状態をあらわす。その精神状態は，結果的には，はげしいことばとなってあらわれることもあるが，それは，「いかる」などの現象それ自体の成立にとっては，どうでもよいことである。したがって，その精神状態の成立そのものには，相手は必要でない。

○唯円（**いかる**）あなたは一人の少女（むすめ）の心をあまり見くびっていらっしゃいます。（出家とその弟子 166）

○「不浄だとは何だ」と丑松は心に**憤（いきどほ）つて**，蔭ながらあの大日向（おほひなた）の不幸を憐（あはれ）んだり，（破戒 6）

○吾儕（わがわれ）の中に新平民が居るなんて言触（いひふ）らされて見給へ。誰だつて**憤慨する**のは至当（あたりまへ）ぢやないか。（破戒 261）

○武帝は思ひの外腹を**立てなかつた**。（李陵 165）

ただし，このような精神状態をひきおこした外的な現象はつねにあるはずであり，それが「～を」というかたちの目的語であらわされる。（「いかる」は「怒る」と書かれることが多いが，これは「いかる」とも「おこる」とも読める。つぎにあげる「或る女」の例は，改造社版日本文学全集のルビによるものである。）

○木部の友人等が葉子の不人情を**怒つて**，（或る女・前 27）

○陵は友の為にその妻の浮薄をいたく**憤つた**。（李陵 192）

○谷間を出ていった，爺さんの細君のことを，**憤慨する**。（自由学校 182）

これらの目的語になるのは，上にみるように，みな抽象名詞である。「姉さんをしかる」のように，人をあらわす名詞が目的語になることはない。ある人に対してこのような感情をもつばあいにも，「自由学校」の例にみるように「(だれだれ) のことを」のかたちをとる。

「腹をたてる」では，この慣用句自身にすでに「腹を」という目的語が含まれているので，上にあげたような「～を」という，いきどおりの向けられる対象をあらわす目的語が，さらにつけ加えられることはない。そのかわり，つぎのように「～に」「～で」「～に対して」などのいい方で，おなじような事実をあらわす。

○彼等はその強圧的なやり方にはらをたてていた。(真空地帯・169)

○昨夜，あたしが逃げ出したことで，腹を立てたのだろうか。(自由学校 275)

○戦争に対しては無論，今も腹を立ててゐますが，(帰郷 203)

もちろん，これらのように，形式がちがうことによって，「～に」「～で」のばあいには，「～を」や「～に対して」よりも原因的なニュアンスが強くなることは事実である。しかし，たとえば「強圧的なやり方をいかる (いきどおる，ふんがいする)」と「強圧的なやり方に腹を立てる」とは，ほとんどおなじことをあらわしている。

「おこる」のばあいには，以上にあげた「しかる」とおなじ用法と，「いかる」などとおなじ用法とがある。

○怒(おこ)つてはならない，これが東京近在の若者の癖であるから。(武蔵野 20)

これは，「いかる」「いきどおる」などとおなじ意味の例で，相手にむかってとがめる，という意味ではない。ルビは岩波文庫本による。一方，「しかる」と同様に，相手をことばでとがめる，というばあいもある。ただし，上にもいったように，「いかる」と「おこる」とでは，どちらにも読めるものが多く「(だれだれ) をおこる」という適当な例が見当たらなかった。

○飯田さんがたい子さんにおこっている。(放浪記 271)

は「(だれだれ) におこる」の形をとっている。

○私はあとで山瀬さんを怒つたくらゐですが，(真知子・前 198)

○カムパネルラは決してぼくを怒つてゐないのだ。(銀河鉄道の夜 258)

などは多分「おこる」とよむ例と思われるが，ルビがないので決定的なことはいえない。なお，「しかる」のばあいには，「～をしかる」のように相手である人間が「を」格の目的語によってあらわされるのとともに，つぎのように，その相手の行動をあらわすことばを目的語にすることもある。

○これからは，そなたの，たまの夜遊びも叱るまい (面白倶楽部 1956年12月 180)

○おつぎは衣物の泥になるのを叱りながらそれでも威勢よく田圃へ出してやつた。(土・上 117)

「を」格の目的語がかさなることは，一般にさけられるから，このばあいにも，「だれだれをしかる」「なになにをしかる」とはいっても，「だれだれをなになにをしかる」という，かさなったいい方はない。そのような事実をいうためには，上の「そなたの

夜遊びをしかる」のように，「だれだれのなになにを」のかたちでいう。「しかられる」という受け身のばあい，「だれだれを」という方の目的語は主語にかわるが，「なになにを」という方の目的語はそのまま残ることになる。

○瑠璃子は仙子の非常識と，わがままの分を代って叱られているので，（朦がらせの年齢 277）

2.2.2 相手の種類

〔130〕 しなだれる＜よりかかる，もたれる，もたれかかる

これらの動詞は，みな，自分のからだを何かでささえるようにすることをあらわす。そして，「しなだれる」は相手が人間にかぎられる。

○駒子は島村の肩に手をかけてしなだれて来たが，（雪国 140）

「よりかかる」「もたれる」「もたれかかる」は，相手が人間であっても，ものであってもかまわない。

〈人〉	〈も　の〉
○姉に倚凭つた儘，首を垂れて了つた。（破戒 218）	○彼は茫然と壁によりかゝつた。（李陵 174）
○秋声氏の細い肩に凭れて歩いている。（放浪記 280）	○彼は太い楡の幹にもたれて，（潮騒 79）
○うつとりとしたやうになつて，私に靠れかかつてゐた。（風立ちぬ 84）	○一方の扉を半ば開け放ちながら，それに靠れかかつた。（風立ちぬ 86～87）

このちがいは，もちろん，「しなだれる」が相手に対する一定の感情にもとづく態度の表現であり，「よりかかる」などには，そのような態度がかならずしも見られない，というちがいから生じる。

〔131〕 とりすがる＜すがる，すがりつく，とりつく

これらの動詞のうち，「すがりつく」はほとんどの辞典に登録されていない。わずかに三省堂新国語中辞典がのせている程度である。ただし「とりつく」などの説明のことばとしては，多くの辞典でつかっている。これらの単語の説明は，大体おたがいに循環しているようなかたちのものが多い。その中では，例解国語辞典が「とりすがる」について，「相手のからだにすがりつく」と，その対象が相手すなわち人間であるという限定をし，その後岩波・大日本図書・三省堂新国語中辞典など，いくつかの辞典がこの規定にならっている。実例からこの点を確認することはできなかったが，傾向としてはある程度認めることができそうである。すなわち「とりすがる」は

○不断優しくしてくれた柄本の女房を見て，右左から取り縋つて，容易く放して帰さなかつた。（阿部一族 63）

のように大体人間が対象であるときに使われる。「とりすがる」の用例は10例ほど（みな文学作品の例ばかり）あったが，その中で人間以外のものを対象にしているのは1例

だけだった。

○一方には，そんな反省もあるにはあるのだが，然しそれはなんとなく弱々しい力しかもち得なかつた。同時にまた，その弱々しいものをも，力綱にして取り縋らうとしてゐたのだ。（多情仏心・前 319）

これは比ゆ的なばあいであるが，決して不自然な異例とはいえないものであり，これからみても，「とりすがる」の対象がつねに人間にかぎられるという規定はなり立たない。しかし，以下に示すように，「すがる」「すがりつく」「とりつく」などでは，それぞれ対象が人間のばあいと，もののばあいとがあり，おのおのの動詞20〜30例のうちでほとんど半々に分かれる。これらにくらべれば，おそらく「とりすがる」がとくに人間を対象として用いられるという傾向はあるものとみられる。

〈人〉

○女は男の手にすがつて岸に立つと，（野火 83）

○強く父親の腕にすがりついた。（仲子・上 11）

○女滝の心を砕く姿は，男の膝に取りついて美女が泣いて身を震はすやうで，（高野聖 67）

〈その他〉

○彼は，僅かの歩行にも杖に縋らねばならなかつた。（恩讐の彼方に 80）

○彼はやつと電車にすがりつく事が出来た。（波 35）

○甲板の格子になつたところをはなして，三人それにしつかりとりつきました。（銀河鉄道の夜 291）

なお「とりつく」のうち

○私が最初この畠へ上つて来た道を逆行して河原へ降り，暫く流れに沿つて下つてから，最初の屈折点で，別の丘へ取りついた。（野火 95）

のように，「岩や山などにたどりついて，のぼりだす(？)」ことをあらわす用法は，辞典に登録されていないが，上にあげたような用法とは別に立てるべきものである。この意味では，「すがる」「すがりつく」などにおきかえることはできない。

〔132〕 おろす<うる

「おろす」は問屋が小売店に対して売ることをいう。（用例はなかった。）「うる」は，ふつうは商店から一般の人に対して渡すことに使われる。しかし，「おろす」にあたるようなばあいでも，いわないことはない。つぎの例はこれに近いと思われる。

○田舎の植木屋仲間に売るやうな色々の植木と，西洋草花の種子などを，どつさり仕込んで，（あらくれ 104）

小売店に対して売ることでも，売り手が問屋ではなくて一般の人なら，「おろす」といわない。

○古書と古道具の一切を売買する銅座町のある店で彼はその漢書を売り，（青銅の基督 40）

また，問屋が一般の人に直接うったばあいにも，「おろす」とはいえない。このように，「おろす」は「うる」に比べてその相手の面と主体の面と両方で制約されている。

〔133〕 たむける，そなえる＜ささげる（おくる，あげる）

「たむける」「そなえる」は，神・仏・死者などに，花やその他のものをささげることにいう。

○雑司ケ谷の墓地にある或仏へ花を手向けに行く習慣なのださうである。（こゝろ 14）

○饂飩の切り端は皆一寸一箇所を撮んで三角形に捻へて膳へ並べて仏壇へ供へた。（土・上 188）

「そなえる」については，広辞苑その他で，「神仏・貴人などの前に」としているものがある。すなわち，神仏以外にも，現に生きている人間に対してこの動詞が使われるとするのである。しかし，そういう例はなかった。

「ささげる」は，これに対し，神仏に対してのものと，人間（もちろん身分の高い人間）に対するものとがある。

〈神　仏〉

○何よりも先に，ここの社（やしろ）に奉納金を捧げるのであつた。（潮騒 5〜6）

〈人〉

○彼等はその貴重な水を兜にいれて王に捧げた。（映画の友 1956年 1月 131）

この系列には，なお，「おくる」とか，「あげる」とかも考えられる。しかし，どちらも，直接この系列に入れて比較するのには，少しずれが大きい。すなわち，「おくる」は，いまここで問題にしているような，たとえば「花束をそなえる」といった具体的なものを対象にする動作ではなく，「〜に位をおくる」というような，抽象的なばあいにだけ，死んだ人に対しても，生きた人に対しても，共通に用いられるのである。（ただし実例なし。）それ以外の，おくりものをするばあいには，当然相手は生きている人間にかぎられる。また「あげる」の方は，たしかに神仏に対しても，また，生きている人に対しても，「花束をあげる」といえる。しかし，生きている人に対しては，「そなえる」に見られるような，うやうやしい気もちがなく，相手も身分の高い人などにはかぎられない。そして，「そなえる」などが相手の意図や動作を無視した一方的な行為であるのに対し，「あげる」は多くのばあい所有権の移動をともなうもので，単純に一方的だとはいえない。このような点を無視すれば，「おくる」も「あげる」もともに神仏と人間のどちらにも使える点で「そなえる」の系列に属する。

〔134〕 おちあう，ゆきあう＜あう，であう，でくわす，ぶつかる，めぐりあう

「おちあう」「ゆきあう」は，人とあうばあいにつかわれる。

○帰つて来たばかりの佐々と落ち合つた。（仲子・上 43）

○やはり明子は東京へ帰っていた。そしてその夜，新宿で，広介にも行き逢った。（くれない 120）

「あう」「であう」などは，人にあうばあいと事件・ことがらにあうばあいとがある。

〈人〉

○おれは同じ晩また父上と会った。（暗

〈ことがら〉

○しかし直ぐに敵の騎馬兵の追撃に遭つ

夜行路・前 203)

○廊下のところで小使に出逢つた。(破戒 26)

○何処かで好きな女性に出つくはす。その人と半年か，一年ぐらゐ交際を続ける。(波 104)

○若い女に撞着(ぶつか)りたいなぞといふ愚劣な事になつて了ふ。(平凡 112)

○いかなる人に邂逅(めぐりあ)はうと，決して其とは自白(うちあ)けるな，(破戒 299)

た。(李陵 165)

○再三気味のわるい事に出遇つてゐたからである。(つゆのあとさき 4)

○もつとひどい事件にさへ，僕はどの位出つくはしたかしれない。(波 65)

○あんまり永生きするから，こんな時世にぶつかったのよ。(罪がらせの年齢 298)

○どれだけの幸福に，巡り合ったというのか。(自由学校 117)

＜人＞と＜ことがら＞という分類にあてはまらないもの，あるいは，これらの中間とでもいうべきものにも，いろいろなものがふくまれる。比較的いろいろの相手をとった例がある「であう」について説明すると，まず

○ウマの第二回の調査のときに，偶然にサルの群れに出会って，(高崎山 30)

のように動物を相手とするものがある。これは，もちろん人間なみの相手である。つぎに，からだの部分をあらわすことばと結びついている例がある。

○彼の顔に出会うと地野上等兵は眼の辺(あた)りをゆがめて顎から上をしゃくってつき出した。(真空地帯・上 97)

このばあいは，単に「かれにであう」というのと，まったく同じことをあらわしている。からだの部分といっても，「顔」は人全体を代表するのにもっともよい部分だ。また，人がのった乗り物に「であう」という表現もある。

○組合の舟は，歌島から三哩位のところで，B24の艦載機に出会つた。(潮騒 33)

○高原町へ出ると，折よく町駕籠に出会ったので，(小説の泉 1956年9月 230)

乗り物をあらわす名詞は，しばしば人をあらわす名詞と同様にあつかわれることがある。さらに完全に人間とは縁のない，ものを相手とした例もある。

○しばらくして一行は，五葉松のジャングルに出あった。(別冊文芸春秋 1956年 51号 185)

○君の一篇にも生活と自然とが密接して居るといふことが有り，また時々色々なものに出遇(つ)ふ面白味が描(えが)いてあるが，いかにも左様だ。(武蔵野 26)

ただし，この「武蔵野」の例における「もの」には，人やできごともふくまれているかもしれない。ほかの動詞は，これほど種類の豊富な相手とは結びついていない。しかし，そういう例がまったくないわけではない。

○成るたけ時雄の顔に逢ふのを避けて居る様子であつた。(蒲団 74)

この例では，「あう」が人間のからだをあらわす語と結びついている。

○やがて彼女は一枚の不思議な絵にぶつかった。(人間の壁・上 158)

この例では，「ぶつかる」が，ものをあらわす名詞と結びついている。しかし，ものをあらわす名詞とともにもちいられた，

○待つ思ひに我慢がならなくなると，ゴムの雨合羽を羽織つて海に会ひに行つた。海だけが彼の無言の対話に答へてくれるやうな気がしたのである。（潮騒 60）

という例では，このもの（海）が，ぎ人化してあつかわれている。そういうところからみると，人やできごとにくらべれば，ものの方が「あう」相手になりにくいということがあるかもしれない。

なお，最初に，「おちあう」「ゆきあう」は人以外のものと結びつかない，といったが，これに対する例外が1つあった。

○岸子がいま行き合っている自分の境遇を，如何なる性質のものかはっきり知っていることを思えば，（くれない 13）

この例外がどの程度の意味をもつものであるかは，あきらかでない。

2.2.3 相手の評価

相手の評価とは，つまり主体と相手との上下関係の認識であり，

たてまつる，さしあげる，献ずる――さずける，たまわる，めぐむ，ほどこす＜あたえる，やる，わたす

もうしあげる＜いう

いただく＜もらう

お目にかかる＜あう

などの敬語がこれにあたる。

つぎにあげる「しこむ」も，やはり上下関係がきいている。これと逆に，もっぱら上の相手に対する行動とおもわれるものに「いさめる」があり，上下どちらに対してでもよい「さとす」「いましめる」などと対立している。

〔135〕 しこむ＜おしえる

「しこむ」は自分よりも目下のものに対しておしえるばあいに使われる。

○今度新しい子が来るから，お前の妹分にして仕込んでやってくれと（出家とその弟子 155）

たとえば，つぎの2つの例を比べると，おしえられている内容は，おなじようなことだが，「しこむ」の方は「おしえる」におきかえることができるのに対し，「おしえる」の例を「しこむ」におきかえることはできない。

○娘時代から女のたしなみとして，いやというほど仕込まれたお針仕事への（厭がらせの年齢 295～296）

○このあひだ編物を教へに行つたお宅でも（冬の宿 25）

これは，「おしえる」が別段評価的なニュアンスをもたないのに対し，「しこむ」では，おしえるものとおしえられるものとの間に上下関係がみとめられ，そして「冬の宿」の例では，むしろおしえられるものの方が目上である，ということによるのであろう。もっとも，この例でも，客観的な関係として目上目下というものが固定しているわけでは

ないから，話し手によっては「しこむ」という表現をつかったかもしれない。しかし少なくともこの話し手は自分をへりくだった位置において話をしているのであって，そのばあいには，「編み物を教へに行つた」とはいえても，「しこみに行つた」とはいえない。

2.3　とりつける対象

2.3.1　対象のありなし

〔136〕　つなぐ／しばる，ゆう＜むすぶ（ゆわく，ゆわえる）

これらの動詞は，みな，ひも・つな・なわなどの細長いものを，ある状態にすることをあらわすが，そのばあいに，ひもなどそれ自身だけを，ある状態にすることもあり，また，他の物体との関係において，その状態にすることもある。すなわち，ある動作のばあいには，これらのひもなど以外に，そのひもが付着する他の物体（対象）が必要であり，他のばあいにはそうではない。このような観点から，これらの動詞を分類してみる。

まず，どのような現象をあらわすか，という観点から，4つのグループに分け，そのおのおのについて見ていくことにする。

(1)それ自身の変形。「ひもをわに～」
(2)同類との結合。「ひもをひもに～」
(3)他の物体との結合。「ひもを柱に～」
(4)物体どうしの結合。「犬を柱に～」

(1)　それ自身の変形

ここでは「ゆう」と「むすぶ」とが用いられる。いちばん典型的には，

○糸端を軽く結んで輪を作り，（婦人生活 1956年10月付録　新型あみもの大全集　95）
○色んなネクタイを一ぱい持つてお出でになるのだけれど、この巾の広い黒いのをそんな風にお結びになるのが一等お好きだと見えて，（桑の実 86～87）

のようなものがある。

○たつぷりした癖のない髪を，この頃一番自分に似合ふ丸髷に結つて，（あらくれ 214）
○髪は無造作に首筋へ落ちかゝるやうに結び，（つゆのあとさき 49）

など，髪を結うのも，細長い糸状のものを一定のかたちに変形するという観点で，これと同じグループにいれることができる。

つぎの例は対象が1つであるか，あるいは，(2)にあげるような「ひもをひもにむすぶ」というグループにいれるべきか，問題である。

○幅の細い帯を楽に後(うしろ)で結んでゐる其人の姿を（こゝろ 110）
○一旦二十冊包みこんで，風呂敷を結んでしまってから（むらぎも 109）

「帯をむすぶ」ばあい，それは結局はつながった1本のものであるが，その両はしを

とれば，たとえば

○和田澄江が羽織のひもを結びながら出て来た。（人間の壁・上 224）

にみるように，別々の2本のものである羽織のひもを結ぶのと区別することはできない。「ふろしきをむすぶ」も同様であって，全体としては1枚のものであるが，結ぶのに直接関係するのは，わかれわかれになったその両はしである。これらは，つぎにあげる＜同類との結合＞との橋渡しをするものである。なお，「ゆう」の例は，ほとんど全部が「髪をゆう」であり，1例だけが例外として「帯をゆう」という表現だった。

○母は帯を結うて蒲団の上に起きてゐた。（野菊の墓 47）

(1′) やはりそれ自身の変形であって，事実としては，上にあげた「髪を島田にゆう」などと，まったく同じことをあらわしていても，表現形式の上で，逆に「島田をゆう」のようにでき上がった状態を，「を」格の名詞であらわすことがある。

○日本髪をゆつてみようとお思いですか？（小説サロン 1956年12月 129）

○桃色のてがらもかけて髷も結んでみたい。（放浪記 124）

単に「髪をゆう」という表現では，「髪」というのは，結う以前の素材としてのものをさしているのか，あるいは，でき上がった結果としての一定のかたちをさしているのか，あきらかではない。しかし，これにある種の修飾語がともなうと，一方にきまってくるばあいがある。たとえば

○半白の髪を無造作に結つた，いかにもインテレクチャルな方だつた。（中央公論 1953年8月 159）

は，(1)としてあげた「髪を島田にゆう」の類であり

○おくみは大分しばらくかういふ髪を結はなかつた。（桑の実 50）

○東京風の髪をも結つてもらひ（あらくれ 178）

は(1′)としてあげた「島田をゆう」の類である。

(2) 同類との結合

これは，「ひもをひもにむすぶ」「ひもをひもとむすぶ」などで，実例としては，「むすぶ」だけに，それも，わずかにつぎの1例があっただけである。

○5は2の糸から糸目二本くらい離れた上に裏から表目二本上に通し，始めの糸と結ぶ。（主婦の友 1956年11月付録 和裁と和装 179）

(2′) やはり同類のものとの結合で，「ひもとひもとをむすぶ」のような表現がありうるはずであるが，これと同じ形の実例はなかった。ただし，さきにあげた「はおりのひもをむすぶ」や，

○靴のヒモを結ぶ余裕なぞは，（自由学校 221）

などで単に「ひもをむすぶ」といっているのは，実は1対のひもとひもとを結びあわせることである。

(3)　他の物体との結合

これは，たとえば「ひもを柱にむすぶ」のように，細長いひもの類を他の異質の物体にくっつけることである。これには，つぎのように「むすぶ」と「つなぐ」との例があった。

○僕は懐にあつた紙の有りたけを力杖に結ぶ。（野菊の墓 54）

○「この命綱をむかうの浮標へつないで来る奴は居らんか」（潮騒 144）

(3′)　やはり他の物体との結合ではあるが，「ひもを柱にむすぶ」のように，両者が同等の資格において並んでいるのではなく，「柱をひもでむすぶ」のように，他の物体の方に重点があって，それの状態を変えることをあらわす表現がある。この例は，「むすぶ」「ゆわえる」「しばる」に見られた。

○髪は麻で結んで白樺を挿して遣つた。（土・上 54）

○行李をゆわえてきた細引の（くれない 119）

○野良犬をつかまえて，縄でしばっていじめていたけれど，（人間の壁・上 217）

(4)　物体どうしの結合

これは「犬を柱に～」のように2つの独立の物体の間をひもやなわで結合するばあいである。これには「むすぶ」「ゆわえる」「しばる」「つなぐ」の例があった。しかし，このうち，「つなぐ」をのぞいた「むすぶ」「ゆわえる」「しばる」は，むしろ「むすびつける」「ゆわえつける」「しばりつける」と，「つける」という，あと要素をともなったかたちでつかわれる方が多い。

○うめ女は目を開いて，末孫の背に結ばれているが，（厭がらせの年齢 270）

○風呂敷包の角ばつたのを首に結へて，（高野聖 12）

○それぞれ勢子たちに附添はれて駅の木柵に縛られてゐた。（闘牛 114）

○妹は祖母の着換を包んだ風呂敷包をさげ，うめ女を背中に結びつけて，（厭がらせの年齢 270）

○三春兵の首を腰にゆわえつけたまま（落城 29）

○旋盤の鉄柱に前の日の学生が縛りつけられてゐるのを見た。（蟹工船 67）

「つなぐ」には「つなぎつける」というかたちはない。

○舷側を並べた歌島丸と鰹船は，港内の広さ三畳ほどの浮標に，それぞれの船首を，二本のロープと二本のワイヤアで繋いで，風害に備へた。（潮騒 141）

このことは両者のちがいを示している。すなわち，「むすぶ」「ゆわえる」「しばる」などでは，むしろ上に(1)(2)(3)としてあげてきたそれ自身の変形，ないしは他の物体の状態変化という点に重点があり，これに対して「つなぐ」のばあいには，2つの物体のあいだを連結することに重点があるのだ。

「つなぐ」がつかわれるとき，一方の物体だけが明示されていて，他の物体は示され

ていないことがある。

○白糸でつないだ固い角のある黒い虫の荷馬を持つて（桑の実 82）

○発育盛りの若い二疋の犬は毎日鎖で繋がれねばならなかつた。（田園の憂鬱 50）

こうなると，それは「しばる」などに非常に近い。しかし，このばあいも，単に虫や犬を糸やくさりでしばったという，1物体の状態変化について，のべているのではない。表現面ではそうであっても，事実としては，もう一方のはしが手ににぎられ，あるいは柱にむすびつけられているのである。単に犬の首にくさりをむすびつけただけで，もう一方のはしが何物にもむすびつけられていなければ，それは「犬をくさりでつないだ」ことにはならない。

(4′) 事実としては，上にあげた「犬を柱につなぐ」と同じであっても，犬と柱とを対等の位置にもってきて，「犬と柱とをつなぐ」のように表現するばあいがありうる。これについては「つなぐ」の例しかなかった。

○役者と楽屋とは，切つても切れない糸で繋がれてゐるんだから，（多情仏心・前 42）

これは比ゆ的な例であるが，「AとBとをCでつなぐ」という表現については，これより適当な具体例が見当たらなかった。このグループにもまだ多少の変種が見られる。1つは

○ロープとワイヤアは緊張して，浮標と歌島丸とをつないでゐる。（潮騒 142）

のように，手段であるひも・なわなどが主語として表現されているものである。また，もう1つは

○二本のレールを木の横棒でつないだその恰好，（むらぎも 183）

○それぞれ百以上の蛸壺をつなぐロープは，（潮騒 14）

のように，同類の多くのものをつなぐばあいである。ここでは形式的には「AとBとを」のかたちをとっていないが，事実としては，これと同じであり，上の例文でも，たとえば「レールとレールとを」「たこつぼとたこつぼとを」のように，いいかえることもできる。

以上をまとめると，つぎの表のようになる。

	ゆう	むすぶ	ゆわえる	ゆわく	しばる	つなぐ
(1) ひもを～	◎	◎				
(1′) ひもで輪を～	◎	◎				
(2) ひもをひもに（と）～		◎				
(2′) ひもとひもとを～		(◎)				
(3) ひもを柱に～		◎				◎
(3′) ひもで柱を～		◎	◎		◎	
(4) 犬を柱に～		◎	◎		◎	◎
(4′) 犬と柱とを～						◎

「むすぶ」は，ここにあげたほとんど全部の領域をおおっている。「ゆう」は対象が

1つで，それ自身の変形をあらわすばあいにかぎられる。「ゆわえる」「しばる」「つなぐ」は，ともに，ひものようなものと，柱のような他の物体と，2つの対象のあいだに関係をつけることであるが，そのさい，上にのべたように，「つなぐ」は2つの物体と物体とをむすびつける第4の類に重点があり，「ゆわえる」「しばる」は「ひもで柱を～」のように，細長いものを手段として他の物体の状態を変えることをあらわす点に重点がある。

〔137〕 くみこむ，くみいれる／くみたてる＜くみあわせる

これらはみな，いくつかの部分的なものをあわせて1つのまとまったものを作り出すばあいにつかわれる。そして「くみこむ」「くみいれる」は，すでに一応形をなしているあるものに，その部分品をつけたすばあいにいう。

○その予備レンズのうしろにフォーカシング機構が組込まれており，（アサヒカメラ 1956年6月 172）

○道徳教育を独立の課程として，時間割に組み込ませることを（人間の壁・上 248）

「くみこむ」には，上のように，具体的なものと抽象的なものと両方の例があった。「くみいれる」には

○日本をアメリカの戦争体制の中に組み入れ，（中央公論 1953年7月 68）

のように抽象的な用例しかなかったが，これも具体的なばあいが当然ありうるはずで，「くみこむ」「くみいれる」は，一般におきかえることができる。

これに対し「くみたてる」のばあいには，いわばおなじ資格の部分品どうしをあわせるのであって，一方がすでに全体としてのかたちをなしている，ということはない。

○煖炉に一度組み立てた薪がなかなか燃えつかず，（風立ちぬ 151～152）

まきのようなばあいには，1つ1つが，まったく同じ資格の部分品であり，これを寄せ集めて1つのまとまりを作ることが「くみたてる」ことである。なお，この例では，まきの集まりに対する適当な名前がないが，ばあいによっては，こうしてくみたてられた全体が，1つのまとまったものとして名前をもっていることがある。そして，そのばあい，「を」格の名詞によってあらわされる対象は，部分・材料であってもよいし，全体・製品であってもよい。

○折畳み式の携帯用三味線を器用に組立ると，（主婦と生活 1956年4月 99）

このばあいには，完成した全体である三味線が対象として表現されている。この文脈に材料をおぎなうとすれば，「部品で」という，「で」格の名詞によってあらわされることになる。そしておなじ事実は「部品をくみたてて三味線に作る」というかたちでもいえる。

「くみあわせる」では，この動作の相手があってもいいし，なくてもいい。多くのばあいには

○その土の上へ薪を組み合せて積み上げた。（田園の憂鬱 73）

○ナイフから放した指を，卓布の上で組合せて，（自由学校 62）

のように同類のものをあわせるのであって，特にそれ以外の相手は必要としない。しかしなかには

○頭蓋骨に，骨を二本組合せて，墓には不似合ひに感じられる絵もあつた。（帰郷 9）

のように，相手（「頭蓋骨」）が必要となるばあいもある。ただし相手といっても，「くみこむ」「くみいれる」では，すでになかば作られた全体としての相手であるのに対し，「くみあわせる」では，かならずしもそうではない。いまの「帰郷」の例でも頭蓋骨は骨と同資格の部分にすぎず，「頭蓋骨に骨をくみこむ（くみいれる）」とはいえない。

なお，くみあわせる相手は，「に」格で表現されるばあいと，「と」格で表現されるばあいとがある。「～に～をくみあわせる」というと，「～に」の方が主要な部分であり，「～と～とをくみあわせる」というと，両方がほとんど同じ程度の重要さをもつものである。しかし，これは関心のおき場所にすぎず，同じ事実についても，両方の表現が使われる。（p. 688～689 参照。）

○このジャケットに紺のスカートを組み合せたりすると（若い女性 1956年9月 276）

○無地のウールのシャツと，タイトまたはプリーツのスカートを組合わせて作って，（明星 1956年5月 298）

〔138〕 もつれる＜からまる

「もつれる」は，1つのものが，あるいは2つ以上であっても同質のものが，いりくんだ状態になることをいう。「からまる」は，同質のものどうしのばあいにも，また，異質の対象に付着していりくんだ状態になるばあいにも，つかわれる。

○どう縺れて居るか解らない鎖を直してやらうとする。（田園の憂鬱 52）

これは，1本のくさりがいりくんだ状態になっている例である。

○二つもつれて低く舞ひ舞ひする黄色い蝶々（桑の実 158）

このばあいには，2つのものが「もつれて」いるのであるが，それはともに，ちょうちょうという同質のものである。

○すこし縺れた髪を直しはじめた。（風立ちぬ 80）

この例では非常に数多くのものが，おたがいにいりくんでいるのだが，やはり，髪の毛という同質のものどうしが「もつれて」いる。なお，「もつれる」の例としては

○ようやく聞きとれるような，舌のもつれた言葉だった。（人間の壁・上 213）

○先生の足は，意外にも，もつれるやうな具合ひになつた。（本日休診 65）

のように，からだの部分についてつかわれることがある。これらは，かたちの上にあらわれた状態というよりも，そのはたらきの面での不調をあらわしているのだから，「くさりがもつれる」や，「髪の毛がもつれる」とは，ややちがうかもしれない。それにしても，おなじ1つの個体が，あるいは同質のいくつもの個体が状態をかえるのだという，「もつれる」の特徴においては，これらも同様である。

以上のべたことに対し例外となるのは，つぎの1例である。

○煙硝の硫黄くさい焦げた匂いが鏑矢のうなりともつれて山肌に流れ，（落城 26）

この例は，しかし，におい・うなりという，やや抽象的なものごとについてのべているので，「髪の毛がもつれる」のような，視覚的にとらえられる状態変化とは別にすべきかもしれない。

「からまる」は，これに対して，もっと広い範囲の現象をあらわす。

○水と水とがもつれて，からまつて，揉み合て，自から音を発するのである。（武蔵野 24）

の例では，「もつれる」とともに用いられて，同質の主体がいりくんだ状態をあらわすが，

○人の足になんか搦まつて，贅沢ぢやあないか，（高野聖 37）

○五本の指に藻がもつれた糸のようにからまって来る。（放浪記 231）

のようなばあいには，ある1つのものが，他の対象に付着していりくんだ状態になることをあらわす。（「高野聖」の例は，ひきがえるに対していっていることばである。）このように，「からまる」は，異質の対象との関係において状態が実現するばあいをも含む点で，「もつれる」よりも広い。

2.3.2 対象の種類

〔139〕 かぶる／きる／はめる／はく＜つける

これらは，衣類その他を身につけることをあらわす動詞であり，そのつける部分が，からだのどの位置であるか，ということによって区別される。もっとも，そのつける衣類が，たとえば，手袋であるか，たびや靴下であるか，という面での区別だといえないこともないが，そういう衣類のグループができるのも，結局はそれらが手とか足とか，同じ部分につけるために用いられるものだからである。これらの動詞を区別する特徴として大切なのが，衣類であるか部分であるかということは，たとえば，手に靴下をつけたばあい，これを「靴下を手にはめた」というか，あるいは「手にはいた」というかによるわけであるが，そういう状況はほとんど考えられないし，実例にもなかった。可能性としては，どちらもありうるかもしれない。

なお，今回の資料以外のものには，つぎのような例がある。

○うわばきを手にはいて，かおをなでました。（中川李枝子「いやいやえん」8）

かりに「うわばきを手にはく」という言い方が可能だとしても，そのことからすぐに「うわばきを手にはめる」がおかしいということはできない。両方とも可能で，意味にちがいがあるかもしれないからだ。そのばあいには，＜身につけるもの＞＜からだの部分＞など以外に，動作のし方自身の特徴が大きく表面にでていることになる。お茶の水女子大生についての調査では，「手に靴下をはいてみる。」という例文に対し，○—2，△—4 ×—15，「手に靴下をはめてみる。」という例文に対し，○—14，△—5，×—2だった。

まず，「かぶる」という動詞は，あたまにのせることをあらわす。そのばあい，対象としては，帽子（山高・麦わら帽・中折れ・鳥打ち・角帽・制帽・フエルト・ソフト・

ハンチング・ベレー・パナマ）・かぶと（鉄かぶと・鉄帽・ヘルメット）・かさ（すげ笠・編笠）・頭布（お高祖）などが，実例としてあった。

「かぶる」が対象とするものは，帽子などのように，はじめからそのために一定のかたちに作られているものにかぎられない。

○手拭をかぶつてゐるので島村が見えないのか，（雪国 105）

○ショールを頭から被り（くれない 34）

のように，一枚の布になっているものを「かぶる」こともある。この類には、まだ肩掛け・ふろしき・ベールなどがある。このばあいの条件としては，＜頭からかぶる＞ことが必要で，たとえば，おなじものでも肩にかけたのでは「かぶる」とはいえない。

また，ふつうならば「きる」という単語を使うべきものについても，同様にあたまからかけるばあいには，「かぶる」という動詞が使える。

○外套を頭からかぶつてきた男にすれちがふとき，（冬の宿 75）

○二人でかぶったマントの中で，マッチをすりあわして，お互に見あった顔，あっけない別離だった。（放浪記 119）

ほかに，この類では，「どてらをかぶる」「レーンコートをかぶる」があった。

つぎに，寝具の類について「かぶる」を使った例がある。

○八春先生は安心して蒲団を頭からかぶつた。（本日休診 85）

○私は頭からスポツと夜着を冠つて小さくなつた。（平凡 25）

○頭から，スッポリ毛布をかぶって，臥ていた五百助は，（自由学校 316）

このばあい，前にあげたふろしきの類やマントの類とちがう点は，少なくともふとんについては，かならずしも＜頭から＞という規定があてはまらないことだ。

○握り合せたむづかゆいやうな手を引つ込めて，眼元まで布団を被つて，（或る女・前 195）

○顎まで布団を被つてしまつた。（或る女・前 200）

すなわち，ふとんについては，単にからだの上にかけているだけで，「かぶる」といえるようである。したがって

○勘次はげつそりとして家へ帰ると蒲団を被つて畢つた。（土・上 107）

のように，単に「ふとんをかぶる」とあったばあい，頭の上までかぶったのかどうかは、はっきりしない。

「かぶる」には，もう1つ，「面をかぶる」といういい方が例外的なものとしてある。

○お面を被つて行かないとはいり憎いから，もう少しこゝで飲んでかうぢアないか。（多情仏心・前 80）

面は＜顔にかぶる＞のであって，＜頭にかぶる＞のではない。だから，ほかの「帽子をかぶる」などと完全におなじだとはいえない。なお「面をかぶる」といういい方は，つぎのように比ゆ的につかわれることが多い。

○全然紳士の面を冠つた小人の遣方だ——情ないぢやないか。（破戒 136）

「きる」は，広い意味での着物類につかわれる。すなわち，和服の類（ひとえ・あわ

せ・筒袖・振袖・綿入れ・長じばん・ゆかた・寝巻・厚司・丹前・はっぴ・どてら・はんてん・ちゃんちゃんこ・羽織)，洋服の類（背広・モーニング・フロック・タキシード・スーツ・セーラー服)，外とうの類（二重まわし・インバネス・上っぱり・あっぱっぱ・雨合羽・レーンコート)，肌着の類（シャツ・チョッキ・ジャケツ・セーター・ジャンパー・ワンピース・水着)，その他，ころも・みの・けさ・よろいなど。またでき上がった着もののかたちをあらわすことばではなく，材料をあらわすことばと結びついて，「きる」が使われているばあいがある。

○縮を着る真夏にも縮を織る真冬にも，（雪国 152)

このほか，セル・かすりなど。これも，当然着もののかたちに仕立てたものを「きる」のである。また，もっとなまの材料をあらわすことばと結びついてつかわれた例もある。

○破れ笠に藁束を被て，実にも乞食で無いとは云へぬ容体。（思出の記・上 181)

このばあいには，みのの代りに，田んぼに落ちているわらの束をからだのまわりにつけているようすを，いったものである。やはり臨時の着ものと見立てた表現だ。また，

○細君の被けた蒲団を着たまゝ，すつくと立上つて，（蒲団 20)

○シートの上に，毛布を着て長まつていらつして，（桑の実 100)

などは，本来はからだにかけて使うものであるが，起き上がった姿で身にまとったので，着ものとおなじように表現したものである。

「きる」に対する例外とも思われる例が多少ある。

○エプロンを着た中年の女が，（自由学校 239)

は，もし短い前かけ風のものであるとすれば「きる」であらわすのはあまり適当ではないが，そでのあるエプロンだと考えれば例外ではない。

○青柳が心持わなゝいてゐるお島の綿帽子を眺めながら気軽さうに言つた。そんな物を着ることをお島が拒んだので，着せる着せないで談がその日も縺れてゐたが，到頭被せられることになつてしまつた。（あらくれ 51)

○地味なもんぺを着て，髪に黄いろいリボンを結んでゐる。（潮騒 114)

は，完全な例外である。綿帽子は「かぶる」，もんぺは「はく」というのがふつうであって，どうしてここで「きる」がつかわれているのかは，わからない。

「はめる」という動詞は，主として手に何かをつけることをいう。「手袋をはめる」「グローブをはめる」などの用例が多いが，そのほかのものとしては，たとえばつぎのようなものがある。

○高価な金色の腕時計をそっと自分の腕にはめてみた。（放浪記 228)

○黄金の指環をはめて，流行を趁つた美しい帯をしめて，（蒲団 15)

○手錠を嵌められて，五，六人が，巡査に連れられていく姿も（自由学校 353)

これらは，帽子や着ものや手袋とはちがって，衣類には属さない。その材料からいっても，形からいっても，手袋などとは異質のものである。しかし，手の外側にぴったりおさまるようなかたちでとりつける，という点では共通している。

ただし，「はめる」の用法は，実はかなり広く，その中で，手という部分についてのばあいだけをとり出して1つの意味とすることは，たぶんできないであろう。

○そして手ばしこくコルセツトをはめたり，漸く着なれたペチコオトを着けたりした。（あらくれ 230）

では，やはりからだについてではあるが，手以外の部分だし，

○額から後頭まで箍(たが)でもはめるやうに緊(し)めつけられる感じ（仲子・上 62）

は，比ゆ的な用例だが，本来は，おけなど，からだ以外のものについての表現だ。そして，以上のように，何かあるものの外に「はめる」ことよりも，からだ以外のものについては，むしろ

○伴子は，格子戸をはめた内玄関から上つて，（帰郷 188）

○レーンコートの前ボタンをはめながら，（人間の壁・上 32）

のように，あるもの（わく）の内側に入れるばあいの方がふつうである。これらもまた，あるものに対してぴったりとりつける，という点では「手袋をはめる」などに共通の側面をもっている。

「はく」という動詞は，「ズボンをはく」ようなばあいと，「げたをはく」ようなばあいとで別語とされることもあり，また同じ単語の別々の意味とされることも多い。しかし，これはむしろ漢字の使いわけ（「穿」と「履」）からくるものであって，実例にあたっていくと，そのあいだをはっきり切ることはむずかしい。実例としては，ズボンの類に，はかま・スカート・もんぺ・ももひき・ぱっち・ズボン下・さるまた・ズロース・ショーツなどがあり，また左右が別々になっている類として，くつ下・ストッキング・ソックス・きゃはんなどがあった。一方，げたの類には，ぽっくり・あしだ・くつ・スリッパ・ぞうり・わらじ・地下たびなどの例があった。これら2つの類のちがいとして，片方は地面にじかにつけるものであり，もう片方は，家の中で畳などにしかふれない，というちがいが，みとめられるとすれば，たびと地下たびのあいだで線を引くことになる。そして，スリッパなどは，ちょっと処置に困る。いずれにせよ，これらがみな足の方につけるものであるという点は，比較的はっきりしている。その点では，たとえば「かぶる」が頭にかぎられないこと，「はめる」が手にかぎられないことなどに比べれば，特徴がきわだっている。

「つける」「身につける」は，以上の動詞のおのおのにあたるばあいに，つかわれる。たとえば「かぶる」にあたる例としては，

○帽子をつけ，外套を着，（仲子・上 36）

○能役者は面(おもて)をつけないで登場する。（サンデー毎日 1956年5月20日 67）

「きる」にあたる例としては，

○近頃漢の辺境では太守以下吏民が皆白服をつけてゐることを（李陵 197）

「はめる」にあたる例としては，

○腕時計さえ身につけていないことに，気づいた。（自由学校 123）

「はく」にあたる例としては，

○其の白縞の袴を着け，紺がすりの羽織を着た書生姿は，（蒲団 66）

○長靴をつけた足をひろげて（真空地帯・上 13）

などの例があった。

しかも「(身に)つける」ものの範囲は，上にあげた「かぶる」「きる」「はめる」「はく」などの動詞であらわされるよりも広い。たとえば，

○いつもそれ〔ネクタイ〕ばかりをお附けになる。（桑の実 87）

では「むすぶ」，

○戌の刻に腹当胴楯をつけた長十郎が陸奥に暇乞いに来た。（落城 47）

では「あてる」，

○巻脚絆(まきゃはん)をつけることなく衛門(えいもん)をつれ出されたが，（真空地帯・上 4）

では「まく」などの動詞によってもあらわせる現象を，この「つける」があらわしている。ただし，「つける」がこれらの動詞とおなじようにつかわれるといっても，ニュアンスの面ではちがうばあいがある。その第1は，「つける」が特にからだの部分を指定していない表現であるために生じるものである。すなわち，上の「はめる」とおなじような用法の例として引いた文で，「腕時計さえはめていない」といえば，具体的にもっているようすが限定される。これに対し，上の文では，「身につけていない」といったために，特に腕にはめることに限定されず，＜もっていない＞ということに抽象化している。このばあいの文脈では，腕にはめているか，ポケットに入れているかという持ち方には重点がなく，要するに身のまわりにもっているかどうかをいいたいのだから，その意味では「身につけていない」といったことに積極的な意味が認められる。

ニュアンスがちがう第2のばあいは，たとえば，

○朝に晩に肌身に着けるものかと考へると，（破戒 176）

○誰が肌につけたかしれない古着を，（雪国 151）

などと，「肌身に」「肌に」のような対象があらわれるものである。これらの例は，からだの部分が指定されていない，という意味では抽象的だが，その身につけた人間を感じさせる，という意味では，かなり具体的なイメージをともなう。もっとも，「肌につける」というばあい，常にこういうニュアンスがともなう，とはいえないようで，たとえば，

○其頃の学生は絹(いと)の入つた着物を肌に着けませんでした。（こゝろ 189）

では，単に「きませんでした」というのとほとんど変わりがない。

「つける」がつかわれる理由としては，またつぎのようなことがある。「かぶる」は帽子に，「きる」は着ものに，「はく」はズボンやくつに，というふうに，かぎられているので，これらの異なったものを同時に対象とするばあい，抽象的な「つける」という表現が必要になるのである。

○死んだ父親の形見のズボンと粗末なジャンバアを身に着けてゐる。（潮騒 8）

この例では，もし言いなおせば「ズボンをはきジャンバーをきて」ということになる。

○これも，アメリカ風のフチの広いソフト，女の羽織裏地のようなネクタイ，ボール

箱のような仕立の上衣に，淡色ギャバのズボン，コードバンの赤靴——いずれも，真新しいのを，身に着けてはいるが，（自由学校 44）

ここでは，いちいち言いなおすとすれば，「ソフトをかぶり，ネクタイをしめ，上着をき，ズボンや靴をはき」のように，わずらわしい言い方をしなければならない。このようなばあいに「身につける」という抽象的な表現がえらばれる。

いくつもの単語を並べるのではなく，1つの単語でちがった種類のものをあらわしているときにも，やはり，「つける」がつかわれる。

○陸奥はすぐ通すように下知すると，自分は袴をつけた。（落城 18）

これは，いいなおせば「きる」と「はく」になる。

○蓑笠を着けた村の人々が大勢，（波 265）

このばあいには「かぶる」と「きる」である。

さらに特に何と何を「つける」のか，表現されていないこともある。

○彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた。（こゝろ 8）

○私だつて，お正月には切立ての新しい物を身体につけたいには極まつてゐまつさ。（生まざりしならば 205）

これらのばあいには，もし個別的な表現をえらぶとすれば「きる」をつかうのがもっとも適当であろう。しかし，これらの例で「つける」ものが，せまい意味での＜きもの＞だけに限られるとは考えられず，理屈をいえば，やはり「かぶる」とか「はく」とかの動作までおおう表現でなければいけないのだ。

なお，ちがった種類の対象に対し，1つの動詞で間に合わせた例としては，「つける」以外にいくつかの実例があったので，以下にあげておく。これらには「きる」がつかわれた例が多い。

○またふいと羽織や帽子を被(かぶ)て出て往つたが，（あらくれ 108）

○勘次は其の借りた羽織と袴を着て村中へ義理に廻つた。（土・上 64）

○吾儕(わがとも)にばかり裃(かみしも)を着て歩けなんて（破戒 277）

それぞれ，厳密には「きる」と「かぶる」，あるいは「きる」と「はく」とをあわせて使うべきところだ。

○甲冑をかぶり弓矢を負うて，馬にのって進んでいるのは（出家とその弟子 10）

の例では，「かぶる」と「きる」とをあわせて「かぶる」で表現している。＜はおり・はかま＞については，つぎのように「きる」をつかった例と，「はく」をつかった例とがあった。

○それが又和服で，しかもお役人らしい羽織袴を着てぢや。（青銅の基督 38）

○大男は不器用に和服の羽織袴を穿き，（青銅の基督 66）

このように1つの動詞で代表させた例はかなり多いが，これらがほんとうに自然な表現であるか，あるいは一方の対象だけを頭においたために出てきた，まちがった表現であるかには，問題が残る。その点，「つける」「身につける」という抽象的な表現ならば，どのばあいでも通用するので，そこにこれらの表現の意味もあるのである。

＜注＞　「きる」には，「自分にきる」という例が1つあった。

○おとらはお島に御飯を食べさせると，脱いで傍に畳んであつた羽織を自分に着たり，青柳に着せたりして，やがて其処を引揚げたが，（あらくれ 20）

これは，ふつう使われない表現だが，「自分できる」の「自分」が主体をあらわすのとちがって，この「自分に」は，「青柳に（着せたり）」と同様，対象をあらわしたものであろう。

2.4　とりはずす対象

2.4.1　対象のありなし

〔140〕　ほぐす＜とく，ほどく

「ほぐす」は，ある1つのまとまったものを，ばらばらにすることであって，特にそれ以外の相手・対象はない。

○もう一つの悪い方の丸帯を解(ほぐ)して表にして，（桑の実 154）

○別の小鍋に玉蜀黍の粒をほぐしたのが煮てあつた。（野火 18）

着物についていうことが多いが，「野火」のトウモロコシの例のように，それ以外にも使われる。

「とく」「ほどく」は，上の「ほぐす」とおなじような，それ自身の解体にも使えるし，また，ひも・つなどが他のものにまきつけてあるのを，はずすばあいにも使われる。

〈それ自身を〉	〈他のものから〉
○二目おきに二目を針からはずして三段解き，（婦人倶楽部 1956年1月付録 冬の編物新型集 80）	○十二日目に纜(ともづな)を解いて帰航する筈になつてゐた。（或る女・前 222）
○不断着なぞで縫ひかへたいものを一枚づゝ解(ほど)いた。（桑の実 70）	○もどかしげに帯だけをほどくと，（或る女・前 131）

「とく」や「ほどく」については，むしろ「ほぐす」のような解体の例よりも，「帯をとく」などの，はずす例の方が多い。

「とく」が，ある1つのものの形をくずす意味で「ほぐす」に近くつかわれる例として，人間や動物がそのからだの部分をくみ合わせて作っていた一定のかたちをくずすばあいがある。

○青大将がからだを解いてするするっと草の中へかくれて行く。（むらぎも 133）

○ホットした素振りで，堅く組んでいた腕を，解いた。（自由学校 249）

「むらぎも」の例は青大将が人間の足首にまきついていた姿勢をくずすのだから「なわをとく」などの例に近いものであるが，しかし，とぐろをまいているときにも，やはりこれと同じ表現が使えるであろう。

○髪がゆるんだので解いて了つて，この間から西洋髪にしてゐるのであつた。（桑の

実 50)

は，いまあげた腕ぐみの例にちかいとみられる。そして，広い意味では，「編み物をとく」など，解体をあらわすものの特殊な例である。

「とく」「ほどく」は，上にあげたように，それぞれ2つのばあいがあるが，これらはつぎのように相互に移行する。

○私は行李を解いて書物を繙き始めた。(こゝろ 109)

○荷物を解いてゐると，雪江さんが果して机を持つて来て呉れた。(平凡 64)

これらのばあいには，解体する意味である。ところが，

○行李は何時持ち出しても差支ないやうに，堅く括られた儘であつた。私はぼんやり其前に立つて，又繩を解かうかと考へた。(こゝろ 123)

では，これとほとんど同じ現象が「なわをとく」という表現によってあらわされている。「なわを行李からとく（はずす）」ことは，つまり同時に「行李をとく」ことになるのである。「ほどく」の方には，ちょうどこれにあたるような例がなかったが，たとえば，

○乱暴に結んでいる紐をほどき，丘の傾斜に向って老婆をおろした。(厭がらせの年齢 274)

のように，「ひもをほどく」といういい方はある。「とく」と同様に，これがすなわち荷物をとくことにつながることも，当然あるであろう。

2.4.2 対象の種類

〔141〕 ぬぐ＜とる

「ぬぐ」は，「かぶる」「きる」「はく」などに対応して，衣類など身につけるものをとるばあいだけにつかわれる。「とる」も、これとおなじような動作にもつかわれ，さらにその範囲が広い。

「かぶる」に対応する例。

「ぬ　ぐ」	「と　る」
○運転手は，慌てて飛び下りて，帽子を脱いだ。(自由学校 91)	○葛飾がトンビの袖を上げて黒い帽子を取った。(むらぎも 301)

「きる」に対応する例。

「ぬ　ぐ」	「と　る」
○怠惰な手つきで上着をぬいだ。(人間の壁・上 330)	○仕事にかかる時には其の半纏をとつて木の枝へ懸ける。(土・上 120)

「はく」に対応する例。

「ぬ　ぐ」	「と　る」
○安吉はズボンを脱いで，綿みの下シャツとズボン下とだけになって (むらぎも 115)	○作法が終ると，老主人は袴を除つて，厚い綿入羽織を着て現れた。(河明り 269)

○いくぶん乱暴に靴を脱ぎながら，声をかけた。（風立ちぬ 79）

このほか，「(手袋などを) はめる」に対応する「ぬぐ」や「とる」もあるはずだが，実例は見つからなかった。「とる」は，これらにかぎられず，たとえば，

○先生は眼鏡をとつて台の上に置いて，（こゝろ 9）

のように，おなじ身につけるものであっても「ぬぐ」ではいえないような対象にもいえる。また，からだ以外の場所から「とる」例，たとえば，

○彼は壁にかけた帽子をとる。（人間の壁・上 139）

のようなものもあり，これも「頭から帽子をとる」というのと区別する根拠はあまりない。「ぬぐ」と「とる」とは，このように，まったくおなじような現象につかわれることがあるので，単に表現に変化を持たせるために使いわけられることがある。つぎの例では，ほとんどおなじ文脈で，帽子と外とうに対し，「ぬぐ」「とる」が，入れかえて使われている。

○彼女は窓を広くあけた。そして，帽子をとり，外套を脱ぎ，先づ一休みといふ心持で，長椅子の上に横たはつた。（仲子・上 28）

○大してゐたくもない彼女のこの居間に，帽子を脱ぎ外套をとり，ゆつくりしなければならない命令でも受けたかのやうにぼんやり待つてゐる。（仲子・上 81）

これらのどちらのばあいにも，帽子と外とうに対し「ぬぐ」「とる」の一方でなければならないという理由は，意味的にも文法的にもまったくない。使いわけは，単に変化をもたせるため，という文体的なものだ。

＜注1＞　「ぬぐ」は，原則として，自分のからだから着ものなどをとり去るばあいにつかわれる。他人のからだについてつかわれた例では，「ぬぐ」のばあいには，

○突然背後から帯に手をかけて，身悶をして縮むのを，邪慳らしくすつぱり脱いで取つた。（高野聖 40）

の1例だけだった。「とる」については，この「高野聖」の例と，

○みんな取つて頂戴，足袋もよ。（つゆのあとさき 33）

○お前に巻脚絆とってもろたら，おっとろしいよ――（真空地帯・上 97）

の2例があった。(p. 128～129 参照。)

＜注2＞　「ぬぐ」については，移動させられる対象である着ものなどを目的語にするのがふつうだが，そのほかに，その結果としてあらわになる，からだの部分，つまり状態変化の対象としてのからだの部分を目的語にしていうこともある。

○肌をぬいで，髪に油を塗りながら，お久さんは髪をすいていた。（放浪記 240）

○半玉の頃と同じだと思つて，胸だけ脱ぐと笑はれたこと，（雪国 102）

「一肌ぬぐ」という慣用句もここに属する。

○あの人物に今日明日にでも，一肌脱いで貰はないと困ることが（闘牛 117）

2.5 比較の対象

〔142〕 ずばぬける，ずぬける，ぬきんでる（ひいでる）＜まさる，すぐれる

これらは，あるものの質が高いことをみとめることばだが，質の高さは，ほかのものとの比較によってきまる。そして「ずばぬける」などは，比較の対象が1つでなくて2つ以上，すなわち，全体としては少なくとも3つ以上の中で，すぐれていることをあらわす。「まさる」「すぐれる」は，3つ以上の対象の中でもよいし，2つの中から1つをえらぶばあいでもよい。

○その中尉は朝鮮人十人のうち七人までそうであるように，金という名前で，ほかの金よりも，ずばぬけて臭いので，（文芸春秋 1953年7月 67）

○皆の内で杉子は図ぬけて美しいばかりではなく，（友情 3）

○守備も又他チームに抜きんでていた。（野球界 1956年8月 143）

このように，「ずばぬける」「ずぬける」「ぬきんでる」は，ほぼおなじようなばあいに用いられる。

○すぐれて英でた人もなく，また悪人も居ない様だが，（思出の記・上 83）

「ひいでる」も，やはり3つ以上のものの間で比較していうことが多いと思うが，あるいは，2つの中で比較することがあるかもしれない。なお，「ひいでる」は，上の例のように，ことさら何と比較するということなしに，優秀さをいっているばあいが多いだろう。

「まさる」「すぐれる」は，ともに，比較の対象が2つ以上のばあいにも，1つのばあいにもつかわれる。

〈2 つ以上〉

○西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るやうに思つてゐた。（平凡 98）

○ところがあまた公家たちの歌よみの中で私のがいちばんすぐれているとて（出家とその弟子 71）

〈1 つ〉

○瀬川君に比べると，勝るとも劣ることは有るまい（破戒 23）

○槍術は又七郎の方が優れてゐたので，弥五兵衛の胸板をしたたかに衝き抜いた。（阿部一族 72）

ただし，ほかと比較するというニュアンスは「まさる」の方が強く，「すぐれる」では，質の優秀さをいっているだけで，とりたててどれと比べているのかは，それほど問題でないばあいが多い。「まさる」も，要するに，同類の中での比較，というぼんやりした基準でつかわれることがある。

○最も人間として優つた男を彼女が選んでくれればいゝが，（友情 26）

しかし，このような例は少ない。それに対し，「すぐれる」は，たとえばつぎのように，比較の対象が表面に出ていないことが多い。

○優れた進歩的な教師たちは，戦後数年にわたる苦しい心の闘いを経て，封建主義と国家主義と家族主義とを振りすてて来たのだった。（人間の壁・上 187）

3. 動作・作用の属性

動詞の意味的特徴としてとりあげた項目は，主体・結果・意図など，すべてある意味では動作それ自体の性質といえる。しかし，これらが一応動作のそとにある条件であるのに対し，ここで問題にしようとしている方向・はやさ・手段などの特徴は，より内的に動作自体にそなわっている特徴である。

これらの属性の分類は論理的な，ないしは自然科学的なものではない。対立をつくっている動詞から帰納したものである。したがって，これらのあいだには重複するものや中間的なものがありうる。たとえば，「いきおい」という項目のもとでとりあげる特徴の多くは，「はやさ」とも関係する。「態度」にいれるべきか「手段」にいれるべきか，まようものもある。

3.1 段　　階

ここで「段階」としてとりあげたものは，ひろい意味でのアスペクト的なちがい，すなわち動作のおこり方についてのちがいによって動詞が対立している例である。

3.1.1 状態／うごき

状態とうごき（動作・作用）とのちがいは，動詞全体をつらぬく基本的な対立である。しかし，このように，より抽象的なカテゴリーは，それだけ，語い的手段によって表現されることはすくない。一般に，このちがいは動詞の文法形式によって表現される。すなわち，おなじ1つの動詞でも，「こわれていく」というばあいには変化の過程を，「こわれている」「こわれた（連体修飾法）」のばあいには変化の結果としての状態を，というように，ちがった側面をあらわす。なかには「ある」「ちがう」「寒すぎる」のように，もっぱら状態をあらわす動詞もあるが，これらと語い的に対立する動作はない。（「ある」に対しては「生ずる」をあげることができるが。）

〔143〕 たたえる＜みたす

「たたえる」は，水が一ぱいである状態についていう。

○いまも青い水をたたえている堀川にそうて，（人間の壁・上 65）

水が少なかった状態から，一ぱいの状態に至る変化をあらわした用例はなかった。これに対し，「みたす」の方は状態についてもいうし，変化についてもいう。

〈状　態〉

○tは水を満たしたゴム管。（自然 1956年3月 20）

〈変　化〉

○弁護士の杯に酒をみたしたとき，（宝石 1956年10月 23）

3.1.2 動作・現象の段階

〔移動の段階〕

ここでは，まず，ある動詞が移動の開始（すなわち出発）から終了（すなわち到着）にいたるまでの，どの段階に重点をおいて表現しているかを調べることにする。

○彼の妻は，秋の着物の用意に言寄せて，東京へ行つて来ようと言ひ出した。彼の女は空の天気を案ずるよりも，夫の天気の変らないうちにと，早い昼飯をすませると，毎夜の憧れである東京へ，あたふたと出かけた。心は恐らく体よりも三時間も早く東京に着いたに相違ない。（田園の憂鬱 66）

という文には，「東京へ行つて」「東京へ……出かけた」「東京に着いた」という，3つの近い表現が出てくる。このうち，「東京に着いた」が移動の終了の段階（到着）をあらわしていることはあきらかである。「東京へ出かけた」は，一応開始の段階（出発）をあらわすといっていいだろう。

きのうの5時に東京へ出かけた。

きのうの5時に東京へついた。

という2つの文をくらべると，上の文における5時は出発の時刻であり，下の文では到着の時刻である。これに対し，

きのうの5時に東京へ行った。

という文では，5時は出発の時刻とも到着の時刻ともとれそうである。このように，移動のどの段階に重点があるかは，動詞によってまちまちである。この問題は，つっこんでいくとかなり複雑で，1つ1つの動詞のくわしい検討を必要とするが，以下には一応4種類に大ざっぱにわけて各段階の動詞を概観することにする。

①出発の段階に重点があるもの。「でかける」「出発する」の類

②経過の　〃　〃　「むかう」「とおる」の類

③到着の　〃　〃　「つく」「とどく」の類

④全部の段階をふくむもの。「いく」「はいる」の類

これらの4類を区別する形式上の根拠とみるべき特徴は，つぎのような点にもとめられる。

a）「～ている」の形において，主として動作の進行をあらわすか，結果をあらわすか。

たとえば，②類の「むかう」「とおる」は，「アメリカへむかっている」「道をとおっている」などの形で，これらの移動動作が進行中であることをあらわし，③類の「つく」「とどく」などは，「アメリカについている」「家にとどいている」などの形で，すでにこの動作が完了して，結果として動作の主体がその場所にいることをあらわしている。これは，いわゆる継続動詞と瞬間動詞との区別である。ただし，継続動詞と瞬間動詞との区別が，動詞のアスペクト的性質についての分類であって，語い的意味の点ではまったく同じものが，時によって継続動詞にも瞬間動詞にもなりうるのに対し，ここでとった移動動詞の4分類は，語い的意味そのものについての分類であって，1つの動詞は原則としてどれか1つだけに属する。（ただし，多義語が，その意味のちがいに応じて別

々の類に属することはある。あとであげる「でる」の例を参照。）したがって，②類の動詞は継続動詞である，という関係ではなくて，主として継続動詞としてもちいられる，という関係にある。「とおる」にしても，「あの道ならもう何べんもとおっているよ」という，経験をあらわす例では瞬間動詞である。しかし，移動の経過に重点があるという「とおる」の意味そのものの性質は，どちらのばあいでも一定している。

b）「～ていく（くる）」の形があるかどうか。

たとえば，④類のものは，「いく」「くる」自身をのぞいて，「へやにはいっていく（くる）」「山にのぼっていく（くる）」のような，動作の進行をあらわす形をもっているが，③類のものは，「駅についていく（くる）」「家にとどいていく（くる）」などの形をもっていない。これも動詞のアスペクト的な性質に関係したことであって，「～ていく（くる）」の形でもちいられるのは継続動詞である。ただし，ここでもやはり問題はふつうの用法でこの形があるかどうかである。ごく特殊なばあいを考えれば，「駅には各地からの代表がつぎつぎについていく」のようにいえるかもしれない。つまり「つく」も同じ動作のくり返し全体を1つのものとみて，継続動詞として使えないこともない。だから，各類の特徴としては，正確には，この形が「あるかどうか」というより，「ふつうの用法としてあるか特殊なばあいにしかないか」である。

c）経過点をあらわす目的語「～を」をとるかどうか。

たとえば，②類の「とおる」，④類の「はいる」は，それぞれ「道をとおる」「門をはいる」と，この目的語をとるが，①類の「でかける」「出発する」や③類の「つく」「とどく」は「～を」をとらない。「裏門をでかける（出発する）」といえないことはないが，そのばあいの「裏門を」は経過点ではなくて出発点であろう。すなわち，家の中から裏門をとおって出発するのではなくて，裏門を集合場所とした集団が出発するようなばあいであろう。

以上の形式上の特徴が各類の動詞にどのようにあらわれているかをまとめると，つぎのようになる。

				～ている	～ていく	～を
移動	(出発)	①	でかける，出発する……	結果	○	×
	(移動) (経過)	②	むかう，とおる……	進行	○	○
	(移動) (移動)	④	いく，のぼる……	結果(進行)	○	○
	(到着)	③	つく，とどく……	結果	×	×

広い意味での＜移動＞には，＜出発・到着＞もふくまれる。すなわち，＜出発・到着＞にも＜移動＞としての側面はある。しかし，よりせまく＜移動＞をくぎれば，②④の類であり，そのなかでも特に④類である。

このような特徴を任意にとれば，どのような分類でもできるだろう。それで，上に3つの形式的な特徴をえらんだ理由をのべる。

まず，動詞の「～て＋補助用言」の形には，「～てある」「～てあげる」「～てみる」など多くの形式があるが，このうち，せまい意味でのアスペクト的性格がつよく，したがって移動の段階に関係の深いものとしては，「～てある」「～ている（おる・いらっしゃる）」「～ていく（くる）」「～てしまう」などがある。そして，「～てある」は他動詞にしかない形である。「～てしまう」は継続動詞・瞬間動詞のどちらにつくかによって意味がちがってくる点，「～ている」に似ており，かつそれよりもあいまいであって，「～ている」を基準としてとってあれば不要である。こういう理由で「～ている」と「～ていく（くる）」とをえらんだ。

名詞＋格助詞の形の目的語で移動に関係あるものとしては，「～を」（経過点）のほかに「～から」（出発点），「～に」（到着点）などがある。しかしこれらはすべての移動動詞につくのであって，傾向としてこの類の動詞は「～に」を，この類は「～から」をとりやすい，といったこと以上には，移動動詞の内部を細分する基準にならない。

さて，同じ類とまとめたものでも，こまかく見ていくと，意味の上でのちがいとともに，形式的にも差がある。そのような点について以下にのべる。

① 出発の段階に重点があるもの

でかける・（でる）・出発する……

これらの動詞のあいだにもちがいがある。このうち，もっとも＜純粋に＞出発の段階をあらわすのは，「出発する」である。「でかける」は文脈によって，「でる」はその多義性に応じて，重点のおき場所をことにするばあいがある。

○船は間もなくこの漁村を出発したが，（或る女・前 186）

○佃と一緒にある湖畔の避暑地へ出発した。（仲子・上 127）

などの例にみられるように，「出発する」はまさにこの動作そのものをあらわす。「湖畔の避暑地へ出発した」のように目的地が示されているばあいには，この目的地に到着している，というニュアンスを含むことはない。

この点で「でかける」はちがっている。この動詞も出発の段階に重点があることはもちろんだが，目的地にすでについている段階も，「でかけた」に含まれることがある。

○扇屋を指して出掛けた頃は，月も落ちかゝつて居た。（破戒 293）

○是(これ)から東京へでも出掛けた時に，自分の舅(しうと)は政治家だと言つて，吹聴(ふいちやう)する積りなんだらうが，（破戒 137）

この前の例の「出掛けた頃」は，出発しつつある時刻であるが，あとのはそうではない。「東京へ出掛けた時」というのは，つまり「東京にいる時」のことである。

かれは今工場へでかけています。

というばあいに，「かれ」は工場への途中にあってもいいし，工場についていてもいい。時によっては工場からの帰り道にあるばあいさえ，あるだろう。そして，これらのちが

いは，まったくその場面場面によるものであって，「でかける」が多義的だということではない。ということは，「でかける」にとって大事なことは，これらすべてのばあいに共通した，＜最初の場所における不在＞という事実だということである。出発の段階に重点があるといっても，大切なのは出発の動作そのものではない。その動作の結果として，ここにいなくなることである。

「でかけている」という形の用例をみると，

○伴子は，もつと前に店に出かけてゐる筈だつたが，（帰郷 232）

のように，目的地を示したものもあるが，また，どこへでかけたのかをいわずに，

○「駿さん，いらつしやいません？」

「今，ちよつと出掛けてゐますが，すぐ探しにやりませう。」（波 377）

○広介は出掛けていて，二階に明子はひとり窓を開けていた。（くれない 45）

のように，単に＜外出している＞＜家に不在である＞ということをあらわすものがある。このことは，上にのべた「でかける」の性格を示すものだろう。

「出発する」は「～ている」の形ではあまり使われないが，「でかけている」が主として結果をあらわすのに対し，ばあいによって進行・結果の両方をあらわす。すなわち，「汽船は今出発している」のような表現では，この動作が進行中であることを意味する。ただし，事実として，「出発する」動作は時間の継続をあまり必要としないので，こういう表現がとられることはまれである。また，「かれはもう出発しているよ」というときは，動作の結果をあらわす。ただし，「でかけている」とちがって，ニュアンスとしては，目的地へついていないこと，移動動作がつづいていることをあらわしている。（事実として出発点に不在なことは同じだから，これは重点のおき方のちがいである。）

このように「出発している」と「でかけている」とをくらべてみると，いわゆる瞬間動詞にも2種類あるといえる。瞬間動詞は，「～ている」の形で動作の結果の存続をあらわすのであるが，その「結果」というものに2つある。「でかけている」結果というのは，出発点に不在だという＜状態＞で，大部分の瞬間動詞は，これと同じく＜結果＝(静的な)状態＞である。ところが，「(もう)出発している」というときの結果は，移動の進行，動作の継続であって，広い意味では＜状態＞とよべるとしても，動的な状態だ。

「出発する」のように，動作の結果として別の動作がつづくものとしては，その下位概念としての「発車する」「離陸する」などのほかに，動作の開始をあらわす「よみはじめる」「はなしだす」の類がある。これらは瞬間動詞であって，「よみはじめている」「はなしだしている」は，その動作が完了して，結果がのこっていることをあらわす。ところが，その結果というのは，「よむ」「はなす」という別の動作が進行中ということにほかならない。「もうよみはじめている」ということは，「今よんでいる」ことである。

「でる」が完全に出発をあらわすのは，つぎの例のように，車や船が出発することを意味するばあいである。

○そのうちに汽車がするする出て行つた。（あらくれ 218）

○便船（びんせん）は，と尋ねて見ると，今々飯山へ向けて出たばかりといふ。（破戒 167）

「でる」の基本的意味である，外への移動のばあいは，④類（全段階を含むもの）に属する。このばあいには，「裏門を出る」のように経過点を示す「～を」をとりうるからである。ただし，つぎに示すように，文脈によっては，外への移動というニュアンスがうすれて，出発にきわめて近いものなることもある。

○彼は丸善へ行かうと思つて出たのだがすぐやめて（友情 100）

② 経過の段階に重点があるもの

これには，つぎの2つのグループがある。

a）方向性のつよいもの――「めざす」「むかう」など。

b）方向性のよわいもの――「とおる」「わたる」など。

a）方向性のつよいもの――めざす・むかう・近づく……

このグループに属する動詞は，「～へ（に）」という目的地をあらわす目的語をとることが多い。その点では，ほかの①③④群の動詞と差はないのだが，特徴は，これがつねに目的地であって到達点ではない，ということだ。つまり，「アメリカへむかった（むかっている）」というのは，日本からアメリカへの途中のどこかにいることであって，すでにアメリカにいることではない。この点で③④群や①群の「でかける」とはちがう。（この点，①群でも「出発する」は同じである。なお，「めざす」は目的語として「～を」をとるので「～へ（に）」の形はとらない。）

○早くも目指した待合の門口へ来た。（つゆのあとさき 30）

○二人はその夜，急行列車に乗つて東京に向つた。（冬の宿 87）

○停車場に近づいた汽車は段々と歩度をゆるめてゐた。（或る女・前 20）

このうち，「めざす」「むかう」は，経過といっても，どちらかといえば出発に近い。たとえば，上の「冬の宿」の用例は，「出かけた」におきかえても不自然ではない。しかし，「～ている」ではない現在形で

○車が麹町の通を日比谷へ向ふ時，時雄の胸に，今の女学生といふことが浮んだ。（蒲団 80）

のように，まさに移動の経過（すなわち進行）をあらわす点で，やはり出発とはちがう。

「～を」という形の経過点をあらわす目的語をともなうことは，出発や到着に対してこの②の類を区別する特徴で，これは特にb）の「とおる」「わたる」などに多くみられるが，つぎのように，a）グループにもすこしはある。

○三段構えの布陣を示しながら奥州街道を一関に向っていた。（落城 13）

○草の中を人が近づいた。（野火 179）

○石畳の道をこちらへ近づく小刻みな靴音をきいた。（潮騒 47）

ただし，「めざす」は，「～を」で目的地をあらわすから，経過点の「～を」をとるこ

とがないのはもちろんである。

「めざす」「むかう」が移動の経過そのものを表わすのに対し，「近づく」は経過とともに移動の結果としての位置の変化をもあらわす。この点で，「近づく」は③群（到着）の「つく」「とどく」などと共通の面をもつ。ただし，「つく」などが移動の最終結果をあらわすのに対して，「近づく」は途中の結果であるという点がちがう。

「近づく」が結果をもあらわすことは，「近づいている（おる）」の形ではっきりする。「むかう」などは，

○当時，空母「レキシントン」は，巡洋艦，駆逐艦を伴って，ミッドウェイへ向っており，（特集文芸春秋 1956年 日本と戦った五年間 101）

のように「～ている（おる）」の形で継続動詞的にもちいられる。上の例は，現在航行中だということである。これに対し「近づいている」は大体瞬間動詞である。

○提灯は，すぐ前に近づいているのだ。（小説倶楽部 1956年12月 139）

では，移動の結果としての提灯の位置をあらわしている。

「近づいている」は，「むかっている」と同様に進行中をあらわすこともあるが，その例はすくない。採集した用例の範囲で，あきらかにそういえるものは，つぎの1例だった。

○そして安吉は，戸崎町へはいる枝道のところの交番を知らずに目に留めていた。だんだんにそっちへ近づいている。（むらぎも 355）

なお，つぎのは，結果とも進行中ともとれる。

○彼等は声を合せて吠えた。——目には見られない何者かが近づいて居ることを彼に告げでもするかのやうに。（田園の憂鬱 75）

進行中であることをあらわすには，むしろ，「近づく」「近づいてくる（いく）」が使われるようである。

○廊下をこちらに近づく足音はたしかにゆったりとして，（真空地帯・上 76）

○急ぎ足に近づいて来る男女の姿が見えた。（恩讐の彼方に 65）

b）方向性のよわいもの——とおる・わたる・こえる・つたう・よこぎる……

このグループの動詞は，移動の径路をしめす「～を」という目的語とともにもちいられることが多く，目的地・到着点の「～へ（に）」をとることは少ない。その点で，「むかう」などのグループの動詞とも，また①③④群の動詞ともちがい，移動をあらわすものの中で特徴ある一群をなしている。

ただし，つぎにあげるように，これらも「～へ（に）」をとることが全然ないわけではない。

○舌が欲しがる丈で，咽喉から下へは極僅しか通らなかつた。（こゝろ 134）

○ハドソン河を彼方に渡つてながい散歩をしようと（仲子・上 119）

○飛騨から信州へ越える深山の間道で，（高野聖 6）

○すたすた四辻を向側へと横ぎつてしまつたが，（つゆのあとさき 12）

同じく経過をあらわすといっても，a）グループの「めざす」「むかう」などが，むし

ろ出発に近かったのに対し，b）グループは到着に近いようだ。上の「仲子」の例で，「ハドソン河を彼方に渡った」と言いなおすと，それはむこう岸への到着をあらわす。「ハドソン河を彼方にむかった」が未着・進行中の状態をあらわすのにくらべれば，そのちがいがわかるだろう。しかし，これがやはり「つく」など③類のものとちがうのは，つぎにあげるように，現在形の連体法で進行中の状態をあらわす点である。

○未だ子供だから人懐しがつて通る人の傍へ行くのだ（田園の憂鬱 57～58）

○舟橋を渡る車の音がとゞろに響いてそして又一時静かになる。（蒲団 58）

○島へかへるとき，鳥羽の鉄塔をこえる鷗に賭けた小さな占ひは，（潮騒 73）

○丑松も紅くなつて，顔を伝ふ汗の熱さに暫時世の煩ひを忘れた。（破戒 132）

○水は清く澄で，大空を横ぎる白雲の断片を鮮かに映してゐる。（武蔵野 20）

また，「～ている」の形が結果でなくて進行中の状態をあらわす点でも，到着の類とはちがう。

○夜更けの冷たい舗道の上を，支那蕎麦屋の燈火が通っているきりで，（放浪記 264）

○ほかの話題が見つからぬままで彼らは四ツ木橋を渡っていた。（むらぎも 318）

③ 移動の全過程をあらわすもの

いく　くる　のぼる　はいる……

この類の動詞は，＜移動＞とよぶのに，もっともふさわしい。

このグループのものは，②の経過に重点のあるもの（むかう，とおる……）にちかい。すなわち，どちらの類も，「～ていく」の形をもっており（「いく」「くる」にこの形がないのは，意味上の特殊性から説明がつく），通過地点をあらわす「～を」という形をともなうことがある。

「むかう」などとのちがいは，「～ている」の形で，「むかっている」などが大体進行中の状態をあらわすのに対し，こちらはむしろ結果（つまり目的地に到着した状態）をあらわす点だ。しかし，この点についても，こまかくみると，「いっている」のように，原則として結果だけをあらわすものと，「のぼっている」のように，進行中の状態も，結果も，両方あらわすものがある。後者の方が，「とおる」などに近いわけだ。

まず，進行中と結果と，両方の例があるものをあげる。

〈進行中〉

○船は坂手島を左に見て進んでゐた。（潮騒 56）

○急ぎ足で坂を登つてゐるとき，（冬の宿 179）

○滝のやうに落ちてゐる雨の勢ひを見まもつてゐた。（帰郷 39）

○川崎船をウインチから降ろしてゐた漁夫達は，（蟹工船 34）

〈結　果〉

○十七日，古川，小牛田に進んでいた先鋒の二枝隊を追って，（落城 9）

○何だつてそんなところに登つてゐるんだ。早くおりておいで。（波 314）

○草の上に，茶罐のような鉛色の円筒が，落ちている。（自由学校 231）

○恭吾は，奥の廊下に腰をおろしてゐる伴子を見た。（帰郷 265）

○ジャアジャア水を出している私を見て，（放浪記 177）

○窓から頭を出してゐるお島の曇つた目に，（あらくれ 135）

以上の例のうち，移動の主体が人間である「すすむ」「のぼる」については，進行中の方のばあい，まだ移動の途中にあることが比較的はっきりしている。しかし，移動の主体が人間以外である「おちる」以下については，進行中の表現が，かならずしも移動の途中にあることをあらわしているとはいえない。（ここで移動の主体というのは，自動詞のばあいは動作の主体と一致するが，他動詞ではちがう。「水を出している私」で，動作の主体は私であり，移動の主体は水である。）たとえば，「雨がおちている」というのは，1滴1滴の雨のしずくについていえば，落下の途中にあるものもあり，すでに地面についているのもあるのであって，「おちている」は，空から地面への移動がくり返しくり返しおこっている，その総体としての現象が進行中であることをあらわしているのである。また，「川崎船をおろしている」についていえば，進行中であるのは，厳密には，川崎船の移動ではなくて，これを移動させるためのはたらきかけだ。そのはたらきかけが進行中であれば，川崎船はまだ本船から動いていなくても，あるいはすでに海面に達していたとしても，「今，川崎船をおろしているところだ」といえるだろう。

「とおっている」「のぼっている」などが，わりに進行中の状態をあらわしやすいのにくらべ，「おろしている」「だしている」は，多分，結果をあらわすばあいが多いだろう。

「でる」「はいる」という自動詞では，つぎのように，結果の例しかなかった。

○生徒はみな外へ出ているので，校庭のにぎやかさに反して，ここだけはしんと静まっている。（人間の壁・上 83）

○こうして便所にはいっている時だけが，（放浪記 15）

これらについても，たとえば，「ジャアジャア水が出ている」のように，進行中をあらわすものがないわけはないが，それは少ないだろう。さらに，つぎのような動詞のばあいは，ほとんどつねに結果（すなわち目的地への到着）をあらわす。

○庵原はま江が行つてゐる海岸のサナトリウムでさへ（冬の宿 72）

○郊外に館の世話で一軒借りて移っている。（むらぎも 176）

○それにしても最早宿屋の方に帰つて居る時刻。行つて逢はう。（破戒 291）

○反対々々と歩いて田原町までくると元に戻っている。（むらぎも 143）

○ジョバンニの乗つてゐる小さな列車が（銀河鉄道の夜 265）

「くる」も当然これらと同類で，ふつうはつぎのように結果をあらわす。

○節子は，私の来てゐることはもうとうに知つてゐたらしいが，（風立ちぬ 79）

ところが，つぎの例では，「きている」が進行中の状態をあらわしているようにおもわれる。これは，きわめてめずらしい例である。

○沼津から機関車を持つて来てつけるまで二時間も待ちましたけえ，其の間もナ，思ひまして……これの為めにかうして東京に来て居る途中，もしもの事でもあつた

ら，（蒲団 62）

④ 到着の段階に重点があるもの

つく・とどく・いたる・達する……

これらのあらわすものが到着の段階であることは，説明を必要としないであろう。「～ている」の形は，むろん動作の完了した結果をあらわす。

○あれであしたの朝は新橋へ着いているのだと思うと，（暗夜行路・前 163）

むしろ，ここでは，これらが移動の1つの段階をあらわす，といえるかどうかが問題になるかもしれない。これらの動詞は，多くのばあい，まさに到着という事実だけを問題にしているのであって，移動という動作につきものであるはずの距離も速度も問題ではない。移動というのは位置が変化することだが，到着はその移動動作から静止状態への状態変化である，ともいえる。（この点は，逆になるが，出発についても同様である。）ただし，この状態変化には，つねに位置の変化もともなっていることが特徴であり，少なくとも到着を位置の変化（すなわち移動）という面からもながめることができることは否定できない。形式上は，つぎのように，出発点をあらわす「～から」という目的語をともなうことがある点が，このことを裏づけている。

○其日の午後東京から着いたといふ蓮太郎の妻君（破戒 326）

○岡部の所へ郷里から電報が届き（映画ファン 1956年4月 90）

○北京からウランバートルを経てモスクワにいたる新線は既に運行されているのである。（エコノミスト 1956年7月7日 51）

この「いたる」の例は動作的というより状態的であり，「とどく」の例も移動というにはぴったりした例ではないが，このように出発点が示されていることは，一応到着の前提として移動の全過程が問題にされているとみてよいであろう。

〔144〕 つぐ，さす，そそぐ＜くむ

これらの動詞は，水・酒・その他の液体をある場所から他の場所（うつわなど）へうつしいれることをあらわす。このためには，まずある場所から水などを取り出し，これをはこび，そして別のうつわなどにいれる，という3つの段階がある。そして「つぐ」「さす」「そそぐ」はこのうち最後の段階，すなわち，うつわの中に液体をいれることをあらわす。

○熱い白湯を茶碗についですすっていると，（人間の壁・上 266）

○それから水注(みずさし)の水を鉄瓶に注(さ)した。（こころ 51）

○石油は薪に濯がれたものよりも土の上に零れたものの方が，（田園の憂鬱 73）

これらの動詞では，上の例にみるように，うつわ，あるいは，ものがはっきり示されることが多い。

「くむ」は，かならずしもこのように最終の段階に重点があるとはかぎらない。

○みそ萩の側には茶碗へ一杯に水が汲まれた。（土・上 184）

という例では，「茶碗へ」という帰着点が示されており「つぐ」などでいいかえることができる。しかし

○手桶から柄杓で水を汲んでは植木に水をくれてゐるのは，（あらくれ 55）

のように「手桶から」という出発点だけが示されていて，最初の段階が表現されているばあいには，「つぐ」などであらわすことはできない。そして「くむ」については，つねに出発点や帰着点が示されているとはかぎらず，むしろ

○わざわざ水を汲んだりしてまで，風呂へ入る必要はないと，（田園の憂鬱 49）

○庄馬鹿は洗足（すゝぎ）の湯を汲（く）んで持つて来る。（破戒 175）

のように，そのどちらも表現されていずに，どの段階に重点があるともいえないばあいが多い。

〔145〕 もえる／やける／くすぶる，いぶる／こげる

「もえる」は，明るいほのおを出して，かなり勢いよくやける現象にいう。

○小屋は今は太い火束となつて，盛んに燃えてゐた。（野火 43）

このばあい，ほのおとともに，けむりが出ることも，もちろんある。また，ほのおが出なくて，けむりだけが出ているようなばあいでも，「もえる」といえないことはない。

○小さなストーブに煙の多い石炭がぶしぶし燃えて，（或る女・前 234）

しかし，このような例では，「くすぶる」などを使う方が自然だ。

○連日の雨にしめつて燃えなくなつて居る薪の煙が，風の具合で，意地わるく毎日座敷の方へばかり這入り込んで来て（田園の憂鬱 51）

この例で，けむりが出てくすぶっている状態について，「燃えなくなつて居る」という表現がとられていることからも，そのことはいえる。この点からすると，ほのおをあげていない炭について「もえる」を使うのは異例である。

○火鉢には継ぎたての火が暖かさうに燃えてゐました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳さうと思つて，急いで自分の室（へや）の仕切を開けました。（こゝろ 229）

このばあい，火鉢にとってある火は，すぐつぎに「赤い炭の上に」とあるように，炭火だろうと思われる。ところが，それに対して，「もえる」が使われて，あたかもまきの火であるかのように見える。しかし，炭火も，勢いがよいばあいには多少ほのおが出ないこともないから，そのような状態をさしたものと考えれば，おかしくはない。

なお，「もえる」の主語には「まき」とか「家」とかの材料をあらわす単語がくることが多い。しかし，今あげた「こゝろ」の例のように，「火がもえる」，あるいは，つぎにあげる例のように「ほのおがもえる」という表現もある。

○大きく黒く一面に映つて，それが炎の燃えるまにまに，壁の面で或は小さく或は大きくふるへる。（田園の憂鬱 74）

「やける」などについては，「家がやける」「まきがやける」はあっても，「火がやける」「ほのおがやける」はない。ということは，つまり，それだけ火やほのおという現象と「もえる」との関係が密接であることを示している。

「やける」も「もえる」とおなじように，ほのおをあげて勢いよく変化するばあいにも使われる。

○ところが僕が商売をやめても，そんな裸体の絵ばかり大事にして置いてゐたんですが，例のクリスチャン主義で，みんな家内が僕の眼の前で焼いちまつたんです。めらめらと裸の女が焼けましたよ。（冬の宿 22）

このような例としては，火事のばあいが多い。

○あら，あら，繭倉が焼けてるのよ。（雪国 161）

これに類する例は，かなりたくさんある。しかし，このように「もえる」とおなじような，ほのおをあげての現象のほか，「やける」は，むしろ，もっとじわじわとした変化のしかたをあらわすことが多い。つまり，勢いよく明るい熱いほのおをあげるという現象面よりも，熱が加えられることによって変化する，という側面に重点がおかれた例である。

○半分眠り乍ら落葉の焼ける香(にほひ)を嗅(か)いで居るものもあつた。（破戒 114）

○人が焼ける時のやうな生ツ臭い匂ひがした。（蟹工船 62）

○はま江の骨が焼けてゐるかも知れない。（冬の宿 187）

これらの例では，ほのおがあがっているかもしれないが，そうではないと見る方が自然だろうし，そのことは，どうでもよいのである。熱によって処理されて対象が変化するということが大切なのだ。この類には，食べものを熱によって処理し変化させるばあいのものが多い。

○塩鮭の焼けてきたにおいが部屋じゅうに立ち迷う。（人間の壁・上 41）

○章魚(たこ)の足が並んだ店がある。鰻がある。栄螺(さざえ)が焼けてゐる。（冬の宿 189）

○炉の灰に埋(い)けてあつた薩摩芋が最早(もう)焼けて居る時分だ。（思出の記・上 32）

つぎに，さらに重点がうつってくると，熱が加えられたことそれ自身，つまり非常に熱くなることをあらわすようになり，そのために対象が変化したかどうかは，あまり問題でないような例も出てくる。

○安夫は唇が焼けるほど短かくなつた煙草を，甲板に押しつぶして（潮騒 56）

○鉄工場の見透しになつた盛んな炉と，灼けた真赤な鉄板と，（真知子・前 58）

これらでは，対象が変化したともとれるし，また単に熱せられただけともとれる。つまり「潮騒」の例でいえば，「唇が焼けるほど」というのは，やけどをするほど，ともとれるし，また非常に熱く感じるほどともとれる。つぎにあげるようなものでは，対象は変化したとはいえず，ただ非常に熱せられていることが，「やける」によって表現されている現象である。だから，このばあいには，もう「家がやける」などとは別の意味になっている。

○坐ったむしろの下の砂が焼けているので，（人間の壁・上 304）

○ほうろくのように焼けた暑い直方の町角に，（放浪記 8）

○わしアあの機関(エンジン)の焼けた匂ひが大好ぢやがねえ（多情仏心・前 140）

「くすぶる」「いぶる」は，どちらも，あまりよくもえずに，けむりばかり出している

状態をいう。

○「糞壺」のストーヴはブスブス燻つてばかりゐた。（蟹工船 22）

○暗い土間の隅に燻る煙のなかで，（冬の宿 109）

○柱や梁（はり）などの骨組はいぶりながら立つてゐた。（雪国 170）

しかし，これらはやはり「もえる」ことの一種であって，それと別の現象とはいえない。したがって，おなじ現象が「くすぶる」ことであり，かつ「もえる」ことである，というばあいがある。

○裏戸口の柿の木の下に据ゑられた風呂には牛が舌を出して鼻を舐めづつて居る様な焔が煙と共にべろべろと立つて燻りつつ燃えて居る。（土・上 199）

このばあいは，ほのおと，けむりが，ともに立っており，それが，おのおの「もえる」と「くすぶる」に対応している。

「こげる」になると，けむりも，ほのおも問題ではない。それは，熱を加えられることによって，対象が変質すること，黒や茶色に色が変わることをあらわすのである。

○畳の上では何か焼いた跡らしく，点々と畳が焦げていて，（放浪記 273）

○じりじりストーブの上でこげる餅の匂いは（真空地帯・上 67）

これらのばあいには「もえる」とはいえない。上位語は「もえる」ではなくて「やける」である。そして，その「やける」は，「家がやける」や「画がやける」のような例とはちがい，「さかながやける」などと同じである。

〔146〕　もす，もやす／やく／（くすべる）／こがす

これらの動詞のちがいも，自動詞にほぼ対応する。

まず「もやす」は，いちばん勢いがいい。単に熱するだけでなく，対象をなくしてしまうばあいにつかわれる。

○手の冷たく成つた時などには彼はそこらの木を聚めて燃やす。（土・上 105）

「火がもえる」「炎がもえる」などに対応する「火（炎）をもやす」というかたちも，やはりある。

○鹿柴のこちらでも焚火をもやした。（落城 35）

「やく」には，「火をやく」「炎をやく」などのいい方はない。

以上は「もやす」の例だが，「もす」もほぼおなじだと思われる。ただし，「もす」「もやす」は，かな書きでなければ，よみわけにくい。たとえば，つぎの例では「もす」「もやす」のどちらにでもよめる。

○彼はただ徒に焚きつけを燃した。（田園の憂鬱 72）

「やく」も

○丘の煙は恐らく牧草を焼く火であらうが，（野火 21）

のように，「もやす」と同じように，勢いよく火がついて，対象をなくしてしまうばあいにもつかわれるが，また

○宿の主人は炉に金火箸を渡して，大きい小判型の饅頭を焼いてゐた。（雪国 87）

のように，単に熱して対象を変質させるばあいにもつかわれる。さらに，ただ熱するだけで，対象が変化しなくてもよいような現象をもあらわすことも，「やける」とおなじだ。

○砂はまだ蹠を灼くほどではなく，水は冷たかつたが，（潮騒 122）

「くすべる」は，実例がなかったが，「くすぶる」に対応する他動詞である。

「こがす」は「こげる」に対応し，対象が熱によって変化して黒くなったりすることをいう。

○炬燵蒲団をこがしては叱られる。（厭がらせの年齢 286）

〔147〕（たばこを）のむ，すう

「のむ」「すう」という動詞は，一般に，気体や液体を対象とするばあい，鼻や口を通して，食道や気管の方に，つまりからだの内側に入れることをあらわす。そして，どちらも「はく」という動詞が外側へむけての移動であるのと対をなしている。たばこについても，けむりだけを対象として「のむ」とか「すう」とかいう表現をとることは，ありうるはずである。ただし，実例はなかった。

「はく」の方については，

○煙草をすいつけて意味もなく煙を吐いた。（人間の壁・上 297）

のように，たばこのけむりを対象とする例がある。つぎの例は，あるいは「けむり」にかかるものかもしれないが，「たばこ」にかかるとも見られるので，たしかな例とはいえない。

○一息にうんと喫んだ煙草の煙を，（多情仏心・前 154）

しかし，「たばこをのむ」「たばこをすう」という表現のばあい，「けむりをのむ（すう）」とはちがって「はく」とは対立しない。「たばこのけむりをはく」という表現はあるが，「たばこをはく」とはいわないだろう。「たばこをのむ（すう）」というのは

○二階の自分の部屋に戻ると，やみくもに煙草を喫んだ。（潮騒 77）

○盃はからのまゝで，信之は例の喫つても喫はないでもいゝ煙草を，ぷかりぷかりふかしながら待つてゐた。（多情仏心・前 343）

にみるように，たばこのけむりを口から気管の方に入れて味わい，さらにこれをはく全過程を，つまり「たばこをふかす」などと同じような事実をあらわしている。もちろん，この全過程の中で，重点は前半分の部分，すなわち，たばこを口から気管の方に吸いこむ部分にあって，はき出すのはそれに付随している部分にすぎないのだが，「けむりをすう」が，はっきり「はく」と対立しているのに比べれば，「たばこをのむ（すう）」では，いわばその対立が中和している。

〔148〕ふかす（すう，はく）

「ふかす」は，たばこを対象とするばあいにかぎられる。

○先生は庭の方を向いて，澄まして烟草を吹かしてゐた。（こゝろ 91）

この「ふかす」について，岩波国語辞典（第1版）は「吸ったタバコの煙を口からはく。」という規定を与えている。（第2版では「外へ吹き出す。」）これによれば「ふかす」の上位概念は「はく」であることになる。しかし「ふかす」という動作は単に「はく」ことだけではなく，たばこの煙を吸って味わい，そしてはくという全過程をあらわしているものとおもわれる。したがって，ほかの多くの辞典の定義のように「たばこを吸って，そのけむりをはく。」という方が正しい。この点は，「たばこをのむ」「たばこをすう」などについてもおなじであって，これらもかならずしも煙を吸いこむ段階だけをさすのではなく，それを味わい，はくところまでを含めた全段階をさす。（ただし，それぞれ，重点ははく段階や吸いこむ段階にある，といえるかもしれないが。）

なお，「たばこをふかす」以外には，つぎのようにパイプを対象にした表現があった。

○虎よりは見物人の方を見乍ら長閑にパイプを喫かしてゐる。（青銅の基督 11）

〔149〕 たいらげる＜くう，のむ

「たいらげる」は，「くう」「たべる」「のむ」などの動作全体にあたり，対象が固体でも，液体でも使われる。最後まで食べてしまうこと，のんでしまうことをあらわす。いま，液体のばあいを例にとると，「のむ」は，

○恭吾は岐阜提灯の燈影が縁に涼しい座敷で，食後のウィスキーを飲んでゐた。（帰郷 286）

のように途中の段階にもつかわれる。もちろん最後までのんでしまってもよい。これに対し，「たいらげる」は，

○岡部は二本目のウイスキーを殆ど一人で平らげ，足許も大分怪しくなつてゐたのだが，（闘牛 135）

のように，ある分量をすっかりのんでしまったばあいだけにつかわれる。

〔150〕 もとめる

「もとめる」にはいろんな意味があるが，それらの意味に応じて，この動詞がどのような段階をあらわしているかも，ちがってくる。まず，「もとめる」は，あるものをさがして，あちらこちらあるきまわる，ということをあらわす。

○諸国を遍歴して，只管敵市九郎の所在を求めた。（恩讐の彼方に 81）

また，心の中で，あるものをえたい，とおもうことをもあらわす。

○友は得られないものを強く求めた為に何か他のものを得，俺は求めることをこばんだが，求めるものを得るくじを選んだ。（友情 122）

これらのばあいは，どちらも，「もとめる」ということは，そのもとめているものを手に入れたことをあらわしてはいない。むしろ，まだ手に入れていないこと，手に入れたいとおもい，手に入れるべく努力しつつあることをあらわしている。

○わざとらしく幾度か青年の手に触れる機会を求めた。（或る女・前 7）

○広介は広介で遠慮のない生活をのぞんで別の方向を求めたのだ。（くれない 132）

これらの例では，「もとめた」という表現が心の中の動きだけをいっているのか，その動きに応じて外にあらわれた行動をもふくんでいるのか，ややあいまいな点があり，実現の段階ということからいっても，さきにあげた例とはちがって，すでに完了した，ほしいとおもっていたものをえた，というところまで含んでいる，とも考えられる。すなわち，「機会を求めた」ということは，事実上機会を作ったということであり，「別の方向を求めた」とは，別の方向に歩み出したということである，とも解釈することができる。これらのばあい，心の中だけのことにせよ，外にあらわれたことにせよ，主体がそのような希望をもてば，ほとんど実現をさまたげる条件はなく，希望とその実現とが直結している。そのため，単に希望の段階にとどまっているのか，実現したことまであらわすのか，をわけることはむずかしい。しかし，いずれにしても，これらを，はじめにあげた例とちがって，明らかに実現までをふくんだ例と考えなければならない，ということはない。

つぎに，「もとめる」は，他人に対して一定の行動を要求するばあいにもつかわれる。

○半ば夢中で胸の苦しさを訴へ，水を求めた。真知子は急いで，枕元から吸呑を取りあげ，病人の熱で干涸らびた唇へ持つて行つた。（真知子・前 178）

○昼食の時間に竹越分会長がみんなの机をまわって，署名をもとめた。半数以上の教師たちは，こういう事件に巻きこまれることに多少の危険を感じながら，気乗りのしない態度で署名をした。（人間の壁・上 312）

これらの例では，すぐつぎにつづく文脈が示しているように，「もとめた」ことが実現したことにならないのは明らかである。自分の心の中の動きだけならば，希望と実現は直結するし，自分の行動だけですむことなら，やはり希望と実現のあいだに距離がない。しかし，相手の行動を要求するばあいには，自分の希望・要求に対し，相手がどのように反応するかはわからない。そこには断絶がある。「水を求めた」ことは，水が与えられたことを意味しないし，「署名をもとめた」ことは，署名がされたことを意味しない。

ところで，以上のような「もとめる」に対して，希望した内容が実現したという段階までを，明らかにふくんでいるものがある。それは，なにか品物を買うばあいの例である。

○旅僧も私と同じく其の鮨を求めたのであるが，蓋を開けると，ばらばらと海苔が懸つた，五目飯の下等なので。（高野聖 7）

○又立派な苗を買ひに行く丈の余裕もないので，容子から見れば近村ではあるが何処とも確乎とは知れない天秤商人からそれを求めた。（土・上 129）

これらのばあい，「もとめた」ということは，すでに対象を買いとったということであって，買いとりたいという希望の段階にとどまるものではない。おなじ「水を求めた」

という表現でも，上にあげた「真知子」の例とちがって，もし，金をはらって買ったのなら，すでにその水は自分のところに買いとられたことをあらわしている。

3.1.3　経過／結果

他動詞の中には，動作の経過をあらわすものと，動作の結果をあらわすものとがある。「おす」「ひく」「うつ」「たたく」などは，動作の経過をあらわすだけで，その結果がどうなるかを積極的にはあらわしていない。一方「よせる」「どける」「こわす」「ころす」などは，はたらきかけの結果として，どのようなことがおこるかをあらわしていて，その手段がどのようなものであるかには無関心な動詞である。いま，「ひく」と「よせる」とをくらべてみよう。「ひく」は多くのばあい

○若者たちは蛸壺の縄を滑車にかけて交代で**引く**のであつた。（潮騒 15）

○椅子を**引いて**くれた田川博士にやさしく微笑を見せて（或る女・前 113）

のように，はたらきかけの結果として，対象が動くことをあらわす。しかしこの動詞のあらわしていることは，手前の方向に力をはたらかしたことだけであって，かならずしもその結果として手前に近づくとはかぎらない。

○既に漁師の手に生命を握られて居る蛸は力を極めて壺の内側に緊着すれば什麼強い手の力が袋のやうな其の頭を持つて曳かうとも，蛇が身体の一部を穴に挿入したやうに拗切（ちぎれ）るまでも離れない。（土・上 166）

のばあいには，力ははいっているが，相手は動いていない。またつぎのような例では，そもそも手前に近づけることは「ひく」ことの目的でさえない。

○仲子は，父の腕を**引いた**。

「ここよ！」（仲子・上 11）

○島田に結つた女が立つて衣服（きもの）をぬいでゐるらしい影のありあり映つてゐるのを見て，君江はそつと矢田の袖を**引いた**が，（つゆのあとさき 31）

○羽織を**引かう**が何うしようが平気です。下（おろ）りる気色もない。（末枯 55）

たこつぼのたこを引くのは，これをつぼの外へひっぱり出すためであるが，うでや袖や羽織を引くのは，これらのものを動かすためではない。そこに加えられた力を相手が感じて，信号を受け取れば，それで目的は達せられるのである。このように，「ひく」は，力を加える経過の面では一致していても，その目的，ないしは結果の面ではまちまちである。これに対して「よせる」は結果的に動いていなければいけない。

○電灯の近所に椅子を**よせて**，大きな長い脚を投げ出して，（或る女・前 233）

○渡（わたし）を頼む。漁師がやをら**起**（たつ）**て舟を寄せる**。（思出の記・上 78）

椅子や船がすこしも動いていなかったら，かりに力をこれらに加えたとしても，それはまだ「よせた」とはいえない。一方，その力の加え方はまちまちでかまわない。椅子をよせた例では，おしたのか引いたのかわからないし，船をよせた例では，おそらくおしたのでも引いたのでもなく，ろかさおを使って動かしたのだろう。

一般的に経過をあらわす動詞と結果をあらわす動詞の対立をあきらかにし，かつその

間の相互関係，相互移行の状態をしらべることは，それ自身，文法論と語い論にまたがる大切な研究テーマである。しかし，ここではその問題を全面的にとりあげることはせず，経過をあらわすものと，結果をあらわすものとが，より直接的に対立している例についてしらべることにする。いまのべたように，「ひく」目的はかならずしも移動ではなく，「よせる」ための動作はかならずしも「ひく」ことではない。そのような意味で「ひく」は経過，「よせる」は結果だといっても，この2つを対立させたのでは，複雑な条件がからんでくる。それに比べて，ここでとりあげる発見の動詞などでは，対立が直接的である。つまり「あさる」「さがす」は，経過をあらわしていて，その目的は発見に限定されている。一方「みつける」「発見する」などは，その前提として，ふつう，「さがす」という動作がある。(なお，「はかる」の分析 p. 641～642 を参照。)

〔151〕 あさる，さがす／(みつける) みいだす，みとめる，発見する

「あさる」「さがす」は経過をあらわす動詞である。原則としては，これらの動作が実現したことをあらわす段階では，まだ求める対象は見つかっていない。つまり「さがした」というだけの表現では，見つかっていない段階のことをいうばあいが多い。

○失恋した男の人はよくその恋人に似た似而非女(えせどんな)をあさるものだわ。(青銅の基督 29)

○プラットフォームへかかる前から，彼は首を出し，それらしい姿をさがした。そして，彼はすぐそれを見いだした。(暗夜行路・前 216)

○よくみると，小学校の服をきた輝雄が何かをしきりに探してゐた。(冬の宿 152)

○二人は馬を柵につないだまま落ちた蹄鉄をさがしたが，それはなかなかみあたらなかった。(真空地帯・上 153)

しかし「あさった」「さがした」ということが，すでにその対象をみつけたことをあらわす例もすこしはある。

○この雪国の麻の縮は島村も古着屋であさつて夏衣にしてゐたものだ。(雪国 150)

○夫人の邸内を引払つて，新たに探した貸家に移つた。(波 359)

○秋には烏のつついたのを探して柿の木にのぼって熟柿を食った。(むらぎも 123)

また

○志野田ふみ子は急いで眼をそらすと，大勢の教師たちのあいだから，教職員組合分会長の竹越先生を探した。(人間の壁・上 16)

という例では，相手をすでに見つけたともとれるし，見つけるべく努力しただけで，まだ見つけてはいない，ともとれる。これは前後の文脈を考え合わせてもおなじである。

「みつける」「みいだす」「みとめる」「発見する」などは，みな原則として結果の実現をあらわす。

○娘さんも，素早くその欠伸を見つけたらしいのである。(富岳百景 70)

○道を歩いている時，雑誌のポスターの中に，「林芙美子」と云う文字を見出す時がある。(放浪記 299)

○期待したとはまるで反対の方角に，佃の姿を認(みと)めた。(伸子・上 112)

○そして，また一つ，気にかかる絵を**発見した**。（人間の壁・上 160）

ただし，「みつける」については，「さがす」と同じような使い方をした例が2，3見うけられた。これは，あるいは東京方言というべきかもしれないが，たとえばつぎのような例だ。

○「何を**見つけて**ゐるんだい。」

「をかしいな。何処へしまひ込んぢまつたのかしら。どうも女房がゐないとしやうがないな。」（波 12）

○だが，その生きものは，硝子板に戸惑つて別に入口を**見付ける**やうに，ひゆうひゆう唸つて，この建物の四方を馳せ廻る。（河明り 279）

なお「さがす」という動作も究極の目的は「みつける」や「発見する」とおなじであるから，つぎのように希望・意志などのかたちをとっているばあい，それは結果をあらわす動詞とおなじようなことになる。

○夕方ランプを**捜さ**うとして方方でマッチを擦つたことや，（田園の憂鬱 77）

○みんなのために，ほんたうのほんたうの幸福を**さがす**ぞ。（銀河鉄道の夜 319）

○私もおしる粉を一緒に食べる人を**さがしたい**ものだ。（放浪記 280）

これらの例とたとえば，

○びつしり並んだ顔の列の中に，佃を**見出さ**うとしながら。（仲子・上 161）

○何処かに潜む敵を，彼より先に，**発見しよう**としてゐた。（野火 71）

の「みつける」「発見する」はおたがいにおきかえることができる。すなわち，これらの動詞については，意志・希望をあらわすばあい，経過と結果との対立が，いわば中和してしまう。

〔152〕 思案する／おもいつく＜かんがえる

「思案する」「かんがえる」は経過をあらわし，「おもいつく」は結果をあらわす。しかし「思案する」と「かんがえる」とのあいだにも，ちがいはある。「かんがえる」は，かんがえた結果がえられるばあいにもつかうが，「思案する」は，まさに経過そのものだけで，その結果がえられたことまでは含まない。

○心のもつれから逃れる術（すべ）はないかと**思案して**ゐた。（或る女・前 198）

もっとも，

○彼のこれまでの生き方とぴつたり符合した理由が外にありさうなものだと**思案し**ながら段々畑を登り歩いてゐる間に（厚物咲 41）

のように「～ だと思案する」という積極的なかたちをとっているばあいには，一応その方向への結論を考え出したものともみられる。しかし，このような状況でも，「理由がほかにあると思案する」とはいわない。「あるだろう，ありそうなものだと思案する」というかたちで，断定的な結論はさけるのである。

○自分の身上から一俵の米を減じては到底立ち行けぬことを深く**思案して**彼は眠らないこともあつた。（土・上 65）

という例では，一定の結論を考えついたことをあらわしているようであるが，このばあいにも，考えた結果として，自分たちが暮らしていけないことに思いいたった，そのことを思いついた，というのではなく，暮らしていけないことは「思案する」前からわかっているのだが，そのような状態になったらどうしよう，あるいは，そのような状態というのは，もっとこまかく考えればどのようなことが起こることなのか，というようなことについて，深く考えたことをあらわしているのである。つまり，この「立ち行けぬことを」というのは，考えられた結果ではなくて，考えの対象である。そのことは「深く」という修飾語がついていることからいえる。「深く思いつく」とか「深く考え出す」とかいう表現はないのだから。

「おもいつく」は一定の結論に到達したことをいう。

○富士にたのまう。突然それを**思ひついた**。（富岳百景 65）

○ふと，もう一つの悪い方の丸帯を解(ほぐ)して表にして，青木さんの夏のお蒲団を拵へてお上げしようかと**思ひ附く**。（桑の実 154）

「突然」とか，「ふと」とかいう修飾語がついていることは，途中の経過を問題にしていないことをあらわす。もちろん，その結論が突然えられたものであっても，それまでには長い時間かかって考えていたかもしれない。しかし，そのような経過は，「おもいつく」にとっては，どうでもよいことである。

「かんがえる」は「思案する」とちがって，一定の結論を出す，つまり「かんがえだす」「かんがえつく」などと同様のことをあらわすばあいもあるし，そうでなくて，ただ純粋に経過だけでまだ結論に到達しない段階のばあいもある。

○自分で一番好きなものを**考えて**，きめてくるんですよ。（人間の壁・上 93）

という例では，「考えて」のつぎに「きめる」がつづいていることからみて，「かんがえる」だけでは，まだ，結論に到達するという段階にはいたっていないことを，あらわしているものとみられる。

○私が進まうか止さうかと**考へて**，兎も角も翌日(あくるひ)迄待たうと決心したのは土曜の晩でした。（こゝろ 267）

○眼をすゑて，ぢつと考へるともなく**考へた**。（或る女・前 105）

でも，まだ考えているだけで結論はえていない。これに対して

○日本帝国のためか，——又，いゝ名義を**考へた**もんだ。（蟹工船 55）

○さうだ。己はもつとおシッコを引つかけられなくてはいけない。行介は帰りの汽車の中で，そんなことを**考へた**。（波 203）

などでは，一定の結論をえたこと，考え出したことをあらわす。さらに，結論がえられたとも，えられないとも，はっきりしない例もある。

○いろいろ，善後策を，**考えて**みようと思う……（自由学校 357）

○そんなことを思つて，友達の誰彼を，心のうちにより好みしたり，落ち合ふ場所を**考へたり**してゐた。（多情仏心・前 354）

これらの例は善後策や落ち合う場所について考えるというだけの表現でもありうる

し，また，善後策を作りあげる，落ち合う場所をきめる，というふうにもとることができる。いずれにしても，そういう結論に到達したかしないかは，このばあい，あまり大きな問題ではなく，それらの点について頭を働かすという経過だけが問題なのである。

〔153〕 発明する（考案する）＜工夫する

「発明する」はその結果がえられたばあいにつかう。

○あの踏絵を発明したのはあの男ぢやからな。（青銅の基督 63）

「工夫する」は，そのような結果をえようと努力すること，つまり経過をあらわすだけで，その結果がほんとうにえられたかどうかには無関心だ。「発明する」「考案する」と同様に，結果がえられたばあいにも「工夫した」という。

○誰が工夫したのか，扉にオモリがついて，自動的に閉まるようになっていて，開け放しの不体裁を演じない。（自由学校 184）

○いかにも，安田は工夫してゐた。熾を飯盒に入れ，火が消えない程度に隙間をあけて，蓋をしてゐた。（野火 155）

しかし，まだそのような一定の結論に達していない段階でも，それにむかっての努力がなされていれば，「工夫した」「工夫している」といえる。

○安吉はいろいろ工夫してみたが知恵は出なかった。（むらぎも 289）

「考案する」は，結果がえられたばあいにいうことが多い。

○赤色ブレートもいつまでも誰れにも考案されないものならともかくもう仲間達が必死にこつそり研究してゐるので製法を売るなら今の中だと云ふ。（機械 14）

○麻酔をかけないと痛いので対策を考案したわけだらう。（本日休診 99）

しかし，そうでない例もあった。つぎの例は，思考活動の途中にあること，つまり経過をあらわす。

○見えない形を段々と生んで行くのが，仕事で洋服のデザインを考案してゐるのに似てゐるやうで，（帰郷 187）

〔154〕 ほろびる＜なくなる

「ほろびる」はその主体である集団などが，完全に存在を失なってしまうときに使われ，多くのばあいには，しだいにそのいきおいがおとろえた結果としてそうなることをあらわす。これに対して「なくなる」は，結果的にそこになければよいのであって，時や所をかぎっての非存在についてもいうことができる。

○真剣に働かねば企業は亡び労働者は失業することを（改造 1954年2月 106）

「企業はほろびる」といえば，企業がしだいにふるわなくなって，ついには解散せざるをえない状態に追いこまれることをあらわすのに対し，「企業はなくなる」といえば，結果としての非存在だけで，その途中のプロセスなどは問題でない。また，たとえば，「わが国では企業はほろびる」といったばあい，その企業は外国へにげたりしたのではなく，わが国の範囲内で消滅したことをあらわすのだが，「わが国では企業はなくな

る」というと，企業そのものが完全に消滅した状況でも，また外国ににげ出して日本にはなくなった，という状況でも，あらわすことができる。「ほろびる」はまた人間の文化などについてもいうことができるが，つぎの例では，「なくなる」とともにつかわれて，なくなるプロセスをあらわしている。

○その恋愛は，私との愛情がまだ終りをつげないうちにほろんで亡くなってしまいました。（放浪記 304）

この文で「亡くなって」は純粋の結果の表現であり，それに対して「ほろんで」は「なくなる」にいたるまでのプロセス，しだいに勢いがおとろえて，というような経過をあらわしている。このように，2つのことばがかさねて使われ，おのおの別の役割をはたしていることは，「ほろびる」と「なくなる」とのそなえている本質的な特徴のあらわれとみられる。

〔155〕 はたらく／かせぐ

「はたらく」は純粋に動作だけをあらわす動詞であり，それに対して「かせぐ」は結果をも考慮に入れた動詞だ。つまり，「かせぐ」は，金などの報酬をえるためにはたらくのであって，純粋に無報酬ではたらくことには，つかわれない。「はたらく」は，報酬があろうとなかろうと関係なしにつかわれるので，ばあいによっては，「かせぐ」とそれ程ちがわないこともある。

「はたらく」	「かせぐ」
○と云ってカフェーなんかで働く事は，よれよれに荒んで来るようだし，（放浪記 60）	○先月一ぱいは，社交喫茶で，稼いだわよ。（自由学校 253）

○新緑から紅葉までの間を，ここらあたりの山の湯で働き，冬は熱海や長岡などの伊豆の温泉場へ稼ぎに行く，さういふ男の一人である。（雪国 123）

これらの例では，ほとんど同じような文脈で「はたらく」と「かせぐ」が使われている。しかし，そのばあいにもニュアンスのちがいはつきまとっており，「はたらく」が純粋に動作をあらわすのに対し，「かせぐ」は報酬目あてのしごとであるというちがいは，完全になくなっているわけではない。

両者のちがいは，つぎのような構文上のちがいになってあらわれる。すなわち，「はたらく」は原則として自動詞であり，他動詞になるのは「ぬすみをはたらく」のような，そのしごとの内容を示す目的語をとるばあい（それも多分に慣用句的なもの）にかぎられる。それに対し「かせぐ」は報酬をあらわすことばを目的語とする。

○あの夜以来，私は男の下宿代をかせぐために，こんなところへまで流れて来たのです。（放浪記 232）

このような「かせぐ」は，当然「はたらく」におきかえることはできない。また，「かせぐ」は，つぎのように，量をあらわす修飾語をともなってつかわれることがある。

○今日は少しかせいだ。俊ちゃんは不景気だってこぼしている。（放浪記 92）

○この頃は，彼も，百円ぐらいしか稼がない。よけい稼いでも，意味ないのである。（自由学校 195）

この文脈で「はたらく」を「かせぐ」のかわりにつかうこともできる。しかし，そうすると，修飾語である量の意味がかわってくる。「かせぐ」のばあいには，「少し」や「よけい」が報酬の金額の大小を意味しているのに対し，「はたらく」にすると，そのしごとの量・労働時間をあらわすことになるのだ。

「はたらく」の側からすれば，つぎの例のように報酬をあてにしないで，純粋にしごとをしている例は「かせぐ」におきかえることができない。

○米子はもう出て来て三河島のセツルメントで働いてゐた。（真知子・前 47）

○木下がさつぱりした性格を好むと思ひ取つては，男のやうになつて働きもした。（河明り 335）

〔156〕 ほす／かわかす

一般に，辞典では，「ほす」と「かわかす」をほとんど同義語としてあつかい，「湿気をさる」など，同じような説明をあたえている。たしかに，これらは、大体同じ文脈でつかわれ，おたがいにいれかえても事実にかわりないばあいが，すくなくない。

「ほ　す」

○東の縁に干してある襁褓から立つ塩臭い匂ひや，（或る女・前 51）

「かわかす」

○破れたシャツや穴のあいたむつきなどが至るところの軒に乾かしてあり，（人間の壁・上 209）

したがって，また，漢字があててあって，「ほす」とも「かわかす」とも，どちらにもよめ，判断にくるしむ例もある。

○一部のあいた窓に乾してある焦茶色の雨コートには（真知子・前 47）

しかし，「ほす」と「かわかす」は，完全な同義語だとはいえない。これについて，岩波国語辞典の規定は，つぎのように区別している。

「ほす」　水分を取り去るためなどに，日にさらしたり火であぶったりする。

「かわかす」　日光や火にあてて，水気・湿気を取る。かわくようにする。

この規定がしめすように，どちらもおなじような現象をあらわしていながら，「ほす」の方は，一定の結果をもたらすためにある手段をとる，という点に重点があり，「かわかす」の方は，その結果をえること自体に重点がある。「かわかす」が対象を変化させることをあらわす動詞であるのに対し，「ほす」は，変化させるべくはたらきかけることをあらわす動詞である。このちがいは，以下にあげるようないくつかの点にあらわれている。

第1に，「ほす」の方は手段が限定されているのに対し，「かわかす」では，水分がなくなるという結果に到達しさえすれば，どのような手段をとることもゆるされる。水分をとりさる手段として，もっとも多くもちいられるのは，空気中におくことによって，

自然に水分が蒸発するのをまつこと，または，日光にあてて熱することによって，その蒸発を早めることである。これは「ほす」についても，「かわかす」についても，いちばん多くみられる手段であり，その際，日光に当てているかどうかは，文脈からは，よみとれないばあいが多い。しかし，「かわかす」については，このほかに，熱をくわえる手段として，火にあてる例が，かなりみられる。

○白い肌着を火に乾かして，一人の裸の少女がうつむいて立つてゐる。（潮騒 64～65）

「ほす」の方では，こういう例はほとんどない。大部分は風か日光によって水分をとる例で，ただわずかにつぎの1例があっただけである。

○あるものは炉辺（ろばた）へ行つて濡れた羽織を乾（ほ）すもあり，（破戒 167）

用例にあったかぎりでは，水分をとる手段は，以上にのべたものだけである。「ほす」の方が限定されているといっても，それは，主として量的な面におけるちがいにすぎない。しかし，水分をとる手段をもっと広く考えてみると，「かわかす」とはいえても「ほす」とはいえないものも，ありそうにおもわれる。たとえば，せんたくものを回転させることによって水分をとるばあいや，ドライヤーでかみの毛をかわかすばあいは，それにあたるであろう。

第2のちがいとして，「かわかす」の方は，純粋に水分がなくなるという結果を問題にしているのに対し，「ほす」は，かならずしもそうではない，ということがある。「ほす」は，手段に重点をおいている表現であり，その際，第1の目的がたしかに乾燥という点にあるとしても，2次的な変化がこれにともなうこともある。

○（戸棚から皿に干し柿を入れて持ちきたる）さあ，これをおあがり。秋にかあさんが干しておいたのだよ。（出家とその弟子 20）

このようなばあいには，単に水分をとりさることだけではなく，それにともなっておこるある種の変化，しぶみがとれるというようなことも，また「ほす」ことの目的にはいっているのである。これは，もちろん，「ほす」という動詞にとって，乾燥が目的だという基本的な性格をうしなわせるほどの変化ではなく，その主要目的についているニュアンスであるにすぎない。もし，このさき，しぶみをとるという変化だけはおこすが，乾燥させないような手段がつくられ，その動作がやはり「ほす」で表現されるとすれば，「ほす」に新しい意味が生じたことになるだろう。「ほす」は，まだ，そこまではいっていないのだが，そういう可能性をのぞかせている点で，やはり「かわかす」とはちがったものをしめしている。

第3の相違点として，「ほす」という動作と「かわかす」という動作が，どの段階までをふくんでいるか，ということがある。「ほす」という動作は，乾燥させるべく一定の状態にすることをあらわす。したがって，まだ乾燥していなくても，「ほした」といえる。

○道端に高く干した標縄（しめ）の下に，国境の山々が見えて，（雪国 47）

この例で，おしめは，すでに，かわいているかもしれないし，まだぬれているかもしれない。それは，このばあい，どうでもいいのだ。とにかく，ぬれているおしめをひろ

げて，高いところにならべれば，そのことによって「ほす」という動作はおわっているのである。これに対し，

○せつかく，かわかした着物を，またずぶ濡れにして，（富岳百景 58）

のように，「かわかした着物」というばあいは，着ものは，すでに水分をうしなっていなければならない。「かわかす」という動作は，単に水分をとるべく対象を一定の状態にするだけではおわらず，実際にその対象から水分をなくしてしまうことをあらわしている。

動作の段階のちがいは，このように「～ した」というかたちの連体修飾法にはっきり出てくるが，また「～ している」という持続態にもあらわれる。

○さつき裏口を明けてる時に，隣りのおかみさんはおむつを干してゐたのだから，あの時ちよつといつてくれさうなものだ。（波 23）

における「干してゐた」という表現は，動作の持続をあらわす。そして「ほす」という動作の持続とは，このばあい，おむつを広げてさおにかける，というような動作が継続中であることをあらわしている。それがすでに物ほしざおに並べられてしまえば，その動作は完了したのである。

一方，「～ している」というかたち（持続態）は，完了した結果の持続をもあらわす。

○干してる間，サルマタもないというのは，不悶なことである。（自由学校 188）

における「干してる」は，その結果の持続の方であって，これは，現在せんたく物を広げつつある，ということではない。その動作はすでに完了して，かわくのをまっているのである。

これに対して，「かわかしている」という表現は，やはり動作の持続をあらわすのだが，事実としては，むしろ「ほしている」の結果の持続をあらわす例にひとしい。

○火鉢に火をいれて，みんな服や靴下をかわかしていた。（人間の壁・上 273～274）

このばあいの「かわかしていた」は，服や靴下を広げる途中であった，広げつつあった，ということではない。服や靴下はすでに広げられた状態にあり，ただそれがまだ水分をふくんでいるために，水分を少なくするプロセスの途中にあったことをあらわしているのである。すなわち「～ している」の意味が動作の継続をあらわすという点では，上の「波」と同じであるが，事実上の段階としては，「自由学校」の例とおなじ段階にあたることをあらわしている。

「～ してある」という表現についても，事情はにている。すなわち，「シャツがほしてある」というと，まだぬれているかもしれないし，もうかわいているかもしれない。とにかく，物ほしざおにぶらさがった状態にある，ということをあらわす表現である。「シャツがかわかしてある」というのは，一般に，すでに水分がなくなっている，かわいた状態にある，ということをあらわす表現であろう。ただ，この点，最初にあげた「人間の壁」の，「乾かしてあり」という例は，この説明に合わないようにみえる。すなわち，この例では，「かわかす」が，「ほす」と同様に，まだ水分をとりさりつつあ

るプロセスにあることをあらわす動詞として使われているようである。したがって，「かわかしてある」の例はこれ1例だけしかなかったのだが，もっと例を集めて検討する必要がある。

なお，お茶の水女子大生についての調査では，「おむつが物ほしざおにかわかしてある。」という例文に対し，○—6，△—12，×—3だった。

以上にのべたことを図示すると，つぎのようになる。

	せんたくものを広げつつある	せんたくものが広がっている	
		ぬれている	かわいている
ほしている	○	○	○
ほした（連体）		○	○
ほしてある		○	○
かわかしている		○	
かわかした（連体）			○
かわかしてある		?	○

第4の相違点は，「ほす」の方で対象の帰着点ないしはあり場所が示されているのに対し，「かわかす」の方では，それが示されないということだ。

○庭蓋へ籾の筵を干したりそれから独りで磨臼（すりうす）を挽いたりして，（土・上 28）

○洗たく物はいっさい人目につくところに干さない建前から，アメリカ式の電気乾燥機を置くことを計画中だという。（週刊読売 1956年4月8日 12）

の例のように，「ほす」のばあいには，「～へ」「～に」というかたちで，そのほされる対象の帰着点が示される。「かわかす」については「～へ（～に）かわかす」という表現はない。

○炉のそばで衣をかわかしてください。（出家とその弟子 44）

のように「～でかわかす」という表現はあるが，これは「かわかす」という動作がおこされる場所を示すのであって，対象である衣の行く先，あり場所を示すものではない。また，

○水に濡れた全身を火に乾かすことに，（潮騒 65）

のばあいの「火に」は，「かわかす」手段をあらわしているのであって，かわかされる対象であるからだの場所をあらわすのではない。ただし，ここで注意しなければならないことは「～に～してある」という表現のばあいには，「ほす」も「かわかす」も同様に「～に」といういい方と結びつきうることである。実例については最初にあげた「或る女」の「干してある」と「人間の壁」の「乾かしてあり」を参照。

このように，変化をあらわす動詞が，「～してある」のばあいに場所をあらわす名

詞と結びつくようになることは，「かわかす」にかぎらず，ほかの例でも見られる。たとえば「なべにいもをにる」「庭にまきをきる」とはいえないが，「なべにいもがにてある」「庭にまきがきってある」とはいえる。形式的にいえば，このばあいの「なべに」「庭に」は，「にる」や「きる」にではなくて，下の「ある」にかかっているのだともいえるが，また，「にてある」「きってある」が全体として「にる」「きる」を状態性の表現に転ぜしめているのだ，という観点からとらえることもできる。

なお，「ほす」がはたらきかけで，「かわかす」が変化だということについては，つぎのような点を根拠としてあげることができるかもしれない。それは，「かわかす」には「かわく」という対応する自動詞があって，よくつかわれるのに対し，「ほす」に対する自動詞「ひる」はほとんどつかわれない，ということだ。一般に，変化をあらわす動詞は自他が対応していることが多い。これに対して，はたらきかけをあらわす他動詞には，それに対応する自動詞がないことが多い。(p. 684 参照。) 現代語で「ひる」という自動詞は，あっても ほとんどつかわれない，ということは，これに対応する他動詞「ほす」が，対象の変化をあらわすというよりも，対象にはたらきかける動作をあらわしていることの傍証になるだろう。

3.1.4　一時的／継続的

〔157〕 ひらめく＜ひかる

「ひらめく」は，瞬間的な光り方についていう。(「ひらめく」も「ひかる」も，発光体・反射体の両方についていえるので，以下の例でもなるべく両方あげることにする。)

○飛魚の群が虹のやうな色彩に閃いて，繰り返し海へ注ぎ落ちる。(河明り 336)

○バッ，バッと激しくひらめくカメラのフラッシュ (週刊サンケイ 1956年3月11日 29)

この特徴は，抽象化した意味でも，たもたれている。

○突然，私の頭の中にこんな考へが閃いた。(風立ちぬ 73)

つぎの例では，かならずしも，瞬間的とはいえない。

○遙かに見ふる湖や川は金の如く夕陽(ゆうひ)に閃めいて居る。(思出の記・上 64)

○朝の光線が当つて，閃く樹皮は螺旋状の溝に傷つけられ，(河明り 316)

しかし，これも，たとえば，「思出の記」の例については，水が動いているために，強さが一様ではなく反射し，きらきらと1回1回の反射光がとぎれて見えるのだと思われる。また「河明り」の例でも，光りか，またはそれを反射する木か，それを見ている人間か，どれかが動いているために，光りが反射するときに一定方向に一定の強さで光っているようには見えないのであろう。

これに対し，「ひかる」は，一時的な光りでもいいし，継続的な光りでもいい。

○そのころから，昼間は向かい島の山と山との間にちょっと頭を見せている百貫島(ひゃっかんじま)の燈台が光りだす。それはピカリと光ってまた消える。(暗夜行路・前 159)

○夜の闇の中で，波が歯をムキ出すのが時々青白く光つてみえた。(蟹工船 26)

では一時的にとぎれる光りで，「ひらめく」と同様であるが，

○一つの街燈が，青白く立派に光つて立つてゐました。（銀河鉄道の夜 252）
○切口の中央には，骨が白く，雌蕊のやうに光つてゐる。（野火 141）
では，間がとぎれることのない光りであるので，「ひらめく」とはいえない。

〔158〕 ちらつく＜みえる

「ちらつく」は，瞬間的に見えるばあいにいう。
○カーテンの隙から，内部にちらつく男の立姿や文句の判らない話声が聞えて来る。（仲子・上 11）
○彼女はしたり顔になり，にッと紅の口もとへ，金冠ちらつかせる。（小説新潮 1956年4月 182）
実例からすると，
○先刻から，空腹を感じ出して，残してきたショート・ケーキが眼にちらついてならなかったのである。（自由学校 147）
のように，実際は目の前にないものが，想像で，見えるように思われる，というときに使われているものが多い。これも，想像の中で見えるのだから，ずっと継続せずに，ぱっぱっとあらわれたり消えたりする傾向が強いためであろう。

「みえる」は，一時的，瞬間的なばあいもあるし，また継続的なばあいもある。

〈一時的〉
○笑う時八重歯の見えるのが妙に誘惑的だった。（暗夜行路・前 268）
○真珠のやうな実もちらつと見えたのでした。（銀河鉄道の夜 302）

〈継続的〉
○バルコンの真正面に見える遠い森の方を指した。（風立ちぬ 121）
○道端に高く干した襁褓の下に，国境の山々が見えて，（雪国 47）

なお，「ちらつく」は，このように，ものの姿が見えることだけではなく，光りがちらちらすること，いわば「ひかる」の下位概念をあらわすこともある。しかし，この方はあまり適当な例がなかった。

3.2 量・程度

動作・作用の量は，その現象のつづく時間のながさではかられる。これは，つぎにあげるような，時間をあらわす構成要素をふくんだ複合動詞については，あきらかな特徴をなす。

長居する，長いきする，長ばなしする，永住する，永続する，小憩する

しかし，それ以外の動詞については，あまりはっきりした特徴とはいえない。

動作・作用の程度という表現のもとには，いろいろな側面を考えることができる。
①「いそぐ」のように速度が問題なもの。
②「とおざかる」のように距離が問題なもの。
③「かよう」のように回数が問題なもの。
これらは，それぞれ別に＜速度＞＜距離＞＜回数＞という項目をたててあつかった。

④「ほとばしる」「ぶんなぐる」など，力が問題になる動作・作用は＜いきおい＞という項目にまとめた。

⑤「ぬれる」「ひえる」など，変化の結果が問題なものは，＜変化＞のところでとりあげた。

こうして，ここに残ったのは，光りと音のばあいだけである。これらについては，その現象の＜量＞といってもよいかもしれない。

このほか，ここに入れてもよいものとしては，

へたばる＜つかれる
まどろむ＜ねむる
驚愕する＜おどろく
あきれはてる＜あきれる
窮する＜こまる
ふるえあがる＜おそれる
いきどおる＜おこる
こがれる＜恋いする

など，感覚・感情をあらわす動詞が考えられる。これらは④の動作・作用とも，⑤の変化とも近い面をもっていながら，その中間にあるような現象である。

語構成要素のなかには，程度をあらわすものがある。

あそびすぎる，寒すぎる
ちぢみあがる，ふるえあがる
あきれかえる，しずまりかえる
しょげこむ，ひえこむ
あきれはてる，こまりはてる

など。漢語では，

号泣する，深謝する，泥酔する，心酔する，激怒する，熱愛する，確信する，渇望する，痛感する

など，程度をあらわす要素をもったものが多い。

3.2.1　光りの程度

〔159〕 かがやく，ひらめく＜ひかる，てる

「かがやく」は，

○震災以来目立つて広濶になつた下町の空が，今は一層ひろやかに，初冬らしい紺碧に輝いて彼女の上にあつた。（真知子・前 91）

のように，かなり強い光りのばあいにしかつかわれない。

「ひらめく」も，瞬間的な光りである点で「ひかる」よりも範囲がせまいだけでなく，光りの量・鋭さという点でも制約があり，

○突然，埠頭が明るくなり閃光が閃いた，と同時にあの海軍倉庫と思えるあたりのビ

ルの窓から一度に火を吐いて，（特集文芸春秋 1956年 赤紙一枚で 217）

のように，かなり量の多い鋭い光りについてつかわれる。

ただし，「かがやく」が光りの量の多いときにつかわれるということは，まわりの暗さなどとの相対的な関係でいえるのであって，おなじようにろうそくの光りが光っているばあいでも，まわりがまっくらやみで，その光りだけが特にはっきり浮き出してみえるときには，「かがやく」ということもできるだろう。つぎの例はこれに近いものだ。

○浜はすでに真暗である。答志島（たうしじま），菅島（すがしま）の乏しい灯が沖に耀いてゐる。（潮騒 37）

「ひらめく」も，この点はおなじで，

○陰気なくすぶりが小さな焔になつて閃くまでには，（潮騒 64）

では，絶対的な光りの量はそれほど大きくないとしても，まわりがうす暗いへやであるために，はっきりきわだって見えたのである。＜鋭い光り＞という条件は量が多いだけではなく，まわりからきわだっていることも必要である。

「ひかる」の例のうち，

○種市の野辺を小さく二十人ばかりの西国勢が走つて行くのがみえた。ひらたい塗笠が，さしはじめた朝の遠い日ざしをあびてにぶく光つてみえた。（落城 24）

○自動平衡器（へいかうき）の中にともされた蠟燭は壁板に奇怪な角度を取つて，ゆるぎもせずにぼんやりと光つてゐた。（或る女・前 122）

のように，ごく弱い光りのばあいには「かがやく」「ひらめく」におきかえるのには抵抗がある。

○薬指に燦（きら）と光つてゐたのは本物のゴールド・リングと見た。（平凡 115）

○そして陽（ひ）を受けた羽根が桃色にキラキラと光る。（暗夜行路・前 159）

のような例では，かなりするどい光りなので，「かがやく」「ひらめく」といいかえてもよい。

「てる」は，自然現象のばあいに使われるのが原則で，大体はかなり明るい光りをさす。

○深い雪の上に晒した白麻に朝日が照つて，雪か布かが紅（くれなゐ）に染まるありさまを考へるだけでも，（雪国 151）

ただし，

○冬の日は暮近く，今迄室の一隅に照つて居た日影も（蒲団 70）

のようなばあいには，かなりあわい光りだと思われる。これを「かがやく」といいなおすと，もっとぎらぎらした光りを思わせる表現になるだろう。

3.2.2 音の程度

〔160〕 とどろく＜（ひびく）なる，〔音が〕する

「とどろく」は，かなり大きな音についていう。

○第二の喊声（かんせい）が広場ぢゆうに轟いた。（仲子・上 43）

「ひびく」も，大きな音についていうことが多い。

○或る日轟音が空に響いた。大型爆撃機の編隊が，頭上の狭い空を渡るところであつた。（野火 139）

しかし，「ひびく」は，かならずしも大きな音でなくてもよい。たとえば，つぎにあげるようなのは，わりに小さな音だ。

○受話器に響く，辺見の声は，嘆願の調子があった。（自由学校 116）

○隣りと共同で使つてゐる裏口の水道の水音が柔かに響いて来た。（波 36）

「なる」は音が大きいばあいにも，小さいばあいにも，同じように使われる。

〈大〉

○座敷の雨戸の中で目ざましの音がじりじりと鳴つた。（桑の実 38）

○ごうごう鳴る三等列車の中で，（こゝろ 148）

〈小〉

○足もとに池水の落ち口があつて，絶えず，小さく鳴つてゐた。（帰郷 263）

○落葉が，武蔵野の道のやうにかさこそと足許で鳴つた。（野火 13）

からだの中の一部分が音をたてる，つぎのような例は，比較的小さい方に属するものと見られる。これらは慣用的な表現で，「ひびく」や「(音が) する」とはいわないのがふつうだ。

○五百助は，腹の虫が，グウと鳴った。（自由学校 147）

○開けた口をそのまゝ仰向けて，雨を受けようとした。喉が鳴つた。（野火 130）

「音がする」はふつう小さい物音についていうようである。

○私の背後にふと軽い足音がした。それは節子にちがひなかつた。（風立ちぬ 135）

しかし，数は少ないが，かなり大きい物音についていった例もある。

○大きな菊の鉢が窓から落ちた。そして石に砕ける音がした。（青銅の基督 23）

○その時遠く，バーンと音がした。「やつた」と安田が叫んだ。私は銃声のした方へ駈けて行つた。（野火 158）

音が大きければ，当然遠くの方まで聞こえるし，またその音が伝わる過程や余韻のつづく時間も問題になる。したがって，「とどろく」には，「なる」や「音がする」に比べて，遠くの方とか，余韻がつづくとかいうニュアンスがともなう。「ひびく」のばあいには，このことが一そう強くあらわれており，音の大きさというよりは，その伝わり方の方に，むしろ「ひびく」の本質があるように思われる。このことは，形式面では，たとえば，

○遠く山上の敵塁から胡笳の声が響く。（李陵 163）

のように，音の出発点が示されていたり，

○就中（わけても），銀之助は克く笑つて，其の高い声が台所迄も響くので，（破戒 43）

のように，音の到着点が示されていたりすることが少なくない，という点にあらわれている。また，

○遠い水車の音が，コットン，コットン，コットン，と野面を渡つてひびいて来た。（田園の憂鬱 78）

のように，「～てくる」という形でつかわれた用例が見られるのも，音の伝わる過程

を問題にしているからである。さきに，「ひびく」が小さい音にも使われることがあるとしてあげた例も，むしろ音源から耳に伝わるまでの過程を問題にしているから使われたのであって，そうでなければ，「音がする」などといってもよかったのである。音が伝わる道すじは，かならずしも空気中とはかぎらず，たとえばつぎのように，ものの振動にともなうばあいがある。

○籾を打つ槌の音は地に響いて，稲扱く音に交つて勇しく聞える。（破戒 51）

○庭で遊ぶ庭球の音はおもしろく窓の玻璃に響いた。（破戒 77）

また，音が伝わる過程を問題にするという点から，つぎの例では，よくとおる，遠くまでよく聞こえる，というような意味に近づいている。

○よくひびく棚沢の声が，「どうだかネ？」といっているようにも安吉に聞えた。（むらぎも 352）

〔161〕 どなる，がなる，さけぶ，わめく／ささやく，つぶやく＜うめく，どもる，まくしたてる，いう

ここにあげた動詞は，最後の「いう」をのぞいて，みな話し方に特徴のあるものである。そして話し方ということの中には声が大きいか小さいかということもふくまれる。

「どなる」「がなる」「さけぶ」「わめく」は，大声を出すばあいに使われる。「がなる」については単独の用例がなかったので，「がなりちらす」の例をあげる。

○一度その男が飛びたつような大声で誰かに怒鳴った。（むらぎも 253）

○大声でがなりちらすことしか出来ぬ漁師に比して，（中央公論 1953年12月 186）

○誰か大声で叫んで，右舷のデツキを走つて行つた。（蟹工船 36）

○夫に大きな声で喚いたりしてゐるのをみたら，（冬の宿 80）

ただし，このうち「さけぶ」については，問題がある。この動詞は，一般には，大声をあげることをあらわすといって，まちがいはないのだが，まれに，小さな声でいうばあいにもつかわれる。

○「又，そんなことを！」

私はいかにも焦れつたいやうに小さく叫んだ。（風立ちぬ 99）

○そのとき病人が不意に，

「あら，お父様」とかすかに叫んだ。（風立ちぬ 142）

○「おゝ。アントニオ・ルビノ！ルビノ！」と低くふるへるやうに叫んだ。（青銅の基督 94）

○低い声で一人が叫ぶと，それまで，ぢつと動かずに何か見詰めてゐた人々が，急に身動きし，いそがしく手を出したり引込めたりして紙幣をやり取りした。（帰郷 48）

これらのうち，「青銅の基督」「帰郷」の例については，「低く」「低い」が声の大小ではなくて，高低をあらわしていて，「叫ぶ」声の量は大きかったと考えることもできる。つぎの例と同じように。

○片手をメガフォンに口のはたにあて，太い低声で怒つたやうに叫んだ。

「独逸(ドイツ)降伏！　無条件降伏！」（仲子・上 37）

この例では，声の量そのものは，大きかったとおもわれる。しかし，さきほどの「青銅の基督」「帰郷」などのばあいには，やはり，前後の文脈からみて，「低く（低い）」が高低よりも量の大小，「風立ちぬ」の例とおなじような状況をあらわしているものとみられる。このように「小さくさけぶ」という例もあることは，単に量の大小だけではこの動詞を規定することができないことを示している。基本的にはその規定で正しいのだが，2次的な条件として，ほかの「どなる」や「わめく」にない特徴も認めなければならない。「どなる」や「わめく」には，つねに声の大小という特徴をみとめることができるのだが，「さけぶ」のばあいには，そのほかに，声の出し方，すなわち感情をこめて一定のイントネーションで発音するというような条件も加わってくるのである。上にあげた，小声でさけぶ例のうち3つは，おどろいたようなときに感情がたかぶって声を出したことをあらわしており，「帰郷」の例は（これはバクチの場面であるが）人びとに呼びかけるときの声で，やはり緊張したきもちがこめられている。実は「どなる」や「がなる」や「わめく」にしても，多くのばあい，ふつう以上の大声を出すことの裏には，なにか特殊なきもちがある。単に平静なきもちで，遠くにいる人に呼びかけるために，大声をはり上げることも，もちろんあるが，おこったり興奮したりして，「どなる」あるいは「わめく」というばあいが多い。しかし，それらの動詞については，あくまで声の大小という1次的な特徴による規定が必要であって，この特徴をかいたときには，「小声でどなる」「小声でわめく」などとはいいにくい。ところが，「さけぶ」については，1次的な特徴である，大声をはり上げるという条件が失なわれていても，一定の緊張した感情で，一定の声音・イントネーションで発音されれば，それだけで条件がみたされるのである。

なお，「どなる」の方にも，1例だけ「小声でどなる」というのがあった。

○「一軒，家ちゅうもんを，定めんとあんた，こぎゃん時に困るけんな。」

「ほんにヤカマシかな。」

父が小声で呟鳴ると，あとは又雨の音だった。（放浪記 12）

このばあいには，「どなる」，つまり大声を出すという行動をひき起こすというような感情である，怒りの気持ちがあることをあらわすために，こう言ったものであろう。その点，「さけぶ」が小声でもつかわれるのと同じことである。

「ささやく」「つぶやく」は，小声のばあいにつかわれる。

○前の座席の人に聞えないほどの小声でささやいた。（人間の壁・上 293）

○役人にも聞こえぬ程の低い声で彼女はかう呟いた。（青銅の基督 115）

以上以外の動詞は，みな声が大きいか小さいかに無関心だ。

○あとで曾田にきけば，彼はじつにへんな声でうめいて，なにかしらわからないことを口ばしったのだという。（真空地帯・上 143）

○「杉子さん，随分……」武子はさう云ひかけてあわててどもつた。（友情 84）

○田代は，これが言ひたくて四国からはるばる出向いて来たかのやうに，自分一人で

まくし立てた。（闘牛 75）

○「穴山君は長男じゃなかったね」と北見先生は杯を顔の前に支えたままで言った。（人間の壁・上 118）

これらについては，大きな声を出したとも，小さな声を出したとも，どちらにでもとれる。なお，ここで「いう」をあげたのは，話し方について積極的な特徴をもたない言語活動の動詞，すなわち，「はなす」「しゃべる」「そしる」「こぼす」「たずねる」「こたえる」などの代表としてあげたものであって，それらの動詞もやはり声の大小に無関心である。これらが，大声または小声と，はっきりわかる文脈でもつかわれることを示すために，「いう」の例をあげておく。ほかの動詞では，このように両方の例を対にしてあげることはできないが，このような文脈におくことは可能なはずだ。

〈大〉

○思ひ掛けなく大きな声で病人がいつた。（野火 33）

〈小〉

○伯母は声を低めて云つた。（青銅の基督 38）

〔162〕 ほえる＜なく

「ほえる」は犬や獣についてつかわれ，「なく」は動物一般についてつかわれる。このことと関係があると思われるが，おなじ動物，たとえば犬についていうばあいでも，「ほえる」と「なく」との間には，ちがいがみられる。すなわち，「ほえる」はかなり大きな，おそろしい声で「なく」ことにかぎられ，小さな声で「なく」のは，たとえ犬や猛獣でも「ほえる」とはいえない。

○大急ぎで縁側へ出て戸を開けながら口笛を吹くと，犬は直ぐ何処から帰つて来る。さうして鳴いて居るのは外の犬であつた。併し，口笛を吹いても名を呼んでも容易に帰つて来ない事がある。さうして一層けたたましく吠えつづける。（田園の憂鬱 60）

これは，すぐつぎに「ほえつづける」ということばがでてくることからもわかるように，「なく」を「ほえる」におきかえてもよいような例である。

しかし，

○近所の犬は大抵馴染だ。けれども，此様繊弱い可愛げな声で啼くのは一疋も無い筈だから，不思議に思つて，（平凡 26）

という例では「ほえる」で表現することができない。つぎのように，大きな音，あるいはものすごい音をたてる現象を比ゆ的に「ほえる」で表現するのも，「ほえる」のもっている程度の面の特徴がいかされた使い方である。

○或時は風が凄じく吼へたり，雪がさらさら窓に当る。（思出の記・上 31）

○サイレンは高く永く尾を引いて吠えた。（くれない 33）

3.3 いきおい

＜いきおい＞という要素は，速度や程度などと厳密に区別することができない。ここ

では，ややあいまいだが，「ほとばしる」「ぶんなぐる」など，動きのはやさとともに，動かしている力の大きさも関係しているとおもわれるものを，<いきおい>としてまとめた。

つぎにあげるような接尾的要素は，<いきおい>のよさをあらわしている，あるいは，すくなくとも，これに関連しているものである。

もえたつ，わきたつ
ならべたてる，はやしたてる
言いつのる，ふきつのる
なきしきる，ふりしきる
おいまくる，ふきまくる

〔163〕 そよぐ<ゆれる（ゆらめく，ゆらぐ）

「そよぐ」は主として草木の葉や木の枝などの，わずかな風，いわゆるそよ風でも動く程度のものについていうことばであり，はげしくゆれ動くばあいにはつかわない。

○風があると一様に枝が揺れ，雨の日には烟る緑の塊となつて，点々と町の風景に明るいリズムを付けてゐる柳は特別のものであつた。（帰郷 242）

のように，わずかな風でかすかにゆれるときには，「ゆれる」を「そよぐ」といいかえられるが，

○枯れた河岸の柳の木が，腰をもみながら大風にゆれている。（放浪記 119）

○細い癖にひよろひよろと高いものだから，そのひよろひよろへ風のあたること！怖ろしいほど揺れてよ。（田園の憂鬱 101）

などのように，大風ではげしくゆれる例は，「そよぐ」におきかえることはできない。

「ゆらぐ」「ゆらめく」「ゆれる」のあいだで程度に差があるかどうかは，「ゆらぐ」「ゆらめく」の例があまり多くないため，よくわからないが，とにかく「そよぐ」ほどはっきりした傾向はなさそうである。

なお，これらの動詞については，主体 p. 72～74，原因 p. 475～476を参照。

〔164〕 ほとばしる<でる，ながれる，とびちる

「ほとばしる」は，そのばあいばあいに応じて「でる」「ながれる」「とびちる」などとおなじような，ただし，いきおいのよい現象をあらわす。まず，「でる」とおなじような現象について。

○一つの水道栓がこはれて，白い水が迸つてゐた。（野火 75）

「でる」は，いきおいの強いばあいと，弱いばあいとがある。

〈強〉
○十本の指から血がほとばしって出そうなこの肌寒さ……（放浪記 285）

〈弱〉
○ちょろちょろしかでない水をそそごうと（真空地帯・上 86）

つぎに「ながれる」とおなじような現象をあらわす例。

○その山裾に雪笹川が激湍をほとばしらせている。（落城 11）

「ながれる」は，勢いのはげしいばあい，ゆるいばあい，両方に使われる。

〈強〉

○上から流れて来る颯と瀬の早い谷川が，（高野聖 66～67）

〈弱〉

○もう烏瓜のあかりもない川が，わづかに音を立てて灰いろに，しづかに流れてゐたのでした。（銀河鉄道の夜 261）

「ほとばしる」は，また，空中に「とびちる」ことにもつかわれる。やはり，勢いがいいとびちり方である。

○さうして振り返つて，襖に迸ばしつてゐる血潮を始めて見たのです。（こゝろ 269）

「とびちる」が，弱い勢いに用いられた例は適当なのがなかった。液体以外のものについてなら，つぎのように，明らかに弱い勢いで「とびちって」いる例がある。

○古い竹の枝からは細い葉がひらひら絶間なく飛び散つてゐる。（つゆのあとさき 49）

〔165〕 さわる，ふれる／あたる，ぶつかる

「さわる」「ふれる」は，ふつう，軽い勢いで接触するときにいう。

○自分の袂の一寸触つた，テイブルの上の花の形を直しながら（桑の実 125）

○辺見の露わな膝小僧が，駒子のスカートに触れる時があった。（自由学校 93）

○暖かな息が微かに頬に触れ，（平凡 135）

ただし，このばあい，接触するものが，かならずしも静かに運動してきて「ふれる」のだとはいえない。はげしい勢いで進んできたものでも，まともにぶつからずに，そのものの一部分をかすめるようなばあいには，「ふれる」といえる。

○文平を目がけて，打込んだ球はかすかに網に触れた。（破戒 80）

○工場のかえり，トラックにふれたのだと云って，松田さんは肩と足を大きくほうたいをしていた。（放浪記 205）

「さわる」には，これにあたるような例がなかったが，やはり，おなじような現象に使えるだろう。

「あたる」は，勢いがよいばあいにも，そうでないばあいにもつかわれる。

〈強〉

○懐中してゐた鏡に中つて穂先がそれた。（阿部一族 76）

○復び劇しく打つた手がおつぎの鼻に当つた。（土・上 192）

〈弱〉

○私は飢ゑを意識し，手に当る草を採つてその根を噛んだ。（野火 48）

○新鮮な冷風が心地よく鬢や顔に当つても（青銅の基督 72）

「ぶつかる」は，たいていの辞典で，「うちあたる」のように説明しており，これではどういうことか，あまりはっきりしないが，岩波国語辞典では，「（強い勢いで）つき当たる。」としている。たしかに「ぶつかる」は単に「あたる」というよりも強い勢いのように思われる例が多い。しかし，つぎに示すように，かならずしもそうではなく，軽くぶつかることもある。

〈強〉

○私が頭を横に振つたので，肩の骨にひどくぶつかつた。（冬の宿 149）

○忽ち風の巨塊は又ぶつかつて来て，帆桁をわななかせ，（潮騒 142）

〈弱〉

○このとき上方で，木と石のぶつかるやうな軽い音がした。（潮騒 27）

○舷側に来てぶつかる漣の音も長閑だつた。（或る女・前 184）

軽い，とはいっても，「さわる」「ふれる」にくらべれば，まだ音が出るだけ勢いがあるともみられ，上に「あたる」の例としてあげた「野火」のばあいのように，ほとんど「さわる」と同じ程度の事実をあらわしているものとのあいだには，やはり差がみられるかもしれない。しかし，「強い勢いで」という限定が，つねにあてはまるものでないことは，はっきりいえる。

○何かが額にぶつかる。固くなくて，さわるという感じのぶつかり方，それは束にして提げた下駄の鼻緒だった。（むらぎも 353）

この用例では，一応「ぶつかる」がつかわれているが，それは「さわる」という感じだと説明されている。つまり，ここでは，「ぶつかる」と「さわる」とが，ほとんどどちらを用いてもいいような状態であること，そして一般的にいうならば「ぶつかる」は「さわる」よりも強い力で接触するばあいに使われるものであることが，示されている。

〔166〕 さわる，ふれる／あてる／ぶつける／たたきつける

「さわる」は，原則として自動詞であるが，つぎのように他動詞として用いられた例が1つだけあった。

○手を触るさへ暑くるしい，旅の法衣の袖をかゝげて，表紙を附けた折本になつてるのを引張り出した。（高野聖 6）

「ふれる」も，大部分は自動詞である。しかし，やはり他動詞としてつかわれた例がいくつかある。

○初江はそつと自分の写真に手をふれて，男に返した。（潮騒 163）

ほかの他動詞の「ふれる」も，ほとんど「手をふれる」という例で，ほかに「足をふれる」「頬をふれる」がそれぞれ1つずつあった。

「さわる」「ふれる」は，他動詞として用いられたばあいにも，自動詞のときと同様，ひじょうに軽い接触をあらわす。

「あてる」もかるい接触であることが多い。

○葉子は窓をしめて，赤らんだ頬に両手をあてた。（雪国 7）

しかし，

○彼等は鞭をあて，拍車を入れた。（真空地帯・上 151）

のように，かなりはげしい接触をあらわすばあいにもつかわれる。

「ぶつける」は，大体，強い勢いでの接触のときにつかわれる。この点，対応する自動詞の「ぶつかる」とは，ややちがうようだ。すなわち，「ぶつかる」だと，それほど強くなくても，いうばあいがかなりあるが，「ぶつける」の方は，大体強い勢いの例で

ある。

○私はうで卵を七ツ八ツ卓子へぶっつけて破った。（放浪記 102）

しかし，たとえばつぎの例では，それほど強くないともいえる。

○前の男の帽子の鍔に顔をぶつつけながらのび上つて見た。（仲子・上 42）

このような例はあまりない。

「たたきつける」は，つねに強い接触をあらわす。

○彼等は，はがしてきた兵舎の板塀を寝台の足にたたきつけて折った。（真空地帯・上 27）

〔167〕 つつく／つく

「つつく」は，「つく」に比べれば，勢いが弱い。ふつうは，

○葉子は一寸倉地の顔をつゝいて，其の唇に触れた。（或る女・上 189）

のように，ごく軽い動作であり，いちばん強いかと思われるものでも，せいぜい

○竜二は木の棒で壺のなかをつついた。なかなか出てこない。さらに壺を木の棒で掻きまはされて，蛸は，不承不承，昼寝の最中を起された人のやうに，全身を辷り出してうづくまつた。（潮騒 16）

の程度である。これに対して「つく」の方は，

○同じことを繰り返して訊問して故意に疲労させたり，普通のことのやうに棒で突いたり，打つたりした。（帰郷 109）

のように，はげしいことが多い。また

○前髪の七之丞が電光の如くに飛んで出て，又七郎の太股を衝いた。（阿部一族 72）

のように，やりでつくばあいもある。割合弱いかと思われるのは

○日傘の尖で砂利を突きながら立ちすくんでゐる。（つゆのあとさき 48）

のような例で，この程度ならば，「つつく」にいいかえることもできる。

〔168〕 おす／つく

この両者のあいだには，いくつかのちがいがありそうだが，その1つとして，動作を加える際のいきおい，圧力がちがうということがある。いま，比較を簡単にするために，人間が他の人間に対して道具を持たずに直接手ではたらきかける例を，対照してあげる。

「お す」	「つ く」
○道路に難渋の人を見ると，彼は，手を引き，腰を押して，その道中を助けた。（恩讐の彼方に 71）	○料理庖丁のキラキラしたのをさげて，料理人のひとが，一人の若い男の背中を突いてはいって来た。（放浪記 190）

〔169〕 ぶんなぐる，なぐりつける＜なぐる，ぶつ＜うつ，たたく

「ぶんなぐる」「なぐりつける」は，ひじょうに勢いよく力をこめてなぐることをい

う。

○そして彼は，この未亡人の肥った頬っぺたを，思いきりぶんなぐってやりたいと思っていた。（人間の壁・上 294）

○六角棒で腰が立たなくなる程なぐりつけることは（盤工船 57）

「なぐる」「ぶつ」は，これらよりも範囲が広い。

○伯父は突然彼(あの)大力で長官を押倒し，存分に撲つたので，（思出の記・上 47）

○伊之はカッとして小畑の頬を平手で撲(よ)ち（あにいもうと 148）

などでは，「ぶんなぐる」「なぐりつける」とおなじように，力いっぱい「なぐる」ことをあらわす。そして，事実，力いっぱい「なぐる」ばあいが多いのだが，つぎのような例では，かならずしもそうとはいえない。

○看護人が多く旧日本軍の衛生兵であるのは甚だ皮肉であるが，彼等が時々患者を殴る様子に，彼等の前身を偲ぶのも私には快い。（野火 170）

○アキルや，アキルや，飛びつくんぢやありませんよ。——まあちやん，泥だらけにされるわ。いゝからぶつておやんなさい。このごろあんまりふざけ過ぎるんだから。（真知子・前 162）

これらも，「ぶんなぐる」「なぐりつける」といって，まったく不自然というほどのことはないが，おなじ「なぐる」にしても，「野火」の例では，看護人が患者をなぐるのであり，「真知子」の例では，自分の飼犬を子どもになぐらせようとするのだから，力いっぱい，というほどの勢いは，こめていなくてもよい。

「うつ」「たたく」は，もっと範囲が広く，はげしく勢いよく「うつ」ばあいと，軽く「うつ」ばあいと，両方の例がみられる。

〈強〉

○復び劇しく打つた手がおつぎの鼻に当つた。（土・上 192）

○巡査は呶鳴つてぴしやりと横手で勘次の頬を叩いた。（土・上 109）

〈弱〉

○額を手でトシトシ打ちながら入つてくると，（盤工船 58）

○それと見た体操の教師は軽く銀之助の肩を叩いて，（破戒 264）

なお，「うつ」は「たたく」にくらべて強い動作である点に特徴がある，とする意見がある。（国広，文献〔18〕）しかし，この意見は疑問である。「うつ」にも，上にあげたように，軽く「うつ」ばあいがあるからである。つぎにあげる例なども，やはり，「たたく」にくらべて，それほどはげしく，つよくうっているとはみられない。

○いゝ御機嫌に廻つてゐる時の信之は，故意(わざ)と洒々(しゃしゃ)とした顔つきを扮(よそほ)つて，（中略）心臓のあたりをハタハタと打つて見せたりした。（多情仏心・前 293）

○雨もいゝあんばいに止んだ，とお豊は手を拍って言い，（くれない 113）

なお国広氏は「うつ」の意味（意義素）を「可動性の対象物に道具を用いて強い打撃を与える」としている。すなわち，ここでは「うつ」の特徴を＜つよい（勢いがよい）こと＞のほかに＜可動性の対象物に対するものであること＞＜道具を用いること＞とい

うような点にも求めているのである。しかし，これらの特徴も，実例からはみとめにくいようである。まず，可動性の特徴というとき，多くのばあいには，打撃を受けたあと動くということが根拠になっている。また，その動かすことが打つ動作の目的であるとされている。しかし上にあげた「うつ」の例は，いずれも動かすことを目的にした動作ではない。＜可動性の対象物＞という点についても，たとえばつぎにあげるようなものは，明らかに例外になる。

○やがて水を鑿つ棹の音がした。（破戒 170）

○静かな夜の空気を破つて，ぱちやあんと大地を打つ音が響いた。（波 219）

さらに，＜道具を用いる＞という点についても，上にあげてきた例はむしろ大体＜手で＞打ったものであって，道具を用いたものではない。

まとめていうと，＜強い打撃を与える＞ということは，「うつ」の多くの例についてある程度みとめられるが，「たたく」と比較しての特徴とはいいにくく，＜可動性の対象物＞ということも同様であり，＜道具を用いる＞という点については，傾向としてもみとめることがむずかしい。

〔170〕 くりこむ，くりだす，ふみこむ，のりこむ＜はいる，いく

これらは，みな，いきおいよく出かける（目的地につく）ことをあらわす動詞である。

○白粉をこてこて塗つて繰込んで来た若い女連と（あらくれ 50）

○佐土原勢は手負いのもののあとからあとから新手がくり出して来た。（落城 26）

○私はその家に駈け寄り，階の欠けた階段を飛び上つて，踏み込んだ。（野火 73）

○この大雪を衝いて，市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る，といふ噂は学校に居る丑松の耳にまで入つた。（破戒 273）

辞典の規定をみると，例解国語辞典の「くりこむ」には「大勢の人がある所へどやどやと入り込む。」とある。この「どやどやと」というのが，つまり勢いがいいことをあらわしている。また新潮国語辞典では「のりこむ」について「（威勢よく）目的地に到着する。」とある。辞典によって，また項目によって「威勢よく」のような規定のぬけているばあいがすくなくないが，以上にあげた動詞については，ほぼ同様の規定をすべきである。

〔171〕 ふきこむ／たたきこむ＜おしえる

「ふきこむ」は，かなり意図的に相手を一定の考えにしようと思っておしえることであり，したがって，ある程度熱心さがともなう。

○この人に，そんな風な説を吹きこんだに違いない。（人間の壁・上 194）

「たたきこむ」は，さらに，はるかにきびしく熱心におしえることである。

○小学校でたたきこまれた教育勅語と二宮金次郎の思想が，（中央公論 1954年4月 215）

したがって「ふきこむ」と「たたきこむ」のあいだには，ある程度段階のちがいがみ

られる。もっとも，「ふきこむ」の方は，おしえる側の意図に関することであり，「たたきこむ」のばあいには，外にあらわれたきびしさに関することであって，おなじ線上に程度のちがいとして並んでいる，ということはできない。意図としては熱心であっても，外にあらわれた態度としては，やさしく，あるいはずるく指導して導いていくばあいもあるだろう。「たたきこむ」は，そういう指導法を含まない。意図において熱心であるのはもちろんだが，それが外形におけるきびしさ，はげしさとなってあらわれているばあいに使われることばだ。

「おしえる」は熱心な態度にも，いいかげんな態度にもいう。

○どれだけ熱心に教えても，まだ足りないのではないか，（人間の壁・上 240）

○煙草をすいながら，ひざをくずして，遊び半分のような態度で教えているが，急所ははずさない。そういう頭のいい教師だった。（人間の壁・上 111）

3.4　はやさ

純粋に速度だけを特徴としてほかの動詞から区別される，というものは，和語の基本的な動詞にはないようだ。ここでは，移動のし方に関係したものとして「はしる」「とぶ」を，態度と関係のあるものとして「いそぐ」をとりあげることにする。

〔172〕 はしる，とぶ；いそぐ＜(いく)

「はしる」

この動詞について，ほとんどの辞典は，人や犬が「はしる」ばあいと，汽車や船が「はしる」ばあいとを，まとめて同じ意味とし，「かける。かけて行く。早く行く。早く動く。」などの訳語をあたえている。広辞苑のように，これらをそれぞれ，

③かけて行く。　「出で一・り去（い）ななと思へど」

①早く移動する。　「フネガハシル」

（用例の一部は省略する）

と区別しているのは，きわめてまれな例に属する。

しかし，これらは，やはり別々の意味として，わけるべきではないかと思われる。というのは，人や動物のばあい，「はしる」は「あるく」に対立し，その意味の中には移動のし方についての規定がふくまれているのに対し，乗りもののばあいには，「あるく」に対立せず，移動のしかたは問題でないからである。たとえば，つぎにあげる例は，あきらかに「あるく」と区別して「はしる」をつかったもので，乗りものについてはこういう使い方はない。

○夜ふけの町を歩いたり走ったりしてまわったことがあった。（むらぎも 97）

○行進は六列にならばなくてはならない。走ってはならない。蛇行してはならない。（人間の壁・上 334）

「競歩競技」の定義は，つぎのとおりである。（陸上競技規則　第45条）

競歩は，いずれかの足が，常に地面から離れないようにして前進することをいう。

したがって，「はしる」ことは，両足とも空中にある瞬間があるような動きかたである。日常語としての「はしる」「あるく」に，このような厳密な定義がつねにあてはまるとはいえないが，大体は一致するとみてよいだろう。

これに対して，人間・動物以外のものの「はしる」は，「あるく」と対立しない。まずどのようなものが「はしる」で表現されているか，その例をあげる。

○帆を張った漁船が四五艘，黒ずんだ藍色(あいいろ)の海を力強く走っていた。(暗夜行路・前 173)

○戸の走るその音が，野面の方へ重く這つて行つて，(田園の憂鬱 70)

○雨戸が微かに動いて落葉の庭に走るのもさらさらと聞かれた。(土・上 52)

○もうプラットフォームを出離れて，白ペンキの低い柵が走る，其向ふの後向きの二階家が走る，平家が走る。(平凡 54)

○洒し尽して何の濁りも立てずに，浅く走つて行く水は，(田園の憂鬱 8)

○一群の雲がおもむろにその上を走つていく(墓 1956年4月 135)

○重い冷たい潮霧(ガス)が野火の煙のやうに濛々と南に走つて，(或る女・前 97)

○カイゼルの格子縞の襤褸(ぼろ)を火が走つた。(仲子・上 43)

○生唾が舌の上を走った。(放浪記 64)

○はだをはしる冷感がふたたび彼の肉をかたくした。(真空地帯・上 155)

なお，「人が乗りものではしる」ばあいも，「乗りものがはしる」のと同類で，「人がはしる」とは別のようだ。つぎの例を参照。

○そこで船に乗る。船で走って上海に行く。(むらぎも 135)

○雨のなかを自転車で走らねばならなかった。(人間の壁・上 27)

これらのばあいにも，やはり「はしる」は「あるく」と対立しない。「人間の壁」の例では，「自転車であるく」ともいえそうだが，そういうと，その「あるく」は，移動のし方をあらわすのではなくて，「あるきまわる」「あちらこちらと移動する」意味になってしまう。

以上のような理由で，ここでは，人が「はしる」ばあい（広辞苑の説明にしたがえば，「かけて行く」こと）と，乗りものなどが「はしる」ばあい（広辞苑によれば「早く移動する」こと）とにわけて，それぞれの移動法に，＜速度＞という特徴がどのようにあらわれているかを考察する。

1）人・動物が「はしる」ばあい

このばあい，「はしる」の意味の特徴は，主として「あるく」との対比における移動のし方にある。その際，「はしる」という移動法にともなう当然の結果として，事実上「あるく」よりも早い移動だということになる。ただし，これは，あくまで結果的にそうなるという二次的な特徴にすぎないから，「はしる」を「あるく」から，また「いく」「かよう」などから区別する積極的な特徴にはなりえない。ゆっくり「はしる」ことは，いそいで「あるく」ことよりも，おそくてもよいのである。したがって，この意味の「はしる」の記述には，移動法をあげれば十分である。

2）乗りものなどのばあい

自動車などは，人間とおなじようなし方で「はしる」「あるく」という動作をすることはない。したがって，「はしる」の意味も「あるく」と対立するような移動法の特徴を欠いている。それでは，このばあいの「はしる」の特徴はどこにあるか。「自動車があるく」という表現がないかわりに，「自動車がうごく」はある。つまり，ここでは「はしる」を「うごく」と比較することで，その特徴をあきらかにすることができるだろう。

「はしる」は「うごく」から，速度と移動法の2点で区別されるようである。ただし，そのどちらも決定的な特徴とはいいにくい。

まず速度について。「うごく」がどのような速度の移動でもいいのに対し，「はしる」が，多くの辞書の規定するとおり，はやい移動をあらわす，ということは，たとえば，つぎの「うごく」が「はしる」でおきかえられないことからもいえそうである。

○角を一つ曲ると，支那蕎麦の屋台がズルリズルリ動いて来た。（多情仏心・前 17）

○旧式な大八車が動いていたり，そうかと思うと行きなり横丁から恐しく大きなトラックが出てきたりする。（むらぎも 292）

屋台や大八車は，人があるいている程度のはやさなら，「はしる」とはいわない。「屋台（大八車）がはしる」といえるとすれば，それは，ひいている人がはしっているようなはやさのときだろう。

ところが，汽車・自動車のように，人力・畜力によらずにうごき，ふつうのばあい人間よりもずっとはやい乗りものについては，事情がちがう。これらについては，つぎのようにかなりおそい速度でも「はしる」といえる。

○電車がごとんごとんのろく走るのが気にならない。（むらぎも 348）

このばあいには，人があるくくらいの速度でも，「電車がはしる」といえるだろう。もちろん，「うごく」ともいえる。とすると，電車などについては，「はしる」とはつまり「うごく」ことであって，速度という特徴はきいていないことになる。事実，つぎのようにほとんどおなじ文脈でつかわれている例がある。

○カムパネルラのうちにはアルコールラムプで走る汽車があつたんだ。（銀河鉄道の夜 250）

○ここの汽車は，スティームや電気でうごいてゐない。（銀河鉄道の夜 268）

では，汽車などについて，「はしる」と「うごく」とが完全におなじかというと，そうはいえない。たとえば，自動車を横から押してうごかしたばあい，これは「うごいた」のであって「はしった」のではない。つまり，「はしる」は，ふつうの方向にふつうのし方で「うごく」ことだ，という移動法についての特徴をもっているのだ。これは，さきにあげた屋台や大八車についても同様である。

まとめていうと，乗りものが「はしる」とは，その本来の，ふつうのし方での移動を意味し，大八車など，人と等速のものについては，さらに，ふつうよりはやい，という限定がつく，ということになる。

なお，乗りもの以外の水・雲などについても個々にしらべるべきであるが，用例が十

分でないので省略する。

「とぶ」

この動詞には,

鳥が空をとぶ。

のような,空中における移動のほかに,

家にとんで帰る。

のような用法がある。

これらを別々の意味とする点では,ほとんどの辞書が一致しており,それは正しいとおもわれるが,後者の意味をどう規定するかには問題がある。大体は,これに「走る。かける。」という訳語を与えている。これだけではあいまいだが,この規定は,単なる速い移動以外に,「あるく」などと区別された移動法の特徴を,この意味についてみとめているようにみえる。その点,特色があるのは新辞源の「はやく運動する。」という規定である。これは,この意味の特徴が移動法にではなくて速度にあることをはっきりさせている点で,注目にあたいする。(ただし,移動に限定すべきところを「運動する」こと一般に広げているのはよくない。)

この意味の「とぶ」が「はしる」という動作にかぎられないことは,たとえばつぎのような例からいえるだろう。

○旅へ出なければならない,と云ふ,やゝ義務的な感じが多くて,一日も早く飛んで行かう,と云つた風な願望にはなつてゐなかつたからで,(多情仏心・前 250)

この例で,「とんでいく」は,旅行にいくのだから「はしる」ことではない。いろいろな乗りものを利用しての移動であり,移動のし方としては,さまざまである。また,

○彼はそれを予想してかけ足でとんで行ったのだが,(真空地帯・上 78)

のように,わざわざ「かけ足で」という限定がつくことがあることも,問題が速度にあって移動法にはないことを示している。(ただし,純粋に速度かどうかには問題がのこるが,これはあとで「いそぐ」のところでのべる。)この意味の「とぶ」は,「とんでいく(くる・帰る・でる)」のように,つぎに移動をあらわす動詞をともなった「とんで」の形でもちいられるのが原則である。上にあげたもの以外の,ややめずらしい移動動詞をともなった例としては,つぎのようなものがある。

○すぐ隣の浴室へ飛んではいつた。(多情仏心・前 317)

○正反対の方向に私は飛んで逃げるやうにいそいでゐたのだ。(冬の宿 186)

このように,「とんで ～ 」という形をとっていない,例外的なものとしては,つぎの2つのばあいがあった。

第1は,乗りものが,はやくはしることである。

○寒い夜で,風が出た。真知子の俥は追はれて軽く,水の上の小舟のやうにアスファルトの路を飛んだ。(真知子・前 172)

○百三十キロも飛ぶスポーツ・カーを(娯楽よみうり 1956年10月5日 42)

これについては，他動詞の「とばす」が「はやくはしらせる」という意味でもちいられることを参照。

○いつもきまつて狭斜の巷へ自動車を飛ばし，（多情仏心・前 119）

○小野田が自転車で飛ばして，方々当つてみてあるいた羅紗のサムプルが持込まれたり，（あらくれ 227）

この意味における「とばす」は，「とぶ」とちがって，特別に形の上での制約をうけていない。それだけ安定した意味だといえる。乗りものの「とぶ」の例は，その「とばす」にささえられて「とんで ～ 」以外の形で使われたのではないだろうか。

第2の例外は，使が「とぶ」ばあいである。

○忽ち使が都から博徳と陵の所に飛ぶ。（李陵 155）

これについては，

○次の日曜日には，外出はとりやめになるかもしれないという，うわさがとんでいた。（真空地帯・上 78）

○果して廻状は飛んだ。（映画ファン 1956年12月 175）

のように，うわさ・命令などが，はやく伝わる，という意味に「とぶ」がもちいられることと関係があるものとおもわれる。

以上のように，この意味の「とぶ」が「とんで ～ 」の形をとっていないばあい，それは他の意味によってささえられている例外的な現象として説明がつく。したがって，「とぶ」のこの意味が，自由な意味ではなく，一定の形式によって＜しばられた＞ものであるという原則は正しいであろう。上の2つのばあいをのぞき，「とんで ～ 」の形をとっていないものは，この意味と同様の事実をあらわしているようにみえる，つぎのような例でも，むしろ基本的な空中における移動という意味の比ゆ的な用法ではないかとおもう。

○後をも見ずに逸散に宙を飛で家へ帰つた。（平凡 40）

○駒子はよく走つた。凍りついた雪を下駄で掠めて飛ぶかと見え，（雪国 166）

「いそぐ」

この動詞については，「しごとをいそぐ」のように非移動的な動作一般のばあいと，「家へいそぐ」のような移動のばあいとを，別々の意味にしている辞典と合併している辞典とがある。意味としては合併・一括すべきかもしれないが，その際にも，

○私は荷物をもつて，そのまま駅にいそいだ。（冬の宿 166）

○天気のよいのに山路を急いだから，汗ばんで熱い。（野菊の墓 23）

のように目的地・経過点の表現をともなう例があることなどから，これが「いく」「とおる」など，他の移動動詞と同様に扱える側面をもっていることはあきらかである。

移動のばあいについては，「はやくあるく」と規定している辞典が多い。（明解・角川・新選・大日本・講談社など）しかし，この「あるく」という規定はせますぎる。たしかに，

○彼は急ぐと云ふより寧ろ走つてゐた。（青銅の基督 82）

というような例では，「いそぐ」は「はしる」に対立し，したがって「あるく」ことを意味するようにみえる。しかし，これは，たまたまそうなのであって，「いそぐ」が歩行にかぎられないことは，つぎのような例からあきらかだ。

○殊に夕暮前は泊りの場所へ急ぐ船で河は行き詰つた。（河明り 251）

○二人は，新橋駅から，タキシイに乗って，桜田門まで，急いだ。（自由学校 352）

○突兀と秋空を劃る遠山の上を高く雁の列が南へ急ぐのを見ても，（李陵 152）

だから，「はやくいく」という規定（三省堂新国語中辞典）の方がよい。

しかし，「はやくいく」にも問題がある。まず「いく」には方向性がある。また，「いそぐ」の特徴は，実は，移動の速度といった純粋に客観的なものではなく，はやく行きつきたいという気もちに裏うちされた行動，という点にあるからだ。上にあげたような例で，「いそぐ」はたしかに移動という（客観的な）事実をあらわしており，「あわてる」「あせる」など，気もち・態度にもっぱら焦点をあわせた表現とはちがう。「駅にいそいだ」といえても，「駅にあわてた」「駅にあせった」とはいえない。しかし，主体が意志をもちえないものであるばあい，はやく移動しても「いそぐ」といえないことも事実である。たとえば，急流にながされた船や，大砲の弾は，比ゆ的な表現でないかぎり「いそいだ」とはいえないだろう。したがって，この点では，単に「はやくいく」とするよりも，

早く着くように速力をます（三省堂国語辞典）

早く行き着こうとして，速さを増す（岩波国語辞典）

などの規定の方が，一層正確である。

急いで速く歩く（例解国語辞典）

いそいでいく（新潮国語辞典）

のように，規定の中に「いそぐ」をもちいた同語反復の表現も，このような主体の態度を言いあらわそうとして生じたものとおもわれる。

さらに厳密にいうなら，三省堂や岩波の規定の後半，「速力をます」「速さを増す」はせますぎる。大切なのは，はやく行きつこうとして行動することにあるのであって，その行動が，加速という形ををとることは必要条件ではない。はじめからはやい速度で進行している状態も，「いそいでいる」ことである。また，

○「でも，をばさん，お湯へ行くんだらう。」

「ナニ，あなた。まだ急がないでもよう御在ます。」（つゆのあとさき 73）

という例では，「いそぐ」は，お湯へいくときの速度というよりも（それもあるかもしれないが），むしろ，お湯へ出発する時刻をはやくすることをあらわしている。出発をはやめることも，当然，はやく行きつくための方法である。このような例は，特に，「いそいで」の形で副詞的につかわれたばあいにみられる。

○別に急いで帰るにも及ばない。二度出掛けるのも大変だから，ゆつくり勉強したり見物したりして来る方がいゝ。（つゆのあとさき 93）

○私は急にそれが気になつて溜まらないやうに，急いで山径を下りはじめた。（風立ちぬ 120）

要するに，「いそぐ」にとって，速度はたしかに重要な特徴ではあるが，それは，あくまで，主体の気もち・態度の表現としてのものなのである。そして，このことは，ある程度，「とんでいく」などの例における「とぶ」にもあてはまるのではないかとおもわれる。このばあいにも，原則として，はやくいきたいという主体の気もちは存在する。しかし，「とぶ」は，たとえば，「坂の上から雪のかたまりがとんできた」のように，無意志的な主体についてもいえるから，「いそぐ」に対して，より純粋に速度という特徴をそなえているとみられる。

〔173〕 うごめく＜うごく

「うごめく」は，うごく距離が短かいだけでなく，その際のはやさも，あまり早くない。

○後の柵にうごめいてゐる羊の群。（真知子・前 63）

ただし，つぎの例は例外のようにも思える。

○山北は染太郎に腕をとられながら，タクシイのうごめいている通へ出た。（講談倶楽部 1956年5月 206）

しかし，このばあいにも，タクシーを遠い地点から眺めているような表現で，タクシーが小さく，したがってゆっくりに見えるのでこうあらわしたのではないかと思われる。

「うごく」は，おそくてもはやくてもよい。

〈遅〉

○思ひ思ひの恰好で横はり，時々立ち上つて無意味にのろのろと動いた。（野火 26）

〈速〉

○宮崎は機敏に動いてダイレクトで捕り，一塁に転送併殺が成立。（野球界 1956年4月 132）

「野火」の例は，「うごめく」でおきかえられるが，「野球界」のようにすばやい動作は「うごめく」とはいえない。

以上にとりあげたもののほか，漢語サ変動詞には，

速射する，疾走する

徐行する，緩行する

のように，速度をおもな特徴とするものがある。

急行する，急造する，速成する

などは，「いそぐ」とおなじように，速度と態度とが，からみあったものであろう。「急」「速」などの要素をもっていても，

急変する，急死する，速断する

などの瞬間的な現象のばあいは，速度ではなくて，思いがけずに，とか，時間をおかずすぐに，とかいった面をあらわし，その点で

即答する，激変する，勃発する
などに近い。

3.5 方　　向

方向を特徴とする動詞というのは，原則としてはもちろん移動の動詞である。「あがる」「おりる」「でる」「かえる」など。しかし，移動以外にも方向を特徴とするものがある。たとえば，

姿勢・むきの変化をあらわすもの——あおむく，うつぶす……
変形の方向をあらわすもの——でっぱる，へこむ，ねじれる……
並び方の方向をあらわすもの——つもる，かさなる，ならぶ……
力の方向をあらわすもの——おす，ひく……

なお，ここでとりあげた移動の動詞については，実は方向として規定すべきか「目的地」として規定すべきかが問題である。たとえば「いく」「くる」のちがいは，基本的には話し手の方向への移動であるかどうかによるのだが，これはまた，話し手のいる場所が目的地になっている動作かどうかという対立だとも考えられる。

方向の種類は，つぎの13にわける。

1）上下
2）左右
3）前後
4）内外
5）東西南北
6）ある基準点に対する方向
7）特定の目的地に対する方向
8）川上・川下の方向
9）人前への方向
10）話し手に対する方向
11）最初の出発点に対する方向
12）不定の方向
13）回転

このほか，語例はすくないが，

直進する——蛇行する
縦断する，縦走する——横断する

なども，方向を特徴とするものである。

3.5.1 上下

上——下

方向によって区別される動詞はかなりたくさんある。そして，そのなかでも特に多いのは，上下の方向である。それらの動詞のあらわす方向性を分析するにあたって，まずまえもって「上」および「下」という名詞の意味についてしらべておくことにする。というのは，これらの名詞の意味にみられる特徴が，基本的には，つぎにとりあげる動詞の方向性にみられる特徴と同じものだからであり，それがより純粋なかたちであらわれていると思われるからだ。

基本的にはまず地球の中心に近い方が＜下＞であり，そこから遠ざかる方向が＜上＞である，と規定することができる。重力のはたらく方向が下，といってもよい。

○震災以来目立つて広濶になつた下町の空が，今は一層ひろやかに，初冬らしい紺碧に輝いて彼女の上にあつた。（真知子・前 91）

○下を覗けば，水は青味を帯びた水晶と透き徹つて，（思出の記・上 78～79）

地球という基準をはなれて，たとえば遠い宇宙空間に出たとき，いったい，なにを基準にして，「上」「下」および「あがる」「おりる」のようなことばを使うことになるか，そんな状況で，これらの単語がそもそも使われるのかどうかは問題であるが，いま資料にしているようなものでは，そういう状況の例はふくまれていない。

ただし，上および下という方向は厳密な直上・直下のものとはかぎらない。つぎにあげるように，ななめ上の例もある。

○教会は道路から少し退き，左手の家並の上に，細長い白堊の側面を現はしてゐた。（野火 72）

下のばあいには，上に比べて，ななめの方向であることが一そう多い。

○坂の下から生徒たちがひとりずつ上ってくる。（人間の壁・上 273）

「上」や「下」は身分・ねだんなど，価値をあらわす用法をももっている。これも広い意味では一種の方向である。しかし，そういう抽象的な方向をあらわすようになる以外に，やはり空間的な方向ではあるが，いちばん基本的なものからみると，すこしずれているばあいがある。その第1は正常な状態で上になる方向，ということである。まず実例をあげる。

○其にこやかな唇の上の黒子（ほくろ）までが妙に神々（こうごう）しく拝まれた。（思出の記・上 51）

○膝から下，二の腕，首すじ，顎の下，どこもひどい中で（むらぎも 122）

○どうやっても上と下とで開いてしまう厚ぼったい唇，（むらぎも 203）

これらの例では，いちばん基本的な用法とちがいがないように見える。たしかに，人が立っているかぎり，たとえば，「上唇」「下唇」というばあいの「上」「下」は，地球の中心からより遠い方向にあるか，より近い方向にあるか，ということと一致する。ところが，このおなじような「上」「下」が，からだが横になっているばあいにも適用される。

○布団を耳の上まで掛けて，平気で寝てしまはうと思つたの。（波 271）

○二枚の毛布を顎の下までかけて，もう，寝に就いていた。（自由学校 358）

これらの例では，垂直方向で「上」「下」を問題にしているのではない。足から頭の

方へ向けての方向が「上」であり，その逆方向が「下」なのである。すなわち，正常な状態，ということは人間については直立している姿勢であるが，そのばあいにおける，「上」「下」という方向の基準が，横になったときにまで，拡張されているのだ。おなじような場面についてつかわれていても

○彼は布団を顔の上に引張り上げた。（波 216）

では，これとちがい，垂直方向に見たばあいの「上」であると思われる。もし直立している姿勢だったら，これは「顔の前」になるはずである。

「右」「左」という方向は，人体を基準にした相対的なものであり，おなじ位置にいて，客観的にはおなじ方向を指さしても，その人の向きによって「右」とも「左」ともいえる。「右」「左」という単語は，したがって，地球上にいようと，宇宙空間にいようとおなじように使えるはずである。「上」「下」が人体を基準とする意味に移行していることは，この「右」「左」と同様のものになっていることであり，地球その他の基準とすべき天体をはなれたところでは，この基準によって「上」「下」ということになるかもしれない。

これらの人体の方向性に近いものとしては，品物のばあいがある。

○レンズが上下に二つあり，上のレンズはピントを合わせ，下のレンズは撮影専門で，（週刊東京 1956年6月23日 39）

カメラについても，その固有の方向性を基準にして，横になっていても「上のレンズ」ということが可能であろう。また，文章などを紙に書いたばあいの「上」「下」がある。

○二十八ページをひらいて。よろしい。第七行目の上からかぞえて，十一，十二，十三字目まで，墨で消しなさい。（人間の壁・上 101）

○大分ながすぎる文章を書いて，名前の下に爪印を捺した。（本日休診 105）

これらの正常な状態というと，むしろ水平におかれたばあいであるが，もしこれらの教科書や証文を立てるとすれば，上になるのは，自分の手もとから，より遠い位置にある部分である。文章ではないが，

○五線の上にオタマジャクシがあるのか，それとも，五線の間にあるのかはっきりしないとき，（音楽之友 1956年10月 119）

の例でも，手前にある方が「下」，手前から遠くが「上」という方向になっている。服の型紙にはこのような意味での「上」「下」を使った例が多い。

○ウエストから背巾線までの中央線を上に延長し，（婦人生活 1956年11月付録 冬のスタイルブック 187）

○脇線はバストより10センチ下と結びます。（若い女性 1956年12月 286）

型紙や絵などは，水平にひろげて書いているときでも，直立させたときとのつながりが直接的なので，「上」「下」の方向性がこのようにずれることは，ごく自然である。

なお，手前かどうかというのとは別な方向に「上」「下」がずれたものがある。それは碁の例である。

○白2と上からハネる手は黒3とヒカれ，（棋道 1956年8月 52）

○黒十一，これで下をハネ，参考図1の定石も（囲碁 1956年1月 8）

このばあいには，「下」というのは，まわりの辺により近い方向であり，「上」は中央に近い方向をあらわしている。これも，もともとは，まわりの方から見るのが自然であり，つまり，まわりの線が手前，すなわち「下」となりやすいことからおこったものと思われるが，すでにそれとはちがった独立の用法と見られるべきものである。現に，上にあげた「棋道」の「上からハネる」というのは，実は碁盤の上の辺でのようすなので，雑誌の紙面に即していえば，「下から」といった方がわかりやすい位置になっている。

空間的な範囲での方向のずれの第2は，より表面的な方向，ふつう人の目にふれやすい方向を「上」であらわし，その逆の方向を「下」であらわすことである。

〈上〉

○洋服の上から白いエプロンをかけた姿で，（人間の壁・上 41）

○ラムプの感じやすい焔は，少女の静かな眉や長い睫（まつげ）の影を，頬の上にゆらめかせてゐるに相違ない。（潮騒 23）

○紙と，その上に文字を書かうとして口紅のステックを（帰郷 92）

〈下〉

○冷い風が時々夜着の下に忍込んで，（波 36）

○その緑色の皮膚の下には，痩せながらも，軍人らしくよく発達した，筋肉が隠されてゐるらしかつた。（野火 133）

○薄紙の下の文字のように，時々，透けて見えるので（自由学校 14）

これは，第1にあげた，正常な方向での上下を基準にしたずれよりも，ずれ方が大きい。さきほどの例で，からだの「上」と「下」というのは，人が原則として直立していることが多いので，基本的な方向からずれていないとみてむじゅんしないものが大部分である。しかし，この第2の，表面か裏の方か，という意味では，そのようにどちらにでも考えられる例というのは，ほとんどない。ただ，今あげた「帰郷」や「自由学校」のように，紙の上下の例，あるいは

○私は手拭を帽の下に敷いて汗の流れるのを防ぎ，（野火 12）

のような例では，たまたま基本的な方向における上下と表裏とが一致する。これらは，どちらにでも解釈できる中間的な例である。

服装についての表現では，「上」「下」といういい方をとると，ややまぎらわしいばあいが出てくる。

○中背の体軀を，上から下まで総革の重さうな外套で包んで，（闘牛 75）

の「上から下まで」は，上半身・下半身の意味であろう。

○着物は上から下まですっかりきかえている。昨日合宿へかえると，玄関へあがるなり安吉は褌まではずしてまっ裸になった。そしてぶるぶる慄えながら脱いだものを完全に包みにして洗濯屋に出した。（むらぎも 283）

の「上から下まで」は，それと同じように解釈することもできるが，いちばん外に着ている服から，いちばん肌に近いものまで，のように解釈した方が自然であると思われ

る。なお，用例からみると，「上着」はすべて上半身に着るもの，「下着」はすべて肌着の意味であってこれらの「上」「下」は意味がちがう。

○彼は急いで**上衣**とズボンを脱ぎ，河に飛込まうとした。（波 78）

○それかあらぬか，彼女は**下着**なしで寝ることを好む。身につけるものといったら，香水のシャネル五番だけ。（週刊東京 1956年 8 月18日 10）

用例にはなかったが，服装以外でも，つぎのようなばあいには，まぎらわしい。すなわち，壁にポスターがはってあって，「その上にもう 1 枚はってくれ」といわれたようなときである。この「上」は地面から遠い方向という基本的な意味にも，表面（人に面する方向）という派生的な意味にも，とることができる。

〔174〕 あがる，あげる，のぼる——くだる，おりる，おろす，さがる，さげる，おちる，おとす

上下の方向によって区別される動詞はひじょうに多い。その中で基本的なものとして，これらの動詞をとりあげることにする。これらの動詞を対立させている特徴は，基本的には「上」「下」という名詞を対立させているばあいと同様に，地球の中心の方に向かっているか，それに反する方向であるか，ということである。しかし「上」や「下」がそれからずれた空間的な方向もあらわしうるように，これらの動詞も，空間的ではあるが，そして基本的な意味での上下の方向と密接に関係はしているが，すこしずれた方向をあらわすばあいがある。

(1) 川の流れる方向へのずれ（p. 286～287参照。）

これは，川が高いところから低いところへ流れるということからすれば，依然として基本的な意味における上下関係がたもたれているともいえる。「上」「下」という名詞でも，実際には，垂直の方向における上下ではなく，ななめの方向におけるものが多い。「あがる」などについても，人間の移動をあらわすばあいには，ほとんどすべて，ななめの方向への移動で，垂直の方向での移動をあらわしている例は，きわめてまれだ。「おりる」の例を 1 つだけあげておく。

○エレヴエターで**下りる**瞬間の，小便がもれさうになる，くすぐつたい不快さをその度に感じた。（蟹工船 19）

大部分は「坂をあがる」「二階へはしご段をあがる」のように，ななめの道を通って上下するのである。したがって，それがゆるい坂であるばあいには，上下への移動距離はわずかで，水平方向への移動距離の方がずっと長いことがありうる。川を上り下りするばあいの表現は，そのもっとも極端な例である。

○小さな蒸汽船が汚穢船（をわいぶね）を何艘も引いて**上つ**て来た。（波 74）

○そこで船をのりかえて揚子江を**のぼつ**て行く。（むらぎも 135）

○千曲川の瀬に乗つて**下る**こと五里。（破戒 173）

なお「上」の字は，「あがる」とも「のぼる」とも読めるばあいが多いが，上の「波」

の用例は，改造社版現代日本文学全集のルビによれば「あがる」である。

(2)　内外などの方向へのずれ

「あがる」「おりる」などが，一般的に空間的な方向を示すのではなく，特定のものとの関係における移動をあらわすものに移ると，それらはむしろ，あるものにはいったり，その中から出たりする方向をあらわすようになる。たとえば「家にあがる」「船からおりる」などであって，これらのばあい，かならずしも，基本的な意味における空間的上下関係がたもたれているとはかぎらない。地面とおなじ高さの家に「あがる」ばあいもあるし，船よりも高い岸壁に「おりる」ばあいもありうる。なお例解国語辞典・岩波国語辞典などでは，「おろす」という動詞について，人間が乗りものから出るばあいだけを別の意味とし，くるまから荷物を「おろす」ような例は，棚からものを「おろす」ようなのとあわせて，基本的な意味に属するものとしている。しかし，対象が人間（動物）か，ものか，ということで，これらを区別する必要は，ほとんどない。

〈も　の〉

○彼のいはゆる飼料なるものを貨車から降ろして，（闘牛 116）

○大きな風呂敷包みを，岩に下ろして，汗を拭いた。（潮騒 125～126）

〈人〉

○上野までは辛抱しさうもないので，雷門（かみなりもん）で下して（波 196）

○丘の傾斜に向って老婆をおろした。（厭がらせの年齢 274）

これらの例において，荷物が対象になっているばあいにも，重点は上から下への移動ではなくて，車や背中というものの上から（または中から），他の位置への移動にあるからである。

水を田んぼから出すことをあらわす「おとす」という表現も，やはり上下関係よりも田んぼの中から外へという内外関係に重点が移っている。

○菊さんが水を落すとその後からいって水を入れてくる。（農業朝日 1956年3月 73）

このばあい，「水をいれる」が，「水をおとす」と対立してつかわれていることも，そのことを示している。田んぼがみぞなどにくらべて高くなくても，水を「おとして」しまうことができる。厳密にいえば，水位がまわりよりも高いから落ちるわけだが，田んぼ自身の高さは同じでもよいのである。その意味でたとえば，

○水門の水を一時に切つて落したやうに，雨がどうと雨戸に吹きつけた。（波 264）

というように，明らかに高いところから低いところへの移動をあらわすものとは，ちがってきている。

(3)　正常な状態で上下関係を示すような方向へのずれ

人間のからだについて，「上」「下」というのが立った姿勢での上下を基準にしており，かりに横になったばあいでも，その表現がたもたれていることがあることは，上に示したが，これに近いような表現が，移動の動詞についても多少みられる。ただし，はっきりからだが横になっているばあいに，「のぼる」や「くだる」を使ったとみられる

例はない。

○寝たっきりなので，体をもち上げるとボキボキ骨が鳴ってくる。指で輪をこしらえて，私の首を巻いてみると，おいたわしや私の動脈は別に油をさしてやらないのに，ドクドク澄んだ音で血が流れを登っている。尊しや。（放浪記 287）

この例では，断言はできないが，寝た状態で血があたまの方に移動している状態をのべたものとも解釈できる。とすれば，「のぼる」は実は水平方向への移動である。

○甘い温かな乳汁が滾々（どくどく）と出て来て，咽喉へ流れ込み，胸を下つて（平凡 27）

これは，子犬が乳を飲んでいるところであるが，もし子犬が，特に首をもたげているのでなければ「胸を下る」はやはり水平方向への移動であろう。

ほかの動詞については，みな起きているときのからだの部分の動かし方，またはそれの状態化したものの例しかなかった。

○彼の眉が上つた。（野火 31）

○時屋一等兵は一寸薄い唇の右端をあげ，（真空地帯・上 68）

○頬骨（ほっぺた）のふくれた，眦（めじり）の下（さが）つた，鼻（はな）の低（ひく）い，（高野聖 70）

○少し眼尻をさげて，行介の顔をのぞいた。（波 18）

これらについては，基本的な方向における上下を基準にしていると考えて，すこしもむじゅんはない。しかし，かりにからだを横たえた状態についてこのような表現を使ったとしても，それもまたゆるされるはずであり，その際には基本的な方向性からずれていることになる。

○そのヒップから裾までちょうど定規で線を引いた様に真直に下りたものでなければならない。（それいゆ 1956年 40号 159）

○特徴としては，ウエストラインがほんの少し落ちて，ローウエストのシルエットを作っていることです。（婦人朝日 1956年 6月 154）

などの例は，服のかたちについてのべているのだが，これらの例も，いまあげた人間のからだのばあいに準じて考えることができる。そして，これらはあとでのべる型紙のばあいへの橋渡しをするものである。

つぎに人間のからだ以外でも，やはり普通の状態で上または下の方向になるものが基準になっているものがある。

○伸子は検温器を振つて水銀を下してしまつた。（伸子・上 56）

○つばの下った登山帽をかぶり，折鞄を持っていた。（人間の壁・上 52）

もっとも，「伸子」の検温器の例では，正常な状態において水銀のある方が下だとはいえないかもしれない。むしろ，ふつう検温器は水平の状態におくのが自然かとも思われる。にもかかわらず，このばあい「おろす」が使われているのは，検温器の空間的なかたちや，そのおかれる際のようすなどよりも，目盛りが数字の低い方から高い方へつけられていること，温度は「ひくい」「たかい」と表現されること，などによってささえられていると，みるべきかもしれない。とすれば，ここでは「上」「下」という名詞の意味との対応よりも，それらの形容詞の意味との対応・相互関係を問題にする方がよい

であろう。「人間の壁」の登山帽については，かぶっていないときも，かぶっているときも，上下の位置関係は，基本的にきまっている。もしこれが横だおしになっていても，やはり「つばの下った」という表現はつかわれるだろう。

(4) 移動の帰着する方向へのずれ

「おちる」は，ふつうのばあい，上から下への移動を表わし，したがって，帰着点は下にあるのだが，その方向性がうすれて，単に移動の帰着点を示す意味しかもたない，というのに近くなるばあいがある。

○男の体に反抗する女の手が，小野田の火照つた頬に落ちた。（あらくれ 164）

この例では，女の手は，相手の男の頬よりも上から落ちてきたとはかぎらない。真横からでも，ばあいによっては，下の方からでも，そこにつきあたるような移動をすれば，おなじ表現がとられただろう。ただし，この例は孤立したものであって，「手が頬におちる」という慣用句的（？）表現が相手をなぐることをあらわす例は，ほかになかったし，また，手以外のものについて，これに近い状況を表現した例もなかった。たとえば，鉄砲のたまが壁にあたるばあい，それを「おちる」と表現することができれば，この動詞が上下の方向性をうしなった例とみることができるだろうが，そういう例があるかどうかは不明である。つぎにあげる例は，さらに抽象的な事態についての表現だが，「手が頬におちる」と同様の意味で方向性をうしなったものだ。

○四十五歳の重治の白い豊かな頬にはかすかに青黒い影が落ちていた。（落城 14）

○対岸の土手の上までも，長い影を落すやうな斜光が，（多情仏心・前 10）

「影がおちる」「影をおとす」という表現は，これもまた慣用句的ではあるが，「手がおちる」よりは多く使われるものであり，真横から写し出されたばあいであっても，あまり不自然ではない。

(5) ＜手前—先＞へのずれ

平面においた紙の上に書くばあい，「上」「下」の方向が，手前かどうかを基準にしているように，「あがる」などの動詞についても，同様のずれが見られる。

○この点より一・五糎上って直角線を引き（婦人画報 1956年2月 287）

○脇線平行に三・五センチ出し，ウエスト脇で二センチ上げて一センチ入れ，（ドレスメーキング 1956年9月 223）

○ヒップ線で前持出しより更に六センチ出して直角に一センチ下げ，脇でも二・五センチ出して，（ドレスメーキング 1956年2月 167）

これらはみな洋服の型紙についての例であり，それだけ人のからだのばあい，すなわち，ふつうは直立していて，上下の方向があきらかなものへの連想がかんたんに働く。実例はなかったが，ふつうの文章についてでも，たとえば，「一番上から三字下がったところ」のように，手前かどうかを基準にした表現があるはずだ。

(6) 表裏へのずれ

表裏の方向へずれることは，動詞のばあい，あまりみられない。しいていえば，

○はま江の頬には血がさつと上り，眼がうるんで光つた。（冬の宿 159）

の例はそうかもしれない。これは「あがる」とよむのか「のぼる」とよむのか，わからないのだが，血がからだの中の方から表面の方へあがったのだとみれば，上下から表裏へのずれの例になる。しかし，これは，胴の方からのど・顔という方向へ血があがってきたことを表わすともみられ，そうすれば，いまいった例には，あてはまらないことになる。つぎの「雪国」の例は，胴が下，首が上という方向性にもとづくものであろう。

○百合か玉葱みたいな球根を剝いた新しさの皮膚は，首までほんのり血の色が上つてゐて，なによりも清潔だつた。（雪国 71）

＜注1＞ 自他の対応

上下の移動をあらわす動詞では，「あがる／あげる」「おちる／おとす」のように，たいてい自動詞と他動詞とが対応している。しかし，中にはきちんと対応しないものもある。

「のぼる」には，対応する他動詞がない。形式的には「のぼせる」がこれにちかいが，これは主として興奮することをあらわすのであって，「のぼる」には対応しない。ただし，空間的な上昇をあらわす例でなければ，つぎのように，「のぼる」と「のぼせる」とが対応するばあいもある。

○無表情だった顔には自然に微笑が上(のぼ)って来た。（暗夜行路・前 214）

○偶(たま)には愛とか恋とかいふ問題も，口に上(のぼ)らないではありませんでしたが，（こゝろ 219）

○頬に奇妙にうれしげな笑いをのぼせてかえってきた。（真空地帯・上 38）

○その醜穢なること到底筆には上せられぬ。（平凡 22）

このような意味では，また「のぼす」もつかわれる。（「のぼす」はつねに他動詞で，興奮する意味にはつかわれない。）

○妹達の事が話題に上ると共に（或る女・前 68）

○そのことを自分から話題にのぼすのが，（真空地帯・上 72）

なお，「たれる」は自動詞としても他動詞としてもつかわれる。(p. 705)

＜注2＞ 上下の対応

「あがる」や「のぼる」に対立する反対語はなにかという問題は，かなり複雑である。大体，「あがる」と「のぼる」とのちがいが，きわめて微妙で，多少の傾向がみとめられるという程度でしかないことは，「のぼる」の記述のところ (p. 523～526) で示したとおりである。したがって，下降をあらわす動詞も，どれが「あがる」に，どれが「のぼる」に対応する，ということはできない。

まず，「けむりがあがる」のように生産的なものは，事実として下降の現象がないから，「おりる」などでは表現しない。しいていえば，このばあい「あがる」に対立

するのは，「きえる」であろう。

つぎに，日や月が「あがる（のぼる）」に対しては，「おちる」「しずむ」が対応する。

○やがて落ちて行く秋の日が最後の反射を田の面に投げた。（破戒 59）

○日清戦争といふものゝ光も太陽が西に沈む度毎に減じて行つた。（或る女・前 14）

ただし，「おちる」がより低い空にうつることもあらわすのに対し，「しずむ」は，山や地平線下にかくれてしまうときにしか，いわないようだから，本当に「日があがる（のぼる）」に対応するのは「おちる」の方であろう。

以上をのぞいた上昇のばあいの「あがる」「のぼる」に，もっともよく対立するのは，「おりる」のようである。

○河原の砂の上を降り埋めた雪の小山を上つたり下りたりして，（破戒 285）

○山は，のぼつても，すぐまた降りなければならないのだから，（富岳百景 63）

ある条件のもとでは，「くだる」や「さがる」も，「あがる」や「のぼる」の反対語となる。（「気温がくだる」「ねだんがさがる」のように抽象化した例をくわえれば，当然そのような例は多いが，ここでは空間的に移動するものだけについていう。）

○山をくだらずに，反対に登つて行つたと云ふ点が，（多情仏心・前 341）

○吊し上げられてゐる雑夫が，ハツキリ黒く浮び出てみえた。ウインチの先端まで空を上つてゆく。（中略）それから下がつて行つた。（蟹工船 65）

しかし，こまかいニュアンスを無視すれば，今ひいた「くだる」「さがる」が「おりる」でおきかえられるのに対し，「梯子段をおりる」は「くだる」では不適当だし，「さがる」は「山を」にも「梯子段を」にもむすびつかない。つまり，もっとも広く対応するのは「おりる」で，「くだる」「さがる」は部分的に対応するのだということになる。

＜注3＞　上下のふつりあい

ちょっと考えると，上昇の表現と下降の表現とは，きちんと対応してもよさそうだが，実際にはそうはならず，下降の表現のほうが多い。「したたる」「ふる」「たれる」などは，主として液体について，下への移動をあらわしているが，これに対して，液体が上の方に移動することをあらわす単語はない。これは，自然の状態で，下への移動はあっても上への移動がないことからみて，当然といえば当然である。

漢語動詞のばあいにも，「上昇する」に対して，「下降する」「降下する」「落下する」「墜落する」「沈下する」「沈降する」と，下への移動の表現が多い。この1つの理由として考えられることは，重力が下にむかってはたらいているために，下への移動は上昇よりもおおく，また多様であり，このため「墜落する」のような表現を特にもうけるようになったということである。

＜注4＞　複合的表現

上や下への移動の表現が，その他の要素とあわさってできた複合的な表現がかなりある。もっとも多いのは，

とびあがる・よじのぼる・ひきあげる・かけおりる・ずりさがる・ころげおちる・うちおろす・ひきさげる・つきおとす

のような，方法・手段の表現との複合である。

転落する・投下する・撃沈する

などの漢語動詞も同類である。

つぎに，目的地や出発点の表現と合わさった，

昇天する

天くだる・下山する・降壇する

などがある。

このほか，上昇と下降が複合した，

○天使の昇り降りする雲の梯(かけはし)のやうに（或る女・前 227）

○動く度ごとに爪先が上下して，そこに力がはいつて，（田園の憂鬱 93）

などがある。

〔175〕 あおむく——うつぶす<ふす，ねる，ねころぶ，よこたわる

「あおむく」「うつぶす」は，それぞれ上および下を向いて寝ることをあらわす。

○葉子はやうやく眼を覚まして，仰向いたまゝ，煤(すゝ)けた天井に描かれたランプの丸い光輪をぼんやりと眺めてゐた。（或る女・前 33）

○お品は俯伏した儘乳房を含ませた。（土・上 24）

これに対して「ふす」「ねる」「よこたわる」などの動詞は，どちらを向いてねていてもかまわない。もっとも，そのばあい，どちらが多いかという点でのちがいはある。「ふす」は，

○私は地に伏して銃を構へ，慎重に覗つて撃つた。（野火 52）

のように下を向いているばあいが多い。しかし，そうでない例もある。

○（親鸞を助けて寝床に臥(ふ)させる）（出家とその弟子 206）

のばあいには，方向の限定はないが，上を向いているととるのが自然だし，またここから出て

○過労した麻子は急性肋膜炎で病床にふした。（小説倶楽部 1956年4月 27）

のように慣用句化したものは，単に病気になることをあらわす抽象的な表現にすぎず，具体的に，どちらの方向を向いているかは，問題にならない。さらに，

○何とかいふ草花なぞは，すつかり土の上に伏してしまつて，（桑の実 102）

のように，単に立っていたものが横になることをあらわすばあいには，上を向いているか，下を向いているかということは，まったく問題外である。

「ねる」「ねころぶ」は，上を向いていることが多い。

○落葉の床に仰向けに寝て，碧玉よりも澄むだ空を眺めて，（思出の記・上 64）

○彼は，ベンチの上に，仰向きに，寝ころんだ。（自由学校 158）

しかし，つねにそうだとはいえない。

○山肌に寝て敵の追撃を待ち，岩石もろとも敵勢の上におちかかるような必死な防戦もつづけられたが，（落城 41）

○髪を蓬々させたお婆さんが寝転んで煙草を吸っていた。（放浪記 238）

などでは，別段，どちらを向いているか，はっきり指定してあるわけではないが，下を向いていたととるのが自然だろう。また，

○私とたいさんは抱きあって寝たふりをしていた。（放浪記 267）

○寝台の上にねころんで，互にだき合い（真空地帯・上 220）

などでは横を向いて寝ているのである。

「よこたわる」も，方向の面での限定がない。はっきり方向がわかるのは，やはり

○茶の間には嘉門が大の字になつて仰向けに横はつてゐる。（冬の宿 132）

のように，あおむけになっているばあいだが，

○娘は胸をこころもち傾けて，前に横たはつた男を一心に見下してゐた。（雪国 9）

では横を向いているのである。これはすぐあとの部分に「島村の真横ではなく，一つ前の向側の座席だつたから，横寝してゐる男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかつた。」とあることからそういえる。また，つぎの例では，いろいろな姿勢で，いろいろな方向を向いて横たわっているのである。

○思ひ思ひの恰好で横はり，時々立ち上つて無意味にのろのろと動いた。（野火 26）

〔176〕 かぶる＜あびる

これらは，水・ほこりなど，こまかいもの（あるいは，こまかく粒状に分かれうるもの）を，からだにうけることをあらわす。そして「あびる」は特に方向の限定がなく，「かぶる」は，大体上からにかぎられているようである。

○病院のお湯にはひつて頭から陸湯をかぶる癖になつてゐる。（本日休診 100）

つまり人間のばあいについていえば，頭からうけることをあらわす。これは，たとえば「帽子をかぶる」などのいい方につながるものであろう。

「かぶる」	「あびる」
○雨を灰のようにかぶって綿菓子をなめている女，（放浪記 288）	○小糠雨を羽織に浴びながら，（放浪記 281）
○それらの品物がいっぱいほこりをかぶっている。（放浪記 134）	○埃を浴びながら不気味なほど真紅に光つてゐる鮪ずし（冬の宿 189）

これらの例では，大体おなじような事実をいっており，「かぶる」だけでなく，「あびる」も，上から雨やほこりをうけたことを，表わしているとみられる。しかし「あびる」のばあいには，かならずしも，方向性ははっきりしておらず，横からの雨やほこりもあったかもしれない。もっとも「かぶる」でも，横からの雨やほこりを同時にうけていたとしても，さしつかえない。たいせつなことは，主要な方向が上からだということである。もし，上からくるものが全然なく，横や下からだけ雨粒などがきたとすれば，それを「あびる」で表現することはできても，「かぶる」で表現することはむずかしい

であろう。たとえば

○小屋を焼く手伝ばかりしたものは，灰ばかりあびてゐる。（阿部一族 77）

では，上からのも横からのもあっただろうし

○屋内にはさう煙も巻いてゐないし，たつぷり水を浴びた屋根も燃えてゐさうには見えないのに，（雪国 170）

では，さらに下からあびた水があったかもしれない。これらの例で「灰をかぶって」「水をかぶった」のようにいうと，ほとんど同じことではあるが，多少上からという方向に限定されるように思われる。

〔177〕 つむ，つみかさねる＜かさねる／ならべる

これらは，みな，2つ以上のものを1つの場所におくことをあらわす。しかし，その際，おかれるものどうしの方向上の関係はちがっている。

「つむ」はある1つのものの上に，ほかのものをおくことをあらわす。

○併し老人は焚付の上に炭を積むことに熱中してゐるらしく，（波 28）

○最後に死屍の上につんだ雨戸，障子に火をかけて般若経を誦した。（落城 50）

このばあいの＜上＞というのは，地面を基準にしてそれに垂直な方向をいう。つまり「上」のもっとも基本的な意味にかぎられる。「つみかさねる」も方向の点では「つむ」とかわりない。

○蕎麦屋は方々で集めて来た道具の上に，更に今のを積み重ねて，（波 40）

これに対して「かさねる」はやや意味が広い。

○男たちは二十八人残った。そのうち十八人が死屍を天守閣の艮の穴に運び，土を深くかぶせ，その上に城内の雨戸，障子を重ねた。（落城 49～50）

○新婦の紋附や長襦袢が，屏風の蔭に畳みかけたまゝ重ねられてあつたりした。（あらくれ 66）

などは「つむ」といいかえてもいい例であり，やはり，ほかのものの上に，あるものをおくことをあらわす。ところが「かさねる」のばあい，かならずしもこのような方向における「上」に，ものをのせるとはかぎらない。

○イエスの背は血にまみれ，重ねて釘づけられた足から滴つた血は，（野火 79）

○どてらを二枚かさねて着て，茶店の椅子に腰かけて，（富岳百景 71）

これらも，規定としては，「あるものの上にほかのものをのせる」ことだといえる。しかし，その規定での「上」というのは，地面を基準にして，それと垂直な方向を意味するのではない。むしろその意味での上下とは直角の方向，地面と水平に向いた方向だ。つまり，このばあいの「上」というのは，人間が目でみとめやすい，表になっている面の方向にほかならない。おなじ「上」という単語が「床においた紙の上にもう一枚の紙を……」というばあいと「壁に張った紙の上にもう一枚の紙を……」というばあいでちがっているように，「かさねる」もまた基本的な方向だけにかぎらず，「つむ」ではあらわせない領域まで広がっているのである。「野火」や「富岳百景」の例では.

「かさねる」を「つむ」でおきかえることはできない。

一方，「ならべる」も2つ以上のものをおくことだが，このばあいには，あるものの＜上＞におくのではなくて，あるものの＜横＞におくのであり，全体が一目で見渡せるようにおくのである。

○座敷きの上に，バケツ，茶碗，お椀，摺鉢，鍋，釜など，いつぱいに並べてある。（本日休診 89）

は，水平面上におかれた例だし，

○欄間の壁には講中の名を彫り出した木札がずらりと並べて掛けてある。（帰郷 131）

は，垂直面上におかれたことだが，いずれにしても，あるものの＜上＞ではなくて，＜横＞に他のものをおいていく点ではかわりがない。おなじように本を対象にした表現でも，

○壁に積んである沢山の本を見ていると，（放浪記 275）

○机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音が（銀河鉄道の夜 246）

では縦の方向であり

○美術書を並べてある見世窓の硝子越しに，外の道路を眺めた。（帰郷 154）

では，横の方向においていくのである。また，つぎの例では「かさねる」と「ならべる」がおなじ文の中でつかわれていて，そのちがいがはっきりわかる。

○後部の開き戸から，乱暴に担架を引きずり出すのが見えた。重ねたまゝ，倒れた日本兵の間へ持つて行くと，馴れた動作で地上に並べた。（野火 119）

なお，「つむ」には，また，乗りものなどにのせるという意味がある。このばあいには，かならずしも＜1つのものの上に……＞という規定は必要ない。

○罐詰の箱をいっぱい積んでいる自動車を見ると，（放浪記 184）

○トロッコに一杯石炭を積んで（蟹工船 12）

などでは，たくさんのものをのせていて，上にあげてきた「つむ」の例とかわりないようにみえる。これらの例は，「1つのものの上に……」「乗りものに……」のどちらの意味に考えてもむじゅんはない。しかし，

○婆やが涙ぐみながら行李を積んで乗るのを，（桑の実 46）

ではおそらく行李は1つしかのせてないのだろうから，「1つのものの上に……」という規定ではあてはまらない。

○雛で積まれた家鴨はだんだんと大きくなり，（真知子・前 83）

では，たくさんのものがのせられているのだが，縦につみかさねられているわけではない。だから，こういう例は明らかに別の意味とみなさざるをえない。

〔178〕 つもる，つみかさなる＜かさなる／ならぶ

これらの自動詞のばあいにも，他動詞についてのべたのと同じような方向性がみとめられる。まず「つもる」は雪やほこりなど，ひじょうにこまかいものについてしかいわないが，基本的な意味における上下，すなわち地面に垂直な方向に，ものがかさなって

いくことをいう。

○じめじめした霙が降つたり，雪が積つたりしてゐた。（あらくれ 117）

「つみかさなる」は，主体の範囲については「つもる」よりも広いが，その方向性はおなじである。

○地金の真鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて来たり，（機械 11）

「かさなる」は，これに対して，方向という観点からみて範囲が広い。多くのばあいには，「つもる」や「つみかさなる」と同様に，地面に垂直な方向における〈上〉の方へ，ものが置かれていくことをあらわす。

○一枚置いた下にダイヤの女王は重なつてゐた。（帰郷 354）

しかしそれだけではなく，「上」の派生的な意味，すなわち表側，よくみえる側に，ものが置かれていくことをもあらわし，そのときには，基本的な意味における上下から，はなれる。

○そこには大きな杉の林があつて，一面にかさなつた杉の幹のごく少しの隙間から川が見えた。（田園の憂鬱 96）

このスギは，観点をかえていえば，「ならんでいる」ともいえる状態にある。上下にかさなっているのではない。こちらから見たばあい，スギの木のむこう側にまたスギの木があり，さらにそのむこう側に……というような状態になっていて，いちばん手前の方のスギしか見えない，そういう状態にあることを，あらわしたものである。

○前の翅と後の翅との重なつてゐる部分だけは，緑が濃い。（雪国 86）

の例でも，「かさなる」は，かならずしも基本的な意味における＜上＞の方向と関係はない。これはガについていっている文で，多くのばあい，ガは基本的な意味における上下の方向に羽をかさねているのだろうが，つねにそういう姿勢でいるとはかぎらない。現にこの例文に出てくるガは窓にはった金網にはりついているのだから，前の羽と後の羽とは，その窓の面，地面とは垂直な面を基準にしたときに，はじめて＜上下に＞かさなっているといえるのである。

「ならぶ」は，以上にあげた動詞とちがって，あるものの横に一目で見渡せるような状態でおかれていることをいう。

○その部屋には，持主のゐない真新しい箪笥が二棹も駢んでゐて，（あらくれ 120）

この場面では，いわば，視点がたんすを1度に見られるような位置におかれている。しかし，ばあいによっては，そのたんすの一方のかげに，もう一方がかくれるような位置に，視点をおくことも可能であり，その際には，たんすが「かさなっている」といえるだろう。ちょうど，上にあげた「田園の憂鬱」の例文で，スギの幹がかさなっている，といっているように。

3.5.2 左右

純粋に左右の方向を特徴とするものは，

左折する，右折する

くらいしかないであろう。

左傾する，右傾する，右顧左眄する

などは，実際の方向をあらわすよりも，抽象化した意味でつかうのが，ふつうである。

〔179〕 かしげる＜かたむける

「かしげる」は首などをかたむけることをいう。「かたむける」は首にかぎらず，一般にからだの部分やそのほかのものについてもいう。ところで「かしげる」について横にまげることだと規定している辞典がある。（岩波国語辞典・広辞苑第2版など）たしかに実例の大部分は，首を横にまげることである。

○頭を心持ち左にかしげてちつと田川の眼を見やつた。（或る女・前 78）

そして，このような動作は，疑問を示すための習慣的な表現になっている。しかし，つぎのように，これに反する例もある。

○「すると何だね，もうどうしたつて駿は永久僕の子といふことになつてしまふんだね。」

園田は何とも答へなかつた。たゞ重たく首を前にかしげただけだつた。（波 187）

このばあいには，園田は疑問に思ったのではなく，むしろうなずいて，無言で肯定を示したものである。この状況で，「前にかしげた」という表現がとられていることは，一般に「かしげる」が横にかたむけることであるのにむじゅんする。ただし，このような例はほかに見当たらず「かしげる」にとって＜横に＞という方向性が傾向的な特徴にすぎないか，あるいはより本質的なものであるかは，まだ明らかではない。

なお，お茶の水女子大生についての調査では，「かれは首を前にかしげた。」という例文に対し，○—3，△—7，×—11，だった。

「かたむける」については，明らかに前または後に首をかたむけたのだ，ととれる用例はなかった。むしろ，つぎのように，「かしげる」と同じく横にかたむけて疑問を示すことが多い。

○お品の病体に手を掛けると医者は有繋に首を傾けた。（土・上 47）

つぎの例は，前または後にかたむいたのだともとれるし，横にかたむいたのだともとれる。このように両方にとれる例もいくつかあった。

○与吉はそれを聞いて又せがんでおつぎへ飛びついて，被つて居る手拭を引つ張つた。おつぎは

「おお痛えまあ」と顔を蹙めて引かれる儘に首を傾けていつた。（土・上 118）

つぎの例は胸についてのべているが，前に「かたむけた」のだろう。

○娘は胸をこころもち傾けて，前に横たはつた男を一心に見下してゐた。（雪国 9）

いずれにせよ，「かたむける」は，首その他からだの部分にかぎらないのだから，＜横＞という限定は必要ないであろう。

なお，つぎの「かたむく」は明らかに前にかたむいた例と考えられる。

○若者の厚い胸は，社の前にあつて謙虚に傾いた。（潮騒 24）

3.5.3 前後

〔180〕 すすむ，すすめる，でる，だす——しりぞく，さがる，さげる，ひく，ひっこむ，ひっこめる，すさる，しさる

「すすむ」「しりぞく」がそれぞれ前と後への移動として規定できることは，きわめて明白で，問題の余地はないようにみえる。しかし，その「前」と「後」とが，それぞれどのような方向をさすかは，かならずしも単純にはきまらず，したがって「すすむ」などのあらわす事実も，それほど透明ではない。

まず，人間（動物）についていうと，ふつうの状態では，顔のある方が「前」である。つぎの例は，常識的に考えれば，当然顔のむいている方向にすすんだものとおもわれる。

○仲子は父の腕を執り，どんどん人波を分けて進んだ。（仲子・上 160～161）

○後からついてきた監督が，周章てゝ前へ出ると，（蟹工船 79）

○彼は厩当番に蹄鉄の具合がどうかとたずね，「蹄鉄」は「ぜんぶしらべてあります」という答をとると馬を前にだした。（真空地帯・上 151）

しかし，ひじょうに特殊なばあいを考えると，「うしろむきにすすむ」ということも考えられないことはない。つぎのような乗りものについても同様である。

○運転手は突然急速力で車を進めたので，君江はアッと一声。（つゆのあとさき 102）

○風はいくらかなぎ，船は紀州の海岸に添うて進んでいた。（暗夜行路・前 150）

つまり，動物や乗りものについては，その物自体の構造からする前後の認定は，かならずしも「すすむ」などの方向をきめるのに役立たないのである。さらに，

○電車は黄色い車体を悠長に日に照らしながら，少し走つたかと思ふとガタン，またガタン，こうるさく一丁目毎に止りながら進む。（仲子・上 63）

というのは，ニューヨークの市街電車だが，もし日本のと同じ構造だとすれば，車体そのものには前後の区別がないものである。また，

○田の面には，風が自分の姿を，そこに渚のやうな曲線で描き出しながら，ゆるやかに蠕動して進んで居た。（田園の憂鬱 44）

○その視点が，次第に遠く，尾張町の四角（よつかど）の方へ進んで行く時分に，（多情仏心・前 160）

などについては，風や視点それ自身に前後が考えられないことは，いうまでもない。

以上のように，「すすむ」とは前に移動することだと規定するとき，その「前」とは，かならずしも静止した状態で決定された方向ではない。いわば，それがすすんでいくことによって前後が決定するのである。とすれば，「すすむ」を「前への移動」と規定するのは，同義反復であって，むしろ「一定方向への移動」と規定すべきかもしれない。

後への移動についても，似たようなことがいえる。つまり，背中の方向への移動とは，かならずしもいえない。

○木谷はたじたじとして身をひいたが，（真空地帯・上 43）

では，背中の方向への移動だが，

○丑松はそこに置いた羽織を取上げながら，すごすごと退いた。（破戒 81）

では，おそらく顔の方向に，つまり人体を基準にしていえば前にむかって歩いたものとおもわれる。また，つぎのような例では，そのどちらにもとれる。

○弥五兵衛は槍をからりと棄てて，座敷の方へ引かうとした。（阿部一族 72）

○彼は未練らしく二三歩下がって頭の上の大時計を見た。（暗夜行路・前 169）

○古年次兵が後列にひきさがってかくれたがるので（真空地帯・上 130）

からだの構造を基準にしていないとすれば，これらの進行方向が「後方」であるというのは，なにを基準・根拠にしていることになるだろうか。上の引用だけでは短かすぎてはっきりしないかもしれないが，これらの例にあっては，すべて主人公と向かいあっている相手があること，移動はその相手から遠ざかる方向におこっていること，に注意したい。つまり，これらは，移動の際のからだの前後ではなくて，移動する以前の，相手と向かいあっているときのからだの前後を基準にしている，と考えれば，その意味での「後方への移動」といってよいわけである。なお，相手というのは，人間にはかぎられない。絵を見ていてさがった，というときは絵が相手である。

こうして，単純には「すすむ」などの反対といってもよい「さがる」「しりぞく」なども，こまかくみると，それほどかんたんに逆方向とはいえないわけである。「風がすすむ」のような例があるのに対して，「風がしりぞく」「風がさがる」などの例がないことも，「しりぞく」の類が相手という人間的な条件によって規定されていると考えるならば説明がつくであろう。

なお，この点で「すさる（しさる）」は特徴的である。すなわち，「しりぞく」「さがる」などが，移動する主体のからだの向きについて問題にしないのに対し，「すさる(しさる)」は，相手の方を向いたままで「さがる」動作にかぎられる，という特徴をもっている。

○そこに運んで来た手焙を一つづつ各自のそばに置いてから，お勢は座を退つて，あらためて丁寧に挨拶をした。（多情仏心・前 47）

〔181〕 ふみこむ

「ふみこむ」は，ふつう，あるものの中に足をふみいれること，または建てものの中にはいることをあらわす。どちらにしても，それは＜外から中へ＞という方向をもった移動である。ところが，これとちがって，前の方への移動をあらわすばあいがある。

○「しまつた。」と，三郎兵衛が，太刀を引かうとする隙に，市九郎は踏み込んで，主人の脇腹を思ふ様，横に薙いだのであつた。（恩讐の彼方に 60）

○と，加治馬は見て取ったので，これまで斬り結んでいた敵に，一際大きく踏みこんで，ビュー！と斬りこんだ。（オール読物 1956年10月 280）

実例はこの2例だけで，どちらも，刀をもって切りあっている場面だ。そのほかにも

前へむかっての移動をあらわすばあいに「ふみこむ」が使えるかどうかは，明らかでない。しかし，つぎにあげる，抽象的なことをあらわす例は，おそらく，このような，前への移動を背景にしてなりたった用法だとおもわれるが，敵を目の前にしている，というような限定されたニュアンスはない。単に一般的な前進をあらわしているだけである。もっとも，このばあい，ふつうならそのへんでとまるところなのに，あえて進んだというようなニュアンスはみとめることができる。その点では敵と戦っている場面のイメージが無関係なわけではない。

○然し叔父に欺むかれた記憶のまだ新らしい私は，もう一歩踏み込んだ疑ひを挟さまずには居られませんでした。（こゝろ 182）

この意味の「ふみこむ」は，ほとんどの辞典でおとしているようである。わずかに新潮国語辞典が「力を入れて足を前へ踏み出す。」という規定をのせているだけである。

＜注1＞ 「ふみこむ」は，自・他を分けている動詞では，ふつう自動詞とされている。たしかに，「他人の家にふみこむ」とか，上にあげた「もう一歩前へふみこむ」という例では自動詞である。しかし，いちばんもとになる「泥にふみこむ」のようなばあいについていえば，実例ではむしろ他動詞の方が多かった。

○すると彼等は真直に波の中に足を踏み込んだ。（こころ 8）

のような他動詞としての用例が，4，5例あるのに対し，

○取り散らかされて足の踏みこむ場所もないほどであつた。（本日休診 87）

のような自動詞としての用例はこれ1例だけだった。なおこのように自・他ともにあるので，「ふみこむ」が連体修飾語として使われた，

○ひよいと踏みこんだ足をそのまゝに（多情仏心・前 311）

のようなばあいには，どちらの用例であるか明らかでない。

〔182〕 かがめる＜まげる

「かがめる」は，からだをおりまげる動作にいい，「まげる」は，からだについても，その他のもの一般についてもいうので，「まげる」の方が，範囲が広い。しかし，からだについていうばあいにも，「かがめる」にはまだ限定がありそうである。それは「かがめる」は前向きにおりまげるのであって，「まげる」はそのような方向の限定がない，という点だ。「かがめる」は，

○勘次は草刈籠を背負うて前屈になつた身体を幾度か屈めていつた。（土・上 110）

のように，からだを前におって低くするばあいに使う。これに対し「まげる」は，

○行介は少し首を曲げて横を見た。（波 247）

○週番士官はつかつかと近よってきて木谷の体を手荒く両手で右の方にまげたが，（真空地帯・上 87～88）

のように，前以外の方向にまげるばあいにも使う。なお「真空地帯」の例は，他人のからだをまげる動作であって，「かがめる」は自分のからだにかぎられるから，このよう

な例には使えない。

ただし「かがめる」にとって，より本質的なことは，前の方に「まげる」ということよりも，そのことによって身を低くするという点にある。したがって，からだ全体としては，たおれていなくても，つまり方向性がなくても，ひざをおることによって全身の位置が低くなれば，「身をかがめた」ことになるであろう。つまり，「かがめる」にとって，方向という特徴は，つねにあるわけではない。これに対して，「まげる」のばあいには，それは，つねにつきまとっている特徴である。ひざを「まげた」だけで，からだ全体としては垂直の方向性をたもっているとすれば，それは「からだをかがめた」ことではあっても，「からだをまげた」ことではない。どちらかの方向に傾けなければ「からだをまげた」ことにはならないだろう。このちがいは，対応する自動詞「かがむ」と「まがる」とのあいだでは，さらにはっきりする。「かがめる」は一応「まげる」におきかえられるけれども，「かがむ」は「まがる」におきかえられないばあいが多い。なお，「おる」「おりまげる」についても，「まげる」と同様かと思われるが，この方は適当な例がなかった。

〔183〕 そる＜まがる

「そる」は，からだ全体の状態についていうとき，うしろの方にまがることをいう。

○背を後にそらせた馬上の姿勢には気取りがあった。（真空地帯・上 151）

からだの部分については，つぎのような例がある。

○女は，彩つた唇を反らせて，笑顔を向けた。（帰郷 158）

○強い瞳と，ツンと反った鼻が，眼に浮ぶ。（自由学校 190）

これらのばあいには，「うしろの方へまがる」とはいえない。しかし，やはりその変形の方向については，ある限定があり，「まがる」とはちがう。すなわち，「くちびるをそらせる」はくちびるの内側を出すような形で，うらがえすようにすることであり，「くちびるをまげる」というと，くちびるの片方のはしが下にさがった状態，口がゆがんだ状態にすることをいう。また「そった鼻」は真横から見てわかる状態であり，「まがった鼻」は，前から見てわかる状態である。「からだをそらせる」は，からだを「うしろへまげる」ということもできるが，「くちびるをそらせる」「そった鼻」などでは，「まげる」「まがる」にいいかえることはできない。したがって，単純に「まがる」は方向の点において「そる」の上位概念だとはいえない。からだ・くちびる・鼻などについて，「そった」具体的なようすはちがっているが，「そる」がすべて横から見たばあいにみとめることのできる変化で，前後の方向から見たのではまがっていない，ということは共通である。

「まがる」には，このような方向の面での限定がない。

○ふと，この腰の全く曲つて居る老婆を照すと，（田園の憂鬱 54）

のばあいには，もちろん前にまがっている状態，すなわち「そる」とは逆方向への屈折だろうが，

○信仰の強さで足の曲った人が歩けるようになったことだとか，（放浪記 70）

のばあいには，前後左右どちらへまがった状態と考えてもさしつかえない。

なお，以上にあげたのは，からだ全体，またはからだの部分についての例で，「そる」については，それ以外は実例がなかった。しかし，たとえば，「板がそる」とか「棒がそる」とかいういい方もありうるはずで，その際には，からだの部分とは多少ちがった方向性が問題になるかもしれない。つまり前後とか左右とかいう方向が人間のからだのばあいほどは意味をもたなくなってくるだろう。しかし，やはり「板がそる」などというとき，それは，板を横の方から見たときにみとめられる方向へまがることであり，からだの方向性との共通点は依然としてのこっているのである。

3.5.4 内外

〔184〕 はいる，いれる——でる，だす
つぐ——こぼす
のる——おりる
もぐる，こもる，つかる

内と外といっても，平面上のある範囲を基準にすることもあれば，立体的なものの内外のこともある。「つぐ・こぼす」は，液体をいれるうつわについていい，「のる・おりる」は乗りものについていうので，立体のばあいだけである。「(穴に) もぐる」「(へやに) こもる」「(水に) つかる」なども，立体的なものにかぎられる。それに対し，「はいる・でる」の類は，平面でも立体でもよい。

〈平 面〉

○そこは蔀倉の横の畑地で，島村達といっしよに駈けつけた村人は大方そこにはいつたのだつた。（雪国 170）

○金米糖は古い皿に入れて歓待（もてな）した。（破戒 167～168）

○おくみは小さい笊を持つて畠を出た。（桑の実 156）

○子供達は門外へ一足も出されぬので，（阿部一族 63）

〈立 体〉

○そして死んだ彼の懐ろに，小判の入つた重い財布があつた。（あらくれ 9）

○手紙を巻き収めて，再び封の中へ入れました。（こゝろ 269）

○ぐずぐずしているので湯槽（ゆぶね）を出られなかったと（暗夜行路・前 126）

○黴臭くなつた古い冬服を行李の中から出して着た。（こゝろ 86）

「皿」を平面というのは，いささか苦しいが，ほかにもっと適当な例が見あたらなかった。立体に出入することは，同時に平面に出入することになるので，この2つは，わけにくいことが多い。「へやから出る」なども，どちらともいえそうだ。上に，平面と立体と2つのばあいがあるといったのは，2つの意味があるということではなく，どちらでもよいということである。

なお，「のる」（「おりる」）を内外の方向性によって区別されるグループに入れたのは，実は正確ではない。「電車にのる」「自動車にのる」などは，その車体の外から中

への移動だが，つぎのように，むしろ，乗りものの上に移動することをあらわす例がある。

○どっちの馬にのるかと言われても，返事のしようがなかったが，（真空地帯・上 150）

○お島は，小野田の勧めで，自転車に乗る練習をはじめてゐた。（あらくれ 231）

○田圃で村の子供がスキイに乗つてゐた。（雪国 47）

そしてこれらを，「電車にのる」などと別の意味とみることはできないだろうから，一般に「乗りものの中への移動」とは規定できず，「中または上」とせざるをえない。

「のる」には，これと別に，乗りものにかぎらず，一般に，ものの上に移動することをあらわす用法がある。

○黒く逞しい秋田犬がそこの踏石に乗つて，長いこと湯を舐めてゐた。（雪国 47）

乗りもののばあいでも，それ以外でも，ものの上に移動することは，かならずしも上昇することではない。つぎの例を参照。

○酔払つた駆逐艦の御大はバネ仕掛の人形のやうなギクシヤクした足取りで待たしてあるランチに乗るために，タラツプを下りて行つた。（蟹工船 18）

以上のべたことは，「おりる」についても同様である。

〔185〕 **もりあがる，もりあげる——くぼむ，へこむ**

これらは，ものの表面の状態についていう。「もりあがる」「もりあげる」は，そのものの外にいて，そのものの表面をながめたばあいに，外がわの方につき出ている状態であり，「くぼむ」「へこむ」はその逆である。「表」に対立するものであっても，「裏」の方につき出ているとはいえない。ここで問題にしているのは，平面的なものの表と裏の関係ではなく，立体的なものの外側と内部との関係である。

○二つの間に波の大きなうねりがもり上つてローリングした。（蟹工船 38）

のように地面や海面が「もりあがって」いるばあいには，基本的な方向における上・下の関係でとらえることもできる。しかし，

○甲も指も盛りあがるように肥えてふくれている。（むらぎも 34）

○胸そのものが盛りあがってて，そこへもう一つ盛りあがったというのが理想的なんだ。（むらぎも 38）

のように，からだについていったばあいには，その意味での上下関係とはまったく無縁で，からだの外側へつき出る状態が「もりあがる」ことである。人間のからだ以外のものについては，

○七宝配りの箔が盛り上つてゐる帯を掬ひ上げながら，（河明り 285）

という例があった。これも上下ではなくて外〜内の関係である。

「もりあげる」については，

○砂を両手で盛り上げて撫でていた行一は，（くれない 15）

という，上下関係と一致する例しかなかったが，これも，たとえば天井や壁に浮きぼりをつくる場面などを考えれば，当然，上下関係にはかぎられない。

「くぼむ」「へこむ」は，「もりあがる」と逆の方向をあらわす。上下の方向でないことは，「もりあがる」より一そうはっきりしている。

○被害者は先刻から雨垂の水で土の窪んだあたりを見て居たが（土・上 137）

では上下と一致するが

○顔は色蒼ざめ双の眼(まなこ)が窪んで，肉は落ち骨露はれ，（恩讐の彼方に 78）

○罐のふたと底がへこんでいて，（家の光 1956年1月付録 暮らしの経済宝典 270）

などでは，これとずれている。かんのふたと底がへこむというばあい，ともに内側の方に出ばっているので，ふたと底とではちょうど逆方向につき出ていることになる。ただし「くぼむ」「へこむ」については，＜そと—うち＞といいきれないものがあり，「もりあがる」と完全には対応しない。

○八枚の雨戸をしまっておく場所が，いきなり廊下から凹んでついているので，そこへ迷いこんでしまうのだった。（罠がらせの年齢 286）

○街道から少し凹んだ畑の奥に建つてゐるのだが，（雪国 118）

これらの例は「くぼむ」「へこむ」のどちらによむのか，はっきりしないが，基準になっているのは，1つの平面というよりは1本の線である。廊下や街道が外（表）の面とよばれるべき理由はない。したがってそこからずれた位置にあることを「くぼむ」または「へこむ」と表現していることは，上にのべたことだけからは説明しきれない。

〔186〕 でばる，でっぱる，でる，つきでる，つきだす——ひっこむ，ひっこめる

これらの動詞が，＜そと—うち＞の方向であって，上下でないことは，「もりあがる」などのばあいよりもあきらかだ。

○上向(うはむ)になつた大きな鼻頭(はながしら)と，出張つた頬骨とが，（あらくれ 145）

○その旅館の横を切って，軒の出っぱった煤けた街が見えている。（放浪記 256）

○前額部に角のやうな瘤が出てゐるのを私は認めた。（野火 41）

○頬骨のつき出た頬のぐっと引きこんだあの所長が（真空地帯・上 64）

○斜めにつき出した甍(いらか)の先に，重たくうす暗い雲をささえている。（羅生門 8）

○寝床に入つてから，膝を立てゝ，お互に脛を指で押してゐた。何度も繰りかへして，その度に引つこんだとか，引つこまないとか，（蟹工船 32）

○腹を引込めることは，人工では無理なことだと（波 210）

以上の例は，みなある物体の内側と外側への方向を基準にしている。しかし，つぎの例では，物体の表面ではなくて，平面上の1つの線（岸の線）が基準になって「でばる」などがつかわれている。

○海へ出ばった一本立ちの大きな石の上に，（暗夜行路・前 171）

○河原のいちばん下流の方へ，洲のやうになつて出たところに（銀河鉄道の夜 261）

○池に突き出てゐる小さく屋根のある廊下に佇(たたず)んだまゝ，（帰郷 264）

○海に突き出して一つの城廓のやうに館が右手(めて)に見える。（青銅の基督 21）

つぎにあげるのも，これと同じような状況だが，「暗夜行路」の例が，かたちを問題

にしていたのに対し，このばあいには，位置を問題にしている。

○松村家の山は，或は海に沿ひ，或は陸に引込むで，北の方五里ばかりが間に点々として居た。（思出の記・上 77）

3.5.5　東西南北

この特徴をもつものは，「東上」「西下」「東漸」のように，漢語で前の要素が方向をあらわすという構成をもったものにかぎられる。

○これ以上北航しても，川崎船を発見する当がなかつた。（蟹工船 41）

○甲板で仕事をしてゐると，よく水平線を横切つて，駆逐艦が南下して行つた。（蟹工船 69）

ただし，これは方言とみるべきかもしれないが，京都で北にいくことを「あがる」，南にいくことを「さがる」という事実がある。元来は御所のあるところを基準にしたものらしく，そのかぎりでは p. 286 の「都へのぼる」などと同じだったものだが，現在はそういう観点ではなくて，単なる方向が基準になっているようである。

3.5.6　ある基準点に対する方向

〔187〕　むかう――（さる，それる，転ずる）

「むかう」はある一定の方向への移動をあらわす。ふつうのばあい，

○二人は連れ立って子供たちの避暑先へ向った。（くれない 141）

のように，その方向は目的地をあらわすことによって示される。しかし，ときには，

○騎都尉・李陵は歩卒五千を率ゐ，辺塞遮虜鄣を発して北へ向つた。（李陵 152）

のように，方向をあらわすことばだけで，目的地の示されていないこともある。

「むかう」に対する反対語，すなわちある特定の地点からはなれる方向への移動，ある特定の方向と反する方向への移動，というような現象をあらわす動詞は，みあたらないようだ。しいていえば「さる」がそれに近いが，「さる」のばあいには，「いく」と同じように，話し手や，話題の中心になる人物などから遠くへうごく方向という限定がある。すなわち「むこうへさる」とはいえても，「こちらへさる」とはいえない。「むかう」にはそういう限定がなく，話し手や，中心人物の方向への移動であっても，「むかう」といえる。ただし，それをしめすのに適当な例はなかった。しいていえば

○石巻にあった土佐，肥後，津和野の藩兵七百が，三春藩の兵を先道に北上川沿いに柳津に向ったという報せがついたのは，（落城 9）

ようなのが，それにあたるだろう。また，

○まつすぐ暗い廊下をこちらに向つて歩いてきた。（伸子・上 168）

のように「むかって……くる」のかたちのばあいには，「こちらに」と結びついた例がみられる。

「むかう」に対立するものとしては，また別の意味で，「それる」が考えられる。「さる」が方向の点で「むかう」と逆になっているのに対し，「それる」は特定の方向

からかわることをあらわす。たとえば,

○煙が余所へ逸れれば箕で煽つて家の内へ向はせた。(土・上 186)

では「それる」が「むかう」と対立してつかわれている。

しかし「それる」はつねに「むかう」と反対だとはいえない。「むかう」という動詞は,まだ目的地についていないばあいにつかわれる。「かれはアメリカへむかっている」というのは,アメリカへの道の途中にあることをあらわす。ところが,「それる」のばあいには,かならずしも途中だとはいえない。途中で進路をかえたことも「それる」ことだが,すでに距離的にいえば目的地に到達しているくらいの位置にありながら,目的地からずれたこと,すなわち「むかう」に対しての反対語であるよりも「つく」「到着する」「あたる」などに対する反対の事実をあらわすばあいがある。

○懐中してゐた鏡に中つて穂先がそれた。(阿部一族 76)

○屋根を外れたボンプの水先が揺れて,水煙となつて薄白いのも,(雪国 170)

これらは「むかう」というよりは「あたる」に対立する例である。

さらに「それる」には、ある場所にあったものがその場所をどく,というばあいの例もみられる。ふつう「それる」というのは移動中のものがその進路をかえることであるが,つぎにあげる例ではそうはいえない。

○雨はずつと小降りになつた。嵐がわきに逸れたらしい。(波 265)

○水上が突然薄暗くなるかと見ると,雲の影が流と共に,瞬く間に走て来て自分達の上まで来て,ふと止まつて,急に横にそれて仕了ふことがある。(武蔵野 24)

これらでも,長い目でみれば,あらしや雲が移動中であることにかわりない。その点で「それる」の基本的な用法と共通しているのだが,ただ,ふつう「あらしがそれた」「雲がそれた」といえば,それは,まだあらしや雲がある地点までこないうちにほかへむかった,ということをあらわす。ところが,上にあげた例文では,そうでなくて,あらしや雲は,すでに主人公のいる位置にきてしまったのである。そのあとでそれが別のところへ移動したことを「それる」であらわしている。こうなると,「むかう」とのちがいは,ますます大きくなる。

「それる」と同じように方向をかえるという意味で「むかう」に対立するものとしては,なお「転ずる」もある。

○されば路といふ路,右にめぐり左に転じ,林を貫き,野を横ぎり,(武蔵野 18)

〔188〕 近づく,近づける,近よる,近よせる——遠のく,遠のける,遠ざかる,遠ざけるよる,よせる,せまる
くっつく,くっつける——はなれる,はなす,へだたる,へだてる
あつまる——ちる

接近・集合する目標が,場所であるか、ものであるか,人であるかによって,動詞のとりうる目的語の範囲はちがってくる。以下の表で,◎は実例のあったところ,?はあるかどうかうたがわしいもの,×は多分ないとおもわれるものである。「よせる」等は

実例が少ないので略した。

	場所	もの	人
近づく・近よる	◎	◎	◎
よる	◎	◎	?
あつまる	◎	◎	×

「近づく」「近よる」

これらは，目標が場所でも，ものでも，人でもよい。

（場所）

○次第に高原へ近(ちかづ)いたことを感ぜさせる。（破戒 102）

○衛兵司令の方をちらとみて，そちらへ近よって行った。（真空地帯・上 9）

（もの）

○ベツドに近づきながら，節子の寝顔を屈み込むやうに（風立ちぬ 125）

○大衝立(ついたて)で通り路から遮られた一つの机に近よつた。（仲子・上 73）

（人）

○私は彼女に近づいて，揶揄ふやうに耳打ちした。（風立ちぬ 110）

○恭吾は初めて達三に近寄つて声を掛けた。（帰郷 317）

「よる」

これは，実例として，場所・もの・人のどのばあいもあった。ただし，場所については、

○すると先生がいきなり道の端へ寄つて行つた。（こゝろ 81）

のように，接近するばあいもあるが，むしろ

○彼女は宿へ呼ばれさへすれば，島村の部屋へ寄らぬことはなかつた。（雪国 125）

のように「たちよる，途中でちょっとおとずれる」ということを表わすことがおおい。

ものに「よる」例としては，

○皆は夕飯が終つて，「糞壺」の真中に一つ取りつけてある，割目が地図のやうに入つてゐるガタガタのストーヴに寄つてゐた。（蟹工船 54）

○今のボーイが，テーブルに寄ってきた。（自由学校 240）

○電燈がつくと灯に寄る羽虫を狙つて（帰郷 64）

などがあり，人に「よる」例としては，

○土塀横の空地から黒いものがうごめいて安吉へ寄ってきた。（むらぎも 217）

がある。ただし，これら，もの・人について「よる」をつかった例はすくなく，人によっては，不安定な感じをもつかもしれない。お茶の水女子大生についての調査では「彼女はいそいで一郎へ寄ってきた。」という例文に対し，○—1，△—5，×—15だった。

「あつまる」

これも，場所のばあいと，もののばあいとがある。

（場所）

○ベルが鳴つた。群集はぞろぞろと改札口に集つた。（蒲団 81）

（もの）

○それからみんなでテイブルに集つて，（桑の実 152）

○水に臨んだ飲食店では，人が蓄音器に集つてゐたり，（あらくれ 210）

ただし，ものに「あつまる」類は，やや文章語的な，あるいは古いニュアンスがあるかもしれない。そして，人に対して「あつまる」をもちいる例は，おそらくないであろう。このことは，人がものよりも一層非空間的であることを示している。

これらの動詞が人を表わす名詞と結びつくときは，空間を表わす形式名詞「そば」「ところ」「方」などが名詞に付属して，直接的にはこれらの形式名詞と動詞との結合という形をとることが多い。「姉に寄っていった」「夫妻に多数の人が集まった」とは言いにくいが，つぎのような表現は可能である。

○お島はいきなり姉の側へ寄つていつた。（あらくれ 97）

○田川夫妻の周囲には一番多数の人が集まつた。（或る女・前 138）

ものを表わす名詞のばあいにも，同様に形式名詞がつく。このばあいには，形式名詞のつかない形とついた形とが対立することになる。すなわち，さきにあげた「ストーヴに寄つてゐた」に対して

○彼は黙ってストーブのところに寄って行った。（真空地帯・上 22）

があり，「テイブルに集つて」「蓄音器に集つてゐたり」に対して

○隅の長椅子と長机のところに集っている兵隊のなかに（真空地帯・上 42）

○銀之助，文平を始め，男女の教員は一同風琴の側に集つた。（破戒 73）

がある。これら2様の形式は，もちろん意味的にまったく同じとはいえない。「ストーブによる（あつまる）」が，ストーブそのもののすぐそばに，ストーブにあたることを目的として移動することであるのに対し，「ストーブのところ（そば）による（あつまる）」は，大体の見当でストーブの近くに，かならずしもストーブにあたる目的でなくくることが多いであろう。しかし，このニュアンスの差はわずかであって，実際には同じような事実の表現にもちいられることが多いとおもわれる。

以上のような，対象の空間性によって動詞のとる目的語に制限のあることは，このグループにかぎらず，移動の動詞に広くみられる現象である。この点については，奥田論文（26）（『教育国語』12，p. 34）を参照。「いく」「くる」の類や「かえる」「もどる」の類でも，場所の名詞とむすびついて，

かれは東京にきた（もどった）。

とはいえるが，人の名詞といっしょに

かれは私にきた（もどった）。

とはいえない。(比ゆ的なばあいは空間の移動でないから別である。)つぎのような実例もあることはあるが，一般的な用法からは，ずれているといえるだろう。

○しかし仲田兄妹は暇を見ては大宮の家に来た。大宮に来るのか，野島にくるのか，武子にくるのかわからなかつた。(友情 73)

ある点から遠のく方向での移動についても，同様の問題があるわけだが，この方は資料が十分でないので，単語ごとのちがいについてはのべられない。ただ，「はなれる」については，以下のように，場所，もの，人のそれぞれについての実例が見つかった。ただし，どれも，距離が遠くなるというより，接触をうしなうという点に重点がある。

(場所)

○この温泉場から離れるはずみをつけるつもりもあつた。(雪国 154)

(もの)

○銀之助も火鉢を離れて立上つた。(破戒 85)

(人)

○人目もあると思つて，島村は駒子からそつと離れると，(雪国 169)

〔189〕 むける——そむける

「むける」と「そむける」とは，おなじような文脈で反対語としてつかわれる。「むける」は「〜に」，「そむける」は「〜から」というかたちと結びつく。

「むける」	「そむける」
○顔だけそちらに向けて、何も言わなかった。(真空地帯・上 11)	○青年は，松木ボリスから絶えず顔を反けてゐた。(本日休診 81)
○桟橋の方に眼を向けてゐた。(或る女・前 87)	○揺れて居る蠟燭の光を避けて，目をそむけた。(田園の憂鬱 105)

ただし，「そむける」の実例は、上にあげた「顔をそむける」「目をそむける」の類しかない。「顔」と「目」以外の名詞で「そむける」と結びついているのは，つぎにあげるように，みな「顔」と同じようなことばである。

○けれども彼は殊更面(おもて)を反(そむ)けずに，ぢつと眼を据ゑて(波 334)

○信之は，心弱くもそむけた頬を真(ま)ッ赤にして，(多情仏心・前 105)

○泪(なみだ)のにじんだ目をとじて，まぶしい燈火に私は額をそむけた。(放浪記 122)

「むける」の方は範囲がずっと広い。すなわち「顔」と「目」以外にも

○くるりと背を向けて，手の甲で洟水(はなみづ)を啜りあげると，(多情仏心・前 14)

○果は松の方へ膝を向けて了つて，松ばかりを相手に話をする。(平凡 86)

のように，からだのほかの部分と結びついてつかわれた例がある。このほか，てのひら・ゆび・耳・しり・くちばし・つのなどを「むけた」例がある。また，からだの部分以外でも，

○木谷はまがり角のところで，馬を外側に向けて(真空地帯・上 152)

○上つた壺を，竜二は海のはうへ向けずに，船の中へ向けて逆さにした。(潮騒 16)

○潤葉樹(くわつえふじゅ)の類は，何時の間にか，葉を払ひ落した枝先を針のやうに鋭く空に向けてゐた。（或る女・前 223）

のように，いろんな名詞と結びついてつかわれている。

「足をむける」「水をむける」という慣用句も，それぞれ，からだの部分とそれ以外とに「むける」が結びついた例である。

○それぎり話を切り上げて，小石川の宿の方に足を向けました。（こゝろ 253）

○此梅暦に拠ると，斯ういふ場合に男の言ふべき文句がある。何でも貴嬢(あなた)は浦山敷思(うらやましく)はないかとか，何とか，ヒヨイと軽く戯談を言つて水を向けるのだ。（平凡 82～83）

＜注＞「むける」は原則として他動詞だが，むしろ自動詞としてつかわれたといえるような例がある。これは「～に（へ）むけ（て）」というかたちで後置詞的につかわれるばあいである。これまでの辞典にはこの用法が登録されていないようなので，つぎに例をあげる。これにはまず方向をあらわすばあいがある。

○張掖に戻つて部下の兵を勒すると直ぐ北へ向けて進発した。（李陵 154）

○彼は一巻の草稿をふところにしてロンドンに向け出発した。（貧乏物語 98）

○午の刻にはライフル砲が天守にむけて据えられた。（落城 44）

つぎに，空間的な方向から抽象化して，相手をあらわすばあいがある。

○恭吾は驚きもしなかつたし，左衛子に向けて，くやみも云はなかつた。（帰郷 354）

○この男，女に向けて挨拶ぐらゐは心得てると，（河明り 258）

実例にあるかぎりでは，相手は，上にみるように，ほとんどすべて言語活動の相手だった。ただし，つぎの例はそうではないが，このばあい，執達吏は移動するのだから，言語活動の相手の例ほどは抽象的でない。

○私にむけて執達吏を差向けるというのであった。（ものの見方について 148）

また，非空間的な方向，つまり変化の目標をあらわすように抽象化した例もある。

○思想が発達するというが，それは何に向けての進歩であろうか。（哲学以前 21）

〔190〕 むく，むかう，面する――（そむく）

これらの動詞は静止状態にあるものの方向をあらわす。しかし，その方向性の度合いには，いろんな段階がある。方向がきまるためには，そのもの自身に，前後・左右，あるいはすくなくとも前（正面）という方向性がそなわっていなければならないはずだ。それがうすれてしまって，最後には，単に外界のあるものと接触していることをあらわすにすぎず，方向という側面を完全にうしなった用法までみられる。以下，方向性のはっきりしているばあいから，それが捨象されて単なる位置の表現に近づくばあいまで，順にみていくことにする。

正面という観点がいちばんはっきりしているものは，もちろん人間のからだについてである。

○思慮深い貴女のやうな物腰で女中の方に向いて云つた。（或る女・前 24）
○はいって正面の演台に向って不動の姿勢を取っていた。（真空地帯・上 64）
○馬に面してゐんだ月下の美女の姿を（高野聖 53）

これらの例では，主人公である葉子・木谷・美女がその顔の方向を女中・演台・馬などに向けることをあらわしている。このように，主体が人間であるばあいの例は，「むく」「むかう」には多いが，「面する」では，この明治時代の作品にみられる1例があるだけだった。あとにのべるように，「むく」「むかう」がかなり方向性をたもっており，具体的であるのに対し，「面する」は，すくなくともこの方向という観点については抽象的であって，単なる接触に近づく。そのようなちがいが，もっとも方向性の明らかである人体については、ほとんど用例がない，というかたちで，ひびいているのであろう。

以上にあげた例では主体の外にあるもの，すなわち女中・演台などというものとの関係において方向が決定された。しかし，つねにそのように具体的なものとの関係だとはかぎらない。つぎにあげる例では，物体ではなくて，方向・方角それ自身が基準になっている。

○そして彼は鋭く裏の戸口を指すと，又後ろに向いて捕手の方に一歩近づいた。（青銅の基督 95）
○北海の滸に到つて此の事を告げた時，蘇武は南に向つて号哭した。（李陵 197）

「青銅の基督」の例では，＜うしろ＞という方向が基準である。＜うしろ＞とは，主体がそれ以前に向いていた方向と逆ということであって，外界とは関係なしに，主体自身のもっている方向性との関係で決定されたものだ。「李陵」の例では，＜南＞という方角が基準になっている。これも特定の物体とは無関係だが，さらに主体自身の姿勢とも関係がなく，もっと大きな状況によって決定される方向である。

つぎに，人間のからだではないが，構造上，正面・おもてが決定されているものがある。

○与吉は鼠麹草の花を水へ投げた。花が上流に向いて落ちると，ぐるりと下流へ押し向けられてずんずんと運ばれて行く。（土・上 85～86）
○窓にむかつてゐる三脚架の上の望遠鏡などが照らし出された。（潮騒 160）

花は，柄のついている方が下で，その反対側が上である。したがって，もし柄のついている方が上流にあるような状態で落ちれば，これは上の例文とは逆に「下流に向いて落ちた」と表現される状態である。望遠鏡も人間の目の接する方がうしろであって，そのはしが窓の方にあるとすれば，「窓にむかっている」望遠鏡とはいえない。

つぎにあげるように，家についていうばあいにも，やはり，正門・玄関のある方が正面であり，北西にむかっている，というのは，その正面が北西の側にあることをあらわす。

○いくつもの寺が，思ひ思ひの方向に向きながら不規則に立つてゐたので，（冬の宿 179）

○一つは島の頂きちかく，北西にむかつて建てられた八代神社である。（潮騒 5）

つぎにあげる例も，やはり，構造上ある部分を一定の側におけば，その方向にむいたことになるようなものの例だ。

○廊下に向いた机で勉強をしていた十五，六のお下げの娘が，（人間の壁・上 108）

○稲の穂は北が吹けば南へ向いたり，南が吹けば北へ向いたりして其の重相な首を止まず動かしてはさらさらと寂しく笑ひはじめた。（土・上 134）

机のばあい，廊下にむいているというのは，人間がすわると廊下の方をむくような，そういう状態でおかれていることである。廊下に近い場所におかれていても，その逆の方向におかれていれば「廊下にむいた机」とはいえない。稲の穂のばあい，表・裏とか正面とかいう概念はないが，穂のいちばん先端がある方向が，いわば正面にあたる。

つぎに，ある平面自身が主体として表現されるばあいがある。このばあいにはどちらが正面であるかという点は問題にならない。

○牡丹は，南に向いた斜面に植ゑてある。（帰郷 209）

○霧島家のある斜面は二つの丘の間に，西北に向つてひらけてゐたので（冬の宿 99）

○南に面した断崖が，群棲する鵜の糞で，真白に染つてゐる。（潮騒 15）

つぎに，より大きなものの部分が主体として表現されることがある。このばあいには，その部分自身についての正面がどちらかというようなことが基準になるのではない。その部分が全体のなかでしめる位置，すなわち，その部分が問題の方向の側にある，ということがたいせつなのだ。たとえば

○眼をさますと，海に向いた窓が，あかあかと夕日に照らされてゐた。（野火 83）

○窓はやはり往来へ向って，明子の今までいた室と並んでいる。（くれない 38）

○隣家の土蔵の壁に面したゐる窓は遅く白んだ。（潮騒 59）

などの例における「窓」のばあいもそうみられる。窓は，まだしも構造上の特徴として，たとえば内側へ開くか外側へ開くかというような観点から，内と外，表と裏とを問題にできるかもしれない。そして，そのような観点から，窓自身のおもて側が，海などの方向をむいているのだ，といえるかもしれない。しかし，このばあいにむしろ重要なことは，その窓のある家，あるいはへや全体をとって考えたとき，その窓が海の側にあるということである。このことは，つぎにあげるような例のばあいには，いっそうはっきりする。

○中庭に向いた廊下に立ちはだかり，煙草をくゆらしながら（人間の壁・上 30）

○まだ庭に向つた敷居際に佇んだまま顔だけ仲子の方へ向けた。（仲子・上 173）

○その一部である古風な小庭に面したその部屋は，（仲子・上 189）

廊下・しきい・へやなどは，それ自身の構造として，表・裏というような方向性をもっていないことが，窓のばあいより，いっそうはっきりしている。これらの例における「むく」などは，それらの廊下やへやが，庭に接していること，あるいは建物の中で庭にもっとも近い位置にあり，庭とのあいだに，なにも障害物がないことを表わしている。こうして，これらの例では，「むく」などにおける方向性が捨象されて，位置の側に重

点がうつってきている。この傾向がもっともすすんだのが，つぎにあげる「面する」だ。

さきに，もの自体の構造から方向が決定されるものとして，家のばあいをあげた。家が「……にむいて（むかって）いる」といえば，それは家の玄関などのある方が基準となる方角にある，ということをあらわしている。しかし「面する」についてはそういえない。家について「面する」がつかわれた例はいくつかあるが，これらは，玄関がそちらをむいているというよりも、家全体がそこに接しているとみた方が適当な例である。たとえば

○此家も前は道路に面していたんですよ。でも火事があってねえ。こんなところへ引っこんじゃって……（放浪記 153～154）

のばあい，しいて解釈すれば，家の玄関が道路の方をむいていた，ととれないこともない。しかし，そのすぐあとに「こんなところへ引っこんじゃって」があり，これと対比されているところからみて，むしろ，道路に接していたことに重点があるものとみるべきだろう。

○マラッカの華僑の大住宅は，道路に面して表構へがどれも同じ形式を採つてゐるやうに，家の内部に入つて見ても，様子がほゞ似たものである。（帰郷 20）

では，そういう対比がないが，これも同様かとおもわれる。すなわち，これらの例にあっては，「面する」は，そのもののむいている方角をあらわしているというよりも，そのもののおかれている位置をあらわしているのである。つぎにあげるようなものについては，そのことがいっそうはっきりいえる。

○日本海に面した直江津と云う小さい小港だった。（放浪記 252）

○岸子の家は街道に沿って海岸に面した小高い丘の上にあった。（くれない 10）

「港」や「丘」について表裏がいえないことは，いうまでもない。もっとも「港」については，海に接する側が表で，陸に接する側が裏だといえないこともないが，「くれない」の例にある「丘」のばあいに，その前後を論じることは、ほとんど無意味である。「街道に沿って」と「海岸に面した」とを入れかえて,「街道に面して海岸に沿った小高い丘」といってもいい。あるいは「海岸に接した」といってもよいであろう。もっとも，「接した」といえば，丘と海とのあいだに，まったく空間が残されていないことをあらわすのに対し，「面した」といえば，そのあいだには平地が残されていてもよい，ただし，あいだをしきるようなもの，すなわち，より高い丘などがあってはいけないことをあらわす，という程度のニュアンスのちがいはあるかもしれない。

以上にあげてきた，一定の方向をむくことをあらわす動詞に反対の動詞，すなわち逆の方向をむくことをあらわすものには，ぴったりするのはみあたらない。「そむく」という動詞は，みな

○阿部一族は上に叛いて籠城めいた事をしてゐるから，（阿部一族 62）

のように抽象化した意味でつかわれており，空間的な方向性はもっていない。しいていえば

○私の空想はやっぱり古里へ背いて都へ走っている。（放浪記 112）

のばあいが，まだ空間的なイメージをともなうものとして使われている，といえるだろう。

＜注1＞ 「……に向かう」といういいまわしは，道具をあらわす名詞と結びつくと，その道具を使ってする動作をすることをあらわす換ゆ的な表現になることがおおい。

○信輔が孤独で膳に向ふか，お種と仲好く箸を取るかにも（帰郷 214）

この「膳に向ふ」は，直接的には，たしかに文字どおり食膳にむいてすわることをあらわしているが，それはつまり＜食事をする＞という意味である。すぐつぎにある，「箸を取る」というのと同じような慣用句になっている。つぎの例もこれと同類だ。

○伸子も机に向つてゐた。（伸子・上 88）

○私は退屈な父の相手としてよく将棋盤に向つた。（こゝろ 62）

「机にむかう」は読み書きをすること，「将棋盤にむかう」は将棋をすることをあらわしている。いずれも膳・机・将棋盤などというものが，ある特定のきまった動作のためにつかわれる道具であるところから，このような用法が生じたものである。しかし「机にむかう」などが，つねにこういう慣用句としての表現だとはいえない。

○四角な小さな食卓にむかって，大きな男が二人，あぐらをかいて食事をしていた。（人間の壁・上 212）

○朝飯の後、丑松は机に向つて進退何を書いた。（破戒 299）

これらのばあいには「……にむかって」と「食事をする」「書く」などの動詞が分かれており，主人公の位置・姿勢の表現と，そのときしている動作の内容とが，はっきりいいわけられている。したがって，これらの「むかう」は換ゆ的とはいえず，文字どおりの意味である。このような形式上の特徴，すなわち「……して」の形ですぐつぎに内容をあらわす動詞がくるばあいをのぞいても，換ゆ的でないことが明らかな例がある。

○夜，私は遅くまで何もしないで机に向つたまま，（風立ちぬ 140）

また，つぎの例では，つぎに出てくる文の中に動作の内容が示されているので，「机に向いなさい」は文字どおりの意味と考えてよい。

○すこし我慢をして机に向いなさい。そうすれば書けるよ。（くれない 125）

動作の内容をあらわすことばがなければ，「机に向いなさい」というのは，むしろ一般的には「机にむかって勉強しなさい」などの内容をもつものと考えられる。

＜注2＞ 「むく」と「むかう」とでは、結びつく名詞の形がちがう。すなわち，「むく」が原則として「……の方にむく」という形をとるのに対し，「むかう」は「方に」を介さずに直接名詞と結びつく。まず「むく」についていうと，

○それよか一寸こちらへ向いて御覧なさい。（桑の実 5）

のように，それ自身が方向をあらわす名詞「こちら」と結びつくときには直接だが，ふつうは，

○伴子はこちらを見てゐたが，恭吾の視線に出会つて庭の方に向いた。(帰郷 265)

○銀之助は準教員の方へ向いて言つた。(破戒 225)

のように「……の方に（へ）」という形と結びつく。これに対する例外として，もの（場所）を表わす名詞に直接結びついているのは，つぎの2例だけだった。

○庭に向いたまゝ言い始めた明子の声は，(くれない 86)

○ただ習慣(しきたり)で，夕方ごとに鏡に向くのだ。(出家とその弟子 147)

「庭の方にむく」と「庭にむく」とでは、ややニュアンスがちがう。すなわち，「庭にむく」はまさに庭そのものにむいているのに対し，「庭の方にむく」はそれほど厳密ではなく，ややぼんやりと庭のある方向にむいたことをあらわす。したがって，厳密にいえば，庭からすこしずれた方向をむいたとしても，「庭の方にむいた」うちにはいるだろう。

これと逆に，「むかう」のばあいには、原則として名詞と直接結びつき，「……の方に（へ）」というかたちはとらない。

○庭へ向って立てた膝の上で，そっと唇を噛んだ。(くれない 85)

○鏡に向つてゐて，恭吾は，涙さへ催しかけてゐた。(帰郷 342)

「方へ」がとられることがあるのは，移動をあらわす意味のばあいだけだ。

○碌々男と口を利くひまもなく，直きに停車場(ステーション)の方へ向つたが，(あらくれ 134)

○そして蓙らに竹矢来の方に向つて走り乍ら(青銅の基督 116)

移動のばあいには，「停車場へむかう」とも「停車場の方へむかう」ともいえる。

このように「むく」のばあいに「……の方へ」というかたちがとられ，「むかう」に対してはそうでないということは，その意味上のあるニュアンスと結びついているのではないかと思われる。それは，「むかう」が対象とするものに対してやや積極的な姿勢をあらわすこと，「むく」はそれに対して，より純粋に方向・姿勢をあらわすということである。人に対して「むかう」がつかわれるばあい，

○オオベルマンスに向かって一列横隊の形で学生は掛けている。(むらぎも 338)

のように純粋に方向をあらわす意味で用いられることは，むしろまれであって，多くのばあい，はたらきかける対象としての人をあらわす。たとえば

○門口を出て二三町来た時，私はついに先生に向つて口を切つた。(こゝろ 80)

という例でも，この「向つて」は，「対して」とおきかえてもいいようなものであって，方向をあらわすものとはいえない。すなわち，先生の方にむきなおってことばをかけたとはかぎらず，先生と同じ方向をむいたままで，口を切ったのかもしれないのである。このばあい，「むかう」は空間的な方向性から，はたらきかけの対象をあらわすものへと変化している。このように，対象への働きに傾きやすいという「むかう」の性質が，「……の方へ」というかたちを必要としないという形式上の特徴と対応しているものと思われる。

＜注3＞　上にあげてきたのは，「……にむく」という用法だが，このほか「むく」には「……をむく」という他動詞的な用法がある。そして，実例からいうと，この方が

ずっと多い。（今回の調査につかった資料では，自動詞的用法にくらべて，約4倍くらいの量があった。）この他動詞的な「むく」も，「……にむく」と同じように，名詞に直接結びつくことはすくない。名詞に直結するのは

○彼は決然踵を返して，北を向いて歩き出した。（波 302）

○人影は一斉にこつちを向いた。（野火 89）

のように，方向をあらわす名詞に対してであり，ふつうは

○二人は再び濡縁に腰をかけて庭の方を向いた。（つゆのあとさき 31）

○奥さんは私の方を向いて云つた。（こゝろ 24）

のように，「……の方をむく」というかたちをとる。これに対する例外もないことはないが，きわめてまれである。つぎにあげるようなのが，その例外的な用例である。

○隠岐氏は庭を向いて黙り込んだ。（帰郷 225）

○天井を向いて考えていた私は，クルリと背をむけると（放浪記 38）

自動詞的用法と他動詞的用法で，あらわしている意味はほとんどおなじである。ただ，完全におきかえられるとはいえず，多少ニュアンスのちがいがある。その第1は「……をむく」というばあい，その主体がほとんど人間にかぎられるということだ。「……にむく」という用法では，上にいくつかの例をあげたように，主体が人間以外のもの（家・窓）であることもある。これに対して，他動詞的用法では，ほとんどの例が人間の動作についてであって，人間以外につかわれたものとしては，わずかにつぎのような例があるにすぎない。

○サナトリウムは、いくつかの側翼を並行に拡げながら，南を向いて立つてゐた。（風立ちぬ 93）

この1例のほかは，からだの部分をあらわすつぎの2つがあっただけだった。

○何，鼻が天を向いとると云つた，（思出の記・上 66）

○明るい外光を受けて，顔が真正面を向いたが，（自由学校 9）

ちがいの第2は，上の点に関係して，他動詞的用法が，やや意志的な動作をあらわしているようにみえることである。ただし，この点については，用例の上からはっきり示すことがむずかしかった。

ちがいの第3は，他動詞的用法で，からだの部分だけの方向転換をあらわす例がみられることである。ただし，からだが全体としてある方向に向いているのか，または顔とか上半身だけをそちらに向けたのかは，文脈の上からは判断することが不可能なばあいが大部分で，「……にむく」という用例についても，そうとれないことはない。しかし，つぎにあげる例は，かなりはっきり，からだの部分，すなわち顔だけがある方向をむいたのだととれるような文脈である。「……にむく」には，これにあたるような例はなかった。

○眉一つ動かさずに，下を向いたまゝでスープを啜つてゐた。（或る女・上 112）

○委員は教壇の上で，どうしていいか解らなくなった。彼は先生の方を向いて，助けを求める。（人間の壁・上 218）

〔191〕 おす，つく——ひく

これらの動詞は，力を加えるものと加えられるものとの間にみられる方向が逆である。「おす」については，新潮国語辞典のように，「物に対して力を加える。」としか規定せず，方向についての特徴を記述していない辞典もある。しかし，これだけでは，「ひく」との区別がつかない。「ひく」もまた，ものに対して力を加えることだからである。だから，たとえば岩波国語辞典が，「手前から向うへと力を加える。」のように規定している方が正しい。「つく」については，一般に辞典は方向の規定をはぶいているようだが，これにも「おす」と同様の方向性をみとめることができるだろう。「ひく」については，一般にどの辞典も方向を規定している。すなわち，岩波国語辞典では「手にとって自分の方へ近づける。」，新潮国語辞典では「遠い所から手近の所へ寄せる。」のようになっている。しかし，こまかくみていくと，このように単純に規定しただけではすまないような面も出てくる。

まず「おす」については，

○上等兵は背中をまげて長い手で木谷の肩を押した。（真空地帯・上 37）

のような例では，「手前から向うの方へ」という規定があてはまる。大部分の例については，このように問題がない。しかし普通「手前」というと自分の前の方にあるものをさす。自分のすぐ横やうしろにあるものについては「手前」とはいわない。ところが

○瀬戸上等兵は木谷にならんで壁に背をつけ，膝の上に通信紙をひらいて何かかきはじめたが，再び肩で木谷をおした。（真空地帯・上 37）

○昼食のとき彼が食台の一ばん端の席をうばっていたので尻でおしてきた瀬戸上等兵にまたおしのけられた。（真空地帯・上 36～37）

などでは，むしろ，おしている当人の横，またはうしろの方向に向けて力が働いている。したがって，「手前」というよりは，「（おしているものの）近くから遠くへ向かう方向」といった方が正確だ。さらに，

○推進機に押される，シャアシャアという水音も聞えた。（暗夜行路・前 147）

○窓掛けのレエスが，微風に軽く押されて、ふくれては，（帰郷 170）

などでは，生きものではなく，前後が問題にならないものなので，なおさら「手前」とはいえない。

つぎに「つく」についてみると，まず

○ついで赤児を母親がその咽喉をついて殺した。（落城 48）

のような典型的な例では「おす」と同様に「手前から」といってもよい。しかし，

○地面を突きながら回る鉄棒（かなぼう）の響きがさえて聞こえた。（暗夜行路・前 35）

では上下の方向であり，いわば自分と平行の方向に力が働いている。さらに自分で自分を「つく」ようなばあい，すなわち

○佐助が自ら眼を突いた話を天竜寺の義山和尚が聞いて，（春琴抄 209）

のような例では，むしろ力は向う側から手前に向かってはたらいている。このような例

をふくめて考えると，「おす」や「つく」についての方向の基準となる主体は，人間全体ではなく，その力を加えている当の部分，すなわち手先・足先・肩・しりなどで，そのばあいばあいに応じて考えなければならないであろう。「自分で目をつく」あるいは「自分で自分のすねをおす」などというばあいには，その手・指などを主体と考えれば，力を加える主体からその力を加えられつつあるものの方向へ，という規定の範囲におさまるものである。

さらに

○妻の人差指には，薔薇の刺で突いたのであらう，血が吹滲んで居る。それが彼の目についた。（田園の憂鬱 113）

のばあいには，力を加えるものから，力を加えられるものの方向へ，という規定もあてはめにくい。このような場面では，文字どおり指をばらのとげでついた，すなわち，ばらのとげの方が動いて指にぶつかり，これを傷つけたというばあいもあるかもしれないが，それよりもむしろ，指の方が動いていって，とげにぶつかり，とげをおすようなかたちになり，それが結果的に指を傷つけた，というばあいが多いだろう。どちらをあらわしているのかは，これだけの表現では何ともいえない。にもかかわらず，一般に「ばらで指をついた」とはいっても，「指でばらをついた」ということがすくないのは，ばらのとげの方が細く鋭く，この接触の結果として，影響，すなわち，きずをこうむるのは，指の方だからであろう。

「ひく」については

○南瓜は昼間見て置いて夜になるとそつと蔓を曳いて所在（ありか）を探すのである。（土・上 132）

のように、主体の方に力が向いているのが原則である。これについて，辞典は，「手前」ということばをつかわず，「手もと」「手近のところ」「自分の方」などをつかっている。この方が正しい。上にあげた「土」のばあいでも，主体の前の方からひいたのか，後の方からひいたのかは，わからないし，

○男の子二人の手を両方に引いて歩いていたのを，（くなれい 9）

のようなあいだったら，両側になめうしろの方向からひいているのである。

ばあいによっては，この動詞も力の加わる方向がそれほど問題ではなくなることがある。たとえば

○雨戸はいつものやうに引いた儘で陰気であつた。（土・上 64）

の例における「ひく」は，文字どおり厳密な意味で雨戸をひっぱったものと考える必要はない。実際には「ひく」よりも押してしめたのであっても，「雨戸をひいた」と表現することもある。このばあい，重要なことは、ひいたか押したかというプロセスではなくて，結果として雨戸がしまった状態にあるということだからである。すなわち，このばあいの「ひいた」は，ほとんど「しめた」と同義的なものに近づく。この点，上にあげた「田園の憂鬱」の例で，ばらのとげから指の方に力がはたらいたのか，指からとげの方に力がはたらいたのかはあまり問題ではなく，結果的に指がきずつけられたことに

重心が移っているのと共通である。

3.5.7　特定の目的地に対する方向

これには，まず都を基準として，これにむかうものと，はなれるものとがある。

○少年の時学生として初て東京に**上つて**から十年になるが，（武蔵野 10）

○何某は此月末に**上京する**といふ話も聞く。（平凡 52）

○再び**出京**したが，**出京**して見ると，物価騰貴に付き下宿料は上る，（平凡 129）

○京都から来るお針医と江戸から**下る**御上使との接持（阿部一族 29）

○忌日に先だつて，紫野大徳寺の天祐和尚が京都から**下向する**。（阿部一族 56）

この類に属するものとしては，＜移動動作＋目的地＞という構成をもった漢語がひじょうに多い。（和語にも「里がえりする」のような例はあるが。）「上京する」「出京する」もその例だが，ほかにつぎのようなものがある。

登校する ～ 下校する　登庁する ～ 退庁する　来日する ～ 離日する　出社する
来場する　来店する　帰国する　帰郷する　訪日する　渡米する

このうち，「出 ～ 」という構成をもった漢語には，2とおりの用法がある。「でる」という動詞は，せまいところから広いところへの移動という側面を強調して，「座敷を（から）でる」のようにいう用法とともに，背後にある場所から，はれがましい場所への移動という側面を強調して「座敷へでる」のようにいう用法ももっているのだが，ちょうどこれに対応して，「出 ～ 」という漢語のなかにも，「出獄する」のように「～をでる」という意味のものと，「出場する」のように「 ～ へでる」という意味のものがある。後者のばあいには，「入場する」のように，「出」を「入」でおきかえても似た意味の動詞になることがある。今，岩波国語辞典から両者の例をひろってみると，以下のようになる。

「～をでる」	「～へでる」
出郷　出家　出庫　出港　出国　出獄　出所　出世（仏門にはいること）　出世間　出土　出廬	出社　出場　出陣　出世（えらくなること）出席　出廷　出府

3.5.8　川上・川下の方向

〔192〕 のぼる，さかのぼる-くだる，さがる

○此の川を半町も**上れば**，鎖渡しと云ふ難所がある。（恩讐の彼方に 72）

○見れば大な谿流の勢に変つて，白波（はくは）を揚げて谷底を**下る**のであつた。（破戒 102）

○松戸から二里許り**下（さが）つて**，矢切の渡を東へ渡り，（野菊の墓 6）

○嘉門の故郷の海岸から，川を溯つて行つた山峡の，（冬の宿 143）

これらは，上下の方向への移動ともいえないでもない。特に「破戒」の例などは，傾斜が大きいため，そうもとれそうだ。しかし，川ぞいの陸地をいくばあいを考えてみると，川上にいくことは，かならずしもより高いところへいくことではないから，もう本

来の上下関係からずれて，川上・川下という新しい方向性が意味を規定するものとしてはたらいているとみられる。(p. 253 参照。)

これらの単語については，川の中をいくか，山ぞいの道をいくかは，どちらでもよい。上にあげた例でいうと，「恩讐の彼方に」（のぼる）は道を，「破戒」（くだる）は川の中をうごく例であり，「野菊の墓」（さがる），「冬の宿」（さかのぼる）はどちらともとれる例である。「くだる」でも，つぎの例では陸上を移動している。

○渠の流れに沿うた道を十町以上も下つて見た。（田園の憂鬱 59)

「遡行する」「遡航する」「遡上する」（どれも実例なし）などは，「さかのぼる」と近いけれども，川の中をいくばあいにしかつかわない点で「さかのぼる」と区別される。

3.5.9 人前への方向

〔193〕 でる，だす——ひっこむ，ひっこめる，さがる，さげる

これらの動詞は，人の前，はれがましい場所に行くことか，そこからあまり目立たない場所へ行くことか，どちらかの方向をあらわす。

「でる」「だす」は人前への方向である。

○ちつとも眠れないし，それでお座敷へ出た時だけしやんとするのよ。（雪国 61)

○母親は娘が生徒総代に選まれて，弔辞を読むといふので，いつもの，色の褪めた風呂敷のやうな袴をはかせて，晴れの場所には出したくなかつた。（波 51)

これらは，本来ものの中から外への移動をあらわすものだが，外が明るい場所であることが多いことから，このような方向性にずれたものであろう。これについては「でる」の分析（p.570）を参照。

「ひっこむ」「ひっこめる」「さがる」「さげる」は「でる」「だす」と逆の方向をあらわす。

○夫人が去ると，茂木も無言で，奥へ引っこんだ。（自由学校 94)

○いそがしく手を出したり引込めたりして紙幣をやり取りした。（帰郷 48)

○皆さんのお食事がすむと，おくみはあちらへ下つて一人で戴いた。（桑の実 151)

○笑つて二人の膝の前から，あいた茶碗をさげながら，（多情仏心・前 49)

以上にあげた例は，みな，わりあいみじかい距離における移動をあらわしており、ある特定の人がいる場所が基準になっている。しかし，一方，これらの動詞はもっと抽象的なばあいにもつかわれる。すなわち，都会がはれがましい場所であり，いなかはその逆である，という観点に立っての表現も見られる。

○九月始めになつて，私は愈又東京へ出やうとした。（こゝろ 119)

○娘の切なる希望を容れて小説を学ぶべく東京に出したことや，（蒲団 65)

○友達夫婦が田舎に引っこむので，（厭がらせの年齢 295)

「ひっこめる」は，たまたま，このようなばあいにあたる例がなかったが，「いなかにひっこめる」という表現はありうるだろう。「さがる」「さげる」は実例もなかった

し，また，こういうばあいには，おそらくつかわれないとおもう。

3.5.10　話し手に対する方向

空間的な移動では「いく――くる」が代表的だが，「やる――よこす」もある。方向ということばを空間的な意味にかぎらなければ，「やる――もらう」など，やりとりの動詞も話し手中心である。

〔194〕 いく――くる

これについては，森田良行氏の研究があるので，くわしくはそちらにゆずり，一言だけつけくわえることにする。

これらの動詞は，話し手が現にいる場所を基準にするばあいには，おきかえられない。しかし，話題の中心の場所が基準になると，どこを基準点と設定するかによって，いれかわることがある。

○事務長が行つてしまふと葉子は急に力が落ちたやうに思つた。(或る女・前 227)

○外の者は皆又山へ往つたとかで，お増が一人台所片づけに残つてゐる。僕は顔を洗つたなり飯も食はずに，背戸の畑へ出てしまつた。(野菊の墓 39)

これらの例文では，移動の主体「事務長」「外の者」は，この場の主人公「葉子」「僕」と別人である。したがって，移動によって話題の中心場面がかわることはない。このようなばあいにも，「いく」を「くる」におきかえて，「事務長がきてしまふと」「外の者は皆山へきたとかで」とはいえない。

しかし，

○葉子は小学校に通つてゐる時分でも，泣きたい時には，人前では歯を喰ひしばつてゐて，人のゐない所まで行つて隠れて泣いた。(或る女・前 116)

○新婚旅行だといつて温泉に行つたときに，もう嘉門は沢山の芸者を集めて騒ぐんですもの。私はただふるへて居たのです。(冬の宿 80)

○彼はある日の晩大宮の処にあそびに行つた。(友情 17)

のように，移動の主体が主人公と一致するものは，「人のゐない所まできて」「温泉にきたとき」「あそびにきた」，と「くる」におきかえることができる。「くる」「いく」の方向は，主人公の位置によってきまるのだから，同じ移動の動作でも，移動前の位置を基準にすれば「いく」，移動後の位置を基準にすれば「くる」で表現されるのであり，そのどちらをとるかは表現効果上の問題として自由に選択できる。上の「友情」の例とつぎのとを比較。

○しかし仲田兄妹は暇を見ては大宮の家に来た。(友情 73)

「くる」をつかえば，視点は大宮のがわにうつり，むしろ大宮が主人公になる。しかし，ここで仲田と大宮のどちらを主人公として表現するかは，書き手の自由にできることである。

このように，観点のとり方で，自由に「いく」でも「くる」でもつかえること，そし

て，どちらを主人公にしてもいいくらい，登場人物のあいだの重みに差がないばあいが多いことは，上のような文脈で，「いく」と「くる」との方向性の対立をほとんど失なわせて，いわば「中和」されたものにしてしまう。つまり，「いく」も「くる」も，要するにある場所から他の場所への移動であって，特に方向を問題にした上で選択されたものではない，という状態に近づいている。

これがさらにすすむと，「いく」は「ある場所から他の場所へ」という抽象的な方向性さえも失って，純粋の移動そのものをあらわすようになる。

○二足いかないうちに，すぐプツンと切れちまつてね，（多情仏心・前 274）

○されば君若し，一の小径を往き，忽ち三条に分るゝ処に出たなら困るに及ばない，君の杖を立てゝ其倒れた方に往き玉へ。（武蔵野 19）

このあとの方の「往き玉へ」は，主人公のいる場所から遠ざかる方向へ，という方向性をもっているが，前の「往き」はそのような方向性のない単なる移動で，その点では「すすむ」「あるく」「うごく」などと近い。「くる」の方は，ここまで無色に近くはならないようである。

〔195〕 さる

「さる」の方向性についても，基本的には「いく」と同じとも考えられる。すなわち，それは，話し手の位置，あるいは話題の中心である人や場所から遠ざかる方向への移動である。ただし，「さる」は文章語であって，会話の中にはあまり出てこないので，話し手のいる場所からの移動というのにふさわしい例はほとんどない。しいてあげれば，つぎのものがそれにあたる。

○僧三　今あなたに**去られて**は若いお弟子たちをだれが取り締まるの でしょう。（出家とその弟子 176）

このばあい，「さる」は空間的な場所としての寺からの移動ではなく，むしろ，組織としての寺から，はなれることを表わしている。その意味で，あまり適当な例ではないのだが，一応これは話し手の位置を基準にしているともいえる。（しかし，また，寺が話題の中心だからともいえる。）

○遠くへ**去**った男が思い出されたけれども，（放浪記 84）

では会話ではなく，主人公の考えをのべているのだが，その話し手（考え手）のいる場所が基準になっている。一方，

○河井は何故かすぐには彼女の前から**去らう**としなかつた。（真知子・前 111）

○かう二人にさゝやくと，軽く一礼してそつちへ**去つた**。（青銅の基督 89）

などでは話題の中心としての場所が中心になっている。これらの例は，方向性に関するかぎり，「さる」が「いく」に近いことをしめしている。話し手の位置，あるいは話題の中心となるべき場面の方への移動に「さる」をもちいることはできない。「遠くへさる」はあっても「近くへさる」はなく，「そっちへさる」はあっても，「こっちへさる」はない。

しかし，このことは「さる」の意味が「いく」のばあいとまったく同じだということではない。第1に，「さる」には「（どこどこ）からさる」のほかに「（どこどこ）をさる」といういい方があり，これは「いく」にはおきかえられない。

○彼は今は一刻も早くこの地を去りたかった。（暗夜行路・前 212）

このことは，また，つぎにのべる第2第3の事実と関係がある。

「さる」が「いく」とちがう第2の点は「いく」が方向性を主にするのに対し，「さる」は出発点を重視するということである。「いく」のばあいには，ときとしてその方向性さえ，ほとんどうすれてしまって，単なる移動をあらわすのに近くなるばあいがあることは，上にみたとおりだが，「さる」はこれとちがって，つねにある場所からの移動であることがあきらかだ。それは「（どこどこ）から」「（どこどこ）を」という表現がないばあいにも，つねに自明のこととして文脈からよみとれなければならない。たとえば，

○突如空気を破るやうな音で，単機が樹の梢をかすめて去つた。（野火 55）

では，飛行機が自分のいるあたりから遠くへいくことをあらわしている。もしこの文脈で「かすめていった」といいかえるとすれば，そのばあいの「いく」には，自分のところからはなれるという側面はずっとうすれて，単なる移動に近くなるだろう。

第3点として，「さる」は単なる移動ないしは出発ではなく，その出発点にいなくなるということをあらわしている。

○おつぎは又土手へ戻つて大きな川柳の傍に身を避けた。二三語を交換して人は去つたやうである。（土・上 148～149）

○六人から一人が去り，二人が新しく到着してゐた。（野火 25）

○この家の住人が急いで出て行つたか，掠奪されたかである。しかし明白な米軍の痕跡があるのに，何故比島人は去る必要があつたか。（野火 73）

これらの例では，「さる」を「いく」におきかえることはむずかしい。もしおきかえるとすれば，ややちがったニュアンスをもつことになるだろう。すなわち，これらの「さる」は，その問題にしている場所から人が移動して，その場所にいなくなったということをあらわしているのである。これらの文脈では，単に「いく」というよりは，「（そこから）いってしまう」あるいは「（そこに）いなくなる」といいかえた方がぴったりする。「いく」のばあいに，話し手の位置とか話題の中心地点とかいうのが，単なる方向の基準点としての意味しかもっていないのに対し，「さる」のばあいには，移動の主体が最初存在した地点としての意味をもっている。「いく」という動作の結果として出発点の状態がどうなったかは問題ではないが，「さる」は，出発点における状況変化をもしめしているのである。そして，このようなニュアンスは，実は最初の方にあげた「さる」にも，ある程度まではつきまとっているのであり，単純に「いく」とおきかえられるとはいえないのである。

3.5.11　最初の出発点に対する方向

〔196〕 かえる，もどる，ひきあげる，ひきかえす，帰還する，帰国する，帰宅する ……＜いく，くる

〔「いく」「くる」と「かえる」「もどる」〕

上には，「かえる」「もどる」に対立するものとして，「いく」「くる」をあげておいたが，これは，いわば移動動詞の代表としてあげたものであって，ほかの動詞でもよいのである。つまり，「かえる」「もどる」は，もときた方向への移動だが，この特徴をもっているもの（marked）は，上にあげたようなものにかぎられ，ほかの移動動詞は，「近づく」でも「のぼる」でも「はいる」でも，それ以前に逆方向への移動があったか，なかったかに無関心（unmarked）であり，その点で「いく」「くる」と同じなのであって，特に「いく」「くる」だけが積極的に「かえる」などと対立しているわけではないのである。もっとも，「ゆきかえり」「ゆきはよいよい，かえりはこわい」など，習慣的に，「かえり」に対するものとして「ゆき」がえらばれるところからみれば，「いく」は「かえる」に対して積極的に最初の移動であるという特徴をもっているようにも思えるが，これは，「いく」が比較的他の面での特徴をもっておらず，純粋の移動動詞に近いところから，unmarked なものの代表にえらばれたものであろう。

A地点にいる人がB地点にはじめて移動したとき，これは「いく」または「くる」で表わせる動作であるが，「かえる」や「もどる」では表わせない。しかし，その人がふたたびA地点に移動してきたとき，この動作は，最初の移動を考慮して「かえる」「もどる」とよぶことも，またこれを無視して「いく」「くる」とよぶことも可能である。すなわち，「かえる」「もどる」とよべる事実は，観点をかえれば，つねに「いく」「くる」でも表わせる事実である。（そして，逆はかならずしも真ではない。）おなじような事実が，「いく」「くる」でも「かえる」でも表わされている例をあげよう。

○私も三人目にとうとう席を外して，自分の室へ来た。（こゝろ 144）
○小さい坊ちやんをつれて実家の方へ行つてゐたり（桑の実 63～64）
○私は何の分別もなくまた私の室に帰りました。（こゝろ 269）
○仙台のお実家の方へかへられることになつた。（桑の実 9）

〔「かえる」と「もどる」とのちがい〕

この両者は意味的にきわめて近く，たいていの文脈で，おきかえてもそれほどニュアンスがちがわない。それで，一口でそのちがいをいうことはむずかしいが，つぎのような2，3の点では，その差を指摘することができる。

(1)「他人の家を辞去する」という現象には，「かえる」だけがつかわれる。
たとえば，

○表二階の客はなかなか帰りそうもなかった。（暗夜行路・前 80）
○小さい女は彼に早く帰ってもらいたいようにいかにも落ちつかない様子をしながら，何かしら絶えずしゃべっていた。（暗夜行路・前 257）

などの例は，「もどる」でおきかえることはむずかしい。これらの例で，「かえる」

は，現に客や彼がいる家・へやをはなれることをあらわす。「彼」が一歩その家から出てしまえば，「小さい女」は，「早く帰ってくれてよかったわ」というであろう。自宅にかえりつく，到達することまでは，このばあいの「かえる」には含まれていない。

おなじような状況のもとで「かえる」をつかっても，それが自宅への帰還，到達を表わすものとして，つかわれているばあいには，「もどる」でもいえる。上の例のようなばあいに，客や彼の家族の立ち場に立って「なかなか帰りそうもない」「早く帰ってもらいたい」ということができるであろう。このときの「かえる」は自宅にかえりつく，到達することに重点があるのであって，単にいまいる場所をはなれることだけではない。そして，こういう条件のもとでは，「なかなかもどりそうもない」「早くもどってもらいたい」といっても，すこしも変ではないのである。つまり，「もどる」におきかえられない「かえる」というのは，辞去するという段階の動作だけを表わすばあいにかぎられる。

(2)　目的地が問題にならず，単なる後退をあらわすばあいには，「もどる」だけがつかわれる。

表面に出ていようといまいと，「かえる」はつねにある場所へ移動することである。これに対し，「もどる」はかならずしもそうでなくて，単なる後退をあらわすことがある。「三歩もどる」「もっともどらないと（自動車が）すれちがえないよ」のような例はそれで，どこへ移動するのかという目的地の問題は，これらに関係しない。こういう例は，「かえる」では，おきかえられないものである。つぎのも，このような後退をあらわす例に属する。

○そして，ふいと思ひついて，俊樹は道を**戻つて**，再び牛木家の門をあけて，入つて行つた。（帰郷 121）

○貨車を入れかえるために機関車が行ったり**戻ったり**しているのに，（人間の壁・上 300）

なお，「ゆきつもどりつ」という慣用句における「もどる」も，やはり単なる後退であろう。これも当然「ゆきつかえりつ」にはならない。

(3)　「もどる」の目的地は，比較的ちかいことが多い。

「かえる」「もどる」などのあらわす移動は，たとえばアメリカから日本へ，というような大がかりな，とおい地点からのものも，同じへやの中で，ちょっとはなれたテーブルにまたいく，というような近距離のものもある。そして，「かえる」は比較的とおいところからの，「もどる」は比較的ちかいところからの帰還をあらわすことが多い。今，雑誌90種の資料によって，直前に「家へ」「日本へ」などの目的地が示されているばあいだけについていうと，つぎのようになる。目的地の種類を，大きさを基準にして6つにわけた。目的地の大きさは，大体のところ移動の距離と比例するとみてよいであろう。

目　的　地	かえる	もどる
A）地球・日本・故国・本土……	15	-

B）東京・村・島・郷里……	32	7
C）家・城・病院・駅・ホテル……	46	9
D）へや・台所・船室……	1	7
E）テーブル・ミシン……	−	2
F）家の方・殿様のもと……	8	4

このうち，Fグループは，形式名詞によって方向や地点をぼんやりと示すものであって，大きさや距離を問題にするには不適当である。それで，これをのぞいた他のグループについてみると，「かえる」「もどる」とも，Bグループ（市町村）・Cグループ（建物）が目的地となることが多いが，「もどる」は，Aグループ（国）のような大きい地点（とおい距離）には，つかわれておらず，逆に「かえる」は，Dグループ（へや）・Eグループ（道具）のような小さい地点（ちかい距離）には，ほとんど出てこない。

ただし，このことは，あくまで傾向としてそうなのであって，「日本へもどる」「テーブルへかえる」などの表現がゆるされない，ということではない。たとえば，上の分類でいうとEグループ（道具）に属する目的地と，「かえる」が結びついた例を，雑誌90種以外の資料からさがすと，

○椅子に帰つて，半分ほど残つてゐたウヰスキイを一息にあほると，（多情仏心・前36）

○一礼して，聽て拍子の抜けたやうに元の席へ復つた。（破戒 29）

などがある。

以上にあげた，「かえる」と「もどる」との相違点3つには，ある共通の根拠，つまり「かえる」「もどる」おのおのの重点のおきどころのちがいが，はたらいているように思われる。その重点とは，「かえる」のばあいは本拠への帰還ということであり，「もどる」にあっては逆方向への移動ということである。この観点から，もう一度上にのべた3つの相違点について考えてみよう。

(1) 「かえる」だけが「辞去する」ことをあらわすのは，「かえる」の中に本拠（すなわち多くのばあいは自宅）へいくということが含まれているので，単に「かえった」といっただけで，自宅への帰還が暗示されていたためであろう。訪問先から辞去して行くところといえば，生活の本拠である自宅がふつうである。

(2) 単なる後退が「もどる」でしかあらわされないことは，端的にこの両語の重点のちがいを示している。

(3) 国のような大きな目的地への移動に「もどる」がつかわれないことは，こういうばあいに距離がとおく，前に「きた」ときの移動との時間的なへだたりも大きいので，その前の移動との対比において方向が逆だという関係がうすくなるためかと思われる。一方，「家」「町」「国」など大きさはまちまちでも，それが他の家・町・国に対して本拠でありうることは同じである。そして，へや・テーブルなど小さな地点について「もどる」がつかわれるのは，これが，生活の本拠というには，あまりに臨時的な居場

所だからであろう。

〔「ひきあげる」と「ひきかえす」〕

「ひきあげる」は「かえる」にちかく，「ひきかえす」は「もどる」にちかい。

「ひきあげる」は，本拠とする場所への移動であるというニュアンスが，「かえる」よりも一層つよい。

○妻が東京へ引き上げたいといふ気持は，（田園の憂鬱 118）

○謙作はとうとう尾の道を引き上げてしまった。（暗夜行路・前 210）

のように，単に行っただけのところでなく，ある程度の期間生活していた場所からの移動が目につくのも，このせいであろう。また，

○それから火を踏み消して，跡を水でしめして引き上げた。（阿部一族 75）

のように，ある場所でなにか一しごとして，それがおわってから「かえる」ばあいにも，よくつかわれる。いずれにしても，その人の本拠とするところへの本格的，全面的な帰還である。

これに対し，「ひきかえす」は，目的地が本拠かどうか，ということよりも，逆方向への移動というニュアンスをもつ傾向があり，「もどる」よりも，それが一層つよい。

○すぐ引きかへして左の路を進んで見玉へ。（武蔵野 19）

このように，ちょっともどるばあい，「もどる」でなら言いかえられるが，「ひきあげる」では大げさだろう。

○同じ路を引きかへして帰るは愚である。（武蔵野 21）

という例では，「帰る」が全体としての移動の性質をあらわし，「引きかへして」は特にその方向・ようすを限定している。

○もう帰らうといふ時，彼女は急にあることを思ひつきもう一遍階上へ引きかへした。（伸子・上 22）

では，「帰らう」が美術館から自宅までの移動，すなわち本拠への移動をあらわすのに対し，「引きかへした」は，階上，すなわち，主人公の本拠ではなく，ちょっとのあいだいたにすぎない場所への，ちょっとした移動をあらわしている。

3.5.12　不定の方向

〔197〕　さまよう，うろつく，ほっつく／いく，くる
ただよう＜ながれる

「いく」「くる」「くだる」「はいる」など，移動をあらわす動詞の多くは，なんらかの方向への移動であることを積極的にしめしている。また，移動の動詞のなかには，「わたる」「およぐ」「はしる」のように，方向について無関心なものもある。しかし，上にあげた「さまよう」などは，これら2つのグループのどちらともちがって，方向が不定であることを積極的にあらわしているものである。すなわち，移動の動詞は，方向の観点からみると，つぎの3つにわかれる。

方向の規定がある{定 ——いく，はいる……
不 定——さまよう，うろつく……
〃 がない——わたる，はしる……

「さまよう」の類の形式的特徴は，「～へ」「～に」という一定の目的地をあらわす目的語がなく，そのかわりに「～を」という形で移動の場所が示されることが多い，という点にある。

○愛らしい少女と一緒に林檎畠を彷徨つたやうな，楽しい時代は（破戒 130）

○朝飯もたべず，昼過ぎまで畑のあたりをうろついて了つた。（野菊の墓 44）

○元気になつてまた街をほつついてゐるのであらう。（冬の宿 136）

そして，「～に」という目的語がとられるとき，それは目的地・到達点をあらわすものではなくて，その動作の行なわれる場所を示す。

○谷川の水を飲んで烏帽子ケ岳の麓に彷徨ふ牛の群のことを話した。（破戒 176）

この「～に」の用法は，「いく」「くる」などの移動の動詞よりも，むしろ「いる」「ある」など存在の動詞と結びつくときに見られる，ありかを示す用法であって，「～へ」にはないものである。「さまよう」がこれと結びつくことは，「いく」など方向の一定した移動との大きなちがいである。

「さまよう」に方向性をあたえるためには，「さまよっていく」の形がとられ，この形では「～に」（「～へ」）という目的語と結びつく。このばあい，「さまよって」は，もっぱら移動のようすを——直進せずに，ふらふらしながら移動するようすをあらわす。

○先刻一度門前へ来て，又何処へか彷徨つて行つたやうだつたが，（平凡 28）

○葉子の眼は木村や二人の妹の写真の方にさまよつて行つた。（或る女・上 191）

なお，「ただよう」は，「さまよう」などにくらべて，移動としての性格がよわい。実例としては，移動のばあいは

○どこからかまた漂つてくる新しい船を探してたかつてゆく，（冬の宿 200）

○上等の香水が微かに漂ってくるように，（ドレスメーキング 1953年4月 169）

のように，「～てくる」の形のものがあるほかは，つぎの1例だけである。

○限りも無い海藻の岩根離れて，八重の潮路を漂ふ如くに，（思出の記・上 108）

あとは，以下にあげるように，移動という動作よりも浮いている状態をあらわすものばかりである。

○沈んだ船の乗員が助け上げられる希望もなく浪に漂つてゐるのを！（帰郷 49）

○往来には厨の煙とも夕靄ともつかぬ薄い霧がたゞよつて，（或る女・前 62）

○潮の香の漂つた濁つた小さな運河を渡つて，（或る女・前 23）

○しかし山頂にはまだ幽かに光が漂つてゐた。（風立ちぬ 143）

これらについては，船員や霧・香・光が動いているともとれるが，海上や空中に浮いたまま動かないとしても，一向さしつかえない。

3.5.13　回転

〔198〕 まげる／ねじる，ひねる，よじる，まわす

これらの動詞は，みな，対象の方向をかえることをあらわす。「まげる」は対象とするものの軸の方向をかえるばあいにつかわれる。

○漸くのことで枝を曲げて其針をとつた。（土・上 86）

○首を曲げ，走るように，父親の腰について行った。（くれない 142）

人間のばあい，軸は足と首をむすぶ線であり，「首をまげる」ということは，前後または左右から見たときに，首のところがこの軸に対して折れるような角度をなすことをいう。そのばあい，顔のむいている方向は，かわってもかわらなくてもよい。たとえば，前をみたままで首を横に「まげる」こともできる。

これに対して「ねじる」以下の動詞では，軸そのものの方向はかわらない。

「ねじる」

○流し下で勢いよく水道の栓をねじり，（くれない 61）

○それでわしは鶏の首をぐるぐるねじったのだ。（出家とその弟子 39）

「ひねる」

○蛇口をひねつて水を受けて飲んだ。（帰郷 233）

○首をひねられた鶏のやうに，首をガクリ胸に落し込んで，（蟹工船 67）

首をまげれば，軸に対する首の方向・角度はかわるが，首をひねったり，ねじったりしても，その角度はかわらない。ひねったり，ねじったりすることは，その軸のまわりに首を回転させることであって，顔が前をむいていた位置から，横や後をむくような運動が行なわれるである。「水道の栓をひねる」「蛇口をひねる」などにしても，せんの軸の方向はかわらない。その軸の周囲に回転するだけである。

「よじる」も「ねじる」や「ひねる」とおなじとおもわれるが，実例としては人間のからだの部分につかわれたものだけがあった。

○広間の右側に立つてゐる博士の方に頭を捩つてゐるので，（仲子・上 16）

○薄着になつて，そくそくする背中を捩りながら，（多情仏心・前 47～48）

「まわす」も，この点では，「ねじる」「ひねる」などと同類である。

○日傘を廻して幸福な娘のような姿で街へ出てみた。（放浪記 59）

○伸子は屈んで鍵穴を見た。ついで念のため把手を廻して見た。（仲子・上 54）

○くるりと首を廻して一同を見渡した。（或る女・前 71）

これらもみな，軸のまわりに回転させることであって，軸の方向をかえることではない。

＜注1＞　「ひねる」が，つぎの例では，「いじる」「いじりまわす」などとおなじようなことを表わすのに，もちいられている。

○お上品な奥様が，猿股を二十分も捻っていて，たった一ツ買って行った。（放浪記 26）

このような使い方をしているのは，この1例だけで，ほかにない。したがって，ま

ったく臨時のものかどうかは不明である。

＜注2＞ 「ひねる」には，わざとかわったようすをする，という意味がある。

○金閣寺の庭の美しさは西洋人も認めるであらう。あの庭には，人間臭いところが強い。日本的にひねつたところがなく自由で濶達で明るい。（帰郷 249）

やはり上の1例しかなく，はっきりはいえないが，この用法のばあい「～を」という目的語をとることはない。多くの辞典ではこれを他動詞の1用法としているが，明解国語辞典のように，自動詞と（あるいは，むしろ連体詞と）みとめるべきだろう。（p. 676 参照。）

＜注3＞ 「ねじる」は，5段活用の例だけをあげたが，1段活用の例もある。

○首をねじてあるのだから鳴く事はできないのだ。（出家とその弟子 38～39）

○そこの針金からひったくるようにして取った手拭を捩じて（むらぎも 210）

〔199〕 まがる／よじれる，ねじれる，まわる

これらについても，他動詞の「まげる」などと同様のことがいえる。すなわち「まがる」は軸の方向がかわることだ。

○右手の人指し指が，怪我をしたかして曲がらない。（むらぎも 165）

これに対して「ねじれる」「よじれる」「まわる」は，軸の方向はかわらず，その軸を中心として回転することをあらわす。

○小腸がねじれていたから，（ベースボールマガジン 1956年1月 74）

○よじれたネクタイにアイロンをかけていると，（人間の壁・上 267）

○岡の上には水上げの風車が，青空に白い羽根をゆるゆる動かしながら，かつたんこつとんと呑気らしく音を立てて廻つてゐた。（或る女・前 185）

3.6 距　離

移動の距離がちがうことによって区別される動詞はかなりある。しかし，「あがる」と「おりる」が方向だけによって区別されるのと同様に，距離だけによって区別される動詞の対というものはほとんどない。

わりにはっきり距離の特徴がとらえられるのは，

とおまわりする，とおでする，とおのりする――ちかみちする

のように，「とお―」「ちか―」という要素をもっているものである。これらについても，「とおまわりする」「ちかみちする」は，もっとちかい（とおい）道がふつうなのだが，といったニュアンスがあり，純粋に距離だけの問題ではない。なお，これらが移動の距離なのに対して，「とおぼえする」は動作の場所までの距離であり，他から孤立している。

距離という特徴は，たいていは，ほかの特徴とくみあわさって，しかも，ほかの特徴がある結果として，出てくるのである。たとえば，「帰京する」は同じ国内での移動であり，「帰国する」は外国からの移動だから，一般には「帰国する」の方が長距離の移

動であろう。しかし，このちがいは，都と自国という目的地がちがう結果として生じたもので，目的地という特徴のかげにかくれている。「はい寄る」と「かけ寄る」の対立でも，一般に「かけ寄る」の方が長距離の移動をあらわすはずだが，これも移動のし方という特徴の結果であり，かげにかくれている。

これらの例における「距離」という特徴は，たとえば，pとm，tとrの対立における有声という特徴に似ている。mやrが有声音であることは，pやtとちがう点であることはまちがいないが，その特徴は，鼻音とか，はじき音とかいう他の特徴のかげにかくれて，p／m，t／rの対立をつくる主要な条件にはなっていない。

以下には，なるべく距離の観点が大きくはたらいているような何組かの動詞をとりあげるが，これらについても，同時に他の特徴がからみ合っていて，距離の観点だけをとりだすことはむずかしい。

〔200〕 とおざかる，とおのく＜はなれる
　　とおざける，とおのける＜はなす

「はなれる」も「とおざかる」も，ある場所やものからの距離が大きくなることをあらわす。ただし，「はなれる」の方は，その場所やものとの接触をうしなうという点に重点があり，

○丑松は机を離れて窓の方へ行つた。（破戒 299）

○桟橋からしづしづと離れて行く船の上に（或る女・前 85～86）

のようなのが典型的な例である。これらのばあいに，移動の主体である丑松や船は，移動する以前には，机や桟橋と接触しているのであり，「はなれる」は，この接触を失うことと，距離がへだたっていくこととを，ともにあらわしている。

これに対して，「とおざかる」は，距離のへだたりだけを問題にしている。最初に，移動の主体と，その移動の基点とのあいだに，接触があったかどうかは，どうでもよい問題だ。

○汽車の響きは遠ざかるにつれて，夜風のやうに聞えた。（雪国 42）

○何時(いつ)の間に動いたともなく船は桟橋から遠ざかつてゐた。（或る女・前 86）

この「或る女」の例では，前の例の「離れる」のばあいと同様に，船は最初基点である桟橋と接触していたのである。しかし，「雪国」の例では，「遠ざかる」主体である汽車の響きは，はじめから部屋とは別のところにはなれてあったのであり，単にその距離が一層大きくなったものである。

上の「或る女」の2つの例に見るように，一般に「遠ざかる」は「はなれる」よりも遠い距離のばあいにつかわれる。しかし，「或る女」の例では，たまたま

はなれる ⟶　　遠ざかる ⟶

のように，「はなれる」のつぎの段階として「遠ざかる」があるようであるが，ほかのいろんな用例をみると，むしろ

遠ざかる
⟶
⟶
はなれる

と図示すべきかと思われる。つまり，遠い距離の移動については，「はなれる」も「遠ざかる」も使われるが，近い距離では「遠ざかる」は使われない，ということである。

遠い距離の実例としては，つぎのようなものがある。

○何千哩も離れた北の海で，（蟹工船 30）

○〔ロケットは〕秒速四・九六キロで火星引力を脱しつつ双曲線軌道を描いて次第に火星から遠ざかり地球軌道に接近していった。（宝石 1956年8月 224）

「蟹工船」の例は「離れた」の形で状態的な意味だから，適当な例とはいえないが，これに近い文脈で動作性の意味をもつこともあるはずである。

近い距離の方では，「遠ざかる」は，つぎのように数メートルの距離が限度だった。

○早二三間のかなたに遠ざかつてゐた。（或る女・前 129）

○しだいに私の処から遠ざかつて行つて雪達磨をまた造りはじめた。（冬の宿 93）

これに対し，「はなれる」の方では，つぎのようにごく近い距離のものがある。

○もうどんどんと冷えて行く衣物の裏に，心臓のはげしい鼓動につれて，乳房が冷たく触れたり離れたりするのが，（或る女・前 123～124）

このばあい，「触れたり」と対立していることからわかるように，重点は接触をたつことにあり，その結果どのくらいの距離を移動するかは，問題でないのである。

「とおのく」は「とおざかる」にくらべて用例が少なく，また「記憶がとおのく」のように空間的移動でない例がかなり含まれているため，はっきりした比較はできないが，大体「とおざかる」とおなじようなものと思われる。ひじょうに遠距離のばあいと近距離のばあいとを1例ずつあげる。

○おつかぶさつて来るかと見上ぐれば，眼のまはる程遠のいて見え，遠いと思つて見れば，今にも頭を包みさうに近く逼つてる鋼色（はがね）の沈黙した大空が，（或る女・前 123）

○私に二三歩遠退（とほの）いて見て呉れろといふのです。（こゝろ 190）

以上に対応する他動詞「はなす」と「とおざける」「とおのける」のあいだにも，同様の関係があるものと思われるが，用例が少ないため，はっきりはいえない。ただ，「はなす」の例には，

○静かに葉子の手を離して，大きな眼で深々と葉子をみつめた。（或る女・前 26）

○彼は犬を鎖から放してやつて，それを台所の方へ呼んで来た。（田園の憂鬱 72）

のように，接触をたつという観点がつよくて，移動の距離を問題にしないものが，「はなれる」よりも一層多い。

なお，以上にただ「距離」といってきたものは，基準になる場所やものとのへだたりであって，厳密にいえば移動した距離とは一致しない。おおくのばあい，基準点の方はうごかないから，移動の距離がすなわち基準点とのへだたりであるかのようであるが，

つぎのような例では，この2つが一致しないことは，あきらかである。

○今はただ二頭になつて後をかなり離して鼻でせり合つてゐる一つは，（冬の宿 189）

このばあい，後に走っている馬が基準点だから，「離して」のあらわす距離は，移動の距離よりもあきらかに少ない。

同じく「距離」といっても，「はい寄る／かけ寄る」や，「くだる／おりる」の差がまさに移動の距離のちがいであるのに対し，これは移動の結果としての距離である。

〔201〕 くだる＜おりる

「おりる」と「くだる」は，同じような文脈でつかわれることがある。

○砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。（こゝろ 230）

○そのまゝゾロゾロタラツプを下りて行つた。（蟹工船 92）

○空車荷車の林を廻り，坂を下り，野路を横ぎる響。（武蔵野 13）

○またタラツプを下つた。（蟹工船 107）

「こころ」と「武蔵野」の例は，ともに現代日本文学全集（改造社）につけられたルビにしたがったのだが，それがなければ，これらをそれぞれの「おりる」「くだる」と読みわけることはできないはずである。

しかし，傾向としていえば，「くだる」は一般に「おりる」よりも長い距離の移動をあらわす。もっとくわしくいうと、比較的高い位置からの長い移動（たとえば「山を～」）では，「おりる」も「くだる」もつかわれるが，つぎのような低い位置からの短い移動のばあいは，「くだる」はつかわれない，ということである。

○其の儘二階に上つたが下りて来ない。（蒲団 60）

○おくみはやがて土間へ下りて，（桑の実 87）

すなわち，図示すれば下のようになり，「おりる」の意味領域の方がひろい。



このことは，「おりる」がより結果的であるのに対し，「くだる」がより経過的であることと関係があると思われる。すなわち，かなり長い距離であれば途中の経過が問題になるが，一瞬のうちに下に到達するような短い距離では，これが問題にならないのである。したがって，長い短いといっても，それは絶対的な距離であるよりも，移動する主体の大きさや運動の速度との相対的な関係によってきまる長さである。人間的尺度からは問題にならない距離――たとえば，人間なら一足で移動できる座敷から土間への距離も，もしナメクジがはうとすれば，かなり長い距離になり，これを「くだっていく」などと表現することができるであろう。つぎの例で「くだる」がつかわれているのも，このような観点から説明することができる。

○甘い温かな乳汁が滾々と出て来て，咽喉へ流れ込み，胸を下つて，（平凡 27）

このばあい，大切なのは，乳が胸を下ってどこにゆきつくのかという結果ではなくて，胸を下っていくときの感じそのものである。そして，そのような途中の経過を問題にできるほど，乳にとって胸は長い道のりなのである。

距離がもっとも短いのは，出発点が＜場所＞というよりは＜物体＞に近いばあいであり，これは当然「おりる」の領域である。

○終つて演壇を下りる頃には，手に持つた帕子が紅く染つた（破戒 291）

○彼はどうしても寝台からおりなかった。（真空地帯・上 37）

＜乗りものから出る＞ことをあらわす用法が「おりる」だけにあるのも，この，物体から「おりる」の延長上にあるものと見れば説明がつくであろう。

〔202〕 ふる／したたる，たれる＜おちる

これらは，どれも（おもに）液体の下降をあらわす動詞で，そのちがいはいろいろな面にあり，かんたんではないが，1つの条件としては距離の大きさがある。すなわち，「ふる」がおもに空から雨・雪などのおちることで，その距離はほとんど無限といってもよいのに対し，「したたる」や「たれる」は数十センチから，長くても数メートルのことが多い。

実例からいうと，「ふる」ものの大部分は雨か雪，またはこれに類するみぞれ・しぐれ・ひょうなどで，したがって特に「空から」などと出発点を示したりはしていない。なお，天然現象に属するものではあるが，つぎの2例は特殊である。どの程度一般的に用いられる表現かは疑わしい。

○「ケンタウルス，露をふらせ。」いきなりいままで睡つてゐたジョバンニのとなりの男の子が，向うの窓を見ながら叫んでゐました。（銀河鉄道の夜 310）

○霧が降つてきた。深い霧だわ。（冬の宿 100）

このような自然現象以外には，液体について「ふる」で表現した例はなかった。液体以外のものについて「ふる」を使ったものとしては，つぎのような例がある。

○地球の薄皮が破れて空から火が降るのでもなければ，（高野聖 26）

○旅をする人が，飛騨の山では蛭が降るといふのは彼処でござんす。（高野聖 41）

○枝からはぼろぼろと白い粉が降るやうにこぼれて，（田園の憂鬱 32）

この「田園の憂鬱」の例は「降るやうに」であって「白い粉が降った」とはいっていないが，とにかく実例の中ではこれがいちばん短距離の下降の例である。

「したたる」「たれる」の例は，以下のように1メートルを出ない程度の距離のものである。

（したたる）

○噛みしめたその左の腕から血がぽたぽたと滴つてゐた。（或る女・前 88）

○蠟燭の蠟がぽたぽたと土の上に滴る。（桑の実 133）

（たれる）

○彼女の御召の小袖から，水がだらだらと垂れた。（あらくれ 237）
○私が陸へ上つて雫の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると，（こゝろ 9）

「おちる」の主体は，液体にかぎられないが，その距離もまたさまざまで，「ふる」「したたる」「たれる」などより範囲が広い。主体が液体のばあいにかぎっても，

○雨はシャワーのやうに機械的に連続して降り，ぴたりと止み，また不意に，栓をひねつたやうに落ちて来た。（野火 103）
○さつさと如露を動かすと，水滴がひろがつて土に落ちるとき，（仲子・上 169）

のように，距離の長いのも短いのもある。「野火」の例では，「降る」とまったく同じで，空からの何百メートルかの距離があり，「仲子」の例では数十センチである。

〔203〕 よる，ちかよる＜ちかづく
　　よせる＜ちかづける

「ちかづく」の用例には，

○私は彼女に近づいて，揶揄ふやうに耳打ちした。（風立ちぬ 110）

のようにごく近距離までせまることを示すものも多い。（これは大体人が別の人またはものに「ちかづく」ばあいである。）

しかしまた，

○山気は窓から流込んで，次第に高原へ近いたことを感ぜさせる。（破戒 102）
○淋しい航海であつた。日本へ近づくにつれ，不幸が待つてゐはしまいかといふ不安が募つた。（仲子・上 133）

のように，まだかなりの距離がある地点まで「近づいた」ことを示すものもある。（これは，当然，乗りものがある場所にちかづく例に多い。）

これに対し，「よる」「ちかよる」などは，前者のばあい，すなわちごく近距離までの接近をあらわす例ばかりである。

○いつのまに寄つて来たのか，駒子が島村の手を握つた。（雪国 170）
○女中は近寄りながら謙作に丁寧にお辞儀をした。（暗夜行路・前 85）

「ちかよる」の例でもっとも遠距離なのは，つぎのばあいだが，これでも肉眼で見える距離である。

○離れて見ると屏風を立てた様な山又山，何処に舟が着けられやうかと覚束なく思はるゝが，近寄つて見ると処々に小島もあれば，山穿ちて入江潜み（思出の記・上 70）

「よる」についても，この程度の距離の例はありうるはずだが，実例としては人が他人のそばによる程度，つまり数メートルぐらいの距離をこえた例はない。

「はなれる」のばあいにならって，図示するとすれば，以下のようになるであろう。

近づく
←――――
←――
近よる・よる

なお，このばあいの距離が，基準点とのへだたりであって，かならずしも移動の距離と一致しないことは，「はなれる」のばあいよりも，一層はっきりいえることである。「はなれる」ときは，移動の距離が大きいほど一般に「はなれる」度合いも大きいのだが，「近づく」ばあいは，逆に基準点との距離は小さくなるからである。

〔204〕 さがる，さげる＜ひっこむ，ひっこめる

これらの動詞は，みな，おもてだったところ，人目につくようなところから，奥まった，目立たないところに移動することをあらわす。

○女給は勘定場の方へさがつて行つた。（多情仏心・前 155）

○膳を下げに来たら，今度こそは勇気を振起して物を言つて見よう，（平凡 116）

○笹巻の鮨が持出された。老父は一礼して引込んで行つた。（河明り 272）

○私が出て挨拶をするといつて，聴かなかつた父親に顔を顰めて，奥へ引込めておくやうにしたお島の仕打を，小野田は気にかけて言出した。（あらくれ 214）

上の例では，移動は比較的みじかい距離，おなじ家の中での1室から別のへやへの移動という程度のものである。しかし，このような具体的な動作でなく，もっと大きな場面について，長い距離を移動するばあいにも，「ひっこむ」はつかわれる。

○世に立つて働くことが出来ないやうな身分なら，寧そ山奥へ高踏め，（破戒 113）

「客の前からさがる」「客の前からひっこむ」という表現は，おたがいにおきかえることができる。しかし「山奥へひっこむ」という表現は「山奥へさがる」とはいえない。このばあい，ちがいは，単に距離の大小にあるだけではなく，一方が具体的に特定の客などの前から身をかくす一時的な現象であるのに対し，他方は生活様式の変化をあらわしているのである。したがって，山奥などへ行かなくても，町の中でひっそりと暮らしているようなときには「ひっこむ」といえる。

○茅場町の店舗を畳み，向島の言問の奥へ引込んだ。（末枯 48）

○未亡人らしく小石川の古い家に引つ込んでゐた母が，（真知子・前 7）

これらの例でも「さがる」であらわされるような移動よりは長い距離だといえる。しかし，より本質的には，移動の大小よりも，生活様式の変化に重点があることはあきらかである。「末枯」の例では，たしかに，今まですんでいたところから移動したのだが，「真知子」の例では，すんでいる家の位置は多分かわらず，ただ，今までは外に出ることが多かった生活が，自分の家の中だけでいとなまれることが多くなった，という変化を「ひっこむ」であらわしているのである。「ひっこめる」については，「ひっこむ」と平行するような，うまい例がなかったが，「家族を田舎へひっこめる」のような例は，やはりありうるであろう。

〔205〕 うごめく＜うごく

「うごめく」は，うごく距離が小さいばあいだけにつかわれる。

○区切られた寝床にゴロゴロしてゐる人間が，蛆虫のやうにうごめいて見えた。（蟹

工船 17)

これに関してつぎの例はややずれているようにも思われる。

○山北は染太郎に腕をとられながら，タクシイのうごめいている通へ出た。（講談倶楽部 1956年5月 206)

しかし，このばあいの書き手の位置は，いわば遠い所にあり，そこから見ればタクシーの動いている距離もわずかなものに思われるのであろう。

「うごく」は，短い距離についても，長い距離についてもいう。

〈短〉

○波が退いて，あらはれた浅瀬の泥に，蟹が動いてゐる。（帰郷 64)

〈長〉

○灰色の雲が拡がったまゝ大きく動いてゆく。（くれない 115)

〔206〕 うろつく／さまよう／さすらう

これらの動詞のあいだには，移動の距離の点でちがいがみられる。へやの中をあるきまわるように，ひじょうに距離の短いばあいには「うろつく」をつかう。一目で見渡せるくらいの，また，一度に歩けるくらいの範囲，たとえばある林の中・町の一角くらいの範囲については，「さまよう」がつかわれる。また，広く1つの国の中をあるいたり，外国まで出かけていくように，何か月もかゝる旅行には「さすらう」がつかわれる。ただし，このようなちがいは，典型的なばあいをあげたので，おのおの，ほかの状況にも使われることがある。また，＜移動の距離＞より＜移動する範囲，広さ＞といった方がよいかもしれない。狭い範囲の中でも，何度も往復していれば，移動の距離は長くなるが，これらの動詞を直接的に規定しているものは，そういう意味での移動の距離ではなくて，あるきまわった範囲の端から端までの広さ，ということだからである。

まず，「うろつく」は，つぎの例にみられるように，おなじ建物の中のある場所，具体的にはせいぜい数メートルの範囲内をあるくばあいに使われることがある。

○来ると急いで部屋を出て縁側を彷徨(うろつ)く。（平凡 121)

○私が暗室の前をうろついてゐるともうかたかたと音を立てて自分がここから見てゐるぞと知らせてくれる。（機械 10)

これらは，「さすらう」では，もちろん，おきかえることはできないし，「さまよう」でもやや大げさないい方になる。しかし，「うろつく」はもうすこし広い範囲，むしろ「さまよう」がよくつかわれるような現象にも用いられる。

○なにか腹の立つことがあると二三時間も外をうろついてくる。（冬の宿 46)

さらに，もっと広い範囲の場所をあるくことに，つかわれた例もある。

○ひとりで外国をうろついてゐると，さういふ気持になるものだよ。（帰郷 130)

これは，むしろ，「さすらう」といえるような例だ。しかし，この文脈でも「うろつく」と「さすらう」とでは，多少違いがみとめられるかもしれない。すなわち，「さすらう」の方だったら，このばあいの「外国」が複数で，いくつもの外国を渡りあるいていると，というような意味にとりたくなるのに対し，「うろつく」の方はもっと具体的

で，外国の地点を，あるとき，たまたま歩いていると，というような状況の描写を思わせる。せまい範囲での移動をあらわすということは，それだけ「うろつく」の描写が具体的で，これに対して，広い範囲における移動をあらわす「さすらう」は，抽象的だということになる。

「さまよう」については，比較的せまい範囲の例として，たとえば，つぎのようなものがあった。

○あの林檎畠が花ざかりの頃は，其枝の低く垂下つたところを彷徨つて，互ひに無邪気な初恋の私語を取交したことを忘れずに居る。（破戒 128）

○委員席に現はれたかと思ふと，リングサイドの観衆の中をさまよひ，（闘牛 144）

もちろん，これは，「うろつく」におきかえることもできる。また，かなり広い範囲をさまよう例，つまり「さすらう」に近いような例としては，

○志士政客の日本を彼方此方さまよふ者も多かつた。（思出の記・上 108）

○永劫に，この地上をさまよつてゐるといふ話があるんだがね。（帰郷 51）

などがあった。

「さすらう」は，

○女の身空を唯独り米国の果てまでさすらつて行くのを（或る女・前 48）

のように，ひじょうに遠い範囲についていうのがふつうだろう。しかし，かなりせまい範囲，むしろ，「うろつく」や「さまよう」がふつうかと思われる状況についてつかわれた，つぎの例もあった。

○しかし不幸な若者は祠のほとりをさすらひ，疲れると草の上につくねんと坐つて膝を抱き，月にてらされた海を眺めた。（潮騒 110）

「さすらう」の実例は以上にあげた2つしかなかった。

3.7 回　数

純粋に回数をあらわす要素はなさそうである。しかし，「～あう」「～かわす」は，たがいにする動作だから，当然何回もくりかえされるわけだし，「～しきる」「～たてる」「～まくる」などの要素も，いきおいのよさをあらわすとともに，回数の面におけるニュアンスをもっているようにみえる例がある。たとえば，

○王仁三郎が作り出し書きまくる神話のかずかずは，（人生手帖 1956年10月 77）

漢語には，「一周（二周，三周……）する」「三拝する」「五泊する」「頻発する」のように，回数を示す要素をもったものがある。

全体としての回数ではなく，何度目の動作であるかをあらわす要素には，2度目であることをしめす「～かえす」「～なおす」がある。「再」も，原則として「再発する」「再起する」「再刊する」「再会する」「再検討する」のように，2度目であることをあらわす。しかし，つぎの例では，「二拝する」というのと同じように回数をあらわしている。

○一言云ふにも再拝し，一言聞くにも開き直つて手をつかふると云ふ様に，馬鹿にし

きつた仕打をする。（思出の記・上 114）

〔207〕 かよう＜いく

移動の回数を積極的な特徴とするものには，「かよう」がある。「かよう」は，2回以上いくばあいにつかう動詞で，1回だけの移動にはいわない。これに対して，ほかの移動の動詞は，1回でも2回以上でも，特に制限なくあらわす。つまり「かよう」とほかの動詞との対立は，積極的ではなくて消極的である。上には「いく」をあげたが，これは「かよう」以外のすべての代表という意味であって，特に「いく」がはっきり「かよう」に対立している，というわけではない。

○御嬢さんは学校へ**行く**上に，花だの琴だのを習つてゐるんだから，（こゝろ 179）

などにおける「行く」は，習慣的にくりかえされる動作をあらわし，つぎの「かよう」とほぼ同じである。

○雪江さんは一ツ橋のさる学校へ**通つて**ゐたから，（平凡 73）

しかし，同じ「学校へ行く」という表現でも，つぎのような，1回かぎりの動作をあらわす例は，「かよう」におきかえられない。

○いよいよ明日（みょうにち）は，学校へ**行つて**告白（うちあ）けよう。（破戒 297）

「かよう」ことは，原則として，

(a) 同じ主体が

(b) くりかえしておこなう

移動だが，これら (a) (b) おのおのの条件に対して，例外となるのではないかとおもわれる用例があるので，以下にそれをあげることにする。

(a) ちがう主体による移動

「かよう」主体の多くは単数だがつぎのように複数の例もある。

○近在から**通ふ**児童（こども）なぞは，絨（よろ）の布片（きれ）で頭を包んだり，肩掛を冠（かぶ）つたりして，声を揚げ乍ら雪の中を飛んで行く。（破戒 300）

しかし，この例についても，ひとりひとりの子どもをとってみれば，やはり，くりかえし学校にいっているわけで，その点では主体が単数のばあいとかわりない。ところが，つぎのような例では，そう言いきれないようにおもわれる。

○最初に申す通り路がいかにも悪い，宛然（まるで）人が**通ひさう**でない上に，（高野聖 19）

○たまさかの殿城山（とのしろやま）の間道を越えて鹿沢温泉（かざは）へ**通ふ**旅人が立寄る外には，（破戒 109）

これらの例で，「かよう」主体である旅行者は，やはり複数だが，その人たちが，かならずしも＜くりかえして＞これらの道をとおることを表わしている，とはいえない。なかには何度もその道をとおる旅行者があったとしても，「かよう」の表現している重点はそこにはなく，多くの主体による多くの移動がおこなわれたことにある。つまり，主体のちがいを無視してならしたばあいにだけ，はじめてこの移動は＜くりかえし＞としてとらえられるものである。

上のは，2例とも明治時代の例で，あるいは，この用法は多少古いのかともおもわれる。現代の用例としては，つぎの1例があった。

○ロンドンを通うすべてのバスが，その赤い横っぱらに，リグレイのチューインガムとコカコラの広告をつけて走っていた。（改造 1953年12月 95）

バスは一定の道をはしるにきまっているものだから，このばあい，1台1台のバスを問題にしても「かよう」といえるだろう。したがって，これを上の明治時代の用例とおなじに見ていいかどうかには疑問があるが，単に多くのバスが「行きかう」状態を表現したものと，とれないこともない。

なお，「高野聖」と「改造」との例で，「～に（へ）」という目的地の表現がかけていることに注目したい。これは「かよう」のばあい，例外といってもよい事実である。「かよう」目的地は文中に示されているのがふつうで，たとえその文のなかにはなくても，

○其処から学校へは何程も無いんです。克く和尚さんは二本榎の道路を通ひました。（破戒 253）

のように，前後の文脈から，あきらかにわかることが多い。ところが，「高野聖」や「改造」の例では，どこへ「かよう」のかが示されていないだけでなく，そもそも問題ではないのだ。このことは，おそらく，これらの例が＜くりかえし＞からズレていることと，関係があるであろう。

(b) くりかえしでない，1度の移動

○その時長十郎が心の中には，非常な難所を通つて往き着かなくてはならぬ所へ往き着いたやうな，力の弛みと心の落着きとが満ち溢れて，（阿部一族 32）〔ルビは岩波文庫本による。〕

この例は，しいて解釈すれば，何度もくりかえしての動作，とみられないこともないが，それは不自然であろう。問題になるのはこれ1例で，あるいはこれもやや古い用法かともおもわれる。

〔208〕 うねる，くねる＜まがる

「うねる」「くねる」は何度もまがっているばあいにいう。

○うねり，くねったわかりにくい小道がいくつもあって，（暗夜行路・前 154）

○六軒続いた家並みのうねっている，かしいだ長屋であった。（くれない 32）

○角櫓の白壁と高い石垣と年老いてくねった松の幾株とは，（人間の壁・上 64）

これらについて，何度もまがっている，まがる回数が多い，という積極的な根拠はないが，そうとるのが自然であろう。1度しかまがっていないときに，「うねる」「くねる」と絶対にいえないかどうかは問題だが，すくなくとも傾向としては，何度もまがっているときに，これらの動詞が使われる，とおもう。

「まがる」は1度まがったばあいでも何度もまがったばあいでも使える。

○併しながら坂は曲つて最早勝助父子(もうかつすけおやこ)の姿も見へぬ。（思出の記・上 40）

これは1度しかまがっていない例である。

○突き当り，曲り，ゆるく廻って，やがて川は東京市内へ入ってゆく。（くれない 49）

はっきり何度もまがったともとれる適当な例はなかったが，上の例は，何度もくりかえしまがったことをあらわしていると，とれないこともない。

○くの字に曲つた階段を降りきると意外に内部は広く，（闘牛 92）

○階段は左右にわかれ，くねりながら五階までつづいている。（人間の壁・上 230）

この2つの例は，建物の構造としては，おなじようなものであろう。ただ1か所だけとれば，くの字に「まがった」階段であって，それが何度もくりかえされることによって，「くねって」いるといえるのである。「闘牛」の例では「くの字にくねった階段」とはいいにくい。「人間の壁」のばあい，「くねりながら5階までつづいている」といえば，1階から5階までの全体を頭においていることであるが，もし，これを「まがりながら5階までつづいている」といいかえると，1階ごとのまがり角を頭においていることになる。

〔209〕（はずむ＜はねる）

「はずむ」は，からだや物体自身に弾力があって「はねる」ようすに使われる。したがって，ただ1度だけではなく，何度もくりかえし，とびはねるようすをあらわす。例がすくないので，このことを典型的に示すような実例はさがせなかった。また，「はずむ」が，1回だけ「はねる」ばあいには，けっして使われない，ともいいきれない。しかし，その点も用例からは，はっきりいえない。

○霰の降るときは水面に浮き跳ねて悦ぶといふ琵琶湖の杜父魚(かくぶつ)を（河明り 264）

のように，同じ主体が何度もとびはねるときの「はねる」は，「はずむ」におきかえても，あまり不自然ではない。しかし，

○狭いとはいひながら跳ては越せぬ堀を隔てて，（土・上 166）

のように，あきらかに1回の跳躍をあらわすばあいに，「はずんでは越せぬ堀」というのは，おかしい。このことはまた，「はねる」が実際にあらわれた動作について使われ，「はずむ」の方はそのような動作をひきおこす性質，つまりものに弾力があるという，動作からみれば潜在的な性質をあらわすのに用いられる傾向があることと関係がある。

○お葉のふところの中の，弾む双つの隆起物（読切小説集 1956年6月 445）

のように，実際に動作がおこっていなくても，ものの性質をあらわすのに，「はずむ」は使われる。

〔210〕 たたく／うつ

「たたく」の意味について，辞典は「続けてうつ」「くり返してうつ」のように規定していることが多い。しかし，現代語では，このように，「たたく」という動作の特徴が，くり返して行なわれることだ，とはみとめられない。すくなくとも，この点につい

て，「たたく」は「うつ」とほとんど違わないようだ。つぎにあげるように，「たたく」も「うつ」も，どちらも1回のばあいにも，また数回くりかえして行なわれるばあいにもつかわれる。（用例の質をそろえるために，人間が人間に対してする動作の例だけをあげる。）

〈1 回〉

○背後から一ツ背中を叩いて，（高野聖 68）

○「冥加至極の事ぢや，随分お手柄をなされい」と云つて背中をぽんと打つた。（阿部一族 77）

〈数 回〉

○薪を持ち出し，それでもつて私の肩をとんとん叩いた。（富岳百景 67）

○その顔は，寝台の上においた剣のさやでつづけさまに打たれた。（真空地帯・上 112）

もちろん，実例からはその動作の回数がわからないものがある。

○冷たいコーヒーを飲んでいる肩を叩いて，辻さんが鉢巻をゆるめながら，讃辞をあびせてくれた。（放浪記 61）

○いきなり駈寄つて，弟の頭を握拳で打つ。（破戒 58）

これらの例では，1回うった（たたいた）のか，または数回なのか，わからないし，そのことは，どうでもよいのである。大部分の実例は，このように，つづけてうったかどうかを問題にする必要がないもので，「たたく」は回数が多いということは，傾向としてもみとめるのがむずかしい。

つぎの例では，「うつ」と「たたく」が，会話文と卜書きの中で使いわけられたとは思われない。もちろん，回数のちがいによって使いわけたわけでもない。このように，ほとんど同じ文脈で「たたく」も「うつ」も使われるのである。

○善鸞　お前の頭をたたいてみろ。

太鼓持ち　おやすいことで。（おのれの頭を扇子で打つ）

善鸞　（狂うように）もっと，もっと。

太鼓持ちつづけざまにおのれの頭を打つ。（出家とその弟子 93）

〔211〕 つつく／つく

辞典の中には，「つつく」の意味を「何度もつく」のように説明しているものがある。しかし，このように「つつく」と「つく」のちがいを回数の点にもとめようとするのは，まちがいである。

「つく」については，あきらかに1回の例と何回もの例とがある。

○茫然机に頬杖を突てゐる背中を，誰だかワツといつてドンと撞く。（平凡 78）

では1回ついたのだし，

○雑夫を後からグイ，グイ突きながら，押して来た。（蟹工船 34）

では何度もついたのである。しかし，もちろん何回ついたのかはっきりしない例の方が多い。

○お加代は多少下品な調子でいって，お牧の肩を突いた。（暗夜行路・前 123）

のような例では，1回とも数回ともとれる。

「つつく」の方では，たとえば，

○秋には鳥のつついたのを探して柿の木にのぼって熟柿を食った。（むらぎも 123）

のように，鳥がついばむ意味のばあいや，

○君と牛肉を突つつきがら話したことがあつたね。（波 160）

のように，料理を食べるばあいには，＜何度も＞という規定があてはまるだろう。しかしそのほかには，1回にせよ数回にせよ，どちらともはっきりきめかねる例ばかりだった。

「つつく」の中で多いのは，

○従妹がつつくので，順番がくると私も出て行つた。（冬の宿 181）

のように，注意をうながすために軽くつく動作だが，今の例でも，1度つついたのか数回つついたのかは，まったくわからない。注意をうながす以外の例としては，つぎのようなものがあった。

○針の先でつつかれれば風船は爆発してしまう。（人間の壁・上 36）

○兼博労はちよいと蟷螂をつついて見て独り興がつて笑つた。（土・上 209）

これらでも，やはり回数は不明である。また，

○すわっとばかり，たちまち屯所は，蜂の巣をつついたように騒然たる気配につつまれた。（平凡 1956年12月 131）

という慣用句のばあいでも，1度とも数度とも，どちらにも考えられる。

3.8　手段・方法

手段・方法の面で区別される動詞は多い。複合動詞の多くは，前要素によって手段・方法をしめす。たとえば，はいる意味の「 ～ こむ」では，

おどりこむ，かけこむ，ころがりこむ，しのびこむ，すべりこむ，とびこむ，なだれこむ，のりこむ，ふみこむ，まいこむ，わりこむ

など。漢語動詞についても同様で，ころし方についても，

圧殺する，斬殺する，刺殺する，射殺する，銃殺する，毒殺する，撲殺する，薬殺する，扼殺する

など，多くの方法が区別される。

ところで，手段は，目的のために意図的にえらばれるものである。したがって，

縊死する

における死に方は手段だが，

圧死する，病死する，溺死する，轢死する

などでは，自殺の手段としてえらばないかぎり，手段というよりも原因である。

〔212〕 はしる，かける／あるく／はう／ころがる／すべる
　　とぶ

ながれる／およぐ

上にあげたような動詞は，移動のしかたによって，おたがいに区別される。移動のしかたに重点があるのだから，どこからどこへ移動したのか，という結果よりも，途中の経過を問題にしているわけで，移動の段階のところで「② 経過の段階に重点があるもの」(p. 207) としてあげた「とおる」「わたる」などにちかい。つまり，「～ ている」の形でおもに進行中の状態をあらわす，「～ ていく」の形がある，経過点をあらわす「～ を」という目的語をとる，などの点で「とおる」などと共通である。

これらの動詞は，ほかの移動の動詞にくらべて，移動としての性格がよわい。たとえば，「のぼる」「いく」「すすむ」など，方向の観点をおもな特徴とするものについていうと，＜方向＞という特徴は，移動に特につよく結びついている。(移動に固有の特徴とまではいえない。「向く」という非移動的な状態変化も，方向によって特徴づけられている。) これに対し，「あるく」と「はう」とのちがい，すなわち直立かどうかの姿勢の問題と，手足ともつかうか足だけかという問題とは，移動という動作に特につよく結びつくべき必然性をもっていない。「ける」「なでる」「すわる」など，ほかの多くの動作にも，要するに人間の動作をあらわすもの一般にみられる問題である。

このような意味上の事実に応じて，形式上では，これらの動詞は，出発点・到着点をあらわす目的語をとることが，ほかの移動の動詞にくらべてすくない，といえる。もちろん，ないわけではない。

○本郷から**歩いて**とっとっと遠い松井町へ帰って行った。(むらぎも 217)

○もつと，つきとばして頂戴。ここからごろごろ転がるわ，(闘牛 107)〔ただし，これは全体として比ゆである。〕

○真直ぐに床を横切つて，演奏中の画家のところへ歩くことだつた。(帰郷 93)

○砦からは二三十人ずつの黒菅勢が鹿柴や逆茂木を伏せた丘に**走った**。(落城 32)

しかし，このようなばあいには，つぎのように「～ ていく」「～ てくる」の形をつかうことが多い。

○突然うしろから自動車が**走つて**来て，彼の車を追越した。(波 241)

○行介は渚に**走つて**行つた。(波 382)

これらの動詞は，移動のしかたがおもな特徴になっているが，二次的な特徴としては，その移動のおこなわれる速度や，その場所の条件がある。すなわち，「はしる」という動作は，当然の結果として，一般に「あるく」や「はう」よりも早い速度でおこなわれる。また，「はしる」「あるく」「はう」「ころがる」は固い平面の上で，「すべる」は固い平面か水の上で，「とぶ」は空中で，「ながれる」は空中・水上・水中で，「およぐ」は水上・水中でおこなわれる動作である。逆にいえば，それらの環境・条件のもとでの移動であることが，「あるく」「とぶ」「およぐ」など，それぞれに応じた移動のしかたを生じさせているのである。

〔213〕 つれる，ひきいる／はこぶ

これらの動詞は，主体が他のものを移動させることをあらわす。「つれてくる」「ひきいていく」などは，対象が人にかぎられるが，「はこぶ」は人よりも，むしろ，ものについていう。しかし，今は「はこぶ」についても，人のばあいだけをとりあげる。

「はこぶ」が人・ものを同列に対象とすることは，つまり人を＜もの＞なみに扱っていることをしめす。ものなみ，というのは，人の意志を無視したことだ，とも考えられる。つぎのような例については，そうとれそうだ。

○患者を病室代用の応接間に運んだ後，（本日休診 109）

○私が戦ふために海を越えて運ばれながら，私に少しも戦ふ意志がないため，意識と外界の均衡が破れた結果であつた。（野火 15）

しかし，つぎのような例については，はこばれる人の意志を無視する，とはいえない。

○乗ってみるとそれは尻のどっしりした，息の長い強い馬で彼を広い背にのせてひとりでにはこんで行った。（真空地帯・上 151）

○今日小石川の奥から築地まで電車で運ばれて行くのだつて，決して自動車代を惜しむのではなく，（真如子・前 77）

これらの例で，木谷や未亡人は，自分の意志によって移動しただけではなく，みずからすすんで，その馬や電車という乗りものをえらんだのだから，意志のありなしは「はこぶ」対象にとって本質的といえない。それで，はこばれる人が＜もの＞なみに扱われるかどうかということは，自分自身の力で移動するか，他のものの力によるか，という点にも，かかっているようにおもわれる。

〔214〕 つれる，ひきいる，はこぶ／やる，よこす＜おくる，とどける

これらは，すべて動作の対象となる人（もの）が移動することをあらわしている。（もっとも，「つれる」「ひきいる」は，これだけでは移動ではなくて対象である人に対する関係をあらわしており，「どこどこへつれた（ひきいた）」とはいえない。だから，「つれていく」「ひきいてくる」などと，移動の動詞をともなって，全体として移動をあらわしているもので考える。）このばあい，動作の主体，すなわちこれらの動詞の主語によってあらわされる人が移動するかどうかで，これらは，

移動――つれる，ひきいる，はこぶ

非移動――やる，よこす

不定――おくる，とどける

の3つにわかれる。つまり，

○そこへ沢田先生が，さっきの子供を連れてやって来た。（人間の壁・上 276）

では，沢田先生も子供もともに移動しており，

○或る日又七郎が女房に言ひ附けて，夜更けて阿部の屋敷へ見舞に遣つた。（阿部一族 62）

では，又七郎は動かずに，女房だけが動いている。

これらのグループについては，ほとんど問題はない。

「おくる」「とどける」については，すこしのべておかなければならない。

「おくる」には「荷物を自動車でおくる」のような「おくりとどける」意味と，「客をおくる」のような「見おくる」意味とがある。(「おくりとどける」「見おくる」というのは，もちろん便宜的な規定で正確なものではない。)「おくりとどける」意味は，ものについていうのが普通で，人についての例は，

○石切の刑務所から護送自動車で送られてきた木谷一等兵が（真空地帯・上 4）

という1例しかなく，しかもこれについても，「おくった」主体はだれであるか，はっきりしない。「おくった」主体が刑務所あるいは軍隊だとするならば，それは動いていないというべきだろう。そして，この例が「おくりとどける」の意味を一般的に代表しているといえれば，その意味の「おくる」は「やる」「よこす」のグループにはいることになる。しかし，もちろん，もっと多くの用例がないと，はっきりしたことはいえない。

「見おくる」意味のばあい，「おくる」主体は，おくられる対象である人の移動の途中までいっしょに移動するのが普通で，

○かへりに，娘さんは，バス発着所まで送つて来て呉れた。（富岳百景 66）

のようなのが代表例としてあげられる。ところが，つねにそうだとはいえない。

○雨が降つてゐます。お宅まで是非送らせて下さいな。（つゆのあとさき 101）

では，最終の到着点まで同行することになり，

○また人に送られて廊下に出ようとする時であつた。（帰郷 317）

では，おくり主は全然動いていないとみられる。この意味の「おくる」にとって重要なことは，移動する人（対象）に対して一定の態度をしめすことであって，おくり主の移動は必要条件ではない，ただ，多くのばあいにおくり主も移動するのだ，と考えられる。

「とどける」のばあいも，多分とどけ主が同行することがおおいだろう。しかし，「使をとどける」のように，自分は動かないでも「とどける」といえる場面も，ありそうだ。「とどける」が人を対象とした用例がほとんどないので，たしかなことはいえない。

〔215〕 おぶう，おう，せおう，しょう＜かつぐ，になう

「おぶう」「おう」「せおう」「しょう」は背中に荷物などをのせることをあらわす。（ただし「おぶう」には「背中におぶう」「背におぶう」という例はなかった。）

○衛士はあらためて姫を背に負ふと，（新潮 1956年5月 155）

○雌の産みつけた卵を背中に背負つて歩かなくつては（波 188）

これに対して，「かつぐ」「になう」は主として肩にのせることをあらわす。

○ジャンバーの男は，巻いた担架を肩にかついでゐた。（本日休診 109）

○二つの桶の繩に棒をとほして，肩に担つて歩きだしたのである。（潮騒 84）

「かつぐ」「になう」は，しかし，肩にのせるばあいだけに使うのではないようだ。この点について以下にすこし考える。

辞典では一般に「かつぐ」と「になう」とを同義語とし，ともに肩にのせるばあいに

使うと説明している。たとえば，岩波国語辞典では「かつぐ」の方を「肩にかけてになう。背おう。」とし，「になう」の方は「物を肩でささえ持つ。かつぐ。」としている。この2つの説明はまったく同じことをいっており，ともにからだの部分としては肩に限定している。（なお，「かつぐ」の説明で，「せおう」をいいかえの中にあげているのは適当ではないであろう。「せおう」は肩ではなくて背中にのせることだからである。岩波国語自身が「せおう」については「せなかにのせて負う」という解釈をのせている。）実例でも，「かつぐ」「になう」について，からだの部分がはっきり指摘されているのは，上にあげたように肩を使うばあいである。

ところが，本当に「かつぐ」「になう」が肩にかぎられるのかどうかには，問題がある。たとえば，岩波国語辞典では「担架」について「傷病者をのせ，手でになってはこぶ道具。」という説明をつけている。このばあいの「になう」は肩にのせることではなく，手を下にたらした状態で，持ってささえることを意味すると思われる。すなわち，やはり「担架」について角川国語辞典が，「病人・負傷者などを乗せて，ふたりの人が前後に立ち，手にさげて運ぶ道具。」とくわしく規定しているような状況をさすものであろう。また，例解国語辞典は「担架」について，「死者傷病者などを横にして載せ，前後からかついで運ぶ道具。」とし，新辞源もこれに近い規定をして，やはり，「かつぐ」と表現している。このように「になう」や「かつぐ」ということばを使うことは，担架のはこび方をはっきりさせる上に必要なことであって，ほかの多くの辞典がしているように「傷病者をのせてはこぶ道具。」というようなかんたんな規定では，それが車のようなものであるかどうかさえ，はっきりしない。担架のはこび方としては，前後にふたりまたは4人が立って，棒を肩にのせてはこぶやり方もある。しかし，もっともふつうのはこび方としては，やはり角川国語辞典の規定するように，手を下におろした状態でもっていくことだと思われる。そして，いくつかの辞典では，このような状態を表現するのに，もっともふさわしいことばとして，「かつぐ」「になう」がえらばれているわけである。

では，これらが本当に標準的な用法とみとめてよいかどうかというと，それにも疑問がのこる。すなわち，東京の日常語としては，これにあたる表現がないというのが正確なようであり，「かつぐ」およびその文章語的な同義語としての「になう」は，ともに肩にのせてはこぶ動作をいうようである。それで，これらの辞典の記述は，あるいは，「担架」の項目の筆者の方言的な言語経験を反映したのではあるまいか，との見方もある。担架をはこぶような動作についての方言分布は，あきらかになっていないが，少なくとも関東の一部には，これに「になう」をあてる方言がある。また「担」という漢字の訓として「になう」があることが，このような規定をするきっかけになったのではないか，とも考えられる。いずれにしても，これらの表現が標準語として正しいものであるかどうかは，かんたんにきめるのが，むずかしい状態であり，もし正しいとすれば，「かつぐ」「になう」を肩にのせることに限定する現在の辞典の規定は，せますぎることになるわけである。

「かつぐ」「になう」の問題点としては，担架をもつような動作を一応別にしても，背中にのせる，すなわち，「せおう」「しょう」などとの区別がはっきりあるかどうかということがある。例解国語辞典では，「かつぐ」について，「物を肩に載せ，また肩から背中にまわして背負う。」という規定をあたえている。この後半の部分，「肩から背中にまわして」というところまで考えるとすれば，事実上「せおう」などの意味領域をふくみこんでしまうことになる。たとえば，つぎの2つの例は，まったく同じような事実をあらわしており，「かつぐ」と「せおう」とを入れかえてもかまわない。

○ズタ袋を担いで歩けば，任務が果されるようなものだった。（自由学校 165）

○めいめいに，自分のズタ袋を背負えば，済んでしまうのである。（自由学校 176）

袋は背中にのっているにちがいないが，同時に，それをささえるひもは，肩にかかっているのだろうから，そのどちらに注目するかによって，「かつぐ」とも「せおう」ともいえるのである。

こうして，「かつぐ」にしろ「せおう」にしろ，肩から背中のあたりに，というようにばくぜんとした限定でたりるようになると，そこからさらに抽象的に，要するに「もってくる」ことをあらわすような用法がでてくる。

○青山さんなんか，まだ二十四，五の若い先生で，四国からいわしの煮ぼしを大袋に詰めて背負ってくるし，中野さんは岐阜県から，あの混雑した汽車に乗って，兵隊靴をはいて，炭俵を二俵も背負って来たわ。（人間の壁・上 238）

○そうやって，みんなが各地の産物をかついで持ち寄って，やっとこさ，組合の結成をやったの。（人間の壁・上 239）

この例で，「背負って来る」の2例は，たしかに自分の背中にのせてきたという具体的な動作を表わしている，といえるだろう。しかし，あとの「かついで」は肩にのせてきたというような具体的な動作をさしているのではない。実際には，肩にのせたのもあるだろうし，また，すぐ前で，「せおう」と表現されているように，背中にのせてきたものも，さらに手でぶらさげてきたものもあるだろう。それらをひっくるめて，要するにもってきたことを表わすのが，このばあいの「かつぐ」ということばである。

「になう」や「おう」についても，つぎのように抽象的なばあいがある。

○息子には洋品雑貨をになはせて村々を売り歩かせ（厚物咲 23）

○確にこの子供達が一層沢山に蚤を負うて来るに違ひない，（田園の憂鬱 53）

これらについても，「になう」が肩だとか，「おう」が背中だとかいうふうに，からだの部分を限定することは不必要であるし，まちがいでもある。これらのばあいには，すでに，「はこぶ」や「持っていく」のように，その運搬手段の限定，からだのどの部分を使うかという限定なしに，ものの運搬一般をあらわす表現に近づいているのである。

「おう」や「せおう」は，今のべたように，からだのどの部分を使うかという面を捨象する方向に意味が変化する一方では，逆に，背中の部分，すなわち，からだのうしろの方が問題である，という点を特に発展させる方向で抽象化した用法ももっている。何かをうしろにしている，という派生的意味でもちいられた，つぎのようなばあいがそう

である。

○黒菅城は背に雪笹山を負っていた。（落城 10）

○背後に雑木林を背負ひながら，赤い屋根をした，いくつも側翼のある，大きな建物が，行く手に見え出した。（風立ちぬ 91）

○信之は，突当りの壁を背負(しょ)ふ位置に坐り込んだが，（多情仏心・前 69）

〔216〕 ふる／ゆする，ゆすぶる

これらの動詞は，辞典にはみな大体「ゆりうごかす」のように説明してあって，ちがいがはっきりしない。しかし，実際には，かなりちがった動作をあらわすことが多い。「ふる」は，「手をふる」のように自分のからだの一部分を動かすものと，「旗をふる」のように，からだの外にあるものを動かすばあいとで，かなりちがうので，これを別々にわけてあつかうことにする。はじめに，からだの外にある道具その他のものを動かす動作について，「ふる」と「ゆする」「ゆすぶる」とを比較する。「ふる」について，岩波国語辞典は「(一端を固定したまま) 物をゆり動かす。」と規定している。この「一端を固定する」という限定は，「手をふる」「首をふる」など，からだの部分について使われた例ではよいが，それ以外にはあてはまらない。

○仲子は検温器を振つて水銀を下してしまつた。（仲子・上 56）

○朝風をあびて，私は島へさよならとハンカチを振っている。（放浪記 230）

これらのように，道具などを「ふる」典型的な例では，検温器やハンカチの全体が動いているのであって，固定している部分はない。検温器やハンカチの一端をにぎっていることを「固定して」ということばで表現したものとも考えられるが，それはピッタリした表現とはいえない。かりにそうだとしても，たとえば，つぎのような例ではそういえない。

○宇平はそのまゝになつてゐる盆の上の徳利を取上げて振つた。（波 56）

○謙作は罐を振ってみた。（暗夜行路・前 178）

徳利については，まだ一方の端をもって動かしたともいえる。しかし徳利全体をにぎって動かしたのかもしれない。かんづめのばあいには，おそらくほとんど確実に，かんづめ全体をにぎってゆり動かしたのである。したがって「一端を固定して」という規定があてはまらないだけではなく，「一端をとって他端をゆり動かす」(広辞苑)，「一端をもって他の端をゆり動かす」（新辞源）などの規定もあてはまらない。

以上の例は，多分すべて片手で持って動かしたものである。「ふる」がからだの部分以外に対してつかわれた大部分のばあいには，「片手で持って」という限定をつけることができる。しかしこのような限定もまた，つぎにあげるような例についてはあてはまらない。

○丁度其女房が箕を振る度に，空殻(しひな)の塵(ほこり)が舞揚つて，（破戒 53）

○其の花籠は又底へ紙を敷いて死んだものの年齢の数だけ小銭を入れて，それを翳した人が時々ざらざらと振つては籠の目から其の小銭を振り落した。（土・上 56）

これらについては，おそらく両手で持って動かしたと思われる。結局，これらの「ふる」に共通していることは，＜手に持って動かす＞という点だけである。

この点で，「ゆする」「ゆすぶる」は「ふる」よりも範囲が広く，限定されていない。

○調子をとりつつ槽(バット)の中の塩化鉄の溶液を揺するのだ。（機械 21）

の「ゆする」では，まだ手にもって動かすといえるかもしれないが，

○子供等が栗の木をゆすぶつて一どきに栗の実を落す，（風立ちぬ 124）

の「ゆすぶる」では，手を使って動かしているのではあっても，「手にもって」とはいえない。さらに

○真中の筏の上で，男の生徒たちがさんざん揺ぶつた上に，（波 82）

のばあいには，手をつかわずに動かしたのであろう。

なお，「ゆする」の方には，からだの部分以外についていった例がすくない。手以外を使ってものを「ゆすった」例としては，

○谷川をわたるには，たくさんのサルがつぎつぎとクサリのようにぶら下って，ブランコをしながらしだいに大きくゆすり，（高崎山 55）

というのがあった。また，比ゆ的なものとしては，

○只もう校舎を撼(ゆす)つてワーツといふ声の中に，（平凡 35）

がある。

さて，手で持って動かす動作は，「ふる」でも「ゆする」「ゆすぶる」でも，いえる可能性があるのだが，そのばあい，やはり対象の性質と動かし方とに，ちがいがみられる。上にあげてきた「ふる」の例では，最初の検温器やハンカチなどはほとんど「ゆする」とはいえず，つぎの徳利・かんづめ，さらに箕・かごなどになると「ゆする」でもそれほどおかしくなくなる。つまりひじょうに小さいもの，軽いものについては，「ふる」でなければおかしいが，かなり大きなものだと，「ゆする」でよくなる。このことは動かし方のちがいから出てくる結果だと思われる。すなわち，「検温器をふる」「ハンカチをふる」のように，一端をもってかなりはげしく動かすばあいには，「ふる」としかいえず，かごのように大きなものを両手でもったばあい（かんづめ程度のものを片手でもったときでもそうはげしく早くない動かし方ならば）「ゆする」「ゆすぶる」といえるのである。辞典で「一端を持って……」のように規定しているものがあるのは，すべての例についてあてはまらないことは上に見たとおりだが，やはり「ゆすぶる」に対する「ふる」の傾向的にあらわれる特徴であるとはいえる。

つぎに，からだの部分についてだが，ここではまず他人のからだを動かすばあいを別にしなければならない。これは道具などについてとおなじ用法とみられる。

「ふる」については，自分のからだの部分を動かす例は多いが，他人の部分を動かす例はほとんどない。

○時ちゃんはぶざまな行李がなくなったので，陽気にはしゃぎながら私の両手を振った。（放浪記 263）

この例のほかには，もう1つ，やはり他人の手をとる動作だけであった。これに対し，「ゆする」や「ゆすぶる」では，他人のからだの部分を動かすのにもちいられた例がかなり多い。むしろ自分よりも他人のからだについていう方が多いくらいである。

○貞世は姉の膝を揺(ゆす)りながらその言葉を遮(さえぎ)つた。（或る女・前 70）

○朗吟の陶酔に耽つてゐる社長の肩を揺つて正気に還らせ，（河明り 314）

○広介は，明子の肩をゆすぶった。（くれない 138）

○父はおさえている手で私のからだをゆすぶった。（暗夜行路・前 16）

このようなちがいは，やはり，ものを動かすばあいに「ふる」が手にもって動かすのであるのに対し，「ゆする」「ゆすぶる」はかならずしもそうではない，というちがいを示していることと，関係があるだろう。他人のからだの部分は手で動かすことはできるが，相手のからだから切りとって，完全に自分の手で持ちはこびするわけにはいかないからである。

自分のからだの一部分についてつかわれた例では，「ゆする」「ゆすぶる」よりも「ふる」の方がずっと多く，範囲も広い。すなわち自分のからだの部分についてつかわれた実例を整理すると，つぎのようになる。

	からだ	肩	頭	くび	腰	ひざ	髪	顔	うで	手	こぶし	指	あご	耳	足	しり	しっぽ
ふる	◎	◎	◎	◎	◎			◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ゆする	◎	◎	◎	◎	◎												
ゆすぶる	◎	◎				◎	◎										

これをみると，からだの部分のうち，たとえば肩・腰のように，からだのある部分としては規定できるが，特にまわりの部分から離れたかたちになっていないばあいに「ゆする」「ゆすぶる」がつかわれ，手とかしっぽとか足のように，全体からつき出たかたちになっているばあいに「ふる」がつかわれている。この点は，からだの外にある道具などを対象とするとき，「ふる」が多くはその一端を手にもって動かすのであることと共通性を示している。

実例のうちで「ふる」対象にしかなっていない手や足についても，「ゆする」「ゆすぶる」を使うことはできるだろう。しかし実際には，おそらくそのような例はすくないと思われる。そしてもし「ゆする」を使ったとすれば，それは「ふる」であらわされるのとは多少ちがった動作をあらわすことになるだろう。

○私は手を振り，駈け上つた。（野火 89）

このように，「手をふる」という表現がとられるばあい，多くは，手を頭の方まであげて，それを，人にみえるように動かすことをあらわす。もし，「手をゆする（ゆすぶる）」という表現があったとすれば，それは，手を下にたらしたままで動かすことになるだろう。「手をふる」と「手をゆする（ゆすぶる）」とのこのようなちがいは絶対的なものではなく，その逆のばあいもありうるかもしれないが，一端を手にもって動かすこ

とが多いという「ふる」の特徴がはっきりあらわれるのは，やはり他の端はからだから大きくはなれている状態，すなわち，手が上にあげられているばあいであろう。

「ふる」と「ゆする」「ゆすぶる」とが，ともに用いられている，首その他についても，ちがいがみとめられるばあいがある。たとえば「首をふる」という動作は，

○何を話しかけても，微かに首を縦にふるか，横にふるかだけで（闘牛 143）

の例のように，多くのばあいは，肯定や否定をあらわすため，一定の信号をおくるためにしめす動作である。それにかぎられるのではないが，傾向としてはその例が多い。「ゆする」にはそのような傾向はみとめられない。

しかし，このような「ふる」と「ゆする」「ゆすぶる」とのちがいは，つねにみとめられるものではなく，あるばあいには，まったくおなじ現象について両者が用いられることがある。つぎにあげるのは，おなじ作品の中の，おなじ人物の，おそらくは，まったくおなじような動作についての表現だが，このばあい，「ふる」と「ゆする」とのあいだに，ちがいをみつけることは，むずかしい。

○浅川はそれだけ云ふと，左肩だけを前の方に振つて出て行つた。（蟹工船 33）

○ヂロヂロ棚の上下を見ながら，左肩だけを前の方へ揺つて出て行つた。（蟹工船 23）

〔217〕 いる／いためる／やく

「いる」は油を使わず，「いためる」は油を必要とする。

○女房は忙しい思ひをしながら麦を焙つて香煎も簡つて置いた。（土・上 198）

○厚手の鍋にバター大匙二杯を入れて熱し，りんごを両面炒めて器に取り出します。（婦人倶楽部 1956年2月付録 お惣菜料理全集 64）

ところで，「いる」のばあいに油があってもよいかどうか，というのは問題になる。「いためる」の説明を，辞典では，ふつう「食物を油でいりつける」のようにしている。これによれば，「いる」ことの中（すくなくとも「いりつける」の中）には，油を使うばあいもふくまれており，「いためる」は「いる」の下位概念ということになる。しかし，今回の調査で「いる」の用例は，5, 6例にすぎず，これだけからいうのは無理があるとしても，一般に油を使う作業には，あまりこの動詞は使わないだろう。では，油を使ったばあいに，「いる」というのはまちがいか，というと，そうも断言できない。使えば使えないことはない，というところかもしれない。

なお，「いためる」の方は，かならずしも，はじめに油をなべなどにとっておいて，そこにたべものを入れるのではなく，たべもの自身から，熱を加えているあいだに油が出てくるばあいもある。

○ベーコンも脂が出るまで炒めておきます。（婦人生活 1956年8月付録 日本料理 153）

「やく」はもちろん範囲が広く，いろいろなやき方をふくんでいるが，その中には，油で「やく」ばあいもある。そして，そのときには，ほとんど「いためる」と同じような現象を表わす。

「いためる」	「やく」
○鍋にラードを熱し，漬け汁を切って豚肉を**炒めます**。(若い女性 1956年1月 198)	○フライパンに油を熱し，漬けておいた肉を焦さないように**焼いて**，(婦人生活 1956年8月付録 日本料理 153)

つぎの焼きそばのばあいも，「いためる」といってもよい。

○中華鍋にラードを少々煮立てた中で**焼き**，(婦人倶楽部 1956年7月 393)

なお，「いる」は，対象が比較的小さいものであるが，それにともなって，いり方とやき方とで，ちがいが生ずる点もある。すなわち，「とうふをやく」といえば，いわゆる焼きどうふのように，全体のかたちをくずさないで表面がこげるように熱をくわえることだが，「とうふをいる」，すなわち，いりどうふをつくるには，全体のかたちをくずしてしまい，こまかくして，かきまぜながら熱をくわえるのである。

〔218〕 あぶる＜あたためる，熱する

「あぶる」は，火であたためる，という方法をとるばあいにかぎられる。

○漁師が二三人鰹船の外縁(そとべり)を藁火で**炙(あぶ)つてゐた**。(波 254)

ただし用例の中で，「野火」だけに出てくる，つぎのようなものは，例外をなす。このように，日光についても，一般に「あぶる」といえるかどうかは，疑問である。

○痰に含まれた日本の結核菌が，熱帯の陽に**あぶられて**死に絶えて行く(野火 12)

○陽に**あぶられ**，雨に浸されて，思ふ存分に変形した，それら物体の(野火 159)

「あたためる」では，これに対して，ひじょうにさまざまの方法がゆるされる。いま，からだを「あたためる」ものにかぎってあげてみても，用例の中から，つぎのような多様な方法がひろえる。

○一寸丑松に会釈した後，黙つて炉の火に身を**温めた**。(破戒 244)

○透き澄(とほ)るばかりの湧かし湯に身体(からだ)を浸し**温めて**，(破戒 132)

○奥さんは枕元に坐つて，大方風邪を引いたのだらうから身体を暖ためるが可いと云つて，湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。(こゝろ 242)

○僕は寒さに痿(な)へた手を息で**暖めて**暫時(しばしとのそと)戸外に佇立(たたず)むで(思出の記・上 181)

○凝然と冷たい手を懐に暖めて居た。(土・上 53)

「熱する」は，大部分，火の熱で「あたためる」ことをあらわしている。

○アニリンをかけた真鍮の地金をアルコールランプの上で**熱しながら**(機械 16)

しかし

○中心部で一部の星が爆発すると，発生したエネルギーで周囲の濃いガスが**熱せられ**，他の星の進化を早め，(宇宙の謎はどこまで解けたか 97)

のような例もあり，また，たとえば，あつい空気をふきつけたり，電気をとおしたりすることによって「熱する」こともできるはずだから，「あぶる」よりは，ずっと広い。やはり「あたためる」と同様に，方法は特に限定されていないものとみられる。

つまり，「あぶる」は結果の面と方法の面とに限定があるが，「あたためる」「熱す

る」は結果の面だけに限定があって，方法の面では限定がないのである。「あたたまる」という自動詞があり，「熱する」も自動詞としても使われること，それに対して「あぶる」はもっぱら他動詞であって，これに対応する自動詞がないことは，変化をあらわす動詞と，はたらきかけをあらわす動詞，というちがいがあることの傍証になるだろう。これについては，「ほす」と「かわかす」のちがいについてのべたところを参照。(p. 228, 684)

〔219〕 はりだす＜かかげる

これらは，どちらも人目につくような状態にすることであるが，「かかげる」が，人目につくような，したがって，多くのばあい，かなり高い位置におくことだけで，その方法は特別に限定されていないのに対し，「はりだす」は，方法の面から限定されている。

○永代読経として寄附の金高と姓名とを張出してある古壁の側，(破戒 213)

「はりだす」は，したがって，「かかげる」におきかえることができる。逆に「かかげる」とあるばあいには，かならずしも，「はりだす」におきかえることはできない。

○中央をつらぬく坂道に沿うた一軒に，掲げてある当番表を (潮騒 76)

では，「はりだす」といっても，ほぼちがいはない。しかし，このばあいにも，当番表が紙や1枚の板に書いたものではなく，たとえば，名札を釘にぶらさげるようなものだったとすれば，「はりだす」ということはできない。つぎにあげるような例では，人目につくように高くあげることであっても，「はりだした」ことではない。

○戦争当初に，日の丸を掲げ，自転車を揃へて進んで来た軍隊が，(帰郷 76)

○軍使二人の首が竹槍の先に，さらし首のようにかかげられた。(落城 21)

このように方法の面で「はりだす」が限定されているところから，当然，対象としては，うすく平たいものにかぎられることになる。

〔220〕 かぶりつく＜かみつく，くいつく

これらは，ほとんど同じような文脈で使われることがある。たとえば，つぎにあげた例ではそうである。

○肘に激しくかぶりついたほどであつた。(雪国 42)

○もう，手がつけられない。殴る，蹴る，噛みつく――(自由学校 193)

○食いつく仇吉。ひッかく米八。(小説倶楽部 1956年2月 392)

しかし，「かぶりつく」は，特にいきおいよく大口をあけて「かみつく」動作に限定される。そして，その対象は，ほとんどたべものである。その意味では，上にあげた「雪国」の例は，典型的ではなく，つぎのような例の方が，代表例としてふさわしい。

○無暗にこれ等の豊饒な果ものにかぶりつくのです。(河明り 315)

「かみつく」「くいつく」のあいだには，ほとんど，ちがいがないようだが，これらも，大体は，いきおいよく歯を立てる動作をいう。しかし，つぎにあげる例のように，

「軽くかみつく」というばあいもある。

○おせんは作造の，少したるみの来た頬に軽く咬みついた。（小説春秋 1956年7月 39）

これは，「くいつく」におきかえることはできるかもしれないが，「かぶりつく」におきかえるのは不自然であろう。

〔221〕 のむ／すする＜すう

これらの動詞は，「のむ」は固体についても使う，というように，対象の面でもちがいがみられる。しかし，

○階下の人達が風呂へ行ってる隙に味噌汁を盗んで飲む。（放浪記 285）

○東京で吸う赤い味噌汁はなつかしい。（放浪記 122）

○滝十郎は，然し平気な顔をして，赤だしを啜つてゐた。（多情仏心・前 218）

のように，おなじ対象（液体）について使われたばあいでも，そのようすには多少ちがいがある。

まず「のむ」は口の中へ入れるにとどまらず，さらにのどをとおして食道へおくりこむことをいう。たとえば，

○卯平も泣いた。彼は煙管を噛んでは只舌鼓を打つて唾を嚥んだ。（土・上 53）

というばあいには，外から口にはいったものではなく，はじめから口の中にわいて出たつばが対象である。このようなばあいには，「すう」や「すする」ではいえない。「すう」「すする」は，のどから先におくりこむかどうかに無関心で，とにかく外にあるものを口の中に入れることをあらわすのである。最初にあげた「みそ汁をのむ（すう，すする）」のような表現では，かりに，重点のおき場所がちがっていても，どの動詞のばあいにも，結局はみそ汁を口の中に入れ，さらにのどをとおして胃袋の方におくりこむ全過程をいっているのであって，おたがいにおきかえても，それほどのちがいはない。しかし，その全過程の中で特にどこに重点をおいているかといえば，上にのべたようなちがいが見られるのである。つぎの例で，特にのどに注意して「のむ」という動作のうごきをのべていることも，このことの傍証になるだろう。

○「おほほン……」といった咽喉音をさせて瓶詰めをすこし飲む。（むらぎも 156）

○馬は長い咽喉を大きく動かしてそれを飲んだが，（真空地帯・上 154）

また，

○飲み残しの冷たい茶をゴクリと一息に呑むと（青銅の基督 11）

の「ゴクリと」という副詞は，液体がのどをとおるときの音を表現したものだ。

つぎに，「すする」と「すう」とでは，音のあるなしが，ちがいになる。「すする」は一般に音をさせて「すう」ことをあらわす。ふつう酒については「のむ」と表現するのだが，つぎの例で「酒をすする」という表現がもちいられているのは（のどをとおる音ではなくて）口の中に酒を入れるときの音をとくにきわ立たせたかったためだろう。

○仲子は，高く酒を啜る音を聞いた。（仲子・上 127）

この点については「すう」はどちらでもよい。

すなわち，

○ありつたけの蛭(ひる)が不残(のこらず)吸つただけの人間の血を吐出すと，（高野聖 25）

のように音をたてないばあいにも，

○かう云つてから，画家はワンタンの汁を，音をさせて吸つた。（帰郷 202）

のように音をたてるばあいにも，「すう」を使うことができる。前者の用例は，したがって，「すする」におきかえることができない。

「のむ」と「すう」「すする」とのもう1つのちがい，あるいは上にあげたものよりもっと本質的かもしれないちがいは，「すう」「すする」のばあいに，口の中に気体をひきこむようにして，それにつれて液体をひきこむのだ，という点にある。したがって，かなり強い息の流れが口の中におこらなければならないから，口は当然すぼめられる。「のむ」という動作は，これと同じようにしてもいいし，また単に液体をながしこんでもいい。

○酒が飲めぬため麦藁でシトロンを飲んでいる。（むらぎも 156～157）

この場面では，自分の口よりも下にある液体を，ストローですいあげるので，「すう」を使ってもよいところである。

○底に残つてゐた珈琲を，振り仰いでぐつと飲むと，（多情仏心・前 158）

のような文脈では，「すう」や「すする」は使えない。このばあいには，自分の口よりも上にある液体をながしこむだけで，息の流れを利用してはいない。このちがいは一口にのめる対象の量にもある程度影響し，相当多量の液体を「のむ」ばあいには，「すう」「すする」とは，いいにくい。

○彼等は駆けおりて手桶の水をがぶりと飲んで漸く胸を落付けた。（土・上 212）

○そして，ジュースや水ばかり，ガブガブ飲んだ。（自由学校 96）

のように「がぶりと」「ガブガブ」などの副詞が「すう」「すする」についてつかえないことも，その点と関係があるだろう。また「酒をすする」はいいとして

○社長はビールを啜つたり，ハンカチで鼻を擦つたりする動作を（河明り 300）

のように「ビールをすする」というようないい方は，ふつうはしない。ビールは一口に「のむ」もので，ちびりちびり「すする」ものではないからである。

〔222〕 あおる＜のむ

「あおる」が「のむ」の1つの特殊なばあいであること，それが酒など対象の面でも限定されていることについては問題がない。ここでは，同じように酒をのむにしても，「あおる」と「のむ」とで，どのようにちがうのか，という点についてとりあげる。辞典では，「あおる」を規定するのに，つぎのようなことばで「のむ」を限定している。

(1) 一気に。一息に。
(2) 勢いよく。
(3) さかんに。
(4) あおむいて。

このうち，(2)「勢いよく」というのは，事実上(1)「一気に」「一息に」というのと同じとみとめてよいかもしれない。また(3)「さかんに」という限定も，考え方によっては，「勢いよく」や「一息に」と同じともとれる。しかし，「さかんに」のむということばには，酒などの量もふくまれている。ちょこに1ぱいの酒を「さかんに」のんだとはいいにくい。したがって，これは「一息に」とは一応別だろう。4番めの「あおむいて」は，むろんこれらと別の側面からの限定だ。「一息に」のむためには，あおむくことが多いのだから，つながりはあるけれども，つねにかさなるものではない。

以上のような規定のうち，どれが「あおる」の説明として，ぴったりしているかを，用例からきめることはむずかしい。

○半分ほど残つてゐたウヰスキイを一息にあほると，（多情仏心・前 36）

では，はっきり「一息に」ということばがつかってあり，

○白い形のいゝ喉を見せながら，強い酒を乱暴にあふつて見せた。（帰郷 52）

では，たぶん「あおむいて」のんだのだろう，ということが，文脈からわかる。しかし，ふつうは，どのようにしてのんだか，はっきりいえないような文脈で「あおる」がつかわれている。

○彼は，酒ばかり呷った。従って，急速に，酔いを感じてきた。（自由学校 148）

この例では，はっきりしていることは，かなりの量をのんだだろう，ということである。それ以外に，「あおむいて」のんだか，「一息に」のんだかは，積極的にこの文脈からいうことはできない。大部分の用例はこのようなものであって，上にあげた規定を積極的に否定もできなければ，肯定もできない。ただ，「さかんに」という規定に暗示されている量的な側面については，はっきり否定できる例がある。いまあげた「自由学校」の例などでは，たしかに，かなりの量をのんでいるのだが，最初にあげた「多情仏心」の例などでは，＜多量にのむ＞ばあいだとはいえない。だから，「あおる」を規定するのに，＜多量にのむ＞ことであるかのようにとれる「さかんに」ということばは，さけた方がよい。

「のむ」の方では，「あおる」にあたるような例もあるし，また，それにあてはまらならない例もある。

○その夜，アパートの一室で，ひとりで，がぶがぶ酒のんだ。（富岳百景 51）

では，多量に，勢いよくのんでいるようすをあらわし，

○それでも居ずまゐを正して，盃の底に残つてゐたのを，チヤブリと盃洗にあけて酌をして貰ふと，一口に飲んで，すぐ信之に献した。（多情仏心・前 70）

では，一口にのんだようすをあらわしていて，ともに「あおる」にちかい。しかし，

○寒さ凌ぎに今までちびちび飲んでゐた小野田が，（あらくれ 151）

では，すこしずつのんでいるのであって，「一口に」でもなければ「さかんに」でもない。むろん「あおむいて」という規定もあてはまらない。

〔223〕 ふるまう＜もてなす

これらは，どちらも客を歓待することをあらわす。そして，「ふるまう」は酒やさかなを出して歓待することにかぎられる。

○頼宣が酒肴を振舞ってくれたが，（サンデー毎日 1956年12月9日 73）

これに対して，「もてなす」の方は，そのように限定されていない。多くのばあいには，やはり「ふるまう」と同様，のみくいによって「もてなす」ことをあらわす。

○私は紅茶を沸かしてもてなした。（冬の宿 120）

○水菓子にビールなどをぬいて，暑い二階で彼等を歓待(もてな)したが，（あらくれ 213）

しかし，のみくい以外の方法によって「もてなす」ことを，あらわしているばあいもある。

○李陵・衛律等ばかりが残つて牛酒と博戯とを以て漢使をもてなした。（李陵 198）

○一週間位は下にも置かないやうに，ちやほや歓待(もてな)されるのに，（こゝろ 64）

新和英大辞典（研究社）には，また「音楽でもてなす」という例文があげてある。「こゝろ」の例では，もてなし方が具体的に書いてない。この中には，のみくいによる「もてなし」もふくまれているのだろうが，そのほか，たとえば話し相手になること，近所案内をしてまわること，やわらかいふとんをあてがうことなど，いろいろな方法がふくまれているはずだ。

一般に辞典は「ふるまう」と「もてなす」とを完全な同義語としてあつかっている。たとえば，広辞苑では「ふるまう」について，「もてなす。馳走をする。」とし，「もてなす」については，「とりもつ。ふるまう。馳走する。」という訳語をあげている。つまり，循環しているのである。しかし，この両者のあいだには，大きなちがいがある。すなわち「ふるまう」は動作が直接酒やたべものにむけられていて，「客に酒をふるまう」というのに対し，「もてなす」の方は，相手が対象になって「酒で客をもてなす」といういい方になる。広辞苑は「ふるまう」について日葡辞書の「ヒトヲフルマウ」という例をあげているから，古くはこの両者がはっきり分かれていなかったのかもしれないが，現代語では「ふるまう」の直接目的語は，のみもの・たべものであり，「もてなす」の直接目的語は人・相手であって，それが混同されることは，おそらく，ほとんどないだろう。今回の用例の中では，つぎにあげる例が，わずかにその例外をなすといえるかもしれない。

○一つには膳部の簡単なのとで饂飩を饗すのである。（土・上 178）

これは，「きょうす」とも「もてなす」とも，どちらにもよめそうな例だが，もし，これを「うどんをもてなす」とよむとすれば，上の説明に対して例外である。ほかの例は，みな上にある「あらくれ」の「彼等を歓待した」，「李陵」の「漢使をもてなした」のように，人をあらわすことばを直接目的語にしているものばかりである。辞典では，一般にこれらのあいだに意味的な差をみとめていないし，文法的な用法の面からいっても，ともに他動詞であることを指摘するだけでおわっている。実は，単に他動詞か自動詞かというだけでは不十分なのであって，他動詞については，直接目的語としてとりうるのは「酒」（手段）であるのか「客」（相手）であるのかが示されなければ，そのこと

ばをつかうための手びきとして不完全だ。また，一方からいえば，他動詞というのは，つまり「を」格の名詞と結びつきうる動詞ということだが，「ふるまう」が「客にふるまう」と，相手の「に」格に結びつきうること，それに対して「もてなす」の方は，相手の「に」格を要求しないことも，なんらかの方法で辞典には示されなければならない。要するに，単に自他を区別するだけでは，その動詞の用法を示すのに，きわめて不十分なのである。

〔224〕 うかがう＜みる

「うかがう」は，例解国語辞典に，「①そっと様子を探る。そっと覗いて見る。②様子を見て時機を待ち受ける。」とある。すなわち，ここでは，視覚的に状況をとらえるばあいには，＜そっと＞という限定があり，より抽象的に時機をまつようなばあいにはその限定がない，というちがいがある，と判断しているようである。たしかに，

○芳子はちらと時雄の顔を覗つたが，其の不機嫌なのが一目で解つた。（蒲団 53）

のような例では，これは単にようすをしろうとして，そっと見ているだけであって，つぎに自分がとるべき行動との関係は問題になっていない。しかし，多くの例で，「うかがう」は，つぎに自分がなんらかの行動をとろうとして，そのために状況をたしかめることをあらわしている。しかも，同時に「そっと」ということばで規定できるようすでもある。

○息を殺しながら，上の様子をうかがっていた。（羅生門 9）

○単身敵陣を窺つてあはよくば単于と刺違へる所存に（李陵 163）

これらの例はどちらも＜そっと＞「うかがう」のであり，かつ時機をまちうけているのである。そのような意味からいって，例解の分類している①と②とを，はっきり意味のちがいとして分けるべきかどうかは疑問である。なるほど，「うかがう」のなかには＜そっと＞という規定がうまくあてはまらないような例もいくつかみられる。

○燈をかゝげて戸外をうかゞふ，降雪火影にきらめきて舞ふ。（武蔵野 9）

○縁側境の障子の隙間から内部を窺ふことができた。（厚物咲 38）

○私は彼等の表情に，飼育動物の優しさがないのに気がついた。彼等は今は低く唸つてゐた。私の上体を窺つてゐるやうに思はれた。（野火 74）

しかしこのうち「武蔵野」の例と「厚物咲」の例は，べつだん時期をまちうけるためにではなく，単にようすをしるために見ているのであり，その意味で最初にあげた「蒲団」の例に通じる。一方，「野火」の例は，まさに「時期を待ち受ける」という規定にあたる例であり，これは「羅生門」や「李陵」の例に近い。要するに，「そっと見る」のであるかどうか，つまり，自分が見ている動作を，人にしられまいとしているか，ということと，時期をまちうけているか，ということは，相互に無関係なことであって，この2つの特徴をたばにして，「うかがう」の意味を2分するわけにはいかないのである。

なお，「うかがう」の上位語としては「みる」がある。「みる」は，つぎのような例

においては，「うかがう」とほぼ同じく，＜そっと＞ようすをみているのであるが，大部分の例では，そのような限定なしにつかわれている。

○家の横町の角迄来て撲たいやうな心持になつて，竊と其方角を**覗**る。（平凡 35）

〔225〕 じゃれる＜ふざける，たわむれる

「じゃれる」は動物だけについていい，「ふざける」「たわむれる」は動物についても，人間についてもいう。このことと当然関係があるわけだが，「じゃれる」は客観的にあらわれる，からだの動きをいい，「ふざける」「たわむれる」は，からだの動きによっても，ことばなどによってもあらわされる。

○私の裾にまつわってじゃれていた小猫のオテクサンは（放浪記 131）

これは，首をすりつけたり，きものをひっかいたり，というような，からだの動作をあらわしている。

○毎日学校へ通つて，友達を相手にキヤツキヤツとふざけて（平凡 46）

○小さな徒弟工たちが日向ぼっこに出て，猫の子のようにからみ合って**戯れ**ていた。（くれない 33）

これらの「ふざける」「たわむれる」も，やはり，からだの動きによって表現される状態である。

○「序でに社会主義予防注射液でも拵へて，うんと儲けるんですね。」

「あんたまで何です。ふざけて。」（真知子・前 143）

○恭吾は，ゆるやかに笑つて，目で，ふざけて見せた。（帰郷 44）

○「このような攻め手を薩摩では静か攻めとでもいうのか」

と戯れた言葉をかけあっていた。（落城 25）

これらのばあいには，「じゃれる」があらわすような，からだの動きとはちがって，ことばによる，あるいは表情による表現を意味する。

〔226〕 うばう／ぬすむ／する／かすめる／くすねる＜とる

これらは，みな，相手の所有物を不当な方法で自分のものにする行為である。「うばう」……「くすねる」の動作のあいだには，方法の点でちがいがみられる。そして，「とる」は，それらすべての上位語として，特に積極的な特徴をもっていない。

これらの特徴を表にすると，つぎのようになる。

	むりに	人から	だます
うばう	＋	±	−
ぬすむ	−	±	−
す る	−	＋	−
かすめる	±	±	−
くすねる	−	±	±
と る	±	±	±

すなわち，ここでは(1)相手から＜むりに＞とるかどうか，(2)人が身につけているものをとるのか，あるいは単に他人に所有権があるものをとるのか，(3)人を＜だまして＞とるかどうか，という3つの特徴によって，動詞のちがいをみようとするものである。

(1) まず，人から＜むりに＞とるかどうか，という観点から，みることにする。「ぬすむ」「する」「くすねる」などが，＜むりに＞ではなくて，＜こっそり＞とるのであることは明らかだ。また，「とる」が

○夢中に擲り合をしてゐる間に，学校の制帽をとうとう向ふのものに取られてしまつたのです。（こゝろ 156～157）

のように暴力的に「とる」ばあいも，

○他の畑のものよりも自然にそれを盗つた。（土・上 132）

のように，相手に気づかれないように，こっそりぬすむときにも使われる動詞であることもたしかだ。だから，問題は「うばう」と「かすめる」とにある。

「うばう」は，一般に辞典で「他人の持ちものをむりにとりあげる」のようなかたちで規定している。この規定は，「うばう」の典型的な用例については，大体そのままあてはまる，といってよい。しかし，「うばう」はきわめて具体的な動作から，かなり抽象的な現象までふくめた，幅ひろい範囲の事実をあらわす動詞だ。これらの範囲を1つの意味としてまとめるべきか，または，いくつかの意味にわけるべきか，はわからないが，とにかく，その抽象の度合いが，さまざまにかわるにつれて，ここでとりあげている＜むりに＞という特徴にも変化がみられる。したがって，そのさまざまの段階を見わたしておくことが必要になる。「他人の持ちものをむりにとりあげる」という規定を分析すると，つぎの3つの条件になる。

A）あるものに対してはたらきかける行為である。

B）その対象は他人の持ちものである。

C）そのようすは＜むりに＞と表現されるようなものである。

抽象的な領域にうつるということは，これらのAおよびBの条件が抽象化することである。すなわち，＜行為である＞というAの条件は，単に原因・結果の関係にある，1対の現象にすぎないものに抽象化する。また，Bの＜他人の持ちもの＞というのも，具体的なものから，その人のもっている属性へと変化する。このような抽象化に応じて，Cの＜むりに＞という条件の内容もかわっていくのである。さて，「うばう」のいちばん具体的な動作としての例は，つぎのようなものである。

○往来の町人百姓の路用の金を奪つて居た。（恩讐の彼方に 62）

○あつと思ふ間に，天秤棒を奪はれ，右の手首をつかまれてしまつた。（潮騒 80）

これらのばあい，＜むりに＞という規定は，もちろんあてはまる。そして，その＜むりに＞の内容を分析してみると，つぎのようなことが要因としてふくまれている。

1　不当である。

2　相手の意志にさからっている。

3 さからいがたいほどの力をもってする。

4 暴力的である。

これらの規定は，おたがいに重複するし，また関係をもっている。その行為が不当だから，うばわれる側としては，これにさからうのだし，その相手の意志にさからってとろうとするために，大きな力をもってすることになるのである。その「力」というのは，いちばん端的には，暴力というかたちであらわれる。しかし，また，これらのあいだには，完全にかさならないところもあり，どの要因が特に強くはたらくかは，「うばう」の抽象の段階に応じ，さまざまにかわってくる。

国語辞典の中で，＜むりに＞とちがったかたちで「うばう」の意味を規定しているものとしては，岩波国語辞典がある。ここでは，「うばう」を「（相手の意志にさからって）取り上げる。特に，盗む。」としている。このうち，「ぬすむ」という規定は不必要である。というよりも，まちがっている。上にあげた「恩讐の彼方に」の例も「潮騒」の例も，ともに「ぬすむ」にはおきかえることができない。そして，「ぬすむ」とのちがいを，はっきり示しているのは，その上にある，「相手の意志にさからって」という規定だと考えられる。「さからう」ということばは，単に，相手の意志や希望に反する，意志・希望にそわない，という程度のことを意味しているものではない。相手の意志にそわないだけなら，「ぬすむ」だろうと「する」だろうと，「くすねる」だろうと，みな＜そわない＞ことはあきらかである。しかし，これらの動作は，「ぬすまれた（すられた，くすねられた）」当人が，そのことに気づかないでいるあいだに，おこなわれる。（「くすねる」については，もちさられること自体を知っているかもしれないが，それが不当だという点については，気づいていない。）したがって，これらの表現がもちいられるばあい，「とられる」側としては，＜さからう＞ということはない。これに対し，「うばう」のばあいには，とられる側が「うばわれる」ことをはっきり意識しており，したがって当然これにさからっているのである。

ただし，「うばう」にも，具体的な動作である点では上にあげた例と同じでありながら，「相手の意志にさからう」という規定が，かならずしも，あてはまらない例がいくつか見られる。その第1は，

○片手に，まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり，（羅生門 14）

のようなばあいだ。このばあいには相手が死人だから，もちろんその意志は問題にならない。しいていえば，もしその当人が生きていたなら，当然さからっただろう，というように拡張して考えることができるだけである。

第2に，

○看護婦たちの云ふのを綜合すると，午後一時半ごろから二時までの間にリヤカーを奪つて乗り逃げしたものである。（本日休診 117）

のような例がある。この種の例は，わずかにこれ1つだけだが，このばあいには，事実としては，相手が知らないあいだに「うばった」のであって，完全に「ぬすんだ」とおなじだ。ただ，「羅生門」の例にしろ，「本日休診」の例にしろ，もしここで「とっ

た」とか「ぬすんだ」とか表現したとすれば，ややニュアンスがわかってくるということはある。というのは，「うばう」をつかう方が，かりに相手が，または第3者が，それを見つけたとしても，ムリにでもとる，というような意気ごみをもっていることが，感じられるからである。リヤカーを「うばった」男は，さいわい持ち主に見つからなかったから，結果的には「ぬすんだ」と同じ行為になった。しかし，もし「ぬすむ」つもりだったら，見つかれば逃げだすところを，「うばう」つもりだったら，みつかってもその掠奪を強行しただろう，というような意気ごみのちがいを感じさせる。あるいはまた，その意気ごみの結果として，あらわれた行動のあらあらしさという点に，単なる「とる」や「ぬすむ」とのちがいがある，といってよいかもしれない。「うばう」の典型的な例が暴力的にとることだ，ということが，これらの例にも影をおとしているのである。

「うばう」が「相手の意志にさからって」という規定にうまくあてはまらない第3のばあいとしては，

○鼠のように床をはって，最前列の空席を奪った行動は，（自由学校 140）

○昼食のとき彼が食台の一ばん端の席をうばっていたので（真空地帯・上 36）

のような例がある。これらの例では，座席は，はじめから，だれかのものであったわけではない。すなわち，厳密な意味では，このばあい「他人の持ちものをとる」のだとはいえない。したがって，＜相手の意志＞というのも，おかしいことになる。ただ，その席は，当然だれかがすわるはずのものだから，いわば＜あるべかりし持ち主の意志にさからって＞というように考えることができる。

以上，＜相手の意志にさからって＞という規定があてはまらない3つのばあいには，＜むりに＞の要因としてあげた第3の＜さからいがたいほどの力をもってする＞という要因，第4の＜暴力的である＞という要因も，やはりうすくなる。これらの特徴は，相手の意志にさからってする，ということに付随して出てきたものだから。相手の意志にさからうのでなく，ただ相手の意志に反したことをするにすぎないばあいには，相手をしいておさえつける必要がなく，したがって暴力をふるう必要もないからである。だから，これらにおける＜むりに＞の内容としては，それが不当であること，および，かなりの悪条件をおかしてでもしようとする決意と，そのあらわれとしての行動のあらあらしさ，というようなことになる。

つぎに，抽象の第1段階として，「うばう」が，社会現象についてつかわれた例について考える。上にあげてきたのは，すべて，具体的な動作をあらわすものだった。具体的ということは，「うばう」側の肉体的な行動をともなうということであり，「席をうばう」のばあいを例外とすれば，「うばわれる」ものの空間的な移動もともなう動作である。しかし，具体的動作であっても，このような，いわば物理的な変化だけでなく，そこに所有権の変化をも，ともなうばあいがある。前の方にあげた，「恩讐の彼方に」と「潮騒」の例をくらべてみると，「潮騒」の例では，「うばわれた」ものである天秤棒の所有権がだれに属するかは，問題ではない。そのとき現にもっていた人間が，かわっ

ただけである。これに対して，「恩讐の彼方に」の例では，現象的にもっていた人間がかわった点では「潮騒」とおなじだが，その上さらに金の所有権も，「うばわれた」側から「うばった」側へと移動している。したがって，「潮騒」がより物理的，生理的であるのにくらべ，「恩讐の彼方に」の例はより社会的である。

「恩讐の彼方に」のばあいには，まだそれは具体的な動作を通じて実現され，所有関係の移動という社会現象としての事実は，いわば，その一つの側面としてあらわれたにすぎなかった。しかし，生理的・物理的な現象なしにその所有権の移動が実現することもある。

○前の例で云ふと，一坪の土地から辛うじて得た一升の中の五合を，完全に奪はれるのです。（真知子・前 37）

ここでは，五合の米が，直接的な動作として「うばわれる」ばあいもありうる。すなわち，それが，小作人の家から地主の家へ空間的に移動することもある。しかし，そのような移動がおこらず，単に所有権の移動だけがおこって，米自身は依然として小作の家にありながら，地主のものになってしまう，ということもありうる。それでも，やはり地主が小作の米を「うばった」ことには，かわりないのである。さらに，

○田畑を奪はれさうになつてゐる内地の貧農を煽動して，（蟹工船 60）

のばあいには，対象が土地だから，もちろん空間的に移動するということはありえない。この「うばう」は，まったく，社会現象としてその持ち主がかわる，ということにすぎないのだ。

このような抽象化にともなって，<むりに>という規定の内容もかわってくる。すなわち，これらのばあい，不当であり本人の意志にさからっている，という点ではかわりないが，肉体的・物理的な暴力が加えられることはない。それは，法律的な，ないしは社会的な制裁といった，非物理的なおどかしによって実現するのである。また，さきに「席をうばう」という例についてみたような変化，すなわち実際の持ち主からではなく，あるべかりし持ち主からの掠奪というのに近い例が，社会的な現象のばあいにも見られる。

○しかし金持ちはぜいたくをするがためにただにおのれが身心を害するのみならず，同時に世間多数の人々の生活資料を奪うのであるから，（貧乏物語 145）

はそれであって，このばあい，金持ちがぜいたくをして世間の人の生活資料を「うばう」ということは，すでにもっていた生活資料をとるというよりも，むしろ世間の人々が手にすることができたはずの生活資料を先どりしてしまう，というふうに考えられる。このばあい，相手に対する直接のはたらきかけとはならず，その意味でも抽象化している。

抽象の第2段階としては，相手の持ちものではなくて，相手の属性を「うばう」ということがある。

○二人の男女の生命を，不当に奪ふといふことが，（恩讐の彼方に 64）

○相手を蹴落すことによって自分がその地位を奪うことだ。（人間の壁・上 250）

これらの「うばう」も，はたらきかけではあるが，生命・地位などは，相手から離れて存在できる独自の物体ではなく，相手の属性の一部分であり，これを「うばう」ということは，つまり相手の性質を変化させるということである。この方向への抽象化だということは，そのこと自身直接に＜むりに＞という規定に影響をおよぼすものではない。すなわち，「恩讐の彼方に」のばあいには，相手の生理的な属性をうばうのであって，そのはたらきかけもまた肉体的・物理的であるために，さきに要因としてあげた

1　不当である。
2　相手の意志にさからっている。
3　さからいがたいほどの力をもってする。
4　暴力的である。

という条件がそのままあてはまる。一方，「人間の壁」の例では，相手の社会的な属性を変化させることなので，＜不当である＞＜意志にさからう＞などの規定はあてはまるが，＜暴力的＞という規定はあてはまらない。つまり，＜むりに＞という規定に影響をあたえるのは，その対象が持ちものか属性かではなくて，はたらきかけが生理的・物理的なものであるか，社会的なものであるか，という点である。

つぎに，抽象の第3段階として，他人に対するはたらきかけではなく，単なる因果関係をあらわすものになっている例がある。

○学生として大切な時間を奪はれるのは非常の苦痛だと（こゝろ 170）
○強い感情が，ほとんど，ことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまった（羅生門 11）

このばあい，他人に対するはたらきかけではなく，自分自身の動作や感情が，自分自身の属性にある変化をあたえることを表わしている。したがって，＜むりに＞という規定の内容も，＜暴力的＞とは，いえないし，＜不当である＞というのも，ぴったりしない。また，＜相手の意志にさからう＞というのも，あてはまらない。しいていえば，＜さからいがたい力をもってする＞ということ，かりに自分がそれをこばもうとしても，こばむことができないようなものである，ということを表わしている点で，＜むりに＞という規定が生きており，「うばう」という動詞がつかわれる意味がある，といえるであろう。

「かすめる」は，「とる」と同様に，＜むりに＞という規定があってもなくてもよいようだ。すなわち，

○或る時彼れは復た主人の米をそつと掠めて股引へ入れて（土・上 82）

のばあいには「ぬすむ」と同じく，相手の目をくらましてとるのであって，＜むりに＞という規定はあてはまらない。一方，

○辺吏が殺され，人民が掠められ，家畜が奪略される。（李陵 153）

では「うばう」と同様，暴力的にとっている。そして，

○昨夜盗みを試みた兵士だけ，額に瘤をつけたまゝ，反対に医務室に向つて突進した。咄嗟に食糧を掠めようといふのであらう。（野火 42）

では，そのどちらとも考えられる。しかし，いずれにせよ，全体で4，5例しかないの

で，用例の面から，はっきりいうことはむずかしい。

(2) 第2の特徴である，人の身につけているものを直接とるかどうかという点では，「する」だけが特徴的である。すなわち，これはつねに相手の現にもっているものをとる動作にかぎられる。

○スラれた彼の墓口を彼女がとり戻して以来の仲である。（平凡 1956年8月 182）

ほかの動詞では，みな，身につけているものをとってもいいし，持ち主とはなれた場所にあるものをとってもいいようだ。その両者について，「ぬすむ」と「とる」の例をあげておく。

＜身につけたもの＞	＜はなれたもの＞
○神宮外苑で午睡をして，紙入れや時計を盗まれた時も，（自由学校 341）	○瓜が作つてあるのを知れば竊に瓜や西瓜を盗んで（土・上 195）
○町人や百姓は，金を取られながら，頗る柔順であつた。（恩讐の彼方に 62～63）	○這入られた所では必ず何か取られた。（こゝろ 43）

なお，「うばう」は一般に直接相手が身につけているものをとることが多いが，社会的な現象としての「田畑をうばう」などについては，もちろん持ち主とはなれたところにあるものをとるのである。

(3) 第3の条件，相手をだましてとったか，という点については，「くすねる」が特徴的だ。たとえば，

○表面高踏社の金と云ふじやう，つまりは貴方の金を，貴方の厚い信用につけ入つて，かれこれ千円ほどもくすねました。（多情仏心・前 360）

のばあい，相手は金がへっていることは知っているのだが，それは正当な方法で，だれかにしはらったものと信じているのである。それを適当にごまかして，自分のふところに入れてしまうことが，つまり「くすねる」である。なお，辞典ではこの動詞について，たとえば，つぎのように説明している。「他人の物をごまかして取って自分の物にする。」（例解国語辞典）しかし，「くすねる」はつねに，この規定にあてはまるような動作をあらわすのではない。

○うめ女は納戸からくすねて来た曾孫のパンツを（厭がらせの年齢 305）

このばあいには「ごまかしてとった」というよりも「ぬすんできた」のである。

○母親からもらつて来たか，あるひはくすねて来た煎餅や饅頭を，（潮騒 88～89）

の例でも，母親をだましてとったとも見られるが，母親のすきを見て，気づかれないようにぬすんできた，と見る方が自然だろう。つまり例解国語辞典の規定と，「ひそかに物をかすめとる。」（広辞苑）という規定とを，あわせなければならない。

「とる」のばあいには，つぎのような例が＜だましてとる＞という規定にあたる。

○マコオレー文集の端本（はぼん）は已に挿むだ五円なにがしと共に胡麻の繩に奪（と）られたのである（思出の記・上 179）

〔227〕 もうける／かせぐ

これらは，どちらも，金などを手に入れることを表わす。そして，「もうける」は，もっぱらその結果，すなわち，金などが手にはいることを表わし，「かせぐ」は，結果とともに，それが働いてえたものであること，つまり手段の面にも重点がおかれている。したがって，正当に働いて金をえるようなばあいには，「もうける」といっても「かせぐ」といっても，それほどちがいはない。

「もうける」	「かせぐ」
○遺産であらうと，自分の儲けた金であらうと，（多情仏心・前 256）	○其の間に少しでも小遣銭を稼いで来たいと思つた。（土・上 65）

この例では，どちらの動詞を使っても，あまりちがいはない。すくなくとも，「もうける」の例を「かせぐ」におきかえることはできる。それにくらべれば，上の例の「かせぐ」を「もうける」におきかえることには，すこし抵抗があるかもしれない。というのは「もうける」には，正当に働いて金をえた，というよりも，むしろ正当の報酬以上に得をしたというニュアンスがつきまとうことがあるからで，上の例のように，まともに働いて，それにふさわしい，正当な報酬をえるばあいには，「もうける」というのは，あまり適当でないかもしれない。つぎの「自由学校」の例のように，ばくちで金をえたことを表わすには，「かせぐ」でも「もうける」でも，ほとんどニュアンスのちがいがない。

○彼は，それを，ポーカーで，儲けたのである。（自由学校 246）

「もうける」のうち，あきらかに「かせぐ」にならないのは，はたらきもしないのに，または，しごとにくらべて不当に多額の金がはいってくるばあいの例である。

○君，ほんとにいい絵なのかい，君，儲けるんじゃない？（私の人生観 53）

○知らないだらうけれども，この会社が此処へかうやつて，やつて来るために，幾何儲けてゐると思ふ？（蟹工船 74）

これらは「かせぐ」におきかえることができない。逆に，「かせぐ」のうち「もうける」といえないのは，結果として金をえることよりも，その手段として一生けんめいはたらくことに重点がおかれている例だ。

○二人で心を合せて一生懸命に稼いだ。（あらくれ 21）

○「ううん，いいのよ。私達はどこへ行つたつて働けるから。」

その素直な実感の籠つた調子は，親譲りの財産で徒食する島村にはひどく意外だつた。

「ほんたうよ。どこで稼ぐのもおんなじよ。くよくよすることない。」（雪国 127）

これらの例では，「雪国」のばあい，すぐ前に「どこへ行つたつて働ける」という表現があって，おなじことをさしていることからも分かるように，結果として金をえることよりも，そのために働くことの方に，重点がおかれている。これらの「かせぐ」は，「もうける」とはいえない。しかし，このばあいの「かせぐ」も，まだ「はたらく」と

はちがっており，無報酬ではない。完全に無報酬ならば，「はたらく」とはいえても，「かせぐ」とはいえない。

「もうける」と「かせぐ」との以上のようなちがいは，「もうける」に「もうかる」という自動詞が対応しているのに対し，「かせぐ」には対応する自動詞がないという点にもあらわれている。

○仕事は山ほどあつて，面白いほど儲かるんですから。（あらくれ 149）

自動詞は対象の変化をあらわし，他動詞はその対象を変化させるためのはたらきかけをあらわす。そして，もし，はたらきかけだけを問題にしていて，対象の変化が問題でないばあいには，それに応じる自動詞はない。（p. 684 参照。）

「もうける」は対象の変化，すなわち金などが自分のものになるという変化をあらわしており，それに対して「かせぐ」は，金が自分のものになるという側面よりも，そのために一生けんめいはたらく，という面に重点があるのであって，その結果，一方は自動詞があり，もう一方は自動詞がないという対立が生じているのである。

〔228〕 うる＜かす

「うる」は，有料の行為にかぎられる。「かす」は

○必要の書物を二三冊貸さうと云つた。（こゝろ 68）

のように無料のばあいも

○小金を貸して今ではなかなかの財産家になつてゐる。（厚物咲 32）

のように有料のばあいもある。「もらう」と同様に，「やる」「あげる」「あたえる」「あずける」などについても，おそらく，有料の例と無料の例とが，ありうると思われる。たとえば「何をあげましょうか」というのは，実際には「うる」ことを，つまり有料であたえることを，あらわしている。しかし，実例には，このようなばあいのは見あたらなかった。

〔229〕 かう＜もらう，うけとる，かりる，あずかる

「かう」は，つねに有料である。すなわち，金をはらって品物を手に入れることをあらわす。

○といって，どんなボロ服でも，買うには，金が要る。（自由学校 168）

「もらう」は，原則として，無料で品物を手に入れることをあらわす。

○道灌が傘の代りに山吹の花を貰つたといふ歴史的の原でもない。（武蔵野 25）

しかし，「もらう」は，有料のばあい，すなわち「かう」に近いようなばあいにも，使われた例がある。

○テケツの女が，突き飛ばすような，声を出した。いつまでも，紙入れを覗いてる客なぞは，軽蔑に値するのだろう。「いや，貰うんだ，一枚」（自由学校 138）

○そんなら両方〔魚と豆腐汁〕貰ひませう。それで一杯飲まして下さい。（破戒 231）

これらにみるように，「もらう」が「かう」に近い有料の現象をあらわしているのは

全部で6例ほどであるが，すべて会話の中の文だ。そういう意味で，まだこれは文体的な制約があり，完全に確立した用法とはいえないかもしれない。しかし，地の文でも使えないことはないだろう。「かう」が，金をはらって品物をうけとるその全体をあらわしているのに対し，このような「もらう」は，重点が品物をうけとる点だけにあり，金をはらうという面は捨象されている。そして，金をはらうばあいの「もらう」は，ふつうの無料で「もらう」ばあいと，はっきり対立して別の意味になっているわけではない。たとえば，

○「（上略）ついでにお茶でも入れてまゐりませうか。」
　「さう。一杯貰ひませう。（下略）」（つゆのあとさき 51）

の「もらう」は，もちろん無料であるが，これと前にあげた「破戒」の例とのあいだで特に区別する必要はない。

「うけとる」は，

○春三は，滝さんの手から鞄を**受取る**と先きに立つて外に出た。（本日休診 87）

のように無料であることが多いが，やはり

○結局，彼女は，米を**受け取った**が，その代価と共に，（自由学校 267～268）

のように，金をはらって「うけとる」こともある。ここでも，「もらう」という動作と同様に，「かう」は金をはらうところまでふくめた全過程を，「うけとる」は金をはらう部分を捨象した手に入れる部分だけを，あらわしているのである。そして，あとで(p. 409)のべるように，「うけとる」は，本来所有権の移動をあまり問題にせず，具体的，物理的なものの移動をあらわす傾向が強いから，金をはらうか，はらわないかに無関心な表現をつくる点では，「もらう」よりも容易である。

「かりる」も

○先生が下駄を**借りて**外に出ると，主人もついて出た。（本日休診 88）

のように，ただのばあいと，

○十円**かりて**来る。沢山利子をつけて返そうと思う。（放浪記 34）

のように，かり賃（このばあいには利子）をはらうばあいとがある。ここでも，もちろん，その2つがはっきり分かれるわけではなく，たとえば，

○十年ほど前交渉のあつた女から三千円の金を**借りて**，伊予の郷里をとび出すと，トラックの運転手をしてゐる兵隊時代の友達をたよつて神戸に出てきた。（闘牛 96）

のように，そのどちらであるか，はっきりしないものも多い。

「あずかる」も

○吉田班長から**あずかった**鍵をだしてその戸をあけた。（真空地帯・上 223）

のように無料のばあい，

○女生徒を**預る**素人下宿を開いたり，（桑の実 10）

のように有料のばあいと，両方につかわれる。ただし，金は，あずかった側がもらうのであって，「かりる」とは，逆である。「かりる」は，借り手の都合によってなされる行為であるが，「あずかる」は，逆に，あずける側の必要から，保管料・保護料をはら

ってされる行為である。

〔230〕 やとう（めしかかえる）＜たのむ，つかう

これらは，他人に何かしごとをさせるような状態にすることをあらわすが，そのさい，相手に金をはらうかどうかには，ちがいがある。

「やとう」は，金をはらうばあいに使われる。

○市の経費で警備員を雇ってもらうことも出来る。（人間の壁・上 114）

「めしかかえる」も，やはり，原則として金などをはらう行為である。

○それを三斎が豊前で千石に召し抱へた。（阿部一族 64）

ただし，「めしかかえる」では，そういう関係よりも，身分的な従属関係の方に重点がある。だから，ばあいによっては，反対給付が何もないのに「めしかかえられて」いることが，あるかもしれない。

「たのむ」や「つかう」では，金をはらうこともあるし，はらわないこともある。

〈有 料〉

○そういう親たちが家庭教師をたのむ。（人間の壁・上 111）

○どちらも大勢の奉公人たちを使つてゐた。（厚物咲 16）

〈無 料〉

○近所の者を頼んで取り敢ず医者へ走らせた。（土・上 47）

○お品の手が減つた丈はおつぎを使つて（土・上 83）

「たのむ」や「つかう」については，比較的安定した雇用関係では，金をはらうことが多く，ある特定の具体的なしごとをさせる一時的な関係のさいには，そうではないことが多い。

〔231〕 命ずる，命令する／しいる，強制する，強要する

これらの動詞のあいだには，もっぱら言語活動にたよるか，それとも，ほかの手段にもうったえるか，というちがいがみられる。「命ずる」「命令する」は，もっぱらことばによって，相手を自分の意志にしたがわせよう，とするものである。これについては，あらためて例をあげるまでもない。ただ，ことばを使っていない例もあるので，その方をあげておこう。

まず，比ゆ的なものとして，つぎのように主体が人間でない例。

○さうして其感じが妻に優しくして遣れと私に命じます。（こゝろ 283）

○Go。進め。と，信号機の文字が道の真中で大きく彼に命令した。（波 302）

この例，特に「こゝろ」の例などは，「要求する」または「強制する」などといっても，さしつかえないものである。

つぎに言語以外の伝達方法によって意味をつたえている例。

○二連の打揚げは，仙人沼峠以下各要衝の首将の集合を命じるもので（落城 19）

このばあいにも，あつまるように，という意志をつたえることだけが「命ずる」のあらわすものであって，それ以上ではないという点では，言語活動による伝達とおなじであ

る。ここまでひっくるめるならば，記号活動といいなおしてもよい。

「しいる」「強制する」「強要する」などの動詞では，「命ずる」とちがって，ことばによって意志をつたえる以上のなんらかの動作，プラスアルファがあることが条件である。

○あの美しい有為な青年も踏む事を**強ひられる**事になるのだ。(青銅の基督 100)

○誰も私にもう一度戦場で死ぬのを**強制する**ことは出来ないと同様，(野火 169)

○売春を**強要**されたとか，搾取されたとか (週刊サンケイ 1956年9月30日 22)

これらのばあいにも，意志をつたえること自身は，もちろん，ほとんどつねに，ことばによってなされるだろう。しかし，それだけでは「強制する」などというには不十分で，そのことば・命令にしたがわなければならないようにさせている，要求する側の態度もまた，これらの動詞によって表わされているのである。たとえば，「青銅の基督」の例をとると，踏絵をふむことは，ことばによって要求されるだろう。しかしそれが「しいる」と表現されるのは，ふまなければならないようにしむけている言語活動以外のもろもろの条件，役人がそばにひかえているとか，すでにこれを拒否した連中がつかまってひどい目にあわされているとか，そういうことがあって，はじめて「しいる」という動詞がもちいられるのである。

「しいる」には，言語活動をまったくぬきにした例もみられる。

○第一彼はまだ女を知らなかつたので，このとき女といふ存在の道徳的な核心に触れたやうな気がしたのである。彼は**強ひ**なかつた。(潮騒 69)

○コマ売りの老人の同情を**強いる**眼を見ていると，(放浪記 173)

このような例は，おそらく「しいる」だけにあるのではなく，「強制する」「強要する」にもあるだろう。たとえば，つぎにあげる例は，それにちかいともみられる。

○その場合，患者は，大きな装置の近くに寝たままという生活を**強制される**わけだが，(人工心臓を体内に 373)

○そのゆえに物理学は自然から**強要され**，無意識の中に唯物弁証法の見地に到達することができるのである。(原子物理学の発展とその方法 329)

ただし，これらのうち，「強制する」の方では主体がはっきりせず（しいていえば「状況」か），「強要する」では「自然」が主体であって，どちらも意志的な主体でないので，言語活動うんぬんという条件は，あまり問題にする価値がない。

「しいる」にも，状況がある行動をとるように「しいる」，一定の動作をとらざるをえない，ということをあらわす例もある。

○むしろ犬に攻撃され，発砲を**強ひられる**のを，私の方で懼れた。(野火 74)

○やつと休漁を**強ひる**ほどの嵐が島を襲つた。(潮騒 58)

これらを単に臨時の比ゆ的な例とみてしまえば，信号機がかれに命令した，というのと同じことになる。しかし，このような「しいる」は，かなり自由に使われており，主体をぎ人化しているような感じもあまりない。それは，つまり，「しいる」の本質が言語活動というような人間固有の動作にではなく，相手を一定の行動においやるという，

もっと一般的なものにあるからだろう。

なお，「もとめる」も，ほとんど，ことばをつかって相手に意志をつたえるのだが，たまには，ことばによらないばあいもある。

○委員は教壇の上で，どうしていいか解らなくなった。彼は先生の方を向いて，助けを求める。（人間の壁・上 218）

この例では，先生に「なんとかしてください」と，ことばで「もとめた」可能性もある。しかし，それよりも，困ったという顔つきをして，先生の方をだまって見つめたこと自身が，たすけを「もとめる」ことであると解釈する方が自然だ。

〔232〕 つぶやく，ささやく，まくしたてる，どもる，がなる，どなる，いう／さけぶ，わめく，うめく

これらの動詞のうち，「つぶやく」「ささやく」「まくしたてる」「どもる」「どなる」「がなる」および「いう」（そのほか，「はなす」「しゃべる」などの動詞）は，みな言語活動についてだけつかわれる。例は略す。

これに対して「さけぶ」「わめく」「うめく」は，言語活動をも，また言語以前の，さけび声にすぎないものをもあらわす。まず，「さけぶ」は，多くは，

○（今夜はお客様があるよ。）と叫んだ。（高野聖 64）

のように言語活動をあらわすのだが，単におそれや興奮のため，無意識的にさけび声をあげることをあらわした例もある。

○女は叫んだ。かういふ叫声を日本語は「悲鳴」と概称してゐるが，あまり正確ではない。それは凡そ「悲」などといふ人間的感情とは縁のない，獣の声であつた。（野火 84）

つぎの例は，感動詞とみれば言語活動であるが，実際にはやはり感動詞以前の，つまり言語以前の声にすぎないとみてよいだろう。

○「ああつ。」

駒子が鋭く叫んで両の眼をおさへた。（雪国 172）

さらに「さけぶ」は，動物についてつかわれることもある。このばあいには，もちろん，言語活動とはまったく関係がない。

○犬は不意を打たれて，けん，けん，と叫びながら家のなかへ逃げ込む。（田園の憂鬱 58）

具体的な例については，言語活動であるか，あるいは単なるさけび声であるか，わからないこともある。たとえば

○私（わし）は思はず恐怖の声を立てて叫んだ，（高野聖 25）

のばあいには，「きゃっ」というような，単なるさけび声か，それとも，なにか形容詞のようなことばを発したのか，明らかではない。いずれにせよ，言語活動のばあいでも反射的に出てくる，かなり大声のものにかぎられるのであり，その点では単なるさけび声と共通性をもっている。したがって，いちいちの文脈について，どちらかはっきりし

ない例がでてくるのも，当然である。

「わめく」も

○彼は，「さあちやん，さあちやん，大丈夫か。」と喚きながら耳をすりよせるのであった。（冬の宿 100）

のばあいには，ちゃんとした言語活動だが，

○嘉門は一層はげしく，「ウオーッ」とわめいた。（冬の宿 188～189）

のばあいには，言語活動というよりも動物的なさけび声にすぎない。

「うめく」でも

○「こんなことがあり得るだらうか！　こんなことがあり得るだらうか！」と呻いて，骨が砕けさうに伸子を擁き締めた。（伸子・上 100）

のように，明らかにことばを発している例と，

○そしてその苦しみに堪へるやうに，時々唇を噛んでは軽くうめいた。（闘牛 143）

のように，おそらくはことばではなく，単なるうなり声を出しているにすぎないとみられる例とがある。この動詞にも，やはりどちらかわからない例もある。

○彼は思はず飛上り，奇声を発し，呻きつゝ四辺を歩きまはり，（李陵 181）

このばあい，単なるうめき声を出しているのだろうが，断片的にことばがまじっていたとみても，さしつかえはない。このように，おなじく大声を出す「どなる」「がなる」が言語活動だけなのに対し，「さけぶ」「わめく」は単なる発声活動もあるのだが，このことは，「どなる」「がなる」などの方が，より多く対人的な動作をあらわすのに用いられる，ということと関係があるだろう。すなわち「どなる」は，

○ぴりぴりする声で怒鳴られて安吉は青くなってきた。（むらぎも 170）

のように，相手をしかる意味で用いられることがあり，それだけ，単なる反射的な発声活動ではなくて，対人的，意識的な行動の方に重点が移っているのである。「がなる」については，全体でわずかに2例しかなく，あまりはっきりしたことはいえない。

＜注1＞　ここにあげた動詞群は，辞典で大体自動詞とされている。いま広辞苑と岩波国語辞典とを例にとると，ともに他動詞としての用法をみとめているのは「まくしたてる」と「いう」の2語だけで，あとは広辞苑はすべて自動詞とし，岩波も「わめく」「ささやく」には自・他両方の用法があることをみとめているが，「どなる」「さけぶ」「つぶやく」「うめく」「どもる」はみな自動詞としている。（「がなる」は岩波に登録されていない。）ところが，実際には，これらはむしろ，ほとんど他動詞としての用法ももっている。これらのうち，「うめく」「どもる」はみな自動詞的な用例であり，他動詞として用いられることがあるかどうか，疑問が残る。また，「がなる」は2例しかなく，これも他動詞としての用例がなかった。しかしそれ以外は，つぎにあげるように，みな他動詞的につかわれた例がある。

○何か呪を呟く妖婆のやうにも見えた。（田園の憂鬱 54）

○其恐しい秘密を私語いて聞かせるやうな態度を示した。（破戒 275）

○一方的な見解をまくしたてるだけで（ダイヤモンド 1956年8月14日 21）
○やけに大声で「ストン節」をどなつた。（蟹工船 72）
○彼は遂に夢中で転宗を叫んだのであつた。（青銅の基督 67）
○勝手なことをわめく艦長のために，（蟹工船 18）

このうち，「さけぶ」は，ふつう，実際に大声をあげる具体的な言語活動ではなく，一定の意見を強く主張することをあらわす抽象的な用法において他動詞として使われる。たとえば，つぎのようなばあいである。

○新聞で共産党や社会党が，邸宅の開放を叫んでいる（厭がらせの年齢 269）

岩波国語辞典も，「さけぶ」を自動詞としながら，「再軍備反対を――」という用例をあげている。しかし，さきにあげた「青銅の基督」における用例は，文字どおり大声でさけんだことをあらわす例である。

なお，このような他動詞的用法でこれらの動詞群がとる目的語には，2種類ある。上の例でいえば，「秘密を私語く」「見解をまくしたてる」「転宗を叫ぶ」「勝手なことをわめく」という例は，そのことばによって表現されている内容であり「呪を呟く」「ストトン節をどなる」は，そのときに表現された，ことばそのものである。「いう」の例についていえば，つぎにあげる左側は表現される内容，右側は表現そのものを目的語としてあらわしている例だ。（なお，p. 684参照。）

〈内　容〉	〈表　現〉
○先生は亭主から目を反らせ，ごく簡単な心得を云つた。（本日休診 75）	○めつたに冗談を言はない十吉がさう言つた。（潮騒 101）
○そして遠く郊外の方の行先を言つた。（人間の壁・上 254）	○駄目になるような言葉を言ってしまった。（人間の壁・上 271）

3.9 態　度

ここで「態度」とよぶグループは，さきの「手段・方法」のグループや，つぎの「ようす」のグループにちかい。ただ，ここでは，相手に対する主体のきもちが，なにかの形で動作にあらわれたものを，「態度」とよんで区別することにした。

〔233〕 おしかける／つめかける／かけつける＜いく，つく

「おしかける」「つめかける」「かけつける」は，みな一定の目的をもってある場所へいくことをあらわす。そして単なる「いく」や「つく」とちがって，その際の主体のきもち，態度に特徴がある。

まず，「おしかける」については，「招かれぬのに，強いて人の家に行く。」という広辞苑の規定，あるいは「相手が好まないのに無理に人の所へやって来る。」という例解国語辞典の規定で，よくあたっているようだ。例解国語辞典は，この規定のつぎにかっこして，「多人数の場合に多く用いる」と注記している。これもそのとおりで，「おしかける」の典型的な例は，

○給料が上がるのは有難いけれども，そのために教室をはなれてデモ行進をやったり，県庁や市役所へ**押しかけたり**するような事は，（人間の壁・上 16）

のようなばあいだ。しかし，他人に面会を強要するような態度でさえあれば，ひとりでいっても「おしかける」ことになるのは，つぎにあげる例がしめすとおりである。

○その保険課長の自宅へ**押掛けて**三十万円の保険の契約を申込んだ。（闘牛 97）

○治療さへすれば，なほるだらう。しかし，先方が受けつけないのに，こちらから行くと，**押しかけて**行くことになるし，（本日休診 122）

なお，上にあげた広辞苑や例解国語辞典の規定では，ゆく先が他人の家，または他人のいる場所であり，その相手のきもちというものが，かなり重要な要素になっているようにとれる。たしかに，実例も，みなその説明があてはまるような状況なのだが，つねにそうだとはいえないだろう。たとえば，山の中であたらしい火山が噴火した，あるいは金が発見されたというようなときに，大ぜいの新聞記者がそこへ「おしかける」ばあい，かならずしも，そこに，持ち主などがいるわけではない。持ち主でなくても，大ぜい「おしかける」ことによって，近所の人はめいわくするかもしれず，そのことが「おしかける」ということばをえらぶように働くばあいもあるだろう。しかし，そういうことよりも，むしろ，その動作をとる者に対する否定的な評価が「おしかける」にあることの方が，大事だとおもわれる。この点，たとえば，つぎにあげる「つめかける」や「かけつける」とちがう。人がいやがるのに，むりに会おうとするのは，もちろん否定的に評価されるべき行為であり，「おしかける」がつかわれるときには，つねにそういう評価がつきまとっている。そして，このような評価をひきおこさせるのは，「おしかける」際の主体の態度である。山の中に新聞記者がいくばあいには，相手はいないのだが，それでも，おしかけていく記者たちは，人よりも先にいこう，あるいは，もしだれかが途中でさえぎったとしても，それをおしきっていこう，というような，かなり強引な態度をとっているはずだ。このような主体の態度が「おしかける」にとっていちばん本質的な要素であり，それが多くのばあい相手のきもちを無視し，相手のきもちにさからう，という結果となって，あらわれているのである。

つぎに，「つめかける」については，多くの辞典が「大ぜいでおしかける」のように説明している。すなわち，「つめかける」は「おしかける」ことの1種であり，そのちがいは主体の数にある，としているわけだ。このことは，ある程度あたっている。すなわち，別に説明したように，「つめかける」は原則として大ぜいの人たちが，ある場所に，ある目的をもってやってくることをあらわす。しかし，「つめかける」のばあい，「おしかける」とちがって，無理をしてもいこうとする強引な態度が，つねにみられるわけではなく，したがって，相手のきもちにさからう，というニュアンスや，否定的な評価がつきまとっているわけではない。

○病男病女（びやうなんびやうによ）が我（われ）も我もと**詰め懸（か）ける。**（高野聖 70）

の例では，医者のところへ，あまり大ぜいの患者がこられては，めいわくだということがあるかもしれない。だから，これは「おしかける」といってもよいだろう。しかし，

つぎのような例では，「おしかける」におきかえると，すこしニュアンスがかわってくる。

○五六十人も詰めかけているほかの学生にしても，安吉よりどの程度よく分かって聞いているのか安吉には怪しいとしか思えなかった。（むらぎも 131）

○その初期の競輪場にも，観衆は堤からこぼれ落ちるほど詰めかけていた。（ニューエイジ 1953年9月 84）

「むらぎも」の例では学生が研究会に，「ニューエイジ」の例ではお客が競輪場にあつまっているのである。どちらも，強引にそこへやってきた，というようなものではない。もちろん，「つめかける」が使われるばあいにも，人は何となくあつまるのではなく，特定の目的をもって，かなり熱心にあつまってくるのだが，「おしかける」ほど強引な態度ではないのである。

つぎに「かけつける」は，いそいでいくばあいにつかわれる。これは，ひとりでも大ぜいでもよい。「いそぐ」ということは，かならずしも，はやいスピードであるということではない。

○自分で操縦して，快速力で患家に駈けつけたものである。（本日休診 65）

のばあいには明らかにスピードがはやいのだが，より本質的なことは，たとえば

○朝飯も後まはしにして，前夜の家に駈けつけた。（本日休診 66）

○行介は取るものも取りあへず，船橋に駆けつけた。（波 204）

のように，ほかの用事を投げ出しても，すぐにそこへいく，ということであって，途中の速度にそのきもちがあらわれている必要はない。そして，「いそぐ」が客観的な動作の面と主体のきもちの面とをもっているように，「かけつける」もやはり，「波」に「取るものも取りあへず」とあるように，主体のきもちを言いあらわしたことばでもある。

〔234〕 せまる，よせる，おしよせる，つめよる＜よる，ちかよる，ちかづく

「せまる」「よせる」「おしよせる」「つめよる」は，みな敵などがつよい態度で相手に近づくことをあらわす。

○胡兵の先登が二十歩の距離に迫つた時，（李陵 158）

○なだらかな毛無山の山肌に虎韜の陣立てをしいて寄せてくる薩賊が（落城 32）

○デッキの上の外国船客は物珍らしさに逸早く，葉子が倚り掛つてゐる手欄の方に押し寄せて来たので，（或る女・前 78）

○生命を抵当に入れるから三十万円貸して貰へないかと詰めよつた。（闘牛 97）

「せまる」には，人の動作をあらわす以外の例もあるが，それもやはり心理的に圧迫をあたえるようなときに使われるものである。

○大気に暈りのかゝつた柔かい風景があつた。丘が迫つて来てゐた。（帰郷 116）

このばあいには，丘がすぐ近くにあったことをいっているのだが，それがいかにも人を圧迫するように，せまくるしい感じをあたえるように，そびえている，ということをあらわす。

○それでも冬至が明日と迫つた日に勘次は蒟蒻を持つて出た。（土・上 39）

この例は，時間的に近づいていることを，あらわしている。そして，単に近づいているというだけではなく，それまでに片づけてしまわなければならないしごとがあって，やはり心理的な圧迫がくわわっているのである。

「よせる」は人間についてつかわれるほか，波のような自然現象についてもいう。このばあいには特に圧迫感といったものはなさそうだ。

○近くに寄せる浪のうねりは琅玕（らうかん）の練りもののやうに，悠揚と伸び上つて来ては，そこで青葉の丘のやうなポーズをしばらく取り，（河明り 336）

「つめよる」は「よせる」「おしよせる」などとちがって，かならずしも空間的に近づくことを意味しない。岩波国語辞典は，この動詞について，「そば近く寄る。せまり寄る。」と規定している。このうち，「そば近く寄る」というのは，なにも圧迫感がなく，ただ近づくことを表わしているだけ，とみたものであって，この規定はよくない。「せまり寄る」は，その圧迫感に注目した規定とみれば，あたっているようだが，しかしほんとうに相手に近づく必要があるかどうかは疑問である。ほかの辞典でも，大体，近くへよること，つまり空間的に移動することをこの動詞にとっての必要条件とみなしているようだ。例解国語辞典では，第1の意味として，「そば近くまで迫る。詰め寄せる。」とし，第2の意味として，「相手に返答を求めるために緊張したり，興奮した状態でそばに近づくこと。」としている。このうち，第1の例，すなわち特に答を求めるためでなくて，相手にせまっていくことをあらわすような用例は，今回の調査でえた10例ほどの中には，なかった。例解国語辞典では，これについて，「相手は刀を正眼に構えたままじりじりと詰め寄って来た」という例文をあたえているが，こういう例は見あたらなかった。ただし，わずか10例ほどだから，この意味でつかわれることを否定する根拠にはなりえない。例解の規定の第2の意味でいっている「相手に返答を求めるために」ということは，すべての用例に共通していえることであって，むしろこの方が，近づくという条件よりも，中心的なものではないかとおもわれる。「つめよる」がつかわれた例について，ほんとうにそばによったのか，または，ただはげしい態度で相手の返答を求めたにすぎないのかを，みわけることはむずかしい。そこまで具体的に描写してはいないので，どちらにでも解釈できるのである。ただ，たとえば

○キーナン検事は「あなたはもし釈放されたとすれば，もう一度かくのごとき戦争をするつもりか」とつめ寄った。（日本週報 1956年3月5日 13）

のような例をみると，検事が被告の側にあゆみよった，とはおもえず，せいぜい，からだをのり出した程度であろう。ほかの例についても，数歩あるいて近づくというほどの距離にはなく，はじめから相手のすぐそばにいたものが，答えを求めるために顔を近づけた，という程度にしか考えられない例が多い。だから，「そばに近づく」という規定は，すこし大げさすぎるようだ。なお「つめよる」のばあい，返答を求めるというのは大部分そのとおりだが，ことばによる答えでなく，行動を求めて「つめよる」こともある。上にひいた「闘牛」の例にしても，実際は「よろしい，金を貸そう」という，こと

ばによる答えでも，だまって金をさし出しても，その答えにはなる。なお，「つめよせる」という動詞も「おしよせる」などに近いものとおもわれるが，これは実例が1つもなかった。「よる」「近よる」「近づく」は，強い態度にも，やわらかい態度にもつかわれる。

〈つよい〉

○武芸の心得らしい，身構えをして，ジリジリと，寄ってきた。(自由学校 343)

○尾根は嶮しいので敵勢の近よってくるわけはなかったが，(落城 29)

○にらみながら近づいて行った。(真空地帯・上 103)

〈やわらかい〉

○しかし彼はすぐ彼女の方に寄つて来た。(波 226)

○いかにも嬉しさうに声をかけて近寄つて来た。(闘牛 114)

○若し少女(をとめ)であつたら近づいて小声できゝ玉へ。(武蔵野 20)

〔235〕 ひきたてる，ひったてる＜つれる

「ひきたてる」「ひったてる」は，いやがる相手をむりにつれて行くことをあらわす。したがって，多くのばあい，あらあらしい動作となってあらわれる。

○しじゆう腕をとらへて引きたてて行つたが，(冬の宿 193)

○激しく岡を引つ立てるやうにして散歩に連れ出してしまつた。(或る女・上 141)

もっとも，罪人をつれて行くようなときに，相手がそのいやがる気もちを反抗するという形であらわしているとはかぎらない。それで，外見的には単につれだって歩くことと同じといってもいいばあいがある。

○そして彼女は曳き立てられ乍ら云つた。

「あゝ嬉しい！妾は今日の日をどんなに長く待つてゐただらう！」(青銅の基督 115～116)

○どこかの用心棒が，コソ泥でも引ッ立てていく風景としか，(自由学校 164)

これらでは，おそらく，ひきたてられることに対して，ことさら反抗はしていない，といっていいだろうし，したがって，ひきたてる側についても，特にあらあらしいようすは見せなかったかもしれない。しかし，いずれにせよ，行きたくない相手をむりにつれて行く，という点ではおなじである。

これに対して，「つれる」のばあいには，

○パンパン狩りにつかまつて，トラックで警察に連れて行かれた(帰郷 158)

○子供だと思っているとここへ連れてくる途中で逃げだそうとした。(むらぎも 280)

のような例では，いやがる相手をつれていくことであって，「ひきたてる」「ひったてる」をつかっても，おかしくない。ところが

○明子は，帰ったら先ず，子供二人を連れて何処かへ遊びにゆきたい，ということを思っていた。(くれない 40)

では，相手がいやがっている，ということはないから，この点で「ひきたてる」「ひったてる」よりも，範囲が広い。

＜注1＞　「ひきたてる」「ひったてる」は，「つれる」とかさねて使われて，特にそのつれていくときのようす，あらあらしさをあらわすための修飾語として用いられるばあいがある。

○顔さへ見れば直ぐに引立てゝ連れて行かうといふ見脈だで……。（あらくれ 127）

「ひきたてる」「ひったてる」の実例をみると，ほとんどが「ひったてて」とか「ひったてるようにして」とかいう形で使われている。「ひったてた」「ひったてる」のように，そのまま単純に言いきりになっている例はすくない。わずかにそうかと思われるのは，つぎの1例である。

○（立ち上がり，遊女の手を取って引き立てる）（出家とその弟子 93）

この例にしても，つぎにのべる「立ち上がらせる」という意味かもしれない。

○「何でもいゝから芝へ行きませう。恁うなれば見えも外聞もありやしない。」お島はさう言つて倦み爛れた男を引立てた。（あらくれ 181）

という例も「ひったてる」が言いきりに用いられた例と考えられないこともないが，やはり「気もちをひきたてた」という意味であろう。

＜注2＞　「ひきたてる」の意味として，ここで問題にしているような「罪人をひきたてる」または，「気もちをひきたてる」とか「部屋をひきたてる」のような例については，辞典に説明がのっているが，つぎにあげるような例については，説明がない。

○彼は私の腋の下に手を廻して，引き立てた。（中略）立ち上ると，河原が広くなつた。（野火 145）

このばあいには，「彼」は「私」をつれて行ったのではなく，単に立ち上がらせたにすぎない。文字どおり「引いて立てた」のである。つぎの例もそうかもしれない。

○腋の下から手を入れて，引き立てようとしたが，（多情仏心・前 181）

この例では，「つれていこうとしたが」とも解釈できるし「立たせようとしたが」とも考えられる。いずれにしても，これまでの記述にもれていた「引いて立ち上がらせる」という意味が「ひきたてる」にはある，とみとめてよいであろう。

〔236〕　つきつける／さしだす

「つきつける」については，単に「目の前にさしだす」のように規定している辞典がおおい。「さしだす」というのも，ふつう目の前に出すことだから，これは「つきつける」を「さしだす」から区別することにはならない。岩波国語辞典が「荒っぽく目の前に差し出す。」と規定しているように，「つきつける」ときの態度は単なる「さしだす」とあきらかにちがうのであって，その点を規定しなければ「つきつける」の意味を説明したことにはならない。

○「貴方は遠慮深いのねえ。男ツて然う遠慮するもンぢやなくつてよ。」と何にも知らぬ雪江さんが焼芋の盆を突付ける。（平凡 82）

○飯を掻き込み，茶碗をカラにしたから，駒子が盆を差し出すと，（自由学校 303）

実例によるかぎり，「さしだす」の方は，すべて「つきつける」とちがって，おだや

かな態度とみてもよい例である。すなわち，「さしだす」は「つきつける」の上位にあるのではなくて，これと積極的対立をなす同位語であり，「つきつける」と「さしだす」とを入れかえると，意味がかわってしまうようにみえる。しかし「さしだす」がつねにそのような態度であるかどうかは問題で，たとえば，

○船長は細綱の端を新治にさし出して，耳元でかう叫んだ。（潮騒 145）

のようなばあいには，「つきつける」といってもいい動作をあらわしているのかもしれない。

なお，このような態度のちがいは，「つきつける」が相手に対して積極的な要求を出しているという，動作の目的と関係しているのである。

〔237〕 ゆする＜せびる／せがむ／ねだる

これらはみな相手になんらかの行動を要求すること，特に，相手から金やものをもらいたいときに，これを要求する動作をあらわす。そして，その際，相手から力ずくでおどしてとるか，または，あまえて相手の歓心をかい，よろこんで出させるようにするか，といった態度のちがいがみられる。

「ゆする」はいちばん高姿勢で，相手をおどかしてとることをあらわす。

○キット顔に傷のある兄さんがイカサマをタネにゆすりに行く。十万円ぐらいとられてヤレヤレと思ったら大間違い。（週刊サンケイ 1956年8月26日 73）

このような例が典型であって，この例文では，相手がいかさまトバクをしたことを世間にバラスぞとおどして金をとるのである。

「せびる」は，「ゆする」よりも範囲が広い。

○まだいひがかりをつけて僕をせびらうつていふのか。（波 172）

のようなばあいには，「ゆする」におきかえてもかまわない。つまり，やはり相手をおどして金を出させようとするのである。しかし「せびる」は

○小遣いが足りなくなるとせびりに来た。十も違う叔父さんが十四か五の甥のところへ来て「ひとつ頼む」などと片手を出す風景は（小説の泉 1956年1月 104）

のように，「ゆする」では，おきかえられない動作にも使われる。この例では，相手から金をとる点では「ゆする」と同じだが，＜おどかして＞とるわけではない。むしろ，低姿勢になって，もらうのである。ただし，いずれにしても，「ゆする」「せびる」とも，正当な根拠がないのに金をとる，というような評価がはいっている点では，共通である。

「せがむ」も「ねだる」も，その点では同じようであって，みな，あまりよい評価をあたえられる動作ではない。「せがむ」と「ねだる」は，ともに低姿勢で，どちらかといえば，子どもが親にあまえるような調子でとる点，「ゆする」とは正反対である。「せがむ」「ねだる」は，ほとんど同じ文脈で使われることがあり，たいていのばあい，おたがいにおきかえても不自然ではない。たとえば，つぎの例では，大体同じような動作を同じ漢字で表記し，しかも読み方がちがっている。

○与吉は能く貧乏な伴侶(なかま)の子が佳味相に青物を噛つて居るのを見ておつぎに強請(せが)むことがあつた。（土・上 132）

○お島の迹から絡はり着いて来さうな調子で恵みを強請(ねだ)つた。（あらくれ 18）

しかし，おきかえることができるとはいっても，つねにニュアンスまでまったく同じだというわけではない。あまえるような態度という点では「ねだる」の方がはっきりしており，「せがむ」では，それほど強くない。むしろ「せがむ」は熱心にたのみこむことであり，その熱心さがしばしば幼稚さにつながり，さらには，あまえになっていくのである。

○黙って往来を歩けば，赤い羽根だの，白い羽根だのが，寄ってくる。署名をして下さいと，セガまれる。（自由学校 133）

このばあいには「せがむ」にあまえの要素がほとんどない。ここで「せがむ」がつかわれているのは，たとえば「たのむ」に対していえば，熱心に，しつこくせまるようすをいうためであって，別段，相手のきげんをとったり，あまえたりすることを表わしているわけではない。もしこの文脈で「ねだる」をつかえば，今いったような点でのニュアンスがかわってくるだろう。逆の面からいえば，「ねだる」は相手が自分に対して恩恵としてあたえる動作であるばあいに使われる。署名をするという行為は，原則として特定の個人に恩恵をあたえるものではないので，熱心に「せがまれる」ことはあっても「ねだられる」ことは，まれである。しかし，おなじ署名でも，たとえば，自分が著者からもらった本に署名をしてくれ，とたのむときには，純粋に個人的に恩恵をあたえる行為であり，したがって「ねだる」ということもありうる。

〔238〕 つっぱねる，はねつける＜拒絶する，拒否する＜ことわる，こばむ

これらの間には，ことわり方の手きびしさの段階がみられる。「つっぱねる」「はねつける」は，いちばんはっきりした態度で「ことわる」ことをあらわす。

○昨日は強くつつぱねたものの，（闘牛 132）

○この間宇平が訪ねて来た時には，あんなに厳しくはねつけたのに（波 96）

「拒絶する」「拒否する」は，「つっぱねる」程度に手きびしいのもふくんで，それよりも，もっとゆるいことわり方まで，範囲がひろがっている。

○「そりゃ，駄目。」敢然とみね子は拒絶した。（真知子・前 187）

○「退職勧告？　もちろん拒否したよ」と志野田先生は言った。（人間の壁・上 57）

などでは「つっぱねる」「はねつける」といっても不自然ではない程度に強い調子でことわっている。しかし

○軽く左衛子は拒絶した。「さうでない方がいゝでせう。」（帰郷 93）

では「かるく」という修飾語がついており，「つっぱねる」ではふさわしくない。上にあげた「つっぱねる」や「はねつける」の例で「強く」とか「厳しく」とかの限定がついているのと対照的である。「拒否する」の例では，これにあたるように，表現上明らかに＜かるい＞程度を示すものが見当たらなかったが，つぎの例では，それほどはっき

り強い態度であるとはいえず，「つっぱねる」にするとニュアンスがかわってくる。

○小我の権利のみ主張して公共につくすことを拒否する国民（丸 1956年10月 17）

「ことわる」「こばむ」は，さらに範囲がひろくなる。

○俺ア活動なんぞ大嫌ひだつて，頭から断つちまへばいゝものを（多情仏心・前 221）

○いやだと拒んだところで，無理にも押しつけて来るんだよ。（厭がらせの年齢 268）

などでは，「つっぱねる」「はねつける」といってもいいくらい，はっきりした態度でことわることだが，

○一緒に散歩しないかとその兄にすゝめられたが，自分は断つて（友情 115）

○「厭だよ，私そんなものなんか買ふのは……。」お島はさう言つて最初それを拒んだが，やつぱり誘惑されずにはゐなかつた。（あらくれ 166）

ではそれほど強くなく，軽くことわるようすをあらわしている。

「拒絶する」「拒否する」は，文体的に，かなりかたい層に属し，「ことわる」「こばむ」とのちがいは，意味内容の広さよりも，むしろそういう文体上の特徴にある。したがって「ことわる」「こばむ」のやわらかい方の態度のばあいも，「拒絶する」「拒否する」でいえないことはない。しかし，「拒絶する」「拒否する」の意味の中心は，文体のちがいに応じて，日常的なごく軽いことわり方よりも，おおやけの場におけるはっきりしたことわり方のほうに，かたむいている。

なお，ここで2つずつ組にした，「つっぱねる」と「はねつける」，「拒絶する」と「拒否する」，「ことわる」と「こばむ」のあいだにも，意味的なちがいがあるかもしれないが，こまかなことなので，はっきり，たしかめることはできなかった。

＜注＞ 「ことわる」「拒否する」は，つぎのように話しことばの文末にもちいられて，話し手の行動をあらわす。

○お気毒さまですがね，宅はお花なんか習つてゐる隙はないんですから，今日きり私からお断りいたします。（あらくれ 236）

○問 ホフマン君，君は，今何をしているか。答 答弁を拒否する。（ジュリスト 1956年5月1日 60）

「拒絶する」も，これと同じような使い方があるかもしれない。しかし「こばむ」「つっぱねる」「はねつける」には，このような用法はないだろう。このような使い方は，つぎのような意味で特殊である。すなわち，「ことわります」「拒絶する」などと，ことばに出していうこと自身が，＜ことわる＞＜拒絶する＞という動作をすることになる，という点である。ふつうの動詞のばあい，あることを，ことばに出していうことは，そのことを行なったことではない。たとえば，「わたしは手紙を書きます」「わたしは本を朗読します」といったとすれば，まだ，＜手紙を書く＞＜朗読する＞という動作は，はじまっていないのであって，これらの「書く」「朗読する」というかたち（現在形）は，そのすぐ直後におこるべき動作をあらわしている。つまり，テンスの問題としていえば，これらのかたちは，ごく近い未来をあらわしている。

あるいは，主体の意志をあらわしている，といってもよい。いずれにしろ「手紙を書きます」「本を朗読します」という言語活動が終わった瞬間には，まだ「(かれは)手紙を書いた」「本を朗読した」とはいえないのである。ところが，「おことわりします」「拒否します」といった瞬間，その話し手はもう<ことわった>＜拒否した>ことになる。「つっぱねる」「はねつける」について，また「こばむ」については，このような関係はなりたたない。「わたしは，はねつけます」といったとすれば，それは，もし相手が要求してきても，というように，未来のことを仮定しているのであって，そういった瞬間には，まだ<はねつけた>ことにはならない。実際に相手が要求をつきつけてきたばあい，その相手にむかって，「わたしはつっぱねます」「わたしははねつけます」「わたしはこばみます」などと，いうことはできない。

「たのむ」「ねがう」なども，この点で，「ことわる」と同じグループに属する。「おねがいします」「おたのみします」「……することをもとめる」「……することを命令する（要求する)」などと，声に出していえば，あるいは文章にかけば，それがつまり，＜たのんだ＞＜もとめた＞＜命令した＞＜要求した＞ことになるのである。これに対し，「しいる」「強要する」「強制する」などのばあいには，かりに「わたしは強制する」といっても，そのことばだけでは＜強制した＞ものとみなすには不十分だろう。このように，ことばに出していうことが，同時にそのことばのあらわしている動作の実現である，という類の動詞には，なおつぎのようなものがある。

あやまる，わびる，ゆるす，許可する，まかせる，任ずる，うけあう，保証する……

さらに，「しかる」「ほめる」なども，「わたしはしかります」「わたしはほめます」といっただけでは，しかったこと，ほめたことになりにくいが，相手に面とむかって「きつくしかっておく」「一応ほめておきます」など「～ておく」の形で言えば，やはりそれが同時に，しかったこと，ほめたことの実現をあらわす。このように，「～ておく」がつけば，この種の動詞になるものは，ほかにもありそうで，値段をひく意味の「まけておく」などがそうかもしれない。また，所有権の移動をあらわす動詞，たとえば「やる」や「もらう」にしても，「じゃあこの本をきみにやるよ」といった瞬間に，物理的にはうごいていなくても，もうその所有権は相手に移動して，「やる」ことが実現されたものともみられる。さらに広く考えれば，このような現象は，対人的な行動をあらわす動詞だけにかぎらず，「……と仮定する」「……とみなす」などについても，同様といえる。これらも，「仮定する」といった瞬間に，その動作が実現してしまっているのである。なお，これらの動詞のばあい，たとえば，「おねがいしましょう」とか，「ゆるそう」とかいう意志のかたちでいっても，すでに実現したことになる。

このような動詞の範囲が，どんな領域にひろがっており，それが本質的にどのようなことを意味するのかということは，語い論と文法論の両方にまたがる，興味あるテーマである。この点については，鈴木論文（文献〔28〕）のp.19～20を参照。

なお，「ことわる」がこのように用いられるのに対して，「つっぱねる」「はねつける」に，おなじような用法がない理由は，つぎのような点にあると考えられる。すなわち，「つっぱねる」「はねつける」は，非常に強い態度でことわることであり，面とむかって相手にそのようなことをいうのは，失礼だということである。「拒絶する」「拒否する」も，文体的にかたいこともあって，話しことばにはあまり用いられず，したがって，このような用法はすくない。それがつかわれるのは，非常に公式的な場面にかぎられ，個人的なことで「ことわる」には，つかわれない。「こばむ」がつかわれない理由は，やはり文体の問題とからんでいる。「こばむ」は，「拒絶する」ほどかたくはないが，かなり古い感じの文章語で，話しことばには，あまり出てこない動詞である。

〔239〕 哀願する，嘆願する／懇願する／懇請する，懇望する／希望する，依頼する／要望する，要請する／要求する／命ずる，命令する，強制する，強要する
ねがう／のぞむ／たのむ／もとめる／しいる

これらの動詞をとりあげるにあたって，上のように漢語の系列と和語の系列と2つにわけたのは，それが意味上のちがいに対応する点があると考えたからである。純粋に和語と漢語という語種のちがいだけなら，意味・用法を問題にしているばあいに，ことさらとりあげる必要はない。しかし，漢語動詞の系列と和語動詞の系列では，つぎのような点で別々にあつかった方が便利な点がある。

第1に，漢語の方が，段階がこまかく分かれており，和語はそのいくつかの段階をふくんだものに対応する，というように意味が広いこと，つまり意味のきざみ方がちがうことだ。たとえば「ねがう」を漢語の系列のどこかにあてはめようとすれば，「懇請する」「懇望する」と「希望する」「依頼する」とのあいだになるかもしれないが，「ねがう」の中心的な用法がそのあたりにあるとしても，実際には，「哀願する」から「懇望する」までの幅広い範囲をおおうのがこの動詞の用法である。したがって，漢語できざんだ，こまかい段階のどこかに「ねがう」や「たのむ」をおしこんでしまうのは，あまり適当ではない。

第2に，あとでのべることだが，漢語の系列は，和語にくらべて，あらたまった場のことをいうのに用いられる，という，文体に応じた対立があり，それは，上に「哀願する」から「強要する」までならべた系列とは質がちがう，意味上の特徴に対応する。

この第2の特徴，すなわち日常的なできごとに使えるかどうかという点はあとまわしにして，ひとまず上にならべた系列にあらわれている意味上の特徴を問題にすることにする。これらの動詞は，ひっくるめていえば，すべて，ほかの人間に対して何らかの行動をとらせたいとおもい，それを実現すべく，相手にはたらきかけることを表わしている。＜はたらきかけ＞の方法としては，もっぱら言語にたよるものと，かならずしもそうでないものとがある。たとえば，「命令する」と「強制する」の対立は，かなりの程度まで，ことばによるかどうかという点にかかっている。しかし，今，このような方法

上のちがいを捨象して，「哀願する」から「強制する」「強要する」までを並べてみると，この系列は相手に対する態度の強さをあらわしている。つまり，「哀願する」「嘆願する」の類は，自分をもっとも低いところにおいて，へりくだっており，逆に「強制する」「強要する」は，相手を低いところにおいて，これに強くあたっている。この点では「ねがう」を一方の極に，「しいる」をもう一方の極におく和語の系列の方も同様だ。まず，例をあげながら，いちいちの動詞について説明していくことにする。

「哀願する」「嘆願する」はどちらも自分をきわめて低いところにおき，相手をなんとか説得しようとして，大げさな身ぶりなどをまじえながら「ねがう」ようすをいう。

○すると私の衣の袖にすがって泣くのだ。私も修行して助けられたいからぜひ山へ連れて行って出家にしてくれと一生懸命に哀願するのだ。（出家とその弟子 73）

○事件を穏便にはからつてくれるやうにと，歎願するやうにいつた。（波 119）

「哀願する」の方がその度あいが強いかとも感じられるが，ほとんどちがいはない。

つぎに，「懇願する」は，「哀願する」「嘆願する」にくらべて，外見的なあわれっぽさがすくない。

○モービアスに娘と共に地球に帰るよう懇願するが，（映画之友 1956年7月 147）

たとえば，親が子に対して「懇願する」のは，それほど不自然ではないが，親が子に「哀願したり」「嘆願したり」するのは，よほど，とりみだしたばあいである。

「懇請する」「懇望する」も，へりくだってはいるが，これらは「懇願する」よりももっとなまなましさがすくない。

○更に分署長へ懇請して見た。（土・上 151）

○再三再四家屋の交換明け渡しを懇望した。（中央公論 1953年8月 110）

「懇願する」が，目のまえにいる人間に，じかにねがうようすを，あらわすことがおおいのに対し，「懇請する」「懇望する」は，これらの例にみるように，文書で，あるいは直接にでも，やや公式的な，よそゆきのしかたで，たのみこむのに使われることがおおいようだ。そのことが，おそらく，なまなましさ，形象性のすくなさということと関係があるのだろう。

「希望する」「依頼する」は，別段へりくだりもせず，また相手に対して高い姿勢でのぞんでいるわけでもない。ただし，「依頼する」の方は

○羽根田は，思案に沈んだ。ふと，いつか，五百助の行方捜索を依頼しようかと思った，警視庁勤務の門下生のことが，頭へ浮んだ。（自由学校 350）

のように他人に行動をもとめる意味だが，「希望する」の方はむしろ原則としてそうではない。大部分の用例は

○寧ろ父母の極力反対することを希望して居た。（蒲団 57）

のように，自分のきもちの問題だけであって，それが外に表明されることまでは，のべていないのである。わずかに

○駒子をフレンドにして，自分を本妻にしろという申し込みからして，気紛れである。本心ならば，その反対を，希望する筈だ。（自由学校 263）

のような例が，「依頼する」などに近く，自分の心の中にいだいた希望を実現するように相手にはたらきかける，「申しこむ」ことをあらわしている。（ただし，この「自由学校」の例でも，単なる心の動きの表現にすぎないととれないこともない。）量的にすくないだけではなく，このような相手へのはたらきかけをあらわす「希望する」は，意味の構造上からいっても，「蒲団」の例にみるような，心の中の動きだけをあらわしているものからの派生，その特殊化されたものと考えることができる。すなわち，希望とは一般に「こうありたい」「こうしたい」とねがう気もちであって，相手を必要としないのだが，たまたま，その希望が他人にむけられたときに，「希望を（相手に）つたえる」「依頼する」にちかくなるのである。

「要望する」「要請する」は，「希望する」や「依頼する」よりも強い態度でのぞむばあいにいう。

○両島を漁業基地として，利用する途を強くソ連側に**要望**したと伝えられる。（実業之日本 1956年11月15日 59）

○金子伍長などはむしろ木谷に引きつづき経理室にいてくれることをのぞんでいて，中隊にも**要請する**といったのだから，（真空地帯・上 174）

そして，単に強い態度というだけでなく，これは，おおやけの交渉における動作である。上の例にみるように，相手は個人ではなく，組織・団体などであるのがふつうだ。

○二，前項の期間，各支部は他の労組民主団体を訪問し協力を**要請**し署名を**依頼する**こと。（人間の壁・上 316）

という例では，「要請する」と「依頼する」とが，ならんでつかわれている。このばあい，「協力」の方が抽象的であって，それだけ，他の労組・民主団体は，こちらの運動に対して「協力」をする可能性があると考えることができる。しかし，その協力の具体的な手段には，いろいろありうる。その１つとして署名を考えたのであるが，具体的な方法・手段になれば，抽象的に協力をもとめるよりも，当然要求できる，という要素がへって，おねがいするという面が強くなるだろう。そういう意味では，ここで「要請する」と「依頼する」とが使いわけられていても，おかしくない。ただし，これは，しいて理くつをつけてみたまでのことで，この文脈で，「協力を依頼し署名を要請する」といいなおすと不自然だ，というほどのことはない。「依頼」は，相手が個人でも，また，おおやけの団体などでも使えることばである。これに対し，さきほどの「自由学校」の例で使われていた「依頼する」のばあいには，「要請する」になおすとおかしい。おおやけの依頼ではなく，個人的な依頼だからである。おなじ行方捜索を「依頼する」にしても，たとえば，ある団体が警察に対して正式に「依頼する」ばあいには，「要請する」ということもできるだろう。

「要求する」は，公式的であるとともに，「要望する」「要請する」よりも態度が強い。

○さし当り現に退職を**要求**されている九人の先生がたには，（人間の壁・上 172）

この文脈で「要望する」や「要請する」をつかうことも，できなくはない。しかし，

それらのことばにおきかえると，当然の権限として退職をもとめる，というニュアンスはうすくなる。できれば退職してもらいたい，というような感じになる。

「命ずる」「命令する」は，「要求する」よりもさらに強い調子である。上の「要求する」の例では，まだ退職を「命令された」わけではなかった。形式的には，自発的に退職を申し出るようにもとめられているのであって，それが公式的な命令として出てきたものではない。実は「命令する」は「要求する」の一部分をしめ「要求する」の中にすっかりふくまれるとも考えられる。

○私は担任教師から専攻の学科に関して，次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。（こゝろ 246）

○そして彼は衛兵の交代後，衛兵を下番した木谷に部隊にかえるから自分と一緒にくるんだと命令した。（真空地帯・上 185）

これらについては「要求する」といいかえても事実をまげることにはならない。しかし，逆に「要求する」がすべて「命令する」におきかえられるわけではない。

○今度は日教組本部が文部省に向って解決を要求する。（人間の壁・上 183）

このように，まったく上下関係がないばあいには，「命令する」は使えない。

「強制する」「強要する」はともに「要求する」の度あいの強いものである。

○真知子の方は平生こそ一人前の道徳や義務を強制されるが，（真知子・前 75）

○中学校の教員が，昨年の三月に校長から退職を強要されて，（人間の壁・上 171）

この2つのあいだにも，「制」と「要」とのちがいからくるような意味上のちがいがニュアンスとして感じられるかもしれない。すなわち「強制する」の方は実際に行なわせるという結果に重点があり，「強要する」の方は要求するときの態度の強さに重点がある，ということである。しかし，実際にはそのようなちがいはあまりないようで，実例も，たがいにおきかえても，さしつかえない。つぎの例では，「強制する」と「強要する」とがならんで同じ事実をあらわすのに使われている。

○敵は，視力を失ったわたしの眼球を抜きとることを何度も強要した。わたしは，眼球を抜こうと強制するのをはねのけたために，故郷の山川，父母兄弟の面影をやっと見られるだけの視力は失わなかった。（解放 1953年7月 82）

「命ずる」「命令する」と，「強制する」「強要する」とは，ともに「要求する」よりも高姿勢である。上の系列でいえば，どちらも「要求する」よりも右よりの位置にあるといえる。しかし，その高姿勢ということの中身は「命ずる」「命令する」と「強制する」「強要する」とでちがっている。すなわち，「命ずる」「命令する」のばあいには，要求をだす方と要求をうける方との上下関係が問題である。その両者のあいだに上下関係があれば，ものやわらかな態度で命令をくだすこともできる。

○簡単な診察後，節子はすぐベツドに寝てゐるやうに命じられた。（風立ちぬ 92）

○奥さんは自分一人で行くとは云ひません。私にも一所に来いと命令するのです。御嬢さんも行かなくてはいけないと云ふのです。（こゝろ 190）

これらは命令ではあっても強制ではない。「強制する」「強要する」というばあいに

は，上下関係のありなしにかかわらず，要求をだす側に強い態度がなければならない。上の「風立ちぬ」や「こゝろ」の例では，無理をしてでも自分の要求を相手におしつけようとするものではない。あるいは，無理をしなくても，相手は当然受け入れるものと期待している。だから，その態度はそれほどきつくないはずだ。

「強制する」「強要する」のばあいには，上下関係があってもなくてもよい。

○その患者さん，内科の宇田先生に，どうしても注射してくれと強要して，帰らうとしないんで御座います。（本日休診 98）

このばあいには，要求をだす側が患者，うける側が医者であって，むしろ患者の方が社会的な地位が低いともいえる。このようなばあいに「命令する」をつかうことはできない。すなわち，上下関係がなければいけない，という意味では，「命ずる」「命令する」の方が範囲がせまく，逆に，相手に強い態度でぜひともおしつけようとするようすが見られなければいけない，という意味では，「強制する」「強要する」の方がせまいのである。これら2つの基準，上下関係と強い態度というのは，おおくのばあいに平行している。自分の社会的な地位が相手よりも高いところにあると信じているからこそ，相手に対して強く自分の意志をおしつけようとする態度にでるのである。ところが，「命令する」「命ずる」と「強制する」「強要する」とでは，その両者がわかれている。なおこれらのあいだには，もっぱら言語活動にたよっているかどうか，というちがいもある。このことについては別にのべた。(p. 337～339)

つぎに和語の系列にうつる。漢語とちがって，和語の方は範囲が広いのが特徴である。漢語の方はみな2字の漢字があわさったものであり，おなじ「願」という字を後要素とするものについても，「哀願」「嘆願」「懇願」と，前要素によって，そのようすを区別している。ところが，ここでとりあげた和語は，みな単純語であり，そういうこまかい区別はない。

和語の系列のなかで，いちばんていねいなもの，あるいは，へりくだっているものは，「ねがう」である。これは

○「先生，まことに申憎いことでございますが，一つ前のやうにお計ひが願ひたいんでございますけれど……」

宇平は床(ゆか)に頭が届くほど丁寧に腰を曲げた。（波 85）

のような例では，「哀願する」「嘆願する」というような漢語にあたる，きわめて低姿勢のようすをあらわす。しかし

○「お会計を願ひます。」と帳場の前へ立ち，（つゆのあとさき 16）

では，別段へりくだっているわけではなく，平等の立ち場でのようす，段階としては「希望する」「依頼する」などにあたるようすをあらわす。（ただし文体のレベルがちがうので，この用例を「希望する」「依頼する」などでいいかえることはできない。）

「ねがう」のつぎに低姿勢なのは「のぞむ」だが，これは大部分の例が

○つゝましいながら自分の望む流儀で幸福に老後を送らうとする。（帰郷 312～313）

のように自分の気もちをのべているだけで，他人に対する＜はたらきかけ＞までは，あ

らわしていない。その点で「希望する」と似ている。実例の中には，他人に実際にその希望をのべることをあらわす例は1つもなかった。

○金次爺さんは，暗に，立ち退きを**望んで**るし，（自由学校 323）

のような他人に対する希望でも，それを外にいいあらわしたものではない。しかしこれに近い文脈で，「AがBに ～ をのぞんだ」というかたちで，その希望をいいあらわすことをも表現できるはずである。その際，漢語の方の系列にあわせていえば，低姿勢の方では「懇請する」「懇望する」から，やや強い態度のものでは「要望する」「要請する」あたりまでを，ふくむことになるだろう。

つぎに「たのむ」がくる。これは，ふつうは

○将集（将校集会所）の当番に**たのんで**ポストに入れさせるか（真空地帯・上 128）

のように，ほとんど同じくらいの位置にある相手に対する動作をあらわす。したがってその中心的な部分は「ねがう」よりもずっと右よりの位置にくる。しかし，なかには，つぎの例のように，「ねがう」と同じ程度に低姿勢なばあいもある。

○もう少しのところだからと泣いて伯母に**頼んだ**けれども，（波 224）

「もとめる」は，大体のばあい，「要求する」と同じ程度の姿勢，すなわち対等の立ち場よりもやや強い態度をあらわす。

○教育委員会へ押しかけてゆき，教育長にむかって抗議し，退職勧告の撤回を**もとめる**予定になっていた。（人間の壁・上 54）

しかし「もとめる」は，文脈によって，かなり広くいろいろな態度での要求をあらわすことがある。たとえば

○倉子はさう云つて柘植夫人を顧みながら，河井の同意を**求めた**。（真知子・前 27）

のように，別段強い態度でも低姿勢でもない，同等の立ち場で「もとめる」ことにもつかわれる。このようなばあい，それは当然そうする根拠があるというようなニュアンスをともなうようだ。たとえば上の例では，自分の意見は正しいから相手は当然これに同意するはずだ，と期待している。さらに，つぎのような例では，「もとめる」はひじょうに低い姿勢をあらわす。

○忘れることの出来ない，救ひを**求める**声を「ハツキリ」聞いた。（蟹工船 13）

このほか，「あわれみをもとめる」「同情をもとめる」など，おそらく，かぎられた一連の名詞との結びつきが条件になるけれども，むしろ「哀願する」「嘆願する」に近いようなばあいがある。これらの例では，相手が当然そのようなあわれみをかけるべきである，というようなニュアンスはない。したがって，中心はあくまで「要求する」というのにちかい高姿勢の部分にあるとしても，「もとめる」は，低姿勢から高姿勢までひじょうに広い範囲をおおっているのであって，いま問題にしている動詞のグループ全体をひっくくるには，「もとめる」で代表させるのが，もっとも適当である。漢語の「要求する」は「もとめる」より高姿勢であることが，はっきりしており，たとえば「あわれみをもとめる」にくらべて，「あわれみを要求する」というのは不自然だし，もしこういったとすれば，相手が当然自分をあわれむべきだという根拠があることを確信して

いるような感じを与える。しかし，やはり，これらの動詞を代表するものを漢語のなかからえらぶとすれば，「要求する」がえらばれるだろう。つまり，これらの動詞を一括すれば，＜要求＞をあらわす動詞といえる。

「しいる」は，程度からいうと，「要求する」から「強制する」「強要する」くらいまでにあたる。

○かねてから国元にゐる親達に勧まない結婚を強ひられてゐた。（こゝろ 5）

さて，以上問題にしてきたのは，相手に対する態度がへりくだっているか，それとも高姿勢かという基準についてであった。これは外にあらわれたようすだが，それをささえるものとして，主体の側の心理的な面では，相手にある行動を期待するばあい，それを自分からいうだけの正当な根拠があると信じているかどうかの段階だともいえる。これら2つの条件（外見と心理）は結びついて1つの軸をなしている。

ところで，これを＜よこ軸＞とすれば，これらとは別な基準による段階づけ，いわば＜たて軸＞を考えることもできる。それは，やはりいくつかの側面からとらえることができるが，第1に，もとめている内容が日常的なことか，それとも異常事態，日常的にはおこりえないような重大な用件についてか，ということがある。ちょっとタバコを買ってきてくれ，と「たのむ」のと，おれのかわりに死んでくれ，と「たのむ」のとでは，その依頼内容の日常性という点で大きなへだたりがある。第2に「たのむ」ときの気もちの強さ弱さのちがいがある。ことわられてもいい，というような，あるいは相手がことわるかどうか，ほとんど考慮しないような軽いきもちで「たのむ」のと，ぜひともこれを相手にみとめてもらわなければこまると，必死になって「もとめる」ばあいとでは，主体の気もちがまるでちがう。これが，日常的なことかいなか，という点に関係をもつことは明らかである。日常的なことならば，それほど真剣にならないことがおおく，特に異常な重大な事件であれば，もとめる側も必死になるだろう。そしてさらに第3に，相手にもとめるときの態度が大げさかいなか，という点がからんでくる。日常的な軽いことから，はなれればはなれるほど，また，きもちとして，ぜひこのことは相手にみとめてもらいたい，という思いが強ければ強いほど，それだけ要求する側の態度もまた大げさになるだろう。

これらの3つの基準は密接に結びついて1つの軸をなしているのであって，ばらばらに，ときほぐすことは，むずかしい。もちろん，3つは，原則的な面において平行しているだけで，個々のばあいにあたれば，おたがいにむじゅんし，平行しないという面も出てくるだろう。たとえば，人の命にかかわるような重大事件を，あっさりと他人にたのんでしまう，ということもありうる。しかし，原則としては，やはり，この3つを平行したものと考えても，それほど，大きなまちがいに，ならないだろう。

なお，ここにあげた＜たて軸＞の段階づけは，文体の面における段階づけとも平行している。すなわち，日常的なことがらを表わすのに主としてもちいられる単語と，異常事態を表わすのに主としてもちいられる単語とのあいだには，日常語対文章語という文体上のちがいが見られるのがふつうである。そして，最初にちょっとのべたように，こ

こでとりあげた動詞を和語の系列と漢語の系列との2つにわけたのは，つまりそれらが日常語対文章語という系列の上での対立に関係し，それがさらに要求内容の日常性その他の基準からみた意味上の段階づけ（たて軸）に関係しているからであった。具体的にいうと，たとえば「たのむ」と「依頼する」は，ほとんど同じ内容を表わすが，「依頼する」は文章語であって，内容的にもそれに応じたかたよりがある。あまりに身のまわり的な，家族のあいだで，ちょっと，たなの上のものをとってもらうことを＜たのむ＞，という程度のことにもちいるのには，不適当な動詞である。そのような関係は，「ねがう」と「嘆願する」や，「もとめる」と「要望する」「要求する」などのあいだにも見られる。もちろん，このばあい，「たのむ」や「ねがう」は日常的なことに限定されるのではなく，重大なことについての公式な要求・依頼にももちいられるのだから，いわば和語の系列が漢語の系列をふくむかたちで，漢語の系列よりも広い範囲をカバーしていることになる。

以上にのべたことを，いくつかの例でしめそう。漢語の系列，「嘆願する」「懇願する」などが非日常的なことについて使われることは，あらためて例をあげるまでもない。これに対し，「ねがう」は，「懇願する」などと同じように，重大な事件に必死で対することにもつかわれる。

○私たちはぜひとも今度の後生（ごしょう）の一大事が助けていただきたいのでございます。皆に代わって私が一向（ひとむき）にお願い申します。（出家とその弟子 81）

この例では，内容的には重大事件であり，きもちとしても強い。外にあらわれたようすも，かなり大げさであるとおもわれる。

○総理の責任ある御答弁をお願いしたいのでございます。（人間の壁・上 353）

では，へりくだっておらず，その面からいえば「希望する」ないしは「要望する」程度であって，きもちとしても，さきの例ほど切実なものではないだろう。しかし，日常的でないことについて，おおやけの場で希望することをあらわしている点ではおなじである。一方，「ねがう」には，これとちがって，つぎのようなばあいもある。

○程によつたら平河さんへも帰りにお寄りして来たいと思つて，朝早く，青木さんが山羊の乳を搾つて入らつしやるところへ行つてお願ひした。（桑の実 139）

この例では，日常的なことについて，ちょっとたのむのであって，それほどあらたまった態度でも，必死のようすでもない。この例は，「嘆願する」など，文章語的な漢語の系列では，おきかえることはできない。

「たのむ」も「依頼する」とおなじようではあるが，「ねがう」と同様に日常的なことがらまでふくむという意味では，範囲が広い。「依頼する」は，

○警官に捜索方を依頼した後，××病院に廻つて足を診（み）て貰つた。（波 108）

○彼女とすれば弁護士に依頼する費用を丸徳してゐるわけだが，（厚物咲 33）

のように，かなりおおやけ的なことについて，また，それほど親密な間がらにない相手に対して「たのむ」ばあいにつかわれる。「たのむ」の方も，

○その時兼て介錯（かいしゃく）を頼まれてゐた関小平次（せきこへいじ）が来た。（阿部一族 36）

○彼は，在米中知つた人々に就職口の紹介を**頼んだ**。（仲子・上 186）

などのばあいにはこれに近く，「依頼する」といいかえることができる。しかし「たのむ」は

○「さうして御呉れ」と母が**頼んだ**。（こゝろ 123）

○次の日，午後の五時過，佃から電話がかかつた。仲子は，自分が行くから，七時頃図書館に来てゐてくれるやうに**頼んだ**。（仲子・上 97）

のように，家族や親しい友だちなどに，はたらきかけるばあいにもつかわれる。「こゝろ」の例のように，母がむすこに対していうのに，「依頼する」というのはひじょうに不自然であるし，「仲子」では，もし「依頼した」という表現がつかってあれば，その関係は，「たのんだ」とあるよりも，ややよそよそしいものにうつる。

「たのむ」と「依頼する」とのちがいは，文体上のちがいでもある。

○「かくすなら，警察にでも**頼む**。」私は声をあらくした。（冬の宿 106）

このようにおなじ「警察に」という相手，すなわち，おおやけのことについての依頼であっても，地の文ではなく，会話の中では，「たのむ」という方が自然である。

「もとめる」と「要求する」との関係についても，「たのむ」と「依頼する」のばあいと似たようなことがいえる。「もとめる」は，おおやけのばあいから個人的なばあいまで範囲が広い。

○中年の女教師が手をあげて発言を**もとめた**。（人間の壁・上 172）

○松木ボリスは二人に連行を**もとめた**さうである。（本日休診 78）

これらは，おおやけの場における要求であって，それぞれ「要求した」といいかえてもおかしくはない。その際，「もとめた」にくらべれば，やや態度が強いようにひびく，といったニュアンスのちがいはあるが，おなじ文脈で，どちらのことばもつかえる。これに対し，

○何となく助太刀を**求めた**やうに伴子を見て笑つた。（帰郷 307）

○「それは断つた方がいゝね」と野島は大宮に相槌を**求めた**。（友情 69）

のように，日常的な，したしいものどうしのあいだで「もとめる」ことは，「要求した」といいなおすと不自然である。よそよそしく，あらたまったものになってしまう。もっとも，したしいものどうしでも，

○広介の顔の下で熱い息をはくようにして，今日，逢っても，決して何もしちゃあ，厭。と言い，厳密に広介の答えを**要求した**。（くれない 89～90）

のように，「要求する」がつかわれないことはない。そして，そのばあい，「もとめる」よりも強い態度をあらわしているようなニュアンスがある。しかし，このような例はまれであって，「要求する」は，ほとんど，おおやけの場におけるものである。

「しいる」と「強制する」「強要する」とのあいだにも，以上に見てきたような広さのちがいがあるかどうかは，あまりはっきりしない。

○銃は国家が私に持つことを強ひたものである。（野火 88）

のように，おおやけの関係であるばあいに，「強制する」や「強要する」が使えること

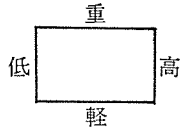
はもちろんだが，

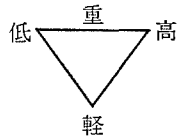
○〔母親は〕明後日の帰島の日まで宏の身に何事もないやうに，新治も一緒に祈れと強ひた。（潮騒 75）

のように，わたくし的なばあいでも，やはり「強制する」「強要する」といっても不自然ではない。相手に「しいる（強制する，強要する）」という行為は，たとえ家族間であっても，すでにある程度のよそよそしさ，したしみのなさを前提にするものであって，その点，「たのむ」などとは，ちがうのかもしれない。また，「しいる」ということばが，和語ではあってもかなり文章語的であり，会話ではほとんど使われない，という点でも，「強制する」「強要する」などに近い面がある。もっとも，範囲の上ではっきり区別はできなくても，重心のありどころからいえば，「強制する」「強要する」の方がいっそうおおやけ的な方に傾いているかもしれない。

さて，さきにこれらの動詞を区分する2つの軸があることをのべた。すなわち，一方では主体の態度が低姿勢から高姿勢までの範囲でどのような位置にあるかということ，他方では，おおやけの，あらたまったものから，日常的，私的なささいなことに関係するものまでの，どのへんに位置するかということ，この2つである。これらを，たて軸とよこ軸とにおけば，それぞれの動詞のしめる位置は，一応四角のなかの一定範囲ということであらわすことができるはずだ。しかし，実際は，以上にのべた，たて軸とよこ軸とは，それぞれ無関係なものとしてあるわけではない。すなわち低姿勢から高姿勢へという，よこ軸の段階が問題になるのは，おおやけ的，ないしは非日常的な重大事件であって，小さなことについて，ちょっとたのんだりするばあいには，低姿勢も高姿勢もあまりないのがふつうである。すなわち，たて軸の程度を重から軽へと表現すれば，よこ軸の低から高へという段階が問題になるのは，たて軸が重のばあいであり，軽のばあいには，ほとんどとりあげるほどのことはない。だから，図示するとすれば，それは四角形ではなくて，三角形になる。第1図を参照。

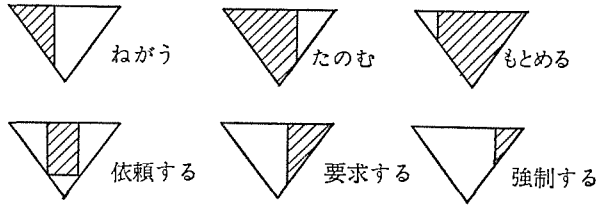
（第1図）





いま，この三角形の上に，おのおのの動詞がどのような位置をしめるか，いくつかの例についてしめすと第2図のようになる。

（第2図）



たとえば，「哀願する」という動詞はきわめて低姿勢の態度をあらわす。そしてそれ

は日常のささいなことには関係がない。「依頼する」は，特に低姿勢でも高姿勢でもなく，また重大な，おおやけのことだけでなく，かなり日常的なことについても表わすことができる。しかし，「たのむ」にくらべれば，ほんとうの日常的なところまで，おおっているとはいいにくい。「要求する」は，高姿勢の側を広くおおっており，「強制する」は，その中のせまい一部分，もっとも高姿勢の態度をもった部分だけをあらわす。和語の方は一般にこれらよりも範囲が広く，「ねがう」のばあいは低姿勢のほとんど全般，「たのむ」のばあいには，さらに右よりのところまで領域が広がっている。一方「もとめる」は高姿勢の方に中心があるが，先にのべたように，「あわれみをもとめる」など，慣用句的なものについては，低姿勢のものまでふくんでいる。そして，和語のばあい，いずれも三角形の下側の頂点，すなわち日常的な，私的なことについてまでおよんでいるのが特徴である。もちろん，このような図式化は単純な一面化にすぎない。純粋に図式という側面だけからしても，以上の図では，その動詞のおおっている領域の広さはあらわしているが，その中でどの辺にいちばん重点があるのか，ということは，あらわしていない。たとえば，「たのむ」についていえば，重心は，高姿勢でも低姿勢でもない，まん中へんにあり，「もとめる」はやや右よりにあるのであって，そのことをあらわすためには，以上のような区画図だけでは不十分である。さらに，上にのべてきた2つの軸の上における位置づけが，この図示によって完全に示されると仮定したところで，それだけではこれらの動詞の意味的な関係を完全に記述したことにはならない。以上2つの軸のほかにも，たとえば，これらの要求が，ことばによるものかどうか，またその要求によって実際に相手が動きだしたかどうか，ということがある。前者からは「要求する」と「命令する」との対立が生じている。「強制する」と「強要する」とのあいだには，後者のような対立があるとする見方があるかもしれない。

3.10 ようす

これも「手段・方法」のグループにちかい。しかし，「手段・方法」というのは「目的」に対立する概念であり，したがって意図的な行為についてしかいえない。ここで「ようす」というのは，「したたる」のような自然界の現象，または，人間についても「ふきだす」のように非意図的な行為についてで，「手段・方法」というワクにおさめられない属性である。

〔240〕 したたる，ふる＜たれる，おちる

「したたる」「ふる」は，液体がつぶになって，きれぎれにおちるばあいにつかわれる。

○雨靴と滴のしたたる雨傘とを両手にもったまま，(人間の壁・上 32)

○左衛子は，瞳を外らせて庭に降る雨を見まもつた。(帰郷 181)

「おちる」はそのようなことにも，また，つづけて，あいだがきれることなしに落下することにもいう。

○涙の雫がぽたりと鼻の先きからズボンの上に落ちたのを見た。(或る女・前 197)

この例は「したたる」や「ふる」と同様，しずく，つまりつぶになって液体がおちるばあいである。

○岩組に滝とは云へない水の落ちてゐるところがある。（帰郷 269）

この例は水がつづいて，つぶ状にではなく，棒状に見えるばあいである。

「たれる」については，

○大根の葉からも霜が解けて雫がまだぽたりぽたりと垂て居た。（土・上 24）

のように，つぶ状に，あいだがきれておちるようすと認められる例はあったが，その逆のようすとはっきり断定できる例はなかった。しかし，つぎにあげるような例では，水や油がつぶ状になっていた，ととれると同時に，棒状につづいていた，ととれないこともない。

○小野田も怒りだして，そこにあつた水差を取つてお島に投げつけた。彼女の御召の小袖から，水がだらだらと垂れた。（あらくれ 237）

○鰯の油がぢりぢりと垂れて青い焔が立つた。（土・上 33）

〔241〕 あふれる＜こぼれる／もれる

「あふれる」は，量がふえて，いれものや場所に，はいりきれないので外へ出ることをいう。

○雨水が下水からあふれて，路の上が川になっている。（人間の壁・上 272）

「こぼれる」も，これと同じような状況に，つかうことがある。

○扇朝は涙れるほど注がれた盃に口をつけた。（末枯 55）

この文では「あふれる」といいかえることができる。しかし「こぼれる」がいつもはいりきれないで出ることだとはいえない。

○客が飲み食いして行った後の，こぼれた酒で，（放浪記 100）

このばあいには，ほんとうにあふれてテーブルの上に「こぼれた」酒もあるのだろうし，また，とくりが倒れて出てきた酒，つぐときに落ちた酒などもあるだろう。したがって，「あふれた酒」といいかえることはできない。

「もれる」はわずかなすきまから出ることで，量的にいっぱいあるところから，とはかぎらない。

○その堰き止めからもれる僅かな「こぼれ水」さえ，（改造 1954年6月 69）

〔242〕 とびちる＜ほとばしる

「とびちる」はおもに液体または粒のようになった固体がとぶことをいう。液体のばあいにも，棒のようにつづいてとぶのではなく，しずく，粒になってとぶのである。

○飛沫がその十人余りの身体をつつんでとびちった。（落城 25）

これに対して「ほとばしる」は，「とびちる」とおなじように粒状になっていることもあり，また長くつながって棒状になっているばあいもある。

○表情の歪んだ固い職工達の顔から

怒りの涙がほとばしって（放浪記 225）

この例では明らかに1つ1つの粒になって「ほとばしって」いるのであって，「とびちる」と同じだ。

○一つの水道栓がこはれて，白い水が迸つてゐた。（野火 75）

このばあいには，末端では粒になっているとしても，水道を出たばかりの水は，おそらく棒状になっているであろう。

一般的には，「ほとばしる」の用例のうち棒状になっているものの方が多いように思われる。しかし，もちろん，いちいちの文脈について，どちらかはっきり指摘できない例もある。

○矢は矢羽根を瞬間ふるわせて，やがて血を迸らせた。（落城 21）

このようなばあいには，血の「ほとばしった」ときの形ははっきりしない。おそらく，からだをでたときは，つながっており，それがすぐに小さな粒にわかれたものであろう。すなわち1つの現象のなかに，棒状のものと粒状のものとがふくめられているものと思われる。

〔243〕 **ひんまがる＜まがる，ゆがむ**
ひんまげる＜まげる，ゆがめる

「ひんまがる」「ひんまげる」は，基本的には，そのまがったときのようすに対する評価によって「まがる」「まげる」と区別される。すなわち，まがったあとの状態がみにくいばあいに，「ひんまがる」「ひんまげる」がつかわれる。しかし，その動作・変化が行なわれるプロセスについてのちがいもある。

○もんは呆気（あつけ）にとられてゐたが，みるみるこの女の顔がこはれ出して，口も鼻もひん曲つて細長い顔にかはつてしまひ，（あにいもうと 152）

○突然思い切り歯を剝出して，いいッと顔をひん曲げた。（くれない 141）

これらの例文では，変化がおこった結果に対する評価と同時に，その変化がおこる途中のようすも，あらあらしさによって特徴づけられている。あらあらしい，ということは，さらに分析するならば，速度がはやく，力がはいっていることである。これに対して，「まがる」では，そのような条件が必要ない。

○彼女はいきなり，自分のかけていた眼鏡を両手に取って，きゅっと逆に捩った。（中略）それはいびつに曲って宙にとんだ。（くれない 28）

これは「ひんまがって」といいかえてもいいような例であって，めがねは，結果としてぶざまなようすになったのであるが，それと同時に，そのまがり方もはげしく，あらあらしかったのである。これに対し，

○なかなか曲がらない腕を組合はせながら，涙を麻袋の中に落した。（蟹工船 90）

のような例では，あらあらしいとはいえない。むしろ，ゆっくり，しずかに，力が加わっているのである。

もしこの2重の基準のあいだに，むじゅんがあるときには，結果としてのまがった状

態に対する評価が優先する。つまり，かりに途中のプロセスとしては，あらあらしくなくても，結果として，それがみにくい状態であれば，「ひんまがる」「ひんまげる」が使われる。たとえば，

○葉の陰に下る瓜が，萎んだ花のとれぬうちに尻が曲つて（土・上 130）

のばあい，時間的には，あらあらしいという表現を使うほどには，短時間におこった変化ではない。しかし，その結果がみにくければ，「ひんまがって」ということもできるだろう。逆に，途中のプロセスがあらあらしく，しかも結果的に，きちんととととのった形にまがっているときに，やはり「ひんまがる」「ひんまげる」といえるかどうかは，明らかでない。そのような状態をも仮定することはできる。たとえば，針金などをかるがると，むしろ雑なようすでまげていながら，結果としてできあがったのが美しい曲線である，というようなばあい。このような現象も「ひんまがる」「ひんまげる」といえるのかもしれない。もしそうならば，上にのべた，結果についての評価が優先する，ということは修正して，どちらかの基準があれば，この動詞が使える，と考えなければならない。しかし，これにあたるような実例は「ひんまがる」「ひんまげる」の方にも，「まがる」「まげる」の方にもなかった。

以上には「まがる」の例をあげたが，「まげる」でも同様だ。

○其高い蜀黍の幹をぐつと曲ては穂首に近く斜に伐つた。（土・上 135～136）

○彼女は人さし指を曲げて，指の節で校長室の扉を二つたたいた。（人間の壁・上 132）

左側の例では，力を入れて，すばやくまげているのであり，「ひんまげて」といえないことはない。しかし，「人間の壁」の例では，やさしく，しずかにまげたのだろうから，「ひんまげて」ということはできない。

「まがる」「まげる」には評価はくわわっていない。これに対し「ゆがむ」「ゆがめる」は，結果に対する評価があるという点では，「ひんまがる」「ひんまげる」と同じである。にもかかわらず，その途中の経過が，あらあらしくなくても使える点で，「ひんまがる」「ひんまげる」とはちがっている。

〈あらい〉

○女の顔は歪み，なほもきれぎれに叫びながら，（野火 84）

○唇を思ひツ切りゆがめて唾をはいた。（蟹工船 27）

〈やわらかい〉

○仲子は，微かな歪んだ頬笑みを浮べた。（仲子・上 68）

○微笑ともつかないやうなもので口元を歪めながら，（風立ちぬ 122）

これらの例で，左側にあげた，あらあらしいようすでの「ゆがむ」「ゆがめる」は，「ひんまがる」「ひんまげる」と同様だ。しかし，右側にあげたような，静かな上品な動作については，「ひんまがる」「ひんまげる」をあてはめることはできない。（ただし，ここにあげた文脈で，これらの動詞が使いにくいのは，文体のせいもあるだろう。また，動作自身のあらあらしさだけではなく，「ひんまがる」などが，「まがる」と同様に，主として直線的な軸を基準にしているのに対し，「ゆがむ」が平面を基準にしてい

るというちがい，したがって，ほほえみのように面的な現象については，「ゆがむ」の方が適切だということからもきている。(p. 389～390 参照。)

〔244〕 うずく＜いたむ

「うずく」は，ふつう，辞典に，「ずきずきと痛む」としてある。すなわち，「うずく」は「いたむ」ことの1種で，その特徴は，「ずきずき」と表現されるような痛み方にあるわけだ。この規定はおそらく正しいが，実例からは，それを示すことができなかった。というのは，「うずく」の用例は10例くらいだが，そのうち実際に生理的な痛みを表現したのは，わずかにつぎの1例しかなかったからだ。

○寒負の顔うづく日本海に出て (俳句 1956年12月 76)

この俳句の例も，「ずきずき」と表現されるような痛みであるかどうかは，はっきりせず，典型的な「うずく」の例とするのには不十分である。「うずく」の用例は，大部分，つぎにあげるように比ゆ的に使われたものだ。

○最初の印象を思ひ出すと，今でも私の胸はうづく。(野火 72)

○もし万一うちの子供がスターにでもなったら，という甘い考えが，こころの片隅でうずいているからである。(婦人公論 1956年5月 258)

これらの慣用的な表現において，「うずく」は，自分が意識的におさえることができない悲しみ・苦しみ・欲望などを表現している。「いたむ」の方は，「うずく」にくらべて，はるかに範囲が広く，生理的な痛さを表現した例が多い。この中には，ずきずき痛むばあいもふくまれる。

○頭はズキズキと**痛んで**ほてり，体は疲れてゐた。(青銅の基督 72)

そして，「ずきずき」以外に，いろんな痛み方がある。

○頭の芯がきりきりと**痛んで**くる。(人間の壁・上 152～153)

○ただ眼がしんしんと**痛む**のでした。(銀河鉄道の夜 315)

○疝気でどうかすると腰がきやきやと**痛む**こともあつたが，(土・上 80)

○瞼(ひぐ)がぴりぴりと**痛んだ**。(土・上 14)

もちろん，痛みについての形容は，以上にあげたものにとどまらない。それらすべての痛みについて，この動詞は使われるだろう。

〔245〕 ふきだす／ほほえむ，ほくそえむ＜わらう

「ふきだす」は，突然声をあげてわらいだすようすをいう。

○縁側へ爪先立っていた私たちはドッと**吹き出して**哄笑した。(放浪記 74)

「ほほえむ」「ほくそえむ」は，ともに，声を出さずに静かにわらうようすをいう。

○葉子はたゞにこにこと微笑みながら点頭(うなづ)いて見せた。(或る女・前 165)

○「いよいよあいつも，だらしなく惚れ込んで来やアがつたな」とでも北叟笑(ほくそゑ)むところでせうけれど，(多情仏心・前 358)

「ほほえむ」と「ほくそえむ」とでは，その背景にある，きもちの状態にちがいがあ

り，そこから，わらい方にも多少のちがいが出てくるかもしれない。「ほくそえむ」は，自分の予想どおりに，ことがはこんだとき，あるいは，自分につごうよく行ったときに，うれしくなって「わらう」ことであり，そういう利害関係をぬきにして，純粋に上品なわらいをうかべているときには，「ほほえむ」としかいえないだろう。しかし，客観的な表現として，「ほほえむ」と「ほくそえむ」とが，どのようにちがっているのかをいうことは，むずかしい。

「わらう」は，これらのばあいをふくみ，さらに，そのほか，いろいろなわらい方をも合わせた，範囲の広い動詞である。たとえば，

○皆はそれでドツと笑つた。（蟹工船 79）

という例では，急に高い声をあげてわらったので，「ふきだす」におきかえることができるし，

○色の白い子が，にこにこ笑ひながら，私のはうへやつて来た。（富岳百景 71）

の例では，にこにこ静かにわらっているのだから，「ほほえむ」でもあらわせる。

「わらう」がこれらよりも広い範囲をしめているということは，具体的にいえば，たとえば，わらいつづける例をふくんでいることである。「ふきだす」は，わらいだすことをあらわす。継続したわらいを表現することはない。

○考え考え学生がそれに答える。そのたびに，左手の日本人教授たちが一列のままどっと笑う。岡などはげらげら笑ってなかなか止まらない。（むらぎも 338）

この例では，前の「笑う」を，「ふきだす」にすることはできるが，あとの「笑って」を「ふきだして」にすることはできない。「ほほえむ」や「ほくそえむ」とくらべても，たとえば，相手をあざけるような調子でわらっている，つぎのような「わらう」の例は，動作としては，「ほほえむ」などに近いにもかかわらず，これらの動詞におきかえることができない。

○吉田に一泊して，あくる日，御坂へ帰つて来たら，茶店のおかみさんは，にやにや笑つて，十五の娘さんは，つんとしてゐた。（富岳百景 60）

このように，「ふきだす」や「ほほえむ」に近くて，しかもすこしちがっている，という例だけではなく，それらとまったくちがったわらい方の例としては，つぎのようなものがある。

○柄杓を持つたまゝ「へゝ」と笑つて，お島の顔を眺めてゐた。（あらくれ 56）

○昇子が側（わき）からあやすと，駿は彼の膝の上で少し笑つた。（波 152）

もちろん，このほかにも，わらい方はいろいろあり，それらはすべて「わらう」という動詞で表現できるはずである。

〔246〕 たどりつく＜つく

「たどりつく」について，広辞苑（第1版）・例解国語辞典は「道を尋ね求めて行きつく。」と規定している。つまり，「たどる」の意味のうち，「知らない道を尋ねながら歩く。」（例解）という方の意味をもとにして成立した複合語だと解釈していることにな

る。しかしこの規定はまちがい，またはすくなくとも不完全である。というのは，「たどりつく」はふつう。

○泥濘の中を歩き通した後，翌朝漸く丘陵地に辿りついた途端に，（李陵 160）

のように，困難な条件をおかして，やっとのことで「つく」ことを表わすのであって，道がわからないところを進んで「つく」ことを表わすのではないからだ。今回の調査で具体的な動作に「たどりつく」がもちいられたのは20数例あるが，そのほとんどが，今あげた「李陵」の例のように，困難なところを通りぬけてつく意味，ちなわち「たどる」についての例解国語辞典の規定によれば，「歩きにくい道を苦労しながら歩く。」という方の意味をもとにしているのである。道がわからないばあいについていったものかとも解釈できるのは，わずかにつぎの2例にすぎなかった。

○ところで，八十六のうめ女がひとりで汽車にのって，未知の山村に辿りつくことは常識で考えられず，（厭がらせの年齢 268）

○私は右手に丘を縁取る道なき林の中を迂回して，河原の道が前方で，また別の林に入つてゐるところまで，辿りつくことにした。（野火 17）

これらも，「道を尋ねて行きつく」というよりも，道はわかっているのだが，そこへゆくのがむずかしいことをいっている，とみる方が自然だ。この点，新潮国語辞典が，「たどりつく」を，「たどってやっと着く。かろうじて到着する。」と規定している方が正確である。（ただし，新潮は，「たどる」の意味については，「道に迷って尋ね行く。」という規定しかしておらず，「あるきにくい道を……」のような意味をのせていないので，不完全である。）広辞苑も第2版で，2番めの意味として「歩くのに苦しみなやみながら，ようやく行きつく。」という説明をあたえており，これは正しい。

新潮の「かろうじて」ということのなかには，上の「李陵」のように，客観的な条件としてあるきにくい，ということのほかに，主体的な条件もはいる。

○気がついてみると瀬谷はいつか片野の家から遠ざかり，町に通じる郊外の道をがくがくと顫へながら走り歩いてゐた。しかも彼は右腕にしつかと菊の鉢を抱きかかへてゐたのである。彼はやうやく我が家に辿りつくとそのまま熱をだして寝こんでしまつた。（厚物咲 40）

このばあい，客観的条件としては，ふつうの道をあるいているのだが，ただ，このときの主人公は，夜中に人の家にしのびこんで首つり死体にぶつかり，ふるえあがって逃げ出してきたので，そのことを「たどりつく」といったのである。

なお，広辞苑や例解国語辞典の規定のうち，「道を」という部分にも問題がある。やっとのことでつく動作には，すべて，「たどりつく」が使えるのであって，「道を」通っているとはかぎらないからである。つぎにあげる例では，おそらく数メートルしかはなれていないところの移動をいっているのだが，その移動がきわめてむずかしかったために，「たどりつく」ということばが用いられている。

○ものにつかまりながら，何度も薙ぎ倒されて，船橋に辿りついた安夫は，船長にその旨を報告した。（潮騒 143）

○お蝶は必死ともがくうち，漸く，階子段に辿り付きましたが，身を起す気力もありません。（傑作倶楽部 1956年5月 417）

〔247〕 たどる<いく

「記憶をたどる」のような抽象的な用法を別にして，具体的な動作をあらわす「たどる」に，例解国語辞典や岩波国語辞典は2つの意味をたてている。第1の意味は，例解によれば「知らない道を尋ねながら歩く。」，岩波によれば「捜しながら知らない道を進む。」ということであり，第2の意味は，例解では，「歩きにくい道を苦労しながら歩く。」岩波では「進みにくい道を苦労しながら進む。」という規定になっている。「歩く」と「進む」とのちがいを別にすれば，両者の規定はほとんど同じであって，第1の意味では道を知らないこと，第2の意味ではあるきにくいことが条件になっており，そのような困難な条件をおかしてすすむことが，「たどる」の両方の意味に共通にみとめられる特徴だということになる。この規定は一応正しいが，これだけではつくせない面もあるので，その点についてのべる。

はじめに，以上の辞典の規定にあてはまる方の例をあげよう。まず，しらない道をいく例としては，

○地図通りに辿ってすぐ安達書房は見つかった。（むらぎも 348）

のようなのがある。

○敏速に獲物の足跡をたどるという名誉ある役を（文芸春秋 1954年6月 216）

もここへいれてよいかもしれない。しかし，この例は他動詞である。一般に，自他を区別している辞典では「たどる」は自動詞になっている。そして，以下にあげる「たどる」の用例はほとんど「……の道をたどる」と，「を」格の目的語をとっているけれども，それらはみな空間的な通路をあらわすものなので，自動詞とみとめるうえで，さまたげになるわけではない。しかし，いまあげた例は場所をあらわすものではなく，さがし求めているものをあらわす目的語をとったものである。したがって，これを自動詞とするのは不適当であろう。

つぎに，あるきにくい道をいくばあいの例をあげる。

○今此雪の夜道を独り辿つて行くのも夢の様な心地。（思出の記・上 183）

○細長く泥が掻き分けられた所を，後生大事に辿つて行かなければ（こゝろ 230）

○歩み難い石高道(いしだかみち)を，市九郎は，杖を頼りに辿つて居た時，（恩讐の彼方に 72）

上にあげたような，辞典の規定にそのままあてはまる例のほかに，上の2つの意味のどちらの「たどる」でもなく，しかも，特殊な例外とみることもできないほど，かなりの例がある用法の「たどる」がある。

○このたびのお召しで登城してからはじめての家路をたどった。（落城 15）

○どこかの寺に出る静かな野道を辿つてゐて，（帰郷 245）

○思案に呉れ乍ら，白隠は飯山の町はづれを辿つた。（破戒 219）

これらについて，「道をさがしながらあるいている」とか，「あるきにくい道をある

いている」とか，いうことはできない。「破戒」の例などは，まだしも，道自身はけわしくなくても，心理的に苦しみながらあるいている例だが，「落城」のばあいには，城から自分の家に帰るのだから，道をよくしっているのはもちろん，あるきにくいこともないはずだし，心理的に苦しみながらというわけでもない。つぎにあげるようなものも，ここにふくめてよいかもしれない。

○朝じめりのした街道の土を踏んで，深い霧の中を辿つて行つた時は，（破戒 141）

○重なり合つた幾箇かの山裾を辿つて行くと，（あらくれ 124）

○道を山国川の渓谷に添うて辿つた。（恩讐の彼方に 71）

これらは，しいて理くつをつければ，霧の中だから道がわかりにくいのだとか，山道だからあるきにくいのだろうとか，さきにあげた第1第2の意味のどちらかにこじつけることもできる。しかし，この文脈では，特にあるきなやんでいることをいっているわけではない。それでは，これらの「たどる」の意味はどのように規定すべきか，どのような点で「いく」や「とおる」とちがうのかというと，その積極的な特徴はあまり明らかでない。「帰郷」の例を「静かな野道をあるいてゐて」とし，「破戒」の例を「飯山の町はづれをいつた」といいなおしても，別段大きなちがいはない。したがって，ちがいはむしろこの動詞のもつ，やや文学語的な，文体上のニュアンスにあるだけで，意味的には，単にあるいていく動作をしめすにすぎず，悪条件をおかしていくという特徴は，このばあい失なってしまっている，とみられる。

なお，「たどる」は原則として人間を主体とするが，そうでないばあいの例としてつぎの2つがあった。

○鏡の裏面に彫られた鹿や栗鼠たちは，遠い昔，波斯の森のなかから，永い陸路や，八重の潮路をたどつて，世界の半ばを旅して来て，（潮騒 6）

これは比ゆ的で，ぎ人化している例である。

しかし

○一条の鉄道線路が，南へ南へとたどつて行くのでした。（銀河鉄道の夜 267）

のばあいには，比ゆ的とはいえない。しかも，依然として空間的な現象を表わす点で，「記憶をたどる」や「複雑な過程をたどる」のように抽象化した例ともちがう。主体が人間でないという点は別だが，単に長くのびていることをあらわしているだけで，特に困難な道を進むというようなニュアンスをともなわないという点では，上にとりあげた問題と共通する面をもっているものである。

4. 環　　境

ある現象がどのような環境のもとにおこるかを，おもな特徴とする動詞は，あまりないようだ。ただし，あり場所を存在の環境とかんがえれば，つぎのようなものをあげることができる。

山ごもりする，野宿する，在宅する，外泊する，内蔵する

また，時間的な条件の限定されていることをしめす，つぎのような複合動詞がある。

朝寝する，夜逃げする，早出する，先どりする，夏やせする

〔248〕 とぶ<うく，うかぶ，しずむ，ながれる

これらの動詞は，原則として，固体の上にしっかり自分をささえて移動するのではなく，気体や液体の中をささえなしに移動することをあらわす。そして，これらのうち「とぶ」はあきらかに気体の中の移動にもちいられ，それに対して「うく」「うかぶ」「しずむ」「ながれる」などは，気体の中でも液体の中でもかまわない。いま「とぶ」については，例をあげるまでもないので，ほかの動詞について，それぞれ両方のばあいをあげておく。

〈気　体〉

○美しい雲が，（中略）いとも軽軽と浮いて出る。（田園の憂鬱 116）

○機体がいつか地面を離れ，空へ浮かんで行く，（暗夜行路・前 114）

○丘も木も石も草も，すべてあの高い空間を沈んで来て，こゝに，自然の底に落着いたらしい。（野火 177）

○砂のやうな雲が空をさらさらと流れてゐた。（凧立ちぬ 71）

〈液　体〉

○蛙がふわりと浮いてはこそつぱい稲の穂に捉りながら（土・上 135）

○水をくぐり呼吸を吐きに浮び，（あにいもうと 133）

○重火器は揚陸する隙なく，船諸共沈んだ。（野火 9）

○雪の塊りが，船の間にしきりに流れて来る。（河明り 282）

ただし，これらの動詞は，どちらかといえば，液体の中での移動についてつかわれるのが基本的な用法であり，気体の中での移動は，それにくらべて，比ゆ的とまではいえないにしても，2次的であるようにみえる。これは液体の中での移動の用例の方が量的にずっと多いこと，

○突気は澄みきつて，まるで水のやうに通りや店の中を流れましたし，（銀河鉄道の夜 254）

○ハツラツとした男の体臭が汐のように部屋に流れて来て，（放浪記 85）

○この窓から見下す杉林の前には，今日も蜻蛉の群が流れてゐる。夕が近づくにつれ，彼等の游泳はあわただしく速力を早めて来るやうだつた。（雪国 106）

のように，気体の中での移動に液体の例をひくことはあるが，その逆はないことなどの点からいえる。この点，特にあやしいのは「しずむ」であって，これは上にあげた「野火」の例でもやや比ゆ的ともいえる，あまり適当でない例だし，ほかの「うかぶ」や「ながれる」のように，あきらかに気体の中を移動することを示す典型的な例がみあたらなかった。

気体の中ということをしいて拡張して考えれば，

○と，私の傍に立つて，それを避けたはずのまつ子の体が，力なく，折れるやうに沈み，地面に折り重なつて，口から何か吐いてゐた。（冬の宿 111）

○まわりが急いで中腰になるだけ小男が小さくその底へ**沈む**。（むらぎも 252～253）

のように，人間のからだがひくい姿勢をとること，あるいは

○慣れてるから，歩けるようなものの，両側の畑は，闇に**沈み**，（自由学校 374）

のように，みえなくなること，などの例も，ふくめることができる。しかし，これらは，気体の中での移動というには，あまりに，はなれすぎていて，変形ないしは消滅の方に意味がずれている。しかも，一方「しずむ」には，固体の中での移動ともいえるような例がある。

○千代子の下駄は，ひとあしひとあし冷たい砂に**沈んだ**。（潮騒 104）

○体が雪のなかへすぽつと**沈んで**しまつて見えなくなるの。（雪国 78）

このばあい，固体といってもこまかい粒の集まりであり，全体としては液体に近く，その中をおしわけて他の物体がすすむのである。「ながれる」や「うく」「うかべる」についても，このような砂や雪の中での移動をあらわす例は考えることができそうだ。いずれにしても，液体の中での移動ということは，それだけで決定的にはたらく特徴ではなく，むしろ，これらの動詞の移動のし方を条件づける１つの側面にすぎない。

つぎの例も同じく固体の中での移動ともいえばいえるようなものだが，このばあいには，雪や砂の粒とちがって，全体として液体のような性質をもっているものではないこと，また移動の主体も「戦慄」という抽象物，性質であること，という両面からみて，さきの「砂にしずむ」「雪にしずむ」とはちがって，比ゆ的な用例とみとめられる。

○彼は，強い戦慄が身体を伝うて**流れる**のを感じた。（恩讐の彼方に 90）

なお，気体の中での移動というとき，それは厳密にはほとんど気体のあるなしを問題にしていないのである。つまり自然科学的にいえば真空の中における移動までふくんでいる。

○太陽に向つて**飛ばう**としたイカルスのやうに，（人格主義 39）

○細い月は，紐で繋がれたやうに，太陽の後を追つて**沈んで**行つた。（野火 33）

○秋になると，星が幾つも**流れて**行く。（放浪記 13）

これらが気体の中での移動であるか，真空の中での移動であるかを論じるのは，無意味に近い。

〔249〕 つかる，ひたる／うまる，うずまる，うもれる，うずもれる＜もぐる，没する

「つかる」「ひたる」は，液体のなかにはいるばあいに使われる。

○湯に**つかっ**ていると，朝から一寸も腰掛けられない私達は，（放浪記 92）

○清水に**ひたつた**女の足形を，青いばかりにくつきりと描きだした。（厚物咲 21）

ただし，「ひたる」の方は大部分の例が，

○この哀しみにいつまでも**浸つて**ゐたい。（或る女・前 154）

○子供らしい空想に**ひたつて**は泣いたり笑ったり，（放浪記 55）

のように抽象的なことに使われたものであって，「湯にひたる」「水にひたる」など，具

体的な動作をあらわすのに使われた例は少ない。液体以外のものとしては，どろのなかにはいることをあらわす，つぎの例があった。

○他の兵士等もこんなひどい泥に**漬つて**ゐるのだらうか。（野火 113）

○一日泥に**浸つた**儘でも愉快相に唄ふ声が（土・上 197～198）

ただし，「野火」の例は「つかる」，「土」の例は「ひたる」とよむのだと思われるが，ふりがながふってないので，この読み方が絶対に正しいとすることはできない。

これに対して，「うまる」「うずまる」「うもれる」「うずもれる」は，土や砂など固体のこまかい粒におおわれるばあいにつかわれる。ただし，「うまる」と「うずまる」とは，漢字でかいてあると，よみわけることができない。

「うずまる」は，かながきの例があるが，「うまる」の方については，あきらかに確認できる例がなかった。「うもれる」と「うずもれる」についても同様である。

「うまる」「うもれる」などについても，逆に固体の方から液体に近づいたものとして，どろについていった例がある。

○一度川底の泥に**埋つた**銃を，再び使用可能の状態に戻す困難は（野火 88）

○艦底には倒壊した箱物が油泥に**うもれて**，（文芸春秋 1953年10月 179）

つまり，どろのばあいには，「つかる」「ひたる」のグループも，「うまる」「うもれる」のグループも，どちらもつかわれるわけだ。

以上の説明に対して例外となるものに，つぎの例がある。

○雪笹川の渓谷ぞいの間道も濁流に**うずまつて**いた。（落城 29）

このばあいには，「濁流」という液体にはいっているのだが，にもかかわらず，「つかる」や「ひたる」ではなくて，「うずまる」がつかわれている。この理由を，どのように説明すべきかは，あきらかでない。1つ考えられる可能性としては，つぎのようなことがあげられる。「つかる」「ひたる」が，液体のなかにはいることを表わす，ということは，おおくのばあい，外からみえるような状態にあることを意味している。一方「うまる」「うずまる」などで，土や落ち葉の下にあるということは，主体がみえなくなるという結果をもたらす。（これは，逆に，「つかる」にとっては，みえるような状態ではいることが，より本質的であるために＜液体＞が条件になり，「うまる」などについては，みえなくなるということが本質的な条件であるために土や落ち葉が必要になってくる，ということかもしれない。）ところが，このばあい，道が濁流の下にあるということは，その道がすっかりみえなくなっていることである。したがって，それは液体のなかにはいっているという意味では「つかる」や「ひたる」でいいが，みえなくなっているという意味では，「うずまる」がつかわれる条件に近い。そのために，ここで「うずまる」がつかわれているのかもしれない。

なおこの点に関連していうと，「つかる」「ひたる」がつかわれるばあい，はたしてその主体は水中深くはいってもいいか，という疑問がある。「うずもれる」には，たとえばつぎのような例がある。

○学校の運動場には雪が山のやうに積上げてあつた。木馬や鉄棒（かなぼう）は深く**埋没**（うづも）れて了（しま）つ

て，屋外(そと)の運動も自由には出来かねるところからして，（破戒 301）

このように表面から遠ざかった深いところにあるばあいにも，「つかる」「ひたる」がつかえるかどうかは，多少疑問であって，その多くの例は，たとえば

○私の裸の足は冷い水を感じ，脛まで漬つた。（野火 113）

のように，部分的に液体のなかにはいっていることをあらわす。しかし，

○ざぶりと頭ごと漬(つか)つてしまひ，（冬の宿 17）

のように，完全にその姿が水面下にある例もないではない。いずれにせよ，その点をたしかめるには，例が不十分である。

「もぐる」「没する」は，液体でも固体でも，両方についてつかわれる。

○呼吸を吐きに浮び，また水のなかにもぐつて行つた。（あにいもうと 133）

○いくら宇宙線の透過力が強いといっても，地面の中にもぐれば，そこまでつき抜けてくるほど力の強い宇宙線は少ない。（物質の根源と宇宙を結ぶ 106）

「どろにもぐる」という例ももちろんある。

○片足を高く抜き，重心のかゝつた他方の足が，もぐりさうになるのをこらへ，抜いた足で，泥の上面を掃くやうに，大きく外に弧を描いて前へ出す。（野火 113）

ただし「没する」については，ふつう

○草も隨つて短くなつて腰を没するやうな処は滅多にない。（土・上 96）

のように，他動詞としてつかわれることが多い。自動詞としてつかわれた例は，

○霍去病が死んでから十八年，衛青が没してから七年。（李陵 153）

のように，死ぬという意味か，または

○其の時は日は疾(とう)に没して（土・上 16）

のように日がしずむ例が大部分であって，それ以外には，わずかにつぎの1例があっただけだ。

○林の絶へ間を国境に連る秩父の諸嶺が黒く横はツて居て，あたかも地平線上を走ては又た地平線下に没して居るやうにも見える。（武蔵野 17）

＜注1＞　「つかる」「ひたる」は，「湯につかる」「水にひたる」のように，液体をあらわすことばを目的語とするのがふつうである。しかし，つぎにあげるように，その液体をいれたいれものを目的語としているものもある。

○浴槽につかつたまゝ話してゐるらしく，湯音もしない時があつた。（帰郷 339）

○多計代は，浴槽に浸つてゐた。（仲子・上 183）

＜注2＞　「ひたる」は自動詞だが，「あらくれ」のなかには，これを他動詞につかった例が1つあった。

○精米所の主人が，もうやつて来て大きな体を湯に浸つてゐた。（あらくれ 119）

＜注3＞　また，「あらくれ」のなかにあるつぎの「ひたる」は自動詞だが，液体を主体とした表現だという点でほかの例とちがっている。

○岸には波がだぶだぶと浸つて，（あらくれ 7）

ふつうの表現ならば，「波が岸をひたして」とでもいうところだ。なお，以上「伸子」の1例「あらくれ」の2例の「ひたる」という読みには，多少疑問もあるが，改造社版現代日本文学全集のルビでは，そうなっている。

〔250〕 もれる，もる＜（でる，はいる）

「もれる」を完全にふくむような上位語というものはないらしく，したがってこの動詞の意味の規定はむずかしい。広辞苑は，「水や光がすきまを通ってこぼれる。」としている。しかし，「こぼれる」の典型的なばあい，たとえば，うつわに水などがあふれて外へ出るような現象には，「もれる」とはいわないし，つぎにあげるような「もれる」の典型的なばあいも「こぼれる」とはいいにくい。

○白い蒸気（ゆげ）が釜の蓋から勢ひよく洩れて（土・上 91）

○ストーブの火口の隙間（すきま）からもれる火をみる木谷の（真空地帯・上 11）

○すやすやと安らかな鼾が葉子の唇から漏れて来た。（或る女・前 236）

○葭簀（よしず）の日覆を洩れて，まだ暑苦しいやうな日の差込む時が，（あらくれ 93）

つぎに岩波国語辞典は「すきま・選択などから，こぼれ落ちる（こぼれ出る）。」としている。しかし，この規定も不十分であり，例解国語辞典のように「液体・気体・光線などがあいている所からこぼれ出る，またはいって来る。」としている方が正確だ。というのは，大部分の用例はたしかに「でる」という規定があてはまるのだが，つまり，よりせまいところから，より広いところへの移動をあらわしているのだが，そういえない例があるからだ。たとえば

○お辰は饅頭笠をもれた雨にぬれて，（娯楽よみうり 1956年7月27日 48）

のばあい，むしろ，広いところから，せまいところへの移動であって，「はいる」という方が近い。

○木の間を洩れる鈍い月光に，切れ切れに照らされてゐた。（野火 65）

のばあいも，どちらかといえば，はいる方であろう。また，

○二三日の寒さがなごんで，弱い冬のひざしがもれていた。（落城 12）

の例は，なにから「もれて」いるのかはっきりしないが，

○日光雲間をもるゝとき林影一時に煌（きら）めく，（武蔵野 6）

と同様に，雲のすきまを「もれて」いるのだと考えられる。このばあいには，雲の上と雲の下とで，どちらがせまいか，つまり，どちらが内がわであるか，ということは，いいにくい。だから，この「もれる」は，「でる」にあたるのか，「はいる」にあたるのかということは，ほとんど意味がないだろう。このように，ことばで規定するのはむずかしいが，いずれにしても「もれる」がせまい通路をとおりぬけて，より広いところにあらわれることを表わす動詞であることはあきらかだ。

「もる」の方については，広辞苑や例解国語辞典は「もれる」とおなじとしているが，岩波国語辞典は「すきまから（液体が）こぼれる。」として，液体にかぎっている点で，「もれる」よりもせまいものとみている。実例はわずか4例しかなかったが，「も

る」の方はみな雨がもるばあいだけだった。このなかには，

○板の間の真ん中へ雨が漏るのへ，バケツを受けておいて，（桑の実 99）

のように，液体を主体とする表現と，

○屋根が漏る心配も壁がこわれる心配もない，（貧乏物語 36）

のようにその通路のあり場所を主体とする表現とがある。このばあい，「雨がもる」は作用・現象に，「屋根がもる」は屋根の状態・性質の表現に，それぞれ重点がある。「もれる」の方は100例以上あるが，それはすべて煙・光・水など，移動するものを主体とした表現であって，その通過する窓・戸口などを主体とするものは1例もなかった。この点「もれる」と「もる」とのあいだには，かなりちがいがありそうだ。

〔251〕 たたえる＜みなぎる，みちる

これらは，水が，ある場所にいっぱいにあることをあらわす。しかし「たたえる」はかなり広い場所に水があって上が平らになっていることをいうのに対し，「みなぎる」「みちる」は，そういうばあいにかぎられない。

○堀には動かない水が空を映して湛へて居る処がある。（土・上 115）

〈平　面〉	〈立　体〉
○時代は潮の漲る如く変つて来た。（思出の記・上 119）	○僕の脉管には，まだ紅の熱血が漲つて居る。（思出の記・上 194）
○街道のすぐ下まで満ちているのだが波の音さえ無くて，（くれない 113）	○ふくらんだ体腔を押し潰して，中に充ちた血をすゝつた。（野火 133）

「みなぎる」「みちる」は，平面的なばあいにも，入れものの中にあって，いわば立体的なばあいにも，つかわれる。一般の用例と意味がすこしずれるが，「潮がみなぎる」「潮がみちる」というときには，広い平面に水があることを，あらわしている。一方，からだの中に「血がみなぎる（みちる）」というばあいには，外からそのようすが平面としてみえるわけではない。立体的ないれものの中にあることの表現である。したがって，そのばあいには，「たたえる」ではいえない。

もう1つのちがいとして，「たたえる」は，かなり広い場所に水があることをあらわすが，「みなぎる」「みちる」は，広くても，せまくてもつかわれる。広いばあいについては，上に＜平面＞としてあげた例を参照。せまい例をあげると，

○芳子は涙の漲るのを禁め得なかつた。（蒲団 61）

○生憎（あいにく）酒は盃に満たなかつた。（破戒 237）

〔252〕 ありふれる＜ある

「ありふれた」は数が多いことをあらわすが，単に無限定に多いのではなくて，世間に多くて珍しくない，ということである。たとえば，へやの中とか，ある一定のせまい空間の中にたくさんあるばあいには，「ありふれた」とはいわない。「ありふれた」に対する限定は，

○今まで世にありふれた講談や伝奇を（つゆのあとさき 57）

のように示されていることもあり，また

○ありふれた愛国主義者の婦人らしく不愉快に思へた。（仲子・上 32）

のように示されていないこともあるが，いずれにしても，原則として＜世間に＞＜この世に＞というような漠然とした範囲に多く見られるということである。もっとも，たとえば「北半球にありふれた植物」のように，かなり自然的な範囲についてもいうだろうが，そのばあいにも，相当広い範囲の世界が切りとられていなければならず，明確に区切られたせまい範囲ではつかえない。

5. 結　　果

変化の結果の面での対立を，ここではつぎの4つにわけて記述する。

1　変化の形式
2　変化の内容
3　変化の程度
4　結果の評価

分析例は，これらのどの側面がもっともおもな特徴であるかを考えて，4つのうちのどれかに入れた。しかし，実際には，ある現象が一定の形式（一時的か永続的か）をもっていることや，一定の程度のものであることは，その現象が一定の内容・質のものであることと無関係ではないのであり，分類は，この対立において，どの側面が特にはたらいているか，という相対的な基準によるものである。

5.1　変化の形式

5.1.1　一時的／永続的

〔253〕　しなう，たわむ＜まがる，そる

「しなう」「たわむ」は，一時的にまがるばあいに使う。

○力があってよくしなう肥えた色の白い指（むらぎも 341）

○二本のマストは釣竿のやうにたわんで，ビユウビユウ泣き出した。（蟹工船 20）

これらは，働きかけている力がなくなれば，もとにもどるような一時的な変化である。それに対し，「まがる」「そる」のばあいには，一時的な変化をも，また永続的な変化をもあらわす。

＜一時的＞	＜永続的＞
○別の細い野火は上が折釘のやうに曲つて，（野火 176）	○くの字に曲つた階段を降りきると意外に内部は広く，（闘牛 92）
○手も足も引き緊められるやうに後へ反つた。（土・上 48）	○やや反った鼻の愛嬌が救い，（自由学校 5）

この永続的な変化では，上にあげた例のように，「～た」のかたちで状態をあらわす

連体修飾語としてつかわれた例が多い。

〔254〕 ばける<かわる，なる，変ずる，変化する

「ばける」は，人や動物・ばけものが，ほかの人などをごまかそうとして，かりに姿をかえることだから，変化の結果は当然現象的であり，一時的である。

○あんたは，ある物資の持主に化けて，頂きたいのです。（自由学校 236）

同じく変化をあらわす動詞でも，「かわる」「なる」「変ずる」「変化する」などでは，変化の結果が現象的，一時的なこともあるし，本質的，永続的なばあいもある。

〈一時的〉

○藪の出口で，青大将があらわれて祖父の足首をずるっと巻く。顔色の変った安吉が立ちすくむ。（むらぎも 132～133）

○伴子は自分が可怖い顔附になつてゐるのを知つてゐた。（帰郷 147）

○雲は黄金色に染て，見るがうちに様々の形に変ずる。（武蔵野 21）

○流行の婦人服のやうに断えず変化してゐる研究題目（真知子・前 97）

〈永続的〉

○「おれは別段性質が変つたやうにも思はれないがな。変つたのは顔付ぐらゐなものだ」（生まざりしならば 182）

○大きくなり，しっかりした顔つきになって，（人間の壁・上 11）

○耳が動く，足がのびる，忽ち形が変ずるばかりぢや。（高野聖 76）

○この古い都でもワンピースの洋装に変化してゐるのを，（帰郷 250）

ただし，ここで例外となるのは，「ばける」の主体が有情物以外のものをあらわすばあい，たとえば「ドルが円にばける」というようなものである。（p. 102 参照）これらの例では，「ばける」が使われているけれども，その結果はかならずしも一時的とはいえない。

〔255〕 ふとる，こえる<ふくれる，ふくらむ

からだの部分については，これらがみな使われる。しかし，そのばあいにも，これらのあいだには，ちがいがある。

「ふとる」「こえる」は，一時的ではなく，ながく続くような変化をあらわす。

○彼女の肥った頬には血の気がさし，眼がかがやいていた。（人間の壁・上 179）

○力があってよくしなう肥えた色の白い指（むらぎも 341）

「ふくれる」「ふくらむ」は，ながく続く変化のばあいもあるし，まったく一時的な変化のばあいもある。

〈一時的〉

○心臓がしつかりしてゐれば，あるいは持ちこたへられるかとも思ひますが，どうも下腹部がふくれてゐるのが，心配です。（波 209）

〈永続的〉

○いかり肩，厚い胸部，ふくれた腹，大きな腰，大きな脚部が，（冬の宿 15）

○木谷は餅で頬をふくらませたまま言った。（真空地帯・上 128）

○スーツの胸が丸々とふくらんでいた。（人間の壁・上 254）

「ふくれた腹」「胸が丸々とふくらんでいた」などは「ふとる」「こえる」でいいかえることができる。しかし「波」の例や「真空地帯」の例は，いいかえることはできない。これらはまったく一時的な現象にすぎないからだ。

なお，このちがいは，「ふとる」「こえる」が正常な生理現象として肉づきがよくなった結果をあらわし，「ふくれる」「ふくらむ」は，そうとはかぎらない，ということと関係がある。（p. 402参照。）

〔256〕 めしかかえる＜たのむ，つかう，やとう

「めしかかえる」は，身分の変化をあらわすもので，永続的な関係の変化である。

○右田は大伴家の浪人で，忠利に知行百石で召し抱へられた。（阿部一族 42）

そのほかの「たのむ」「つかう」「やとう」は，それぞれ永続的なばあいにも一時的なばあいにもつかわれる。もちろん，永続的といっても比較的長い期間の安定した雇用関係ということであって，相対的な概念にすぎない。

〈一時的〉

○通夜の僧は根津の定津院の長老を頼んで，既に番小屋の方へ登つて行つたとのこと。（破戒 108）

○表では大工が，二人ばかりの下を使つて，せつせと木拵へに働いてゐた。（あらくれ 221）

○酌や給仕をするために傭はれて来たのであつた。（あらくれ 51）

〈永続的〉

○私は母と相談して，其医者の周旋で，町の病院から看護婦を一人頼む事にした。（こゝろ 125）

○今この下人が，長年，使われていた主人から，暇を出されたのも，（羅生門 7）

○新卒を，安い月給で雇おうというんだ。（人間の壁・上 44）

これらの間では，「やとう」が，いちばんはっきりした人間関係の変化をあらわし，したがって，永続的である。「たのむ」「つかう」は，これに比べると，人間関係よりは，しごととの関係に重点をおいており，一時的なことが多い。

＜注1＞ これらの動詞は，みな，人間をあらわす名詞を，「を」格の直接目的語とすることができる。しかし「たのむ」では，相手をあらわす名詞は，「に」格であらわされるのが普通である。そして「たのむ」内容が「～を」または「～と」「～ように」などのかたちであらわされる。

○仲間を連れて来て，先生に治療を頼んだことがある。（本日休診 79）

○あなたに子供を抱いてくれ，と頼んだことはない。（くれない 94）

○船橋に出かけて，少し待つてくれるやうに，彼女に頼んだ。（波 275）

したがって，「たのむ」と結びつく，「を」格の名詞は，「破戒」の「長老をたのむ」のように，人間をあらわすものであることも，また「本日休診」の「治療をたの

む」のように，動作名詞であることもある。そして，この間には，いくつかの中間的な段階がある。まず「治療をたのむ」に比較的近いものとしては，

○先生は訳を話して，私に帰つてくる間迄の留守番を頼んだ。（こゝろ 43）

のようなばあいがある。「治療」は動作名詞でしかありえないが，「留守番」は，文脈によって，動作をも，人をもあらわす。上の例で「治療」と同様に動作をあらわしていることは，「私に」という相手の表現をともなっていることからいえる。

○そういう親たちが家庭教師をたのむ。（人間の壁・上 111）

では，これとちがって「家庭教師」は人をあらわしているものと思われる。そのことは相手をあらわす「だれだれに」というかたちがないところからいえる。しかし意味的にも形式的にも，この「家庭教師をたのむ」は，上にあげた「破戒」の「長老をたのむ」や，つぎに示す「若い人をたのむ」とはちがって，「留守番をたのむ」に近い面がある。

○若い人を頼めば，そのくらゐなことは大目に見てゐなきや駄目ですよ。（生まざりしならば 194）

というのは，長老や若い人のばあいには，たのまれる以前からそういう状態であったのに対し，家庭教師のばあいには，かならずしもそうはいえないからである。たのむ以前から家庭教師という職業に従事している人がいて，その人をたのんで連れてくるのだというふうに考えれば，「長老をたのむ」「若い人をたのむ」などと同列になる。そのばあいには，「だれだれに」という相手をあらわす目的語をはさむことはできない。しかし，また，たのむ以前にはふつうの教師であって，それがたのまれて，そのしごとをすることによって家庭教師になるのだ，と考えることもできる。そうすれば，それは「留守番をたのむ」と同じであって，「だれだれに」という目的語をおぎなうことができる，上の「家庭教師をたのむ」は，そのどちらともきめかねる，という意味で中間的である。

なお，人をあらわす名詞が，「を」格であらわされていても，

○それが出来なくなつたから，この後とも定子を宜しく頼む。（或る女・前 61）

のようなばあいには，相手ではない。これは

○折入つて色々と葉子の身の上を頼んだ。（或る女・前 224）

と同様に，相手にたのむ内容，相手にまかせたものをあらわす。

＜注 2＞　これらの動詞の表現する動作が要求する相手は，原則としてはもちろん人間である。しかし，例外的に，乗り物のばあいがある。これは「やとう」のばあいにいちばん多い。

○人力車を二台傭つて，その一つに乗ると，（或る女・前 42）

○我々は小舟を傭つて，其鯛をわざわざ見に出掛けたのです。（こゝろ 222）

もちろん，これらの乗り物については，長期間の雇用契約というものではなく，一時的に，あるしごとについてだけ，やとうのである。しかし，そのかぎりでは，たとえば「小船をやとう」のと「船頭をやとう」のとで区別する必要はない。ほかの移動

の動詞のばあいにも，しばしば乗り物は人間のグループにはいるが，この例についても，それらと同じことがいえる。

ところが「たのむ」については，そうみとめてよいかどうか問題である。

○そば屋の出前持ちの親切で，円タクを一台**頼んで**もらうと，（放浪記 96）

のような例については，2とおりに考えることができる。一方では「やとう」のばあいと同様に，また，相手が人間である，

○「今からでもあんまを**頼んで**もらえるかい？」（暗夜行路・前 153）

などと同様に，円タクがたのむ相手だと解釈することができる。しかし，また，つぎのように考えることもできるだろう。上にのべたように，「たのむ」は原則として，相手を，「に」格の名詞で表現する。そして，そのばあい，「たのむ」内容は，「を」格の動作名詞であらわされる。ところがその「を」格の名詞が時として相手に「たのむ」（託する）対象である具体物をあらわしていることがある。上にあげた「或る女」の「定子をたのむ」もそうだし，

○明子は自動電話のボックスの傍で，友達に五十銭銀貨を**頼んだ**。（くれない 71）

の「50銭銀貨をたのむ」もそうである。このばあいには，「だれだれに」と「なになにを」とが共存する。それで，たとえば「自動車をたのむ」というばあいにも，「タクシー会社に自動車をたのむ」というふうに考えれば，「友だちに50銭銀貨をたのむ」というのと同じかたちになる。すなわち，そのばあい「自動車を」は，たのむ相手ではなくて内容をあらわしていることになる。実際には，「たのむ」が乗り物をあらわす「を」格の名詞をうけているばあい，これと「だれだれに」という相手をあらわす名詞が共存していた例はなく，そのかぎりでは，「自動車をたのむ」は「あんまをたのむ」「自動車をやとう」に近いように思われる。

5.1.2　現象／本質

〔257〕　**しおれる，かれる，さびれる，すたれる／おとろえる**

「おとろえる」は勢いが弱くなることで，物理的，生理的，心理的，社会的な各方面の現象について広く使われる。これに対して，そのおとろえた結果が現象的にあらわれることを意味する動詞がいくつかある。

○樹勢の衰へてゐたのを，自分の健康がすぐれなかつた信輔が庭弄りを仕事にして世話をして，年々大輪の花が咲くやうに回復させたものであつた。（帰郷 209）

○この前の水仙の花はもう凋(しぼ)れてしまつてゐたのだ。（冬の宿 46）

○一本の小さな松は，杉の下で赤く**枯れて**居た。（田園の憂鬱 23）

植物について「しおれる」「かれる」という表現は，おとろえたことの現象である。

○ただ近在の衰へた旧家から何も知らぬ娘を貰つてきたのだといふことは，（冬の宿 19）

○だゝ広(ぴろ)いばかりで陰気な，さびれた家のやうに想像して来たけれども，（桑の実 19）

「冬の宿」の例では，「家」は家庭を意味し，「桑の実」の例では，「建物」を意味

する。家庭，家族としての「家」が「おとろえる」ことによって，建物としての，場所としての「家」が「さびれる」のである。「さびれる」は人が多く集まるような場所だったのが，人が少なくなって，さびしくなることをいうのであるが，はじめから人が少ないような場所は「さびれている」とはいわず，もっとにぎやかで，栄えていたところが「おとろえた」ことのあらわれとして，さびしくなることをいうことばである。

○戦後のいまになっても盆踊は衰えていない。（大法輪 1956年8月 40）

○時代によって流行したり，すたれたりする項目を（眠がらせの年齢 291）

このばあいには社会的な現象で，「おとろえる」を使っても「すたれる」を使ってもほとんどちがいがない。ただ「すたれる」といった方が領域が限定されるので，それだけ具体的であるといえる。一般に，現象を述べる動詞の方が，領域が限定されることになる。

〔258〕 にじむ／しみる

これらはどちらも液体などが他の物体にはいっていくことをあらわす。しかし，その際「にじむ」は，表面にはっきり，ようすがあらわれること，視覚的にとらえられることをあらわし，「しみる」の方は，より本質的な変化をあらわしていて，外からとらえられるとはかぎらない。

○泥か何かの迸(とばしり)がついた跡でゞもあるやうに，小黒く滲(にじ)んでゐる。（桑の実 155）

「にじむ」は，上の例のように，外からみて色がかわったりしているばあいに使われる。これに対して

○食べこぼしが，着ものにまで滲みるという心配（婦人生活 1956年4月 422）

のように，「しみる」は，かならずしも，そうだとはいえない。もしここで色がかわったのならば，「しみる」を「にじむ」といいかえることができるが，たとえば外見上はすこしもかわりなくて，ただ，液体が繊維にしみこんだために，繊維をもろくした，というような現象にでも「しみる」はつかえる。そういうばあいには，「にじむ」とはいいにくい。

○干いた屍体についてゐる靴を取つて穿いた。臭気が手と足にしみた。（野火 126）

のように，においについて，「しみる」がつかわれることがあるのも，これに関係があるだろう。においが「しみた」のは，視覚的に外からはとらえにくいから「にじむ」ではおきかえられない。

「しみる」はまた，薬などが目や皮膚などを刺激するばあいにつかわれる。

○虱にくわれたあとに湯のしみる気持ちよさは（むらぎも 283）

はその例だが，このような現象にも，もちろん「にじむ」はつかわれない。透明な湯がからだに「しみて」も皮膚の色はかわらないからである。

一方「にじむ」もやや抽象的な現象，液体が固体にはいっていく以外のことにつかわれた例がある。

○そのうちの多くは，立ち迷う川霧の中に，黒い影を滲ませながら，上の道路へ登っ

ていくのである。(自由学校 183)

このばあいには，川霧に黒い影がうつっているのだから，明らかに，視覚的・現象的であって「にじむ」というのにふさわしい。「黒い影をうつしながら」といってもいいところである。(「うつす」とのちがいは，影のりんかくが，ちょうど紙にえのぐが「にじんだ」ように，ややぼけているところにあるのだろう。) この例では，「しみさせながら」「しませながら」のようにいいかえることはできない。

5.1.3 基準のあるなし

〔259〕 ふえる，ます／みちる，あふれる

「ふえる」「ます」は，特に一定の基準がなく，どのくらいから，どのくらいにふえたばあいでもよい。

○兵達は急いで四散し，新しい死者と傷者が道端に増えた。(野火 96)

○それに北浦の水は水嵩が増すばかりだつた。(波 260)

「みちる」「あふれる」は，少ない量から多い量への変化をあらわす点では，これらと同じだが，ある一定の基準があって，それに達したり，それを越えたりする現象に使われる。

○室内はすつかり煙に充ちた。(潮騒 64)

○雨水が下水からあふれて，路の上が川になっている。(人間の壁・上 272)

ただし，「みちる」という動詞は，上の例のように変化をあらわすものよりも，

○母なるものは青い畑に満た竈の前に立つては踞りつつ，(土・上 169)

のように「～た」「～ている」のかたちで状態をあらわすことが多い。また，「あふれる」の方は，かならずしも，いっぱいにふえたために外へ出る，ということをあらわすばかりではない。

○蟻塚が道傍にうづ高くつもり，蟻が吹き出すやうに溢れてゐた。(野火 21)

のような例では，<外へ>出るという要素の面に重点がある。このばあいにも，ひじょうに多くのものがはいっていて，はいりきれないほどに思われる，という事実はあるにちがいないが，文字どおり，はいりきれないで「あふれた」のではない。

〔260〕 ふやす，ます／みたす

これらも，自動詞のばあいとまったくおなじである。「ふやす」「ます」は，特にどの程度という制限がない。

○もつと街燈でもふやせばいいのに……(伸子・上 11)

○人を増し歳月を重ねたならば，(恩讐の彼方に 77)

「みたす」は，器などに，いっぱいになるまで「ふやす」ことをいう。

○油断なく徳利を取り上げて，岡部と津上の盃を充したり，(闘牛 94)

〔261〕 のこる<とどまる

「のこる」は，ほかの人がいってしまって，または，ほかのものがなくなってしまって，そのものだけがもとの位置にあることをいう。

○だから家に残つてゐるのは，Kと御嬢さん丈だつたのです。（こゝろ 213）

○次の日に仕事に出なければ一銭も自分の手には残らなくなる。（土・上 77）

「とどまる」は，その点について無関心である。つぎの例では，ほかの人間がいなくなったあとまで，おなじ場所に「とどまって」いるので，これは「のこる」といいかえることができる。

○男が遁れ去つた以上，私は村に留ることは出来なかつた。（野火 89）

しかし，つぎのようなばあいには，事実上，ほかに人間や鳥がいてそれが先にいなくなった，ということではないから，「のこる」におきかえることはできない。

○或はもつと早く再び訪ねて来る。そして大抵夜まで止つた。（仲子・上 59）

○蓋し雲雀は垂直に舞ひ上り空中の一箇所に留まつてゐて再び垂直に降下するのである（春琴抄 180）

5.2 変化の内容

5.2.1 物理的・化学的な変化

〔262〕 くだく≪きる，たつ，さく，ちぎる，やぶる，わる／つぶす，くずす≪こわす

これらの動詞は，その働きかけの結果として，対象がどのような状態に変化するかという点にちがいがみられる。大きくわけると，「くだく」「きる」などのグループと「つぶす」「くずす」などのグループ，および「こわす」という3つにわかれる。「くだく」「きる」などは，なんらかの意味で対象が2つ以上にわかれる結果となる動作をあらわす。「つぶす」「くずす」は，分離ではなくて，変形，特に厚みのあるものをたいらにするという変形をもたらす。そして「こわす」は，そのどちらのばあいをもふくみ，かつそれよりも範囲が広い。

対象をわけることをあらわす第1のグループの中で，「くだく」は多くのばあい，こなごなにすることをあらわす。対象が2つにわかれたのでは，まだ「くだいた」とはいえないのであって，すくなくとも3つ以上にわかれる必要がある。

○すり硝子の内側からは，氷を砕く寒い音が聞こえた。（真知子・前 173～174）

これに対して「きる」「たつ」「さく」「ちぎる」「やぶる」「わる」は，対象を2つにわけてもいいし，3つ以上にわけてもいい。ここでは「きる」「さく」の2つの動詞についてその両方の例をあげる。

〈2　つ〉	〈3つ以上〉
○戸の内側にむすんであった紐を切ってはいってきた。（真空地帯・上 69）	○彼は細かく切つたその紙片を，（あらくれ 172）
○丹前の上を半分に裂いた腰巻で結んだ恰好で，（厭がらせの年齢 300）	○一センチの幅にずたずたに裂いてしまうのだった。（厭がらせの年齢 295）

なお，対象の分離ということについて，2つの点を注記しておく。

第1に，多くのものにわかれることは，ただ1回の動作によっておこるとはかぎらない，ということだ。上の例でいうと，多くの部分にわけるばあいの「きる」や「さく」の例は，ただ1度の動作で完成したわけではない。まず全体を2つにきり（さき），つぎに，同じような動作をそのわかれた2つの部分に対してくわえ，というような，くりかえしによって，最後には，こまかな部分にわかれてしまうのだ。「氷をくだく」というばあいには，ただ1回の動作によって，氷がいくつもの部分にわかれてしまっている。だから，多くの部分にわかれるといっても，「きる」や「さく」と「くだく」とのあいだには，ちがいがあり，この点に関しては，「きる」「さく」などが「くだく」の上位語だとは，いいにくいことになる。もっとも，実例にはなかったが，「くだく」という動作についても，たとえば，石をまず2つにわり，そのおのおのを，さらにこまかな部分にわり，というふうに，いくつもの動作をつみかさねることによって，最終的には，こまかくわけてしまう，ということもありうるだろう。だが，そのばあいに，その1つ1つの動作は「くだく」とはよべない。「わる」とか「ちぎる」とか「きる」とか，ばあいによって，よびわけることになるだろうが，とにかく1回に2つにわけるだけだとすれば，それは「くだく」動作ではない。にもかかわらず，それらの動作の集合としての全過程は「くだく」とよぶことができる。一方，「きる」や「さく」のばあいには，1回1回の2つにわける動作だけでも，そうよべるし，また，それをひっくるめた全過程も「きる」「さく」などとよべるのである。この点が「くだく」と他の動詞のちがいである。

注記の第2は，完全分離と不完全分離とでもよぶべきことについてである。いま，「きる」の例をとると，上にあげた「ひもをきる」や「紙片をきる」の例では，ひもや紙きれが，おのおの完全にわかれてしまっている。つぎの「指をきる」「つめをきる」でも，指やつめは，完全に，そのからだから，はなれるのである。

○田村が死んだぞ。夜があけたら，小指を切つて拾つて行つてやれ。（帰郷 71）

○「今日うちへ帰ったら，爪を切ってくるのよ」（人間の壁・上 203）

ところが，つぎの例では，やはり，からだの部分を「きる」のだが，その部分が，からだの本体から，はなれるわけではない。

○一名を斬り倒した時に己れも肩口を深く斬られたのである。（落城 23）

このばあい，肩のあたりの皮や肉は，おたがいに，はなれている。しかし，その肩や腕が完全に胴体から，はなれたわけではない。このようなのを，「つめをきる」や「ひもをきる」の<完全分離>に対して，ここでは<不完全分離>とよんでおくことにする。

「きる」の用例の大部分は完全分離の例であり，不完全分離としては，「肩口をきる」「敵をきる」など，刀で相手をきずつけるばあいの例が多い。つぎのは，からだ以外のものについての不完全分離の例だ。

○清岡は門人同様の村岡に命じて，君江が歌舞伎座へ見物に行つた帰途，安全剃刀の刃で着物の袂を切らせた。（つゆのあとさき 44）

もちろん，実際問題としては，完全分離であるか不完全分離であるか，わからないも

のも多い。「人をきる」というばあいにも，胴体から手や足が，はなれることもあるだろうし，はなれないこともあるだろう。したがって，すくなくとも部分的に分離する，ということが必要条件なのであって，完全に分離しているかどうかは「きる」にとってどうでもよいのである。

○「おい，新前のコックさん，指を切らないやうに頼むよ。」(波 16)

この例のようなばあいには，一応不完全分離が多いとはみられるが，完全分離のばあいもその中にふくめている，と考えてもよい。

「さく」のほうでは，上にあげたものや，

○此を出せば渡して呉れるものがあるからと此も手帖の端を裂いた。(土・上 48)

などが完全分離の例であり，

○血潮は割かれた咽喉を通して紅く板敷の上へ流れた。(破戒 149)

○下駄で踏まえて血だらけになって栗のいがを裂いた。(むらぎも 123)

などが不完全分離の例になる。

「つぶす」「くずす」は対象が分離するかどうかには無関心だ。たとえば

○黄身は丼に入れて，フォークの先で丁寧につぶします。(女い女性 1956年7月 106)

のようなばあいには，対象である，たまごの黄身が，あるいは多少ばらばらになるかもしれないが，それは「つぶす」の本質には関係がない。より平たくなることがあればいいのである。

○そのソフトは，普通のつぶしかたにしてあつたが，気をつけて見ると，オカマ帽につぶしたあとがついてゐた。(本日休診 78)

○指揮官が誰かあの気球を潰して来る者はないかと募った。(丸 1956年7月 91)

などの例では，ばらばらになるという現象はまったくみられず，対象の変形があるだけだ。

「くずす」の意味は，どのような特徴をもっているか，規定するのがむずかしい。

○屋敷の裏手にあつた物置小屋を崩させて，それに火を掛けた。(阿部一族 75)

○崩した崖の土で埋め立てをして造つた，(或る女・前 185)

これも「つぶす」と同様に分離よりも変形に本質があることは，あきらかである。そして，多くの例について，やはり結果的には厚さがうすくなる（というよりも高さがひくくなるといった方がよいかもしれない)。しかし「くずす」は「つぶす」とはあきらかにちがう。先にあげたような「つぶす」の用例を「くずす」でおきかえることはできない。高さがひくくなるとしても，それは，やはり付随的な現象にすぎないのである。「くずす」の本質がどのような点にあるかということを，他の動詞と比較しながら箇条書きにしてみよう。

第1に，それは，あるととのった形から，ととのわない形への変形である。この点で，それは「こわす」「つぶす」や，また「ゆがめる」「ばらす」などとも共通の側面をもっている。

第2に，しかし，それは，あるまとまったものの，まとまりを失わせることである。こ

の点で，それは「ゆがめる」とはちがう。箱のかたちをみにくく変形することは，「ゆがめる」ことであっても「箱をくずす」ことではない。「姿勢をくずす」「ひざをくずす」などの表現は，上の第1の特徴の点では問題ないが，この第2の特徴の点で，もっとも基本的な「がけをくずす」「石垣をくずす」などとちがっている。したがって，それはすでに意味の重点をかえたものであって，「がけをくずす」のばあいと完全に同じ意味とみることはできない。

第3に，それは部分的なものの結合を分解することである。たとえば

○ブローチを壊されたりするような（トルーストーリー 1956年10月 85）

○小さなガラスの動物置物を壊すというシーンで（スクリーン 1956年11月 101）

のようなばあいには，全体を部分に分解することではあるが，「くずす」とはいえない。なぜなら，金属やガラスの製品は，全体がいくらでも分解できるものであって，こまかい部分の結合したものではないからだ。これに対し，「石垣をくずす」のばあいにはそれを構成している1つ1つの石が部分だし，「がけをくずす」でも，やはりそのがけの土の1粒1粒が構成部分であって，金属のように任意の大きさの部分に分けられるものとはちがうのである。

第4に，それはまた物質的なものへの分解であって，ある働きをもった独立の存在でもあるような物体への分解ではない。この点で，それはたとえば「ばらす」と区別される。とけいやカメラを分解するばあい，対象はいくつもの部分の集合からなりたっている。それをこまかくわけて，全体としてのまとまりを失なわせるという点では，「くずす」といえてもよさそうなものだが，こんなばあいに「とけいをくずす」「カメラをくずす」とはいわない。それは，わけられた各部分，たとえば，とけいのぜんまいや文字盤や針が，それ自身で1つの働きをもった，また形のきまった物体だからである。そのような部分にわけることは，「ばらす」ことであって「くずす」ことではない。石垣や，がけのばあいには，それを部分にわけるということは，石や土の粒の1つ1つという物質的なものに還元することである。「くずす」が主として物質的なものに使われ，「物置小屋をくずす」のように物体に対していうことがすくないのも，その結果だろう。物置小屋のばあいには，それをつくっている柱や屋根がわらなどは，物体的なものであって，石垣やがけとはちがうが，しかし，とけいやカメラにくらべれば，まだ物質的なものである。1本の材木は，柱にも，はりにも使うことができるだろう。

最後に「こわす」についてだが，これは「ものをいためて，そのものの働きを失わせる。」という岩波国語辞典の規定がほぼただしい。すなわち，その本質は，ものの形をかえるというよりも，働きをうしなわせることにある。多くのばあいは，

○「おい！さつき何か壊したね」

「ええ，十銭で買つた西洋皿」（田園の憂鬱 102）

のように変形が同時に働きの喪失につながるのだが，つぎのような例では，かならずしもそうではない。

○土蔵の鍵が壊された。（面白倶楽部 1956年3月 208）

○方向は一時曲っても船を壊さないようにしてやり，（改造 1953年8月 111）

これらのばあいにも，こまかくみれば，部分的には，鍵や船の変形がおこっているにちがいないが，そのもの全体としては，かならずしも変形されているとはいえない。外見上すこしも形がかわっていなくても，そのものの働きがうしなわれていれば，「こわされた」といえるのである。

しかし，「こわす」は，つねに働きに重点をおいた表現だともいえない。

○その突起を壊さないやうに，スコップを使ひたまへ。（銀河鉄道の夜 275）

この例は，けものの化石をほりだしている場面についての描写なのだが，「突起をこわす」ということは，このばあい，その突起を変形することを意味している。化石だから，その突起に，なんらかの働きがあるとはいいにくい。したがって，この例では，働きよりも形に重点がおかれているのだ。このような例は，これ1つしかないので，「こわす」について，どの程度形という側面が重要であるかは，はっきりしない。一般的にいえば，働きの方が重要だという結論をかえる必要は，おそらくないだろう。

なお，「こわす」は人間のからだについていうことはない。

○監督の窓硝子からテーブルの道具が，すつかり滅茶苦茶に壊されてゐたことが分つた。監督だけは，何処にゐたのか運よく「こはされて」ゐなかつた。（蟹工船 78）

人間のからだをきずつけることは，働きをうしなわせることであり，同時に変形することであるのだが，それは「こわす」とはいわない。このばあい特に引用符をつけて強調しているのは，監督が物体のようにあつかわれることを，あらわすためである。ただし，自分のからだの調子をくるわせるばあいには「こわす」が使われる。

○食べたからとてからだをこわすばかりである。（貧乏物語 79）

○「腹をこはすぞ」と安田が注意した。（野火 151）

○最近ピッチングやって肩こわしちゃった。（主婦と生活 1956年12月 153）

これらの用例では，いずれも，まったく働きの面がとりあげられているだけで，形には関係がないことに注意しなければならない。もし自分でまちがって手や足をきずつけたとすれば，それは「足をこわした」などとはいえないのである。

ただし，人間のからだを構成するものであっても，つぎの例のようなものでは，あまりに＜からだの部分＞という観念からはなれており，独立の物体に近い。それで，この例では，変形であるにもかかわらず，「こわす」がつかわれている。

○なぜなら，血液中に酸素をブクブク吹き込むため，血流のなかに酸素のアワがまじったり，血球などがこわされたりするからだ。（人工心臓を体内に 366）

〔263〕 かる＜きる

「かる」は対象の面で，ほとんど草とか，かみの毛などにかぎられる，という限定があるが，その「草をかる」ばあいでも，地面にはえているものを途中から切りとる，つまりあとにまだ残っている部分があるという点で限定されている。たとえば

○切つたネギを皿に盛つて，洗つた牛鍋と一しよに茶の間に運んだ。（波 17）

のように，もうすっかり地面からとり去られた状態にある植物を切るのには，「かる」とは絶対にいえない。ネギは，「かる」という動作の対象になることが，もともとあまりないが，畑にはえているものを地面に近いところから切りとるばあいなら，「かる」と呼べるだろう。また草を「かる」には，地面の近くで切りとらなければいけないように思われる。たとえばつぎの例では「かる」にいいかえることは不自然だし，そのつぎの「土」の例でも「かる」とはいいにくい。

○政は立つた次手(ついで)に花を剪つて仏壇へ捧(あ)げて下さい。（野菊の墓 10）

○勘次は菜切庖丁を取出して，其高い蜀黍の幹をぐつと曲ては穂首に近く斜に伐つた。（土・上 135～136）

〔264〕 おる／そらす＜まげる

「おる」と「まげる」とは，ほとんど同じような文脈でつかわれるばあいがある。

「おる」	「まげる」
○膝を折つて石の上に坐つた。（思出の記・上 25）	○彼はその前に窮屈(きゅうくつ)に膝を曲げて坐り，（仲子・上 170）
○二，三，四と指を折つて余る時日を勘定して見た時，（こゝろ 67）	○左手(さしゅ)の指が二度曲げて二度起されても尽せなかつた。（土・上 180）

しかし，「おる」は，上の例に示すように，あるものをある点で一定の角度にきっかり「まげる」ことをいう。「まげる」はそのような状態にもつかうし，また，つぎのように，なだらかな曲線をえがく状態にもつかう。

○きぬ子はすねて柔かに体を曲げた。（波 82）

○黒く裸の枝を，踊つてゐるやうに宙に曲げてゐる 。（帰郷 156）

「そらす」は，ゆるやかにまげる動作につかう。

○厚ぼつたい胸をぐつと椅子の背に反らして，（多情仏心・前 26）

〔265〕 おれる／そる＜まがる

「おれる」は

○よく辞書にある，ページの片隅が重なって折れてるのがない。（むらぎも 143）

のように，急にまがるばあいにつかう。

「そる」は，ある一点から急にまがるのではなく，全体として弓なりにまがることをいう。

○ぽんと胸を叩いて，反つて見せたが，（帰郷 97）

「まがる」は，急にまがるか，ゆるやかにまがるかに無関心であり，「そる」のような限定はない。

○あそこに箒のやうに風で曲つてゐる森が見えますね。（青銅の基督 84）

のように，ゆるやかに「まがって」いるばあいにも，またつぎのように，ある一点から急に「まがる」ばあいにもつかわれる。

○なかなか曲がらない腕を組合はせながら，涙を麻袋の中に落した。（蟹工船 90）

これは死人の腕をまがらせることで，もちろん，ひじから急な角度に折りまげるわけである。このようなばあいには「そる」とはいえない。

〔266〕 まがる，おれる＜くぼむ，へこむ＜ゆがむ

これらは，みな，ある基準からずれて形がくずれることをあらわす。そしてその基準となるものは「まがる」「おれる」については，1次元の線であり，「くぼむ」「へこむ」は主として2次元の面であり，また時に1次元の線でもある。そして「ゆがむ」については1次元の線，2次元の面，3次元の立体が，ともに基準になる。

まず「まがる」「おれる」は，ある基準の線から，ずれることをあらわす。

○道が大きく曲れば，渠もそれについて大きく曲つた。（田園の憂鬱 8）

○街道から停車場へ折れる広い道を，あわただしく駈けて来るのは（雪国 79）

これらでは，まがっているもの，おれているもの自身は道だから，2次元の平面的なものと考えられる。しかしそれが「まがる」「おれる」で表現されるような性質をもっているということは，つまりその道について，ある直線を考え，その直線から道がずれているということである。また，つぎの例では，2次元ではなくて，3次元のものについて「まがる」「おれる」がつかわれているが，このばあいにも，やはり基準になるのは1つの直線である。

○じいさんの背中は，いくら腰をのしてもまだまがっていた。（暗夜行路・前 169）

○毛髪は，堅く櫛に絡んで，櫛は折れてしまつた。（田園の憂鬱 49）

「くぼむ」「へこむ」は，これに対して，ある面が基準になる。

○高台の処々が低く窪んで小さな浅い谷をなして居るといつた方が（武蔵野 16）

○四分板が，縦に割れめがはいつて，へこんで了つた。（多情仏心・前 316）

これらのばあいには，地面や板の表面という1つの平面が基準になっており，その平面からのずれが，「くぼむ」「へこむ」で表現されている。ただし，これらの動詞についても，基準が線ではないかと考えられる例がある。

○街道から少し凹んだ畑の奥に建つてゐるのだが，（雪国 118）

○皆葉が落ち尽して居るので，其小枝を透して凹んだ棟（やのむね）が見える。（土・上 16）

これらは読み方の上で「くぼむ」とも「へこむ」とも読めそうであり，どちらの例にしてよいかわからないが，とにかく，基準になっているのは，街道にそう線，あるいは，屋根の上の線であって，そこから少し奥の方に，あるいは下の方にずれていることが，ここで「くぼむ」または「へこむ」をつかった理由である。ただし，おなじように1次元の線が基準になっているといっても，「おれる」「まがる」などでは，ある1点においてずれていて，全体としての形が問題ではないのに対し，「くぼむ」「へこむ」では両端は基準の線にそっており，その中間だけがずれた形になっている点でちがう。

「ゆがむ」は，1次元・2次元・3次元の基準のばあいが，ともに見られる。

○鼻汁が風にあふられて，歪んだ線を描いて飛んだ。（蟹工船 64）

○その線を，活字には少しも触れないやうに，又少しも歪まないやうに，彼は細い極く神経質な直線を引いて行つた。（田園の憂鬱 100）

などでは1次元の線が，

○窓の外を見た眼鏡の玉に，庭の新緑が歪んだ影を映してゐた。（帰郷 223）

○月はまともに縁側に当つて，歪んだ長方形で板の上に光つた。（田園の憂鬱 105）

では，あるべき形としての平面が，

○歪んだ梯子段を上って客引が知らせに来ると，（放浪記 222）

○彼の体はひとりでに右にゆがんで，皆を笑わせた。（真空地帯・上 39）

では立体の形が基準になっている。もっとも，これらの基準はこの3つにはっきりわかれるとはいいにくい。今の「真空地帯」の例でも，1次元の垂直な線が基準で，それからのずれが「ゆがむ」で表現されているともいえる。しかし，それだけならば，「まがる」であらわしてもよいのであって，「からだが右にまがる」に対して，「からだが右にゆがむ」は，「まがる」ことによって，からだ全体のかっこうも，あるべき姿からずれていることを，あらわしている。

○女の顔は歪み，なほもきれぎれに叫びながら，（野火 84）

のばあいにも，基準は平面であるとも，立体であるともいえるかもしれない。

〔267〕 それる／どく＜ずれる

「それる」は，動きつつあるものの進路・方向がかわることをいう。

○宿直室の横から右にそれて営庭のはしを斜に横切り，（真空地帯・上 64）

○私は身を固くした。すると火は突然横に逸れ，黒い丘の線をなぞつて，少しあがつてから消えた。（野火 126～127）

「どく」は，これに対して，位置がかわることをいう。

○おい，そこんとこ退けよ。僕，ずうつと歩いて見せるから。（波 328）

この動作以前，主体は，ふつう，じっととまっているのだが，もちろん進行中であってもかまわない。

「ずれる」は，その両方をあらわす。実例としては，「どく」と同じように，位置の変化をあらわすものしかなかった。たとえば，「航行中の船の進路がずれる」のように，「それる」と同様，方向の変化をあらわすにも使えるはずであるが。

○ワイヤアが不吉な軋りを立て，杭に巻かれたその一端がすこしずれたやうに思はれた。（潮騒 143）

〔268〕 そらす，どける，ずらす

このばあいには，対応する自動詞の「それる」「ずれる」とちがって，対立点がそれほどはっきりしない。実例によるかぎり，どの動詞も，ものを，ある位置から動かすことをあらわしており，おたがいに，おきかえていえるようである。

○そっと顔をそらすと彼の唇を避けた。（オール読物 1956年11月 66）

○行介は足や腰のまはりの湯タンポをどけて，病児の体を抑へた。(波 208)

○自分の椅子を隣りの山瀬の方へ少しずらした。(真知子・前 139)

ただ，「そらす」と「どける」「ずらす」とのあいだには，多少ちがいがみられる。上にあげた例でいうと，「どける」の例と「ずらす」の例とは，動詞をおきかえることができるし，「そらす」の例を「どける」や「ずらす」におきかえることも，それほど不自然ではないだろう。しかし「どける」や「ずらす」の例を「そらす」であらわすことはできない。この理由はつぎのように考えられる。自動詞の「それる」は，進行中のものがその方向をかえることをあらわす。これはさきに見たとおりである。しかし，その方向というのは，主として目標となるものとの相関関係においてきまることであって，方向がかわるということは，つまり到達すべき目標に達しない方向にかわるということである。したがって，運動しているもの自身の方向がかわらなくても，それがはじめから目標とは別の方向を指していたり，また途中で目標の方が動いてしまったために目標に到達しなかったりしたばあい，やはり「それる」であらわすことがある。これに対応する他動詞「そらす」のばあいには，いわば目標の側に立って，進んでくる弾丸などがはずれるようにするわけだが，その際，進行中の物体にはたらきかけて，これを方向転換させるよりも，目標自身を動かすことによって当たらないようにする方が自然だ。つぎにあげる例では，「それを」という目的語は，たしかに進行中の物体（このばあいには「私の唇」）だが，それを「そらす」方法は，その目標になっている自分（はま江）のくちびるをうごかすことである。

○まだ咳をふくんでゐる唇に私の唇を押しつけようとすると，はま江は二三度それをそらさうとしたが，(冬の宿 164)

実は，最初にあげた「オール読物」の例は，事実としては，これとほとんど同じことをあらわしているのである。ただ，「冬の宿」の例では，進行中のもの（相手のくちびる）を目的語にしてあらわしており，それだけ「それる」との対応が強く残っているが，「オール読物」の例では，目標である「顔」の方を目的語にしているので，「それる」からのずれがいちじるしい。それにしても，まだこの「オール読物」の例は，やはりある物体（このばあいは「彼の唇」）が動いてきて，他の目標（このばあいは「顔」）に接するのをさけるための行為である，という，もともとの観点が生きているのである。したがって，そのような限定をもたない「どける」や「ずれる」でこの例をおきかえることはできるが，逆に，上にあげたような「どける」や「ずれる」の例を，このような目的の面で制限されている「そらす」でおきかえることは，できないのである。

〔269〕 うらがえす＜ひっくりかえす，かえす

「うらがえす」は平たいものの向きを逆にして，裏をこちら側にすることをいう。

○名刺を裏返してその裏を眺めた。(或る女・前 109)

「ひっくりかえす」も，これと同じようなばあいにつかうことがある。

○彼女は，竹の棒で，もう一つ瓦を引くり返して見た。(仲子・上 190)

しかし「ひっくりかえす」は，また，立っているものを横に倒すばあいにもつかわれる。

○火鉢を引つくり返したり，障子を倒すまでも（生まざりしならば 222）

○軽部は直ぐ苦もなく屋敷をひつくり返して上になつて（機械 30）

「かえす」も「ひっくりかえす」と同様，両方の動作につかわれると思われる。ただし，実例としては，「うらがえす」のようなものだけだった。

○怪しんで裏を返して見ると隠岐達三と，署名してあるので，（婦郷 297）

○葉子に対する態度は掌（てのひら）を返へしたやうに変つてしまつた。（或る女・前 182）

このほか，たとえば，「コップの水をかえす」のように，立っているものを横倒しにすることについても，使われると思われるが，その例はなかった。なお，「かえす」は，大体「うらをかえす」のかたちで使われることが多く，「うらがえす」「ひっくりかえす」よりは用法上の制約がありそうである。ただし，辞典は「ひっくりかえす」や「かえす」の2つのばあいを，それぞれ別の意味としている。実際の文脈では，「ひっくりかえす」のあらわす動作が具体的にどちらであるか，かならずしも，はっきりきめられない。上にあげた「火鉢をひっくりかえす」でも，うらがえしにした，ととってとれないことはない。

「うらがえす」は袋状になったものの内側を外側にすることにもつかわれる。これは，紙のようなものを「うらがえす」のと，もちろん共通点はもっており，その1つの特殊なばあいではあるが，やはり特にとり出して記述すべき用法であろう。

○「何だらう。足袋の中に。」

彼は変な気がしながら足袋を裏返して振つて見た。（波 25）

○爺さんは，一々，ポケットを裏返して，在中物を，とり出した。（自由学校 169）

たびを「うらがえす」動作には，たびの底を表側に向けたという，普通の「うらがえす」動作もあるし，また，上の「波」の例のように，内側を外に向けた動作もある。

「ひっくりかえす」には，うらがえす動作と倒す動作のほかに，うらがえしたり，倒したりする動作を部分的にはふくみながらも，全体として，あたりのものを乱雑にかきまわす（おもに，なにかをさがすために）という動作をあらわすばあいがある。

○先刻から机の上，床の間，押し入れの中と頻りに引つくり返して何か探してゐたが，（青銅の基督 9）

つぎの例も，単に本のページを繰っていくことを意味するのではなく，あちらこちらと，乱暴にひっかきまわすような動作，というニュアンスが加わっていると思われる。

○新着の外国雑誌を，あちら此方と引繰り返して見てゐました。（こゝろ 246）

○口惜しいから，法律をひっくり返して調べて見たんです。（人間の壁・上 119）

「ひっくりかえす」は，中に何かを入れた入れものについていうばあいがある。

○玩具箱をひっくり返したような公園の中には，（放浪記 170）

この当然の結果として，中にあったおもちゃは，そのへんにばらまかれることがあ

る。それで，「ひっくりかえす」が，入れものについてではなく，中身について，「あたりにばらまく」というような意味合いでつかわれるばあいがある。

○わざと獲れないふりをしてかくしておいた金剛石を，誰かがいきなりひつくりかへしてばら撒いたといふ風に，（銀河鉄道の夜 265）

これについては，たとえば「酒をのみほす」と「グラスをのみほす」，「酒をあける」と「グラスをあける」などの両方の言い方がある動詞を考え合わせることができる。「のむ」については p. 621～622，「あける」については p. 612～613 を参照。

「うらがえす」は，おもに平たいものについていう。「ひっくりかえす」は「うらがえす」と同じような意味では平たいものについていい，倒すばあいには，むしろ，たてに長いものについていう。しかし，このような対象のちがいは，動作の結果として，裏側を表に出すかどうか，というちがいから派生した2次的なちがいであって，おもなものではない。「うらがえす」でも，たとえば，つぎのように，平たくないものについていった例がある。裏と表が考えられれば，平たくないものでも「うらがえす」対象になるのだ。

○奥に椅子を裏返してまたがつてゐた若い男が振り返つて見て，（帰郷 315）

「ひっくりかえす」が逆の関係にするという抽象的な意味で用いられた，つぎのようなばあいについては，辞典に記述してあることが多い。

○慶大が二回戦をひっくりかえしたので，（野球界 1956年7月 145）

○そして全部をひっくり返して，時の順序に並べて，この半年ほどの間にふりかかってきた経験，事柄を構造をあたえて整理してやろう。（むらぎも 160）

しかし，「うらがえす」が抽象的なことをあらわしている用法は，記述されていないようである。

○又色々な男に弄（もてあそ）ばれかけて，却つて男の心といふものを裏返してとつくりと見極めたその心が，（或る女・前 159）

の例では，心を紙や袋などにたとえたものとして，臨時の比ゆ的な用法とみてよいのかもしれないが，つぎのようなばあいには，「ひっくりかえす」と同様に「逆の関係にする」という用法がかなり固定し，確立しているものと見られる。

○優越を裏返した親切ごころですよ。（人間の壁・上 291）

○この場合の（国の責任）とは，政府の責任ということであり，裏返していえば（政府の権力をもって教育をおこなう）ということであった。（人間の壁・上 312）

〔270〕 つめる＜いれる

「つめる」は，ふつう，入れものにいっぱいになるような状態になるまで入れることをあらわす。

○雑嚢に塩を詰められるだけ詰めて，私はその家を出た。（野火 86）

○鍬沢は残っていた煙草を銀煙管につめてその火を吸いつけた。（落城 35）

しかし，「つめる」は，かならずしも入れものに全然すきまがないように入れることを

あらわすとはいえない。たとえば

○俵の中へは音作の弟が詰めた。尤も弟は黙つて詰めて居たので，兄の方は焦燥(もどか)しがつて，（破戒 245）

では，俵の口まで，ぎっしりはいらなければ，「つめた」といえないわけではない。たとえば「俵の中に半分つめた」というようないい方もありうるのであって，そのばあいの「つめる」は，あまった空間ができないように，いちばん下からぴったり入れていくことをあらわしているのである。

○彼女は，出発の時，自分も一緒に手伝つてトランクにつめてやつたものを，仲子が身につけてゐたのを認め，懐(なつか)しさうに云つた。（仲子・上 138）

のような例では，トランクがほんとうに上までいっぱいになったかどうかは，あまり問題ではない。事実上はそうかもしれないが，この場面では，重点はそこにはなく，むしろ単に「いれる」というのに近くなっている。「いれる」の方は，すきまがないような状態に入れても，またそうでなくてもよい。

○私はそのあひだに，いそいで洋服に着換へ，当座に必要なものだけを小さなスーツケイスに入れて，ここを逃げ出さうとした。（冬の宿 150）

では，事実上，上の「仲子」の例とおなじようなことをあらわしている。しかし，

○漁夫は虱を口に入れて，前歯で，音をさせてつぶしたり，（蟹工船 63）

○ふみ子は急いで買物かごを持ち，財布をポケットに入れた。（人間の壁・上 309）

などでは，とうてい口やポケットのすきまを満たすことができない程度のものを入れているので，「つめる」とはいえない。なお，結果がこのようにちがっていることに関係して，「つめる」は，大体力を入れて押し込むという動作をあらわしている。「いれる」には，それほど力を入れる必要がない。

〔271〕 しく＜おく

「しく」と「おく」との中心的なちがいは，「しく」がその上にからだその他のものをのせるためという目的をもった行為であり，「おく」はそのような目的の面での限定がないという点にある（p. 451～452）。これにともなって，「しく」は平たいものに限られるという対象の面での限定もある（p. 66～67）が，さらに，平たくできるものについては，水平面に平たく広げておく，という結果の状態の面における限定もある。「おく」はどのような状態におこうと無関心で，限定がない。

「し　く」	「お　く」
○白い肌着をとつた若者はそれを少女の背に敷かうとしたが，（潮騒 69）	○腐着のシヤツを，ほかのものと一緒に四畳へ置いたのを（桑の実 132）

「潮騒」の例では肌着は広げられて平らに地面におかれようとしたのであり，「桑の実」の例では，どのような状態でおいたかは問題ではない。広げてあったかもしれないし，小さくたたんであったかもしれない。また，

「し　く」	「お　く」
○父親は白い毛布を長く敷いて，傍に小さい鞄を置いて，芳子と相並んで腰を掛けた。（蒲団 81）	○彼はまだ朝四つに折りたたんだままでおいてある毛布の上に顔をふせたが，（真空地帯・上 108）

のばあいも，これと同様である。「蒲団」の例では「長く」という修飾語がついているように，ふたりで腰をおろせるだけの広さに広げてあり，「真空地帯」の例では，4つに折りたたんだままだから，広げてないわけである。このように，上に何かをのせるためには，それがある程度広げられなければならないので，目的の面での限定が，結果の状態を制約することになる。

〔272〕 つくろう＜なおす

これらの動詞は，どちらも，故障したもの，こわれたものを修理する動作に使われるが，そのほか，「なおす」は，もともと，こわれてはいなかったもの，しかし，ある希望の条件をみたしてはいないものを，作りかえてよくすることにも使われる。

○路の崩れたのを見れば，土砂を運び来つて繕うた。（恩讐の彼方に 71）

○ぜひ日本の道路は，一刻も早く直したいものだね。（ダイヤモンド 1956年10月23日 15）

このばあい，どちらも，道についていわれているのだが，「つくろう」の方が，あきらかに，こわれた道をもとどおりにすることであるのに対し，「なおす」の方は，むしろ，改良すること，舗装が不完全だからもっと舗装道路をふやす，というようなことをあらわしている。「道をなおす」は，こわれた道をもとどおりの状態にすることをもあらわせるから，それだけ「なおす」は「つくろう」よりも範囲が広いわけだ。

〔273〕 にる／ゆでる

「にる」は，主として，味をつけることにいう。

○糸昆布を用いる場合は甘酢く煮たもので結びます。（婦人生活 1956年2月 付録 家庭料理 369）

ただし，水たきのように，味がなくても，「にる」というばあいがある。

○記者　水炊きならいいのですか

山崎　ええ，水で煮る分にはいくらにてもいいんです。（婦人生活 1956年3月 398）

「ゆでる」は，味がない単なる湯で処理するのがふつうである。ただし塩味だけのばあいには，

○塩で煮たかと思ふ様な白つぽい馬鈴薯（じやがたらいも）の大きな皿を膳へ乗せて（土・上 205）

のように「にる」も使われるが，

○玉ねぎは皮をむき四つぐらいに切って，塩を加え，やわらかくなるまでゆでて，こまかくきざんでおきます。（暮しの手帖 1956年33号 157）

のように，「ゆでる」でいうこともある。

このばあい，動作としては同じでも，目的にちがいがあるかもしれない。国広哲弥氏

は，『意味の諸相』(p. 114) で，

ゆでる：≪食物に加熱する。湯を媒体とする。加熱後食物を媒体から取り出す意図を含む≫

にる：≪食物に加熱する。水と調味料の片方あるいは両方を媒体とする。媒体を食物にしみこませることを意図する≫

としているが，この規定は上の「塩でにる」「塩でゆでる」の例にも大体あてはまるようである。ただし，≪媒体を食物にしみこませる≫という意図は，「暮しの手帖」の「ゆでる」についてもみとめられる。なお，両者における意図のちがいを説明するのにつごうのよさそうな例を，もう1つあげておく。

○秋田では煮こむときに茹でたふきを一緒に入れます。三十分煮るとにしんとわかめの味がふきにしみて美味しくなります。(婦人生活 1956年2月付録 家庭料理 248)

「にる」と「ゆでる」とのちがいについては，このほかたとえば「にる」は主にこまかく切ったものについていい，「ゆでる」はまるごとのばあいに多いのではないか，とか，「にる」はぐずぐず長い時間をかけて処理することで，「ゆでる」は，

○もやし五十匁は熱湯でサッと茹でて水分をきります。(婦人倶楽部 1956年8月付録 お惣菜料理 93)

のように，さっとお湯に通すことが多い，とかいうようなちがいも考えられる。これらははっきりした対立といえるかどうかわからないが，傾向としてはみとめられるだろうと思う。

〔274〕 あせる，さめる<うすれる

これらはみな色がうすくなることをあらわすのに用いられる。

○ソフト帽も，深い茶色が，リボンも色があせてゐた。(帰郷 107)

○座布団も色のさめたメリンスの汚点だらけになつたのが一枚，(つゆのあとさき 34)

○やがて，その星屑のいろがうすれ，白々とした夜明けのいろが (落城 38)

しかし「あせる」「さめる」がもっぱら色についてつかわれるのに対し，「うすれる」の方はかならずしも色にかぎられない。今あげた「落城」の例も，色がうすれるとともに，その輪かくもはっきりしなくなって，結局まわりの空にとけこみ，まわりとの区別がつかなくなってしまうのである。

○屋根が火明りでほうつと呼吸するやうに浮き出して，また薄れた。(雪国 169)

○夕闇にうすれゆく淡路島を左手にのぞみ，(キング 1956年8月付録 179)

などでも，「色がうすれた」といえないこともないが，むしろ屋根や淡路島をとりかこむ空間の色が濃くなり，そのためにまわりとの区別がつかなくなったのであって，「かたちがぼんやりしてしまった」と考えられる。ただし「あせる」や「さめる」と同じように，完全に色だけを問題にして，形・輪かくがはっきりしているときにも，「色がうすれる」といえるとおもわれるが，そういう実例はなかった。

「うすれる」が色以外につかわれたものには，視覚的なものとして，光りの例があ

る。

○次第に薄れて行く夕暮の反射を受けて，（破戒 105）

しかし，むしろ多いのは，

○警戒心がうすれてくると，その次には（人間の壁・上 97）

のように，抽象的な現象についての例である。「あせる」「さめる」は色以外の現象についてはつかわれず，比ゆ的に抽象的なものごとをあらわすのにも「色（が）あせる（さめる）」のかたちでつかわれる。

○例の階級政党論というレッテルはかくて色あせる。（文芸春秋 1956年1月 76）

○ところでフライヤーズらしいカラーは，一応このシーズンを以て，色がさめて行ったように私は思う。（野球界 1956年2月 84）

なお，「あせる」「さめる」は，ほとんど人工的な色の例であった。自然物については，つぎの1つだけがあり，例外になる。これは二葉亭四迷の訳した「あひびき」からの引用の部分である。

○樺の木の葉は著しく光沢が褪めても流石に尚ほ青かツた，（武蔵野 11～12）

ただし，自然物にあまりつかわれないというのは，事実として，注意が向けられるのが人工のもののばあいに多いことの自然の結果であって，意味の上のことではないだろう。

色がうすくなるのは，ふつう，日光にさらされたりして自然にそうなるのであって，「あせる」「さめる」の実例もすべてそのようなものである。しかし，特殊なばあいを考えると，たとえば，薬品を使って色をうすくすることもできるので，そういうときにも「あせる」「さめる」といえるかどうかは，問題として残る。

〔量の変化と位置の変化〕

個別的な記述の「のびる」の項目でふれたように，本来量的な変化をあらわすものが，位置の変化をあらわすようになるばあいがある。「のびる」は，ふつう，

○服は裂け，靴は破れ，髪と髯が延びて，（野火 96）

のように，あるものの長さが長くなることをあらわす。しかし，

○ひらいた掌がいつせいにのびた。老商人は大仰にそれを払ひのけた。（潮騒 128）

の例では，そうではない。ここでは，てのひらの長さが長くなったことではなく，てのひらが自分のからだから離れた位置に移動したことを，あらわしている。腕がのびたことによって，てのひらの位置がかわったのである。これは，最初は「てのひらをさし出した」と「腕をのばした」とを，いっしょにしたような表現として，生まれたものかもしれない。また，

○空しく延びた手に爽やかな風が当つた。（野火 149）

のような例では，事実上，どちらの意味にも解釈することができる。すなわち，「手」は，指から肩までの全体をあらわすばあいもあり，そう考えれば，これは量の変化である。一方，そのうちでも，特に指・てのひらなどの部分を問題にしていることばであ

り，そうみれば，この「のびる」は，「てのひらがのびる」と同様に位置の変化である。したがって，これは中間的な段階にあるものといえる。野球の慣用的な表現としてつかわれる「球はぐんぐんのびております」のような例になれば，完全に球の移動，位置変化であって量的な変化ではない。

このように1つの動詞が，量の変化と位置の変化とを，ともにあらわすいくつかの例について考えてみることにする。なお，このような対立は，自動詞だけでなく，他動詞にもみられるはずである。たとえば，「のびる」に対応する「のばす」についても，

○小指の爪を長くのばした指のそそくさとした動きで，（潮騒 127）

では量の変化であり，

○拳を頭の上へ伸して，時々思ひ切つたあくびをした。（こゝろ 63）

では位置の変化である。しかし，他動詞のばあいには，基本的に自動詞と平行していると思われるので，ここでは自動詞の例だけとりあげる。

まず，「のびる」にわりに近いものとして，「ひろがる」がある。この動詞も，ふつうは，

○袴下の腿のあたりにしみが現はれ，下の方へ拡つていつた。（野火 32）

のように量の変化をあらわすのだが，つぎの例では，ある意味で，それが位置の変化の方に移りつつある。

○初年兵が衛門の眼をかすめてもってかえってきた菓子や煮ぬき卵，キャラメル，アメ玉などは古年兵たちの寝台の上にひろがっていた。（真空地帯・上 201）

すなわち，寝台の上にばらまかれた食べものを全体としてとらえるとき，その範囲，面積が広いということになるが，その1つ1つのたまごやキャラメルに注目すれば，おたがいにはなれていること，つまり位置がたがいに遠いことをあらわしている。これは量の変化から位置の変化へはっきり移ったとはいえず，ただその可能性を示しているにすぎない。しかもこのばあい，「ひろがっていた」は変化ではなくて，状態をあらわしている。しかし，つぎの例では「ひろがる」は状態ではなく変化である。

○それが一定の間隔を措いては一同が袋の口の紐を引いた様に輪が蹙まつて，ばらりばらりと手拍子をとつて，復以前のやうに拡がる。（土・上 188）

おどりのわが大きくなることは，そのわを全体で1つのものとしてみれば，量的な変化にすぎない。しかし，そのわを構成している人たちについていえば，わがひろがることは，ひとりひとりがおたがいに，あるいは，そのわの中心から，遠ざかることをあらわしている。したがって，たとえば，「手がのびる」が，それ自身では手の長さの変化として考えられるにもかかわらず，手の先端は，事実上そのことによって，からだから遠い位置に移動するのであり，やがて「てのひらがのびる」という表現を生ずるところまで発展するように，これもまた，位置変化への可能性を示しているものである。

つぎにとりあげるべきものに，形容詞と意味的，形態的に直接の関係をもつものがある。形容詞のうち空間的な量をあらわすもの，たとえば「たかい」「ひくい」「ふかい」「あさい」などは，対象の属性としての量をあらわすとともに，対象の位置関係をもあ

らわす。たとえば，

○樹は荻に似た楕円形の細かい葉をつけ，軒よりわづかに高かつた。（野火 52）

では木の高さ，木自身の属性としての量をあらわしており，

○九時十時となると，蟬が往来から見える高い梢で鳴きだす，（武蔵野 31）

では，こずえの位置をあらわしている。このような対立はそのまま，「たかまる」「ひくまる」などの動詞にもみられる。

〈量〉

○丘はまたその対岸に高まつて，流れに沿つて下り，この風景の左側を囲つてゐた。（野火 11～12）

○女の背中のやうな起伏が，次第に左へ低まり，一つの鼻でつきたところに，幅十間ばかりの急流が（野火 11）

〈位置〉

○而して自分の体がずつと高まつてやがて又落ちて行くなと思はしい頃に，（或る女・前 99）

○頭の上は屋根裏がまる出しで，窓の方へ低まつて来てゐるものだから，（雪国 52）

ほかの動詞，たとえば，「ふかまる」などについても，対立はありうるかもしれないが，適当な例がなかった。

「木がたかい」というとき，たしかにそれは木全体の量（性質）をあらわしてはいるが，木の特徴的な部分として先端（こずえ）に注目するとき，位置の問題としても「木がたかい」という表現がでてきても自然である。あるもの全体の性質を認定・評価するにあたって，そのもっとも特徴的な一部分に注目することは，ほかのばあいにもみられる。「あの人はうつくしい」というとき，それは特に顔の美醜であり，「あの人はふとっている」というときには胴体のふとさであって，ともに手や足の美醜やふとさを問題にしているわけではない。これと同様に，事実上は木の先端や山の頂上の位置だけに注目していながら，「木（山）がたかい」ということも自然である。このように，「こずえ（頂上）がたかい」と「木（山）がたかい」とは，ある意味では両者とも位置の表現としての側面をもっているといえる。「たかまる」などの動詞についても同じである。

ただし，このことは，かならずしも，位置の表現が性質の表現にくらべて歴史的に先行することを示すものではないし，現代語としての，より基本的な側面は位置の方である，ということでもない。その点で，性質の面が基本で位置の方はこれから派生したにすぎないことがあきらかな「のびる」とは，はっきりちがっている。

おなじ空間的な量をあらわすにしても，「たかい」「ひくい」「ふかい」「あさい」のように，1次元の長さをあらわすものではなく，「ひろい」「せまい」「ふとい」「ほそい」のように2次元，3次元の量をあらわすものについては，位置をあらわす用法がない。それに応じて，動詞の方でも「ふとる」や「ほそる」については，量の変化だけで，位置の変化をあらわす用法がみられない。ただし，「ひろがる」については多少問題があることは，上にみたとおりだ。

つぎに，形容詞とは関係がないが，「でばる」「ひっこむ」という動詞も，量の変化と位置の変化とを，ともにふくんでいる。

〈量〉

○頬の出張った，大きな眼鏡(めがね)をかけた初年兵は，（真空地帯・上 28）

○下剤や洗腸で腹の中にはもう何にも残つてゐないのですから，下腹が引込まなくつちやならないのに，（波 209）

〈位　置〉

○物置のこちら側の出張つた台石の上に（桑の実 132）

○それはひどい力でつかんだ。安吉の腰が反射的にひっこんだ。（むらぎも 214）

「ほおがでばる」「下腹がひっこむ」というとき，ほおや下腹の全体としての位置が変わるわけではない。ただ，それが，ノーマルな状態にくらべて量的に変化するため，その先端の位置が変わるのである。「台石がでばる」「腰がひっこむ」というときは，それとちがって，これらのもの全体としての位置の変化である。台石や腰の量がかわるわけではない。ただし，これらのばあいには，さきほどあげた「たかまる」や「ひくまる」に比べて，その対立が，ややあいまいである。それは，ほおとか，下腹とかいうものが，切り離されてあるものではなくて，からだ全体の一部分としてしか存在せず，全体としての量がかわった，といえるかどうか，あいまいなためだろう。山も地球の一部分としてしか存在しないが，もりあがっているだけに，腹よりはとらえやすい。腹の範囲は，どこからどこまでか，はっきりせず，ただ，はっきりしているのは，腹の前面だけである。そして，その腹の前面に関するかぎり，肉づきがよくなって出っぱったのか，からだをそらせたために出っぱったのかは，あまり問題ではない。

つぎの例における「ひっこむ」は，量の変化の極限として，なくなってしまうことをあらわしており，位置の移動ではないこと，「腰がひっこむ」とちがうことは，比較的はっきりわかる。

*○本当に瘤の引込む間がなかつたぢえ（潮騒 34）

なお「でばる」「ひっこむ」は，人間の移動について，つかうばあいもある。こうなると，意味的に量の変化をあらわすものとのつながりは，きわめてうすい。

○班のものはそれぞれの会場へ模様を見に出ばった。（むらぎも 253）

○そういって，茂木は，奥へ引っ込んだ。（自由学校 98）

つぎに，さきほどの「ひろがる」とちょうど逆の関係にたつ動詞がある。すなわち，「ひろがる」は，本来量の変化をあらわすのであって，ただ，そのはしに注目するとき，位置の変化をもあらわすことになるのだが，反対に，本来位置の変化をあらわすものであって，ただ，それがある大きなものの先端の位置を問題にしているばあい，結果的には全体としての量の変化をもあらわす類の動詞である。たとえば「達する」という動詞は，本来，

○犬共は私がその位置に達する前に散り，四方の家の軒にかくれて，（野火 75）

のように位置の変化をあらわす。この例では量の変化とはまったく関係がない。しかし

○市九郎の掘り穿つた洞窟は，もはや五丈の深さに達して居た。（恩讐の彼方に 77）

のばあいには，洞窟の先端だけをとれば位置の変化ではあるが，洞窟全体からみればその量が拡大したことをあらわす。同じ文脈で，たとえば，「五丈の深さに深まった（広

がった)」などと，いいかえることもできるであろう。これも，直接的にあらわしているのは，あくまで量の変化であり，位置の変化をあらわしているとはいえない。ただ，「手がのびる」から「手のひらがのびる」という表現が生まれるように，ここでも，量の変化から位置の変化の表現が生まれてくる可能性がある，というにとどまる。この類のものとしては，つぎのようなものがある。

○満潮時の海は崖のすぐ下まで来た。(潮騒 32)

○直接酒蔵へ行つたので酒は白鳥徳利の肩まで届いて居た。(土・上 205)

○道はやはり草原に深く刻まれて，木立に到つてゐた。(野火 51)

みな本来は，あるいは直接的には，位置の変化であって，ただ，ある全体的なものの先端がある位置までくることをあらわすことによって，その全体としてのものの増大，拡張を結果的にはあらわしているのである。

最後に，位置の移動が，同時にあるものの発生をあらわすような動詞がある。

○火の手が下の村の真中にあがつてゐた。(雪国 160)

○志摩半島の元浦あたりに，山火事の煙がのぼるのを見ると，(潮騒 86)

○外は夕闇がおりてゐるし，汽車のなかは明りがついてゐる。(雪国 8)

○黒い鮮かな木の影が道に落ちていた。(くれない 46)

「あがる」や「のぼる」では，まだ空間的な上昇のうちに，ふくめることができるが，「おりる」や「おちる」のばあい，空間的に上から下への移動がおこっているわけではない。「ひっこむ」という空間的な表現が，「こぶがひっこむ」でこぶの消滅をあらわすのとちょうど逆に，これらの表現においては，現象の発生を，上昇や下降の動詞によってあらわしているのである。

5.2.2 生理的な変化

〔275〕 やせる／ほそる

「やせる」「ほそる」は，ともにからだの部分についても使われる。

○彼はのろのろと痩せた左手を挙げ，右手でその上膊部を叩いた。(野火 132)

○胸が痩せて手足が細れば，谷川を浴びると旧(もと)の通り，(高野聖 76)

しかし，以下のような点では対立している。第1に「やせる」は栄養をとらなかった結果としてからだが「ほそる」ことであって，「ほそる」には，そのような原因の限定はない。たとえば手足をきつくしめつけることによって，ほそくなったとすれば，それも「ほそる」であらわすことのできる現象である。しかし，これは「やせる」とはいえない。第2に，「ほそる」はほそくなることだが，「やせる」は，かならずしも，ほそくなることではない。たとえば，上にあげた高野聖の「胸が痩せて」は，「胸がほそって」とはいえない。胸の肉がおちたことによって，それは平たくなるのであって，「ほそい」とよぶのは不適当である。「ほそい」というのは，ある程度長さのあるものについていうことばで，胸のように，全体の形が長くないものは，やせても「ほそった」ことにはならない。

〔276〕 ふとる，こえる／むくむ＜ふくれる，ふくらむ

「ふとる」「こえる」は，正常な生理的な現象として肉づきがよくなって，からだが横に大きくなることをいう。これに対して，「むくむ」は病的な現象である。

○「お婆ちゃん，おらげに来てから肥ったね」と，間貸している農家のおかみが言った。
「そうかしら，むくんでるんじゃないかしら」
「ううん，肥ったんだよ。むくみとは違うよ。お婆ちゃん，九十まで大丈夫だぜや」（厭がらせの年齢 294）

この例では「ふとる」と「むくむ」がはっきり対立してつかわれている。

「ふくれる」「ふくらむ」はからだ全体についていうことはなく（あるいはまれで），主としてからだの部分について使われるが，その際「ふとる」と同じように正常な現象としておこったものか，「むくむ」のように病的なもの，またはまったく一時的なものであるかは，関係がない。

○そしてその端に手があって，甲も指も盛りあがるように肥えてふくれている。（むらぎも 34）

この例では，「こえる」と「ふくれる」が対比して使われている。そして，「ふくれている」は，結果としての状態をあらわし，「肥えて」はその原因がむくみや何かによるのではないことをあらわしている。このばあいは単に「こえている」といっても同じことなのだが，このように分析的に表現することによって，結果と原因とが，ともにはっきりいいあらわされたことになる。この分化は，「こえる」と「ふくれる」との本質的な差にもとづくものである。

「ふくれる」は，今の例では肉づきがよくなったばあいに用いられていたが，

○歯の痛い方の片頬が熱を持つたやうに膨れてゐた。（桑の実 31）

という例では，むしろ，「むくむ」に近いような，一時的な現象について，いわれている。これは，「ふとっていた」「こえていた」のようにいいかえるのが，不自然な例である。

「ふくらむ」についても，

○彼女の指は子供のように白くてふくらんでいた。（人間の壁・上 61）

では「ふとっていた」「こえていた」といいかえられるような現象，

○瑠璃子は仙子の非常識と，わがままの分を代って叱られているので，頬をふくらませ，拗い顔をしていた。（厭がらせの年齢 277）

では，これらとちがう一時的な現象をあらわしている。

5.2.3 服装の変化

〔277〕 はおる＜きる

「はおる」の意味について，辞典は多く「きものの上にかけてきる」またはこれに近い説明をしている。これは大体正しいとおもわれるが，もっとくわしい説明を必要とす

る点がある。

この説明法によれば，「きる」に対して「はおる」は＜きものの上に＞という点と，＜かけて＞という点とで区別されることになる。この＜かけて＞というのが，積極的な意味をもっているのかどうか，つまり「きものの上にかけてきる」ということは，単に「きものの上にきる」ということと，同じであるのかどうかは，あいまいだが，問題の1つは，その点にかかっている。しかし，＜きものの上に＞という規定にも，全然問題がないわけではない。

「はおる」が多くのばあい＜きものの上に＞あるものをさらに着ることをあらわしているのは，あきらかな事実である。それは

○国民服の上に丹前を羽織つた姿で炬燵に入つてゐた。（闘牛 92）

のように「……の上に」とはっきりしるされているばあいもあり，

○我慢がならなくなると，ゴムの雨合羽を羽織つて海に合ひに行つた。（潮騒 60）

のように，それとは書いてないが，ふつう着物の上に着るもの（羽織・外とう・コート・はっぴ・はんてんなど）であるために，それと読みとれるばあいもある。つぎの文では，「上にはおる」という表現が「下にたくさん着込む」に対立してつかわれており，以上のことを示すのにつごうのいい例である。

○しかし，この日本的防寒法は，昨今の暖房装置の発達につれて，次第に上に羽織るヨーロッパ式に変りつつあるということは事実です。というのは，大抵の事務所や店舗，劇場が一定温度をあたたかく保っているので，下にたくさん着込む必要がなくなってきたからです。（サンデー毎日 1956年12月2日 54）

しかし，この「きものの上に」という規定は，基本的に正しいけれども，絶対的ではない。

○その四十男は，穴ぐらから裸体の半分を現はしてゐたが，すぐ軀を引込めた。すぐにまた，今度はシャツを羽織つて穴ぐらを這ひ上ると，渡しの板を船から岸に架けてくれた。（本日休診 73）

このばあいには，裸のからだの上にシャツを着たことを，「はおる」と表現している。また，

○湯あがりに，いま浴衣（ゆかた）をはおつたばかりか腰紐もしめず，（多情仏心・前 310～311）

○薄いパジヤマを羽織つて寝台に横たはると，（帰郷 58）

なども，ほとんど裸か，または，下着1枚程度の上に着ていることをあらわす。「きもの」という表現は，広い意味では衣類全般をあらわすが，「はおる」の説明に用いられているようなばあいには，常識的に考えて上着程度のもの，ふつうそれを着て外を歩いてもさしつかえないような服装をさすのであって，肌着のようなものは含まれていないだろう。したがって，裸のからだにじかに着るにせよ，あるいは肌着の上に着るにせよ，それらは「きものの上に着る」という規定からは，ずれることになる。それでは，これらのばあい，なぜ「はおる」がつかわれたのか，といえば，それはこの動詞がふわりとひっかける，のせるという程度の着方で，ボタンをはめたり帯をしめたりして，し

っかり身につけるのではない，ということをあらわしているためであろう。たとえば，つぎの例はカクテルコートについてのべた文章の1節だが，このことがはっきり文脈から読みとれる。

○コートのデザインは，ドレスと調和するもので，余りボタンやベルトのつかない，羽織るだけのプレーンなものが多いのです。（婦人画報 1956年12月 49）

もし最初にあげたような辞典の規定が，「（きものの上に）かけて」という表現によって，このことを表わそうとしたものであるならば，それは積極的な意味をもっていることになる。ただし，すべての「はおる」が常にこのような事実をあらわしているとはかぎらない。はじめにあげた「潮騒」の例や，つぎの「むらぎも」の例では，単にきものの上にかけて着ているだけで，ボタンをはめていないととるのは，むしろ不自然である。

○今はシャツにジャケツをきこんで上へ外套を羽織っている。（むらぎも 213）

これらの文脈では，単に雨合羽や外套をきる，きこむなどというのにひとしい。

要するに「はおる」というのは，原則として，きものの上に羽織などをふわりとかけてきることをあらわすのであるが，それが一方では＜ふわりとかける，ボタンや帯などできちんと身につけるのではない＞というニュアンスが強く出，また一方では＜きものの上にきるのである，下着ではない＞という面が強く出ているのである。これらはそれぞれ別々の意味としてはっきり分裂しているとはいえず，大部分の例では，この両方の側面が統一されてあらわされているのであるが，もし，一方のニュアンスだけが特に強調されて固定すれば，別々の意味になったものとみとめるべき段階にいたる。

〔278〕 つくろう／なおす

これらの動詞は服装などをととのえるばあいにつかわれる。

○衣紋（えもん）を繕ひながら，滝十郎は，すつかりもう色事師らしい余裕や落ちつきで，隙（すき）なく心を甲（よろ）つてゐた。（多情仏心・前 52）

○乱れた着物を直しながら台所に行つて湯を呑んで，（冬の宿 142）

そして，上にあげたような例では，どちらをつかっても，あまりかわりはない。しかし，このように，みだれた状態にある服装をきちんととととのった状態にするほかに，「つくろう」はみだれた状態を出発点とせず，はじめからきちんとした状態を作りあげるばあいにもつかわれる。

○山家風のつくろはぬ装ひの中から突然現れでた彼女の明眸皓歯は（厚物咲 20）

この「つくろはぬ」は，状態的な意味であるが，はじめに乱れた状態があって，それを整った状態につくりかえたのではなく，最初から整った状態をつくりあげることをあらわしているのである。この点，修理する意味の「つくろう」と「なおす」を取り上げたばあいに述べたこと，すなわち「つくろう」は，こわれたものを修理することにかぎられるが，「なおす」は，こわれていないものを，さらによいものに改良することをもあらわす，というのと，いわば逆である。

〔279〕 くしけずる，すく，とかす＜ととのえる

「くしけずる」「すく」「とかす」は髪についてだけいい，「ととのえる」は髪もふくめて一般的につかわれる。しかし対象の範囲の広さだけではなく，変化の結果という点でも，これらのあいだには，ちがいがある。「くしけずる」「すく」「とかす」は，乱れた髪を，くしできちんとそろえることをあらわす。

○母親は髪に手をやつたが，髪は海風に乱れたままだつたので，ところどころ歯の欠けた小さな赤いセルロイドの櫛を，懐ろから出して手早く梳いた。（潮騒 113）

「髪をととのえる」という用例はなかったが，つぎの例では，髪も，ととのえる対象の一部分として，ふくまれているかもしれない。

○鏡の前に立つている人は，自分を見ている。そして自分のある部分を整えようとしたり，ある部分から内緒の満足を得る。（若い女性 1956年7月 228）

しかし，このばあい，髪を「とかす」ことだけが「ととのえる」にあたる，とはいえない。たとえば，髪型がゆがんでいるのを手でなおすことも「ととのえる」ことだが，こういう動作は「くしけずる」「とかす」などではいえない。したがって，「くしけずる」などは「ととのえる」に比べて結果の状態の面でも，せまいことになる。

5.2.4 社会的な変化

〔280〕 かす，あずける／やる，あげる，あたえる＜わたす

「かす」「あずける」は，所有権の移動をともなわない。

○実は五円ほど要るんだ。三円はある。一円貸してくれないか？（むらぎも 314）

○彼は帳場へ伸子の鍵をあづけるついでにノートを置いて来た。（伸子・上 39）

「かす」は，使用権を与えるのであり，「あずける」は，保管をたのむのであって，そのあいだには，ちがいがあるが，どちらにせよ，一時的にわたすだけで，相手の所有になるわけではない。

○私の希望，いのち，私そのものを仏様に預けるのじゃ。（出家とその弟子 85）

という例では，いわばあずけっきりではあるが，このばあいにも，自分の命はあくまで自分の所有であり，ただその使用権を相手（仏）にわたしてしまうのだ，とみることができる。

これに対して「やる」「あげる」「あたえる」は，所有権の移動をあらわす。

○「地面は他（ひと）のものだから仕方がない。其代りおれの持つてるものは皆な御前に遣るよ」（こゝろ 96）

○「何も云わないで借りて下さい。僕はあげてもいいんですが，貴女がこだわると困るから。」（放浪記 42）

○いままでかえりみなかった兵隊たちに近づいて煙草をあたえ，外出につれだしたり，歓心（かんしん）を買おうとした。（真空地帯・上 171）

所有権が移動すれば，当然使用する権利も相手に渡ることになる。

しかし，「やる」などについては，つねに積極的に所有権の移動をあらわすとはいえない。すなわち，この点で「かす」や「あずける」に対し，積極的な特徴をつねに示しているとはいいにくい。まず，

○お嬢さん二人は鶏に餌をやる手伝ひもしないで遊び歩いてゐる。（本日休診 93）

○おおよしよし，レオも来たのかい。おお可愛いね。何も**上げる**のぢやなかつたのだよ。（田園の憂鬱 22）

○二人は水飼場に馬をつれて行って水を**あたえた**。（真空地帯・上 154）

のように，動物に食べもの，飲みものを与える例がかなりあるが，このばあいには，相手が動物であるから，所有権という観点はややうすくなる。しかも，対象が食べもの，飲みものであることによって，所有権の移動という観念はさらにうすくなっている。というのは，相手はそれをただちに消費してしまって，特に所有という状態を継続しないからだ。この点はたとえば，

○奥さんは飲み干した紅茶々碗の底を覗いて黙つてゐる私を外らさないやうに，「もう一杯**上げ**ませうか」と聞いた。（こゝろ 46）

のように，相手が人間であるものについてもいえる。相手は受け取った液体をすぐにのんでしまい，それを自分のものとして持っている，という状態は長く続かない。したがって，このようなばあいには，所有権の所在を問題にすることは，あまり意味がない。それで，この点については，いわば中和された環境にある。

○一食分の食糧が出発に際し**与へられた**。（野火 24）

の例では，食べものを与えているのだが，このばあいには相手がすぐに消費するのではなく，しばらく持っているのであるから，まえにあげたものよりは所有権の所在が問題になる。

いずれにせよ，これらの例については，人間から動物，あるいは相手の人間に対して所有権が渡るのだという範囲に含めることができる。しかし，つぎにあげるような例については，所有権を移動させるとはいいにくい。

○（飲みほす）この杯はだれにやろう。（見回す）かえで，かえで。小さいかえでに。（杯をかえでにさす）（出家とその弟子 91）

○マダム，ダイヤの札は，君に**上げ**よう。ダイヤの女王をね。（帰郷 351）

○加治木は，店へ入ってきた五百助に，椅子を**与えた**。（自由学校 222）

これらは，いずれも，所有権の移動というよりは，むしろ使用権の移動であり，相手がそのさかずきやカードや椅子を自由に使う権利を与えるということである。そして，その所有権そのものについていえば，さかずきとカードについては，だれの所有であるか明らかでなく，椅子については，店の所有であることが明らかである。すなわち，与えている主体はこれらのものの持ち主ではなく，所有権の移動は起っていない。したがって，これらの例も最初にあげたようなものと同一に扱うとすれば，「やる」「あげる」「あたえる」は，所有権の移動について積極的な規定をもっていないことになる。つぎにとりあげる「わたす」は，一応，そのような単語だと思われるが，「やる」などにつ

いては，そこまでいいきることは問題があるであろう。というのは，大部分の例はやはりはっきり所有権が移動するばあいであり，「椅子を与える」のようなのは，あくまで例外的なものだからだ。

可能性としては，この現在は例外的にみえる用法がさらに一般的になって，「やる」などが，単に相手の方に物理的に移動させること，あるいは使用権をまかせること，などをあらわす単語になりきり，「わたす」と同様に所有権の所在を問題にしなくなるかもしれない。しかし，もう1つの可能性としては，「椅子をあたえる」などが，慣用句的なものとして，あるいは特殊な文体の中におけるものとして，あるいは所有権の移動以外のなんらかの意味上の制限をともなうものとして，一般の「やる」などとは別の意味に固定するということも考えられる。現在の事実からは（または，現在手元にある資料からは），こういう可能性以上のことを，のべることはむずかしい。

「わたす」は，所有権の移動をともなうかともなわないか，一時的であるか永久的であるか，という点に無関心な動詞である。

○漁夫がその女房に金を渡してゐるところだつた。（蟹工船 11）

○大福もちを取り出してきて木谷に渡した。（真空地帯・上 155）

では，所有権が一方から他方に移り，その移動は永久的なものである。しかし，

○こういう商人の露骨さをいきなり見せられると，謙作は持って来た物を見せる気がしなくなった。しかし，「そりゃ，なんです」こんな事を言って，骨董屋が手を出した時に彼はやはりそれを渡した。（暗夜行路・前 48）

○帽子を女中に渡しながら，ぎごちない空気を払ふやうに（仲子・上 162）

では，所有権はあくまで「わたす」方の主体にとまっており，ただ一時的に相手に見せるため，あるいは保管してもらうために「わたした」にすぎない。また，

○「ああ，速達がきてゐます。」といつて封書の速達を私に渡した。（冬の宿 96）

では，むしろ所有権はわたされる方の相手にある。そして

○徳利を動かして空に成つたのは女房等へ渡して（土・上 208）

では，わたす方にも，わたされる方にも，所有権がなく，これらの動作に無関係な第三者がもっているものを，やりとりしているのである。

以上の諸例で，「わたす」が，所有権や使用権の移動に関係なく広くつかわれるということは，つまりこれらの「わたす」に共通の特徴がそういう社会的・抽象的なことにはなくて，むしろ物理的・具体的な移動の方にあることを示している。しかし「わたす」はつねにそういう具体的な動作をあらわすのではない。明らかに所有権の移動を，しかも空間的な移動をともなわずに，抽象的な所有権の移動だけを，純粋にあらわすばあいもある。

○半年たたないうちに鈴むらさんは田所町の店舗を銀行の手に渡した。（末枯 45）

ここでは，店をわたすのであるから，当然空間的な移動はおこっていない。

○之を償却せん時には，先祖の遺産を人手に渡さねばならぬ。（平凡 129）

のばあいにも，その財産の一部にやはり不動産を含むであろう。そのすぐ前に「地所を

抵当に入れて」借金したことが書いてあるのだから。したがって，一方の極に純粋に物理的な移動に近いものがあり，もう一方の極には純粋な所有権の移動をあらわすものがある，その広い範囲をただ1つの意味として規定できるかどうかは問題である。所有権の移動のばあいには，上の例にみるように「だれだれの手にわたる」というかたちをとることが多いと思われるので，このばあいには，形式上からも限定された特殊な意味とすべきかもしれない。それにしても，「金をわたす」のように，物理的な移動も所有権の移動も，両方ともなっている例がかなり多いのであって，これら2つの極は，連続的である。

〔281〕 かりる，あずかる／もらう，いただく＜うけとる

これらの動詞についても，「かす」などと同様のことがいえる。「かりる」「あずかる」は，それぞれ一時的にわたされることをあらわす。

○その翌る日，安吉は太田の制服を借りて帝国ホテルへ行った。（むらぎも 164）

○日誌と鍵とは丑松が預つて置いた。（破戒 273）

このばあいにも，「かりる」は使用権をゆずりわたされること，「あずかる」は，保管をたのまれること，というちがいはあるが，所有権がわたっていない点では同じだ。

「もらう」「いただく」は，これに対し，所有権が移動していることをあらわす。

○このガンジョウな男が，汗ばんだ二銭を私からもらうと，（放浪記 170）

○僕の金もともと父上からいただいたものですが，（暗夜行路・前 209）

ただし，これらについても多少問題になるばあいがある。「もらう」は，「やる」などに比べれば，比較的純粋に所有権の移動をあらわしているようで，それに対する例外は少ない。しかし，たとえば，

○「ぢやあ飲むよ。――此奴へ貰ほう。」（末枯 37）

のばあいには，のみものを自分の方へもらって，すぐにのんでしまうことを表わしており，そののみものを手元にずっと所有しているわけではないので，所有権の所在はそれほど問題にならない。また，

○「ちょっと本をもらいに来ました」と声をかけて，「塚原卜伝は戸棚ですか」と言った。（暗夜行路・前 20）

では，一時的な借用を「もらう」であらわしている。

○其の晩勘次は二人を連れて近所へ風呂を貰ひに行つた。（土・上 87）

では，「もらう」といっても，実は，風呂を借りることをあらわしているのであるが，これはまったく慣用句的な表現である。

「いただく」には，「もらう」よりもやや例外的なばあい，すなわち所有権の移動をともなわない例がある。

○昼近くに，蕎麦屋の出前持が来た。「道具をいたゞいて参ります。」（波 37）

この例では，そば屋がからになったどんぶりを持って帰ることを「いただく」であらわしている。どんぶりは本来そば屋のものであって，それらが本来の持ち主のところへ

帰ってゆくのだから，このばあいには，所有権の移動はすこしも起こっていない。相手の使用権のもとにあったものが，そうでなくなることを，あらわしているのである。

○「赤ちやん，いたゞきませう。」（波 146）

では，赤ん坊をあずかることを「いただく」であらわしている。また，

○「まあ，私がこのお部屋を戴きますのでございますか。」（桑の実 117）

では部屋を借りることを，あらわしている。これらはみな，所有権の移動という本来の用法からは，ずれているものである。

これらの例外的なものをみると，「かりる」「あずかる」が所有権の非移動を積極的に表わしているほどには，「もらう」「いただく」は所有権の移動をつよく表わしてはいない。

さきに「やる」「あげる」などについていったのと同様，「もらう」「いただく」の意味も全体として所有権という観点をうすくし，抽象化する方向に向うか，あるいは，本来の意味から分かれた第2の意味を生じるか，両方の可能性があると思われる。

「うけとる」は，以上のような所有権という観点はない。この点，ちょうど「わたす」に対応する。

○暮に受取るべき賃銀を，胸算用で見積つてみたとき，（あらくれ 150）

では所有権の移動と具体的な移動とが平行しており，

○私は彼の姉の夫から長い封書を受取りました。（こゝろ 201）

では，やはり一応所有権の移動といえるような現象について使われている。しかし，

○私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ツ込んで眼鏡を拾ひ出した。先生は有難うと云つて，それを私の手から受取つた。（こゝろ 10）

では，うけとり手は，本来持ち主であって，一時的にそれをもっていた相手から自分のところへもどすことを，「うけとる」であらわしている。

○私は平静を装ひ，娘さんの差し出すカメラを受け取り，（富岳百景 72）

では，逆に，うけとり手は，その持ち主から一時的にわたされたのである。また，

○娘が稲の束を投げ上げると，高くのぼつた男が器用に受け取つて，（雪国 118）

○監督は桶一杯に水を受取ると，枕木のやうに床に置き捨てになつてゐる学生の顔に，いきなり——一度に，それを浴せかけた。（蟹工船 67）

では，所有権がどこにあるかは，まったく問題にならず，単なる空間的な，物理的なうけわたしをあらわしている。

〔282〕 むらがる＜あつまる

「むらがる」は，人びとのあいだにあまり整然とした秩序がなく，いわゆる＜群集＞があつまったばあいについていう。

○それを待つ旅客は「プラツトホオム」の上に群つた。（破戒 159）

「あつまる」は「むらがる」と同じようなばあいにも，また秩序をもったあつまりにもいう。つぎの例は，別段はっきりした秩序をもったあつまりではないので，「むらが

った」といいかえても，それほど不自然ではない。

○丁度準教員は鉛筆写生を終つた。人々はいづれも其周囲へ集つた。（破戒 272）

○おつぎは其処へ聚つた近所の女房に自分の手を見せて（土・上 87）

一方，つぎの例では「むらがった」といいなおすことはできない。

○全国四十六の都道府県からあつまった各府県教組の執行委員長，書記長九十二名が出席していた。（人間の壁・上 230）

この例では，意図的に計画された集会に，あらかじめ指定された人たちがあつまったのであり，その集合の状態もきちんと座席がきまっていて，雑然としたものではないにちがいない。

この対立は，「むらがる」が非意図的なあつまりであるのに対し，「あつまる」はその点に無関心だという対立につながるものと思われる。

なお，「むれる」も「むらがる」と同様，不特定多数の雑然としたあつまりをさすものと思われるが，この方は用例が少なく，しかも動作的であるよりは状態的な意味に使われているものが多いので，ひくべき適当な例がなかった。

5.3　変化の程度

○マツチの細い軸が燃えつくすと，一旦赤い筋になつて，（田園の憂鬱 119）

○壊れかかった大名門だの，伸び過ぎた芝草なぞは，（自由学校 331）

これらの動詞における接尾的な要素は，「もえる」「こわれる」「のびる」などの変化の程度をしめしている。「～つくす」「～かかる」などは，動作・現象の段階をあらわすが，それが変化の動詞につくと，どの程度変化したかのしるしになる。

漢語では，程度をしめす要素をもったものがおおい。

一新する，根絶する，全焼する，大破する，小破する，半壊する，過熱する

など。

〔283〕 かたむく，かしぐ＜たおれる

「かたむく」「かしぐ」は，ななめになることをいう。その角度は何度でもよいが，90度になってしまって，地面の上に水平に横たわるようなばあいには，もう「たおれる」としかいえない。

○古びた庇の陰は暗かつた。傾いた柱の根元が朽ちてゐたりした。（雪国 154～155）

○川は岸からかしいだ大木の蔭で，巨大な転石の間を早瀬となつて越し，（野火 46）

「たおれる」は，ふつう，垂直の状態にあったものが水平の状態になることであって，「かたむく」「かしぐ」とは対立する。

○君の杖を立てゝ其倒れた方に往き玉へ。（武蔵野 19）

○直に丑松は畳の上に倒れて，放肆な絶望に埋没れるの外は無かつた。（破戒 206）

しかし，ななめの状態になること，すなわち「かたむく」などとおなじようなばあいにつかわれることもある。

○それにその体は，何だ……全然左の方へ倒れてしまってるじゃないか。（真空地帯・上 87）

この例では，「全然」ということばは使ってあっても，からだは，まだ，ななめの状態にとまっていて，完全に直角に曲がっているわけではないであろう。この例のすぐつぎに，

○彼が手をはなすと木谷の体はまたもとどおり左の方に傾いた。（真空地帯・上 88）

のような記述がある。つまり，このような状況には，「たおれる」でも「かたむく」でも，どちらでもよいのである。誤解の恐れがなければ，はじめにあげた「雪国」や「野火」の例でも，「たおれる」を使うことができるであろう。これらの例文でただ単に，「たおれた柱」「たおれた大木」とあれば，それは地上に水平の状態で横たわっている意味になってしまうので，「たおれる」をつかうことはできないが，たとえば「少したおれた」のように，角度についての限定があれば，ななめになったことであることがわかる。

〔284〕 かたむける，かしげる＜たおす

これらの他動詞についても，対応する自動詞のばあいとおなじことがいえる。「かたむける」「かしげる」は，ななめにすることであって，ふつう水平の状態にまでは達しない。

○娘は胸をこころもち傾けて，前に横たはつた男を一心に見下してゐた。（雪国 9）

○しかし，嘉門は急に首をかしげて，思案顔をした。（冬の宿 102）

しかし，「かたむける」は，びんなどの入れものをかたむけて，中にはいっているものを外に出す，という動作をあらわすのに用いられることがあり，その際，重点がうつって，びんをかたむけること自体よりも，中のものをとりだすために，そうするのだ，という方に重みがかかる。そうすると，「かたむける」際の角度はそれほど重要ではなくなる。

○栓を抜いて瓶を傾けると，きらきらとプリズムの光を放つてダイヤモンドは水のやうに流れ落ち，掌に盛り上つて行つた。（帰郷 58）

この例では，むしろ，水平の状態からさらに口の方を下げたことによって，ななめにしたことをあらわす。このような換ゆ的な表現は，特に飲みものを飲むばあいにしばしば用いられる。

○勘次は冷めた湯を幾杯か傾けた。（土・上 34）

この例では，単に湯のはいった器をななめにしてその器から液体がこぼれるようにしたにとどまらず，それを飲んだことをあらわす。かたむける角度は問題にならない。

「かしげる」については，ほとんどが「首をかしげる」という表現であるが，つぎの例は，入れものから液体をこぼすために，かたむけることをあらわしており，重点が移りつつあるものである。

○主婦(かみさん)が傾(かし)げた大徳利の口(こうつぼ)を玻璃杯に受けて，（破戒 231）

「たおす」はふつう垂直のものを水平にまですることをあらわす。

○杉の大木は西へ倒したのでづしんとそこらを恐ろしく撼(ゆる)がして（土・上 20）

○つづけさまに拳骨で頬をなぐりつけ，床の上に倒した。（真空地帯・上 39）

しかし，やはり，完全に水平にまでもっていかないで，ななめにする程度でも，「たおす」がつかわれていると思われる例がある。

○木谷は自分の前で曾田の背がまるくなっているのを感じて身体を前にたおした。（真空地帯・上 151）

この例では，どの程度の角度になっているのかは明らかでなく，水平にまでたおしたとも，そこまでいっていないとも，どちらにもとれる。

〔285〕 さめる＜ひえる

これらはどちらも温度が下がることをあらわす動詞だが，下がった結果としての温度がどのくらいになるかという点にちがいがある。すなわち「さめる」では，下がった結果が大体日常生活においてふつうである程度の温度であり，「ひえる」の方はこれよりも低いのが原則だ。これは，形容詞の「ぬるい」と「つめたい」にほぼ対応する。

ただし，「ひえる」の方は，もっと抽象的な使い方として，たとえば

○どうしたつて，地球が一年々々と冷えて行くんだから。（冬の宿 98）

のようなばあいにもいう。この例では，特に常温程度まで温度が下がるというような制限はなく，一般的に高い温度から低い温度に変化していくという抽象的な表現である。ちょうど「あたためる」に対して，「熱する」が，より抽象的，一般的な表現でありうるのと同様だ。しかし，「熱する」がふつうは「あたためる」よりも高い温度にすることをあらわすように，「ひえる」も，ふつうは「さめる」よりも低い温度にすることをあらわす。

○島村は汽車のなかのぬくみがさめなくて，そとのほんたうの寒さをまだ感じなかつたけれども，（雪国 13）

○表を歩いて体が冷えてゐたせいか，急に胸が悪くなつて頭へ来た。（雪国 145）

この2つの例をくらべると，「ぬくみがさめる」は，比較的あたたかかったのが，ふつうの温度にまで下がること，「体が冷える」は，ふつうの温度であるのが，ふつう以下に下がることをあらわしている。上の例で，汽車の中のぬくみがさめることは，もしその温度が非常に冷たいところまで下がるのであれば，「汽車のなかのぬくみが冷えきって」のように，いうこともできる。しかし，「体が冷えていた」は「体がさめていた」ということはできない。もし，そういったとすれば，それは，ふろにはいっていたかなにかで，からだがふつうよりもあつくなっており，それがふつうの温度にもどることをあらわす表現になる。

しかし，「さめる」と「ひえる」との間には，いつもこのような使いわけがあるとはかぎらない。たとえば，つぎの例では，どちらも，同じようなことをあらわしており，「ひえる」の方がつめたくなっている，ととれないこともないが，「さめる」と「ひえ

る」とを入れかえても大差はない。

○勘次は冷めた湯を幾杯か傾けた。（土・上 34）

○咲子は私の為に冷えた味噌汁を沸かし，飯を盛つてくれた。（冬の宿 33）

なお，「さめる」も「ひえる」も，どちらも温度が低くなることをあらわしているだけで，特にきもちの上での快・不快とは結びつかないようである。たとえば，「さめる」が，のみもの・たべものについてつかわれるとき，ふつうは

○さめたお茶を持ってこられて，沢田が行きなり怒りだしたことは（むらぎも 44）

のように，のみごろの温度よりもさらに下がることをあらわすのだが，

○飲み加減にさめたお茶と共にしづかに胃の腑に流し込んだ。（真知子・前 168）

のように，熱すぎたのみものが適度の温度まで下がることをあらわすばあいもある。

気温をあらわすには，

○雪の後でお天気になる前の晩は，特別冷えます。（雪国 13）

のように「ひえる」の例はあるが，「さめる」がつかわれた例はなかった。しかし，これも，たとえば夏のあつい気温が「夜になってさめてきた」のように，いえるばあいがあるかもしれない。お茶の水女子大生についての調査では，「日中は暑かったが，夜になってさめてきた。」という例文に対し，○—1，△—5，×—15だった。

〔286〕 さます＜ひやす

これについても，自動詞の「さめる」「ひえる」と，ほぼ同じことがいえる。「さます」は，

○熱い茶碗をさます間訊いて見た。（真知子・前 167）

のように，ふつうの温度よりも熱くなったものを，ふつうの温度にもどすことをあらわす。

これに対し「ひやす」の方は

○ビール壜に入れて，崖の湧き水に冷やしてあったのだから，（自由学校 199）

のように，ふつうの温度以下に下げることをあらわすことが多い。しかし，

○恭吾はカレエ料理で火のやうに口の中が熱くなつたのを冷す為に，麦酒に口をつけてゐた。（帰郷 80）

○氷で頭を冷やしても薬を与へても何の効果もない。（本日休診 113）

のように，そうでないばあいもある。これらの例では，もとの温度にもどればよいのであって，その意味では「さます」を使ってもよいはずだが，ふつう「本日休診」のような例では「ひやす」としかいわない。それは，このひやす手段が氷という，ふつうの体温よりもずっと低いものであること，そのため本当の目的はふつうの体温にもどすことであっても，一時的，部分的にはそれ以下に下がることもありうること，などのためかもしれない。おなじく，熱いからだの温度を下げることでも，たとえば，ふろにはいって熱くなったのを，夜風にあたって，もとの温度にもどるようにするばあいには，「さます」というだろう。

〔287〕 あたためる，あっためる＜熱する

「あたためる」「あっためる」は，そうあつくない温度にまで高めることをいう。

○ストーブの煙突を両手で握って，こわばった指をあたためた。(人間の壁・上 65～66)

○そして暖めたミルクを小さい口にあてがつてやつた。(波 144)

これに対し，「熱する」は，ふつう「あたためる」「あっためる」よりも高い温度にするばあいにつかわれる。

○アニリンをかけた真鍮の地金をアルコールランプの上で熱しながら(機械 16)

○ラードを熱して白菜を炒めます。(若い女性 1956年1月 198)

この料理の例に類した用例は，婦人雑誌などに数多くみられる。それらはみな「あたためる」というのには高すぎる程度にまで「熱する」ことである。しかし，たとえば，化学の実験などでは，わずかの熱を加えること，ふつうなら「あたためる」という程度に加熱することについて，やはり「熱する」を使うことができるだろう。つまり「熱する」の方は「あたためる」よりも範囲が広く，これを含んでいるといえるだろう。しかし，このことを示す適当な例はなかった。

○戦慄が軀を走るやうに覚えたのは，さう云つてしまつてからである。冷覚ではなく，皮膚を熱して快よいものであつた。(帰郷 343)

などでも，心理的なものであるという条件を別にしても，快く感じたのは，皮膚があたたかいというよりは熱いというのに近い感覚があったからであろう。なお「あたためる」「あっためる」について，温度がはっきり指定されているのは，おのおのつぎの1例ずつだった。「あっためる」はミルクのばあい，「熱する」は石油のばあいについての例だ。

○さうさう。人肩に暖めるんだつけ。(波 178)

○しかし，六十度以上に熱すると燃えます。(婦人生活 1956年12月 495)

〔288〕 (あたたまる，あったまる＜熱する)

「あたたまる」「あったまる」も，「あたためる」「あっためる」と同様，ある程度の温度，一般的には，人間の体温または人間のふだんの生活環境にみられる常温程度にまで熱を加えることをあらわす。

○毛布のなかは体温がたまって，あたたまっているようだった。(真空地帯・上 63)

○「(上略) 待つてて頂戴。いま，すぐあつたまるわ。」

彼女はミルクの瓶を銅壺の中にひたした。(波 179)

「熱する」の例としては，

○彼の濡れた体は熱し，頬はかつかとほてり，顱頂が烈しい鼓動を打つた。(潮騒 147)

のように，からだがあつくなることをあらわした用例しかなかった。そして，このようなばあい，たとえば

○お品は家に帰つて幾らか暖まつたがそれでも一日冷えた所為かぞくぞくするのが止まなかつた。（土・上 17）

とくらべれば，少なくとも心理的には，それよりも高い温度になることをあらわしている。すなわち「あたたかい」と「あつい」との間にみられるのに対応するちがいである。しかし，自動詞のばあいにも，より客観的，抽象的な表現としては，あたたまる程度の現象としても「熱する」がつかわれるものと思われる。

〔289〕 ぬれる／しめる

「ぬれる」は，「しめる」に対して，水分がより多く含まれた状態についていう。

○ハンケチは涙の為めにしぼる程濡れて丸まつてゐた。（或る女・上 192）

○コートも着ない私の袖は，ぐっしょり濡れてしまって，（放浪記 154）

のように「しぼる程」とか「ぐっしょり」とかいう修飾語がついていて，しぼれば水がしたたりそうなばあいには，「しめる」というより「ぬれる」の方が適当である。「しめる」程度ならば，空気中の水蒸気によってもありうるが，「ぬれる」には，雨がふるとか水の中につけるとかしなければならない。

○庭へ敷いてある庭蓋の藁も只ぐつしりと湿つて居る。（土・上 24）

は冬の朝の霜のためにしめったようすであるが，ここで「ぐっしり」という修飾語がつかわれていることは多少例外にもみえる。「ぐっしり」は「ぐっしょり」と同様に水分を非常に多く含んだ状態かとも思われるからだ。しかし，また，この一般にはあまりつかわれない副詞は，水気のために，わらがやわらかくなった状態，いわば「ぐったり」に近い状態を表現しているのだとも考えられ，そうみれば，「しめる」についてつかわれていても，おかしくない。もちろん，水分がどの程度含まれたばあいに「しめる」から「ぬれる」にうつるのかは，客観的な基準があるわけではない。上にあげたように，修飾語によってそのことが示されているものや，場面から判断して，明らかに一方としかとれないもの以外に，どちらでもいいものもある。たとえば，つぎにあげる例では，ほとんど同じような場面について「ぬれる」と「しめる」とがつかわれている。

「ぬれる」	「しめる」
○ジョバンニの汗でぬれたシヤツも（銀河鉄道の夜 258）	○朝から汗でしめっている着物の私は，（放浪記 136）
○そこへおしこんだ紙は，取りだしてみると水でぬれて（真空地帯・上 139）	○土のなかでしめった紙幣は夜の間に凍てついた。（真空地帯・上 137）

しかし，これらについても，やはり「ぬれる」は「しめる」よりも水分を多く含んだ状態で，たとえば「銀河鉄道の夜」の例では，しぼれば水がしたたる程度であり，「放浪記」のばあいはそれほどでもない，というようにとるのが自然である。

水分が多いかどうかということ以外に，「ぬれる」と「しめる」とでは，表面的かどうかというちがいもある。すなわち，「しめる」というのはある物質の内部に水分が含

まれる状態であり，「ぬれる」は，もちろん内部にまで通っていてもいいが，そのものの表面だけに水分がみられる状態にもつかわれる。木・紙・布・土など，割合に水を吸収しやすく，その内部に水分を含むことが多いものについては，「ぬれる」も「しめる」も両方つかわれるが，つぎのように比較的その内部に水分を含みにくいものについては，ふつう「ぬれる」がつかわれる。

○スチイムの温(ぬく)みでガラスがすつかり水蒸気に濡れてゐるから，（雪国 9）

○おくみは微笑みながら，皿のふちの濡れてゐるのを布巾(ふきん)で拭いた。（桑の実 74）

○雨に濡れたアスファルトの大通りは，人通りも少なく（くれない 109）

○いつのまにか束ねた髪や頬が雨に濡れてゐるのが，（冬の宿 162）

これらについて「しめる」といったとすれば，やはりこれらのものの表面に「ぬれる」よりも少ない水分がみられることをあらわすが，そういうばあいは少ない。

○湿つた路の面(おもて)に反映するカツフエーや酒場の色電燈が（つゆのあとさき 79）

これは銀座の大通りなどについていっているのだから，当然舗装された道であり，水分が内部にしみこむようなものではない。

○蛇の目の傘がしっとりと濡れたまま縁側に立てかけてあった。（放浪記 281）

という例で，水分の量が「しっとりと」と表現される程度に少ないにもかかわらず，「ぬれる」がつかわれているのも，表面を問題にしているからと考えられる。蛇の目の傘は，布で作った傘とはちがって，紙に油を引いたものであり，水気を含むことはない。してがって，それは表面が「ぬれる」ことはあっても，その紙自体が「しめる」というのには不適当である。

以上のことは，逆に，「ぬれる」がふつう使われずに，「しめる」と表現されるばあいを考えてみても，裏づけることができる。すなわち，

○遠く犬の鳴く声が断続して，湿つた空気の底を伝つて耳に届いた。（野火 113）

○湿った夕風の中に，法師蟬の声が，気忙しかった。（自由学校 117）

のように，空気についても「しめる」は用いられることが少なくない。

○丁度，この海岸の湿った部屋に寄り合っている今の状態で（くれない 116）

の「湿った部屋」というのも，へやを作っている材木やたたみなどの固体が水気を含んでいるだけではなく，そのへやの中にある空気がしめりけをおびていることをいっているのであろう。これに対して，「ぬれる」は，気体について使われることが，ほとんどない。これは，上に述べたように，「しめる」が，その物質の内部に水分を含むことをあらわすのに対し，「ぬれる」が表面にある水分の方を主として問題にしている，というちがいに関係があると思われる。気体であれば，当然表面ということは問題にならないからである。もっとも，水分の量の大小に関係があると考えられないこともない。「空気がぬれる」という例が1例だけあった。

○廊下も教室も，じっとりと空気がぬれて，重たくなっていた。（人間の壁・上 274）

このばあいには，おそらく，ふつう「空気がしめって」と表現する状態よりも多くの水分をふくんでいること，その空気にさわっただけで，からだがぬれそうに感じられるこ

とを，あらわしているのだろう。

〔290〕 そだつ，成長する，長ずる／としよる，としとる，としおいる，おいる＜（としをとる）

「そだつ」「成長する」は，人間・動物が一人前の状態に達するようになることをいう。

○私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので，（こゝろ 174）

○或る時内田はもう娘らしく生長した葉子の手を堅く握つて，（或る女・上 53）

ただし，これは，方向としてそちらを向いていればいいので，完全に一人前になりきることだけをあらわすのではない。たとえば，つぎの例では，まだ生まれていないこどもについて「そだつ」がつかわれている。

○若い母親が胎内に育つて動いてゐる子供を感じながら，（帰郷 187）

人間のばあい，単に生物学的な成長だけでなく，精神的な発達もまた，それにともなう。つぎの例などでは，むしろそちらの方に重点が移りつつある。

○子供たちは日々に成長する。先生がなまけているあいだにも，迷っているあいだにも，生徒たちは成長する。（人間の壁・上 85）

そして，完全に精神的なものについて，「成長する」がつかわれる例もある。

○あなたの誠実と，本気さは，あなたを何処までも生長させます。（友情 15）

このばあいには，生物学的な成長とは無関係であり，こどもからおとなに成長するだけではなく，生物学的にはすでに成長しきった段階でも，まだ精神的な成長はつづく。老人について「成長する」といってもかまわないのである。

なお，この類のものとしては，「そだつ」「成長する」のほかに「長ずる」がある。

○長じて「エルテル」や「ファウスト」を書くに当つては，（人格主義 163～164）

ただし，「長ずる」が成長する意味でもちいられたのは，これ1例で，あとは，

○かくまで私心（わたくしごころ）が長じてきてどうして立派な口がきけよう。（野菊の墓 33）

のように，精神的なものの発達についていった1例と，あとは「理論に長ずる」のように，すぐれているという意味でつかわれた数例があっただけだった。

「年とる」などはみな老人になることをあらわす。

○有名な喧（やかま）し家（や）の女隠居も年取つて，家風はいくらか弛んでゐた。（あらくれ 71）

○だんだん年寄って行かれる父上を（暗夜行路・前 190）

○この年老いた女教師の小さな告白を，（人間の壁・上 240）

○ところが，老いてますます気の強くなる親もあり，（厭がらせの年齢 294）

ここには，なるべく変化をあらわしているような例をあげたが，実際には，「年とった」などの形で，連体詞的に使われている例が多い。「わかい」に対立する形容詞がないため，そのすきまをうめているのである。

ついでに「年をとる」という連語の例をしらべてみると，「年とる」が老人になることをあらわすのとちがって，特にそのような到達点における年令の制限はない。若い時

代についても，老人の時代についても，文字どおり年をとる，年をかさねることをあらわすだけである。

○年をとるとそれがことに早く感じられるものだ。（出家とその弟子 110）

○老主人は，年をとつて，ひどく人生の寂莫を感じ出した。（田園の憂鬱 17）

などでは，老人になることをあらわしている。しかし，

○年をとつての後の考へから言へば，あアもしたらかうもしたらと思はぬこともなかつたけれど，当時の若い同志の思慮には何等の工夫も無かつたのである。（野菊の墓 37）

○俊ちやんも身体が丈夫でもつと歳を取つたら，屹度好きな女の人が出来るに違ひないわ。（生まざりしならば 209）

などでは，こども，ないし少年の時期から一人前のおとなになることを表わしている。

○こんな心持で年を取つて行く間に葉子は勿論何度も蹉いてころんだ。（或る女・前 49）

では，若い年代における変化をあらわしており（このとき主人公は25才である），

○六十を出たばかりの彼が急に十年も年をとつたやうに耄けた。（李陵 202）

では，年老いてからの変化をあらわしている。また，

○扇朝よりも女の方が年をとつてゐた。（末枯 22）

では，状態をあらわしているが，純粋に年令の差をいっているだけで，絶対的な年令がいくつくらいであるかは，問題にしていない。このように「年をとる」は「年とる」などにくらべるとずっと範囲が広いようにみえる。しかし，「年とる」などについても，もっと若い段階における変化をあらわす例がありうるのかもしれない。今回の調査で，「年とる」という表現は約40例であり，「年をとる」はその倍以上の例があったが，このことが「年とる」の範囲についてのかたよりを生んでいるかもしれない。仮にそうだとしても，少なくとも傾向としては，「年とる」が老人になることをあらわすのに用いられる，ということはいえる。

以上にあげた動詞は，みな植物についても用いられる。

○豆もあつた。灌木ほどの高さに育ち，鉈状の房が褐色に熟れてはじけ，（野火 53）

○草木は遠く遙に響けと鳴く其の声に撼られつつ夜の間に生長する。（土・上 76）

○この円覚寺の境内は，年とつた杉の大木が多い。（帰郷 123）

○角櫓の白壁と高い石垣と年老いてくねった松の幾株とは，（人間の壁・上 64）

○その老いた幹には，大きな枝の脇の下に寄生木が生えて居た。（田園の憂鬱 13）

また，上にのべたように，「そだつ」「成長する」は，人間が精神的に発達することをもあらわすが，人間を主体にするのではなく，そのような精神現象，または社会現象のように，抽象的なことがらを主体にして，その発達をあらわす用法もある。「年とる」「おいる」などの動詞には，このような例はない。

○生徒だけしか知らないあこがれが育っている。（人間の壁・上 157）

○新しい教育研究は，このような社会情勢のなかで，全国の良心的な教師たちのあいだに興り，成長して行った。（人間の壁・上 102）

「おとなびる」は，成人，「ふける」は，中年以上という制限がある。

○おつぎはもう十六である。辛苦の間に在る丈に去年からでは何れ程大人びて勘次の助に成るか知れない。（土・上 111～112）

○齢よりは十位老けて見えるがその実漸く四十になつた許りの（青銅の基督 12）

しかし，これらはどちらも実際に年をとるのではなくて，そのような状態にみえるようになることをあらわすものである。

〔291〕 ずぬける，ずばぬける，ぬきんでる＜すぐれる

これは，便宜上ここに入れたが，変化ではなく＜状態の程度＞である。

「ずぬける」「ずばぬける」「ぬきんでる」は，程度がひじょうにかけはなれて，すぐれていることをあらわす。

○皆さううまくはなかつた。一人一高の生徒が図ぬけてゐた。（友情 75）

○艶笑味たっぷりな最後の一篇（ヴィットリオ・デ・シーカ，ジナ・ロロブリジータ主演）だけがズバぬけている。（文芸春秋 1954年3月 324）

○イギリスを他に抜んでさせているその勤勉，（平和 1954年2月 24）

これに対して，「すぐれる」の方は，程度の限定がない。

○器用な性質なので，祭りバヤシの楽器は，一応，何でもコナし，腕も一番優れている。（自由学校 37）

のばあいには，ほかにくらべて「一番優れて」いるのだから，「ずばぬけて」いるのかもしれない。しかし，「一番」のように限定をつけうることが，そもそも「すぐれる」の範囲の広さを示している。「ずぬける」などだったら，特にすぐれているのだから，あらためて「一番」というような限定をつける必要はないのである。

○人間というものは，なぜだか知らんけれども，少しでも他の者よりすぐれていることを示そうとするらしい。（特集文芸春秋 1956年 赤紙一枚で 173）

のような例では，ほかに比べてわずかにすぐれているのであって，「ずぬける」などにおきかえることはできない。

5.4 結果の評価

〔292〕 なおる／こわれる，くずれる＜かわる

「なおる」は，いい方への変化をあらわす。いい方といっても，ふつうの水準よりも低いところにあったものが，正常な水準に達することをいうのである。おおくのばあいは，「病気がなおる」のように，もともとふつうだったものが，わるい状態におちいり，それがもう1度もとのふつうの状態にかえることをあらわす。しかし，いつでも，もとの状態への復帰をあらわすわけではない。

○「ホウ，作文が醐正(なほ)つて来た。」(破戒 309)

○これは直らない方だろう。ツォーグといっている。(むらぎも 32)

これらにあっては，はじめからわるい状態にあったのであり，それを「なおす」ということは，もとの状態へではなく，それがあるべき姿への変化だ。この<あるべき姿>というところに，つまり評価がはいっている。

○もんのやうな女はうんとやつつけてもそれで性根がなほるとか，悪たれ口に参つてしまふとかいふそんな生優しい代物(しろもの)ぢやないんだから，(あにいもうと 151)

このばあいにも，最初はまっすぐだった性根がまがったのだとすれば，もとの状態への復帰で，病気とおなじだが，はじめから性根がまがっていたのかもしれない。

「こわれる」「くずれる」は，現にある姿，(そして多くは同時にあるべき姿)から，よりわるい状態への変化をあらわす。もっとも，「こわれる」は，大体そういいきってまちがいないようだが，「くずれる」については多少問題がある。

○くづれた垣根の間から，広い地所内にはひつて行つた。(波 313)

のようなばあいには，あるべき姿からの変化だが，

○崩れた崖の上にとげとげと咲いていたあざみの花(放浪記 144)

○共同湯の屋根に落ちる雪の塊も，温かいもののやうに形が崩れた。(雪国 47)

などで，がけや雪のかたまりのあるべき姿というのは，すこしおかしい。このばあいには，現にある姿からの変化が問題なのであって，評価的な観点はあまりはいっていないかもしれない。

「かわる」は，いい方への変化もわるい方への変化もあらわす。

〈いい方へ〉

○見慣れたいろいろのものを見ると次第に心持が甘く明るく変つて行くのであつた。(青銅の基督 64)

〈わるい方へ〉

○私の周囲の空気は全く今までとは変わっていた。すべてが貧乏くさく下品だった。(暗夜行路・前 9)

もちろん，特に評価に関係のない変化をあらわす例もある。

○溝(みぞれ)は雪に変つて来た。(破戒 171)

○用意は赤十字の車を無駄に待つた一日の焦燥と一夜の熟考の後，決意に変つた。(野火 120)

〔293〕 なおる，もちなおす／ぶりかえす<もどる

「なおる」「もちなおす」は，病気がよくなることを表わす。

○向ふではもう病気は癒つたのかと不思議さうに聞くのです。(こゝろ 261)

○病気はメキメキと持ち直したが，一向，手紙もよこさない。(自由学校 102)

「なおる」は，けがのばあいにもつかわれる。

○腰や手足の打身はまだ直らず，(つゆのあとさき 103)

「もちなおす」は，単に「なおる」というよりも，ひじょうな重病から，ややよい方にむかったという程度のなおり方をあらわすのであり，したがって，ちょっとしたかぜ

やけが程度では「もちなおす」とはいわない。「なおる」も「もちなおす」も，病気のほかに社会的な状態についてつかわれることもある。

○そのうち景気が直つたら，一度温泉へでも来るさ。（あらくれ 218）

○つゆを過ぎると次第に持直し，値も安く，マグロ好きの堪能する時期となる。（オール読物 1956年10月 187）

これらの例も，わるい方から，いい方への変化をあらわしている。

「ぶりかえす」は「もちなおす」と逆に，病気がわるくなることをあらわす。

○しかし，ぶりかへすことなく病人の熱は下降しはじめた。（伸子・上 59）

これは，ふつう，病気以外にはつかわないようだが，例外としてつぎの 1 例があった。

○〝東郷ブラザース〟の名コンビが再びアメリカのプロレス界で人気をぶり返したが，（月刊ファイト 1956年3月 12）

これは，

(1)社会的な現象につかわれていること，

(2)わるい方から，よい方への変化であること，

(3)ふつう自動詞のはずなのに他動詞としてつかわれていること，

という 3 つの点で一般の「ぶりかえす」とちがっている。多分，誤用といってよいだろう。

「もどる」はよい方への変化もわるい方への変化もあらわす。

〈いい方へ〉

○火膨れの痕が直りましたらやがて元のお姿に戻られます（春琴抄 198）

〈わるい方へ〉

○さつきの酔ひが戻つたらしく眼を細めて（雪国 145）

もっとも，このばあい，上にあげた「なおる」「もちなおす」などとおなじ文脈の中でいれかえられる，というわけではない。「酔いがもどる」は「ぶりかえす」といえるかもしれないが，よい方への変化のばあいに，病気や酔いを主体にして，「病気がもどる」とはいえない。この点，「病気がなおる」「病気がもちなおす」といえるのとちがっている。

つぎの例は，もっと抽象的なばあいである。

○何となく元のあたたかい関係に戻ることができそうな気が（人間の壁・上 75）

○その笑ひはなんともいへぬ自己嫌悪の気拙さにまもなく戻つてくる。（冬の宿 160）

これらの例では「関係（気まずさ）にもどる」ともいえるし，逆に「関係（気まずさ）がもどる」ともいえる。

〔294〕 ひんまがる，ゆがむ＜まがる

ひんまげる，ゆがめる＜まげる

「ひんまがる」「ひんまげる」「ゆがむ」「ゆがめる」という動詞は，そのあらわす動作がおわったあとの状態に対する評価がはいっている。かたちが変化して，一層みに

くい状態になったばあいに，これらの動詞が，つかわれる。

○みるみるこの女の顔がこはれ出して，口も鼻もひん曲つて細長い顔にかはつてしまひ，（あにいもうと 152）

○突然思い切り歯を剝出して，いいツと顔をひん曲げた。（くれない 141）

○にやりとする毎（たび）に歪む其口元に（思出の記・上 127）

○白癡（ばか）は情ない顔をして口を曲（ゆが）めながら頭（かぶり）を掉（よ）つた。（高野聖 55）

「まがる」は，そういう評価に無関心であって，結果がどのようなばあいでもつかえる。

○彼女たちにとっては上等の眼鏡であった。それはいびつに曲って宙にとんだ。（くれない 28）

○西洋人らしくない，背の低い，指一本怪我で曲がらなくなっているこの男が，（むらぎも 177）

○男の子が私に口を曲げて「い，い，い。」といふ風をしてみせたが，（冬の宿 17）

○どんな男にも気に入られると知つてゐる柔かいしぐさで肱を曲げて左衛子は，髪に手をやり，（帰郷 39）

左側にあげた方の例では，変化の結果，みにくい状態になったのであって，これらのばあいには，「ひんまがる」「ゆがむ」などにおきかえられる。しかし，右側のばあいには，積極的にわるいという評価があるわけではないので，「ひんまがる」などでいうことはできない。

6. 意　　図

この観点からは，まず動詞を意志的な動作をあらわすかどうかという点で分類しなければならない。これは，主として動詞のムードの形のありなしを基準にして検討することができる。大別すると，つぎの3つになる。

(A)有情物の意志的動作

「よむ」「はしる」「わらう」など。大部分の動詞はここに属する。＜有情物＞というのは，つまりほとんどは人間だが，動物も，感情や理性をもったものとしてあつかうばあいには，ここにはいる。非情物のグループにはいるのは，植物・鉱物，抽象名詞であらわされる動作・性質・関係などである。

(B)有情物の無意志動作

「あわてる」「気づく」「おどろく」「こまる」など。これらはみな人間の動作についての表現である。しかし「あわてろ」とか「気づけ」とかいう命令形はない。「あわてよう」「あわてておく」などの意志的な意味をあらわすかたちもない。もし命令の「あわてろ」や意志・さそいかけの「あわてよう」がつかわれたとすれば，ややこっけいな意味をもたせて，わざとそんなかっこうをする，いかにもあわてたようなようすをしてみせる，ということになるだろう。（命令形がつかわれれば，希望をあらわすことになるかもしれない。）

(C)非情物の動き

「ながれる」「もえる」「おとろえる」など。これらは植物・鉱物・抽象物など，本来の非情物について，もっぱら用いられる動詞である。これらもやはり命令・意志・さそいかけなどの用法をもっていない。(A)としてあげた有情物の意志的な動作をあらわす動詞も，非情物の主体についてつかわれることがあり，そのばあいには，このグループの動詞とおなじことになる。このグループのばあい，命令形がつかわれれば，それは希望の意味に近づく。

○「天皇陛下様。大日本帝国様。何卒，家へ帰らして下さいませ。飛行機様。迎へに**来い**。オートジャイロで**着いてくれい**……暗いぞ」（野火 131）

この例では，「飛行機様」と書いてあって，ぎ人化した表現ともとることができる。しかし「春よこい」や「雨雨降れ降れ」という歌の例のようなものまで，すべて対象をぎ人化している，といいきることはむずかしい。むしろ「対象がこうなればいいが」という希望をあらわすのに近くなっている。希望は，相手が人間であるばあいにも，命令形であらわされることがある。

○釣り上がった口もと，それを囲んだ深いしわ，変に下品な印象を受けた。「早く行**け**」私は腹でそう思いながら，なお意固地に下を向いていた。（暗夜行路・前 8）

○肉親なんて犬にでも**喰われろ**と云った激しい気持ちになっている。（放浪記 295）

これらのばあいには，相手に直接命令しているわけではない。相手がそのような動作をとる，あるいはそのような結果になるのを，自分が希望していることを，あらわしているのである。相手が動物なら，非情物のばあいよりも，かなり命令的なニュアンスが強くなる。

○ポチ**来い**，ポチ**来い**と呼びながら，近くの原へ一緒に遊びに行く。（平凡 36）

さて，以上 (A) (B) (C) の分類で，1つの動詞がつねに1つのワクにはいるというわけではない。上にもいったように，主体がかわれば(A)にも(C)にもなるという動詞は多い。たとえば「あがる」は，

○ハシゴが立てかけてあって，女は，それに**上れ**と，眼で合図した。（自由学校 208）

のばあいには命令形をとっていて，主体は人間であるが(A)，

○ぬるぬるとした青い水草が一面に絡んで**上つて**来た。（田園の憂鬱 86）

では，水草が主体であるために命令形にはならない(C)。また，

○さ，沢山，おつぱいを**お上んなさい**。駿さん。（波 147）

では派生的意味であって，この意味でも命令形をもちうるけれども(A)，

○ところが岡山市で講演をした時などは，こっちはちっともあがっていないのに，野次が二階と下とで僕を黙殺して喧嘩をはじめた。（私の人生観 21）

のような派生的意味のばあいには，無意志動詞であって命令形をもちえない(B)。このように，意味のちがいによって意志動詞にも無意志動詞にもなるものの例を，つぎにあげてみよう。

〈意志動詞〉

○「はやく行け。」初年兵係は言った。（真空地帯・上 29）

○「悪い奴だ。こつちへ来い。」（波 325）

○ここの看板のある事務所へ安吉に移れという。（むらぎも 272）

○義ちやんが肩車をするから，登れ登れつていつたんで，（波 315）

○「よし，通れ。」（真空地帯・上 9）

○仲子は，「そつち向いて，そつち向いて」と（仲子・上 183）

〈無意志動詞〉

○演奏は申分なく行つた。（真知子・前 27）

○妊娠からくる食欲不振と脚気とで，（人間の壁・上 128）

○サルにしかうつらぬ病気がある。（高崎山 46）

○負傷者も既にかなりの数に上つてゐる。（李陵 159）

○厳格で通つてゐる米国人の老校長に，（或る女・前 10）

○彼は，運動部に向かないばかりでなく，（自由学校 11）

さらに，意志動詞が人を主体とする無意志的な動作をあらわすこともある。

○お前はこの頃，月に五つ位はものを壊すね。（田園の憂鬱 102）

○少年はあいまいにうなずいて，裸の小さな尻を見せて，引返して行った。（人間の壁・上 308）

だから，ここで意志動詞というのは，主として意志的動作にもちいられる動詞，と考えるべきである。

つぎに，ムードの観点からみて少数派である動詞，すなわち，

(B)有情物の無意志動作をあらわすもの

(C)非情物の動きをあらわすもの

にどんなものがあるか，ややくわしくみることにする。

(B)有情物の無意志動作をあらわすもの

これには，まず人間や動物の生理的な現象をあらわすものがある。

あおざめる，あせばむ，いたむ，うずく，うまれる，老いる，おとろえる，（病気に）かかる，かじかむ，こごえる，しばたたく，しびれる，しわがれる，すじばる，ただれる，血走る，つかれる，ねちがえる，ねむりこける，はげあがる，ひきつる，ほてる，まばたく，みごもる，むくむ，むせる，もよおす，やせほそる，若がえる，わずらう。

つぎに，心理的な生理現象とでもいうべきグループがある。たとえば，「うなだれる」という動詞は，頭を低くたれることをあらわす。しかし，そのような動作だけではなく，その背後には，落胆・かなしみなどの心理現象がある。このように，心理現象に裏打ちされた生理現象ないしは動作をあらわすものとしては，

あえぐ，あからめる，あざわらう，いきまく，うき足立つ，おののく，くずおれ

る，こみあげる，しゃくりあげる，すくむ，（胸を）ときめかす，泣きくずれる，泣きぬれる，涙ぐむ，ねつく，ねぼける，ふるえあがる，へたばる，むかつく，むせぶ，むつかる，もだえる，よっぱらう，わななく。

などがある。

つぎに，主体の心理現象をあらわす動詞がある。

あきる，あきれる，あせる，あなどる，あまったれる，あわてる，いきどおる，いさむ，いぶかる，いやがる，いらだつ，うかれる，うちとける，うぬぼれる，うろたえる，おこたる，おごる，おそれいる，おどろく，おびえる，おもいあがる，おもいこむ，おもいつく，かしこまる，かんぐる，感ずる，かんづく，気づかう，気づく，くじける，くやむ，くるう，こがれる，こだわる，このむ，こまる，こりる，こわがる，さげすむ，したう，しょげる，じれる，たかぶる，たじろぐ，たまげる，ためらう，だれる，ちまよう，つけあがる，てこずる，てれる，なじむ，なつく，ねたむ，のぼせる，はかなむ，はにかむ，はやる，はらだつ，ひがむ，びくつく，ひるむ，ふてくさる，まどう，まよう，みくびる，むさぼる，めいる，めんくらう，もてあます，やにさがる，よくばる。

「あぐむ」「ほうける」は，「まちあぐむ」「せめあぐむ」……「あそびほうける」「やみほうける」……ともっぱら接尾語的につかわれる動詞だが，これらもやはり無意志動詞を作るものといえる。

さて，以上にあげたもののうち，生理現象をあらわすものは，人間を，まだいわば非情物の水準でとらえているものとみられる。動物や植物についての動詞が無意志的であるのと，おなじレベルにあるものである。ところが，心理現象や心理的な生理現象になれば，単に生物一般のレベルではなくて，あきらかに有情物のレベルである。そして，これらの心理現象，心理的生理現象に特徴的なことは，命令形や意志形がつかわれない点でほかの無意志動詞と同列にあるにもかかわらず，禁止の用法があることだ。「あわてろ」「おどろけ」とはいわないが，「あわてるな」「おどろくな」とはいえる。もっとも，すべての心理現象についていえるかどうかは疑問であり，たとえば「気づくな」とか「このむな」などとは，ちょっと言いにくいようだから，この中でもまだわける必要があるだろうが，一般に，心理現象のばあいには禁止の表現がなりたつようである。

なお，ここにあげたもの以外にも心理現象をあらわす動詞はある。「よろこぶ」「くるしむ」など。これらには，「よろこべ」「くるしめ」という命令形がある。その意味では，意志動詞といってよいかもしれない。しかしこれらの命令形は，命令の意味として，ややかわっている。「よろこべ」といわれた相手がすなおに「はい，ではよろこびます」というのは，いささか間がぬけている。「よろこぶ」とか「くるしむ」とかいう心理活動が本当に主体の意志的な選択によって可能な現象であるかどうかは，うたがわしい。「よろこべ」という命令形も，非情物に対する命令とおなじように，実は相手に対する希望を，または「よろこんでいい」という許可や，「くるしむべきだ」という当為をあらわすもの，とみるべきかもしれない。この点については，もっと研究する必要

がある。

無意志動詞には，まだこのほか，いくつかの類型がある。それらをならべてみよう。まず本人にとって悪い結果をもたらし，本人が当然さけようとする動作をあらわす1群がある。たとえば紛失する意味の「(定期券を) おとす」などという表現がそれであって，本人がそういうことを，わざわざするはずがないのである。これらが無意志動詞であるのは，きわめて自然だといえよう。これらには，命令の表現はないが，禁止は，かなり多くのものについて，なりたつようだ。

あぶれる，あてられる，あやまる (よみあやまる，ききあやまる……)，いいおとす (かきおとす，ききおとす……)，かまける，いいそびれる，うしなう，かかずらう，おちぶれる，おぼれる，かいかぶる，かかりあう，かきそんずる (ききそんずる……)，ききわすれる (いいわすれる，かきわすれる……)，くいすぎる (のみすぎる……)，くいつめる，くちごもる，屈する，しくじる，しでかす，すりむく，そこねる，だしおくれる，ちがえる，つまずく，つんのめる，でかす，とちる，どもる，とりちらす，とりみだす，なまる，のがす，(みのがす，ききのがす……)，のめる，のりおくれる，はぐれる，ひまどる，まみれる，みうしなう。

偶然の結果そうなることをあらわすもの。これも無意志動詞であるのはきわめて自然である。命令も禁止も言いにくい。

つれあう，であう，できあう，となりあう，めぐりあう，ゆきあう，なれあう，いあわせる，ききあわせる，ききこむ，ききつたえる，つたえきく，でっくわす。

他人の意志によって左右されることをあらわす受け身的な動詞。やはり命令も禁止も言いにくい。なお，p. 685 参照。

いいつかる，こうむる，ことづかる，さずかる，とっつかまる，やけだされる。

「やけだされる」は受け身ともみられるが，「やけだす」という他動詞はない。

つぎに，道徳的にみて，わるい動作をあらわす動詞。

あくたれる，あてつける，いがみあう，いちゃつく，いなおる，いりびたる，いれあげる，うそぶく，うろつく，きめつける，しらばくれる，ずるける，たくらむ，だしぬく，たわむれる，でしゃばる，てらう，ふざける，ほっつく，もちくずす，わずらわす。

これらも，本人にとって悪い結果をあらわす動詞と同様に，禁止の表現はなりたつようである。

つぎに可能動詞的なもの。これも本人の力ではどうにもならないものである。

うかる，たすかる，つとまる，もうかる。

などは，可能の意味をふくむことが形の上ではっきりしている。このほか

ありつく，える，しおおせる，しこなす，とげる，得する，まぬがれる，みてとる，わかる。

など。これらの動詞については，命令・禁止とも言いにくい。

「ゆきつく」もこの類かもしれない。逆に，「みかねる」「待ちかねる」など，不可

能の意味をあらわすものもある。

つぎに，ことの経過を，客観的にながめて，動作の１段階をあらわすものがある。たとえば，「よむ」から出た動詞をとると，「よみかける」「よみかかる」「よみさす」などは無意志動詞である。このほか，「かわりはてる」「たちつくす」「出はらう」など。もちろん，「よみはじめる」や「よみきる」は意志動詞であり，動作の１段階をあらわすものすべてが無意志動詞だとはいえない。

以上にあげたのは，みな，いかにも無意志動詞であるのがふさわしいようにみえるグループだが，このほかにも，よく説明がつかないが無意志的に使われる，というものがある。たとえば，「もちはこぶ」という動詞は，「もちはこべ」とか「もちはこびましょう」とかいうことはなく，その点「はこぶ」が命令や意志のかたちをもっているのとちがう。これは「はこぶ」が具体的な動作をあらわすのに対し，「もちはこぶ」の方は抽象化し，一般化してあらわす表現で，特定のばあいの特定の動作をあらわすのではない，ということに関係があるのかもしれない。「あつかう」に対して「もちあつかう」も同様の関係にある。いずれにしても，このような動詞の分類には，文法的な事実としての命令・意志などのカテゴリーのくわしい調査が先行しなければならない。命令形があるかないか，ということは，最後には程度問題であって，どの程度不自然かということになってしまい，したがって意志動詞と無意志動詞との境界もあいまいになるが，もっとくわしい調査があれば，今よりもたしかなことが，いえるようになるだろう。

最後に，以上あげたのとはちがった種類として，文体的な制約からくるものではないかとおもわれるグループをあげる。たとえば，「はむ」という動詞は「くう」「たべる」と，「もだす」「黙する」という動詞は「だまる」とおなじ意味であって，意味上これらが命令形をとりにくいとはいえない。しかし，「はめ」「もだせ」「黙せよ」などの命令形，あるいは「はもう」「もだそう」「黙しよう」などの意志形は，事実上ほとんどあらわれないであろう。その理由は，これらの動詞がきわめて文語的なもので，日常の会話につかわれないこと，したがって相手に対する命令のような場面には，あまり出てこないことにある。

この類としては，

いならぶ，まみえる，ひさぐ，すなどる，つどう，あやめる，さしまわす，たちさわぐ。

などがある。「する」のついた多くの動詞，

死する，辞する，食する，製する，蔵する，談ずる，擁する，列する。

などに命令形がないのも，同様の理由によるものであろう。敬語の動詞「おおせつける」「のたもう」「くだされる」「ましまず」などに命令や意志がないこと，「死ぬ」は意志動詞だが「なくなる」「崩ずる」「薨ずる」「歿する」などは無意志動詞であることも，意味の面からも説明できそうだが，文体の問題もからんでいるかもしれない。

(C)非情物の動きをあらわすもの

まず，動物の動作をあらわすもの。

いななく，うみつける，はばたく。

これらは動物についての動詞であるが，理性をもったものとして人間なみに扱ってはいない。命令形がつかわれるとすれば，ぎ人化しているか，希望をあらわすかのどちらかであろう。

生物一般についてのもの。

しなびる，生ずる，育つ，なえる。

植物についてのもの。

植わる，おいしげる，さく，しげる，しぼむ，つぼむ，はえる，みのる。

社会的な現象。

うりきれる，ごったがえす，さびれる，出まわる，はやる。

自然現象。

秋めく，明けわたる，いきれる，いてつく，かおる，かがやく，かげる，かすむ，きらめく，けむる，こおる，したたる，しぶる，たちのぼる，たなびく，てりつける，てる，波立つ，ぬかる，はれる，ひあがる，ひえこむ，ひらめく，もえる，やけつく，わく。

抽象的な現象。

あてはまる，あまる，うわまわる，おしつまる，おわる，きまる，くいちがう，こじれる，さしせまる，さだまる，とだえる，ながびく，はかどる，はじまる，ぶりかえす，もとづく，やむ，ゆきづまる。

このほか，物理的な変化をあらわすものには，主として非情物を主体とするものが多い。ところで，ここに属する動詞は大部分が自動詞であるという点が注目される。すなわち，おなじような現象でも，非情物を主体としていうばあいには自動詞で無意志動詞だが，その現象をひきおこした人間の動作として表現すれば，他動詞で意志動詞になる，という例が多いのである。たとえば，

くずれる／くずす，こわれる／こわす，あく／あける，さめる／さます，たまる／ためる，ちぢむ／ちぢめる，流れる／流す，深まる／深める，ふえる／ふやす，広がる／広げる。

これらの動詞のばあいには，みな対応する自動詞は無意志動詞であり，他動詞は意志動詞である。この種の対はまだたくさんあるが省略する。他動詞でこのグループに属する動詞がないかといえば，多少はある。それはまず

○複雑多様のうちに統一を保った芸術的創作と見られよう。（哲学以前 147）

○敵の屍体は又しても数千を算したが，（李陵 161）

○バスやトラックが来るたびに，ヒヤヒヤさせられるし，時間もくう。（高崎山 19）

のように，関係をあらわす動詞である。つぎに，

○まことに悽惨（せいさん）な光景を呈した。（冬の宿 90）

○読者の間に物議をかもした問題作品で，（読切小説集 1956年4月 37）

のように，ある状態をひきおこすことを表わす動詞である。他動詞のあらわすものが，一般的には「はたらきかけ」だといえるとしても，これらの動詞は，ふつうの意味での「はたらきかけ」をあらわしているとはいえない。p. 684 参照。

つぎに，意志の面で特徴的な動詞の対を，つぎの 3 グループにわけて説明する。

1．主体の意図
2．相手の意図
3．目的

6.1 主体の意図

ここでは，動作が主体の意図にもとづくものかどうかを対立点とする動詞の対についてのべる。これらの対立において，marked なのは，あるばあいには意図的行為であり，あるばあいには非意図的行為である。すなわち，

A（意図的行為をあらわす動詞）
B（非意図的行為をあらわす動詞）
C（行為が意図的でも非意図的でもかまわない動詞）

とすると，対立の型は，

A＜C
B＜C
A／B＜C

の 3 つにわかれる。

6.1.1 意図的行為

まず，第 1 の型，すなわち意図的行為が marked であるものからあげる。

〔295〕 ばける＜かわる，なる，変ずる，変化する

「ばける」は，ほかの人をだます意図のもとに，自分のようすをかえることをいう。

○あの仁がばてれんの化けた者ぢやとしても，（青銅の基督 39）

ただし，主体が人間・動物・ばけものなど以外のものについても，臨時に「ばける」が使われることがあり，このばあいには，もちろん，非意図的である。

○正木　調書がちがったものに化ける……。
　江里　書かれたあとを見ると，そのときの取調べの状況がそのままに出ていないということも多いですね。（世界 1954年 5 月 172）

これに対して，「なる」「かわる」「変ずる」は，意図的なばあいにも，非意図的なばあいにも使われる。

〈意図的〉

○船長になって，七つの海をまわってみ｜

〈非意図的〉

○四年生になると，みんな彼女の手から

たかった。（人間の壁・上 120）
○加治木の五百助に対する態度が，ガラリと，変った。（自由学校 229）
○真昼の端正な「伎芸天」迄が妖艶，婀娜な姿に変じて燃える眼で彼を内から外へ誘ひ駆りたてるのであつた。（青銅の基督 20）
離れて行く。（人間の壁・上 14）
○先生の性質が段々変つて来たのは。（こゝろ 54）
○果は間を隔てて居ても，道を迷うた旅人は嬢様が思ふまゝはツといふ呼吸で変ずるわ。（高野聖 72）

「変化する」についても「かわる」などと同じく両方に使われると思うが，はっきり意図的と指摘できる例はなかった。多くは

○なにもかも，戦争がいけない。家が零落して，細君が働き振りを示し出したら，とたんに，迷惑な女性に変化してきたのである。（自由学校 130）

のように人間についても非意図的にかわるばあいである。

○マルクス主義者としてレーニンの日本訳の仕事を宰領するように変化してきてるのか？（むらぎも 114）

という例では，訳者が意図的に変化したことを表わしている，といえるかもしれない。

〔296〕 ひそむ＜かくれる

「ひそむ」は，具体的な動作・現象をあらわすときは，意図的な動作にかぎられる。

○敵勢は駈け下ればひと息にも斬り込める杉木立ちにひそんでいた。（落城 33）
○私が潜んでゐた家へ，彼が男と共に入つて来た，といふ偶然のため，（野火 86）

「かくれる」も，これと同じようなばあいにつかわれる。

○二度も三度も押入に隠れることは出来ないし，困つちやつた。（雪国 112）
○木谷はひとのかげにかくれてみていたが，（真空地帯・上 181）

しかし，「かくれる」は，人間の動作についても，意図的でないできごとにもつかわれる。

○見る見る高柳の一行は巡査の言ふなりに町の角を折れて，軈て雪山の影に隠れて了つた。（破戒 300）
○早朝から二三人の人夫が来て，その丘の縁にある栗の木らしいものを伐り倒しはじめてゐるのが霧の中に見えたり隠れたりしてゐた。（風立ちぬ 107）

このようなばあいには，「ひそむ」でおきかえることはできない。さらに，具体物についての表現であっても，もともと意志をもちえない，生物以外のものについてつかわれることもある。

○半ば諏訪山にかくれて禿鷹の頭のやうに見える真黒な丘を（青銅の基督 53）
○ホーキ星そのものは太陽の背面にかくれてしまうのである。（未知の星を求めて 326）

これらの現象は，もちろん，非意図的である。これも，「ひそむ」ではいえないようだ。ただし，抽象的な性質・関係などについて，すぐにわからないような状態にある，現象の背後にある，というようなことをあらわすときには，「ひそむ」でも「かくれ

る」でも，おなじようにつかわれる。

○五百助とは反対に，コチコチと，痩せて見える体格だが，あのすさまじい腕力が潜んでいると思うと，（自由学校 125）

○ボーアの理論に潜むこの内部的矛盾は，（物質世界の客観性について 273）

○幾枚も皮を被った古藤の心のどん底に隠れてゐる欲念を（或る女・前 41）

○ちよつとした脚の置き方や椅子のもたれ方がみな何処か隠れた性格の一部を現してゐるやうで，伸子はこの見ものを面白く感じた。（伸子・上 16）

〔297〕 すずむ＜ひやす（さます）

これらの動詞の用法のあいだには，かなり大きなちがいがある。「すずむ」は自動詞だ。

○毎夜毎夜寝苦しいお島は，白い地面の瘟気（いきれ）の夜露に吸取られる頃まで，外へ持出した縁台に涼んでゐたが，（あらくれ 27）

これに対して「ひやす」は他動詞である。

○サイダーをよく冷しておき，（小説倶楽部 1956年8月 79）

「ひやす」の対象が，このように自分のからだ以外のものであると（多くの例はそうなのだが），「すずむ」とまったくちがった現象をあらわす。しかし，いわば再帰動詞的に自分のからだにむけられるとき，それは「すずむ」に近づく。

○四十恰好の克明らしい内儀（かみ）さんがわが事のやうに金盥に水を移して持つて来てくれた。葉子はそれで白粉気（おしろいけ）のない顔を思ふ存分に冷やした。（或る女・前 59～60）

この例ではまだ水で温度をさげるので，ふつう「すずむ」が風にあたって温度をさげるのとはちがう。しかし，

○夜風にほてつた顔を冷やさせて，貞世を抱いたまゝ黙つて坐り続けてゐた。（或る女・前 74）

の例では，ほとんど「すずむ」といってもいいような場面につかわれている。

ところで，以上にあげた例は，「すずむ」にせよ「ひやす」にせよ，みな意図的に温度をさげようとある行為をすることをあらわしている。そして「すずむ」は，つねにそういう動作につかわれるのだが，「ひやす」はかならずしもそうではない。

○腰を冷やしたり，感情が激昂したりした後では，きつと収縮するやうな痛みを下腹部に感じてゐた。（或る女・前 189～190）

この例では，わざと「ひやす」のではなくて，本人にそのつもりがないのに腰がひえてしまうのである。

なお，「さます」も，自分のからだについていうことがあると思われる。「湯ざめする」という表現があることを参照。しかし，実例では，つぎのように自分のからだ以外のものの温度をさげるものしか出てこなかった。

○次にこの餅を一つに丸めて布巾に包み，そのまま水に浸けてすっかり冷まします。（婦人生活 1956年2月付録 家庭料理 434）

〔298〕 しとめる<ころす

「しとめる」は，つねに意図的に「ころす」ことをいう。

○椿の前に出た奴は，待ってましたと一発で仕留められたが，（文芸春秋 1953年12月 239）

「ころす」も，大部分の用例は意図的なものである。

○「あいつを殺して下さい。あいつは非国民です」っていふんだ。（野火 110）

しかし，「ころす」には，そのことを，はじめからねらってした，とはいえないばあいがある。

○カーリイはロウリイを救けおろし，犯人のジャッドと争って殺してしまった。カーリイは裁判にかけられるが正当防衛で無罪となった。（映画之友 1956年11月 114）

この例では，夢中であらそっているうちに「ころして」しまったのだから，本人には「ころす」ほどのつもりはなかったかもしれない。

○自分で人を殺したなら自分で責任をもつ，しかし他人が殺した責任をもたされてはたまらない。（友情 29）

この例でも，自分が意図的に「ころした」ばあいも，事故かなにかでまちがって「ころして」しまったばあいも，ふくんでいるものと見られる。さらに，「ころす」には，それが自分の責任であることをあらわすような例がある。

○全く私の不心得で，まだ三年や四年は生延びられる所をむざむざ殺して了つたやうに思はれてならなかつたから，深く年来（としごろ）の不幸を悔いて，（平凡 138）

○「おめえさん，子供があるかね。」

「いゝや。」

「ぢや話にならねえな。——己あ，三人あつたよ，三人。その内二人は病気で殺しちやつた。ところで……」（波 57）

○よもや，あの二頭があんなことをするとは思わなかった。いまさら怒つても仕方がない。大事な馬も殺してしまった。（週刊朝日 1956年6月17日 79）

これらの例においては，主体が意図的にその対象をころしたのでないことは，いうまでもない。逆に，それは主体の意図や希望にまったく反することなのだ。しかし，それがやはり「ころす」であらわしてあるということは，その対象である親や子や馬が死んだことが，自分の責任だというニュアンスをこめてつかわれているためである。子どもが病気で死ぬのは，自分がそうしむけたわけではない。おそらく親としては一生けんめい看病したのだろう。親は自分の責任を深く感じ，自分がもっと手をつくしていれば当然助かったはずなのに，という後悔の念にとらわれる。そのようなばあいに，親は，結果的には自分が積極的な殺人をおかしたのと同様だ，というようなニュアンスをこめて，「子どもをころした」というのである。

他動詞の「ころす」が，その他動詞性の具体化において，かならずしも積極的なはたらきかけを意味せず，主体の責任というかたちで具体化することについては，使役の用

法をも参照すべきである。使役というのは，つまり自動詞を他動詞にする1つの手段とも見られるが，これも積極的にはたらきかけてその動作を行なわせることだけをあらわすのではない。使役については，「死なせる」の用例をみても，＜積極的な使役＞＜放任＞＜許可＞など，どの説明をとるべきかまようものが多い。しかし，たとえばつぎの例などは，比較的今とりあげている「ころす」の例に近いものだ。

○彼等はその貴重な水を兜にいれて王に捧げた。王様だけは何としても死なせないという兵の心意気であった。（映画之友 1956年1月 131）

この「死なせる」も，積極的にはたらきかけているわけではなく，王が「死ぬ」ことが自分たちの責任であることをあらわしている。(p. 684 参照。)

「ころす」は，その主体が意志をもちえない生物であるときにも，つかわれる。

○其の身を殺した黴菌がどうして侵入したであつたらうか。（土・上 63）

○また，乳酸菌が腸内の雑菌を殺すから，（家の光 1956年7月 207）

このばあいには，まだその主体も対象も生物という範囲にとどまっている。しかし，それがさらに転じて，抽象的な主体が人間（生物）を「ころす」ばあいもある。

○彼等を殺したのはさうした彼等の不思議な意地張りだつた。（厚物咲 43）

○観念が絶対化されると，その観念がしばしば人間を殺すのである。ナチスの理論は，実際には無数の人間を冷酷無残に殺した。（ものの見方について 80～81）

これらにあっては，もちろん主体の意図ということはいえないし，主体が積極的にはたらきかけるということも，比ゆ的にしかいえない。思想が人間を「ころす」というのは，つまりその思想が原因になって人間が死ぬということの，ぎ人的な表現だ。

以上見たように，「ころす」は主体がつねに意図的，積極的にはたらきかけて相手を死にみちびくことではない。（しかし圧倒的な大多数の例がそういうばあいにつかわれていることは事実だから，基本的には意図的に死にみちびくことだといってもよい。）つぎの例では「しぬ」と「ころされる」を対比させてつかっている。

○然し僕はよく考へて，かう思ふんです。山田君はどんなに死にたくなかつたべか，とな。――イヤ，本当のことを云へば，どんなに殺されたくなかつたか，と。確かに山田君は殺されたのです。（蟹工船 88）

このばあい「ころされる」という表現が「しぬ」に対立してえらばれているのは，自然な事情で死ぬのではなくて，会社や監督に責任・原因があって死ぬのであること，さらにつっこんでいえば，かれらが意図的にころしたも同然であること，を強調したいためである。

主体の意図のありなしという点以外に，「しとめる」と「ころす」では，まだ，ちがいが見られる。辞典では単に「しとめる」の訳語として「ころす」をあげ，同義語であるかのようにしているばあいが多いが，例解国語辞典は，「しとめる」をつぎのように規定している。「弓・鉄砲などで獲物を撃って殺すこと。」すなわち，ここでは，第1に，＜弓・鉄砲などの飛道具でころす＞のだという手段の点，第2に，＜えものをころす＞のだという対象の面で，「ころす」よりも範囲がせまい，といっているのである。

そして，例解のあげている「鉄砲で猪をしとめる」というような例，あるいは，この分析の最初にあげた「(熊が) 一発で仕留められた」というような例においては，たしかに，この規定があてはまる。しかし，つねにそうでないことは，つぎの例をみれば明らかだ。

○「各々，かゝれ，かゝれっ！　これが新田長七郎だ。こ奴(いつ)を仕留めなくては，われわれ江戸を濶歩出来ないぞ」(小説倶楽部 1956年10月 147)

ここでは，手段は刀で切ることだし，対象は人間だ。したがって，例解のつけた条件は，どちらもあてはまらない。しかし，実をいうと今回の調査でえた「しとめる」の例は，わずか3例なので，例解の規定が「しとめる」の大部分の例についてあてはまるような，基本的な性格を規定しえているものか，あるいはよけいな条件にすぎないのかということまではいえない。すくなくとも，ふつうの辞典のように「ころす」と単純に同義語とすることも，例解のようにはっきり範囲をせばめてしまうことも，ともに問題だというところまでは，たしかである。

なお，「いとめる」は，手段の面では飛道具にかぎられるが，対象の面では，えものにはかぎられない。つぎの例では生物以外のまとについて「いとめる」がつかわれている。

○大助さん，あんたウィリアム・テルよ。首尾よく林檎を射とめてみせて。(面白倶楽部 1956年3月 419)

この点についても，例解国語辞典の「矢や弾丸をうまく命中させて捕える，殺す。」という規定(岩波国語辞典もほぼ同じ)は，やはりせまく限定しすぎている。

「ころす」と「しとめる」との関係については，なおつぎのようなことも考えなければならない。それは，「しとめる」の方が「ころす」よりも方法などの点でせまいとしても，はたして「ころす」は完全に「しとめる」の上位語だといってよいかどうかということだ。つまり，「しとめる」というためには，もう「ころした」状態になければならないだろうか，あるいは重傷をあたえて動けない状態においこめば，それでもう「しとめた」といえるのか，ということだ。この点については，例のすくなさもあって，はっきりしたことは何もいえない。おそらく大部分の例において「しとめた」ということは，「ころした」という段階まですすんだことを表わすのだろうが。

〔299〕 いじめる，いびる<くるしめる，いためつける

「いじめる」「いびる」は，意識的に相手を苦しめることをいう。(「いびる」は実例がなかった。)

○あんな人を本気にいぢめても可哀想だからよしといたの。(真知子・前 126)

「くるしめる」ということばは，意図的なはたらきかけも表わすし，本人はかならずしも苦しめようとする意図がないのに，そのふるまいによって客観的には相手を苦しめたことになる，つまり相手がこちらのふるまいによって苦しむことになる，というばあいにもつかわれる。

〈意図的〉

○あゝ妾貴方を本当に苦しめてやり度い。（青銅の基督 75）

○かういふ女を苦しめるには肉体に痛苦を与へるより外には仕様がないかも知れない。（つゆのあとさき 72）

〈非意図的〉

○此のやうな大事を惹き起しお師匠様を苦しめて自分が無事でをりましては（春琴抄 201）

○おれはだんだん年寄って行かれる父上をどういう事ででも苦しめるのは非常にこわいのだ。（暗夜行路・前 190）

「青銅の基督」や「つゆのあとさき」では，明らかに意図的な動作であるが，「春琴抄」や「暗夜行路」の例では，「苦しめる」主体として表現されている「自分」「おれ」は意図的に苦しめようとしているのではない。むしろ逆にお師匠様，父上に対しては，できるだけ苦しめまいとしているのだが，にもかかわらず，本人の不注意により，相手が苦しむ結果になることを，あらわしているのである。

このばあい，他動詞がつかわれていることは，積極的な＜はたらきかけ＞をあらわすのではなく，そのことについて主体が責任をおわなければならないこと，相手を苦しむままに放置したという点にこちら側の責任があることをあらわしている。この点については，「ころす」の説明（p. 432）を参照。なお，p. 684 も。

「いためつける」は，「いじめる」と同様，積極的な＜はたらきかけ＞をともなうことが多いかとも思われるが，実例には，つぎのように意図的，非意図的両方のばあいがあった。

〈意図的〉

○何とかして兵隊に行かずにすむ方法はないものだろうか，もしあったらそれをやろうと私がいったため，三人の中で罪は私が一等重く，ひどくいためつけられたのでした。（学園評論 1953年9月 64）

〈非意図的〉

○さき子は自動車に荒く揺られてゐる手負うた愛人の顔をじつと見詰めてゐた。すつかり傷めつけられて喋ることも出来なくなつてゐるこの生き物を，彼女は初めて自分のものとして眺めることが出来た。（闘牛 143）

「闘牛」の「傷めつけられて」という例は，だれか人間がはたらきかけたために「いためつけられた」のではない。状況が自分の計画をぶちこわすようにはたらいたために，具体的にいえば，雨が降ったために「いためつけられた」のである。したがって，「いためつける」主体を想定することもむずかしい。かりにその主体が「状況」なり「天候」なりだといってみても，それらの意図的な行為として「いためつける」がおこったのでないことは，いうまでもない。

つぎにあげる 2 つの例では，ともに「いじめる」と「くるしめる」が並べて使われている。

○その他，他人をいぢめる話，殊に肉体的に苦しめる話，之も実は腹の立つ話だ。（心 1954年5月 89）

○父親はときどき無理をいって息子を苦しめた。それは「いじめる」という形で平井の目に映った。（むらぎも 185）

雑誌「心」の例では，「いじめる」と「苦しめる」はほぼ同義語としてあつかわれ，「苦しめる」は単に「いじめる」をいいかえたにすぎない。しかし「むらぎも」の例では，「いじめる」と「苦しめる」が使いわけられたようなかたちで並んでいる。この「いじめる」は，ことさら意図的な動作として「苦しめる」と区別されているのであろう。「無理をいって息子を苦しめた」というだけの表現からは，父親が意図的に苦しめたともとれるし，そういうつもりはないのに客観的には苦しめたことになる，ともとれる。その両方の解釈の可能性がある事態について，平井にとっては，どちらかというと，意図的に苦しめているように，すなわち「いじめて」いるようにみえた，というのが，ここでの表現のもつ意味ではないかと思われる。（なお「いじめる」には自分よりもよわい者を苦しめるという限定があり，「苦しめる」にはそのような限定がない。このばあい，苦しめなくてもいい，よわい立ち場にあるむすこを，ことさらに苦しめている，という点でも，「いじめる」という表現がぴったりするように思えたのであろう。）

「くるしめる」が，意図的，非意図的両方に使われるということは，いつもこの両者がはっきりわかれている，ということではない。たとえば，つぎの例は，前後の関係によって，どちらにでもとれるであろう。

○嘉門はもう大びらに酒や女の話をしてまつ子を苦しめるのであつた。（冬の宿 51）

意図的な行為であるかどうかは，主体の広さにも影響をあたえる。すなわち，意図的な行為である「いじめる」「いびる」のばあいには，主体は人間（または動物）にかぎられる。これに対して，「苦しめる」のばあい，その主体は以下にあげるように人間以外のもの，現象，あるいは苦しむ当人の生活や精神状態など，範囲が広い。

○又は「水沢潟（おもだか）」等の雑草に苦しめられる耕作の経験から，（破戒 143）

○彼が直りかけて，うめき声が皆を苦しめなくなつた頃，（蟹工船 86）

○ああどうにも動きのとれない今の生活と，感情の落ちつきなさが，私を苦しめるなり。（放浪記 87）

○罪の思ひはまだ千代子の心を苦しめてゐた。（潮騒 150）

したがって，主体の範囲の広さという点でも「いじめる」などと「苦しめる」などとはちがうわけであるが，これは，意図的かどうか，というちがいからくる2次的な対立点だと思われる。「いためつける」主体が人間にかぎらないことは，上にあげた「闘牛」の例がしめしている。

6.1.2 非意図的行為

つぎに，最初に第2の型としてあげた，

B＜C

という対立，すなわち marked なのが非意図的な行為であるものをあげる。

〔300〕 くちばしる＜いう

「くちばしる」は，特に言おうというつもりがないのに，おもわずことばが出てしまうばあいにつかわれる。

○懲役が土を掘り石を運ぶ中を通ると僕は吾れ知らず**口走つた**，（思出の記・上 49）

これに対して「いう」は，ふつう，意図的になにかを話すことにつかわれる。しかし，なかにはそうでない例もある。

○「たわけめ」とひとこと吐きすてるように**言った**。（落城 22）

この例では，特に他人にきかせようとしたのではなく，おもわず口をついて出てしまったのであり，「くちばしる」におきかえてもよい。つぎのも同じような例である。

○「おゝ美しい顔！」と女は思はず**云つた**。（青銅の基督 70）

○娘は素直に鮨を手に受取ると，一口端を噛んだが，またしばらく手首に涙の雫を垂し，深い息を吐いたのち，「あたくし，辛い！」と**云つた**。（河明り 273）

〔301〕 たかる，むれる，むらがる＜あつまる

「たかる」「むれる」「むらがる」は，人々の状態が雑然としているばあいに，「あつまる」は，整然としているときにも，雑然としているときにも使われる。おそらく，このことと関係があると思われるが，「たかる」「むれる」「むらがる」は，非意図的である。すなわち人々は，あるものにたかろう，ある場所にむらがろうとするのではなく，結果としてそう表現されるような状態になるのである。「あつまる」はこれとちがって，意図的にあつまろうとしてあつまる，というばあいもある。

○丑松のことに就いて，**集つて**相談したい，といふ打合せが（破戒 302）

○これからも月一回は**集って**生活の向上について話しあいましょうと（農業朝日 1956年9月 91）

これらのように「～したい」「～しよう」という希望・意志の表現があるばあいには，「むらがって相談したい」とか「月一回はむらがろう」とかはいえない。

ただし，このちがいは，客観的な事実だけにもとづくものではなく，その事実をどのような側面からながめるか，ということによって生ずる。まったく同じ現象についても，人々の主体的な側面を考慮するかしないかで，「むらがる」といえたり，いえなかったりする。たとえば，

○この広場に**集まる**ことの出来ない東京の教師たちは，（人間の壁・上 333）

という例では，「あつまる」を「むらがる」にいいなおすことはむずかしい。「集まることの出来ない」という表現は，この主体である東京の教師たちの意図を表現したものだからである。一方この例文のすぐ前にある

○それだけの人数が**集まる**と，ひろい外堀公園もほとんど一杯であった。（人間の壁 上 333）

という文における「あつまる」は，「むらがる」といっても，それほどおかしくない。

このばあいには，その参加者の意図ではなくて，客観的な状態だけが問題にされているからである。

つぎの例で「あつまる」が「むらがる」におきかえにくいことも，この面から，説明できるかもしれない。

○しかし客は花壇の前よりは，広い庭の其処此処に設けられた模擬店の方へ熱心に集まつてゐた。（真知子・前 15）

「熱心に」は動作主体の精神状態をあらわすことばである。したがって「熱心にあつまる」ということは意図的にあつまることを意味しており，このような状態については，「むらがる」で表現するのは適当ではないであろう。ここで「熱心に」をとってしまえば，「むらがる」にいいなおしても，不自然ではなくなる。

なお，「たかる」が非意図的だというとき，それは，この現象を生じさせている群集全体の意識を問題にしているのであって，これに参加している個人個人の意識としては，むしろはっきりした目的をもった意図的行為である。ただ，その意図は，自分個人がそこへいきたい，ということにすぎず，大ぜいであつまりたい，ということまではふくんでいないのである。p. 459～461 参照。

〔302〕 ふきだす，ほくそえむ＜ほほえむ，わらう

「ふきだす」は，自分から，わらおうとしないのに，おかしなことをみつけて，おもわずわらいが出てしまうときにつかわれる。

○これには，三好も，思はず噴飯（ふきだ）して了つた。（多情仏心・前 44）

○私はその髯面（ひげづら）と，掌（てのひら）の五十銭玉とを見くらべながら，吹き出したくなるのをこらへていつた。（冬の宿 102）

この例のように，＜ふきだしたくなる＞ことはあっても，自分から積極的に＜ふきだそうとする＞ことはない。もし「ふきだそうとする」という表現がつかわれたとすれば，それは意志をあらわすものではなく，＜ふきだしそうになる＞ということをあらわすにすぎない。ムードの表現ではなく，アスペクトの表現である。

○その場の滑稽に思はず噴き出さうとしたが，（或る女・前 196）

「ほくそえむ」も，「ふきだす」と同じように，非意図的につかわれる。

○本人も一仕事したら，「アトリエと家をたてて……」と皮算用したりしてホクソ笑んでいたので，（芸術新潮 1956年8月 263）

現象としては，「ほくそえむ」は「ほほえむ」とほとんど同じようなわらい方を表わす。しかし，あとであげるように，「ほほえむ」が他人に対して積極的に示してみせる動作もふくんでいるのに対し，「ほくそえむ」は，自然にうかびあがってくるわらいだけに限定される。上の例が示すように，自分の利益になること，または自分の予想どおりにことがはこんだことを考えて，ひとりでにうれしくなってきたためのわらいが「ほくそえみ」である。

これに対して，「ほほえむ」「わらう」は，非意図的なばあいにも，意図的なばあいに

もつかわれる。

〈非意図的〉

○伸子は，思はずほほゑんだ。(伸子・上 54)

○それが可笑しくひとりで微笑みながら，(帰郷 87)

○生徒達は彼のうしろでよくくすくす笑つた。(波 325)

○そのたびに，左手の日本人教授たちが一列のままどっと笑う。(むらぎも 338)

〈意図的〉

○彼もてれ隠しにほゝ笑んで見せるより外はなかつた。(波 8)

○濃い白粉の顔で微笑まうとすると，反つて泣き面になつたので，(雪国 15)

○武子がそれに気がついて近づくとさすがに笑つて見せた。(友情 96)

○くつきりと浮び上つてゐる富士山を見ながら，大きな声で笑つてみた。(冬の宿 90)

上にあげた例からもわかるように，非意図的であることを示すのは，「思はず」のような単語のほかは，前後の文脈であって，特に積極的な文法形式がそれを示すということはすくない。しかし，そのような例が全然ないわけではない。

○離れて暮す広介への思慕も加わって微笑まれることもあった。(くれない 30)

この「ほほえまれる」というかたちは，非意図的なわらいであることを積極的に示している。「わらう」の方でこれにあたるかたちがあるとすれば，可能動詞の「わらえる」がそれにあたるかもしれないが，「わらえる」の中には，自発的なわらいをあらわす例はなく，みな可能のばあいをあらわすものだった。これに対し，意図的な動作であることを示すには，やはり上の例にあるように，「～てみせる」「～てみる」「～うとする」などのかたちがつかわれる。それらの文法形式があれば，ひとりでに，わらいがうかびあがってくるのではなく，他人にみせるためなどの理由で，積極的に意図的に外にわらいを表わそうとしているのだ，ということがわかる。しかし，また，特にそのような文法形式をともなっていなくても，文脈からみて，意図的なわらいであることが示されている例もある。

○「You are welcome」

と比島人は私の手にある銃を見ながら，卑屈に笑つた。(野火 18)

○祖父はだれよりもことさらに声高く笑い，そして私の頭を平手で軽くたたきながら「ばかだな」と言った。(暗夜行路・前 17)

これらの例で，わらいが意図的であることを示すのは，文法形式ではなくて，「卑屈に」「ことさらに」などの単語や，前後の文脈である。

〔303〕 みかける＜みる

「みかける」は，べつだん，みようとまちうけていないのに，ぐうぜんの機会で「みる」ばあいにつかわれる。

○其の弟をも，お島はちよいちよい見かけて知つてゐた。(あらくれ 15)

「みる」は，「みかける」と同じように，ぐうぜんのばあいもあるし，特にみようと

思ってみることもある。

〈ぐうぜん〉

○私が其掛茶屋で先生を見た時は，先生が丁度着物を脱いで是から海へ入らうとする所であつた。（こゝろ 7）

○列の中から伴子を見て，笑顔で挨拶した若い男があつた。（帰郷 298）

〈意図的〉

○さうして客に来た人のやうに鹿爪らしく控えてゐる私を可笑しさうに見た。（こゝろ 44）

○見てゐないやうでゐて伴子は冷静に恭吾を見てゐた。（帰郷 267）

なお，「みかける」の意味について，岩波国語辞典は，「目にとめる。道などで，時時見る。」と説明している。この「時時見る」という規定は，多くの例にあてはまる。上にあげたのもそうだ。しかし，つねにあてはまるとはいえない。つぎの例を参照。

○私はすぐにきのふ教会で見かけた，やはり独逸人らしい中年の婦人を思ひ浮べた。（風立ちぬ 155）

6.1.3 意図的／非意図的

つぎに，第3の型，すなわち

A／B＜C

のように，対立のなかに意図的なものも非意図的なものも含まれている系列の例についてのべる。

〔304〕 なくする／うしなう＜なくす

「なくする」は，意図的な行動についてつかわれる。

○いかにして虚栄をなくすることができるか。（人生論ノート 43）

○すなわちこの人の死を救わんとすれば，われわれはこれら二条件のいずれか一をなくすればよいのであるが，（貧乏物語 88）

これに対して，「うしなう」は，具体的にせよ抽象的にせよ，非意図的に，自分のものでなくなるばあいにつかう。

○蹄鉄を失って気をめいらせている曾田に（真空地帯・上 160）

○しかし流石に永年の友を失つた孤独に沁みて（厚物咲 44）

○教師であるところの彼女が，その指導力を完全にうしなって，どうすることも出来なかったのだ。（人間の壁・上 37）

一方，「なくす」は，意図的な現象にも非意図的な現象にもつかわれる。

○それとは反対に影から物の起ることもあります。それ故まづ影をなくすやうになされば，自然と物事は落つく処へ落ついて行くわけで。（つゆのあとさき 9）

○逆に，燃料の流出を止めたいときは，アルミ容器と浮袋のあいだのガスを放出して，浮袋にかかっている圧力をなくす。（人工心臓を体内に 369）

などの例では，意図的に「なくす」ことをあらわしている。また，

○スケッチ・ブックは先に内地へ送つたお蔭で，失くさなかつた。（帰郷 141）

○獄中で自信を失くすのは，決まってこういうときなのだ。（くれない 134）

などでは，非意図的に「なくす」ことをあらわしている。「なくする」と「なくす」とは，このように，活用のちがいに応じて，意図のありなしもちがっている。

これらが共通の活用形，すなわち連用形の「なくし」というかたちでつかわれたばあいには，どちらに属するか，まぎらわしいことがある。「なくし」が非意図的な現象をあらわすつぎのような例では，それを「なくする」の連用形と解釈することはできない。これらは，さきにあげた「うしなう」の例と同じような文脈でつかわれているから。したがってこれは「なくす」の連用形と解釈すべきものだ。

○なくした蹄鉄をみつけだすことはどうしてもできなかった。（真空地帯・上 154）

○二十すぎの頃父をなくしてからはまつたく思ふままにくらした。（冬の宿 18）

○一たまりもなく操縦の自由をなくしてしまつた。（蟹工船 43）

しかし，つぎにあげるように意図的な行動のばあいには，「なくす」「なくする」どちらの連用形と考えてもむじゅんはない。

○いつそ順々に生徒を詰めさせて，その穴をふさいでしまはうかとも思つたが，今まできぬ子のゐた席をなくしてしまふことは，何となく気がすゝまなかつた。（波 69）

○私は一度，この名前をこの世の中からほんとうになくしてしまいたいとさえ考えています。（放浪記 299）

〔305〕 であう，でくわす，ぶつかる，めぐりあう，ゆきあう／おちあう＜あう

「であう」「でくわす」などは，ぐうぜんに「あう」ことをいう。前もって約束しておいて，しかるべきとき・ところで「あう」ことにはいわない。

○相避けんとて歩むも林の回り角で突然出逢ふ事があらう。（武蔵野 18）

○安吉は斉藤肇のところで相田俊吉という詩人に出くわした。（むらぎも 244）

○何人か待つて漸くそこを出ると，意気な丸髷で，くろうとのやうな扮装をした辰子の友達にぶつつかつた。（真知子・前 136）

○出勤する途上に，毎朝邂逅ふ美しい女教師があつた。（蒲団 8）

○民子は其後僕の所へは一切顔出ししない許りでなく，座敷の内で行逢つても，人のゐる前などでは容易に物も云はない。（野菊の墓 11）

これに対して「おちあう」は，あらかじめ約束しておいて「あう」ことにつかわれ，「であう」などとはっきり対立している。

○佐多さんや畔柳二美さんたちと電話で連絡して落ち合い，（文芸 1956年3月 43）

一方「あう」はぐうぜん「あう」ばあいと，約束しておいて「あう」ばあいと，その両方にもちいられる。

〈ぐうぜん〉

○私と一所に卒業したなにがしに会つた。彼は私を無理やりにある酒場へ連

〈約束して〉

○九月になつたらまた貴方に会はうと約束した私は，嘘を吐いたのではありま

れ込んだ。（こゝろ 98）

○「あなたにお逢ひ申してから僕もシカゴに行きたくなつてしまつたんです」（或る女・前 141）

せん。（こゝろ 286）

○でも先方で会ひたいと云ふのなら会つてあげてもいゝから，（或る女・前 147）

ただし，「あう」が，いつもこのように，はっきりわかれるというわけではない。どちらかはっきりきめにくい例，どちらかをせんさくすることが無意味な例もある。

○私は長く兄に会はなかつたので，又懸け隔つた遠くに居たので，（こゝろ 137）

○「又会ふ事があるだらうか」葉子はそゞろに不思議な悲哀を覚えながら心の中でさう云つてゐたのだつた。（或る女・前 22）

これらの例では，約束してあうにせよ，ぐうぜんあうにせよ，とにかく「あう」という結果になることだけが，たいせつなのだ。

以上の説明について，例外となるのは，「であう」のつぎの例である。

○三つの郡を代表してやってきた農民が出会って，今後仲よくやってゆこうという誓いから始まったという謂わゆるスイス盟約国で，（ものの見方について 198）

このばあいには，わざわざ，各地を代表して相談に集まったのだから，ぐうぜんではない。その意味で，これは上の説明とあわない。例外となるのはこれ1例なので，これがどのような意味をもつのか，あきらかでないが，「であう」には，またつぎのように，ぐうぜんか約束の上でのことかが，あまり意味をもたない例もある。

○逢つたたび気まづい思ひをさせられる彼にいつまた出逢ひたいとも感じなかつた。（真知子・前 66）

○女と女と出会つて，すぐ探り合ふあの鉤針のやうな何ものもない。（河明り 246）

このような点で，「であう」は，ぐうぜん「あう」ことをあらわすグループのなかでは，もっとも「あう」に近く，ぐうぜんさを表現するという観点がうすれているようだ。しかし，「あう」のように，その観点をまったくすてている，ということはむずかしいだろう。つまり，さきにあげた「ものの見方について」の例は，やはり現在のところ，例外とよぶべきものだろう。

6.2 相手の意図

ここでとりあげるのは，動作の相手が一定の意図をもっていて，動作がその意図にそって，あるいは逆にその意図に反しておこなわれるような種類のものである。この第6章で問題にしているのは，全体として動作主体の意図であって，相手の意図というのは，これとまったく質のちがうものである。しかし，この種のものをどこであつかうべきか，あきらかでないので，便宜上ここにいれた。

6.2.1 意図の尊重

まず，相手の意図にそうことが条件である動作の例。

〔306〕 かくまう<かくす

「かくまう」という動詞は，その対象である人が，自分からすすんで「かくまわれたい」という希望をもっているばあいにつかわれる。

○母親のような恩情を傾けて，高杉をかくまってくれた望東尼は，（サンデー毎日 1956年12月9日 28）

「かくす」という動詞では，そのような条件は必要でない。

○どうか隠してくれと彼は土蔵へ入れて貰つた。（土・上 140）

では，かくされる本人がそれを希望しているのだから，「かくまってくれ」とおきかえることができる。しかし

○伴作も，しかと，かくしてあるだろうな。伴作と姫と，この二人をおとりにつかって，法外な金で売りつけるのだ。（小説と読物 1956年11月2日 242）

では，「かくす」と「かくまう」とはおきかえられない。伴作と姫とは，ともに本人の意志によらずに，むりやりつかまえられて，かくされているからである。

上には「かくまう」「かくす」ともに相手が人間である例だけをあげたが，「かくまう」が人間だけを対象とするのに対し，「かくす」は人間も動物もものも広く対象とする。このことと，今のべた相手の意志の有無とは関係があるであろう。すなわち，「かくまう」は相手の意志を尊重するときにつかわれるので，当然相手が人間にかぎられ，「かくす」はそのような条件がないので対象が広いのであろう。このように，人間ともの，あるいは，生きものともの，というあいだで線が引かれるばあい，実は，それはもっとほかの理由によって区別されるべき動詞であって，その結果として，あるいは現象形態として，人間とか生きものという特徴が表面に出ている，とみられることが多い。

「かくまう」と「かくす」とでは，同じく人間を対象とし，しかも相手にその希望があるばあいでも，まだ重点のおき場所がちがう。すなわち「かくまう」は，その人が，だれかにおわれているような状況下で，これを保護する，というニュアンスがある。人にみつからないようにする，というのも，保護することの1つの側面である。一方，「かくす」の方は，これとちがって，人から見えなくする，ということに重点があり，保護するという点はどうでもよい。このことが，また本人の意志を尊重するかどうかに関係をもっているものと思われる。本人の意志に反して「かくす」ようなばあいには，当然，保護するとはいえないからだ。つぎの例では，このような点での「かくまう」と「かくす」のちがいが比較的はっきり出ている。

○「長老は来られましたか。」

「えゝ，実はもう七日程前から私の処におかくまひしてあつたんです。私は是非貴方に一度あの長老を見せたかつたんです。」

「しかしよく天草から無事に渡つてくる事が出来ましたね。」

「熱心な信者の船頭がうまく隠してお連れして来たんです。（青銅の基督 83～84）

つぎの例は，いわば自分で自分を「かくまう」ことになるので，「かくまう」の例と

しては，やや異例に属するといえるかもしれない。「かくす」ならば，まったく自然な文脈である。「かくまう」を使うと，かくまっている自分と，かくまわれている自分とが，あたかも独立の主体であるかのような印象を与える。

○葉子は思はず羞恥から顔を赤らめて，引き出した派手な浴衣を楯に，しだらなく脱ぎかけた長襦袢の姿をかくまひながら立ち上つて振り返つて見ると，それは船医だつた。（或る女・前 95）

〔307〕 つのる，募集する＜あつめる

「つのる」「募集する」は，相手が自発的にそれに応募するばあいにいう。

○それからクラブ活動の希望者をつのり（人間の壁・上 93）

○農村と近代工業とを結びつけるという名で労働者を募集した。（むらぎも 49）

つまり相手の意志が尊重されているわけである。これに対して，「あつめる」は，「つのる」と同じようなばあいもあるし，そうでないばあいもある。

○そして，かういふてんでんばらばらのもの等を集めることが，雇ふものにとつて，この上なく都合のいゝことだつた。（蟹工船 16）

○近郷近在から，三十人に近い石工が蒐められた。（思譽の彼方に 80）

これらの例では，労働者や石工が募集に応じて「あつまる」のであって，行きたくなければ，いかなくてもよかったはずだ。このような例では「あつめる」を「つのる」「募集する」におきかえることができる。ところが，つぎの例では，そういかない。

○私は結核患者のみ集めた病棟に隔離され，（野火 166）

○長欠児童だけを集めたクラスを造って，（人間の壁・上 282）

これらの例では，結核患者や児童の意志は，尊重されていない。かれらが，あつまりたいという意志をもっているか否かにかかわらず，「あつめて」しまうのである。このようなばあいには，「募集する」とはいえない。結核にかかっているとか，長欠児童であるとかいう一定の条件をそなえているものは，すべてあつめられるのだ。「あつめる」についていえば，上のように人間を「あつめる」例は一部分にすぎず，多くは，むしろものを「あつめる」例である。

○土民の畠から芋やバナナを集めて来た。（野火 9）

このようなばあいには，「つのる」「募集する」にかえることは，もちろんできない。したがって，現象的には人を「あつめる」のが「つのる」「募集する」で，人でもものでもよいのが「あつめる」だ，というちがいが，なりたちそうにみえる。しかし，それは，相手の意志を尊重するかどうか，というちがいの結果として出てくる対立点にすぎない。実は，人間以外のものについても，「つのる」や「募集する」が，つかわれることがある。「つのる」には適当な例がなかったが，「募集する」にはつぎのような例があった。

○懸賞募集した闘牛大会の歌の選が発表になると，（闘牛 111）

このばあいにも，「募集する」は「（懸賞で）あつめる」といいかえることができる。

そして，そのばあいにみられるちがいは，人間を「あつめる」のと同様に，「つのる」「募集する」が，自発的な意志にもとづき，「あつめる」は，かならずしもそうではないという点である。この当然の結果として，「つのる」「募集する」の対象は，人の持ちものにかぎられる。「あつめる」対象は，人の持ちものでもいいし，また自然に落ちているものでもいい。上にあげた「野火」の例でも，いもやバナナには一応持ち主がいたはずだが，かれらは逃げてしまっているだろうから，「つのる」対象にはならない，といえる。

「つのる」「募集する」と「あつめる」のちがいは，また，「あつめる」の方が空間性が強いという点にある。「つのる」「募集する」は，一定の資格・条件にあう人たちをえらんで，それに新らしいしごとをあたえたりするばあいに使うことばであるが，空間的に一定の場所にあつめる，ということは，あまり重要な条件ではない。だから，「～につのる」「～に募集する」という，集合地点をあらわす目的語はつかない。「あつめる」では，つぎのように，その集合地点があきらかに示される。

○障子襖を取り払つた広間に家来を集めて，鉦太鼓(かねたいこ)を鳴らさせ，（阿部一族 61）

○残った藩士たちを山麓の西山村の杉木立ちにあつめた。（落城 39）

6.2.2 意図の無視

つぎに，相手の意図に反する行為であることを積極的にしめしている動詞の例。

〔308〕 すっぱぬく，ばらす＜しらす，しらせる

「すっぱぬく」「ばらす」は，他人が秘密にしていること，知られたくないと希望していることを第三者に知らせてしまうことをあらわす。

○何時私の事を食卓でKに素(す)つぱ抜かないとも限りません。（こゝろ 264）

○「染，お前，だれかにもうその話をしたか……」曾田はもしこの事実がばらされた場合，安西がどのような処分をうけるかと考えると，（真空地帯・上 220）

「しらす」「しらせる」には，そんな限定はない。

○今さらに母上のそういう過失を世間に知らして，今，ようやく老境へ入られようとする父上にまた新しく苦痛を与える事が（暗夜行路・前 189～190）

○或はまたそのような木谷がどうして花枝のような女に軍の機密を知らせる必要があったのか。（真空地帯・上 227）

などでは，「すっぱぬく」「ばらす」とおなじように，他人が知られたくないとおもっていることを知らせることをあらわす。しかし，多くのばあいには

○委員会制による民主的な運営方針が決定された。その結果は数十人いた宇宙線研究者全員にすぐ知らされた。（物質の根源と宇宙を結ぶ 117）

○自分もばたばたと洗面場に駆け込み，隣りの夫に皆んなが帰つて来たことを知らせて，硝子戸越しに叫んだ。（真知子・前 163）

のように，別段秘密にしているのではないこと，むしろ本人や関係者も知らせてほしい

とおもっていることを知らせることをあらわす。

〔309〕 ばれる＜しれる

このばあいも，「ばらす」と「しらせる」とにみられるような関係がなりたつ。すなわち，「ばれる」は，その関係者が知られることを希望していないことが知れてしまうことをあらわす。

○不幸な身の上の姪をやもめの叔父が引きつけて，もしそのことがばれれば一家親類からも世間からも葬られてしまいそうな瀬戸ぎわへ来て，（むらぎも 191）

これに対して「しれる」は限定がない。

○かえで　お師匠様には知れはしなくて。
　唯円　えゝ。（不安そうな顔をする）（出家とその弟子 127）

○彼は襲子のことと聞いてぎよつとした。もうあのことが知れてゐるのだらうか。（波 279）

などの例では「ばれる」と同様に知られるとこまることをあらわしているが，

○運転手が，警笛を鳴らしたから到着は知れてるわけだが（自由学校 93）

○一見して病人であることが知れる。（本日休診 110）

などは，別段こまることではない。

〔310〕 （あばく＜しる）

「あばく」ということばは，ふつう「すっぱぬく」や「ばらす」とおなじ意味に解釈されている。たとえば岩波国語辞典では「他人の秘密を，さぐり出して発表する。」と規定している。しかし，この規定には疑問がある。というのは「すっぱぬく」や「ばらす」は，たしかに＜しらせる＞ことだが，それに対して「あばく」は，かならずしも第三者につげしらせなくてもよいのではないか，とおもわれるからだ。

○勘次は何だか隠事でも発(あば)かれたやうに慌てていつて（土・上 159）

○「たゞ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」
　「私の過去を許(ゆる)いてもですか」（こころ 85）

これらの例で，「あばく」という動詞は，秘密を第三者にしらせる，公表するという意味にとる必要はない。直接的には，その「あばいた」主体に知られることがつまり「あばかれた」ことである。したがって，これらの「あばく」の上位語としては，むしろ「しる」の方が近いのではないかとおもわれる。もっとも，「しった」上で公表することが多いことは事実だろう。

「しる」の方でも，たとえば，

○おれも今度初めて知ったが，お前のもらった金は，あれはすべて，芝のお祖父さんから出たものだそうだ。（暗夜行路・前 227）

○何故なれば，先生が之を知つたなら，先生と私との今までの関係は必断滅するだらうと思つたからです。（つゆのあとさき 103）

などの例は，相手が知られたくないようなことについて知ることをあらわしている。ただしこれを「あばく」におきかえても，ぴったりしない。というのは，「あばく」は意図的な行為であって，わざわざそれを知ろうと努力した結果知るのであるのに対し，「しる」はそうとはかぎらないからだ。その点では「あばく」は「しらべる」に近いともいえる。しかし，「しらべる」は新しい知識をえる，という結果に達しなくてもよい点で「あばく」とちがう。

〔311〕 しいる／すすめる／しむける

これらの動詞は，みな，相手に何かをさせるように，はたらきかけることを表わす。そして，相手の意志をどの程度尊重するかという点，したがって，相手にどのようにはたらきかけるか，という点にちがいがある。「しいる」は，相手の意志を無視した形ではたらきかけることをあらわす。

○無理々々に強ひられたとは云へ，嫁に往つては僕に合はせる顔がないと思つたに違ひない。（野菊の墓 53）

「すすめる」は，これに対して，相手の意志を尊重しており，相手が自発的にその動作をとるよう，はたらきかけることをあらわす。

○叔母が病気で手が足りないといふから私が勧めて遣つたのです。（こゝろ 289）

このようなちがいは，当然そのはたらきかけ方にもあらわれる。「しいる」のばあいには，かならずしも，ことばによって相手にはたらきかけるとはかぎらない。むしろ，言語活動以外の，より物理的な力によって，あるいは社会的な制裁によって，相手を一定の行動にみちびくのである。これに対し，「すすめる」は，もっぱら言語活動によって相手の意志がかわるようにはたらきかける。

「しむける」は，これらのどちらともちがう。すなわち，この動詞は，相手の意志に反することを，むりやりおしつけるのではない，という点では「しいる」とちがう。しかし，また，相手の意志に直接はたらきかけるのではなく，相手がそういう行動をとらざるをえないような客観的な情勢を作りだすようにはたらきかけるのである，という点で，「すすめる」ともちがう。形式的には相手の自発性を尊重しているが，客観情勢の変化によって，形式上自発的な意志の実現として，相手の行動が行なわれるようにするのである。

○私に力が無いのですもの。また皆が私にそうあきらめさせるように仕向けるのですもの。（出家とその弟子 129）

○どうだ，別れようじゃないか。……おれの方から求めているんじゃない。お前がそういう風に，仕向けてくるんだ。（人間の壁・上 296）

「出家とその弟子」の例では，直接すすめること，相手に対して，あきらめなさい，とことばでいうことも「しむける」ことの一部分であるかもしれない。しかし，具体的にはどのような行動であるか明らかでないが，ことばによるすすめ以外にも，あきらめることを決心するようにしている行動はあるはずだ。たとえば，まわりのものが冷たくあ

たる，など。「人間の壁」の例では，ことばによって直接相手の意志にはたらきかけること，わかれるようにすすめることは，明らかにこの「しむける」の中にふくまれていない。相手（このばあいには夫）に対してつめたい態度をとることによって，夫の方から自発的にわかれるという行動をとることを期待しているのである。上の例は，どちらも，相手にとって本来の意志に反し，利益にならないような行動をとらせるのである。そのかぎりでは「しいる」に近い。これらの文脈で「しいる」といっても，不自然ではない。しかし，「しむける」が，つねにこのように，当人の本来の意志や利益に反する行動をとらせることに，かぎられるわけではない。

○気むづかしやの春琴が佐助に対して突然斯かる温情を示したのは何故であつたらうか実は春琴の発意ではなく周囲の者がさう仕向けたのであるともいふ。(春琴抄 157)

○小さい時から母親がさう仕向けてくれたので，「たんぽぽ」の店が開かれなくとも，いつか，自分で始めたいと夢みてゐたものである。（帰郷 170)

これらにあっては，むしろ当人の利益にかなっているのである。したがって，「しいる」におきかえることはできない。ここでも，相手にことばで直接そういう行動をとるように「すすめた」わけではない。まわりのものがことばで説明するかわりに，自然にそういう行動をとるような状況を作りだしていったことが，「しむけた」ことである。

〈注〉 例解国語辞典は「しむける」についてつぎの3つの意味を区別している。

① 他人にある動作をしかける。

② 他人が物事をする気持になるようにする。

③ 商品を先方に送る。

ここでとりあげた「しむける」は，例解の第2番めの意味にあたる。この第1の意味と第2の意味とをはっきり区別したこと，とくに，第2の意味をこのようなかたちで規定したことは，例解の特色であって，ほかの辞典にはみられないようだ。この第1の意味と第2の意味とでは，動詞の自他がちがうのではないかとおもわれる。一般に，自動詞と他動詞とを区別している辞典では，「しむける」は他動詞になっている。そして，第1の意味では，たしかに他動詞としての用法がある。

○さうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。（こゝろ 254～255)

○その時十九だつたが，既に幾人もの男に恋をし向けられて，（或る女・前 10)

第3の意味も，当然他動詞とおもわれるが，これは実例がなかった。しかし，ここでとり上げたような第2の意味については，ふつうは「～するようにしむける」というかたちでつかわれるのであって，「～をしむける」という例はなかった。全体で10例ほどしかないので，あまりたしかなことはいえないが，第2の意味では「～をしむける」といえないようである。

6.3 目 的

ここでとりあげる動詞は，みな意図的な行為をあらわす。その点では「6.1 主体の意

図」のところで

A＜C

という形であらわしたものにちかい。ただ，「6.1」のばあい，対立がもっぱら意図的であるかどうかという点にしぼられていたのに対し，「6.3」ではその意図の具体的な内容が問題になる。たとえば，「ひそむ」は，「かくれる」に対しては，つねに意図的だという点で対立しているが，その意図の内容，すなわち目的の点では「かくれる」と同じである。この対立は「6.1」でとりあげた。一方，「こもる」も意図的行為だが，その目的が「ひそむ」とはちがっている。この「こもる／ひそむ」のような対立を「6.3」では記述の対象とする。

〔312〕 ふみこむ／はいる

「ふみこむ」の意味をどのようにわけるかはむずかしいが，いま，一応，広辞苑（第1版）にしたがうと，つぎの3つにわかれる。第1は「ふんで落ちこむ」「ふんで深入りする」という文字どおりの意味である。これは，つぎのような例にあてはまる。

○そして遂に靴が泥だらけになると，もうどんな泥の中にも踏みこんで平気になつて了ふ。（青銅の基督 35）

これは，直接的には具体的な動作をあらわしている例文だが，実は全体として抽象的なことに対する比ゆになっている。つぎの例では，もっとはっきり比ゆのかたちをとっている。

○彼はこんどの失敗によつて，闘牛といふ事業の持つ不思議な魅力の深沼に，さらに一歩深く踏み込んでゐる形だつた。（闘牛 145）

さらにつぎの例では，完全に抽象的な表現だが，第2，第3の意味かもしれない。

○しかし政治が，向うの方から，教師の生活と仕事のなかに踏み込んでくるのだ。（人間の壁・上 322）

第2の意味は，「勢いよく入りこむ」ということだ。

○私はその家に駈け寄り，階の欠けた階段を飛び上つて，踏み込んだ。（野火 73）

の例はこの意味にあてはまるだろう。ただし，これはつぎの第3の意味のものとも見られ，そうすると，この第2の意味にあてはまるものはない。広辞苑の第2版では第2の意味をけずっているが，その方がいいかもしれない。

第3の意味は，「他家へ無断で入りこむ」という規定があるものである。つぎの例は一応ここにはいる。

○女の，しかも，床の敷いてある部屋へ，ずかずか平気で踏込んで来る七三郎に，彼女は露骨に眉をひそめた。（読切倶楽部 1956年3月 425）

ただし，「他家」という規定はあてはまらない。これは宿屋の一室だから。もっと一般的にいえば，他人のいる，あるいは他人の持ちものである，へやや家，ということになるだろう。つぎの例はこれが抽象化したものである。

○相手の中へ勝手に踏みこんできて何かを瀬踏みしようとする，（むらぎも 205）

ところで，広辞苑の分類によれば，この第3の意味にあたるものの一部分だが，犯人などをつかまえたり，かたきをやっつけたり，あるいは何かものを取ったり差しおさえたりするために，ある建物・へやに強引にはいりこむ，という動作をあらわす例がかなりある。

○深夜に，犯人の巣にでも，**踏み込む**ような気持がする。（自由学校 239）

○しかしどうせ私が外で見張り番をしてゐますから，**踏み込まれる**やうな心配はありませんよ。（青銅の基督 84）

○三千代を囮にして，その操をすてさせ……庄一郎が，情慾に溺れている最中を，**ふみ込んで**，斬る——。（週刊新潮 1956年9月17日 71）

これらのばあいは，＜無断で＞というようすの面よりも，つかまえたり，傷つけたりするために，という目的の面での規定の方が強く働いており，「無断で」，あるいは例解国語辞典の規定によれば，「突然」というようなようすは，むしろこの目的から必然的に生じる結果であるようにおもわれる。その点で，単に，ずかずかはいりこむことに重点をおいていた，さきほどの読切倶楽部の例などとは，重点の置き場所がちがっており，特にとりだす必要がある。

なお，広辞苑の第2版では，以上のほかに「気張ってする」「思いきってする」という意味を立てているが，現代語にはこれにあたる用例はなさそうだ。

〔313〕 **どける＜ずらす**
（どく＜ずれる）

「どける」は，なにか物体がじゃまであるのでそれを動かすことをいう。

○さ，お這入りなさいまし。そんなもの足ででも**どけて**頂戴，（或る女・前 34）

「ずらす」はそのような目的の面での限定がない。

○ちょっとお二人は向き合って笑って下さい，と写真を撮すというので，椅子を**ずらして**衝立の前に二人だけ別になったとき，写真班が言った。（くれない 141）

この例では，ならんですわっていたふたりが，向き合ったために，ひざがぶつかるのをさけようとして，いすを動かしたのである。したがって，いすがじゃまになったために動かしたという点では「どける」に近い。ただ，前にあった位置から完全に移動してしまう，というほどでもないので，「ずらす」といったのであろう。

○その枠は，巻揚機（クヮンヤウキ）で舟を引き上げるとき，舟の底にあてがつて，次々と上方へ**ずらして**行く道具であるが，（潮騒 8～9）

このばあいには，じゃまだから動かすというような理由はない。

対応する自動詞の「どく」と「ずれる」にも，これと近い関係があるかもしれないが，はっきりしない。「どく」は，たしかにじゃまであるために動くことをあらわす。

○寝台一つもち上らんのか。**どいたどいた**初年兵はじゃまだ。（真空地帯・上 54）

しかし「ずれる」は

○高松では貨車を連絡船にすべり込ませるレールが**ずれて**しまつて，（闘牛 116）

のように，とくにじゃまだから動いたというのでない例ばかりで，「どく」に対応するようなものはなかった。「ずらす」の目的語，したがって「ずれる」の主語があらわすものは，人ではなくてものであり，したがって，それがある目的のために動くということは，いいにくいのかもしれない。

〔314〕 ふさぐ／つめる

「ふさぐ」は，意志的な動作をあらわすばあい，ほかのものをある場所に存在させないために，またはある場所をとおさないために，その場所にいる（あるようにする）ことをあらわす。

○下人（げにん）は，老婆が死骸につまずきながら，あわてふためいて逃げようとする行く手をふさいで，こうののしった。（羅生門 13）

もっとも，「ふさぐ」は，かならずしも意志的な動作をあらわさない。結果として今のべたような目的が達成されるような現象なら，無意識的なこと，あるいは意志が問題にならないようなことについてもつかわれる。

○数輪の冬薔薇が，彼女の塞いでゐた空間に入れ代つて現はれた。（真知子・前 183）

○暗い葉が空をふさいでゐるので，しいんと静けさが鳴つてゐた。（雪国 29）

つぎの例は，声がとおらないように「ふさいで」いるのである。

○長老は一同に最後の言葉をかける事が出来ないやうにその口を布で塞がれてゐた。（青銅の基督 116）

ところで，今の例で，布は，口のそとをおおっているだけかもしれないが，口のなかにつっこまれて，そのすきまをうめているのかもしれない。そして後者のばあいなら，「口を布でふさぐ」という表現は，「布を口につめる」といいかえることができる。つぎの例はこれにちかい。

○船長は咽喉へ綿でもつめられたやうに，立ちすくんでゐる（蟹工船 27）

この例も，逆に「のどを綿でふさがれた」といいかえることができる。

このように「AをBでふさぐ」とも「AにBをつめる」ともいえるばあいには，「ふさぐ」も「つめる」もおなじような現象であらわしているのだが，「つめる」では「ふさぐ」にみられたような目的がつねにあるわけではない。さきの「蟹工船」の例と同様に，からだの部分にある空間に，ものを入れることをあらわしていても，つぎの「つめる」においては，まったく目的がちがう。

○まづい昼飯を，噛まないままで，ただ一生懸命に口につめてゐた。（冬の宿 174）

〔315〕 しく＜おく

「しく」と「おく」とのあいだには，目的の面でちがいがある。

「し　く」

○ネルの着物を，さつきから膝の下に敷いて押しを切つてゐたのを，（桑の実

「お　く」

○〔襦袢の〕胴のところを二枚に折り，（中略）棚の上においた。（真空地帯

135)

○砂上に竹笠を裏返しに置き，更にハンケチをその上に敷き，「まあ，この上に腰をおろして頂きませうか」(河明り 325)

・上 48)

○葉子は大急ぎで寝台の側に駈けよつて，枕許においといたハンケチを拾ひ上げて眼頭を押しあてた。(或る女・前 192)

これらのばあいには，同じきもの，ハンケチという対象について「しく」「おく」が使われている。しかし，そのさい，「しく」は上に何かをのせるために，(上のばあいには，人間のからだをのせるために) これらのものを「おく」のであり，単に「おく」というばあいには，そういう目的の面での限定がない。したがって，上の文脈でも，「しく」を「おく」にいいかえることはできるが，逆に「おく」を「しく」にいいかえることはできない。

「おく」という動詞は，かならずしも上に何かをのせるという目的を排除するものではない。この点については「河明り」の例文における「竹笠を裏返しに置き」という例が証拠になるだろう。笠は平べったいものだから，その上に腰をおろすために下へ置くのであれば，これを「しく」といってもよいと思われる。それがこの文の中で「おく」で表現されているのは，そのすぐつぎに「ハンケチをその上に敷き」という表現がつづくためであろう。

〔316〕 おさえる

この動詞についての辞典の規定には，ふつう「ものが動かないように」とか，またはこれに似たことばがはいっている。たしかに，対象とするものの動きをとめるため，という目的をもった動作をあらわす例がおおい。

○枕元に居た人々は各自(てんで)に苦しむお品の足を抑へた。(土・上 52)

○風でばたばたするコートの裾をおさえながら，(人間の壁・上 37)

○下人(げにん)は，太刀(たち)を鞘(さや)におさめて，その太刀の柄(つか)を左の手でおさえながら，冷然として，この話を聞いていた。(羅生門 15)

つぎにあげるような例も，うごきをとめるために，という範囲に入れることができるだろう。

○袂で口を抑へて女房等は笑を殺した。(土・上 204)

○絃を押へる必要上左手の指の爪の生え加減を気にするものだが (春琴抄 173)

しかし，「おさえる」という動作の目的は，かならずしも，対象のうごきをとめることだけではない。つぎに，それ以外の目的で「おさえて」いる例をあげる。

○船腹は白粉でもふりかけたやうに，霜の結晶でキラキラに光つた。水夫や漁夫は両頬を抑へながら，甲板を走つた。(蟹工船 39)

この例では寒さをふせぐために「おさえて」いる。

○駒子が叫んで眼をおさへたのと，ほとんど同じ瞬間のやうだつた。(雪国 173)

○耳を掩(おさ)へた太郎作が未だ半町と逃げ延びぬ中に，鳴る，光る，(思出の記・上 6)

これらの例では，ものごとを見ないため，聞かないためにおさえている。

○わざと悲鳴をあげ，弁当の竹の皮をかたはらに置いて，乳を押へた。（潮騒 125）

逆に，この例では，人から見られないためにおさえている。

○ここが十二時ここが六時，その真中が三時といふ風に指で抑へて見せ（雪国 55）

この例では，主人公は目が見えないのだが，時計にさわることによって時間をしろうとしている。指で「おさえる」のは，針がどこにあるかをしるためである。

このように，「おさえる」という動作の目的は，対象であるものの動きをとめることに限定されるものではない。したがって，「ものの動きをとめるために，ほかのもの（手などを）をあてる，または（他の目的で）これと同じような動作をする」とでも説明しなければならない。

〔317〕 しぼる＜ねじる＋おす

「しぼる」は水けをとることを目的とする動作である。その方法としては，せんたくもののばあいなど，手でもって「ねじる」のがふつうだ。したがって，おなじ現象が「ねじる」でも「しぼる」でもあらわせることがある。

○ごしごし洗って，力いっぱいねじってしぼるのは禁物。（主婦の友 1956年6月付録 夏の婦人服と子供服 37）

しかし「しぼる」は，つねに「ねじる」ことによって達せられるとはかぎらない。たとえば，電気せんたく機のしぼり機でせんたくものを「しぼる」ばあいには，あきらかに「ねじる」のではなく，おしつけることによって水分をとっているのである。だから「ねじる」と「おす」とをあわせたものが，「しぼる」の上位概念をあらわしていることになる。

○つや子は大きなスポンヂに湯をふくませ，両手で搾つて，自分のおなかへ上から湯をかけながら，燥(はしや)いで笑つた。（仲子・上 183）

このばあいには，手ぬぐいとおなじように「ねじった」のだとも解釈できるが，ただ「おした」ものかもしれない。つぎにあげるような例では，おそらくは「ねじった」のではなく「おして」しぼったのだ。

○朝早く，青木さんが山羊の乳を搾つて入らしやるところへ行つて（桑の実 139）

○挽肉四十匁にみじん切玉葱半個分，水に浸して固くしぼった食パン一切分と，塩，胡椒少々を混ぜ，（主婦の友 1956年1月付録 日記兼用家計簿 70）

○小松菜の芥子和え　茹でた小松菜カップ半杯を固く絞り，塩をふっておきます。（婦人倶楽部 1956年4月付録 おすしとお弁当料理 64）

一方，「ねじる」や「おす」は，動作のし方の面だけで限定されていて，その目的には限定がない。だから，つぎのように，水けをとるということに関係なくつかわれるばあいが多い。

○手拭を捻つて向鉢巻ばかりでは間怠(まだる)ツこい，（平凡 49～50）

○小さい押し枠にすし飯三分の二，いり玉子三分の二，残りの御飯，いり玉子の順に

入れ，押して静かに抜き，具を好みに飾る。（婦人公論 1956年3月 48）

これらも，もし手ぬぐいがぬれていたり，食べものから水分をとるのが目的だったりしたばあいには，まったくおなじ動作を「しぼる」といいかえることができるかもしれない。しかし，ここではそのことは目的ではないので，「ねじる」「おす」としかいえない。

辞典では，「しぼる」の規定を，ふつう，つぎのような形でしている。「強く握りまたはねじって水分を除き去る。」（岩波国語辞典）ほかの辞典も表現はちがうが，基本的なくみたてはおなじである。すなわち，「～することによって水分をとりさる」という形で規定している。だから，水分をとりさるということが，いわば目的ではなくて結果であるとみとめていることになる。「水分をとる」ということが目的であるか，結果であるかは，むずかしい問題だ。たいていのばあいには，意識的にそのことを目的として動作をし，かつ結果的にもそのことが達成されるからである。これを区別する基準は，「しぼった」という表現が，対象に対するはたらきかけとして，単にねじった，あるいはおしたことをあらわすのか，それとともに，対象から水けがとりさられたことまで表現されていなければならないのか，ということである。ここでは，「しぼったけれども水は出なかった」というような表現がありうるものとみて，つまり「しぼった」ことの実現は，かならずしも水分をとりさることの実現を意味しないものとみて，目的と規定したのだが，そのことを用例から証明することはできなかった。なお，目的にせよ，結果にせよ，いずれにしても＜水分をとる＞ことが，「しぼる」の基本的な意味にとっての必要条件であることは，まちがいない。たとえば，

○仕切りは，不要のときには絞つておく白いカーテンである。（本日休診 49）

のようなばあいには，動作としては，＜おしてちぢめておく＞という点で，「手ぬぐいをしぼる」などとにているが，＜水分をとる＞ということには無関係なので，基本的な意味とは別のものとすべきである。

＜注＞　「しぼる」の対象には，「手ぬぐいをしぼる」「ぞうきんをしぼる」のように，水けをふくんだものと，「水分をしぼる」「乳をしぼる」のように，そのときにとりさられる水けの方とがある。つぎの例では，この2種類の対象がおなじ文脈に出てくる。

○行介は手拭を水でしぼつて，彼女の額の上にのせてやつた。（波 47）

ただし，このように手ぬぐいが対象として表現されて，水がその対象の変化のための手段となっているのは，ややおちつかない感じだ。これだと「しぼる」のなかには手ぬぐいをぬらすことまでふくまれてしまう。例にはなかったが，「手ぬぐいから水をしぼる」のような表現なら自然だとおもわれる。

〔318〕 みがく＜こする

これらは，動作としては同じようなことなのだが，「みがく」は，対象をきれいにす

るという目的がはっきりしている。

○細君の背中を流すことも，細君の靴をみがいてやることも，（自由学校 130）

○ラッパやとめ金などをみがくときに用いる紙を（真空地帯・上 224）

「こする」も，対象をきれいにするための動作であることがある。

○汚れた甲板を単調にごしごしごしごしと擦る音が，（或る女・前 210）

このばあいには「みがく」とおきかえてもよい。しかし，もちろん「こする」の目的はさまざまであって，「みがく」におきかえられない例の方がずっと多い。

○彼女は，いそいで両手の甲で涙に濡れた眼を擦つた。（仲子・上 92）

○弾の尻から火薬を抽き出し，木の枝でこすつて火を起した。（野火 96）

なお，きれいにするといっても，「みがく」のばあいには，かなり力を入れるのであって，かんたんに，よごれがとれるような動作には，「みがく」とはいいにくいようだ。

○島村は顔を窓に寄せると，夕景色見たさといふ風な旅愁顔を俄づくりして，掌でガラスをこすつた。（雪国 9）

この例での「こする」目的は，ガラス窓のくもりをとることにあり，その点では，「みがく」といってもよさそうなものだが，かんたんに手をふれただけでとれるようなものなので，「みがく」におきかえることはむずかしい。

つぎの例では，「こする」と「みがく」とが，となりあってつかわれている。

○ポリッシュを塗らない場合は，バッファーにネイル・パウダーをつけ，爪の面を磨きます。バッファーは一方向にだけ動かし，爪の根本はこすられないようにします。（主婦と生活 1956年1月付録 スピード美容読本 54）

この文で，両方の例をともに「みがく」あるいは「こする」にしてしまっても，意味はかわらない。しかし，前の例は，まさにきれいに光らせるために「みがいて」いるのに対し，あとの例は，そうしてはいけない，といっているのだから，やはり，この文にあるように「みがく」と「こする」をつかいわけるのが自然だろう。

つぎの例では，ややふざけた言い方をして「みがく」がつかわれている。

○お前の顔を磨いてやらうと云つて横たはつてゐる私の顔をアルミニュームの切片で埋め出し，その上から私の頭を洗ふやうに揺り続けるのだが，（機械 19）

このばあいには，本当は「こする」といった方がぴったりする動作である。つまり，目的は，あいての顔をいためつけ，きずつけることであって，きれいにすることではない。それをわざと「みがく」という動詞によって表現することで，あいてに対する皮肉が生じているのである。

〔319〕 いける＜うめる

「うめる」「うずめる」は，特に目的の面で限定されていない。ずっと土の中にうずめっぱなしでもいいし，また，のちにほり出して使うためでもよい。これに対して，「いける」の方は，将来使うために一時うずめておく，というばあいが多いようであ

る。ただし，用例が少ないので，単なる傾向以上に，このような目的の面での限定がはっきりあるのかどうかを明らかにすることはできなかった。

○それから大根も干したり土へ活けたりして闇いから闇いまで働いた。（土・上 28）

○炉の灰に埋けてあつた薩摩芋が最早焼けて居る時分だ。（思出の記・上 32）

別の意味とすべきかもしれないが，「火をいける」といういい方も，やはり，とりだすために，かりにうずめておくことである。

辞典では「いける」について単に「土の中にうずめる」という説明をしていることが多い。それが正しいとすれば，「いける」と「うずめる」との区別はほとんどないことになる。しかし，うずめっぱなしにするばあい，たとえば

○電線は全部地下にこめ，最も新しい単純な型の街灯を建ててもらいたい。（文芸春秋 1954年3月 41）

まで「いける」といえるかどうかは問題が残るであろう。またもしそういう表現があったとしても，それには文体的な，あるいは，方言的なニュアンスがついているかもしれない。なお，お茶の水女子大生についての調査では，「電線は地下にいけてあります。」という例文に対し，○—2，△—2，×—17だった。

〔320〕 ほうむる＜うずめる

「ほうむる」について辞書は一般に「死体を土の中にうずめる」のように規定している。この点からすると，「ほうむる」は「うずめる」の一種で，「うずめる」とのちがいは対象が死体に限定される点にある，ということになる。しかし，ちがいは，その点にかぎられるものではなく，またその点がもっとも本質的だともいえない。このことは，おなじく死体をうずめることに使われた「ほうむる」と「うずめる」の用例を比較することによってわかる。「ほうむる」はきちんと墓にうずめて，死者をまつることをいう。

○此人々の中にはそれぞれの家の菩提所に葬られたのもあるが（阿部一族 43）

「うずめる」もこれと同じようなばあいにつかわれる。

○そこでその屍は何の物語も残さずに，美しい古里の浜と八丈ケ島を見下ろす陵に埋められたのである。（潮騒 110）

この例では「ほうむる」を使っても，それほど不自然ではない。（なお，「うめる」と「うずめる」は，「埋める」と書いてあると，よみわけられない。）しかし，つぎのような例では「ほうむる」にしにくい。

○それから老人や女は自殺し，幼いものは手ん手に刺し殺した。それから庭に大きい穴を掘つて死骸を埋めた。（阿部一族 61）

○「林の中で日本の兵隊が死んでゐなかつたかね。」

「ある。」

と，マライ語で答へて，振り返つてその方向を指さした。

「土に埋めてあるか。」

さうでないといふ無表情な返事があつた。（帰郷 74）

これらでは，死者をまつることよりも，死体を人目につかないように処理するために，土の中にうめるということに重点がある。「帰郷」の例では会話の中で使われており，「ほうむる」が文章語的であることもあって「ほうむる」におきかえることはむずかしいように思われる。

「うずめる」がもの一般，「ほうむる」が死体だけ，という対象の面でのちがいは，このような死者をまつるためという目的，またはきちんと墓などをつくるというようすなどの面での限定と関係がある。「ほうむる」のばあい，具体的な動作として土のなかにうずめるということには，かならずしも重点がないのである。はじめにあげた「阿部一族」の例についても，遺骨を墓石のなかにおさめたとしても，「ほうむった」ことになるであろう。岩波国語辞典は，「ほうむる」の意味を「死体・遺骨を墓所などにおさめる。」と規定しているが，この「墓所などに」という表現の方が「土の中に」という規定よりもよいと思われる。

〔321〕 ひかえる＜いる

「ひかえる」について岩波国語辞典は「順番が来ることや用が出来ることに備えて，ある場所に居て待つ。」と規定している。この規定は，つぎにあげるような「ひかえる」の典型的な用例によくあてはまる。

○座敷の戸を締め切つて，籠み入る討手のものを一人々々討ち取らうとして控へてゐた一族の中で，（阿部一族 72）

○悠然と，何もせんで，控えて下されば，よろしい。必要な時には，こうして下さい，とお願いしますよ。（自由学校 228）

岩波は，またこの規定にならべて，「ある人のそばに居る。」という規定をもあたえ，「主人の後ろに――」という例をあげている。この規定は，たとえばつぎのような例にあてはまるようにみえる。

○うしろに畏まつて控へてゐると「暑い」と独りごとを洩らした（春琴抄 150）

○小宮山や竹村の背後には，めつけ役として伊藤律の追随者菅間正朔が控へ，更にその背後に代々木当局が控へてゐたから，（群像 1956年6月 177）

しかし，このような例も，単にある人のそばにいるのではなくて，なにか用事がありはしないか，と思ってそばにいるのである。偶然いあわせたばあいには，「ひかえる」はつかわない。したがって，「ある人のそばに居る」という規定は不必要で，最初にあげた「……に備えて，ある場所に居て待つ」という規定があれば十分だろう。

「いる」もこの「ひかえる」と同じようなばあいにつかわれることがある。

○もう春三が帰つてお袋だけゐる控室に行つた。（本日休診 115）

○背後に絶えず誰かがゐるのでないかぎり，とても小よしだけの――小よし一人のはたらきだけではカシキのつくはずはなかつた。（末枯 45）

しかし，「いる」の大部分の例は，もちろん，特にそのような条件なしで人がある場所に存在することをあらわすのであって，「いる」は「ひかえる」にとって上位語であ

る。

ところで「ひかえる」には，上にあげた規定がうまくあてはまらないような例もある。

○頭(こうべ)を垂れて，死灰(しくわい)の如く控へたから別段目にも留まらなかつた。（高野聖 6）

○其の幾人は自分の父母が喚ばれるので苦い笑を噛んで控へて居る。（土・上 180）

これらは，なにか用事などにそなえているわけではない。かといって「ある人のそばにいる」という規定もあてはまらない。とすれば，「ひかえる」は，なんらの限定なしで，例解国語辞典のように，「その場所にいる。」と規定すべきだろうか。しかしこのような非限定的な定義は，あまりにも広すぎる。これでは，「ひかえる」と「いる」との区別はつかない。

「ひかえる」には今問題にしている自動詞のほかに，他動詞としての「制限・遠慮をする。」（岩波国語辞典）という意味をあらわすものがある。

○この上同じような統計学的数字を列挙するを控えるであろう。（貧乏物語 28）

○私はそれ以上に立ち入つた質問を控えなければなりませんでした。（こゝろ 231）

そして，この「こゝろ」の例では，「質問を控える」と，あきらかに目的語が示されているが，つぎの「波」の例ではそうではない。

○よつぽどさう聞かうかと思つたが，恐しいやうな気がしてわざと控へた。（波 366）

このばあいにも，やはり事実としては質問をひかえているのであって，それがことばの上で省略されているだけだとみられる。すなわち，これはまだ他動詞である。ところが，やはり事実としておなじようなことであっても，

○私(わし)は何にも問はずに小さくなつて黙つて控へた。（高野聖 46）

における「ひかえる」は，自動詞だとみられる。ここでの「ひかえる」は，質問をひかえるのではなくて，「小さくなつて黙つて」にあらわされているような，その主人公のいる居方をあらわしているのだ。つまり，上の「こゝろ」の例，「波」の例，「高野聖」の例は，事実としてはみな近いけれども，一応「こゝろ」と「波」は他動詞，「高野聖」は自動詞の例とみられる。しかも，このばあい「波」と「高野聖」とのあいだは，きわめて近い。目的語が省略されたのか，あるいは本来ないのであるかということは，判定に苦しむばあいがある。

○「弱輩の身を以て推参ぢや，控へたら好からう」（阿部一族 32）

○皆の衆，お控へなされい。了海，打たるべき覚え十分御座る。此の洞門を穿つことも，たゞその罪滅しの為ぢや。（恩讐の彼方に 87）

これらの例についても，一応は自動詞と考えられるが，「願ひごとを控へたら好からう」とか，「邪魔だてをお控へなされい」とかの省略された表現とみられないこともない。こうして「制限・遠慮をする」という他動詞の用法と自動詞の「ひかえる」とのあいだが連続的だということは，つまり自動詞のばあいにも，そのような態度が表現されているということである。すなわち，単に「……に備えて，ある場所に居て待つ」というのでは解釈できないとした「土」などの例における「ひかえる」も，単にある場所にいる

というのではなくて，「自分の行動を遠慮して出しゃばらないようにしている」「ひかえめな態度でいる」ということをあらわしているのである。

〔322〕 かくれる，ひそむ／こもる

これらの動詞は，人間の動作をあらわすばあい，ほかの人との接触をたって，ある場所にじっとしている点で共通している。しかしその目的はちがう。「かくれる」「ひそむ」は他人に見つからないためにその場所にいるのである。

○厩の藁の中に三人，砲撃にくずれおちた櫓天守に一人，女がかくれていた。（落城 50）

○駿は番人の去つた後でも，なほ長い間手の平のやうな葉つぱの重なり合つてる蔭に潜んでゐた。（波 317）

「こもる」には，そういう目的はない。

○大宮はますます杉子に冷淡になつた。大宮は方々から原稿をたのまれ出したせゐもあつて書斎に籠つてゐる時が多くなつた。（友情 73）

○たとえば，法華経の行者が山にこもる，都にいては心が散って雑念を生じやすいから山に行く，平たく言えばそれが止であります。（私の人生観 90）

これらのばあい，べつに他人から見つかってこまるので書斎や山にいるのではない。書斎や山にいることは他人にも明らかなのだが，ただそこには他人が行くことを遠慮するので，しずかにしごとに専念できるのである。「こもる」の目的は，そのように他人との接触をたって，あることに持続的に専念するということである。

〔323〕 たかる＜あつまる，むれる，むらがる

「たかる」には，たべたり，見たりするための具体的な対象（もの）がある。

○楽屋口にたかつて来て，吾々の出這入りを見物してゐる子守(こもり)ッ娘(こ)ね，（多情仏心・前 43）

○家禽類は，洋禽も和鶏もよく育つて，朝々鈴江君が餌を遣ると夥しい闘の声をあげながら真黒にたかつて来る。（思出の記・上 89）

○あの硝子燈に小さい虫があんなにたかつて飛んでるでせう？（桑の実 93）

以上に，人・鳥・虫が「たかる」ばあいを1例ずつあげたが，これらにはみな具体的な目標・対象がある。それは，かならずしも直前・直後の文脈にそれといいあらわされてはいないが，読み手にはすぐにわかる。すなわち，「多情仏心」の子守っ娘にとっては「吾々」が，「思出の記」の家禽にとってはえさが，「桑の実」の虫にとっては硝子燈が対象であって，これを見たい，たべたい，あるいはこれに近づきたいためにあつまってくるのである。

「あつまる」という動詞には，このような対象は必要なく，むしろない方がふつうだ。比較のために，やはり人・鳥・虫の例を一つずつあげよう。

○ベルが鳴つた。群集はそろそろと改札口に集つた。（蒲団 81）

○鶏は朝晩小屋に集つて軒端に寝た。（野火 55）

○あの鷹匠町の下宿に居た頃は，煩いほど沢山蠅の群が集つて，何処から塵埃と一緒に舞込んで来たかと思はれるやうに，鴨居だけばかりのところを組んづ離れつしたのであつた。（破戒 222）

これらのばあいには，目的とする対象（もの）はない。「蒲団」の群集も，「野火」のにわとりも，「破戒」のはえも，なにかある具体的な対象を見たい，食べたいなどという目的をもって，集まっているわけではない。「群集が改札口にあつまった」「にわとりが小屋にあつまった」というとき，改札口や小屋は，単にあつまった場所を示しているだけで，改札口や小屋というものを見るためにあつまったのではない。したがってこれらの例では「あつまる」を「たかる」に言いなおすことはできない。

もし「蒲団」の例で「群集は改札口にたかった」といったとすれば，この例のように汽車にのるためではなく，たとえばなにか事故がおこったのを見るために改札口のところにあつまった，ということになるだろう。同様に「小屋にたかった」といったとすれば，多分，小屋そのものか，または，その小屋にあるなにかを見るために，そこへやじ馬があつまった，というような意味になるだろう。

「あつまる」は，「たかる」と同様に，ある具体的な対象を目ざしてあつまる，というばあいにもつかわれる。

○古い兵隊達はストーブの廻りにあつまって火をつくった。（真空地帯・上 27）

この例で「兵隊たちはストーブのまわりにたかって」といいなおしても，それほど不自然ではない。というのは，ストーブのまわりにきたことが，一定の目的をもって，つまり，ストーブという対象から暖をとりたいという目的をもって，あつまったことだからである。このような例はもちろん「あつまる」のなかではそう多くないのだが，「たかる」と「あつまる」は，つねにはっきりちがう分野に属するとはいえない。

このように両者がダブる領域については，漢字が書いてあると，「あつまる」とよむか，「たかる」とよむか，まようことがある。

○水に臨んだ飲食店では，人が蓄音器に集つてゐたり，（あらくれ 210）

この例では，「蓄音器にたかっていたり」とも「蓄音器にあつまっていたり」ともよめる。一般に，「あつまる」が「 ～ に」という目的語をとるとき，その「 ～ 」は蓄音器のようなものではなく，改札口・小屋のような空間であるのが普通だが，「蓄音器にあつまる」という表現も全然ないとはいえないのである。

○豆電燈がまるで千の螢でも集つたやうについてゐました。（銀河鉄道の夜 310）

このばあいも「ほたるがあつまった」「ほたるがたかった」両方によめるとおもわれる。

「むれる」「むらがる」もやはり「あつまる」と同じように「たかる」をふくんで，それよりも広い領域をあらわしている。対象とする具体的なものがなくて，ある地点に大ぜいがやってくることをあらわす例，つまり「たかる」とかさならない例が多い点も，「あつまる」と同じである。

○広間に群れたどの顔も面白いフイルムのようだ。（放浪記 50）

○町々の軒は秋雨(あきさめ)あがりの後の夕日に輝いて，人々が濡れた道路に群(むらが)つて居た。（破戒 8）

これらの例は「たかる」でおきかえることができない。しかし一方では，特定の対象を目ざしてあつまるばあいもある。たとえばつぎのように。

○たわわに咲きこぼれた白い花には，小さい白い蝶々が群れていて，（放浪記 48）

○俺は船が沈んでゆく時に群がる鷗のやうなものだ。（冬の宿 200）

「放浪記」の例では，蝶々が花を目ざしてきており，「冬の宿」の例では，鷗が船を目標にして，これにとまるためにやってきている。これらのばあいには，「むれる」「むらがる」を「あつまる」にも「たかる」にもいいなおせる。現に，「冬の宿」の今引いた例文のあとには，つぎのような文句がつづいている。

○どこからかまた漂つてくる新しい船を探してたかつてゆく，あの，長い翼と白色とに表徴された浮動性と冷情。（冬の宿 200）

〔324〕 はたらく＜はげむ，いそしむ＜つとめる

「はたらく」は労働だけにつかわれるが，「はげむ」「いそしむ」「つとめる」は，労働でも，勉強でも，とにかく，一生けんめいやるのであればかまわない。

「はたらく」が，労働につかわれた例は，ほとんどあげる必要もないが，つぎの例では明らかに勉強するのと対立させてつかっている。

○「本を読む丈なら，田舎でも充分出来るし，それに働らく必要もなくなるし，丁度好いだらう」（こゝろ 140）

ところが，おなじ「こゝろ」の中に，むしろ勉強するのをあらわしているような「はたらく」がある。

○毎日机の前で精根のつゞく限り働らいた。（こゝろ 69）

このばあいには，勉強といっても，単に受動的に知識をふやすのではなく，卒業論文をまとめるために研究をしているのだから，その意味で「はたらく」がつかわれていてもおかしくないともいえる。しかし，研究についても，「はたらく」というのは，あまり一般的な用法ではないだろう。

これに対して「はげむ」は明らかに両方の用例があった。

〈しごと〉	〈勉　強〉
○ただただ真剣に船に乗組み，仕事に励む真面目な人達の生活を（婦人画報 1956年7月 294）	○ある人達が浪費している金銭と暇とを，夜学で勉強に励む人達に分ける事が出来たら（葦 1956年 3月 113）

「いそしむ」「つとめる」も，これとおなじとおもわれるが，勉強の方のいい例がなかった。

○子供を育てながら連続して制作にいそしんできたことに（むらぎも 191）

○（教育基本法第六条・二）法律に定める学校の教員は，全体の奉仕者であって，自

己の使命を自覚し，その職責の遂行に努めなければならない。（人間の壁・上 102）

のように，あきらかにしごとと解釈できる例は多いのだが，「勉強にいそしむ」「勉強につとめる」などという表現はなかった。しかし，このような表現も可能なはずである。「いそしむ」についていえば，

○日夜技芸の練磨をし，一層立派なカブキの世界を築こうと芸道にいそしんでいる人たちをさして，（娯楽よみうり 1956年9月7日 16）

などは，勉強をさすと考えられる。「芸道にいそしむ」というのは，その具体的な内容があまりはっきりしないが，勉強することと，実際に演技をして，いわばしごとをすることと，その両方をふくんでいるものとみられる。「つとめる」の方についても，明らかに勉強をさす例は見あたらなかったが，

○カントの書やヘーゲルの書は難解である。だがわれわれは，そのゆえに哀訴することなく非難することなくただ理解すべく努めねばならない。（哲学以前 44）

は，研究とも勉強ともいえる。

さて，「はたらく」にしても「はげむ」や「いそしむ」にしても，ある程度長い時間にわたるしごとであって，瞬間的なものではない。しかし，「つとめる」のばあいには，ごくみじかい時間におわってしまうような，そして労力もほとんどかからないようなことについてもつかわれる。

○丑松は高柳夫婦を見ないやうにと勉(つと)めた。（破戒 173）

○早くこんな出来事は忘れてしまはうと努めながら，（風立ちぬ 106）

これらは，労働でも勉強でもなく，「はたらく」「はげむ」「いそしむ」のどれでも，おきかえることはできない。

このような動作の内容のちがいに応じて，これらの動詞の前にくる文法的なかたちの上の特徴も，それぞれちがっている。「はたらく」のばあいには，ほとんど内容が示されない。この動詞は，要するに「あそぶ」「ぶらぶらしている」「やすむ」などに対立して，なにかのしごとをする点に比重がかかっている。

○大工が，二人ばかりの下を使つて，せつせと木挽へに働いてゐた。（あらくれ 221）

のように，そのしごとの具体的な内容が「 ～ に」というかたちで示されることもあるが，それはむしろまれである。なお，「はたらく」については，他動詞の例が「桑の実」にあった。

○下を働く下女が一人，出前持の小僧が一人ゐて，（桑の実 3）

このほか，「盗みをはたらく」という慣用句では，他動詞としてつかわれるが，その実例はなかった。

「はげむ」「いそしむ」は，ふつう「 ～ にはげむ」「 ～ にいそしむ」というかたちで，その具体的な内容が示される。単に一生けんめいしごとをしている，ということだけではなく，どのようなことに従事しているのかを表わすために，もちいられることが多い。

「つとめる」は，大部分の例が，さきに「破戒」「風立ちぬ」の用例で示したよう

に，「 ～ ようにつとめる」「 ～ うとつとめる」というかたちでつかわれており，具体的な内容をともなっている。「はたらく」や「いそしむ」には，「つとめる」とちがって，「 ～ うと」と結びついた例はなかった。「はげむ」にはつぎの一例がある。

○――村をよくしようと励んでいる人達へ――（世界 1953年12月 179）

〔325〕 くすぐる＜さする，なでる

「くすぐる」は人をわらわせる目的で他人のからだにさわり，さらに一定のはたらきかけをすることをあらわす。その「一定のはたらきかけ」というのは，具体的には「さわる」のほかに「こする」「さする」「なでる」「かく」など，いろいろなものをふくんでいるのだが，うまくこれらの現象すべてを表現するような上位語は見あたらない。

○真黒な赤ん坊の頬を，軽く人差指でさすつた。赤ん坊はにつこりした。（波 148）

○始めは頻りに可愛がつて抱いたり撫でたり接吻したりして居たが，（蒲団 19）

などは比較的「くすぐる」に近いような動作をあらわしている。なおつぎの例を参照。

○浜から吹いて来る風がくすぐるやうに彼の背中をさすつた。（波 96）

人をわらわせるということが「くすぐる」の目的であるという点にも問題がある。ふつう辞典はこれを目的とせずに「 ～ のことをして ～ のような気持ちをおこさせる」といった規定をしている。この規定によれば，それは目的であるよりも結果である。たしかに，

○雨戸を閉づる時蛙の声は滅切遠く隔つてそれがぐつたりと疲れた耳を擽つて百姓の凡てを安らかな眠りに誘ふのである。（土・上 76）

○朝も，昼も，夜も鼻翼をくすぐる若葉の香がみちた。（仲子・上 126）

のように，比ゆ的ではあるが，人間以外のものが主体になって「くすぐる」がつかわれているときには，目的とはいえない。人間の動作でも，ぐうぜん相手にさわったことが相手にわらいたいような気持ちをおこさせたとすれば，そしてそれが「くすぐる」で表現されうるとすれば，やはり目的とはいえないだろう。しかし，一方から考えれば，相手を笑わせようと思って，わきの下などをこすったり，かいたりしてみても，結局わらわなかった，おかしい気持ちにさせることができなかった，ということがありうる。それでも，そのばあいには，やはり「くすぐった」といえるであろう。つまり，「くすぐる」という動作は実現したとみられる。そのような点からすれば「くすぐる」は，実際に相手にわらいたいような気持ちをおこさせる，というよりも，その気持ちをおこさせるべく，はたらきかけることである。つまり，気持ちをおこさせるのは，結果ではなくて目的だ，ということになる。この点については，はっきり断言できない。

〔326〕 つきつける＜さしだす

「つきつける」は，あらあらしさという態度の点で「さしだす」とちがうが，これは「つきつける」の目的と結びついている。すなわち，「つきつける」は相手に対して強い態度でなにごとかを要求するためにだす動作をあらわしている。

○「何をしていた。言え。言わぬと，これだぞよ。」
下人は，老婆をつき放すと，いきなり，太刀の鞘を払って，白い鍔の色を，その目の前へつきつけた。けれども，老婆は黙っている。（羅生門 13）

このばあいには相手に答えることを要求している。

○行介は手紙を出して無言のまゝ駿の前に突きつけた。駿の顔色が急にさつと変つた。（波 395）

このばあいには自分がそれを書いたことをみとめるように要求している。

○「だが，このバイロンもいい男でせう。」と私は本を取つて彼につきつけた。嘉門が，自分でバイロンの気になつてゐるのではないかと馬鹿らしくなつたからである。（冬の宿 125～126）

この例では，相手が自分とバイロンとのちがいをみとめることを要求している。このように，ちょっとみると要求のはっきりしないような例文でも，実はたいていなにかを相手に求めるところがあって「つきつけて」いるのである。

「さしだす」も，もちろん，なにか目的があってさしだすにはちがいない。そして，それは相手に対する要求であることもある。

〈つきつける〉

○突きつけられたコップの冷酒を島村は無造作に飲んだ。（雪国 145）

〈さしだす〉

○藤田は盃をさし出している重治の手にとりすがって（落城 14）

これらは，ともに，相手が酒をのむことを求めて，コップやさかずきを相手の目の前に出しているのであって，そのかぎりでは，目的は同じだ。ただ，「つきつける」の方が要求が強く，したがって動作もあらあらしく，「さしだす」は，要求というより，すすめという程度であって，その動作はおだやかである。

しかし，「さしだす」のばあい，目的とするところは，かならずしも相手になにか行動を要求するということではない。

○そこで先づ曙工業に出掛けて幹部と面談したのだが，その時，彼の差出した名刺には曙産業株式会社理事といふ肩書が印刷されてあつた。（闘牛 96）

この例では，ただ単に相手に自分の肩書きをしらせることが目的である。それ以上のなにかを相手に求めているわけではない。

以上のように「つきつける」のほとんどの例は相手の行動を要求するものだが，つねにそうだとはいえず，この説明にむじゅんする例もすこしある。たとえば，

○予想表のやうな紙片を二三枚ポケットから出して，薄暗い空気の中で私のまへに突きつけながら，今日の午後からの成績を説明した。（冬の宿 188）

○「こいつが一番よく君を覚えてゐたよ。」と人差指だけ押した左手の握拳を，いきなり女の目の前に突きつけた。（雪国 16）

などの例がそうであって，相手になにかを説明するために相手の目の前に出したのであり，それ以上を要求していない点，さきほどの「闘牛」の名刺の例と似ている。したがって，「つきつける」と「さしだす」とのちがいとしては，やはりあらあらしい態度で

ある，という方がより重要な点ではないかと考えられる。

「さしだす」は「だす」ことの一種である。そして，以上にのべてきたような「つきつける」と対応する「さしだす」のばあいには，この「だす」が相手の目の前への移動をあらわしている。しかし「さしだす」にはそれ以外の方向への移動もあり，それらは「つきつける」に対応していない。

まず特定の相手がいないのに「さしだす」がつかわれることがある。

○「アラ，実にシヤンねえ。清岡先生の奥様よ。」といふ声に，ボツクスに休んでゐた女は一斉に顔を**差出した**。（つゆのあとさき 19）

このばあいには，自分のいる位置よりも表だった方への移動が，「さしだす」によってあらわされている。別に特定の相手の前にさしだしているわけではない。

○弟は腹ばひになり，灯の下に**さし出した**教科書を読んでゐる。（潮騒 36）

この例も，そう考えてよいかもしれない。

第2に，「さしだす」は中から外への方向をあらわす。

○銀杏に近い二階の窓の障子を開けて，顔を**差出して**呼ぶのであつた。（破戒 36）

これももちろん「つきつける」とは関係がない。

第3に，「さしだす」は，主体が人間以外のばあいもある。これは，ぎ人化したものと考えることもできるかもしれないが，比ゆ的な感じはうすれている。いずれにせよ，「つきつける」では，このような例をおきかえることができない。

○百段目あたりのところで，石段には左右から**さしだした**松の枝のために，暗い影がうづくまつてゐた。（潮騒 119）

〔327〕 **あやす，きげんをとる／なだめる**

「あやす」はもっぱら小さい子どもについてつかわれ，「なだめる」は子どもでもおとなでもよい，というちがいがある。しかし，そのほかに，この2つの動詞は目的とするところがちがう。「あやす」は，相手を積極的に笑わせたり，喜ばせたりすることを目的としている。いわばそれは相手のきもちをゼロまたはマイナスの状態からプラスの状態にかえることだ。一方，「なだめる」の方は，そこまでは目的としていない。おこったり，悲しんだりしているのを平常のきもちにもどせばたりる。つまり，マイナスの状態にいるものをゼロの状態にすることである。

○彼女が側から**あやしても**，駿は少しも泣き止めなかつた。（波 150）

のようなばあいには，マイナスの状態にある相手に対してのはたらきかけだから，「なだめる」でもよいだろう。

○昂子が側(わき)から**あやすと**，駿は彼の膝で少し笑つた。（波 152）

のばあいには，ゼロの状態からプラスの状態にしようというのだから，これは「なだめる」の範囲とはかさならない。

「なだめる」の方では，大部分の例が，

○気色ばんで伊庭がきめつけるのを，瀬川は，ニヤニヤしながら**宥めにかゝつた**。

（多情仏心・前 124）

のように，おこっている相手に対して向けられた動作をあらわす。しかし

○おくみは背中の涙の人をなだめながら，そこらを往き返りした。（桑の実 93）

のように，悲しんでいるきもちに対するはたらきかけのばあいもある。

○小さい布団の二つ並べてあるまん中に横になり，こっち向いて，こっち向いて，というのに両方へ手をかけることでなだめて歌ってやった。（くれない 21）

では，別におこっても悲しんでもいるわけではないが，要求を出して，いわば多少興奮した状態にあるきもちを，しずめることを表わしている。

「なだめる」のばあい，対象は人をあらわす名詞だけではなく，きもちをあらわす名詞によっても示される。

○お島のいらいらした感情が，悉皆和められてゐた。（あらくれ 158）

○「神のお怒りをなだめるには，どうしたらいいでせうか」（潮騒 88）

○ロシアの恐怖をなだめるような仕方で達成されなければ（世界 1954年1月 38）

さらに，

○この老婦の兇暴な挙動をも宥めてやらなければならなかつた。（あらくれ 95）

のように，そのきもちのあらわれである行動に対しても，「なだめる」という動作は向けられる。なお，病気を対象とした

○老主人は時々神経痛を宥めるらしい妙な臭ひの巻煙草を喫つた。（河明り 270）

という例があった。これは以上のきもちをあらわす目的語をとった例とも別で，病気をぎ人化したのかもしれない。なお，「きげんをとる」という慣用句は，以上の点では，「なだめる」よりも「あやす」に近い。すなわち，

○大泣に泣いて，而してお祖母さんに御機嫌を取つて貰ふ。（平凡 18）

では，マイナスの状態を出発点としているが，

○母親を甘やかし，御機嫌をとって，表面だけでＰＴＡの平和を維持するやり方を，いつまでも続けていていいだろうか。（人間の壁・上 189）

では，ゼロの状態を出発点として，これをプラスにしようとするのである。

〔328〕 みまう＜たずねる，おとずれる

「みまう」は病人とか不幸のあった人とかを，なぐさめるために，たずねていくことをいう。

○しかし医者が急病人を見舞うためなどに使えば，（貧乏物語 151）

「たずねる」や「おとずれる」も，これと同じようなばあいにつかわれることがある。

○三時か四時，或はもつと早く再び訪ねて来る。そして大抵夜まで止つた。病人の寝台の左右に黙つて永いあひだ腰かけてゐることがある。（仲子・上 59）

○婦女の身として密かに見舞ふのは，よしや後日に発覚したとて申訣の立たぬ事でもあるまいと云ふ考で，見舞には遣つたのである。女房は夫の詞を聞いて，喜んで

心尽しの品を取揃へて，夜更けて隣へおとづれた。（阿部一族 62）

しかし，「たずねる」「おとずれる」は，特にその目的が限定されてはおらず「みまう」にとって上位語だといえる。だが多少問題はのこる。というのは，「たずねる」「おとずれる」が，つねに相手のところに出かけていくことを表わすのに対し，「みまう」も，かならず出かけなければならないかどうかは，断言できないからだ。実例にあたったかぎりでは，「みまう」は，みなそこへ移動していくことを表わしている。しかし，たとえば，手紙（見舞状）を相手にだすこと，または電話で相手とはなすことも，「みまう」とよべるかもしれない。とすれば，「たずねる」「おとずれる」は，「みまう」に対する完全な上位語だとはいえないことになる。

なお「みまう」は抽象的なことがら（一般にあまりよくないことが人におこるような）にもつかわれる。そのばあいには，移動ということはない。

○日本ではその後，悪天に見舞われて，皆く見えなかったのである。東京天文台でも確認できないらしい。（未知の星を求めて 319）

のばあいなどは，まだ，わるい天気が移動してきて，日本をみまったと解釈することもできるが，

○一層不安な年の暮が，直ぐにまた二人を見舞つて来た。（あらくれ 160）

○諸行無常の思想が釈迦を見舞ったと同じころ，（私の人生観 101）

などでは，まったく移動とは別だ。

＜注＞　これらの動詞は，そのとる目的語の種類とかたちの点で，いろいろの型がみられる。たとえば「たずねる」を例にとると，まず人を目的語にした（A）「だれだれをたずねる」というかたちがある。つぎに場所を目的語にしたものとして(B)「どこどこをたずねる」(C)「どこどこへ(に)たずねる」という2とおりがある。そして，さらに，これらがくみあわさった(D)「どこどこへ（に）だれだれをたずねる」というかたちもある。以下「みまう」「たずねる」「おとずれる」について，それぞれの例をあげる。

（A）「だれだれをたずねる」

「みまう」については上の「貧乏物語」の例を参照。

○彼は一番親しい大宮を訪ねることにした。（友情 11）

○葉子は母に黙つて時々内田を訪れた。（或る女・上 53）

（B）「どこどこをたずねる」

○様子を探りかたがた，こゝから幾許（いくら）もない生家（さと）を見舞つた姉は，（あらくれ 56）

○そして彼は曙工業を辞した足で，御影の山本の家を訪ね，（闘牛 97）

○この木部が度々葉子の家を訪れるやうになつた。（或る女・前 12）

（C）「どこどこへ（に）たずねる」

○決して紀尾井町へ尋ねて来るやうなことはしなかつた。（多情仏心・前 147～148）

「おとずれる」については上の「阿部一族」の例を参照。

(D) 「どこどこへ (に) だれだれをたずねる」

○あけの日から，真知子は毎日病院に米子を見舞つた。(真知子・前 179)

○こんな田舎へ，彼を，思ひがけなくも訪ねて来る友人があつて，(田園の憂鬱 87)

○父を斯の牧場に訪れたは，丁度足掛三年前の五月の下旬であつた (破戒 112)

ただし (C) の「どこどこへ (に) たずねる」という型にあたるものとしての「みまう」は，例がなかった。「おみまいする」「みまいにくる」というかたちなら，つぎのような例がある。

○「病院にもしばらくお見舞いしなかったし」(婦人生活 1956年8月 301)

○どうしても，駒子の家へ見舞いにくるという辺見を，(自由学校 116)

なお「みまう」の目的語は，人や場所ではなく，みまわれる人の状態であるばあいも多い。

○また或る一人は親戚の不幸を見舞ふために，そして他の一人は友人の結婚を祝ふためにと，いふやうに。(人生論ノート 132)

〔329〕 せびる，ゆする＜せがむ，ねだる，もとめる

これらはみな，相手になにごとかを要求する動詞だが，その要求の内容にちがいがある。

「せびる」「ゆする」は，相手から，なにかものをとるときに使われる。＜もの＞というのは，主として金である。

○母親にセビる金の全部を，服装に入れ上げてしまうそうで，(自由学校 58)

○そのあとで，そいつが自転車強盗をやっていると感付いて，金をユスル。(読切倶楽部 1956年11月 384)

「せびる」については，金以外のものをとる例があった。

○お八ツにお煎を三枚貰つたのを，貰つて五枚にして貰つて，(平凡 36)

○「おれには渋いのをくれよ。うんと渋いの。うんと濃くして，苦いやつ……」としつっこく茶をせびる。(むらぎも 157)

「ゆする」についても，金でない品物をとる例がありそうにもおもわれるが，見あたらなかった。

「せがむ」「ねだる」「もとめる」は，ものを要求するばあいにもつかうが，そのほかに，相手になにかしてくれと動作を要求するばあいにもつかわれる。

＜も の＞

○高は私のウイスキをせがみ，(冬の宿 84)

○そんな間にも，男から二十円，三十円くらゐづつ小遣ひをねだられてゐた。(多情仏心・前 242)

○ほとんど無意識の状態でしきりに水を

＜動 作＞

○満足したみんなは，もう話をせがむことをやめた。(潮騒 86)

○而して諸国を行脚なすつた内のおもしろい談をといつて打解けて幼らしくねだつた。(高野聖 10)

○春琴が又怡々としてその奉仕を求め

求めた。（波 208）　　｜　　（春琴抄 204）

これらの例のうち，左側の「せがむ」や「ねだる」は，「せびる」といいかえてもおかしくない。しかし，右側の例について「話をせびる」などということはむずかしい。「もとめる」は，ほかの動詞とちがって，要求するときのしつこさ，その他主体のようすが捨象されており，したがって「水を求める」を「水をせびる」にいいかえることはできない。しかし，ものと動作とを両方対象にできる点では「せがむ」「ねだる」と同じである。

〔330〕 さそう／うながす＜もとめる，すすめる

これらの動詞は，みな，相手に対してなにかの行動をとらせるように，はたらきかけることを表わす。しかし，はたらきかけている内容にはちがいがある。すなわち，「さそう」は，自分といっしょの行動をとらせるべく，はたらきかけるのであり，「うながす」は，一般になにか早くさせるように，はたらきかけるのである。そして「もとめる」「すすめる」はそのような内容上の限定がない。

まず，「さそう」と「うながす」との典型的な例をあげる。

○教会にゆくといつて，「高君，君も行かう。」とさそつた。（冬の宿 40）

○其人は手紙でKに帰国を促がしたのですが，（こゝろ 200）

最初の例では，「さそって」いる主体も，ともに行こうとしているのであり，つぎの「うながす」の例では，主体は1カ所にとまっていて，ただ相手だけを移動させようとしているのである。もちろん，「うながす」は，相手だけを移動させるばあいにつかわれるとはかぎらない。

○加治木は，五百助を促がして，長い陸橋を渡り，（自由学校 205）

のように，自分もいっしょに移動するばあいにもつかわれる。このような例では，「さそう」といいかえても，おかしくない。しかし，「うながす」をつかえば，「さそう」といったよりも，はやく行こうと，いそがせていることになる。

上の例にみるように，「さそう」も「うながす」も，移動についてつかわれた例が多い。特に「さそう」は大部分が移動の例である。しかし，つねにそうだとはかぎらない。移動以外のばあいをあげておこう。まず，「さそう」の例。

○独身の一条先生が神倉喜久代をさそって夜ふけまでマージャンをしている姿を想像すると，ふみ子は何かいやな気がした。（人間の壁・上 77）

○一体三好は，ひとに誘はれゝば，敢て辞するでもなかつたが，どつちかと云へば，花柳界の女や，そこの情趣には，あまり牽引を感じない方だつた。（多情仏心・前 211）

つぎに「うながす」の例，

○「さあ，何卒ずんずん干しておくんなせえね」亭主は促した。（土・上 205）

○徹子も兄貴の話に割り込んで，同じことを自分の言葉で言い直し，母の返事をうながしたりする。（くれない 113）

これに対して，「もとめる」「すすめる」は，内容の限定がなく，「さそう」にあたるばあいにも，「うながす」にあたるばあいにもつかわれる。「もとめる」の例をあげると，

○多計代は何かの機会で佃を捕へると，返答を求めた。（伸子・上 199）

では「うながす」に近い。「さそう」にあたるような例は適当なのがなかったが，

○代・上郡を寇掠する軍隊の一将として南行することを求められた。（李陵 183）

は，そう解釈できないことはない。このばあい，主体がともに移動するつもりなのかどうかが，はっきりしないので，断言はできないが，もし主体がいっしょに動くのであれば，「さそう」といえるところである。

「すすめる」も，たとえば

○「まあ，御酌しませう。」と丑松は徳利を持添へて勧めた。（破戒 62）

では，「うながす」に近い。そして，

○此日も彼は友人に誘はれなければ行かなかつた。誘はれても行かなかつたかも知れない。その日は村岡の芝居が演られるので，彼はそれを読んだ時から閉口してゐたから。然し友達の仲田に勧められると，ふと行く気になつた。（友情 3）

では「さそう」とおなじである。この文では，まったくおなじ事実について，「さそう」と「すすめる」とが，ならんでつかわれている。また，

○お栄も出て来てしきりに上がるよう勧めたが，信行は「お栄さんもどうですか」などとかえって外出を勧めていた。（暗夜行路・前 41）

では，一つの文の中に，「すすめる」が2度出てくるが，まえの「すすめる」は「うながす」に，あとの「すすめる」は「さそう」におきかえることができる。つまり，まえの「すすめる」は，自分はすでに上にいて，ただ相手にあがることを，もとめたのであり，あとの「すすめる」は自分も相手もともに外へ出るということを，もとめたものだからである。

〔331〕 すすめる／もとめる

これらの動詞は，どちらも，ある人が別の人に対してある行動をとるように，はたらきかけることを表わす。そして，それがだれの利益になるか，という点に，ちがいがみられる。すなわち，「すすめる」は，その行為をすすめられた人間の利益になるようなばあいに，「もとめる」はそれ以外の，むしろ「もとめる」側の人間に利益になるようなばあいに，もちいる。「AがBにXをすすめる」とあれば，Xをすることはにとっての利益であり，「AがBにXをもとめる」とあれば，Xをすることは，Bにとっての利益よりも，Aにとっての利益になる。

まず「すすめる」の方で，比較的利害関係がはっきりしている例をあげよう。

○人々は，衰残の姿いたいたしい市九郎に，「もはや，そなたは石工共の統領（たばね）を，なさりませ。自ら槌を振ふには及びませぬ。」と，勧めたが，（恩讐の彼方に 80）

○卓夫は土地自慢に，いろいろ説明して，もう少しそばまで行って見る事を勧めた

が，彼は広場の入口から引き返さした。（暗夜行路・前 215）

○それが分ると昂子に同情する人は彼女に訴訟を勧めたけれども，（波 229）

これらの例は，みな「すすめられた」人にとって，そのことが利益である，と考えられるものである。「波」の例についていえば，訴訟をすることは，これをすすめられた昂子には利益になる。すくなくとも，そう思ってまわりの人は訴訟をすすめているのである。しかし，そのすすめているまわりの人にとっては，彼女が訴訟をすることは，直接利益をもたらさない。同様に「暗夜行路」における＜車夫＞や「恩讐の彼方に」における＜人々＞にとって，すすめている内容が実現されたとしても，それは直接の利益をもたらすものではない。これらの例文で「もとめる」というと，だいぶニュアンスがかわってくる。相手のためというよりも自分のためにそのことを要求しているかのようにきこえる。もっとも，「すすめる」の例を「もとめる」でおきかえると，つねに不自然になる，というわけではない。つぎにあげるような例では，「すすめる」のかわりに「もとめる」といっても，それほど大きくニュアンスがかわりはしない。

○殊に急進党は新に機関新聞を興すについて，恰好の記者を得たり貌に頻りと入社を勧めて来たのを断然辞して半破（はんぱ）の育英学舎を引受けたのは，（思出の記・上 109）

○駿はそんなに勉強しなくつても学校の成績がいゝので，彼は強ひてそれを勧めなかつた。（波 359）

○どんな贅沢な生活でも望む通りにさせてやるから，女給をやめるやうにと勧めたが，（つゆのあとさき 39）

これらのばあいには，「すすめて」いる側にとっても利益をもたらすのである。「思出の記」についていえば，入社することは，駒井先生の利益であるとともに，急進党にとっても，利益になる。「波」の例では，駿が勉強することは，本人にとっての利益であるとともに，父親である行介にも利益をもたらす。「つゆのあとさき」でも同様で，女給をやめることは君江にとって有利であるだけでなく，これを「すすめて」いる側（清岡）にとっても，大へんありがたいことなのである。このように，「すすめて」いる主体が，まるっきり無関係の第3者ではなく，そのことによって利益をえるような人であるばあいには，「すすめる」「もとめる」どちらをつかっても，おかしくはない。もちろん，そのばあいに，どちらの動詞をつかうかによって，だれの利益としてその動作が表現されているか，というニュアンスのちがいは生じる。

このような利益上のちがいは，これを「すすめ」「もとめて」いる側の態度にもちがいを生じることになる。一般的にいって，「すすめる」がかなり低姿勢であるのに対し，「もとめる」はかなり高姿勢であることが多い。「もとめる」の例についていうと

○そこへやつて来た夫の方を優しくふり返り，その承認を求めた。（真知子・前 98）

○それはこの附近に彼が救ひを求むべき人のゐないことを意味した。（野火 21）

などでは，その「もとめて」いる内容である承認や救いが実現されることは，「もとめて」いる側の利益になる。このようなばあい，その動作はかなり低姿勢に行なわれる。しかし

○李陵はハツキリと嫌な表情をしたまま口を開かうとしなかつた。単于も強ひて返答を**求めようとしなかつた**。（李陵 183）

○志野田先生と須藤先生とに，出頭を**求められている**んです。（人間の壁・上 19）

の例のように，その行動（返答・出頭）の実現がかならずしも特定の個人の利益と密接にむすびついていないような例もある。このような例のばあいには，「もとめる」という表現は，かなり強い態度であたっていることをあらわす。いずれにしても，これらの「もとめる」であらわされていることは，これを「もとめられた」側の利益になることではない。したがって，これらを「すすめる」におきかえることはできない。

〔332〕 **そそのかす，けしかける＜あおる，あおりたてる**

「そそのかす」「けしかける」は，内容が動的であり，「あおる」「あおりたてる」は，動的でも静的でもよい。すなわち，「そそのかす」「けしかける」は，常に，一定の動作をするように，しむけることをあらわす動詞だ。

○おきぬを**そゝのかして**，わしが家出させたとでも思つてゐるんでせう。（波 30）

○それを今流行（はやり）の露助の真似をして，飛んでもないことを**ケシかける**ものがあるとしたら，それこそ，取りも直さず日本帝国を売るものだ。（蟹工船 18）

これに対して，「あおる」「あおりたてる」は，かならずしもそうではない。

○出来高払いや割増給で　労働者間の競争を**あおる**ので（平凡 1956年1月 281）

○記者は二人ともいかにも面白さうに，「うむ，それから，それから。」と**あふり立て**るので年増も興にまかせて，（つゆのあとさき 64）

などでは，一定の動作をするようにさせているので，「そそのかす」や「けしかける」ともいえる。しかし

○彼等の言動は，同じ学問に志す若い者の同情と興味を**煽つた**ので，（真知子・前 50）

○葉子の心に好奇心なり軽い嫉妬なりを**煽（あふ）り立てよう**とする，（或る女・前 95）

などでは，そうではない。これらのばあい，対象は動作そのものではなくて，結局は動作をひきおこすかもしれないが，直接には相手の感情をつのらせることをいっているのである。「興味をそそのかす」とか「嫉妬をけしかける」とかいうことはできない。

これらの間には，はたらきかけの強さのちがいもある。すなわち，「そそのかす」「けしかける」などにくらべて，「あおる」「あおりたてる」は，いっそうはげしい＜はたらきかけ＞なのが，ふつうである。「そそのかす」と「けしかける」の間でも，「けしかける」の方がはたらきかけが強く，「そそのかす」は，相手をおだてたりして，自然にそちらへ向かわせるような，弱い形のはたらきかけをあらわすことが多そうだが，用例の上でこれを示すのに適当なのは見当たらなかった。

＜注＞　これらの動詞は，相手である人間を目的語であらわして，「だれだれをそそのかす」のようにもいえるし，またその目的とする動作をもってきて，「～することをそそのかす」のようにもいえる。「そそのかす」については，この相手と動作とが

1つの文の中に共存していて，動作の方が「～に」という形であらわされている例があった。

○そしてその死に民衆を「嗾かす」ばてれん達は（青銅の基督 7）

〔333〕 たてかえる＜はらう＜あたえる，やる

「たてかえる」は，他人にかわって金をはらうことをいう。

○国から旅費を送らせる手数と時間を省くため，私は暇乞かたがた先生の所へ行って，要る丈の金を一時立て替へてもらふ事にした。（こゝろ 57～58）

辞典では大体上の例にみるように金を＜一時＞はらうことだと規定している。しかし明解国語辞典のようにこの＜一時＞という規定がないものもある。実例からすると，大部分はたしかに一時他人にかわってはらうのだが，はらいっぱなしになってしまうような例もある。

○それら六人の児童のために，代金を立て替えて教科書を買っておくべきだろうか。しかしその立て替え金は，ほとんど返してもらえる当ては無いのだ。（人間の壁・上 146）

このばあいには，一応＜一時＞たてかえるのだが，それがかえってくることは，あまり期待していない。

○「つまり，この娘さんは切符を失くしたのだから，行先までの代金さえ払えば，このまま網走まで行ってもいいわけなんでしょうね」

「ハア」

「じゃア，僕がそのお金を立替えましょう」（小説サロン 1956年1月 215）

この例も同様であって，他人のために他人にかわってはらう，という観点は，はっきりたもたれているが，いずれはかえしてもらうのだ，というようなことは考えていないようである。実際上，他人にかわって金をはらうとき，それが本当にはらいっぱなしになるか，または将来かえしてもらえるのか，あいまいなばあいも少なくないだろうから，「たてかえる」の規定に＜一時＞という条件をいれることが絶対に必要かどうかは疑問である。しかし，はらう側でも，はらってもらう側でも，その金をかえすつもりが全然なく，他人になにかをおごるようなときには，「たてかえる」とはいえない。

○勘定は，駒子が払った。まさか，子供のような隆文君のフトコロを，傷めるわけにもいかなかった。（自由学校 53）

このような例は「たてかえる」におきかえることはできない。この点からすれば，「たてかえる」には，やはり＜一時＞という条件が原則としてついており，ただ，その条件がほとんど無視されてしまうことがある，ということになる。

「はらう」は，あとでかえしてもらうことが，つまり一時的なたてかえであることが，はっきりしているときにも，使えるはずだが，実例には見あたらなかった。つぎにあげるのは，上の「たてかえる」の例にみたように，かえしてもらうあてが，あるのかないのか，あいまいなばあいである。

○「といって未だ脈のある病人を見殺しに出来ますか。いいえ宜うございます，お医者さんの費用は私が**払ひますから**」（厚物咲 25）

「あたえる」「やる」は，対象が金にかぎられていない点で，「たてかえる」や「はらう」などよりも広い。そして，金をあたえるにも

○勘次は今開墾の仕事の為に春までには主人の手から三四十円の金を**与へられる**様にまで成つた。（土・上 183）

○漸(やつと)のこと，お金を**遣(や)つて**，女の方の手を切らせました。（破戒 253）

のように，なんらかの対価としてあたえるときには「はらう」とおなじだが，

○未亡人(びぼうじん)，老父母には扶持が**与へられる**。（阿部一族 54）

○「金ばかりせびって仕様がないヤツだ。この前やった分は どうしたんだ？」（傑作倶楽部 1956年8月 395）

のように，別段対価としてではないばあいには，「はらう」とはいえない。したがって，目的の面でも，「はらう」より範囲が広いわけだ。

〔334〕 **しいれる＜かう**

「しいれる」は，ほかへ売るために商品を買いこむことをいう。

○私は父が**仕入れて**来た，扇子や化粧品を鼠色の風呂敷に背負って，遠賀川を渡り隧道(トンネル)を越して，炭坑の社宅や坑夫小屋に行商して歩くようになった。（放浪記 9～10）

また，なにかを作りだすために，その材料などを買いこむことをいう。

○彼等はその残りのものに依つて何人かの口を養ひ，何人かの身体に着せ，肥料や種子を**仕入れ**，租税を納め，子供たちの学用品を買ひます。（真知子・前 37）

○「さうか。ぢやいよいよ君の**仕入れて**来た牛肉にありつけるわけだね。」（波 15）

「かう」は，かならずしもそのような限定がなく，

○「僕はこれを吸う。」といってゴールデンバットを安吉が買う。（むらぎも 174）

のように，ただちに消費されるものを買うことにも使われる。ただし，「かう」にも，「しいれる」と同じようなばあいに使われることもある。

○はるばる縮を買ひに来る三都の呉服問屋の定宿さへあつたし，（雪国 150）

○度胸だけで買って，それらを西洋人の間へ持ち回っている，（暗夜行路・前 48）

これらは，さらにほかに売るために買い込んだ例である。

○困つてゐるものには自分の家の地金を買ふ金銭まで遣つてしまつて（機械 12）

○これは手前が買つて参つた牛肉でございますし，（波 18）

これらは，なにかを作りだすために材料を買いこんだ例である。したがって，「買う」は「しいれる」にくらべて，より広い領域をしめている。

このばあい，「しいれる」はその主体の面でも限定をうけている。すなわち「しいれる」のは，商人かまたは，何かを作る人である。しかしそれは「しいれる」がある目的をもった行為であるところからくる2次的な制約である。商人や製造業者でも，それを商品あるいは材料として買うのではなくて，自分が消費するために買うときには「しい

れる」とはいわない。

もっとも，「牛肉をしいれてきて，スキヤキをつくる」という表現は，日常的，家庭的なできごととしては，やや大げさな感じがしないでもない。すなわち，「しいれる」がよくつかわれるのは，それを職業とする人がある程度以上の量を「かう」ばあいである，という傾向はみられるだろう。

「しいれる」は実際上大部分「かう」の中に含まれる。つまり，しいれるための手段としては金を払って手に入れるわけである。しかし厳密にいえば，かならずしも金を払わなくても「しいれる」ことができる，といってよいかもしれない。

○どこで**仕入れ**やがつたか，しこたま煙草の葉を腹へ巻いてやがる。（野火 30～31）

このばあい，タバコの葉のしいれ方としては，金を払って買ったとはかぎらない。どこからか，ぬすみ出してきたようなことも，当然考えられる。

つぎの例は，商品として，あるいは，材料として買いこんだのではない，とみられるものである。これらの例をどう考えるべきかは，わからないが，とにかく，このような2例があったことを記録しておく。

○飛石のうへに，山谷の寅の日の縁日で**仕入れ**て来た鉢菊が，素枯れて，痛ましく雨に晒されてゐるのが鈴むらさんの心を惹いた。（末枯 60）

○六カ月前に**仕入れ**たばかりの新兵器は，特殊な螢光物質を使った粒子検出器で，（物質の根源と宇宙を結ぶ 123）

7. 原　　因

現象としてはおなじようなことで，その原因の面におもな差がある，という対立は，そうおおくない。ただし，これに準ずるものとして，人間のある行動が一定のきもちの表現としてあるときに，このきもちを「原因」とよぶならば，この種の「原因」の点で対立している動詞は，かなりある。

なお，サ変の複合動詞には，

湯ざめする，雪やけする，酒ぶとりする，こごえ死にする

のように，前要素に原因をしめす部分をもっているものがある。漢語では，

焼失する，摩損する，病死する

など。2つの動詞をくみあわせたものにも，

すりきれる，まちくたびれる，のみつぶれる，ひわれる

など，前要素が原因的なものがある。

7.1 原　　因

〔335〕 **そよぐ<ゆらぐ，ゆらめく，ゆれる**

「そよぐ」も「ゆれる」ことをあらわすが，「ゆらぐ」「ゆらめく」「ゆれる」などがどんな原因であってもかまわないのに対し，わずかに風がふいて，そのために「ゆれ

る」ことをあらわす。したがって，

○幅広な葉を風にそよがせて，ざわざわと音をたてて居るので（田園の憂鬱 13）

○ただその時の風にゆらゆらゆれて居るその花の美しさは，（田園の憂鬱 97）

のように，あきらかに風が原因であるばあい，「そよぐ」と「ゆれる」はおなじようにつかわれる。（ただし強い風ではいけない。p. 236 参照。）

○里芋の葉が揺れる，畑道になっても，（自由学校 119）

では，風が原因であることがはっきりは示されていないが，おそらくそうであろうから，やはり「そよぐ」といいかえることができる。しかし，おなじように草や木の葉，枝がゆれるばあいでも，たとえば，

○はげしい雨脚にたたかれて揺れる蓮の葉が（講談倶楽部 1956年10月 336）

のばあいには，雨にうたれてゆれるのだから，「そよぐ」とはいえない。

なお，主体の項（p. 72～74）で述べたように「そよぐ」はほとんど植物にかぎられ，「ゆれる」などは広くいろいろなものについて使われる。このように主体の面にちがいがあることは，むしろ原因としての風，それもわずかな風という制約が「そよぐ」にあることからきたものと見られる。「ゆらぐ」「ゆらめく」については，枝や葉で，しかも風以外の原因でゆれている適当な例が見当たらなかったが，やはり「ゆれる」と同様，ほかの原因のばあいもあるはずである。

〔336〕 あふれる＜はみだす

これらは，どちらも，ものが一部分，いれものなどの外に出ることをいう。そして，「あふれる」は，いれものに比べて多すぎるために，はいりきれないものが外に出るばあいにつかわれる。

○雨水が下水からあふれて，路の上が川になっている。（人間の壁・上 272）

○風が吹いたら溢れるかと思ふほど綿はゑんでゐる。（野菊の墓 23）

これに対して「はみだす」はそのような限定がない。

○降りるものが一人もない。デッキまで膨れあがって外みだしたところへ片山がやっとはいり，（むらぎも 212）

○それ以上建て増すと，橋の下からハミ出して，風雨を受けるし，（自由学校 181）

などは，いっぱいになったために，はいりきれないで外へ出てしまったのであり，

○綿のはみ出した寝具があり，（人間の壁・上 304）

○その上杭に引掛けたところはメリンスが切れて，帯心（おびしん）がみにくくはみ出してゐた。（波 81）

などでは，そうではない。これらでは，中身がいっぱいはいっていたかどうかに関係なく，まわりが破れてしまったために，中から出てきたのである。

〔337〕 さざめく＜ざわめく，ざわつく

これらはみな，ざわざわという音をたてることをあらわすが，「さざめく」はその音

が話し声によるばあいだけにつかわれる。

○「おつぎは居るよおめえ，さういに見ねえでも」柱の陰からいつて私語(さざめ)いた。(土・上 208)

「ざわめく」「ざわつく」は話し声であってもそうでなくてもよい。

○「フエレラ」と云ふ語を聞くと家の中の一同は又湧き立つ様にざわめいた。「ユダ！ユダ！」と云ふ声が聞こえた。(青銅の基督 94)

のような例では，当然その音の一部分に話し声が含まれていたと思われる。しかし

○始業式がおわって職員室にもどってくると，部屋のなかは何となくざわめいていた。(人間の壁・上 85)

○食堂はひどく混んでゐた。そのざわついてゐる中で役者の芸評なぞをしながら，三人は食事をした。(波 173)

などでは，かならずしもそうはいえない。話し声が含まれていたと考える方が自然かもしれないが，始業式の日の職員室で，みんななんとなく，いそがしく動きまわっている音，あるいは，こんだ食堂の中で歩きまわったり食器をがちゃつかせたりしている音などだけによって「ざわめく」「ざわつく」で表わされるさわがしさが生まれたと考えても，むじゅんはない。

なお，これらの動詞は，人間の出す音だけではなく，自然現象についても，みな使われる。

○眼を開くと川——月にさゞめく川瀬の音だ。(思出の記・上 63)

○或る夜，庭の樹立がざわめいて，(田園の憂鬱 47)

○畑の横の林が風にざわつき煌(きらめ)き輝くのを眺むべきか。(武蔵野 17)

上の「ざわめく」「ざわつく」については問題ないだろうが，「さざめく」は，あるいは比ゆ的な臨時的なものと考えるべきかもしれない。「ざわめく」「ざわつく」では，人間についても話し声以外のものが含まれるのだから，自然まで範囲を広げてもおかしくないが，「さざめく」のばあい，人間については話し声だけで，そのほかに自然現象の音について使われるとなると，そのあいだを結ぶものが，たち切られることになるからである。

〔338〕 つもる＜かさなる（つみかさなる）

「つもる」は

○淡雪(あはゆき)が，大学の芝生の上や鋪道の日かげに積つてゐた。(仲子・上 106)

○勿論木葉は堆く積つて，雑草も生えてゐたが，(平凡 21)

のように，自然現象として，あるものがふえていくことにつかわれる。「かさなる」は多くのばあい

○一枚置いた下にダイヤの女王は重なつてゐた。(帰郷 354)

のように人間がかさねたために，「かさなった」のであって，自然現象が原因ではないが，

○切出したやうな大巌が二ツ三ツ四ツと並んで，上の方へ層なつて其の背後へ通じて居るが，（高野聖 14）

のように自然現象としてかさなっている例もある。「つみかさなる」は，例がほとんどなく，はっきりしないが，多分「かさなる」とおなじだろう。

○地金の真鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて来たり，（機械 11）

〔339〕 あたる／中毒する

これらは，どちらも，主として食べものを対象としてつかわれる。実例としては食べもののばあいしかなかった。

○毒ダケに当って身を滅ぼす人は（オール読物 1956年9月 229）

○そのヒナの肝臓を五百グラム食べれば中毒するだけのヒソを蓄積することがわかっている。（週刊朝日 1956年9月30日 5）

しかしこのほかに「あたる」は「暑気あたり」があり，「中毒する」は「ガスに中毒する」ばあいがある。食べもの以外にどの程度まで対象の広さがあるか，はっきりしないが，「暑さに中毒する」とか「ガスにあたる」とかは，言いにくいと思われるので，その範囲にはちがいがみられる。

＜注＞ 「あたる」は，「 ～ にあたる」以外に「 ～ があたる」といういい方がある。

○悪いものも食べてゐないのに，何があたつたのかしら，と彼は思つた。（波 238）

「中毒する」には「 ～ が中毒する」という表現はないと思われる。

7.2 主体のきもち

以上は客観的な世界での因果関係が問題になっている語の例である。つぎに，「原因」ということばを広い意味にとって，ある行動をひきおこすようなきもちを含めることにする。そうすると，つぎにあげるような，おおくの例がここにはいる。

〔340〕 ぬかずく＜ひざまずく（ひれふす）

「ぬかずく」は，神仏の前で，また深く尊敬している人の前で，敬意をあらわすために，頭を地面につけることをいう。

○私はつと立って神前に額ずくと，そのまま下駄をはいて（放浪記 71）

○お師匠様私はめしひになりました。もう一生涯お顔を見ることはござりませぬと彼女の前に額づいて云つた。（春琴抄 199）

「ひざまづく」「ひれふす」も，これとおなじようなばあいにつかわれることがある。

〈神仏に〉

○群衆が会堂に満ち，跪いて祈つてゐ｜

〈人 に〉

○同僚の前に跪いて，恥の額を板敷の塵

た。（野火 62）

○酋長の宗やんは，二人の間をとほつて祭壇の前へしづしづと進み，石灰石の地面にひれふして，（潮騒 89）

埃の中に埋めて居た。（破戒 312）

○すきをうかがいてのこの始末，ただただお許しあれ」と地べたにひれ伏した。（読切倶楽部 1956年10月 255）

もちろん，「ぬかずく」と「ひざまずく」とでは，かならずしもその姿勢はおなじではない。しかし，崇拝のきもちをあらわすためにそういう姿勢をとったのだという点では，以上にあげた例はみな同類である。ところが，「ひざまずく」は，そういう特定のきもちなしにつかわれるばあいもある。

○踏み辷らして跪いたを機会に，僕は二口三口雪を嚙むで（思出の記・上 182）

○娘は床に膝まづいて手術台に凭れ，さつき先生の与へた薬の使用便覧を読んでゐた。（本日休診 56）

したがって，「ひざまずく」は要するに一定の姿勢をとることをあらわしているのであり，つねにきもちの表現である「ぬかずく」と対立している。

「ひれふす」についても，「ひざまずく」とおなじとみることができるかもしれない。たとえば岩波国語辞典は，「ぬかずく」については，「額を地につけて拝む。丁寧に拝む。」としているが，「ひれふす」の方は，「頭を地につけるようにしてふしかがむ。」としており，「おがむ」ということばをいれていない。もっとも例解国語辞典は「ひれふす」について「からだを平たくして頭を下げる。拝む。」としている。つまり「ひれふす」が「ぬかずく」と同様につねにきもちの表現であるのか，それとも「ひざまずく」とおなじく単に一定の姿勢をとることをあらわすにすぎないのか，という点については解釈がわかれるのだ。「ひれふす」の用例は6例しかなかったため，なんともいえないが，つぎの比ゆ的な1例以外はみなきもちの表現としての姿勢をあらわすものだった。

○嵐と怒濤とひれふす梢をわたる風の叫喚に飾られた祝日である。（潮騒 59）

お茶の水女子大生についての調査では，「地面にひれふして敵弾をさけた。」という例文に対し，○—8，△—5，×—8だった。

なお，「ぬかずく」「ひざまずく」などが，単に姿勢ではなくてその主体のきもちをあらわしていることは，つぎのような点にあらわれている。すなわち

○貴方は貴方の神に額づく事によつて万人の神に額づくのです。（青銅の基督 49）

○新時代が，彼女にヒザまずいたことにもなるし，（自由学校 66）

のように，相手をあらわす目的語と結びついて使われていることである。「ぬかずく」はもちろんだが，「ひざまずく」のばあいにも，こうなってしまうと，重点は姿勢であるよりも，その姿勢をとることによって表現される相手へのきもちの方にある。

〔341〕 にらむ<みつめる

「にらむ」は，ふつう，相手に対して，いかり・にくしみのきもちをこめて「みつめる」ことをいう。

○伯父はかう云つてにくにくしげに少年を睨み乍らも彼を引きつれて帰つた。（青銅の基督 54）

これを効果や目的の面からみれば，相手をおどかすために「みつめる」ことだともいえる。つぎの例などでは，そう規定した方があたる。

○「そんなこといふと，あんたのこと，姉さんにすつぱ抜いてよ。」
　襄子は上目(うはめ)を使つて，じろつと彼を睨んだ。（波 287）

このようなばあいに，相手は原則として人間である。しかし，「にらむ」は，いつもいかりのきもちをこめて相手をおどかすために「みつめる」ことをあらわす，とはかぎらない。つぎにあげる例では，そういうことはいえないし，対象もまた，人間ではなくなっている。

○両腕をたくしあげて瓢箪を持ち，川のなかの鯰を睨んでいる。（私の人生観 70）

このばあいには，ある目的をもって対象を注視しているのである。つぎの例では，目的をもって注視しているというよりも，結果的にそれをみつめていることになる。

○二人はしばらく前から天井をにらんだままじっと考え込んでいた。（物質の根源と宇宙を結ぶ 111）

別段，天井のようすを知るために，みつめているわけではない。単に目をつぶっていてもいいのだが，たまたまあけていた目が，天井の方を向いていただけの話だ。このような例まで考えれば，＜にくしみのきもち＞というような規定は，あてはめることができない。ただ，すべての例を通じて，かなりの緊張した態度でみつめている，ということはいえる。

「みつめる」のばあいにも，「にらむ」と同様に，一定の感情をこめていることがある。

○母親は憎さげにお島の顔を瞞(みつ)めてゐた。（あらくれ 40）

○行介は倒れてゐる駿を長い間ぢつと見詰めてゐたが，突然，
　「駿！」
　と，鋭く呼んだ。（波 333）

これらのばあいには，いかり・にくしみなどのきもちがこもっているといってよい。したがって「にらむ」と大体おなじような事実をあらわしている。人間を相手にするのではないときにも，「にらむ」と同様の「みつめる」がある。

○かれらの任務はロープを見つめてゐることである。（潮騒 142）

○「今ごろ誰だろう？」われわれは視線を揃えて，遠くの自動車の灯を見つめた。（未知の星を求めて 332）

これらにおいては，ロープや自動車の灯などについてある情報をえたいためにみているのであり，さきほどの「鯰を睨んでいる」に近い。

○板の間に腰を下したまゝ，靴も脱がずにぼんやり宙を見詰めてゐた。（波 376）

○小屋の暗い天井を見凝めて考へ続けたが，解決は見つからなかつた。（野火 60）

これらでは，別段何かを知るために積極的にみるのではなく，結果的にみることになる

のであり，上の「天井をにらんだまま」と同じような場面である。

以上のようなばあいには，「にらむ」でも「みつめる」でも大差はなく，「にらむ」の方が緊張したきもちが，よりはっきり出ているのに対し，「みつめる」はそれほど緊張していなくてもよい，という程度のニュアンスのちがいがあるにすぎない。しかし「みつめる」には「にらむ」でおきかえると大分かわってしまうものもある。

○津上は口辺に軽い皮肉な笑ひを漂はせながら三浦を見詰めた。（闘牛 124）

○少女はやつと笑ひから醒め，真正面から若者の顔をまじめに見つめると，また吹き出した。（潮騒 38）

これらでは，「にらむ」とはいえない。このように人間が対象であるばあいに「にらむ」をつかえば，やはりある程度いかり・にくしみ・警戒などのきもちをあらわした動作になるだろう。「闘牛」の例も「潮騒」の例も，相手に対して積極的にそういう感情をもって対しているわけではない。

〔342〕 うなだれる＜うつむく

「うなだれる」は，一定のきもちのあらわれとして頭をたれることをあらわす。そのきもちにはいろいろあり，

○女は消え入るやうにうなだれてゐた。ひと目で，暴行を受けた娘だとわかつた。（本日休診 44）

では，はずかしさをあらわしている。

○「然うですね。洋服屋なんてものは，迚も見込はありませんね。私は二日歩いてみて，つくづく此の商売が厭になつてしまつた。」

職人は首を項垂れて溜息を吐いた。（あらくれ 167）

では落胆，

○どうかすると，うな垂れて萎れてゐることがあつた。（生まざりしならば 186）

では，単に元気がないことをあらわしている。

○先生はそれをあける前に一度きいてみる。

「これ，何の写真？」

生徒はうなだれていて，答えない。（人間の壁・上 218～219）

のばあいには，これらのいろいろなきもちが複雑にまじりあったもので，単純にはいえないだろう。

なお，「うなだれる」の以上のようなきもちについては，大体辞典にのべられているが，つぎのように，礼拝するために首を傾けることに「うなだれる」がつかわれることは，注意されていない。

○私は箸をとつて食はうとするとき，ふと皆がうなだれてゐるのに気づいた。まつ子が静かな夕餉の祈りをしてゐたのである。（冬の宿 17）

○半開の扉を押して入ると，群衆が会堂に満ち，跪いて祈つてゐた。声なき音楽が，彼等のうなだれた頭の上を渡るらしかつた。（野火 62）

これに対し，「うつむく」は，きもちの表現には限定されていない。

○非常に愧ぢ入つた様子に，顔真赤にして俯向いてゐる。（野菊の墓 9～10）

では，はずかしさ，

○そんな言葉はもとより，無言の涙さへ浮べ得ずに，たゞぢツとうつむいてゐるやうな別れの時が近づいて来ると，（多情仏心・前 296～297）

では，かなしさによって首をたれているといえ，ここらは「うなだれる」に近いが，つぎのように，きもちには関係ないばあいにも，自由につかわれる。

○炬燵の火加減をなほすのにうつむいたまま，多計代は答へた。（仲子・上 136）

○少女は，土間に立つたまゝ俯むいて，ハンドバッグの蓋をひらき（帰郷 141）

○ちやんと椅子に腰をかけ，半ばうつむいて，眠つてはゐないやうな恰好で行儀よく眠つてゐる。（本日休診 51）

〔343〕（ふんぞりかえる＜そりかえる）

「ふんぞりかえる」については，「いばって」という限定をつけている辞典と，つけていない辞典とがある。「ふんぞりかえる」という動作をするばあいに，ふつう「いばる」きもちがあることは，たしかであろう。

○彼は自動車の中にふんぞり返つて，大勢の前を悠然と通り過ぎた。（波 241）

○社長室に，岡部弥太は文字通りふんぞり返つてゐた。（闘牛 127）

この「闘牛」の例で，「文字通り」ということばがついていることは，逆にいえば，「ふんぞりかえる」が，文字通りからだをそらしていなくても，いばってさえいれば使えることを示している。もちろん，文脈からだけでは，単にいばっているのか，からだをそらしているのか，というところまでは分からないのがふつうである。ところが，いばるのではなくて，単にからだをそらしているにすぎないのに，「ふんぞりかえる」がつかわれている例もあった。

○しかし駿はその婦人の腕の上でも，しきりに踏んぞり返つて泣続けた。（波 177）

したがって，「いばる」という規定は絶対必要なものというよりも，多くのばあいには，という限定つきでつけるべきものかもしれない。ただし今度のばあい，「ふんぞりかえる」が，いばった状態につかわれたのが5例，それ以外につかわれたのは，上にあげたもののほか，やはり赤ん坊について「波」の中でつかわれている1例があったにすぎない。

「そりかえる」も，「ふんぞりかえる」とおなじような文脈でつかわれることがある。

○彼は角刈りの巨漢であつて，濃い眉と，大きな吊り上つた眼と，円く坐つた鼻と，黒々とした髭の下の大きな口を持つた四角な顔とを真正面から此方に向けて睨みつけ，襟には菊の造花を挿し，腕を背にまはして反りかへつてゐる。（冬の宿 10）

この例では，あきらかにいばっているのであって，「ふんぞりかえる」におきかえてもいい。ただし，そのばあいにも「ふんぞりかえる」の方がより俗語的であるという文

体上の差はある。しかし，「そりかえる」は，別段いばっているのでなくても，つぎのようにいろいろなばあいにつかわれる。

○「馬鹿なことを言ひたまへ。」と丑松は**反返つて**笑つた。（破戒 37）

○見れば省吾の弟，泣いて**反返る**児を背負(おぶ)ひ乍ら，一人の妹を連れて（破戒 57）

○病人は復た意識を恢復して，びりびりと身体を撼はせて，太い繩でぐつと吊されたかと思ふやうに後へ**反**(そりかへ)**つて**，其劇烈な痙攣に苦しめられた。（土・上 50）

＜注＞　「ふんぞる」ということばは，現代語の辞典にはあまりのっていないが，これを他動詞としてつかった例が1つだけあった。

○そして胸を**ふんぞつて**ゐるんですが，やつぱり大いに狼狽して赤い顔をしてゐましたよ。（冬の宿 28）

〔344〕 しかめる＜ゆがめる

「顔をしかめる」「顔をゆがめる」という似た表現についてのちがいの1つは，「しかめる」が多くのばあい主体の不愉快な気もちの表現としての動作をあらわしているという点である。

○足腰の痛みに顔を顰めるくらゐがおちなのだが，（多情仏心・前 318）

○事務長は葉巻の煙に顔をしかめながら，シャンペンをついで（或る女・前 172）

これらの例では主体が痛いこと，けむいことの表現として顔をしかめているのである。感覚的な不愉快さを表現するのに顔をしかめている例としては，このほか，においや渋がきの味，くすぐったさなどのばあいがあった。また，つぎのようにもっと感情的な不愉快さのばあいにも，「しかめる」は使われる。

○「むゝ――あの穢多か。」と郡視学は顔を渋(しか)める。（破戒 23）

○それを見ると，安夫は眉を**しかめて**，歌島の唯一のこの屈辱の思ひ出から目をそむけた。（潮騒 57）

ただし，つねにそのような気もちがともなう，とまではいいきれない。というのは，つぎのような例があるからだ。

○つんぼは人の云ふことを聴かうとして眉を**しかめ**眼や口を開け（春琴抄 139）

このばあいには，眉のあたりにしわを寄せるという外見は同じであるが，不愉快なために特にそうしているわけではない。

○俄商人はカンテラの光明と木陰の薄い闇との間に立つた其の姿が明瞭(はつきり)と見極め難いので，頻りに目を**瞬めつつ**（土・上 190）

この例では，対象をはっきり見ようとして目を細め，それが目のあたりにしわを寄せることになっている。つまりこの例も不愉快な気もちのあらわれではない。

しかし「しかめる」の例が，数十あるうちで例外となるのは，以上の2例だけなので，やはり傾向としては，主体の不愉快な気もちというものを認めてよいと思われる。これに対し，「ゆがめる」では不愉快な気もちをともなっていない例が少なくない。

○それから津上は気難しい顔をゆがめて，ともかくこの女の情人だといつた看板を顔にぶら下げて，仁和寺くんだりまでのこのこ出掛けてゆくことは真平だなと言つた。（闘牛 107）

というような例では「顔をゆがめて」が主体のいやな気もちのあらわれとして使われており，そのかぎりでは「顔をしかめて」といってもさしつかえないと思われる。しかし，「ゆがめる」にはまたつぎのような例もある。

○唇をゆがめて，唾をチエツとはいた。癖だつた。（蟹工船 32）

○口を三角形にゆがめると，背のびでもするやうに哄笑した。（蟹工船 41）

○二三杯の酒で血色のよくなつた顔を，気持のいい程きゆつとゆがめて，三谷はなほ喚呵を切り，（闘牛 136）

これらの例では，顔をゆがめたことは，くせにすぎず，または，大声でわらった結果や勢いよくたんかをきった結果である。このように，不愉快さのあらわれでなくて，顔をゆがめている，という例はひじょうに多くみられるので，「顔をゆがめる」については，主体のきもちという制限をつけることが，まったくできない。

〔345〕 しなだれる＜よりかかる，もたれる，もたれかかる

「しなだれる」は，相手が人間にかぎられるが，その際，さらに，＜相手にあまえるような，なまめかしいようすで＞という限定が加わる。「よりかかる」などは，そういうばあいもあるし，またそうでないばあいもある。

○駒子は島村の肩に手をかけてしなだれて来たが，（雪国 140）

つぎの「よりかかる」などは，「しなだれる」に近いきもちの表現に使われた例である。

○君江は例の如く新しい男に対する興味を押へる事ができないので，既に帰仕度をしかけた木村の膝によりかゝつて其の手を握つた。（つゆのあとさき 82）

○ホテルの屋上でアメリカ人に凭れて映画をみてゐる彼女とかを，（冬の宿 161）

○お島はその時の調子で，どうかすると心にもない自分の身の上談がはずんで，男に凭れかゝるやうな姿態を見せたが，（あらくれ 216）

しかし，つぎの例では，相手が人間であるのに，「しなだれる」におきかえることはできない。このばあいには，そういうきもちの表現ではなくて，むしろひとりで立っていることができないような疲れのあらわれとして，この動作をとったのである。

○姉は弟を自分の胸によりかからせて睡らせながら，（銀河鉄道の夜 304）

○帳場に坐り込んだ内儀さんの膝に凭れて，七つほどの少女が，ぢつと葉子の眼を迎へて葉子を見詰めてゐた。（或る女・前 60）

○咳がやむと，身をくねらせて，起して，私に凭れかかるやうにしたが，また咳が出だしたので，俯伏し，（冬の宿 163）

＜注1＞　「もたれる」は，ふつう自動詞だが，これを他動詞として使ったつぎの例が

あった。

○指さして伴子に教へてから，自分も欄干に腕をもたれて覗き込んで，（帰郷 281）

＜注2＞　つぎの例は，「しなだれる」が「うなだれる」と同様の意味でつかわれている。これは誤植または誤用であろう。

○朝日の照り返へしに眼がチクチクとしみるやうな石だたみの道を裕佐は自分の家の方へ歩いてゐた。何と云つて弁解してもおのづと滅入り込んで行く胸の暗さを抱いて悄然としな垂れた彼の姿は惨めであつた。（青銅の基督 34）

〔346〕 あしらう＜あつかう

「あしらう」は，相手をばかにしたような気もちで応待する動作にいう。

○「私のことならどうでもお好きなやうにお書きなさいな」と私を軽く遇(あしら)ふやうに言ひ足した。（風立ちぬ 117）

○次に野島が紹介されたが，それは露骨に冷淡にあしらはれた。（友情 74）

そういう主体の気もちは，外にあらわれるばあい，上の例のように「軽く」とか「冷淡に」とか直接的なかたちであらわれるとはかぎらない。

○細君は心の侮蔑を面(おもて)にも現はさず，物静かに待遇(あしら)つてゐた。（あらくれ 22）

○お島は体(てい)よく遇(あしら)つてゐた。（あらくれ 72）

○客にタテつくよりも，程よくアシらって，早く帰って貰いたい（自由学校 110）

のように，表面的には自分の方がへりくだって，相手をていねいにあつかっていても，心がこもっていない，という意味で，軽べつの気もちが，かえってそこに表現されていることもある。「あしらう」のうち，そういう気もちにあまり関係がないように思われるものとして，つぎの例があった。

○恐ろしいほどやさしく親切に葉子をあしらふかと思へば，皮肉らしく馬鹿叮嚀に物を云ひかけたり，或は突然路傍の人に対するやうなよそよそしさを装つて見せたりした。（或る女・前 134）

このばあいには，かならずしも，相手を軽べつしているとは考えられない。単につぎにのべる「あつかう」とおなじようなことの表現であるようにおもわれる。

「あつかう」は主体の気もちがどうであろうとかまわない。

○そうして母親たちは先生から甘やかされ，表面だけは丁重に扱われているのだった。（人間の壁・上 189）

のように，本心はそうでないのに，表面だけ，ていちょうに「あつかう」ときは「あしらう」と同じであるが，

○青木さんが自分を一人前の女のやうに扱つて下さるのに馴れて，（桑の実 148）

○同じ同胞(きょうだい)でどうしてお前だけが別に扱われているのかと（暗夜行路・前 188）

のように，特に相手を軽べつしたりしている気もちがないばあいには，「あしらう」でおきかえることはむずかしい。

〔347〕 ふきだす／ほくそえむ＜ほほえむ≪わらう

これらの動詞は，あらわれた動作だけでなく，その動作をひきおこした主体の気もちにも，ちがいがある。むしろ，その気もちのちがいが，動作の差となってあらわれているのだ。

大ざっぱにいうと，「ふきだす」はおかしい気もち，「ほくそえむ」はうれしい気もち，「ほほえむ」はうれしい，あるいは，たのしい気もち，そして「わらう」は，これらすべてをふくんだ気もちのあらわれとしての動作をあらわす。

まず，「ふきだす」は，なにかおかしい，こっけいなことにぶつかって「わらう」ばあいにつかわれる。

○上向けた靴の大きさには葉子は**吹き出し**たい位だつた。（或る女・前 234）

○あたしァ，ブッと，**吹き出しちゃった**んだよ……。いいえ，顔がおかしいんじゃない，男ってものが，急に，滑稽に見えてきたのさ。（自由学校 313）

なお，「ふきだす」は，わらいをこらえていたのが，こらえきれずに急にわらいだした，というばあいにつかわれることが多い。上の「或る女」の例はそういう状態であり，

○さう云ふ美津枝の顔つきは，何故かぷツと噴飯（ふきだし）さうに，笑ひをこらへてゐた。（多情仏心・前 225）

もそうである。ただし，「自由学校」の例のように，かならずしも，わらいをこらえている心理状態が先行するとはかぎらず，急におかしくなると同時に「ふきだす」こともある。

「ほくそえむ」は，自分の利益になったり，自分の予想が当たったりしてうれしいときに，自然に出るわらいである。

○そうかと思うと“これで碁界もトップ記事で話題にされるんだから大したものサ”と**北叟笑む**のもあるといった次第。（文芸春秋 1954年3月 257）

「ほほえむ」も，うれしい気もちのばあいに，ひとりでに出るわらいをあらわす。

○何が嬉しいともなく，ひとりで**微笑まれた**。（生まざりしならば 197）

○有繋（さすが）に心から嬉しさうに**微笑みながら**，（多情仏心・前 90）

しかし，「ほほえむ」は，うれしい気もちという表現ではあまりふさわしくないようなわらいをもあらわす。

○家隷は帰つて，「しまひの四つ丈は聞きましたが，総体の杼数（ひちかず）は分りません」と云つた。橋谷を始として，一座の者が**微笑んだ**。橋谷は「最期に好う笑はせてくれた」と云つて，家隷に羽織を取らせて切腹した。（阿部一族 41）

この例では，むしろ，こっけいな現象を見てわらったのであって，その意味では「ふきだす」に近い。これが，切腹というような深刻な場面でなく，大声をあげてわらったのだったら，おそらく「ふきだした」と表現されただろう。したがって，「ふきだす」と「ほほえむ」のちがいをうみだす心理状態のちがいは，質的なものよりも量的なものであるともいえる。「ほほえむ」という現象がおだやかな動作であるように，それをうみ

だしている心理状態も，はげしいものではなく，おだやかなものである。

〔348〕 いそしむ／はげむ，つとめる＜はたらく

「いそしむ」「はげむ」「つとめる」は，客観的にあらわれたようすに特徴があるとともに，そのようすをうみだしている，主体の気もちにも特徴があるといえる。「熱心に」ということばは，動作としてあらわれた側面と，それをうらづける主体の気もちの面と両方をふくんでいるのだが，ちょうどそれと同じことである。

○彼等は，古い伝統を守って，商売にいそしんでいるのである。（キング 1956年10月付録 103）

○病身な妻を控へて商売に励んで来た長いあひだの身の上談（あらくれ 74）

○市九郎は，十日の間，徒らな勧進に努めたが，何人もが耳を傾けぬのを知ると，奮然として，独力此の大業に当ることを決心した。（恩讐の彼方に 74）

このうち，「いそしむ」と「はげむ」「つとめる」とでは，多少ちがいがある。ふつう，辞典の説明は，これらについて，まったくおなじような規定をしているが，「いそしむ」は，単に熱心だというだけではなく，すこしゆとりをもって，たのしみながら，しかも熱心にはたらくことをあらわす。〔これは「楽しいと思いながら働く」という意味で，日本人の勤勉さを表わす代表的な単語だと思う。（金田一春彦「日本語」144）〕

したがって，たとえば

○レフトは鷲と白崎でレギュラー争いだ。鷲がこの頃は打撃フォームを変えて懸命に励んでいる。（野球界 1956年2月 156）

のように，「懸命に」とか「必死に」とかいうような限定がついていて，ただひたすらまじめに熱心にやっている例は，「いそしむ」におきかえることはむずかしい。

「はたらく」は，このような主体のきもちの面での限定，あるいはそれが外にあらわれた客観的なようすの面での限定がない。

○婢を相手に裁縫物をしたり，精一ぱいに働いて居た。（思出の記・上 16）

○いままで遊びながら洋裁学校に行っていた，だから，そのままもっていって，また遊びながら働こうという，（装苑 1956年4月 131）

「思出の記」のように，熱心にはたらいている例の方がずっと多いが，「遊びながらはたらく」というように，のんびり不熱心にはたらくばあいにも，このことばはつかわれる。

＜注＞　「はげむ」ということばは，自他を区別している辞典では，自他ともにみとめているものもあるが，おおくは自動詞としている。そして，現代語では上に引いたように，ふつうは「〜にはげむ」というかたちでつかわれる。ところが，今度採集したなかで，文学作品のばあいには，つぎのように「〜をはげむ」というかたちの他動詞の例の方が多かった。

○阿部一族は面目を施して，挙つて忠勤を励んだのであらう。（阿部一族 55）

○それからずつと稽古を励んでをられました，（春琴抄 143）

「～に」と「～を」，つまり自動詞と他動詞の例がどのくらいあったかをあげると，つぎの表のようになる。

	～に	～を
総合雑誌	2	—
雑誌90種	6	—
文学作品	2	7

この表にみるように，総合雑誌と雑誌90種には，自動詞の例しかなく，文学作品では他動詞の方が多い。それで，これはあるいは，年代のちがいによって，比較的古いばあいには他動詞，新しくなると自動詞として使われる傾向があるということかとも考えられる。文学作品のうち，自動詞として使われた2例は「あらくれ」と「人間の壁」各1例ずつであり，他動詞として使われているのは「春琴抄」に3例，「土」「阿部一族」「暗夜行路」「真空地帯」に各1例ずつである。しかも「真空地帯」の例は，他動詞の中でやや特殊だ。というのは，ふつう「～をはげむ」というかたちでのばあい，その「～」の部分には，上にあげたように，「忠勤をはげむ」「稽古をはげむ」と，そのするしごとの内容がくるのだが，「真空地帯」の例は，

○今日はいつの日よりも力を励まなければならなかった。（真空地帯・上 201）

のように，「力を励む」というかたちで使われているものだからである。なお，「～にはげむ」というかたちが，いつから用いられているかは明らかでない。（国語研究所で調査した明治初期の郵便報知新聞の例では「はげむ」が2例あり，ともに「～をはげむ」と他動詞になっている。）

〔349〕 はしゃぐ／どよめく＜さわぐ

「はしゃぐ」は，＜うれしい・たのしい・陽気な＞などと表現できるような心理的状態において「さわぐ」ことをいう。

○坊ちやんは寝床へお這入りになるとまた目がさえたやうに，しばらくはしやいでいらつしたが，その内にくたぶれて寝入つてお了ひになつた。（桑の実 31）

○ジャズソングを歌つてはしやいでゐる学生たちの方を（帰郷 110）

「どよめく」について，ふつう辞典は「ざわざわとさわぐ」程度の解説しかしていない。しかし「どよめく」は単に「さわぐ」ことではなく，なにか事件があってそのためにおどろき，あるいは，思わず声をあげたり手をたたいたりしてさわぐことである。

○船舷（ふなばた）に立ちならんで物珍らしげに陸地を見物してゐたステヤレーヂの男女の客は一斉（いっせい）に手をたゝいてどよめいた。（或る女・前 165）

○照吉ははじめて顔を向けて，にこりともしないで言つた。

「その話ならもう決つとるがな。新治は初江の婿になる男や」

女客たちは堰を切つてどよめいた。（潮騒 155）

このように，おどろき・感動などが原因になっているところからみて，次のようなあて

字がしてあるのも自然に思われる。

○校を挙げて宛ながら一の「モツブ」となり果てた生徒一同，忽ち動揺めいて，（思出の記・上 110）

「さわぐ」の方は，そのような感情の動きがあるとはかぎらない。

○玄関で追付いて，何を如何するのだか，キヤツキヤツと騒ぐ。（平凡 78）

○些いと何かいはれると，もう好い気になつて一人で騒いでゐる（あらくれ 94）

などの例では，「はしゃぐ」に近く，

○一旦つなぎ目が切れたとなると，筏は容赦もなく流れ出して止まるところを知らなかつた。

向うの筏の上で生徒たちが騒いでゐるばかりでなしに，丁度河を上つて来た，大きな荷足の船頭まで，何か大声でわめいてゐた。（波 78）

という例は「どよめく」に近い。しかし，

○乳母や，女中などは，台所の方でガタガタ顕へて居るらしいから，私が行つて，じたばた騒がないやうに云つて来ようよ。（恩讐の彼方に 61）

では，恐しさのあまり「さわぐ」のであり，

○君江はきつと泣いて騒ぐだらうと思ひの外（つゆのあとさき 44）

のばあいは，落胆などによって「さわぐ」のである。

なお「さわぐ」が「はしゃぐ」に対して完全に上位にあるとはいえない。心理的に限定されていないという意味では，たしかに上位にあるのだが，外にあらわれたようすからいえば，「さわぐ」ではおきかえられない例もある。というのは，「さわぐ」の方が一般に大きな物音をたてることをあらわし，「はしゃぐ」はそれほど大げさでなくても，うれしい気もちがその動作にあらわれていさえすれば，つかえるからだ。

○女は声を沈めて微笑むと，少し芸者風にはしやいで，

「私もそんなのが大好き，あつさりしたのが長続きするわ。」（雪国 25）

○社長もすべての疎通を快く感ずるらしく，

「これで顔が揃つた。まあ祝盃として一つ」

などとはしやいだ。（河明り 323）

これらの例では，「さわぐ」といいかえるのは大げさすぎる。この程度の静かなはしゃぎ方でも，主体のうれしい気もちは十分にあらわれており，その気もちの表現という目的は達せられている。

＜注＞　「はしゃぐ」は一般に無意志的な動作をあらわす。ただし，つぎの例のように意志的なばあいもある。

○腹の底には何か冷たいものがよどんでゐながら，行介は変にはしやぎたかつた。（波 18）

「さわぐ」は意志的，無意志的両方のばあいがある。

〈意志的〉	〈無意志的〉
○わざと騒いだり奇声を発したり机の下にもぐったりする行為が，（人間の壁・上 212）	○葉子は予めこの刹那に対する態度を決めてゐたから慌ても騒ぎもしなかつた。（或る女・前 8）

7.3　気もちと行動

以上の，原因における対立とはちがったものだが，行動と気もちとの表現の対立——いわば結果と原因との対立の例をつぎにあげる。

〔350〕 はしゃぐ，いわう／よろこぶ，うれしがる

これらの動詞のあいだには，純粋に気もちの表現であるか，それとも，気もちがなんらかの動作・表情などで外にあらわれたことを表現するものであるか，というちがいがある。

「はしゃぐ」「いわう」は，気もちが外にあらわれること，一定の気もちにもとづいたある種の動作をあらわす。態度をあらわすといってもよい。ただし，そのもとになった気もちには，ちがいがある。「はしゃぐ」は，自分のことについてよろこび，うれしがることをいう。

○時ちゃんはぶざまな行李がなくなったので，陽気にはしゃぎながら私の両手を振った。（放浪記 263）

これに対し，「いわう」は，主として他人のめでたいことに対して，よろこびの意をあらわすのである。

○父や母が私の卒業を祝ふために客を呼ばうと云ひだしたのは，（こゝろ 112）

もっとも，つぎの例のように，他人というより自分たちのよろこびを「いわう」ばあいもある。

○東家西隣新酒に舌鼓うつて豊年を祝ふのである。（思出の記・上 7）

しかし，「はしゃぐ」とちがって，純粋に自分個人にうれしいことがあったときに「いわう」というのは不自然だろう。いずれにしても，「はしゃぐ」や「いわう」は，なにか外にあらわれた動作についていうのが原則だ。したがって，それは本当の気もちとは一致していないばあいがある。つぎの例を参照。

○口で祝つてくれながら，腹の底でけなしてゐる先生の方が，（こゝろ 101）

一方，「よろこぶ」「うれしがる」は，気もちそのものをいっている。それは，

○少年なぞは，手を拍って，雀躍して，喜んだ。（破戒 81）

○民子は分けてやつた半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがつた。（野菊の墓 20）

のように，外にはっきりした形であらわれていることもあるが，

○他の教授は麾いて致すべしと，心ひそかに喜んだ。（総長就業と廃業 366）

○私は事情が自分の推察通りだつたので，内心嬉しがりました。（こゝろ 245）

のように，心の中だけのことで，外へはすこしもあらわれない（あらわさない）ばあい

もある。

ただし，「あらくれ」や「多情仏心」には上にのべた「はしゃぐ」の説明とむじゅんするような例，すなわち純粋にきもちの問題として「はしゃぐ」をつかっている例がみられる。

○お島は燥(はしや)いだやうな気持で，いつになく身綺麗にして来た若い職人や，お島の放縦な調子におづおづしてゐる順吉に話しかけた。（あらくれ 253）

○初雪，——その初めてと云ふことが，なんとなく，要するに子供らしく，信之の心をはしやがせた。（多情仏心・前 65）

○はたに人がゐるなかで，隠語ゆゑに，平気でさう云ふ話が出来ると云ふ意識で，一層燥(はしや)いだ気持にされてゐた。（多情仏心・前 135）

これらが，年代や作家による特殊な例であるか，あるいは，一般的につかわれる用法であって「はしゃぐ」がつねに動作にあらわれるという説明はゆきすぎであるかは，明らかでない。

〔351〕 とむらう／かなしむ

「とむらう」ときの気もちは，かならずしも「かなしむ」ことではない。

○息子の命日を弔ふといふやうなこともしなかつた。（厚物咲 27）

のばあいには，「かなしむ」というよりも死者の冥福をいのるということだし，

○天竺に行ってお釈迦様の跡を弔いたいという熱望を（私の人生観 91）

の例では，昔をしのびたいという気もちである。一方，「かなしむ」の対象はかならずしも死ぬことではない。

○彼は今更に，半生の悪業の深きを悲しんだ。（恩讐の彼方に 71）

しかし，いずれにしても，「とむらう」は，自分の気もちを何らかのかたちで行動にあらわしたものであり，「かなしむ」は行動にあらわれるかいなかをとわずに，気もちだけを表現したことばである。このことは，「とむらう」と「かなしむ」がともに人の死を対象にしているときにも，はっきりあらわれている。「とむらう」は，

○旅で死んだといふことを殊にあはれに思ふかして，扇屋の家の人もかはるがはる弔ひに来る。（破戒 326）

のように何らかの動作にその気もちをあらわすことをいう。ただ心の中で深くかなしんでいるだけでは，「とむらった」ことにならない。おじぎとか，焼香とかの動作をすることが必要だ。一方，

○天皇のであるにしろ，人の死は悲しまれていいと安吉は思った。（むらぎも 232）

○母の死を憐れむとも悲しむとも知れない涙を眼には湛へながら，（或る女・前 100）

などでは，「かなしむ」が動作に表現される必要がないことを示している。「或る女」の例では涙をたたえているのだから，その点では動作にあらわれているともいえるのだが，涙を見せなくても「かなしむ」ことは当然ありうる。

8. 評　　価

ひろい意味で「評価」に関係のある動詞には，いろいろな種類がある。「いらっしゃる」「さしあげる」のように，動作の主体や相手に対する敬意をあらわすものもその1種である。（p. 96, p. 185）また，「なおる」や「ゆがむ」は，変化の結果に対する評価をあらわしている。（p. 419以下）ここでは，これらとちがって，動作・状態自体に対する評価をふくんでいる，と考えられる例をあげる。

8.1　よい評価

この種のもので，よい評価をふくんだ動詞はすくない。「かおる」「くゆらす」も，この現象自体についてというより，その内容についての評価であり，結果に対する評価の方にいれるべきかもしれない。

〔352〕 かおる＜におう

「かおる」は，いいにおいのときにつかわれる。

○アカシヤの香る並樹道を一人できままに歩いてみたいものなり。（放浪記 65）

「におう」は，いいにおいでも，わるいにおいでもかまわない。

＜いい＞

○誰も居ないサロンの壁に，薔薇の黄いろい花がよくにおっていた。（放浪記 259）

＜わるい＞

○ぷんぷんにおう堆肥のれき汁でよごれた空地の一番奥の家だった。（ニューエイジ 1953年11月 86）

つぎのような例では，いいにおいか，わるいにおいか，わからない。

○夏の日ざかりに大きな空家に入つたやうな感じで，埃や湿気が匂ひ，（帰郷 244）

○厩にはもう馬は一匹もいないのだが，暗い奥からは生きものの匂いがまだ匂っていた。（落城 46）

もし，ここで「かおる」をつかえば，積極的に，いいにおいだと評価していることになる。

＜注＞　「におう」を他動詞としてつかった例が1つあった。

○彼は足もとから立ちのぼるその土の匂を，香を匂ふ人のやうに官能を尖らせて沁み沁みと味うて見た——（田園の憂鬱 15）

〔353〕 くゆらす／くすべる

「くゆらす」は

○事務長は煙草をくゆらしたまゝ新聞を見続けてゐた。（或る女・前 236）

のように，たばこについての例しかなく，「くすべる」は1例もなかった。辞典には，「くゆらす」については「香をくゆらす」の例，「くすべる」については「紙をくすべ

る」「いおうをくすべる」などの例があがっている。これらはどちらも，あまりほのおをたてない状態でけむりを出すようにもやすのであるが，「くゆらす」は，たばこにしろ，香にしろ，そのにおいがよいものであり，においを味わうためにする動作である。これに対し「くすべる」はむしろ不愉快なにおい・けむりをだすばあいに多く使われるのではないかと思われる。つまり名詞における「かおり」と「におい」との対立に近いものが，これらの動詞の対象における対立にも見られるようだ。

〔354〕 永眠する／落命する＜死ぬ，死亡する

死ぬことをあらわす動詞や慣用句は，かなりたくさんある。そして，それらのあいだには，文体・敬意などの面で，こまかいニュアンスのちがいがみられ，評価という観点から問題にすべきものもおおい。ここでは，そのなかから，「永眠する」「落命する」をとりあげる。

「永眠する」は，死を美化して，やすらかに死んだように表現する。

○夫におくれること二年，三十九才で一代の才女は永眠した。（講談倶楽部 1956年4月 264）

から，事故死などを想像することはないだろう。

「落命する」は，逆に，不慮の死をあらわす。

○六部はその晩急病のために其処で落命したのであつた。（あらくれ 9）

「死ぬ」や「死亡する」は，この点，中立的である。

○愛する弟子たちにかこまれて，安らかに死ぬことが（出家とその弟子 213）

では「永眠する」に，

○火の難，水の難で死ぬ人もある。（出家とその弟子 214）

では「落命する」に，それぞれ言いかえることができるが，逆に，上の例を「落命する」で，下の例を「永眠する」で，言いかえることはできない。

8.2 わるい評価

わるい評価をふくんだ動詞の例は，よい評価の例よりもずっとおおい。そして，「かおる」が美的価値を問題にしているのに対し，むしろ倫理的な価値をとりあげている。なお，合成語では，

悪あがきする，むだづかいする，犬死にする；悪用する，死蔵する，失言する，横行する

のように，評価をしめす構成要素がついていることが少なくない。

〔355〕 でっちあげる＜つくりあげる，つくりだす

「でっちあげる」は，わるい評価をともなう動作にいう。ふつうは

○また反対者は，反共文献ないし自分で勝手にでっち上げた共産主義の悪夢を唯一の材料としている。（革命期における思惟の基準 143）

のように，事実にあわない話や考えをつくりあげることをあらわすが，

○選挙のときだけ間に合わせの「政策」というシカツメらしい作文をでっちあげるような人間の集団は，政党とはいえない。（中央公論 1954年2月 174）

○私の会社はどれも終戦後に作り上げたものばかりです。一代で築いたといひたいが，実は一年でつち上げた。ただの一年ですよ。（闘牛 95）

のように，もうすこし実体のあるものをつくるばあいにも，使われることがある。いずれにしても，そのつくられるものは，チャチなまにあわせのものであり，そのつくり方も雑で，手をぬいている。つまり，つくられる対象と，それをつくるやり方とが，ともにわるい評価をうけているのだ。

「つくりあげる」「つくりだす」は，評価をともなわない。

○漁夫はスパイの目的を以て区域内に侵入したのだという解釈を作り上げようとする，これまた定石通りの手である。（中央公論 1954年5月 125）

○王仁三郎が作り出し書きまくる神話のかずかずは，（人生手帖 1956年10月 76～77）

などでは，あまりよい評価をあたえていないから，「でっちあげる」といいかえてもよいかもしれないが，

○察する所二十一年も孤独で生きてゐた間に在りし日の春琴とは全く違つた春琴を作り上げ愈々鮮かにその姿を見てゐたであらう（春琴抄 209）

○かような経験尊重の生活から，一つの全く新しい思想を創り出すことに着目した人は絶無であったと言ってよい。（私の人生観 139）

などでは，「でっちあげる」にすると不自然である。

〔356〕 うろつく，ほっつく，ほっつきあるく／さまよう，さすらう

これらの動詞は，事実としては，大体おなじようなことをあらわすのに用いられる。たとえば，つぎにあげる例では，「うろつく」と「さまよう」とが，おなじ現象についてつかわれている。

○三途（さんず）の川をうろついているようなトルストイが現われるか。（私の人生観 110）

○三途の川をさまようトルストイを見るような歴史家は，（私の人生観 114）

しかし，「うろつく」「ほっつく」「ほっつきあるく」が，どちらかというと俗語的なのに対し，「さまよう」「さすらう」は文章語的だ，という文体上のちがいがある。それに応じて，「うろつく」「ほっつく」「ほっつきあるく」のあらわす動作自身についての評価もやや低い。例をあげれば，何かいいものが落ちていないか，というような目つきで，まちの中を歩きまわるばあい，つまり動物的なにおいを感じさせるような現象について「うろつく」の類がもちいられる。一方，高尚なことを考えながら歩きまわるようなばあいには「さまよう」や「さすらう」がふさわしいだろう。

○十太夫は大兵（だいひょう）の臆病者で，阿部が屋敷の外をうろついてゐて，引上の前に小屋に火を掛けた時，やつとおづおづ這入つたのである。（阿部一族 77）

○泥鰌くさい田舎をうろついてゐるお前なんぞに（あにいもうと 154）

のように，行為としてあまりよくないとき，また，ののしるようなばあいには，「さまよう」ではおかしい。

「ほっつく」「ほっつきあるく」は例がすくないが，

○元気になつてまた街をほつついてゐるのであらう。（冬の宿 136）

○寒い町をほつつき歩いて発作的な興奮を鎮めるといふ最後の手段に（冬の宿 56）

などでは，「うろつく」とおなじような，動物的な行動を感じさせる。もちろん，このばあいには，「さまよう」といっても，事実としては，ほとんどおなじである。

「さまよう」「さすらう」の方でも，

○この時見かけた警官や私服達は，近頃私の近辺や農大附近をさまよい時時学内をうかがっていた奴等です。（学園評論 1954年4月 59）

のように，動作自身があまりいい感じのものでないものもある。これは「うろつく」にしてもいいが，

○愛らしい少女と一緒に林檎畠を彷徨つたやうな，楽しい時代は（破戒 130）

○しかし不幸な若者は祠のほとりをさすらひ，疲れると草の上につくねんと坐つて膝を抱き，月にてらされた海を眺めた。（潮騒 110）

のように，その行為を美しいものとして表現しているばあいには，「ほっつく」や「うろつく」にすると不自然である。このばあいの評価は，倫理的にみて正しいということよりも，美的観点からであって，「さまよう」「さすらう」は「うろつく」に対する美化語だといってよい。

〔357〕 なすりつける（なする）＜ぬる

「ぬる」は中立的で，「なすりつける」「なする」は，やや悪い評価をともなうことが多い。「なする」は，たまたま実例が1つもなかったので，評価の点でほぼおなじとみられる「なすりつける」だけをとりあげることにする。

「なすりつける」は，つぎのように，きたないものを「ぬる」ばあいにつかわれる。

○半靴のどろを砂利と溝板へなすりつけてゐる。（つゆのあとさき 27）

○黴菌をなすりつけられて盲目になつた芸者もある。（つゆのあとさき 98）

比較的きたなくないものを「ぬる」のにつかわれた例としては，つぎのようなものがある。

○駿は近所の砂を掘つては，無闇にそれを行介の体の上に擦りつけた。（波 398）

このばあいにも，積極的にきれいだと評価できるものを「ぬって」いるわけではない。ただし，「なすりつける」がわるい評価をともなうというとき，なすりつけられるもの自体が泥やばい菌のようにきたないものである必要は，かならずしもないのであって，動作が雑である，したがって，できばえがあまりよくない，というばあいにも，やはりこの動詞が使えるだろう。画家が絵をかくことについても，それがひどく雑な態度であることをあらわすばあい，あるいはことさら軽べつ的な評価をこめてその「ぬる」動作をあらわすばあいには，「なすりつける」ということができるだろう。

抽象化した用法でも，この動詞は，やはり，あまりよくないことを他人におしつけることをあらわす。

○罪を女といふ一字に塗り付けて我慢した事もありました。（こゝろ 182）

○佐助にお相手役をなすり付けて少しでも自分たちの荷を軽くしようと（春琴抄 157）

「ぬる」の方は，これに対して，評価をふくんでいない。

○侘しそうに赤い絵具をベタベタ蝶々に塗っている。（放浪記 36）

のようなばあいには，動作も雑で，できあがりもチャチなものだから，「なすりつける」といってよいかもしれないが，

○長いことクリームを塗らない顔は瀬戸物のように固くなって，（放浪記 106）

のような例では，ことさらに雑な動作だとは考えられないので，「なすりつける」というのは適当ではない。

＜注＞ 「なすりつける」は，すべて「AをBになすりつける」という構文の中でつかわれている。これに対し，「ぬる」の方は，おなじように「AをBにぬる」というばあいもあるが，また，「BをAでぬる」という言い方でつかわれていることも多い。p. 704 参照。

○唇を毒々しくルウジュで塗った女達が，（放浪記 261）

したがって，おなじ現象でも，文法的な制約の面で，「ぬる」ではいえるが「なすりつける」でいえないこともある。

○ああソロモンの百合の花に，ドブドブと墨汁をなすりつけ給え！（放浪記 286）

○手紙の隅に小さく書いて，そしてまたこれを黒々と塗つて了つた。（蒲団 10）

この2つの例では，ともにすみを「ぬる」のだが，「なすりつける」には，「墨汁」という目的語があるのに対し，「ぬる」の方には，これに対応する目的語がなく，ぬられる相手が「これを」で表現されている。したがって，このままの構文では，「ぬる」を「なすりつける」におきかえることはできない。そのためには，「手紙に墨を ～ 」という構文に書きあらためることが必要だ。

〔358〕 たかる＜あつまる

「たかる」と「あつまる」とがほぼ同じような状況についてもちいられた例がある。

○楽屋口にたかつて来て，吾々の出這入りを見物してゐる子守ツ娘ね，（多情仏心・前 43）

○見物人がわいわいと面白がつてたかつてゐるのも（或る女・前 66）

○踊の列は先刻から崩れて堵の如く勘次とおつぎの周囲に集つたので（土・上 193）

○難破のことが知れると，村の人達が沢山集つてきた。（蟹工船 43）

これらは，どれも見物人・やじ馬などがあつまるばあいについてのべたもので，おたがいに「たかる」と「あつまる」とを入れかえても，さほど不自然ではない。しかし，これらをくらべると「あつまる」の方が無色透明で客観的な表現なのに対し「たかる」は

その動作の主体をややひくく見たような表現であるというちがいがある。このことは，「たかる」の用例が人間のばあいに少なく（今回あつめた実例としては上の2つしかなかった），あとは，にわとり・虫・しらみ・はえ・白ありなど，あまり好ましくないものの表現について多く見られる，ということによっても裏づけられる。（なお「たかる」については「よってたかって」という慣用句があるが，これは人間について多くもちいられる。しかし今はこの慣用句は無視することにする。）

「むれる」「むらがる」についても，やはり多少主体を低くみるという傾向があるかもしれない。しかし，それは，「たかる」ほどではない。「たかる」にくらべれば人間についていう比重がずっと高いようである。

「たかる」「むれる」「むらがる」に軽べつのニュアンスがついているということは，これらの単語が，雑然とした不特定多数のあつまりを表わす，という客観的内容の面における特徴と関係がある。

〔359〕 むしかえす＜くりかえす

「むしかえす」は，何度もおなじ問題をくりかえすことで，もう解決ずみでくりかえさなくてもいいのに，という非難が，その動作に対して向けられている。

○理念騒ぎは，あの時で懲りたはずなのに，昨今，また蒸し返してやってる。（自由学校 131～132）

つぎのような例では，事実としては「むしかえす」であらわすこともできるが，「くりかえす」が客観的で，評価していないのに対し，「むしかえす」といいかえれば，マイナスの評価をあたえていることを意味する。

○たゞ一つ其夏の出来事として，私の心にむしろ薄暗い影を投げたのは，叔父夫婦が口を揃へて，まだ高等学校へ入つたばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三四回も繰り返されたでせう。（こゝろ 160～161）

○ここで同じ議論を繰返すことは止めよう。（物質世界の客観性について 286）

〔360〕 おこたる，ずるける，なまける，サボる＜やすむ

「おこたる」などは，「やすむ」べきときでないのに「やすむ」こと，倫理的にみてよくない行為であることをあらわす。

○彼は長い間怠っていた日記をつけ始めた。（暗夜行路・前 110）

○宇平の顔を見ると，自分がずるけてゐるやうな気がして苦しかつた。（波 69～70）

○怠けて二ケ月も休むやうな人間なら，もうその仕事に興味を失つてゐる（波 253）

○今朝はうちの班長殿，ねぼうして，点呼をさぼらはりました（真空地帯・上 72）

しかし，倫理的にみてよくないという評価は，立ち場がかわれば，かわることがある。「さぼる」というのは，一般的にはよくない評価をあたえられる行動だが，働いているものの側で，要求をとおすために意識的にしごとを「さぼる」こともある。このばあいの「さぼる」は，直接には評価をあらわしていない。一般的にわるい評価をあたえられ

るような現象形態をしている動作を「さぼる」とよぶだけであって，本人がそのことをわるいと思っているわけではない。

○今度こそ，このまゝ仕事してゐたんぢや，俺達本当に殺されるよ。犠牲者を出さないやうに全部で，一緒にサボルことだ。この前と同じ手で。（盤工船 117）

つぎの例では「ずるける」と「さぼる」とがつづけてつかわれている。そして「ずるける」は「さぼる」ことの原因をあらわしており，そこには評価がふくまれているが，「さぼる」はこの評価と分離して単に「やすむ」というのに近くなっている。

○ずるけてサボるんでねえんだ。働けねえからだよ。（盤工船 70）

「やすむ」は評価に無関心であって，

○「クビになったんじゃないの？ ほんと？ じゃア，ただ，怠けて，社を休んでたのね」（自由学校 20）

のような例では，わるい評価があたえられるべき行動だが，

○寒い雨の降る日で，茶の室の火鉢の側には下に使はれてゐる男が仕事を休んで，四五人集つてゐた。（あらくれ 169）

のようなばあいには，やむをえずやすんでいるのだから，別段わるいことではない。

〔361〕 せしめる＜える

「せしめる」は，不当な手段で金その他のものを「える」ことをあらわす。

○金持はこの船一艘で純手取り四，五十万円ッて金をせしめるんだ。（盤工船 102）

○彼はつまりインチキにひつかかつたのである。後で知れたことだが片野から五千円の譲渡金をせしめた男は名うての悪ブローカアだつた。（厚物咲 22）

これに対して「える」は評価の面での限定がない。

○雑誌へ載せれば，私の名も世に出る，万一したら金も獲られる，（平凡 100）

のようなばあいには，あまりよい評価があたえられることではないので，「せしめる」といいかえてもよいが，

○前の例で云ふと，一坪の土地から辛うじて得た一升の中の五合を，完全に奪はれるのです。（真知子・前 37）

のような例では，いいかえはまったくできない。

〔362〕 ぼる＜もうける

「ぼる」は，不当に利益をあげることをいう。

○たしかにボリ過ぎる。然し結局は日本自体が悪いつていふことですよ。（文芸春秋 1953年10月 142）

不当だというのは，その手段が不正だということではなく，利益率が高すぎる，あまりに多くの金額をもうけすぎる，ということである。

「もうける」にはこういう限定はない。

○目的は——本当の目的は，俺達をウンと働かせて，締木にかけて，ギイギイ搾り上

げてしこたま儲けることなんだ。（蟹工船 101）

では，不当に高い利益をあげることで「ぼる」とおなじだが，

○その日その日を働いて日銭をもうけて来ている人達なので，（放浪記 301）

では，方法としても正当だし，利益率もわずかであるにちがいないので，「ぼる」とは反対だ。

○金はたんまり他で儲けさせて貰ひます。（闘牛 79）

のばあいには，利益率はかなり高いはずだが，自分のことについてだから，不当な程度にまで高いとは考えていない。だからやはり「ぼる」とはいえない。

〔363〕 おもねる，へつらう，おだてる＜ほめる

「おもねる」「へつらう」は，わるいと評価されるような行為である。

○ひとに阿ることは間違つたことを言ふよりも遙かに悪い。（人生論ノート 119）

○権威者にこびへつらふことなく却つてこれを凌駕するのが禅における師弟関係の要諦である。（日本及日本人 1953年8月 24）

「おだてる」は，「おもねる」「へつらう」ほどは，わるいと評価されていない。「おもねる」「へつらう」が自分を相手に売りこむための行為であり，その手段として相手をほめ，もちあげることをあらわすのに対し，「おだてる」は，かならずしも自分を問題にしてはいない。相手を「ほめる」ことによって，相手に気に入られようとするばあいもあるが，単に相手にある行動をとらせるために「おだてる」こともある。

○青年をおだてて咲子へ手紙をよこさせたあの女の事を（暗夜行路・前 220）

のような例はそれに近い。これも，やはり事実以上に誇張して相手をほめるような傾向がある点では「おもねる」「へつらう」とおなじであり，程度の差はあるが，不純な行為である。もっとも，その不純の度合いはひじょうに低く，つぎの例などでは，ほとんど「ほめる」というのに近い。

○杉子を妹のやうに叱りつけたり，教へたり，おだてたりしてゐた。（友情 67）

「ほめる」は，評価に無関係である。

○裕佐は口に出してほめた上に内心感服——むしろ驚いてゐたので（青銅の基督 12）

のような例では，心に感じたとおりを口に出しているのであって，なんら非難されるべき行為ではない。

○彼はなんとなく大宮のことをほめたくなかつた。しかしそれだけ，なほほめないとわるいやうな気もした。

「実際日本で一番有望な小説家はなんと云つても大宮だらう。今にきつと世界的な仕事をして，日本の為に気焔をあげてくれるだらう」彼はさう云つたが，何となく口と心が別のやうな気がした。（友情 44）

の例では，心とことばとが完全には一致しておらず，やや心にもないことをいっている点で，「おだてる」「おもねる」などに近くなっている。そして

○遷が陵を褒めるのは，それによつて，陵に先立つて出塞して功の無かつた弐師将軍

を陥れんがためであると言ふ者も出てきた。（李陵 169）

では，まったく不純な行為であって，「おもねる」などとおなじような事実をあらわしている。

〔364〕 ふきこむ＜おしえる

これらの動詞は，ことがらとしては，おなじような事態について使える。

○きっとだれかがこの人に，そんな風な説を吹きこんだに違いない。（人間の壁・上 194）

○委員長は男子でも女子でもいい。

こうして男女平等の観念を教える。（人間の壁・上90）

しかし動作に対する評価はちがう。「おしえる」が特に評価をくだしていないのに対し，「ふきこむ」の方はその動作をわるいものとして表わしている。上の第1の例文は，若い母親が戦後の教育を批判して，日本には日本流の教育法があると思う，という保守的な説をのべているところの描写である。したがってその説は自分の経験から考えだしたものではなく，だれかもっと年よりの，保守的な人間から意図的におしえこまれたものであろう，というのがここの例文でいわれていることなのだが，そのさい，筆者は，この母親にそういう説をおしえこむことに対して批判的な目をむけているので，その説をおしえこんだ人間は否定的な人物としてえがかれることになる。これに対し，男女平等の観念をおしえることは，もちろん肯定的なえがき方をされている。「おしえる」もわるいことをおしえこむばあいにも使えることばであるが，そのことば自身には評価はこめられていない。

〔365〕 あおりたてる，あおる，けしかける，そそのかす＜うながす，すすめる

「あおりたてる」「あおる」「けしかける」「そそのかす」は，何かあまりよくないことを他人にさせるばあいにいうことがおおく，したがって，その行動自身もあまりよくないことに属する。

○葉子の感情を最も強く煽り立てるものは寝床を離れた朝の男の顔だった。（或る女・前 153）

○嘉門の動物的な鋭敏な本能を煽つて，あばき立てなくてもいい人生の秘事を，醜くも嗅ぎ探させながら，何か知識を得たとでも思つてゐたのでないか。（冬の宿 126）

○吉也がほかの子供をけしかけて松若をいじめるのですって。（出家とその弟子 25）

○悪いお友達に唆されて，何の気なしにいたづらをなすつたものと（波 375）

もっとも，あおられたり，そそのかされたりする内容は，かならずしもわるいことだとはかぎらない。

○この刹那の自分を誰かがちよつと引張るか，唆かしさへすれば，どんな乱暴な行為でも，生命がけの勇敢な行為でもできるのではないか。（冬の宿 156）

このばあい，「乱暴な行為」というのはわるい行為だが，「生命がけの勇敢な行為」と

いうのは，いい方に属する。しかし，いずれにせよ，そのような行為をそそのかした側では，その行為の結果について責任をもたないのであって，その無責任さからすれば，やはり「そそのかす」こと自体はわるいことに属する。

「うながす」「すすめる」は評価をふくんでいない。

○葉子はさうした気分に促されて時々事務長の方に牽き附けられるやうに視線を送つたが，その度毎に葉子の眸は脆くも手きびしく追ひ退けられた。(或る女・前 113)

○それから一年ほどして，前に書いたようにある青年が咲子に手紙をよこしたのである。彼がそれに叱言(こごと)をいってやると，その看護婦に勧められて出したものだと，その青年は平(ひら)あやまりにあやまって来た。(暗夜行路・前 221)

などの例では「そそのかす」などにおきかえてもよいような，あまりかんばしくない行為だが，こういう例は少なく，大部分はつぎのように，わるくない，むしろ相手のためを思ってするような行為である。

○夫人は，

「好う御座いませうよ，血液がよく循環して」と応じて葉子に散歩を促した。(或る女・前 118)

○彼がそういう話に腹から感動するのを見ると信行は遠慮しながら，鎌倉へ来る事を勧める事もあった。(暗夜行路・前 252)

〔366〕 ほくそえむ<ほほえむ，ふきだす，わらう

「ほくそえむ」は，ややわるい評価をともなう。

○憐れむべき奴隷は，或ひは強者の笞の音に戦き，或ひは屈従によつて購ひ得たる強者の保護にほくそ笑みながら，その主人の周囲に蝟集(ゐしふ)する。(人格主義 91)

「ほくそえむ」ときのきもちは，自分にとってうまくいった，あるいは自分の予想があたった，などということを，よろこぶものである，そのことが利己的と考えられ，したがって，わるい印象をもったわらいとしてうつるのであろう。

「ほほえむ」「ふきだす」「わらう」は，別段積極的に，わるい印象も，よい印象も，ともなっていない。

○杉子はもう来て居た。そして野島を見ると，微笑みながら近づいて(友情 88)

○ぷツと噴飯(ふきだ)して，肚の底から可笑しさうに笑ひ崩れた。(多情仏心・前 242)

○多くの無邪気な男女の少年は，互ひに悲んだり笑つたりして，(破戒 279)

このように，わらうばあいには，一般に邪念なくわらうのであって，利己的なきもちと結びついていないから，むしろ，評価としてはよい方だともいえる。しかし，これらの動詞は「ほくそえむ」に近い，わるい評価のあたえられそうなわらい方にも使われ，それだけ範囲が広い。たとえば，「ほほえむ」は，現象的には「ほくそえむ」と近く，つぎのような例では，きもちの上からも，「ほくそえむ」のばあいと，ほとんど同じである。

○彼はその言葉の効果を充分見てとると，優越感にほほゑみながら立ちあがつた。

（冬の宿 61）

○この，ちよつと気の利いた質問の仕方に，我ながら微笑まれて，眼鏡をかけ終へた目尻に，（多情仏心・前 38）

したがって，事実をつたえるのならば，これらの文脈で「ほくそえむ」といってもさしつかえない。ただ，「ほくそえむ」の方は，やや積極的にわるい評価がつきまとっているので，その点では，この「ほほえむ」を「ほくそえむ」にかえるとニュアンスがことなる。「わらう」も，つぎの例では，あまりよくないわらい方をあらわしている。

○此男は，人情として笑ふ事が必ず不可能である場合にも必ず意識してヘラヘラと笑ふ。（青銅の基督 15）

○そして志野田先生の机のそばへ，だらしなく大きな口をあけてにやにや笑いながら近づいて来た。（人間の壁・上 160）

「へらへら」「にやにや」などの副詞は，むしろマイナスの評価をあたえる修飾語である。

〔367〕 わだかまる＜ある

「わだかまる」の意味は，具体物についてのばあいと精神現象についてのばあいとにわかれる。具体物についての，いちばん典型的な例は，へびがとぐろをまいているようすである。

○あげくのはてに，いよいよ歴史のふたを開けて見たら，毒蛇がわだかまつてゐた。（日本及日本人 1954年3月 56）

この例は比ゆ的なものだが，へびについての例は，これしかなかった。辞典によっては，具体物のばあいをさらにわけて，木の根などが複雑にからまっているようすをあらわす例を，へびがとぐろをまいているのと別の意味として，たてているものがある。木の根の例はなかったが，具体物としては，さらに3つのばあいがあった。第1に雲，第2に波，第3に山である。

○空は降らないながらに低い雲が蟠つて，（土・上 126）

○船首に立ち，海を眺め下ろした。舳先に砕ける波頭と繁吹の下に，身をくねらして蟠つてゐる見えない真暗な波があつた。（潮騒 145）

○郷社のある山が，こんもりと樹を繁らせて，椀を伏せたやうに海のある南側にわだかまつてゐる。（帰郷 208）

これらの意味は＜複雑に入りくんでいる＞などとは規定しにくい。波の例（潮騒）は「身をくねらして」とあるから，へびに見立てているとも考えられるが，雲や山の例については，そうはいえない。わずか3例から帰納して意味を規定するのは危険だが，とにかくこれらに共通な観点として，＜黒っぽい＞＜うす暗い＞そして＜やや不気味な感じがする＞というようなことが，いえそうである。このような感じは，いちばんもとになっている，へびのイメージにつながっているかもしれない。そして具体物については，まだこのことをはっきり規定の中に入れることがむずかしいとしても，精神現象に

ついて「わだかまる」がつかわれるのは，つぎのように，何かあまりよくない気もち，道徳的に不純であるか，または本人にとって不愉快だが消すことのできない気もちについてである。

○私の胸には御嬢さんの事が蟠まつてゐますから，彼の侮蔑に近い言葉をたゞ笑つて受け取る訳に行きません。私は私で弁解を始めたのです。（こゝろ 224）

○平常心の底に蟠つてゐる怨恨は（つゆのあとさき 45）

以上の例のほか，「わだかまる」の主体になっている表現をあげてみると，「複雑な感情」「心のしこり」「ムツとした気持」「重い，激しい，同時に懐い心持」「毛嫌ひの精神」などであって，みな，本人としても，できればぬぐいさりたい，そしてぬぐいさることができずにいる，よくない精神状態である。

精神状態の存在は，一般的には「ある」であらわすことができる。「ある」の主体はどういう精神状態でもよいので，特にわるい評価をあたえられるようなものにはかぎらない。つぎの例では，わるい状態が主体になっていて，「わだかまる」といってもあまりおかしくない。

○すぐ拒絶されはしまいかといふ掛念もありました。（こゝろ 173）

○当人にはまた当人相応の要求が心の中にあるのだから（こゝろ 288）

しかし，つぎの例では，むしろいい方の状態，ないしは，よくもわるくもない精神現象についてなので，「わだかまる」とはいえない。

○知れはしないといふ安心と，知れたつて構ふものかといふ度胸とが，二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方がありません。（こゝろ 196）

○私はそれ迄に御経の名を度々彼の口から聞いた覚がありますが，（こゝろ 197）

なお，つぎのように，あまりよくないことではあっても，動的な精神現象については，やはり「わだかまる」とはいえない。

○私の内面には，常に斯うした苦しい戦争があつたものと（こゝろ 284）

「わだかまる」は，ちょうどへびがとぐろをまいているように，一定の（静的な）状態で心の中に存在することである。

9. その他

9.1 内　容

〔368〕 むしかえす＜くりかえす

「むしかえす」は，あるおなじことを「くりかえして」問題にすることをあらわす。

○理念騒ぎは，あの時で懲りたはずなのに，昨今，また蒸し返してやってる。（自由学校 131～132）

つぎのような例では，おなじことを「くりかえして」はいるが，おなじ問題をとりあげている，というわけではないので，「むしかえす」とはいえない。

○私は次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。其次の日にも亦同じ事を繰り返した。(こころ 9)

○ドイツが再度同じ失敗を繰り返したのは，第一次大戦後に再教育というものが全く看過されたためだともいえよう。(ものの見方について 189)

あることがらを問題にするというのは，ほとんどのばあい，ことばによって議論をすることである。しかし，言語活動を「くりかえして」いても，なにか問題をとりあげているばあいでなければ，「むしかえす」とはいえない。

○家の内へ入るが早いか，「先づ，よかつた」を幾度と無く繰返した。(破戒 118)

○実は「あゝあ，俺はもう駄目だ」という科白を五六回くり返せばいいのだ，と僕の俳優的才能を全然信用していない彼は，恐る恐る頼んだのである。(私の人生観 20)

つぎのように，ことばによって一定の意見をのべるばあいには，「むしかえす」でおきかえることもできる。

○私は彼の迂濶を笑つてやりました。さうして女の価値はそんな所にあるものでないといふ昔の議論を又彼の前で繰り返しました。(こゝろ 215)

ただし「くりかえす」が客観的な表現であるのに対し，「むしかえす」は，くりかえさなくてもよいのに，というわるい評価がはいってくる。

9.2 予　想

〔369〕 とぎれる，とだえる／おわる＜やむ

「とぎれる」は，ふつう，ある動作・事件などが途中で一時やんで，またはじまるばあいにいう。

○先生の言葉は一寸其所で途切れたが，別に私の返事を期待する様子もなく，すぐ其続きへ移つて行つた。(こゝろ 28)

もっとも，とぎれっぱなしになって，ふたたびはじまらないこともある。

○続くかと思つた父親の言葉は，そのまゝ途切れて煙草になつてゐる。(帰郷 283)

このばあいにも，その動作は，おわるべきところでおわったのではなくて，本来なら当然もっと続くだろうと予想されるようなところで「とぎれて」いるのである。つまり「とぎれる」ということは，もっとつづくだろうという予想に反しておこる現象だ。もっとも，つぎの例などでは，ふつうの「おわる」と，あまりちがいがなさそうにもみえる。

○二人の間の挨拶はそれなりで途切れてしまつたので，田川博士は徐ろに事務長に向つてし続けてゐた話の糸目をつながうとした。(或る女・上 110)

しかし，このばあいにも，ほんとうは，もっとつづきそうにみえるあいさつが，予想以上にはやいところで，おわってしまったのだとみられる。

「とぎれる」の例は，上にあげたように，話についてつかわれたものが多い。しかしそれだけではない。

○内職の賃訳が弗と途切れた。此暇を遊んで暮すは勿体ない。(平凡 8)

また，空間的なものについてつかわれている例もある。

○しばらく行くと，町がとぎれて田畑になる。（人間の壁・上 255）

この例などでは，＜もっとつづくだろうという予想＞ということは，あまりはっきりしないが，やはり町がずっとつづいてきて急に畑になっていることをあらわすために「とぎれて」といったものだろう。

「とだえる」も「とぎれる」に近い。しかし「とだえる」は，「とぎれる」にくらべて単なる終了，もっとつづくだろうという予想と無関係の終了に近いのをあらわすばあいが多いようだ。

〈中断的〉	〈終了的〉
○話が，途絶えた。しばらくして行介はいつた。「あなたは結婚なさらないんですか。」（波 220）	○これで話は途絶えて，二人は黙つて歩いた。（蒲団 37）
○其の響の途絶える折々，暗い水面から貸ボートの静な櫂の音に雑つて若い女の声が聞える。（つゆのあとさき 107）	○世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響ももう途絶えました。（こゝろ 156）

「波」や「つゆのあとさき」の例は，一時中断してまた再開される現象の例で，これは「とぎれる」の典型なばあいと同じだ。「蒲団」の例では，話はふたたびつづけられることはなかったのだが，第三者からみれば，もっと話がつづいてもよさそうなふんいき・条件のもとでの中断をあらわすのであろう。内容的には話は完了しているのだが，ふたりがそろってあるくという情景のもとでは，話がつづいていた方が自然なのである。「こゝろ」の例は，もっとつづくだろうという予想とあまり関係がないようであり，「おわる」「やむ」などとのちがいは，（すくなくともこの点に関しては）明らかでない。

「おわる」は，内容的にも，ひとまとまりのことがらが，はっきりすんだばあいにつかわれる。

○仕事が終つてから，煮しまつた手拭で首を拭きながら，皆ゾロゾロ「糞壺」に帰つてきた。（蟹工船 71）

○染は点呼がおわると腕をぼいぼいふりながら曾田の寝台の辺りを行ったりきたりしていたが，ついにそばにやってきた。（真空地帯・上 222）

これらのばあいには，一応，ことがらは完了しているのであって，かりにそれが再開されるとしても，それはすでに別のしごとと考えられるのである。

「やむ」は，一時的な中断にも，すっかり完了して再開されないばあいにもつかわれる。

〈中　断〉	〈完　了〉
○九月になると，すこし荒れ模様の雨が何度となく降つたり止んだりしてゐた	○その日は前夜からぱつたり雨が止んで，その日も朝からうすぐもりであつた。

が，（風立ちぬ 104）

○「（上略）赤まんまが出るぞおお痛え」杯とおつぎのいふのが聞えた。其度に庖丁の音が止む。（土・上 27）

（田園の憂鬱 66）

○其切バタリと，琴の音は止む……ともう茶の間で若い賑かな雪江さんの声が聞える。（平凡 78）

9.3 抽象性

〔370〕 かせぐ＜はたらく

「はたらく」が具体的な場面にもつかわれ，その点で「つとめる」（勤）とちがうことについては，別の項目でのべたが（p. 116），「かせぐ」と「はたらく」のあいだでも，やはり動作の抽象性にちがいが見られる。「かせぐ」は「つとめる」と同様に，特定の場面における特定の動作をあらわすのではなく，もっと一般的，抽象的にしごとをすることを表現する。「はたらく」もそれに近い文脈でつかわれることもあるが，この方はより具体的な特定の場面におけるしごとをもあらわす。

「かせぐ」

○新治が稼いでくれるやうになつてこのかた，（潮騒 110）

「はたらく」

○子供が働いてくれなくては生きてゆけないのだ。（人間の壁・上 306）

これらの例では，特定の場面における具体的なようすでなく，一般的な形で問題にしているので，ほとんど両者にちがいは見られない。しかし，

○太陽に祝福され野面や，犬や，そこに身を跼めて居る働く農夫などを，彼はしばらく恍惚として眺めた。（田園の憂鬱 109）

○男が大勢石を掘つたり土を運むだりがやがや働いて居る。（思出の記・上 43）

などの例では，この「はたらく」を「かせぐ」におきかえることはできない。これらは特定の場面における特定の人物の動作だから。

〔371〕 ふきだす／ほくそえむ＜ほほえむ，わらう

これらの動詞は，実際に動作としてわらったことをあらわすのか，それとも，単にわらいをひきおこすような精神状態にあったことの表現として抽象的に使われるのかという点で，ちがいがみられる。このちがいは絶対的なものではなく，動詞によってどちらに比重がかかっており，どちらの用例が多いか，というような程度の差である。

まず「ふきだす」は，つねに具体的な動作についてもちいられる。

○真正面から若者の顔をまじめに見つめると，また吹き出した。（潮騒 38）

このばあいにも，もちろんその背景になった気もちはあるのだが，特にその気もちをいうためには，「ふきだしたくなる」「ふきだしそうになる」「ふきだすところだった」「ふきださんばかりだった」などという表現をとる。そうでなくて，「ふきだした」といえば，単におかしくてたまらなかったという心理状態をあらわすにはとどまらず，実際にわらいという具体的な動作としてあらわれたことを意味する。

○彼の男が高尚らしいやうなことを言ふかと思ふと，私は噴飯したくなる。（破戒 189）

○同じ動作を，根よく，三度もくりかえした時に，駒子は，危く吹き出すところだった。あんなに，男性が滑稽に見えた時は，曾てなかった。（自由学校 105）

「ほほえむ」「わらう」は具体的なばあいにも，抽象的なばあいにもつかわれる。

○微笑みながら，皿のふちの濡れてゐるのを布巾で拭いた。（桑の実 74）

○にやにや笑つてゐる先生の顔を見た時，私は急に極りが悪くなつた。（こゝろ 11）

などは，実際にわらった例で，もちろん大部分の用例は，このように現象としてあらわれたわらいについて使われている。しかし，「ほほえむ」や「わらう」には，「ふきだす」とちがって，単にきもちだけを表現した例もある。

○一目見たばかりで，辞書でも繰り当てたやうに，自分の想像の裏書きをされたのを胸の中で微笑まずにはゐられなかつた。（或る女・前 76～77）

○心の底で笑つてるでせう。今笑つてなくつても，きつと後で笑ふわ。（雪国 36）

これらのように，「胸の中で」「心の底で」などという限定があれば，それがきもちの上だけのことだということは明らかである。外面的な動作としての＜ほほえみ＞や＜わらい＞をひきおこすような精神状態にあったということを，これらの文はいいあらわしているのだ。しかし，そのような限定がなくても，精神状態の描写の方に重点がうつり，実際にわらったか，わらわないかは，あまり問題でないような例も見うけられる。

○私一人で味わうのはもったいないくらい四季を通じて青く澄んだ空，美しい緑の山々とても素晴らしく，一人ほほえんでいます。（葦 1956年11月 82）

○かつて病院が砲撃された時，笑つて仲間を見棄てることが出来たのは，（野火 98）

これらの例では，ほんとうにほほえんでいるかどうか，ほんとうにわらって仲間を見すてたのかどうか，はあまり問題ではない。ほほえみたくなるようなきもちであること，かなしいというよりも，むしろほがらかなきもちで病院をさったことなどが，ここでいわれていることである。もっとも，表現の重点，あるいは目的が，心理描写にうつったといっても，実際に主人公がほほえみ，わらったと考えて，不つごうなことはなにもない。その意味で，これらもやはり具体的な行動についての描写であり，ただそれが，精神状態の象徴的な表現として，換ゆ的にもちいられているのである。しかし，これらのような具体的な特定の場面における特定の主人公の行動ではなく，一般的なことの表現にもちいられるようなばあいには，抽象化がさらにすすむ。

○君香が冗談のやうに皮肉のやうに饒舌つた言葉の中には，とても只笑つては聞き流せない実感らしいものが多くあつた事を彼は疑へなかつた。（青銅の基督 74）

この例は，特定の主人公が特定のばあいにわらう，というよりも，一般論として，軽いきもちでおもしろがることができない，ということをあらわしている。したがって，わらうという動作が実際におこるかどうかからは，一そうへだたっている。これは，さらに，つぎのような慣用句的な表現につながる。

○「はゝゝゝゝゝ，土屋君の観察は何処迄も生理的だ。」

「いや，左様笑つたものでも無い。見たまへ，病気は一種の哲学者だから。」（破戒 47）

このばあいには，具体的な動作はまったく問題ではない。この用例では，たまたまその前に相手がわらっているので，具体的な動作についてのべているかのようにみえるが，「～ものでもない」という表現は，たとえば「そうすてたものでもない」のように慣用的な表現形式であって，「わらったものでもない」全体で，そう風がわりな，とっぴなものではない，ということを表わすものである。

「わらう」のばあい，特に相手を軽べつし，あざけるというきもちを表わすために使うことがおおい。これは，具体的な動作としての「わらう」と区別して，2番目の意味にたてている辞典もある。それが妥当かどうかは，ほかの類例とあわせて検討しなければならないが，もしそれを分けるとすれば，実例については，そのどちらに属するかを判断するのがむずかしいものが，しばしば見うけられる。

○半玉の頃と同じだと思つて，胸だけ脱ぐと**笑はれた**こと，（雪国 102）

このような例では，実際にわらったとも，また単にあざけったにすぎないとも，考えることができる。

○やがて共通の軽蔑の対象がはま江になつて，その浮薄さを**笑ふ**点で二人は一致する。（冬の宿 160）

○私はすぐ自分の錯覚を**嗤ひ**，再び前進に戻つた。（野火 114）

についても，実際にわらったとみられないこともないが，「雪国」の例にくらべれば，軽べつのきもちをあらわすという方のニュアンスが，より強くなっている。「野火」で，ふつうの「笑」とはちがった「嗤」の字を使っていることも，そのあらわれである。

以上のように，「ふきだす」がつねに具体的，「ほほえむ」「わらう」が具体と抽象の両方にまたがるのに対し，「ほくそえむ」は，むしろ抽象的な面にはじめから重点がある。すなわちこの動詞は

○憐れむべき奴隷は，或ひは強者の笞の音に戦き，或ひは屈従によつて購ひ得たる強者の保護にほくそ笑みながら，その主人の周囲に蝟集する。（人格主義 91）

のように，実際にほくそえんだかどうかが，あまり問題にならないばあいにつかわれることが多いらしい。実例は，今回のばあい，全部でわずか5例しかなかったので，それがどの程度まで一般的だといえるかは断言できないが，「ほほえむ」や「わらう」にくらべれば，ひとりでよろこんでいるという精神面の表現に重点がおかれていることは明らかだといってよいだろう。

第2部　個別的記述

0. 前おき

第2部では，いくつかの動詞を1つ1つとりあげて，その意味・用法のくわしい記述をすることにする。動詞は，いろいろな分野から比較的基本的とみられるものをえらんだ。すなわち，

移動——あがる，あげる，のぼる，うく，うかぶ，でる
変化——あける，のびる
動作——くう，のむ
精神・言語——はかる，よむ

である。記述法については，特にくわしくのべることはないが，2，3の点についてかんたんにふれておく。

（1） ここにとりあげた動詞はみな多義語である。理論的に多義語というものを否定しようとする傾向は，ねづよく存在する。あるばあいには，1つの単語には全体に共通する1つの抽象的な意味を考えることができる，とする立ち場からであり，また，意味とはその単語の用法の総体だから，1つの単語について2つの意味をみとめるのはおかしい，とするような考えからである。しかし，ここではこれらの考えはとらない。全体に共通する抽象的な意味的側面は，認めることができるばあいもあるし，むつかしいばあいもある。

ＡＢＣ……という意味がある単語で，ＡとＢとのあいだ，ＢとＣとのあいだには，それぞれ何らかの共通性をみとめることができても，全体にわたる共通性はみとめられない，というばあいもありうる。それでも，1つ1つの意味のあいだにつながりがあれば，全体としての単語の統一性はたもたれると考える。このことは，単語全体についてだけではなく，それをいくつかにわけていく際の大分けの部分についてもいえる。1つの単語がＡＢＣ……という意味にわかれ，そのＡがさらに$A_1A_2A_3$……Ｂが$B_1B_2B_3$……とわかれるとき，これらの$A_1A_2A_3$……$B_1B_2B_3$……にそれぞれ共通な抽象的な側面をみとめることが可能なばあいもあるし，そうではないばあいもある。

（2） もっとも典型的な例をとれば，多義語の意味はつぎのようなかたちでわかれるであろう。

$$A\begin{cases} A_1 \begin{cases} A_{11} \\ A_{12} \end{cases} \\ A_2 \\ A_3 \begin{cases} A_{31} \\ A_{32} \end{cases} \end{cases} \qquad B\begin{cases} B_1 \\ B_2 \end{cases} \qquad C\begin{cases} C_1 \\ C_2 \begin{cases} C_{21} \\ C_{22} \\ C_{23} \end{cases} \end{cases}$$

しかし，実際には，このように単純にはいかないばあいがある。たとえば，A_2は$A_1$$A_3$などと共通の側面とともに$B_1B_2$などＢグループと共通の側面をもち，$A_3$は同様に

Cグループと共通の側面をもつ，というようなものである。このようなばあいには，意味をこまかに分けていって1つ1つについて説明するだけでは，これらの意味間の相互関係，観点をかえていえば1つの単語の意味の内部構造を，十分にはつかめないことになる。したがって，いちいちの意味について説明したあとで，さらに全体をふりかえる必要が生じる。これについては「でる」の分析例を参照。

（3） もっとも基本的な問題として，どのようなものを1つの意味にみとめるべきかという点が未解決である。多義語についてのもっとも単純な図式は，1つの単語のなかにA，B，C，D……という同列のわくがならんでいると考えることであろう。かんたんな辞典類はこのような記述法をとる。さらにすすんだ考え方では，まず大きなわくとしてABCD……をたて，そのおのおののなかに，$A_1A_2A_3$……さらにA_{11}，A_{12}，A_{13}……のように小分けをしていく，という形をとる。辞典でも，このような形で，多義語を記述することがある。しかし，そのばあいにも，辞典では，AなりA_1なりA_{11}なりのわく自体は，いわばきちんとした箱のように限界がはっきりさだまっており，となりのBやA_2やA_{12}とのあいだは，はっきりしきられている，というイメージをあたえる。ところが，実際には，この境目はひじょうにあいまいで，中間的なものが存在しうる。小さい箱がいくつかならんでいるというイメージよりも，不規則なかたちの星雲（Nida "Toward a Science of Translating" p.48）といった方が，多義語のほんとうのすがたに近い。しかしここでもまた，われわれは，あらかじめ1つの意味とは何であるかを定義し，それを操作的にみとめうる方法を考えてから記述にむかうという下降型の態度をとるべきではなく，記述の実例を多くつみかさね，多義語における意味の関係の具体的なあり方を追求するなかから，この問題の解決にせまるという上昇型の方法をとるべきだと考える。くわしい記述は理論的解決への十分条件ではないが，必要条件である。このことは多義語と同音語との境界線についても同様であろう。

おのおのの記述のあとに，その動詞のそれぞれの意味が，雑誌90種の資料でどのくらいあらわれたかを表にしてしめした。その際，意味がちがうと漢字もちがうことがあるので，その表記別の度数もあげることにした。

1. 「あ が る」

〔00〕 「あがる」の基本的な意味は，空間的に上の方へ移動することである。

○二階の梯子をあがつて行くお島の耳に，（あらくれ 236）

○彼は見ないようにして二階へ上がって行った。（暗夜行路・前 258）

一口に移動といっても，「梯子をあがつて行く」では，「～を」という目的語に示されているように，動作の経過に重点がおかれ，「二階へ上がって」では，「～へ」という目的地・到達点が明示されていることからわかるように，動作の結果としての上昇という面に重点がおかれている。これら2つのちがいは，「あがる」の意味が派生していく

際にある種の方向づけの役わりをはたすという点で大切であるが，基本的な意味というこの段階では，それらはニュアンスのちがいとしてあるだけで，おのおの独立の1項目を立てる必要はないと思われる。つぎの例では，「～を」が「～に」と共存している。このような例があるということは，経過と結果とが別々の意味として立つものではない，という証拠になるであろう。

○そのまゝ，正面の階段を二階の寝室に上らうとしたが，（帰郷 54）

また，これらの人間の動作のばあいと，

○高い屋根の上から広告の軽気球があがつてゐるので，（つゆのあとさき 10）

のようなばあいとでは，その移動のし方はまったくちがう。しかし，両方とも，結果的に上の方に移動した点ではおなじであり，その差も問題にしないでよいだろう。

さらに，「あがる」には，以上のように自分の力で移動するものだけではなく，

○彼は雨に濡れながら渠のなかに這入つて，その枝を水の底から引き出した。沢山の小枝のあるその太い枝の上には，ぬるぬるとした青い水草が一面に絡んで上つて来た。（田園の憂鬱 86）

○お前ら，いくら気ばったって，それ〔雪だるまのあたま〕が上るわけないよ。（野球界 1956年3月 161）

のように，他からの力によって移動するものもふくまれる。後者のばあいには，「野球界」の例にみるように，否定表現のときなど可能動詞的なニュアンスをともなうことがある。

ニュアンスの範囲内では，まだいくつかのばあいを区別することができる。「軽気球があがってゐるので」の例では，問題なのは移動という動作そのものではなくて，その結果として気球がたかい空にあることである。動作から状態・性質へのかたよりが一層すすんで，主体が捨象され，だれが，なにが「あがる」のかが問題にならない，つぎのような例もある。（ただし，2例とも「のぼる」ともよめるものである。）

○本社へ上る急な石段がある。（暗夜行路・前 177）

○その坂を上つたところには，教会がある。（冬の宿 154）

つぎの例も，やはり状態をあらわしているが，「目尻」「根」という，ものの一部分をあらわす単語が主語としてもちいられており，主体が捨象されていない点が上の例とはちがう。

○目尻が上りも下りもせず，わざと真直ぐに描いたやうな眼は（雪国 31）

○おくみの，根の上つた日本髪や，帯の背中の恰好なぞは，（桑の実 18～19）

そして，「本社へ上る」などの例が，一応は移動という動作の存在を前提とした上で，その動作性を捨象したのにくらべ，「目尻が上りも下りもせず」などにおいては，目尻の移動という事実は全然なく，はじめからそのような状態にあることの表現である点もちがっている。「あがる」のほかにも，「まがった道」「つきでたみさき」「はなれた地点」のように，動作を前提にしない状態の表現にもちいられる動詞がある。その範囲がどのようなものであるか，また，ここでは動作の表現と状態の表現とを要するにニュア

ンスの差としたのだが，その差が別義とみとめるべき程度に大きいものがあるか，など，これからの研究課題になるだろう。また，

○漬け終れば押蓋をし，重石をのせておくと二，三日たてば水があがってきますから，（婦人生活 1956年2月付録 春夏秋冬の家庭料理 455）

○拍子木が鳴って緞帳がゆっくり上った。（小説春秋 1956年11月 136）

などの例の「あがる」は，その主体である水や緞帳全体の位置変化ではなくて，その一部分，すなわち，水については水面ないし上の方，緞帳については客からみえる大部分が位置をかえることを表わすものである。これはもう1歩すすめば，位置変化というより形の変化を表わすものとなるだろうが，上にあげた例については，まだその可能性が示されているにすぎない。なお，空間的に上の方というのは相対的な概念であって，たとえば船が沈んで水が「あがって」きたばあいには，実は水そのものはあがっておらず，基準となる人・船の方がさがったので相対的にいうまでである。

つぎの例は，比ゆ的につかわれたものである。

○いろいろの人に会って一言を発するごとに，自分の立つ場所が，上がったり，下がったりする社会が，意識の下にまだひそんでいる。（ものの見方について 170）

つぎにあげるような慣用句は，全体としては抽象的な表現だが，「あがる」だけをとりだせば，やはり空間的移動にほかならない。

○自分の使つてゐる者の前に，始終頭のあがらない態なのも，（多情仏心・前 136）

○疲労と寒あたりで，翌朝になつても，如何しても枕が上がらぬ。（思出の記・上 187）

○この世界的大ニュースについて，それを見事に抜いた読売に，やはり軍配が上がる。（改造 1954年5月 62）

「軍配があがる」についていえば，「あがる」の用法としては

○軍配は鶴ケ嶺にあがったが，物言いがつき取直し。（週刊読売 1956年2月5日 11）

と同じであり，比ゆ的な使用は「軍配があがる」全体についておこっている。

基本的意味としての空間的上昇という観念の中には，つぎのような条件がふくまれている。

空間的であること

具体的（物理的）な動作であること

結果として上にあることになること

基本的な意味から他の意味が派生し，抽象化するときには，これらの条件のうちのあるものがうすれたり，抽象化したりしていくわけである。

〔011〕 手もとからはなれた方向にいくこと。

「上」というのは，地面または水面に対して垂直の方向に見るのが本来の方向である。しかし，広い意味では空間的上昇とよんでいいと思うが，服の型紙についてのつぎのような例では，この本来の方向とちがう。

○後身頃に，上衣の裾から八寸上った所に鋏を入れ，（スタイル 1956年7月 200）

○更に二〇糎を計り，この点より一・五糎上って直角線を引き（婦人画報 1956年2月 287）

型紙は水平面においてかくのだから，このばあいの「あがる」の方向は，直接的には手もとからはなれることである。「上」の概念，したがってまた「あがる」の概念が，このばあい，わずかながら抽象化にむかっている。

〔012〕 ものの表面にでること。

ものが水平にあるばあい，上昇は表面にでることと一致する。たとえば，水のなかにあるものが「あがった」ということは，水面にでたことである。ところが，つぎのような例では，ものの表面にあらわれることが上昇を意味しない。

○いつも蒼白んでゐる高次の顔には血が上がつてゐた。（別冊文芸春秋 1956年54号 41）

ここでは，血は顔の内部から表面にあらわれたのであって，かならずしも水平面に対して上昇したのではない。おなじような表現だが，つぎのばあいには，胴体から首への上昇であろう。（ただし，これは「のぼる」かもしれない。）

○百合か玉葱みたいな球根を剝いた新しさの皮膚は，首までほんのり血の色が上つてゐて，（雪国 71）

○あんまり，口惜しがって，血が頭へ上ったらしい——（自由学校 116）

実は，上の「顔に血が上がる」も，胴の方からあがったのだとみることもでき，そうすると，ここにあたる例はない。

〔021〕 空間的にあがるということは，結果的にいうならば，高い位置にあること であり，同時に，多くのばあい，人目につくようになることである。移動のニュアンスを持ちつづけながら，経過よりもそのような結果の方に重点がうつるものがある。

○以上優勝から三位までに揚る日の丸の皮算用をしてみた。（週刊朝日 1956年11月25日 71）

のような例はそれであって，事実上の問題としては，旗はたとえば旗ざおが建物から横に出ていて横からあがってもかまわない。結果として大勢の目にふれるように空たかくあがっていればいいのである。

○扇朝のやうな料簡かたの奴のウダツの上らう道理がありません。（末枯 39）

という慣用句における「あがる」の意味は，現代語で「うだつ」が使われないため不明であるが，本来はここに属するものだろう。

〔022〕 上昇が同時にかくれていたものの顕在化というニュアンスをともなうことがある。

○友人の朝代の屍体が上つたら悲しさよりも恐怖の方が先立つだらうと思へた。（中央公論 1954年4月 333～334）

ここでは，屍体が見つかったことが大切なのであって，空間的上昇は絶対的な条件ではない。これが「あがる」と表現されることについては，「陸へあがる」という表現との関係も考えなければならないだろう。「顔へ血があがる」は，さがしていたものが見つかったわけではないが，顕在化という面ではここへつながる。

〔03〕 上昇が同時に生産であるもの。
○火の手が下の村の真中にあがつてゐた。（雪国 160）
○つづいて黒菅勢の六つの砦の間をぬうように土煙が上った。（落城 32）
などでは，火の手や土煙というものがはじめからあって，それが上昇したわけではない。「あがる」ことによって，これらが作りだされるのである。
○私は飛泥(はね)の上がるのも構はずに，（こゝろ 231）
○ひとしほ甚だしい轟きがして，竪坑から高いしぶきがあがつた。（潮騒 89）
○漢軍の後方遙か北の地平線に，雲の如く黄塵の揚るのが見られた。（李陵 159）
これらの例で，「はね」「しぶき」「黄塵」を「火の手」や「土煙」と同様のものとして考えることもできるが，これをどろや水玉やちりとしてとらえるならば，生産と同時に，全体としての位置変化がおこっており，その点で基本的意味に近い。これに対して「火の手があがる」「土煙があがる」などのばあいには，生産と同時に，さきに「水があがる」「幕があがる」の例についてのべたような，形態変化的側面をもった部分的位置変化がおこる。
○万更(まんざら)火の気の無いところに煙の揚る筈も無からうぢやないか。（破戒 265）
という慣用句も，「あがる」の用法という観点からは，ここにはいる。比ゆは，「火の気の無いところに煙の揚る」全体についていえることである。

さきに〔01〕としてあげたものは，「上」の概念が抽象化するとともに，空間的な動作としての面もうすれているが，やはり空間的上昇という概念が変化しながら（ニュアンスとしては持っている），依然として空間的な動作としての性格ははっきりしているものがある。

〔04〕 つぎの「あがる」は，川上の方向への移動である。
○小さな蒸気船が汚穢船を何艘も引いて上つて来た。（波 74）
つぎの〔05〕〔06〕では，いずれも到達という結果に重点がおかれている。

〔05〕 水のあるところから，ないところへの移動。
○或時先生が例の通りさつさと海から上つて来て，（こゝろ 10）
○内湯から上つて来ると，（雪国 102）
これらのばあい，「あがる」動作は水中から陸や座敷への移動であって，空間的に上昇しているともいえる。（なお，「湯からあがる」は，つぎの〔06〕に入れるべきかもしれ

ない。）しかし，つぎの例では，岸はむしろ海上の船よりもひくいところにあるはずで，事実としては，「おりた」といってもよさそうなところである。

○郵船会社の大きいランチで岸へ上がった。（暗夜行路・前 151）

つまり，このばあいには，重心はあきらかに上昇からずれていて，海から陸への移動ということになっているのである。厳密にいえば，さきにあげた「海から上って」「内湯から上って」は，上昇と，陸への移動と，そのどちらに重心があるともいえない中間的なものであり，「岸へ上がった」のような例がでて，はじめてそれは単に上昇というワクにおさまりきれない独立の意味になるといえるであろう。

○ドーンブルックは，陸に上って，発電所で，働き始めた。（ポピュラーサイエンス 1956年6月 39）

という例では，「陸にあがる」が「船乗りをやめて陸上のしごとにつく」というニュアンスをもち，慣用句に近づいている。

〔060〕 家屋の，土足でいない場所にうつることをあらわすもの。

かりに土間とまったく同じ高さの板の間にうつることでも，はきものをぬぐなら，それは「あがる」ことである。これにも，抽象性の段階を区別することができる。

○それで私は座敷へ上つて，先生を待つ間，奥さんと話をした。（こゝろ 30）

○お澄の手に支へられて，足袋跣（たびはだし）のまゝ玄関にあがり，（多情仏心・前 184）

のように，建物の特定の部分が問題になっているときは，動作の具体性も，もっともはっきりしている。これに対して，

○まだ当人が帰つて居らぬのに上つても為方が無いと思つて，（蒲団 30）

○よく懇意の得意先へあがつていつて，（あらくれ 45）

では，特定のどこへあがるかが問題ではなくて，相手の住居全体が問題なので，それだけ具体性はうすい。

〔061〕 料理屋などに客としてはいること。

「座敷へあがる」の類が一層抽象化し，特殊化したものである。

○料理屋にあがつた客から，畳に手をさげられると，（多情仏心・前 86）

○安西二等兵が飛田の遊廓にあがってあそんできたという話は（真空地帯・上 219）

これらでは，実際に座敷へあがったかどうかよりも，客としてその店へはいったことが問題である。

〔07〕 神仏にそなえられること。

○蠟燭のあがつた多くの大師の像のある処の前に（あらくれ 19）

○つき当たりの燈明のあがった神棚から（暗夜行路・前 36）

○おさい銭が，二十万円もあがった（商店界 1956年10月 101）

これも，事実として上昇をともなうことはおおいにしても，それを必要条件とはしな

い。すでにある燈明に火をつければ，それが「あがった」ことである。この用法は，まえにあげてきたのが大体人間を主体としているのに対し，ものを主体とし，それに関連して，「あげる」という他動詞を前提とした表現であるという点で特色がある。

〔1〕「あがる」が抽象化して量的増大，質的向上など，要するに状態・性質の変化をあらわすようになったものがある。これには，移動の行なわれる空間的場面の変化に応じて，2つの型を区別することができる。第1は，これが抽象化して，抽象的場面としてたもたれているものであり，第2は，これが捨象されて，より純粋な状態変化になったものである。

〔11〕抽象的場面内での変化。

〔111〕学校にはいること。

○木下は店から通つて，中学から高等学校に**上つて**行つた。（河明り 332）

「学校」という名詞の意味は，ばあいによっていろいろなニュアンスをともなう。「学校であそぶ」というときには空間，「学校がやけた」のときは建物，「学校をつぶす」のときは組織である。しかし，これらはまさにニュアンスとしてあるのであって，それぞれを独立の意味としてたてることはむずかしいだろう。「学校へあがる」のばあい，直接には組織だが，やはり空間や物としての意味と切りはなされてあるわけではない。その点を別にしても，とにかく「学校」は主体である「私」の外にある抽象的地点であり，〔12〕にあげるものにくらべて，抽象的移動とよぶにふさわしい。

〔12〕性質・状態の変化。

「わたしが学校へあがった」は，「わたし」の状態が変化したことをあらわしている。同様に「牛乳が20円にあがった」は牛乳の状態の変化である。しかし，「学校」が「わたし」に対して外在しているのに対して，「20円」は「牛乳」の外にあるものではない。それは牛乳自身の性質であり，牛乳から切りはなすことはできない。したがって後者のばあいは，抽象的場面における移動というニュアンスもうすれて，「〜に」の示すものは，抽象的到達点というよりも結果を示すものになっている。なお，このばあい，主体が「牛乳」のような具体名詞よりも「物価」のような抽象名詞で示されることが多いこと，「20円に」のように到達点（結果）の示されることが少ないこと，が特徴である。

〔120〕量的増大・質的向上をあらわすもの。

a) 量的増大

○会社は生産が**あがり**，合理化が進む。（ダイヤモンド 1956年10月23日 120）

○益々崇拝熱は**あがった**ようです。（近代映画 1956年12月 75）

b) 質的向上

○そのせゐか女振もあがつたぢやねえか。(あらくれ 209)

○芸も上がり，人気もだんだん出て来た。(暗夜行路・前 236)

○隊の教育訓練のすすむと相まって成績もすこぶるあがり，(真空地帯・上 230)

○国が繁栄し，生活水準が上ることが，(文芸春秋 1954年2月 61)

○それだけ能率があがり，コストが引下げられた。(ダイヤモンド 1956年8月11日 48)

これと，量的増大とのさかい目ははっきりしない。たとえば，

○兵隊は外出させないと志気があがらないからと(真空地帯・上 102～103)

○土地改革によってだけ生産力が上ることではなくて，(中央公論 1953年12月 52)

○細川七段の名がまだ上がらないころ，(棋道 1956年3月 112)

○谷間における五百助の声望は，上るばかりで，(自由学校 246)

のような例はどちらともいえそうである。

また，つぎのようなばあいには，そのどちらとも言いにくいとともに，生産的なニュアンスもあるように思われる。

○その方がずっと演出上の効果はあがったろう。(週刊サンケイ 1956年6月24日 68)

○綜合開発などで，あまり実績の上らない場合も(文芸春秋 1954年2月 61)

上の例にみるように，これらのばあいの主体は「芸」「水準」など大体抽象名詞によってあらわされる属性である。文法的にいうと，

Aは　aが　あがった。

(彼女は　女振が　あがった。)

のaの位置をしめるものが主体として表現される。Aの位置にくる実体をあらわす名詞がaぬきで直接「あがる」に関係している例はきわめてまれである。つぎにあげるのは，そのまれな例だが，一般的には，こういう言い方はしないようにおもう。

○君儕の事業が是丈に揚つて来たのも，一つは君の御骨折からだ。(破戒 92)

これは，この「あがる」の用法，つまり量的増大，質的向上とよんだものの具体的な内容が，あまりにも広く，ぼんやりしているので，aをおぎなって，限定しなければならないからだろう。実体Aは，さまざまな属性a_1，a_2……をもっているから，そのうちのどれが「あがった」のかを明示しないとあいまいになる。このことは，裏からはつぎのような点でいえる。すなわち，aがかけている表現でしかも不自然でないのは，属性が抽象的な位置という形で示されていることである。

○省吾は(中略)丁度十五六番といふところを上つたり下つたりして居る。(破戒 305)

○新小結羽黒山は，(中略)前場所は東前頭五枚目に上って(相撲 1956年5月 116)これらには，aにあたる表現がかけているが，そのかわりに，「十五六番といふところを」「東前頭五枚目に」という，抽象的な位置をしめすことばがあり，これによって，省吾・羽黒山(A)は，成績・番付(a)があがったのだ，ということがわかる。「十五六番」「東前頭五枚目」を，それぞれ生徒や力士のしめるべき位置とみれば，それは主体の外にあるとも考えられ，その点では「学校にあがる」などにちかい。しかし，また，

これらを主体のもつ資格として「女振」「成績」などの性質をあらわすことばにちかいものとみることもできるであろう。そのような，外的とも内的ともいいきれない，やや中間的なものではないかとおもう。

なお，

○近頃師匠の晩酌の相手をして少しばかり手が上つたけれども（春琴抄 188）

○治五郎の腕はめきめきとあがった。（講談倶楽部 1956年3月 118）

などは，主体が一応具体名詞によって表現されているが，その意味は「能力」などの抽象名詞とおなじとおもわれる。

つぎの例も，一応ここに属するとみられるが，この形でしか使わない慣用句である。

○やせて小柄な，風采のあがらない先生である。（人間の壁・上 17）

〔121〕 ねだんが高くなること。

○しかし既に紙の値段はあがっているし，（真空地帯・上 224）

○生地が100円も上がっているのに，（東洋経済新報 1956年5月26日 36）

○米国の国内相場はこうして上がった。（東洋経済新報 1956年10月20日 77）

これの形式面での特徴としては，「値段があがる」のほかに，「生地があがる」のように実体を主体とする表現が，わりに自由につかわれることがあげられる。

〔2〕 広い意味では状態変化への抽象化であるが，顕在化という方向に発展したものがある。これは〔02〕の延長上にあるもので，つぎの2つがある。それぞれ，「証拠」（をあらわすことば），「犯人」（をあらわすことば）としか結びつかない，きわめてかぎられた用法における意味である。

〔21〕 証拠がみつかること。

○ここは厚い立派な地層で，百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども，（銀河鉄道の夜 275〜276）

○隠したつて駄目だよ。ちやんともう種はあがつてるんだからね（多情仏心・前 108）

〔22〕 犯人がつかまること。

○強盗殺人というのは，一番力を入れる事件ですから，大体九〇%は挙っています。（文芸春秋 1953年10月 202）

これは，単にみつかるだけではなくて，つかまえられることなので，あるいは顕在化の線上におくのはまちがいかもしれない。

〔3〕 生産。これは〔03〕の延長上にある。

〔31〕 成績や利益の生産。

○工場から上がる利益は折半やで。(新潮 1956年3月 244)

ここでは，まだ「工場から」という出発点が示されていることで，移動のニュアンスがのこっている。「工場であがる利益」のような表現では，もっとそのニュアンスがうすれるだろう。

○外国で成果が上らないと始めないことに(中央公論 1953年12月 178)

おなじ「～から」でも，つぎの例では，「これ〔闘牛大会〕」という非空間的なものがきて，収益の場所ではなく根拠を示すものになっているので，移動から遠くなっている。

○これに要する全支出とこれから上る全収益の差額を新聞社と梅若興行部が折半にすること，(闘牛 86～87)

これらと，さきに〔120〕としてあげた量や質の変化の例とのあいだには，はっきり線がひけないところがある。この点については，「あげる」の方でのべた(p. 546～547)。なお，

○千五百名の学生がいるが，これから上る授業料だけでは大学経営が円滑を欠く。(週刊新潮 1956年7月17日 48)

も生産ともいえるが，これはあるいは所有権の移動として別に立てるべきかもしれない。

〔32〕 音・声の生産。

○どこからともなく讃美歌の声があがりました。(銀河鉄道の夜 291)

○また「わあつ」といふ叫びが上つた。(波 327)

○耳をつんざく銃声があがるのと，(傑作倶楽部 1956年9月 403)

○ともあれ村々には歓声が揚がった。(小説と読物 1956年1月 275)

4番目の例は比ゆともみられる。つぎのは比ゆだが，「あがる」の意味としては，ここにはいる。

○「……」と，不満の声が上っている。(週刊朝日 1956年1月29日 18)

○そして凱歌は稲尾にあがった。(ベースボールマガジン 1956年11月 14)

つぎの例は音の生産であるとともに，音の空間的上昇でもあって，基本的な用法とことをつなぐものである。

○鐘が鳴り出した。カラン，カラン，カラン，カラン——叫ぶやうに中空にあがる姦ましい音であつた。(野火 64)

○右手の窓下から，さわさわという水の音があがってくる。(むらぎも 115)

〔40〕 やはり抽象化して，ことがおわる，という意味あいになるものがある。

○行く間際まで鎌倉の家で仕事をしていて，やっと上ったんで，それから東京に出て来てさ，(週刊サンケイ 1956年11月18日 56)

○悪阻(つわり)もどうやらあがつたらしく，(ニューエイジ 1953年10月 56)

この辺は用例がすくなく，どのような「こと」の終了を「あがる」と言いうるか，たしかめることができない。「かいこがあがる」（例なし）も，これに近いだろう。

つぎのように，料理ができあがることを示すものも，ここに入れてよいだろう。

○「お料理があがるまで，海鼠腸（このわた）かなんかで一杯めしあがる，——さうでせう？」（多情仏心・前 49）

○ホラお汁粉一杯上ったよ！　ホラも一ツ一杯上ったよ！　お爺さんのトンキョウな有名な呼び声にも今の淋しい私には笑えなかった。（放浪記 264）

〔41〕 すごろく，トランプなどでいう「あがる」は，元来ふりだしから順々に道をたどって終点に到達する，という空間的なイメージをふまえたものだろう。（実例なし）

〔42〕 これに対して

○申（さる）の刻下（こくさ）がりから降りだした雨は，いまだに上がるけしきがない。（羅生門 8）

○ちんぐるまくるくる廻り霧あがる（婦人朝日 1956年11月 152）

などは，空間的移動からいきなりではなく，さきに「水があがる」「幕があがる」などについてのべたような，形の変化というニュアンスをともなうものを基礎として抽象化したものかもしれない。「霧あがる」は，特殊な例のようにおもわれる。

〔43〕 「百円で」「安く」などのねだんをあらわす修飾語をともなって，「費用があまりかからずにすむ」という意味をあらわすものがある。

○労力や生産費等が安く上ること（農耕と園芸 1956年4月 101）

〔5〕 全体としての抽象化ではなく，空間的な移動動作としての性格をたもちながら，「上」という観念が抽象化したものに，目上の人または尊敬する人の家に行く，という意味のものがある。

○十三歳の時に始めて奉公に上つたのであるから（春琴抄 146）

○あれは武子さまの処へ上つて二人でお友達の処に参る時でした。（友情 110）

ただし，空間的移動にくらべると，単に方向だけでなく目的地があきらかでなければいえないことであり，経過よりも到達という結果に重点をおいた表現である。たとえば「あがっている」は，つねに完了をあらわす。

以下にならべるのは，他の意味とのつながりが，あまりはっきりしないものである。

〔6〕 「たべる」「のむ」（「すう」）の敬語。

○貴方，御飯をお上ンなさいなと云ふ。（平凡 17）

○どうです，一緒に茶でも上りませんか。（伸子・上 21）

○もう一度をばさんの薬を上つてお出かけなさいましよ。（つゆのあとさき 34）

○高い木立の方に目をおやりになりながら，煙草をお上りになる。（桑の実 112）

これらは，具体的な飲食活動についてだけであって，意味が抽象的なものに転じた「相手の提案をのむ」のような例については，もちいられない。

〔7〕 油でにた食品ができること。

○栄螺が焼けてゐる。焼鳥がある。脂臭いカツレツが揚つてゐる。（冬の宿 189）

○そこへ，天プラが，揚ってきた。（自由学校 148）

〔8〕 のぼせること。

○おひろはあがってしまひ，おぶんはおちついてゐた。（オール読物 1956年12月 46）

つぎの例は，これとはちがって，よろこんだりすることもふくんでいるようだ。臨時の比ゆ的用法とみるべきかもしれない。

○野島は，仲田の一言一句で自分の心が左右され，上つたり下つたりするのを醜く，浅ましく思つた。（友情 21）

〔6〕〔7〕〔8〕などの意味を直接他とむすびつけるのはむずかしい。しかし，これらが他の意味とまったく無関係ならば，これを同じ語とすることはできない。そして，これを同語とみとめ，おたがいの意味を関係づけるためには，他の語における意味体系，それと「あがる」とのはりあいを分析しなければならない。〔5〕〔6〕のばあい，もし対応する「あげる」の方で，これらにあたる意味と基本的意味との関係が，より密接ならば，それは「あがる」の方についてもこれらを他の意味にむすびつけるものとしてはたらくだろう。また，「のぼせる」の意味は，語源的には「頭へ血があがる」ことからきたものかもしれないが，現代語としては，そのような点からこれを基本的な意味に結びつけることはできないだろう。もしこれが他の「あがる」と同語とみとめられるとすれば，それはおそらく，「高ぶる」「ふるい立つ」；「しずむ」「おちつく」など空間的上下と精神状態との両方に関係のある語群の意味構造との関連においてである。

こうして，1語の意味の分析は，これと群れをなす他の語の分析と切りはなせない。

〔まとめ〕

00）上に～
- 1）芸が～ （変化）
- 02）日の丸が～ 2）証拠が～ （顕在化）
- 03）煙が～ 3）声が～ （生産）
- ？ 4）しごとが～ （完了）
- 06）ざしきに～ 5）お宅に～ （尊敬）
- ？ 6）ご飯を～
- ？ 7）テンプラが～
- ？ 8）試験場で～

これらの派生関係は、みな一種の抽象化である。そして，00）の〈移動〉〈上の方向

へ〉という要素のうち，1)〜4)については両方が，5)については〈上の方向へ〉という要素だけが抽象化している。つまり，5)にあっては，空間的な上の方向から目上の人の方向へと抽象化しただけで，移動という性格はやはりたもたれている。

1)〜4)は，〈移動〉という要素もかわってしまっており，その結果，方向性もまた当然空間的なものではなくなっている。そして，5)のばあいに，方向性が抽象化されたものとして残っている（つまり，「〜に」という目的語がつかわれる）のに対し，1)〜4)では，方向性がほとんど失なわれている。（ただし，11）の「学校へあがる」の類だけは例外である。）

2)「証拠が〜」（顕在化），3)「声が〜」（生産）は，それぞれ 02)「日の丸が〜」03)「煙が〜」などの延長上にあるもので，抽象化の方向はそれらとひとしい。ただし，02) 03) が，抽象化しながらも依然として上昇（移動）という側面を失なっていないのに対し，2) 3) は完全に非移動的な現象をあらわしている。したがって，2) 3) と 02) 03) とでは，抽象化の段階にあきらかな差がある。

〔雑誌の90種の資料による統計〕

	かな	上	揚	騰	挙	計
0)						
00) 上に〜	13	12	−	−	−	25
011)八寸〜た所に	−	2	−	−	−	2
012)顔に血が〜	−	1	−	−	−	1
021)日の丸が〜	2	1	1	−	−	4
022)屍体が〜	−	−	−	−	−	−
03) 煙が〜	−	2	−	−	−	2
04) 川を〜	−	−	−	−	−	−
05) 海から〜	−	1	−	−	−	1
060)ざしき〜	1	3	−	−	−	4
061)料理屋へ	2	1	−	−	−	3
07) 燈明が〜	1	−	−	−	−	1

	かな	上	揚	騰	挙	計
1)						
111)学校に〜	−	−	−	−	−	−
120)芸が〜	6	8	−	−	−	14
121)ねだんが〜	−	5	−	1	−	6
2)						
21) 証拠が〜	−	−	−	−	−	−
22) 犯人が〜	−	−	−	−	−	−
3)						
31) 利益が〜	3	4	−	−	1	8
32) 声が〜	3	1	1	−	−	5
4)						
40) しごとが〜	−	1	−	−	−	1
41) すごろくで〜	−	−	−	−	−	−
42) 雨が〜	1	−	−	−	−	1
43) 安く〜	−	1	−	−	−	1
5) お宅に〜	2	−	−	−	−	2
6) ご飯を〜	1	−	−	−	−	1
7) てんぷらが〜	−	−	1	−	−	1
8) 試験で〜	1	−	−	−	−	1

2.「のぼる」

〔00〕「のぼる」の基本的な意味は，「あがる」と同様，空間的な上昇である。ほとんど同じ文脈のなかで「あがる」と「のぼる」とが同様につかわれている例もみられる。(ルビは岩波文庫本。)

○小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。(こゝろ 171)
○自分の足を自分の手で持ち上げて，階段を上がつた。(蟹工船 66)
○ギシギシと鳴る，暗く狭い梯子段をあがる時分(多情仏心・前361)
○けれどもジョバンニは、まつすぐに坂をのぼつて，(銀河鉄道の夜 256)
○男女の生徒は足拍子揃へて，二階の式場へ通ふ階段を上(のぼ)つた。(破戒 72)
○みしみしいう狭い梯子段を登ると，(暗夜行路・前 161)

したがって，つぎのような文章では，「あがる」「のぼる」の両方によめて，区別がつかない。

○さういふ折に隣近所の人々も自分たちの家の物干に上つて(春琴抄 181)
○その坂を上つたところには，教会がある。(冬の宿 154)

「のぼる」の基本的な意味がおおう範囲をあきらかにするために，主体・経由点・到達点などの観点から，いくつかのばあいにわけてみよう。

(A) もっとも多いのは，上にしめした「坂をのぼる」「梯子段をのぼる」のように，運動の主体が人で，これがななめになった通路にそってのぼるものである。上には「～をのぼる」という形で経由点の示されたもの，したがって動作の経過に重点のおかれたものだけをあげたが，「あがる」のばあいと同じく，「～に」「～へ」という到達点が示され，動作の結果に重点がおかれたものも，もちろんある。

○自分がこつそり其の二階に登つて行つて，遣瀬なき恋を語つたら(蒲団 73)
○或る晴れた午後，私たちは三ツ峠へのぼつた。(富岳百景 52～53)

〔A'〕上にあげたものの変種として，やはりななめの通路を「のぼる」のだが，主体が人間や動物ではなくて，いわばこれに準ずるもの(「ジイプ」)または人間の動きを暗示し，これの代理となるもの(「足音」)のばあいがある。

○丘の新道を登つて行くジイプだけが動いてゐるやうな感じだつた。(帰郷 197)
○入れ替りみたいに，伏見庄兵衛の足音が登ってきた。(婦人画報 1956年10月 270)

(B) 通路をではなくて，ものの上に(人間が)「のぼる」もの。このばあい，ものの形や大きさによって，のぼり方，つまり具体的な動作としては，さまざまな動作があるはずである。

○細引を持つものは細引を捨てて，いづれも牛の上に登つた。（破戒 149）
○その椰子に猿のやうに登つてゆく裸の少年。（冬の宿 95）
○花をもってジャンヌ・ダルクの銅像に登った。（改造 1953年3月 169）

このばあい，到達点とはなれた通路はない。「二階へのぼる」ばあいなら，二階のそとに階段という通路があり，到達点（または方向）と通路が，それぞれ「～に（へ）」「～を」という形で区別される。

○彼はまた茶店まで引きかえして，石段を寺のほうへ登って行った。（暗夜行路・前 157）

のように，1つの文脈に両方が出てくる例もある。これに対して，(B)のばあいには，「～に」という到達点は示されていても，それがものであって，特にそこに達するための道といったものを必要としないことから，「～を」という形での限定をうけることはない。

（C） 空間をまっすぐに上昇するもの。これには，まずつぎのような，動物の意志的な動作がある。

○雲雀は嬉々としてツンツン啼きながら高く高く昇つて行き（春琴抄 181）

(C′) やはり空間をまっすぐ上昇するのだが，つぎのように，物体または物体相当のものがのぼるもの。

○煙突の中の黒い煤の間を，横すぢかひに休らひながら飛びながら，上つて行く火の子のやうに（或る女・前 125）
○それにすつかり身体を縛られて，吊し上げられてゐる雑夫が，ハツキリ黒く浮び出てみえた。ウインチの先端まで空を上つてゆく。（蟹工船 65）

このばあいは，当然意志的な動作ではない。

○ブズー，ブズー，昇降機はもつと上へ向つてきりきり昇つた。（仲子・上 37）

は，やはり垂直に空間をのぼっているものだが，通路といえば通路をとおっている。

（D） 太陽や月が高くなることをあらわすもの。

○灼けた太陽は、空の真中近く昇つて来て居た。（田園の憂鬱 9）
○月が家並の後ろの高い樫の梢まで昇ると，（武蔵野 31）

「あがる」についても，これとほぼ同じような領域をおおう用例がみられる。それで，数量的に，どのようなかたよりがあるかを，雑誌90種の例に出てきた「あがる」「のぼる」について比較した。ただし，「上る」とあって，どちらにもよめるものは，前後の文脈から判断して，どちらかに入れた。また，以下にとりあげるような，慣用句的なものや，やや特殊化したものも，〔0〕のなかにはいるとみとめたかぎりでは，ここにふくめた。

		A	A′	B	C	C′	D	その他
あがる	かながき	4	−	1	−	4	−	4
	上	6	−	1	−	3	−	2
	計	10	−	2	−	7	−	6
	かながき	9	−	−	−	1	−	−
のぼる	上	8	2	−	2	−	4	−
	登	21	1	6	−	−	1	−
	昇	2	−	−	−	−	1	−
	計	40	3	6	2	1	6	−

「その他」としたのは，「軍配があがる」(4)，「頭があがらぬ」(1)，「あごがあがった」(1)である。

以上の数字だけからは，はっきりしたちがいはいえないが，「のぼる」が日や月の上昇について，またA・B・Cなど，人間の意志的・全身的な動作について使われることが多い，という程度のことはいえるであろう。

つぎに，Aとしたものについて，到達点「〜に（へ）」，経由点「〜を」のどちらが示されているかをみると，つぎのようになる。両方がともに示されている例は，雑誌の用例にはなかった。

	到達点	経由点	ともになし
あがる	7	3	−
のぼる	16	13	11

このように，「のぼる」の方に比較的経由点を示したものが多いことは，両者の区別についての，大野晋氏のつぎのような指摘と関係があるかもしれない。

> 「もともと，「あがる」も「のぼる」も，低いところから高いところへ，下から上へ移って行くことを表現するに変りはない。しかし，「のぼる」とは，あるところを経由して線条的に高くなっていくことをいう。（中略）ところが，「あがる」は，どこかを経由していくという，その経由を中心に考える言葉ではなく，むしろ，一足飛びに高くなり，その高くなった結果を重く見る言葉である。」（大野晋「日本語の年輪」 p. 169）

このことをよく示す用例としては，つぎのようなのがある。

○「いいよ。」と，島村は真暗な梯子段を**昇つて**(あが)**上つた**。（雪国 142）

この例では，「あがる」が2階への移動という結果を示し，「のぼる」は途中の経過・方法を示している。

ただし，上の数字だけでは，それほどきわだったちがいは出ていないし，また，到達点・経由点のどちらも明示されていないものが「のぼる」に多いことをどう解釈するかという点にも問題はのこる。

これよりもはっきりしたちがいは，到達点はどんなところか，ということである。文

中に明示されていないものは文脈からよみとる，たとえば「坂をのぼる」は山・丘・高所にいれる，というふうにしてかぞえると，つぎのような結果になる。

	2階以上	山・丘・高所	土俵	その他
あがる	6	−	2	2
のぼる	4	32	−	4

「坂をあがる」という例が実際にあることは，最初にあげたとおりである。しかし，量的にはおそらく少ないのだろうと思われる。このことは，「のぼる」が経由に，「あがる」が結果に重点をおいた表現だということと，関係があるであろう。すなわち，山などのように，大きいもの，高いものにのぼるときには，2階のように比較的低いものにのぼるばあいにくらべて，経由に要する時間が長く，当然の結果として，短かい時間でのぼれるばあいよりも経由に注意がむけられるだろう。ただし，到達点が高いところだということと，経由に重点がおかれることとの，どちらが原因でどちらが結果かは，かんたんにはいえないであろう。

基本的な意味の範囲で，ニュアンスをことにする用法としては，つぎのようなものがある。

まず，動作の主体があいまいになって，動作というよりも「のぼるための」「のぼったところにある」というような，性質・状態・位置をしめす用法である。これは連体的用法にみられるものである。

○その前から二階へ登る緩い階段が見上げられる。（仲子・上 12）

○雲峰寺は，登山道をわずか登った所の左側に，高い石段の上にある。（週刊新潮 1956年12月3日 68）

つぎに，

○鉄骨の足場の下よりのぼる霧鋲打つわれを忽ち蔽ふ（小説新潮 1956年1月 329）

のように，全体としての位置変化ではなくて部分だけの上昇のものがある。つまり，このばあい，おそらく，たちこめた霧の底はそのまま動かず，ただ霧が厚くなって上へのぼってきたものであろう。とすれば，これは位置の変化から形の変化へとかわる可能性がしめされている例である。もっとも，この例は，あるいは，雲がのぼるように，霧全体の位置がうごいているものかもしれず，はっきり断定はできない。

また，

○丑松は省吾と一緒に内陣迄も深く上(のぼ)つて，（破戒 209）

○既に本堂へ上(のぼ)つて，北の間の隅のところに集つて居た。（破戒 213）

などの例については，空間的に上昇することよりも，その部分の建物にはいることに，表現の重点がうつっているとみるべきかもしれない。「あがる」については，「座敷にあがる」「うなぎ屋へあがる」などの例を〔06〕として別に立てたが，「のぼる」についてはそうしなかった。これは，「のぼる」のばあい，「破戒」の例しかなく，これが空間的上昇をともなわなくてもよいところまで重点の移動をおこしているかどうか，はっ

きりしないからである。

「のぼる」が慣用句中にある例としては,

○その年の十二月ついに彼女を獲得した彼は,文字通り天にも上る気持だったらしい。(週刊東京 1956年12月29日 26)

がある。

また,つぎの例は,臨時にたとえとして抽象的な事実の表現にもちいられたものである。「あまつみくに」や「恋」は,いわば空間的にみて高いところにあるように仮定されている。したがって,「のぼる」の意味としては,やはり直接的には上昇をあらわしているのである。

○きよき岸辺に　やがてつきて　あまつみくにに　つひにのぼらん(冬の宿 14)

○「恋に上る階段なんです。異性と抱き合ふ順序として,まづ同性の私の所へ動いて来たのです」(こゝろ 36)

なお,「のぼる」には,「あがる」の例にひいた,

○それ〔雪だるまのあたま〕が上るわけないよ。

のような,可能動詞的なニュアンスをともなうものはない。これは,可能動詞的な表現が「あげる」という他動詞を前提とし,他からのはたらきかけによって上昇することを表わす2次的な言い方であるのに対し,「のぼる」については,そのような,前提となるべき他動的表現がないためとおもわれる。「のぼせる」は意味が特殊化し,「のぼらせる」は「のぼる」にくらべて2次的である。

上昇ではあるが特殊なものとして,つぎの〔01〕〔02〕がある。これらと,さきに〔0〕の範囲内でのニュアンスの差としてあげたものとの差は,はっきりつけにくい。これらも,あるいは〔0〕のなかへ入れたほうが適当かもしれないのである。

〔01〕 上昇が同時に生産であるもの。

○風のない日の薄曇の空に,烟が真つ直に升つて、(阿部一族 75)

○とけた霜から湯気ののぼるのが見えた。(伸子・上 35)

○それさへあるに,土気の醸上る臭気は紛と鼻を衝いて,(破戒 111)

○剣山の後ろから非常な美しい曙光ののぼるのを見た,(暗夜行路・前 90)

これらについての説明は,「あがる」と同じなので略す。

〔02〕 川の上流へいくこと。

○みんな魚のやうに川上へのぼるらしいのでした。(銀河鉄道の夜 298)

○此の川を半町も上れば,鎖渡しと云ふ難所がある。(恩讐の彼方に 72)

「銀河鉄道の夜」は,川のながれのなかをさかのぼるものであるが,「恩讐の彼方に」では,川にそって道をいくものである。どちらにしても,大きく見れば上昇しているにちがいないが,重点はそれよりも移動の方向が川のながれてくる方にむかっていること

におかれている。

〔03〕 顔などに一定の現象・状態があらわれること。

実は，このような形でここにくくったものは，多かれ少なかれ慣用句的であって，自由に，いろんな単語とむすびついて用いられるものではない。しかも，その度合いも，基本的な意味での自由なむすびつきにちかいものから，慣用句的性格のつよいものへ，さらにそれをとおして，あたらしい自由な意味の発生に近づいたものへと，いろんな段階をふくむ。表現しているものからみれば共通性があるが，各段階の用法は，言語的にはさまざまな性質のものがあるわけである。

まず，つぎの例は，血の空間的な上昇をあらわしていて，〔00〕に属する。

○指で輪をこしらえて，私の首を巻いてみると，おいたわしや私の動脈は別に油をさしてやらないのに，ドクドク澄んだ音で血が流れを登っている。（放浪記 287）

つぎに，これは採集した例のなかにはなかったのだが，

頭へ血がのぼった。

のようなものがある。これが文字どおりの意味でもちいられているかぎりでは，「放浪記」の例や「試験管のなかを水がのぼった」と区別すべき理由はない。しかし，この表現は，〈頭へ血がのぼった〉ような感じ，興奮したときの感じをいうのにもちいられる。その意味で，象徴的表現であり，慣用句化にすすんでいる。

つぎの例は，「頭へ」をいわないで同じ事実をあらわし，一層慣用句的になったものである。

○頭痛持は血が上(のぼ)るほど耐(こら)へ切れないのが，（高野聖 9）

さらに，「顔に血がのぼる」では，一層上昇からとおくなる。「頭に」では，それといわれることはないが，頭よりも下の部分から血がのぼるわけだが，「顔に」では，首から下の部分からのぼったというよりも，皮膚の表面にあらわれたことを言っているのである。

○美代はその丸々とした顔にちょっと血をのぼらせたが，さして警戒の色は見せなかった。（娯楽よみうり 1956年4月20日 65）

このことは，「上」の概念の変化とむすびついている。「皮膚の上（下）」というとき，皮膚の表面が上，からだのなかにあるほうが下であって，これはもう地面を基準にした上下の関係とは，ずれている。それに応じて，「のぼる」もまた，鉛直方向への上昇から，からだの表面への上昇とかわりうる。もっとも，顔はからだの上部にあり，かつ皮膚の表面にあるから，そのどちらともとれる。もし「手のひらに血がのぼる」のような例があれば，後者への変化が断言できる。

ここまでは，まだ上昇という範囲のなかで考えることができる。しかし，つぎのように，状態をあらわすことばが主語になるばあいには，もはや上昇とはよべない。

○彼女の顔に，瞬間微かな血の色がのぼつて来た。（冬の宿 110）

○皮膚には若々しい血の紅さまでのぼつてきてゐた。（冬の宿 156）

ここでは，移動ではなくて，「色」「紅さ」という状態の出現が示されている。「うかぶ」のばあい（p. 558）とほとんど平行した変化がここでおこっている。

「血の色」のような例を，おそらく，なかだちとして，「のぼる」は，また，単に感覚的にはとらえられない，表情が顔にあらわれることをもあらわす。

○時雄の顔には得意の色が上つた。（蒲団 77）

○細君の無表情だった顔には自然に微笑が上って来た。（暗夜行路・前 214）

これも，「色」「表情」などの数語と結びつくにすぎず，まだ完全に独立した自由な意味になったとはいえないが，空間的移動でなくなった点では，〔01〕〔02〕などよりも，基本的意味からの距離はずっと大きい。

〔1〕 空間的な移動という点では基本的意味と同じであるが，「上」の方への移動という，その「上」の概念が空間的な意味での，水平面を基準にしたものではなくなったものがある。これは，すでに〔02〕としてあげた「川をのぼる」の例がその方へのかたむきをみせているが，よりはっきりしたものには，つぎのようなばあいがある。

〔11〕 都に行くこと。このばあい，「上」は空間的なものから価値的なものにかわっている。

○少年の時学生として初て東京に上つてから十年になるが，（武蔵野 10）

○此年少気鋭な三代将軍の承職に当つて江戸に上つた際，（青銅の基督 5）

〔12〕 これは，移動といってよいかどうかも問題だが，（旅に）出かけること。この用法は「旅」「途」など，かぎられたほんの数語と結びついてだけつかわれる，まったく慣用句的なものである。これが現代語として，ほかの意味とどう関係づけられるのかは，実はあきらかでなく，〔11〕といっしょにくくって〔1〕にふくめたのは，便宜的なものである。

○免許皆伝を許されると，彼は直ちに報復の旅に上つたのである。（恩讐の彼方に 81）

○大正十五年六月，八雲に出雲という二隻の軍艦が，少尉候補生を乗せて遠洋航海の途に上った。（面白倶楽部 1956年2月 200）

同じような意味をあらわすことばでも，「旅にのぼる」はあっても，「旅行にのぼる」「漫遊にのぼる」などはいいにくいだろうし，「ハイキングにのぼる」とはけっしていわない。これが慣用句化しているということの意味である。

〔20〕 状態変化をあらわすもの。

これには，2つのばあいがある。あとにひく例をもとにしていうと，

わが国は，高い地位にのぼった……（A）
わが国の地位は，（高く）のぼった……（B）

のようなちがいである。（A）（B）両方の表現とも，全体としてはおなじことをいってお

り，「のぼる」の意味としても，ともに質的な向上をあらわしている。したがって，これらを別々の意味としてたてることには問題があるわけである。ただ，つぎのようなちがいもあるので，一応〔2〕の中で小分けしておくことにした。すなわち，(A)のばあい，「のぼる」の主体はものであり，(B)のばあいには，ものの持っている属性である。(A)のばあい，空間的移動において到達点を示していた「～に」という形の名詞は，「高い地位」という抽象的到達点（実は「わが国」の属性を示すもの）としてのこっている。この目的語なしに，単に「わが国はのぼった」ということは，あまりないであろう。

ここに属する例はすくない。(A)のものとしては，

○何時か先生に聞ゐた泰西詩人の詩にも「英雄豪傑は他人(たのひと)の眠(ねぶ)つて居る間にごそごそ這つて其地位に上つたもの」と云ふ事があつたが，（思出の記・上 165）

○自然はその発展の段階を昇るに従つて益々多くの個性に分化する。（人生論ノート 21）

などがあった。(B)の方は温度の例だけである。

○夜明から体温は次第に昇つて摂氏四十度を越え，（つゆのあとさき 103）

この例では，たまたま(A)が質の向上，(B)が量の増大という結果になったが，これは多分偶然であろう。すくなくとも，(B)のばあいについては，「地位がのぼる」のような，質の向上の例も当然ありうるはずである。

また，ここで，かんたんに質の向上といってしまったが，こんなに広くいうのは実は不適当であって，厳密には，さらに限定する必要がある。すなわち，「製品が高い質にのぼった」「製品の質がのぼった」とはいえないからである。（あとの例文については，「あがる」ならいえる。）だから，もっといろんなばあいの例をあつめて，どんな質のどんな向上が「のぼる」でいえるのかを規定しなければならない。量の増大ということについても，まったく同様である。

なお，以上にあげたのは，客観的な事実としての状態変化であるが，このほか，観念の世界で高級なものへと変化することをあらわす例がある。

○さて最も貧乏なものから数えてまず全人口数の六割五分を取ったのちは，さらにだんだんに上にのぼって，今度は全人口数の一割五分に相当するだけの人員を一まとめにしてこれを中等の下となし，（貧乏物語 31）

この例における「のぼる」は，客観的な事実の変化をあらわしてはいない。計算する人の観念のなかにおける位置がかわるだけである。このようなばあい，「のぼる」主体は一体なんであるか，明記されていないし，これと指定することもむずかしい。主体は計算する人であろうか。とにかく，これは(A)(B)どちらにも分類できかねる例である。

〔21〕 ある数量に達すること。

○T33一機の価格は六千二百万円，F86Fは一億五千万円にのぼる。（知性 1956年6月 232）

○引合されたものは五十品目以上にのぼる。（実業の日本 1956年4月1日 84）

○この増配によって，基本配給も含む内地米の配給量はそれぞれ，消費県十八日，生産県二十三日にのぼる。（週刊サンケイ 1956年9月9日 26）

これらの例にみるように，この用法は，かなりの数量に達するばあいだけにもちいられるものである。

これと，前にあげた量の増大の例とのちがいは，ここに属するものが，原則として，より少ない数量からふえてきたことを問題にしていない，という点にある。事実としては，たとえば「二十日にのぼる」のばあいは次第にふえた結果だろうし，飛行機のねだんが「一億五千万円にのぼる」というのは，ねだんがあがってきたわけではない。しかし，いずれにしても，この表現は現在高だけを問題にしているものである。

もちろん，これが量の増大（変化）の表現をとおってうまれたものであることは当然であって，つぎのように形式上にそれがあらわれている例もある。

○今日の文明諸国において，かくのごとき貧乏人ははたしてどれだけいるかというに，そは実に驚くべき多数に上りつつある。（貧乏物語 20～21）

これは，あきらかに変化（の過程）をしめしている。したがって，〔21〕のグループにあっては異質で，〔20〕からの中間的な段階にある。

こうして，移動の表現から変化の表現へと抽象化した「のぼる」は，さらに特殊化して状態・関係の表現をうんだわけである。これが状態の表現であることは，形式的には，「～てくる」の形がないこと，原形で終止法にもちいられて現在のようすをあらわすこと，などにあらわれている。（動作の表現ならば，原形が終止法にもちいられると，未来・歴史的現在・くり返しなどをあらわし，現在の事態をあらわすことはない。）

〔3〕 登場すること。

高いところへのぼることは，目につくような位置にいくことであり，その面が強調されると，登場の意味にちかづく。「血がのぼる」などとも関係のあるものである。ただし，「のぼる」のばあい，登場といっても，ものが具体的にあらわれることを示す用法はなく，みな抽象的である。しかも，どれも多少とも慣用句的である。

このなかを大きくわけると，つぎの3つになる。

場面に登場するもの　「～の場にのぼる」

ことばに登場するもの　「うわさにのぼる」

意識に登場するもの　「意識にのぼる」

なお，ともに抽象化した用法ではあるが，〔2〕については「くだる」という反対語があるのに対し，〔3〕の方にはこれがない。

〔310〕 一定の場面に登場すること。

○日本が世界史の場に登つたのは，未だ百年に満たぬ。（中央公論 1954年3月 23）

このばあい，「のぼる」の意味がかわったといえるかどうかは問題である。「かれは舞

台にのぼった」という具体的な事実についての例とくらべてみると，比ゆ的につかわれ，抽象化したのは，「のぼる」だけではなくて「場にのぼる」全体だ（したがって「のぼる」だけとれば抽象化していない）といえるかもしれない。そのばあいには，「日本」がぎ人化されていることになる。なにしろ，ここに属するのはこれ1例だけなので，これ以上の考察はひかえる。

〔311〕（市場で）とりひきされること。

○赤い色だの藍の色だの，普通市場に上らないやうな色をした小魚が（こゝろ 217)

これは，多分「市場に」と結びついた形でしかもちいられない，まったく慣用句的なものである。さきの「世界史の場に登る」とちがって，「市場」の意味は全然問題ない。すなわち，ここではまさに「のぼる」自体の用法がかわっているのである。

〔32〕ことばに登場すること。

これは，さらに，「〜にのぼる」の「〜」の部分のあらわすものによって，3つにわかれる。

〔321〕口に。

○その言葉が不用意に口にのぼつて来た。（中央公論 1953年12月 279)

○山の町の人達の噂も，彼等の口に上つたが，（あらくれ 249)

○愛とか恋とかいふ問題も，口に上らないではありませんでしたが，（こゝろ 219)

上の3つの例は，みな「口にのぼる」だが，ここにあげた順に抽象化している。すなわち，何が口にのぼるのかをみると，第1例ではことばそのものであり，第2例ではことばの形式面だけでなく内容に重点がうつり，第3例ではことばになる以前の題材である。口にのぼるものとしての実体性は，この順にうすれてきている。

なお，「口にのぼる」のほかには，つぎの2例がここに属する。

○次の呪いの言葉がおのずからくちびるの上にのぼりました。（出家とその弟子 45)

○恁うしておつぎもいつか口の端に上つたのである。（土・上 121)

〔322〕いろんな形のことばに。

○丑松のことは嬶(やが)て二人の談話(はなし)に上つた。（破戒 319)

○一時はあれほど喧(かしま)しく世の噂に上つた此の親爺が，（つゆのあとさき 80)

○石橋内閣では池田勇人氏や水田三喜男氏がすでに下馬評に上っている。（週刊読売 1956年12月30日 15)

つぎのも，これらと同類とみられる。

○同名の人間が旧露西亜帝国の国籍に登っていないとか，（哲学以前 163)

「国籍」というのは，ことばの形態というには抽象的かもしれないが，一応ことばで記されたものだからである。

○早速“議長不信任案”をつきつけた。すったもんだの挙句，これが夜の十時頃からひらかれた本会議に上った。（文芸春秋増刊 1954年 政界読本 42）

この最後の例は，ほかのとちがってさらに特殊化している。「会議にのぼる」は，議題としてとりあげられたことで，かならずしも議論されたことを意味しない。この例もふくめて，上にあげたものは，みな言語活動のいろんな形態に「のぼる」ものであり，「口」という具体的なものに「のぼる」ばあいにくらべて，一層抽象化している。しかし，「口にのぼる」がこの結びつきしかないのに対し，この種のものは，「うわさ」「下馬評」など同群に属するいろんな単語とかなり自由に結びつき，その点で慣用句的性格がうすれている。

〔323〕 ～の資格で。

○遺産を悉く放棄して，自ら労し，足るを知る生活にはいらうとしてゐることが，新聞に発表されて，あらゆる階級の話題にのぼつた。（多情仏心・前 254～255）

「話題にのぼる」は，全体としては，「うわさにのぼる」とほとんど同じことをあらわしている。しかし「うわさ」がいわば「生活にはいらうとしてゐること」の登場する場面であるのに対し，「話題」は「うわさ」に登場した「……ゐること」そのものである。つまり「話題にのぼる」は，「話題になる」にちかい。「うわさにのぼる」の「に」が抽象的な到達点を示しているのに対し、「話題に」の「に」は資格または変化の結果を示す。（もっとも、はっきりそう言いきれるものではない。このように慣用句的性格をおびた結びつきにあっては，「に」の意味をそれと決定することはむずかしい。）

○二人の恋の許可不許可も問題に上つたが，（蒲団 66）

○私の宿泊場所の第一候補に上ったのが，（傑作倶楽部 1956年9月 321）

これらの例でも，「のぼる」は「……の資格で（ことばに）あらわれる」ことをあらわしている。

つぎの例は、あるいはさきの〔322〕に入れるべきかもしれず，またそれともちがう独自の項目を必要とするかもしれないが，一応上の例にちかいものとみた。

○ところで，海外投資を促進するためには，国家的な投融資機関をつくるべきかどうかということが日程に上った。（ダイヤモンド 1956年7月14日 6）

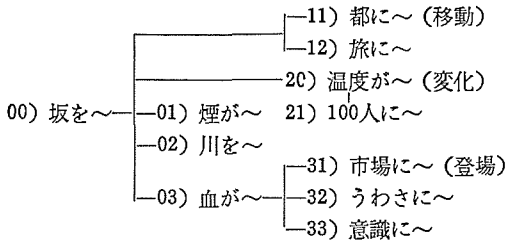
〔33〕 意識に登場すること。

これには，つぎの1例しかなかった。

○自然の姿勢といふのは意識に上るものではない。（帰郷 58）

「考えに」「頭に」「きもちに」など，似た表現のなかで，どれが「のぼる」と結びつくことができるかは，さらに調べないと不明だが，どれにでも完全に自由に結びつく，というわけではなさそうだ。

〔まとめ〕



1)「都に～」「旅に～」は，＜上＞という空間的な方向性が抽象化し，あるいは失なわれているが，やはり移動である。

20)「温度が～」は，移動ではなくて変化だが，方向性は質の上下関係に抽象化して残っている。21)「100人に～」では，それがさらに転じて，状態の表現になっている。

03)「血が～」は，よく見える位置への移動という意味で，非移動的な登場である，3)「市場に～」などへの仲立ちをしている。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	上	登	昇	計
0)					
00）坂を～	10	17	30	3	60
01）煙が～	－	－	－	－	－
02）川を～	－	1	－	－	1
03）血が～	1	－	－	－	1
1)					
11）都に～	－	－	－	－	－
12）旅に～	－	1	－	－	1
2)					
20）温度が～	－	－	－	1	1
21）100人に～	8	7	－	－	15

	かな	上	登	昇	計
3)					
310）～の場に	－	－	－	－	－
311）市場に～	－	－	－	－	－
321）口に～	－	－	－	－	－
322）うわさに～	1	3	－	－	4
323）話題に～	1	3	－	－	4
33）意識に～	－	－	－	－	－

3.　「あ げ る」

〔00〕「あげる」の基本的な意味は，空間的に上へ移動させることである。移動させるということのなかには，2つのばあいがふくまれる。1つは，

○「これでしょう？」とウィスキーのびんを**上げ**て女中は首を傾けた。（暗夜行路・前85）

○校長は椅子を離れて玻璃（がらす）の戸を**上げ**た。（破戒 78）

○錨を**上げ**たり，下したりする度に，（蟹工船 10）

のように，移動が，ほかから加えられる力によっておこるものである。大部分の「あげる」の用例はこれに属する。もう1つの，数からいえばずっと少ない型のものは，つぎのように，移動はそれ自身の力によっておこり，他動詞としての性格は，その移動を他のものがゆるすところにあるものである。

○「牡と名のつくものは猫も膝へあげちゃいけないよ」（小説春秋 1956年7月 39）

○盲目の女師匠が物干台に立ち出でゝ雲雀を空に揚げてゐるのを（春琴抄 181）

他動詞性におけるこのようなちがいは，対応する自動詞（このばあいは「あがる」）にみられるちがいとともに，多くの動詞に共通しているものである。

「あがる」のばあい，「二階にあがる」のような到達点や「坂をあがる」のような経由点が示されていることが多く，そこから，到達という結果に重みがかかるものと，経過に重みがかかるものとのあいだにニュアンスの差が生じることをのべた。「あげる」については，そのような差はほとんど問題にならない。というのは，到達点も経由点も示されていないものが多いからである。いま，雑誌90種の資料によって，〔0〕とした空間的上昇の意味をもつもののうち，「～に（へ）」「～を」「～から」の形で到達点・経由点・出発点の明示されているものの数をしらべると，つぎのとおりである。

		到達点	経由点	出発点
あがる	39例	15（38%）	3（8%）	4（10%）
あげる	69例	12（17%）	−（0%）	3（4%）

このことは，上昇するもの，すなわち，「あがる」については動作の主体，「あげる」については動作の対象が何であるかにも関係する。これを，いきもの（人間・動物）・からだの部分・それ以外のものの3つにわけると，つぎのようになる。（「裾から八寸上った所に」のように主体があまり問題でないものは，便宜上，いきものにした。）

		いきもの	部分	もの
あがる	39例	22（56%）	2（5%）	15（38%）
あげる	69例	2（3%）	29（42%）	38（55%）

このことは，上昇するものがいきもの，特に人間であるばあいには到達点や経由点が問題になるが，からだの部分であるばあいには問題にならない，ということを示すものであろう。からだの部分については、からだ全体との相対的な位置がきまっているから，ある部分（たとえば手や足）が上昇すればどの辺に来，その結果からだ全体としてどんな形になるかは，わかりきっている。つぎにあげるような例では，その部分の上昇ということ自身よりも，その結果として人が一定の姿勢をとったことが大切なのである。

○ほりながらときどき，頭をあげて，左右に気をくばったが，（真空地帯・86）

○向うで鎌首を上げたと思ふと草をさらさらと渡つた。（高野聖 20）

○時屋一等兵は一寸薄い唇の右端をあげ，（真空地帯・上 68）

○雑夫長が薪を脇にはさんで，片肩を上げた窮屈な恰好で，（蟹工船 65）

○そのひとは指を一本あげてしづかにそれをおろしました。（銀河鉄道の夜 318）

○拳固をあげて，自分の頭を力まかせに撲りつけた。（多情仏心・前 289）

○婦人は背後へ高々と踵を上げて向うへ飛んだ。(高野聖 37)

○白耳はそれを見上げていたが，もう下から吠えるようなことはせず，尻尾を上に上げて何事もなかったように引揚げて行った。(小説新潮 1956年8月 302)

このほか，首・手・うで・足などを対象とした表現があった。

以上にのべたように，からだの一部分をあげることの表現は，たしかに特徴的な1群である。しかし，一部の辞書がしているように，これを独立の意味とすることには問題がある。人体の一部でなくても，「～をあげる」という表現が，習慣的に一定の姿勢をとるばあいをさすように固定化している例があるからである。

○彼は，ただ機械の如く渾身の力を入れて，槌を挙げ，渾身の力を以て，之を振り降ろした。(恩讐の彼方に 79)

○鞭をあげて，光秀は小姓に訊いた。(オール読物 1956年1月 100)

これらが，単に道具の空間的な上昇をあらわすだけでなく，その道具をもって一定の姿勢をとったことをあらわしていることは，明らかである。これと「手をあげる」などとは，はたらきかけの対象が主体のからだの外にあるかどうかという基準による以外は，区別することがむずかしい。

なお，消極的な理由としては，他のいろんな動詞，たとえば「まわす」「うごかす」「さげる」「ねじる」などについて，からだの一部に対する動作とそうでないものとを別の意味としているものがないことをあげることができるだろう。これも，「あげる」のばあいとまったくおなじはずである。

このような，いわば意味の特殊化に向かう傾向は，実は空間的上昇を意味する「あげる」の用例の大部分についてみられることで，そのようなニュアンスのうすいもののほうが，かえって少ないようである。(最初に引用した「びんをあげる」「ガラスの戸をあげる」「いかりをあげる」は，比較的特殊化されていないとおもわれるものである。もちろん，対象がそれぞれちがう以上，完全に無色透明な上昇などというものはない。)「あがる」についても，「坂道をあがる」のと「階段をあがる」のとでは，たしかにあがりかたがちがう。しかし，どちらも上昇するものが人間であることにはかわりない。「あげる」については，上昇するものが，いちいちのばあいでちがうので，一層特殊化しやすいのであろう。

特殊化を意味のずれの第1段階とすれば，第2段階としては，これに象徴的用法のくわわるものがある。ここで象徴的な用法とよぶのは，そこで直接のべられている動作にともなう他の現象を暗示するようなものである。「あげる」という動作をその一部分とする，より大きな動作を示しているという意味では，これを提ゆ的な用法とよんでいいかもしれない。

○「御目出たう」と云つて，先生が私のために杯を上げて呉れた。(こゝろ 88)

○母が止めるのも聞かずに，とうとう床を上げさせて仕舞つた。(こゝろ 59)

○根が愛妻家なので決して直接手を上げる様な事はなく，(文芸春秋 1953年10月 232)

「さかずきをあげる」というとき，かんじんなことは酒をのむことである。「床をあげ

る」では床をかたづけることである。これらのばあいに，さかずきや床の上昇という事実はあるにちがいないが，大切なのは，その上昇に象徴され，代表されているもっと大きな動作全体である。しかし，ここで，「あげる」に「（～をつかって）酒をのむ」「かたづける」などの独立の意味をみとめるべきではないだろう。なぜなら，この用法は「さかずきを」「床を」という形，または意味的にみてこれときわめて近い「祝盃を」「ふとんを」などの形でしかみられず，「茶わんをあげる」「コップをあげる」や（かたづける意味で）「下着をあげる」「食器をあげる」などとはいえない。つまり，これは自由なむすびつきをつくるものではなく，意味のずれは「さかずきをあげる」「床をあげる」全体についておこっているものとみるべきである。

「頭をあげる」「顔をあげる」も，この段階に属するものとみられる。これらのばあい，たしかに大体は頭や顔の空間的上昇をともなうだろうが，大切なことは，むしろそれとともに頭や顔が前をむくということである。

「あがる」と同様，部分的な位置変化のものもみられる。

○それをだしてきて，上衣の前をあげて腹のところに納めたが，（真空地帯・上 135）

○熱帯の朝が，幕をあげるやうに，するすると明け放れるのを（野火 67）

基本的な意味の範囲内で、全体が比ゆ的な慣用句になっているものには，「たなにあげる」がある。

○葉子は，自分の事は棚に上げておいて，激しく事務長を憎んだ。（或る女・前 162）

「あがる」にならって，空間的上昇の範囲内にあって本来の用法とはちがっているものをならべておこう。

〔01〕 ふつう上のほうにあるもの，つまり服装の頭に近いほうが，平面上にあっても上とされ，そちらに近づくことが「あげる」であらわされるのは，「あがる」のばあいと同様である。

○肩線は肩先とネック・ポイントを五ミリ上げてカーヴ線で訂正します。（婦人倶楽部 1956年10月付録 流行のジャケット集 62）

○ウエスト線を3センチ上げ，そこからスカート丈をとる。（主婦の友 1956年12月 251）

〔020〕「あげる」の重点が，単なる上昇よりも，そのものをよく目立たせる，という点にうつっているばあいがある。

○松山書店と書家の書いた看板をあげている古本屋へ来た。（暗夜行路・前 265）

○汚い活動小舎があって，毒々しいチャンバラものの絵看板があげてある。（むらぎも 175）

これらも，もちろん上昇という事実を重要な要素としてふくんでいる。しかし，単なる

上昇ではなく，よく見えるような位置に看板をかかげて固定する，ということを表わしているのである。そのような一連の動作を「あげる」で代表させている点で，これは「さかずきをあげる」「床をあげる」などと同様に提ゆ的な側面をもっている。ただ，「標札をあげる」「国旗をあげる」など，よく目立つ高い位置におくことであれば，わりに自由につかわれるのではないかとおもって，それらとはちがう扱いをした。（本当に「さかずきをあげる」などとちがって独立させる必要があるかどうかを確認するためには、さらに大規模な調査が必要である。）

つぎの例は，「一旗あげる」全体で比ゆとなっている。

○夏期林間学校で一旗挙げんものと近江舞子に赴くが，（明星 1956年11月 204）

〔021〕（顔などを）前の方に向けること。

からだの部分について「手をあげる」「足をあげる」などというばあいを，特に1つの意味としてみとめる必要はない，ということは前にのべたが，それらは，一定の姿勢をとるようなし方での上昇である点で特殊ではあっても，とにかく上昇に中心があった。しかし，「顔をあげる」「目をあげる」については，事実として上昇をともなうかどうかはあまり問題でない。

○木村はふと顔を上げてしげしげと葉子を見た。（或る女・前 221）

○私は不図眼を上げて其所に立つてゐるKを見ました。（こゝろ 247）

○新治と水夫は訊ねる視線をあげた。（潮騒 144）

これらの例で，実際に目などの位置がより高くなったかどうかはわからない。下をみていたのが前を，つまり，より上をみるようになったこと，視線が前を向いたことが問題なのだ。つぎの例が実際に上昇を問題にしているのとは，区別されるべきである。

○事務室で週番下士官の調査がはじまったが、安西ははいっという言葉を繰返しては眼の玉を上の方にあげた。（真空地帯・上 210～211）

この例でわざわざ「上の方に」とことわっていることに注意。単に「目をあげる」といえば，目玉を「上の方に」つりあげることではないのである。ただし，顔や目を前に向けることには，上昇をともなうことが多いはずで，「頭をあげる」などとの境は連続的である。

顔や目を前の方に向けることは，つまりこれらを他人からよく見えるようにすることである。その点で，この用法は〔020〕の「看板をあげる」「旗をあげる」と共通する面をもっている。

〔022〕敵の首をとること。

漢軍之を追撃して虜首を挙げること数千。（李陵 158）

これは，「首をあげる」といえても「頭をあげる」といえないことからみて，完全に慣用句としての用法であり，「さかずきをあげる」などの延長上にある。しかし，「さかずきをあげる」などが，上昇という要素を失っておらず，上昇で全体を代表させる提ゆで

あるのに対し，「首をあげる」では，上昇の要素がほとんどゼロに近い——つまり，首を切りさえすれば，より高い位置に移動させなくても「首をあげる」といえる——点で，基本的な用法からのズレが大きい。

首をとることを「首をあげる」というのは，とった首を高くかかげて示すことからでたものと考えてここに位置づけたのだが，とにかく慣用句だから，この「あげる」の意味をそうはっきり規定することはできない。

つぎの例は，この用法の「兜首をあげる」が，全体として比ゆ的にもちいられたものである。

○レッツの場合は，新鋭が思いがけずに兜首をあげるのではないかと見られている。（野球界 1956年10月 157）

〔03〕「あげる」ことが同時に対象の生産を意味する例は多い。

○けたゝましい汽笛が一抹の白煙を青空に揚げて鳴りはためき，（或る女・前 164）

○爆発して湯気でもあげてゐるやうに見えるのでした。（銀河鉄道の夜 253）

○やがて水沫をあげて全身をあらはした。（冬の宿 17）

○砂ぼこりを**上げ**ながら，主人の後になり前になりして，（田園の憂鬱 5）

○手首にぶつつかつてできた波は，うつくしい燐光を**あげて**，（銀河鉄道の夜 274）

○見えない天の川の水もそのときはゆらゆらと青い焔のやうに波を**あげる**のでした。（銀河鉄道の夜 298）

つぎの例は，ここから比ゆ的につかわれるようになったものである。

○一方を揉み消す為めには一方にどんと火の手を**挙げる**必要がある。（或る女・前 27）

○このときに，分子生物学の研究を志す日本の学者たちはノロシを**上げ**たのである。（生命の暗号を解く 163）

作りだされた結果は，以上のように「～を」で示されることが多い。しかし，また，「～に」で示されることもある。

○丸髷に結つたり教師らしい地味な束髪に**上げ**たりしてゐる（或る女・前 80）

この文にはないが，このばあい，材料となるものを「髪を束髪に上げる」の形でおぎなって示すことができる。これはちょうど，

{ 絵をかく
{ けしきを絵にかく

{ かざりをつける
{ 花をかざりにつける

などに見られる対応関係と同じである。

つぎに，空間的移動ではあるが，かならずしも上昇といえないもの。

〔04〕「あがる」のほうには，船から陸に「あがる」という用法があるが，これに対

して，「あげる」のほうには，水のなかから空気中にとりだす，というばあいがある。下の例で，たとえばザルが水よりも上にあるとはいえない。

○そうめんはゆでて水にさらし，ザルにあげて，（主婦と生活 1956年3月 387）

○金魚は，よわい。水からちょいちょいあげていくんじゃ，もたないや。（婦人倶楽部 1956年7月 71）

さかなをつりあげることを「あげる」というのは，ここからさらに特殊化したものであろうが，別の独立のものとしてたてるべきかどうかは不明である。

○永田氏が二貫七百匁の寒鯛と九百匁の石鯛をあげたのみで殆んど全員があぶれた。（中央公論 1953年8月 208）

〔05〕 座敷などにとおすこと。

「あがる」についてのべたように，「家にあげる」ことは、多くのばあい上昇の動作があるとしても，そこに本質があるとはいえない。

○自分の家へ君を上げては，死んだ奴らに済まぬと感じた男だ。（帰郷 135）

○河原田は日本座敷へ二人をあげた。（むらぎも 166）

〔06〕 神仏にそなえる，意味。

○僕は香を上げ花を上げ水を注いでから，前に蹲(つくば)つて心のゆくまで拝んだ。（野菊の墓 53）

○燈明をあげ，肩衣(かたぎぬ)をつけ，歎異鈔に類したものを唱した。（仲子・上 169）

○お経をあげて山田君の霊を慰めてやることは出来ない。（蟹工船 88）

これらは，たしかに1つの群をつくるだろうが，そのなかでもいろいろな，具体的な上昇に近いものからきわめて慣用句的なものにいたる段階をみとめることができる。

まず，もっとも移動動作としての性格をこくもっているものに，

○政は立つた次手(ついで)に花を剪つて仏壇へ捧(あ)げて下さい。（野菊の墓 10）

のように，到着点が明示されているものがある。これはいわば移動と「ささげる」意味とをあわせもった，中間的なものである。

つぎには「香をあげる」「燈明をあげる」の類がある。これも，香や燈明をほかの場所から仏壇へうつしたばあいにもいえる。しかし，「花をあげる」がつねに移動をあらわすのに対して，これらはかならずしも移動をともなわなくてよい。もともと仏壇にあった香に火をつけ，燈明をともしただけでも「あげる」ことになる。したがって，「仏壇に」ということばをともなっていたとしても，これが移動の到着点をあらわすとは言いきれないのである。大切なことは香や燈明に火がつけられること，すなわちこれらの状態が変化することである。

最後に「お経をあげる」がある。ここではもう移動はまったくおこらない。これは，意味的には，移動よりもむしろつぎの「祈りをあげる」などを中だちとして，「声をあげる」のほうにつながるともみられる。

○数人の女たちはすぐ感謝の祈りをあげ，叫び声をあげて，子供たちを抱いた。
（実話雑誌 1956年12月 28）

この「祈りをあげ」は「お経をあげる」のと同じ群に属するとおもわれるが，つぎの「叫び声をあげて」とも近いようにおもわれる。

〔07〕 たべたものをはくこと。

これは実例がなかったが，「さげる」や「おろす」に対応しないことや，到着点が表現されない点で特殊なものである。

〔1〕 状態・性質の変化をあらわすようになったもの。

〔11〕 抽象的場面内での変化。これには，つぎに示すように，「入学させる」「進級させる」の2つのばあいがある。

○おくみが十四になつて女学校へ上げて貰つたばかりのときに（桑の実 6）
○あれ切りしか休まないで落第するなんか，変だなあ。あれくらゐなら，僕なんか上げてもらへるんだがなあ。（冬の宿 129）

ただし，この両者をくらべると，前者のほうが「学校」という，ときとしては具体物をもあらわしうることばとつながっているのにくらべ，後者は「上級」などの，より抽象的なものへの移動であり，その点でつぎの一層純粋な状態変化に近づいている。

〔12〕 資格の変化。これは，人に一定の（これまでよりもよい）資格・役目をあたえることをあらわすものである。

○帝国大学を卒業後は直に助教授に挙げられ，（つゆのあとさき 53）
○自分を代議員にあげてくれた職場に帰ると，（改造 1954年1月 153）

これらの例は，対象が人という具体物である点，「子どもを学校にあげる」などの〔11〕のばあいと共通であり，「温度をあげる」のように抽象名詞と結びついた〔13〕とはちがう。しかし，〔11〕では，帰着点が「女学校」のように，対象の外にあるもの（組織）であり，抽象的な場面における移動ともいえるのに対し，「助教授にあげる」では，帰着点である「助教授」が，対象自身の資格であって，外にある場面ではない。それだけ，より純粋な状態変化であって，〔13〕に近づく。「助教授にする」といいかえられることも，そのことを示している。

〔13〕 純粋な状態変化のうち，量的拡大を示すものには，つぎのような例がある。

○勤続年数がふえるにつれて，給与をあげねばならぬ。（文芸春秋 1956年10月 98）
○将来、月産三千トン位の能力までは上げるかも知れないがそれ以上にする計画はないようである。（ダイヤモンド 1956年4月28日 70）
○温度を上げて溶融して液体にすると，（新しい繊維 381）

なお，この類のもので比ゆ的に使われた慣用句に「熱をあげる」がある。

○マリナのほうは早くも彼に熱をあげ，訪問のお目当てが姉なのですっかりふくれ，（スクリーン 1956年7月 108）

質的向上をあらわすものには，つぎのような例がある。

○班の成績あげよおもて，自分の班のもんにええのん廻して，（真空地帯・上 49）

○レンズや反射鏡などで収レンさせて50%までこの率を上げることができることが分っている。（科学朝日 1956年10月 31）

○奢侈に依って自分の面目を上げようとする努力である。（世潮 1954年4月 36）

〔11〕と〔13〕とのちがいは，意味的には，前者に抽象的場面における移動というニュアンスがあるのに対して，後者がまったく変化の結果を示すものだということである。上にあげたように，変化の主体は，〔11〕では具体物であり〔13〕では抽象的な，それ自身質であるものである。そして，後者のばあい，「～に」という到達点は示されないことが多い。具体物を「あげる」ばあいには，空間的にあげることもあるし，またここにみるように抽象的なわくのなかで「あげる」すなわち変化させることもある。これに対して抽象物を「あげる」には，空間的上昇ということは考えられないから，質的に変化させることにきまっている。そして，「熱」「成績」などの抽象物はおのおの独自のしかたで変化するのであり，その帰着点を示す必要はない。（もし示すとすれば，それは変化の程度をあらわすことになる。）これが「～に」という帰着点が〔11〕では示されていて〔12〕では示されていない理由である。

具体名詞がもちいられていても，つぎのような例では抽象化して質をあらわすものになっている。

○古藤さんも手紙の上では一枚がた男を上げてゐますわね（或る女・前 204）

○「燻ゆる情炎」以来，腕をあげて，（スクリーン 1956年2月 144）

なお，

○前に伊藤整はチャタレー裁判で一躍名をあげたが，（改造増刊 1953年10月 10）

も，やはりここへはいるべきものであろう。「名がたかい」という表現があることからみて，空間的な上下の関係を土台においているとおもわれる。「人に知れるようにする」という点で「式をあげる」などとくくっている辞書があるが，「式を」のほうには「式がたかい」という表現はない。

〔2〕 はっきり目だたせるようにすることをあらわすもの。

これには，「犯人をあげる」ばあいと，「例をあげる」ばあいと，2つある。移動的で，かつ人目につくようにすることをあらわす「看板をあげる」(02)などの延長にあるものであろう。

〔21〕 検挙すること。

○質屋から足がついて，出入りの魚屋の若い者があげられた。（多情仏心・前 308）

○主犯共犯いつしよに挙げちまひました。（本日休診 76）

〔22〕 とりだして示す，意味。

○彼女が思ひ出すままに挙げる新しい作家の名前など，（雪国 41）

○一例を挙げると，もし坊さんに女の子があつて，其女の子が年頃になつたとすると，檀家のものが相談して，何処か適当な所へ嫁に遣つて呉れます。（こゝろ 194）

この用法には，特に文法的な制限はなさそうである。慣用句的ではない，自由な意味としてよい。「あげる」対象としては，「雪国」の「名前」のように，ことばのばあいもあるが，多くは「こゝろ」の例のように（「一例」）言語外の事実である。「雪国」のばあいでも，ただ単に「彼女が思ひ出すままに挙げる新しい作家など」といいかえてもよい。つぎの例を参照。

○先にあげた松下幸之助氏は，あれだけの要素は備えていたのだ。（実業の日本 1956年11月1日 52）

辞典のなかには「候補者をあげる」の例をひいて，これに「すいせんする」という説明をくわえているものがある。このような例は見あたらなかったので，はっきりはいえないが，こういう例文があることだけで「すいせんする」という意味をみとめることはむずかしいだろう。それはちょうど「欠点をあげる」という例文から「非難する」という意味がぬきだせないのと同じである。辞典のなかにはまた，「例をあげる」などについて，「かぞえたてる」「列挙する」という訳をあてているものがある。たしかに，例は1つだけでなく，いくつかまとめてあげることがおおい。しかし，それと「こゝろ」の「一例を挙げると」のあいだに線をひいて別の意味とするのは，あきらかに無理である。だから，これらの訳語はまちがいとしなければならない。

「とりだして示す」という規定は，それらにくらべれば難点がすくないが，このようなかんたんな規定では，けっきょくのところ不十分なことはまぬがれない。「示す」行為は，ある意味では，意識的にせよ無意識的にせよ，すべて他からとりだしていうことである。だから，よりくわしくは，「いう」「のべる」「話す」「知らせる」など，いくつかの類義語の組のなかにおいて，そのちがいをしらべなければならない。ここでは，いくつか気づいたことを指摘するにとどめる。

第1に，形式の上からは，「あげる」は体言的なものしかうけえない。つまり，「あげる」対象は，「例」「候補者の名まえ」のように単語相当のものであり，「……したといった（のべた）」のように文相当のものをうける用法はない。後者をいいかえれば，「……したことをあげた」のように体言化した形につづくわけである。

第2に，「あげる」はつねに対象を要求する。

かれは自分の先生についてのべた。

の「のべた」を「あげた」でおきかえると「何を」あげたのかあらためて指摘しなければならない。しかもこの対象は，発言の内容にかかわることであって，発言の形式にかかわることではない。「悪口をいう」「感謝のことばをのべる」のように，「いう」「の

べる」には言語形式を対象とする用法があるが，これらの例は「あげる」ではおきかえられない。

第3に，その対象は資格づけられていなければならない。

かれは自分に金がないことをのべた。

という文の「のべた」を「あげた」にするとおちつかない。そのまえに「不参加の理由として」といった表現がほしいところである。すなわち，「あげる」対象が内容的に一定の叙述・判断をふくんでいるばあい（いいかえれば，文相当のことを伝えるばあい），それはおもな伝達内容であるよりも，副次的な説明である。しかし，「候補者の名まえをあげる」のように，「あげる」対象が単語相当のものであるばあいには，このことはかならずしもあてはまらない。また，

インドネシアについて知っていることをあげなさい。

のようなばあいにも，伝達内容という観点からみて，副次的とはいいにくいだろう。それで，このようなものまでふくめて考えるならば，「あげる」の特徴は，あげられた内容（対象）の資格が話し手だけでなく聞き手にもあきらかなことに求められるかもしれない。金がないことは単純な報告でありうる。そのばあい，これは「のべた」ことであっても「あげた」ことではない。これが不参加の理由という資格でのべられるとき，それは「あげた」ことになる。人名もまた何となくつぶやくこともありうる。しかし，それが候補者の名まえという資格でのべられているとき，それは「あげた」ことである。

第4に，「あげる」がはたして言語活動に属するとしてよいかどうかの問題がある。

○この説には種々の反証が挙げられる。（日本及日本人 1954年1月 90）

証拠をあげるばあい，もちろん原則としては言語活動によるわけであるが，ある物的証拠をつきつけるという無言の動作によっても，やはり立証したことになるばあいがあるであろう。すなわち，大切なことは証拠を示すことであり，のべることではない。だから，「とりだしていう」という規定よりも，「とりだして示す」といった方がよい。

〔3〕 生産をあらわすもの。

〔31〕 子どもをうむこと。

○母しげ女は京都鉄屋町の跡部氏の出にして安左衛門に嫁し二男四女を挙ぐ。（春琴抄 138）

たまたま文語文の用例しかなかったが，この意味の「あげる」は口語文でも使われる。しかし，文章語的であって話しことばには出てこないであろう。また，「うむ」といっても，具体的な出産の動作をさすよりも，もっと抽象的に，いわば家族構成に変化があったことをのべているのであり，その点「もうける」に通じる。動物については，おそらくいわないだろう。なお，対応する自動詞「あがる」には，この用法はない。

〔32〕 音・声の生産。

これには，

○アーメンと云ふ声の一座の人々から挙げられるのを待つて（或る女・前 63～64）

○奥の間の廊下まで来ると，俄かに滝十郎は酔漢らしいつくり声をあげて，

「さア，来ましたよ，来ましたよ！　ど，同勢そろつて闖入しますよ！」

（多情仏心・前 84）

のように，はっきりしたことばになっているものもある。また，

○その時の彼の気持を考へ，中には声をあげて泣いたものがゐた。（蟹工船 87）

○急に弾け返つたやうな笑ひ声をあげ，（多情仏心・前 87）

○伸子はそのたびに悲しげな，断れ断れな叫びを上げた。（伸子・上 66）

のように，ことばにならない声のばあいもある。しかし，

○木谷はしょげかえっている曾田をみて笑いをあげずにはいられなかった。（真空地帯・上 153）

○ベンチの浮浪人達は，朗かな鼾声をあげて眠っている。（放浪記 42～43）

のようなのは特殊な例であろう。

声以外の音についても，この表現はありうると思うが，実例はなかった。しいていえばつぎの1例である。

○鋭い口笛の音をあげたりするものがあつたが，（多情仏心・前 172）

辞典のなかには，この意味を「声を高く（大きく）する」ことだとしているものがある。たしかに、今までだしていた声を一段とはりあげる，のような意味でも「声をあげる」というであろう。「ラジオの音をあげる」などとも，よくいうところである。こんどの用例には見あたらなかったが，もしこのようなものがあれば，それは〔13〕のところに，「熱をあげる」などとならべて，量の増大の例としていれることになる。しかし，以上にあげたのは，それとはちがって，今までだしていなかった声をだしたことである。事実としては大きな声をだしたものが多いだろうが，それにかぎられるわけでもない。

○ふりかえって木谷をみつけたとき，あっと小さい声をあげた。（真空地帯・上 134）

したがって，これらの用例は声をだすこと一般をさしているものとみるべきで，「声をたかくする」という規定であてはまらないのはもちろん，「高い声をだす」という規定も「多くのばあい」というような限定なしではまちがいである。もっとも，実例が非意図的な笑い声・泣き声・叫びなどについてのものと，大声をあげるものとにかぎられることからみて，単なる「声をだす」にくらべて，何らかの限定があることは，みとめるべきかもしれない。これは（声を）「だす」「たてる」などの用例と比較しながら，検討しなければならない。

ここに属する比ゆ的な例には，つぎのようなものがある。

○われわれの判断に対して疑念が生じ不信任の声が挙げられるにつれて，（哲学以前 202）

また，以下に示す慣用句も，ここにつながるものである。

○これが下宿の人々の最後に揚げた凱歌であつた。(破戒 11)
○いち早く「近代文学」を創刊して戦後文学第一の名乗りをあげたが，(群像 1956年4月 115)

ただし，これらと「声をあげる」とのあいだには，比ゆ的用法ということをぬきにしても，つぎのような差がある。すなわち，現代語では，実際にはことばをつかっているばあいでも，上に示してきたように「声をあげる」という形でしかいわず，「声」の位置に「歌」「ことば」「あいさつ」など言語表現を示すいろいろのことばがくることはない。この点で「凱歌をあげる」「名乗りをあげる」は，その本来の具体的な動作をあらわす用法においても，一般の「声をあげる」とはちがっているのである。

つぎの「音をあげる」も，「声をだす」という意味ではあまりつかわない慣用句である。

○それでなくても主食の獲得に音を上げてゐる兵庫県や大阪府では，(闘牛 118)

〔33〕 成績などの生産。

○穂数で主に収量をあげる品種では，(農業世界 1956年9月 127)
○労賃以上いくばくの収益をあげているだろうかなどの(農耕と園芸 1月 133)
○一番の希望は開幕早々から連続二十勝をあげること。(週刊読売 1956年3月11日 7)
○次の回西鉄がまた二点をあげ(ベースボールマガジン 1956年10月 116)
○メーデーが平和裡に，百六十万という戦後最高の動員レコードをあげながら，(中央公論 1954年6月 46)

これらは，さきに質的向上の例としてあげたものと区別がつけにくいばあいがある。

〈質的向上〉

○〔日東紡は〕富士，日清にまさる利益増加率を示している。(中略)各部門とも，成績をあげている。(ダイヤモンド 1956年6月23日 50)
○能率の高い動力噴霧機や撒粉機が普及し，共同防除の効果を著しくあげている。(農業世界 1956年2月 133)
○要するに明日の仕事の能率をあげるため，全部組をつくっておいて，(改造 1954年1月 199)

〈生 産〉

○前場所は西前頭二枚目に進み，八勝五敗の成績を挙げ，関脇にはね上った。(相撲 1956年5月 116)
○使いかたによっては，シャレた効果を上げることができる。(婦人朝日 1956年12月 106)
○与えられた分量に対して，百一パーセントの能率をあげたという図表が(改造 1954年1月 199)

左がわの例では，これ以前にも成績や効果はあったのであり，ただ，最近のそれは以前よりもよくなっているのである。このばあい，成績や効果の内容は以前のとかわりないから，特にこれらを限定する語句はつけ加えられていない。これに対して，右がわの例では，それ以前に類似の成績や効果があったかどうかは問題でなく，このばあいのことだけが問題にされているのである。したがって，「八勝五敗の」「シャレた」などとい

う限定がいる。「効果」ということばは，単なる結果とちがって積極的な評価をふくんでいるから「効果をあげる」だけでも効果の生産という意味で使える。しかし，「成績」については，よい成績もわるい成績もふくんだ中性的な表現であるから，成績の生産というのはナンセンスであり，どのような，どの程度の，という限定がなければ，「成績をあげる」は生産的な意味にならない。だから，単なる「成績をあげる」はつねに質的向上のグループに属する。

一応生産的な意味に入れたけれども向上のほうかもしれない，というものには，つぎの例がある。

○このように，宮川村森林組合は，着々と山林復興に，その実績をあげているが，
（家の光 1956年4月 187）

なお，より低いところからの程度の変化という点で，質的変化は基本的な空間的上昇と共通性をもつ。逆の意味で，生産は基本的意味からより遠い位置にある。

この意味での「あげる」の対象を示すのは，広くいって成績をあらわす名詞である。すなわち，

a) 「成績」「レコード」など，本来そのような性質をあらわす抽象名詞
b) 「勝星」「二点」のように，成績の象徴であるもの
c) 「収益」「利潤」のように，その量が成績をはかる基準になるようなもの

などがふくまれる。そして、これらのうちで，「あがる」の基本的な意味につながる橋わたしの位置にあるのは，c)の類の具体的なものや金をあらわすグループについての用例であろう。

○イランが石油を国際市場に販売し，それから収入をあげようとすればそれには，妥協しなければならない。（世界 1953年11月 18）

というような例では，抽象的だけれども「それから」という出発点が示されていることで移動（所有権の移動か？）のニュアンスがある。なお，この意味の「あげる」は，抽象的な出発点をあらわすことばをともなうことはあっても，「〜に」という到達点をともなうことはない。

〔34〕 以上のほか，つぎの例も生産的なものにかぞえてよいかもしれない。

○そこで，クラスとしてとり上げたこの問題を自治会でとり上げてやってもらおうというので委員をあげることになったら，受験勉強をやっている人たちが皆立候補して出てくるのです。（平和 1954年6月 35）

この「あげる」は委員をただ単に列挙するのではなくて「選出する」ことであろう。「会長」「代表」など，一般の人よりもいわば一段とたかい，目だつような位置にある人について，この表現は可能かとおもわれる。さきに〔12〕の質的向上の例として「自分を代議員にあげてくれた」という例文をのせておいたが，これと「委員をあげる」とは事実としておなじことをいっているのである。「米をたく」と「めしをたく」，「切れをエプロンにしたてる」と「エプロンをしたてる」などとおなじ関係がここにもみられ

る。

ただし，この用法に属するものは上の1例しかなく，その所属や他の用法との関係については，まだ問題があるかとおもわれる。

〔35〕 式をおこなう，の意味。

○年来の希望であつた結婚すら，不安のうちに式を挙げたと云へば（こゝろ 277)

実例としては「式（結婚式）をあげる」のほか，「結党式をあげる」「華しょくの典をあげる」があった。

この用法は，実行する，という点ではつぎの〔4〕に近いが，人前でみんなに見えるようにする，という点では「例をあげる」などにつながるともいえる。

〔4〕 最後までやりとげる，の意味。

○a（エー）の字も知らぬと云ふ者があれば、第一読本を少しやつたと云ふ者，第二読本をあげたと云ふ者もある。（思出の記・上 205)

○早撮り映画の，手早くあげる作品を（笑の泉 1956年12月 191)

これと「式をあげる」とは，実行するという点では共通するが，つぎの点でちがう。まず，「式を」のほうは実行の開始が問題であって，「式をあげたが中断した」ということもありうる。これに対して，「作品をあげる」のほうは，行為の完了が問題である。すでに開始し，進行中である行為が目的とするところまで達した，という表現である。つぎに，「式をあげる」のほうは，「式」およびこれと同義的な「華しょくの典」のように，そのうけることばがひじょうにかぎられている。動作性名詞の「式」を動詞化するために，たまたま「あげる」がえらばれた，といった気味がある。その意味で慣用句的である。「作品をあげる」のほうについては，実例が以上の2つともう1つ，やはり映画の話しかないので，「作品」の位置にどのような名詞がくるか，あきらかに示すことはできないが，すくなくとも「式をあげる」にくらべればずっと多いのはたしかである。たとえば「しごと」のような抽象名詞も，「教科書」のような具体名詞もくることができる。したがってこの結びつきはかなり自由なものであり，「式をあげる」ほどには慣用句的でない。

なお，「会の費用を千円であげる」のような例は，これの変種であるが，出てこなかった。

〔5〕 全部出しつくす，の意味。

○収入の全額を挙げて春琴の用に供した（春琴抄 206)

○一家を挙げて大阪へ移つたさうだが，（多情仏心・前 298)

○いま国内をあげてＢＫＰ時代にあるので（東洋経済新報 1956年7月28日 35)

なお，「蒲団」には，「全心を挙げて同情して呉れた」という例があるが，今ではこんな表現はしないだろう。

この用法は原則として「～をあげて」の形で副詞的にあらわれる。ただし，つぎのような形で使われることもある。

○党が，わが国民の独立，平和，自由の闘争の先頭にたって活動することができるように，われわれは全力をあげている。（中央公論 1956年2月 50）

○アカハタ紙その他同系統のものはいざ知らず，それ以外の日本の言論機関は，挙げて，重光全権と同じ見解を表明した。（東洋経済新報 1956年8月18日 21）

この用法と，ほかのものとのつながりも，あきらかではない。「全部を……」という点では「しごとをあげる」などに共通したところがあるかもしれない。

〔60〕「あたえる」の敬語。

これも〔06〕と同様うやまう相手を空間的に高いところにたとえることからでたものである。

○二千円だけの金をあげるというのだ。（暗夜行路・前 203）

○君の所へ愛子を上げたい気は充分にあるのですが，（暗夜行路・前 72）

○返事を上げなければ済まない貴方に対して，（こゝろ 150）

このグループには，「仏壇に花をあげる」のように，移動に近いものから，「お祈りをあげる」のようにこれと遠いもの，といった段階のちがいはない。

〔61〕補助動詞としての用法。「～てやる」の敬語。

○いゝ額縁を買つて来て，おくみさんの部屋へかけて上げようね。（桑の実 84）

〔7〕油でにること。

○蚕豆の油で上げたやうなのを壜に詰めたのと，（桑の実 96）

この意味は，ほかの意味とどのように関連するのか，不明であり，その位置を証明するような中間的な例がみつからない。

〔8〕潮がみちてくること。

○このへんが内海のまん中で西からも東からも潮が上げて来て，（暗夜行路・前 173）

これは自動詞としての用法で，ほかのとちがっている。「(風が) ふく」「(潮が) ひく」「(日が) さす」など，自然現象にはこの類が多い。意味的にはもちろん空間的上昇という面があり，基本的意味と直結している。

〔x〕所属不明の慣用句。

慣用句のうちで「たなにあげる」のように，もとの意味があきらかで，比ゆ的なニュアンスのはっきりしているものは，それぞれの意味のところへ入れたが，以下は所属不明のものである。

○切支丹を槍玉に挙げて，凡そ残虐の限りを尽した家光が（青銅の基督 5）

○その前に三春兵の一人は必ず血祭りにあげてみせると（落城 13）
○選挙で同じ候補者へ投票するというぐらいのことに何で血道をあげる必要がある？（むらぎも 318）
○今にきつと世界的な仕事をして，日本の為に気焔をあげてくれるだらう（友情 44）
○際限なく酒を註文して，乱暴に飲みながら，気勢を揚げてゐた。（帰郷 337）
○吾妻橋で文七を助けるところの捨へから違ふ。——扇朝師匠のために精精これが味噌をあげた奴さ。（末枯 57）

これらのうち，「槍玉にあげる」は「上にあげる」と，「気勢をあげる」は「能率をあげる」などと，というふうに関係づけられそうに思われるものもあるが，その正確な位置づけはむずかしい。

以上のほか，

○尤も老婆（ばゝ）は僕の鰯のぬたを一度誉めて以来，三日にあげず腥いぬたを拵（こさ）へては，（思出の記・上 193）

のような，「三日にあげず」という形の慣用句があるが，これは，現代語で「あげる」に結びつけることがむずかしいであろう。

〔まとめ〕

00）上に～
- 1）成績を～（変化）
- 02）看板を～ — 2）例を～（顕在化）
- 03）煙を～ — 3）声を～（生産）
- ? — 4）作品を～
- ? — 5）全力を～
- 06）さいせんを～ — 6）金を～（所有関係）
- ? — 7）油で～
- 8）潮が～

これらのうち，8）「潮が～」は，自他の変換が行なわれただけで，空間的な性質をなくしていない点で，ほかのと区別される。

1）「成績を～」（変化），6）「金を～」（所有関係）は，基本的な「あげる」（空間的な上昇）における＜上＞という観点が抽象化して，空間的なものではなくなったものである。しかし，1)のばあいには質の水準として，6)のばあいには対人関係として，まだ方向性が残っている。つまり，これらについては，「～にあげる」という表現が成立する。

ほかのものでは，このような方向性も失なわれている。2），3)はそれぞれ02），03)をとおして基本的な意味にむすびついており，空間的上昇のもっていた別々の側面が抽象化したものである。4），5)については，このようなむすびつきがあきらかでない。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	上	挙	揚	騰	計
0)						
00) 上に～	14	28	1	–	–	43
01) 3センチ～	–	3	–	–	–	3
020) 看板を～	1	–	1	–	–	2
021) 目を～	8	5	–	–	–	13
022) 首を～	1	–	–	–	–	1
03) 煙を～	1	1	–	–	–	2
04) 水から～	4	2	–	–	–	6
05) 家に～	–	–	–	–	–	–
06) さいせんを～	3	1	–	–	–	4
07) たべものを～	–	–	–	–	–	–
1)						
11) 学校に～	–	–	–	–	–	–
12) 助教授に～	–	–	–	–	–	–
13) 成績を～	7	3	–	–	1	11
2)						
21) 犯人を～	–	–	1	–	–	1
22) 例を～	42	3	11	–	–	56
3)						
31) 子どもを～	–	–	–	–	–	–
32) 声を～	21	11	–	–	–	32
33) 成果を～	21	1	4	–	–	26
34) 委員を～	–	–	–	–	–	–
35) 式を～	5	–	9	–	–	14
4) 作品を～	2	–	–	–	–	2
5) 全力を～	9	–	1	–	–	10
6)						
60) お金を～	3	1	–	–	–	4
61) …て～	37	4	–	–	–	41
7) 油で～	–	–	–	5	–	5
8) 潮が～	–	–	–	–	–	–
?	2	2	–	–	–	4

4.「う　く」

〔00〕「うく」は，原則として，液体・気体またはこれに類するものの中での上昇をあらわす。

〔液体の例〕

○銀金具の握のある杖が，その金具の重みのために頭の方だけ少し沈みながら，濁つた渠のなかを，流れのまにまに**浮いたり**沈んだりして，（田園の憂鬱 61）

〔気体の例〕

○さすがに巨大な嘉門の重量も，そのあふりを食つて，梶棒の為に，二三度梃子で弾ね返されるやうに，宙にふわりと**浮く**のが見えた。（冬の宿 200）

○美しい雲が，丘の高い部分に小さく聳えて末広に茂つた木の梢のところから，いとも軽軽と**浮いて**出る。（田園の憂鬱 116）

つぎの例は，人類の発達についてのべたものである。

○すでにからだがまっすぐになって来ると，それに伴うて二本の手が**浮いて**来て，全く自由なものになると同時に，（貧乏物語 68）

これも，上昇をあらわしているにはちがいないが，重点は，地面との接触をうしない，空中を自由に移動できる状態になった，という点にある。その点では，たとえば〔1〕「歯がうく」のような表現につながる面をもっている。

辞典のなかには，液体特に水のばあいにしか注意してないものがあるが，これはもちろんまちがいである。また，「表面にあがる」ことは，事実おおいにしても，上の例にみるように必要条件ではないのだから，そう規定することは行きすぎである。気体（空気）のばあいには，ことの性質上，表面に……ということはほとんどないだろう。

「～た」「～ている」の形で結果を示すことは，多くの他の移動をあらわす動詞と同様である。液体のばあいには，その表面にあることをさすのがふつうである。

○その下の油のギラギラ浮いた水たまりで（暗夜行路・前 140）

○泉水に大きな緋鯉が絵に描いたやうに浮いてゐた。（あらくれ 17）

一方、気体のばあいには，底（地面）からはなれた状態にあることをさす。

○直ぐ石油は地の上から三四寸浮いたところに大きな軽い火の塊をつくつて，燃え立つた。（田園の憂鬱 72）

○ふと彼の目の前へ人間の足の形が浮んで来た。足だけが中有に浮いて居るやうであつた。（田園の憂鬱 93）

液体についても，これとおなじ状態，すなわち，表面には達しないが底からははなれている状態を「ういている」といえるかもしれないが，実例はなかった。

しかし，「～た」「～ている」ではなく連体法のばあいに「うく」の形でこれにあたるような結果の状態の意味をもあらわせることは，「行く」などの移動の動詞とはちがう点である。これも典型的な例はなかったけれども，

○我を忘れてベンチから飛出し，殊勲者樋笠を胴上げする巨人軍ナイン。数万の目と目が宙に浮く樋笠に集中した。（ベースボールマガジン 1956年5月 24）

の例は，あるいはそうかもしれない。すなわち，この例の「浮く」は上昇しつつあることを示すとも，またすでに上昇をおわって空中に「浮いた」状態にあることを示すともとれるのである。これが，たとえば「あがる」であったら，あがりつつあることを示すのがふつうであろう。

はじめに，液体・気体または「これに類するもの」としたのは，どろ・あめ・砂などのばあいにも，やはり「うく」といえるだろうとおもったからであるが，これも実例はなかった。また，上昇といっても，厳密には，固定した物体のささえなしに，といった表現をおぎなうことが必要だろう。人が柱をのぼるのも空気中での上昇だからである。

「うく」動作とは，つまり「ういた状態になる」ことである。そして，液体のばあい，これは「表面にあるようになる」ことである。力点が上昇という経過よりも，結果の面におかれると，そのような状態になりさえすれば，上昇という方法によらなくても「うく」で表現されるようになる。

○北条　泳げるか，泳げないか，水にはいってみなきゃ……。（笑声）水のない世界にいたんだから……。

野添　はいれば浮くかもしれない。（主婦と生活 1956年12月 153）

○比重は○・八だから水にも浮くという，完全な軽量コンクリートである。（ダイヤモ

ンド 1956年6月2日 46)

これらは「しずんだ」状態から「ういた」状態に，上昇という動作によって変化することではない。「ういた」状態への変化は，水の外から水にはいることによっておこるのであり，その際，上下関係からいえば，むしろ下降して「うく」ことになるであろう。気体のばあいにも，より高いところからおちてきて「ういた」状態になることを，「うく」で表現することもありうるだろう。この点を重視すれば，「うく」の基本的意味は，上昇というよりも，「水面や空中にただよう状態になる」ことであると規定すべきかもしれない。

〔01〕 (からだの表面にあぶらなどが) あらわれること。

液体のばあい，上昇することの多くは、結果的には液の表面に出ることであるが，固体である皮膚の表面についても，つぎのように「うく」がつかわれることがある。

○それも海近い田舎から出て来たあぶらのギラギラ浮いた顔，(放浪記 212)

あぶらが皮膚の表面に出ること以外に，どのような事実について「うく」がもちいられるか，あきらかでない。シミ・ソバカスなどが「うっすりと皮膚にうく」などといいそうには思われるが，いずれにしても，きわめてかぎられたものについてしか，この表現はつかえないだろう。つぎのような例があったが，これも臨時的な用法と思われる。

○お女郎は毎日秋刀魚ばかりたべさせられては，体中にうろこが浮いてくるだろう。(放浪記 102)

なお，つぎの例は，まったく移動をともなわない出現（発生）である。しかし，顔の表面にあらわれるという点で「あぶらがうく」の系列に，その延長上にあるといえるだろう。

○へんに淋しそうな表情だけがぼんやり浮いている。(むらぎも 86)

〔02〕 ぬいつけない状態にしておくこと。

○見返し奥は裁目を二つ折にして端ミシンをかけて浮かせておきます。(若い女性 1956年7月 253)

○前打合せの見返しは裏に折って浮かせます。(婦人倶楽部 1956年10月付録 流行のジャケット集 98)

これは，宙にういた状態にある点で基本的意味と共通であるが，基点が下になくて服の本体である点で特殊である。使役以外に「浮いている」などの形でつかうかどうか，あきらかでない。

〔1〕 ぐらぐらするような状態にあること。

これは当然固体のなかにおけるもので，ぐらつくことは，つまりまわりの固体が液体（気体）にそれだけ近くなったことを意味する。上昇しかねないようすをいったものであろうが，事実として上昇しないでもよい。実例には「歯の浮く（ような）」という慣

用的な表現しかなかったが「土台（根太）がうく」などもありうるだろう。しかし，いずれにしても，この意味の「うく」の対象をあらわす名詞はかぎられていて，自由な結びつきをつくるとはいえないものとおもわれる。

○酸っぱいものを食べた後のように，歯がじんと浮いてきた。（放浪記 212）

○ダイヤの指環を抜いて見せて，女達に品質の鑑定法や相場などを長々と説明するといふやうな，万事思切つて歯の浮くやうな事をする男（つゆのあとさき 18）

○謙作は歯の浮くいやな文字を予想しながら読んだ。（暗夜行路・前 109）

なお，「歯のうく（ような）」という慣用句は，大体は上に示したように，きざっぽい，いやらしい感じに対する不愉快さをあらわしたものだが，つぎの1例はちがっていた。この場かぎりの使い方であろう。

○ミシンがまた歯の浮くやうな騒々しさで運転しはじめた。（あらくれ 151）

この，音に対する不快感のほうが，態度やことばの内容に対するそれよりも，一層直接的に「歯がうく」ことと結びついているであろう。

〔2〕 まわりのものがみえずに、それだけがきわだってみえる（ようになる）ということ。

液体の表面に出ることも，空中にあがることも，ともに他のものからはなれて一層みやすい状態になることである。この点が強調されて生じたのがつぎのような用法であろう。

○暗がりの中にそれだけがほの白く浮いてゐる彼女の寝顔を（風立ちぬ 133）

○同時にカーテンがめくれて硝子戸に滋子の顔が浮いた。（家の光 1956年1月 75）

○カムフラージュの黄の色は暗い夜の色のなかで，白くういていた。（真空地帯・上 209）

つぎの例は，ここに属するやや抽象的な用例である。（「うかぶ」にくらべて，古い用法かもしれない。）

○親達が失望して情ながる面（かほ）は手紙の上に浮いて見えるけれど（平凡 106）

○私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。（こゝろ 13）

〔3〕 大衆の生活や気もちから，はなれていること。

○国会は，こうした国民大衆の運動からやや浮いている。（平和 1953年9月 19）

○要するに法律が我々の生活から浮いているのは，法律の製造元である国会の制度が，やはり形ばかりで中身は浮いている，というところからも来ているのである。（ものの見方について 152～153）

○現実を見つめて，その現実から引出してきた言葉ではなく，現実からは浮いた言葉であり，希望の表明である。（ものの見方について 174）

この用法はもちろん基本的な意味の比ゆ的な使い方から出たものである。これを単なる比ゆ的用法としないで，独立の意味としてたてた根拠は，つぎのようなことである。

○輸入小説には人生の真相が活字の面(おもて)に浮いてゐるやうに思つてゐた。(平凡 98)

○慰さめる私も，慰さめられる奥さんも，共に波に浮いて，ゆらゆらしてゐた。ゆらゆらしながら，奥さんは何処迄も手を出して，覚束ない私の判断に縋り付かうとした。(こゝろ 54～55)

などは，基本的意味の比ゆ的用法であって，独立の意味ではない。ということは，この「うく」だけが比ゆ的につかわれているのではなく，「活字の面に」「波に」「ゆらゆら」などという表現をふくめて，もうすこし長い文脈全体が比ゆ化していることからいえる。直接的表現の世界から比ゆの世界にうつったのは，「浮いて」ではなくて「……波に浮いて……」である。そのため，この「波に」と「浮いて」との関係，また「浮いて」とその他の語との関係自身は，なんの変化もないのである。「波に」のように、「うく」とともに比ゆ化したことばがないことは，「うく」が独立のあらたな意味を獲得したとすることにとって，必要条件に近い。(「波に」がなくて「うく」だけで比ゆ的につかわれる例ももちろんあるから，十分条件ではないが。)

これに対して，「大衆から浮いている」のような用法では，どこにういているのか，という位置がしめされることは，まずないだろう。これは，この用法が，つねに基本的な液体や気体のなかでの現象についてのイメージの上になりたっているとするならば，すこしおかしいことである。また，大衆を水底や地表にたとえる言い方がないことも1つの理由になる。「ういている」が浮遊状態にたとえられるならば，その基点である大衆は，当然これらにたとえられるべきものである。

〔4〕 男女関係について，不まじめな気持ちでいること。

この意味は，「ういた」の形での連体法にしかみられない。

○年の至らぬのと浮いた心のない二人は，なかなか差向ひでそんな話は出来なかつた。(野菊の墓 31)

○「そんなやかましやの姉さんが，よくまたそんな浮いた話を平気でゐるね」(多情仏心・前 31)

つぎの例もこれに属するとも考えられるが，「浮いた大胆さ」というつづき方が特殊でちょっとひっかかる。

○暫く経つて，帰つて来たおゆふの顔には，鶴さんのためなら、何でも為かねないやうな浮いた大胆さと不安が見えてゐた。(あらくれ 98～99)

〔5〕 陽気なこと。

この意味も「うかない（うかぬ)」という形で連体法にもちいられるばあいにかぎられる。

○何か厭な事でもおありになつた続きのやうに，浮かない顔をして(桑の実 96)

○浮かぬ顔をしてゐる相客でもあれば，気前よく振舞つてゆく。(冬の宿 190)

〔6〕 つかうべきものについて、あまること。

○今度，駿の里扶持の金が浮けば，夜学にも通へると彼は思つた。（波 185）

○この方法でゆくと，日本の砂糖輸入量を二割くらい減らすこともできて，それだけ外貨も浮くことになる。（実業の日本 1956年4月1日 156）

ただ単に「あまる」「のこる」などと規定しただけでは不十分である。この意味での「うく」は，何かの目的でつかうべき人員・資材・金などが，はじめの予想よりも少なくてすんだ結果としてあまることである。したがって，これは活動の主体のがわ（人間や道具など）についていうことばであって，対象のがわについてはもちいられない。たとえば、田うえについて，しごとがすすんで人手や時間が「うく」ことはあっても，しごとがおくれて，その日のうちにうえるべき田が一反歩「ういた」とはいえない。また，「酒がういた」というのは，その酒を提供するがわ，つまり酒を手段として，人をもてなすというしごとをするがわの立ちばにたった表現であって，酒をのむがわ，すなわちこれを純粋に消費の対象としてみるがわの表現ではない。

つぎの例は，以上の説明と多少ぶつかるところがある。

○二千円の賃上げは，ハネ返りを計算すると，トン当り三百円余の原価高となる。炭況回復で浮いた利益を喰って，なお赤字となる。（東洋経済新報 1956年2月25日 67）

すなわち，このばあい「利益」は生産された対象であって，生産手段ではないからである。その利益が何かのしごとに資金としてふりむけられ，それが「ういた」のならば，それは問題ないが，このばあいは，そこまでいっていないであろう。ここでは「予定以上の生産に達した」ことが「浮いた」で表現されているわけであるが，そこまでこの意味を広いものとみとめるべきか，あるいはほかの理由によってこの例を説明すべきか，あきらかでない。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	浮	計		かな	浮	計
00 ） 水に～	－	8	8	3 ） 大衆から～	－	－	－
01 ） 脂が～	－	1	1	4 ） ういた話	－	－	－
02 ） 見返しをうかせる〔裁〕	－	3	3	5 ） うかない顔	－	2	2
1 ） 歯が～	－	2	2	6 ） 金が～	－	2	2
2 ） やみに～	－	2	2				

5. 「うかぶ」

〔00〕 「うかぶ」の基本的意味は，ほぼ「うく」と同様であると，一応はいえるであろう。問題は，「うかぶ」について，上昇そのものよりも結果として状態をあらわす例がおおいことである。

○水面へ浮んだかと思うと，たちまち海底深く沈んで（ニューエイジ 1953年10月 5）

のように，移動をあらわす例も，全然ないことはないが，まれである。おおくは，

○空も，其処に唯一筋繊糸のやうに浮んだ雲も，（田園の憂鬱 109）

○蚕の蛹を干し砕いた餌が水に浮んでゐるのを，（雪国 111）

のように，「～た」「～ている」の形で状態をあらわすものである。また，

○彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ，妖しく美しい夜光虫であつた。（雪国 11）

○空に浮ぶ冬雲の焦茶色が灰がゝつた紫色に変つた頃は，（破戒 287）

のように，連体法のばあい，このままの形で状態性になるものもある。

ここまでは「うく」とおなじだが，「～う」「～ながら」の形で状態の継続をあらわすのは，「うく」の用例にはみられなかったところである。（ただし，つぎの「うかばう」の例については，やや不自然の感じがあるかもしれない。）

○その静かな方の水に浮びながら、滝川の中にもまれもまれて落ちて行く自分といふものを他人事のやうに眺めやつてゐるやうなものだつた。（或る女・前 88）

○浮かべるだけは浮ばうと船の沈むのを待つてゐました。（銀河鉄道の夜 291）

つぎの例も，上昇の動作をあらわすものかもしれないが，また，宙にうかんでいる状態をいったものと，みられないこともない。

○何か素晴しい力でグイと持ち上げられる。船が一瞬間宙に浮かぶ。——が，ぐウと元の位置に沈む。（蟹工船 19）

これらの例にあたる表現が「うく」の方にないとはいいきれない。また，数の上で，これら状態性のものの比率が「うかぶ」の方にたかいというには，用例が少なすぎる。したがって，断定はできないが，もっと大規模な調査をすれば「うかぶ」の方が「うく」よりも状態的だといえるかもしれない。（辞典のなかにも「うく」に対しては「……に出て来る」と動作としての訳を与え，「うかぶ」に対しては「……を離れてある」と状態としての訳を与えているものがある。）わずかの数だが，雑誌 90 種の資料についてみると，つぎのようになる。（0 とした，基本型な用法のものだけ。）

	うく		うかぶ	
動作	4	うく（終止） 2 ういた（連体） 1 ういて 1	0	
状態	2	ういて 1 ういている 1	4	うかぶ（連体） 1 うかんでいる 3
不明	1	うく（連体）	1	うかぶ（終止）

「うく」のばあいと同様に，上昇によらずに「水面や空中にただよう状態になる」現象をさすことがある。つぎの用例は，その典型的なものである。

○柿の病葉が一枚，ひらひらと舞ひ落ちて，ぽつりとそこ〔井戸水〕に浮ぶ。（田園の憂鬱 117）

○古い燃えかすの火に向つて，ポンプが一台斜めに弓形の水を立ててゐたが，その前にふつと女の体が浮んだ。さういふ落ち方だつた。（雪国 171）

〔01〕 うかんだ状態にはなるのだが，まったく移動をともなわないもの，つまり，その位置で発生する現象についていうもの。

○あそこへ行く途中，どこかで夕立がして……虹が浮んだ……（田園の憂鬱 93）

これは，どこからか移動してきて，そこにうかんだ状態になるというわけではない。（最初の方にあげた「浮んだ雲」というのも，実は，移動ではなくて発生の結果かもしれない。） つぎの光のばあいも同様である。

○麦の穂波がそよぐ山麓の部落に，朝の光がうかんできた。（明星 1956年10月 190）

○そのあたり〔白いレールの果〕に，夜を吸って潤んだ青いシグナルの光りが泛かんでいた。（新潮 1956年2月 174）

ただし，これら発生にともなってうかんだ状態になるものは，〔0〕の移動によるものと，〔1〕の，移動をともなわないで，よく見える状態になるものとの中間に位置するものであり，見方によっては後者にふくめることもできよう。特に，シグナルの光の例などは，地面からはなれたところにあるという意味で「うかんで」いるとともに，やみの中からはっきり見えるという意味でも「うかんで」いるのであり，両方の用法をかねているとみられる。

〔02〕 （液体が）固体の表面にあらわれること。

○真白な額には汗がぎらぎらと浮び，（冬の宿 111）

○考へて来ると，仲子の眼に涙が浮んだ。（仲子・上 87）

ここに属すべきものとしては，汗が皮膚の表面にあらわれるのと，涙が目にあらわれるのと，2つのばあいしかない。これがどのくらいの適用範囲をもった用法かは，あきらかでないが，たとえば，つゆが草の葉につく現象なども，「うかんだ」とよべるであろう。かりに（液体が）としたが，もっとせまく「液状の分泌物が」としたほうが正確かもしれない。

〔03〕 現象が固体の表面にあらわれること。もっとしぼっていえば，一定の感情をあらわす表情が，顔にあらわれること。

○その顔には，ありありと，狼狽の色が浮んでゐた。（冬の宿 32）

○彼の顔には満足さうな表情がうかんできた。（中央公論 1954年6月 285）

○信之の頬には，ちよつと苦笑ひが浮んで，すぐ消えた。（多情仏心・前 316）

○仄かな微笑が唇にうかんだ。（週刊読売 1956年5月27日 77）

○相手の眼にきっと恐怖と嫌悪の色が浮ぶだろうと予期したが，意外にも彼の眼に浮んだのは，ますます大きくなる尊敬の色であった。（中央公論 1953年7月 282）

うかぶ場所は，以上のように，「顔」「頬」「唇」「目」などであり，これらは大体明示されているが，つぎのように省略されているばあいもある。

○思はず，嬉しくつてたまらないやうな微笑（ほほゑみ）が浮かんだ。（多情仏心・前 273）

また，うかぶものは，「色」「表情」「微笑」など，一定の感情の表現されているよ

うすであるが，感情そのものが「うかぶ」ばあいもある。ただし，これは特殊な表現といえるであろう。

○怒気(いかり)と畏怖(おそれ)とはかはるがはる丑松の口唇(くちびる)に浮んだ。（破戒 215）

なお，一定の感情の表現ではないようすが現れたものの例として，つぎのものがある。

○一見やさしく見える母性的な容姿のなかから，思いがけない婦人闘士のおもかげが浮んで来たようであった。（人間の壁・上 179）

このようなものまでふくめると，規定の方も「一定の感情をあらわす表情が」というよりも広くしなければならないが，今はこれ1つしかないので，これ以上の検討はさける。

以上，〔01〕〔02〕〔03〕は，いずれも，表面にあらわれるという点と，そのあらわれ方が移動によるのではなくて，発生によるのだという点とが共通している。その反対語も，当然，移動をあらわす「しずむ」ではなくて「きえる」である。「多情仏心」の例，「苦笑ひが浮んで，すぐ消えた」は，そのことを示している。そして，表面にあらわれることは，よくみえるようになることでもあるから，その意味では〔00〕から〔1〕への橋わたしをしている。

〔10〕 それだけが切りはなされてよく見える（ようになる）こと。

「うく」のばあいと同様に，この用法は，空間的に「うかぶ」ことが結果的には「よくみえる」ことになるために，うまれたもので，つぎにあげる用例についてみても，やはり基準面（地面など）から切りはなされて上の方にある，というニュアンスが，多かれ少なかれ，つきまとっているようである。

○暗い夜空の下に，ほのぼのと浮んだ女の顔へ（多情仏心・前 175）

○網戸にも外側から幾種類とも知れぬ蛾が点々ととまつて，澄み渡つた月明りに浮んでゐた。（雪国 91）

○柔かい靄の中に，雑夫の二本の足がローソクのやうに浮かんだ。（蟹工船 49）

○山や森や村や畑，——さうしたすべてのものは秋の穏かな日の中にいかにも安定したやうに浮んでゐた。（風立ちぬ 120）

特に，つぎの用例は，まさに，〔0〕と〔1〕との両方の特徴をかねそなえたものであり，用法の移行のしかたを示している。

○ポプラの木が幾本も幾本も，高く星ぞらに浮かんでゐるところ（銀河鉄道の夜 254）

〔11〕 意識の表面にあらわれること。

ここにまとめたもののなかには，〔10〕にちかい具体的なものから，きわめて抽象的なものにいたるまで，いろいろな段階がふくまれる。以下わりに具体的なものから並べることにする。

a）視覚的な像があらわれるもの

aの1）像が主体のそとにあるもの

○母が襷掛で張物をしてゐる姿などが，顕然と目の前に浮ぶ。（平凡 21）

○又忽然として懐かしい昔が眼前に浮ぶから，不覚其に現を脱かし，（平凡 8）

あとの例は，「眼前に」とはあるものの，かならずしも「昔」のようすが視覚的なイメージとなってみえることだけをさすのではないかもしれない。すなわち，もっと概念的に昔のことを思いだしていることも，ふくんでいるのかもしれない。もしそうなら，aの1）とあとで示すものとの両方にまたがることになる。

前の方の例は，これに対して，あきらかに視覚的なイメージをさしている。このばあい，〔10〕とのちがいは，言語表現の面では，ほとんどないといってよい。線をひいたのは，〔10〕の方が客観的にそのような姿であらわれていることの表現であるのに対して，〔11〕のaの1）は，その像が想像の産物である，という根拠によるものである。この根拠は，あくまで言語外の事実にすぎず，きわめてよわいものである。しいていうならば，〔11〕の方の例は「目の前（眼前）に」という限定がついていて，その点慣用句的なのに対し，〔10〕では，さきにあげた例からわかるように，そのような制限がなく，自由につかわれている，というちがいがある。しかし，これも，〔11〕の方はつねにそうだというほどの資料でもないので，十分な論拠とはいいにくいであろう。たとえばつぎの例では，かなり長い文脈をとっても，それが実際にうかんだのか（つまり主人公が本当に「見た」のか），または空想にすぎないのか，はっきりしない。

○ふと彼の目の前へ人間の足の形が浮んで来た。足だけが中有に浮いて居るやうであつた。それはどれほどの大きさであつたか解らないが，それの大きさに就て，別だん注意を呼ばなかつたところを見ると，普通の人間のものぐらゐであつたであらう。それは白い素足で美しかつた。（田園の憂鬱 93）

実は，これは夢の描写である。ところが，そのあとに，目をあけたままねむっていたのではないか，ということがかいてあり，「おれは枕を外してしまつて，畳の上へぢかに横顔を押しつけて寝て居たらしいから，妻の足が歩いて行くのを見て夢だと思つて居たのだ。」という文がある。それで，ますます，実際に見えたのかどうかが，あいまいなのである。

これは極端な例だが，とにかく〔11〕は〔10〕と区別しにくく，特にaの1）とした類は〔10〕といっしょにできる可能性がある。

aの2）像が主体の視覚器管にあるもの

このばあい，つぎのように，目というからだの部分が明示されている。

○母の心配してゐる顔だのが時々眼に浮かんだ。（こゝろ 57）

○昨夜も寝られぬままに川瀬の音を聞いていると，太陽にきらめく葉桜の梢が眼蓋に浮かんでなりません。（私の人生観 66）

おなじ「目にうかぶ」でも，さきにあげた〔03〕の「喜びの色が目にうかぶ」などのばあ

いと，ここの例とは区別しなければならない。さきのばあい，目は客体的なものである。「～の色が目にうかぶ」ようすを見ている人は別にいるのである。「顔にうかぶ」といいかえても，大きなちがいはない。「母の顔が目にうかぶ」の方では，目は主体の一部であり，心の延長である。

aの3）像が主体の思考器官にあるもの

このばあいにも，「頭」「胸」などが明示される。

○すると，私の頭には，その午後家を出るまへの光景が浮んだ。（冬の宿 129）

○暗く眼を伏せた，さびしい衰耄した姿が鈴むらさんの胸に浮んだ。（末枯 56）

aの4）像が意識のなかにあるもの

○既に義俠的な行為をする自分が想像に浮ぶのか，（小説新潮 1956年6月 228）

以上の，aの1～4）は，像の生じる場所をただ列挙しただけで，そのあいだに大きな区別をつけようとするわけではない。いずれにしても，意識内でのできごとであり，事実としては，「目の前に」といおうと，「目に」「あたまに」といおうと，また，つぎのように，場所の限定がない（したがって1～3のどれにも属さない）ばあいだろうと，おなじことである。

○五百円を持つと，東京の妻や子供のよろこぶ顔が浮んできて（冬の宿 66）

したがって，「目の前に」などは，事実のちがいを言いわけるためや，よりくわしく描写するためにつけられたことばではなく，むしろ表現効果をますための手段である。すなわち，単に「姿がうかんだ」というよりも，「姿が目の前にうかんだ」といえば，「ありありと」「いきいきと」などの副詞をつけたのと同様の効果をもつであろう。

なお，<視覚的な像>をあらわす名詞としては，「顔」のような具体名詞，「姿」のようにそこから視覚的な側面を抽象した抽象名詞があるほか，さきにあげた「平凡」の「昔」や，

○君江の眼にはいよいよ初めての夜の事が浮んで来る。（つゆのあとさき 31）

○此時長十郎の心頭には老母と妻との事が浮かんだ。（阿部一族 33）

の「事」のように，それ自体では視覚的な像をあらわさず，単に視覚的な映像か，これに何らかの判断のくわわった一連の考えであるか，はっきりしないものもある。

b）考えがあらわれるもの

これには，aの1)・aの2)にあたるもの，つまり主体の外（「目の前」など）や「眼」にあらわれるばあいが欠けている。それだけ，基本になる空間的上昇からは遠くなっている。また，a）とb）をわけ，それをこの順にならべることの意味も，この点にある。このことによって，意味の派生関係があきらかになるからだ。

aの3)にあたる，主体の思考器官のうちにあらわれるものの例には，つぎのようなも

のがある。

○お志保の顔付を眺めたばかりで，大凡(おほよそ)の想像が銀之助の胸に浮ぶ。（破戒 317）

○其の間に頭脳に浮んで来る考は総て断片的で，猛烈で，急激で，（蒲団 6）

また，aの4）にあたる，意識内への登場としては，

○不敵な誓願が，彼の心に浮んで来たのである。（恩讐の彼方に 74）

があり，特にその場所を指定しないものには，

○平野のどこを眺めても，昔しの記憶は浮ばなかつた。（あらくれ 247）

○事々にこういう邪推が浮かぶのであった。（暗夜行路・前 26）

などがある。

考えをあらわす名詞としては，以上に引用してきたもののほかに，「感想」「感情」「空想」「反省」「哀憐(あはれみ)」「追憶(おもひで)」などがある。また，これらと別に，ことばが意識にのぼることもある。

○島村の頭にはまた徒労といふ言葉が浮んで来た。（雪国 59）

○いつか下さった御手紙の文句が浮かんできて，（保健同人 1956年 増刊 140）

○キリキリと二三遍廻つたといふ今聞いた話が胸に浮ぶと，（平凡 43）

「意識の表面にあらわれる」意味が，〔0〕の「水にうかぶ」の類や，〔10〕の「やみにうかぶ」の類をもとにした，比ゆ的な用法から出たことはあきらかである。つぎの用例を参照。

○こういう断片的な記憶が，ちょうど沼水の底から沼気(しょうき)のぷかりぷかりと浮かんで来るように浮かんで来た。（暗夜行路・前 162）

さきに「私の頭には先生の顔が浮いて出た」のような例を，「それだけがみえる」という意味の比ゆ的な用法と考えて，独立の項目を立てなかった。これに対して，「うかぶ」について〔10〕と区別して〔11〕をもうけたことには，問題が残るだろう。しかし，「うく」について，このような例がまれなのにくらべ，「うかぶ」の例はかなり多い，というちがいがある。（「うく」のばあいは，さきにあげた2例だけで，「うかぶ」の方は約90例におよぶ。）さらに重要なことは形式の上でも，もとになった意味とのあいだでちがいがみられることである。すなわち，「考えがうかぶ」のような類については，「……に」という場所の指定のないものが少なくない。今，雑誌90種の用例だけについてみると，つぎのようになる。

＜「……に」が＞		ある	ない
〔0〕		11	−
〔10〕		1	−
〔11〕	a）	8	2
	b）	3	3

このことは，意識の表面にあらわれる，という意味が，基本的な意味から独立していくことを示していると思われる。

〔21〕 成功すること。

○そんな紙屑みたいなものをひねくり廻して，小汚ねえまねをすれア，……こつちは千円どぶに捨てたと思やアすむんだけれど，そつちア一生人間らしい世の中にやア**浮かばれねえ**や。（多情仏心・前 287）

これは上の1例しかなく，〔0〕から独立した意味とみとめるべきか，単に比ゆ的なものとみとめるべきか，不明である。一般的な用法といえるかどうかも疑問である。

このほか，これに近いものとして，

○そして後悔するときは，もう自分の**浮かぶ**瀬は無くなっていました。（出家とその弟子 165）

という慣用句的な用法があるが，これは「瀬」とともに使われていることからみて，「水に浮かぶ」などと同じ基本的用法に属するものの比ゆ的な使い方とみられる。

〔22〕 成仏する，意味。

○頭陀袋一つで亡者が**浮ばれねえ**つて訳でもあるめえに。（青銅の基督 76）

これと前の成功する意味とは，どちらも「うかぶ」の基本的な意味の上昇という側面を，質的な向上におきかえたものだという点で共通性がある。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	浮	泛	計		かな	浮	泛	計
00）水に～	－	5	－	5	10）やみに～	1	－	－	1
01）虹が～	1	－	1	2	11）頭に～	2	14	－	16
02）汗が～	－	－	－	－	21）世の中に～	－	－	－	－
03）表情が～	1	3	－	4	22）仏が～	－	－	－	－

6.「で　る」

〔000〕「でる」のもっとも基本的な意味は，物体が他の物体から，または一定範囲の空間から，外に移動することである。

このうちで，用例の大部分をしめるのは，人間が建物やへやの外に移動するものである。以下に，それぞれ2例ずつあげる。

○九時ごろ二人はその家(うち)を出た。（暗夜行路・前 83）

○彼女は図書館を出た。（仲子・上 90）

○二人はすぐその部屋を出た。（暗夜行路・前 106）

○葉子はそれでも船室を出ようとはしなかつた。（或る女・前 98）

つぎに，空間的ではあるが一定の物体からでるものがある。この例はずっと少ない。

○「起きるよ。」と，島村は女の手を握つたまま，勢ひよく寝床を出た。（雪国 111）

○おくみは蚊帳を出て電気をつけた。（桑の実 138）

○いつまでもぐずぐずしているので湯槽を出られなかったと（暗夜行路・前 126）

これらの例のほか，この類に属するものとしては，「フトンを」「床を」「風呂を」など，ほぼ同様のものしかなかった。

一方，逆に，ものとしての性格がうすれて，一定範囲の空間を示すことばと結びついている例がある。これも数はわずかである。

○寺の境内を出ると，（こゝろ 223）

○町を出て，省線の踏切を渡つて，（冬の宿 69）

○この島を出ることだけが執念になっていた。（オール読物 1956年10月 150）

○彼は海から出て黙つて家の方へ一人で帰つた。（友情 60）

○朴訥な父親が附添ひ，髪の長い，兄貴がおぶつて山から出て来た。（高野聖 72）

以上の例は，みな出発点が示されているものだが，このほかに，経由点や到達点の示されているもの，何もそのようなものがなくて，文脈からの判断にまかされているもの，などがある。

（経由点）

○斯う思ひ乍ら，丑松は蓮華寺の山門を出た。（破戒 300）

（到達点）

○三好は先に立つて，硝子扉のそとに出た。（多情仏心・前 37）

○車の音がするから出てみたの。表に出てみたのよ。（雪国 159）

（何もないもの）

○奥さんは果して留守でした。下女も奥さんと一所に出たのでした。（こゝろ 213）

〔なお，上の「雪国」の例を参照。〕

出発点は，大部分が「～を」の形で示され，ごくわずかのものが「～から」で示されている。そして，「～から」のものの多くは，同様の表現が「～を」にも見いだされる。

○いづれも小屋を出て，午後の労働に従事して居た。（破戒 51）

○厠を出ると，其処に（蒲団 72）

○曾田は誰にも見つけられることなく倉庫を出て，（真空地帯・上 127）

○おくみは小さい笊を持つて畠を出た。（桑の実 156）

○裏の山羊がもう起きて小屋から出てゐるのが見えた。（桑の実 37）

○厠から出て来た彼は，（田園の憂鬱 105）

○兵器庫からでてくると，木谷につき当りそうになって（真空地帯・上 150）

○無智な顔をして畑から出て来る汚いその姿を見たときには，（あらくれ 175）

これらの例について、どのようなちがいがあるかをいうのはむずかしい。しいていうならば，「～から」は「でてくる」の形と結びついていることでわかるように，経過に重点をおいた具体的な表現で，「～を」は結果に重点をおいた，より抽象的な表現であるといえるかもしれない。しかし，この点については，逆に，そういうちがいは「でてくる」という動詞のアスペクトのうみだすものだから，「～をでる」と「～からでる」自

体にはそのような差がない，と考えることもできる。結局のところ，よくわからないというほかない。

ただ1つ，わりにはっきりいえることは，場所としての性格がうすれて，方向的なニュアンスをおびた名詞については，「～を」よりも「～から」がつかわれる，ということである。上にあげた例でいうと，「海から」「山から」のようなばあいである。これらは，ひじょうに広くて，その限界がはっきりしない。はっきりわかるのは，こちらがわの限界線だけである。そのため，これらは，出発点としての地点・地域から，方向をあらわすものへと近づくのではないかと思われる。完全に方向の表現になってしまえば，「～を」はつかえない。たとえば，「東から」「上から」などは「東を」「上を」にはならない。（もちろん，「東」「上」が方向ではなくて特定の場所をさしているばあいは別である。）しかし，目的語が完全な方向のばあいには，「でる」自身もまた中から外への移動ではなくて出現の意味になってしまうから，ここに属する「でる」で「東からでる」のような例はなかった。方向に準ずるものとして，相対的な位置を示す「奥」「側」「中」などの目的語をとったものはあり，これらはみな「～から」であって「～を」ではない。これらの例は，いわば出現の意味への橋わたし的なものといえる。

○花枝のことをよく知っているばあさんが奥からでてきて，（真空地帯・上 222）

○雑夫が，二日前にボイラーの側から出てきた所をつかまつた。（蟹工船 33）

○硝子扉が日を照り返しつつ開いた。中から二人づれの男が出て来た。（仲子・上 36）

○彼の二疋の犬は，その時床の下からほの白く出て来るや否や，（田園の憂鬱 70）

なお，つぎの例を参照。

○私はその森を出た。（風立ちぬ 118）

○沢山の男たちが林の奥から出てきて，（冬の宿 89）

「～をでる」と「～からでる」とのちがいについては，まだほかに考えられる1つの可能性がある。それは，「～から」の方が比較的あたらしく勢いをえつつあるのではないか，ということである。この形が「破戒」や「こゝろ」になくて「真空地帯」や「富岳百景」にみられるところから，そのような推定がうまれてくるのであるが，われわれの資料採集が，このことを統計的に肯定または否定できるような形ではされていないので，その可能性を指摘するにとどめる。

以上にあげたのは，人間や動物が自分の意志で「でる」例であった。このほか，意志をもたないものが外に「でる」ばあいも当然ここにふくまれる。しかし，その例は（特に小説では）きわめてすくない。

○品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時，（或る女・前 8）

○七月（ななつき）になるかならぬの胎児が出たしまつたことに気の附いたのは，（あらくれ 91）

○目を，目玉がまぶたの外へ出そうになるほど，見開いて，（羅生門 13）

○熔鉱炉から出た銅の汁のやうに，（銀河鉄道の夜 282）

○窓をあけて吐かうとしても出なかつた。（雪国 34）

○また射つた。弾は出なかつた。（野火 84）

つぎの例は，「暗黒（くらやみ）」を出発点とする，腕の移動である。

○暗黒（くらやみ）から，茸々（もじゃもじゃ）と毛の生えた，節くれ立つた大きな腕がヌツと出て，（平凡 27）

しかし，

○さあ，殴れ。誰も手が出んのか，（文芸春秋 1956年12月 63）

では，やはり具体的な手の動きにはちがいないが，なぐるための動作に限定されていること，どこから出たかという出発点が問題にならないこと，などのために，慣用句になっている。（出発点が無視されて方向性だけがある点では，むしろこれらは〔03〕「前へ出る」の類に入れるべきかもしれない。）さらに，「手が出る」が抽象的なことの表現にもちいられた慣用句には，つぎのようなものがある。

○好きな菊池契月，藤島武二といった故人の大家は手が出ない状態です。（週刊新潮 1956年 11月 5 日 56）

○のどから手が出るほどほしいがざんねんながら……（週刊読売 1956年11月 4 日 42）

○社会主義運動は手も足も出ない状態になって，（改造 1953年 7 月 202）

「でる」の意味のうち，第1の大わけを〔0〕としたものは，みな空間的な移動である。このうち，〔00〕は中から外への移動で，これがもとになって，いろいろな意味がうまれる。第3けた目を0にしたものは，いわば物理的な条件がかわったものである。

〔010〕（出発）「東京をでる」の類は，出発点が，ある広がりをもったものの内部から，1点へとかわったもの。

〔020〕（到達）「町にでる」の類は，出発点ではなくて到達点に重点があるもの。

〔030〕（前進）「前へでる」の類は，出発点も到達点も意味をうしない，方向性だけが問題になるもの。

これらのそれぞれについて，ほかの条件がくわわって特殊化した変種がある。それらは，第3けた目を 1.2……にしてあらわすことにした。

〔001〕 あることをするために外出すること。

○お島はぐづぐづしてゐる小野田を急立（せきた）てゝ家を捜しに出た。（あらくれ 188）

○「どこか飯を食いに出ないか」（暗夜行路・前 40）

○佃はもう自分の講義に出て行つた後であつた。（仲子・上 73）

○仕事に出てゐない「病気のものだけ」で，「お通夜」をさせることに（盤工船 86）

これらは，どれも，事実の上では家またはこれに準ずるもの（船室など）から外にいくことで，そのかぎりでは〔000〕とおなじである。しかし，このように，ある目的をもって外出することの表現においては，出発点も到達点も，もちろん経由点も示されないのが原則であって，その点では＜外に＞という観点はうすくなり，「～にいく」と大差ないものになっている。

目的を示すには，上の「捜しに」「食いに」のような動詞連用形によるものと，「講義に」「仕事に」のような動作性名詞によるものとがある。後者の例としては，なおつ

ぎのようなものがある。

あいさつ　アルバイト　応待　買物　稼業　狩　気晴し　教授　行商　航海　興行　公用　散歩　使役　修業　商売　田植　托鉢　釣　偵察　出稼ぎ　出前　トレーニング　拝見　配達　日傭　奉公　飯　夜勤　夜警　遊山　用達　夜伽　漁

このほか，「～に」の位置に，そのことをする人をあらわす名詞がくる，つぎのような例もある。

○新治の母親が海女に出るのは今日が最初であつた。（潮騒 124）

○拾い屋に出るにしても，職業安定所の行列に加わるにしても，（自由学校 183～184）

「旅にでる」の類もこれとおなじとみられる。

○Kはあまり旅へ出ない男でした。（こゝろ 219）

○ひとりで旅行に出よう，――ふとさう思ひ立つた。（多情仏心・前 250）

ただし，上にあげたような動作性名詞にくらべて，「旅」はいわば大きな遠出であって，家の中から外へ，といったことの比重は，相対的にかるくなる。したがって，それはただの出発点にすぎなくなり，以下の〔010〕〔011〕などに近い面をもっている。

なお，「芸者にでる」なども，あるいはここにのべた類と関係があるかもしれないが，あとの〔32〕でとりあげることにする。

〔002〕 生活の場としてのある場所からはなれること。

○君江が家を出たわけは両親はじめ親類中挙つて是非にもと説き勧めた縁談を避けやうが為めであつた。（つゆのあとさき 7）

○騒々しい下宿を出て，新らしく一戸を構へて見やうかといふ気に（こゝろ 171）

これらの「家を出る」「下宿を出る」は，単なる外出ではない。自分の生活している場所としての家や下宿をはなれて，別のところでくらすようになることである。この用法において，出発点をあらわす名詞は，かなりかぎられている。「家」などのほかには，まず，「病院」「刑務所」のように，そこにいることが一定の形での生活を意味するものがある。

○病院から出られて間もないころ，（桑の実 63）

○刑務所をでればまず何よりも林中尉のところにでかけて行って，（真空地帯・上 65）

つぎに，一定の地域社会がある。

○私はなるべく父の機嫌に逆はずに，田舎を出やうとした。（こゝろ 120～121）

○南方から帰ってきて，じきに村を出ていった（講談倶楽部 1956年5月 263）

○再び帰っては来まいと思って，故郷を出たのだった。（世界 1953年9月 204）

種類としては，これでほとんど全部である。

この種のものは，実際上は空間的にも家などを「出て」いるわけだから，単なる外出とまぎらわしいばあいもある。〔000〕の方は一時的に出るのがふつうであるが，〔002〕のばあいは永久的に，または少なくともかなり長期間にわたってはなれるのであり，い

つ，どのようにして出ていくのかという具体的な出方は問題ではない。それだけ〔002〕の方が抽象化しているのである。ところが，描写が具体的であって，しかも事実上はそれが新しい生活への出発を意味するつぎのような例では，どちらに属させるべきかが問題になる。

○かうして，この姦夫姦婦が，浅草田原町の旗本，中川三郎兵衛の家を出たのは，安永三年の秋の初であつた。後には，当年三歳になる三郎兵衛の一子実之助が，父の非業の死も知らず，乳母の懐ろにスヤスヤ眠つて居るばかりであつた。（恩讐の彼方に 62）

○ある日の暮，籠に乗せられて，夕闇の空に紛れて病院を出た。（破戒 6）

「籠に乗せられて」のように，具体的な出方が描写してあるときは，病院生活をはなれるよりも，病院そのものをはなれる方であろう。

なお，この類は，組織からの離脱をあらわす〔40〕につながる。（p. 600～601参照）

〔010〕 ある地点からはなれること。

○夫は，彼等が江戸を出てから，三年目になる春の頃であつた。（恩讐の彼方に 63）

○横浜を出るとなほ汽車は早かつた。（友情 95）

これらの例で，「でる」は，江戸や横浜という，ある広がりをもった地域の中から外へ移動することを表わすのではない。地名は，単に広さを無視した地点を示すにすぎず，「でる」はその地点から，はなれることを表わしているのである。「江戸を出てから」は「江戸を去ってから」「江戸をたってから」といっても大差ないはずである。もっとも，これが完全に「去る」などと同じかどうかには疑問がのこる。というのは，まったく広さをもたない点や線のばあい，たとえば「南極（赤道）をでる」とはいいにくいようにおもわれるからである。「南極（赤道）を去る」とはいえるから，そこに差があるかもしれない。つまり，直接的には，広さは問題ではないけれども，依然として広さのあるものからの出発だということである。

このため，ある地点からはなれること〔010〕であるか，ある地域の外に移ること〔000〕であるか，まぎらわしい例もある。たとえば，

○颱風の圏外へのがれるために，船は早朝に港を出た。（潮騒 140）

では，港を点と考えて，そこを出帆することとみるか，港を一定の広さをもった地域と考えて，その外に出たとみるか，問題になるだろう。しかし，つぎの例は，これに似ているが，あきらかに湾という地域の外に移ることであり，これと比較すると，「潮騒」の例は，やはり港をはなれることの意味とみた方がよさそうに思われる。

○ 燈（ともしび） あかき別府の湊（みなと）を後に，舟は次第に湾を出た。（思出の記・前 173）

〔011〕 出発すること。

○そのうちに汽車がするする出て行つた。（あらくれ 218）

○東京の交通公社本社前から出る志賀高原ゆきの夜行バスは，（旅 1956年1月 120）

○一時半ごろ汽船の出る所へ行った。（暗夜行路・前 169）

これらにあっては，やはり出発点は1つの点であるが，「江戸を出る」などとちがって，さらに特定の地点をはなれるということも問題でなくなり，ただ単に移動をはじめたことをあらわしている。上にみるように，車か船の例だけだが，そのほか，たとえば「使いの者が朝九時に出たから……」のようなばあいも，これに属するとみてよいだろう。

つぎの例は，ここに属する慣用句である。

○夫が失業したとかそういうときには，だれからも助け船が出ないのですね。（婦人公論 1956年11月 219）

〔020〕 ある場所にいくこと。

これには，つぎのようなばあいを区別することができる。

a）外にある場所に「でる」こと。

これは，基本的な意味にもっとも近いものである。

○なかには広い運動場に出て，雪投げをして遊ぶものもあつた。（破戒 196）

○滝十郎を先に，信之，三好と並んで廊下へ出た。（多情仏心・前 83）

○葉子は温室のやうな船室からこのきりつとした空気に触れようとして甲板に出て見た。（或る女・上 142）

○私は何処でも構はなかつた。たゞ先生を伴れて郊外へ出たかつた。（こゝろ 71）

○林が尽きると野に出る。（武蔵野 15）

これらの例は，みな，ある範囲の空間から外に移動することが，そのまま他の空間の中へいくことにつながるものである。「船室から」のように，この出発点が示されていることはまれであって，上の例でも，校舎・へや・町なかなどの出発点は示されていない。2つの空間的な範囲が境を接しているばあい，どちらを外，どちらを中とみるかは，多分に相対的なものである。したがって，おなじ事実が，また逆に「はいる」でも表現できる。「破戒」の例をとってみよう。校舎と運動場をくらべると，校舎が屋根をもったたてものであるところから，たしかに運動場は「外」であり，そこへの移動は「でる」というにふさわしい。しかし，また，中と外との区別には，話し手の位置，中心人物や事件の位置も関係する。この観点から，描写の中心を運動場におくならば，おなじ事実を「運動場にはいって」と表現することも可能である。こうして，これらは，反対語におきかえても，あらわしている事実にはかわりないという，おもしろい例である。

ここに属する例は〔000〕と区別をつけにくいものが多い。実際問題として，どちらかにわけることは無理だが，数をかぞえるばあいには，「外に」以外の「～に」という形と結びついたものを〔020〕にいれることにした。

b）比較的遠くへ「でる」こと。

○二丁程沖へ出ると，先生は後を振り返つて私に話し掛けた。（こゝろ 10）

○一番遠くに出てゐたし，それに風の工合も丁度反対の方向だつた。（蟹工船 43）

これらのばあい，出発点と到達点との境ははっきりしない。たしかに，「沖へ」「遠くに」という到達点は示されているが，これらはまったく相対的な場所で，どこからが沖であるか，遠くであるかはわからない。したがって，このばあい，中から外への移動ということは問題にならず，ただ原点（陸や蟹工船など）からみて，一層遠い方向にすすむことをいうにすぎない。

c）はれがましい場所へ「でる」こと。

つぎにあげる例では，到達点だけが問題で，どこからそこへ行ったかは問題にされていない。その点で，b）と同様，a）よりも基本的な意味からのへだたりが大きい。

○その日の夕方，葉子は船に来てから始めて食堂に**出**た。（或る女・前 109）

○お島が再び座敷へ**出**て行つた頃には，席はもう乱れ放題に乱れてゐた。（あらくれ 54）

○衣服も改めずにゐたので，其儘館（やかた）へ**出**て忠利に申し上げた。（阿部一族 70）

これらの例では，移動は，より広い，どこと指定されていないところから，よりせまくくぎられた場所へ，という形でおこっている。そのかぎりでは，「でる」よりもむしろ「はいる」といった方が適当だともいえる。にもかかわらず，ここで「でる」がつかわれているのは，それが，よりはれがましい（人目につく・表だった・公的な）場所への移動だからであろう。（ほかに適当なことばを思いつかなかったので「はれがましい」を使ったが，〈名誉な〉〈きまりが悪い〉などの意味ではない。）「でる」の基本的意味は，中から外への移動だが，大体のばあい，中はせまく，くらく，外は広く，あかるい。このため，外への移動→あかるい場所への移動→はれがましい場所への移動，のように，重点のおきどころがかわったものとおもわれる。「廊下へでる」のと「座敷へでる」のとで，表現はおなじだけれども「でる」のつかわれている理由はちがうのである。

ここに属する例には，まだつぎのようなものがある。

○立役（たてやく）は幕明きから舞台に**出**てゐるものではない。（或る女・前 98）

○俥は直きに大通の真中へ**出**ていつた。（あらくれ 106）

○ぢや失礼ですがもつと真中へ**出**て来て頂戴。（こゝろ 44）

○監督が白い垂幕の前に**出**てきた。（蟹工船 75）

○長十郎は衣服を改めて母の前に**出**て，始て殉死の事を明かして（阿部一族 34）

○線香とローソクの立つてゐる死体の側のテーブルに**出**て行つた。（蟹工船 88）

○自分と同じ野戦の戦線に**出**た下士官のうちの最上級者として（真空地帯・上 74）

○山から里へ**出**て来て，せつかく人なつつこいんだからね，（雪国 21）

ただし，a），b），c）などの差は，こまかいニュアンスのちがいで，はっきりしないところがある。「雪国」の例などはa）にいれるべきかもしれない。

以上は，みな到達点のあきらかに示されたものであるが，つぎのように，これがなくてやはりc）に属するとおもわれるものがある。

○女中が二人とんで**出**た時には，娘はもう上へあがつて，（多情仏心・前 21）

○客間に通され，挨拶して，そのうちに娘さんも**出**て来て，（富岳百景 54）

つぎの例は，比ゆ的にもちいられたばあいである。

○マルキシズムのごときは，ただの思想としても，表向きの場所には出ることができなかった。（ものの見方について 177）

d） ある場所にいきつくこと。

これは，上にあげたa），b），c）にくらべて，どのような場所へ「でる」というべきかを限定するのがむずかしく，ほかの用法とのつながりも，あまりはっきりしないものである。

○橋を渡つて，停車場（ていしゃじょう）近くへ出た。（破戒 156）

○二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つて又富坂の下へ出ました。（こゝろ 214～215）

○彼はH・市まで出ると一等車の切符を無意識に買つてゐた。（冬の宿 67）

○それから日本海岸に出て，北陸にまはり，それから関西にきて，（冬の宿 171）

以下の連体的用法の2例は，性質の表現にちかくなったものである。

○この峠は，甲府から東海道に出る鎌倉往還の衝に当つてゐて，（富岳百景 52）

○石廊下の裏手の便所へ出る通りのところでまっていると，（真空地帯・上 83）

d）の例は「いく」「つく」「あらわれる」などにきわめてちかいもので，「でる」がもともともっていた，「中から外への移動」といった方向性は，ほとんどその跡をもとどめていない。しかし，他の類義語にくらべて，「でる」独自のニュアンスがないわけではない。それは，つぎのような点である。

「いく」が途中の経過に重きをおいているのに対し，「でる」は，到達という結果に重点がある。「日本海岸にいった」というとき，その人はもうついているかもしれないし，途中かもしれない。しかし，「日本海岸にでた」のばあいは，もうかならず到達したあとである。この点では，「でる」は単なる移動ではなくて，目的地における存在をあらわし，あとでのべる出現の意味と共通のものをもっている。この点で，「つく」「あらわれる」などと近い類に属する。

「つく」は，最終の目的地に意識的に到達したというニュアンスがつよい点で「でる」とちがう。もちろん，「つく」も中間的な到達点についていうことがある。しかし「日本海岸について，北陸にまわり……」と「日本海岸に出て，北陸にまわり……」とをくらべると，後者はただ単に汽車にのったままで日本海岸を通りすぎてもよいのに対し，前者のばあいは，一応日本海岸に止まっただろう，という程度のちがいがある。また，

○其通りにゆき玉へ，突然農家の庭先に出るだらう。（武蔵野 20）

○しばらく歩くと昔の宿場らしい町通に出た。（雪国 154）

のように，それと意識してある場所にいったのではないことをあらわすのに，しばしば「でる」がつかわれるのも，やはり，「つく」とのちがいを示している。

「あらわれる」は，その主体のがわに立っての表現ではなく，まったく第三者としての見方をあらわしている点で「でる」と区別される。

○謙作はなんという事なしに，上野のほうへ出たい気がしていた。（暗夜行路・前 75）

のように，動作主体の希望や意志をあらわしている表現は「あらわれる」でおきかえられない。「でる」は主体のがわにたっても，第三者としても，ともに可能な表現である。

ここに属するもののうち，いなかから都会にいくことをあらわす，つぎのような例は，やや特殊である。

○彼は医者にはならない決心をもつて，東京へ出て来たのです。（こゝろ 195）

○町の小学校を卒業するとすぐ，神戸に出て神戸の女学院に入り，（蒲団 10）

これらは，具体的な動作としての移動というよりも，都会に出っきりになって，生活の本拠をうつしてしまうことであり，その点で，〔002〕「家をでる」や〔021〕「役場にでる」などにて抽象化しているといえる。だから，これらにならって，別に立てた方がよいかもしれない。都会にいくことが「でる」で表現されるのに対し，逆にいなかにひきこもることは「でる」といわないのは，都会の方がはれがましい場所だとする考えにささえられているのであろう。

〔020〕に属するもののなかにも，あることをするためにでていくことをあらわすものがある。

○けさもお庭に仏様のお花を切りに出て見ましたが（出家とその弟子 110）

○鈴むらさんは，大阪から京都のはうへしばらく遊びに出た。（末枯 44）

○映画女優が舞台へ挨拶に出る時のように，（自由学校 47）

さきに，「飯をくいにでる」〔001〕を「家をでる」〔000〕から区別したことからいえば，ここでも「舞台へでる」と「舞台へあいさつにでる」とは別々の意味としてたてるべきかともおもわれる。ここでそうしなかったのは，つぎのような理由による。

「家をでる」〔000〕における「でる」は，内から外への移動をあらわしている。これに対して，「飯をくいにでる」〔001〕の「でる」は，＜内から外へ＞という側面がうすれて，「いく」に，つまり単なる移動に近くなっている。この差は，「飯をくいに」という目的の表現がひきおこしたものと考えられる。なぜなら，「家をでる」のばあい，重点は移動の基点である「家」におかれているが，目的が表現されることによって，この目的の実現される（飯をくう）場所，つまり到達点の方にこの重点が移るからである。到達に重点をおいて考えれば，この移動が最初＜内から外へ＞という形でおこったかどうかは，どうでもよいことである。

ところが，「舞台へでる」〔020〕のばあいには，はじめから，重点は到達点にあって出発点にはない。＜内から外へ＞という観点は，もともとないのである。それで，この上に目的の表現がつけくわわっても，その性格がかわることはない。つまり，「飯をくいにでる」〔001〕と「舞台にでる」〔020〕とは，ともに「家をでる」〔000〕から（外出→移動＞という同じ方向に変化しているのであって，その点では一括できるのである。

〔021〕　しごとの場としてのある場所にいくこと。

〔020〕の，c）またはd）に属するものの特殊化した用法として，「でる」が，ある場所であるしごとに従事していることをあらわすものがある。このばあい，到達点は，場所（たてもの）であるとともに，一定の組織でもあるような一群の名詞である。

○役場へ出るとか，学校へ勤めるとか，それ位のものさ。（破戒 62）

○銀座のカツフエーへ出てから今日まで（つゆのあとさき 101）

○まだ学校へ出てゐる位で年が若いから，（こゝろ 192）

これらの例で，「でる」は，移動動作の表現という本来の用法から，むしろ状態の表現（「破戒」「こゝろ」）や状態変化の表現（「つゆのあとさき」）にちかづいている。ある特定のときにでたのではなくて，その動作がくり返しおこなわれて習慣化し，状態化しているのである。おなじ「学校へでる」でも，

○私は寝坊をした結果，日本服の儘急いで学校へ出た事があります。（こゝろ 227）

にくらべれば，抽象化している。

この到達点が，完全に場所としてのニュアンスを失えば，「でる」もまた移動とはよべなくなるのだが，つぎにあげる「鉄道」のばあいは，「役場」や「学校」にくらべて，やや場所的性格がうすれているとおもわれる。

○うちの人つて，鉄道へ出てゐる弟一人ですから，（雪国 133）

「家をでる」に2つのばあいがあるように「役場へでる」や「学校へでる」にも2つのばあいをみとめて，抽象化したものを別にたてることにした。（なお，この用法は少なくなってきているかと思われる。）

〔022〕「人がでる」

○天気が悪いので，浜にはいくらも人が出てゐなかつた。（波 382）

○「……静かね」

「今いちばん人の出ない時間ですから」（仲子・上 52）

「人がでる」という形での慣用句は，ある場所に，組織的でなくおおぜいの人があつまっている（動いていてもよい）ことであるが，「……に人がでる」と到達点の示されることがあるから，〔020〕からの変種とみられる。

〔023〕「電話（口）にでる」

これも，本来はその場所にいくことだろうが，今では，単にそこにいるだけでなく，電話の相手として，うけこたえをすることである。

○電話に出たのはお蔦だった。（暗夜行路・前 76）

○「女将（おかみ）さんはいかゞです。自分で電話口に出られるくらゐだから……」（多情仏心・前 48）

「〜に」という目的語をとらずに，この意味でもちいられることもある。

○お島が，大政へ電話をかけたとき，出て来て応答（うけこたへ）をしたのは，（あらくれ 102）

〔024〕 料理などが人の前におかれること。

〔020〕のc）としてあげた，はれがましい場所への移動の，主体が物であるばあいの特殊化したものとして，料理が客などのまえに「でる」例がある。

○彼是する中に，午飯の膳が出た。（蒲団 63）

○テーブルの上に一人前の食器が出てゐる。（仲子・上 157）

○茶が出てから，三人は別の話題（はなし）に移つた。（破戒 47）

でてくる主体としては，「膳」「食器」の類に「どんぶり」「杯盤」「ちろり」など，「茶」のような飲食物の類に「酒」「ビール」「紅茶」「果物」「ケーキ」「パン」「飯」などの実例があった。

このグループについての問題は，まず，料理についてと限定してよいかどうかである。たしかに，飲食物が「でる」例が多いのだが，つぎのような例もある。

○おや，絞り手拭が出ましたね？（多情仏心・前 70）

実例はなかったが，筆記用具や遊び道具が，これと同様に客の前に「でる」という表現もありうるであろう。したがって，単に料理だけと規定するのは，せますぎるであろう。

つぎに，ここに位置づけることが適当かという問題がある。「〜に」という目的語は実例にあらわれたかぎりでは，場所をあらわしている。しかし，「客にお茶をだす」という表現はあるのだから，その自動詞として「だれだれにお茶がでる」という表現もあるかもしれない。たとえば，区別をつけて，「A氏にはお茶がでたが，B氏には何もでなかった」のようにいうばあい。そうなると，この用法は，場所との関係においてだけではなくて，対人関係においても問題となるものであり，「駅前にでる」などとは，かなり質のちがったものだということになる。1例ではあるが，「でる」主体としてつぎのように抽象名詞がもちいられた例もある。

○そういうような関係のアメリカ人との関係ですと，婦人の接待も出るものですから，多少かかるのでございます。（中央公論 1956年7月 91）

このばあいには，全体としてあらわしていることは「料理がでる」などとちかいけれども，「でる」だけをとってみれば，移動とはいえない。

〔025〕 大勢の人からみえるような場所にある（ようになる）こと。

○蟹が人間様に都合よく，時間々々に出てきては呉れないしな。（蟹工船 93）

○夜分に，大きな蝙蝠が出て自分を食ふと言つて（桑の実 64）

○ゲリラも出るが，あの辺は虎の出る名所だ。（帰郷 17）

○しかし，都会の焼跡のどこかには強盗が出てゐるし，（帰郷 137）

これらは，事実としては，見えない場所から見える場所への移動をあらわしている。しかし，「〜から」という出発点の表現をともなうことはなく，出発や移動の経過には無関心であって，焦点は，今までは見えなかったものが見えるような場所にあらわれた，という結果の面だけにある。その意味で，これは〔1〕でとりあげる「発生」にきわ

めて近く，移動と発生との中間的な位置をしめる。ただし，発生の類が無から有への変化であるのに対し，上にあげたような出現は，隠在的なものから顕在的なものへの，しかも移動によるのを原則とする変化である。（移動はこれらの「でる」にとって必要な条件ではない。虎や強盗は，その場所を動かなくても，通行人がその前に行くことによって「でた」状態になるのである。）

なお，この類に属するものは，虎や強盗のように，人に害をあたえる，あるいは不気味な感じのするもの（おもに動物）が突然現われることについての表現であることが多いが，「蟹工船」の例のように，そうでないものもある。

つぎの例は出現ともみられるし，「〜から」という出発点があることからは，「家からでる」など〔000〕の類ともみられる。

○嘘から出た真，瓢箪から駒だ。駒が出たら乗ってけゃいい。瓢箪から出ようが厩から出ようが，知ったこっちゃないってのが（むらぎも 315)

このばあい，厩は，中に駒のいることを当然予想させるが，瓢箪はまったく予想させないから，2つをくらべると，「厩から」はより外出的，「瓢箪から」はより出現的といえるだろう。

無生物が主体になっている例として，つぎのものもここに属するとみられる。

○廊下は長かった。そこに四辻が出てきて二人はつつ切った。（むらぎも 41）

以上のような動作的なもののほか，ここには，つぎのような状態的なものもある。

○勘次は紺の筒袖の単衣で日に焼た足が短い裾から出て居た。（土・上 184）

○外套の襟からでてゐるマフラーをはたつかせながら，（闘牛 120〜121）

この文で，「裾から出て居た」は，裾から移動してそうなったものではない。はじめから裾の外にあったことを，あらわすものである。しかし，「出て居る」という形自身は，裾の外への移動をもあらわすのであり，そうでないとする判断は，事実の上から下したものにすぎない。だから，この例ではまだ「家から出ている」などと区別する理由はないともいえよう。しかし，移動の経過よりも，外にでているという移動の結果に重点がうつると，「〜から」という出発点は問題でなくなる。

○今は斯の部屋の内にあの先輩の書いたものは一冊も出て居ない。（破戒 181）

○病院の手術のときには，外に出ている部分に着けるものはナイロンの靴下でも，禁じられていると（リーダーズダイジェスト 1956年6月 45）

これらのばあい，「出ている」のは，事実としては，押入の外であり，きものの外である。しかし，そのことは問題でない。大切なのは，要するに外に，人目につくような場所にあるということだ。したがって，「〜から出ている」という表現はとられない。

○強雨に洗われて，小砂利の出ている往来には，（暗夜行路・前 53）

○派手な帯が半ば山袴の上に出てゐるので，（雪国 54）

これらも同じグループに属する。

この類に属するものとしては，また，看板・表札などについていうものがある。

○「歓楽」といふ看板の出た一軒のカフェをみつけて（冬の宿 111）

○何日(いつ)は兎狩と云ふ貼札が出る。(思出の記・上 62)

ここになると,「でる」は,もう「はいる」の反対語とはいえない。家の中にあった看板が外へでるとはかぎらず,はじめから外で書かれた看板がかかげられても,やはり「看板がでた」といえるのである。ここで大切なのは,結果として,人目につくような場所にかかげられてあることであって,そこにいたる経過が(内から外への)移動によるかどうかではない。つまり,移動動作の表現から状態変化の表現へとかわっているのである。この「でる」は,さらに,「……といふ看板の」という部分を,いわば吸いこんで,つぎのような慣用句的表現をうむ。

○大きな石の門のうへに,植源と出てゐる軒燈の下に突立つて(あらくれ 87)

なお,つぎの例も看板などと同類だろう。

○目の前に明りの出た家が一軒あつて,島村はほつとしたが,(雪国 157)

この類のものは〔04〕ときわめて近い関係にある。そちらを参照。

○会場に出てゐたあの筆太な宗盛の書簡の前に,(週刊朝日 1956年3月4日 41)

○売場に安く出ている布地や洋服は,(主婦の友 1956年1月付録 洋裁と洋装 44)

ただし,物のばあいは,どこから出発してどこをとおって到達したかという過程が人間ほど問題にならず,しかもこのばあい,会場にでたということは,単なる到達ではなくて一定の資格をもってそこにならべられたことだから,「食堂へでる」などよりも,よほど移動からとおざかって,状態の変化にちかくなっている。「会場」という名詞に空間性があるから,移動のワク内にいれておいたが,これが「展覧会にでる」になれば,運動会にでるのと同様,むしろ資格の変化を意味する。〔31〕を参照。

つぎの例は,ここに属する慣用句である。

○陽のあたる場所に出られない"映画界の隠し子"(週刊新潮 1956年7月3日 34)

〔03〕 前へすすむこと。

○後からついてきた監督が,周章てゝ前へ出ると,何か云つて,(蟹工船 79)

○三尺さきに出たら深みになっているので(週刊新潮 1956年9月17日 32)

○(畜生。)といつたが馬は出ないわ。(高野聖 50)

○それに吉葉山は,大内山に対しては不思議に一気に出る。(相撲 1956年3月 77)

「前へでる」「さきにでる」という例ばかりだったら,これを「大通りへでる」「駅前へでる」などと区別する理由はないかもしれないが,ただ単に「でる」だけで前への移動をあらわすようになった「高野聖」や「相撲」のような例があるので,これを区別することにした。つぎの例は,ここへ入れるべきか,「大通りへでる」「駅前へでる」などといっしょにすべきか,疑問のものである。

○嘉門は人垣をつきのけて最前列に出ようとしたが,(冬の宿 188)

前にすすむことは,かならずしも絶対的な問題ではない。つぎの例では,ほかのものよりも相対的に前にすすむことをさしている。

○やっぱり駄目か……と思ったとたんに,その白黒帽がスルスルと出てきてゴオル間

際で二三人ぬいてみごとに一着になった。（ニューエイジ 1953年9月 84）

「駅前へでる」などの反対語は考えにくいが（「駅前からちょっとはいったところに」といった表現があるかもしれない），この「前へでる」の反対語は「うしろへさがる」だ。このことも「前へでる」を他の用法から区別する1つの根拠になるだろう。

○「出ろ，赤パン！　打つンだよ，そこで打つンだ……」

別な方角で，そんな叫びが発せられた。途端に，リングの二人の敵手は，赤黒いグローヴを振り廻して，滅多矢鱈に打ち合いだした。

「そうだ！　そこだ！　下るナ，赤パン……」（別冊文芸春秋 1956年 53号 204）

つぎのような「足がでる」という表現もここに属するとみられる。なお，〔000〕のおわりの部分で「手がでる」についてのべた個所を参照。

○走り出さうとしたが，どうしたのか足が一歩も前に出なかつた。（波 34）

つぎの例は，この用法が比ゆ的になったものである。

○私の疑ひはもう一歩前へ出て，その性質を明らめたがりました。（こゝろ 218）

○全然ちがうという感想は，この弓山がすでに半月ほど前に曾田にもらしたところだった。しかし弓山はそれから先に出ようとはしなかった。（真空地帯・上 84）

これを独立の意味としてみとめなかったのは，「もう一歩前へ」とか「先に」とか，空間を示すことばとともに用いられていて，これらをふくんだ全体で比ゆ的になったものとみたからである。

碁の文章にみられる，つぎのような表現も，ここにいれておくことにする。

○白が六の一路左を出ても，（囲碁 1956年5月 90）

○第8図黒3と出て5のトリを先手に利かす。（棋道 1956年11月 21）

つぎの例は慣用句だが，「でる」自身としては，やはりこの〔030〕に入れるべきものかとおもわれる。

○浪花さんの右に出る女優は映画界にいないものね。（主婦の友 1956年11月 125）

この類に属するものは，主体は大体人間である。碁の例は中間的なものであろうか。

〔04〕 ある基準面（線）から，はなれる方向にのび（てい）ること。

これは，上にあげてきた〔00〕～〔03〕にくらべて，かなり異質なものである。

○棚の横木に釘が出てゐるのを（桑の実 157）

○其時分の束髪は今と違つて廂が出てゐないのです，（こゝろ 231）

○屋根から，細いのと太いのと二本の煙突が出ていて，（暗夜行路・前 139）

○窓の下にある小さい洗面器の下からでている鉛管と（真空地帯・上 139）

第1に，この類のものは，動作ではなくて状態を，それも，移動という動作の結果としての状態ではなくて，はじめからの状態をあらわす。第2に，これと関連して，その

形は大体「でている」（または「でた」）である。金田一春彦氏の分類にしたがえば，瞬間動詞ではなくて第4種の動詞に属する。これらの点は，〔00〕～〔03〕の動作性のものとちがう点であるが，実は，さきに〔025〕としてあげた，「看板がでている」などの類も，この点では同じである。その意味で，〔025〕は，動作性のものからこの〔04〕への橋わたし的存在であるといえる。

〔04〕「釘がでている」が〔025〕「看板がでている」とちがうのは，つぎのような点である。〔025〕のばあい，「でている」はあくまで物（たとえば家）の内と外との対立に関連して，物の外にあるということである。ばあいによっては，物からはなれていてもよい。〔025〕の「破戒」の例を参照。これに対して，〔04〕では，問題は内と外との対立ではない。そもそも，釘や廂は，横木や束髪の内部にはいっているようなものではない。ここで問題なのは，それらが横木や束髪の表面から〈つきでて〉いるという状態である。したがって，ここでは当然物からはなれることはなく，物の表面に密着しているものでなければならない。つぎにみるように，基準となるのは面や線であって，内部に空間をもっているような物ではないのである。

○真白い三角が，地平線にちよこんと出てゐて，それが富士だ。（富岳百景 51）

なお，このばあい「地平線に」は存在の場所をあらわす「に」であって，もちろん到達点ではない。このグループでは，「横木に釘がでている」「地平線に富士がでている」などを，それぞれ「横木から」「地平線から」といってもおなじことになる。

このように，基準面(線)からつきでた状態をいうのに，人間を主体とするものがないのは当然だろう。ただし，人体の部分の名まえは，この「でる」と結びついて，からだの特徴をあらわす。「～に」「～から」という基準は，当然わかっているから，それと示されることはない。

○胸は，肋骨が一つ一つムキ出しに出てゐた。（蟹工船 87）

○池田といふのは五十年配の歯の出た貧相な男で，（つゆのあとさき 17）

○おいお前，はらがでとるぞ……（真空地帯・上 56）

「でている」主体のなかには，物ではなくて，線のばあいもある。

○生命線から上向きの小さい線がいくつも出ていること（面白倶楽部 1956年11月 430）

「～に」が到達点をあらわさないことは上にのべたとおりだが，方向をあらわすものとして，「～へ」の形がつかわれる。「～へ」には存在点をあらわす用法がないから，方向を示すのにはまぎれなくて好都合である。

○いちばん下流の方へ，洲のやうになつて出たところに（銀河鉄道の夜 261）

〔1〕 発生

「でる」の基本的な意味（移動）のつぎには，ものや現象の発生をとりあげる。これが移動に対して2次的であるのは，発生の多くが一方で移動のニュアンスをともない，移動の特殊化したものとみられること，また，質の変化による発生とでもいうべき用法もあって，移動よりは抽象化しているとみられること，などのためである。

移動に対して，このグループの特徴の1つとしてかぞえるべきことは，なにが発生するのかという主体の別によって，さまざまの変種がうまれることである。移動のばあい，主体としては人間が圧倒的に多かったが，この発生のばあいには，主体はほとんどものまたは現象・性質である。そして，ものの性質の差が，そのまま発生のしかたの差を規定することが多い。主体が人間であるばあいには，そのあいだにみられるちがいは，いわば固有名詞的なものである。その差は動作のあり方に影響をおよぼさない。ところが，ものが主体であるばあいには，その差は普通名詞的であって，抽象的にはおなじ動作として考えられるものでも，そのあらわれ方は主体の差に応じてさまざまにかわる。

主体の観点からすると，発生はつぎの3つにわかれる。

A）もの――あせがでる：月がでる

B）現象――風がでる：火がでる

C）性質・状態――元気がでる：速力がでる

しかし，この3つを意味の下位区分とするのは適当ではない。B，Cはたしかにそれぞれが，ひとまとまりをなしているが，Aはまた中がいくつかにわかれる。しかもその細分化は，主体の別に基本的には応じていても，また別の観点もはいってくる。（移動のニュアンスや，空間的位置づけのあるなしなど。）それで，上の3分法はとらず，Aの中を細分化したものとB，Cとを並べる。ここで，より具体的でより移動にちかいAからはじめるのは当然である。

発生のグループをさらにわける基本的観点は，それがどのようにして発生するかというしかたである。つまり，「汗がでる」「涙がでる」などでは，これらの分泌物の体外への移動によって発生する。あるいは，移動が発生にともなう。これに対し，「賞品がでる」については，賞品の空間的移動は必要でなく，ただ，ものと持ち主との関係に変化がおこるだけである。このような発生方法の差から，発生のなかをつぎの6つにわける。この小分けについて，さらにニュアンスをことにする変種をたてたものもある。

11）移動

12）成立

13）現象の発生

14）動作・状態・性質の発生

15）対人関係における発生

16）由来

〔11〕 移動のニュアンスをともなうもの。

〔111〕 これには，まず分泌物の例がある。

○島村はふつと涙が出さうになつて，われながらびつくりした。（雪国 85）

○涙が鼻に入つてゆくらしく，水鼻がしきりに出た。（蟹工船 65）

○くさい耳だれが出たりしてきます。（婦人倶楽部 1956年8月 449）

○甘い温かな乳汁が滾々(どくどく)と出て来て，咽喉へ流れ込み，（平凡 27）

○ベーコンも脂(あぶら)が出るまで炒めておきます。（婦人生活 1956年8月付録 日本料理 153）

○オオムギを浸出して出てきた水分を試験したところ，（科学朝日 1956年8月 114）

このほか，「汗」「血」「あか」などの例がある。涙や汗がでるのは，これらの生産であり，同時にからだの外への移動である。したがってそれは移動と発生との橋わたしをするものであり，もっとも具体的な意味である移動から，より抽象的な意味である発生へのつなぎ目になっている。ただし，上に一まとめにした例についても，移動のニュアンスのつよいもの（血は体内にあっても血であり，外へでてはじめて血になるわけではないから，むしろ「人がへやからでる」などにちかい），それがうすいもの（垢ははじめから体外にあるが，目にはみえない）の区別があり，質がひとしいとはいえない。

なお，「涙がでる」「冷汗がでる」は，それぞれ「かなしくなる，感情が激する」「はずかしくなる」という意味の象徴的表現としてもちいられる。

○何がそれほど父上を激怒させたか，それを思うと，涙が出て来る。（暗夜行路・前 201）

○狂人でも無くて誰が冷汗の出るやうな懺悔なぞを書かう。（破戒 270）

また，つぎのような慣用的表現もある。

○その血の出るような税金が（婦人生活 1956年8月 203）

分泌物にかぎらず，発生が示す形式上の特徴に，発生の場所をあらわす「～に」と「～から」が事実上ほとんど一致する，ということがある。外へでるばあいには，「～に」は到達点，「～から」は出発点で，全然逆の地点だが，発生のばあいには出発点がすなわち到達点である。

○腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを（こゝろ 237）

○わたし達の目にはそんなにたやすく涙は出ないが，（人生手帖 1956年11月 130）

これらの例は，それぞれ「腋の下に」「わたし達の目からは」とおきかえても，事実としては，おなじことをあらわすことができる。ただし，ニュアンスとしては，「～からでる」は，分泌された涙や汗が，そこからさらに流れてほかの場所にうつること，「～にでる」は，その場所にとどまっていること，といったちがいがある。

○途中まわりに出たアブラをすくいかけながらまわりに色がついたら火を細くして三十分ほど焼きます。（主婦と生活 1956年5月付録 家庭料理全集 198）

の「まわりに」は，むしろ到達点であろう。これと「目に涙がでる」とのあいだは，はっきり切れているわけではない。しかし，「目に～」は，こまかいニュアンスを無視すれば，一応「目から～」におきかえられるのに対して，「まわりに出たアブラ」は，「まわりから出たアブラ」にはおきかえられないのだから，「～に」について出現の場所は到達点と区別すべきだし，「でる」の出現の意味は移動の意味から区別すべきである。

つぎに，気体や液体の発生がある。

○部屋をあたためるために木炭や練炭を入れるときは，よくおこって一酸化炭素の出

なくなったものを入れてください。（ポピュラーサイエンス 1956年10月 75）

○川口では，どのくらい掘ったら水が出ますか？（週刊読売 1956年3月18日 28）

このばあいも，移動とのさかい目ははっきりしない。土地などの中から外への移動，というニュアンスがあるだけでなく，無から有への変化は，また〔020〕で問題にした，はれがましい場所への移動ということとも相通じるところがある。つぎの例では，「栓から」が経由の場所を示しているので，「でる」は水道の中から外への移動をあらわしているとみるべきであろう。

○凍った水道の栓からでる水が鉄の長い桶にたまると（真空地帯・上 154）

なお，「この土地は石油が出る」のように，「AはBがでる」の形になることがある。このばあい「この土地」と「石油」とのあいだには，あらかじめ必然的な関係を予想できないが，「この水道は水がでる」「このバチンコは玉がよくでる」のように，AB間に必然的な関係があり，AはBをだすための道具である，というときには，Bはいわなくてもわかっている。そのとき，Bは省略されて，つぎのような表現になることがある。

○水道が出ないので冷いたまり水のなかへざぶっと手をつっこんで（真空地帯・上 88）

こういう「でる」は，個別的な動きではなくて，「よくでる性質をもっている」「たえずでる状態にある」というように，主体の性質・状態をのべるものになっている。

〔112〕 生物の部分の発生。

動物のばあいは，上の分泌物に近い。

○おつぎは手の平の処々に出た肉刺を見て心配相にいつた。（土・上 88）

○腰に手拭をさげて，にきびの出た顔でぷすっとして立っている。（むらぎも 161）

植物のばあいの例は，これに対して，むしろ土の外への移動のようなニュアンスがある。

○まあ珍らしうございますこと，麦の穂が出てをりますよ。（桑の実 18）

○「その松の下へ蕗の薹が出るのよ，春」（仲子・上 189）

ここから転じた慣用句につぎのものがある。

○合金鉄工業は，戦後長い間，サッパリ芽がでなかった。（ダイヤモンド 1956年10月30日 105）

〔113〕 そのほかの物体の例としては，つぎのようなものがある。

○彼はこれを件の紙袋の中へ入れて気の済むまで叩いた。出てきた細かい埃を検鏡すると，木の微細な繊維が現われて来た。（宝石 1956年4月 164）

○現に三宮の闇市に行けば，米でも布地でも，靴でも洋傘でも，無いものはない。何処から出てくるのか。（キング 1956年3月 322）

これらは，移動のニュアンスがきわめてつよく，発生に入れるよりも移動の方に，つまり見えないところから見えるところへの移動として，位置づけるべきものかもしれな

い。なお，

○死んだ青年たちが幽霊になって出てくるという話です。(人間の壁・上 195)

は，「ねずみがでる」のような移動的なものから純粋の発生までをふくんだ，中間的なものである。つまり，「やなぎの下からおばけがでた」は，やなぎの下から道の上などにすうっとでてきたこととも，やなぎの下に文字どおり無から生じたこととともとれる。

○いつの間に出たのか，真ツ白な雲が一つ，(多情仏心・前 14)

の例も同様である。「雲がでる」例には，

○油 旱(あぶらひでり)の焼けるやうな空に，其の山の巓から，すくすくと雲が出た，(高野聖 76)

のように，あきらかに移動をともなうものもあるが，「多情仏心」の例は，移動によってあらわれたものか，または空中に発生したものかに無関心な表現である。

また，物体とはよべないが，それにちかいものとして，つぎのような例がある。

○そして原子に関してわれわれが知り得るのは、それから出て来る光の振動数や強さや偏りだけであるから，(物質世界の客観性について 274)

○二人の影は，ちやうど四方に窓のある室の中の，二本の柱の影のやうに，また二つの車輪の幅のやうに幾本も幾本も四方へ出るのでした。(銀河鉄道の夜 273)

これらは，一面では一方方向への移動であるともいえる。しかし，光や影のいちばん先端の部分が移動するにつれて，光や影全体が生じてくるのであり，その点では，たとえば「煙があがる」が移動であるとともに発生である，というのと平行する関係にある。これらは，〔13〕「現象の発生」に入れるべきかもしれない。

〔12〕 成立：移動のニュアンスのないもの。

これは内容的にも積極的に規定できず，いろいろな種類のものを雑然とふくんだものである。なにかの観点で整理しなおせば，もっとすっきりしたものになるだろう。

〔120〕 個物の成立。

○怪我人が出てよ。焼け死ぬわ。(雪国 162)

○「月下の一群」以後に出た，文語詩人の通弊である。(世界 1956年5月 312)

○日本人で，これをやるものが出た。(娯楽よみうり 1956年2月17日 43)

○群小メーカーのなかには，商社のヒモにしぼられるところがでてくることも予想しておこう。(東洋経済新報 1956年7月21日 61)

○流行歌にヒットらしいものが出なくなって(週刊サンケイ 1956年1月29日 70)

これら具体名詞のばあいには，それが「でる（発生する）」ことは，状態の変化によって，その新しい質を獲得する，ということである。ものがまったくあらたにつくりだされるのではなくて，前からあったものが，新しい質または資格をえることが，つまり発生である。けが人のばあいについていえば，人がけがをすることによってけが人が「発生」するのであり，人そのものは前から存在している。これらの例では，「日本人で」「群小メーカーのなかには」「流行歌に」と，もともとこれと同類であるものを示

すことばのみられることが多いことが1つの特徴である。その同類のなかの1つが，質の変化をおこして，新しいものが発生するのである。

つぎのように，出発点が示されるばあいもある。

○自分の家庭から葉子のやうな娘の出た事を，（或る女・前 27）

○郷里から出た実業家で私立の大学の理事をしてゐる男のところに，（冬の宿 128）

この「～から」が，出現の場所（空間的な，また非空間的な）を示しているだけで，移動の基点を示すものでないことは，もちろんである。

具体的で，しかも変化によらないで新しくつくりだされたものとしては，つぎのような例がある。

○尤も近頃は極端なふざけたやうな画も出ますけれどね。（桑の実 41）

また，いろいろな可能性のあるものに，つぎのような例がある。

○今晩はあの辺の縁日で色んな店が出てました。（桑の実 53）

○日本のことであるから，経済の危機信号が出たとしても，（国民 1954年5月 7）

「店がでる」のには，方法はいろいろある。建物をつくってもよいし，住居を改造してもよいし，また夜店のばあいなど，ひっこんだところから通りへ移動させてもよい。そして，たいていの文脈では，そのどれかをきめることはむずかしく，また意味がうすい。「信号がでる」も，信号をつくっても，色をかえても，目につくところにひっぱりだしてもよい。かんじんなことは，人目につくような状態になることである。（上の例で「危機信号が出た」は，全体として比ゆであるが，「でる」をあつかうかぎりにおいて，普通の「信号がでる」とおなじことである。）このように，移動とも変化とも，また純粋の発生とも考えられる例があることは，これらをすべて大きくは〈発生〉という形でくくることの1つの根拠となるだろう。

〔121〕 種類の成立。

上にあげてきたのは具体的な個物の発生だが，これが抽象化する方向としては，種類の発生と組織の発生とがある。

a）製品

○次から次へと新しい化繊織物の出てくる近頃では，専門家でもまごつかせられます。（ドレスメーキング 1956年5月 195）

○間もなく出るはずのコニカⅢ型同様，（アサヒカメラ 1956年8月 174）

これらの例で，「でる」は織物やカメラの1つ1つの発生ではなくて，それの新しい種類がうまれることをいっている。この抽象化にともなって，発生の場所を示す「～から」「～に」がもちいられるばあいにも，それは特定の地点ではなくて「日本」のようにひろい地域を示すものであろう。また，「A社から」のようにその作り手を示すことばがつくこともありうる。これらは，いずれも具体的な個物のばあいとはちがう条件である。しかし，それらの実例はなかった。

b）言語作品

単行本や雑誌が出版されることも，種類の発生とみられる。ただ1冊の本ではなくて，印刷物のばあいには，同種類のものが数おおくつくられるのだから。

○その雑誌が出てからもう一週間になる。（暗夜行路・前 22）

○私の作が出た時に，其知己が余り酷くは評して呉れぬ。（平凡 107）

○『試作』と前後して『層雲』，『朱鞘』が出，（俳句 1956年3月 115）

これらは，具体的な形としては，おおくの本というものだが，言語作品という観点からは，それぞれ1種類である。これと同様のものに，つぎのような作品がある。

（劇）

○彼女主演の喜劇が月の一つぐらい出ていたように記憶する。（スクリーン 1956年2月 144）

（映画）

○ところで十一月の突ツ鼻には待望の黒沢明作品「蜘蛛巣城」が出る。（キング 1956年12月 184）

（レコード）

○B・Gのレコードはキャピタル，コロムビア，ビクターから新旧がどっと出た。（週刊サンケイ 1956年1月29日 70）

（切手）

○おなじ図がらで，色のちがうのが二種類出た。（高崎山 10）

c）生物

動物の発生をあらわすものも，個物ではなくて種類である。

さきに〔025〕の中に，動物が人のちかくにあらわれるものとして，「コウモリがでる」「トラがでる」などをあげた。つぎの例もこれとおなじである。

○昨夜（ゆうべ）あたりはもう蚊が二三匹出て寝られなかつたから，（桑の実 102）

しかし，つぎの「ガが出る」はこれとちがう。

○中国，四国，九州地方では一部ですでにガが出て（農業世界 1956年6月 135）

このばあいには，1匹2匹とかぞえられるような，個体としてのガが，ある特定の場所にあらわれることではなく，ガという種類が発生したことを示している。おそらくは，上の「蚊が出る」などをもとにして抽象化したものであろうが，移動が「～から」という出発点をいうことがあるのに対し，発生ではそれがない点がことなる。

〔122〕 組織の発生も，個物の発生にくらべれば抽象化している。

○社会党が下野した後に出て来る政権もそういうものだと思う。（世潮 1954年3月 95）

これは，個物をひっくるめた種類ではないが，また物質的なものでもない。新製品などのばあいと同様に，特定の地点に発生する，というのではなく，場所が指定されるとすれば，「東京」「日本」のようなひろい地域である。このことは，種類や組織の発生する場所が，本質的に空間ではなくて社会であることを示している。新製品や新政権が日本に「でた」というとき，その「日本」とは自然地理的な概念におけるそれではなく

て、日本という地域社会である。（この点で，生物のばあいはちがうかもしれない。）

〔13〕 現象の発生。

○波が出て来た。（蟹工船 89）

○広い海の面が旗でもなびくやうに，うねりが出て来て，（蟹工船 19）

○やがて風が少し出たと見えて，（風立ちぬ 129）

○火は映写機を据ゑた入口の方から出たらしく，（雪国 170）

○火移りは止まらぬらしく，思ひがけないところから焔が出た。（雪国 170）

○今夜この家から火事が出るといふ事の予覚に思へてならない。（田園の憂鬱 77）

○民さんそれぢや……と言ふつもりでも咽がつまつて声が出ない。（野菊の墓 36）

○化繊の絹では，その音が，どうしても出ないというので，豪華を誇る場合には，絶対に本絹ということになっています。（サンデー毎日 1956年4月29日 56）

これら，現象とここでよぶものは，物と性質や動作との中間にある。たとえば，風は空気のうごきだけれども，「うごき」「上昇」などとちがって，空気という実体の属性とはみなされない。「空気のうごき」「……のうごきをする」という表現はあるが，「空気の風」「風をする」という表現はない。その意味では，風は空気や雲とならぶ独立の実体としての面をもっている。しかし，逆に風を「うごきつつある空気」と規定して，完全に物のグループに入れてしまうことにも問題がある。「風がおこる（つよまる，やむ）」などは，「空気」のように物をあらわす名詞とではなく，「うごき」のようにこと（動作）をあらわす名詞に共通する用法である。このように，事実としてそれがどのような現象であるかという観点とは別の，言語的立場から，ものを表わす名詞とことを表わす名詞との中間に，現象を表わす名詞という1群をみとめることができる。

発生の「でる」について，このグループの示す特徴としては，移動のニュアンスがないことがあげられる。これは，具体物よりも種類や組織のように抽象化したものに共通な点だが、それらとはちがって，空間的には特定の地点に「でる」ものである。つまり，種類や組織のように，「日本」のような広い地域を出現の場所とするものではなくて，「林」「家」のように特定の地点が限定できる。その意味では種類や組織よりも具体的である。

しかし，これらのなかにも，さまざまの段階があり，よりもの的なものから，よりこと的なものへとニュアンスのちがいが見られることも事実である。たとえば，

○ひた赤く赤い許りで光線の出ない太陽が（野菊の墓 15）

では，「光線」は空間に一定の位置をしめ，太陽から放出されるものとして，かなりもの的である。これに対し、

○すると先生の眉がちよつと曇つた。眼のうちにも異様の光が出た。（こゝろ 19）

では，「光」は眼をはなれて存在するものではなくて，「色」「つや」などと同様に，眼のもつ1つの性質に近い。つまり，こと的性格をつよくもっている。

「〜から」の形は，この意味の「でる」と結びつくとき，現象のおこる場所を示す。

上にあげた「思ひがけないところから焔が出た」「この家から火事が出る」などの例に見るとおりである。そして，その現象が空間的に移動するようなものであるばあいには，現象のはじめておこった場所を示す。「火は……入口の方から出たらしく」では，そのようなニュアンスがある。（このばあい，「～から」は「どれから食べようか」のような，順序をあらわす用法に近づいている。）しかし，おなじく現象のおこった場所といっても，つぎの「～から」などでは，かなり出発点的である。つまり，音声のようなばあいには，現象といっても，かなりもの的な性格がつよく，空間をとんでくる物体にちかい。

○第一其の清らかな涼しい声といふ者は，到底此の少年の咽喉から出たものではない。（高野聖 60）

「水がでる」「こうずいがでる」を，これらとおなじグループに入れてよいかどうかには問題がある。

○此間の梅雨に水が出て，とてつもない川さ出来たでがすよ。（高野聖 16）

○こうずいが九州に出てきたぞ（学園評論 1953年9月 45）

「こうずい」の意味は，水そのものではなくて，水がでることだろうから，「火がでる」などとおなじにしてよいかもしれないが，「水」の方は，「水がおこる（おわる・やむ）」などといわないから，現象ではなくて，物質としての水そのものをあらわしていると見るべきかもしれない。とすれば，「水がでる」は，「ねずみがでる」などとおなじに，人目につくような場所への出現をあらわすにすぎず，それが全体として慣用句化して大水の意味をあらわすことになったものである。

ここに属する慣用句には，つぎのようなものがある。

○それを聴きながら顔から火が出るやうに思つたが，（あらくれ 100）

○昔は遊芸を仕込むにも火の出るやうな凄じい稽古をつけ（春琴抄 159）

○“彼女は相手をグウの音も出ぬようにする”とでも（文芸春秋 1954年6月 214）

〔14〕 動作・状態・性質の発生。

これには，つぎのようなものがある。

（動作）

○その合間に出る咳をきくと，（冬の宿 60）

○彼は一種不可思議な感激に身ぶるひさへ出て，（田園の憂鬱 47）

○検査に手ぬかりがでてくること，（農業世界 1956年11月 96）

○これ等の人達の一時の亢奮や思ひつめた気持から出る普通の刑事事件では考へられない様な挙動は，（中央公論 1953年10月 107）

これらは，みな無意識的にとる行動であって，意識的な動作ではない。このほか，「せき」の同類として，「くしゃみ」「あくび」「ためいき」などがあるが，これらはみな無意識的なものであると同時に口からでる，口の動作である，という特徴をもってい

る。これらのばあい，単に動作であるにとどまらず，口からでる空気のながれとしての側面をもっていることが，これらの動作を「でる」にむすびつけているのであろう。すなわち，「せきがでる」は，「せき」という動作の発生であるとともに，「せき」という実体（移動する空気）の，口の中から外への移動でもある。そういう意味で，この「でる」は空間的移動と直接の関係をもっている。しかし，「身ぶるいがでる」以下の用例については，そのような移動のニュアンスはない。あるいは，「せきがでる」のような例が，空間的移動から，「身ぶるいがでる」のような純粋の動作の発生への橋わたしをしたのかもしれない。

○期待の三，四番にヒットがでない。（ベースボールマガジン 1956年 増刊21 103）

○加藤（左）兵頭（中）もしだいに当りが出たし，これからの活躍が注目される（ベースボールマガジン 1956年7月 55）

などは，他の同類のものがなく，ちょっと孤立した形である。

「でる」主体となるのは，原則として動作であるが，つぎのような副詞的表現がもちいられた特殊例もある。

○私は疾から出さうな莞爾を顔の何処かへ押込めて，（平凡 74）

以上は個人の行動の例だが，社会的なものになるとちがってくる。

○もしフルシチョフを失脚させようという動きが出てくるとすれば，必ず農業政策の問題を取上げてくる。（週刊東京 1956年8月4日 8）

○横浜工場で最初に集団加入が出たのは鋳造関係である。（中央公論 1954年1月 74）

このばあいには，行動は意識的なものである。また，「彼は……身ぶるひさへ出て」のように，個人のばあいには，だれの行動かが，はっきりわかるのだが，社会的なものでは，主体がきわめてあいまいである。「動き」が主体の属性であるよりも，主体に無関心なものとして表現されており，その点では，さきに「現象」として問題にしたような「火」「風」などにちかい。

なお，つぎの例は，「研究」を「研究すること」とみれば，ここにはいるが，「研究された結果・成果」とみれば別である。それは，あとであげる(意識・精神)というのにもはいらないだろうから，（抽象物）というような項目を1つたてるべきかもしれない。

○もしほんとうに，正統的な科学の一つとして日本の動物学の伝統の上に立っていたら，こういう研究は，けっきょく出てこなかったのではないか。（高崎山 54）

（状態）

○尿毒症が出ると，もう駄目なんだから（こゝろ 93）

○上官に対する許すべからざる反抗的な態度もでてくるので（真空地帯・上 231）

○血清にN抗体というものが含まれているため，間違えやすい反応が出るということが（主婦の友 1956年1月 551）

このほか「つかれ」「熱」「効果」など。以上は全体的（全身的）な状態だが，またつぎのような部分的な状態もある。

○船長は肥えた女のやうに，手の甲にえくぼが出てゐた。（蟹工船 52）
○明治初年か慶応頃の撮影であるからところどころに星が出たりして（春琴抄 139）
○右端中景に日向と陰の区切りが出ているのも，（アサヒカメラ 1956年3月 40）

また，「しみ」「ふくらみ」など。これらは，「状態」といっても，さきにあげた「態度」「熱」などとちがって，視覚的にとらえることができ，空間的にその範囲を限定することができる。その意味で，「態度」や「熱」にくらべてずっともの的である。さらに、

○外観がきれいで，ゆがんだり，錆が出ていたり，ふたの取り付け部（巻き締め部）に異常のないこと。（家の光 1956年1月付録 暮らしの経済宝典 270）

になると，本体から切りはなすことができる点で，状態というよりも，本体とは別のものが発生したとみるべきかもしれない。とすれば「汗がでる」〔111〕と同類である。

ここからうまれた比ゆ的用法および慣用句に，つぎのような例がある。

○使はない鉄が腐るやうに，彼の心には錆が出てゐたとしか，（こゝろ 209」
○身から出た錆よ（厭がらせの年齢 287）

以上にあげた，人や物の状態のほかに，社会的な状態として，つぎのような例がある。

○夏景気はもうでている。（ダイヤモンド 1956年7月7日 14）
○またもし買占めの気配が強く出るようなら，（エコノミスト 1956年2月18日 10）
○結局三十八度線を中心にしてにらみ合いの状況が出た。（世界 1953年12月 39）
○好ましからぬ結果も出て来るだろうということを（中央公論 1953年11月 65）

これらにあっては，人や物のばあいとちがって，何の状態であるかという，主体の問題が明示されていないことがおおい。その点で，さきに動作についてのべたことと共通性をもっている。

（性質）

○父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出した。（こゝろ 102）〔人〕
○生糸や絹織物の高い値が出てゐるのではないか。（心 1954年5月 44）〔物〕
○自然（ひとりで）に軽く手足に弾力が出て来て（あらくれ 230）〔物〕
○然し，信之の調子にはだんだん張りが出て来た。（多情仏心・前 287）〔状態〕
○初めの何年かは，ボス議員の汚職などによって悪い面ばかりが出るかもしれないが，（中央公論 1953年8月 13）〔社会状態〕

例文のうしろに，〔人〕〔状態〕のようにかいたのは，〔人の性質〕〔状態の性質〕の意味である。このように，いろんなものについて性質の出現が「でる」であらわされる。以上のほか，「でる」とむすびついている性質の例には，つぎのようなものがあった。

愛敬　味　色　色気　色っぽさ　色つや　美しさ　落ちつき　おもしろみ　個性
新味　人気　値打ち　不思議さ　矛盾　無理　容疑　弱さ

（意識・精神）

○ふうん，……未練が出たかね？（多情仏心・前 153）

○噫，意地の悪い智慧はいつでも後から出て来る。（破戒 81）

○「勉強するよ。僕も，この頃勉強する気が猛烈に出て来た」（友情 92）

○此の暗い想像に抵抗する力が他の一方から出て，盛にそれと争つた。（蒲団 73）

このほか，以上に類するものとして，つぎのような名詞が「でる」とむすびついている。

意欲　覚悟　気持ち　疑惑　元気　心持ち　食欲　睡気　はげみ　張り合い　迷い　勇気　ゆとり　ゆるみ　酔い　要求　欲　余裕　理屈

つぎのは，ここに属する慣用句である。

○「オウ常さん，今日は駄賃かな。大変早く御精が出ますね」（野菊の墓 25）

これらに類したものに，つぎのようなものがある。

○答はすぐでます。（婦人画報 1956年8月 226）

○被告にどんな有利な結論が出るかという事等は（中央公論 1954年6月 76）

これらのばあい，「答」や「結論」がでるというのは，個人の意識のなかでの現象であるよりも，むしろ論理的な過程である。したがって，だれが考えた「答」「結論」かは示されていないし，問題にならない。

（その他）

ひろい意味では性質などの同類にはいるとおもうが，もっと物からの独立性がつよい，抽象的な性質のものに，つぎのような例がある。

○其所に坐つて話し込むやうな場合も其内に出て来ました。（こゝろ 180）

○花枝との遊興費の問題などもでてこなくなる。（真空地帯・上 228）

○ヒソ飼料はいけないという根拠は出て来ないが，（週刊朝日 1956年9月30日 5）

○その具体的な数字が出てきた。（リーダーズダイジェスト 1956年10月 172）

以上のほか

意味　影響　可能性　機会　結果　好都合　時間　必要　要因　率

など。

さて，これら状態・動きなどの属性の発生に共通していることは，空間性がないことである。個物や現象のばあいはもちろん，種類などのばあいでも，まえにのべたように，ひろい地域が出現の場所としてしめされることがあるのに対し，属性のばあい，「手足に弾力が出て来て」「保守党株に人気が出る」のように「～に」であらわされるものは，地点ではなくて，（具体的なばあいも抽象的なばあいもあるが）ものである。（それも，ほとんど性質についてであって，動きについては，「～に」という形の名詞をともなうことはあまりない。）一方，「～から」の形は，出発点や出現の場所ではなくて，理由をあらわす。

○其卑しい動機から出た結婚の真相が残るところなく発表された。（破戒 291）

○学校へ這入てからの専門の相違も，全く性格の相違から出てゐた。（こゝろ 137）

動きをあらわすことばは，原則として名詞だが，この理由の「～から」が述語にあるときには，「～のは～からでたこと（もの）だ」という形がもちいられる。

○申し込むというのも実は父の意志から出た事だと話した。（暗夜行路・前 67）

○然るに検校が父祖代々の宗旨を捨てゝ浄土宗に換へたのは墓になつても春琴女の側を離れまいといふ殉情から出たもので，（春琴抄 137）

○それを左程に思ふ気色を見せないのは，一つは彼の強情から来てゐるのですが，一つは彼の主張からも出てゐるのです。（こゝろ 206）

なお，つぎの「手紙は」は「手紙をだしたのは」をはしょった形で，結局は動作性の表現ではないかとおもう。

○君江は暫くしてこの手紙は村岡の心から出たものではなく，内々清岡さんに言はれて書いたものではないかと，気がついて見ると，（つゆのあとさき 106）

〔15〕 対人関係における発生。

これは，移動のニュアンスをともなうもののように「どこから」「どこに」が問題になるものではなくて，「だれから」「だれに」が問題になるものである。大きくわけると，ものや状態についてのばあいと，ことばについてのばあいとがある。

〔151〕 もの・状態などのばあい。

○副賞が電気洗濯機，ミシン，カメラ，ラジオ，化粧品セット，毛糸とあとからあとから出るのです。（婦人倶楽部 1956年10月 223）

これは，ものの例である。このばあい，賞品が「でる」というのは，洗濯機・ミシンなど，すでにあるものが，賞品としての資格を獲得することであり，品物が移動する必要はない。その点では，これは「けが人がでる」などの状態変化の例に属するといってもよい。ただ，ちがう点は，けが人のばあいは，実質的な状態変化がおこっているのに対し，このばあいは，人との関係が変化したにすぎない，ということである。すなわち，まったくおなじ品物でも，店にあるときは商品であり，家にあれば家具であるが，これが持ち主の手をはなれて他のある人の手にわたったとき（あるいは，わたるべきものになったとき），「賞品がでた」といえるのである。このように，問題は所有関係の変化だから，「だれだれから」「だれだれに」という目的語をともなうことがあるはずで，その点がこれまであげてきた発生のいろんなばあいとちがう。ただし，ものについては，目的語をともなった例がなかったが，状態についてはつぎの例がある。

○すつかり畳んで行かれたので，おくみたちに閑が出たのである。（桑の実 11）

○下士官の遠隔地のものには外泊がでていたのを，（真空地帯・上 78）

状態のばあいには，ものとちがって，所有関係の変化といったことはなく，「閑」はおくみの身の上に生じたものだが，この状態が主人からおくみに与えられることによって

生じたものだという点では賞品と同様である。さらに，つぎの例では，しごとが，つまり動作が，「でる」主体である。

○被服廠の仕事が出なくなつたところから，（あらくれ 181）

○金にもならない直しものが偶に出るくらゐで，（あらくれ 158）

〔152〕 ことばのばあい（その1）。

○殿様のお許が出たのは，此上も無い誉ぢや。（阿部一族 43）

○三百人から三百五十人ぐらいに退職勧告が出ているらしいです。（人間の壁・上 28）

○間服の註文などの盛んに出た四月の頃であつたが，（あらくれ 243）

○誰れからも筆蹟についての質問は出なかった。（知性 1956年9月 134）

○昨年の暮，この辺一帯に，軍からオフリミット（立入禁止）の布令が出て，街全体が失業状態におち入った。（読切倶楽部 1956年5月 237）

これら，積極的にか消極的にか，とにかく何かの形で相手の行動を制約する言語活動のばあい，特に「三百五十人ぐらいに退職勧告が出て」「軍から……布令が出て」のように，言語活動の主体や相手が「～から」「～に」の形で示されることがおおい。この類には，つぎのようなものがある。

おふれ　規定　許可　徴兵令　問　問題　（このばあいは「試験問題」の意味）

このほか，特に行動を要求せず，伝達を主とする言語活動に，

あてこすり　言いまわし　異議　うわさ　苦情　ぐち　小言　讃美論　相談　提案　答申　返事　非難　批評　報告　論議

などがあり，それ自身では言語活動ではなくて考えをあらわす単語として

案　意見　説　対策　予想

などがある。（「いくら考えてもいい案がでない」は個人の心理活動だが，「かれからいい案がでた」は言語として発表されたことである。）

これらのばあい，「命令」「質問」などよりも，主体や相手の示されることはすくないようだが，それでもつぎのような例がある。

○是話が彼の代議士の候補者から出たといふことだけは（破戒 201）

○小売業者から，"山梨モモ不買"の声さえ出た。（農業朝日 1956年9月 108）

○去年二十八年の九月ころから「来年（ことし）には不況がくる」という予想が経済学者や財界人の間から出てくるに至った。（ニューエイジ 1954年1月 42）

○ぶつきらぼうの私も雪江さんだけには言ひつけぬお世辞も不覚出て，（平凡 75）

ただし「～に」は相手をあらわすだけでなく，上にあげた「この辺一帯に，……布令が出て」のように場所をもあらわす。この場所は，まえに種類の発生などでのべたように，このばあいもある程度の広さをもった地域であって，1点ではない。これは，やはり単なる空間ではなくて社会的なものであることを示すものだが，さらに，「～に(で)」でまったく社会的・人間的な場の示されることもある。

○一時は自民党内に益谷除名論まで出たくらいだから（中央公論 1956年6月 179～180）

○厄年にも当るというので，周りに反対が出た。（スタイル 1956年5月 173）
○後載の座談会でも，なかなか貴重な意見が出ているので，（ベースボールマガジン 1956年10月 66）

なお，

○獄中から，脅迫状が，出るようになった。（ダイヤモンド 1956年1月1日 59）
○是通(このとほ)り瀬川先生からは進退伺が出て居ます。（破戒 314）

など，手紙のばあいも，やはり言語活動の一種であろう。このばあいには，実際にものがうごくので「獄中から」など移動の出発点というニュアンスもある。

〔152′〕 ことばのばあい（その2）。

言語活動の表現という点では上にのべてきたものとおなじだが，「ことばがでる」（またはこれと近い表現）は，「命令がでる」「話がでる」などとはちがう点がある。それは，「口から」「口を」「口へ」などをともなう例がおおいことである。

○歯のぬけた口からでるその言葉は，（真空地帯・上 68）
○是が私の口を出た先生といふ言葉の始りである。（こゝろ 11）
○私には喧嘩といふ言葉が口へ出て来なかつた。（こゝろ 27）
○台詞がうまく咽から出て来ない娘がいても（それいゆ 1956年 42号 31）

また，つぎのような例もある。

○突然，意味もなく，又その句が口の先に出る。（田園の憂鬱 116）
○ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を，（風立ちぬ 72）

「ことばがでる」の例がすべてこのように「口からでる」などという形をとっているわけではないが，そのような例がかなりおおいことは，これらが「あめ玉が口からでる」のような空間的移動のばあいときわめて近いことを示している。「ことばがでる」が，もとをただせば空間的移動の用法にもとづき，その比ゆ的表現として成立したものであることはあきらかであり，問題は，現在もこれを臨時の比ゆ的用法とみるか，それとも独立の意味とみるか，という点にかかっている。1つの考え方としては，「命令がでる」までふくめて，言語活動のばあいすべてを，空間的移動の比ゆ的用法にすぎない，とみる立場がありうる。しかし，「命令がでる」などのばあいには，出発点である話し手も，到達点である聞き手も，ともに人間（または組織）であって，内から外への移動という関係はみられない。もし移動ということばをつかうならば，主体から遠ざかる方向への（なにものかの）移動，という，きわめて抽象的な共通点があるだけである。（もし，このような共通点さえなければ，それは別義ではなくて別語になる。）ところが，「ことばが口からでる」では，人間は社会的な存在としてでなく，空間的な存在としてえがかれているようにみえる。「ことばがだれだれにでる」という，相手を示す表現がまれである（実例としてはなかった）ことも，そのうらづけとなるだろう。それで，一応〔152′〕を〔152〕から区別してたてることにした。

なお，「命令が出る」の類にも，つぎのように，「口から」をともなうものがあるこ

とはあるのだが，ひじょうに少ないことは事実である。

○唄も騒ぎも止んで一同の口から俄に催促が出た。（土・上 216）

○新治は食卓の話題に，母親の口から，あの見知らぬ少女の噂が出ることを待ちのぞんだ。（潮騒 13）

○泣きごとも，よろこびも口を出なかった。（厭がらせの年齢 276）

〔152′〕という位置づけは実はおかしいのであって，比ゆ的用法であるならば〔0〕の空間的移動のグループへ，独立の意味であるならば〔153〕としてでも位置づけなければいけないわけだが，その処理について断言できないので，かりにこうしたのである。

ここに属する慣用句的表現に，つぎのような例がある。

○麻疹（はしか）つて云はうとしたやつが，どうしたはずみか，疱瘡と出ちやつて……（多情仏心・前 87）

これの特徴は，「～と」でことばの内容が示されていることと，「ことばが」という主体の表現がないことである。一般に，人間が主体であるばあいにくらべて，人間以外のものが主体になるばあいには，なにが主体であるかが，はっきり表現されることがおおい。「～とでる」という表現にそれがかけていることは，これに慣用句的性格をもたせることになる。

〔16〕 由来。

あるものの由来・前身をあらわすのに「でる」がもちいられることがある。

○江戸時代に来た外人のヤンヨウステンの名から出た八重洲河岸，（帰郷 314）

○生長の家の谷口雅春も，大本教から出ています。（人生手帖 1956年10月 77）

つぎの例は，「家鴨」の成長を問題にしているので，ほかのとちがう。多分一般的にはもちいられない表現であろう。

○老人の説明に依れば，それ等の家鴨はやつと雛から出たばかりの頃，遠い四川省の奥から筏で揚子江に運び出される。（真知子・前 83）

以上のほか，のこっているのは，大きくくくれば状態変化をあらわすものである。基本的な空間的移動からの抽象化のようすを，特にその空間的場面（「へやから」「町に」など）がどのように抽象化しているかという点を中心にして概観することにする。

まず，空間的場面が空間的なままであって，しかも移動から状態変化にうつったものがある。

〔2〕「月が（空に）でる」

のように，出現をあらわすものがそれである。

つぎに，場面が空間的なものではなくなって，しかも抽象的場面としてのこされているものがある。空間的移動のばあいも，「でる」動作の出発点を強調した「へやをでる」の類と到達点を強調した「町にでる」の類とがあったが，このばあいにも，

〔3〕「社会にでる」「新聞にでる」

のように，ある場面への登場をあらわすものと，

〔4〕「学校をでる」「会社をでる」

のように，ある場面（組織）からはなれることをあらわすものとがある。

つぎに，

〔5〕「父から金がでる」

のように，移動の場面が場面としてはほとんど問題にならず，所有関係における移動とでもいうべきものがある。

〔6〕「～の域をでる」

の類は，外的であった場面が，もっぱら質をあらわすものとして，内的なものに転じたものである。

最後に，かなり慣用句的なものとして，

〔7〕「～の態度にでる」

の類がある。

〔2〕出現。

発生のばあいと近いのだが，ないものが新しくできるのではなくて，今まであって見えなかったものが見えるようになる，ということをあらわすものがある。これには，見る人間の側のはたらきに重点をおいて，さがしたら見つかった，ということをあらわすものと，対象の状態の変化として，見えるようになる，という，客観的な面に重点をおいたものとがある。

〔21〕見つかること。

○鎧櫃の中迄探したが，小判は一枚も出て来はしなかつた。（恩讐の彼方に 62）

○万国史など，教へる間に，知らぬ字が出て困ることがある。（思出の記・上 209）

○金が出るといふ山迄は一里余りあつた。（厚物咲 20）

これらは，さがすという，人間の意識的な行為の結果として「でる」，つまり見えるようになるものである。もっとも，

○馬鈴薯の中から釘が出るやうな，青木さんのお料理でも（桑の実 121）

のように，偶然の結果そうなったばあいの例もあるが，これも人間のはたらきかけの結果「でた」ことにかわりはない。なお，「見つかる」という表現は，対象が視覚的にとらえられることを意味するようだが，上の釘の例でもわかるように，ここではその必要はない。触覚でみとめてもよい。要は，対象がある場所にあることが，なんらかの方法で確認されることである。

〔22〕との形式上のちがいとしては，発見の場所が「～から」の形で示される，ということである。このことは，時としてこの「でる」に移動のニュアンスをもたせる結果となっている。事実としても，発見にひきつづいて移動がおこる，すなわち，見つかったものがとりだされることは多いだろうが，それは必要条件ではない。小判は，よろい

びつの底にあることがみとめられれば「でた」のであって，よろいびつの外にひき出される必要はないのである。

ここに属するものには，また，カード・さいころなどのある札・数字があらわれることをあらわすものがある。これは，その札なり数字なりをさがすというはたらきかけの結果としてあらわれたのではない点で「発見」とよぶのは適当でないが，今まで見えなかったものが見えるようになった，という面では共通している。

○赤が出るか黒が出るかでよい。マダム，ダイヤの札は，君に上げよう。(帰郷 351)

○艶福家に，いいサイコロの目が出る筈がない。(自由学校 340)

つぎの例は，これと同じか，また木箱から外に札が移動することをあらわすのか，わからない。

○一人の男が神籤のやうに木箱を振つて出た札の番号を読み上げると，(帰郷 66)

〔22〕 見えるようになること。

○風がやみ，かくれていた日がでてくると (真空地帯・上 151)

○裏の松林の上に，大きなバラ色の月が出ていた。(暗夜行路・前 180)

○さうして星でも出ては居ないかと，空を見まはした。(田園の憂鬱 55)

○いくたびか虹出で農夫の鍬依然 (知性 1956年8月 267)

これらの自然現象のばあい，人間のはたらきかけによって見つかるというものではない。日や月の客観的な状態が変化して，見えないような状態にあったものが見えるようになる，ということである。(「虹出で」のばあいには，見えるようになるというよりも，虹そのものの発生ともいえる。)

この類のも，移動との関係があるものがある。

○よしや日は西から出て東へ入る時があらうとも，(破戒 113)

の例は，あきらかに移動である。これが視界の外から視界の中への移動であるのに，「でる」で表現されるのは，外国人には異様に感じられることもあるらしい。たしかに，これは，「空にはいる」と表現してもよさそうなところである。しかし，「でる」は，中から外への移動→よく見えないところから見えるところへの移動，という重点の変化をおこしているばあいがある。「破戒」の例もそれである。重点がさらにずれると，移動なしに，よく見えない状態から見える状態への変化，ということになるのであって，「暗夜行路」の「月が出ていた」「田園の憂鬱」の「星でも出ては居ないか」は，ただまわりがくらくなったので月や星が見えるようになった，ということである。そして，「真空地帯」の「かくれていた日がでてくる」はその中間にある。つまり，この例では，日はうごいていないのに雲の方でうごいて，相対的な位置の移動がおこり，その結果として日はよく見えるような状態になったわけである。

さて，上の例で，「日がでてくると」「虹出で」は変化そのものであり，「月が出ていた」「星でも出ては居ないか」は変化の結果としての状態をあらわしている。これがさらに，状態そのものをあらわして，変化の結果とはいえない例もある。

○板木の木目がくっきりでているコンクリートの壁がない。（真空地帯・上 25）
コンクリートの壁は，最初から木目が「でている」状態にあったのであり，でてくるという変化がおこったわけではない。

〔23〕 知られること。
これも，「みつかる」といえばいえるのだが，視覚的にとらえるのではなくて，その存在を確認するばあいの例である。
○いままでの動物学の理論では処理しきれぬ事実が出てきたので（高崎山 37～38）
つぎの例は，「ぼろ」を具体物とみて，「ぼろが出た」全体で比ゆ的につかわれたのだとみれば，視覚的に発見したことになるが，「ぼろ」を「欠点」とおなじに考えれば，ここにはいる。
○第一，敗けた経験のない国民が惨めに敗けたのだから，処置なしに，おつこちてしまつた。一度に，ぼろが出たのだ。（帰郷 202）

〔3〕 登場。
移動をあらわす「でる」のなかには，「座敷へでる」「舞台にでる」のように，よりはれがましい場所への移動というニュアンスをもつものがあった。（〔020〕のc）これらにあっては，中心は，やはり，空間的にある場所から他の場所へ移動する，という点にあるが，これが抽象化して空間性をうしない，単にある場面への登場という意味になったものがある。〔4〕の「学校をでる」などにおいて，空間的出発点が組織という形に抽象化して，それでも「～を」の形であらわされているように，このばあいには，空間的到達点の抽象化した，登場する場面は「～に」の形であらわされる。そして，主としてこの場面がどのようなものであるかによって，登場のし方もちがい，〔3〕のなかが下位区分される。大別すると，
〔31〕 できごとへの登場
〔32〕 社会への登場
〔33〕 作品への登場
〔34〕 抽象的なものの顕在化
〔35〕 位置づけの変化
にわかれる。なお，この類は〔2〕の出現とひじょうに近いが，出現のばあい，原則として一定の空間的な場所にあらわれるのに対し，〔3〕では空間性がうすれている。

〔31〕 できごとへの登場。
○芝居に出て来る若旦那そのまゝにきやしやで骨細なのがあり，（春琴抄 146）
○中堀中尉はまた一度も野戦にでたことがないという点でも（真空地帯・上 172）
○奈美子はその時の叔父の死骸も見せてもらわなかったし，葬式にも出なかった。
（小説新潮 1956年7月 142）

これらの例では，まだ移動との関係がつよくのこっている。芝居・野戦・葬式のどれへ「でる」にしても，やはり人がうごいてその行なわれる場所にいきつかなければならない。したがって，空間的な移動とのさかい目ははっきりしない。

この類のできごとの例としては，ほかに

映画　演説会　会合　軍法会議　決勝　講義　校友会　コンクール　試合　銃剣術大会　授業　ゼミ　独唱　番組　ピンポン　放送　夜会　余興

などがあった。（「映画」については，あとでまたとりあげる。）

以上はすべての人の登場だが，ものの例としてこれにあたると考えられるばあいは，当然ながらごくまれである。つぎの例はここに入れてもよいであろう。

○こないだ拝見した連盟の展覧会に出た絶筆（芸術新潮 1956年2月 102）

「展覧会」は行事の名まえであるとともに場所の名まえでもある。したがって，「会場にでている」〔025〕などとは，紙一えの差である。

○国際市場に出る大麦の量がすくなく，（文芸春秋 1953年11月 53）

も，「売り場にでている」にちかいが，「市場」が特定の空間をしめるものではない点で，「展覧会」と「会場」の差よりも大きくへだたっている。

つぎの例は，あるいは別にたてるべきものかともおもうが，かりにここに入れた。

○輸入を制限する法案が米国の議会に出たが，（エコノミスト 1956年2月18日 10）

この用法の「でる」主体としては，2とおりのばあいがある。

○一人区をはばまねばならないとあって，重政，高橋両氏が連合，さらに十一区から出ている永山忠則氏がこれに加わった。（週刊朝日 1956年4月8日 10）

○飯山——彼処（あそこ）からは候補者が出ませう？（破戒 101）

前者のばあい，「永山忠則氏」は，でる前から永山忠則氏で，そこに変化はない。しかし，あとの例では，「候補者」は，でることによって候補者になるのであり，それ以前には候補者ではない。いわばこの「でる」は候補者の発生である。事実としては，どちらの例も選挙への出馬だが，「でる」と主体との関係はおなじではない。「候補者がでる」は，この点で，まえにあげた「けが人がでる」などとちかい関係にある。

ここでは，一応このグループにいれておくけれども，特に事件というほどのことがなくて，他人のまえにあらわれる，というばあいもある。

○そこに出て来た一人の男に栄花はすぐ身も心も任せて（暗夜行路・前 237）

○だからニーチェ風に，神よ，出て来い，やっつけてやろう，出て来られないだろう，という所があるんだがね。（文芸 1956年11月 26）

これらの例では，みえないところにいた男や神が，栄花や話し手のまえに登場することが「でる」で表現されている。

これらの例は，〔025〕であげた，「虎がでる」「強盗がでる」と近く，その抽象化したものである。ただし，〔025〕の類が，ある空間的な場所にあらわれる，という具体的な動作なのに対し，この〔31〕の類は「他人のまえに」といっても空間的なものではなく，社会的なものである。

〔31〕 に属する慣用句には，つぎの例がある。

○選挙ですから，実は僕なぞの出る幕では無いと思つたのです。（破戒 158）

〔32〕 社会への登場。

○これから世に出て身を立てようとするものが，（破戒 49）

○急に社会に出ると，反動的に身を持ち崩すらしいですよ。（新潮 1956年4月 156）

○私より三年も先にいはゆる文壇に出てゐて，（新潮 1956年7月 95）

これらのばあい，主人公は，ある一時的なできごとに登場するのではなくて，前とはちがったあたらしい社会に登場するのである。

「（候補者として）選挙にでる」ことは，選挙というできごとへの登場だが，

○もし私が今度の選挙に失敗すれば，最早（もう）につちもさつちもいかなくなる。どうしても此際（こゝ）のところでは出るやうにして頂かなければならない。（破戒 190）

○国会にも共産党が相当に出ているし，（東洋経済新報 1956年10月20月 36）

○信州から代議士に出てきた人で（改造増刊 1953年10月 日本を動かす1000人 194）

などは，議会というあたらしい社会への登場である。

この「代議士にでる」は，〔31〕であげた「候補者がでる」と同様に，でることによって代議士になる例である。このように，でることによって生じる主体が「～に」の形で示されたものは，ほかに，つぎのようなサービス業につくばあいのものだけだった。

○駒子がいひなづけのために芸者に出たといふのも，（雪国 59）

○お酌に出たこともある女にしては，こころもち鳩胸だつた。（雪国 31）

○売子のやうなことをしたり，或小さい商会へ給仕に出たりしてゐた。（桑の実 7）

これらの例では，ある一時的なできごとへの登場ということではなくて，かなりの期間つづくしごとへの登場であり，その意味でさきにあげた「文壇にでる」などといっしょにした方がよいであろう。おなじく芸者の世界のことについてであっても，

○其の場の様子から清岡を自分の出る客と思つたらしく，（つゆのあとさき 67）

で一時的に「でる」ことをあらわしているのと比較すれば，そのちがいはわかるであろう。なお，「自分の出る客」は，「その客に自分がでる」ことで，つまり相手の表現を前提にしており，「会にでる」などからは，すこしずれている。

つぎにあげる例は，どこに登場するのかが，はっきりしめされていないものであるが，事実としては，はなやかな世界への登場である。

○デュマと同じく民衆の中から出た人である。（週刊朝日 1956年1月29日 82）

○あの頃は，「毒消しァいらんかねェ」で，私出たンですけど，それから後ヒットするものがなくて，アカンと思っていました。（スタイル 1956年6月 157）

なお，この類に属するものは，原則として人間についての表現だが，つぎのように，それ以外につかわれた例もある。

○相沢さんは，行くさきのことはともかく，あの岩宿（いわじゅく）の崖が世にでることで，もう十分満足すぎるほど満足で，（旧石器の狩人 316）

〔33〕 作品への登場。

「作品」といったが，大部分は言語作品，つまり話しことば，書きことばへの登場である。文学作品にかぎるわけではない。

(話しことばの例)

○寝物語に，どうしたつて出なければならないのは，お澄の過去だつた，そして現在だつた。(多情仏心・前 188)

○佃の名が出ると，多計代は平静を失つた。(仲子・上 146)

(書きのことばの例)

○一月程して私の処女作は或雑誌へ出た。(平凡 104)

○この家の主人，門札に出てゐる霧島嘉門であるかどうか，(冬の宿 13)

登場する主体としては，「霧島嘉門」「お澄の過去」のような現実そのものと，「佃の名」「処女作」のような言語のばあいとがある。つぎの2つは，おなじことについての記述だが，「でる」主体は，前の例では現実そのもので，あとの例では記事という言語表現である。

○街巷新聞に出た黒子(ほくろ)の一件は，誰がいたづらをしたのか(つゆのあとさき 36)

○街巷新聞に出てゐた記事は誹謗でも中傷でもない。(つゆのあとさき 5)

以上のほかに，映像の登場するつぎのような例がある。

○巻頭に東京の日仏会館の写真が出ている(ニューエイジ 1954年2月 53)

○「カラコルム」の映画の中に，アフガニスタンのカーブルにスタイン卿の墓が在るのが出た。(世界 1956年7月 140)

〔34〕 抽象的なものの顕在化。

○都々逸がよく分るわね，一番その人の癖が出るから。(雪国 71～72)

「癖」は抽象的なもので，それ自体ではとらえられない。それが三味線のひき方に「でる」ということは，癖がひき方に影響をあたえて，ひき方にある特徴をもたせ，そのことを通じて客観的・顕在的なものになる，ということである。

○そして染一等兵の「あら，ほんまに，ええ人だっせ」という言葉には曾田に対する彼の好感がはっきりでていた。(真空地帯・上 60～61)

○これも易(えき)の表へ出たことだ。(談切倶楽部 1956年6月 76)

○「不安の倫理」は評論であるだけに，彼の考えかたがハッキリ出ている。(キング 1956年1月 207)

ただし，このおわりの例は，むしろ〔33〕へ入れるべきかもしれない。つまり，「自分の考えかたはこれこれだ」という形でのべたものなら〔33〕のグループだし，そうでなくて，なにごとかを書いているその書きっぷりに，自然に筆者の考えかたがにじみでている，というばあいなら，この〔34〕に属するものである。

「～に(へ)」という目的語は，上のように，「言葉」「易の表」など，動作・状態を

あらわすことがおおいが，さらにその状態のあり場所である，具体的な地点をしめすこともある。

○大抵の人は気象が眼へ出ると云ふ。（平凡 10）

これは，一層正確には，「気象が眼つき（＝眼の状態）に出る」ということである。

○海軍の汚職事件が明るみに出た。（群像 1956年10月 281）

○市場問題が前面に出てくるにつれて，（改造 1953年7月 105）

○沖縄問題は，そういうところで表面に出てきたのである。（世界 1956年9月 101）

これらは，「明るみに出た」など全体としては，たしかに顕在化だが，まだ「でる」自身の意味として本当にそれをあらわすとはいえない。「明るみに」「前面に」「表面に」のように，本来空間的な場所をあらわすことばと結びついてそうなるのであり，したがって，「でる」自身は移動をあらわして，「明るみにでる」など全体が比ゆ的にもちいられたともいえるかもしれない。しかし，一方で「でる」が「ことばに好感がでる」のような，かなり自由な結びつきにおいても顕在化をあらわすこと，「表面」などがしばしば非空間的な，抽象的なものをあらわすこと，を考えてここに入れた。

なお，思いだされることをあらわす，つぎのような例も，ここにいれていいだろう。

○ゲエテのある戯曲の筋が頭に出ていたが名前が出ないのだった。（むらぎも 340）

〔35〕 位置づけの変化。

位置づけ・役わりが，よりたかいところ，より目だつところにうつることをあらわすばあいがある。

○わが国の造船業は（中略）一躍船舶輸出国の首位に出たが，（リーダーズダイジェスト 1956年11月 49）

○別当サンは第一線に出て欲しいですな。（ベースボールマガジン 1956年1月 211）

これも，はれがましいところへの移動という点で，空間的な移動のばあいとつながっている。

〔40〕 組織をはなれること。

○尤も土屋君の方は，農科大学の助手といふことになつて，遠からず出掛けたいやうな話ですから——まあ斯(この)人は黙つて居ても出て行く。（破戒 76）

○私が軍隊を出てオヤジ球一の家に寄食するようになって（中央公論 1953年10月 122）

○日活を出て，月形竜之介と改名した。（キング 1956年2月付録 71）

これらの例で，「でる」は，学校・軍隊・会社などの組織から個人がはなれることをあらわしている。このばあい，「～からでる」という表現もあるとおもうが，実例はほとんど「～をでる」であった。

この類は，〔002〕としてあげた，「下宿をでる」「病院をでる」「刑務所をでる」などと相接しており，その延長上にある。ちがいは，〔002〕の類がまだ移動としての側面を失っていないのに対し，〔40〕の方は，もう移動としてはとらえられない，という点に

ある。〔002〕も〔40〕も，「でる」出発点になっているものは，空間的な敷地や建物も，非空間的な組織をも表わすものが多く，同じ表現が両方に属することがある。

（見舞客が）面会時間がすぎたので病院をでた。〔000〕

（病人が）全快して病院をでた。〔002〕

（医者が）主任と意見が合わなくて病院をでた。〔40〕

という3つをくらべてみると，〔000〕のばあいは，「病院」は，あきらかに空間的なもの（敷地または建物）であって，見舞客は，はじめから病院という場での生活とは関係がない。また，〔40〕では，「病院」は，完全に非空間的な組織としてのそれであって，たとえその医者が病院の敷地の中に住んでいたとしても，辞表をだして受理されれば，もう病院を「でた」のである。そして，〔002〕のばあいは，これらの中間にある。それは移動であるとともに，病院における集団生活からの離脱でもある。

なお，〔40〕のなかでも，「病院」「学校」のように，組織が一定の空間的な位置にあるものは，〔002〕に（したがってまた〔000〕に）より近く，「政党」「サークル」のようにそうでないものはより抽象化している，という段階の差がある。

〔41〕 学校を卒業すること。

○おれも中学を出るころ，神戸の叔母さんに聞いて（暗夜行路・前 188）

○長男健造は東大仏文科を出て（主婦と生活 1956年6月 209）

これらの「卒業する」ことをあらわす用法も，ひろい意味では学校という組織をはなれることだから，前にあげた例とおなじグループに属する。しかし，さきの「破戒」における「でる」の例が，教員のがわであって，学校からのはなれ方に特別の限定がないのに対し，ここにあげたものは，みな生徒・学生が卒業という特定のし方で学校からはなれることである。中途退学では学校を「でた」ことにはならないのである。

○学校をでていない自分が中堀中尉からみすてられていることを（真空地帯・上 174）

というばあいに，木谷は学校にはじめから行かなかったかもしれないが，途中で退学したのかもしれない。退学もまた学校という組織をはなれることだという点では卒業とかわりないのだが，「学校をでる」は卒業に限定される。この点で〔40〕と区別したのである。

なお，卒業については，多分「～からでる」という例はないだろう。そういう形式面でも〔40〕とはちがうはずだが，〔40〕の方でも，みな「～をでる」だったので，この点は積極的にはいえない。

〔5〕 所有関係における移動。

〔51〕 金の移動。

○お前のもらった金は，あれはすべて，芝のお祖父（じい）さんから出たものだそうだ。（暗夜行路・前 227）

このばあい，現実にものの移動があるかどうかは問題でない。実際にある人のところから貨幣が他の人のところへ移動することもあるし，また，借金を帳けしにするときのように，ある意志を表明しただけで金が「でた」ことになるばあいもある。したがって，それは本質的に社会的な現象であって，空間的に一定の場所をしめるものではない。

しかし，実例の大部分は，つぎのように，金の所有権が移動するとともに，その資格もかわるものである。

○無論費用は坊さんの懐から出るのではありません。（こゝろ 194）

○住宅公庫の返済金，二人の姉さんへの送金，保険料，ミシンの月賦支払金という，どうしても出ていくものを除くと，（婦人生活 1956年2月 394）

○戸籍上弟がいれば扶養家族手当も出ないのです。（主婦と生活 1956年10月 267）

扶養家族手当は，「でる」ことによって手当になるのであり，「でる」までは，つまり支払者の手にあるうちは，ほかの金一般と区別がない。その意味では，これらは出現としてのニュアンスをもっており，さきに〔15〕としてあげた，「賞品がでる」「命令がでる」などときわめてちかい。「費用がでる」や「手当がでる」だけだったら，それらといっしょにしてもよいところである。ただ，最初にあげた「金がでる」のような例もあるので，出現と区別することにした。

〔52〕 売れること。

○品物ばかり出て勘定の滞つてゐるのが，（あらくれ 80）

○生野菜で出ているのはジャガイモとタマネギです。（農業世界 1956年5月 63）

○卸値で，三百円前後が出ている。（ダイヤモンド 1956年8月11日 28）

このばあいにも，おおくは空間的な移動をともなうとしても，それは必要条件ではない。店にあるものをかえば，もちさらなくても，それは「でた」ことである。

なお，ものの移動の例は，おおくは上のように品物の売買についてのものだが，つぎの例はそうではなく，単なる受け渡しである。これは，さきの〔151〕「賞品がでる」などの〈出現〉の例にちかいが，渡されることによって鉄砲玉になるものではない点がちがう。

○鉄砲玉が勘次の手から出ることと思つたらしかつた。（土・上 78）

〔6〕 範囲外にあること。

○もう四十を出てゐるらしく顔は小皺で垢じみてゐたが，（雪国 86）

○春琴の佐助を見ること生理的必要品以上に出でなかつたであろう乎（春琴抄 171）

○老婆心の範囲を出るものではなかつた。（多情仏心・前 260）

○一千万円の域を出るボーナス・プレーヤー（小説と読物 1956年12月 353）

これらは，きわめて慣用句的な用法である。というのは，上にあげたもの以外でも，「～の限界を」「～なみを」「～以外に」「数年を」など，つねに範囲や限界をしめすことばとともに用いられていること，また，その意味が状態的であって変化をしめすも

のでないこと，などの点で，ほかの用法にくらべ，特殊化しているからである。ただし，「～の範囲を」などの表現をとらずに，いきなり比較の対象をあらわすことばにつづいた例外が1つだけあった。

○今日出海は，どこで買ったかボヘミアン・ネクタイなんかしめて，いちばん画かきらしくいそいそとしているが，銀座通りの似顔かきを出ない。（私の人生観 22）

なお，

○文学者は文学の殻にとじこもるな。文学の外に努力して出て行け。（群像 1956年10月 224）

○しかも彼女は，シャンソンから一歩も出ないで世界にその名を知られることができたのである。（解放 1953年7月 197）

などは，上にあげた例とややちがう。すなわち，群像の例では「出て行け」と，状態ではなくて変化をあらわしているし，あとの例では「一歩も」とあることによって，移動の比ゆ的な使い方というニュアンスをもっているからである。

〔7〕 一定の態度をとること。

これもやはり慣用句的な用法である。すなわち，その直前に動作の内容やようすをしめすことばがなければいけない。そのようなことばには，つぎの4つがある。

（動作の内容をしめす名詞＋に）

○攻撃に出られない悲しさには，何時となく受け損じて（恩讐の彼方に 59）

○先生は奥さんに対しても始終斯ういふ態度に出るのだらうか。（こゝろ 41）

○配当ねらいの買いに出るかも知れない。（ダイヤモンド 1956年8月28日 94）

（形容詞・形容動詞の連用形）

○『今夜は大変綺麗にしてますね？』男は態と軽く出た。（蒲団 17）

○葉子はすぐ腹を決めてひどく下手に尋常に出た。（或る女・前 93）

（動詞連用形＋て）

○斯んな問を掛けるのは，父の方が折れて出たのと同じ事であつた。（こゝろ 108）

○私の方から一歩，和解的なゼスチュアを取つて出たことになつた。（冬の宿 175）

○危険な仕事をかって出て（娯楽よみうり 1956年1月6日 81）

この表現につかわれる動詞の種類がどのようなものかはあきらかでないが，とにかく，かなりかぎられた範囲のものらしい。上にあげたもののほかは，「うってでる」「すててでる」しかない。「かう」「うつ」の意味が単独のばあいとちがうことからいっても，この表現の慣用句性はつよいといえる。

なお，「～て」が後置詞化したものについた，つぎのような例もある。

○問題は，会社側が誠意を以て出てくるか否かですよ。（むらぎも 220）

（コソアド）

○母が伯に対してどう出てよいものか迷つてゐたのは，（仲子・上 163～164）

○ソ連がこう出るのは初めからわかり切ったこと（日本週報 1956年9月25日 20）

この類は，〔001〕「しごとに～」という，一定の目的の表現と結びついた移動が，非移動化したものであろう。

〔？〕 以上にあげたもののほかに，そのどこにはいるものか，またはこれらと別の項目をたてるべきか，まよったものがある。いくつかの例をあげておこう。

○若い私は全く自分の態度を自覚してゐなかつた。それだから尊いのかも知れないが，もし間違へて裏へ出たとしたら，何んな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。（こゝろ 20）

○佐々さんに負けましたね。夏向きのお茶が出てしまつて……（仲子・上 114）

○踊の方の縁故から能衣裳の古物などを扱ふ店も知つてゐるので，筋のいい縮が出たらいつでも見せてほしいと頼んであるほど，この縮を好んで（雪国 150）

○どんな生活から彼らは出てきたのだろうか？（むらぎも 266）

「でる」の小分けした意味はおおく，その関係も複雑だが，おもなものだけを結ぶと，次ページのようになる。

基本的な 000）「へやを～」（移動）の類の抽象化にあたっては，＜出発＞＜到着＞＜出発・到着＞という，3つの方向がある。これは，主として，「～から(を)」「～に（へ）」という目的語のうち，どちらをともなうかによる分類である。

＜出発＞の方向への抽象化

これは，おもに「～から(を)」という目的語をとるものだ。

(1) 002)「下宿を～」の類は，空間的な移動であるとともに，生活の変化をもあらわしている。その延長上に，非空間的な変化になりきった，4）「会社を～」（離脱）の類がある。

(2) 010)「江戸を～」は，出発点が面から点になったもので，その延長上には，出発点がほとんど問題にならずに，移動の開始をあらわす，011)「汽車が～」の類がある。

(3) 一方，面積をもった出発点が，非空間的なものにかわると，6）「四十を～」のような，範囲・限界から外にあることの表現がうまれる。

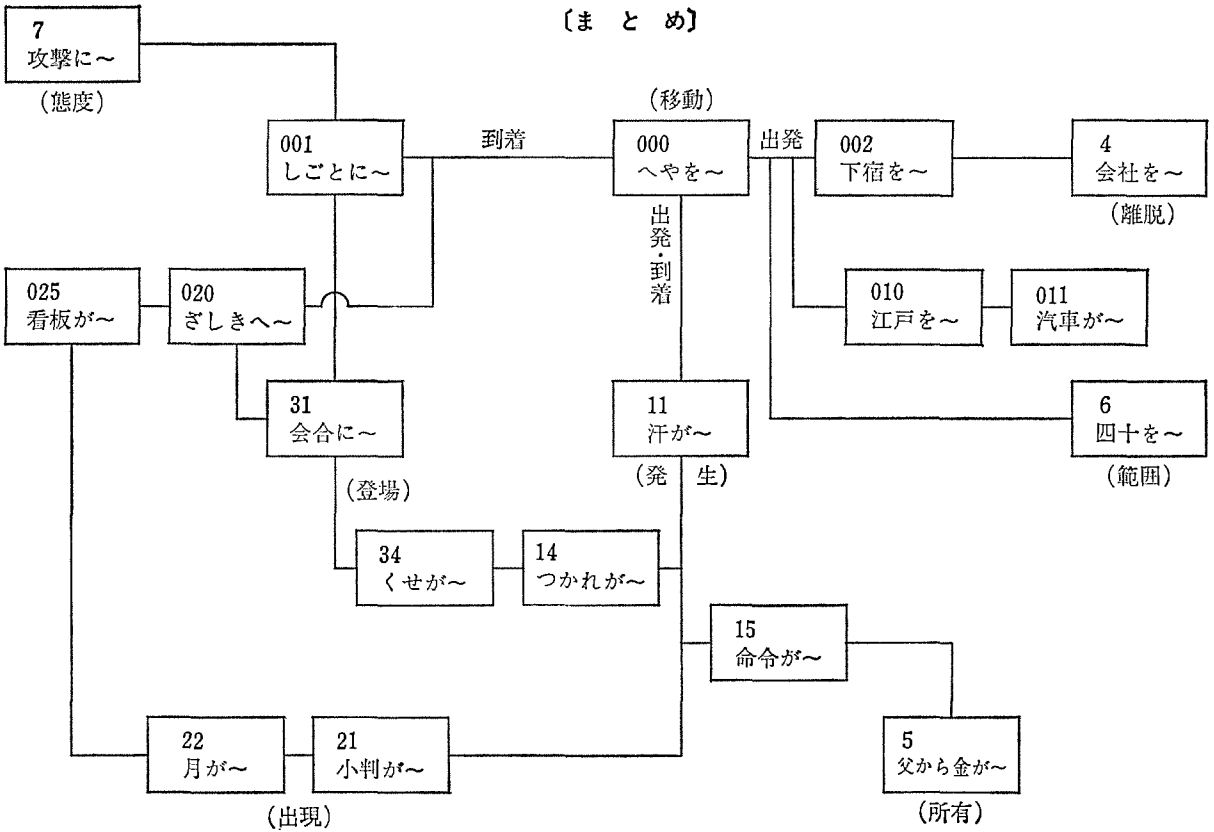
＜到着＞の方向への抽象化

これは，おもに「～に(へ)」という形の目的語をとる。

(1) 001)「しごとに～」の類は，動作の目的を示すことによって，重点を移動の基点から帰着点の方へうつしている。7）「攻撃に～」（態度）の類は，その延長上にあるものと考えられる。

(2) 020)「ざしきへ～」の類は，ある場所への移動だが，特にそのなかでも，はれがましい，人目につくような場所への移動をあらわすものが多く，そこから025)「看板が～」の類に，さらに非移動的な出現をあらわす22）「月が～」の類につながる。

〔ま と め〕


7
攻撃に～
（態度）
001
しごとに～
到着
（移動）
000
へやを～
出発
002
下宿を～
4
会社を～
（離脱）
出発・到着
025
看板が～
020
ざしきへ～
010
江戸を～
011
汽車が～
31
会合に～
（登場）
11
汗が～
（発 生）
6
四十を～
（範囲）
34
くせが～
14
つかれが～
15
命令が～
22
月が～
21
小判が～
（出現）
5
父から金が～
（所有）

(3) 31)「会合に～」の類は，ある場所への登場であるとともに，あるしごとのための登場でもあり，020)「ざしきへ～」の類と001)「しごとに～」の類との両方につながる。34)「くせが～」のようなものは，そこから抽象化したものである。

＜出発・到着＞の方向への抽象化

これは，「～に」「～から」両方をとり，しかもそれらが同じことである（「汗がひたいからでる」）ものを中心とする。

(1) 14)「つかれが～」の類は，11)「汗が～」などから抽象化したものだが，これはまた，登場の類にあげた34)「くせが～」などとひじょうに近い。

(2) 15)「命令が～」のようなことばの発生は，対人的である点で，5)「父から金が～」のような所有関係の変化に通じる。

(3) 21)「小判が～」の類の出現は，「思いがけないところから（ところに）」と両方とりうる点で「汗が」に近いが，見えるようになる，という点では22)「月が～」などと同じグループであり，「看板が～」などともつながる。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	出
0) 移動		
000) へやを～	4	126
001) しごとに～	1	30
002) 下宿を～	–	13
010) 江戸を～	–	3
011) 汽車が～	–	5
020) 座敷へ～	5	59
021) 役場へ～	–	2
022) 人が～	–	–
023) 電話に～	–	2
024) 食事が～	–	3
025) 看板が～	–	7
03) 前へ～	1	9
04) くぎが～ている	–	5
1) 発生		
111) 汗が～	2	25
112) 芽が～	1	2
113) ほこりが～	–	2
120) けが人が～	3	30
121) 新型が～	2	26
122) 政権が～	–	–
13) 火が～	1	13
14) 弾力が～	17	69
151) 賞品が～	–	1
152) 命令が～	2	33
152′) ことばが～	1	3
16) 名称が～	1	5
2) 出現		
21) 小判が～	–	7
22) 月が～	–	4
23) 事実が～	–	–
3) 登場		
31) 芝居に～	2	53
32) 社会に～	3	11
33) 雑誌に～	1	43
34) くせが～	1	10
35) 首位に～	–	2
4) 離脱		
40) 会社を～	1	2
41) 学校を～	1	14

5)				6) 範囲を～	1	7
51) 金が～	−	9		7) 態度に～	4	25
52) 品物が～	−	8		?	−	−

7. 「あ け る」

「あける」の用法を大きくわけると，

A 他動詞 「窓をあける」など。

B 自動詞 「夜があける」など。

の2つになる。

A 他動詞のばあい

これも，大きくはつぎの2つにわかれる。

〔1〕 へだてやおおいを取りさること，「窓をあける」など。

〔2〕 一定の空間をふさいでいたものを取りさること，「コップをあける」など。

これらは，ともに何ものかを「取りさる」ことが共通である。その取りさられる対象は，〔1〕では外側にあるもの，〔2〕では内側にあるものでちがっているが，取りさられた結果として，中まで見とおせるようになる点も共通である。

〔1〕と〔2〕は，どちらも具体的な動作・作用であって，そのどちらをより基本的なものとみるかはむずかしいが，用例の数は〔1〕の方がずっと多いことから，現代語では一応〔1〕を基本的なものと考えておく。

〔1〕 へだて・おおいになっているものを取りのぞいて，中が見える（中へとおれる）ようにすること。

これには，なにを対象として表現するかによって，つぎの3とおりがある。これは，事実としては，まったく同じ事実についての，表現上の区別である。

第1は，「戸をあける」「しょうじをあける」のように，へだてになっているものを対象とする動作として表現するばあいである。このばあいは，戸・しょうじなど，はたらきかけをうけるものを移動させることをあらわす。

第2は，「窓をあける」「裏口をあける」のように，そのへだてのある場所を対象として表現するばあいである。

第3は，「へやをあける」「押入れをあける」のように，そのへだてによってさえぎられ，中のみえなかったものを対象として表現するばあいである。第2，第3のばあいは，はたらきかけをうける対象は，位置が移動するのではなくて，状態が変化するのである。

○扉をあけた男は，彼らを見ると更に入口を広くあけ，改つた口調で挨拶した。（仲子・上 12）

という例で，前の「あける」は第1の，あとの「あける」は第2のばあいに属する。「あける」ことによって，扉は位置がかわるのだが，入口は位置ではなくて状態がかわるのである。

このような対立は，へやや家のような，空間的に大きなスペースをしめる建物のばあいに見られるだけではない。たとえば，かんづめをあけるばあいを考えると，「（かんづめの）ふたをあける」は第1の「戸をあける」の類に，「（かんづめの）口をあける」は第2の「窓をあける」の類に，「かんづめをあける」は第3の「へやをあける」の類に，それぞれ対応する。やはり「ふたをあける」は位置移動的であり，あとの2つは状態変化的である。

以下に，同じような事実について別々の表現をとっているものの例をあげる。

まず家やへやについて。このばあい，同じ事実が3とおりに表現されている例は見つからなかったが，第1と第2，第1と第3のかさなったものはあった。

(1) へだてているものについて	(2) へだてている場所について	(3) へだてられたものについて
○品のいゝ婦人が門の戸を明けて内に這入つた。（つゆのあとさき 49）	○十二時すぎたら門を開けぬことにしよう。（むらぎも 69）	
○耳門の重い鉄戸をあけて内部に迎へ入れた。（帰郷 59）	○急いであけた耳門(くぐり)を，（多情仏心・前 21）	
○納屋のやうに見える裏口の戸を開けた。（青銅の基督 86）	○昨晩(ゆうべ)はそつと裏口を明けておいたのに相違ないのだ。（波 237）	
○とうとう明子は玄関の戸を開けてそとへ出た。（くれない 109）	○「今晩は……」といって安吉は事務所の玄関をあけた。（むらぎも 269）	
○私は窓硝子を開けて夜霧をいっぱい吸った。（放浪記 103）	○私は驚ろいて窓を開けた。（こゝろ 26）	
○押入の襖をあけて枕をしまひかける。（つゆのあとさき 112）		○おくみは急いで押入を開けて蒲団を出した。（桑の実 130）
○叔父と一緒に小屋の戸を開けて入つた。（破戒 109）		○漬物樽の積まさつてゐる物置きを，コツクが開けると（蟹工船 50）
○水色の不透明ガラスの引き戸を，ガラリと開ける		○水野さんてば，女湯をあけたんですって，（放浪記

と，二，三人の客しかいない，流し場が見える。（自由学校 216）

○青い鳥籠の戸を開けて，（桑の実 29）

101）

○愛玩の雲雀の籠を開けて（春琴抄 208）

これらの例が第1・第2・第3と3つそろっていないのは，いわば偶然であって，理論的には，それぞれ空白の部分をうめる表現があるはずだ。しかし，つねにこの3つがそろうとはいえない。つまり，へだてをとりはらうことは，かならずしもそのへやを「あける」ことにはならない。

○ねるまへに，部屋のカーテンをそつとあけて硝子窓越しに富士を見る。（富岳百景 63）

という例では，へやはカーテンと窓ガラスで2重にしきられており，カーテンだけをあけても，へやを「あけた」ことにはならない。

なお，ここに属する慣用句には，つぎのものがある。

○一九五六年度のプロ野球が近く幕を開ける。（ベースボールマガジン 1956年3月 246）

○夜は大抵行燈一つで埒を明けて，（思出の記・上 31）

○重なつて来てゐる家事向の雑用に埒をあけて置かうとして，（多情仏心・前 61）

なお，「店をあける」は，単なる「家をあける」とちがって，営業していることをあらわす。たてものとしては，戸があいていても，店としてはしまっている，ということもありうる。その意味で，すこしズレがあるが，〔1〕のなかに小分けした1項目として立てるべきかどうかは疑問である。

○こんな厄介な客を店を開けて待っている必要ないじゃないか，（私の人生観 14）

以上と同じ動作でありながら，ちがった種類の対象をとる例がある。

○襖のそとから「およしさん」と声をかけて，細目にあけた隙から，若い方の娘が銚子をさし入れた。（多情仏心・前 71）

このばあい，「隙」はあけたことによって生じた結果である。動作そのものとしては，「ふすまをあける」「へやをあける」とまったく同じであるが，生産された結果を対象として表現している点で，「すき（ま）をあける」などは，以上とちがった第4の類として立てることができる。

つぎに，入れものの類について。この類で第2の，へだてている場所を対象とした，「かんづめの口をあける」のような表現は見あたらなかったので，第1の「ふたをあける」，第3の「かんづめをあける」に類した例がそろっているばあいをあげる。

(1) へだてているものについて

○もう気の早いものはお弁当の蓋を明けてしまつた。（波 75）

○手を動かしてハンドバッグの蓋をあけながら，（帰郷 310）

○もうのみたくなくなったコーヒーの

(3) へだてられたものについて

○慌てゝ弁当箱を開けて，（平凡 36）

○留金を外してハンドバッグを開けた。（帰郷 288）

○女中は帯の間から口ぬきを出してソー

栓をあけて，（真空地帯・上 44）　｜ダ水をあけ，（暗夜行路・前 85）

つぎの例は，結果として生産されるものを対象として表現する第4類である。

○煖を飯盒に入れ，火が消えない程度に隙間をあけて，蓋をしてゐた。（野火 155）

入れものについては，第1の「ふたをあける」「せんをあける」などがない（偶然にではなくて，ありえない）ものが多い。

○人目がなければ，納戸にはいりこむ。箪笥を開ける。（厭がらせの年齢 301）

○蟇口を開けて，銭を投げつゝ急いで通り過ぎた。（あらくれ 18）

○誰だい母さんに黙つて其袋を開けたものは。（破戒 57）

○昨夜も，何気なく自分のふところをあけてみたら，（厭がらせの年齢 267）

これらのばあいは，がま口・袋などの入れもの自身の一部分がその内部への通路をふさぐかっこうになっていて，ふた・せんなどのように，移動させることによって除きさることはできない。したがって，第1の表現にあたるものはありえないのである。

つぎに，包みの類も，入れものに近いけれども，やはりちがう面がある。このばあい，

○「うむ……」といって雨森は風呂敷をあけた。（むらぎも 267）

は，「戸をあける」「ふたをあける」などと同じ第1の類に，

○母さんのところから送って来た小包をあけてくれた。（放浪記 292）

○婆やは新聞紙の包みを開けて，（桑の実 45）

は，「へやをあける」「箱をあける」などと同じ第3の類に属するといえるだろう。しかし，このばあい，内部をへだてているものは，ふろしきや新聞紙など全体的なおおいであり，そのおおいを取りさることは，包みを包みでなくすることである。すなわち，「包みをあける」ことは，包みを消滅させることにほかならない。これが「箱をあける」などとの相違点である。

入れものや包みについては，第1～第4のほかに，第5のグループがある。それは，「中をあける」という表現である。

○モウン・ノウが男子用の化粧箱を差出した。大守は無表情の儘でそれを受取ったが，中をあけて調べているうちに，（ニューエイジ 1953年8月 98）

○先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見やうといふ目的があつた。（こゝろ 144）

○ふきんを取り出すと、まん中を開けてみせた。（厭がらせの年齢 292）

実例はなかったが，へやや家についても，「へやの中をあける」のような表現があるかもしれない。ただ，ここでちょっとひっかかることは，実例がみな「あけてみる（みせる・調べる）」などの形をとっていることである。これだけからいうと，「中を」は「あける」にではなくて「みる」などにかかっている，ともいえるかもしれない。しかし，単なる「中をあける」があったとしても，それほど不自然ではないと思われるので，第5の類をみとめたい。

「本をあける」のは，「がま口をあける」「袋をあける」などに近い。あけることによって，ふた・せんなどが取りさられるわけではないからである。

○偶(たま)には書物を開けて十頁もつゞけざまに読む時間さへ出て来た。(こゝろ 127)

そして，つぎのような例は，第5の「中をあける」の類かと思われる。

○黄色い本の表紙を眺めたり，一寸内部(ちよつとなか)を開けて見たりして，(破戒 10)

○先づ表紙から装幀を調べ，タイトル・ページを開ける前に，(真知子・前 108)

なお，このグループにも，つぎのような慣用句がある。

○戦後，蓋をあけたとき，世界のトップをいっていた日本の理論物理学も，実験屋さんの支援なしには孤立状態になってしまう。(物質の根源と宇宙を結ぶ 112～113)

つぎに，からだの部分について。口と目については，つぎのように対応する表現があり，それぞれ第1の「戸をあける」，第3の「へやをあける」にあたる。

○厚い唇をゆるく開けたまゝで，馬鹿な顔をしながら(或る女・前 17)

○白痴のやうに口を開けたまゝで薄笑ひを漏しながら(或る女・前 65)

○固く目をとじて，パッと瞼を開けてみると(放浪記 53)

○眼をあけると，瞼に弾力がなくて，(放浪記 292)

つぎの例は，「がま口をあける」「書物をあける」の類である。

○白銅のないと思う手からあけさして行って，(暗夜行路・前 34)

これが「こぶしをあける」だったら，「包みをあける」と近くなる。「あける」ことによって「こぶし」は消えるからである。

からだの部分に関係することだが，着物をどけるばあいがある。

○彼は，自分で洗濯した，シワだらけのワイシャツの胸を開けた。(自由学校 203)

これは「へやをあける」の類であろう。そして，もし「ワイシャツをあける」という表現があれば，それは「戸をあける」にあたる。つぎのは，あるいはそうかもしれない。

○開けた浴衣の胸から坐つた腿のあたりの肉づきは(つゆのあとさき 115)

ただし，この「開けた」は「浴衣」ではなくて「胸」にかかるのかもしれない。

さて，以上に区別してきた5つのグループ，すなわち，

第1類　戸をあける　　ふたをあける
第2類　窓をあける
第3類　へやをあける　　箱をあける
第4類　すきまをあける
第5類　中をあける

のちがいは，それぞれ別の意味として立てるべきものだろうか。多分そうではないと思う。というのは，このちがいが，「戸」「へや」など，前にくる目的語が何であるかによって生じるちがいにすぎないからである。したがって，目的語をとっていないときには，そのどちらともきめられない。

○「あけろ！　あけてくれっ！」と一つの声がいっている。

「よし。今あける……」といってやはり安吉は心配になった。(中略) 三和土へ降りて行って安吉は差しこみ錠をはずした。そして見はからって置いてがらりと開け

た。（むらぎも 278）

また，つぎにあげる「冬の宿」の例は，直前の文に「戸」があるから第1類に，「土」の例は，直前の文に「裏戸口」があるから第2類に入れる，というのは，機械的すぎるだろう。

○表の戸を激しく叩くものがあつた。私が開けてみると，（冬の宿 84）

○おつぎは直に自分の裏戸口に立つた。そつと開けて這入つて見ると，（土・上 146）

これらについては，どの類に属するかをいうことが不可能であり無意味である。もっとも，多義語のばあい，文脈がなければどちらの意味かわからない。「あける」についても，単に「早くあけろ」とあったとすれば，戸などを「ひらけ」ということなのか，牛乳などを「飲みほしてしまえ」ということなのか，わからない。これは「あける」のもっている多義性に関したことである。第1類～第5類のちがいも，文脈なしでわからない，ということだけならば，これと同じである。しかし，多義性のばあいには，一定の場面・文脈において，そのどれにあたるものかが，わからなければならない（言語活動が成立しない）のに対し，第1～第5類のちがいは，わからなくてもよい，わかろうとしても無意味である，という点が，多義性とは決定的にことなる。これは，第1～第5類が事実としてはまったく同じ事実をさしており，表現面での差にすぎないことの結果である。

これと同じように，意味としては1つであって，ただ結びつき方がちがう，という種類のものには，ほかにつぎのようなものがある。

〔材料と生産物〕

水をわかす～湯をわかす

〔素材と作品〕

できごとを書く～日記を書く

〔場所と生産物〕

地面がへこむ～穴がへこむ

〔場所と対象（全体と部分）〕

頭をかる～髪をかる

〔実体と属性〕

畑をひろげる～面積をひろげる

〔20〕 一定の空間をふさいでいたものを取りさること。

これも，なにを対象として表現するかによって，2つのグループにわかれる。第1類は，「酒をあける」のように，中にあるものを対象とし，第2類は，「コップをあける」のように，入れものを対象とする。「のむ」（p. 621～622）を参照。

第1類	第2類
○盃の底に残つてゐたのを，チヤブリと盃洗にあけて（多情仏心・前 70）	○水でも飲むやうに，がぶりと盃をあけて滝十郎へ献し，（多情仏心 前 219）

○杯洗にサイダーを明けて(自由学校 252)
○腰の雑嚢にその玉蜀黍を開けながら,(野火 19)
○一息にグラスを空けた。(帰郷 90)
○ぬかごの笊をあけたような大学生群の情なさ(むらぎも 342)

上の例にみるように,第1類のばあいは,「〜に」という移動の帰着点を示すことが多く,それだけに動作自体も移動のニュアンスをともなうことが多い。ときには,つぎのように,出発点(第2類では「〜を」という対象になる)が示されることもある。

○商人は財布から自分の手へ銭を明けた。(土・上 43)

第2類には,「〜に」や「〜から」をともなう実例が見あたらなかったが,常にないとはいえない。

このばあいにも,やはり,どちらともいえる例がみつかる。

○無言のまゝ,ちよつと頂いて,お澄が一息にあけて返した。(多情仏心・前 106)

は,「酒をあけて」とも「盃をあけて」とも解釈できる。

「家をあける」の類は,本質的に上の第2類と同じであるとおもわれる。家のなかみ(すなわち人)がなくなって,家というううつわが他の目的に使える状態になることだからである。

○二日,三日づつ家をあけることは何でもないことのやうになつた。(末枯 63)
○河岸の事務室を開けて貸室に致しましたのも窮余の策で,(河明り 270)

ただし,このばあいには,第1類にあたる「(住んでいる)人をあける」といういいかたがない。

家やへやのばあいには,まだその「中にあるもの(人)」をどける,といえるが,つぎのように場所をあらわす名詞については,もう「中にある」とはいえない。これらのばあい「酒をあける」にあたるいいかたがないのは,家についてと同様である。

○比較的通り易い所を空けて,御嬢さんを渡して遣りました。(こゝろ 231)
○中央は踊れるやうに床をあけてあるのだが,(帰郷 85)
○すぐ横の寝台の前のいままで開けてあった位置にはいった。(真空地帯・上 59)
○彼は黙って尻を動かして角の席をあけた。(真空地帯・上 32)

ただし,「席をあける」には生産的なニュアンスもある。つまり,「席」は最初からあって,ただふさがっていただけだと考えることもできる(それならば「家」と同じだ)が,また,最初はなかったもので,「あける」ことによって生じたものである,と考えることもできるわけである。後者の解釈は,たとえば,つぎのような例があることによってささえられる。

○自分の手提鞄をとりのけて,隣に席をこしらえてくれた。(人間の壁・上 55)

この「こしらえて」を「あけて」でおきかえることもできる。したがって,「席をあける」は席の生産をあらわすとも見られるのであり,その点で、あとにあげる「穴をあける」「すきまをあける」などにつながるものである。

つぎに,一定の空間からものを取りさることではあるが,特殊化したばあいをあげ

る。

〔21〕 穴をつくること。

○棒で二尺も孔をあけておいて，そこへ播かないと（銀河鉄道の夜 303）

○その板仕切に開けた四角の穴から甘味品をつき出したが，（真空地帯・上 42）

穴には，「銀河鉄道の夜」のように，単なるくぼみのときも，「真空地帯」のように，向うがわまで突きぬけているばあいもあるが，そのちがいは問題ではない。

つぎにあげるのも，突きぬけた穴の一種である。

○片側の壁にあけた小さい耳門の呼鈴を押した様子で，（帰郷 19）

「穴をあける」のも，一定の空間をふさいでいるものを取りさるという点では〔20〕と同じだが，「さかずきをあける」などが，酒とさかずきという，はじめから別々であるものの一方を取りさる動作なのに対し，このばあいには，地面や壁というもの自体の一部分を取りさるのである点がちがっている。そして，「酒をあける」（第1類）にあたる「土をあける」「壁土をあける」も，「さかずきをあける」（第2類）にあたる「地面をあける」「壁をあける」もなくて，生産された結果を対象とする「穴をあける」しかないのが特徴である。

ここに属する慣用句には，つぎのものがある。

○俺は，役所の金に穴をあけ，始末がつかなくなつて，（帰郷 136）

〔3〕 ものとものとの間隔を大きくすること。

「あける」の他動詞としての用法は，大きいところは上の2つだが，そのほかにつぎのような例がある。

○なるほど安吉が見ると，「共にする」という言葉と「書く」という言葉との二つが活字をあけて印刷してあった。（むらぎも 56）

○行進の列は五十メートルないし百メートルぐらいずつの群に分れ，群と群との間隔を三十メートルぐらい空けなくてはならない。（人間の壁・上 334）

〔1〕と〔2〕とが，動作としては，なにものかを「取りさる」という点で共通していたのに対し，〔3〕はそうではなく，〔1〕〔2〕両方をまとめたものに対立する。そして，この〔1〕〔2〕〔3〕に，つまり他動詞としての「あける」全体に共通する点を求めれば，それは，ある場所をなにもない状態にする，ということになるだろう。〔3〕の間隔を大きくすることも，なにもない場所をひろげる（つくりだす）ことなのだから。

〔4〕 以上は具体物についての例ばかりだったが，「あける」には，このほかに，〔2〕の「家をあける」や「席をあける」から抽象化した「日曜日をあけておこう」のようなばあいがあるはずである。が，これは実例がなかった。〔3〕にあたる時間的表現，すなわち「食事の間隔をあける」のようなものも，適当な例がない。つぎのは，一応それにあたるが，「三日にあげず」の誤用だろう。

○詩代(うたよ)が三日と空けず，柾之介(まさのすけ)の部屋を訪ねてくるのも（小説倶楽部 1956年2月 324）

A′ 可能動詞のばあい

「あける」が可能動詞としてもちいられた，つぎのような例がある。

○勘次が漸く眠に落ちた時お品は

「口が開けなく成つて仕やうねえよう」と情ない声でいつた。（土・上 46）

これは，意味的には，上にあげた他動詞としての用法の一部分に対応する。すなわち，口・目など，自分のからだの部分についていうばあいにしか，この可能動詞の用法はない。これは，この可能動詞が，

かく―かける

いく―いける

と同様に，「あく」という動詞から派生したものであるが，「あく」は原則として自動詞で，からだの部分についてだけ他動詞としての用法をもっているからである。

○彼は口をきくのは無論のこと，眼を明くことさへ大儀だつた。（波 399）

B 自動詞のばあい

自動詞としての「あける」は，ある期間がおわって，つぎの状態になることをいう。これは，「夜があける」の形のことが多い。

○途中で夜が明けて来た。（暗夜行路・前 90）

○一夜が明ける度に，わが家の敷居が，高くなってくるのである。（自由学校 163）

夜のほかには，つぎのような例がある。

○彼方(あちら)の御用も済み，忌服(きぶく)でも明けることになつたら，（破戒 92）

○その菊勇は年期があけて生れた町へ帰るといふが，（雪国 93）

○間もなく入梅があけて夏になり，（つゆのあとさき 39）

以上あげたものは，みな主体が「あける」ことによっておわる期間である。しかし，つねにそうであるわけではない。

○その道が白く明けて行くのを，私は丘の頂の叢から眺めた。（野火 118）

○日曜日は美しい霜で，おだやかに，晴れ晴れと明けた。（真知子・前 104）

「道」は「あける」場所である。「日曜日」は「あける」ことによってはじまる時期であって，夜とは反対である。つぎの慣用句では，「あける」ことによっておわる時期とはじまる時期とが，同時に主体として表現されている。

○これが私の日課で，ボチでなければ夜も日も明けなかつた。（平凡 36）

「夜があける」と「日があける」とは，表現としては逆だが，事実としては同じことをさしている。このような表現があるために，

○それに大晦日の夜のあの不安な思ひは，年が明けても今日まで妙なしこりとなつてさき子の心に残つてゐた。（闘牛 103）

の「年があける」は，旧年がおわることにも，新年がはじまることにも，どちらにもと

れる。このばあい，年がおわってつぎにつづくものは，やはり年だからである。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	明	開	空	計
(他動詞)					80
1）戸を～	29	-	25	-	54
20）コップを～	7	-	2	1	10
21）穴を～	11	3	1	-	15
3）間を～	-	-	-	-	-
4）日を～	-	-	-	1	1
(可能動詞)口が～	-	-	-	-	-
(自動詞)夜が～	-	-	-	-	-

8.「のびる」

〔CC〕「のびる」の基本的な意味は，長さ（広さ）が長く（広く）なることである。

いちばん典型的なものとしては，植物や動物（人間）またはその部分の長さが長くなるばあいの例がある。

(植物)

○街に出る道の両側には麦ののびた畑があり，（人間の壁・上 27）

○白い砂の上から光そのものの空の中に伸びた椰子（やし）。（冬の宿 95）

(植物の部分)

○緑の枝が墓石の上へ屋根のやうに伸びてゐるのであるが，（春琴抄 137）

○生垣の下葉が長く伸びて覗いてゐる。（桑の実 113）

○隣りのうちの地所に植ゑられた竹の根が伸びて（本日休診 57）

(動物〔人間〕)

○おれの背は，もう決して一分でも伸びないだろう。（むらぎも 301）

(動物〔人間〕の部分)

○長く延びた爪の先に，（波 242）

○服は裂け，靴は破れ，髪と髯が延びて，（野火 96）

これ以外のものごとについて，長さが長くなることを表わしている例には，つぎのようなものがある。

○その上に空は夕焼け，真紅の雲が放射線をなして天頂まで，延びて来た。（野火 57）

○一つの丘から野火が上つてゐた。海草のやうに揺れながら，どこまでもどこまでも，無限に高く延びてゐた。（野火 177～178）

これらの例とちがって，長くなるという変化ではなくて長い形そのものをいうのに，「のびた」「のびている」が使われることがある。

○岬というよりは，小さな丘が海にのびた出端が，（人間の壁・上 302）

○北には知多半島が迫り，東から北へ渥美半島が延びてゐる。（潮騒 5）

以上は，みな立体的なものの例であるが，単なる平面の例もある。これにも，

○目の前の地上にますます延びて行く赤松の影と重なる。（野火 175）

のように変化をあらわすばあいと，

○ほそ細く南北に伸びた市街地と，（人間の壁・上 27）

のように形を形容しているばあいとがある。

さて，これまであげてきた例については，立体のものでも平面のものでも，一応一方向への長さが長くなることである。長さが長くなれば，当然全体としての面積（あるいは体積）も大きくなるわけだが，上のような諸例では，長さだけを言っていると見て説明がつく。しかし，「のびる」の中には広さ（面積・体積）が大きくなることをいっていると思われるものもある。たとえば，つぎの例がそうだ。

○僕は暫らく彼が鼻孔の伸びつ縮みつ——此れは彼れが一方ならぬ満足を感ずる時によくする癖で——するのを唯熟と見て，（思出の記・上 85）

つぎにあげるものは，一定方向への長さ，1次元の量ともみられないことはないが，やはりそれぞれ面積・体積とする方が自然なように思われる。

○山の裾野が遮るものもなく左右に広々と延びて，河岸へ届かうとするところに，（雪国 83）

○倒れた身体が，伸びたごむの収縮するやうにちゞこまるのを（真知子・前 179）

以下，この基本的な意味に属するが，臨時に比ゆ的に使われているものの例をあげる。

○私は彼に，もし我等二人丈が男同志で永久に話を交換してゐるならば，二人はたゞ直線的に先へ伸びて行くに過ぎないだらうと云ひました。（こゝろ 211）

○厭はしさは，水のにじみ拡がるやうに，お澄の上へも伸びて行つた。（多情仏心・前 365）

○すると背後から駆けつけるやうな足音がして，「おい，君，待ちたまへ。」と彼の声が，非常に強い音調でのびてきた。（冬の宿 181）

〔01〕（からだの部分が）まっすぐになること。

さきに，人間のからだや，つめ・髪・ひげなどの部分が長くなるばあいの「のびる」の例をあげた。やはり，からだについての表現ではあるが，つぎにあげるものは，これらとちがう。

○自分の仕事に勢い込んでいる広介の，まっ直ぐに伸びた身体つき，（くれない 41）

○矢庭に，手が伸びて，五百助のパジャマの襟にかかった。（自由学校 8）

これらも，結果的に長さが長くなった点は同じであるが，成長して長くなったのではなくて，まがっていたために短かったものが，まっすぐになったことを表わしている。つぎの例は，どのようなことか，具体的にはよく分らないが，多分やはり姿勢がまっすぐになる，あるいは，そり身になることだろう。

○とてつもない声と一緒に，ピヨコンと胸が延び，（多情仏心・前 102）

以上は，まっすぐになることに重点はあっても，手などが長くなる例だが，つぎの例ではひざが長くなるとはいえない。

○日本人にしては，わりに膝の延びた足どりで，（多情仏心・前 159）

それだけ，この例は基本的な用法から遠ざかっている。量的変化から質的変化への移行である。

「手がのびる」は，このグループの中で特殊な位置をしめている。すなわち，「手がのびる」の中には，単にそのような現象だけを示すのではなくて，これによって他のものにさわるという目的が実現されることをも暗示しているものがある。これは，「あげる」の項の分析で，意味のずれの第2段階（象徴的用法）としたものである。上の「自由学校」の例では，まだそのようなずれは見られないが，

○動もすれば怒罵が飛び手が伸びた（春琴抄 161）

○所在なさに，茶碗へ手がのびていった。（小説倶楽部 1956年6月 353）

では，それぞれ，なぐること，茶わんにさわる（茶わんを手にとる）ことを示している。このばあい，「茶碗へ」のように目標物を示すことばが用いられるのが多いことが，形式上の特徴である。

ここからさらに，関係するようになる，という意味で比ゆ的にもちいられるばあいが出てくる。

○その食堂の経営に御用商人の手が絶えず伸びてこようとして（むらぎも 99）

〔02〕 長くなったまま，弾力を失うこと。

実例としては，ソバがのびることの例だけがあった。

○二人はお互に伏目勝ちになりながら，延びた蕎麦を黙つて口へ運んだ。（波 379）

このほかに，「ゴムひもがのびる」などの例も考えられる。

〔03〕 一定方向に位置がかわること。（p. 397～401 参照）

〔01〕 で「手がのびる」を，形の変化をともなう長さの変化だとしたとき，手は，腕のつけ根から指にいたる全体として考えたものである。しかし，この同じ動作を表現するにあたって，手先に注意を集中して，手先だけを「手」とよんだとすれば，その「手」は，長さや形がかわったのではなくて，からだからの位置が遠くなったのである。〔01〕に入れたものでも，「～に手がのびる」のような表現のばあいは，そう解釈する余地も残されているだろう。そして，つぎにあげるような例については，まさにそういう位置の変化としか見られない。

○たちまち多くの黒い指がのび，品物は丹念にしらべられ，品評され，（潮騒 126）

○ひらいた掌がいつせいにのびた。老商人は大仰にそれを払ひのけた。（潮騒 128）

これらは，指やてのひらがその長さをかえたのではなくて，品物のところに，商人のもとに近くなったことを表わしているのである。つぎの例も，これと同様に考えることができる。

○刀のつかの端のほうを手から落ちるか落ちないかぐらいに持って，相手をさぐる。きっ先が相手の刀にさわれば，相手は必ず切ってくる。切ってきても，刀が伸びて

いるから，間合が遠いので何にもならない。（中央公論 1956年2月 258）

つぎの例では，「のびた」主体が点だから，位置の変化であることが一層はっきりしている。

○弾着はだんだん延びて，私の周囲も喧しい炸烈音で埋つた。（野火 118）

しかし，また，長さが長くなったのか，位置がかわったのか，はっきりしないばあいもある。

○それから鰻のやうにロープの先きがのびたかと思ふと——（盤工船 38）

この例で，「ロープの先き」ということばを，ロープの先の方の部分（すなわち線）と考えれば，長くなったことだし，先端（すなわち点）と考えれば，位置の変化である。そして，どちらと考えても，事実としては同じである。そして，このような点から考えると，位置の変化は，長さの変化と別の意味にせずに，「へやをあける」と「戸をあける」との差のような，結びつきのちがいとすべきかもしれない。なお，〔1〕参照。

〔04〕 碁で，まっすぐに一つ前進すること。

○そこで白三にキレば，黒四とノビ，白五の下りなら黒六とオサエます。（囲碁 1956年5月 57）

これは，自分の陣地を長くすることであるが，つぎのような点に特殊性がある。

1）方向の上で，たて・よこの線にそったものだけであり，ななめの方向のは「ノビ（ル）」といわない。

2）すでにある石と連続していなければいけない。一つトンでいるばあいは「ノビ（ル」）といわない。

〔1〕 時間が長くなること。（時期が先になること）

これには，時間を主体にして，その長さが長くなることをいうばあいと時点（時期）を主体にして，その時点がもっと先になることをいうばあいとがある。

○製品の寿命が二倍に延びるようになった。（ダイヤモンド 1956年10月23日 135）

は前者であり，

○これ以上，手紙をだすのがのびるということは（真空地帯・上 135）

は後者である。そして，

○退学取消しというだけで一年伸びるのは実は負担になるのです。（むらぎも 129）

では，在学期間がのびるとも，卒業の時期がのびるとも，どちらにも考えられる。

このちがいは，もとの空間的な意味での，〔00〕〔01〕「手がのびる」と〔03〕「てのひらがのびる」とのちがいに対応するものである。したがって，〔03〕を〔00〕〔01〕から別に立てるなら，時間のばあいも，この両者を別々にした方が一貫する。しかし，この問題については，さらに多くの類例をまとめて考察する必要があるので，ここでは不統一のまま残しておく。

〔2〕 量の増加・質の向上など。

これは，原則として，抽象物についてで，抽象名詞を主語にすることが多い。

（量の増加のばあい）

これには，まず，経済記事の中でよく使われる，つぎのような表現がある。

○自由に放任すれば輸出は伸びるはずだが（エコノミスト 1956年10月6日 23）

○利益は，思ったより伸びていない。（ダイヤモンド 1956年4月7日 81）

類例には，ほかに「貿易」「販売」「需要」「出炭」「仕事」「事業」などがある。

つぎの例は，量の増加が同時に質の向上でもあるような例である。

○資本主義経済が伸びて行く限り，（東洋経済新報 1956年3月31日 25）

○専門メーカーとして着実に伸びてきた当社が（実業之日本 1956年11月1日 103）

つぎに「勢力」の類がある。

○その上自分の勢力が次第にのびて行くにつれて（真空地帯・上 173）

○このように平和運動がのびてゆかないからといって，（中央公論 1954年2月 85）

○もちまえの遊び癖が，五月のタケノコのように，伸びてきた。（自由学校 246）

（質の向上のばあい）

○ただ，互の愛をまつすぐ育てられる位置において二人が，より豊富に，広く，雄々しく伸びたいからだけなのであつた。（伸子・上 88）

○藤田去ったあとの投手陣がのびるものびないも（野球界 1956年2月 122）

質の向上といっても，「野球界」の例のような，人間の能力の向上のばあいが多い。

（考えやことばの展開）

○軍人の妻君だからあゝなのだらう，其妻君の娘だから斯うだらうと云つた順序で，私の推測は段々延びて行きました。（こゝろ 175）

○代数の証明のようにして伸びて行く文章。（むらぎも 310）

〔3〕 ぐったりすること。

これには，単に疲れきって動けなくなったようなばあいもあり，また，意識を失ったり死んでしまったりするばあいもある。

○その間，うめ女は溝に這って、のびていた。（厭がらせの年齢 275）

○麻薬患者ボールは，のどをかき切って寝巻姿のまま床の血の海の中にのびていた。（サンデー毎日 1956年3月11ㄱ 53）

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	伸	延	計		かな	伸	延	計
00）枝が～	4	10	1	15	04）黒が～	5	－	－	5
01）手が～	1	－	－	1	1 ）寿命が～	1	－	2	3
02）ソバが～	－	－	－	－	2 ）輸出が～	11	19	－	30
03）弾着が～	－	1	1	2	3 ）ぐったり～	2	－	－	2

9.「の　む」

〔00〕 のどから食道の方に送りこむこと。

このばあい，対象は気体・液体・固体のどれでもよい。しかし，実際には，大部分が液体，それも酒である。目的語なしにただ「のむ」といえば，酒をのむことを表わすのがふつうだ。

○寒さ凌ぎに今までちびちび飲んでゐた小野田が，（あらくれ 151）

○まア，大変御ゆつくりねえ。どこで飲んでいらしつたの。（つゆのあとさき 24）

ただし，文脈・場面によっては，酒以外のものをのむときでも，目的語なしに使われる。酒の方が場面の制約をうけないことは事実だが，酒か酒以外かというちがいは相対的なものであって，特に酒をのむときの意味だけを別に立てる必要はないであろう。つぎにあげる例は，前がお茶，あとがヤギの乳のばあいである。

○「――お茶が欲しいんだが」

「ぢやあ一寸待つて，すぐ行くわ」

「ここで飲みたいんだがな」（伸子・上 170）

○飲めるだけ飲んだ余りを溜めといて牛酪なぞにするのだと（桑の実 39）

対象が固体である例としては，あまり適当ではないが，つぎのようなものがある。

○夜半を過ぎて，橋の下に帰ってきた彼のポケットは，蛙を呑んだ蛇のように，紙幣束で，膨らんでいた。（自由学校 245～246）

○腹の内は熱鉄を飲むだ様に，耳は鳴り眼は眩いて，（思出の記・上 26）

なお，つぎの例は，「衣類」を対象としているが，これを売り払ってその代金を酒につかってしまったということを表わす比ゆ的慣用的な表現である。

○実際，彼奴が持つて来た衣類は，皆な我輩が飲んで了つたのだから――（破戒 68）

対象が気体のばあいは，あとであげる「息をのむ」という慣用句以外に，例が見あたらなかった。

これら，対象が気体・液体・固体のどれであるかというちがいだけでは，その意味をそれぞれ別のものだとするわけにはいかない。つぎの薬や毒のような例では，それが液体か固体かは，まったくどうでもよいことである。

○頭が痛いと云えば薬を飲めばなおってしまうと思っている人達（放浪記 302）

○それで誠に止むことを得ず，眼を閉つて毒を飲む気で辛抱した。（平凡 48）

さて，酒などの液体をのむことの表現で，なにを目的語とするかには，3とおりのばあいがある。

第1は，液体を目的語とするもので，もちろんこれがいちばん多い。

○嘉門はさういつてコップで酒を飲んで，また話しつづけて行つた。（冬の宿 66）

第2は，上の例で手段として表現されているコップのようなうつわを目的語とするばあいである。

○この杯はな，まずせっしゃが飲んで，そのお流れの古物をそちが飲んだというシャレよ。（娯楽よみうり 1956年9月14日 25）

○そのほかの人々はみな失恋の苦いさかずきをのむのじゃ。（出家とその弟子 185）

これは，「酒をみたす」と「さかずきをみたす」，「酒をあける」と「さかずきをあける」とのちがいに対応するものである。なお，「すう」の分析例（p. 60），「ひっくりかえす」（p. 392～393），「あける」（p. 612～613）を参照。また，これに対応する，主体～場所の転換については，p. 42～43，p, 703～704を参照。

第3は，つぎのように，「～酒」の形の目的語をとっているものである。

○後妻もまた大酒を飲んだ末一年ばかりで老人を見棄て（厚物咲 10）

○主人は其れから寝酒でも飲む気はいであつたが，（思出の記・上 186）

○持つて来た幾許かの金で，茶屋酒を飲んだり，（あらくれ 161）

ほかに「朝酒」「無理酒」など。

これらは，たとえば，

○突きつけられたコツプの冷酒を島村は無造作に飲んだ。（雪国 145）

というのと形は同じだが，実質はちがう。「冷酒」は，冷えた酒そのものである。だから，「冷酒をこぼす」「冷酒をあたためる」のように，単独の「酒」という単語と同様の用法をもっている。ところが，「大酒」「寝酒」などは，液体としての酒の1種ではない。これらは，動作の対象としては「～をのむ」という形でつかわれるだけで，「大酒をつぐ」「寝酒をこぼす」などとはいわない。したがって，これらは，「大量の酒」「寝るときにのむ酒」というよりも，「大量の酒をのむこと」「寝るときに酒をのむこと」という，動作の意味に近い。「朝酒」が「朝寝朝酒」と，あきらかに動作である「朝寝」と対になって使われることも，その1つの傍証になるだろう。ただし，「大酒をする」「寝酒をする」などとは，あまりいわないだろうから，完全に動作の意味になりきっているともいえない。「～をする」という形のかぎられた結びつきしかもっていないので，物とも動作ともきめかねる，中間的な存在である。

以上の3種は，目的語との結びつき方にはちがいがあるが，事実としては同じことを表わしており，単なる結びつきのちがいで意味のちがいではない。

つぎに，ここに属する慣用的表現を4つあげる。

(1)　「かたずをのむ」

これも，より具体的，基本的なものから，比ゆ的な色がこいものまで，いくつもの段階がある。「かたず」ということばは，現代語では「かたずをのむ」という形でしか出てこない。その点からすれば，「かたずをのむ」という表現は，つねに慣用句だといえる。そして，この表現は，主として緊張した状態をあらわすのに用いられるものである。しかし，まれにではあるがつぎのように，実際につばをのむ動作をあらわしている例もある。

○咽喉が乾いて引付きさうで，思はずグビリと堅唾を呑むだ……（平凡 90）

このばあいにも，もちろん，緊張していることの描写として，「かたずをのんだ」ことをいったものだが，直接いっていることは，あくまで具体的な動作である。その点，つぎの「つばをのむ」も同じである。

○源八が，ゴクリと咽喉を鳴らして，唾をのんだ。（傑作倶楽部 1956年10月 352）

これらの「かたずをのむ」や「つばをのむ」が，緊張した精神状態をあらわすのは，「ゲラゲラわらう」や「ぶるぶるふるえる」が，それぞれ愉快な，または恐れている気持ちを描写しているのとかわりない。

ところが，

○私はかたずを呑んで，商品のような求人広告のビラを見上げた。（放浪記 42）

○周囲の客が，画面が変る度に，カタズを飲む気配を起すには，（自由学校 140）

では，はたして実際につばをのんだのか，それとも単に緊張した身がまえをとった程度なのか，はっきりしないし，

○そこで，ある日扉だけ同じように細目に開けておいて，雪はのせないで，固唾をのんで待っていた。（文芸春秋 1953年 9 月 27）

になると，実際にのんだかどうかは問題でなく，単に「緊張して」というのにきわめて近い。

(2) 「息をのむ」

このばあいには，「かたずをのむ」とちがって，特定の精神状態の描写のために限定されない。たとえば，つぎのような例もある。

○いかにも感に打たれたらしく深く息を呑んで，（つゆのあとさき 11）

○明子は一層淋しい顔をし，辛い息をのんだ。（くれない 138）

これらは，「息をすった」といいかえてもいいような動作であろう。しかし，「息をのむ」の多くは，

○あつと人垣が息を呑んで，女の体が落ちるのを見た。（雪国 171）

○海女たちは息を呑んだ。あはよくば八百円のハンドバッグが只でもらへるのである。（潮騒 128）

のように，おどろき，あるいは急な緊張のために，不意に呼吸をとめることをいうばあいである。これが「息をのむ」で表現されるのは，おそらく，息をすったあとで急にとめるためだろうが，単に息をすったあとで不意にとめただけでは「のむ」とはいわず，かならず急な緊張という精神状態の変化をともなうようである。そして，前にあげた「つゆのあとさき」「くれない」の例は，息をとめない点でも，急な緊張をともなわない点でも，普通の「息をのむ」とはちがった用法である。

(3) 「声をのむ」

これは，完全に比ゆ的な表現しかない。声という無形のものを有形のものとして表わしているのである。

「声をのむ」とは，一応声をとめる，声を出さなくなることである。しかし，多くのばあい，それは「だまる」とちがって，出そうになった声をおさえる，というニュアン

スがあるように思われる。「声をのんで泣く」つぎの例などは，その典型である。

○階下では皆な寝たらしい。不図，何か斯う忍び音に泣くやうな若い人の声が細々と耳に入る。どうも何処から聞えるのか，其は能く解らなかつたが，まあ楼梯の下あたり，暗い廊下の辺ででもあるか，誰かしら声を呑む様子。（破戒 256）

つぎの例も，出そうになった声をおさえて，ことばを切ったものだろう。

○「伴子，叱られたんです。」

伴子は，声を呑んだ。興奮は膝に置いた手に見えてゐた。（帰郷 309）

ただし，つぎのような例では，単に声を立てなくなったことをいっている。

○蛙がぴつたりと声を呑む時には日中の暖かさに人もぐつたりと成つて（土・上 76）

「声をのむ」と似た表現に，「ことばをのむ」がある。これも，単にだまる，ことばを言い終わるということではなくて，出かかったことばをおさえることである。

○「いつも，いつも，ご無沙汰ばかり……お変りなく……何より……一度，お礼に何わなければと……いいえ，あなた，隆文が，ショッチュウ……まことに……」すべて，言葉を半分のんでしまう挨拶だが，（自由学校 109）

(4)　「涙をのむ」

これの典型的な用例は，

○ついに張は涙をのんで奉天に帰ることになったので（中央公論 1954年4月 192）

○血涙をのんで台湾へ移駐（丸 1956年5月 68）

のように，「のんで」の形で副詞的に使われ，残念な気もちをあらわすものである。これらの例や，

○卯平は心に涙を呑んだ。（土・上 81）

などでは，気もちの比ゆ的な表現であって，実際に涙をのんだり流したりしたわけではない。しかし，つぎの例では，本当に涙を流している。

○二の丸のかげを覗いた時，堀江真琴の娘のかえに手をついて涙をながしているものがいた。（中略）服部は涙をのんで，かえをかきくどいていた。（落城 46）

しかし，これが本当に涙を口に入れ，のどに通して，「のんで」いることをいったものかどうかはわからない。

「無念の涙をのむ」をはしょった，つぎのような言い方もある。

○臣下たちに押しとめられて無念を呑んで落ちのびた。（中央公論 1953年10月 212）

〔00′〕　タバコをすうこと。

これは，〔00〕と完全におなじところにいれるべきか，〔01〕としてこれと区別すべきか，まようので，一応〔00′〕とした。酒とタバコを対照させていうときには，

○煙草や酒や砂糖などを吸い，飲み，なめているごとに，（婦人公論 1956年10月 390）

のように，「すう」「のむ」と言いわけることもあるが，また，

○酒も煙草も飲まないし，仕事に忠実で学校の評判はよいし，（真知子・前 96）

のように，ひっくるめて「のむ」ということもある。このことは，「タバコをのむ」と

いう用法における「のむ」の意味が「酒をのむ」というばあいと同じであると考える1つの根拠になるだろう。もしこれらが別の意味に属するとすれば，「酒もタバコものまない」というときには，「のまない」に2つの意味をかけていることになるからだ。

しかし，一方からいうと，「タバコをのむ」という表現は，「タバコの煙をのむ」とちがう。「タバコの煙をのむ」という表現なら，「酒をのむ」とまったく区別する必要はないだろうが，「タバコの煙」をさして「タバコ」ということは，ほかのばあいにはない。その意味で，「タバコをのむ」は，特殊だといえるかもしれない。

〔01〕 広いものの中にふくみ，かくすこと。

これは，〔00〕の「のむ」が比ゆ的に使われたものである。しかし，それが比ゆであること，すなわち，「のむ」主体としての<広いもの>が，ぎ人化されているという感じは，大いにうすれているように思われるので，区別することにした。これは，「〜にのまれる」の形で使われることが多い。

○雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれてゐた。（雪国 5）

○二人が砂にのまれて行くのを黙って見ているところ（オール読物 1956年7月 278）

○砕け飛ぶ岩石が，一度天に舞い上って，雨のように，降り落ちる。
克巳の姿はその下にのまれた。（明星 1956年11月 315）

○鱶とグラマンと饑餓とに戦い疲れた部下を飲んだ海（文芸春秋 1956年2月 284）

これらの例で，あまり比ゆ的な感じがしない，つまり「のむ」主体のぎ人化がうすいのは，それが闇・砂・岩石のかけら・海と，限界や形のはっきりしないものだからであろう。つぎの雲の例では，形があるだけ，ぎ人化の度がたかいように思われる。

○ふつと見ると，黒雲が最早(もう)高鞍山を七分通り呑むで居る。（思出の記・上 6）

○断れ雲はもう少しで月を，白銀の頭蓋骨を呑まうとして居る。（田園の憂鬱 106）

つぎの例は，上のものよりも抽象化したばあいである。

○定員に三倍の学生をのんだ結果は，教室から廊下にまで学生が溢れて（改造 1953年9月 171）

〔1〕 精神的に圧倒すること。

この実例は，つぎの2つしかなかった。どちらも受身の形だが，「相手をのむ」のような能動の形もありうるはずである。

○杉子はすつかり勢ひにのまれてしまつた。（友情 78）

○みなはただ唖然とし，浜田伍長もまた気をのまれて，「処置ねえ」といひながら針と糸とをとり上げた。（群像 1956年5月 93）

〔2〕 承知すること。

これも、つぎの1例しかなかった。

○連合軍の出す条件をのみ，陳謝の意を表した。（サンデー毎日 1956年10月7日 24）

ほかには，「要求」「言い分」など，同類のことばと結びつくだけであろう。あまり積極的にではない，という気もちの上での限定があるばあいにいうように思われる。

以上のほか，「ふところに短刀をのむ」のように，「かくしてもつ」ことを表わすばあいがあるはずだが，実例はなかった。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	飲	呑	計
00) 酒を ～	36	67	7	110
00′) タバコを ～	1	1	-	2
01) 海に ～ れる	2	1	-	3
1) 相手を ～	1	-	-	1
2) 条件を ～	1	-	-	1

10.「く　う」

〔00〕 食べものをとること。

この規定は，抽象的であいまいな点があるので，もうすこし具体的に考えてみたい。

(1) この「食べもの」には，ふつう飲みものをふくまない。「お茶をくう」「スープをくう」などとはいわない。

○冷えた味噌汁を食つてゐると，輝雄が学校から帰つてきて，（冬の宿 129）

という例があるが，これは味噌汁の中に実がはいっているためであろうか。

(2) 辞典では，「くう」の規定を，「食物をかんで，のみこむ」のようにしているものが多い。COD でも eat を Masticate & swallow (solid food); swallow (soup) と規定している。（ついでにいうと，現代の辞典で，「くう」に「たべる」，「たべる」に「くう」という，どうどうめぐりの規定を与えるだけで，すましているのが多いのには驚かされる。すでに，言海が「噛ミテ呑ム」と規定しているのにくらべて，あきらかな退歩である。また「かんで口に入れる」のような規定をしているものもあるが，これも，このままでは妙なイメージになる。）この「かむ」という動作は，大部分の「くう」動作にともなうはずである。

○見るともなく見て，葛飾の食事が粥のようなものなのに安吉は驚いた。葛飾は，食うというよりも啜って呑みこんだ。（むらぎも 307）

という例で，「くう」が否定されているのは，対象が液体にちかい流動物であるとともに，ろくにかまずに呑みこんでいることにも原因があるだろう。

しかし，この「かむ」という動作が，「くう」ことにともなう絶対的な必要条件であるかどうかは疑問で，たとえば，ご飯をかまずにのみこんでも，やはり「くう」というはずである。ただし，このことを示す適当な実例はなかった。

(3) 食われる対象は，正常な状態では無論食べものにかぎられる。しかし，食べものと同様のし方でかまれ，のみこまれれば，食べものでなくても「くう」という動作の対象

となる。

○「わたくし，マッチの軸，食べ，食べます」と言つて，マッチの軸を食つて見せたさうである。「わたくし，ガラス，食べ，食べます」と言つて，ガラスのコツプも噛み割つて食つたさうである。（中央公論 1953年7月 293）

「のむ」については，そのとる目的語の種類に応じて，「酒をのむ」「さかずきをのむ」「大酒をのむ」という，3つのばあいがあった。「くう」については，この第2の「さかずきをのむ」にあたる形は見あたらなかった。しかし，「カレーの皿をくう」などの言い方も，ありえない形ではないように思う。「大酒をのむ」にあたるものとしては，つぎのようなものがある。

○彼が大飯を食っても，文句をいわなくなった。（週刊朝日 1956年3月4日 57）

○いや，朝飯は食わなくていい。（むらぎも 125）

○何を菜にして小昼を食うか？（むらぎも 29）

○其日の晩餐は余所で喰はずに，先生の食卓で済ますと（こゝろ 87）

ただし，ここで，「大飯」は「大飯をもる」「大飯をたく」などがないから，かなり動作としてのニュアンスがこいが，「朝飯」や「晩餐」になると，食事というべきか，あるいは食物というべきかは問題だ。「朝飯をすます」とか，

○昨日，おそい朝飯を食べてから，（自由学校 161）

では，かなり動作性がこい（「おそい食事」はいいが，「おそい食物」はおかしい）が，つぎのような例では，ものとしての側面がつよく出ている。

○いつもの通りお町さんのうちへ朝飯をたいてやりに行くと，（本日休診 121）

○もう少しして，だんだん朝飯ができるようになって，（むらぎも 210）

したがって，「朝飯をくう」などの例についても，単純にこれを「大飯をくう」の同類とみてよいかどうかには疑問がのこる。

「くう」の基本的な意味で慣用句になっているものは，たくさんある。

○友達は皆道草を喰つてゐる中を，私一人は駈脱けるやうにして（平凡 35）

○ねえ，犬も喰はないんだつてさ。他人の夫婦喧嘩，（本日休診 104）

○かうして女を宿屋へ連れ込みさへすれば，あとは焼いて食はうと煮て食はうと，こつちの意のままだ。（小説新潮 1956年4月 36）

○なにも兄さんをとって食おうというじゃなし，（読切小説集 1956年8月 238）

○そうさな，毒くわば，皿までか。（小説倶楽部 1956年7月 451）

○邪魔になる奴は悪魔に喰われろ——（週刊サンケイ 1956年1月1日 48）

○武士は食わねど（傑作倶楽部 1956年11月 202）

○心の中では随分あわてながら，何喰はぬ顔で勢好く，（つゆのあとさき 34）

なお，「めしを食う」という形で慣用句になっているものも，ここへはいるが，これらは便宜上つぎの〔01〕で取りあげる。

つぎの慣用句も，多分ここに属するものとおもわれるが，「アワをくう」ということ

の文字どおりの具体的なイメージが持ちにくいので，そう言いきってよいかどうか，疑問がのこる。

○何故，彼様(あんな)に泡を食つて，斯(こ)の蓮華寺へ引越して来たらう。（破戒 49）

「くわせる」の形で，料理がうまい，うまいものをくわせる，という意味にもちいられることがある。このばあい，性質をあらわすので，「 ～ を」という目的語はとらない。これは「くわせる」全体としての意味はずれているが，それは，むしろ使役の形の問題で「くう」と「せる」とに分解して考えれば，「くう」の部分の意味は，この〔00〕に属するとおもわれる。

○馬道の真砂つていふうちは一寸喰はせるねつていつたら、（末枯 36）

〔01〕 生活をすること。くらしを立てること。

○キャバレーでギターを弾いて喰つてゐるだけの人間で，（帰郷 108）

○米もない，電燈もない，娘を売らなくつては食つて行けないと（波 63）

○彼の家はやつと食ふに困らない程度だつた。（友情 85）

○父は此外にもまだ色々の小言を云つた。その中には，「昔の親は子に食はせて貰つたのに，今の親は子に食はれる丈だ」などゝいふ言葉があつた。（こゝろ 120）

この類の形式上の特徴としては「 ～ を」という対象をあらわすことばがかけていることがあげられる。つまり，この用法のばあい，「くう」は自動詞だといってもよい。つぎのように，使役の表現で相手を「 ～ を」という形式であらわしていることも，その傍証になる。

○その上恋人を食わせる必要もあったし，（私の人生観 25）

一般に，使役の相手は，自動詞で「 ～ を」，他動詞では「 ～ に」の形で表現されることが多いのである。（国研報告25『現代雑誌九十種の用語用字』第3分冊 p.130～132を参照。）

具体的な動作として「くう」は他動詞だから，その意味での「くわせる」の相手は「 ～ に」で表現される。

○食事をつくって青年たちに食わせるのを楽しんでいる様子には，（むらぎも 29）

これとおなじ用法は，「たべる」にもある。

○いま時は，誰だってあそんで，何もしないで食べていることは出来ないんだ。働かざるもの食うべからずじゃないか。（厭がらせの年齢 266）

この用法は，生活することのなかで特に大切な「くう」という行為をもってきて，それで生活全体を代表させたものである。人は顔をあらわなくても，くつをはかなくても生きていけるが，食うことなしには生きていけない。このように，もっとも重要な部分の行動で，これをふくむ，より全体的な行動を代表させる，いわば提ゆ的な使い方は，「くう」にかぎらず，以下のようないくつかの動詞にみられる。

（歩く）

○峠の幾箇もある寂しい山道を，お島は独りでてくてく歩いて行つた。（あらくれ 115）

これは，「あるく」の基本的な意味でもちいられた例で，車や馬に乗ることもせず，走りもせずに歩いていくことをあらわす。ところが，つぎのような例では，それがもっと一般的な移動をあらわしている。

○御承知の通り，猪子君も彼様いふ弱い身体だから，始め一諸に信州を歩くと言出した時に，何の位我輩が止めたか知れない。（破戒 296）

○女には内々で朝から金策に歩いたが，出来なかつた。（平凡 135）

○小野田は時々外廻りに歩いて，あとは大抵店で戯をやつてゐたが，（あらくれ 235）

つまり，これらのばあい，文字どおり基本的な意味で歩いたのかもしれないが，車や馬に乗って動いたのだとしてもよい。その移動の全過程の一部に，自分の足で文字どおり「歩く」ことがふくまれているにはちがいないが，それが全部ではないばあいでも「歩く」といえる。ここでも，「歩く」ことを全移動過程の典型的な部分として取りだし、それで全体を代表させているのだ。

なお，このばあい，「歩く」は単なる移動ではなくて，方々をつぎつぎに移動してまわる，というニュアンスをもつ。つぎにあげる，「 ～ てあるく」という形で補助動詞的にもちいられた例でも，このことはよく現れている。

○地方を巡回して歩く休職の大尉とやらが（破戒 222）

○二人づれで毎日就職運動をしてあるいた。（冬の宿 138）

（たがやす）

○おつぎは勘次に引かれて麦の畦間を耕した。（土・上 122）

は，基本的な，「田畑の土をほり返して，やわらかくする」という意味である。しかし，つぎのような例では，もっと広く，田畑をたがやしてそこに作物をうえ，取り入れること，そこで農業をいとなむことをあらわしている。

○現に叔父が耕して居るのは其畠である。（破戒 106）

○田畑を耕すことよりも瓦を掘ることを仕事にしたんですよ。（冬の宿 48）

○一人の百姓が一段の田地を耕したとて，秋の収穫期にどれ程の米が取れるかお分かりになつて。（真知子・前 37）

これも，一連の農作業のなかで，「たがやす」ことが全体を代表するにたる，もっとも重要な部分だからである。

（ぬう）

○糸をしごきながら，見た事もないようなきれいな布を縫っていた。（放浪記 121）

○副食物をやったり，綻びを縫ってやったりしたことが，（自由学校 276）

などの例は，「針に通した糸でつぎ合わせる」ことをあらわす。しかし，

○通運が届ゐて，母が縫つた飛白の単衣にまた涙を落した。（思出の記・上 213）

○こんな地の好い着物は今迄縫つた事がないわ。（こゝろ 56）

などでは，単にせまい意味での「ぬう」動作だけでなく，きれを切ってこれをぬい合わ

せ着物にしたてあげるまでの全過程が「ぬう」という単語であらわされている。

「くう」が生活することをあらわすのも，これらの「歩く」「たがやす」「ぬう」などと同じ用法である。しかし，その意味が文字どおり食物を「くう」ことだけに限定されているか，それとも生活すること一般にひろげられているかは，まぎらわしいばあいがある。

○食うだけ，働けばいい生活で，それも，毎日銀シャリという栄華を，望みさえしなければ，朝の街を一回りするだけで，一日の計は立ってしまうのである。（自由学校 195）

という例において，この「食う」がどちらかは，まぎらわしい。ふつう「食うだけ，働けばいい生活」というとき，その「食う」は，単に食事をするだけではなくて，衣食住すべての日常生活をいとなむことであり，ただ特にぜいたくをしたり，貯金を残したりはしない，という程度の生活を意味する。しかし，このばあいには，ルンペンの生活で，衣料費も住居費もかからない。そして，「銀シャリ」うんぬんの表現からみて，ここでは，文字どおり食費をかせぎだすだけはたらく，という意味ではないかとおもわれる。

○生きてるとすれば食わねばならぬ。人と争わずに食うとすれば乞食をするほかはない。（出家とその弟子 24）

という文章では，前の方の「食わねば」は食事する意味であろう。そして，「人と争わず食うとすれば」は，ふつうだったら，生活していくこと全体をあらわすはずだが，この直前の「食わねば」があるために，ちょっと判断に迷う。

「めしをくう」という表現も，全体としてこの「くう」と同様に「生活をする」という意味にもちいられる。このばあい，「くう」だけをとりだせば，それは〔00〕の，文字どおりの「めしをくう」という表現における用法とおなじである。

○両刀薬てゝ飯が食へぬとは意気地のない話だと（思出の記・上 57）

○人の脚を掬つて飯を食ふことだけ考へてゐるのだ。（帰郷 336）

以上は，一般的に「生活する」「生活をたてる」というばあいだが，このほか，「くう」に，あるいは「めし」にかかる修飾語をともなうことによって，特定の暮らし方を示すことがある。

○スパイというのは厭らしい。一緒に飯をくっている仲間を売るのである。（小説春秋 1956年6月 94，一緒に生活する，または同じ目的のためにはたらくこと。）

○ヤセてもカレてもお父さんは三十年外交の飯を食ったんだよ。（講談倶楽部 1956年8月 154，外交を職業とすること。）

○彦左衛門の飯をくって来た不敵なその方だ。（小説と読物 1956年11月 68，彦左衛門の世話になること）

○わしは牢屋の飯を食って来た男。（世界 1953年8月 189，牢屋につながれていること。）

つぎの例でも，やはり「くう」だけとれば基本的な〔00〕の用法だが，「食うものも残

らんじゃった」全体では，「生活ができなかった」ことをあらわしている。

○小作料を納めると，あとは食うものも残らんじゃったたい。(家の光 1956年5月 176)

〔02〕 虫が血をすうこと。

はじめにのべたように，「くう」はたべものを対象とする。のみもの，つまり液体は「くう」対象にはならない。ところが，ノミ・シラミ・カなどが「くう」というとき，具体的な事実としては，血をすっているのである。

○虱にくわれたあとに湯のしみる気持ちよさは (むらぎも 283)

○自分の病気なぞは杉子にとつては蚤が喰つた程にも思はれないのだ。(友情 86)

しかし，事実としては血をすうことであっても，「血をくう」という表現はないのだから，意味的には「すう」とちがっている。つまり，このばあい，「すう」こと——液体を移動させることよりも，すうためにロをさしこむことをあらわしているのだ。

おなじ「虫がくう」でも，つぎのようなのは，「人がめしをくう」のとおなじで，〔00〕に属する。

○虫の喰つた跡によつて毒草でないと知られる限り，採つて喰べた。(野火 125)

○このお婆さんにいくつですと聞くと，七十六だと云っていた。虫の食ったおヒナ様のようにしおらしい。(放浪記 135)

これらは，まさに人間がめしをくうように葉っぱなどをくっている例である。しかし，これらにも，まえの「ノミがくう」などと共通の側面がある。それは，あまり小さいために，口を動かしてくっているようすが見られず，滋養分の補給という抽象的な観点からしか問題にできないこと，常識的な範囲での人間のたべものからはズレていることである。これらの点で，「野火」や「放浪記」の例は，〔00〕のなかにあっても，人間がたべものを「くう」のとはやや重点のおきどころがちがっていて，カやノミが「くう」という用法への橋わたしの位置にあるものといえる。そして，そのような意味では，「虫がくう」にかぎらず，つぎの「ネズミがくう」も，人間のばあいにより近いけれども，ほぼ同様に位置づけることができる。

○マンチェスター地方のある郵便局で鼠が箱の錠前を喰い切り，中に入れてあった郵便為替を喰った。(日本及日本人 1953年8月 58)

〔10〕 相手の勢力をそぐこと。

ここに属する例はそう多くなく，しかも，大体はすこし慣用句的なものなので，正確に規定することがむずかしい。こまかい点では1例ずつ説明を要する，といってもいいほどで，一応上のように意味を規定したが，このような一般化した規定だけでは，到底十分とはいえない。以下，いくつかに分けて説明する。

a) 敵をやっつけること。

○大型船と駆逐艦が一隻，敵潜にくわれている。(講談倶楽部 1956年11月 425)

この例は，「くう」の基本的な意味のニュアンスを多少もっていて，それの比ゆ的な

用法のようにもとれる。ということは，以下の b) c) のように用法が固定化して，類例がいくらもあるというのではなくて，臨時的なものと思われるからである。ある国の軍艦が敵国の軍艦を「くう」というような表現は，まだそれほど安定したものではないであろう。しかし，とにかく，これ1例しかないので，よくはわからない。

b) スポーツで下位のものが上位のものをまかすこと。

○松登に勝てば，一横綱二大関を**食う**ことになる。（相撲 1956年11月 102）

これも1例しかないのだが，ほかに野球などでもつかうはずである。しかし，スポーツ一般にいえるかどうかは疑問で，陸上・水泳などでは，ほとんどいわないとおもう。これは，下位が上位をまかすことであって，前頭が大関を「くう」ことはあっても，大関が前頭を「くう」とはいわないのだが，そのような順位がかなりきまっているようなスポーツ，つまり，おなじ相手どうしがしょっちゅう顔をあわせるようなスポーツでなければ，つかうのに適さないからである。（なお，芝居でも「子役が主役をくった」のような表現がありそうにおもわれる。）

c) 他のものの領分をおかすこと。

○あんなに美しい唄を，ラジオは活字のように街の空で唸っている。雑音化した夜の曲。人間が**キカイに食われる**時代，（放浪記 249）

これは，人間が本来してきた，また当然すべき，歌をうたうようなことまで機械がするようになってきたことをいっている。しかし，単に機械の使用範囲が広くなったという客観的な事実をのべているのではなくて，人間自身が機械に合わせてしごとをし，人間らしさを失って機械に従属化していくことをも含ませているように思われる。

○だが，この男といつしよに仕事してめつたに**喰はれよう**とは思つてゐなかつた。（闘牛 76）

これは，相手のペースでしごとを進められてしまう，というような意味であろう。

○生活を助けるために始めた外交仕事が生活をかえって**食う**ことになってしまった。（サンデー毎日 1956年9月23日 31）

これは，生活を経済的に圧迫することをあらわしている。

○岸と水との接する線がまったく同じ状態でいることは二日とない。今日は陸地が少々多く海に**食われる**かも知れないが，明日はそれが少々少いかも知れない。（リーダーズダイジェスト 1956年4月 74）

これは，空間的に海が広くなって，今まで陸だった領域が海になることをいっている。

d) 相殺すること。

○二千円の賃上げは，ハネ返りを計算すると，トン当り三百円余の原価高となる。炭況回復で浮いた利益を**喰って**，なお赤字となる。（東洋経済新報 1956年2月25日 67）

○合理化を進めても，毎年の硫安値下げでコスト低下分を**くわれて**しまっているかっこうだ。（東洋経済新報 1956年11月24日 69）

ここには金の例しかなかったが，時間や労力についても，「早おきで浮いた分を超過勤務でくわれる」のようにいうことができるだろう。なお，このd）のグループは，あと

の〔20〕の＜ついやす＞意味にきわめて近いが，その関係は〔20〕のところでとりあげる。

○「帝国海軍を喰ひちらして来た女だ。」

と，突然に彼は言ひ出した。

「今度は何を喰ふ気か知らんが，あれは，優しいきれいな顔をしてゐて，化物だ。」(帰郷 104)

これも，ここに入れるべき用例かもしれないが，それよりも「食いものにする」という慣用句をもとにしたものかと思われる。しかし，「くう」を「食いものにする」とおなじ意味に使った例は，ほかに見あたらない。多分ここでの臨時的な使いかただろう。

以上にあげたのは，ここに属するもので，はっきり慣用句とはいえない全用例である。a，b，c，dがおのおのちがうのはもちろん，cの中でもそれぞれにかなりちがう事実をあらわしていて、これらを1まとめにしてその共通性を規定するのは，むずかしい。用例数が少ないため、また，みなある程度まで慣用句的なためであろう。

〔11〕 このほか，以上のグループに属するのではないかとおもわれる慣用句に，「人をくった」と「くってかかる」とがある。これらは，どちらも，かなりかたい結びつきをつくっているもので，慣用句全体としての意味は規定できても，そこから「くう」だけをぬきだしてしまうと，あいまいになる。したがって，その意味がここに属するといってみても，あまりすっきりはしないが，とにかく，どこかでとりあげなければならない慣用句だから，比較的近そうにおもえるここにあげておく。

〔111〕

○「専門家の立場から」といつた人を喰つた見出しで，新進拳闘家が闘牛を論じてゐる日もある。(闘牛 103)

○岡部は人を喰つたやうにきよとんとした顔つきで言つた。(闘牛 130)

○もし，これが口説(くぜつ)文句だとしたら，あんまり人を食ってるし，(自由学校 63)

「人をくう」は，このように，「くった」「くって（い）る」の形でつかわれて，人を無視し，ばかにして相手にしないようすをあらわす。そして，つねに「人を」という目的語をともなって使われ，「だれだれをくった態度で」のように，ほかの目的語をとることはない。まったくかぎられた結びつきにおける意味だ。

〔112〕

○「何くそ！　貴様の教育が悪い。」と嘉門が妻に食つてかかる。(冬の宿 18)

○いきなり扉をあけて半狂乱の有様で先生に喰つてかかつた。(本日休診 104)

○お弓は，威丈高になつて，市九郎に喰つてかゝつて来た。(恩讐の彼方に 67)

「くってかかる」（はげしく反抗する，の意）は，「人をくった」とちがって，全体としての形が文法的に制約されているということはない。つまり，「～た」「～ている」にかぎらず，「～る」でも「～てくる」でも自由につかえる。また，目的語に

も特別の制限はない。しかし，「くって」と「かかる」との結びつきはかたく，意味的にみて，ほかの「くう」や「かかる」との関係がきわめてうすい。だから，「人をくった」とは別の意味でだが，やはり慣用句である。

〔20〕 ついやすこと。

○竪坑三本（工事中）などでカネを食うし，（東洋経済新報 1956年12月 8 日 77)

○燃料を余計食うジェット機よりも，（エコノミスト 1956年10月27日 49)

○二重になってかえって人手を食う場合があります。（中央公論 1956年 6 月 75)

○悪口の交換はかなり時間を食った。（文芸春秋 1953年11月 124)

この表現は，多少評価的・感情的なニュアンスがこめられているように思われる。すなわち，「ついやす」「消費する」「必要とする」などが純粋に客観的な事実の表現にとどまるのに対し，「くう」は，そのような事態がこのましくないにもかかわらず，期待に反しておこる，というニュアンスがあるように思われる。このことは，「くう」が俗語的な文体に属することと関係があるであろう。ただし，そのようなニュアンスを感じとるかどうかには，個人的な差がありうるだろうが，その点についての調査は，していない。

以下，これらとまぎらわしい表現と比較しながら，この類の形式上の特徴をもっとこまかくみることにする。

このグループの「くう」は，その主体の表現として，しごと，または道具・手段をあらわす名詞をとる。すなわち，「Aは時間（費用・燃料……）をくう」「時間（費用・燃料……）がAにくわれる」というとき，Aの位置にくるのは，しごとや道具・手段をあらわす名詞であって，そのしごとの主体である人をあらわす名詞ではない。「かれ（人）は，自転車（道具）で行商（しごと）をしている」というとき，

行商は時間をくう。

自転車はあまり費用をくわない。

とはいえるが，

かれは時間をくう。

というのは，ふつうの表現にはないだろう。

したがって，

○税金がむざむざと一人の男に食われてしまったのだから（婦人生活 1956年 8 月 203)

という例は，「消費されて」といいかえることはできるが，ここに属するというよりも，〔0〕の具体的な「くう」動作の比ゆ的用法に属するとみられる。「一人の男に」と，主体が人だからである。

さきに〔10〕のｄ）に「相殺する」の例としてあげた，

（賃上げが）利益をくう

（硫安値下げで）コスト低下分をくわれる

などは，金のことを問題にしていて，やはりこの類に近いが，「利益」「コスト低下分」

が「賃上げ」「硫安値下げ」の費用ではない点でちがう。

〔21〕「年をくっている」という表現も，「時間をくう」などと近い関係にあるものとおもわれる。ただし，これは完全な慣用句で，「年を」を「年月を」「年齢を」などにおきかえることはできない。また，主として「くっている」の形で状態の表現につかわれるが，「年をくう」という変化の表現もありうるかもしれない。

○下宿屋のお神さんは大抵年を喰つてる。（平凡 111）

〔3〕めいわくな行為・作用をうけること。

○そこで新治には，玄関払ひを喰つた母親の屈辱だけが身にしみた。（潮騒 116）

○早晩Ｓ—教組からボイコットを食うに違いない。（人間の壁・上 246）

○突然背後から重量のある打撃を後頭部に喰つて失神した。（李陵 165）

○行介はお預けをくつた犬のやうに，黙つてそれをながてゐた。（波 7）

○一番々頭の前に呼びつけられ大眼玉を喰つた上に（春琴抄 155）

以上の「玄関払ひ」「打撃」のように，この類の「くう」は，人が意識的に他人にむけてする行為をあらわす名詞をうけることが多い。このほかの例としては，

うっちゃり　遠距離砲撃　おいてけぼり　さかねじ　しめだし　すっぽらかし　ストライキ　折檻　総攻撃　総スカン　罰　反撃　パンチ　ビンタ　まちぼけ　ゆさぶり

などがある。

この表現は，ある行為をうけるがわからのもので，「打撃をくう」は，いわば「うたれる」と同じである。つまり，全体としては受け身の表現にちかい。これを能動に，行為をくわえるがわの表現にするには，「 ～ をくわせる」にする。

○建一郎は物も言わずに，妻の頬に平手打ちをくわせた。（人間の壁・上 271）

○それを振りきって，ケンツクを食わせるような勇気も，（自由学校 249）

「くう」のうける名詞は，以上のような，行為をあらわす抽象名詞ばかりではない。つぎのように，道具（つまり物）を示す名詞がくることもある。

○何をいつまでも豆鉄砲食うた鳩みたいにぼやぼやしてやがる？（真空地帯・上 131）

○御前崎の沖で軍艦瑞穂が，魚雷をくって沈没，（講談倶楽部 1956年11月 425）

○藤本英雄にグワーンという物凄い死球をくって，（野球界 1956年２月 197）

○日本がＡＢＣＤの包囲陣を食っていると（週刊サンケイ 1956年５月６日 16）

「包囲陣をくう」は，ちょっとおちつかないかもしれない。意味の転化の道すじとしては，「打撃をくう」「うっちゃりをくう」のような，動作性の名詞と結びついたものよりも，「魚雷をくう」のような，物をうける表現の方が，「めしをくう」などの基本的用法に近い。「魚雷をくう」をあいだにおいて考えると，「めしをくう」から「打撃をくう」が出てきた経路がわかる。

これらの道具（物）をあらわす名詞と結びついたばあいも，全体として意識的にむけ

られた動作をうけることである。「魚雷をくう」は，敵が意識的に，ねらって発射した魚雷をうけることをしめす。この意味の「くう」の大部分は，前にものべたように，他人がことさらにしむけた動作をうけるものである。辞書によっては「人からある事を受ける」と説明しているものもあるが，この点を重視したものであろう。

しかし，つねにこのように意識的な動作の結果であるとはいえない。つぎにあげるのは，そうでないものの例である。

○蒸汽のあふりをくつて，筏は大きく揺れた。（波 74）

○爆発室の中で，爆発を喰ったと同じ結果になりますよ……（宝石 1956年2月 136）

○はずみを食って，私は仰向けざまに引っくりかえった。（暗夜行路・前 16）

○ガラガラとウインチで船に積まれて行く，水で皮がベロベロになつてゐる材木に，拍子を食つて，一なぐりされると，頭のつぶれた人間は，（蟹工船 61）

このような例もあることを考えると，「人から……」という規定はせますぎるといえるだろう。

ここに属する慣用句には，つぎのようなものがある。

○実のある処を見せようつたつて其手は喰はなくつてよ。（青銅の基督 75）

○駒子が，一パイ食ったのも，（自由学校 136）

○駒子は，平さんから，一本食ったという感じがした。（自由学校 126）

これらが慣用句だというのは，つぎのような特徴による。まず，「その手はくわない」では，「手」の意味が「方法」「やり方」などと同じであるにもかかわらず，「その方法はくわない」「そのやり方はくわない」などの表現はない。この意味の「くう」をうけるのは，一般に動作（または道具）をあらわす名詞であって，「手」が方法をあらわしながらその位置にくるのは例外だ。つぎに，「いっぱいくう」「一本くう」については，「～を」という目的語をとっていないことがあげられる。これらは，全体としては「だまされる」「自分のおちどをつかれる」ことだが，その内容をしめすべき目的語は欠けている。しかも，偶然おちたのではなくて，目的語をとりえない表現なのである。一般に，ここに属する「くう」がほとんどつねに「～を」という目的語をとっているのにくらべると，これは大きなちがいである。

以上で，実例にあらわれたかぎりでの用法はほぼ記述したが，実はこのほかに「気にくわない」という表現も「くう」にはいっている。

○事毎に自分の境遇が気に喰はないでたゞいらいらしてゐた。（或る女・前 158）

○答えを逃げようとしてしまうのが平井に気に食わない。（むらぎも 80）

この「くわない」にも，ふつう「食」の字がもちいられるが，これをほかの「くう」と関係づけること，ほかの「くう」とのあいだに何か意味上の共通点をみつけようとすることは，現代語の体系の中では無理ではないかとおもう。辞典の編集者がこの「くわない」をどう見ているかは不明である。この慣用句は「気」の項で説明していて「くう」

の項では扱っていない。また，食事の「くう」とこの「くう」とを別語として別の見出しを立てているわけでもない。したがって，辞書でこの「くう」を食事の「くう」と同語として扱っているかどうかについてはわからない。

「気にくわない」は，慣用句の中でもかなり結びつきの度がつよいといえるだろう。「(だれだれの) 気に入らない」という表現はあるが，「(だれだれの) 気にくわない」というのはなさそうだから。このようなとき，「むらぎも」の例にみるように，「(だれだれに) 気にくわない」という。

なお，辞典のなかには，「靴が足をくう」「わらじが足をくっていたい」「この毛抜きはよく毛をくう」などの例文をあげているものがある。これらにあたる実例はなかったが，実例があれば，多分〔0〕と〔1〕とのあいだあたりに1項目立てて入れるのが適当だろう。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	食	喰	計
00) めしを ～	6	36	7	49
01) 文学で ～	-	10	1	11
02) ノミが ～	-	-	-	-
10) 横綱を ～	2	3	1	6
111) 人を ～ た	-	-	-	-
112) ～ てかかる	1	3	-	4
20) 燃料を ～	-	3	-	3
21) 年を～ている	-	-	-	-
3) 打撃を ～	4	3	4	11

11. 「はかる」

〔000〕 ものや作用の性質を量的に知ろうとすること。

対象となる性質には，つぎのように，いろいろなものがふくまれる。

○洞窟の深さを測つて見ると，全長六十五間，(恩讐の彼方に 79)

○あれは，水の速さをはかる器械です。(銀河鉄道の夜 284)

○熱をはかつて見たら三十八度九分あつた。(友情 80)

○「……血圧を，計ってみなくっちゃ，いけないんだがな」(新潮 1956年1月 178)

以上の例のように，「はかる」がとる目的語には，「深さ」「速さ」「熱」と，性質をあらわす抽象名詞がなることがおおい。しかし，また，これらの性質のもち主である実体をあらわす名詞が目的語になることもある。

○その水を測るのは，附属のコップの目盛によらなければ (暮しの手帖 36号 167)

○その光線を熱量で測ってみると，(中央公論 1953年12月 178)

これらは，それぞれ「水の量を」「光線の熱量を」といいかえてもさしつかえない。つぎの「体」は実体を，「体格」はその性質をあらわしているが，両方とも同じ事実をいっている。

○彼らは，そんな体を計ってなんか貰えない。（スタイル 1956年10月 201）

○着る人の体格を計ってきめるとよいのです。（主婦の友 1956年11月付録 和装と洋装 75）

はたらきかけの対象として，ものをも，その性質をもとる，ということは，つぎのような動詞にもみられる。

〈も の〉

○私は改めて周囲のわが絶望の同僚を数へた。（野火 25）

○吉さんの鳥打帽子の内側をかぎながら，（放浪記 264）

○加治木は，足を速めて，興行街を通り抜けた。（自由学校 211）〔ただしこれは本当に実体をあらわしているとはいいにくい。〕

○昭和二十六年ごろの「黒牛景気」に影響されて，採草地を拡げることになり，（農業朝日 1956年10月 72）

〈性 質〉

○のがれ去つた部下の数を数へて，（李陵 165）

○勘次は単衣を少し開いて鼻へ当て臭を嗅いで見た。（土・上 94）

○船はもう可なり速力を早めて，霧のやうに降るともなく降る雨の中を走つてゐた。（或る女・前 89）

○奔騰する濁流はすばらしい勢いで，濠の両側の土砂を削って押し流し，見ているうちに幅をひろげつゝある。（小説春秋 1956年5月77）

「はかる」「かぞえる」について，「（からだを）はかる」と「（体格を）はかる」，「（人を）かぞえる」と「（人数を）かぞえる」などを，それぞれ別の意味とすることはできないだろう。

ものについて量的に知ろうとする

性質を量的に知ろうとする

といいわけると，一見別のことのようだが，実はまったく同じことを表現だけかえていったにすぎず，ちがった規定ということにはならない。したがって，これら2つは，単なる結びつき方のちがいということになる。これは，たとえば，

{この自動車ははやい。
{この自動車の速力ははやい。

{白い花
{白い色

のように，形容詞が実体に結びついて使われたときの意味と，性質に結びついて使われたときの意味とを別義とすることができないのと同様である。

単なる結びつきのちがいにすぎない例は，さきに「あける」についてもあげた。意味がちがうと，これと結びつく単語の種類もかわるばあいが多いのは事実だが，その逆はかならずしもなりたたないのである。

物をはかるのと性質をはかるのとが区別できないことは，目的語をとらない例について，そのどちらともいえないことからも証明できる。

○目分量で測つたところでは春琴女の墓石は高さ約六尺（春琴抄 137）

○そや，測り飯や，飯盒（めんこ）に入れて炊事囚が一つ一つはかりで測って，一瓦でも多いとへずり取りやがる。（真空地帯・上 160）

これらは，「墓をはかる ～ 墓の大きさをはかる」「飯をはかる～飯の重さをはかる」と，2とおりにいいかえることができる。つまり，目的語として，物をあらわす名詞・性質をあらわす名詞の，どちらでもおぎなうことができる。そして，どちらに考えても，表現していることはまったく同じである。また，

○准尉との距離をたえずはかるようにして歩いて行った。（真空地帯・上 14）

○距離と時間とを計つて見るに，問題の敵の主力では無ささうに（李陵 156）

のような，距離や時間は，もちろん物ではないし，かといって性質ともいいにくい。

このほか，結びつきの特殊なものに，つぎの例がある。

○時計を計つてみると十分間で約百人程の人間がスタンドに吸収されてゐるのであつた。（闘牛 139）

道具が「はかる」の目的語の位置にくる例はほかにない。もしこれが「時計で計る」の書きまちがいでないとすれば，まったく特殊な、孤立した例である。

「はかる」対象としての性質は，たいていは物理的なものであるが，中には，つぎのように感覚的・理性的なもので，ちょっと数量化は困難とおもわれるものもある。

○彼は自分で自分の指を握ってみて，握る時の感覚と，その握られた感覚とを計ってみたりした。（暗夜行路・前 47）

○だが此の私ひとりにとつて明瞭なこともどこまでが現実として明瞭なことなのかどこでどうして計ることが出来るのであらう。それにも拘らず私たちの間には一切が明瞭に分つてゐるかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計つてゐてその計つたままにまた私たちを押し進めてくれてゐるのである。（機械 32）

なお，つぎにあげる例における「はかる」は，「はかるような目つきでながめる」「からだのことを考えながら見る」というようなことをあらわしているものと思われるが，現代の一般的な用法にはない使い方である。

○僕の身体（からだ）をつくづく目に測つて，眉宇に一点の雲を宿した。（思出の記・上 147）

〔001〕 一定の量を確認して取り出すこと。

〔000〕の「長さをはかる」などのばあい，対象となる量は未知であって，これを知ろうとこころみることが「はかる」ことである。したがって，結果的には測定に失敗しても「はかった」ことになる。「木の太さをはかったが，よくわからなかった」ともいえるのである。しかし，「はかる」には，このほか，むしろ問題になる量は既知であって，対象となるものを，その分量だけ取り出す，ということをあらわす用法がある。

○肩先から直角に11センチを計り，この点から9センチのまち附線（つけせん）をとる。（主婦の友 1956年6月付録 夏の婦人服と子供服 53）

○袖口は袖巾の中央線を引き，それより一糎五耗前の方へよせて袖口寸法の二分の一

ずつをはかります。(婦人生活 1956年4月付録 春のスタイル集 118)

これらの例で,「11センチ」「袖口寸法の二分の一」という量は既知である。「はかる」は,布地をこれらの寸法にあわせて取り出す,より具体的にいえば,その寸法のところにしるしをつけるか、そこから切りはなすことをいう。

この用法で,「確認して」「取り出す」という2つの要素のどちらに重点がおかれるかによって,変種が生じる。上にあげた裁縫の例では,「取り出す」ことよりも「確認する」方に重点があるとみられる。切りとらなくても,しるしをつけなくても,ものさしをあてて目盛りをよんだだけで,「11センチをはかった」といえるからである。

○穴の入口より奥迄,二十二間を計る迄に,掘り穿つた。(恩讐の彼方に 77)

という例では,「取り出す」という観点は一層うすれている。それは,さきほどの裁縫の例などとちがって,これは洞窟全体の長さであり,一部分の長さではないからである。裁縫のばあいに,たとえ切りとらず,しるしもつけなかったとしても,長い布地全体の中から「11センチをはかる」ことは,その部分を他の部分から「取り出した」ことだが,ここでは全長を問題にしているので,「取り出した」とはいいにくい。さらに,この例では,「はかる」が特定の主体の動作ではなくなって,「二十二間を計る」全体で「二十二間の長さである」という状態の表現になっているために,ますます「取り出す」とはいえなくなっている。

これと逆に,「取り出す」という動作の要素のつよい例としては,つぎのようなものがある。

○小糠を筵へ量るのも白い塩を小糠へ交ぜるのも満足気に見て居た。(土・上 38)

この例で「はかる」のあらわしているものは、小ぬかをむしろへ移すという,まったく具体的・空間的な動作だ。もちろん,ここでも「量を確認する」という要素は生きているが,裁縫の例や洞窟の例にくらべれば,「取り出す」方の観点がずっとつよくなっている。このことは,「11センチ」のような数詞ではなくて,「小糠」という具体名詞が目的語になっていること、「筵へ」という移動の帰着点が示されていることによって,ささえられている。

〔010〕 推定すること。こうだろうと想像すること。

ここに属する例のうち,比較的代表例に近いといえるのは,つぎのようなものである。

○兵隊のすべての行動を測ることのできる准尉がいる。(真空地帯・上 232)

○何人がそのような死に方をするかもはかられぬのじゃ。(出家とその弟子 214)

○世に知られたというのを感謝して,中里氏の碑が二年ほど前に建った位だから,ここの素朴さがはかられよう。(旅 1956年11月 148)

「比較的」とつけたのは,「はかられる」のような形のものだからで,「～をはかった」のような,動詞として,より基本的な語形のものには,適当な例がなかった。ということは,〔00〕にあげたものにくらべて,この用法が文法的な面での使用にやや自由さ

を欠くことからきているかもしれない。（この点をもっと積極的にいうには，用例がたりないと思う。）

なお，この用法は〔00〕にくらべて文章語的で，日常の会話にはあまりもちいず，やや古い語感で文章のなかで使われる。つぎの「計るに」のような形式で，また「己れを以て」のような文語脈のなかでつかわれている例は，その傍証になるだろう。

○自分の学力を計るに少なくも三年には入れる，（思出の記・上 227）

○「己れを以て人を計る筆法ですね」

と答へはしたが，（或る女・前 214～215）

この点については，「はからずも」「あにはからんや」など，慣用句の中にこれと近い文語的用法が残っている点（〔012〕）を参照。

〔00〕の類も〔01〕の類も，対象についてなにかを知ることをあらわしている点では同じである。基本的なちがいは，〔00〕の類が目の前にある対象の性質についての直接的な認識なのに対して，〔01〕の類は，現在眼前に展開されてはいない事実についての間接的な認識（すなわち推定・想像）だという点にある。したがって，多くのばあい，〔01〕の用法は未来の事実について考えることをあらわす。しかし，「ここの素朴さがはかられよう」という「旅」の例は，現在の事実についての推定であり，辞典にときどきみられる「予測する」という訳語は，この〔01〕の類全体に対するものとしては，せますぎる。

〔00〕と〔01〕とのちがいの第2は，〔00〕が量的にとらえられた性質を対象としているのに対し，〔01〕はそれだけにとどまらず，どの程度，ではなくて，どのようにあるか，という質的な側面についての認識もふくみ，さらに，静的な性質だけではなくて，広く現象・事実についての推定をふくんでいることである。「素朴さがはかられよう」の例では，「素朴さの程度が」といいなおすことができる。つまり，量的な認識といえる。しかし，「兵隊のすべての行動を測る」「どのような死に方をするかもはかられぬ」では，行動・死に方の量が問題なのではない。また，単に行動や死に方の「性質」というよりは，どのような行動・死に方であるかという「内容」を推定しているのである。素朴さについての推定が数詞で答えられるとすれば，行動・死に方についての推定は動詞で答えられる性質のものである。

なお，〔00〕では「知ろうとする」という形で規定したのに対し，〔01〕で「推定する」「想像する」と規定して，「～うとする」の形をとらなかったことについて説明しておこう。「知る」という動詞は，認識の変化をあらわしている。

わたしはその水の重さを知った。

というとき，「わたし」が単に水をはかりにかけたりしただけでなく，目盛りをよんで水の重さが何グラムあるかという認識をえたこと，「わたし」の認識が変化したことをあらわしている。単に知ろうと努力しただけの段階では，まだ「知った」とはいえない。ところが，

わたしはその水の重さをはかった。

では，「わたし」の認識が変化したかどうかは，はっきりしない。重さを知ったかもし

れないし，はかったけれどもわからなかった，ということも，ありうるのである。つまり，「はかる」は，認識の変化を目的としたはたらきかけをあらわしているのである。はたらきかけが実現すればいいので，その目的が達せられたかどうかは，問題にならない。したがって，〔00〕の意味の「はかる」は「知る」ではなくて「知ろうとする」と訳さなければならない。(なお，第1部 3.1.3 経過／結果 p.218 以下を参照。)

それでは，〔01〕の方の「はかる」(＝推定する，想像する) のばあいはどうであろうか。この用例が少なく，またこの「はかる」は日常語で自由に使われる用法ではなく，やや文章語的でもあるので，判断がむずかしいところもあるが，〔00〕のばあいとはちがうように思われる。すなわち，「はかった (推定した)」というのは，単に推定・想像しようとしたのではなくて，すでにそのイメージを頭にえがいたばあいにいう。〔00〕の測定とちがって，〔01〕の推定・想像という行為は，主体の一方的な，主観的な行為であるから，原則として「はかろうとしてはかりえない」というようなむじゅんはおこらない。この点は「推定する」「想像する」なども同様である。それで，このばあいには「～うとする」という形で規定する必要はない。

さて，〔00〕と〔01〕のどちらに入れたらいいか，まぎらわしい例がいくつかある。

○妙に摑まへどころのない岡部といふ人間の，悪いにしろいいにしろ，その奥行の深さを測るそれは錘りのやうなものであつた。(闘牛 129)

○子供の体重をはかり身長をはかってやりながら，その子供たちの心の重さをはかるという一番大事なことを忘れていたのだった。(人間の壁・上 143)

○いろいろな出来事の意味を測る一応の座標のようなものが，(世界 1956年1月 66)

これらは，「深さを測る」「重さをはかる」「～を測る一応の座標」と，それぞれ量的な認識についての表現である点で〔00〕の方にちかい。特に「人間の壁」の例では，身長や体重をはかるのと対にしているので，一層その色彩がつよい。しかし，ここではかられる対象である「(人間の) 奥行の深さ」「心の重さ」「出来事の意味」は，それぞれ，ものさしやはかりでは知りえず，かんたんに量的にあらわすことのできないものだ。したがって，何らかの手がかりから推定する以外に，はかり知ることはできない。このように，これらの例は本質的には〔00〕から〔01〕への中間的段階にあるものと思われるが，ここでは一応〔01〕に入れることにした。

〔011〕 (よい時機を) ねらうこと。

○頃合ひを計つて，清岡は君江のつれられて行つた同じ待合へと，振りの客になり済まして上り込み，(つゆのあとさき 42)

○お豊とやす代が傍で昼の食事のことで明子に相談したいのを言い出せず，それとなしに計っていたが，(くれない 119)

これらの例は，とけいで正確に時刻をはかるのではなく，大体よいころだろう，と推定するのである点で，〔00〕よりは〔01〕のグループに属する。しかし，単に時刻を推定するだけではなく，よい時機はいつかとねらっているのである。

この用法は時機をねらうばあいにかぎられている。前にくる名詞も「時機」「ころあい」「きっかけ」など数語にかぎられているだろう。

○二人はにらみ合ったまま，しばらく呼吸をはかっていて，（真空地帯・上 117）

のような，「呼吸をはかる」という慣用句における「はかる」も，もし「呼吸」の意味を「呼吸をおぼえる」「その呼吸で」のように「調子」「やり方」ということだと考えれば，ここに属するといえるかもしれない。しかし，これは実際に相手の呼吸の速さ・強さなどを「はかる」ところから出たものかもしれない。そのばあいには「はかる」は基本的な〔00〕の意味である。

〔012〕 予想すること。

これは，つぎのような，慣用句ないしは副詞的な形でつかわれるだけである。

○参勤の途に上らうとしてゐるうち，図らず病に罹つて，（阿部一族 25）

○左舷に出ると計らずも眼の前に陸影を見つけ出して，（或る女・前 142）

○若い父親（おとつさん）だなと思つたら，豈図らんや此は松村の兄で，（思出の記・上 70）

○然るに何ぞ図らんそれより一年を経て春琴の体にたゞならぬ様子が見えることを母親が感づいたのである（春琴抄 166）

「はからず（も）」「はからん」以外の形としては，つぎの例があった。

○図らぬ事で此処に三月あまりも淹留（えんりう）の身となつたが，（思出の記・上 195）

いずれにしても，この用法は文語的なものが化石的に現代語のなかに残っているもので，文体的にもやや古く，かたいようである。

〔10〕 ある目的のために努力すること。

○それを機会として，生活共同体の確立と強化を計った。（自由学校 181）

○県教組とのあいだで解決がはかられる。（人間の壁・上 183）

○歩留り向上，コストの引下げを図ったことも，（東洋経済新報 1956年12月1日 73）

この用法で，「 ～ を」という目的語は，努力の目標をあらわす。この目的語には，以下の3種類がある。これらの区分は，結びつきうる単語の範囲を示すだけであって，「はかる」の意味の下位区分を示すものではない。

第1は，上の例文の「確立と強化」「解決」「向上」「引下げ」など，動作性名詞（たいていは「 ～ する」の形で動詞になる）である。量的にはこれが大部分をしめる。これには以下のような例があった。

安定　一家心中　永存　栄達　拡張　共存共栄　切りくずし　軽減　コストダウン　再挙　再建　充実　進歩　増殖　蓄財　調整　追求　統一　突破　発展　繁栄　挽回　美化　普及　復活　復興　分散　方向転換　連絡　連携　簡易化　均衡化　軽量化　合理化　有効化

第2は，つぎのような状態をあらわす名詞である。

安全　幸福　堅固　福祉

つぎの例文では，動作と状態とがならんで「はかる」にかかっている。

○これらの事務の適正化と円滑を図るため，（ジュリスト 1956年10月15日 70）

第1と第2とのどちらともつかない，つぎのような例もある。

○私が皆様と力をあわせて，法の隆盛をはかります。（出家とその弟子 209）

○相互の親睦を図るために昔はクラブがあった。（文芸春秋 1953年8月 205）

この「隆盛」や「親睦」は，「～する」という動詞の形も，「～な」という形容動詞の形もない。それで，動作的な意味とも状態的な意味ともとれるが，どちらに考えても結局は大差ない。

第3は，目的自身をあらわす抽象名詞である。これには，今のところの資料では「利益」「便宜」「ため」の3つがある。

○アメリカの利益をはかろうとする考え方を（改造 1953年8月 13）

○彼は彼女のために診察の便宜を計つてやつた。（波 134）

○わが愛する女の幸福の為めを謀るばかりだ。（蒲団 21）

さて，この〔10〕の類についての規定としては，ここでとった「努力する」というもの以外に，「くわだてる」「計画する」というのもみられる。「計画する」ことは，ある目的のために「努力する」ことの第1段階であって，「努力する」ことのなかにふくまれる。したがって，両者はかさなるところがあるわけだが，ここで「計画する」をとらずに「努力する」をとったのは，つぎのような例における「はかる」が，単に計画の段階にとどまるものではなく，つぎの段階の実行をもあらわしている，とおもわれるからだ。

○軍事思想の普及を計る為，学校の生徒一同に談話（はなし）をして聞かせるとか（破戒 222）

○次ぎに，住民の大部分が，拾い屋であるために，職業的な向上と合理化を計った。つまり，拾うばかりでなく，加工生産も始めた。（自由学校 181）

もっとも，つぎのような例では，「はかる」＝「計画する」と考えても通じる。

○対空防衛の有効化を計るべきであり，これが完了したとき，原爆に関するある種の取り極めをソヴェトと結ぶ問題を検討すべきである，（世界 1954年4月 108）

しかし，この文脈でも，「はかる」は，計画をその一部としてふくんだ，有効化の実施全体をあらわしているともみられる。このように，計画とも努力の全過程ともとれる例はあったが，計画することだけで，それ以後の実行段階をふくまない，とはっきりいえるような例は見あたらなかった。それで，ここでは，「くわだてる」「計画する」という規定をとらずに，「努力する」にしたのである。

ただし，「計画する」という側面は，「はかる」の意味全体のなかでこの〔10〕の意味を位置づけようとするとき，大切な役わりをになう。「努力する」ことは意識の中にとどまらない，客観的な事実である。そして，〔00〕や〔01〕に見てきた「はかる」の意味は，人間の認識についての，意識の中における事実だった。これがなぜつながるのか，基本的な意味からどのようにして〔10〕の意味が出てくるのかを，あきらかにするには，「努力」が「計画」という意識的精神的な行為の上になりたつものであることを認めな

ければならない。

さきに，〔00〕における量的な，直接的な認識が，〔01〕の間接的な認識（すなわち推定）に移行することによって，未来の事実についての認識であるばあいがおおくなることをのべたが，推定と計画とは，ともに未来についての意識である（ことがおおい）という点で相接している。ちがいは，一方が認識，一方が希望（にもとづく行為）だという点にある。そして，計画がつぎの実行段階までふくむようにズレれば，この〔10〕になる。

なお，ここに属するものは原則として「～を」という目的語をとるが，これをとっていない，自動詞的な例が，つぎの4例である。

○最初はそのようにむしろ木谷のためにはかる気持をもって（真空地帯・上 166）

○花枝は木谷と共にはかって，或る反軍的な団体に役立つ或る仕事をしていたと考えればよいのだ。（真空地帯・上 227）

○つまり向うは，侮蔑されてもと分っていてよかれと図ったのだ。（むらぎも 313）

○お腹に宿る子を水に流させようと謀る。（サンデー毎日 1956年3月18日 70）

これらのうち，第2例（「～と共にはかって」）や第4例（「水に流させようと謀る」）などは，比較的「計画する」という実行以前の段階のニュアンスがつよいようにおもわれる。このような点が，もし自動詞的用法に一般的にみられれば，他動詞的用法と別に項目を立てるべきかもしれない。

〔11〕 ことを処理すること。

これに属するのはつぎの1例だけで，はっきりした位置づけはできない。

○あの林中尉のやつはほんまにいんけんなやり方で事実をまげて，木谷を不利な立場においこみ，彼をおどしつけてことをはかろうとした。（真空地帯・上 178）

〔2〕 相談すること。

○さて，武帝は諸重臣を召して李陵の処置に就いて計つた。（李陵 166）

○母に告げず，伯父に計らず，学校の諸友をも欺あて出奔した（思出の記・上 170）

○前夜その疑を単于が幹部の諸将に洩らして事を計つたところ，（李陵 161）

○滝本和男氏にその由を図り，（婦人倶楽部 1956年5月 436）

上の例のように，この用法の「はかる」は「～を」という目的語をとるばあいと，とらないばあいとがある。そのどちらにしても意味にかわりはない。

相談することは，他人といっしょに，そのことについて計画することである点が，〔2〕を〔1〕にむすびつける。

花枝は木谷とともにはかった。〔1〕

武帝は諸重臣にはかった。〔2〕

という2つは，かなり近い関係にある。ただし，花枝と木谷とが「はかる」主体として同列にあるのに対し，〔2〕の主体はあくまで武帝だけで重臣は含まれない。〔2〕のばあ

いには，「諸重臣に」と，相手をあらわす目的語をとりうる点で〔1〕と形式上もちがっている。なお，〔1〕では計画だけでなく実行段階まではいっていたが，〔2〕での相談とは，案をねるところまでである点もちがう。

〔3〕 だますこと。

○「はかったか」

福永太兵衛の声が咽喉をつんざくと同時に，二人は鞭をビシリとあてた。(落城 21)

○林中尉にうまくはかられたのだということをようやくさとったが(真空地帯・上 193)

これも，計画しての行為である点で，〔1〕などと共通性がある。ただし，〔1〕のばあいに「 ～ を」という目的語のあらわすものが，計画の内容であるのに対し，このばあいには「ダレダレを」という人をあらわす目的語をとる（実例なし）点がちがう。

〔雑誌90種の資料による統計〕

	かな	計	測	量	図	謀	計
000) 深さを～	2	13	3	1	–	–	19
001) ヌカをむしろへ～	1	6	–	–	–	–	7
010) 行動を～	1	–	1	–	–	–	2
011) 時機を～	–	–	–	–	–	–	–
012) はからずも	1	–	–	–	–	–	1

	かな	計	測	量	図	謀	計
10) 解決を～	11	6	–	–	16	1	34
11) ことを～	–	–	–	–	–	–	–
2) 重臣に～	–	–	–	–	1	–	1
3) 敵を～	1	–	–	–	–	–	1

12.「よ む」

〔000〕 文字にかかれたことばを見て理解すること。

この基本的な意味での「よむ」の対象をわけると，つぎのような種類がある。

a) 言語作品

○安吉は『文つかひ』という鷗外の小説を読んだことがあった。(むらぎも 85)

○彼女はいそいで，戸部雄三の指導要録を読んでみた。(人間の壁・上 81)

この「小説」「指導要録」など，言語作品の種類をしめす目的語をとる例は，いちばん多いようだ。ほかには，つぎのようなものがある。

演説 戯曲 記事 記録 原作 広告 告白 作 作品 作文 詩 辞 手記 知らせ 随筆 筋書き 説教 説明 戦史 速報 弔詞 著述 伝 日記 判決 批判 文章 返事 報道 翻訳 要旨 論文

b) 言語作品をのせたもの

たとえば，つぎの各組を比較。

○心細い気持で古い外国の文学をばかり読んでゐた。(冬の宿 8)

○東独，ルーマニアといったあたりを見

○文学が専門だから，文学書は私より余計読でゐたといふ丈で、(半月 97)

○フラッドの声を耳にしながらハースは

てまわっての報告を読んでみると，（週刊読売 1956年11月25日 49）

○少女は固い声でなおも漫画をよみ，（人間の壁・上 36）

報告書を読んだ。（宝石 1956年11月 259）

○いつまでも漫画本を読んでいる。（人間の壁・上 36）

「文学」「報告」「漫画」は言語（芸術）作品で，物体ではない。これに対して「文学書」「報告書」「漫画本」は1つ2つとかぞえることのできる物体である。しかし，もちろん，ここではこれを物体として扱っているのではなくて，そこに書かれていることばを問題にしているのである。これと逆に，「小説」や「漫画」ということばも，具体的な本を，つまり物体をあらわすものとして用いることができる。たとえば「小説（漫画）をふんづける（けとばす・もやす）」という表現ではそうである。

この類に属するものには，つぎのようなものがある。

絵本 教科書 原稿 雑誌 参考書 書物 書類 新聞 全集 手紙 ノート 葉書 パンフレット 古本 本 名刺 夕刊 洋書

これらのなかには，比較的物体としての性質がつよいものと，そうでないものとがある。「書類」や「名刺」は前者，「原稿」や「手紙」は後者であって，後者のばあいには言語作品との区別がつけにくい。

c）言語形式

これは「言語作品」ということばを広くとれば，その中にふくまれるものだが，一応「作品」とよぶにはみじかすぎるものをまとめた。

○安吉はレスボスの愛といった風の言葉を読んだことがあった。（むらぎも 198）

○そのとき彼はもう一度封筒をひろげてその宛先をよんだ。（真空地帯・上 135）

ほかに，

上書 句 社名 姓 名 文句

なお，つぎの文の「書込んであるのを」も，「書込んであることば（文・文句）を」というのと同義とみれば，ここにはいる。

○そして其地図に〔中略〕と書込んであるのを読んだ事がある。（武蔵野 5）

d）作品名・作家名

作品名のばあいは，当然言語作品としてまとめたものと同類である。

○『魔風恋風』や『金色夜叉』などを読んではならんと（蒲団 11）

○僕がバイブルを読んだことはこんな智慧となつて芽を出しました。（冬の宿 171）

これらは，「小説をよむ」「経典をよむ」などと同じだ。また，

○安吉はいわば偶然に啄木を読んだのに過ぎなかった。（むらぎも 298）

のような例における作家名は，この文脈では，その作品をあらわすものとして使われているので，これも「バイブルをよむ」というのとかわりない。

e）言語作品などを別の観点からとらえた表現

○こんなうらぶれた思いの日，チェーホフよ，アルツイバアセフよ，シュニッツラア，私の心の古里を読みたいものだと思う。（放浪記 79）

○安吉は封筒の中身を読んで行った。（むらぎも 275～276）

f）言語作品の部分

○こゝに一つ最近に来た友の手紙がある。その一部をよんで見よう。（友情 119）

○こゝを読んだら，恐らく唾でも吐きかけたくなるだらう。（或る女・前 204）

ほかに，

あと 箇所 さき 部分

g）言語作品の量

○行介は書出の数行を読んだだけで，（波 110）

○しかし相手は案外とどこおりなく一節をしまいまで読んだ。（むらぎも 33）

h）言語

○ラテン語をペラペラ読みますよ。（新潮 1956年4月 156）

i）文字

○併し最初の二字を読んだだけで，彼の眼は真暗にされてしまつた。（波 32）

○あんな文字を仙が本当に読むのかしらと怪しみおどろいた。（仲子・上 23）

ここでちょっと問題になるのは，「文字をよむ」とはどのようなことか，という点である。これが，文字を見てそれをことばになおし，その意味をとる全過程をいうのであれば，それは今まであげてきた「小説をよむ」「姓名をよむ」などと同じだ。しかし，もし「文字をよむ」が文字を見て音になおすところまでで，意味をとるところまではふくまないとすると，「文字にかかれたことばを見て理解すること」という最初の規定にあわない。子どもが1字1字声に出してたどっているが，文章の意味はわからない，というようなばあいにも，やはりこれを「よむ」といえるだろうが，そのばあいには，ほかの「よむ」とは区別しなければならない。

○夜中悪い精神の跳梁から寝つけなくなると，本を読んでも読んでいる字の意味を頭がまるで受けつけなくなる。（暗夜行路・前 129）

という例が，字を音声になおすことはなおしても，その意味をとることはしない，ということならば，今いったばあいにあたる。しかし，この例もそれほどはっきり事実を言いきっているわけではなく，ただ字をながめているだけ（つまり音声になおすこともしない）かもしれない。また，上にあげた「仲子」の例は，古代ペルシャの文字をよむことであり，ペルシャ文字はよめる（つまり音声になおせる）が，ペルシャ語はしらないから文章の意味はわからない，というような段階でも，「文字をよむ」といえるかもしれない。しかし，少なくとも上の場面で，仙はペルシャ語の意味までわかったはずであり，これも「文字だけよんで意味がわからない」例にはならない。

つぎの例は，直接的には「我事」という文字をどうことばにするかをいっているが，これもつまり意味のとり方のちがいに出発しているのである。

○菊池さんは，いつも「我れ事」と書いておられたが，私は「我が事」と読む方がよろしいのだろうと思っている。（私の人生観 112）

結局，意味ぬきで文字だけよむ（音声になおす）ことをあらわすよい実例はなかった

のである。それがあれば，あるいは基本的な意味と別に一項もうけるべきかもしれないが，しばらく独立の項を立てるのは見あわせておく。

さらにやっかいなのは，最近の問題として出てきた，機械がことばや文字を「よむ」という表現だ。

○だから「日本語を読む機械」は，やはり日本の科学者が（文字を読む機械 391）

○文字を読む機械に，この表をおぼえさせておけば，それと比べて，数字を“読む”ことができるわけだ。（文字を読む機械 389）

「日本語を読む」といっても，人間とおなじように，その内容を理解するわけではないし，「文字を読む」といっても音声化するわけではない。これらの表現は，機械がある記号（ことば・文字）を人間にちかいし方で扱うことをあらわしているにすぎない。人間のばあい，ことばと現実との関係，ことばと音声との関係がつかめなければ，よめたことにはならないが，機械では，記号間の対応関係がつけられれば（たとえば，「タ」のキーをおしたときに，ta と打ち出せれば），それで十分よめたことになる。機械を中心にして考えれば，「よむ」とは，ある記号があたえられたときに，それにふさわしい反応をえらびとることである。実は，人間のばあいの「よむ」の行動は，その1つの限定されたばあいだともいえる。

引用符をつけることがある点からみても，この用法は，まだ完全に定着しきったとはいえず，比ゆ的なニュアンスがある。しかし，ほかにかわるべき表現もないから，事実が一般化すれば，この表現もいずれは定着するだろう。そして，機械の発達にともなって，この「よむ」のような例は，これから，ますますふえていくだろう。そして，そうなると，「機械がよむ」ばあいが逆に一般的な「よむ」の規定にあてはまるものとして〔00〕の位置にあり，「人間がよむ」ことはその特別なばあいとして〔01〕の位置をしめる，ということになるかもしれない。

j）内容

○新聞で蓮太郎のことを読んで見舞状まで書いた丑松は，（破戒 99）

○大体こんな風な状景を読んだと思う。（世潮 1954年4月 36）

これも，「 ～ のを」の形をうけることがある。

○ある種の女たちが，品性のよくない，生活能力なぞも一向にない男たちに，かれらの容貌や体格だけから引かれて行くのを見聞きもし，読みもして，（むらぎも 37）

さて，以上a）言語作品 から j）内容まで，「よむ」対象となるものを10にわけたが，注意すべきことは，これらの対象がつねに「 ～ を」の形であらわれるのではない，ということだ。以上のa）～j）までの各グループに属する単語が，2つ以上同時に「よむ」にかかることがあり，その際1つは「 ～ を」になるが，ほかのものは「～で」などの形をとる。たとえば，「本をよむ」「書物をよむ」というのは多くみられる表現だが，この「本」「書物」（bグループ）がつぎのように内容をあらわすことば「事例」「原則」（jグループ）とともに「よむ」に関係するとき，「本で」「書物で」

の形になる。

○台長夫人はいろいろな本で，年ごろの娘が些細なことから自殺するおそろしい事例を読んでゐた。（潮騒 150）

○書物で民主主義の原則を読むのとは違う。（中央公論 1954年1月 21～22）

つぎの例は，やはりbグループに属する名詞「(パンフレットのやうな）もの」「名刺」が，cグループ（言語形式）に属する「言葉」「名」とともにつかわれたとき，「～で」の形をとったものである。

○きぬ子の事件があつた後で，さういふ意味の言葉を何か小さなパンフレットのやうなもので読んだ時，（波 295～296）

○髪のふさふさと豊かな少女の名を，貰つた名刺で読んだ。（帰郷 141）

もちろん，bグループの名詞が「～で」であらわれるのは，ほかに実際に「～を」がつかわれているときにかぎるものではない。

○あの先生が信州へ来てるさうだねえ。昨日僕は新聞で読んだ。（破戒 187）

また，つぎの例は，hグループ（言語）の「ドイツ語」が，eグループ（他の観点からの表現）の「真物」と共存して「～で」になったものである。

○社会主義の書物が読みたければ読ましてやるから，ドイツ語で真物を読め，（真知子・前 140）

2つのものごとが同時に「よむ」に関係するとき，それらは「～を」と「～で」の形で言いわけられるとはかぎらない。つぎの例では，一方が格助詞をともなわない形で，「～を」と共存している。

○宣伝用の赤本を一二冊読んで社会主義を卒業したつもりなら（真知子・前 140）

これと近い事実が，つぎの例では，一方が他方の修飾語になることで表現されている。

○この一通の手紙を読んで居る中，（蒲団 24）

○漸く刑法講義の一枚も読むだかと思ふと，もう頼まうと来る。（平凡 71）

「よむ」には，また，つぎに示すように，「(ある文字が）～と発音される」ということをあらわす用法がある。

○伴と書いてとも子と読みます。（帰郷 141）

○細川七段の名は，チヒロとよむ。（棋道 1956年3月 112）

このばあい，「よむ」は本来の他動詞的用法ではなく，むしろ文字を主体とする性質の表現になっている。つまり，だれが「よむ」のか，という，動作の主体はあいまいになり，一般化される。つぎの例で，前の「読まないで」に対しては，「みなさんは」という主語をおぎなってみることができるが，あとの「読む」についてはそれができない。

○僕の芸名は本名と同じですが，朗（あきら）を“ろう”と読まないで下さい。“あきら”と読むのですから。（小説サロン 1956年3月 135）

しかし，ここでは，この用法を完全に自動詞化したものとしてほかの他動詞的用法から切りはなすことはしなかった。その理由は，「名は，チヒロとよむ。」の「名は」を主

格といいきることに問題があるからである。「名を，チヒロとよむ」というのがおちつかないのと同様に，「名が，チヒロとよむ」もおちつかない。つまり，この「名は」は対格とも主格とも，いいきれないものである。しかも，これに近い自動詞化の現象は，「当店の屋号は『越後屋』といいます（申します）」「林という字は木を2つならべてかく」「この薬がうっている店」など，いろいろな動詞にいろいろな形でおこっているものだから，それらについて1とおり眺めた上でないと，これを別の意味にするのが適当かどうかの判断はくだせない。

つぎの慣用句も，上にあげたものに近い。

○幾何学（ジオメトリー）は，読んで字のごとく ge（土地）の metria（測定）から起こり，（抵抗の科学 300～301）

〔001〕（お経などを）声を出してとなえること。

文章を「よむ」ばあい，たいていは黙読だが，音読することもある。

○竜二にきかせるために，十吉は声を出して読み，（潮騒 99）

○彼は一晩かゝつて，自宅（うち）できぬ子の読む弔辞を代作した。（波 42）

しかし，また，黙読か音読か，はっきりしない例もある。声に出して「よむ」かどうかは，文字にかかれたことばをみてその内容を理解する，という本質に関係ないから，いちいちの例について黙読と音読とをふるいわけるのは無意味だ。これらは，すべて〔000〕に属する。

しかし，「文字にかかれたことばをみる」という過程をふくまずに，ただ声に出してとなえることだけをあらわす，つぎのような例は，〔000〕の例と区別しなければならない。

○市九郎は，此の不幸な遭難者に，一遍の経を読むと，（恩讐の彼方に 73）

この類のものは「経をよむ」しか実例がなかったが，講談で，ある作品をかたるようなばあいにも，やはり「よむ」というはずである。

〔002〕（はかりの）目盛りを見て量を知ること。

はじめに，「文字にかかれたことばを……」と規定したが，この「文字」のなかには，記号類もふくまれる。たとえば，数学の＋，－，∴など。数字はもちろんほかの文字と区別する必要がない。

○秤の上の子供が替るたびに，目盛り盤の上を針がふるえながら動く。彼女は機械的に数字を読み，機械的に記録してゆく。（人間の壁・上 129）

しかし，これとおなじような動作でも，つぎの「目をよむ」は，ややズレている。

○商人は分銅の手を抑へて又目を読んだ。（土・上 44）

○やはり正確に秤の目を読むときの調子でそれをいっていた。（むらぎも 24）

つまり，文字以外の記号のばあいにも，一定の形が一定の読み方とむすびついている点では文字と同じなのだが，はかりの目は，単にきざんであるにすぎず，その「読み方」

は，相対的な位置だけによってきまるものだからである。ここから，「数をよむ」などへズレていくものとおもわれる。

〔01〕 数をかぞえること。

「はかりの目をよむ」のように，文字でないものを数に訳すことから，さらに，ものの数をかぞえる，つぎのような用例がうまれる。

○舟を淵の上にとめて水深に割宛てられる蛇籠の数をよんでゐたりした。（あにいもうと 133）

つぎの例では，もう一歩すすんで，ただ口のなかで数をとなえるだけのことをあらわしている。

○それもあんまり悪いかしら，などと思ひ迷つて，どつちかにきめる間を，口のなかで，一から十までの数をよむことにした。（多情仏心・前 247～248）

ただし，これらは，どちらも現代語としてはあまり使われない用法だろう。

なお，「さばをよむ」という慣用句も，起源的にはここに属するものとおもわれる。

○日本の皇室史は六百年ばかりサバを読んでいる。（文芸春秋 1954年3月 189）

〔020〕 表面にあらわれていないもの（主として人の心）を，あらわれているものから推察すること。

これには，＜あらわれていないもの＞を目的語とした例と，＜あらわれているもの＞を目的語とした例とがある。

前者の例には，

○女は，私の心を読んだのであらうか。平坦な口調でいつた。（冬の宿 13）

○私は二人が私に対して有つてゐる過分な希望を読んだ。（こゝろ 115）

などがあり，ほかに「意向」「好意」「心底」などをうける例がある。

後者の例には，

○私はその表情を読まうと思つたが，暗くて見えなかつた。（冬の宿 180）

○広い鼻をした上等兵の顔をじっと読んでいた。（真空地帯・上 31）

などのほか，「眼」「目の色」「顔色」をうけた例がある。

これら2つの関係は，いわば手段と目的（または結果）であって，「顔色」を見て，「心」を知るのである。「本をよむ」と「(本で）あることがらをよむ」とのちがいに近いといえるだろう。つぎの例では，これら2種類のものが，「～に～を」という形で，ならんで「よむ」にかかっている。

○一目で，そこに，偽りのない好意を読んだ。（多情仏心・前 171）

この「そこに」は，ここでは「女の目に」ということである。「女の目をよむ」「好意をよむ」は，ともにそれだけでなりたつ表現であるが，ここではそれを1つにまとめたものである。

この用法について問題なのは，「表面にあらわれていないものを推察する」のように

一般化した規定を与えてもよいか，ということである。実例としては，顔・目などにあらわれた表情から，他人の心を推察する例が大部分で，それ以外にはつぎのような数例があっただけである。

○蓮華寺の内部の光景——今は丑松も明に其真相を読むことが出来た。（破戒 250）

○恭吾が賭博の運の目を読む不思議な眼力を持つた男だと，（帰郷 68）

○彼の哲学に反知性主義などを読んでしまうのだ。（私の人生観 135）

したがって，「表情を見て他人の心を察する」のような規定ではせますぎるとしても，推察・推定一般にまでひろげてよいかどうかは，かなり疑問である。たとえば，「列車事故の原因をよむ」「遺跡の状態から当時の社会構造をよむ」などとはいえないだろう。しかし，では，推察・推定一般に対してどのような限定をくわえれば，この意味の「よむ」の規定として正確なものになるか，ということは，まだわからない。上にあげた「破戒」「帰郷」の例は，かなり臨時的にもおもわれるが，この点も，もっと用例がふえないと，はっきりはいえない。

〔021〕 碁・将棋などで，これから先の手や局面を考えること。

「十手先までよむ」などは，よくつかう表現だが，実例はなかった。「考える」という規定では，多分不正確であろう。というのは「いい手を考えた」のように，生産的な「考えつく」という意味のばあいには，「いい手をよんだ」とはいわないだろうから。しかし，用例がないので，これ以上追求することは，しないでおく。

この用法も，すでにすんでしまった，つまり表面にあらわれてしまった手をもとにして，これからさきの，つまり表面にあらわれていない手を考える，という点で〔020〕に近いものである。

これが比ゆ的にもちいられたものに，つぎの例がある。

○ジョンソン大統領もまた，“敵”の手をあれこれ読んだに違いない。（学問の動き 245）

〔1〕 詩歌をつくること。

「詩歌」といっても，ふつうは和歌・俳句をつくることである。

○かような歌をよむからにはお前は恋をしたのに相違ない。（出家とその弟子 72）

○蕪村が編集した女流俳人ばかりの句集に玉藻集というのがあって，その中に遊女の詠んだものが幾つかある。（婦人公論 1956年1月 244）

これらの例では，「よむ」対象として表現されているのは，結果（生産物）としての和歌や俳句だが，また，内容・題材を対象としていうこともある。

○古今集にも新古今にも勿論人間のネガティーブな面をよんだ作品は多くある。（短歌 1956年3月 36）

○一茶の句もこの行事をよんだものであるが，（週刊読売 1956年7月29日 44）

和歌・俳句以外の詩について「よむ」がつかわれることはまれで，調査資料のなかで

は，つぎの1例があっただけである。

○バーシイ・シェリーが，ジョン・キーツの死を悼んでよんだ，一八二一年ピサ刊の『挽歌』"Adonais" の（中央公論 1953年7月 173）

ほかの「よむ」が大体理解の過程をあらわしているのに対し，この「よむ」は言語作品の生産を，表現の過程をあらわしている点で，大きく対立する。しかし，言語作品を対象とする行動だという点では，これは〔01〕「数をよむ」，〔02〕「心をよむ」などにではなく，〔00〕「本をよむ」のグループに，直接関係しているとおもわれる。

〔雑誌90種の資料による統計〕

		かな	読	訓	詠	計			かな	読	訓	詠	計
000）	本を～	11	98	1	–	110	020）	心を～	–	–	–	–	–
001）	お経を～	–	–	–	–	–	021）	十手先まで～	–	–	–	–	–
002）	はかりの目を～	–	–	–	–	–	1）	和歌を～	2	–	–	1	3
01）	数を～	–	1	–	–	1							

13. 感覚動詞

感覚をあらわす動詞は，

みる ～ みえる

きく ～ きこえる

のように，自動詞と他動詞とが対をなしていることが多い。そして，その感覚の持ち主である人間などを〔感覚の主体〕，視覚・聴覚などをひきおこす，刺激をあたえるものを〔感覚の対象〕とよぶことにすると，自動詞では，

（対象）が　（主体）に　動詞

（例）船が　わたしに　みえる。

となり，他動詞では，

（主体）が　（対象）を　動詞

（例）わたしが　船を　みる。

となる。どちらにしても，表現を成立させる基本的な要素は，感覚・主体・対象の3つである。以下，これら3つの要素について，それぞれ検討することにする。すなわち，

(1) 感覚をあらわす動詞には，どのようなものがあるか。

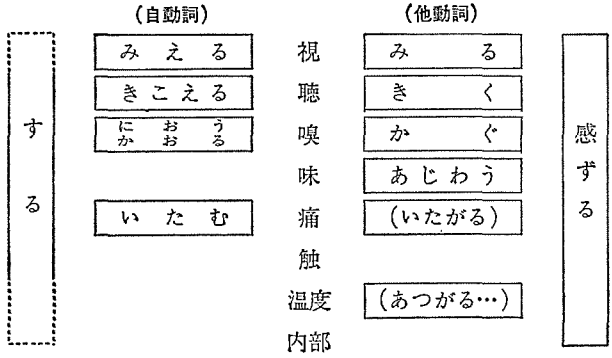
(2) 感覚の主体としては，どのようなものが表現されるか。

(3) 感覚の対象としては，どのようなものが表現されるか。

(1) 感覚をあらわす動詞には，どのようなものがあるか。

視覚・聴覚など，1つ1つの感覚をあらわす動詞のほかに，いろいろな分野の現象をひっくるめてあらわすものとして，自動詞に「する」，他動詞に「感ずる」がある。それ

で，図にまとめると，下のようになる。



点線の部分は，問題のあるところである。ここでは，特に，一般的な表現である「する」「感ずる」がどのくらいの領域をおおうかを問題にしたいが，その前に，個別的な感覚の表現について，2，3ふれておこう。

①「あじわう」に対応する自動詞はない。これは，味が音・においとちがって，物体から切りはなした形では存在しないことと関係があるのだろう。この点，色・形など視覚の対象となるものも，物体から切りはなせないが，「あじわう」ことは，「みる」ことよりも一層能動的な行為を必要とする。

②「傷がいたむ」に対応する他動詞としては，「傷をいたがる」が考えられる。

○お増が火を焚きにきて非常に皸（あかぎれ）を痛がつてゐるから，（野菊の墓 28）

しかし，この「～がる」という形は，感覚においてとらえることを表わす，というよりも，そのような感じを外に対して示すことを表わす，というべきだろう。「いたくもないのに，いたがってみせる」などの例はその証拠になる。この点，「あつがる」「さむがる」などについても同様だ。それで，これらは，「みる」「かぐ」などと同じ資格の他動詞としては扱わない。

③触覚をあらわすようにみえるものに「さわる」がある。もし，触覚をあらわすなら，

○仲子は，父の額に触つて見た。（仲子・上 55）

のように，「さわる」主体が人間のものは，「みる」など他動詞の類に，

○コンクリートの煤けた壁が少女の背中にさはつた。（潮騒 68）

のように，その逆の関係にあるものは「みえる」など他動詞の類に，それぞれなぞらえることができる。しかし，「みる」が視覚によって対象をとらえることを表わすのと同様に，「さわる」が触覚による知覚を表わす，とはいえないだろう。「（手で）額にさわる」のも，「壁が背中にさわる」のも，

○きっ先が相手の刀にさわれば，相手は必ず切ってくる。（中央公論 1956年2月 258）

のように，ともに感覚をもっていないものどうしが「さわる」のと同じであろう。つま

り，これらはすべて物理的な接触をあらわすのであって，触覚をあらわすとはいえないと思われる。このことは，「自動車がはしるのをみた」のように「～が～するのを（に）」の形で，一定の内容をもった現象・事件が「みる」対象となりうるのに対し「さわる」はつねにものを対象とする点からもいえると思われるのだが，この点は，あとで，感覚動詞のとる対象の種類を問題にするところを参照。

なお，「さわる」は，ふつう自動詞として「～にさわる」という形をとるが，つぎのように他動詞としてつかわれた例もある。

○片手で膝のところをさわって「えへへ……」と笑った。（むらぎも 85）

○余りの道ぢやから，手を触るさへ暑くるしい，旅の法衣（ころも）の袖をかゝげて，表紙を附けた折本になつてるのを〔地図を〕引張り出した。（高野聖 6）

ただし，この「高野聖」の例は特殊だろう。「手をさわる」の実例はこれしかなかった。「むらぎも」のように，さわる対象を「～を」であらわすのは，ほかにも2，3の例があった。

④「内部感覚」としたのは，空腹・疲労・めまいなどの感じである。これらは，一つの動詞であらわされるのではなく，「～がする」「～を感ずる」などの形であらわれる。

さて，いろいろな感覚の領域をおおう，抽象的な表現としては，自動詞に「する」，他動詞に「感ずる」がある。これらは，「みる」「きく」などの適用範囲だけでなく，それらの個別的な表現をもっていない領域にもつかえるのである。各分野の実例を以下にあげよう。

	「す　る」	「感ずる」
（視　覚）		
	○ふいと，どこかで，光り物がして（帰郷 71）	○室内に流れる冷たい灰色の払暁の光線を感じた。（仲子・上 68）
（聴　覚）		
	○私の背後にふと軽い足音がした。（風立ちぬ 135）	○それ等の楽の音を感ずるやうになつてからは，（田園の憂鬱 88）
（嗅　覚）		
	○鉄の臭のする唐鍬を提て勘次は復土手を走つた。（土・上 100～101）	○西洋臭いその匂ひを快く鼻に感じながら，（或る女・前 114）
（味　覚）		
	○これは戦後シチュウだ。つくづくと，敗戦の味がする—（自由学校 175）	○何本目かで私は漸くその甘味を感じ，（野火 53）
（痛　覚）		
	○洋装が大嫌いで，ズロースをはくと，頭痛がするという。（自由学校 101）	○お島は，腰の方にまた劇しい疼痛を感じた。（あらくれ 165）

（触　覚）

○「春」を着物に仕立てたら，こんな肌ざはりがするんではないらしら，（波 89）

○葉子の手はもうめれんすの弾力のある軟かい触感を感じてゐた。（或る女・前 62）

（温度感覚）

○脊椎骨の接ぎ目接ぎ目に寒気がするほどで（河明り 308）

○寒さを少しも感じなかった。（厭がらせの年齢 273）

（内部感覚）

○目まいがしたり，むかついたり，（主婦と生活 1956年6月 455）

○息も切れなければ，眩暈も感じなかった。（こゝろ 60～61）

以上のように，「する」「感ずる」は，あらゆる領域にわたる表現だが，この両者のあいだにも，またこれらと「みる」などの個別的な感覚の表現とのあいだにも，いろいろなズレがあり，完全におきかえうるという対応関係にはない。それらの点について，つぎにのべる。

① 「(～が) する」と「「(～を) 感ずる」との対応

たいていのばあい，「(～を) 感ずる」といえれば「(～が) する」ともいえるが，つねにそうとはかぎらない。たとえば，上にあげた例のうち「音」「におい」「めまい」については「感ずる」「する」の両方が結びついているが「寒さ」に対しては「感ずる」しか結びつかない。結びつき方からみると，つぎのように分類できる。

〈両方に結びつくもの〉	〈「感ずる」とだけ結びつくもの〉
光り物　稲光り	光　光線
音　足音　ひびき	
におい　かおり	
味　（甘味？）	
頭痛　疼痛	いたみ　いたさ
肌ざわり	触感
寒け	寒さ　暑さ　涼しさ
めまい　はきけ　（船よい？）	つかれ　疲労　飢え　空腹　ひもじさ

これらをくらべてみると，より動的な，現象をあらわすものは「(～が) する」と結びつき，より静的な，状態をあらわすものはこれと結びつかない，といえる。このことは，今問題にしている感覚という領域をはなれて一般的に考えたばあい，「(～が) する」が広く現象名詞と結びつくこと，一方「(～を) 感ずる」の対象としては物体や性質であってもかまわないこと，などから当然予想されることだ。しかし，純粋に意味的にだけみたばあい，「頭痛」は現象で「いたみ」は状態と，それぞれ別の分野に属する，とは，かんたんに言いきれないだろう。したがって，この区別は，意味に裏打ちされてはいるが，直接的には結びつき方における区別だ。

なお，「感ずる」は自動詞としてもちいられることもある。つぎの例を比較。

〈他動詞〉	〈自動詞〉
○例えば外部から刺激として与えられる同じ電流を，眼は光と感じ皮膚の或る点では痛みと感じるなどである。（哲学以前 196）	○われわれの目に感ずるもっとも波長の短い光は菫色でその波長は十万分の四粍に過ぎない。（物質世界の客観性について 280）

② 「（～が）する」と「きこえる」などとの対応

「味がする」「寒けがする」「めまいがする」などにあたる個別的な感覚動詞はない。その点で，「（～が）する」は個別的な感覚動詞を集めたものよりも領域がひろい。さらに，「音がする ～ きこえる」「においがする ～ におう」のように対応する表現があるばあいにも，つぎのようなちがいがある。

(A) 「音がきこえる」「かおりがにおう」のように＜現象＋が＞のいいかたのほかに，「タイコがきこえる」「花がにおう」のような＜もの＋が＞のいいかたがある。「する」のばあいは，＜現象＋が＞の形があるだけで，「タイコがする」「花がする」のような＜もの＋が＞のいいかたはない。

(B) 「（～が）する」は，正確にいえば，感覚の表現ではなく現象の表現――対象がそのような感覚をひきおこすような状態にあることの表現だ。（ただし「頭痛」「寒け」「めまい」などのばあいは，対象が自分の内にあるので，この両者を区別することができない。）

音や光は，人間によって認識されることと，単に存在することとのへだたりが小さく，「音がした」は「音がきこえた」にちかいが，つぎのような例では，夕立ちや雪どけという現象が客観的におこったことをいっているのであって，それらが「みえた」あるいは「きこえた」ということではない。

○あそこへ行く途中，どこかで夕立がして……虹が浮んだ……（田園の憂鬱 93）

○雪解けのした村の中を，（風立ちぬ 154）

○私達は絶えず落葉のしてゐる雑木林の中へはひつて行つた。（風立ちぬ 129）

(C) 上にのべたことは，「（～が）する」では感覚の主体が表現されない，という点にもあらわれている。「きこえる」については，

○非常に高い，澄んだ鈴の音が彼に聞えたからだった。（むらぎも 205）

○未亡人の耳に，まもなくモーターの発火する音がきこえ，（人間の壁・上 110）

のように，感覚の主体（または感覚器官）が「～に」の形で示されることがあるが，「音がする」については，このようなことはない。「音がする」は聞き手のありなしにかかわりない客観的な現象だからである。

③ 「（～を）感ずる」と「みる」などとの対応

このばあいにも，「めまいを感ずる」にあたるような動詞はないから，それだけ「（を）

感ずる」の領域は広いといえるが，その用例のうち，「音を感ずる」「いたみを感ずる」のように個々の感覚にわりあてることができるものは，そう多くない。具体名詞が目的語になっているばあい，たとえば，

○激しい男の息づかいを感じると，私は涙が霧のようにあふれて来た。（放浪記 39）

という例では，触覚も，温度感覚も，あるいはおそらく聴覚も動員されて，総合的に感じとっているはずだ。

「音を感ずる」「においを感ずる」などと，現象・性質をあらわす目的語をともなっているばあいには，個別的な「きく」「かぐ」などの感覚動詞にちかい。たとえば，つぎの2つの例では，「感ずる」と「かぐ」とをいれかえても，不自然ではない。

○西洋臭いその匂ひを快く鼻に感じながら，（或る女・前 114）

○のんびりした心持ちで樫の芽の強いかおりをかぎながら（暗夜行路・前 241）

ただし，このようにおきかえができるのは，無意志的な動作のばあいにかぎられる。つぎの例では，「かぐ」が意志的な動作とみられ，「感ずる」におきかえることはむずかしい。

○私はしみじみと白粉の匂いをかいだ。（放浪記 124）

(2) 感覚の主体としては，どのようなものが表現されるか

他動詞のばあい，感覚の主体は，「わたしが（は）みる」のように主語として表現される。これは，「みる」「きく」「かぐ」「あじわう」「（～を）感ずる」などに実例がある。一方，自動詞では，「わたしにみえる」のように，「～に」の形であらわされ，これは，「みえる」「きこえる」に実例があった。

感覚の主体として人間が表現されているばあいについては，特にいうべきことはない。ところが，人間のほかに感覚器官が主体としてあらわされている例が，視覚・聴覚のばあいにはある。

（視覚）

○下人の目は，その時，はじめてその死骸の中にうずくまっている人間を見た。（羅生門 11）

○二つの白い綿帽子が目に見えてくる。（むらぎも 356）

感覚器官のワクを広くとれば，つぎの例もこの延長上にある。

○広介の弱気に笑った顔が明子をじっと見た。（くれない 136）

（聴覚）

○それは彼の口で言ふのだが，彼の声ではない。その誰かの声を彼の耳が聞く。（田園の憂鬱 118）

○その耳には武家屋敷からきこえて来る百足の這うような静かな跫音が聞えつづけている。（落城 37）

これらの例で，ことさらに感覚器官を問題にしているのは，何か特別の表現効果をねらっているのであろう。事実としては，「みる」「きく」動作は当然目・耳ですること

だから，これを特にいいたてても，あたらしい情報をつけくわえたことにはならない。「下人の目は……人間を見た」（羅生門）というのは，要するに「下人は……人間を見た」というのとおなじだ。にもかかわらず，わざわざ「下人の目は」としたことは，このばあい，「みる」という動作が下人の意志と関係なくおこったこと，いわば，下人にはその気がないのに目だけがかってに行動して，みてしまったかのように，偶然おこったことであることを暗示する効果をもっている。「田園の憂鬱」における「きく」の例は，これとおなじような効果を一層はっきり，典型的に示している。「落城」の「きこえ（つづけ）る」も，ほぼおなじといっていいだろう。（p. 127 参照。）

「むらぎも」の「目に見えてくる」は，これらとは，ややちがった効果をあげている。これも事実としては単に「見えてくる」というのとかわりないが，それが一層具体的な形象としてえがかれることになるのである。これは，想像をしているようすをえがいたものだが，頭のなかで概念的に考えたのではなくて，実際まのあたりみるような，いきいきしたイメージをえがいたのだ，という点が強調されることになる。「足であるく」などとおなじ種類の効果だ。

感覚器官は，また，当然「目で（に）」「耳で（に）」と，手段としての表現をもうける。このばあいも，べつだん情報がますわけではないことは，主体としての表現とおなじだ。このような表現がとられる理由の1つは，「むらぎも」の「目に見えてくる」と同様，描写を具体化するところにある。

○蔵裏（くり）の下座敷――それはもう目に見ないでも，斯うして声を聞いたばかりで，人々の光景（ありさま）が手に取るやうに解る。（破戒 207）

○もう死んでゐる彼女はしかし，棺の中から，すつかり冬枯れた野面や，黒い樅の木などをありありと見たり，その上をさびしく吹いて過ぎる風の音を耳に聞いたりしてゐた，（風立ちぬ 106）

などはそれにあたる例だ。

しかし，もっとおおいのは，目や耳をほかのことばで形容・限定した例である。

○平野はキラキラ輝く眼で仲子を見，短く笑つた。（仲子・上 39）

○手拭の下から黒い瞳で青年を見るのであつた。（土・上 121）

○私は私にも最後の決断が必要だといふ声を心の耳で聞きました。（こゝろ 257）

これらの例では＿＿の部分の修飾語をいう必要があったために，「眼」などがもちだされたのである。

(3) 感覚の対象としては，どのようなものが表現されるか。

これには，大きくわけて，2種類が考えられる。「におう」という動詞を例にとると，

○誰も居ないサロンの壁に，薔薇の黄いろい花がよくにおっていた。（放浪記 259）

○綺麗に分けた濃い髪のポマードの匂ひがプンと部屋に匂つた。（冬の宿 39）

のように，「花」というもの・実体も，「匂ひ」という，その実体の性質も，ともに感

覚をひきおこす対象として表現される。「かおる」「かぐ」という，嗅覚の動詞についても，やはり，もののばあいと性質のばあいとがある。

〈も　の〉

○つりがねさうか野ぎくかの花が，そこらいちめんに，夢の中からでも薫りだしたといふやうに咲き，（銀河鉄道の夜 257）

○時ちゃんは吉さんの鳥打帽子の内側をかぎながら，子供っぽく目をうるませていた。（放浪記 264）

〈性　質〉

○お志保も近くて，髪の香(にほひ)が心地よくかをりかゝる。（破戒 213）

○私はしみじみと白粉の匂いをかいだ。（放浪記 124）

○豚のように臭みをかぎながら（放浪記 130）

○樫の芽の強いかおりをかぎながら（暗夜行路・前 241）

このように2種類の対象があらわれるのは，嗅覚だけではなく，ほかの感覚についてもほぼ同様である。そして，対象がものであるばあいには，いろいろな単語がくるが，性質のばあいには，ことばがかぎられている。嗅覚については，大体「におい」か「かおり」で，ほかに上にあげた「くさみ」をかぐ，という1例があっただけである。それで，以下，ほかの感覚についても，性質をあらわす単語が対象になったものは，なるべくその全部を示すことにする。

〔視　覚〕

〈も　の〉

○島村は驚いて駒子を見た。（雪国 147）

○はじめてその男の顔をはつきり見た。（仲子・上 12）

○そして黙って，私の目を見ていた。（放浪記 99）

〈性　質〉

○駒子の姿を見ながら走つてゐるので，（雪国 166）

○私の顔色を見て，すぐ不断の表情に帰りました。（こゝろ 213）

○高の鋭敏な眼付きなどみると，（冬の宿 47）

このほか，性質の類には，つぎのようなものがあった。

形　かっこう　りんかく

色　色合　赤　みどり

顔立ち　顔つき　指つき　眼色　身なり

表情　おもかげ

以上が，いわば静的な性質で，これに対して，

そぶり　歩きっぷり　あわて方　苦しがりよう

などのような動的な性質がある。後者は，一定時間つづく動作についての性質で，それだけ視覚的な性格はうすれている。

ありさま　情景　光景　惨状

などは，静的でも動的でもありうる。

さらにここで注意すべきことは，動作そのものもまた「みる」対象になれることだ。

○見知らぬ動物の動作でも見るやうな無関心で，見てゐた。（野火 143）

つぎのような，できごとをあらわす名詞のばあいも，同様に「みる」の目的語になれる。

○行介は舞台の方こそ向いてゐたが，少しも芝居を見てゐなかつた。（波 172）

○いづれにせよ尾本も田代も肝心の闘牛は全然見てゐなかつた。（闘牛 144）

さて，以上にあげた＜性質＞は，＜もの（実体）＞から切りはなすことができない。つねに実体にともなっているものである。ところが，やはり「もの（実体）」とはよべないけれども，性質とはちがって，実体からはなれたところに存在するものがある。

○鷹か隼かと思はれる鳥の影を見ることはあつても，（李陵 157）

○月を背にして自分の短い影を見た。（田園の憂鬱 78）

この「李陵」の例の「影」は，「姿」とおなじだろう。「鳥の影を見る」とは，「鳥を見る」というのとかわりない。ところが，「田園の憂鬱」の「影」は，その主体である「自分」からはなれて，地面におちている影像である。それは，物体ではない点で＜性質＞にちかいが，主体から空間的にはなれたところに存在する点で＜実体＞にちかい。このように中間的なものを＜現象＞とよぶと，「影」とおなじように「光」にも＜性質＞のばあいと＜現象＞のばあいとを，ひろうことができる。

○春琴の瞳の光を一度も見なかつたことを（春琴抄 146）

○横なぐりに落ちて来る金色の陽光（ひかり）を見ることが出来た。（多情仏心・前 354）

「春琴抄」の例では，「瞳の光」は，瞳にやどっているもので，

○彼が最初の煙を厚い胸の奥深く吸ひこむときに細めた眼の色，ぽッ！　と吐き出したときに開いた眼の輝きをみてゐると，（冬の宿 16）

の「眼の色」「眼の輝き」とほとんど同じだろう。一方，「多情仏心」の例では「陽光」は，これを発している太陽から完全に切りはなされている。したがって，前者を＜性質＞に，後者を＜現象＞に属させることができる。ほかに，＜現象＞の例としては，つぎのようなものがある。

○一瞬私は極楽鳥の幻影を見た。（野火 52）

○それはあんまり結構な，肉眼の見ることのできない明晰で微妙な映像だつたので，若者と許嫁は，船がゆつたりとレンズの視界をよぎるあひだ，譲り合つてかはるがはる見た。（潮騒 161）

「幻影」は「私」の外にあるといえない点で，ほかのとちがうとも思われるが，言語的には区別する必要がないだろう。

以上は，「みる」についてだが，「みえる」の方についても，大体おなじことがいえる。

○母の姿は見えないで，台所で返事がする。（平凡 41）

○ひよいひよいと構太の，雪のある山並の堅い線が見えた。（蟹工船 20）

などは＜性質＞，

○雨戸の隙間から白い光が見えている。（くれない 12）

○しかし，切り抜いたように，矩形の薄明りが見えるのは，（自由学校 154）

などは＜現象＞である。

〔聴　覚〕

「き　く」

＜も　の＞	＜性　質＞
○歌にも槍林の奥で時雨を聞くといふ様なことは見当らない。（武蔵野 10）	○雨の音を夢うつゝの中に聴きながら，（つゆのあとさき 84）
○で，遠音に雪江さんの琴を聴きながら，（平凡 68）	○机の上に頬杖を突きながら，其琴の音を聞いてゐました。（こゝろ 175）
○風呂に入り乍ら蟋蟀（きりぎりす）を聴くなんて，（破戒 39）	○寝牀の下で鳴くこほろぎの声を沁み沁みと聞きつつ，（田園の憂鬱 42）

「きこえる」

○丁度腹を切らうとすると，城の太鼓が微かに聞えた。（阿部一族 41）	○鼓や太鼓の音がのべつ陽気に聞えた。（あらくれ 111）
○どこかで氷を削る音と風鈴が聞える。（放浪記 174）	○非常に高い，澄んだ鈴の音が彼に聞えたからだった。（むらぎも 205）

視覚のばあいとくらべると，性質に属することばが，いちじるしく少ない。上にあげた「音」「ね」「声」，およびこれらを後要素とする「物音」「人声」の類をのぞくと，「ひびき」「うなり」ぐらいしかない。また，これらがすべて＜現象＞のグループに属するものであることも注意すべき点だ。視覚のばあい，「姿」「色」などは実体から空間的に切りはなせない。しかし，「音」や「声」は，これを発する人・楽器などをはなれて，空間的にも別な位置にあってよいものである。

○波の打ち寄せる音が，海岸へ真向いになっているこの家の窓へ，いっぱいに円みをもった激しさで聞えてくるのであった。（くれない 18）

○声は慥にKの室（へや）から出たと思ひました。（こゝろ 212）

このように，移動の表現をとれることからみれば，「音」や「声」が，「色」「形」などよりも，「光」「におい」などと同類に属することは，あきらかである。

以上は，感覚の対象が名詞によって表現されている例であるが，このほか，「みる(みえる)」「きく（きこえる）」については，対象が ＜用言＋「の」＞の形であらわされることもある。

○八春先生は，娘が気のないやうに頷くのを見て，（本日休診 51）

○気違いのように馬に鞭をあてて来るのがみえた。（落城 25）

○雨が屋根づたひにバルコンの上に落ちるのを聞いてゐた。（風立ちぬ 105）

○上甲板で叫んでゐるのが，下迄聞えてきた。（蟹工船 71）

これらの例は，「～姿（ようす，ありさま……）をみる」「～音をきく」などと言いかえられないこともない。しかし，それよりも，「娘が気のないやうに頷く（の）」という現象全体を「みる」対象としている，と考えた方がよさそうにおもわれる。つまり，この「の」は，「姿」「ようす」「音」など，現象の一側面をあらわすことばにあたるのではなくて，「こと」「動作」「現象」など，現象全体をさしているものとおもわれる。（上にのべたように，「動作をみる」という表現もなりたつ。）

このことがはっきりいえるのは，つぎにあげる例のように，「音」「声」などが「～の」という目的語の中にふくまれてしまっているばあいだ。

○聞き馴れた日本軍の機銃と小銃の音が起るのを聞いた。（野火 106）

○おつぎは直ぐ側でかさかさと何かが動くのを聞くと共に，ゐいゐいと豚らしい鳴声のするのを聞いた。（土・上 149）

○声を揃へて笑つたのが，遠くの方に聞えた。（多情仏心・前 164）

「土」の例についていうと，「動くのを聞く」は「動く音を聞く」といいかえられるが，「鳴声のするのを聞いた」を「鳴声のする音を聞いた」とするわけにはいかない。

第3部　意味とほかの性質との関係

1.　動詞の意味と文法的性質

1.1　単語の文法的性質

意味と文法との関係ということが問題になるのは，主として文法論の側からである。その1つは，文法論と意味論との境界線はどこにあるのか，ということだ。たとえば，格助詞「に」の用法をこまかく，いくつにも分けるとき，それはもはや文法論ではなくて，意味論の領域である，といわれることがある。また，文法の記述にあたって，意味はどの程度利用すべきかという形でも，この問題はとりあげられてきた。たとえば，品詞の分類にあたっては，動詞や形容詞の意味，つまりそれが動作や性質をあらわすということを基準としてとるべきかどうかが，議論の対象になる。しかし，ここでは逆に意味論の側から，動詞の語い的意味に文法的性質がどの程度関係しているかということ，記述の方法論についていえば，意味を記述するばあいに文法的性質・文法的条件をどのように利用できるか，ということについて，ながめてみたい。

はじめに，まえおきとして，文法というものについて，どのように考えるかを，すこしのべておこう。ここでは文法論を展開することが目的ではないが，文法についての立ち場がさまざまである以上，あとでふれることについての理解をたすけるために，いくつかの点について，あきらかにしておかなければならないのである。

まず第1に，ここでは，対象を単語の文法的性質に限定する。これは，当面の問題が動詞の語い的意味の記述から出発しているために，当然きまってくることである。文法的性質一般をとりあげるならば，＜文の文法的性質＞ということもはいる。単語以下の形態素についても，＜文法的性質＞ということができるかもしれない。が，ここでとりあげるのは，特にことわらないかぎり，単語のそれについてである。しかし，意味と文法との関係をとりあげようとするときに，研究の対象が単語という単位であることは，当面の便宜上のことではない。文は，単語のばあいとおなじような意味で意味論の対象とすることはできないだろう。文の意味論的研究というものは，もちろんありうるけれども，それはおそらく個々の文の意味に密着したものではなくて，一般的なものだろう。すなわち，単語の意味を前提にし，これこれの種類の意味をもった単語が結合するときに，どのような文が生じうるか，というようなことを研究するものであるだろう。単語の数が有限であるのに対し，文の数は原理的に無限であって，それを意味的な観点から個々に記述するということ，「わたしは本をよんだ」「わたしは手紙をよんだ」「わたしは本をかいた」「わたしは手紙をかいた」などの意味を個々に記述するということは，言語学のしごとではないだろう。一方，形態素については，たしかにそれのもつ語い的意味を記述することはできるが，それのもつ性質を文法的とよんでいいかどうか

かは疑問である。（ここでは，語尾など，それ自身が文法形式を構成する要素であって，語い的意味をもっていない形態素は，はじめから問題にしていない。）形態素も，たしかに一般的，法則的な面をもっている。たとえば，語構成上の性質がそれである。しかし，語構成論が定義上文法論に属するかどうかもうたがわしいし，かりにそれが文法の1分野をなすとしても，そのばあいに見られる性質は，ここで問題にしようとするような，単語にみられる文法的性質にくらべて，はるかに貧弱である。

以上のような理由から，意味と文法との関係を考えるにあたって，特に単語という単位に注目しなければならない必然性があると考える。

第2に，ここで考えている単語が，現在の学校文法でいうところの単語とはかならずしも一致しない，ということについてことわっておきたい。ということは，具体的にいえば，動詞に助詞・助動詞などのついたもの全体をその単語の語形と見なす，ということである。「かきます」「かいた」などの「ます」「た」を助動詞として，別の単語とするならば，「かき」「ます」との関係，「かい」と「た」との関係が，「かく」という単語の文法的性質として，とりあげられなければならない。すなわち，「かく」という単語にとっては，いわゆる活用と助詞・助動詞への接続とが，その文法的性質である，ということになる。しかしここでは，「かいた」「かきます」を1つの語形としてみとめる。したがって，「かく」の文法的性質とは，「かいた」の形をとって過去の意味をもつこと，などである。なお，「かいている」のように，形式的には2単語であっても，なおこれを広い意味での語形としてみとめるばあいがある。

さて，単語の文法的性質にはどのようなものがあるか。これは，いろんな観点から分類することができるが，一応ここでは，つぎのようにわけておく。

形態論的——(1)一定の文法形式（広義の語形）をとりうること。
構文論的——(2)一定の文法形式をとった単語と結びつきうること（連語論的）。
　　——(3)一定の構文上の成分になりうること。

「よむ」という動詞についていえば，「よんだ」「よみます」「よめ」「よんでいる」などの文法形式をとりうることは，(1)の形態論的形式に属する。そして，この動詞がたとえば，「本を」という形式の名詞とは結びつくが，「本の」「本へ」などの形式をとった名詞とは結びつかないということ，あるいは「よんだ本」という形はあるが，「よんだはやく」という形はない，ということ，これらは(2)の連語論的性質に属する。さらに，この動詞が述語や連体修飾語になりうるということは，(3)の性質に属する。これらの区別は同じ現象を別々の側面から見たにすぎないばあいが多い。「よめ」という命令形をとりうるということは，まさに，それが述語になりうることの，1つのあらわれである。「本が」という文法形式をとりうることは，それが用言と結びつくという連語論的な性質，また主語になりうるという，せまい意味での構文論的性質と同じ事実を，別の面からいったにすぎない。したがって，これらの概念はさらに学問的に検討されなければならないものをふくむが，ここでは一応文法的性質を分類するために，この2者3類のグループに分けておく。

さて，単語の文法的性質がちがうというばあい，そのちがい方にもいろんなタイプがある。一般化していえば，つぎのようになる。

単語A，Bにa_1，a_2……a_m;b_1，b_2……b_n という文法形式があるとき，

(1) a_m に対応する b_m がないばあい

のる ～ のれ：ある ～ 0

しずかな ～ しずかに：小さな ～ 0

(2) a_m と b_m とで文法的意味がちがうばあい

現在形で「のる」（未来）：「ある」（現在）

「わたしの」（所属）：「特別の」（質）

(3) a_m と b_m とで手つづきがちがうばあい

のる ～ のれ：みる ～ みろ

しずかな ～ しずかに：どんな ～ どんなに

あとでのべるように，語い的意味と関係するのは，このうち，(1)と(2)だけであって，(3)ではない。

1つの単語が2つ以上の文法的性質をもっているとき，それらのあいだには，やはりいろんな関係がなりたちうる。基本的には，つぎの2つのばあいがある。

第1は，おのおのが無関係であって，その観点からすれば十字分類が成立するようなものである。たとえば，動詞が，「を」格の名詞を要求するかどうかということと，目的地の「に」格を要求するかどうかということは，相互に無関係である。「を」格だけを要求するものには「のむ」「きく」などがあり，「に」格だけを要求するものには「ゆく」「かえる」などがある。そして「はこぶ」は，「荷物を倉庫にはこぶ」のように，両方の格をともに要求することができる。「はじまる」「しぬ」のように，どちらの格をも要求しないものもある。「～ している」の形をとりうるかどうかということと，命令形があるかどうかということも無関係である。大部分の動詞は「～ している」の形をとり，命令形をもっている。しかし，「あわてる」や「ばかげる」は「～ している」の形はもっているが，命令形はなく，逆に「いる」は命令形「いろ」をもっているが，「いている」というかたちはない。そして「ある」という動詞には，このどちらもない。このように，ある文法的性質の存在が，ほかの文法的性質の存在に，直接の関係をもっていない，というばあいがある。

第2に，文法的性質は相互に密接な関係をもっていて総合されるばあいがある。たとえば，動詞が，「を」格の名詞を要求することと，それに受け身の用法があることとのあいだには，密接な関係がある。これら2つの性質をもっているものが，つまり他動詞である。もちろん，日本語のばあい，「を」格にも「空をとぶ」のように対象をあらわさないものがある。受け身にもいわゆるめいわくの受け身があって，自動詞をふくめた大部分の動詞は受け身形をもっている。したがって，単純にこの両者が対応するわけではないが，その用法をこまかく吟味していけば，やはり両者のあいだに密接な関係があることは明らかである。また，あとでのべるように，動詞の中には，もっぱら，「～し

た」「～ している」のかたちをとって，状態をあらわすのにつかわれるものがある。（あとで「状態詞」と呼んだもの）。「ばかげた」「こましゃくれた」などがその例であるが，これらの動詞に共通にみられる性質としては，もっぱら「～ した」「～ している」の形でしかつかわれない，ということ（形態論的性質）とともに，それが「～ した」のかたちで述語にならず，連体修飾語としてのみもちいられる，ということ，その連体的用法においては主語をとらない，ということ（連語論的・構文論的性質）がある。これらは相互に密接な関係をもっており，これらの性質の総合された結果として，「ばかげた」などが動詞から品詞論的にもずれている，ということがいえるのである。

1.2　語い的意味と文法的性質との関係

語い的意味といちいちの文法的性質との関係についてのべるまえに，語い的意味と文法的性質との関係についての一般論をのべておく。例はなるべく動詞からとるが，必要に応じてほかの品詞からもひくことにする。ここにあげるのは，おぼえがき的なものであって，別段体系だった記述ではない。

(1)　文法的意味に関係ない文法的性質は，語い的意味に関係しない。

文法はそれ自身の内容（意味）と形式（文法的手つづき）とをもっている。そして，まえに見たように，文法的性質がちがうということには，おなじ形式をもっていて文法的意味がちがうというばあいもあるし，おなじような文法的意味を実現するのにちがった文法的な手つづきをとるというばあいもある。そして，後者のばあいは，語い的意味に無関係である。たとえば，1段活用と5段活用というちがいは，純粋に手つづき上のことであって，文法的意味，それの一般化されたものとしての文法的カテゴリーを組織づけるという点では，1段活用であろうと5段活用であろうと，まったくちがいはない。「のろう」であるか「みよう」であるか，「のれ」であるか「みろ」であるかという手つづき上のちがいは，これらの形式が意志や命令という文法的意味を実現している点になんの影響もおよぼさない。このような文法的性質のちがいは，動詞の語い的意味に関係しないのである。1段活用だからこれこれの意味をもつ，5段活用だからこういう意味になる，ということはない。1段と5段とのちがいは，たとえば自動詞と他動詞との対応関係にあらわれる。すなわち一定の意味的なグループをつくる手段として利用されるばあいがある。しかし，そのばあいでも，対応している一方が1段活用であれば他動詞で，5段活用であれば自動詞だ，というような一義的な関係にはない。おなじような手つづきが，あるばあいには自動詞をつくるために，他のばあいには他動詞をつくるために利用されている。語尾の—u（5段）を—eru（1段）にかえるおなじ手つづきが，「たつ」から「たてる」をつくるときには自動詞を他動詞にかえるものとして，「わる」から「われる」をつくるときには，他動詞を自動詞にかえるものとして，まったく逆のはたらきを示す。もしかりに自動詞とか無意志動詞とかいう一定の種類が，1段・5段のどちらかに多かったとしても，それは単に統計的な意味しかもたず，1段・

5段の活用であることによって，それらの種類になるのではない。おなじような関係は形容詞と形容動詞とのあいだにもみられる。これらは，ふつう品詞がことなるとされているものだが，そのちがいは，むしろ純粋にかたちをつくる手つづき上のものである。形容動詞に抽象的な意味をあらわすものが多いとしても，やはりそれは抽象語のつくられることが多かった近代にはいって形容詞の造語力がおとろえた，というところからくる間接的な結果であって，形容動詞自身が抽象的な意味をになう形式であるのではない。

(2) 文法的性質は一定の語い的意味が実現するための条件である。

すべての単語は一定の具体的な条件のもとでつかわれる。この条件には，非言語的なものと言語的なものとがある。非言語的条件というのは，その単語のつかわれた状況である。言語的条件というのは，その単語をとりまく文脈である。

「その机をどけてくれ」ということばは，実際に目の前にあるのが机であるばあいに発せられる。もしそれが机でなくてイスであれば，話し手は「そのイスをどけてくれ」というだろう。このように，「机」とか「イス」とかいう単語のどれをつかうかは，それがどのような状況でつかわれるかによって制約される。しかし，それはまた同時に「その……をどけてくれ」という言語的条件（文脈）の中においてつかわれている。単語は単独でつかわれることもある。「火事！」「どろぼう！」「かえれ！」などの1語文は，文脈をもっていない。そこにあるのは非言語的条件だけである。しかし，多くのばあい，非言語的条件は言語的な条件とともにはたらく。

単語がつかわれる条件だということは，研究する側からみれば，その条件をおさえることによって単語の意味に近づくことができる，ということである。「火事」ということばが何を意味するかをしるには，まず話し手がどのような現象を目の前にしてこのことばを発したかを研究すべきである。「その机をどけてくれ」というばあいにも，話し手の目の前にあるものがどのような物体であるかを観察することによって，「机」という単語の意味に近づくことができる。これと同様に，言語的条件（文脈）も，やはりその単語の意味が何であるかをしる手がかりになる。

言語的条件は，さらに，文法的条件と語い的条件とにわけることができる。文法的条件とは，それが，文法的にどのようなはたらきをしているか，ということであり，その単語自身の語形，または，その単語が直接に結びついている他の単語の語形によって示されることが多い。たとえば，「かえれ」「よめ」「くえ」などの命令形をとっていることは，その単語の意味が命令の対象になるようなものであること，すなわち，物体の名前などではなくて，それがある種の動作であることを示している。これはその単語自身の語形によって示された条件である。一方，他の単語の語形によって示された条件というのは，「文法的文脈」といいかえることができるだろう。たとえば，

まちへ　かえる（移動）
まちを　つくる（はたらきかけ）

まちで あそぶ（動作）
まちに いる（存在）

などでは，それぞれ，動詞自身の語形ではなくて，これと結びついている「まち」という名詞の語形が，これらの動詞にとって文法的条件になっているのである。「まちへ」「まちを」などと名詞の語形がそれぞれにちがっていることが，これと結びつく動詞の意味的な側面を明らかにする。たとえば「まちへ」というかたちと結びついていることは，「かえる」という動詞がそのような帰着点を必要とする移動の動作をあらわすことを示している。「まちを」という名詞のかたちと結びついていることは，「つくる」が，何か対象に対してはたらきかけるという側面をもった動詞であることを示している。前の，それ自身の語形による条件づけは，その単語の形態論的性質のあらわれであり，あとの，他の単語との結びつきによって明らかになる条件は，その単語の構文論的（連語論的）性質のあらわれである。

このような文法的条件（文法的文脈）とならんで，語い的条件（語い的文脈）もまた，単語の意味を明らかにするのに役にたつ。文法的条件が同じであっても，「川（海，プール，水の中）でおよぐ」というのと「グラウンド（道，原っぱ，にわ）ではしる」というのとをくらべると，「およぐ」「はしる」が，それぞれどのような場所で行なわれる動作であるかに，はっきりちがいがあることがわかる。「～ で」というかたちは，どちらもその動作が行なわれる場所を示している。そのかぎりで，文法的文脈はおなじである。しかし「およぐ」が水の中で行なわれる動作であり，「はしる」が陸の上で行なわれる動作であることは，これと結びつく名詞の種類によって明らかにされる。

なお，今回の調査のように用例だけから意味を帰納しようとすることは，まったく言語的条件だけをたよりにしているものである。

(3) 文法的文脈は語い的文脈とともにはたらく。

言語的条件を文法的なものと語い的なものとにわけたが，実際には，この両者は相ともなってはたらいているのである。「川でおよぐ」というばあいに，「およぐ」が水の中で行なわれる動作であることをあらわしているのは，一方では，これと結びついているのは「川」という単語であって「グラウンド」や「原っぱ」ではないという語い的条件による。しかし同時にそれは「川を」や「川と」という語形ではなくて，まさに「川で」という語形と結びついていることからわかるのであって，文法的条件もはたらいているのである。

別の例をあげよう。「つぶやく」ということばは，岩波国語辞典では，「小声でひとりごとを言う。」と規定してある。ほかの辞典も大体同じである。ここで「ひとりごとを」という限定があるのは，多くのばあいにあてはまるが，つねにそうだとはいえない。

○「困ったね」

羽根田は，総務課長室を出ながら，駒子に，呟いた。(自由学校 356)

このような例では，羽根田はあきらかに駒子という相手に知らせるべくつぶやいてい

るのであって，ひとりごとをいったわけではない。「小声で」という規定はあてはまるだろうが，「ひとりごとを言う」という規定はあてまらないのである。そのことがわかるのは，「駒子に」という相手を示すことばがあるからだ。駒子が相手であることは，「～に」というかたちをとっていることからわかる。しかし，おなじ「～に」という文法形式をとっていても，もしその単語が「駒子」のかわりに「自分」だったら話はかわってくる。「自分につぶやいた」だったら，それは，まさしくひとりごとをいっていることをあらわす。したがって，ここでは「～に」というかたちの名詞と結びついていること（文法的文脈）とその名詞が自分以外の人物をあらわすものであること（語い的文脈）とが，ともにはたらいているのである。

(4) 文法的性質は語い的意味の形式的側面に関係する。

文法的条件は，ある動詞が移動であるか，はたらきかけをもっているか，というような意味の形式的側面を明らかにする。そして，それ以上ではない。「まちへ」という語形と結びつくことは，「かえる」という動詞のあらわす動作が移動であることを示している。しかし，それがどのような方法による移動であるか，車をつかうのか足をつかうのか，また，いそぎの，早い動作であるかいなか，どのような目的で行なわれるのか，といったことは，いっさい示していない。そのようなことを明らかにするためには，「二階へかえる」といえるか，「自動車でかえる」といえるか，など，いろいろに名詞をとりかえてみること，つまり語い的条件を明らかにすることをしなければならない。

ここで語い的意味の形式的側面とよんだものは，見方をかえていえば，範ちゅう的な側面といってよいかもしれない。すなわち，「かえる」という動作を規定すれば，「もといた場所への移動」というようなことになるだろうが，つまり「移動」ということは「かえる」の上位概念なのであって，どのような上位概念に属する動作であるか，どのような範ちゅうにはいる動作であるかを明らかにするのが，文法的性質の役わりだといえるのである。その範ちゅうのなかで，どのような特徴をもつ単語であるかは，語い的な結びつきが明らかにする。このことは，文法的条件はより大まかな特徴を明らかにし，語い的条件がよりこまかな特徴を明らかにする，といいかえてもよい。

しかし，その範ちゅうの接点にあたるところでは，文法的条件がかなりこまかなちがいを明らかにするばあいもある。これについては，あとで構文論に関係したことを問題にするばあいに具体例をあげるが，意味の分析例のところでとりあげたものをもう1度つかうと，たとえば「あつめる」と，「つのる」「募集する」とのちがいがある。これらは，一見きわめて近い意味に属するが「（どこどこに）あつめる」といういい方を取りうるのは「あつめる」の特徴であって，「つのる」「募集する」は，このような空間的な到着点をあらわす名詞とは結びつかない。つまり「あつめる」には空間的な移動性があるが，「つのる」「募集する」にはそういう性質はないのである。このことは「あつめる」と「つのる」「募集する」が別々の形式的側面をもっていることを示す。なお，「ほす」（p.224），「ひびく」（p.231）の分析を参照。

(5) 文法的性質をこまかくしらべれば，それだけ実質的意味に近づく。

文法的性質が語い的意味を明らかにするというとき，その下限は0であった。すなわち，文法的性質のうち純粋に形式的な手つづきに関するものは，語い的意味に無関係なものである。それでは，その上限はどこにあるだろうか。さきに「川でおよぐ」と「グラウンドではしる」という語い的条件のちがいによって，「およぐ」と「はしる」とが，それぞれ別の意味をもっていることを明らかにできることをのべた。しかし，「川」はまた「海」「プール」「水の中」とおきかえてもよいし，「グラウンド」は「道」「原っぱ」「にわ」とおきかえてもよい。すなわち，語い的条件というとき，それはただ1つの単語と結びつくということではなくて，一定の意味的な種類に属する単語との結びつきであることが多い。そして，文法的条件をこまかく観察していくと，しだいに，このような一定の意味的なグループの単語に近づく。たとえば，一般に「～を」という目的語は，これと結びつく動詞の示す動作がはたらきかける対象をあらわす。しかし，たとえば「おどりをおどる」のようなもの（英文法でいう同族目的語のばあい）には，はたらきかけというのは適当ではない。もし，「を」格の目的語をとるというだけで文法的分析がおわるならば，「おどりをおどる」も，「家をたてる」も，「茶わんをわる」も，みなおなじになってしまうが，これら同族目的語のばあい，生産物である対象のばあい，変化をうける対象のばあいなどというものを，それぞれ文法的にも別のものとして分析していけば，しだいにそれは語い的条件のあらわす実質的意味に近づいていくのである。また，「ぬすみをはたらく」「本代をかせぐ」という2つをくらべてみよう。「はたらく」と「かせぐ」とは意味が近い。しかし「かせぐ」は単に「はたらく」のではなく，報酬をえるためにはたらく，あるいは逆に，もっと積極的に，はたらくことによって報酬をえる，ということをあらわしている。このことが上にあげた2つの目的語のちがいにあらわれている。すなわち，どちらも「を」格の目的語をとるのだが，「はたらく」の方は「ぬすみをはたらく」のように，「おどりをおどる」とおなじ種類のもの（同族目的語）にかぎられる。これに対して，「本代をかせぐ」の「本代」は獲得した対象である。したがって，どのような目的語をとるかという文法的性質のちがいが，これらの動詞の意味的な性質のちがいに結びついているといえるのである。

もっとも，分析をこまかくしていけば，それはもはや文法的分析をしているのではなくて，意味論的な分析にすぎないのではないかという議論がでるだろう。その具体的な限界がどのへんにあるか，文法論と意味論との境界線がどのへんにひかれるべきであるかについては，いまいうことはできない。というよりも，いうべきではない，と考える。なぜなら，それだけこまかな文法論的分析，逆の面からいえば，それだけ一般化した意味論的記述というのは，まだほとんどないからである。境界領域が問題になる程度に，文法論・意味論の両側面から近づいていった具体的な調査が多くつみかさねられたときに，はじめてこの点についての一般論をのべることがゆるされるだろう。

(6) 文法的対立がほとんど中和されることがある。

文法的形式の意味をいちいちの例にあたって考えていくと，その形式が典型的な用例においてもっている意味を，どのくらいのこしているのかが，うたがわしい例にぶつかる。ばあいによっては，ほとんどおなじ現象が2つの文法形式によってあらわされることもある。それも，「～に」と「～へ」のように，本来同義的な形式のばあいもあるが，一般的には対立する意味をあらわす形式でありながら，特定のばあいに，その対立が，中和されてしまうこともある。「ふみこむ」「はげむ」の分析のところでのべたことだが，「足がふみこむ」と「足をふみこむ」，「稽古をはげむ」「稽古にはげむ」というのは，それぞれ，まったくおなじ事実をさしている。「ふみこむ」のばあいには，自分の足であることによって，「足をふみこむ」といっても，はたらきかけ性が問題にならなくなっている。「はげむ」のばあいには，そのはげむ動作の内容をあらわすものであって，「～を」と「～に」がちょうど接触する用法である。このようなばあい，単に形式的に，「を」格の名詞と結びついているというようなことは，あまり意味がないのであって，やはり文法的な意味のこまかい分析がなければ，語い的意味との関係を明らかにすることはできない。

(7) 文法的性質は単語より大きい単位について考えるべきばあいがある。

はじめにのべたように，ここでは＜単語＞という単位の文法的性質について問題にする。しかし，ある種の文法的性質は，単語を孤立させたばあいにはあらわれず，それがいくつかあつまってできた連語において，はじめてあらわれることがある。たとえば，「ある」「ふる」「さげる」というような動詞は，一般的にいえば，相手をあらわす名詞とは結びつかない。その点で，「みせる」「あたえる」「たずねる」などの動詞とはちがっている。しかし，たとえば「かれに話がある（手をふる，頭をさげる）」というようなばあいには，相手である「かれに」という名詞と結びついている。形式的にいえば，「かれに」も「話が」や「手を」「頭を」などとならんで，それぞれ「ある」「ふる」「さげる」にかかっているわけだが，このばあい，相手を要求しているのは，その動詞だけではなく，「話がある」「手をふる」「頭をさげる」という連語全体である。「ある」「ふる」「さげる」という動詞自身の性質としては，あくまで，相手をあらわす名詞と結びつくということはない。ただ，「話がある」「手をふる」「頭をさげる」という，相手を要求する連語の形式をつくりうるという能力をもっているだけである。辞典をつくるとき，相手を要求する動詞というのは，当然記入されるべきだが，そのばあいにこれらの動詞を，そのグループに入れることはできないであろう。しかし，相手を要求する連語をつくりうるということは，やはり，「ある」「ふる」「さげる」という見出し語のもとに記述しておくべきことであろう。

(8) 多義語のばあい，意味ごとに考えなければならない。

単語の長さではなくて，単語の幅についても，やはり考慮しなければならないことがある。たとえば，「あたる」という動詞をとってみると「矢が的にあたる」というばあいには「～に」という目的語と結びつき，「企画があたる」というばあいには，これと結びつかない。そして，これらは自動詞だが，「心あたりをあたる」という表現では他動詞になっている。このように，1つの単語でも，その意味によってさまざまに文法的性質がかわってくることがある。「考えがかわる」というばあいには，普通に変化をあらわすが，「かわった趣向」では変化をあらわしておらず，ほかのものとちがっている，という性質をあらわしているにすぎない。そのような意味のちがいに応じて，文法的にも，後者のばあいには，連体的に「～した」の形でつかわれるか，または「～している」の形でつかわれるかに用法がかぎられている。一般に辞典には記述してない例をあげると，「まける」は，つぎのように，「おとる」という意味でつかわれることがあり，そのばあいは否定形を要求する。

○晩餐は仏蘭西風なあつさりした，それで完備した食堂の装飾に負けない贅沢なものであつた。（真知子　前 24）

(9)　文法現象の量的側面も意味に関係する。

文法現象のなかには，随意的なものと強制的なものとがある。たとえば，日本語の他動詞は一般に直接目的語をとりうるだけであって，とらなければならない，というわけではない。そして，「かぞえる」「計算する」などのばあいには，「人数をかぞえる（計算する）」のように，直接目的語をとっていても，「わたしがかぞえた（計算した）ところでは」のように，これをとっていなくてもかまわない。しかし，なかには，つねにとらなければならないものもある。たとえば，「算する」はつねに「集会の人数は五千人を算した」のように「を」格の目的語と結びついてつかわれる。そして随意的な文法現象のばあいには，それがどの程度よくもちいられるのか，という量的な側面にちがいがみられることがあり，これがその動詞の語い的意味と関係しているばあいもある。たとえば，「いく」「くる」という動詞は「～に（～へ）」「～から」という到着点・出発点をあらわす名詞と結びついてつかわれることが多い。それに対して，「あるく」「はしる」のように移動のしかたをあらわしている動詞では，このようなことがきわめてまれである。まれではあるが，全然ないわけではない。

○彼女のしたことは，踊つてゐる人々を避けながら，真直ぐに床を横切つて，演奏中の画家のところへ歩くことだつた。（帰郷 93）

○砦からは二三十人ずつの黒菅勢が鹿柴や逆茂木を伏せた丘に走った。（落城 32）

したがって，これらが「～に」や「～から」と結びつきうるかいなかという質的な側面だけをとりあげるかぎり，「いく」「くる」も「あるく」「はしる」も，ともに結びつくというにとどまる。しかしその量的な側面を考慮すれば，「いく」「くる」のように，移動の方向を示すものにくらべて，「あるく」「はしる」のように移動のしかたを示しているものは，その移動をあらわすという側面がかなり弱いことがはっきりいえるの

である。

1.3 用法の限定による品詞性の変化

品詞というのは，文法的性質の束である。1つの単語は，文法的な観点からみたとき，何十もの性質をもっている。その性質のうちのかなりの部分を共有しているものが，おなじ品詞としてまとめられるのである。たとえば，ある品詞が動詞に属するというとき，それは学校文法に規定するような，用言で，終止形がウ段でおわるもの，といった単純な文法的性質しかそなえていないのではない。いや，用言であるということが，すでに活用があるというにとどまらず，数多くの文法的性質をそなえていることを，あらわしているのである。それは，現在／過去　という，ときのカテゴリーをもつ。肯定／否定　という，みとめのカテゴリーをもつ。ふつう／ていねい　という，ていねいさのカテゴリーをもつ。このような形態論的性質とならんで，それは述語になり，連体修飾語になる，という構文論的性質をもつ。そして，用言のなかでその単語が特に動詞に属するというとき，これらの性質にさらに動詞独特の性質がくわわる。その単語が，受け身・使役などボイスのカテゴリーをもつこと，持続態などアスペクトのカテゴリーをもつこと，これらは用言のなかでも形容詞にはみられない，動詞独自の文法的性質である。

もっとも典型的な動詞，そして大部分の動詞においては，このような何十もの文法的性質は，一応そなわっている。しかし，なかには，そのいくつかをかくものがある。そのような点について，個々のカテゴリー別に，あとでみていくのであるが，ここではまず，典型的な動詞からのズレがひじょうに大きいもの，つまり動詞として当然そなえているべき文法的性質のうち，かなり重要なもののいくつかをかいていて，ほとんど動詞とはよびにくくなっているもの，の例をあげることにする。

例として，いちばん多い(1)のaのグループに属するものについて説明しよう。「ばかげる」という動詞をとってみる。これはふつう辞典に「ばかげる」の形であがっていて，下1段活用の動詞とされているものである。そして，ばあいによっては「げ，げ，げる，げる，げれ，げろ(げよ)」のように，いちいちの活用形まで，ていねいにのせている辞典もある。しかし，たとえば「ばかげない」あるいは「ばかげろ」「ばかげます」というようなかたちが，現実につかわれるだろうか。それどころか，見出しとしてあげられている「ばかげる」というかたちでさえ，実際につかわれることがあるだろうか。この動詞は，もっぱら「ばかげた話」のように「～した」のかたちでつかわれるか，「ばかげている」という形でつかわれるか，そのどちらかである。そして，「～ている」のばあいには，終止法と連体法がともにあるが，「ばかげた」のかたちは連体法だけであって，述語として終止法にたつことはない。このことは，動詞の基本的性質がうしなわれていることを示す。もっとも，これらの用法がないことを（特に用例の面から帰納的に）確認することはむずかしい。たとえば「ばかげてきた」といういい方があるかないか，などというのは，判断にまようところである。一応今の段階で動詞としての本質をうしないかけているのではないかと見られる種類の単語を分類してあげると，つ

ぎのようになる。

(1) 状態詞化したもの

a もっぱら「～た」(連体)「～ている」の形でつかう。

うがった(見方)・かわった(人)・くだけた(態度)・くたびれた(服)・げびた・こましゃくれた・(手の)こんだ・こった(もよう)・さばけた(人)・しけた(顔)・しゃれた(かざり)・すぐれた・ぬけた(やつ)・ばかげた・ひいでた・ませた／

きりたった・おもてだった・きわだった・殺気だった・ふしくれだった・水ぎわだった／ずぬけた・ずばぬけた／かどばった・四角ばった／度はずれた・なみはずれた／耳なれた・ものなれた・世なれた／まがりくねった・まわりくねった／

あぶらぎった・いりくんだ・かたどった・気ちがいじみた・こみいった・才はじけた・すきとおった(声)・なまめいた・にがみばしった・ひねこびれた・まじめくさった・みえすいた・もちあわせた・世ばなれた・かけはなれた・手なれた・ねれた(人)・だまりこくった・あかぬけた・たちまさった・(赤みの)かった・出すぎた(なお,「ありふれた」p.87～88参照。)

b もっぱら「～」(連体)「～ている」の形でつかう。

時めく

c もっぱら「～」(終止・連体)の形でつかう。

いける(口)・はなせる(男)・いかす(やつ) cf. きかせる・くわせる・なかせる・わらわせる

d もっぱら「～ている」の形でつかう。

しょっている

(2) 連体詞化したもの

a もっぱら「～た」(連体)の形でつかう。

ありあわした・奥まった・おもだった・甲ばしった・げすばった・下がかった・しれた(こと)・ひねった(p.297参照。)・ほめた(話)・みあげた(行ない)・たたきあげた

b もっぱら「～」(連体)の形でつかう。

息づまる(熱戦)(「～きわまる」という複合動詞も,これに近い。)

(3) 副詞化したもの

もっぱら「～て」の形でつかう。目的語はとらないのがふつう。

息せききって・うちつれて・かいつまんで・すきこのんで・つれだって・目がけて cf. とんで(p.245～246)

(4) 副詞・連体詞化したもの

「～て」または「～た」の形でつかう。述語にはならない。

うってかわって〔た〕・たまりかねて〔た〕・ひきつれて〔た〕・ことよせて〔た〕

(5) 条件語化したもの

「～と」「～ば」「～て……たら」などの形でつかう。

まかりまちがうと

(6) 後置詞化したもの つねに目的語をともなう。

a もっぱら「～て」の形でつかう。

(～を)おして・さしおいて・めがけて・(～に)つけて・ついて・つれて・とって・免じて・あかして・かけて・際して・(～と，を)にらみあわせて・(～と，に)ひきかえ〔て〕(～は)さておき〔おいて〕(～を)もって

b 「～て」「～た」(連体)の形でつかう。

(～を)相手どって・あげて・ひっさげて・(～に)よせて・したがって・むけて (p.277参照。)(～から)みて・(～と)あいまって

c 「～て」「～た」(連体)「～ている」の形でつかう。

(～を)うけて・介して・つれて・(～に)即して

ここで「状態詞化したもの」とか「後置詞化したもの」とかいう見出しをかりにかかげたが，これらが本当に「状態詞」「後置詞」などと別の品詞名でよばれるべきものか，それとも動詞のなかの特殊なグループというにとどまるか，という品詞分類上の問題には，ここではふれない。それについては，別の品詞分類論的研究があるべきである。特に，「状態詞」という用語をつかって動詞と別の品詞であるかのようにしたのは，「状態動詞」という呼び名が，すでに「ある」「いる」などをさすものとしてつかわれている，ということによるものである。いずれにしても，品詞が文法的性質の束であるからには，1つの品詞のなかにいろんなタイプがみとめられること、そして1つの品詞と他の品詞とのあいだは飛躍的ではなく連続的であり，最後に2つの品詞をわけるものとして引かれる1線はほとんど便宜的なものでしかないことは確かである。

たとえば，典型的な動詞から状態詞にいたるあいだにも，つぎのような段階がある。

1)「さっき風でまがったマスト」

この表現は，過去にある変化がおこったことをのべているだけで，現在の状態にはふれていない。

2)「まがった針金」

これは，過去における変化を事実の上では前提にしているとしても，直接のべているのは現在の状態だ。

3)「まがった道」

これは，変化を前提にしない状態・性質の表現である。まっすぐだった道がまがったわけではない。

4)「まがったことはきらいだ」

これも状態・性質の表現だが，これに対応する変化・動作の意味の「まがる」はない。

「～た」という形式の文法的な意味は(3)と(4)とで同じとみるべきかもしれないが，語い的意味の観点からは(1) (2) (3)と(4)とのあいだでわかれる。ここで状態詞とよんだのは(4)のばあいだけである。この(4)の「まがった（こと）」や「かわった（人）」「くだけた（態度）」のように，多義語の一部の意味が状態詞化したにすぎないものにくらべて，「ばかげた」「ませた」のように，もっぱらその意味でしかつかわれないものは，一層典型的な状態詞である。

なお，ここにあげた類のことばの意味的な性格として一般的にいえることは，動詞本来の変化・動作などという動的な属性に対して，状態・性質・関係など，静的な属性への移行がみられるということである。

用法の限定は，以上にあげてきた，動詞からの品詞としてのずれというよりも，むしろ，文体に関連しておこっているばあいがある。たとえば，「すだく」「なみいる」という動詞は，ふつうは，このかたちで連体的につかわれる。「すだかない」「なみいた」などの，ほかの語形でつかわれることは，おそらくほとんどないだろう。このかぎりにおいて，それはさきに状態詞化したものとしてあげたグループとおなじである。しかし，さきにあげたものが，文体上ほとんど制約がなく，書きことばでも話しことばでも自由につかわれるのに対し，こちらの例は，かなり文章語的な，しかも和文脈でおもにつかわれる雅語的なことばである。品詞論上，かりに状態詞というものをたてたとすれば，これらがそのグループにはいるべきかどうかは，かんたんにいえない。しかし，用法の制限の現象面においてはおなじであっても，制限の根拠において，一般の状態詞とちがうことがあることは，みとめなければならない。このグループには，つぎのようなものがある。

〔基本形・連体的〕いなむ・暮れゆく・すぎゆく・心ゆく・ものいう・能う・まがう・みまごう・すだく・並みいる

〔その他〕おもんみる・なみする・なんなんとする

「すだく」「なみいる」がもっぱら基本形でしかつかわれないのに対し，「なんなんとする」は，「なんなんとしている」のかたちでもつかわれる。そのような用法上のちがいはあるが，これもやはり状態詞的なものである。それに対し，「おもんみる」は，「おもんみるに」のように条件をあらわすばあいに多くつかわれる。これは，いわばさきに＜条件語化したもの＞としてあげた「まかりまちがう」に近いものである。しかし，いずれにしても，以上にあげたものは，みな文語調の化石化した名ごりであって，現代語の体系のなかでは文法的な用法の制限と文体の制限との両側面によって特徴づけられるものである。

さらに，文法ともある程度関係するのだが，もっと用法が限定されて，慣用句のなかでしかつかわれないものがある。たとえば「昼をあざむく明るさ」という用法，つまり「……をもしのぐ」「……をこえるほどの」，という意味の「あざむく」の用法は，この慣用句のなかでしかみられない。「海をあざむく広さ」「山をあざむく高さ」などという表現はゆるされない。その点で，さきにあげた「すだく」「なみいる」の類より

も，もっと制限されている。「すだく」のかかることばは，ほとんど「虫の音」であるが，「こおろぎ」や「きりぎりす」という単語を被修飾語にしてもいい。「なみいる」のばあいだったら，人をあらわす名詞であれば，「大臣」「教師たち」「父兄」その他たいていのことばをもってきても，さしつかえないだろう。「あざむく」が「あざむいた」や「あざむかない」にならない，という形態論的な制限だけではなく，その前後にどのような単語がくるのかという結びつきの上での語い的制限がある点で，この動詞はひじょうに特徴のあるものである。このように，特定の慣用句のなかでしかつかわれないものとしては，つぎのような動詞をあげることができる。

昼をあざむく明るさ・小またの切れあがった女・身の毛もよだつ話・耳を聾する爆音・勇を鼓して・万事休す・手をこまぬいて・こけつまろびつ・ふるいつきたいような女・足跡を印する・手をつかねて・耳（枕）をそばだてる

1.4 動詞の意味と形態論的性質

動詞の形態論的性質がその語い的意味とどのようにして関係しているかをしらべるにあたって，まず動詞のもっている形態論的カテゴリーを用言的なものと動詞的なものとにわける。はじめにこの分類について説明しておく。

形態論的カテゴリーは，いろんな観点から分類することができる。たとえば内容の面からは，ことがらの存在の形式をあらわすものとしてアスペクトやボイス，話し手の態度をあらわすものとしてムード・ていねいさ・とりたて，ことがら間の関係をあらわすものとして中止・条件など，と分類することができる。また形式面からは，せまい意味での語形を利用するものとしてボイスなど，形式化した単語をつけてあらわす（「～（して）いる」のように）ものとして，アスペクトなど，というように分類することもできる。しかし，ここで用言的カテゴリーと動詞的カテゴリーとにわけたのは，その文法範ちゅうがどのような範囲におよぶかという観点からの分類である。このような観点からは，一般に，形態論的カテゴリーを超品詞的・体言的・用言的・動詞的などに分類することができる。超品詞的というのは，特定の品詞にかぎらず広く見られるものであって，たとえば＜とりたて＞というカテゴリーはそうである。これは，「学校へは」「学校さえ」のように名詞に見られるのはもちろんだが，「行きはしない」「広くさえあれば」のように，動詞や形容詞にも見られ，また「ゆっくりははしらない」のように副詞にもあらわれることがある。一方体言的カテゴリーとしては＜格＞をあげることができる。これはもちろん名詞に固有のものであって，用言を格のかたちにするためには，「本をよむのが」「本をよむのを」のように助詞の「の」をつけることによって，その前にある用言を体言化しなければならない。並立の「と」や「など」のかたちも「の」と同様に体言化のはたらきをもっている。（「みるときくとは」「しぬなどとんでもない」）これに対し，用言的カテゴリーというのは，動詞・形容詞（形容動詞）および「名詞＋だ」のかたちに見られるものであって，テンス・ムード（推量）・ていねいさ・条件などがふくまれる。たとえば，テンスの対立は動詞で「よむ～よんだ」，形容詞で

「さむい ～ さむかった」，＜名詞＋だ＞で「学校だ ～ 学校だった」のように，どのばあいにもみられ，しかも，それらにおける意味的なちがいはあまりない。さらに，動詞的カテゴリーというのは，アスペクト・ボイス・やりもらいなどであって，これは動詞固有のものである。たとえば，「 ～ している」「 ～ してしまう」というかたち（持続態・終結態）は，「よんでいる」「かいてしまう」のように，動詞にはみられるが，「さむい」とか「学校だ」のような，形容詞や用言的につかわれた名詞には，みられない。受け身・使役などのボイス，あるいは「 ～ してやる」「 ～ してもらう」などのやりもらいのカテゴリーについても同様だ。これらも動詞には一般に見られるが，形容詞や「 ～ だ」のかたちには見られないものである。

ここでこのように動詞の形態論的カテゴリーをわけるのは，意味との関係において，これらがちがった性質をもっているからである。

1.4.1　用言的カテゴリー

ここに属するのは，上にのべたように，テンス・ムード（直説および推量）・みとめ方・ていねいさ・中止・条件などのカテゴリーであるが，これらは原則としてどの動詞にもみられる。その意味のあらわれ方も比較的単純であって，動詞によるちがいはあまりない。「よまない」という否定形，「よみます」というていねい形が，ある動詞ではこういう意味になり，別の動詞では別の文法的意味をあらわす，というようなことは，ほとんどないのである。また，たまたま，これらのカテゴリーに属する形式（否定形・ていねい形など）がかけている動詞があったとしても，それは動詞の語い的意味にもとづくよりも，その動詞の文体や慣用句性などに関係することが，すくなくない。たとえば「すだく」という動詞に「すだいた」「すだかない」などのかたちがなく，「なく」や「さえずる」に，「なかない」「さえずった」など，いろんなカテゴリーがそなわっているのは，これらの動詞の意味から説明することは困難である。

さきに品詞論上の問題としてあげた，状態詞化したグループなどにも，やはりこれらのカテゴリーはそなわっている。「ばかげる」に「ばかげない」という否定形がなく，「ばかげます」というていねい形がないことは，一見この単語に＜みとめ方＞や＜ていねいさ＞というカテゴリーがかけているのではないか，とおもわせる。しかし，実は「ばかげていない」「ばかげています」のように，持続態においては，この動詞も否定・ていねいの表現をもっている。つまり，問題は，みとめ方・ていねいさのカテゴリーよりも，持続態しかなくて基本態をかいているという，アスペクトの面における特徴にあるのだ。そして，アスペクトは，つぎにのべるように，動詞的なカテゴリーに属する。

〔テンス〕

用言的カテゴリーのうち，テンスは動詞の意味と無関係だとはいえない。すなわち，「ある」「いる」など状態・存在の動詞が，このかたちで現在ないし未来のことをあらわすのに対し，「よむ」「はしる」「なく」など動作をあらわす動詞は，このかたちで現在をあらわすことがなく，つねに未来をあらわすのである（終止法のばあい）。しか

し，このちがいは，前者が状態動詞で「～ている」のかたちをもっていないのに対し，後者は動作動詞であって，動作の進行ないしは結果の持続をあらわす「～ている」のかたちをもっているというちがい，すなわちアスペクトのちがいと関係しているのであって，テンスが直接語い的意味と関係しているわけではない。語い的意味がアスペクトを規定し，そのアスペクトがテンスを規定しているのである。ただし，アスペクトをなかだちとしないで，テンスが直接動詞の意味と関係しているものも，あるかもしれない。たとえば，「現存する」ということばは，「現在（話をしている瞬間に）存在する」ことをあらわすだけで，たとえば「10年前に現存した」とか「将来現存するだろう」とかいう表現は，なりたたないようだ。とすれば，動詞の意味が，＜現在＞というテンスのカテゴリーにしかもちいられない，という文法的性質を規定していることになる。このことはたとえば「実在する」という類義語が，「過去に実在した」「現在実在する」「将来実在するであろう」のように，どの時間についての現象もあらわしうることとくらべれば，明らかな特徴である。このようなものとして，ほかにどういう動詞があるかは，これから調査してみなければわからない。

〔みとめ方〕

つぎに，みとめ方の上で特徴のあるものとして，まず，否定形がぜんぜんつかわれないものがある。これは「ある」という動詞で，この否定には形容詞の「ない」がつかわれる。ほかにこのような動詞があるかどうかは不明である。もちろん，さきにあげた状態詞化したものの類では，基本態における否定形をもっていないものが多い。逆に否定形でしかつかわれないものもある。たとえば「たくむ」という動詞は，ふつう「たくまない（たくまぬ）ユーモア」とか，「たくまずして」とか，語形はいろいろだが，とにかく否定のかたちでのみ，つかわれる。といっても，これも「そのことは特にたくまない（たくまなかった）」のように，終止法にたつことはなく，連体法ないしは連用法につかわれるだけだから，やはり動詞本来のものからずれて，他の品詞への移行の途中にあるとみられる。これにくらべて，もっと興味があるのは，否定的な文脈でしかつかわれない動詞だ。「かまわない」「たまらない」「(……に）しかない」「わりきれない」「わるびれない」などである。これらは，かならずしもその動詞自身の語形としては否定形しかもっていないわけではない。しかし意味的には否定の文脈においてだけつかわれる。「かまう」「たまった」などの肯定形は，「かまうものか」「たまったものではない」のように，反語や引きのばした表現における否定など，文脈全体として否定のばあいだけにつかわれるのだ。「わるびれる（ようすもなく）」も同類。「見あたる」という動詞も，圧倒的に否定的文脈でつかわれるのだが，これは文学作品の中で肯定的につかった例も見られる。今，この動詞が肯定・否定のどちらでつかわれたか，という数字を，総合雑誌・雑誌90種および文学作品・説明文にわけて示すと，つぎのようになる。

	総合	90種	文学	説明文
肯定	—	—	3	—
否定	3	11	31	5

これらの＜否定＞は，単に否定的文脈でもちいられている，ということではない。すべて「見あたらない」「見あたりません」「見あたらず」のように，語形としても否定形をとっているものである。例外になっている文学作品の3例を，つぎにあげる。

○こゝの代りの婆やでも**見当つた**といふのではあるまいかと（桑の実 97）

○青天白日旗ばかりでなく，英国旗を掲げてある店舗も**見あたつた**。（帰郷 61）

○かなり，知識的な顔附も**見あたるし**，前には相当な家の主人だつたらうと思はれるやうな品のよい老人や（帰郷 160）

「見あたる」ほどではないが，「よりつく」も否定につかわれることが多い。

	総合	90種	文学	説明文
肯定	—	—	3	—
否定	—	1	7	—
?	—	—	2	—

ただし，「よりつこうとしない」「よりつきもしない」などは否定に入れた。？としたのは，つぎの2例で，「否定的文脈」という用語の定義しだいで，肯定にも否定にも入れることができそうなものである。

○自分の生家（うち）へも，姉の家へも**寄りついて**行きたくはない。（あらくれ 135）

○お島たちが，**寄りつく**処もなくなつて，（あらくれ 174）

「よりつく」が肯定にもちいられた例をつぎにあげる。

○お島たちの**寄りついて**来ることを，余り悦んでもゐないらしかつた。（あらくれ 196～197）

○従つて野島は杉子のそばに**よりつく**のがいやになつた。（友情 73）

○駒子は，良人の**寄りつきそうな**所は，もれなく，当って歩いた。（自由学校 48）

さきにあげた，「見あたる」が肯定にもちいられた例は，人によっては不自然に感じるかもしれない。それに対し，「よりつく」の肯定の例は，ほとんど不自然さを感じさせないだろう。肯定の例がしめる比率からいっても，「よりつく」は「見あたる」よりもずっとたかい。しかし，一般の動詞では，肯定が否定よりも圧倒的に多いことを考えれば，「よりつく」で否定の方が多いということは，やはり異常な現象であり，この動詞の文法的性質として注意しなければならない。

なお，「よりつく」に対応する他動詞「よせつける」の方では，総合雑誌1例・雑誌90種2例・文学7例，計10例のうちで，肯定的文脈におけるものはつぎの1つにすぎず，あとはみな否定的文脈でつかわれていた。

○顔と顔とを**よせつけて**秘密らしくひそひそ話してゐるもの，（冬の宿 186）

このように，ある種の動詞にあっては否定がこのんでつかわれること，しかもそれにはおそらくいろんな段階があることは，これからの大量のデータをあつかう統計的な調査において，さらに広くしらべられるべき1つの項目だろう。今のところ，否定によくつかわれることと，意味との関連はうすいようにおもわれる。すなわち，これこれの語い的意味をもった動詞は否定のばあいが多い，というのはむずかしい。これは肯定―否定

が用言的カテゴリーであることから当然ともいえるが，この点もさらに豊富な資料による証明がほしいところだ。なお，「たやす」（p. 27）参照。

1つの動詞全体としてではなく，ある意味においてだけ，否定形でつかわれる，というものもある。

「そらす」は，

○対手は，人を外らさぬ応対を，それとなく，心得てる女で，（自由学校 29）

のように，他人のきげんを損ずる，という意味では，つねに否定的にもちいられる。今回の資料中に，この用法は5例（みな文学作品）あったが，うち4例は否定形であり，他の1例も

○田川博士は固より船の正客である。それを外らすやうな事務長では ない。（或る女・前 135）

と，否定的文脈におけるものだった。

1.4.2 動詞的カテゴリー

このクループのカテゴリーとしてはアスペクト・ボイス，およびムードのうちの命令・意志などがある。

〔アスペクト〕

アスペクトは，形態論的カテゴリーのうちで，動詞の意味との関係が，今までに，もっともよく調べられているものである。金田一氏の論文（文献〔13〕〔14〕）を参照。アスペクトに応じた意味のちがいとしては，状態動詞・継続動詞・瞬間動詞などの分類がある。ただし，「かれは今手紙をかいている」が継続動詞で，「かれはたくさんの小説をかいている」が瞬間動詞だというならば，このちがいは，動詞の意味のちがいというよりも，1つの意味のもっている2つの側面のちがいであろう。「かれ」という人をあらわす単語が，「かれにぶつかった」では物理的な面，「かれは死んだ」では生理的な面，「かれは入学した」では社会的な面を，特にとりだしていっているように。

ある動作，現象のすすみ方のちがいをあらわす手段には，つぎのようなものがある。

(1) 語形＋補助動詞

「(～て) いる」「(～て) しまう」「(～つつ) ある」など。これはいちばん純粋にアスペクトとよべるものである。「かいている」は「かく」の1つの文法形式であり，「かく」と「かいている」とは，語い的にはおなじ単語に属する。

(2) 複合動詞

「かきはじめる」「かきつづける」「かききる」など。これについては，武部論文（文献〔30〕）を参照。「かく」と「かきはじめる」とは，べつの動作だ，ともいえるが，後要素が形式化しているから，「かきはじめる」を「かく」の1つの変種とみることもできる。

(3) べつの単語

「さがす」と「みいだす」などがこの例になる。これらは，おなじ現象の2つの段階

というよりも，ひきつづいておこる2つの現象であり，厳密な意味でアスペクトとよぶことはできない。しかし，両者のあいだをゆれ，両者をつなぐものとして「みつける」があり，「さがす」に接尾的要素をつけた「さがしだす」は「みいだす」とおなじ結果のグループにはいる，など，言語的な面でも，これらを一括する根拠がないわけでもない。（p. 219～220）

動詞の意味記述に直接関係があるのは，この(3)のような例である。これについては，第1部　3.1　段階　を参照。

〔ボイス〕

ボイスの観点からは，自動詞と他動詞という分類ができる。ところで，他動詞の特徴としての<はたらきかけ性>とは，意味的な特徴に完全に一致するものとはいえない。

たとえば「動物という概念は単細胞の生物をふくんでいる」のようなばあい，「ふくむ」は単に関係する相手をあらわしているだけであって，すこしも<はたらきかけ>という意味はもっていない。（p. 428～429）感覚動詞の「みる」や「きく」にしても，こちらから積極的にはたらきかけるとはいいがたい。また，言語活動の動詞が，「(ストトン節を）どなる」「(ひとり言を）つぶやく」などのように同族目的語をとっているばあい，はたらきかけているとはいえない。（p. 340～341）

使役の表現には，積極的に，なにかをさせるばあいと，消極的に，その行為をゆるすばあいとがある。「へやにはいらせる」のにも，命令するのと許可するのとがある。これとおなじように，「へやにいれる」のような他動詞による表現も，積極的にはたらきかけていれるだけでなく，消極的に，はいるままにしておく，ということもあらわす。さらに，使役や他動詞による表現は，あるよくないことがおこったのは自分の不注意などが原因だ，といったニュアンスをあらわすことがある。これについては，「ころす」（p. 432～433）「くるしめる」（p. 434～436）の分析を参照。

一方「を」格の名詞でなくても，はたらきかける対象をあらわす，というべき例がある。「～にぶつかる（あたる）」などというばあい，その対象にはたらきかけているといえないことはない。「だれだれにおしえる」「だれだれにたずねる」などについても，同様である。したがって，自他の区別は，意味と密接な関係はあるが，意味的分類そのものではない。

なお，おなじ他動詞でも，対応する自動詞があるものと，ないものとでは，意味的に差がある。すなわち，前者は対象に対するはたらきかけと対象の変化とを，後者は，単に，はたらきかけをあらわす。「たかまる」「しずむ」「そまる」「くずれる」「よごれる」などの自動詞は，対象における変化自体をしめし，これに対応する「たかめる」「しずめる」「そめる」「くずす」「よごす」などは，はたらきかけと変化とをともにあらわしている。一方，「なぐる」「けとばす」「おさえる」のように，対応する自動詞のない他動詞は，対象に対するはたらきかけをあらわすだけで，その結果には無関心である。結果として，相手はきずつくかもしれないし，たおれるかもしれない。しかし，そのことは，「なぐる」や「けとばす」という動詞が積極的にあらわすわけではな

い。この問題については，「かわかす」と「ほす」（p. 228），「あたためる」「熱する」と「あぶる」（p. 321），「もうける」と「かせぐ」（p. 335）の対立を参照。

動詞のなかには，もっぱら受け身形でもちいられるものがある。

○浅い夢魔にうなされて眼を半ばさましたとき，（冬の宿 139）

○伴子は気圧されたやうに顔を赧らめて答へた。（帰郷 172）

○市九郎は，深い悔恨に囚はれて居た。（恩讐の彼方に 60）

○それでも勘次はお品にひかされて，まだ残つて居る蒟蒻を担いで帰つて来て畢つた。（土・上 39）

○いちずな朝姫の熱いなさけにほだされたのだ。（出家とその弟子 118）

などがそれで，「うなす」「けおす」「とらう」「ひかす」「ほだす」という動詞の形は，すくなくとも現代語では使われない。例はなかったが，「身につまされる」もこれらに近い。（ただし，「～に」という相手をしめす目的語をとらない，つまり，なにが「つます」のかがあきらかでない点では，これらとちがっている。）

○仲のよい彼女等夫婦には，散々にアテられたり羨しがらされたりしたが，（傑作倶楽部 1956年4月 270）

○伸子は視点の定まらない熱にうかされた眼で看護婦を見た。（伸子・上 68）

などでは，「あてる」「うかす」という形はあるが，意味的にずれていて，独立の動詞とみるべきかもしれない。

使役の方では，以下にあげるものが，形の上からは使役的なのに，もとの動詞との対応関係が一般の規則的なものからずれていて，独立の他動詞となっている。

おくらせる（おくれる，×おくる）
ちぢらせる（ちぢれる，×ちぢる）
つからせる（つかれる，×つかる）
ふくらせる（ふくれる，×ふくる）
ふるわせる（ふるえる，×ふるう）
まぎらせる（まぎれる，×まぎる）

これらと対立の型はちがうが，

にぎわせる（にぎわう，×にぎう）

も同様。

「しのばせる」では，

○また逢ふ日のたのしみが待つ間を忍ばせた。（潮騒 108）

の例は，「（かれが）待つ間をしのぶ」という，もとの形を考えることができるから「しのぶ」の使役だが，

○薬ならば荷にもならずにポケットに忍ばせることも出来た。（帰郷 35）

○彼等は足音をしのばせながら事務室の方にかけこんで行った。（真空地帯・上 77）

では，「薬がポケットにしのぶ」「足音がしのぶ」という形が考えられないから，「あてられる」「うかされる」とおなじである。

〔ムード〕

動詞のムードのうち，直説法対推量法の対立は推量の方が「だろう」「でしょう」をつけただけであり，この形式は形容詞や名詞のばあいにも同様である。すなわち，それは動詞的カテゴリーではなくて用言的カテゴリーである。そして推量というカテゴリーの意味は動詞によってかわることはない。推量法でしかもちいられない動詞，あるいは推量法にはもちいられない動詞というものはない。（もちろん慣用句の中でしか使われないようなものは別である。）これに対して，命令・さそいかけ・禁止などは，形容詞・名詞＋だ，などのかたちには見られない，動詞固有の文法的カテゴリーであって，これらの用法があるかないかは，動詞の意味的な種類によって強く影響される。これについては，「第1部　6. 意図」の項を参照。

1.5　動詞の意味と構文論的性質

はじめにのべたように，ひろい意味での構文論的性質を，ここでは，連語論的なものとそれ以外の，せまい意味での構文論的なものとにわけて考える。「連語論」という概念は，まだあまり一般的なものになっていないが，これは，文のなかでの単語と単語との結びつき方をあつかうものである。このばあい，「連語」は非陳述的な，一定の対象をあらわすという点では単語とおなじ次元にある結びつきに限定される。たとえば，

白い　かべ／くつの　ひも

本を　よむ／駅に　ちかい

などがそれで，ふつうの学校文法にいう「修飾――被修飾」の関係にあるものと，ほぼ一致する。

連語論自体のりんかくも，まだそれほどはっきりしたとはいえない段階では，構文論マイナス連語論というかたちで考えられた，せまい意味での，陳述的な構文論の姿は，ますますアイマイなものにならざるをえない。しかし，一応このようなかたちで区別をつけたとき，動詞の文法的性質のうちで意味記述ともっとも直接に関係するのは，連語論的性質だ。形態論的な，あるいは（せまい意味での）構文論的な性質は，これにくらべれば，より純粋に文法的なもので，これを細分していっても実質的意味には達しない。これに対して連語論的性質は，はじめからそのうちに実質的要素をふくんでいる。連語とは，ほかの単語とのむすびつきだから，語い的条件がきりはなせない。

道を　つくる

道を　ながめる

道を　あるく

これらにおける名詞と動詞との関係は，それぞれちがっている。つまり，これらはちがった型の連語に属する。この連語としての関係そのものは文法的なものであり，したがって，このような名詞とむすびついてこのような関係をつくりうることも，おのおのの動詞の文法的性質（能力）ではあるが，その性質をささえているものは，これらの動詞の意味上の性格である。そして，文法的なむすびつきを細分していくと，それはしだ

いに語い的なむすびつきとしての性格をつよめ，そのさかい目は，はっきりしない。このことは，上にも，1・2—(5)「文法的性質をこまかくしらべれば，それだけ実質的意味に近づく」というかたちでのべたが，これは特に連語論的な性質にあてはまる。

品詞がそれ自体としては文法的な分類でありながら，かなりの程度に意味的分類に対応し，意味的分類の出発点として利用できる（でなければ「動詞の意味の記述」というテーマは無意味だ）ように，連語的条件の分類も意味の大わけとして利用できるだろう。その1つの具体例として，以下に奥田靖雄氏の研究を紹介しよう。(『教育国語』12号から「日本文法・連語論」として連載中。) この研究で，まずとりあげられたのは，「を」格の名詞と動詞とのくみあわせだが，連語の種類とこれをつくる動詞の例とを最初の部分だけあげると，つぎのようになる。

(1) 対象的な結びつき
1) 対象へのはたらきかけ
11) 物に対するはたらきかけ
a) もようがえ——あたためる，そめる，ぬらす，わる……
b) とりつけ——あてる，つける，つむ，なする，はめる……
c) とりはずし——とりのぞく，ぬく，はずす，はなす……
d) うつしかえ——だす，はこぶ，ひろいあげる……
e) ふれあい——いじる，おす，かむ，さする，つかむ……
f) 結果的な結びつき——こさえる，たく，つくる，ぬう……
12) 人に対するはたらきかけ
a) 生理的な状態変化——あそばせる，なかせる，ねかせる……
b) 空間的な位置変化——おくる，かえす，もどす，やる……
c) 心理的な状態変化——いらだたせる，こまらせる，たかぶらせる……
d) 社会的な状態変化——やとう，めあわす，縁づける……
e) よびかけ——うながす，おしえる，さそう，まねく……
13) 事に対するはたらきかけ
a) 変化のむすびつき——たかめる，とめる，みだす，けがす……
b) 出現のむすびつき——きたす，もたらす，おこす

(以下略)

意味分類体辞典（シソーラス）における分類が，ことばのあらわす対象についての，論理的，科学的，あるいは常識的な分類なのに対し，連語論からする分類は，品詞分類と同様，ことばについての言語学的な分類である。奥田氏の分類でも，<とりつけ>の動詞は（「を」格以外に）「に」格の名詞を，<とりはずし>の動詞は「から」格の名詞を要求する，といったことが分類の根拠になっている。そして，ある動詞を一定の意味的なグループに分類するということは，その動詞の意味を1つの側面から規定することにほかならない。上にあげたのは，「を」格の名詞との結びつきという観点からのもの

だが，ほかの観点からの分類をかさねあわせることによって，動詞の意味的な体系は，しだいにはっきりとした形で示されるものと期待できる。

しかし，それには，まず連語の研究がすすむのを待たなければならない。ここでは，したがって，連語的な関係と動詞の意味とを全体としてながめることはやめて，結びつきのちがいが意味のこまかな区別を反映する1つの例をあげることにする。

相手をあらわす名詞は，「に」格および「と」格の両方の形をとる。そして，このどちらの形と結びつくかは，動詞によってきまっているばあいがある。たとえば，敵対行為をあらわす動詞のうち，「手むかう」「はむかう」「抗する」「敵する」などは，「に」格の名詞と結びついて

　AがBに～する

という型の文をつくり，「あらそう」「たたかう」「わたりあう」「対戦する」などは，「と」格の名詞と結びついて

　AがBと～する

という型の文をつくる。これは動詞の意味上の差と関係しており，後者のグループでは相手と自分とが対等であり（すくなくとも，対等でないことを積極的にはあらわしておらず），行為が相互的なのに対し，前者のグループでは，相手が自分よりも強大，または積極的にたたかいをしかけた側で，行為はこれに対する一方的なものであることがしめされている。

さらに，第3のグループとして，両方の格のどちらとも結びつく動詞がある。たとえば「対抗する」は，

〈～に〉	〈～と〉
○李陵の胡地で儲けた子が，烏藉都尉を立てて単于とし，呼韓邪単于に対抗して竟に失敗した旨が（李陵 203）	○閼氏や衛律等と対抗して李陵も心ならずもその紛争にまきこまれたらうことは想像に難くない。（李陵 202）

と，両方のいい方ができる。このばあいにも，どちらの形と結びつくかによって，「対抗する」の意味に，上にのべたのとちかいニュアンスの差が生じるようでもある。しかし，それは，1つの意味のもつ広がりのなかでの，文脈によるニュアンスの差であって，2つのべつべつの意味がつかいわけられているのだとまでは，みるべきではないだろう。

「ふざける」「たわむれる」も，どちらとも結びつく。

〈～に〉	〈～と〉
○だからビーヤホールの女なぞにふざけてゐないで，（あらくれ 192）	○ビーヤホールの女などゝ，面白さうにふざけてゐること（あらくれ 193）
○一月あまりの間一晩も男に戯れる折がなかつた。（つゆのあとさき 38）	○これが実際男と戯れた初めであつたが（つゆのあとさき 32）

「～に」の形と結びついた方が積極的なはたらきかけであって，「～と」の形と結びついたものは，一方的な行為ではなく，両者があわさって主体になった表現で，は

たらきかけの要素はよわいと見られる。しかし，上の例のように，実際にはほとんど同じばあいの表現に用いられる。

なお，この問題については，「よりそう」「つれだつ」などの分析（p. 88～89），「くみたてる」「くみあわせる」などの分析（p. 190～191）を参照。

つぎに，「～に」「～と」との結びつきによって区別される類義語群の例をあげよう。

AがBに～	AがBと～	AがBに～ AがBと～
手むかう はむかう 抗する 敵する	あらそう たたかう わたりあう 対戦する	対抗する
	ちぎる	ちかう 約する 約束する
いう のべる おっしゃる	かたらう はなしあう	はなす かたる しゃべる
	うちあわせる	相談する 交渉する
よりすがる		よりそう
とつぐ 嫁する	結婚する	
あやかる		にる
くわわる		あわさる まざる 合流する 合同する
せまる		ちかづく

1.5.1 2動詞間の構文機能の対応

つぎに，構文上のはたらきの点で対応する動詞のグループについてのべる。

文のなかには，これを構成する単語がちがっていても，まったくおなじ意味をあらわすものがある。

AはBの最初の男の子である⟺AはBの長男である

この2つの文において，A・Bにどのような単語をあてはめてみても，もし左辺がなりたてば右辺もなりたち，逆に右辺がなりたてば左辺もなりたつ，という関係はかわりない。このような論理的関係にあることを，上のように⇄であらわすことにする。

文全体が同義的であり，しかも，おなじ構造をもっているとき，2つの文における，共通していない対応部分（上の例で＿＿をひいたもの）も，やはり同義的である。もしその部分がともに1単語なら，それらは同義語である。

AはBの妻である⇄AはBの女房である

（ただし，ここでは「妻」「女房」がなにをあらわしているか，つまり対象的意味だけに注目し，したしみ・軽べつなどの感情的意味は無視することにする。）

左辺がなりたつときは，かならず右辺もなりたつが，逆はかならずしも真ではない，という不可逆的な関係にある文もある。この一方的な関係を⟶であらわす。

AはBの長男である⟶AはBのむすこである

このばあい，共通でない対応部分（「長男」／「むすこ」）は上位下位の関係にある。

さて，以上は，共通部分の構造上の位置がまったくおなじものについてだった。つまり，左辺でも右辺でも，

AはBの……である

という形の文になっていた。ところが，左右の文で，AやBなど共通の要素がべつべつの位置をしめ，しかも文全体としては同義的だというばあいもある。

（可逆的な例）

AはBの親である⇄BはAの子である

AはBにかった⇄BはAにまけた

AはBより大きい⇄BはAょりちいさい

（不可逆的な例）

AはBの父である⟶BはAの子である

AはBをころした⟶Bは死んだ

AはBよりもせまくるしい⟶BはAよりもひろい

これらの関係がなりたつとき，対応する1対の単語は，同義語でもなければ上位下位の関係にあるわけでもない。ただ，可逆的な対は，いわゆる反対語（この概念は未整理であり，いろんな関係にあるものをふくんでいる。p. 707の補注を参照。）の一部をなしている。ここでは，この種の動詞にどのようなものがあるかを概観することにする。

はじめに，全体の一覧表をあげる。

Ⅰ　可逆的なもの

（対称的）

1）AがBにxする⇄BがAにyする（かつ――まける）

1'）AがBにCをxする⇄BがAにCをyする（かす――かりる）

2）AがBをxする⇄BがAをyする（かぶる――おおう）

3）AがBよりxする⇄BがAよりyする（まさる——おとる）
4）Aがxする⇄Aがyしない（うかる——おちる）
（非対称的）
5）Aをxする⇄Aにyする（まかす——かつ）
6）AがBをxする⇄BがAにyする（まかす——まける）
7）AがBをxする⇄BがAから（Aで）yする（くみたてる——なりたつ）
8）AがBに（Cを）xする⇄BがAから（Cを）yする（かす——かりる）
9）AをBでxする⇄AにBをyする（おおう——かける）

Ⅱ 不可逆的なもの
1）AがBをxする⟶Bがyする（こわす——こわれる）
2）AがBに（Cを）xする⟶Bが（Cを）yする（おしえる——まなぶ）

Ⅰ 可逆的なもの

可逆的な関係をつくる動詞は，対称的なものと非対称的なものとにわけられる。対称的というのは，

AはBにかった⇄BはAにまけた〔1）のグループ〕

のように，左辺と右辺とがまったく同じ構造になるものである。非対称的というのは，

AはBをまかした⇄BはAにまけた〔6）のグループ〕

のように，左辺と右辺とで構造のちがう文になるものである。

対称的なものには，つぎのような動詞の対がある。

1）AがBにxする⇄BがAにyする
かつ⇄まける
まさる（すぐれる）⇄おとる

「まさる」「おとる」は，一般に，文章の中では「～に」という形とむすびつく。しかし，ときには「～より」とむすびつくこともある。

○詩人と名が附きや，皆普通の人より勝つてゐるやうに思つてゐた。小説，殊に輸入小説には人生の真相が活字の面（おもて）に浮いてゐるやうに思つてゐた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るやうに思つてゐた。（平凡 98）

○娘の嘆をきいて，承知で心中に出してやる遊女の母親にも劣つてゐるのである。（人格主義 117）

○われわれ人間の方が蟻などよりもだいぶ劣っているかと思われる事情があるのである。（貧乏物語 65）

一方，「すぐれる」は，ふつう

○人より優れていることを示すために反対する人がいる。（革命期における思惟の基準 145）

のように「～より」とむすびつくが，つぎのような文語的・慣用的表現では「～に」とむすびつき，そのかぎりにおいて「おとる」と対称的関係をなす。

○お師匠様は御器量や芸能が諸人にすぐれてをられたばかりに（春琴抄 141）
○この手紙の主は幼にして容色人にすぐれ，かつ富裕なる名家に人となりしがために；名門の子弟の婚を求むる者も少なくなかったのであるが，（貧乏物語 119）

おくれる⇄先だつ

「おくれる」は，移動のときに他人よりもおそくなり，あとからいくことをあらわすときには「～に」とむすびつくことが多い。

○蓮太郎と丑松の二人は少許連に後れた。（破戒 141）
○部隊にずつと遅れて，負傷者が一塊りになつて歩いて来た。（帰郷 77）

つまり「～に」とむすびついた例では，空間的な位置関係をしめすという面がつよい。一方「おくれる」は「～より」ともむすびつく。このばあいには，むしろ時間的関係が（他の人よりもおそい時点で，あることをする，ということが）つよく出ている。

○其日もKは私より後れて帰る時間割だつたのですから，（こゝろ 229）
○だれよりも遅れて一条先生が煙草のけむりをなびかせながら，肩にレーンコートをかけてはいって来た。（人間の壁・上 18）

これに対し，「先だつ」は，空間的・時間的，どちらのニュアンスのばあいにも，「～に」をとることが多い。

（空間的）
○山なす松葉の束を背負つて少女に先立つて歩きながら，（潮騒 30）
（時間的）
○――匈奴の侵略に先立つて，弐師将軍が三万騎に将として酒泉を出た。（李陵 153）

ただし，「～より」の例もないことはない。

○墓へ行くにも人よりも先立つて非常に急いだのであつたが，（土・上 185）

このような対応関係をつくる動詞の対は，上にみるとおり，そう多くない。しかし，ある種の受け身形には，これと同じ対応をしめすものがある。たとえば，

犬が子どもにかみついた⇄子どもが犬にかみつかれた

つまり，ふつうの受け身のように，「を」格の目的語を主語にするのではなく，「に」格の目的語を主語としてとるような受け身のばあいである。（これは，自動詞の受け身だという点では，「わたしは雨にふられた」のような，いわゆる「めいわくの受け身」と同じである。しかし，後者のばあい，もとになる文「雨がふった」にはない要素「わたし」が，受け身文にあらわれる点で，ここで問題にしているものとはちがう。）

この種の受け身をつくる動詞としては，まず，「かみつく」と同様に「～つく」という形のものがある。

おいつく　くいつく　くみつく　なきつく

など。つぎの2つの文は，表面的にはどちらも「（Aが）Bに～」という形で同じようにみえるが，実は相互に転換しうる，対応した，別々の構造をもっていることに注

意。

○大滝老医師が，門のところで八春先生に追ひついた。（本日休診 94）

○きいているとその男に追いつかれそうなので，（暗夜行路・前 176）

このほか，つぎにあげるような動詞も，やはりこの種の受け身文をつくるとおもわれる。

近づく　近よる　せまる　おしよせる　つめよる　よりそう　ぶつかる；ほれる
なつく　あまえる；言いよる　話しかける　くいさがる　ねじこむ；そむく

上にあげた「おいつく」と同様，つぎの2つの文も，見かけ上の構造は一致するようだが，実は対応する別々の文型に属する。

○君，ほんとに，君は，僕の細君に，惚れてるのか（自由学校 333）

○平さんで三人目の男に惚れられたとなると，（自由学校 269）

「～にほれられる」と同じ意味は，また，「～からほれられる」であらわされることもある。

○平さんから，惚れられるということは，（自由学校 269）

1′）AがBにCをxする⇄BがAにCをyする

これは，1）にくらべて，「Cを」という要素がくわわっただけのものだ。

かす⇄かりる
（物を）あたえる，やる，くれる⇄もらう
さずける⇄さずかる
おしえる⇄おそわる
いいつける⇄いいつかる
ことづける⇄ことづかる

このグループでも，右辺の動詞には，「BがAにCをyする」という対称的な形のほか，「BがAからCをyする」という非対称的な形がある。

○あの男にでも金をかりようかしらと思う。（放浪記 280）

○十年ほど前交渉のあつた女から三千円の金を借りて（岡牛 96）

○日々の手当ての仕方を看護婦に教はつた。（生まざりしならば 199）

○安吉はそれを木村から教わった。（むらぎも 331）

この点については，8）参照。

つぎにあげるような動詞のつくる受け身文は，もとの文とのあいだに，「かす⇄かりる」などと同様の対応関係をつくる。

たのむ　たずねる　もとめる　申しこむ　しいる　ゆるす　ことわる　おごる　ゆずる

たとえば

AがBに用事をたのむ⇄BがAに用事をたのまれる

このばあいにも，右辺には「BがAから～される」という非対称的な形があらわれ

る。

○安夫は父に組合の用事をたのまれて，前日から津の県庁へ行き，(潮騒 54)

○そんな華やかな娘さんから，はいからの用事を頼まれて，(富岳百景 71)

なお，一般に，「～に」という相手をあらわす目的語をとる他動詞では，

AがBにCをxしてやる（くれる）⇄BがAにCをxしてもらう

という公式がなりたつ。たとえば，

○この戯曲をかの女の日課として教へて遣らうかと（蒲団 6) ⟶かの女がかれに戯曲をおしえてもらう

○看護婦が新聞や雑誌などによつて教へて呉れる文字を熱心に覚えようとした。(生まざりしならば 186) ⟶かれが看護婦に文字をおしえてもらう

おかみさんがおくみにそういうもののをおしえてやる ⟵

○おくみはそこへ女中代りに這入つて，閑々にさういふものを教へて貰ふ女になつた。(桑の実 7～8)

単独では相手の「～に」とむすびつかなくても，「～てやる」の形ではむすびつく動詞がある。この種のものでも，同様の転換が可能だ。

たとえば，

○まつ子はほの暗い裸電灯の下で，弟に漫画の本を読んでやっていた。(人間の壁・上 34) ⟶弟がまつ子に本をよんでもらう

○船長さんがその前に弔詞を読んでくれることに（蟹工船 90) ⟶みんなが船長に弔詞をよんでもらう

新治が母親に葉書をよんでやる ⟵

○新治にこの葉書を読んでもらふと，おしまひの一句で母親は泣き出した。(潮騒 74)

○行介は似寄りの柄のメリンスを一丈，きぬ子に買つてやつた。(波 83) ⟶きぬ子が行介にメリンスをかってもらう

○父は赤い硝子玉のはいった指輪を私に買ってくれたりした。(放浪記 14) ⟶私が父に指輪をかってもらう

かれが君江に切符をかってやる ⟵

○君江は既に二三度芝居の切符を買つて貰つたこともあるし，(つゆのあとさき 18)

ただし，同じ動詞でも，文脈によつては，このような転換のきかないばあいがある。

○竹のロザリオをこしらえて，それを世界中のカトリック教徒に買ってもらうのだ，という。(高崎山 18)

これは,

カトリック教徒が（　　）ロザリオをかってやる（くれる）

とまでは言いなおせるが,（　　）の位置に「かれに」を入れることはできない。入れるとすれば「かれのために」である。ともに「かってもらう」主体ではあっても,「つゆのあとさき」の<君江>は,利益をうける人であるだけでなく切符をもらう人でもあるのに対し,「高崎山」の<かれ>（この文では表現されていない）が単なる受益者である点が,このようなちがいをつくっている。

2）AがBをxする$\rightleftarrows$BがAをyする

このような公式にあてはまる動詞は,あまり見あたらない。ただ,「かぶる」と「おおう」とのあいだに,特殊なばあい,この関係がなりたつことがある。

〈AがBをかぶる〉	〈BがAをおおう〉
○右手は雪をかぶつた畑で,（雪国 51）	○北国の黒菅盆地は深い雪におおわれてしまうのである。（落城 10）
○白いベレ帽をかぶつたやうに白毛を冠つて笑つてゐる童顔に,（帰郷 87）	○頭髪は永く延びて皺だらけの額を掩うて居た。（恩讐の彼方に 84）

また,

上まわる$\rightleftarrows$下まわる

は,つねにこの関係をつくるはずである。

○限られた経済力の向上をたえず上まわる欲望の増大に,（抵抗の科学 303）	⟶経済力の向上が欲望の増大を下まわる

3）AがBよりxする$\rightleftarrows$BがAよりyする

ここにはいるものとしては、上に1）でのべたように,

まさる（すぐれる）$\rightleftarrows$おとる

おくれる$\rightleftarrows$先だつ

があり,また,「～ ている」の形でならあてはまる,というものには,

ふとる$\rightleftarrows$やせる

でっぱる$\rightleftarrows$ひっこむ

にごる$\rightleftarrows$すむ

しめる$\rightleftarrows$かわく

ゆるむ$\rightleftarrows$しまる

など,かなりの数の動詞がある。たとえば,

兄は弟よりふとっている。

といえば,つねに

弟は兄よりやせている。

といえるはずである。ただし,これはあくまで「～ ている」という状態表現にかぎる

のであって，

　兄は弟よりふとった。

という変化の表現のときには，

　弟は兄よりやせた。

とは，かならずしもいえない。

4）Aがxする⇄Aがyしない

これは，以上のグループとはちがって，2つ以上の要素がいれかわる，というものではない。一方の否定表現が他方の肯定表現にあたる，というような関係にあるものである。

うりきれる⇄うれのこる
うかる，合格する⇄おちる
あたる⇄はずれる
ひきうける⇄ことわる
さる⇄とどまる
信ずる⇄うたがう
ゆきあう⇄ゆきちがう

たとえば，

○自分の学校の生徒は問題がおこりがちであるから，決して引きうけない。（人間の壁・上 111）

では「かならずことわる」に，

○それはお断りしなければ，妾は杉子さんと絶交するわ。（友情 69）

では「おひきうけになれば」に，それぞれ言いかえることができる。もっとも，「うかる――おちる」のような現象には，中間的な，うかりもおちもしない状態というのは考えにくいが，「ひきうける――ことわる」では，そのどちらでもない，保留・思案中といったこともありうる。だから，「ひきうけなかった」ことがかならずしも「ことわった」ことを意味するとはいえないかもしれない。

○それを信じないのは，人類を信じないのです。（真知子・前 72）

○しかし，一般は七日に受取つた休戦報告を疑はなかつた。（伸子・上 45）

でも，それぞれ「うたがう」「信じた」におきかえることができる。ただし，このばあいにも，「信ずる」の否定がつねに「うたがう」だとはいいきれない。たとえば，

○彼は巷説を信じなかつた。片野は失恋で自殺するやうな男ではない。（厚物咲 41）

では，その「信じなかつた」を「うたがつた」とするよりも，もっと積極的に，「まちがひだと信じた」といいなおした方がよいだろう。このすこし前に，「巷説によると片野俊三は未亡人にたいする失恋の結果縊首したといふことになつてゐる」とある。「彼」はこの説をうたがった，つまり正しいかどうかわからないと考えたのではなくて，まったく正しくないと信じたのである。

なお，「～ ている」という状態表現でこの種の対立をつくるものは少なくない。たとえば，

そろう⇄欠ける
すたる⇄はやる
とまる⇄うごく
はまる⇄はずれる
あく⇄ふさがる
めざめる⇄ねむる
おぼえる⇄わすれる
ぬぐ⇄着る
くっつく⇄はなれる
いきる⇄しぬ

など。例文をあげれば，

○話のこまかい筋はもう覚えていない。（むらぎも 190）

おぼえている ←

⟶わすれている

○司馬遷は極度の憤怒の中にあつても此の事を忘れてはゐない。（李陵 176）

つぎに，やはり可逆的ではあるが非対称的なもの，つまり左辺と右辺の形が一致しないものをあげよう。

5）Aをxする⇄Aにyする
まかす，やぶる⇄かつ
愛する⇄ほれる

○併しあなたの前で，あなたの奥さんを愛してゐますとは，さう誰にだつてへるものではありません。（波 134）

○君，人の女房に惚れるんなら，もつと真剣におなんなさいよ。（波 132）

6）AがBをxする⇄BがAにyする
まかす⇄まける
めとる⇄とつぐ
みちびく⇄したがう
支配する⇄従属する
ふくむ⇄はいる，属する
つかまえる⇄つかまる
おしえる⇄おそわる

この最後の対については，上に1'）であげたように，

AがBにCをおしえる⟶BがAにCをおそわる

という転換も可能である。そして，

○教へる方も盲人なら教はる方も盲人の場合が多かつたので（春琴抄 161）

のような例についても，

師匠が弟子に三味線をおしえる⟶弟子が師匠に三味線をおそわる⟶師匠に三味線をおそわる弟子⟶おそわる方

のように考えて，「三味線を」といった目的語をおぎないうるものとすることもできる。しかし，「おしえる」は，

AがB（人）にC（ものごと）をおしえる

という型のほか，

AがB（人）をおしえる

という型の文をつくることもある。

○而も佐助は春琴の相手をする余暇を割いて多くの子女を教へてゐた（春琴抄 204）

だから，

師匠が弟子をおしえる⟶弟子が師匠におそわる⟶師匠におそわる弟子⟶おそわる方

という解釈もなりたつのである。

なお，受け身の構文は，これらと同じである。

太郎が二郎をなぐる⟷二郎が太郎になぐられる

また，可能動詞や「みる——みえる」「きく——きこえる」のばあいも，これに近い。

かれが英語をよむ⟷英語がかれによめる

ただし，可能だということは，かならずしも実現したことを意味しないから，ここは一方通行で⟶にすべきかもしれない。

7）AがBをxする⟷BがAから（Aで）yする

くみたてる，構成する⟷なりたつ

○だがタバコモザイクウイルスを取り出して，それを構成する物質を調べるには，（生命の暗号を解く 154）⟶タバコモザイクウイルスがその物質から（物質で）なりたつ

三つの物質がDNAを構成する ⟵ ○DNAは，糖（デオキシリボース）と燐酸と塩基という三つの物質から成り立っている。（生命の暗号を解く 160）

8）AがBに（Cを）xする⟷BがAから（Cを）yする

かす⟷かりる

（物を）あたえる，やる，くれる⟷もらう

さずける⇄さずかる
おしえる⇄おそわる
いいつける⇄いいつかる
ことづける⇄ことづかる

これらのグループでは,

AがBにCをxする⇄BがAにCをyする

という対称的な転換も成立することは1'）にのべたとおりである。

また, 1）および1'）でのべたように, ある種の動詞のつくる受け身文も, この型に属する。

このほか, ここに属するとおもわれるものに, つぎの対がある。

（抽象物を）あたえる⇄うける

たとえば,

○鷹揚な態度は, これまで想像してゐたとは違つた印象を彼女に与へた。（真知子・前 127）⟶彼女が鷹揚な態度から印象をうける

報告が曾田一等兵に印象をあたえる⟵○曾田一等兵は先日よんだときよりもはるかにはげしい印象を, この報告からうけた。（真空地帯・上 93）

このばあい,「～ を」の位置にくるのは抽象名詞である。具体名詞なら,

かれが彼女に金をあたえる
⇄彼女がかれに金をもらう
⇄彼女がかれから金をもらう

という2とおりの表現があるが, 抽象名詞では,

かれが彼女によい印象をあたえる
⇄彼女がかれからよい印象をうける

という転換があるだけで,「彼女がかれによい印象をうける」とはいわない。（まれには「～ に」といいそうな気もするが, 実例はなかった。）この「印象」の類としては,

利益　損害　打撃　衝撃　待遇　訓戒　苦しみ　屈辱感

などがあり, 要するに相手にある影響をおよぼす, ある結果を生じさせる, というばあいの表現である。

9）AをBでxする⇄AにBをyする

おおう⇄かける, かぶせる
ふさぐ⇄つめる（p. 451参照。）
もてなす⇄ふるまう（p. 325～326参照。）

たとえば,

○蓮太郎の死体の上には旅行用の茶色の膝懸をかけ, 顔は白い帕布（はんけち）で掩ふてあつた。

（破戒 295）

では「死体をひざかけでおおい，顔にハンケチをかける」といっても大差はない。

Ⅱ　不可逆的なもの

1）AがBをxする⟶Bがyする

この型に属するものとしては，まず他動詞と自動詞との対立がある。

こわす⟶こわれる

あげる⟶あがる

など。「こわした」以上「こわれた」にちがいないが，だれもこわさないのに，ひとりでに「こわれる」こともあるから，転換は可逆的ではない。

自他は，おなじ語根をもち，形態的に対立したものについてだけいわれるが，意味的にこれとおなじ対立をしめすものに，つぎのような例がある。

ころす⟶死ぬ

つくる⟶できる

やる⟶いく

よこす⟶くる

○合同の組合から中田勝一という代表がきて報告をしたが，中田の話し方がおそろしく丁寧だったことも強い印象として安吉に残っている。相手が大学生だというので，わざとそういう人間をよこしたのだったろうか？（むらぎも 196）

自動詞に対する使役も，自他と同様ここに属する。

いかせる⟶いく

ねむらせる⟶ねむる

など。

2）AがBに（Cを）xする⟶Bが（Cを）yする

他動詞の使役はこの型に属する。

よませる⟶よむ

みさせる⟶みる

使役ではないが，「～せる」という形の他動詞とこの関係にたつものがある。

みせる⟶みる

きせる⟶きる

あびせる⟶あびる

かぶせる⟶かぶる

また，

おしえる⟶まなぶ，ならう

という関係もなりたつ。「まなぶ」や「ならう」は，

○かういふ知識もその若い学者から学ぶところが多かつたと，娘は真向から恋愛の抒

情を語り兼ねて先づかういふ話から始めたのであつた。（河明り 288）

のように先生があって

若い学者が娘におしえる⟶娘がまなぶ

という関係がなりたつこともあるが，

○夜はおそくまで経を**学んで**，有明の月の出るのを知らなかった事もありました。（出家とその弟子 162）

のように独学のばあいには，この関係がなりたたないから，可逆的だとはいえない。

1.5.2 1動詞における構文機能のかさなり

以上にあげたのは，すべて2つの動詞のあいだにみられる関係だったが，これと似たことが，おなじ1つの動詞についていえることがある。つまり，1つの動詞が，内容的には同一の，2つの構文のなかではたらくばあいがあるのだ。したがって，⇄の左右両辺のどちらにも，おなじxという動詞が出てくることになる。つぎにその例をあげるが，これらはみな可逆的な関係である。（このほかにも，さがせば，ほかの型の転換をする動詞があるだろう。）

やはり最初に一覧表をあげる。

（対称的）

1）AがBとxする⇄BがAとxする（結婚する）

2）AをBとxする⇄BをAとxする（くらべる）

3）AがBにxする⇄BがAにxする（さわる）

（非対称的）

4）AがBにxする⇄BがAでxする（みちる）

5）AをBにxする⇄BをAでxする（ぬう）

6）AがBをxする⇄Bがxする（ひらく）

7）AがBにxする⇄Bがxする（失敗する）

まず，対称的なもの。

1）AがBとxする⇄BがAとxする

たとえば「AがBと結婚する」以上，「BがAと結婚する」にきまっている。

AがBと会う／AがBとたたかう

なども同様。この種の動詞は，かなりたくさんある。まず，「～あう」「～かわす」という接尾的な要素をもった複合動詞のグループがある。

○弓山とぐずぐず**言い合って**厚い唇をむき出している安西（真空地帯・上 221）

安西が弓山と言いあう⇄弓山が安西と言いあう

○隣の俗物は苦もなく日増しに女に親しむ様子で，物を**言交す**五分間がいつか十分二十分になる。（平凡 117）

俗物が女と物を言いかわす⇄女が俗物と物を言いかわす

このほか，このグループに属する動詞としては，つぎのようなものがある。

であう，相談する，対談する，対座する，対話する，会談する，協定する，妥協する，交際する，交渉する，文通する，姦通する，協力する，共演する，共謀する，合作する」

約束する，ちぎる，ちかう，婚約する，縁ぐみする」

あらそう，きそう，けんかする，交戦する，競争（走）する」

近づく，くっつく，さわる，接する，接触する，接続する，ぶつかる，衝突する，握手する，接ぶんする」

かさなる，ならぶ，そう，よりそう，つれだつ，つらなる，平行する，共存する，並立する，重複する」

まざる，あわさる，合併する，合同する，合流する，結合する，連合する，連立する」

まじわる，交差する，交錯する，関係する，均衡する」

似る，酷似する，対応する，対立する」

かわる，交替する」

わかれる，離別する」

これらのうち，「AがBとxする」という形のほかに，「AがBにxする」という形をもとるものがあり，そのばあいには「BがAにxする」という逆の表現はかならずしもなりたたない。これについては 3）を参照。

2）AをBとxする⇄BをAとxする

つぎの例がしめすように，「くらべる」や「比較する」は，この型に属する。

○隆文のしなやかな，白い指を，良人のそれと比べたように，（自由学校 71）

白い指を良人のそれとくらべる⇄良人のそれを白い指とくらべる

○宗教的態度を哲学その他の諸態度と比較して見たい。（哲学以前 169）

宗教的態度を諸態度と比較する⇄諸態度を宗教的態度と比較する

重点・関心のおかれているのは，左辺の表現においては，「A」の方，つまり上の例でいえば「白い指」や「宗教的態度」であって，「B」つまり「良人のそれ」や「哲学その他の諸態度」ではない。これが右辺の表現では逆になる。だから，転換したことによって表現上の価値はかわってしまうが，事実としては両辺が可逆的な関係にある。

なお，このような関係がなりたつとき，もう1つの表現「AとBとをxする」も，つねになりたつ。すなわち，

AをBとxする⇄BをAとxする⇄AとBとをxする

たとえば，「哲学以前」の例は，「宗教的態度と哲学その他の諸態度とを」と言いかえることができるし，

○私は心のうちで，父と先生とを比較して見た。（こゝろ 63）

からは，重点のおき場所によって，

父を先生と比較して見た

先生を父と比較して見た

という2とおりの表現をみちびきだすことができる。

このことは，1）についてもあてはまる。つまり，1）のばあいには，

AがBとxする⇄BがAとxする⇄AとBとがxする

という関係がなりたつ。

2）に属するものとしては，つぎのような動詞をあげることができる。

つきあわせる，てらしあわせる，対比する，対照する」

あわせる，合併する，接続する，連結する，併用する」

とりかえる，いれかえる，交換する」

まちがえる，とりちがえる，混同する」

かけあわせる，交配する」

3）AがBにxする⇄BがAにxする

1）にあげた動詞のうち，つぎのようなものは，また3）の型にも属する。

近づく，くっつく，さわる，接する，接触する，接続する，ぶつかる，衝突する」

かさなる，ならぶ，つれだつ，つらなる」

まじわる，交差する，関係する」

似る，酷似する，対応する，対立する」

かわる，交替する」

わかれる，離別する」

○頬(ふる)へる手が行介の外套に触つた。（波125）

⟶外套が手にさわる

背中が壁にさわる ⟵

○コンクリートの煤けた壁が少女の背中にさはつた。（潮騒 68）

これ以外の動詞でこの型の転換が可能なものは，ほとんど見あたらなかったが，「感染する」はそうである。この動詞は，主語として「人」をとることも，「病気（およびこれに類する悪い状態）」をとることもできる。

〈人が病気に ～ 〉

○悠子の顔を一とめ見て，もうこの娘は暴漢の悪疾に感染してゐるな，と気がついた。（本日休診 83）

〈病気が人に ～ 〉

○彼の絶間のない内心の不安が募つて来た。それは伸子にも感染せずにすまなかつた。（伸子・上 85）

つぎに，非対称的なものをとりあげる。

4）AがBにxする⇄BがAでxする

「みちる」「あふれる」は，たとえば酒と杯とについて，つぎの3つの表現をとる。

(1)　酒が杯にあふれる。
(2)　杯が酒にあふれる。
(3)　杯が酒であふれる。

「みちる」

(1)○暫くして青い煙の満ちた家の内には心も切らぬランプが釣るされて，（土・上 201）
(2)○母なるものは青い畑に満た竈の前に立つては踞りつつ，（土・上 169）
(3)○周囲の闇が私と同じ方向に進む，兵士の群で満ちてゐるのを私は感じた。（野火 115）

「あふれる」

○光が，空にも，地上にもしづかに流れながら次第に溢れてこようとしてゐた。（冬の宿 155）
○昼の花園の如き光と色とにあふれた祭りの光景と（青銅の基督 95）
○もう外の世界は暖かな光であふれてゐたのだ。（冬の宿 155）

このうち，(2)の「杯が酒にあふれる」という表現は，今ではやや古風だが，(1)(3)のように，ものを主体としても，場所（いれもの）を主体としてもいえる動詞は少なくない。これについては，p. 42～43を参照。

5）AをBにxする⇄BをAでxする

これには，すくなくとも2とおりのばあいがある。

第1は，Aが材料，Bが生産物，という関係にあるもの，たとえば，

はぎれをスカートにぬう⇄スカートをはぎれでぬう

第2は，Aが道具的な対象，Bがそのとりつけられる対象をあらわすもの，たとえば，

ペンキを壁にぬる⇄壁をペンキでぬる

これらについては，奥田論文（p. 496）にくわしい。なお，後者に近いものとして，「さかずきをのむ⇄酒をさかずきで（から）のむ」などがある。p. 621～622参照。

6）AがBをxする⇄Bがxする

これは，自動詞と他動詞が同形のものである。ただし，単に同形だというだけで意味のちがうものは，転換がきかないから，ここではあつかわない。たとえば，

風がふく ～ 笛をふく
波がよせる（かえす） ～ 車をよせる（かえす）

これまでに指摘されているこの種の動詞には，つぎのようなものがある。

戸がひらく⇄戸をひらく
戸がとじる⇄戸をとじる
水がます⇄水をます
枝がたれる⇄枝をたれる
根がはる⇄根をはる
話がおわる⇄話をおわる

今回の資料から，両方にもちいられた例をいくつかあげておく。

〈自動詞〉

○芽柳の枝が垂れてゐるのが，ショウウィンドウの硝子に映つてゐた。（帰郷 150）

○その発音には，社会に関する学問，人間に関する学問という意味での学という感じがすこしも伴っていなかった。（むらぎも 93）

○胸のボタンとボタンの間が少しはだけて（娯楽よみうり 1956年6月1日 62）

○大きな木の根が歩きにくく道へ張っている。（むらぎも 304）

○前山の一支脈は延びて，正面の林の後へ張り出して来てゐた。（野火 11）

〈他動詞〉

○壁の上から枝を垂れてゐるブーゲンヴィルの花の紅い色も，変らない。（帰郷 61）

○空想とか夢想とかいう感じを伴わずに，美という言葉を発言するのは容易ではない。（私の人生観 125）

○もう一人は，アロハ模様の半袖シャツの胸をハダけ，（自由学校 205）

○すべての樹は，土の中ふかく出来るだけ根を張つて，（田園の憂鬱 22）

○家々の庇を長く張り出して，その端を支へる柱が道路に立ち並んでゐた。（雪国 154）

しかし，この種のものが多いのは，サ変動詞，それも漢語語幹のばあいだ。和語語幹でも，

〈自動詞〉

○君やにおんぶしてエッチャエッチャって行くのよ（暗夜行路・前 82）

〈他動詞〉

○婢やァお嬢ちゃんおんぶしておくれッ！（放浪記 15）

のように，例がないことはないが，漢語では，

〈自動詞〉

○もし信頼度が高く，安価な「文字を読む機械」が完成すれば，（文字を読む機械 393）

○その面と平行して照し込む夕日の光線が，榊の黒い硬い葉の上に反射して（田園の憂鬱 33）

〈他動詞〉

○「日本語を読む機械」を一日も早く完成しなければならないのである。（文字を読む機械 393）

○やがて彗星は雲の上に出た。金色の太陽光線を反射し，鮮かな尾を引いている。（未知の星を求めて 333）

のように，多くの例をひろうことができる。自他両方の実例があったかどうかにかかわらず，とにかく両方にもちいられる可能性があるとおもわれる漢語サ変動詞を，つぎにあげておく。

異化する，一新する，逸する，一転する，一変する，移転する，移動する，湮滅する，運転する，液化する，欧化する，汚染する，汚損する，開業する，解散する，開始する，解消する，解体する，開通する，回転する，回復する，確定する，確立する，化する，嫁する，合体する，合併する，還元する，完備する，完了する，緩和する，毀損する，逆転する，休刊する，休業する，休止する，具体化する，屈伸

する，屈する，具備する，蒸ずる，軽減する，継続する，激化する，激発する，結果する，決壊する，結合する，結集する，決する，顕現する，現出する，減少する，減ずる，固定する，混合する，混ずる，根治する，混入する，再開する，再現する，再興する，再生する，産する，散ずる，磁化する，持続する，実現する，弱化する，集結する，収縮する，収束する，集中する，終了する，縮小する，樹立する，純化する，昇格する，焼失する，成就する，生ずる，消磨する，深化する，震憾する，伸縮する，伸長する，伸展する，振動する，生育する，析出する，接合する，接する，接続する，接着する，絶滅する，漸増する，増加する，増減する，喪失する，増進する，損壊する，損傷する，損ずる，存続する，大成する，大破する，着色する，中絶する，中断する，中和する，調和する，鎮静する，逓減する，停止する，停車する，定着する，撤退する，添加する，電化する，展開する，転回する，転換する，転ずる，転覆する，点滅する，同化する，同伴する，内定する，倍化する，廃刊する，輩出する，倍増する，破壊する，爆沈する，破損する，発散する，発生する，反映する，反転する，普及する，復元する，腐食する，復活する，復旧する，復興する，分解する，紛失する，噴出する，分離する，変形する，変ずる，亡失する，没する，滅する，融解する，融合する，溶解する，冷却する，漏洩する，露出する

自他両用の1つの型としては，ふつう自動詞であるものが，自分のからだ（の1部分）を対象とした表現にもちいられる，というばあいがある。つぎにあげるような実例があった。

手をさわる（p. 238）
足をふみこむ（p. 267）
からだをひたる（p. 373）
うでをもたれる（p. 485）

このほか，この報告書にあげた自他両方の例としては，「たたえる」（p. 51～52）「くりだす」（p. 82）「感ずる」（p. 658）がある。

7）AがBにxする⇄Bがxする

つぎの「手間どる」「失敗する」などは，これに属する。

○何や角やに手間取つて，外に出ると
（思出の記・上 37）
⟶何やかやが手間どる

幕府が任命に手間どる ⟵

○だがすでに幕府の威令が行われず，征長総督の任命が手間どった。（サンデー毎日 1956年10月7日 24）

○伯父さんが事業に失敗したので，
（波 224）
⟵事業が失敗する

父が製糸事業に失敗する ←― ○果ては父が最後の賭として望を属して居た製糸事業が見事失敗して（思出の記・上 10～11）

このグループに属する動詞は，

うかる，合格する，パスする，おちる」

成功する」

ひいでる，すぐれる」

などである。意味的に一般化すれば，Aは活動・属性の主体である人間，Bはその活動や属性，ということになる。

なお，「失敗する」には，「～を失敗する」「～で失敗する」という形もある。

○その他いろいろの障碍のために五回も渡航を失敗している。（私の人生観 90）

○ふと津上は今度の闘牛の事業で失敗するのではないかと思つた。（闘牛 110）

「うかる」「成功する」その他についても，「～で～する」という表現は可能であろう。

＜補注 p. 690参照＞ 動詞の反対語には，つぎのような種類がある。

A）おたがいに，もとの状態にするようなはたらき

大部分の反対語はこれに属する。たとえば，「おとろえる」「うめる」という作用によってある状態になったものは，「さかえる」「ほりだす」という作用がくわわることによって，もとの状態にかえる。この逆も真である。このグループには，

すすむ――しりぞく

あがる――おりる

のように方向をあらわすもの，

たかめる――ひくめる

ふとる――ほそる

のように形容詞と関係のあるものがふくまれる。これらは尺度が問題になるものだが，「うめる――ほりだす」のように，尺度があまり問題にならないものも多い。

A′）逆の状態にするはたらき

A）のグループも逆の状態にするのだから，この規定は不完全である。しかし，A′）のグループでは，おたがいに「もとの状態」にもどすということはない。たとえば，「かなしむ」「あおざめる」の反対語は「よろこぶ」「あからむ」だろうが，かなしんだ（あおざめた）状態がもとの，ふつうの状態にもどるのは，よろこぶ（あからむ）ことだとはいえない。A）のグループが

←――→

のように図示できるのに対し，A′）は

←― ―→

のようにあらわすことができる。このグループは，

愛する——にくむ
はじる——ほこる
けなす——ほめる

のように，精神状態についていうことが多い。

B）一定の状況のもとで，むじゅんするはたらき

たとえば，「わかれる」という状況は「いきわかれる」か「しにわかれる」かで，その両方であるとか，第3の状況になるとかいうことはない。これは，名詞のばあいに「人間」が「男」か「女」かのどちらかである，というのににている。この類の実例は，p. 696 の4）にあげた。

C）一定の現象をべつの立ち場からみたもの

かす——かりる
やる——もらう
うる——かう
おしえる——おそわる

など。Lyons のいわゆるConverse は，このC）とつぎのC′）とにあたるようである。「かす」には「とりたてる」，「かりる」には「かえす」という反対語もあるが，「かす——とりたてる」「かりる——かえす」の対立はA）である。

C′）対応するべつの人の動作

「やる」と「もらう」とは，おおくのばあい，立ち場のちがいによる名づけにすぎない。しかし，「やる」が一方的行為として「やろうとする」に近くもちいられ，「やったがもらわなかった」ということもありうる。こうなると，「やる」と「もらう」とは，べつの人間のべつの動作であり，ただそれが一貫した現象の対応する部分として，おぎないあうのである。この類には，

せめる——まもる
おう——にげる
もうしこむ——うけつける
いじめる——かばう
おくる——むかえる

などがある。

2. 動詞の意味と文体的性質

2.1 単語の文体的性質

文体と意味との関係を論じるにあたって，まずここで問題にする「文体」というものについ定義的な説明をしておかなければならない。「文体」ということばは，文章全体の性質についてもちいるのが，その本来の，もっともふつうの用法であろう。それは，

個人個人の文章の特徴についていうこともあり，また一般化して「論文的な文体」「くだけた文体」などということもある。しかし，ここでは，動詞の文体を，つまり単語の文体を問題にする。単語の文体というのは，文章全体としての文体をなりたたせるような，個々の単語のもっている特徴のことである。たとえば，ある文章がくだけた調子でかかれているというとき，その調子を決定する1つの要素としては，そこにつかわれている単語の性質，すなわち，あまりかたくるしいものではなく，日常的な会話でもっぱらもちいられるものだ，ということが，はたらいているであろう。

単語の文体をここでは大きく，日常語・文章語・俗語の3つにわける。「日常語」とは，話しことば・書きことばを通じて，あらゆる言語生活の場面にもちいられ，特に文体上の制約がないものである。「文章語」とは主として書きことば，またはあらたまった場面における話しことばで使われるものである。「俗語」とは，もっぱらくだけた話しことばでだけもちいられ，書きことばの中や，あらたまった場面における話しことばには，あまりあらわれないものである。

ここで注意しなければならないのは、日常語・文章語・俗語というちがいは，それぞれ，いちいちの単語のもっている特徴であって，それがどのような言語活動に現にあらわれているかということとは関係ないことである。この点は，特に「文章語」と「書きことば」という用語の区別について，のべておかなければならない。ここでは，単語それ自身のもっている日常語・文章語・俗語という文体的性質と区別して，言語活動・言語作品のあり方をあらわすものとして，「書きことば」「話しことば」という用語をつかう。したがって，ある1つの単語が，会話の中にあらわれれば「話しことば」であり文字に書かれれば「書きことば」になる。しかし，それがどちらの形をとろうと，日常語または文章語だという単語としての性質にはかわりない。小説の会話に出てくるようなことばには俗語がふくまれる。そして，小説の会話として文章の中に登場するかぎり，それは「書きことば」である。しかしこれはあくまで1次的には「話しことば」として存在し，ふつうの「書きことば」（小説でいえば地の文）にあらわれることはないのだから，このような形における「書きことば」にあらわれるということは，それが俗語であることをさまたげない。

2.2 文章語における意味の限定

日常語と文章語との意味的な対応について一般的にいえることは，文章語の方が意味的に限定されていることが多いということである。これは，つかわれる場面において，日常語は範囲が広く，文章語は範囲がせまい，ということと対応している。あとであげるように，文体がちがうだけで意味的にはほとんどちがいがない，という例も多いのだが，一見ちがいがないようにみえても実は文章語の意味範囲が限定されている，という例もすくなくない。たとえば，「あつめる」と「収集（蒐集）する」とを比べてみると，これらは意味的にほぼおなじようにも考えられる。そして「収集」に対しては「とり集めること」「集め寄せること」などという訳を与えている辞典もあって，これでは

ほとんどちがいが明らかにならない。しかし，たとえば例解国語辞典ではこのことばを「趣味・研究などの目的で品物などを寄せ集めること。」と説明している。これによれば「収集する」は「あつめる」に比べて第1に対象の面で限定がある。人を「あつめる」のは「収集する」のではないのである。第2に目的の面で限定がある。「ききんにそなえて，全国から米をあつめる」のように，つかうために「あつめる」こと，趣味・研究などの目的でなく集めることは「収集」にふくまれないのである。

なお日常語と文章語の意味とを比べるというとき，これは，一見したところほとんど同じ意味をもっているような対についていうのである。そうでなければ，文章語の方が意味範囲が広いという例も，もちろん少なくない。たとえば，「ひく」という日常語と「かなでる」という文章語とを比べると，「ひく」が弦楽器なのに対し，「かなでる」は管楽器でもいいので，文章語「かなでる」の方が広い。しかし，さらに「ならす」という日常語をもってきて「かなでる」と比較すると，これは打楽器や臨時に楽器のように使われるものについてもいうことができるので，もっと広い。ここでとりあげるのは，このような例ではなく，一見ほとんど同義と見られ，辞典の説明でも区別がないような日常語と文章語の対についてである。

日常語の意味範囲が文章語よりも広いというとき，その広さには2とおりのばあいがある。第1は，日常語が多義語で，Aの意味が文章語のある単語に，Bの意味が文章語の別の単語に，それぞれ対応するというばあいである。もう1つは，多義語ではなく，1つの意味しかないのだが，文章語の2語に対応するだけの広さがあるというばあいである。ある単語を多義語とみとめるかどうかの判定はむずかしく，結果は辞典によってちがうが，ここでは一応岩波国語辞典を基準にとる。まず，第1のばあい，すなわち日常語が多義語である例をあげよう。たとえば「たすける」という動詞（日常語）は，一方で「すくう」「救助する」という動詞（文章語）に対応する意味をもち，また「補佐する」（文章語）に対応する意味をもつ。

○私の今取るべき最も英雄的な行為が再び谷へ下り，倒れた傷兵を**助ける**ことにあるのは明白であつた。（野火 43）

○母が伯母を**扶ける**程では無いが，僕も聊か伯父の助になつた。（思出の記・上 94）

○もし海難に遭つて**救はれれば**，（潮騒 5）

○乗組員四百二十五人。最後なり。**救助される**見込なし。（蟹工船 28）

○会議は，英国の首相が議長となって，英連邦関係国務相がこれを**補佐しつつ**行われる。（東洋経済新報 1956年7月28日 55）

これら2つの「たすける」は，辞典でそれぞれ別の意味とされているものである。つぎにあげる「やすむ」と「休息する」「欠席する」，「もつ」と「所持する」「所有する」などとの対応関係においても，このことはおなじである。

○こんな山の中で**休む**より畑へ往つてから休まうと（野菊の墓 23）

○彼らは此所で茶を飲み，此所で**休息する**外に，（こゝろ 7）

○だつて先生は一度だつて学校をお休みになつたことがないんぢやありませんか。（波 94）

○私はそれまで自分が手榴弾を持つてゐるのを，忘れてゐたのである。二人の声に驚き，私は急いで腰を探つた。（野火 149）

○彼等は食色の奴隷よりも遙かに高い人格を持つてゐる（人格主義 80）

○この委員会を欠席して外堀公園へ行って誤解を解こうということも，（人間の壁・上 339）

○上官に対する兵隊としてあるまじき言葉は，彼の所持せる私物の手帳のなかに，いたるところに発見され，（真空地帯・上 126）

○芸術家にも宗教家にもなり得る自由な人格を所有する（哲学以前 186）

なお，逆に文章語の方が多義的で，日常語はそのうちの一方にしかあたらない，という，まれな例に，「もってくる」：「もたらす」がある。具体的な動作では，

○おばさんが自分にも来たということをいって安吉あての分を持ってきてくれたものだった。（むらぎも 113）

○ある日竜二が，新治を有頂天にさせる手紙をもたらした。（潮騒 116～117）

のように，どちらもつかえるが，抽象的な，原因をあらわす意味では，

○町村合併はこの街にいろいろな変化をもたらした。（人間の壁・上 29）

のように，文章語である「もたらす」の方しかつかえない。

つぎに文章語の2つの単語が日常語の1つの意味に対応するというばあいがある。このばあいも，意味が1つか2つかの認定は岩波国語辞典による。たとえば，つぎの「しずむ」「かえす」は，それぞれ「沈没する」と「沈下する」，「返却する」と「返還する」に対応する。これらの「しずむ」や「かえす」は，それ自身多義語ではあるが，ここであげた文章語に対応しているかぎりにおいては，それぞれ同じ意味とされているものである。

○ボロ船だ，沈んだらかへつて得するんだ。（蟹工船 27）

○船が一瞬間宙に浮かぶ。——が，ぐウと元の位置に沈む。（蟹工船 19）

○私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。（こゝろ 65）

○千島を日本に返すためにヤルタ協定を覆えすような線に（ジュリスト 1956年12月1日 10）

○秩父丸が沈没したつていふ無電が入つたんだ。（蟹工船 32）

○この地方が地質時代に沈下して海に溺れた後，（野火 125）

○少年は，ポケットから，隆文の金をとり出して，素直に返却した。（自由学校 124）

○ハボマイ，シコタン両島とともに，日本に返還されねばならない。（東洋経済新報 1956年6月9日 54）

この類のものとしては，このほかに

つかまえる／逮捕する・捕獲する

忘れる／忘却する・失念する

えらぶ／選択する・選抜する

うばいとる／掠奪する・奪取する
ひっくりかえる／転覆する・転倒する

などがある。

なお，ここにあげたような動詞についても，1つの日常語の意味の範囲は，かならずしも対応する2つの文章語の範囲によっておおいつくされるものではない。たとえば「しずむ」については，つぎにあげるような人間の意志的な動作をあらわすばあい，「沈没する」とも「沈下する」ともいえない。

○どんな速い底水のある淵でも赤座はひらめのやうにからだを薄くして沈んで行き，水中の息の永いことは人夫達も及ばなかつた。（あにいもうと 134）

2.3　文章語における意味のかたより

以上にあげたのは，1つの日常語の意味を文章語の2語が分担してあらわしている例であるが，これからのべようとするのは，主として，日常語と文章語とが1対1に対応し，しかも文章語の方はその意味範囲がせまく，ある一方にかたよっている，というような例である。文章語が意味範囲をせばめるばあい，それは一定のかぎられた分野，かぎられた方向にかたよりがちである。

もっとも，文体がちがえば意味的にもちがう，とは，かならずしもいえない。文体的に別の層に属していても，ほぼ完全な同義語に近いものもある。その例を以下にあげよう。ならべ方は『分類語彙表』の順である。斜線の左が日常語，右が文章語。

（抽象的関係）
あてはまる／該当する
なくす／紛失する
ほろびる／滅亡する
うけつぐ／継承する
くりかえす／反復する
つく／到着する
にげる／のがれる
はいる／いる
しめる／とじる
つぶる／つむる
さわる／ふれる
じゃまする／さまたげる
すりへる／摩滅する
ふえる／増加する

（精神および行為）
つかれる，くたびれる／疲労する

よっぱらう／酩酊する
おこる／いかる
こだわる／拘泥する
まねる／模倣する
たす／くわえる
わる／除する
おがむ／拝する
つきあう／まじわる
たずねる／おとずれる，訪問する
つかう／もちいる

しかし，一方では，文体のかたよりが意味のかたよりに対応しているものもある。文章語が日常語にくらべてかたよりがちな分野・方向というのは，

1）大規模なことがら
2）公的なことがら
3）抽象的なことがら
4）よいことがら

などである。

2.3.1 大規模なことがら

これには，まず，物理的現象として大規模であるものへのかたより，という例がある。たとえば「たてる」と「建築する」とをくらべると，「家をたてる」「家を建築する」では，ほぼその意味がひとしい。もちろん「たてる」には，このほか，「棒を立てる」などいろいろな用法があるのだが，一応ふつう「建てる」と漢字をあてるような用法について比較すると，両者は，ほぼおきかえることができる。たとえばつぎにあげる例を比較。

○創立運動員は，今度最初に理学部を建てる。（総長就業と廃業 360）

○幸い大学病院附近に，理学部を建築すべきあき地があったから，（総長就業と廃業 354～355）

ところが，ふつうの家やビルなどとちがって，ひじょうに小さな，そまつなたてものには，「建築する」とはいいにくい。

○市九郎は，雨露を凌ぐ為に，絶壁に近く木小屋を立てた。（恩讐の彼方に 75）

このばあい，たてものの大きさだけではなく，そのりっぱさ，すなわち評価的な観点もはいっているかもしれない。

なお「営造する」になると，文章語的性格も意味面での大規模さも，一層はなはだしい。

「ながれでる」と「流出する」とのちがいも，やはりその主体である液体の量に関係する。「ながれでる」も多少文章語的な傾向があるが，「流出する」はいっそうかたい

文章語であって，「流出する」液体はかなりの量があるのがふつうである。たとえば，

○横谷が現はれ，**流れ出る**水が落ち合つて，河原を拡げてゐた。（野火 48）

の例は「流出する」といいかえてもいいが，

○寂しい，唯寂しい涙がほろほろと留度なく**流れ出る**のだつた。（或る女・前 48）

の例を「流出する」におきかえると，かなり不自然で，おおげさである。なお「流出する」は実例がなかった。

「はこぶ」と「運搬する」「運送する」のばあいにも，やはり文章語である「運搬する」「運送する」の方は対象の量が多く，移動の距離も長いといった傾向がみられる。「運搬する」は，たとえばつぎのような例が典型的である。

○伐木してすぐ**運搬する**と重いから，山林で種菌の接種を行ない，二年目になってから適当な所に**運搬する**とよい。（農耕と園芸 1956年1月 47）

これはもちろん「はこぶ」といいかえることができる。しかし「はこぶ」がつかわれている例のなかには「運搬する」でおきかえることができるものも，できないものもある。いま，食べものなどについて「はこぶ」がつかわれた例からひろうと，まず

○鉱山の方へ**搬ばれて**ゆく，味噌や醤油などを荷造した荷馬が，（あらくれ 114）

の例はかなり多量のものを遠くへ「はこぶ」ばあいであって，「運搬する」におきかえることができる。

○石廊下に週番上等兵が補充兵をつれて**はこん**できた飯と汁を（真空地帯・上 28）

ではそれほど量も距離も大規模ではないが，それでもまだ「運搬する」ということもできるだろう。しかし

○小薩張りした服装に改めた店員が，膳を**運んで**来た。（河明り 263）

の例になると，「運搬する」をつかうのは，あきらかに大げさだ。「膳を運搬する」というのは，トラックかなにかにつみこんで，問屋から小売店へおろすようなばあいだろう。さらに

○軍曹は湯飲茶碗を准尉の前には**こんだ**。（真空地帯・上 16）

○へなへなのスプーンで小豆を舌の上へ**運びながら**，（むらぎも 199）

になれば，「運搬する」ということは，まったくできない。もしそういったとすれば，それはこっけいな感じを出すためにわざと大げさな表現をした，ということになるだろう。

「つみこむ」「つむ」と「積載する」の対立でも，やはり「積載する」は量が多い方にかたよる。

○どうしても八輌の貨車の半分は，牛も荷物も一応貨車から降ろして，船に**積込み**，宇野で改めて別の貨車に**積載しなければ**ならなくなつた。（闘牛 116）

の例では，「つみこむ」「積載する」がおなじ文の中で使いわけられているが，この文脈ではこれらを入れかえても別段不都合はない。しかし，つぎの例では「つみこむ」を「積載する」にすると大げさである。

○かれは，自転車にフトンから炊事道具まで**つみこんで**，（高崎山 29）

つぎに，ものの空間的な大きさというよりも，その動きの大きさ・はげしさを文章語があらわしているばあいがある。たとえば「ふるえる」については，

○どつと風が吹くたびに室の硝子戸全体が激しく震へた。いや，ホテル中がふるへて鳴つた。（冬の宿 162）

○すると安普請の家ぢゆうが震動して鳴りひびくのだつた。（冬の宿 74）

のように大きな動きのばあい，「震動する」とおなじであるが，

○彼の指の動き方を伝へて慄へて居る茎の上には（田園の憂鬱 115）

のようにわずかな動きのばあいには，「震動する」とはいいにくい。

運動の量の問題としては，移動をあらわす動詞で，文章語がより長い距離の移動にかたよるという傾向がみられる。まず，移動の距離のところ（p. 304～305）でとりあげた，「うろつく」「さまよう」「さすらう」の1組を参照。そこでのべたように「うろつく」の距離がいちばん短かく，「さまよう」がこれにつぎ，「さすらう」はかなりの長い距離・広い範囲にわたって歩きまわることをあらわす。そして，このちがいは，これらの動詞の文体上の差，すなわち「うろつく」はやや俗語的な日常語であり，「さまよう」「さすらう」は文章語で，ことに「さすらう」は雅語的なことばであるというちがいに対応している。移動の距離は「おりる」と「くだる」とのちがいにもみられる。「くだる」は「おりる」にくらべてやや文章語的である。そして坂のように長い距離のばあいには，「おりる」も「くだる」もともにつかわれる。

○やがて自転車はエナメル塗の背を光らせながら，ゆるやかに坂を降りて行き，青い樹立の陰に姿を隠した。（帰郷 10）

○小型のモーターを取りつけたモーターバイクであった。校門の前の坂道をくだりながら，スイッチを入れる。（人間の壁・上 108）

それで，つぎのように，どちらにでも読める文もある。

○五百助は，坂を下りながら，話しかけた。（自由学校 204）

しかし，短かい階段のような径路のばあいには，「おりる」とはいえるが，「くだる」とはいえない。

○加治木は，先きに立って，階段を降りた。（自由学校 237）

運動の距離の大きさは，また「おちる」と「落下する」のちがいにもあらわれる。かなりの距離があるばあい，「おちる」も「落下する」もどちらもつかえる。

○その二階から落ちたので，地上までほんの瞬間のはずだが，落ちる姿をはつきり眼で追へたほどの時間があつたかのやうに見えた。（雪国 171）

○オバサマを襲った悪漢を，その男が投げ飛ばしたら，ブーンと，十メートルぐらい離れた畑へ，落下したそうよ。（自由学校 257）

上の例は，あきらかに，わざとこの「落下する」という文章語を使うことによって，その距離が大きいことを誇張した表現である。しかしごく短かい距離については「落下する」とはいえない。たとえばつぎの「おちる」はその例である。

○伴子の腕を滑つて砂利道に落ちたハンドバッグを，恭吾は拾ひ上げた。（帰郷 279）

このばあいにも，単に距離だけではなく，「落下する」ものの重さ・大きさ，あるいは早さといった要素もからんでいるかもしれない。なお，純粋に客観的な表現として「落下する」がつかわれるばあい，すなわち物理現象の記述などでは，上にのべたようなかたよりはない。

○重力のごときも，自由に落下する物体に固定した座標系への移行に際して現われる見かけの力と打消し得るものであった。（物質世界の客観性について 266）

このように全体として文章語的な文脈のなかで「落下する」をもちいても，特別の効果はしめさないのであって，さきにあげた，会話のなかで「落下する」がつかわれている例とは対照的である。

つぎに，物理的な現象ではなくて，もっと抽象的なことについても，日常語よりも文章語の方が大規模なことをあらわす傾向がみられる。たとえば，「とりかかる」と「着手する」という1対を比較してみよう。つぎの例ではこの両方がとなりあってつかわれている。

○父の蒐集した資料と，宮廷所蔵の秘冊とを用ひて，直ぐにも父子相伝の天職にとりかゝつたのだが，任官後の彼に先づ課せられたのは暦の改正といふ事業であつた。此の仕事に没頭すること丁度満四年。太初元年に漸く之を仕上げると，直ぐに彼は史記の編纂に着手した。遷，時に四十二。（李陵 170～171）

そしてこの文脈で「とりかかる」と「着手する」をいれかえることは可能である。しかし，このような大がかりなことではなく，もっと日常的なちょっとしたことに手をつけるばあい，「とりかかる」とはいえても，「着手する」とはいえない。

○お島は，自分の部屋へ入ると，急いで寝支度に取りかゝつた。（あらくれ 63）

○彼は木谷との対話を打ち切って，食事にとりかかったが，（真空地帯・上 124）

これらの文で，「寝支度に着手する」「食事に着手する」などというのは，あきらかに大げさであり，不自然だ。

あることがらが大規模であるかどうかということは，あとでとりあげる公的か私的かという対立とかさなることが多い。公的なことは，私的なことよりも一般に大規模である。したがって，つぎにとりあげるような例でも，公的／私的の対立とみた方がよいばあいもあるかもしれない。

「とりかかる」と「着手する」に意味的に近いものとして，「はじめる」と「開始する」，「おわる」と「終了する」，「はかどる」と「進捗する」などの対をあげることができる。これらのばあいにも，「開始する」「終了する」「進渉する」という文章語は，小規模な，日常的な，私的なことを表現するのには，ふさわしくない。

〈大〉

○伊谷君が研究をはじめたころ，（高崎山 15）

○やがて午前六時，われわれは一斉にレンズに目を当て，捜索を開始した。

〈小〉

○それから，爺さんは，彼の最近の身の上話を始めた。（自由学校 170）
（*身の上話を開始する）

(未知の星を求めて 333)

○日当は，大会が終つてからお宅で払つて頂く筈でしたが，(闘牛 120)

○大会が終了した時花火を打揚げるさうですが，(闘牛 147)

○彼等は捗どらぬ工事に，何時の間にか倦き切つて居つた。(恩讐の彼方に 78)

○竹矢来のリングを造るのだが，たかがそんな事さへ予定通りには進捗してくれないことなどを (闘牛 108)

○老婆の話が終わると，下人はあざけるような声で念を押した。(羅生門 16)
(*老婆の話が終了する)

○二人の女が算盤を舟の下にあてがつては押しあげてゐる。見るからに捗らない。(潮騒 35)
(*押しあげが進捗する)

つぎに，社会的な現象についても，やはり文章語の方が大規模になるという傾向がみられる。たとえば「ひっこす」と「転居する」とをくらべてみよう。辞典ではふつうこの両者をまったくおなじにあつかっており，事実大部分の例ではおなじ現象をあらわすのにもちいられている。

○彼等がこの家へ引越して来る時に，(田園の憂鬱 55)

○彼がこの家へ転居して来たてに (田園の憂鬱 85)

しかし

○「ああ，違ふのよ，机だけ引越すのよ——ここ，お互に出入りが邪魔だから，元の部屋へ行きたいと思ふの」(伸子・上 188)

という例では，「転居する」におきかえることができない。この例では，独立の家から家へと「ひっこす」のではなく，家のなかの1つのへやから別のへやへと「ひっこす」のである。このような小規模な移動は，「ひっこす」ことであっても，「転居する」ことではない。大きなアパートのなかで，へやからへやへ移ったばあいは，「転居した」といえるかもしれないが，やはり多少ひっかかりが感じられる。「移転する」も「転居する」に近いだろう。

「まける」と「やぶれる」とでも，きわだったちがいではないが，多少傾向に差が感じられる。国が戦争で「まける」ようなばあいには，どちらでもかまわない。

○日本が敗けて来て憲兵がいつもより神経過敏になつてゐた(帰郷 254)

○敗れても平和が来てゐる。(帰郷 157)

しかし，もっと小さなことについては，「やぶれる」よりも「まける」の方が自然であろう。

○其癖負けた時にも，もう一番遣らうと云つた。要するに，勝つても負けても，炬燵にあたつて，将棋を差したがる男であつた。(こゝろ 63)

ただし「やぶれる」の方にもつぎのような例がある。

○島でもつとも老練な海女がよその土地の海女に仕込まれた練達な少女に敗れたのである。(潮騒 130)

したがって「やぶれる」は大規模な現象について多くもちいられるという程度の，傾

向の上でのちがいにすぎないかもしれない。しかし，つぎのような例では，「やぶれる」というのは，どうみても不自然である。

○彼女に負けて今日は出掛けないと約束した広介を（くれない 106）

さきの「潮騒」の例は，一応正式に競争をして「まけた」ばあいである。それに対してこの「くれない」の例は，正式のあらそいなどというものではなく，もっと小さな家庭内の事件にすぎない。そこに「やぶれる」が一層使いにくい理由があるのではないかと考えられる。実例はなかったが，「かくす」と「隠匿する」，「ぶんどる」と「鹵獲する」などのあいだにも，これに近い関係があるものとみられる。

つぎに，生理的な現象の例をとりあげる。「うめく」と「呻吟する」とは，つぎのような例ではほぼおなじである。

○岡の蔭の熊笹の中に呻吟き倒れて居るところを尋ね当てて，（破戒 107）

○空襲中，彼は鎌倉の病院の薄汚い一室で呻吟していた。（私の人生観 59）

しかし

○彼は凡てがいやになり真つ暗になつて力無く呻めいた。（青銅の基督 100）

では，「呻吟する」というと大げさにきこえる。ただし，このばあい「呻吟する」が不適当なのは，「うめく」にくらべて声が大きいとか，深刻な事態であるとかにもとづくと，かるがるしく断定するわけにはいかない。というのは，「呻吟する」の例は4例しかなかったが，どれも，具体的なうなる動作をあらわすというよりも，上にあげたように，病気などで苦しみなやむことを形象的に表現するためにもちいられた例ばかりだったからである。「うめく」は，これに対して，具体的な動作にもちいられている。これが「うめく」と「呻吟する」との相違点の1つである。また「呻吟する」は，これと関連して，大体継続的な現象をあらわすのに対し，上の「青銅の基督」の「うめく」は1回かぎりのうめきをあらわす。このような点にも「うめく」と「呻吟する」のちがいがあるので，どれが決定的にはたらいているのかをいうことはむずかしい。

言語活動についても，一方が大げさな動作にかたよっているという対立がみられる。たとえば「ののしる」と「罵倒する」とでは，文章語である「罵倒する」の方が大規模な動作といえるだろう。言語活動における規模の大きさとしては，声の大きさもありうるし，内容の重要さや，話をするときの態度のはげしさもあるだろう。いろいろな観点で，文章語のあらわす動作の規模を特徴づけることができるはずである。「罵倒する」のばあい，すくなくとも声の大きさではない。話の内容，または話をするときの態度という点に特徴があるのである。内容的にも，また態度の上でも，かなりはげしいばあい，たとえば

○口を極めて彼等は李陵の売国的行為を罵る。（李陵 167）

○「不届者」「不忠者」「露助の真似する売国奴」さう罵倒されて，（蟹工船 115）

では，「ののしる」でも「罵倒する」でもちがいがない。しかし

○何かあてつけらしく鶏を罵りさうにするのを彼は制止した。（田園の憂鬱 52）

の例のように，それほど大ごとでないときには，「罵倒する」といえないことはないに

しても，「ののしる」の方が適当だろう。

感覚的な活動についても，文章語における大規模性をみとめうる例がある。「みつめる」と「凝視する」「熟視する」とをくらべてみると，文章語である後者においては，特にその態度が熱心である，という方へのかたよりがみられる。

つぎにあげるような例では，これら3つの動詞のあいだに大きなちがいはみられない。

○静かに葉子の手を離して，大きな眼で深々と葉子をみつめた。（或る女・前 26）

○「何だ，それは。」男は眼を円るくして女の顔を凝視した。（青銅の基督 23）

○陵は黙して答へない。暫く立政を熟視してから，己が髪を撫でた。（李陵 199）

ところが，「みつめる」は，一心にみつめるばあいのほか，つぎにあげるような文脈でもつかわれる。

○私はホテルの窓がまだ二つ三つあかりを洩らしてゐるのをぼんやりと見つめてゐた。（風立ちぬ 74）

○ぼうつと島村を見つめてゐたかと思ふと，突然激しい口調で，（雪国 76）

○ただ茫然として，虚空を見つめるばかりである。（未知の星を求めて 326）

これらの例では，「みつめる」が「ぼんやりと」「ぼうつと」「茫然として」などという形容をともなってつかわれている。ということは，意識的に，熱心に対象を知ろうとしているのではなく，視線はある一点にくぎづけにされているものの，その対象を意識の中にはっきりとらえているかどうかは，うたがわしいばあいに，つかわれているのである。「凝視する」「熟視する」には，このような形容をともなってつかわれている例がない。特に「熟視する」については，つねに意図的に，熱心にみつめることにかぎられるとおもわれる。「凝視する」は，これよりも多少ゆるいかもしれない。たとえば，

○彼はビルの五階の窓に立って悠然と天の一角を凝視している。（小説の泉 1956年9月 448）

のような例がある。このばあいにも，なにをみつめているのかは，あきらかでないが，おそらくそれほど熱心に対象を知覚しようとしているのではないはずだ。しかしそれにしても「ぼんやり凝視する」などという表現は，やはりあまり適当とはおもえない。

精神現象についても，文章語は度あいが強いものにもちいられる，という傾向がみられる。まず「おどろく」「びっくりする」と「驚嘆する」「驚愕する」「仰天する」とをくらべてみよう。文章語である後者は，日常語である「おどろく」「びっくりする」のあらわす範囲のうち，とくに度が強い部分とだけ，かさなっている。

○昔の多少は大人気なく見えた蘇武の痩我慢が斯かる大我慢に迄成長してゐるのを見て李陵は驚嘆した。（李陵 195）

○マレンコフがこのアイスラーの書簡に接して驚愕したのは当然である。（中央公論 1953年10月 88）

○叫むだ僕の顔は真蒼であつたらふ。宿の亭主は仰天した（思出の記・上 169）

などの例は，みな「おどろく」「びっくりする」でおきかえることができる。しかし

○古本屋を見て歩いたけれど，何でもあるので吃驚しましたね。値段の高いのにも驚

きましたけれど，（帰郷 301）

の「びっくりする」「おどろく」をこれらの文章語でおきかえたとすれば，原文よりも一そう強いおどろきを，おそらくはややオーバーなまでのおどろきを，あらわすことになる。

つぎに「こまる」と「困惑する」「困却する」とをくらべてみても，文章語である「困惑する」「困却する」は，特にこまり方がひどいばあいにつかわれる。

○有馬教育長はいかにも**困っている**らしい様子で，（人間の壁・上 134）

○おくみは何と言へばいゝのか**困惑しつゝ**，（桑の実 84）

○韓国政府が，これら列強の干渉にほとほと**困却し**（中央公論 1953年12月 111）

のように，こまり方がひどければ，どれをつかっても大差ないが，

○与吉は懐の中で頻りにせがんで居る。お品は平常のやうでなく何も買つて来なかつたので，ふと**困つた**。（土・上 18）

のように，ちょっとしたこまり方のばあいには，「困惑する」「困却する」をつかうと大げさにひびく。なお，やはり漢語ではあるが，「閉口する」は，「困惑する」や「困却する」ほど文章語的ではない。それに応じて，そのあらわす内容も，これらほど大げさなばあいにかぎられず，もっと日常的な，ちょっとしたこまり方のばあいにもつかわれる。

○ズボンがズリ落ちそうで，**閉口する**のであるが，（自由学校 361）

「ぐるしむ」と「苦悶する」「苦悩する」「懊悩する」などとの関係も，「こまる」などのばあいと同様だ。

○そこに女が倒れて，陣痛で**苦しんで**転がってるのが見つかった。（むらぎも 137）

○いま眼の先でモルヒネが切れて**苦悶してゐる**やつにグッと注射する（冬の宿 49）

○痙攣は時々発作した。其度毎に病人は見て居られない程**苦悩する**。（土・上 48）

のように，ひどいくるしみには，苦悶，苦悩でもよいが，

○千代子は島の父母の許へかへつてみて，あくる日から無聊に**苦しんだ**。（潮騒 71）

のように，ちょっとしたくるしみのばあいには，これらの文章語をつかうわけにはいかない。

「にくむ」と「憎悪する」でも，やはり「憎悪する」という文章語は，「にくむ」のうちのはげしい部分とかさなっている。

○内田は熱心な基督教の伝道者として，憎む人からは蛇蝎（だかつ）のやうに**憎まれる**し，（或る女・上 52）

○それに，彼は，まだ，駒子を愛している。迷惑な女ではあるが，**憎悪すべき**存在とは，考えていない。（自由学校 134）

のように，かなり強いにくしみなら，どちらもつかわれる。しかし

○黒田は新人会の先輩で，このごろ国粋社会主義のようなことをいいだしてすっかり会員から**憎まれている**。（むらぎも 167）

○大住軍曹は殊に吉田軍曹の怠惰を**にくんだ**ようである。（真空地帯・上 109）

のように，＜にくしみ＞というよりもむしろ＜きらうこと＞をあらわすばあいには，「憎悪する」とはいいにくい。（これらの例は，一応それほどはげしい＜にくしみ＞ではないと解釈したのだが，もし，はげしい＜にくしみ＞をあらわしているのであれば，もちろん「憎悪する」といいかえることができる。）

2.3.2 公的なことがら

つぎに，文章語の方が大規模な現象をあらわす，ということの1つにあたるともいえるが，文章語が公的，日常語が私的という傾向のみられるばあいがある。たとえば，日常語の「かけあう」に対して，「交渉する」という，やや文章語的な動詞がある。この2つをくらべると，「かけあう」が私的，「交渉する」が公的という例がある。といっても，この両者は，きっぱり意味範囲がわかれているわけではない。用例からみても，大部分かさなっているといってもよい。まず，純粋に私的な場面の例だが，つぎにあげるように，「かけあう」も「交渉する」も，ともにつかわれている。

○いま瀬川からもち出された稿料の前借を，信之に掛合つてやらうなどと云ふ気には（多情仏心・前 121）

○廊下に立っているものが，四人がけの席に割り込ませてくれと交渉する。（ものの見方について 81）

ただし「交渉する」が，ややあらたまった，よそよそしい態度をあらわしているといってよいかもしれない。これらにくらべて，やや公的なばあいの例としては，つぎのようなものがある。

○それで事情を話して五十九日目に，退院出来るやう病院の院長に掛合つてくれたのだが，（波 254）

○特別に車輛を増結して貰ふやう，広島鉄道局の方へ交渉してゐるが（闘牛 100）

これらの例についても，やはりどちらの動詞をつかってもよい。しかし，つぎのように当事者の両方がともにまったく公的な立ち場にあるばあい，「かけあう」よりは「交渉する」の方がふさわしい。

○兎も角五月十七日に休業を申入れて以来二回に亘り組合と交渉しており，（ジュリスト 1956年2月1日 70）

○去る二月以来マカリオス大主教と交渉したレノックス・ボイド植民地相は，追放の事情を説明したが，（東洋経済新報 1956年3月24日 17）

これと同じような対立をしめすものに，「はなしあう」と「談合する」がある。「談合する」は主として，

○例えば国会の騒々しい状況を見ても，互に討議し談合するのに最少限度必要な共感がない。（ものの見方について 177）

のように，公の場におけるものについていう。「はなしあう」は，公のものにも，私的なものにも，広くつかわれる。「談合する」におきかえるとすれば

○老夫婦は，寝物語に，そんなことを，話し合った。（自由学校 301）

のように純粋に個人的なものについては，ひじょうに不自然であり

○それは討論のための討論をやっているのではない。何かの結論を導きだすために，お互に話し合っているのである。（ものの見方について 20）

のようにやや公的なものならば，おかしくない。

「あう」と「会見する」とのちがいも，上の例に近い。また，「こたえる」に対する「返答する」「回答する」がある。

○このときまでツンボさじきにすわらせられていた外務省は，びっくりして八方手を回して調べた挙句，「具体的に法律違反でもない限り取締ることは憲法違反である」と返答した。（週刊新潮 1956年2月26日 24）

○組合がスト権を確立して迫るや，ようやく一万五千円を回答したが，（国民 1954年4月 76）

これらはどれも上の例文にみるように，かなり公的な，あるいは，あらたまった場面における行動をあらわす。家庭のなかで親が子どもにこたえるような動作には，あまりつかえない。たとえば，つぎの「答えた」を「返答した」「回答した」といいかえるのはむずかしい。

○「君，ストライキに参加したことが今までにあったかい？」

「ないんだ。」と安吉は答えた。（むらぎも 218）

「返答する」は，それでも，まだかなり「こたえる」に近く，上の例でも「外務省はこたえた」ということができる。しかし「回答する」の方は「こたえる」になおすことがむずかしいばあいもある。上の例で「一万五千円をこたえた」といってよいかどうかは疑問であろう。「返答する」のうち，それほどあらたまった場面における公的な行動でないものとしては，つぎの例があった。

○まるで小児科の医者が幼い患者を扱ふ調子に堕ちてしまつた。それでも病人は真剣味を見せて，「あたくし，ゲンマンします。」と返答した。（本日休診 120）

これは，しかし，むしろ「返答する」と表現することによって，その病人のかたくるしい，きまじめな態度を誇張しているのだとも考えられる。

言語活動とはかぎらないが，「あやまる」に対する「謝罪する」「陳謝する」の関係も，ほぼこれとおなじである。

○私は其刹那に，彼の前に手を突いて，詫まりたくなつたのです。しかも私の受けた其時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立つてゐたならば，私は屹度良心の命令に従つて，其場で彼に謝罪したらうと思ひます。（こゝろ 262～263）

の例では，おなじ事実が「あやまる」と「謝罪する」の両方で表現されており，

○翌朝になって「昨夜大変失礼しました」と陳謝し「今後よろしくお願いします」とインギンに頭をさげて帰ってきた。（文芸春秋増刊 1954年4月 115）

の例もやはり「あやまる」でおきかえることができるであろう。しかし，もっと親しいあいだ，たとえば家族のあいだでの事実をのべたつぎの例では，「謝罪する」「陳謝する」をつかうことはむずかしい。

○私は一言もなかつた。詫まる以上に恐縮して俯向いてゐた。父は平気なうちに自分の死を覚悟してゐたものと見える。（こゝろ 102～103）

言語活動以外の対人的な動作の例としては，「うけとる」と「受領する」とがある。つぎにあげる例はみな軍隊のなかのものだが，公的な受けわたしでは，

○各隊割当の甘味品を受取るために（真空地帯・上 42）

○患者のために受領した糧秣で喰ひ継いでゐたからである。（野火 6）

のように，どちらでもつかえるのに対し，個人的な受けわたしでは，

○曾田一等兵は小便をすませて，彼から帽子と靴とを受けとろうと待っている染に向ってこえをかけた。（真空地帯・上 85）

のように「うけとる」としかいえない。

「くばる」と「配布する」「分配する」との関係も似たようなものである。公的なばあいには，「くばる」とも，「配布する」「分配する」ともいうことができる。

○城兵がくばってまわった蒲団や藁にくるまって寝ていたのだが，（落城 43）

○各分会は配布されたポスターを効果的に掲示すること。（人間の壁・上 316）

○それぞれ分配するばかりになつたので，丑松は校長を助けて，人々の机の上に十月分の俸給を載せてやつた。（破戒 28）

しかし，つぎのように，まったく私的なことについては，「分配する」や「配布する」をつかうと大げさである。

○何の屈託もない様子で，歌留多の札を配つてゐる。（河明り 313）

つぎの例では，いわば私的な家庭のことについて「分配する」がつかわれている。

○どちらがこの家を出るのか。いつ離婚の手つづきをするのか。財産をどう分配するのか。（人間の壁・上 298～299）

しかし，この例は，法律上の問題として厳密さが要求される場面なので，このかたい文章語をつかったものとみられる。

「引率する」は，「ひきつれる」のおおっている範囲のうち，おもに大勢の生徒などをつれていくばあいにかぎられる。

○いづれも受持々々の組の生徒を引連れて居た。（破戒 72）

○彼女は生徒を引率して教室へかえり，（人間の壁・上 142）

これらでは，おなじようなことをあらわしているが，つぎの例ではもっと私的な事実なので，「引率する」とはいえない。

○父が家族を引連れて，この片田舎に移つたのは，（破戒 105）

対人的な動作ではないが，「みまわる」に対して「巡視する」，「たちあがる」に対して「起立する」なども，私的対公的という要素をふくんでいる。公的なばあいには，これらは，ほぼおなじ文脈でつかわれ，おきかえることができる。

○博物館長が館内を見回っていると，

○これから夜の校内を巡視する役目があ

（婦人朝日 1956年11月 39）

○腰掛けていた木谷が立ち上ってした室内の敬礼に対するまともな答礼さえしなかった。（真空地帯・上 8）

る。（人間の壁・上 123）

○「ケー」衛兵所の控えの兵は一斉に起立しながら，口をあけた。（真空地帯・上 9）

しかし私的な場面における動作の「みまわる」「たちあがる」を「巡視する」「起立する」におきかえることはできない。

○夕の戸締は必ず主人自から手を下して，加之(しかも)寝がけに一度内外(うちそと)を見廻はらねば，夢が結ばれぬそうな。（思出の記・上 192）

○「まだ暗いわね。この辺の人はそれは早起きなの。」と，幾度も立ち上つて窓をあけてみた。（雪国 37）

これらを「巡視する」「起立する」といったとすれば，それはかなり大げさに，あるいは緊張した動作としてうけとられるだろう。

以上あげてきたような具体的な動作とちがって，もっと抽象的な現象についても，私的対公的といえるような対立がみられる。たとえば「けずる」と「削減する」はそうである。公的な予算などについては

○差引き残りの代理貸付は，十億円が削られるわけである。（ダイヤモンド 1956年5月19日 23）

○失業対策費について昨年度より一四三億円すなわち約二五%削減してあった。（世界 1954年4月26）

のように，どちらを使うこともできるが，もっと私的なものについては，「けずる」としかいえない。

○銭勘定は積仕事には稀(めづ)らしいくらゐきれいに支払はれ，吝(けち)な端(はし)たを削ることなぞしなかつた。（あにいもうと 134）

以上にあげてきた私的対公的という対立は，別の観点からすれば，規模に限定のないもの対大規模なもの，という対立の1種であるともいえる。私的というのは，一般に小規模な事件であり，公的というのは大規模な事件である。つぎにあげる「しめる」／「閉鎖する」のような例では，さらにいろいろな要素がからみあっている。

○警察が気がついて通用門を閉めた時にはもう手遅れになっていた。（人間の壁・上 345）

○直ちに議場の出入口を閉鎖するという，まるでだましうちのような事までも（人間の壁・上 350）

上のようなばあいには，ほぼおなじ事実をあらわしているといえる。しかし，

○玄関を出て格子になった門の戸を閉めた。（むらぎも 249）

の「しめる」を「閉鎖する」というのはおかしい。なぜなら，第1に，「閉鎖する」は大きなものを対象とする大規模な事件をあらわすからだ。「正門を閉鎖する」はあるが，「勝手口を閉鎖する」などというのは，ふつう，ない。第2に「閉鎖する」は公的だともみられる。個人の家の門を「閉鎖する」よりも，やはり工場・会社・学校，それに上にあげた「人間の壁」の例にある国会などの門を「閉鎖する」方が自然である。第3に，この対立は，物理的現象対社会的現象の例ともみられる。すなわち，「門をしめ

る」というのは単にそれだけの現象なのだが，「閉鎖する」というのは，門のとびらを動かして空間的にそこをふさぐというよりも，立ち入りを禁止する，人の出入りをゆるさない，という点に重点があるともみられる。したがって，あるばあいには，空間的に門をあけていても，たとえばそこに立て札を出すことによって「門を閉鎖した」といえるかもしれない。これら3つの考えうる要素（このほかにもあるかもしれないが）は，おたがいに無関係なのではなく，公的であるとすれば，必然的に私的なことよりも大規模になるのだし，また，単なる物理現象ではなく，より抽象化された社会的現象になるのである。いままで，いろいろな動詞を大規模な現象とか，公的な現象とか分類して文章語の意味的特徴をのべてきたが，それはもっとも特徴的に見える点をとらえて分類したものである。他の要素がみられないとか，おたがいにきっぱり分かれるカテゴリーであるとかいうことを意味するものではない。

なお，第1部の分析のうち，意味と文体との関係にふれたものとして，「拒絶する」など〔238〕，「要求する」など〔239〕の例を参照。

以上にあげてきた例は，大部分，日常語は和語，文章語は漢語サ変動詞，という対立をなす例だった。それで，ここで文体と意味との関係としてとらえたものは，語種と意味との関係というべきではないか，との考えもありうる。つまり，大規模なものごとをあらわす，公的なことにつかう，などというのは，文章語の特徴というよりも，漢語の特徴といえるのではないか，ということである。文章語がほぼ漢語でしめられている以上，現象的にはどちらともいえる。しかし，その根拠づけから考えるならば，やはり直接意味と関係をもっているのは文体であって，語種ではない。文章語が大規模なことをあらわすということは，文章語のつかわれる場面が，主として大規模な現象を問題にするような場面である，ということから自然に説明がつく。つまり，文体と意味との関係は直接的だ。これに対して，漢語が大規模な現象をあらわすということは，直接には説明がつかない。漢語は中国語からの外来語だから，もし和語が日本固有の現象をあらわし，漢語が中国的なことがらをあらわすという事実があるならば，それはまさに語種と意味との関係として説明がつく。ヨーロッパ語からの外来語については，意味との対応関係が明らかにつけられる例がすくなくない。たとえば，「ドレス」にしても「ケーキ」にしても「テーブル」にしても，これらの類義語の「きもの」「菓子」「机」にくらべれば，欧米風のものに限定されている，という特徴をもっている。これに対して，漢語サ変動詞が中国的な現象をあらわすという事実はまったくないのであって，語種と意味との関係は，ここでは直接つけるわけにはいかない。関係は，漢語は文章語に多く，文章語は意味と一定の関係にあり，したがって漢語と意味とも関係をもつ，というかたちで，間接的になるのである。同様のことは，単語の長さやひん度数との関係についてもいえる。文章語が一般に漢語サ変動詞だといえるのと同様に，文章語は一般に長い単語であり，また日常語にくらべてひん度数の低い単語である。しかし，長い単語が大規模なことをあらわすという必然性はないであろう。また，ひん度数の低い単語が大規模な

現象をあらわす，というのも，その理由を説明することができない。これらも，現象的には意味と関連しているかのようであるが，実際には，文体との関係を通じて間接的につながりをもっているにすぎないのだ。

2.3.3　抽象的なことがら

このグループとしては，文章語が物理的・生理的現象よりも社会的・心理的現象，または一般的な関係などをあらわすように，かたよっている例をあげる。対応する日常語の方は，このようなかたよりがみられないか，または逆に具体的な物理生理現象の方にかたよっているかである。抽象的なものの領域，すなわち社会現象だとか心理現象だとかに分けてあげる方がいいかもしれないが，あまり例が多くないので一括してあつかうことにする。そして，文章語の抽象化の度合いに応じて，つぎの3つに分けて説明することにする。

1）文章語がまったく抽象的現象しかあらわさないもの
2）文章語がほとんど抽象的現象にかぎられるもの
3）文章語が抽象的現象をあらわす方にかたよっているもの

2.3.3.1　文章語がまったく抽象的現象しかあらわさないもの

「搾取する」ということばは，この漢字を訓読みして「しぼりとる」という訳語があたえられていることが多い。しかし，「しぼりとる」ということばのうち，たしかに，

○俺達からしぼり取つて行きやがつた金なんだ。（蟹工船 103）
○労働者は，実にここにおいて搾取されているのであります…（むらぎも 254）

のように，ちょうど「搾取する」に対応する例はあるが，「しぼりとる」のあらわす範囲はそれにかぎられない。すなわち，このような社会現象以外に，

○黒柳先生のような先生は，次々にこの世の中の生きた人間の血を絞り取るような憎々しい階層の人間達のために，その口を塞がれ，（葦 1956年5月 152）

のように，具体的な動作をあらわすばあいにも，このことばは用いられる。（ここの表現は全体としては比ゆだが，「ような」より前の部分は事実としてのべている。）なお，単に「搾取する」は社会的現象にかぎられる，というだけでは「しぼりとる」との区別をしめすのに不十分なのであって，

○殊に風儀を紊（みだ）るものは，学生から金を搾り取ろうとするが唯一の目的である。（総長就業と廃業 353）

の「しぼりとる」は，やはり社会的現象をあらわしているが「搾取する」におきかえることはできない。「搾取する」は，「働らいているものに対して，それにふさわしいだけの支払いをしないで金をしぼりとる」という，きわめて限定された意味である。

同様の関係は，たとえば「蹉跌する」と「つまずく」，「紛糾する」と「もつれる」などについてもいえる。「蹉跌する」「紛糾する」を「つまずく」「もつれる」といいかえただけでは，まったく不完全な説明でしかないのであって，前者は社会的な現象だけ

をあらわすが，後者は具体的な現象としてのつまずきや，糸のもつれをもあらわす。

同じようなことは，また，精神現象への抽象化を示すものとして，「首肯する」という動詞にもみられる。承認する，納得するという精神態度をあらわすものとしては，「首肯する」も「うなずく」もほとんど同様に使われる。

○しかし初江の乳房を見ると，彼女と新治に関する悪い噂が時と共に消えたのが肯かれる。（潮騒 124）

○それぞれ何とか口を出したが，結局どれも循環論で，他を首肯させるやうな説はなかつた。（波 320）

しかし，「うなずく」はもちろん，

○尤もと云ふ風に，二三度こつくりとうなづいた。（或る女・前 117）

のように具体的な動作をもあらわすのであり，この例は「首肯する」でおきかえることはできない。

和語どうしの対立では，「おちこむ」と「おちいる」の例がある。抽象的な，関係の変化をあらわすものとしては，どちらも同じ文脈で使われる。

○その五百円と女いとほしさに彼は深みに陥ち込んだのだ。（厚物咲 22）

○何としても長次郎はいよいよ深みへ陥るばかりだつた。（末枯 65）

しかし具体的な移動をあらわすものとしては，

○船はのめつたやうに，ドツ，ドツ，とその谷底へ落ちこんでゆく。（蟹工船 20）

のように「おちこむ」しか使えない。

以上あげた例をつうじて，文章語の方はみな語源的には具体的な動作をあらわすものだった。それで，現代語の説明もその語源・字面にひきずられて，単純にそれにあたる日常語の訳語をあたえがちなのである。ところが，日常語の方は，具体的な動作をも，抽象的な動作をもあらわす。つまり，日常語の方は多義語であって，文章語はその一方の意味とのみ同義関係にある。だから，これらの例は最初にあげた「たすける」と「救助する」および「補助する」などの例にあたる。

2.3.3.2 文章語がほとんど抽象的現象にかぎられるもの

この例として，「よごす」と「けがす」，「よごれる」と「けがれる」の対をあげることができる。これらは，抽象的なばあいには，どちらももちいられる。

○国家主義ほど汚（よご）され不純にされた概念は（人格主義 129）

○俺が行く事はその神聖な祭りの清浄をけがすものだ。（青銅の基督 79）

○あの女が私はよごれているといって涙をこぼして（出家とその弟子 167）

○貧苦こそすれ，罪悪の為に穢（けが）れたやうな家族ではないと（破戒 12）

しかし，具体的な事実については，主として日常語である「よごす」「よごれる」の方がもちいられる。

○鼻血がどくどく口から顎を伝つて胸の合せ目をよごした。（或る女・前 59）

○働いたものは血によごれてゐる。（阿部一族 77）

これらの例を「けがす」「けがれる」におきかえることは，かなりむずかしいであろ

う。それができなければ，つまりこれらは，上に例としてあげた「搾取する」や「おちいる」などと同じことになる。しかし，今回ひろった用例の中にはなかったし，また一般にすくないことはたしかだと思われるが，このような具体的な現象についても，「けがす」「けがれる」がまったく使われない，といいきるのはためらわれる。（もし使われたとすれば，その際，精神的な意味でのけがれをも，ニュアンスとしてあらわすことになるかもしれない。）それでここでは「搾取する」などと一応区別した。

「ゆがめる」「ゆがむ」と「歪曲する」との関係もこれに近い。「ゆがめる」は，「顔をゆがめる」と「理論をゆがめる」，「ゆがむ」は「顔がゆがむ」と「理論がゆがんでいる」のように，どちらも具体的現象も抽象的現象もあらわす。これに対して，「歪曲する」は，おもに「ゆがめる」にあたる他動詞として使われるが，ほとんどの例は，

○たとえ理論的に歪曲されているとはいえ，（社会事情と科学的精神 130）

のように抽象的な現象をあらわすものにかぎられている。ただ1つ例外としてつぎの自動詞の例があった。

○物体に万有引力が働くということは，物体の置かれた空間が歪曲していることを意味しているのである。（物質世界の客観性について 266）

これは，物理現象をあらわしている例であって，理論などにくらべれば具体的な事実といえる。もっとも，このばあい，個別性を完全になくした一般的事実としてのべられているのだから，その意味では抽象的事実だともいえる。（一般性としての抽象性についてはあとでのべる。）

2.3.3.3 文章語が抽象的現象をあらわす方にかたよっているもの

ここにあたる例としては，まず「なげすてる」「ほうりだす」という日常語に対して，「放棄する」「なげうつ」という文章語が対立している例をあげることができる。これらのうち，「なげすてる」はやや文章語的ではあるが，「放棄する」のようなかたい文章語，「なげうつ」のような雅語的な文章語にくらべれば，やはり日常語である。これら4語はそれぞれ具体的な現象についても抽象的な現象についても使うことができる。

〈具体的〉

○のぼりやプラカードを指定された場所に投げすてて，（人間の壁・上 344）

○女はハンカチを放り出して，（冬の宿 164）

○空に冴えた月は放棄してある手水盥を覗いては（土・上 167）

○筆を投つて，嘆息して，復た冷い寝床に潜り込んだが，（破戒 89）

〈抽象的〉

○副会長といふ顕要な位置さへ投げ棄てたのだと（或る女・前 28）

○学校の課業を放り出して，休み前に帰つて来たといふ事が，（こゝろ 60）

○資金がないために放棄されている仕事はたくさんにある。（貧乏物語 131）

○今までの辺境守備隊員の役柄をなげうつて，（潮騒 88）

しかし，「なげすてる」「ほうりだす」という日常語のばあい，具体だろうと抽象だろうと，比較的自由にあらわすことができるのに対し，「放棄する」「なげうつ」で

は，そうはいかない。上にあげた例でも，抽象的現象をあらわす「放棄する」「なげうつ」はごく自然だが，具体的な現象をあらわす例では，「土」の「放棄する」はやや大げさな感じだし，「破戒」の「なげうつ」はかなり慣用的な表現，書くのをやめるということの形象的な表現である。

つぎに「くみたてる」と「構成する」との対立の例をあげる。これらも，ともに具体・抽象どちらの現象をもあらわす。

〈具体的〉

○設計から何から研究者自身が考え，組**み立てなければ**ならなかった。（物質の根源と宇宙を結ぶ 104）

○原子核は陽子と電子より**構成されて**いると見做されていたが，（原子物理学の発展とその方法 327）

〈抽象的〉

○新しい現象を自ら見つけ出し，自ら理論を**組み立てて**いくというやり方（物質の根源と宇宙を結ぶ 120）

○この線に沿って彼が**構成した**新しい理論——すなわち狭義の「量子力学」（物質世界の客観性について 274）

しかし，「くみたてる」がどちらの現象も自由にあらわすのに対し，「構成する」は一般に抽象的なことをあらわすばあいが多く，具体的現象の例としてあげた上の例も，ある意味ではきわめて抽象度（一般性）の高いものである。この点，上にあげた「歪曲する」のばあいと同じようなことがいえる。しかも「原子核は陽子と電子より構成されている」というのは，これらの要素間の関係の表現であって，研究者がガイガー・カウンターをくみたてるというような動作をあらわすものではない。その意味でも，「構成する」は抽象的な表現である。

なお以上にあげた 1)・2)・3) の分類は要するに程度の差であって、きわだったちがいがみとめられるわけではない。そして，この分類自体，かならずしも用例の多さ少なさといった客観的な基準・根拠にもとづくものではなく，かなり主観的な判断によるものである。

ひろい意味では抽象化といってもよいだろうが，上にあげたものとは多少ちがう傾向のものを 2 つあげておく。以上にのべたものが多義語の意味間の差だったのに対し，以下のは 1 つの意味の広がり，ないしは使い方にみられるかたよりである。第 1 は，「抽象化」に対して，文章語の「一般化」とでもよぶべきものである。たとえば，日常語「かばう」と文章語「庇護する」とをくらべてみると，

○洞窟の中から，走り出て来た五六人の石工は，市九郎の危急を見ると，挺身して彼を**庇ひながら**

「了海様を何とするのぢや。」と，実之助を咎めた。（思譽の彼方に 86）

のように，特定の瞬間における具体的な動作の「かばう」は「庇護する」におきかえることはできない。しかし，つぎの例のように，特定のばあいではなく，何度もくり返される行動，何日もにわたる事実を一般的に表現するばあいには，どちらをつかうこともできる。

○おゆふに庇護(かば)はれてゐる男の心が，歯痒かつたり，妬ましく思はれたりした。（あらくれ 86）

○千金の家に生れながら不幸にして盲目となつた可憐な少女を庇護する感情もあつたらうけれ共（春琴抄 144）

なお，上にあげた「歪曲する」の例を参照。

例はなかったが，「くう」「たべる」に対する「食する」も，一般的事実の表現にかたよっているかもしれない。

第2は，文章語における比ゆ的・形象的表現へのかたよりによる抽象化だ。上に「うめく」と「呻吟する」との比較でのべたように，文章語「呻吟する」は，具体的な動作よりも，苦しむことの形象的表現として，もちいられることが多い。これとおなじことは「にらみつける」に対する文章語「睥睨する」にもいえる。これは，主として，

○二人は東京と東京の人を畏れました。それでゐて六畳の間の中では，天下を睥睨するやうな事を云つてゐたのです。（こゝろ 195）

のような慣用的な文脈で，動作よりも心理状態の表現として，もちいられる。

○枕元には，嘉門が仁王立ちになつて私を睨みつけてゐた。（冬の宿 147）

のような具体的動作には，あまりもちいられない。古いところには，

○或は小学校の側(わき)を二人手を組むで憚りながら僕等は中西西山先生の門人だと云はぬばかり睥睨して通つたこともある。（思出の記・上 76）

というように，全然例がないわけではないが。

2.3.4 よいことがら

文章語は，よい評価をともなうような現象をあらわす傾向がある。その典型的な例は「かおる」で，日常語の「におう」に対し，いいにおいだけをあらわす。例は<評価>の項（p. 492）を参照。このほか，2，3の例をおぎなっておく。

まず「そだてる」対「はぐくむ」。文章語である「はぐくむ」は，愛情をこめて，たいせつにそだてるばあいにいう。したがって，

○どれほどの思いをこめて一人の娘を育てて来たことだろうか。（人間の壁・上 37）

○他人の子と思つて悶えるよりは，自分の子と思つて育(はぐく)む方が気持がよかつた。（波 339）

などではおきかえられるが，

○それが全部，彼女にまかせられた彼女の生徒である。優しく育てるのも荒々しく育てるのも，先生の仕向け方ひとつだ。（人間の壁・上 83）

では「はぐくむ」は不適当だ。

つぎに「でくわす」と「めぐりあう」。これらは，もちろん，おなじような文脈でつかわれることが多い。

○何処かで好きな女性に出つくはす。その人と半年か，一年ぐらゐ交際を続ける。（波 104）

○もし女が運命の真実な相手にめぐり逢つたならば，（真知子・前 34）

しかし，つごうのわるい相手に出あったつぎのような例は，「めぐりあう」というのはおかしい。

○昼と夜で小僧と教師の早変り，主人の要を帯びて宇和島に出かける時なぞ吾生徒に出会(でっくわ)して随分きまりの悪い事も少なからず，（思出の記・上 206）

（もっとも，この例で「めぐりあう」が不適当なのは，文章語として，大規模なこと，非日常的なことにかたよっているためかもしれない。）つぎの例は，ある意味ではこのましくない相手との出あいだが，自分がさがしもとめていた相手なのだから，その意味ではよい結果がえられたわけで，ほかの「めぐりあう」の例とむじゅんしない。

○彼は，心の裡で，生来初めて廻り逢ふ敵の容貌を想像した。（恩讐の彼方に 84）

つぎに「古ぼける」対「古びる」。このちがいは，意味的にも文体的にも微妙だが，「古びる」の方が多少文章語的であり，それに応じて，「古ぼける」のもつわるい評価がない。「古ぼける」は，

○現在の古ぼけた陰気な邸宅を，（真知子・前 9）

のように，いつも，わるい印象を与えるものにいう。「古びる」も，

○建物の内部はくらく，ほこりっぽく，古びていて，大きいくせにいかにも貧乏くさい。（人間の壁・上 230）

ではマイナスの評価があるが，

○此方(こんた)からは見通されぬ処に立つてゐる古びた平家の玄関前に佇立んだ。（つゆのあとさき50）

では，べつだん積極的な評価をともなわず，

○黒光りに古びた玄関の板敷きに片寄せてある，桐の三味線箱の秋の夜更らしい静まりにも，島村はなんとなく心惹かれて，（雪国 138）

では，むしろ古いことすなわちよいこと，ともとれるような状況についてつかわれている。

2.4 俗語における意味のかたより

文章語というべき単語が多いのにくらべ，俗語というべきものの数は，はるかに少ない。そして，その意味との対応関係もずっとかんたんだ。すなわち，動詞についていえば，俗語は日常語にくらべて，あらあらしい動作にかたよっている，ということにつきる。たとえば，つぎにあげる「なぐる」「かつぐ」「つかむ」「まげる」を，それぞれ対応する俗語的表現「ぶんなぐる」「ひっかつぐ」「ひっつかむ」「ひんまげる」などにおきかえることはできる。しかし，そうすると，それはいかにも乱暴な，みにくい動作になって，この場にふさわしい，やさしさ，愛らしさといった要素が，まったくなくなってしまう。

○女だてらに男の弟子を打つたり殴つたりしたといふ春琴の如きは（春琴抄 161）

○これ〔三味線箱〕を座敷へ担いで行くなんて嘘のやうな気がしてゐると，（雪国 53）

○女の膝の上の手をつかんで小さい指の撥胼胝(ばちだこ)を弄びながら，（雪国 108～109）

○愛らしい首を曲げて，春は心のかわたれに……私に唄ってくれたあの少女が，四十二の男よ呪われてあれだ！（放浪記 159）

同様のものとしては，つぎのような対をあげることができる。

のめる／つんのめる
ひきぬく／ひっこぬく
かぶる／ひっかぶる
でる／おんでる
のせる／のっける
せおう／しょう

みな，俗語的なものが、乱暴さ軽率さなどのニュアンスをともなっている例である。

なお，

○ぶち殺したつてくたばりさうもないぢぢいだつたけれども。（末枯 35）

○「嘘つきやがれ。」

伊之はカツとして小畑の頬を平手で撲ち（あにいもうと 148）

なども俗語的であり，それに応ずる意味的な特徴をもっている。しかし，その特徴というのは，上の＜乱暴さ＞など，動作自身のもっている客観的な属性より，話し手がこの動作の主体に対していだいている，軽べつ・にくしみなどの感情だ。死ぬこと，うそをつくこと自体が，あらあらしかったり，みにくかったりする，というよりも，話し手の主体的な感情を直接に表現しているのである。「ひんまげる」「つんのめる」なども，時としては，動作主体に対する感情の表現となることがある。しかし，その際，これらの動詞は，直接的には動作のあらあらしさ，みにくさなどをあらわしているのであり，そういうものとして動作をえがきだすことによって，間接的に動作主体への感情をこめているのだ。

参考文献

〔1〕 Apresyan Апресян, Ю. Д.: Экспериментальное исследование семантики русского глагола. (1967)

〔2〕 〃 : Толкование лексических значений как проблема теоретической семантики. "Известия Академии наук СССР. Серия литературы и языка." 28—1 (1969)

〔3〕 Bendix, E. H.: Componential Analysis of General Vocabulary. (1966)

〔4〕 Bierwisch, M.: Some Semantic Universals of German Adjectivals. "Foundations of Language" 3 (1967)

〔5〕 Bolinger, D.: The Atomization of Meaning. "Language" 41 (1965)

〔6〕 Fillmore, C. J.: Lexical Entries for Verbs. "Foundations of Language" 4 (1968)

〔7〕 Hattori 服部四郎「意味」『岩波講座 哲学 11』(1967)

〔8〕 〃 『英語基礎語彙の研究』(1967)

〔9〕 Huzii 藤井 正「『動詞＋ている』の意味」『国語研究室』5 (1966)

〔10〕 Ikegami, Y.: The Semological Structure of the English Verbs of Motion. (1970)

〔11〕 Kasahara 笠原康子「川越方言の〈硬さを表わす語〉」『方言研究の問題点』(1970)

〔12〕 Katz, J. J. & Fodor, J. A.: The Structure of a Semantic Theory. "Language" 39 (1963)

〔13〕 Kindaiti 金田一春彦「国語動詞の一分類」『言語研究』15 (1950)

〔14〕 〃 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集X 文学 4 (1955)』

〔15〕 Kokugo Kenkyûzyo 国立国語研究所報告 25『現代雑誌九十種の用語用字（分析）』

〔16〕 〃 国立国語研究所報告 28『類義語の研究』

〔17〕 Kunihiro 国広哲弥『構造的意味論』(1967)

〔18〕 〃 『意味の諸相』(1970)

〔19〕 Leisi, E.: （鈴木孝夫訳）『意味と構造』(1960)

〔20〕 Lyons, J.: Structural Semantics. (1964)

〔21〕 Miyazima 宮島達夫「意味の体系性」『教育国語』4 (1966)

〔22〕 Mizutani, S.: A Methodological Essay on Semantic Description of Words. 『東京女子大学創立五十周年記念論文集』(1968)

〔23〕 Morita 森田良行「『行く・来る』の用法」『国語学』75 (1968)

〔24〕 Nisio 西尾寅弥「語彙論と意味論」『文学・語学』57 (1970)

〔25〕 Okuda 奥田靖雄「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8 (1967)

〔26〕 〃 「日本語文法・連語論」『教育国語』12～(1968～)
〔27〕 Schmidt, W.: Lexikalische und aktuelle Bedeutung. (1965)
〔28〕 Suzuki 鈴木重幸「現代日本語の動詞のテンス」『国立国語研究所論集 ことばの研究』第2集 (1965)
〔29〕 〃 『日本語文法・形態論』(1972)
〔30〕 Takebe 武部良明「複合動詞における補助動詞的要素に就いて」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』(1953)
〔31〕 Ufimtseva Уфимцева, A. A.: Слово в лексико-семантической системе языка. (1968)
〔32〕 Vinogradov Виноградов, В. В.: Основные типы лексических значений слова. "Вопросы языкознания" (1953—5)
〔33〕 Weinreich, U.: Lexicographic Definition in Descriptive Semantics. "Problems in Lexicography" (1962)

索　引

語彙索引

——あ——

哀願する　**351**～352, 355～356, 360
愛する　697, 708
あいつぐ　158
相手どって　677
あいまって　677
あう　**183**～185, **441**～442 701, 722
～あう　305, 701
あえぐ　424
あえる（和）　**156**
あおざめる　424
あおむく　16, **139**～140, 249 **259**
あおりたてる　**472**, **500**
あおる　**323**～324, **472**, **500**
赤くなる　126
あかして（飽）　677
あかぬけた　676
あからめる　128, 424
あがる　6, 16, **59**, 127, 249 **253**～258, 272, 401, 423 509, **511**～523, 526～527, 535, 537, 539, 544 552, 700, 707
～あがる　230
あきなう　**114**～115
秋めく　37, 428
あきる　425
あきれかえる　230
あきれはてる　230
あきれる　230, 425
あく（開）　90, 428, 697
握手する　702
あくたれる　426
あぐむ　425
悪用する　493
あげて　677
あける　36～37, 91, 428, 509 **607**～**616**, 638
あげる　**39**, **61**～62, **129**～131 **183**, **253**, 256, **405**～406 509, 521, **534**～**551**, 700
あけわたる　428
あさい　398～399
朝寝する　370
あざむく　678～679
あさる　**219**
あざわらう　424
あしらう　**485**
あじわう　655, 659
あずかる　**335**～336, **408**～409
あずける　**405**～406
あせばむ　424
あせる（褪）　**396**～397
あせる（焦）　247, 425
あそばす　97
あそびすぎる　230
あそびほうける　425
あそぶ　**175**～176
価する　24
あたう（能）　678
あたえる　185, **405**～406, **473**～474, 673, 693, 698～699
あたたかい　415
あたたまる　**51**, 126, 321, **414**～415
あたためる　36, **51**, **320**, 412 **414**
あたる　**237**, 273, **478**, 674 696
あつい（暑）　415
あつかう　427, **485**
あつがる　655
圧殺する　310
圧死する　310
あったまる　**414**
あったためる　**414**
あつまる　20, 24, 81, **85**, **107** **112**, **273**～275, **409**～410, **437**～438, **459**～460, **496**
あつめる　**444**～445, 671, 709 ～710
あてつける　276
あてはまる　24, 428, 712
あてられる　426, 685
あてる　**238**
あなどる　425
あばく　**446**
あばれる　98
あびせる　56～**57**, 129, 700
あびる　129, **260**～261, 700
あぶらぎった　676
あぶる　51, **156**～157, **320**～321
あふれる　49～52, **80**, **362** **382**, **476**, 703～704
あぶれる　426
あまえる　98, 693
あまくだる　259
あまったれる　425
あまる　24, 428
あむ　**69**～70
雨　30～31
あやかる　689
あやす　**168**～169, **465**～466
あやまる　350, 426, 722～723
あやめる　427
あらす　**63**
あらそう　98～99, 688～689 702
あらだつ　161
あらたまる　24
あらわれる　24, 571～572
ありあまる　24
ありあわした　676
ありつく　**27**～30, 426
ありふれる　**87**～88, **375**～376
ある　24, **87**, 202, 295, **375** **502**～503, 667, 673, 680 ～681
あるく　15, 242～247, 289 **310**～311, 629～630 674
あれはてる　151
あれる　**62**～63, 127

あわさる 689, 702
あわせる 703
あわてる 111, 247, 422, 425
667

——い——

いあわせる 426
いいあう 701
いいおとす 426
いいかわす 701
いいそびれる 426
いいつかる 426, 693, 699
いいつける 693, 699
いいつのる 236
いいよる 693
いいわすれる 426
いう 96～97, **176**～177, 185
233, 235, **339**～341, **437**
689
いえる **102**～103
いかす 676
異化する 705
いがみあう 426
いかる **179**～180, 713
いきあう **183**, 185, 426, **441**
696
いきかう 307
いきせききって 676
いきちがう 696
いきつく 426
行きづまる 428
息づまる 676
いきどおる **179**, 230, 425
いきまく 424
いきる 697
いきれる 428
いきわたる 25
いく（ゆく） 16, 42, 81, 96
203～204, 209～210
241～**242**, 247, 249, 275
288～**291**, **294**～295
306, 311, **341**, **368**～369
424, 571, 667, 674, 700
いける（活） **110**～111, **455**
～456
いける（行） 676
いさむ 425
いさめる 185
縊死する 310
いじめる **117**, **434**～436, 708
いじりまわす 296
いじる 296
いそぐ 22, 229, **242**, 246～
248, 343
いそしむ **118**, **461**～463, **487**
いただく **59**, 185, **408**～409
いたむ **365**, 424
いためつける **117**, **434**～435
いためる **71**, 128, **156**～157
319～320
いたる 211, 401
いちゃつく **114**, 426
一新する 410, 705
逸する 705
一転する 705
一変する 705
いてつく 428
いてる 36
移転する 705, 717
移動する 705
射とめる 434
いなおる 426
いななく 16, 122, **125**, 428
いなむ 678
いならぶ 427
犬死にする 493
いびる **117**, **434**
いぶかる 425
いぶる 35, **212**, 214
いましめる 185
いやがる 425
いやす **103**～104
依頼する **351**～353, 355, 358
～359, 361
いらだつ 425
いらっしゃる 96
いりくんだ 676
いりびたる 426
いる（居） 22, 96, 295, **457**
667, 680
いる（入） 712
いる（要） 24
いる（射） **169**～170
いる（炒） **71**, **156**～157, **319**
いれあげる 426
いれかえる 703
いれる **55**～57, **86**～87, **269**
393～394
いわう **490**
印する 679
引率する 723
湮滅する 705

——う——

上 16, **249**～256, 261
うかがう **326**～327
うかされる 685
うがった 676
うかぶ 16, 25, 42, 99, **370**
509, 554, **556**～**563**
うかべる 371
うかる 426, 696, 707
うかれる 425
うき足だつ 424
うく **370**～371, 509, **551**～
556, 557, 562
うけあう 350
右傾する 264
うけつぐ 712
うけつける 708
（～を）うけて 677
うけとる **335**～336, **408**～409
723
うける 699
うごかす 536
うごく **69**, **84**, **106**, 126, 244
248, 289, **303**～304, 697
右顧左眄する 264
うごめく **69**, **84**, **106**, **248**
303～304
うしなう 426, **440**
うずく **365**, 424
うずくまる **142**～146
うずまく 152
うずまる **371**～372
うずめる **110**～111, **456**～
457
うずもれる **371**～372
うすらぐ 161
うすれる 161, **396**～397
右折する 263
うそぶく 426
うたがう 696
うちあわせる 689
うちおろす 259
うちつれて 676
うちとける 425

うちよせる　152
うつ　110, 167, 169～171, 218 239～241, 308～309
うってかわって　676
うつぶす　139, 249, 259
うつむく　139, 481, 482
うつりかわる　24
うつる（移）　36, 210, 424
うながす　469～470, 500～501
うなされる　685
うなずく　727
うなだれる　7, 481
うなる　98
うぬぼれる　425
うねる　67～68, 307
うばいとる　712
うばう　327～332
うまる　371～372
うまれる　98～100, 424
うみつける　122, 428
うむ（生）　113
うめく　176, 233, 339～340 718, 730
うめる　110～111, 455～456 707
うもれる　371～372
うらがえす　391～393
うりきれる　26, 428, 696
うる（売）　26, 112, 114～115 182, 335, 708
うるむ　132～133
うれしがる　490
うれのこる　696
うれる（売）　26
うれる（熟）　149
うろたえる　425
うろつく　19, 97, 294～295 304～305, 426, 494～495
上衣　253
うわまわる　428, 695
うわる　428
運送する　714
運転する　705
運搬する　714

—— え ——

永住する　229
営造する　713
永続する　229
永眠する　493
液化する　705
えらぶ　711
える（得）　27～30, 426, 498
縁ぐみする　702

—— お ——

おいしげる　428
おいつく　692～693
おいまくる　236
おいる　417～418, 424
おう（負）　88, 164～165, 313 315～316
おう（追）　708
欧化する　705
横行する　493
横断する　249
懊悩する　720
おおう　695, 699
おおせつける　427
おがむ　713
おきる　142～143, 146～147
おく　66～67, 394～395, 451～452
奥まった　676
おくりとどける　313
おくる　165～166, 183, 312～313, 708
おくれる　692, 695
おこす　24
おこたる　425, 497
おこる（起）　34, 38, 158, 160
おこる（怒）　179～180, 230 713
おごる　425, 693
おさえる　98, 452～453, 684
おしえる　172～175, 185～186 241～242, 500, 693～694, 697～701, 708
おしかける　341～343
おしつまる　428
おして　677
おしよせる　81, 343～345 693
おす　218, 239, 249, 284～285 453～454
汚染する　705
おそれいる　425
おそれる　230
おそわる　693, 697～699, 708
汚損する　705
おだてる　499
おちあう　183, 185, 441
おちいる　727
おちこむ　727
おちつく　521
おちぶれる　119～120, 426
おちる　42, 53～54, 83, 86, 99 209～210, 253, 256, 258 301～302, 361～362 401, 696, 707, 715
おっしゃる　96, 689
音　34
音がする　231～232
男　15
おとす　84, 253～254, 256 426
おとずれる　466～468, 713
おとな　15
おとなびる　114, 419
おどりこむ　310
おとる　674, 691, 695
おとろえる　119～120, 380～381, 423～424, 707
おどろく　230, 422, 425, 719～720
おののく　424
おびえる　425
おびやかす　25
おびる　129
おぶう　88, 164, 313
おぼえる　81, 697
おぼれる　426
お目にかかる　185
おもいあがる　425
おもいうかぶ　25
おもいこむ　425
おもいつく　220～221, 425
おもいのこす　21
おもだった　676
おもてだった　676
おもねる　499～500
おもんみる　678
およぐ　294, 311, 670, 672
おりまげる　140～141, 268
おりる　16, 249, 253～255

257～258, **269**, **300**～301, 401, 707, 715
おる（居） 22
おる（折） **66**, **140**～141, 268 388
おれる 42, 151, 388～**389**
おろす **182**, 209～210, **253**～255
おわる 158～160, 428, **504**～505, 704, 716～717
おんでる 732
女 15
おんぶする 705

—— か ——

かいかぶる 426
開業する 705
会見する 722
解散する 705
開始する 705, 716
介して 677
解消する 705
害する 25
解体する 705
会談する 702
開通する 705
かいつまんで 676
回転する 705
回答する 722
該当する 712
外泊する 369
回復する **102**～104, 705
かう（飼） **167**～168
かう（買） 112, **335**～336, **474**～475, 694, 708
かえす **391**～392, 708, 711
～かえす 305
かえる（帰） 16, 210, 249, 275 **291**～294, 667, 669～671
かえる（孵） 122
かおる 34, 428, **492**, 661, 730
かかげる **321**
かかずらう 426
かがむ **142**～145
かがめる 128, **140**, **267**～268
かがやく **152**, **230**～231, 428
かかりあう 426
かかる 424
～かかる 410
かきおとす 426
かききる 683
かきそんずる 426
かきつづける 683
かきはじめる 683
かきまくる 305
かきわすれる 426
かく（書） 349, 666
かぐ（嗅） 638, 655, 659, 661
確信する 230
かくす **113**, **443**
確定する 705
かくまう **113**, **443**～444
確立する 705
かくれる 24, **430**～431, **459**
かけあう 721
かけあわせる 703
かけおりる 259
かけこむ 310
かけつける **341**～343
かけはなれた 676
かけよる 298, 300
かける（欠） 697
かける（駆） 242, **310**
かける（掛） 56～**57**, 699
（～に）かけて 677
かげる 428
下降する 258
かさなる **68**～69, 89, 132 249, **262**～263, **477**～478, 702～703
かさねる **131**～132, **261**～262
かじかむ 128, 424
かしぐ（傾） 2, **142**～143 **410**
かしげる 2, 4, 128, **137**～138 **264**, **411**
かしこまる 425
かじる **44**～46
かす **335**, **405**～406, 693, 698 708
かすむ 428
かすめる **327**, 332
嫁する 113, 689, 705
化する 24, 705
風 30, 31, 585
かせぐ **223**～224, **334**～335 **506**, 672
かぞえる 638, 674
かたどった 676
かたまる 42
かたむく 42, **142**～143, 147 **410**～411
かたむける 128, **137**～138 **264**, **411**
かたらう 689
かたる 689
かつ 691, 697
かつぐ **88**, **164**～165, **313**～315, 731
合作する 702
かった 676
合体する 705
合併する 702～703, 705
渇望する 230
仮定する 350
かどだつ 161
かどばった 676
かなしむ **491**
かなでる **170**～171
がなる **176**, 178, **233**～234 **339**～340
過熱する 410
かねる 24
かばう 708, 729～730
かぶせる 129, 699～700
かぶりつく **172**, **321**
かぶる 20, 60, 129, **192**～197 199, **260**, 695, 700, 732
かまう 681
かまける 426
かみくだく 45
かみつく **172**, **321**～322, 692
かみとる 45
かみやぶる 45
かむ **44**～46, 626
かもしだす 25
かもす 428
かよう 20, 229, **306**～307
からげる **154**～155
からまる **191**～192
かりる **335**～336, **408**～409 693, 698, 708
かる（刈） **85**, **151**, **387**～388
かれる（枯） 149, **380**
かわかす **224**～228

かわく　43,695
～かわす　305,701
かわった　676,678
かわりはてる　427
かわる　20,24,**101**,**377**,**419**～420,　**429**～430,　702～703
かんがえだす　221
かんがえつく　221
かんがえる　**220**～221
かんぐる　425
関係する　702～703
還元する　705
緩行する　248
感ずる　98,425,654～659
完成する　705
感染する　703
姦通する　702
かんづく　425
かんばしる　33,676
完備する　705
完了する　705
緩和する　705

—— き ——

きえる　258,559
きかざる　129
帰還する　**291**
ききあやまる　426
ききあわせる　426
ききおとす　426
ききこむ　426
ききそんずる　426
ききつたえる　426
ききのがす　426
帰郷する　286
帰京する　297
ききわすれる　426
きく（聞）　96,654,659～660　663～664,667,684
きげんをとる　**168**～169,**465**～466
きこえる　33,654,658～660　663～664
帰国する　286,**291**,297
きこしめす　96
きしむ　33
きしる　33
きずつける　128
きせる　129,700
きそう　702
毀損する　705
帰宅する　**291**
きたす　25
気ちがいじみた　676
気づかう　425
気づく　422,425
喫する　59
希望する　**351**～353,355
きまる　25,428
きめつける　426
逆転する　705
休刊する　705
休業する　705
急行する　248
急死する　248
休止する　705
救助する　710,727
窮する　230
休する　679
急造する　248
休息する　710
急変する　248
共演する　702
驚愕する　230,719
凝視する　719
強制する　**337**～338,350～352　354～355,357,359～361
競争（走）する　702
共存する　702
驚嘆する　719
協定する　702
仰天する　719
共謀する　702
強要する　**337**～338,350～352,354～355,357,359～361
協力する　702
許可する　350
拒絶する　**348**～349,351
拒否する　**348**～349,351
きらう　15
きらめく　428
きりたつ　151,**153**,676
起立する　723～724
きる（着）　60,129,**192**～194　196～199,　**402**～403　697,700
きる（切）　**47**～49,　**64**～65　**75**～76,　85,　**151**,　228　383～385,387
きれあがる　128,679
きわだった　676
～きわまる　676
均衡する　702

—— く ——

くいさがる　693
くいすぎる　426
くいちがう　428
くいつく　**321**,692
くいつめる　426
くいとめる　**57**～58
くう　**59**～60,**123**,　**216**,　423　427,509,**626**～**637**,730
くくる　**84**～85
くさる　42,**50**
くしけずる　**132**,**405**
くじける　425
くずおれる　424
くすぐる　**463**
くずす　**47**～49,**64**～65,**383**　385～386,428,684
くすねる　**327**～329,333
くすぶる　37,**212**,214～215
くすべる　**214**～215,492～493
くずれる　**46**～47,**419**～420　428,684
具体化する　705
くだく　**47**～48,**64**～65,**75**～76,**383**～384
くだける　42,151,676～678
くだされる　427
くだす　128
くたばる　97
くたびれる　676,712
くだる　**253**,258,**286**～287　300～301,715
くちごもる　426
くちばしる　**437**
くちる　**50**
屈伸する　705
屈する　426,706
くっつく　**273**,697,702～703
くっつける　**273**
くねる　**67**～68,**307**～308
苦悩する　720

くばる 723
具備する 706
くびる **138**
くびれる 138
工夫する **222**
くぼむ **270**～271, 389
くみあわせる **190**～191
くみいれる **190**
くみこむ **190**
くみたてる **190**, 698, 729
くみつく 692
くむ（組） **69**～70
くむ（汲） 86～87, **211**～212
くもる 30, 32
苦悶する 720
くやむ 425
くゆらす **492**～493
くらう **59**～60, 127
ぐらつく **108**～109
くらべる 702
くりかえす **497**, 503～504 712
くりこむ **81**, **241**
くりだす **81**～82, **241**, 706
くる 21～22, **81**, 204, 209～210, 249, 275～276, **288**～289, **291**, **294**, 401 423～424, 674, 700
くるう 425
くるしむ 425, 720
くるしめる **25**, **117**, **434**～436, 684
くるめく 128
くれゆく 678
くれる（暮） 36～37
くれる（呉） 693, 698
くわえる（加） 713
くわわる 24, 689
薫ずる 706

——け——

軽減する 706
計算する 674
継承する 712
継続する 706
気圧される 685
けがす 727
けがれる 727
激化する 706
撃沈する 259
激怒する 230
激発する 706
激変する 249
下校する 286
下向する 286
下山する 259
けしかける **168**, **472**, **500**
げすばった 676
けずる **76**, 79～80, 724
決壊する 706
結果する 706
結合する 702, 706
結婚する 689, 701
結集する 706
決する 706
欠席する 711
けとばす 684
けなす 708
げびた 676
けむり 35
けむる 35, 428
けんかする 702
顕現する 706
現出する 706
減少する 706
献ずる 185
滅ずる 706
現存する 681
建築する 713

——こ——

こいしがる 111
こいする 230
考案する **222**
合格する 696, 707
降下する 258
交換する 703
号泣する 230
薨去する 114
交際する 702
交錯する 702
交差する 702～703
交渉する 689, 702, 721
抗する 688～689
皐ずる **161**～162
薨ずる 114, 427
構成する 698, 729
交戦する 702
交替する 702～703
降壇する 259
拘泥する 713
合同する 689, 702
交配する 703
こうむる 426
合流する 689, 702
こえる（肥） **104**～105, **377**～378, **402**
越える 208
こおる 152, 428
こがす **214**～215
こがれる 230, 425
酷似する 702～703
こけつまろびつ 679
こげる **42**, **212**, 214～215
こごえ死にする 475
こごえる 424
心ゆく 678
こしかける **142**～143, 146
こじれる 161, 428
鼓す 679
こする **454**～455
こたえる 722
こだわる 425, 713
こった（凝） 676
ごったがえす 428
固定する 706
ことづかる 426, 693, 699
ことづける 693, 699
ことなる 24
ことよせて 676
ことわる **348**～351, 693, 696
このむ 425
こばむ **348**～351
こぼす **269**
こぼれる **362**
こましゃくれた 114, 668 676
こまぬく 128, 679
こまりはてる 230
こまる 230, 422, 425, 720
こみあう 42
こみあげる 425
こみいった 676
～こむ 230, 310
こもる **269**, **459**
こりる 425

こる（樵）　**151**
ころがりこむ　310
ころがる　149, **310**～311
ころげおちる　259
ころす　218, **432**～434, 684 700
ころぶ　98, **142**～143, 148～149
こわがる　425
こわす　20, **47**～48, **63**～65 128, 163, 218, **383**, 385～387, 424, 428, 700
こわれかかる　410
こわれる　20, 42, **46**～47, **62**～63, 163, 202, 410, **419**～420, 428, 700
懇願する　**351**～352, 358
困却する　720
混合する　706
根治する　706
混ずる　706
懇請する　**351**～352, 356
根絶する　410
（手の）こんだ　676
混同する　703
混入する　706
懇望する　**351**～352, 356
婚約する　702
困惑する　720

——さ——

再会する　305
再開する　706
再刊する　305
再起する　305
再現する　706
再検討する　305
再興する　706
際して　677
再生する　706
在宅する　369
再拝する　305
才はじけた　676
再発する　305
さえぎる　**57**～58
さえずる　14, 16, 18～19, 122～124, 680
さかえる　121, 707
さがしだす　684
さがす　**219**～220, 683～684
さかのぼる　**286**～287
さかまく　152
さがる　16, **91**～92, 94, **253** 255, 258, **265**～266, 272 **286**～**287**, 303, 577
先だつ　692, 695
先どりする　370
さく（裂）　**47**～48, **64**～65 **75**, **383**～385
さく（咲）　149～150, 428
削減する　724
搾取する　726
左傾する　264
さげすむ　425
さけぶ　98, **176**～177, **233**～234, **339**～341
酒ぶとりする　475
さける（裂）　65～66
さげる　**93**, **253**, 255, **265**, **287** 303, 536, 673
ささげる　**39**, **183**
ささめく　**83**, **476**～477
ささやく　**176**, **233**～234, **339**～340, 477
ささる　**55**
さしあげる　185, 492
さしおいて　677
さしせまる　428
さしだす　**346**～347, **463**～465
さしまわす　427
さす（差）　**55**～57, 86～87 **211**
さずかる　426, 693, 699
さずける　185, 693, 699
さすらう　19, **304**～305, **494**～495
さする　**463**
左折する　263
さそう　**469**～470
さだまる　25, 428
殺気だった　676
さておき　677
蹉跌する　726
里がえりする　286
さとす　185
さばける　26, 676
さびつく　151
さびる　151
さびれる　**380**～381, 428
サボる　**497**～498
さます　**413**, 428, **431**
さまたげる　25, 712
さまよう　19, **294**～295, **304**～305, **494**～495
さむがる　655
さむすぎる　202, 230
さめる　36, **396**～397, **412**～413, 428
さる　**272**, **289**～290, 696
さわぐ　**83**, **112**～113, 488～490
ざわつく　**83**, **476**～477
ざわめく　**83**, **476**～477
さわる　**237**～**238**, 655～656 702～703, 706, 712
斬殺する　310
算する　428, 674
産する　**38**, 706
散ずる　706

——し——

思案する　**220**～221
しいる　**337**～338, 350～352 357, 359～360, **447**, 693
しいれる　**474**～475
しおおせる　426
しおれる　**150**, 380
四角ばった　676
磁化する　706
しかめる　128, **135**～137, **483**
しかる　**179**～181, 350
～しきる　236, 305
しく（敷）　**66**～67, **394**～**395** **451**～452
しく（及）　681
しくじる　426
しぐれる　**31**, **162**～163
しけた　676
しげる　149, 428
しこなす　426
しこむ　**172**～175, **185**～186
刺殺する　310
しさる　**265**～266
しずまりかえる　230
しずむ　258, **370**～371, 521 559, 684, 711～712

しずめる　128, 684
死する　427
辞する　427
死蔵する　493
持続する　706
下　**249**～256
したう　111, 425
したがう　697
したがって　677
下着　253
したたる　**53**, **86**, 152, 258 **301**, **361**～362, 428
したまわる　695
しつける　**172**, 174
失言する　493
実現する　706
実在する　681
疾走する　248
失念する　711
失敗する　706～707
しでかす　426
しとめる　**432**～434
しなう　**75**, **376**
しなだれる　7, 20, **181**, 484～485
しなびる　**150**, 428
しぬ　97, 427, 433, **493**, 667 697, 700
忍ばせる　685
しのびこむ　310
支配する　697
しばたたく　424
しばりつける　188
しばる　**84**～85, **116**～117 **186**, 188～190
しびれる　424
しぶる　428
死亡する　**493**
しぼむ　428
しぼりとる　726
しぼる　**453**～454
しまる　695
しみる　**55**, **381**
しむける　**447**～448
しめる（閉）　712, 724
しめる（締）　**138**
しめる（湿）　**132**～133, **415**～416, 695
しもがかった　676
しゃがむ　**142**～145
しゃくりあげる　425
謝罪する　722
射殺する　310
弱化する　706
しゃべる　689
じゃまする　712
しゃれた　676
じゃれる　**122**, **175**～176, **327**
集結する　706
銃殺する　310
収集する　709～710
収縮する　706
縦走する　249
収束する　706
従属する　697
縦断する　249
集中する　706
終了する　706, 716～717
熟視する　719
縮小する　706
熟する　149～150
首肯する　727
出郷　286
出京する　286
出家　286
出庫　286
出港　286
出獄　286
出国　286
出社する　286
出所　286
出場　286
出陣　286
出世　286
出世する　112
出席　286
出世間　286
出廷　286
出土　286
出発する　203～206
出府　286
出盧　286
樹立する　706
受領する　723
純化する　706
巡視する　723～724
しょう　**88**, **164**～165, **313** 315, 676, 732
昇格する　706
上京する　286
小憩する　229
上下する　259
焼失する　475, 706
成就する　706
上昇する　258
生ずる　**38**, **99**, 100, 202, 428 706
昇天する　259
衝突する　702～703
小破する　410
消磨する　706
省略する　**40**～41
食する　427, 730
しょげこむ　230
しょげる　425
徐行する　248
所持する　711
除する　713
しょぼつく　128
所有する　711
しらす　**445**
しらせる　**445**～446
しらばくれる　426
しらむ　34
しりぞく　265～266, 707
しる　98, **446**
しれる　**446**, 676
じれる　425
しわがれる　33, 424
深化する　706
震憾する　706
呻吟する　718, 730
深謝する　230
伸縮する　706
心酔する　230
信ずる　696
伸長する　706
進捗する　716～717
伸展する　706
振動する　706
震動する　715

―― す ――

すう　**60**～61, **215**～216, **322**～323, 624
すかす　128
すがりつく　**181**～182

すがる　181～182
すきこのんで　676
すきとおる　50, 676
すぎゆく　678
～すぎる　230
すく（透）　43
すく（梳）　132, 405
すくう（救）　710
すくむ　425
すくめる　128
すぐれる　201, 419, 676, 691～692, 695, 707
すさる　265～266
すじばる　424
すすむ　42, 209～210, 265～266, 289, 311, 707
すずむ　431
すすめる　265, 447, 469～472 500～501
すする　60, 322～323
すだく　123～125, 678～680
すたる　697
すたれる　25, 380～381
すっぱぬく　445
すっぽぬける　151
すなどる　427
ずぬける　201, 419, 676
ずばぬける　201, 419, 676
すべりこむ　310
すべる　42, 310～311
すむ（澄）　50, 151, 695
すむ（済）　158, 160
ずらす　390～391, 450～451
すりきれる　475
ずりさがる　259
すりへる　712
すりむく　128, 426
する（為）　34, 97, 231～232 654～658
する（掏）　327～328, 333
ずるける　426, 497～498
ずれる　390, 450～451
すわる　142～144, 146

——せ——

生育する　706
成功する　707
製する　427
成長する　417～419
成立する　19
せおう　88, 129, 164～165 313～316, 732
せがむ　347～348, 468～469
積載する　714
析出する　706
せきとめる　57～58
せく（堰）　57～58
せしめる　498
接合する　706
接触する　702～703
接する　702～703, 706
接続する　702～703, 706
接着する　706
接ぶんする　702
絶滅する　706
せびる　347, 468～469
せまい　399
せまる　273, 343～344, 689 693
せめあぐむ　425
せめる　708
洗眼する　164
洗顔する　164
全焼する　410
漸増する　706
撰択する　711
撰抜する　711
洗髪する　164
洗面する　164

——そ——

添う　88～89, 702
憎悪する　720～721
増加する　706～712
増減する　706
喪失する　706
増進する　706
蔵する　427
相談する　689, 702
そぐ　76, 79
即して　677
速射する　248
属する　24, 697
速成する　248
速断する　248
即答する　249
遡航する　287
遡行する　287
そこなう　128
そこねる　128, 426
遡上する　287
ややぐ　57, 87, 211
ややのかす　168, 472～473 500～501
ややりたつ　151, 153
ややる　25
そだつ　97, 417～418, 428
そだてる　730
そなえる　39, 183
そばだつ　151
そばだてる　128, 679
そびえる　151, 153
そびやかす　128
そまる　684
そむく　277, 280～281, 693
そむける　276
そめる　684
そよぐ　72～74, 236, 475～476
そらす　388, 390～391, 683
そりかえる　482～483
そる　75, 268～269, 376, 388
それる　272～273, 390～391
そろう　24, 697
損壊する　706
損傷する　706
存する　24
損ずる　706
存続する　706

——た——

対応する　702～703
対抗する　688～689
対座する　702
対照する　703
大成する　706
対戦する　688～689
対談する　702
退庁する　286
大破する　410, 706
対比する　703
逮捕する　711
たいらげる　59, 216
対立する　702～703
対話する　702
たえる（絶）　26, 34, 100, 158 160

たおす 411～412
たおれる 42, 142～143, 148 410～411
たかい 255, 398～399
たかぶる 425, 521
たかまる 399～400, 684
たかめる 707
たがやす 629～630
たかる 82～83, 107～108 437～438, 459～461 496～497
妥協する 702
たぎる 152
たく 157～158
たくしあげる 154～155
たくむ 681
たくらむ 426
たける（炊） 158
蛇行する 249
だしおくれる 426
だしぬく 426
たじろぐ 425
たす 713
だす 210, 265, 269, 287
たすかる 426
たすける 710, 727
たずねる 466～468, 673, 693 713
たたえる（湛） 51, 53 80, 202, 375, 706
たたかう 688～689, 701
たたきあげた 676
たたきこむ 172～174, 241～242
たたきつける 238～239
たたく 110, 127, 167, 170～171, 218, 239～240, 308～309
たたむ 66
ただよう 42, 294～295
ただれる 424
たちあがる 723～724
たちさわぐ 427
たちつくす 427
たちのぼる 428
たちまさった 676
たつ（立） 142～145, 148～149, 668
～たつ 236
たつ（断） 47～48, 64～65 75, 383
奪取する 712
達する 211, 400
脱帽する 129
たてかえる 473～474
たてこむ 43
たてまつる 185
たてる 668, 713
～たてる 236, 305
たどりつく 366～368
たどる 366～369
たなびく 428
たのむ 337, 350～351, 356～359, 361, 378～380, 693～694
たばねる 84～85
たべる 59, 97～98, 123, 427 626, 730
たまげる 425
たまらない 681
たまりかねて 676
だまりこくった 676
たまる 24, 428
だまる 427, 623
たまわる 185
たむける 39, 183
ためらう 425
ためる 428
たもつ 428
たやす 27, 101, 683
たらす 93
たれさがる 91～93
たれる 53, 86, 91～94, 258 301～302, 361～362 704～705
だれる 425
たわむ 75, 376
たわむれる 122, 175～176 327, 426, 688
嘆願する 351～352, 355～356, 358
談合する 721
談ずる 427
弾ずる 170～171

——ち——

ちかう 689, 702
ちがう 22～24, 202
ちがえる 426
ちかづく 21, 207～208, 273～274, 302, 343, 345 689, 693, 702～703
ちかづける 21, 273, 302
ちかみちする 297
ちかよる 274, 302, 343, 345 693
ちからづける 25
ちぎる（千切） 47～48, 64～65, 75, 383～384
ちぎる（契） 689, 702
ちぢみあがる 230
ちぢむ 428
ちぢめる 428
血ばしる 128, 424
ちまよう 425
着手する 716
着色する 706
中絶する 706
中断する 706
中毒する 478
中和する 706
長ずる 417
重複する 702
調和する 706
直進する 249
ちらつく 229
ちらばる 81, 85
ちる 85, 273
沈下する 258, 711～712
沈降する 258
陳謝する 722
鎮静する 706
沈没する 711～712

——つ——

（～に）ついて 677
ついばむ 122～123, 127
墜落する 258
痛感する 230
つかう 337, 378, 713
つかえる（支） 42
つかねる 679
つかまえる 126～127, 697 711
つかまる 697
つかむ 98～99, 731
つかる 269, 371～373

つかれる　98, 230, 424, 712
つきあう　713
つきあわせる　703
つきおとす　259
つきそう　88
つきだす　271
つきつける　346～347, 463～464
つきでる　271
つきる　24
つく（付・着）　82～83, 203～204, 208～209, 211 273, 341, 366～367, 423 571, 712
つく（突）　239, 284～285, 309
つく（吐）　61～62
つぐ（注）　55～57, 86, 87 211～212, 269
～つくす　410
つぐむ　128, 134～135
つくりあげる　493～494
つくりだす　493～494
つくる　670, 700
つくろう　153～154, 395, 404
つけあがる　425
（～に）つけて　677
つける（付）　36, 192, 195～197
つたう　208～209
つたえきく　426
つたわる　25
つつく　239, 309～310
つづく　34, 160
つっぱねる　348～351
つどう　112, 427
つとまる　426
つとめる　115～116, 118～119, 461～463, 487
つなぐ　186, 188～190
つのる　161～162, 444～445 671
～つのる　236
つぶす　20, 47～48, 64, 383 385
つぶやく　176～178, 233～234, 339～340, 670
つぶる　128, 134～135, 712
つぶれる　20, 46～47
つぼむ　149, 428
つまずく　426, 726
つまびく　170
つまる　42～43
つみかさなる　68～69, 132 262～263, 477
つみかさねる　131～132, 621
つみこむ　714
つむ　131～132, 261～262 714
つむる　134, 712
つめかける　81, 341～343
つめたい　412
つめよせる　345
つめよる　343～344, 693
つめる　393～394, 451, 699
つもる　68, 132, 249, 262～263, 477
つよくなる　161
つよまる　161～162
つらなる　88～89, 702～703
つれあう　426
つれだつ　88～89, 676, 702～703
（～に）つれて　677
つれる　22, 106～107, 165, 311～312, 345～346
つんのめる　426, 732

——て——

であう　183～184, 426, 441～442, 702
逓減する　706
停止する　706
停車する　706
泥酔する　230
呈する　428
定着する　706
でかける　203～206
でかす　426
できあう　426
溺死する　310
適する　24
敵する　688～689
できる　38, 99～100, 700
でくわす（でっくわす）　183～184, 426, 441, 730～731
てこずる　425
でしゃばる　426
ですぎた　676
でっくわす→でくわす
撤退する　706
でっちあげる　97, 493～494
でっぱる→でばる
手なれた　676
ではらう　427
でばる（でっぱる）　249, 271 399～400, 695
手間どる　706
でまわる　428
手むかう　688～689
てらう　426
てらしあわせる　703
てりつける　428
てる　33, 152, 230～231, 428
でる　6, 205～207, 210, 236 249, 265, 269, 271, 286 287, 374, 509～510, 563～607, 732
てれる　425
転回する　706
展開する　706
添加する　706
電化する　706
転換する　706
転居する　717
転ずる　128, 272～273, 706
転倒する　712
転覆する　706, 712
点滅する　706
転落する　259

——と——

投下する　259
同化する　706
登校する　286
到着する　273, 712
登庁する　286
同伴する　706
とおざかる　21, 229, 273, 298～299
とおざける　21, 273, 298～299
とおでする　297
とおのく　273, 298～299
とおのける　273, 298～299
とおのりする　297
とおまわりする　297
とおる　203～204, 207～210

311, 369, 424
とかす **132, 405**
どかす **40**
ときめかす 128, 425
ときめく 128
時めく 676
とぎれる 158, 160, **504**～505
とく（解） 91, **198**～199
とぐ **155**
どく **390, 450**～451
毒殺する 310
得する 426
とける 42
とげる 426
どける **40**, 218, **390**～391 **450**
とざす **134**～135
としおいる **417**～418
としとる **417**～418
としよる 114, **417**
とじる（閉） **134**～135, 704 712
としをとる **417**～418
とだえる 158～160, 428, **504**～505
とちる 426
とつぐ 113, 689, 697
とっつかまる 426
（～に）とって 677
とどく 203～204, 208, 211 401
とどける **165**～166, **312**～313
ととのえる **132, 405**
とどまる **382**～383, 696
とどろく **33, 231**～232
となりあう 426
どなる **176**～179, **233**～234 **339**～341
とばす 246
度はずれる 676
とびあがる 259
とびこむ 310
とびだす 127
とびちる **54**～55, **236**～237 **362**～363
とぶ **42, 242**, 245～246, **310**～311, **370**～371, 676
渡米する 286
とまる **82**～83, 697
とむらう **491**
ともなう 705
ともる 151
どもる **176**, 178, **233**～234 **339**～340, 426
どよめく **83, 112, 488**～489
とらわれる 685
とりかえる 703
とりかかる 716
とりさる **40**～41
とりすがる **181**～182
とりちがえる 703
とりちらす 426
とりつく **181**～182
とりのぞく **40**～41
とりみだす 426
とる 129, **199**～200, **327**～328, 330, 332～333

—— な ——

ない 681
内蔵する 369
内定する 706
なう **69**～70
なえる **150**, 428
なおす **103**～104, **153**～154 **395, 404**
～なおす 305
なおる **24, 102**～103, **419** 421, 492
長いきする 229
長居する 229
ながす 428
長ばなしする 229
ながびく 158, 428
ながめる 81
ながれでる 713～714
ながれる 34, **236**～237, **294** **311, 370**～371, 423, 428
なきくずれる 425
なきしきる 236
なきつく 692
なきぬれる 425
なきはらす 128
なく 14, 16, 18～19, **123**～**125**, 127, **235**, 680
なくす **27, 101, 121, 440**～441, 712
なくする **440**～441
なくなる **24, 26, 97, 100, 120** **222**～223, 427
なぐりつける **239**～240
なぐる 98～99, **110, 167, 239**～240, 684, 731
なげうつ 728～729
なげすてる 728
なげる 98
なさる 97
なじむ 425
なすりつける **495**～496
なする **495**
なだめる **168**～169, **465**～466
なだれこむ 310
なだれる 151
なつく 98, 425, 693
夏やせする 370
なでる **463**
なまける **497**
なまめいた 676
なまる 151, 426
なみいる 678
なみする 678
涙ぐむ 425
波だつ 428
なみはずれた 676
なやます 25
ならう 700
ならす **170**～171
ならぶ **88**～89, 249, **262**, 702～703
ならべたてる 236
ならべる **261**～262
なりたつ 19, 38, 698
なる（成） **24, 101, 377, 429**
なる（鳴） 33～34, **231**～232
なれあう 426
南下する 272
なんなんとする 678

—— に ——

にあう 24
にえかえる 152
にえる **42, 158**
におい 34
におう 34～35, 37, **492**, 660 730

にがみばしった　676
にぎる　98
にくむ　708, 720
にげる　98, 708, 712
にごる　127, 151, 695
にじむ　**55**, 152, **381**～382
にたつ　152
につまる　152
になう　**88**, 129, **164**, **313**～315
二拝する　305
にらみあわせて　677
にらみつける　730
にらむ　**479**～481
にる（煮）　**157**～158, 228 **395**～396
にる（似）　22～24, 689, 702～703
任ずる　350

——ぬ——

ぬう　629～630, 704
ぬかす　**40**, 97
ぬかずく　**478**～479
ぬかる　151, 428
ぬぎすてる　77
ぬきんでる　**201**, **419**
ぬぐ　**76**～78, 129, **199**～200 697
ぬくもる　36, **51**
ぬけおちる　127
ぬけた　676
ぬげる　151
ぬすむ　**327**～330, 332～333
ぬる　**495**～496, 704
ぬるい　412
ぬるむ　**51**, 152
ぬれる　**132**～133, 230, **415**～416

——ね——

ねがう　350～352, 355～356 358, 361
ねころぶ　**259**～260
ねじこむ　693
ねじる　70, 91, **94**, **296**～297 **453**, 536
ねじれる　**96**, 249, **297**
ねたむ　425
ねだる　**347**～348, **468**～469
ねちがえる　424
熱愛する　230
ねつく　425
熱する　**51**, **320**～321, 412 **414**～415
ねぼける　425
ねむりこける　424
ねむる　230, 697
ねる（寝）　**142**～143, 147～148, **259**～260
ねれた　676

——の——

悩殺する　114
のかす　**40**
のがす　426
のがれる　712
のける　**40**～41
のこる　24, **382**～383
のさばる　97～98
野宿する　369
のせる　129, 732
のぞく（除）　**40**～41
のぞむ　**351**, 355
のたまう　427
のっける　732
ののしる　718～719
のばす　398
のびすぎる　410
のびる　23～24, 42, 99, 397 399, 410, 509, **616**～**620**
のべる（述）　689
のぼせる　257, 425, 521
のぼりおりする　259
のぼる　21, 42, 204, 209～210 **253**, 255, 257～258, 272 **286**～287, 311, 401, 424 509, **523**～**534**
のみすぎる　426
のみつぶれる　475
のむ　**59**～60, 97, **215**～**216** **322**～324, 509, **621**～**626**, 667
のめる　426, 732
のりおくれる　426
のりこむ　**81**～82, **241**, 310
のる　210, **269**～270

——は——

倍化する　706
廃刊する　706
輩出する　706
拝する　713
倍増する　706
配布する　723
はいよる　298, 300
はいる　42, 99, 203～204, 209～210, **241**, **269**、294～295, **374**, **449**, 697, 712
はう　**142**～143, 147, 148, **310**～311
はえる　98, **150**, 428
はおる　129, **402**～404
破壊する　706
ばかげた　668, 675～676, 678 680
はがす　**76**, 79
はかどる　158～159, 428, 716～717
はかなむ　425
はかる　509, **637**～**646**
はぎとる　77～78
はく（吐）　**61**～62, **215**～216
はく（履）　20, 60, 129, **192** 195～197, 199
はぐ　**76**～78, 129
はぐくむ　730
縛する　**116**
爆沈する　706
はぐれる　426
はげあがる　424
はげむ　**118**～119, **461**～462 **487**～488, 673
ばける　20, **101**～102, **377** **429**
はこぶ　**106**～107, **165**～166 **311**～**312**, 427, 667, 714
はじまる　158～160, 428, 667
はじめる　716
はしゃぐ　**112**～113, **488**～491
はしょる　**154**～155
はしる　15, 81, 98, **242**～245 247, 294～295, **310**～311, 422, 670, 672, 674

680
はじる 708
はずす 129
パスする 707
はずむ **108**, **308**
はずれる 696～697
破損する 706
はだける 705
はたらく **115**～116, **118**, **223**～224, 334～335, **461**～463, **487**, **506**, 672
発見する **219**～220
発散する 706
発車する 206
発する **169**
発生する 706
発明する **222**
はてる 158, 160
～はてる 230
罵倒する 718
はなしあう 689, 721～722
はなしかける 693
はなしだす 206
はなす（話） 112, 689
はなす（離） 21, **273**, **298**～300
はなせる 676
はなつ **169**
はなれる 21, 42, **273**, 276 **298**～299, 697
はにかむ 425
はねつける **348**～351
はねる **108**, **308**
はばたく 122, 428
はぶく **40**～41
はまる 697
はみだす **49**～50, **476**
はみでる **49**～50
はむ 427
はむかう 688～689
はめる 129, **192**, 194～196 200
はやしたてる 236
早出する 370
はやめる 638
はやる（流行） 25～26, 428 697
はやる（逸） 425
はらう **473**～474
ばらす 385～386, **445**～446
はらだつ 425
はらむ 113
腹をたてる **179**～180
はりだす **321**, 705
はる 704～705
春めく 37
はれる（晴） 30～32, 428
ばれる 161, **446**
反映する 706
半壊する 410
パンクする 90
反射する 705
反転する 706
反復する 712

—— ひ ——

日 33
火 36
ひあがる 43, 428
ひいでる **201**, 676, 707
ひえこむ 230, 428
ひえる 36, 230, **412**～413
ひかえる **457**～458
ひかされる 685
比較する 702
ひがむ 425
ひかる 33～34, 90, **152**, **228**～231
ひきあげる 259, **291**, 294
ひきいる **106**～107, **165**, **311**～**312**
ひきうける 696
ひきおこす 25
ひきかえす **291**, 294
ひきかえ（て） **677**
ひきさがる 266
ひきさげる 259
ひきたてる（ひったてる） **165**, **345**～346
ひきつる 424
ひきつれる 676, 723
ひきぬく 732
ひく（引） 218～219, 249 **265**～266, **284**～285
ひく（弾） 3, 8, **170**～171
ひくい 255, 398～399
びくつく 425
ひくまる 399～400
ひくめる 707
庇護する 729～730
ひさぐ **115**, 427
ひざまずく **478**～479
秘す **113**
ひそむ **430**～431, **459**
左 251
ひたる **371**～373, 706
ひっかつぐ 731
ひっかぶる 732
ひっくりかえす **391**～393
ひっくりかえる **142**～143 148, 712
びっくりする 111, 719～720
ひっこす 717
ひっこぬく 732
ひっこむ **265**, **271**～272, **287** **303**, 399～401, 695
ひっこめる **265**, **271**, **287** **303**
ひっさげて 677
ひったてる→ひきたてる
ひっつかむ 731
人 15
ひねこびれた 676
ひねった 676
ひねる 70, 90～91, **94**～95 **296**～297
ひびく 33～34, **231**～233
ひまどる 426
ひやす **413**, **431**
病死する 310, 475
ひらく 127, 704
ひらめく 33, **228**～231, 428
ひるがえる 42
ひるむ 425
ひれふす **478**～479
ひろい 399
疲労する 712
ひろがる 398～399, 428
ひろげる 428, 638
ひろまる 25
ひわれる 475
ひんまがる **363**～364, **421**～422
ひんまげる **363**～364, **421**～422, 731～732

——ふ——

ふえる　22～24, **382**, 428, 712
ふかい　19, 398～399
ふかまる　161, 399, 428
ふかめる　19, 428
ふかす（吹）　**215**～216
ふきこむ　**172**～174, **241**～242, **500**
ふきだす　**365**, **438**, **486**, **501**～506～508
ふきつのる　236
ふきまくる　236
普及する　706
ふく（吹）　31, **61**～62, **170**～704
復元する　706
ふくむ　684, 697
ふくらむ　42, **104**～105, **377**～378, **402**
ふくれる　**104**～105, **377**～378, **402**
ふける（更）　37
ふける（老）　419
ふさがる　42, 697
ふさぐ（塞）　**451**, 699
ふさけあう　**114**
ふざける　**122**, **175**～176, **327**～426, 688
ふしくれだった　676
腐食する　706
ふす　**139**, **142**～143, 147, **259**
ふせぐ　**57**～58
ぶつ　**110**, **239**～240
復活する　706
ぶつかる　30, 42, **183**～184, **237**～238, **441**, 693, 702～703
復旧する　706
ぶつける　**238**～239
復興する　706
ふてくさる　425
ふとい　399
ふとる　**104**～105, **377**～378, **382**, 399, **402**, 695, 707
ふぶく　31
ふみこむ　**241**, **266**～267, 310, **449**～450, 673, 706
ふむ　91, 98, 126～127
ふやす　**382**, 428
ぶらさがる　**91**～93
ぶらさげる　**93**
ふらつく　**108**～109
ぶりかえす　158, **420**～421, 428
ふりしきる　236
ふる（降）　30～31, 42, **53**～54, **83**～84, **86**, **162**～163, 258, **301**, **361**～362
ふる（振）　**316**～319, 673
ふるいたつ　521
ふるいつく　679
ふるえあがる　230, 425
ふるえる　42, 715
ふるびる　731
ふるぼける　731
ふるまう　**324**～326, 699
ふれる（触）　42, **237**～**238**～712
ふんがいする　**179**
分解する　706
紛糾する　726
紛失する　706～712
噴出する　706
ぶんぞりかえる　8, **482**
ふんぞる　483
文通する　702
ぶんなぐる　230, 236, **239**～240, 731
分配する　723
分離する　706

——へ——

睥睨する　730
閉口する　720
平行する　702
閉鎖する　724～725
併用する　703
並立する　702
へこむ　42, 249, **270**～271, **389**
へだたる　**273**
へだてる　**273**
へたばる　230, 425
へつらう　**499**
へらす　128
へる（減）　24
変化する　**101**, **377**, **429**～430
返還する　711
返却する　711
変形する　706
変ずる　24, **101**, **377**, **429**～430, 706
返答する　722

——ほ——

放棄する　728～729
忘却する　711
崩御する　114
ほうける　425
亡失する　706
ほうじる（焙）　**156**
崩ずる　114, 427
訪日する　286
ほうむる　**110**～111, **456**～457
訪問する　713
ほうりだす　728
ほえる　14, 16, 18～19, 122, **125**, **235**
捕獲する　711
撲殺する　310
ほぐす　**198**
ほくそえむ　97, **365**～366, **438**, **486**, **501**～502, **506**～508
ほこる　708
ほころばす　128
ほざく　97
補佐する　710
募集する　**444**～445, 671
保証する　350
補助する　727
ほす　**224**～228
ほそる　**105**～106, 399, **401**～707
ほだされる　685
北航する　272
没する　128, **371**, 373, 706
歿する　427
ほっつきあるく　**494**～495
ほっつく　**294**～295, 426, **494**～495
勃発する　249
没落する　119
ほてる　424
ほどく　**198**～199

ほどこす 185
ほとばしる **54**～55, 230, **236** 237, **362**～363
ほほえむ **365**～366, **438**～439, **486**, **501**～502, **506**～508
ほめる 350, **499**, 676, 708
ほりだす 707
ぼる **498**～499
ほれる 693, 697
ほろびる **100**, **120**～121, **222**～223, 712
ほろぶ 121
ほろぼす 25, **101**, **121**～122

——ま——

まいこむ 310
まがう 678
まかす 697
まかせる 350
まがりくねった 676
まかりまちがうと 677
まがる **67**～68, **75**, **268**～269 **297**, **307**～308, **363**～364, **376**, **388**～389, **421**～422, 677～688
まく（巻） 196
まくしたてる **176**, **233**, 235 **339**～341
まくる **71**～72, **154**～155
～まくる 236, 305
まける 691, 697, **717**～718
まげる **66**, 128, **140**～142 **267**～268, **296**, **363**～364, 388, **421**～422, 731～732
まさる **201**, 691, 695
まざる 689, 702
まします 427
まじめくさった 676
まじる 24
まじわる 702～703, 713
ます 24, **382**, 704
ませる 114, 676, 678
まぜる **156**
摩損する 475
またぐ 98
まちあぐむ 425
まちがえる 703
まちかねる 426
まちくたびれる 475
まつ 22, 98
まとう 129
まどう 425
まとまる 24
まどろむ 230
まなぶ 700～701
まにあう 24
まぬがれる 426
まねる 713
まばたく 424
まみえる 427
まみれる 426
摩滅する 712
まもる 708
まよう 425
まわす 91, **94**～95, 163, **296** 536
まわりくねった 676
まわる **96**, 163, **297**

——み——

みあげた 676
みあたる 25, 681～682
みいだす **219**～220, 683～684
みうしなう 426
みえすいた 676
みえる **229**, 654, 659, 662～663
みがく **155**, **454**～455
みかける **439**～440
みかねる 426
右 251
みくびる 425
みごもる 113, 424
水ぎわだった 676
みせる 424, 673, 700
みたす **52**～53, **202**, **382**
みちびく 697
みちる **51**～52, **80**, **375**, **382** 703～704
みつかる 25
みつける **219**～220, 684
みつめる **479**～481, 719
みてとる 426
みとめる **219**
みなぎる **51**～52, **80**, 152 **375**
みなす 350
身につける 195
みのがす 426
みのる 149, 428
みまう **466**～468
みまごう 678
みまわる 723～724
耳なれた 676
みる **326**～327, **439**～440 654～663, 677, 684, 700

——む——

むかう 203～204, 207～209 **272**～273, **277**～279 281～282
むかえる 22, 708
むかつく 425
むく（剝） **76**, 79, 128
むく（向） **277**～279, 281～283, 424
むくむ **402**, 424
むける（向） **276**～277, 677
むさぼる 126～127, 425
むしかえす **497**, **503**～504
むしりすてる 78
むしりとりあう 78
むしる **76**, 78～79
むす（生） **150**
むす（蒸） 36
むすびつける 188
むすぶ **186**～189
むせぶ 425
むせる 424
むだづかいする 493
むつかる（むずかる） 425
むらがる 8, 81, **85**, **107**～108 **112**, **409**～410, **437**～438, **459**, 461, 497
むれる（群） 8, 81, **85**, **107**～108, **112**, 410, **437** **459**, 461, 497

——め——

命ずる **337**～338, **351**, 354～355
酩酊する 713
めいる 425
命令する **337**, **351**, 354～355

めがけて　676～677
めぐむ（恵）　185
めぐりあう　183～184, 426
441, 730～731
めくる　71～72, 154～155
めざす　207～208
めざめる　697
めしあがる　59, 97
めしかかえる　337, 378
めす　59～60
滅する　706
滅亡する　712
めとる　697
めばえる　149
めんくらう　425
（～に）免じて　677
面する　277～278, 280

——も——

もうかる　335, 426
もうける　334～335, 498～499
もうしあげる　185
もうしこむ　353, 693, 708
もえたつ　236
もえつくす　410
もえる（燃）　35, 37, 151, 212～214, 410, 423
もえる（萠）　149～150, 428
もがく　98
黙する　427
もぐる　269, 371, 373
もす　214
もだえる　425
もたげる　129～130
もだす　427
もたらす　165～166, 711
もたれかかる　181, 484
もたれる　181, 484～485, 706
もちあがる　96
もちあげる　129～131
もちあつかう　427
もちあわせた　676
もちいる　713
もちくずす　426
もちなおす　420～421
もちはこぶ　427
もつ　711
もって　677
もっていく　165
もってくる　165, 166, 711
もつれる　42, 191～192, 726
もてあます　425
もてなす　324～326, 699
もどす　61～62
もとづく　428
もとめる　216～217, 339, 351 356～359, 361, 468～472, 693
もどる　275, 291～294, 420～421
ものいう　678
ものなれた　676
模倣する　713
もやす　214
もよおす　424
もらう　185, 335～336, 350 408, 409, 693, 698～699 708
もらす　128
もりあがる　96, 270～271
もりあげる　270
もる（漏）　374～375
もれる　362, 374～375

——や——

扼殺する　310
薬殺する　310
扼する　127
約する　689
約束する　689, 702
役だつ　24
やけだされる　426
やけつく　428
やく　71, 156～157, 214～215 319～320
やける　35～37, 212～215
やしなう　167～168
やすむ　497～498, 710～711
やせほそる　424
やせる　105～106, 401, 695
やってくる　30
やとう　22, 337, 378～379
やにさがる　425
やぶる　20, 47～48, 64, 75～76, 383, 697
やぶれる　20, 717
山ごもりする　369
やみほうける　425
やむ（止）　30, 34, 158～159 428, 504～506
やる　165～166, 185, 312～313, 350, 405～407, 473～474, 693, 698, 700 708
やわらぐ　161

——ゆ——

ゆう　186～187, 189
融解する　706
融合する　706
ゆがむ　42, 363～365, 389～390, 421～422, 492, 728
ゆがめる　128, 135～137, 363～364, 385～386, 421～422, 483～484, 728
雪　30～31
ゆきあう→いきあう
ゆきちがう→いきちがう
ゆきつく→いきつく
ゆきづまる→いきづまる
雪やけする　475
ゆきわたる→いきわたる
ゆく→いく
湯ざめする　475
ゆすぶる　316～319
ゆする　316～319, 347 468
ゆずる　693
ゆだる　158
ゆでる　157～158, 395～396
ゆらぐ　72～74, 108～109 236, 475
ゆらめく　72～74, 236, 475
ゆるす　350, 693
ゆるむ　42, 695
ゆれる　42, 72～74, 90, 99 108～109, 236, 475～476
ゆわえつける　188
ゆわえる　186, 188～190
ゆわく　186, 189

——よ——

溶解する　706
要求する　351, 353～354, 357～359, 361

擁する 427
要請する **351**, 353, 356
夭折する 114
要望する **351**, 353, 356, 358
浴する 129
よくばる 425
よこぎる 208～209
よこす **165**～166, **312**～313 700
よごす 684, 727
よこたわる **142**～143, 147 **259**～260
よごれる 42～43, 684, 727
よじのぼる 259
よじる（捩） **94**, **296**
よじれる **96**, **297**
よせつける 682
よせる 21, **81**, 218～219, **273** **302**, **343**～344, 677, 704
よそおう 129
よだつ 128, 679
よっぱらう 425, 713
よどむ 152
世なれた 676
夜にげする 370
世ばなれた 676
よびとめる 22
よぶ 22
よみあやまる 426
よみかかる 427
よみかける 427
よみきる 427
よみさす 427
よみはじめる 206, 427
よむ 15, 112, 422, 427, 509 **646**～**654**, 666, 680, 694
よりかかる 20, **181**, **484**
よりすがる 689
よりそう 88～89, 689, 693 702
よりつく 682
よる（寄） 21, **273**～275 302, **343**, 345
よる（撚） **69**
よろける **108**
よろこぶ 111, 425, **490**
よろめく **108**～110
よわまる 161

——ら——

来場する 286
来店する 286
来日する 286
落命する **493**
落下する 258, 715～716

——り・る——

離日する 286
離別する 702～703
略す **40**
掠奪する 712
流出する 713～714
離陸する 206
類する 24

——れ——

冷却する 706
零落する **119**
轢死する 310
列する 427
連結する 703
連合する 702
連立する 702

——ろ——

漏洩する 706
聾する 679
朗読する 349
露出する 706

——わ——

歪曲する 728, 730
わかがえる 114, 424
わかやぐ 114
わかる 426
わかれる 85～86, 702～703
わきかえる 152
わきたつ 236
わく 152, 428
わずらう 424
わずらわす 426
わすれる 697, 711
わだかまる **502**～503
わたす 185, **405**, 407
わたりあう 688～689
わたる 207～209, 294～295 311
わななく 425
わびる 350
わめく **176**～177, **233**～234 **339**～341
わらう **365**～366, 422, **438**～439, **486**, **501**～502, **506**～508
わりきれる 681
わりこむ 310
わる **47**～48, **64**～65, **75**～76 **383**～384, 668, 713
悪あがきする 493
わるびれる 681
われる 668

事項索引

——あ——

相手 117, 165, 168～169, 174～**186**, 217, 266, 277 329～330, 338, 342～348, 352～353, 355～357, 359～361, 378～380, 423, 442～448, 464～465, 468, 470, 479～480, 484～485, 673, 684～685, 694
相手の意図 183, **422**～**448**
味 55
アスペクト 202, 438, 675, 680～681, 683～684
アスペクト的性質 203～205
新しい意味 225
あと要素 188, 683
雨 86, 163
あり場所 227, 369

——い——

言いかえ 19
いきおい 230, **235**～**242**
意義素 240
いきもの 22, **98**～**149**, 151

164～169, 175, 443, 535
移行 199
意志 93, 220, 312, 329～330 350, 355, 422～423, 427 437, 443～445, 447～448
意識 589
意識的 177
意志形 425
意志的 489
意志的動作 25, 283, 422, 525
意志動詞 423～425, 427～428
位置 390, **397～401**
市河三喜 5
1次元 389～390, 399
1段活用 297, 668
位置変化 96, 208, 512, 526
一般化 729
意図 72, 202, 241～242, 361 **422～475**
異同 24
移動 21, 34, 39, 42, 54, 56 106, 149, 160, **203～211** 215, 219, 243, 282, 286 371, 407～408, 465, 607～608
移動動詞 205, 245～246, 249 291
移動の距離 292
糸状のもの 186
意図的行為 **429～436, 440～442**, 500
犬 125
意味記述 1
意味的カテゴリー 18, 106
意味（的）特徴 4, 14～15 18, 202
意味的派生 16, 353, 512
意味的分類 22, 687
意味の構造 6
意味の体系 **1, 4**
意味の派生関係 561
意味範囲 99, 709～710, 712
意味分野 **17**
意味分類体辞典 687
意味論 **1, 2, 4**, 18～19, 665 672
衣類 192, 194, 199
異例 182, 212
いれもの 704
岩波国語辞典 3, 28～29, 64 82, 94, 172, 181, 216 224, 237, 247, 254, 264 284, 286, 314, 316, 329 340～341, 344, 346, 368 374, 386, 434, 440, 446 454, 457～458, 479, 670 710～711
岩波文庫本 180, 307
因果関係 24, 332

—— う ——

「～う」（「～しよう」） 437 557
受け身 107, 178～179, 181 426, 635, 667, 685, 692 698
受け身的な意味 25
受け身文 693, 699
うごき **202**
有情物 422
打消し 27
「～うと」 463
馬 125
運動 21

—— え ——

液体 49, **50～62**, 86～87, 151 ～152, 211, 216, 301～302, 322～323, 361～362, 370～374, 381, 551 ～553, 621

—— お ——

大きさ **67～72**
大野晋 525
奥田靖雄 687, 704
お茶の水女子大生についての調査 13, 28, 55, 58, 81, 85 100, 109, 122, 124, 151 155, 165, 167, 172, 175 192, 227, 264, 274, 413 456, 479
音 **33～34**, 52, **231～235**, 519 544
おなじ意味 52
おもさ **72～74**
音韻論 16
温度 **36**, 255

—— か ——

「～が」→「が」格
下位 16
下位概念 44, 56～57, 206 319
下位語 17, 19
開始 203
回数 229, **305～310**
改造社版現代日本文学全集 179, 254, 300, 374
回転 **296～297**
外来語 725
会話 336, 360, 457
「が」格（「～が」） 36, 478 657
科学説明文 11
書きことば 709
可逆的 690～691, 697, 700～702
格 679
格助詞 163
角度 142
影 73
雅語 715, 728
風 74
かたち 46～49, **62～67**, 93 186, 191
形の変化 96, 512, 526
楽器 3, 170～171
学校文法 666, 675
活用 441
活用形 441, 675
過程（プロセス） 202, 222 ～223, 233
カテゴリー 675, 680
可動性の対象物 241
角川国語辞典 246, 314
かながき 111
可能 439
可能動詞 144, 426, 439, 511 527, 615, 698
髪 132
「から」格（「～から」） 163 205, 211, 535, 564～565 574～575, 583～586 589～591, 594, 600～

601, 604, 613, 674, 687 693
からだ 42, 951, 58, 195, 277 ～278
からだ全体 139～140
からだの部分 46, 65, 75, 98 106, 109, 111, **125～149** 155, 191～192, 196, 198 200, 276～277, 318, 536
川上，川下 **286～287**
感覚 230
感覚動詞 127, **654～664**, 684
環境 **369～376**
関係 24
関係の変化 42
漢語 164, 230, 272, 286, 351 355～358, 410, 475, 705
漢語語幹 705
漢語（サ変）動詞 248, 259 310, 725
漢字 62, 224, 314, 347, 355 372, **384～385**, 460, 510
漢字の使いわけ 195
感情 81, 112～113, 181, 230 234, 472, 732
感情的意味 690
間接目的語 174
完全分離 384～385
換ゆ 127, 135, 281, 411, 507
慣用 542
慣用句（的表現） 59, 61～62, 73, 84, 103～104 127, 135, 137, 149, 154 169, 180, 200, 223, 232 256, 277, 281, 310, 361 365, 398, 408, 462, 493 497, 507, 512, 514～515 527～529, 531～533 537, 539～540, 542～543, 545, 548～550, 560 563, 566, 569, 573, 576～577, 581, 586, 588 593, 598, 603, 609, 611 614～615, 622, 627, 631 633～637, 641, 643, 651～652, 678～679, 686 691, 729
慣用句化 259
慣用句性 680
慣用的な文脈 730
完了 226

——き——

記述言語 16
記述的 1
記述法 14～15, 17
基準 201, 205, **382～383**, 389
基準点 21, **272～286**, 288 290, 299～300, 303
気象 **30～33**
ぎ人化 15, 22, 97, 108, 110 112, 131, 164, 167, 185 369, 423, 428, 465, 532
ぎ人的な表現 433
季節 **36～37**
気体 **50～62**, 151, 370～371 416, 551, 621
帰着点 212, 227, 256, 541～542, 613, 640
基点 298
規範的 1
希望 217, 220, 353, 422～423 437, 443, 445～446
基本形 678
基本語 19
基本的意味 15, 64, 253～254 261, 263
基本的な方向 255, 261
気もち 39, 112, 118, 138, 234 247～248, 343, 466, 475 **478～491**
着もの 194, 196
共同 88～89
距離 211, 229, 253, 293, **297～305**, 715
禁止 425～426
金属 151
近代語 6
金田一春彦 487, 578, 683

——く——

空間 584
空間性 589
空間的な方向 250
具体性 515
具体的 183, 190, 196, 305
具体的動作 330
具体物 23, 39～40, 100, 502
具体名詞 9, 52, 516, 518, 542 561, 582, 699
国広哲弥 240, 395
くり返し 204
群集 49

——け——

敬意 478, 493
経過 203～204, 207～208 **218～228**, 300, 311, 364 510, 513, 520, 525, 535 552, 564, 571
経過点 204～205, 207, 311
敬語 59～60, 96, 185, 427 549
傾向 72, 83～85, 106, 110 121, 137, 153, 162, 165 178, 181～182, 205, 264 307, 309, 317, 319, 396 456, 483, 717
形式 189, 203, 205, 211, 668
形式主義 9, 18～19
形式上の特徴 204～205
形式的側面 18
形式名詞 275, 293
形象性 352
形象的表現 729～730
継続 226
継続動詞 203～205, 208, 683
形態素 666
形態論的カテゴリー 679～680
形態論的性質 666, 675, **679～686**
形態論的な制限 679
軽べつ 60, 97, 122, 168, 485 497
経由 526
経由点 523, 525, 535, 564 566
形容詞 161, 255, 398～399 412, 417, 638, 669, 679 681
形容動詞 669, 679
系列 160, 183
けだもの 144
結果 35, 45, 47, 78～79, 94 187, 200, 202～204, 206 208～209, **218～228**

230, 300, 311, 320～321
334, 363, **376～422**, 437
442, 454, 463, 480, 490
510, 513, 516, 520, 525
～526, 535, 552, 556
564, 571, 652
結合　186～188
けむり　**35**, 74
原因　35, 49, 180, 310, **485～491**
言海　626
原形　531
言語意識　3, 13
言語活動　4～5, 112, 176, 179
277, 337～341, 350, 447
言語活動の動詞　235
言語行動　3
言語作品　1, 7
言語的条件　669～670
現在　680
顕在化　518
現在形　207, 209, 349
現実　8
現象　33～34, 37, 54, 159～160, **380～382**, 585～586, 657, 662～663
現代かなづかい　9
現代語　1, 6, 108, 150, 162
487
『現代雑誌九十種の用語用字』　12, 628
現代日本語　4, 7
現代日本文学全集→改造社
現代表記　9

——こ——

語い的意味　203, 665～666
668～674, 681
語い的手段　202
語い的条件　669～670, 686
語い的制限　679
語い的なむすびつき　687
語い的文脈　670～671
語い論　219, 350
口語文　6, 544
広辞苑　28, 44, 94, 183, 242～243, 316, 325, **333**, 340～342, 374
広辞苑（第1版）　82, 90, 366
449
広辞苑（第2版）　82, 91, 264
367, 449～450
合成語　493
構成要素　493
光線　58
講談社国語辞典　3, 246
後置詞　603, 677
肯定　682
肯定形　681
肯定的文脈　682
肯定表現　696
公的なこと　716
行動　217, 475
構文　223, 496
構文機能　**689～708**
構文論　686
構文論的性質　666, 675, **686～708**
国語研究所　488
国語辞典→辞典
国立国語研究所年報　12
語形　7, 666, 669～670, 679
683
語構成要素　164, 230
語構成論　666
語根　700
語種　351, 725
個人　166
固体　**50～62**, 64, 98, 216, 322
362, 370～373, 416, 553
621
個体　121
5段活用　297, 668
誇張　50
こと　23～26, **30～41**, **158～163**, **172～175**, 585
ことがら　183～184
子ども　168
「（だれだれの）ことを」　180
個物　49～50
個別的な表現　197, 656
固有名詞　28
誤用　2, 7, 137, 421, 485

——さ——

再帰動詞　431
材料　158, 190, 612
作品　5, 612
さそいかけ　422～423
雑誌90種の用例（資料）　110
292, 488, 510, 522, 524
534～535, 551, 556～557, 562～563, 606, 616
620, 626, 637, 646, 654
681
サ変動詞　475, 705
左右　**263～264**
作用　34, 42
3次元　389, 399
三省堂国語辞典　164, 247
三省堂新国語中辞典　181
247

——し——

使役　128, 432～433, 628, 684～685, 700
辞海　3
次元　**62～67**
時刻　**36～37**
示差的（弁別的）特徴　16
辞書→辞典
姿勢　42, 142～149, 198
自然現象　83, 110, 132, 152
162, 231, 344, 428, 477
自然な表現　197
自然物　151～152, 397
シソーラス　687
持続態　226
「～した」→「～た」
「～したい」→「～たい」
親しみ　122
質　**46～80**
実質的意味　672
実質的側面　18
実体　612, 638, 662
実体のないもの　73
質的変化　618
実例　183, 187
「～してある」→「～てある」
「～している」→「～ている」
私的　716, 721, 723～724
辞典　1～4, 8, 19, 28, 38, 41
44～45, 53～54, 82, 91
94, 100, 102, 109, 112
124, 129, 131, 149, 155
164, 177, 181～182, 216
224, 237, 241～242, 244

～246, 264, 277, 284～285, 308～309, 313～314, 316～317, 319, 323 325～326, 328～329 333, 340, 344, 346, 365 368, 392～393, 402, 404 433, 448, 452, 454, 456 463, 473, 481～483, 487～488, 492, 508, 510 536, 542～543, 545, 552 557, 626, 641, 670, 674～675, 709～710, 717
自動詞 2, 20, 27, 52, 63, 65 81～82, 93～94, 96, 101 107, 121, 132, 149, 158 164, 210, 214, 223, 228 238, 257, 262, 267～268 277, 283, 297, 321, 325 335, 340, 368, 373, 382 391, 398, 411, 413, 415 428, 431, 433, 448, 450 458, 484, 487～488, 535 544, 574, 607, 615, 628 645, 654～656, 658, 667～668, 674, 684, 692 700, 704～706, 728
示同的包括的な特徴 16
地の文 336
自発 439
くしばられた〉意味 246
自分 77, 128～129, 135, 141 200
社会 584
社会現象 25～26, 120～121 162, 330～331, 381, 418 428, 717, 724～726
社会情勢 161
社会的な活動 112
社会的な関係 602
社会的な変化 **405～410**
捨象 511
習慣的な表現 264
終止法 531, 680～681
修飾語 8, 31, 127, 134, 187 221, 223～224, 346, 348 415, 520, 660
集団 **117～122**, 166
自由な意味 246, 528～529 543
終了 203
主語 8, 21, 23, 30～32, 137 181, 189, 212, 312, 451 528, 692, 703
主人公 288～289
主体 20, **21～163**, 163～164 167, 182, 185, 192, 198 202～203, 210, 217, 279 285, 302, 306, 341～343 350, 369, 371, 375, 377 **429～442**, 465, 470～471, 474, **478～490**, 511 516, 523, 530, 535, 542 556, 560, 615, 634, 654 659, 695, 704, 707, 732
手段 38, 60～61, 107, 189～190, 202, 218, 224～225 227, 259, **310～341**, 434 454, 475, 498, 652
出現 529, 553
述語 676
出発 203～207, 209
出発点 204～206, 211～212 232, 259, **290～294**, 301 311, 535, 547, 564, 566～567, 569～570, 574～575, 613, 674
瞬間動詞 203～206, 208, 578 683
「～しよう」→「～う」
上位 17, 347, 489
上位下位 4, 14, 18, 690
上位概念 54～55, 216, 268 453, 671
上位語 16～17, 45, 171, 214 326, 374, 434, 446, 457 463, 467
消極的 306
上下 **249～263**
上下関係 185, 354～355
条件 202, 669, 679～680
条件語 677
状態 38, 41, 92, 96, 142, **202** 206, 382, 398, 404, 419 511, 556～557, 573, 587 643～644, 657, 677
状態詞 676～678, 680～681
状態性 24, 228
状態的な意味 68, 211, 299
状態動詞 677, 681, 683
状態の表現 94, 531, 695, 697
状態変化 42, 188～189, 192 200, 211, 311, 516, 518 529, 540～541, 573, 582 593, 607～608
象徴 121, 138
象徴的表現 528, 580
象徴的用法 536, 618
消滅 222～223, 401
省略 31
植物 73, 97, 105～106, 109 113, **149～151**, 164, 418 428, 616
助詞 666
女性 113
助動詞 666
所有関係 601
所有権（の移動） 183, 330～331, 336, 405～409
資料 5～7, 9
進行 160, 203～204, 206～207
進行中 208～210
新辞源 245, 314, 316
新選国語辞典 164, 246
人体 278
新潮国語辞典 28, 82, 241 247, 267, 284, 367
新版広辞林 164
神仏 183
心理現象 424～425, 726
心理状態 506
心理的な生理現象 424
新和英大辞典 109, 112, 325

—— す ——

随意的な文法現象 674
数 20, 49, **80～86**
数量 **80～90**
鈴木重幸 350

—— せ ——

性 113
生産 **518～519**, 527, 544, 546～547
生産的な意味 61
生産物 151～153, **169～172** 612

性質　23～24, 41, 202, 588 638, 661～663, 677
精神現象　25, 97, 104, 120～121, 161, 418, 502, 719 727
精神状態　29, 105, 138, 162 179, 503, 506～507, 521
精神的な事実　52, 103
正当な用法　53, 108
製品　190
生物　46, **97～151**, 428
生物以外　**151～158**
成分　16～17
成分分析　16～17
生理現象　97, 162, 378, 424～425, 718
生理的な変化　**401**～402
生理的・物理的な現象　331
世界大百科辞典　156
積極的　306
接尾語的　425
接尾的要素　236, 410, 684 701
説明文　681
線　389～390
前後　**265～269**
線状のもの　66, 70, 151
全体　43, 45～46, 49, **90～96** 126～127, 132, 190, 612

—— そ ——

相互移行　219
総合雑誌　488, 681
相互関係　219
俗語　40, 482, 494, 709, 715 **731～732**
属性　43, 202, 530, 585, 612 678, 707
速度（→はやさ）　211, 229 235, 311
側面　23～24
素材　612
組織　115～116, **117～122** 159
存在の動詞　295, 369

—— た ——

「～た」（「～した」）　226 382, 552, 667, 674～678
「～たい」（「～したい」） 437
対応　199, 200, 214
待遇表現　60
体言　543
体言化　543
体言的カテゴリー　679
第3者　446, 471
対象　20, 27～29, 38～41, 44～46, 49, 52, 56～57, 59～62, 65～67, 71～72 75～79, 84～87, 89～90 94, 113, 116, 130～131 134, 137～138, 140～141, 151, 156, 158～159 **163～201**, 213～219 254, 275, 282, 312～313 320～323, 383, 393, 434 443, 445, 453～454, 457 459～461, 466, 472, 478 543, 556, 607, 612, 621 646, 654, 660, 662～663 667, 684, 710
対象言語　16
対称的　690～691, 693, 699 701
対象的意味　690
対人関係　574, 590
対人的　177～178
体積　105
態度　181, 242, 247～248, 313 **341～361**, 490
大日本図書国語辞典　181 246
第4種の動詞　578
対立　18, 202, 215, 218～219 725
高橋太郎　128
多義語　2, 15, 203, 509～510 612, 673, 678, 710～711 727
多義性　205
多義的　206
武部良明　683
正しい用法→正当な用法
他動詞　2, 20～21, 25, 44, 52 82, 96, 149, 158, 164 205, 210, 218, 223, 228 238, 257, 262, 267, 277 282～283, 297, 299, 321 325～326, 335, 340～341, 368, 373, 398, 411 428～429, 431～433 435, 448, 458, 462, 483～484, 487～488, 492 516, 535, 607, 614, 628 645, 654～656, 658, 668 674, 684～685, 694, 700 704～705, 728
他人　77, 128～129, 135, 141 200
たべ方　123
たべもの　156～158, 172, 213 478
単一目的語構文　174～175
段階　**202～229**
単語　665～667, 669, 673, 686 709
男女　114
単独　88～89
弾力　**74～80**

—— ち ——

地域　568
地点　568
中間的（段階）　97, 202, 379 398, 515, 531, 540, 582 601, 642
中止　680
抽象化　46, 118, 149, 196, 258 264, 280, 315, 328, 331～332, 369, 449, 496 507, 512～513, 516, 518～522, 531～533, 542 550, 583～584, 593, 596 601, 604, 606, 726～727 729～730
抽象性　97, **506～508**, 515
抽象的移動　516
抽象的な意味　393
抽象的なカテゴリー　202
抽象的なこと（ものごと・現象）　54～55, 59, 81, 106 135, 160, 183, 190, 192 196, 256, 267, 287, 305 353, 371, 397, 421, 428 716
抽象的な表現　60, 197, 259

412, 656
抽象的な方向 250
抽象的な用法 110, 137, 341
抽象的場面 516, 542
抽象物 22～23
抽象名詞 24, 28～29, 180 516, 518, 541, 547～548 561, 635, 637, 644, 699
中和 215, 289, 406, 673
超品詞的カテゴリー 679
直接的対象 **163～175**
直接目的語 325, 378, 674

——つ——

通過地点 209
粒（状のもの） 55, 57, 69

——て——

「～て」 676
「～で」→「で」格
「～てあげる」 205
「～てある」 205, 226
定義 2～4
「～ていく」 205, 209, 311
程度 **229～235, 410～419**
ていねい形 680
ていねいさ 675, 679～680
提ゆ 536, 538, 628
「～ている」 203, 205, 226 311, 382, 552, 668, 674 ～677, 681, 695, 697
「で格」（「～で」） 115～116, 180, 190, 649
できごと 184～185
「～てくる」 205, 232, 295 311, 531
「～てしまう」 205
です・ます体 178
「～て＋補助用言」 205
「～てみる」 205
「～てやる」 694
転換 692, 694, 698～700, 702～704
天候 **30～33**
テンス（とき） 349, 675, 679～681

——と——

「～と」→「と」格
同位語 347
同音語 510
同義語 41, 224, 313, 325, 433 436, 690
同義反復 265
東京方言 220
道具 137, 151, 154, 159, 170～171, 241, 281, 639
同語 521
同語反復 247
動作 23, 34, 39～42, 68, 96 99, 159, 206, 211, 219 223, 472, 586, 644, 662
東西南北 **272**
動作・作用の属性 **201～369**
動作性 299, 511
動作性名詞 379～380, 548 566, 643
動作動詞 681
動作のし方（おこり方） 78 192, 202
動詞的カテゴリー 679～680 **683～686**
登場人物 289
同族目的語 672, 684
到達点（到着点） 205, 207～208, 232, 295, 311 510, 516, 524～525, 530 535, 542, 564, 566, 570 674
到着 203～205, 207, 209～211
到着点→到達点
動物 20, 42, 97～113, 117 120～125, 135, 144, 146～147, 150～151, 164～169, 175, 184, 242～243 254, 265, 327, 417, 422 436, 443, 616
「と」格（「～と」） 163, 191 378, 593, 688～689
とき→テンス
時の規定 88
特殊化 533, 536, 540, 613
特徴 14, 16～20, 44～46, 122～123, 143, 162～163 172, 191～192, 195, 202～205, 207, 223, 229 233, 235, 241～242, 253 284, 291, 297, 306, 311 369, 376, 386, 497, 559 725, 732
独立の意味 91, 515, 537, 554～555, 563, 592
鳥 82, 123
とりつける対象 **186～198**
とりはずす対象 **198～200**

——な——

内外 **269～272**
内容 174, 178, 185, 223, 341 378～380, 462, 469, 471～472, **503～504**, 505 543, 593, 646, 668
「～ながら」 557
鳴き方 124

——に——

「～に」→「に」格
におい **34～35**, 52, 55
「に」格（「～に」） 115～116, 163, 172, 179～180 191, 205, 283, 295, 307 326, 378, 380, 460, 462 467～468, 473, 478, 487～488, 511, 523～525 530, 535, 539, 542, 547 567, 574, 583, 589, 591 596, 599, 604, 613, 658～659, 667, 673～674 685, 687～689, 691～694
肉体的 1120～12
2次元 389, 399
2次的な特徴 19～20, 243 311, 370
二重目的語構文 174～175
「～に対して」 180
日常語 74, 111, 314, 357～358, 641～642, 709～710, 712～713, 715, 719 721, 725～731
ニュアンス 185, 196, 205 207, 225, 283, 290～291 305, 404, 481, 497, 511 526, 542, 649, 570～571 634, 732
人間（人） 20, 22～26, 42

69, 97～110, **111～122** 135～137, 144, 146, 148 150～151, 161, 164～169, 181～185, 210, 242～244, 254, 265～266 273～278, 312～313 327, 338, 344, 369, 378 379～380, 387, 417, 422 436, 443～445, 451, 466～467, 472, 480, 484 497, 516, 523, 535, 616 707

——ね・の——

熱 213
年齢 113～114, 168～169
能動 178～179
のみもの 56
乗りもの 22, 106, 184, 243～246, 254, 265, 270 379～380

——は——

「～は」 36
場所 31, 36～37, 42～43, 115～116, 151, 160, 203 211, 227, 273～276, 282 295, 301, 311, 342, 381 445, 467, 612, 704
派生 161, 521, 654
派生語 19
派生的意味 15, 102, 106, 253 263, 315, 423
はたらきかけ 45～46, 164 210, 218, 224, 228, 282 351, 429, 435, 454, 684
発生 160, 401, 553
話しことば 349
話し手 186, 249, 272, **288～290**, 349, 569
場面 621, 709
はやさ（→速度） 202, **242～249**
範囲 196, 199
反対 4
反対語 15, 121, 146, 257, 272 276, 531, 559, 569, 690 707～708

——ひ——

火 **35～36**
非意図的行為 **436～442**
比較 24, **201**
美化語 495
光り 33, 52, 74, **230～231**
非言語的条件 669
被修飾語 679
非情物 422～423
非対称的 691, 693, 697, 701 703
非対人性 176～177
否定 682, 696
否定形 680～681
否定的文脈 681～682
否定表現 511, 696
美的価値 493, 495
人→人間
人前 **287～288**
非人称的な用法 36
比ゆ（的用法） 15, 40, 50 56, 58, 77～78, 81, 102～107, 113, 122, 125 135, 152, 161, 171, 182 193, 195, 235, 246～247 276, 338, 369～371, 393 397, 433, 449, 463, 465 477, 479, 502, 512, 519 532, 537～539, 542, 545～546, 554～555, 562～563, 577, 588, 592, 603 617, 622～625, 634, 649 726, 730
評価 **96～97**, 162, **185～186** 342, 347, 363～364, **419～422**, **492～503**, 731
表記 510
表現形式 187
表現効果 127, 166, 168, 288 561, 659
標準語 124, 314
表情 558
表面 62～63
平たいもの 57, 66～67, 132
品詞 665, 687
品詞性 **675～679**
品詞分類 687
品詞分類論 677
品詞論 680

——ふ——

不可逆的 690～691, 700
不完全分離 384, 385
複合語 61, 78, 366
複合的表現 258
複合動詞 17, 45, 229, 310 370, 475, 683, 701
副詞 676
副詞的 247, 549, 643
服装 77, 127, 129
服装の変化 **402～405**
不自然 154
物質 43, **46～50**, 64, 386, 586
物体 33～34, 37, 42～43, **46～50**, 52, 54, 97, 105 110, 151, 164, 167, 175 188, 301, 386, 586
物理的・化学的な変化 **383～401**
物理的現象 724～725
物理的・生理的現象 726
物理的変化 330
部分 23, 43, 45～47, **90～96** 150, 154, 190, 279, 612
部分主語 23
部分の移動の表現 94
普遍性 18
ふりがな→ルビ
古いニュアンス 275
古い用法 307
プロセス→過程
文学語 369
文学作品 9, 488, 681
文型 23
文語（文） 7, 51, 427, 544 641, 643, 678, 691
文章語 7, 40, 74, 103, 111 115, 125, 275, 289, 314 351, 357～358, 360, 457 494, 544, 641～642, 678 **709～731**
文体 7, 27, 74, 92, 111, 200 336, 349, 351, 357, 369 427, 456, 482, 493～494, 643, 678, 680
文体的性質 **708～732**
文典 1

文法 2, 3, 20
文法形式 202, 439, 667
文法書 1
文法的条件 669～670, 672
文法的性質 9, **665～708**
文法的対立 673
文法的な手つづき 668
文法的なむすびつき 686～687
文法的文脈 669～671
文法論 219, 350, 665～666, 672
文脈 9, 14, 18, 205, 217, 219, 223～224, 439, 459, 482, 612, 621, 669
分類語彙表 17, 712

—— へ ——

「～へ」→「へ」格
平面 49, 64～66, 105, 269～270, 375, 389～390
平面的なもの 105
「へ」格（「～へ」） 286, 295, 307, 467～468, 510, 523～525, 535, 599, 604, 674
別義→別の意味
別語 592
別の意味（別義） 56～57, 91, 97, 100, 108, 160, 213, 246, 262, 404, 456, 512, 592, 710
変化 24, 38, 41, 45～47, 75, 92, 142, 148, 164, 202, 213, 215, 224, 227～228, 230, 303, 363, 398, 677
変換 43
変形 186～188, 190
変種 189

—— ほ ——

ボイス 675, 680, 684
方言 4, 7, 137, 272, 314, 456
方向 139, 142, 202, 218, **249～297**, 311, 390
方向性 207～208
「(～の)方へ」 282
方法 29, 157, 259, **310～341**, 453
補助動詞 549, 629, 683
細長いもの 186
ほのお 74
本質 **380～382**

—— ま・み ——

前要素 272, 310, 475
まちがった表現 197
水 80, 86
みとめ 675
みとめ方 680～681
身分 114, 183
都 286
未来 680

—— む ——

無意識的 176
無意志的な主体 248
無意志的な動作 422, 489
無意志動詞 93, 423～428
ムード 422, 438, 679～680, 686
虫 69, 82, 124
無主語文 31
結びつき方 612, 622, 687
無生物 42, 105, 113, 167

—— め ——

明解国語辞典 3, 133, 164, 246, 297, 473
名詞 9, 15, 236, 255, 275, 277, 281～283, 326, 356, 378, 380, 493, 663, 673
明治時代 4, 6, 162, 278, 307
明治初期 488
名詞＋格助詞 205
命令 423, 426～427
命令形 422～423, 425, 428, 669
目上 185
目下 185
面 389
面的なもの 66

—— も ——

猛獣 125
目的 38, 66～67, 79, 157, 176, 218～220, 225, 241, 342, 347, 391, 395, **448～475**, 644, 652, 710
目的語 8, 27, 52, 110, 115～116, 134, 136, 167, 169～170, 172, 174, 179, 181, 200, 204～205, 207～208, 211, 223, 273, 275, 295, 297, 311, 341, 368, 373, 379, 391, 445, 451, 458, 460, 467～468, 472, 479, 496, 510, 565, 599, 611, 621～622, 627～628, 636～640, 643, 645～646, 652, 672, 674, 676～677, 685, 692, 694
目的地 205～210, 249, 259, 273, **286**, 292～295, 298, 307, 510
もの 22～26, **30～158**, 159～161, 165～167, 181, 184～185, 254, 273～276, 282, 312, 443, 451, 530, 585～586, 638, 661～662
森田良行 288

—— や・ゆ ——

やり方 168
やりもらい 680
郵便報知新聞 488
雪 163

—— よ ——

要求 355, 357, 361
用言 675
用言的カテゴリー 679, **680～683**, 686
ようす 79, **361～369**, 450
要素 305, 410
「～ように」 378
用例 4～9, 36, 40, 44, 66, 72
予想 **504～506**
読み方 70, 111, 389
「より」格（「～より」） 163, 691～692

—— り ——

利益 470～471
陸上競技規則 242
立体 63～66, 269～270, 375

389～390
理由　589～590
流動物　53, 60
量　49, **86～90**, **229～235**, 324 362, 382, **397～401**
量的な規定　41
量的変化　618
臨時的な用法　553
倫理的価値　493, 495, 497

—— る ——

類音牽引　7
類義　4
類義語　115, 543, 571, 681 689, 725
ルビ（ふりがな）　179～180 254, 300, 307, 372, 374

—— れ・ろ ——

例外　2, 46, 121, 152, 160, 174 177, 187, 191, 193～194 241, 245～246, 248, 282 ～283, 368, 372, 377 407～408, 421, 442, 483 603, 682, 728
例解国語辞典　28～29, 65, 82 109, 181, 241, 247, 254 314～315, 326, 333, 341 ～342, 344, 366～368 374, 433～434, 448, 450 458, 479, 710
歴史的かなづかい　9
連語　673, 686～688
連語論　686～687
連語論的性質　666
連体詞　88, 297, 417, 676
連体修飾語　267, 668
連体（修飾）法　202, 209 226, 526, 552, 555, 681
連用形　441, 566, 603
連用法　681
論説文　11

—— わ ——

和語　242, 286, 351, 355, 358 360～361, 725, 727
和語語幹　705
話題の中心　288
和文脈　678

—— を ——

「を」格（「～を」）　116, 163 172, 179～180, 187, 190 204～205, 209, 283, 286 295, 297, 311, 326, 378 380, 467, 487～488, 510 ～511, 523～525, 535 539, 564～565, 600～ 601, 604, 613, 628, 636 643, 645～646, 649, 656 ～657, 667, 672～674 684, 687, 692

COD　626
converse　708
ergatum　21
Hill, A.A.　9
hyponymy　14
Ikegami, Y.　9, 20
Lyons, J.　18, 708
marked　291, 429, 436
Nida, E.　510
unmarked　291

The National Language Research Institute
Research Report XXXXIII

A DESCRIPTIVE STUDY ON THE MEANING AND USES OF JAPANESE VERBS

The purpose of this report is to describe the meaning and uses of modern Japanese verbs in detail. The description in this report differs from those in ordinary dictionaries as follows: (1) it is based on a large quantity of examples (2) it does not deal with each verb in isolation, but with many verbs in the semantic system, i. e. the systematic description of verbs is aimed for.

The examples used here amount to some 450,000. They are derived from 52 modern literary works; 24 scientific reports, editorials, and essays; 90 magazines published in 1956, and 13 cultural reviews 1953-54.

PART I Description of semantic features.

The roles of the distinctive features of the verbs in Japanese and descriptions of word-groups separated by these features forming groups of synonyms, antonyms and hyponyms.

The features are as follows:

1. subject 2. object 3. property of actions 4. environment
5. result 6. intention 7. cause 8. value 9. others

PART II Description of some verbs.

A detailed description of 12 verbs (agaru, noboru, ageru, uku, ukabu, deru, akeru, nobiru, nomu, kuu, hakaru, yomu) and a group of verbs concerning sensorial perceptions.

PART III Relation between the meaning and other characteristics of verbs.

(1) The meaning of verbs and grammatical characteristics.

The relation between the lexical meaning of verbs and the grammatical categories as aspect, voice etc. Description of syntactically corresponding verbs as "A ga B ni katu⇄B ga A ni makeru." Description of verbs which have more than two synonymous sentence patterns as "A ga B ni mitiru⇄B ga A de mitiru."

(2) The meaning of verbs and stylistic characteristics.

Here it is shown that verbs of higher (bookish) style are apt to express large, official and abstract events, and verbs of lower (vulgar) style often express rude behaviors.

Syûei Syuppan Co.
2-30, Itigayakagatyô, Sinzyuku, TOKYO, JAPAN
1972

国立国語研究所報告 43
動詞の意味・用法の記述的研究

1972年3月20日　初版発行　　定価　7,500円
1994年3月20日　7版発行　　（本体　7,282円）

著作者　国立国語研究所
発行者　株式会社　秀英出版
　　代表者　金森良之
印刷者　株式会社　平河工業社

発行所　株式会社　秀英出版
〒112 東京都文京区関口1-24-4-302
Tel.（03）3260-5281
Fax.（03）3260-5282

UDC　809.56－31
NDC　814
ISBN 4-7847-0109-5 C3081